

遊戯王*ASTERISK S* (アスタリクス)

kohatuka

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デュエルモンスターズが全てを左右する、6つの大陸を有する世界。

そんな世界でたくましく生きる主人公の少女、ベルはとある事件をきっかけに、放浪の決闘者・ユウと旅をしながら決闘者として強くなることを決意する。

デュエルモンスターズ。不思議な力を持つカードを駆使し、人々が雌雄を決するゲームバトル。これはそんなカードゲームが世の理を支配した世界の、とある物語の1ページ。

2015/3/6

主要人物やオリカのまとめページを追加しました。

・遊戯王シリーズの二次創作、オリジナルのキャラが主軸になります。

・作品のキーカードとして、オリカが数枚出てきます。嫌いな方はご注意ください。

・作中である程度の区切りがつくまで、マスターズルール2で進めていきます。

・pixivの方にも投稿しています。

・ご意見、感想などお気軽にどうぞ。

目次

第1章 飛び立つ星

プロローグ | 1

第1話 お空に瞬く希望の星(ひかり) | 6

第2話 初めての味は飴とムチ | 51

第3話 粉碎、玉砕、大失態 | 102

第4話 光騎士団、反旗(ライトロード、ジャッジメント)

136

第5話 アーリー・ビー・バック | 175

第6話 《災厄》を破れ! | 195

第7話 泣いた赤鬼、笑う青鬼 | 220

第8話 Trick or Surrender? | 240

第9話 2体目のアスタリクス | 264

第10話 思い出に降る雨(スクラップ・スコール) | 286

第11話 金剛の牙 | 301

第12話 父の背中 母の想い | 316

第2章 大会、開催。

第13話 スパイシー・ガール | 337

第14話 急がば回れ | 351

第15話 闇のゲーム | 364

第16話 前夜の告白 | 377

第17話 開幕、SSC! | 391

第18話 フルパワー・フルスロットル | 407

第19話 レッツ・アクション!! 犬猿のタッグデュエル!?

422

第20話 宝石剣と魔蟲の罠

433

第21話 共演のチエツク・メイト!!

450

第22話 辿られる伝説

465

第23話 その名は

480

第24話 青い古傷

496

第25話 地獄から響く唄

513

第26話 蜃気楼の真実

528

第27話 狙われたアスタリクス

548

第28話 立ち籠める闇

562

第29話 イカロスの翼

575

第30話 紅の最終者(アンカー)

589

第31話 歪な融和

605

第32話 楽しいデュエル

617

第3章 海の向こうへ

第33話 過ぎた嵐と波立つ心

630

第34話 空っぽの幽霊屋敷

644

第35話 襲撃! 炎の白面少年

657

第36話 翔ける白炎

671

第37話 十二支柱

684

第38話 黒兎、吼える

697

第39話 屍皇の一撃

709

第40話 決死のフィナーレ

723

第41話 海底大陸 アトランタ

738

第42話 フルフェイス・ライダーズ

754

第43話 ガールズ・サイド

769

	第44話	破滅の種	783
	第45話	開拓地への案内人	796
	第46話	博士の海底水族館	809
	第47話	猛攻！ 水槽の麗女優（アクアアクトレス）！！	826
	第48話	雲間に浮かぶ天女	839
	第49話	魅入られし瞳	854
	第4章	白の騎士と紅の巫女	
	第50話	ユウキリサキ	870
	第51話	勝つだけのゲーム	883
	第52話	勝つ為のゲーム	896
	第53話	疎まれる勝者	908
	第54話	その日。	919
	第55話	英雄への賛歌	933
	第56話	忌むべき力	943
	第57話	終焉へ至る願い	953
	第58話	潜入、魔光の麓へ	963
	第59話	それぞれの決闘	976
	第60話	破滅の運命	991
	第61話	混沌の果て	1007
	第62話	必然のドロ	1021
	キャラクター&オリカ設定		
1036	設定集&オリカまとめ【※挿絵あり、回覧注意】		

第1章 飛び立つ星 プロローグ

『勝者!! ユウキリサキい!!』

かつて栄華を誇ったのであろう、石造りの円形闘技場。

そんな中、周囲に鳴り響くけたたましいブザーのようなサイレンと共に、妙にテンションの高い女性が高々と右腕を振り上げてそう宣言した。

『はい、見るも鮮やかな決定打でした!! 最初から最後までドキドキな勝負でした』

橙色の『ぼんぼん』を振り回しながら興奮気味に語るハイテンションの女性。凹凸に乏しいボディラインには似合いそうにない、チアガールのような露出の高い衣装を着ている。何ともノリノリな彼女の様子を見る限り、この格好に不満や恥じらいといったものは全く感じられない。

『ではでは皆様、またいつかどこかの戦場でお会いしましょう♪』

バサバサとぼんぼんを振って女性が別れを告げると、周囲の景色は一変。石造りの闘技場は光の粒子となって霧散し、砂と岩山ばかりの荒野へと変貌する。その様子はまるで夢から醒めたようだった。

「……馬鹿な、お頭が負けた?」

観客の内の一人であったバンダナを巻いた男が、そんな夢見心地の静寂に一石を投じた。

ざわざわと困惑の波紋が伝染していく中、彼ら決闘者にとって『盾』とも呼称されている、『決闘盤』を納めた機動音が勝負の決着を告げた。『決闘』という言葉になぞらえ比喻するとすれば、それは納刀の鏢鳴りとも呼べるのかもしれないが。

「俺の勝ちだ。約束の『賭け品』は頂いていく」

中背で白いジャケットを着た黒髪の青年が、無味な眼差しと共にそう言い放った。

青年の前に対峙していたのは、立派な髭を拵えた中年の男性。今は

片膝を付き、焦点の定まらない目で青年を睨み返している。

「……くそつたれが」

男の凶暴な視線に怖気づくことなく、青年は淡々とした口調で言葉を続ける。

「ルールに基づき、賭け品を渡してくれ」

抑揚の無い、やや機械的な独特の口調が男の神経を逆撫でする。

屈辱に顔を歪ませる男に青年が右手を差し出した、そのとき。

「……うおらああああ!!」

地鳴りのような怒声と共に、観客の一人が青年へと文字通り『斬り掛かった』。

鉄くずを叩いて伸ばしただけの粗末な『剣』だったが、この勢いなら取り返しのつかない大怪我にも成りかねない。

それだけの殺意を持った一撃。しかしそんな彼の攻撃は、青年が身をかわすまでもなくあっさりと『見えない何か』に阻まれてしまった。

「うっ……!!」

「馬鹿野郎!! 『決闘者』に手エ出す奴があるかア!!」

襲撃者に対し、目を見開いてそう叫んだのは男の方だった。

青年は至って涼しげな顔で襲撃者を見据えると、懐から1枚カードを取り出し襲撃者に向けた。

するとどうだろう。『見えない何か』に攻撃を阻まれ硬直していた襲撃者は、遙か後方へと吹き飛ばされてしまった。

「ぐああっ!!」

襲撃者は糸の切れた人形のように数回地面をバウンドし、近くの岩場に身体を叩きつけられたことのようにやくその動きを止めた。

「……馬鹿野郎が」

誰にでもなく男が呟く。

「……決闘者に直接的な危害が及んだ場合、『審判員機構』^{ジャッジアプリ}が状況を判別。正当防衛が可能と判断された場合、簡易的な『ARヴィジョン』を展開。被害側の決闘者はカードを半実体化させ攻撃が可能となる……決闘者ならずとも、この程度は常識の範囲内の筈だが？」

青年の前に突然立ち塞がり襲撃者を弾き飛ばしたのは、白い甲冑を

着た騎士だった。

騎士は一言も発することなく、役目を終えたとばかりにすぐさま霧散した。青年が翳したカードには全く同じ容姿の騎士の姿が描かれていた。

「うう……」

呻き声を漏らす襲撃者は他の観客達によつてすぐさま担ぎ上げられると、傍に停められていたワゴン車——恐らく『彼ら』のものなのだろう——の中へと運ばれていった。

「デメエ……!!」

「何を睨んでいる。手を出してきたのはアンタの部下だろう。俺は定められたルールに従い行動しただけだ、恨まれる筋合いは無い筈だが」

溜め息すら一つもつかず、まるで鉄仮面のように表情を崩さぬ青年——ユウ・キリサキは再び右手を差し出し告げた。

「勝ったのは俺だ。ルールに従い、賭品を渡して貰おう」

「ホントに容赦ねーなセンサー、やっと出てきた相手のエースモンスターに躊躇い無く《オネスト》打つなんてさ？」

件の『戦場』からしばらく離れた道——と呼ぶにはあまりに頼りない馴らした地表であったが——を走るキャンピングカー、その運転席に座る茶髪の男が、助手席に座るユウへ尋ねた。

茶髪の男の歳は、ユウとそう変わりなく見える。恐らく17〜8歳程だろう。

ダボついたカーキグリーンジャケットと首から下がったゴーグルから察するに、この界限では珍しくないフリーの『売買屋^{ディーラー}』であることが伺えた。

ニヤついたその視線が捕らえているのはユウではなく、商売の種であるカードに向けられていた。先の男から手に入れた賭品……彼の使用していた『デツキ』である。

「……手を抜くのは決闘者の在り方に反する。違うのか？」

眉一つ動かさず、ユウは首を傾げてそう言葉を返した。

「悪びれたり皮肉を言っているつもりではないらしく、無表情な彼なりにクエスチョンマークを浮かべている。」

「いや、まあ……はは、どうでもいいけどな。ともかく、いつも通り『ソレ』は俺が査定して買取りってことでいいんだよな？」

「売買屋の男は苦笑を浮かべながらも、強引に話を商売に戻している。」

「ああ、構わない。目的のカードは見当たらなかった」

「そりゃあ有難いね。換金は……次の街に着いてからになりそうだな、先に査定して見積もりは出しとくから、最終的な判断はその時にしてくれ」

「売買屋の男はそそくさと懐にカードをしまい込むと、満足げな笑みを浮かべて砂利道の揺れに体を躍らせた。」

「遠くに見える地平線。それを境に広がる漆黒へと散りばめられた、降り注がればかりの星々。開いた窓からは、冷たく澄んだ空気が流れ込んでくる。」

「文明のそれとはかけ離れた雄大な大地。しかし『未開拓の橙』^{ネイティブ・グラン}と呼ばれるこの大陸では、さして珍しい光景でもない。」

「いや、本日も快晴快晴。センサーと組んでからこつち、曇天の野郎ともすつかり疎遠になっちゃった」

「そうか、それは何よりだ」

「上機嫌な売買屋に、ユウは相変わらずのトーンで返す。」

「センサーの快晴は、いつになるのかねえ。これだけ勝つても、『目的』とやらが果たされなきゃその時化した面は晴れねーのか？」

「……さあな。俺もそれは分からない」

「ふーん、そうかよ。ま、こつちは『商品』が順調に仕入れられれば何でも良いんだけどな」

「冷たい夜風に吹かれながら奇妙な2人組が荒野を進む。」

「しばらくは2人無言のまま、揺れる車体に身を任せ街の明かりを待つばかりだ。」

——デュエルモンスターズ。不思議な力を持つカードを駆使し、人々が雌雄を決するゲームバトル。

これはそんなカードゲームが世の理を支配したある世界の、とある物語の1ページ。

第1話 お空に瞬く希望の星（ひかり）

すまない、と頭を下げた父親に対して、ただ黙って頭を振った。いつも強くて大きな優しい背中が、涙を流して肩を震わせている。幼い少女には事情が分からなかったが、父親が初めて見せた脆弱な姿は『どうにもならない事態』を理解するには十分過ぎる材料だった。父親の従えていた巨龍が霞み、消えていく。父親の『でゆえる』は彼らの日常を守れなかったのだと、少女に残酷な現実を否応なしに突きつける。

すまない、と跪いた父親に対して、今度は精一杯に笑顔を作って向ける。
悪いのは父親ではない。まして勝者である『彼ら』を恨むのも違う、と思う。

憎むのは、理不尽が支配するこの世界。そして自分の身すら守ることの出来ない、力の無い幼過ぎる自分だ。

そう答えを出した後、少女の意識は暗転した。

.....

.....

.....

「.....うう」

遠くで鶏の鳴く声が聞こえた気がして、少女は定刻通りに目を覚ました。

すぐに閉じそうになる瞼を擦り、ぼんやりとした視界を開かせる。寝ぼけた瞳を擦る自分の腕を眺めて、少しばかり溜め息が出そうになったが、そんな憂鬱も慣れたものだ。丁度ついて出た欠伸と一緒に飲み込んでしまった。

(.....もう、朝か)

歳はおおよそ12〜3程度だろう。褐色の肌に焦げ茶色の髪、うつらうつらと揺れる半眼からは琥珀色の瞳が見え隠れする。

少女は小柄な体躯をむくりと起き上がらせると、やや機械的な動きで支度を始めた。のそのそと簡素な寝巻きに替わって身に纏ったの

は、橙と黒を基調とした『メイド服』だった。

少女の年齢には相応しくない、胸元が大きく開いたデザイン。小柄な割りに胸囲は良く発育していた少女だったが、それを見世物にするような度胸は彼女には無い。確かに胸だけは同世代の娘と比べれば大きいほうかもしれないが、ただそれだけだ。大人の女性が持つ独特な魅力や色気の欠片も無い。

仕事着でなければ、こんな衣装は全力でお断りだ。

（わたしみたいな『橙』^{ネイティブ}の、それも子供の胸なんか見て何が楽しいんだか……）

少女は鏡に映った自分の姿を見て、今度は堪えきれずに溜め息をついた。

彼女は『未開拓の橙』^{ネイティブ・グラン}と呼ばれる、この大陸の『原住民』である。6つの大陸が交流するこの『異陸交易』の時代で、ネイティブは文明レベルが著しく低い。過去には他大陸から侵略戦争の対象となった歴史背景もあり、今なお差別的な目で見られることも少なくない。

しかし現在ネイティブの街が豊かに発展したのは、その異大陸人の移住によるものが大きいのも事実だ。郊外へと追いやられ、貧しい生活を余儀なくされた原住民の彼らは、幼い頃から働き口の多い街へ出稼ぎに出ることが通例となりつつあった。この少女もそんな例に漏れず、生まれ出た村を出て住み込みで働いている。

（まあ、お客さんが喜ぶ理由なんて二の次でいいや）

どんな状況であれ今は全力で働いて、明日へ繋いでいくだけ。

少女は鏡に映る自分にそう言い聞かせると、従業員休憩室のある2階から、仕事場である1階へと向かった。

「おはようございますー」

朝方のしんとした空気を吸い込みながら、少女は決して広いとは言えない木造のフロアに降り立った。

「おはようベルちゃん。今日も1日ヨロシクねー」

少女の挨拶に、厨房の奥から『野太い声』が返ってくる。

ベルと同じメイド服を着こなした恰幅の良い男性の姿が、ちらりと

伺えた。非常に残念な話だが、彼はこの店のオーナーである。

他の男性従業員——と言っても調理係1人だけなのだが——にも挨拶を済ませ、黙々とフロアの清掃を始める。それが終われば、オーナー達の仕込みの手伝いだ。

こんな荒野のど真ん中に佇む、砂埃にまみれた宿街にも『メイド喫茶』は存在する。とはいえメイドと呼べる存在はフロア担当の褐色の少女ただ1人で、外観はさしずめハリボテ小屋のような木製二階建て。内装もファンシーな桃色空間などとは程遠い粗雑な出来上がりなのだが。

(……あ)

清掃を始めたベルの足元に1枚のカードが舞い落ちた。動かしたテーブルのどこかに挟まっていたのかもしれない。

「また忘れ物、か」

ベルはそれを摘んで拾い上げると、興味も薄そうに眺めた。

なんとということはない、薄っぺらい存在感。それが逆に憎らしく思えて、ベルは思わず呟いた。

「こんな紙切れ1つで、何でもかんでも決めちゃうなんて……」

デュエルモンスターズ。『6大陸の共通言語』とも比喻される、今や政治と同等までに世界を動かす力を持った異色のカードゲーム。

ゲームと言えば聞こえはいいが、彼女らネイティブの立場を最下と定めた侵略戦争、その勝敗を分けたのは他にもない、このデュエルモンスターズだ。

ときには戦争の手段として用いられるほど大きな力を持つが故に、この辺りで暴れるゴロツキ達ですら律儀にカードを持ち歩きデュエルモンスターズの腕を競い合っている。

この店に訪れるのは、そんなデュエルの腕前をひけらかし昼間から酒を飲み散らかす荒くれた『決闘者』の男達ばかりだ。

下品で豪快なバカ笑いが店内を賑わすその様相は、さしずめ『メイド喫茶』ではなく『デュエル酒場』と言った方が正しいかもしれない。

勝った負けたで大騒ぎする男達。それだけならまだ、微笑ましくもあつたのだが——。

少女は静かなフロアを見回して、唇を噛み締めた。

(……デユエルモンスタースターズなんて、無くなっちゃえばいいのに)
忘れ物を握り締めそうになる衝動を何とか抑え、ベルは沸きだした
憤りをモップに込めて業務を再開した。

「おー、遅かったなセンサー。デザートはもう無いぜー?」

にしし、と満面の笑みを浮かべて、カーキグリーンジャケットを着た『デイラー売買屋』の男がユウにひらひらと手を振る。彼の前に置かれている食器には、多種多様な食事の痕跡が見られた。

明け方に街へ着いてすぐ宿を取った彼らだったが、歩き疲れが祟り着いてすぐに寝入ってしまった。今は日も高く上がり、丁度昼飯時だ。

ユウが起きたのは10時頃。デッキの調整を行っていた為に出遅れてしまったらしい。

食事は共同の食堂で済ませるといふこの宿の古めかしい方式も、ネイティブではそう珍しいことでもない。安価な料金を省みれば十分過ぎるほどだ。

「……そうか、スープでも残っていたら十分なんだが」

「はは、冗談だって。おぼちゃんに伝えてあるから、1食分はちゃんと確保してあるぜ?」

そう言つて売買屋が奥の厨房に声を掛けると、愛想の良さそうな中年の女性がトレーに食事を載せて運んできた。

「気を使わせて申し訳ない」

ユウは軽く会釈をして、食事を受け取る。その間、売買屋とおぼちゃんは他愛の無い、それでも十分に楽しげな談笑をしていた。

「クラド、お前は本当に誰とでも親しくなるな。不思議な奴だ」

食事を口に運びながら、ユウは不思議そうに売買屋——クラドに問いかけた。

「いやいや、センサーが無愛想過ぎんだよ。まあ、職業病みたいなもん

さ。情報収集は売買屋（おれら）の命綱みてえなもんだからな」

「俺にはとても真似出来そうに無い。羨ましい限りだ」

そう言つて、ユウはスープを啜つた。根野菜をコンソメで味付けした素朴なものだったが、刺激の無い優しい口当たりが飲むたびに心を落ち着かせる。

「センサー、それ褒めてんのか？ それとも嫌味？」

「？ 褒めたつもりだが」

「分かり難いんだよセンサーは。ポーカーフェイスもご立派だが、決闘外オプのときくらい分かりやすくリアクションした方が良いぜ？」

そう言われても、とユウは眉を顰めた……のだが、傍から見ればその表情に何の変化も現れてはいなかった。

「さて、飯を食いながらで悪いんだが。早速今日の予定を確認しようぜ？」

いつの間に聞いて回つたのか、クラドは雑紙に書いた街の地図をテーブルの上に広げた。地図には大まかに、情報が交換出来そうな店や酒場などの場所が書き込まれていた。

「……準備が早いな」

「ま、これが俺のセンサーに対しての『見返り』だしな。さて、この街の概要を簡単に説明するとだな——」

地図を指でなぞりながら、クラドは手短かに街の概要を説明している。

「残念だがこの街に『ショップ』は無い。都市部と都市部を繋ぐ宿街つてのが、ここらの街のデフォルトみたいだ。情報を仕入れるなら宿屋や酒場辺りか……後は少々危険な橋を渡ることになるが、外れの方に1件『ろくでもない連中』が集まる酒場があるらしい。日が沈んだら様子を伺うのも手かもしれないねえ」

めぼしい店を指差しながらそう言い終えると、クラドはおもむろに口端を吊り上げた。

「それともう一つ。俺らにとって超快晴の予報が入った」

「どういうことだ？」

「2ヶ月後、この先にある『シガマ』って都市で政府主催の公認大会が

開かれるそうさ。どうやら賞金とは別に『お宝』が賞品として用意されてるらしくてな。ここらの決闘者がこぞつてシガマを目指して集まってる」

「……普段より多くの決闘者が足を休めに来ている、か」

「そういうこと。センサーの『目的』探しも捗る、俺の商売相手も探せるわでアドバンテージは稼ぎ放題ってワケ」

ほくほくとした笑顔を浮かべて、クラドは懐からカードを取り出した。

どれだけ高く売り捌けるか、安く買い取れるか。そんな勘定が彼の頭を駆け回っていることだろう。

「さ、そうと決まれば早速外に出て回るとしようぜ……っと、そういやこの宿の人たちにはまだ『見せて』なかったんじゃないか？」

クラドが手招きすると、厨房の中で話しこんでいたおばちゃん達が数人、こちらへ駆け寄ってきた。

「おばちゃん達、センサーがちよつと聞きたいことがあるってさ」

そう促されて、おばちゃんたちの視線がユウに集まる。

ユウはその左腕に付けた決闘用の端末『Dパッド』を開くと、1枚の画像を表示して見せた。

「……こんなカードに、見覚えは無いか？」

夕暮れも迫り、辺り店の雰囲気も変わりだした頃。ユウとクラドの2人は、とある店の前に佇んでいた。

近辺の決闘者の勢力、カードの環境など、有力な情報はそれなりに入手することが出来た2人だったが、肝心の『目的探し』と『商売』は全く捗っていない。そう簡単に見つかるものでも、上手くいくものでもない。頭では分かっているのだが、やはり空振り続きは堪えるものがある。

「んで、最後にここが残ったわけだが——」

『ろくでもない連中』の集会所、とされる酒場は、どうやらここで間

違いないようなのだが。店前の看板が正しければ、この店は『メイド喫茶』ということになっている。

「どっからどう見ても普通の酒場なんだけどなあ……」

東の大陸『ユートピア・レイ白き文明』の歓楽街ではよく目にするが、この小さな宿街には珍しい肩書きだ。それも『ろくでもない連中』の集会所に使われているともなればさらに稀有だ。

「まさか、ろくでもないって『そういう意味』じゃねーだろうな……?」

古びた木製のドアから漏れ出る喧騒を聞いて、クラドは訝しげに眉を寄せる。

ユウは相変わらずの無表情のままだったが、立ち止まるクラドを何でもなく追い越すとおもむろに店のドアを開け放った。

「な、ちよつと待てセンサー!?!」

ぎい、と古びた木製のドアが軋み鳴くより早く、店内の喧騒がより鮮明に響いた。

「あーハイ!! いらっしやいませー、ご主人さまー!!」

お出迎えのメイド……なのだろうか。

店に入るなり、12〜3歳程の褐色肌の少女が、フロアーを忙しうに駆け回りながら微妙なニュアンスのご挨拶を放り投げてきた。

橙色を基調としたメイド服はそこそ立派なものであったが、街を覆う砂埃でところどころが薄汚れており、煌びやかな本職のそれとは程遠い印象を受ける。

妙に胸元を強調したデザインも、どこか荒くれ男達の趣向に合わせたようにで下品にも見えた。幸い、この褐色メイドは小柄な体躯に似合わず胸が大きく張り出しており、一見不釣り合いな衣装も難なく着こなせているようだが。

「席は空いてる場所にどうぞー、ご注文が決まりましたらお呼び下さいー」

あちらこちらへ酒の入ったグラスを配膳しながら、褐色メイドは早口にそう告げるとカウンターの奥へと消えてしまった。

危惧していたような『怪しい桃色空間』ではなかったことにひとまず胸を撫で下ろして、クラドはユウへ問いかける。

「何か、随分こじんまりしたメイドちゃんだな……さて、どうするセンサー？」

クラドの問いかけに応じることもなく、ユウは黙って言われた通りに『空いている席』に腰掛けると、そばにあったメニューを手に取り黙々と目を通し始めた。

メニュー内容も別段奇怪な名称のものではなく、何の変哲もない揚げ物などが淡々と顔を揃えているだけだ。これでは『メイド喫茶』の名を掲げている意味があるのかと店主に問い質したくなる。

「おいおい……一応『連れ』がいるんだからさ、1つだけ空いてるカウンター席にしれつと座られると俺の繊細なハートがだな？」

「早いもの勝ち、というルールがある」

メニューを広げるユウを横目に、クラドが苦笑する。

「いやいや、俺が先に座りたかったとかじゃなくてさ……ま、いいか。俺も他の連中と同じで立ち飲みさせて頂きますかねえ」

周囲を見れば、1つのテーブルを囲んで何人もが立ち飲みしているグループが店内の殆どを占めていた。店の広さに比較して客数が多いのはこの為だろう。

ユウが腰を下ろしたカウンター席のエリアは団体客が寄り付かず、酒場でDパッドを弄っているような客がちらほらと見受けられた。

Dパッドはネイティブ内での流通数が少ない。すなわち、彼らは他的大陸から何らかの目的を持って来ていることになる。ユウたちが狙いとしているのは、どちらかといえばこうした人種が殆どなので都合が良かった。

「それにしてもあのメイドの子……たった1人で注文受けて回ってるのか？」

客で溢れかえる店内を眺めながら、クラドが訝しげに眉を寄せる。

厨房内には他に2人ほど男性従業員の姿が見受けられたが、いわゆるメイドは褐色肌の少女1人だけのようだ。

各テーブルから次々と注文を受け、厨房に持ってかえるや否や過積載気味の料理や酒を持って運び回っている。

「……ネイティブじゃ珍しい光景でもないのだろうか？」

メニューから目を離すことなく、ユウは抑揚なくそう答えた。

「俺が言いたいのはそういうことじゃなくてだな、この客の量に配膳1人じゃおっつかねえだろって話」

「酷い奴だ。彼女の心配より自分の注文の心配か」

「メニューに夢中なセンチメンシーも大概だと思うけどな？　つか、俺が心配してんのはそこでもない」

メニューから目を離したユウが、無表情で首を傾げる。

「どういう意味だ」

「注文が遅くてイライラしてんのは、基本マイペースな俺らじゃないってことさ」

ガシャン、と。

クラドが言い切らないうちに、テーブルがひっくり返ったのかと思うような騒音が店内の喧騒を裂いた。

「……ほらな？」

静まり返った店内でも騒音の主に聞こえない程度に、クラドは声を潜めてそう呟いた。

彼の半眼が見据える先は、横倒しになったテーブルの向こう。屈強な荒くれが集まったこの場所にしては珍しい、線の細い美系の男が何やら不機嫌そうに腕を組んだまま顔を歪めていた。テーブルがひっくり返ったような、というのは比喻でも何でもなかったようだ。

「おーい、遅いよっ」

その華奢な顔立ちからはとても想像出来ない、獣じみた苛立ち声が凍てついた空気を震わせた。男はこの辺りのゴロツキと同じような皮製の日除けマントを羽織っていたが、マントの下から覗く華美な衣類が、比較的上の地位と権力を有していることを物語っている。

加えて、その腰にデツキを納める『ホルダー』が下がっていることを、ユウ達は見逃さなかった。

「だー……やっぱ決闘者なのな。これだからネイティブは」

ぼそぼそと悪態をつくクラドを尻目に、男の身勝手な怒りは褐色肌の少女に向けられていく。

「僕を待たせるんじゃないよ。何分経ったと思ってるの？」

「……すいません、ただいま店内は大変——」

少女の言葉は、男の細腕に遮られた。

「答えるよ。『何分』経った？」

有無を言わさぬ理不尽が、少女の胸元を掴む。

いくら華奢とはいえ、そこは成人男性の腕力だ。爪先が辛うじて床に着いているような状態であったが、少女の大きな瞳は決して怯んでいなかった。

「……店内は大変混み合ってます。注文は先のご主人様から順番にお運びしていますので、申し訳ありませんが少しお待ちください」

「へえ、口答えるの？ 僕に？」

『ご主人様』、お店は公共の場です。規則があります。他の方々をなかがしろにするような個人規則は……全力でお断りします」

震える身体を必死に抑えながら、少女は真っ直ぐに男を見据えて言った。

「ローカルルール、ね。小娘が偉そうに何をいい出すかと思えば……なら教えてやるよ、この世界の基本たる規則を」

にやりと口を歪ませると、男はぐいと少女の顔を自身の鼻先まで引き寄せた。

「タイム・イズ・マナー。時間は金より重要だ」

男は囁くようにそう言うと、乱暴に少女を後方へ突き放した。

「っ!？」

テーブルの惨状が広がる床に、どしやりと倒れこむ少女。その大きな琥珀の瞳には困惑と、理不尽な扱いに対する怒りが僅かに交じり合い男を見上げていた。

男はそんな少女の視線など気にも留めず、椅子に腰掛けたままわざとらしい口調で声を上げた。

「店長お？ 『最後の』この子、貰ってくけどいいよねえ？」

周囲を取り巻く男の一派——おおよそ10数人程——を除く、店内の人々からざわめきが沸き立つ。

と同時に、厨房の奥からきつく顔を引き締めた、恰幅の良いメイド服の男性がズンと姿を現した。

「……させる訳がないでしょう。今日こそ……いいえ、今日『だけ』は何としてでもアナタに勝つ!!」

いきり立つ彼の左腕には、多少旧式ながらもよく手入れされたデュエルディスクが装着されている。

「やめときなよ店長、闘うだけ時間の無駄だよ？　これ以上僕の時間を浪費させないでくれ」

「アンタの下らない時間なんか幾らでも使い込んでやるわ!!　さあ、さっさと構えなさい!!」

「……ま、これが最後になるだろうし。いいよ、好きなだけ足掻くといさ。おい、相手をしてやれ」

男は顎で合図を送ると、男性——店長の前に手下なのであろう取り巻きを1人立たせた。

「……随分と舐められたもんね」

「正当な評価だよ店長。あんた如き、もう僕が直接手を下す必要は無い」

「後で後悔しないことね……行くわよ!!」

店長と手下の男がデュエルディスクを起動させる。

『——『決闘申請』、確認』

どこからともなく、機械的な女性の声が響いた。

まるで空に取り付けられたスピーカーから響いているような、しかしそれでいて妙にクリアに声が届いている。

『ARワイジョン 仮想戦場、リンク 展開完了。ジャッジアプリ 審判員機構起動——』

突然、店内の景色が一変し、廃工場のような光景が広がっていく。

2つのデュエルディスクが起動し、決闘開始が認証されたとき。『白き文明』より配信される広大な仮想戦場が決闘者達を包み込む。

これが、この世界における決闘デュエルフィールド場の基本スタイルだ。

新型であろうと旧型であろうと、要となる『白き文明』との交信システムさえ備わっていればどのデュエルディスクでも仮想戦場を展開し決闘が出来る。逆を言えば、交信システムの無いデュエルディスクは同型品としかリンク出来ない単なるガラクタに過ぎない。

そう言わざるを得ないのは、何かとトラブルの起き易いデュエルの

環境から決闘者を守る、『審判員機構』が交信システムを介して配信されてるからだ。

『……こんにちわ皆様。今回の試合で審判を勤めさせて頂きます、ネフと申します。宜しくお願いします』

突如、決闘者の間に立つように現れた、どこか半透明で現実感の薄い小柄な少女。彼女こそが『審判員機構』そのものだ。

その姿やキャラクターこそ仮想のものだが、こうして不正を見抜く公平な審判として立ち、決闘者に危害が加わるようなことがあれば仮想技術を応用し、身を守ってくれる。

これらのシステムが存在するおかげで、決闘者であること自体がアドバンテージとして確立している訳だ。

『それではルールの設定確認を行います。対戦形式はシングル、LPはハーフライフ4000からのスタート。追加で適用する設定がありましたら、どうぞ』

ネフ、と名乗った審判員機構の少女は静かにそう言うと、決闘者2人目配せする。

「賭けルールアンテイを申請するぜ。譲渡の期限は今日、こっちは奴隷のガキを1人、そっちは従業員のガキを1人だ」

下卑た薄ら笑いを浮かべながら、手下の男がそう宣言した。

『……アンティールは双方の合意が認められなければ適用されません。双方、明確な承認をお願いします』

「俺は大賛成だ」

「……承認するわ。拒否したところでベルちゃんを守ること、『あの子達』が戻ってくることは無いもの」

陰鬱に表情を曇らせながら、店長が呟く。

『……承認を確認、アンティールが適用されました。デュエル終了後、設定された賭け品が譲渡が確認されない場合、我々審判員機構が強制的に賭け品の譲渡を執行します』

一連のやり取りを眺めながら、クラドは大よその状況を理解し呆れたようにそつとぼやいた。

「……もしかして、この店にメイドが1人しかいないってのは」

そんなクラドの眩きを小耳に挟んだらしい、ユウの隣に座っていた丸眼鏡を掛けた初老の男性が静かに口を開いた。

「お察しの通りだ坊主。ここのメイドは皆、あの坊ちゃんが持っていったちまったのさ。『時間』の肩代カダにな」

Dパッドに目を落とす、時折ウィスキーを口元に運ぶ……一連の騒ぎには関心を示していないようにいながら、しつかりと聞き耳は立てていたようだ。

「お？　なんだよ爺さん。アイツのこと知ってんのか？」

「ああ……どこぞの異世界から来た、お偉いさんの脛齧りらしい。金持ちの坊ちゃんやんが権力を盾に威張りちらしているだけなら可愛いもんなんだが。腕はそれなりに立つもんでな」

クラドは再度、男の腰に光るデツキホルダーを見やる。

これだけの勝手をやって尚『出る杭』が打たれていないということは、それなりに梅雨払いはできる腕の持ち主だということだろう。どうやら腰のホルダーはハリボテの権力者にありがちな飾り物アクセサリーではないらしい。

「なるほど、ねエ……」

クラドは苦笑いを浮かべながらも、再び決闘者たちへと視線を戻した。

「……始める前に1ついいかしら？　あの子達は今……どうしてるの？」

「ギアな？　新しい『ご主人さま』に目一杯、可愛がって貰ってるんじゃないのか？」

手下の男がニヤリと口端を吊り上げて答えると——店長の表情に、鬼の形相が浮かんだ。

次の瞬間に放たれたのは、それこそ雄叫びじみた怒涛の宣言だった。

「^{デュエル}決闘!!」

「バトル!! 《サモン・リアクター・AI》で《悪魔の調理師》に攻撃!!」

機械兵団の圧倒的な侵攻は、店長のLPをあつという間に削り切った。

仮想現実の爆風が、店長の身体を無慈悲に吹き飛ばす。

「……ああつ!!」

店長 LP 0

「店長!!」

思わず駆け寄ろうとしたベルだったが、賭け品である彼女にその自由は許されなかった。男達に行く手を阻まれ、立ち竦む。

彼が決死で挑んだデュエルは、残念ながら相手の一方的な展開で幕を閉じた。

「ごめんなさい……アタシの力が及ばなかったわ……」

店長は床に伏したまま、ベルに顔を合わせられないまま呟いた。その声には堪えきれずに涙の色が混じっていた。

「はいはい、感動のお別れフェイズはそこまで。さつさと賭け品を譲渡しなよ?」

男は座ったままイラついた口調でそう言うと、審判員機構に目配せする。

『アンテイルールに従い、賭け品を譲渡して下さい』

審判員機構のネフは静かに告げる。公平であることを求められる以上、そして人の姿形をしても、あくまで彼女は『システム』だ。そこに感情が挟まれることは無い。

「……………」

ベルは黙って、男の下に歩み寄る。

——すまない。

記憶の片隅に染みこんだ『あの日』の光景が、今この瞬間と重なって見えた。

どうしてこんな理不尽が繰り返されるのだろうか。デュエルモンスターズは。決闘者はそんなにも偉いのか?

「…………ごめんなさい」

涙を流す店長が、搾り出すように呟いた。

ベルは『あの日』と同じように、頭を振って笑顔を見せた。

彼女の答えは変わらない。力の無い自分に代わって闘ってくれた店長に恨みは無く、憎むのはデュエルが全てを支配するこの世界の不条理と、そんな世界で力を持てなかった自分の不甲斐なさ。

『それでは、これにてデュエルを終了します。……ガツチャ、楽しいデュエルでしたぜ』

場違いなコメントを残し、審判員機構のネフと仮想戦場の展開が解除される。

瞬く間に、景色は元の木造店内へと戻った。

「さて、と……前の子達に比べると少し地味だけど。まあ発育は良さそうだし買い手はつくでしょ」

男は文字通り値踏みをしながら、ベルを眺める。

「ああ、いいことを思いついた。買い手ならこの店にいくらでもいるじゃないか？」

ぱつと表情を明るくして、男は辺りで佇む男達を見回した。

「この場でオークションといこう。この子1人になっても店に来てる熱心なファンの皆様なら、喉から手が出るほど欲しいんじゃないのかな？」

男の発言に、周囲は動揺にぎわめき立つ。

ベルは思わず耳を疑った。この男が遊び半分で行う人身売買の金額は、恐らくここに居るような荒くれ男たちが払えるような『はした金』では届かないはずだ。

「さて。そういうわけで商品を『展示』しないとね……早速だけど服、ここで全部脱いで貰える？」

ニヤニヤと、男は狂喜に満ちた目をベルに向けた。

「……え？」

「え、じゃないよ。キミの商品価値は結局、その身体にあるんだから。そこを見て貰わなきゃ買い手が付かないだろう？」

がたり、と背後で店長が立ち上がる。今にも暴れ出しそうな息遣いまで聞こえてきたが、決闘者に手を出せばどうなるかは店長自身が身

に染みて分かつてる筈だ。

今この場に集まっているのは、この近辺を縄張りとしている決闘者だ。自分に歯向かったらどうなるか、それを見せしめるためにこんなことを強要させているに違いない。

「さ、早くしなよ。また僕の時間を無駄にするようなら、無理矢理に剥いでも良いんだよ?」

彼らの圧倒的な実力を見せられた後だ。この店の実情を初めて目の当たりにした客は勿論のこと、事情を知っていた初老の男性のような常連客達も黙って彼らの暴虐を見過ごす他無かった。

ベルもそれは理解している。自分を助けてくれる者は、もう誰も居ない。

「……………」

屈辱と恥辱に顔を染めながら、ベルはゆつくりと胸元のボタンに手を掛けた。

ココから先はただただ落ちていくだけ。救いの光も希望も無いだろう。ベルはそう覚悟していた。

涙で滲むその視界に、白い人影が映りこむまでは。

「……………」

異様な静寂の中、こつこつと床を鳴らし一派に向かっていく人影。

あろうことかそれは、今の今まで無関心の塊のようだったユウ・キリサキその人だったのだ。

「おいおいセンサー、アンタそういう『アツい』キャラじゃねーだろ?」

呆れながらも、しかしどこか楽しそうにクラドが呟く。

トイレに立っただけ、というような足取りではない。ユウの足はしっかりと意思を持って、彼らの方を向き歩を進めている。

「何だお前? 正義の味方のつもりか?」

男の一派から苦笑が漏れ出す。

ユウはさらに一歩足を進めベルの目の前まで来ると、すつと静かに息を吸い込んで、言った。

「ジントニック2つと、オニオンリング。あとは適当に腹に溜まるものが欲しいんだが、何かまともな食事はないのか?」

「……へ？」

メニューは開かれ、ベルに突きつけられている。

涙を貯めた大きな瞳を丸くしながら、ベルはそんな気の抜けた返事を返す他無かった。

「注文が決まったら呼べ、と言ったのはお前だろう。ならメイドらしく「かしこまりましたご主人様」ぐらい言ったらどうだ？」

訪れる、先程までとはまた違ったぎこちない静寂。

「おいおいセンサー、まさか『注文』しに行ったのか？」

クラウドが苦笑を浮かべながら、茶化すようにツツコミを入れる。

「……面白いな、キミは。でも生憎だけど、もうこの子は僕のものだ。その注文は受けられないよ？」

男が好奇の眼差しを向けるも、ユウは相変わらず仏頂面を崩さぬまま言葉を返した。

「そうか。すまない、『無駄な時間』を取らせた」

「構わないよ。その代価程度なら、キミには十分に笑わせて貰ったしね」

「なら無駄のついでに、1つ尋ねたいことがある」

皮肉のつもりだったのだろうか、ユウにその意図は伝わっていなかったらしい。男の眉間に少しばかり皺が寄る。

「あー、申し訳ないけど、キミの話に付き合うのはもう——」

男の返答を待たず、ユウはDパッドを取り出すと1枚の画像を表示して見せた。

「アンタ達。こんなカードに見覚えは無いか？」

それは何の変哲もない、1人の少女が描かれたデュエルモンスターズのカードだった。

「……《魂の牢獄》？」

カードには『白き文明』のものらしき白い学生服を着た、可愛らしい少女が描かれている。しかしその表情はどこか虚ろで、暗い牢獄のような部屋に囚われていた。

「なんだい、その気味の悪いカードは？ 知らないね、お前らもそうだろう？」

時間を取られたのが気に入らなかったのか、少し眉をひそめた男が取り巻きに問いかけたが、誰一人首を縦に振る者はいなかった。

「し、知ってます！ わたし、そのカードのこと！」

必死に声を張り上げた、ベル以外は。

「……は？」

訝しげに、そして思いつきり不機嫌そうに男が少女を見やった。

「おいおい……助かりたいからって適当なことを言うんじゃないよ。ネイティブ出身のお前が、僕すら知らないカードのことなんか知ってる訳が無いだろう？」

「嘘じゃありません！ わたし、そういうカードを持つてる人を見たことがあります！」

声を張り上げて叫ぶように主張するベルは、ただじつとユウの目を見据え続けた。

「そういう、つてねえ……キミさあ、曖昧にも程があるでしょ？ イラストが似たようなカードなんていくらでもあるんだよ？ 適当なことを言つて無駄な時間を——」

「分かった」

男の言葉を遮り、ユウはDパッドを閉じると、言った。

「事情が変わった。俺はそのメイドをアンタから『奪わなきゃ』ならなくなつた」

にわかにざわつく店内。

「……へえ、それつてつまり闘ろうつての？ 僕と？」

口端を吊り上げ、男の目が好奇に輝く。

男は銃型のデュエルディスクを取り出すと、おもむろにその『銃身』をユウへと向けた。

「いいよ、これだけ時間を無駄にされたんだ。せめて見返りとして、憂さ晴らしくらいさせて貰おうかな？」

「ボス。こんな奴あ俺が……」

「いや、僕がやるよ。万が一キミが負けでもしたら二度手間になるしね？ これ以上無いくらい時間の無駄だ」

男はそう言つて立ち上がると、デュエルディスクを展開した。

「さ、決闘前の自己紹介といこうか……僕はシフト。シフト・クロツカ。一応、この決闘者旅団パーティの頭を務めてる者だ。キミは？」

「……ユウ・キリサキ。ただの旅行者だ」

ユウの白いDパッドが展開し、ディスクモードへと変形する。

「ただの『旅行者』が随分といいモノを持つてるじゃないか。知っているかい？ キミみたいな奴を『カモ』って呼ぶんだよ」

「御託はいい。早く始めよう、時間の無駄なんじゃないのか？」

「……オーケー、分かった。そう言うならお望み通り、すぐに決着を付けてやるよ」

お互いがディスクにデツキをセットする。

セットされたデツキはオートシヤツフル機能によってランダムに掻き混ぜられ、運命を決める初期手札……デツキトップ5枚を主へと差し出した。

『――決闘申請確認。仮想戦場ARワイジョン、展開完了。審判員機構起動――』

淡々と起動する、最先端科学の決闘場。

この店で行われる本日二度目の決闘、その舞台は古に榮えし、石造りの廃神殿だ。

荘厳な光景に思わず息を呑むベル。自分の命運が左右される勝負などでなければ、より純粹にこの風景を楽しめたのに、と思わずにはいられなかった。

『呼ばれて飛び出て、美少女審判員ジャッジコーパルちゃん只今参上♪』

突然、響き渡る陽気な女性の声。

ぎよつとしたベルが目をやると、戦場の中心に位置する柱の上でさもステージに立っているかのように佇む人影があった。

ワインレッドの髪に大きな青いリボン。ベルは知る由も無かったが、コーパルと名乗ったその女性は、昨夜ユウ達の前に現れた『審判員機構』と同一人物だった。

しかし服装はチアガールではなく、ウエスタンハットを目深にかぶった西部劇のガンマンのような格好をしている。

『さてさて、今回私が審判を勤めさせて頂きます試合は――現在、飛ぶ鳥を落とす勢いでぐいと勝率を上げている謎の決闘者ユウ・キリ

サキさんと、その圧倒的な戦術で自身の『決闘者旅団』勢力を拡大し続けているシフト・クロツカさんによる世紀のイケメン対決!!』

むさ苦しい男ばかりな観客からの反応は今ひとつであったが、そんなことを気に掛ける風もなくコーパルは言葉が続ける。

『ではでは、ルールの設定確認を行いますよ。対戦形式はシングル、LPは4000からのスタート。追加設定がありましたら、なんなりとお申し付け下さいませ♪』

コーパルの問いかけに、シフトがすかさず答える。

「アンティールの適用を申請するよ、こっちはそのメイドの所有権を。キミの方はどうする？ このアンティイが成立するような品物は持つてるのかい？」

シフトの目は、やはりユウの腕に装着されたDパッドに目が向いていた。彼は最初からユウがDパッドをアンティイにしてくるだろうと考えていたのだろう。

だが、ユウの口から出たのは彼の算段を大きく外れたものだった。

「俺はこのデッキを賭ける。しかるべきルートで売却すれば、その子を買うだけの金にはなるはずだ」

しばしあっけに取られたシフトだったが、やがて抑えきれないように満面の笑みを浮かべて何度も首を頷かせた。

「……なるほど。いいよ、アンティイは成立だ。アドバンテージは十分に取れそうだし」

ユウが平然と言ったのけた『デッキのアンティイ』だが、単純な売却金額はもとより決闘者として強力なカードを多く持つことには、金などより何倍も重大な価値が付加される。

シフトにしてみれば破格の申し出。断る理由は無い。

『ご両名から承認を確認しましたので、アンティールを適用しました。尚、デュエル終了後すみやかに賭け品の譲渡が行われない場合、私たち審判員機構が強制的に譲渡を執行しますのでご注意くださいかね？』

微笑ましげに両決闘者を見比べながら、コーパルは最終確認を促した。

『1人の少女と、決闘者の魂とも言えるデッキを天秤に賭けた死闘……いいですねー、何やらドラマチックな香りが漂ってきましたよー?』

不意に自分が表舞台に引っ張り出されたような気がして、ベルは気恥ずかしくなって思わず周囲に目を配る。が、誰も自分のことなど意に介した風も無い。

『さてさて、ここで両者の命運を分けるダイスロールタイムといきましょう♪』

そう言ってコーパルが取り出したのは、白と黒の6面ダイス。

仮想空間だからこそなのか、ユウとシフトの頭上に文字が表示された。

〔ユウ 白〕

〔シフト 黒〕

『アルティメットダイス、ゴー!!』

コーパルが天高く右腕を振り上げる。手のひら大のサイズだったダイスは宙を舞う間にみるみる大きくなり、地面を転がる頃には観客達にも目が分かるほどにまで巨大化していた。

賽の目はそれぞれ白が5、黒が3を示した。

『と、いう訳で先行は白コーナー、ユウ選手からスタートです♪ それではご両名、準備は良いですかー? セーの、』

〔『決闘!!』^{デュエル}〕

宣言と共に、2人の決闘者は初期手札の5枚をデッキから引き抜いた。

ユウ LP 4000

手札・5

シフト LP 4000

手札・5

「俺の先攻、カードをドロー」

ユウは一瞬で手札に目を通し、カードを1枚ドロウする。

最良の一手は、すぐに決定した。

「俺は手札から、『ソーラー・エクステンジ』を発動。『ライトロード・ピースト ウォルフ』を捨て、デツキから新たに2枚をドロウする」
ライトロード。そのワードを聞いた観客は思わず驚嘆の声を上げた。

カードカテゴリー「ライトロード」は、この辺りではあまり見かけない希少なカード達だ。ユウを知るクラドと、デュエルモンスターズに疎いベルだけはそれぞれ異なった反応を示したが、その価値を知る観客達が驚くのも無理は無い。

このデツキは特徴として『デツキからカードを墓地に送る』効果を多用し、墓地のカードが増えることにより強力な効果を発揮する。そのためゲームの序盤は出来るだけ早く、より多くのカードを墓地に送ることが求められる。

そうした動きを1枚で可能とする『潤滑油』のようなカードこそが『ソーラー・エクステンジ』。それを開始1ターン目で発動できたのは好調な滑り出しと言えた。

「更に、デツキの上から2枚を墓地に送る」

ユウのデツキ上から、『ライトロード・サモナー ルミナス』《裁きの龍》の2枚が墓地へと送られる。

墓地に送られたカードを見て、にわかになぞめき立つ周囲の観客達。シフトはというと、ヒユウと上機嫌に口笛を鳴らす程だった。

「ライトロードか……流石に啖呵を切っただけはある。それも『裁きの龍』を入れているとなると純正か、益々価値が上がりそうだ」

ライトロードの代名詞とも呼べる、正真正銘の切り札。かのカードの強力な効果は、ライトロードの希少さに反比例した知名度に裏付けられている。

デュエルに疎いベルにとって全く意味不明な先攻ターンではあったが、シフトの反応からユウの持つデツキが相当高価なものだということくらいは理解できた。

それだけの代物を賭けたのだ。この賭けデュエル、ユウの気まぐれ

や酔狂などではないのだろう。

「……続けて、俺は手札から《ライトロード・パラディン ジェイン》を攻撃表示で召喚」

ユウがディスクにカードをセットすると、仮想戦場のフィールドに白銀の甲冑を纏った若き騎士が光臨した。

《ライトロード・パラディン ジェイン》

☆4 / 光属性 / 戦士族・効果 / ATK 1800 / DEF 1200

後光差す凜々しい姿は、仮想現実とはいえ周囲の観客さえも圧倒する。

「裏側表示(リバーズ)カードを2枚伏せ、エンドフェイズ。ジェインの効果でデツキの上から2枚を墓地へ送る」

再び墓地に送られたのは、《ブレイクスルー・スキル》《死者転生》の2枚。

「これで俺は、ターンエンド」

エンド宣言をしたユウに、パチパチと拍手を送るのはシフト。

「ライトロード。確かに良いデツキだ……でも、強力なデツキが必ずしも万能ってワケじゃあない。過ぎた力を手にして身の程を誤ったキミに、僕が少しばかり『教育』に時間を割いてあげるとしよう。僕のターン、ドロー！」

後攻1ターン目、シフトのターンが開始される。

シフトの表情には余裕を通り越した、どこか気だるささえ匂わせる気味の悪い笑みが張り付いていた。

「ある意味、残念だよ。そんな希少なデツキを前に退屈を強いられるなんてね」

「退屈する前に、そうして喋っている時間が無駄になっているようだが？」

ユウの、恐らくは意図していないのであろう皮肉にも、シフトは顔色一つ変えることなく言葉を返す。

「そうでもしないと、折角のデュエルが盛り上がりそうにないんだよ。この手札じゃ、あまりにも簡単に決着が付きそうなもんでね？」

「……随分な自信だな」

「ああ、このカードを見ればキミもきつと理解するよ。このデュエルそのものが途方もない時間の無駄だったということを、ね」

そう言いながら、シフトはディスクに『あるカード』を叩き付けた。

「まずはモンスターを召喚！ 来い、アーリー・オブ・ジャステイス《A・O・J》 コアデストロ

イ》！」

アーリー・オブ・ジャステイス
《A・O・J》 コアデストロイ》

☆3 / 闇属性 / 機械族・効果 / ATK 1200 / DEF 200
シフトのフィールドに出現したのは、流線型のフォルムが特徴的な、単眼四足歩行の機械だった。その姿はどこか昆虫を彷彿とさせる。

「……おいおいマジかよ？ よりにもよってA・O・Jだった？」

そのモンスターを見たクラドは、顔を苦く曇らせた。観客達も先程とはニュアンスの違う、絶望的な驚嘆を漏らしている。

(皆、一体何を……)

目まぐるしく変化する周囲の状況に付いていけず困惑するベル。

そんな彼女の様子を見て、審判員機構たるコーパルがニコニコと微笑みながら尋ねた。

『おやおや、賭け品さん。デュエルはあまりお詳しくないようですね』

「？」

「へ!？」

まさか自分に話し掛けられるとは思っていなかったベルは、一段と困惑した様子でたじろいだ。

「えっと、わたしですか……？」

『はい。私達審判員機構は、観客の皆さんにもデュエルを楽しんで貰うべく、解説機能も搭載されているのです♪ 今回は熟練者の皆さんばかりのようなので、私はお払い箱といえますか。デュエル中は特にやる事が無くて暇だったんです。という訳で、ご質問があれば何でもお答えしますよ?』

「え、えっと。わたし別にデュエルに興味は……つてうあ!？」

誇らしげに胸を張るコーパルに対し、ベルはおずおずと断ろうとし

た……が、気がつけばコーパルは目と鼻の先まで近寄ってきていた。仮想現実の存在とはいえ、気配を消して接近するそのワザにただならぬ者のオーラを感じたベルは、思わず顔を引きつらせた。

『はい？』

「あ、あの。じゃあ今何がマズいのか、わたしにも分かりやすく教えて頂けると……」

にこにこ笑顔の妙な迫力に気圧され、ベルは適当に質問を投げかけることにした。

『ふむふむ、分かりました。それでは細かいルールはさておき、お2人の使うデツキを簡単にご説明しましょうか』

ヴン、と鈍い電子音を響かせて、ベルの前にモニターが出現した。どうやらコーパルが解説に使うらしい。

『ユウさんの使うライトロードは光属性のモンスターで統一された、いわば『光の軍隊』。膨大な魔力を消費する、という設定からデツキからカードを墓地に送る共通の効果を持っています。この墓地送り効果を加速させることで強力なカードを呼び出したり、墓地で発動するカードの効果を上手く利用したりするのが主な闘い方になります。強力なデツキですが非常に希少で、この辺りでは見かけることも珍しいようですね』

表示されたモニターに、恐らくコーパルの自作なのだろう図解が表示された。非常に可愛らしくはあるが、お世辞にも上手とは言い難い。

『次に、シフトさんの使用するA・O・Jですが——』

「僕は更に永続魔法《マシンナイズ・フロントライン機甲部隊の最前線》を発動し、バトルフェイズへ移行する。コアデストロイでジェインを攻撃!!」

コーパルの解説の傍ら、シフトは悠々とターンを進めていく。不気味な駆動音を轟かせながら、機械兵器が白銀の騎士に迫る。

ベルとてデュエルの様子は何度も見ている。攻撃力の低いモンスターが負ける、ということくらいは分かっていたが、その数値の差を見て目を疑った。このまま戦闘を行えば破壊されるのは攻撃を仕掛けたコアデストロイだからだ。

しかし——光殺しの機械爪は騎士の身体を貫き、いとも簡単に破壊を成し遂げた。

「な、なんで？ 攻撃の数字はあつちの方が低いのに……」

『《A・O・J コアデストロイ》のモンスター効果ですよ。光属性のモンスターと戦闘を行う場合は、その攻撃力の差に関係なく一方的に破壊することが出来るんです』

コーパルから語られた理不尽な効果に、ベルはシフトの暴虐無人な姿を重ねた。デッキは決闘者の心を映す。その言葉をベルがここで知っていれば思わず頷いていただろう。

『ご覧頂いたとおり、A・O・Jは光属性のモンスターに対して有効に働く効果が多く、対光属性に関しては右に出る者はありません。光属性の侵略宇宙生命体〔ワーム〕を撃退する為に開発された闇属性の機械兵団……という設定だそうですねー。とどのつまり、ユウさんのライトロードには効果バツグンという訳です』

「そんな……」

ユウのLPにダメージこそ無いものの、このターンでデッキ同士の『相性』という圧倒的不利な条件が明白となった。

「僕はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ。あっさり攻撃が通ったけど……そっちのリバースカードは役に立たない『ブラフ』だったのかな？ そんな調子じゃ、僕には勝てないよ？」

シフトが満足げに目を細めてカードを2枚場にセットするも、余裕に溢れた彼とは対照的にユウは変わらぬ調子でターンを開始した。

「……俺のターン、カードをドロー」

予想に反して反応の薄いユウに、シフトは僅かに表情を曇らせる。全く心情の読み取れないユウのポーカーフェイスは、デュエルにおいて天性の才能と言えた。

「俺は、《カードガンナー》を攻撃表示で召喚」

ライトロードの騎士に代わって出現したのはA・O・Jとはまた違う、野暮ったいデザインの小型機械だった。

《カードガンナー》

☆3 / 地属性 / 機械族・効果 / ATK 400 / DEF 400

「? ライトロードじゃないモンスター……?」

疑問符を浮かべるベルに、コーパルがすかさず微笑み返す。

『ふっふっふ、賭け品さん。何もライトロードデッキだからといって、ライトロードのカードだけしか入れてはいけない何てルールはありません。むしろ隠し味的に他のカードを投入することで戦略の幅が広がり、より多くの局面に対応出来るようになったりするんですよ?』

コーパルの解説を体現するように、ユウは静かに効果の発動を宣言する。

「《カードガンナー》の効果。デッキの上からカードを3枚墓地に送り、エンドフェイズまでその攻撃力を1枚につき500ポイント、合計1500ポイントアップさせる」

ユウのデッキからそれぞれ、《D・Dクロウ》《ライトロード・モンク エイリン》《光の援軍》が落とされる。

「……これで墓地に、ウォルフ・ジェイン・ルミナス・エイリン。合計4体の『ライトロード』が揃った」

ユウが口にしたその言葉は、いわばライトロードの上等文句。

光の軍隊、その切り札たる最上位の存在が光臨するに相応しい状況が整ったことを告げる、相手にとっての最後通告だ。

「自分の墓地に『ライトロード』が4種類以上存在する時、このカードは手札より特殊召喚出来る。《裁きジャッジメント・ドラグーンの龍》を攻撃表示で特殊召喚」

空の青さえも割いて現れた光の柱。その中から純白の鱗を纏った巨龍が姿を現した。

僅か2ターン目にして姿を現した裁きの龍に、観客達が歓声を上げる。

《裁きジャッジメント・ドラグーンの龍》

☆8 / 光属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 3000 / DEF 2600

「裁きの龍、効果発動。1000ポイントのライフを支払うことで、これ以外のフィールド上のカードを全て破壊する」

A・O・Jがいかにか強力な戦闘効果を持つていようとも、このカードの前では一瞬で塵芥と化す。

ユウ LP4000↓3000

ユウのLPが大きく減少し、その力を糧とするかのように裁きの龍が光を纏っていく。

「……『ディスプレイック・レイ』」

裁きの龍が、その身に溜めた光を解き放つべく力を込めた、その瞬間。

「させないよ、僕はその効果にチェーンして、リバーズカードを発動させる!!」

待ち望んでいたように狂喜の笑みを浮かべ、シフトは高らかにカードを発動させた。

「永続罠、《閃光を吸い込むマジック・ミラー》!!」

シフトの発動したカードに、観客達がざわめき立つ。

「効果は単純明快!! このカードが存在する限り、光属性モンスターはフィールド上はおろか墓地ですら効果を発動することは出来ない!! 裁きの龍だって例外なくね!!」

フィールドに出現した巨大な鏡に、裁きの光が吸収、霧散されていく。

その能力を無力化された裁きの龍は、低くうなり声を上げてマジック・ミラーを恨めしげに睨み付けた。

「な、なんですかあのカード!? あんなのまで出されたら勝てる訳ない……反則じゃないんですか!?!」

あまりの理不尽な効果にベルは思わずコーパルに訴えたが、そのコーパルは笑顔で、すかさず言葉を返した。

『いいえ賭け品さん。お2人とも、正々堂々とデュエルしていらっしやいますよ? それにこんな窮地の状況こそ、デュエルの一番の醍醐味スパイスになるんじゃないですか♪』

「た、楽しむって……」

コーパルの言葉に、ベルは思わず言葉を失った。

ただ成り行きを見ていればいいだけの側からすれば、このデュエル

も余興のようなものだ。楽しむ余裕もあるのだろうか。

賭け品であるベルにとってこの勝負は自分の未来の暗明を分ける重大なものだ、とても楽しんでなどいられない。まして今やベルにとって『明』に位置するユウが劣勢なのだ。

「……バトルフェイズ。カードガンナーでコアデストロイを攻撃」

カードガンナーが放った砲撃が、見事にコアデストロイを貫いた。地属性であるカードガンナーに、コアデストロイの効果は通用しない。

シフト LP 4000 ↓ 3300

戦闘を行ったモンスター^の攻撃力の差分の数値が、ダメージとしてシフトのLPから差し引かれる。だがシフトにとってはまだ、この程度のダメージは掠り傷程度でしかない。

「フ、少しくらいは噛み付かせてあげるよ。だが僕は永続魔法《機甲部隊の最前線》の効果を発動させて貰う。このカードは自分の機械族モンスターが葬られたとき、それよりも攻撃力が低い同属性の機械族1体を特殊召喚できる。来い、《A・ジエネクス・クラッシャー》！」
《A・ジエネクス・クラッシャー》

☆4 / 闇属性 / 機械族・効果 / ATK 1000 / DEF 2000

等身の低い無骨な機械兵がフィールドに姿を現す。

腕を交差させ、肩膝をつくその姿は守備表示であることを示していた。

「……続けてバトル。裁きの龍で攻撃」

効果を封じられたとはいえ、その攻撃力は3000。A・ジエネクス・クラッシャーの守備力をゆうに超えた光のブレスが無慈悲になぎ払う。

「あー、怖い怖い。機甲部隊の最前線は1ターンに一度までしか効果を発動できないから、これで僕のフィールドはガラ空きだけど……キミの場に攻撃可能なモンスターはもういないようだね？」

ニヤニヤ、と意地の悪い笑みを浮かべ、遠まわしにターンエンド宣言を促すシフト。

「……俺はこのまま、ターンエンド」

本来ならばこのエンドフェイズ、裁きの龍はデッキから4枚のカードを墓地に送る効果を発動させるのだが、マジック・ミラーはその効果すら打ち消してしまっている。更に、カードガンナーの上昇した攻撃力も元の400へとダウンした。

「さて、僕のターンだ。カードをドロロー……おや？ どうやらキミのお望み通り、早く決着がつきそうだ」

シフトはドロローしたカードを見やると、口端を吊り上げて言った。

「僕はチューナーモンスター、《ブラック・ボンバー》を召喚!!」

《ブラック・ボンバー》

☆3 / 闇属性 / 機械族・チューナー・効果 / ATK 1000 / DE

F 1100

「ブラック・ボンバーの効果を発動、墓地の《A（アーリー）・ジェネクス・クラッシュャー》を特殊召喚!!」

紫色の魔法陣に導かれ、地の底より再び這い出した機械兵。攻撃力の低いモンスター2体をフィールドに並べたことに疑問符を浮かべたベルだったが、そんな彼女に反し、周囲の観客らはにわかによめき立った。

「更に僕は魔法カード《死者蘇生》を発動!! 墓地よりモンスター1体を蘇らせる!! 来い、《A・O・J コアデストロイ》!!」

シフトのフィールドに、『チューナー』を含むモンスターが3体が並び立つ。

その合計レベルは10。ベルには知る由も無かったが、もし対戦相手がユウでなければその表情に絶望が浮かんでいただろう。

「僕はチューナーモンスター、ブラック・ボンバーに、レベル4のクラッシュャーとレベル3のコアデストロイをチューニング!!」

ブラック・ボンバーが3つの光輪に変化し、2体の機械兵を囲い変質させていく。

「大成されし晩期の要塞、この戦いを終局へと導け!! シンクロ召喚

!! 出撃せよ、《A・O・J デイサイシブ・アームズ》!!」

《A・O・J デイサイシブ・アームズ》

☆10／闇属性／機械族・シンクロ・効果／ATK 3300／D
EF 3300

光輪の内より姿を現したのは、裁きの龍すら小さく見える程に巨大な、まるで山のように聳え立つ巨大なA・O・Jだった。その姿はもはや、機械兵士などではなく要塞だ。

「も、モンスターが合体した!?!」

『うーん、合体とは少しニュアンスが違いますが、これは『シンクロ』と呼ばれる特殊な召喚方法です』

聞きなれないデュエル用語に、ベルが恐る恐る聞き返す。

「シン、クロ?」

「はい。『チューナー』と呼ばれる特別なカテゴリのモンスターと、その他のモンスターをフィールドから墓地に送り、それらのレベル合計と同じレベルの『シンクロモンスター』をエクストラデッキから呼び出す、というものです。モンスターの足し算、とでもいいでしょうか?」

回答の中にまたも聞き慣れない単語がいくつか飛び出したが、聞き返す間も無くターンは流れていく。

「さて、覚悟は良いかい? 僕はディサイシブ・アームズのモンスター効果を発動!! 手札を全て墓地へ送り、相手の手札を確認し光属性モンスターを全て墓地に送る!! 『エネミー・レイ・サーチ』!!」

ディサイシブアームズからサーチライトのようなものがユウに向けて照射されると、ユウの手札はARヴィジョン上に大きく映し出されてしまった。

「ふん、《ライトロード・ドルイド オルクス》に《増援》……? そんなカード、もはや壁にもならないねえ!? さあ、墓地へ落として貰おうか!!」

ユウは静かにオルクスのカードをディスクの墓地ゾーンへと落とす。

その瞬間を待っていたように、シフトが高らかに声を上げた。

「まだ効果は続く!! この効果で墓地へ送った光属性モンスターの攻撃力の合計分、ダメージを受けてもらう!! 『ペナルティ・オブ・レイ』

!!

《ライトロード・ドルイド オルクス》

星3 / 光属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 1200 / DEF 1800

ユウ LP3000 → 1800

遂に、ユウのLPが残り半分を切った。

「バトルフェイズ、デイサイシブ・アームズでカードガンナーに攻撃!!」

カードガンナーの何十倍もあるうかという巨大な機影が悠然と迫る。この攻撃が通ってしまえば、ユウが受けるダメージは2900。敗北決定に釣り銭まで付いてくる。

ベルが、観客が思わず声を上げそうになった、その瞬間。

「リバースカード発動、速攻魔法《エネミーコントローラー》」

静かに、しかしそれでいて明確なユウの発動宣言がデイサイシブ・アームズの攻撃をストップさせた。

「俺はカードガンナーをリリースして効果を発動。相手フィールド上のモンスター1体のコントローラーをエンドフェイズまで得る。対象はデイサイシブ・アームズ」

攻撃対象を失ったデイサイシブ・アームズに、エネミーコントローラーの接続端子が襲い掛かる。

「いいぞセンサー、上手いこと攻撃を回避した!」

ユウの思わぬ切り返しに、曇り顔だったクラドも思わず歓声を上げた。

次のターン開始時には再びシフトの場に戻ってしまうとはいえ、このターンの攻撃は難なくやり過ぎることが出来る。しかし――。

『おっと、これは妙な選択ですね?』

ただ1人、審判員コーパルだけは小首を傾げた。彼女の傍で胸を撫で下ろしかけたベルは、思わず聞き返した。

「な、何が変なんです?」

『ユウさんの使用したカード《エネミーコントローラー》にはもう1つ、『相手のモンスター1体を守備表示に変更する』という効果があり

ます。こちらの効果はコストが掛かりませんし、ただ相手の攻撃を凌ぐだけならコチラの効果の方が適切です。腕の立つユウさんがミスをしたとも思えませんので、どうにも妙だなと思ひまして』

それに、とコーパルは言葉を付け加える。

『カードガンナーには破壊されたときにカードを1枚ドロウ出来る効果もあります。攻撃を防いで次のターン、守備表示にしたカードガンナーを破壊させれば時間も、逆転のカードを手にするチャンスも得られた筈なんです。それをわざわざ『リリース』するなんておかしいと思いませんか?』

「…………… えっと」

決闘者でないベルに今の解説は『適切でない』と即座に判断したコーパルは、ポクポクと頭を回して必死に言葉を言い換えた。

『あー……………ええつとですね。とどのつまり、ユウさんは『お買い得品をわざわざ見逃してまで定価の商品を選んでお買い上げになった』といえますか』

「な、なんとなく感覚は分かりました」

何とかニュアンスが伝わったと安堵するコーパル。

そんな彼女が抱いた疑問は、すぐに解決することになった。

「……………命拾いしたね、キミ。リバースカード発動、《八式対魔法多重結界》」

心なしか腹立たしそうな表情で、シフトは低く唸るように宣言した。

「このカードは、フィールド上のモンスター1体を対象にした魔法の発動と効果を無効にし破壊する。僕はデイスイシブ・アームズを対象とした《エネミーコントローラー》の発動を無効にする!!」

デイスイシブ・アームズへと伸びた接続端子が、瞬時に光の粒子となつて霧散する。

八式対魔法多重結界は他にもう1つ、魔法カードを捨てることで相手の魔法を無効にする効果もある。恐らくは《閃光を吸い込むマジック・ミラー》の破壊を防ぐ役割も兼ねて伏せられていたのだろう。

『なるほど、ユウさんは防御系罠を読んで第2の効果を』

コーパルは納得した様子でぽんと手を打った。

「えつと……どういうことですか？」

『恐らくユウさんは、シフトさんが今の攻撃で勝負を決めに来ていることを察して、残された伏せカードが《神の宣告》等の効果無効系罠だろうと予想出来ていたのではないでしょうか？ デイサイシブ・アームズの効果で破壊を優先したのが、『用途不明の伏せカード2枚』より手札の方だったというのも、大きな判断材料になったのでしよう。それが分かれば、発動に失敗したとき『攻撃表示のカードガンナー』が残ってしまう危険のある第1の効果は避けるべき。う〜ん、見事な判断ですよーユウさん！』

（気になったから一応聞いてみたけど、やっぱりデュエルの話は全力で分からない……）

話はよく分からなかったベルだが、結果としてユウはまだフィールドに立ち、デュエルを続行している。ベルにとって今はただそれだけで十分だが――。

「バトルは続行だ、攻撃対象を裁きの龍に変えて攻撃!!」

そう、まだデイサイブ・アームズの進撃は終わっていない。

両者の攻撃力の差は僅か300、しかしその壁は厚く高い。ライトロードの象徴たる光の龍は、呆気なく巨大な要塞に蹂躪され霧散した。

ユウ LP1800→1500

これでユウのフィールドは伏せカードが僅か1枚のみ。

圧倒的な強さを誇った裁きの龍も、この状況では機械要塞に打ち勝つことは叶わなかった。

（次は、どうするんだろう……）

次のターン、ユウは変わらずデッキからカードを引くだろう。

それが逆転の一手となるのか、はたまた絶望を叩きつける死に札なのか。それはベルはおろか、ユウ自身もその瞬間まで分からない筈だ。

これじゃあ、まるでギャンブルだ。ベルは自分の身が掛けられたこの勝負を、そう考えた。何を引くかも分からない、相手も何を引くの

か分からない。相手の手の内も始まるまで分からない……全てが運任せじゃないか。やはりこんなゲームに何もかもを委ねるこの世界は、どうかしている。

「これでターンエンド。さ……もう分かっただろう？ キミに勝ち目が無いって事はさ。時間が勿体無いから、大人しく降参サレンダーしてくれないかな？」

そう。いくら全力で挑んでも勝てないものは勝てない。

ベルは初めて、シフトの言葉に同意しかけたが――。

「俺のターン、カードをドロー」

ユウは変わらないのポーカーフフェイスで、何の躊躇いも無くカードを引いた。

「ははっ、なるほど『どんな状況でも俺は諦めない』ってヤツかい？ 生憎だけどキミの力じゃ奇跡もクソも起こらないと思うけどね？」

毒づくシフトを尻目に、ユウは淡々とデュエルを進める。

「俺は魔法カード《増援》を発動。デッキからレベル4以下の戦士族モンスター1体を手札に加える」

Dパッドに表示されたリストからカードを選択すると、デッキから対象のカードが選定されデッキトップまで移動した。ユウがカードを引き抜くと、デッキはオートシャッフルを始めた。

「手札に加えたのは《ライトロード・パラディン ジェイン》」

「そんな奴、今更手札に加えて何を……」

「ジェインをコストに《ソーラー・エクステンジ》を発動。カードを2枚ドローし、カードを2枚墓地へ送る」

瞬間、シフトの一団から爆笑の渦が巻き起こった。

「見ろよ、アイツこの土壇場で起死回生のカードを2枚とも墓地に落とすやがったぜ!!」

効果によつて墓地へ送られたカードは、《ブラック・ホール》《大嵐》の2枚。どちらも、『逆転』の可能性を秘めた強力なパワーカードだった。

《ブラック・ホール》はフィールド上のモンスターを、方や《大嵐》はフィールド上の魔法・罫を一掃する、強力な制限魔法カードだ。ど

ちらか1枚でも手札に加わればこの状況を打破できる逆転の切り札と成り得ただけに落胆は大きい。

開いた口が塞がらない、といった様子のクラドと、あちやーと顔を塞ぐコーパルの反応を見たベルは理解した。あの人は『ギャンブル』に失敗したのだと。

「……そんな」

希望は、潰えた。

「はははは!! これは傑作だ!! 時間の無駄かと思いきや、こんな名デュエルの誕生に立ち会うことになるうとはねえ!?!」

対戦相手であるシフトからすれば、これは確かに勝利を磐石にせしめた決定打だ。

だが、腹を抱えて笑う彼は気が付かなかった。

2枚の手札を確認した無表情の口元が、僅かに緩んだことを。

「俺はこれで、ターンエンドだ」

「ああ、そうか、僕のターンか……はは、ドロ。いやあ、勝利の女神に見放された人間がこうも面白いとは思わなかったよ」

笑い涙を浮かべるシフトはもはや、別の意味で戦意を喪失していた。相手は丸裸も同然。これ以上、何を警戒しろというのか。

加えて、ドロしたカードは――。

「ま、折角だからダメ押しといこうか……僕は手札から『ダーク・バースト』を発動。このカードの効果により、墓地の『A・O・J コア デストロイ』を手札に加え、攻撃表示で召喚する」

三度フィールドに出現した、光殺しの機械兵。今度はその爪の標的を、対峙するプレイヤー自身へと定めた。

「さあ、最期のバトルフェイズだ、僕は――」

「俺はここで、リバースカードを発動させて貰う」

シフトのメインフェイズ終了と同時に。ここでまた、ユウはカードの発動を宣言した。

「……何だと?」

「罨カード『光の召集』。その効果により俺は手札全てを墓地に捨て、捨てた枚数だけ光属性モンスターを手札に加える。捨てた手札は2

枚。よって俺は《裁きの龍》を2枚手札に加えさせて貰う」

「デイサイシブ・アームズとマジック・ミラーが立つこのフィールドで、最早裁きの龍の力は封じられたも同然。一見無意味な行動に思えたが、墓地へ送られた手札を確認したシフトは忌々しげに眉をひそめた。」

「……チツ、《ネクロ・ガードナー》か。無駄な時間稼ぎを」

《ネクロ・ガードナー》

☆3 / 闇属性 / 戦士族・効果 / ATK 600 / DEF 1300

相手のターン中に、墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

このターン、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「バトルを続行する、デイサイシブ・アームズでダイレクトアタック!!」

「ネクロ・ガードナーのモンスター効果。墓地のこのカードをゲームから除外し、攻撃を1度だけ無効にする」

まるで幽体のような半透明のネクロ・ガードナーが立ち塞がり、デイサイシブ・アームズの攻撃からユウを守った。だが――。

「まだだ、コアデストロイでダイレクト!!」

「……………」

続く機械兵の追撃を防ぐ術は残されていない。ユウの無防備な体をコアデストロイの爪が貫く。

ユウ LP 1500 ↓ 300

「ああっ!？」

ベルが思わず声を上げる。ユウの残りLPは風前の灯だ。

「僕はこれでターンエンド。もういいだろう？ さっさとサレンダーしてくれよ、僕のLPは3300も残ってる。裁きの龍は封じられ、頼みの制限魔法も落ちたキミに、もう勝機は無いんだよ？ これ以上は時間の無駄だ!!」

「……それは、どうだろうな」

それまで通りの抑揚の無い口調で、その言葉は放たれた。

「——何？」

「俺のターン、カードをドロー」

ユウはそうして、何の躊躇いも思いも込めず、ただ平然とカードをドローした。

がら空きのフィールドに筒抜けの手札、LPの差は歴然。

ベルが見ても分かる、崖っぷちもいいところだ。そんな中でユウは相変わらずの無表情でただ前を見据えていた。

神に祈ることなく、奇跡を願うこともせず。ただ己の力だけを信じているかのよう。

自分ならどうだったろうか、とベルは思った。きつと諦めていたに違いない。

だが目の前の彼は。今この状況でも、間違いなく『全力』で闘っている。

「……………」

ドローしたカードに目を落とすユウ。

ベルが、観客が見守る中。その口端が、ほんの僅かに吊り上った。

「——はっ、何を馬鹿な？」

考えうる逆転の一手は墓地に落ちた。何を引こうが『希望』は残されてはいない筈。

そう思考を巡らせるシフトを尻目に、ユウは再び白き龍をフィールドに呼び寄せた。

「俺は手札から、『裁きの龍』を特殊召喚」

白鱗の巨龍がフィールドに再び顕現する。しかし今回は——。

「召喚条件は既に満たされている。俺は残り2枚の『裁きの龍』を特殊召喚」

後続に2体を引き連れての、怒濤の進軍だ。

「凄い、ドラゴンが3体も……」

『ドローカードは3枚目の裁き、でしたか』

圧巻の光景に感嘆の声を漏らすベル。そんな彼女とは対照的に、どこか残念そうに呟くコーパル。

「こんな状況で裁きの龍が幾ら沸いて出ても無駄だよ!! 攻撃力は

デイサイシブ・アームズが上、コアデストロイには効果破壊がある!!
効果も封じられている今、そいつらの攻撃は僕には——」

「墓地より罨発動。《ブレイクスルー・スキル》」

手札でも場でもない。死札となった筈のカードが墓地の深淵から
光を放つ。

「なッ——!?!」

「ブレイクスルー・スキルの効果発動。このカードを墓地から除外し、
相手モンスター1体の効果をエンドフェイズまで無効にする。俺は
コアデストロイの効果が無効にさせて貰う」

コアデストロイの眼光が光を失う。システム・フリーズ、といった
ところだろうか。

「い、いつの間になんなカードを——!?!」

シフトの脳裏に過ぎる、前ターンに発動された光の召集。ネクロ
ガードナーと共に墓地へ送られたのは、このカードだったのだ。

「更に墓地より罨カード《スキル・サクセサー》を発動。このカードを
墓地から除外し、《裁きの龍》1体の攻撃力を800ポイントアップさ
せる」

裁きの龍の攻撃力が3800へと上昇し、デイサイシブ・アームズ
を上回る。

こちらのカードはシフトも確認していた。ライトロードの効果に
よって墓地へ送られていたが、墓地での発動は自分のターンにしか発
動できないため、コアデストロイを召喚したシフトにとって障害とは
成り得ないカードだった。

しかしそんな頼みの綱（コアデストロイ）も機能を停止し、もはや
カカシも同然。

ほんの一瞬。強固と思われたシフトの布陣はいとも容易く崩壊し
てしまった。

「馬鹿な……逆転きせきの可能性は潰れたはずだ!! なのに何故!!」

「……勝利に至る方法は1つじゃない。可能性が1つ潰えたなら、他
の道を探せばいい。その答えは必ずデッキに隠されている。俺はそ
の中から正解を導き出したただけだ」

「な、何を格好付けて……!!」

狼狽するシフトを尻目に、しかしユウは止まらない。

「格好だけかどうか、確かめてみるといいーバトルフェイズ」

表情も、声色一つ変えずにただ宣言する。

「攻撃力3800となった裁きの龍で、デイスアイシブ・アームズを攻撃」

先程の恨みとばかりに放たれた光のブレスは巨大要塞を打ち抜き、超過ダメージとなってシフトに降りかかる。

シフト LP3300↓2900

「ぐっ——!?!」

「続けてバトル。効果が無効となったコアデストロイを攻撃」

ぴくりとも動かない機械兵に光が降り注ぐ。攻撃力という名の『理不尽』が襲い掛かったのは、今度は光殺しの方だった。

「ぐああああ!?!」

シフト LP2900↓1100

『賭け品さん、これがデュエルの醍醐味ですよ』

「……え?」

あつという間の逆転劇に呆けていたベルは、コーパルの言葉に遅れて反応した。

『どんなに不利な状況だつてきつと覆せる。希望の光は、いつだって誰にだって掴める。そんなドラマが生まれるからこそ、デュエルは多くの人々に愛されているんだと思います』

猛々しく吼える白き龍が、攻撃の命を待つまでも無く光を収束させていく。

『このデュエルの間だけでも、決闘者のお2人は幾度も思惑を交差させていらつしやいました。確かに『運』に左右される場面は多々ありましたが、それでもユウさんは見事に相性最悪な相手をここまで追い詰められました。それはユウさんの実力もあってこそですが、何より勝利を諦めない強い『心』にあったのではないのでしょうか?』

ただひたすらに前を向き、ドロ―し続けたユウの横顔がベルの脳裏を過ぎる。

それが理不尽を跳ね除けた彼と、ただ唇を噛み締めて俯いた自分との違い。

「諦めない、心……」

圧倒的な力に抗うこと。

デュエルモンスターズ
全 力から目を逸らした自分とユウとの、決定的な差。

「……つく、ふぎけるな、こんなことが!!」

信じられない、と目を見開き、自身に下される断罪の光^{ブレス}を凝視するシフト。

そんな彼の様子を目の当たりにしながら、ユウは淡々と宣言した。

「——詰^{チエックメイト}みだ。裁きの龍でダイレクトアタック」

放たれたブレスは光の柱となってシフトを襲い、残り僅かであったLPを一気に削り落とした。

シフト L P O

『と、いう訳で。アンティルールも無事完遂されたようですので、わたしはこれにて失敬させて頂きますね〜』

そう言うと、コーパルは手を振りながらデータの粒子となって姿を消した。

当然ながらシフトらの姿は既に無く、嵐の後のように荒れ果てた店内にはユウ達と僅かに残った観客らを取り残された。

「……あ、えっと」

静寂に包まれる中、ベルがおずおずと第一声を放つ。

まずは一言お礼でも、と思考を巡らせていたベルの眼前に、ユウのDパッドが突き出された。表示されたのはデュエルが始まる前に見せていたカードの画像だ。

「改めて尋ねる。このカードについて知っていることを、全て話して貰いたい」

魂の牢獄。不気味なそのカードを初めて目にしたその日のことを、

ベルは記憶の隅をつつくように思い出しながら話し始めた。

「えつと……確か、一週間くらい前のことですよ。それと似たようなカードを持った、多分……女の人がお店に来たことがあって」
「多分？」

クラドが怪訝そうに聞き返した。

「その人、フード付きの赤いコートを着てたんですけど、フードを被った上に白いお面まで被った変な人で……ただ声は女の人だったので」
「……分かった。続けてくれ」

「それで、注文を受けに来たわたしに聞いてきたんです。『このカードのことを知ってる？』って、そのカードを見せながら」

ユウの表情が、ここへ来て僅かに揺らいだ。

「あ、でも確か絵柄は少し違ったような気がしますが。だからそのカードを見たとき、すぐ思い出して……」

「その女は、他に何か言っていたか？」

「カードのことはよく知らないって答えたら、すぐにその話は切り上げられましたよ。後は何の料理が好きとか、無茶な値切りされたりとか、他愛も無い話をされて帰られました」

「どこへ行ったかは分かるか？」

「確か、この先にあるシガマって大きな街に行くって行っていましたけど……」

ユウとクラドが目を見合わせる。2人が思い浮かべたのは、シガマで開かれるデュエル大会。ベルの言うその人物が大会出場の為にシガマへ向かった可能性は高い。

「他に、何か覚えていることは無いか？」

「いえ、聞いたのはそれくらいの話だけです。怪しい見た目の割りに良く話し掛けて頂いたのは印象に残っています」

「……分かった。ありがとう」

そう言うとユウはベルの頭を軽く撫で、言った。

「それだけ聞ければ十分だ、お前はここで『解雇する』。店長にまた世話になるなり、好きにするといい」
「え……？」

Dパッドを仕舞いながら、ユウはさつと背を向けた。

「あの……」

「気を悪くしないで欲しい。例え形式上だけでもお前は俺の『所有物』になつていた。こうでも言っておかないと、後々厄介なことになる」背を向けたままそう言い捨てるユウ。

ベルはどうかか声を掛けようと一歩追い縋つたが、ユウの足並みは既にこの場を離れる意思を持って出口へ向かつていた。

出来るなら。引き止めてちゃんとお礼をしたい。

叶うなら。自分の勝手な願いを聞いて欲しい。

だがそれ以上に、危機を救ってくれたユウの足枷になるような真似は出来なかった。

「だとき嬢ちゃん。そんなわけで迷惑掛けたな……って待てよセンセー？」

へらへらとした笑みを浮かべて、クラウドも後について店を出て行った。

胸に灯つた僅かな『火種』が、燃え広がることなく萎んでいく。

何かを変えようと切り出した一歩は、本当に呆気なくタイミングを逃した。

店の中には、これまで通りのお客と従業員だけ。嵐のような時間は、爪跡だけを残してあつという間に過ぎ去っていった。

「……………これで、」

これで良かったんだと。

踏み出しかけた足を引き戻そうとしたそのとき。

ぽんと誰かに背中を押されて、気が付けばベルの足は一歩二歩と前に動いていた。

振り返つてそこにあつたのは、涙の跡が残る店長の無骨な笑顔だった。

「案外早く見つきりそうだなあ、そのカード」

「……どうだろうな。あのメイドが言っていた『女』が何を、どこまで知っているのかは分からない。興味本位で拾っただけ、という可能性もある」

早足に歩くユウに、半歩遅れて後を続くクラド。

2人は宿に戻って街を出ることを伝えると、手早く支度を済ませて出発していた。

「そーかよ。ま、疑り深いのも結構だが……もう少し晴れた顔してもいいと思うけどな?」

街の外に停めてあるキャンピングカーまでの僅かな道のりだが、新たな情報の入手に心なしかユウの口数も多いように感じる。

「それにしても……あの店は今後どうなることかねえ。あのA・O・J使いの連中がこのまま黙っているとは思えねーけど。センサーが余計なことしたばっかりに、あの嬢ちゃんが余計酷い目にあったりしてな?」

「……ああ、そうか。そこまで考えが至らなかつたな」

ポーカーフェイスを僅かにポカンとさせて、ユウは関心したような眼差しをクラドに返した。

「……いやいや。おいおいマジかよ? 『許せ』ってアレ本気でそういう意味だったのか!? 何か上手くやる算段とかあつたんじゃねーのか!?!」

「いや、全く。デュエルに勝てば何の問題も無いものかと」

「このデュエル脳が!? ああああどーすんだよ、このままサヨナラしたんじゃ、あのメイドちゃんの人生が……」

「まつ、待って……下さい!!」

真つ青な顔でクラドが頭を抱えたそのとき。

息も切れ切れに、たどたどしい少女の叫びが投げかけられた。

「? メイドちゃん……って何だあの馬鹿アカい荷物は!?!」

疲労困憊といった様子で佇むベルの姿を見たクラドは愕然とした。

ベルは着のみ着のままの格好——もといメイド服のまま、およそ彼女の背丈と同じくらいにまで膨れ上がったリヨックサックを背負っていたのだ。

「待つて……わたしも一緒に……一緒に行かせて下さい!!」
放たれた二言め。こうなればもう止まらない。

息の続く限り、ベルは文字通りの全力で言葉を紡いだ。

「もう……デュエルモンスターズから逃げたくない、負けたくないです!! だからわたしにデュエル教えて下さい!! 店長にも、もう誰からも守られなくても大丈夫なように!!」

何も飾らない。ベルは今の自分をそのまま言葉にした。

この理不尽なを恨むのはやめた。この理不尽の中で生きていくには、立ち向かって勝つしかない。

どんなに困難な状況でも、どれだけ運命の女神に突き放されても。歯向かって足掻いて勝ち抜いてやる。自分にそんな道を示してくれた、彼のように。

「強くなりたいんです!! わたし、今度こそ全力で頑張ります!! だから……!!」

僅かに顔を綻ばせながら、クラドが横目にユウを見やる。

「おお……アツい展開だねえ。どうするよ、センチー?」

ユウは相変わらずのポーカーフェイスを崩さず、静かに告げた。

「……………いや、まず親御さんに確認を取らなければ」

「心配はそこかよ!? そこは『……好きにしろ』とかクールに決めるとこだろうが!? いや実際問題気掛かりなのはそこだろうけど!? 違うだろ、違うだろオ!」

クラドの叫びが、すっかり日も落ちた宿場街に轟いた。

店長達の許可を貰って店を出てきたこと、店はこっそり別の街に移転すること。

ベルがそれらを説明し終えた頃には、空には再び星々が散りばめられていた。

第2話 初めての味は飴とムチ

「……………うわぁ」

散らかり放題のゴミ、ゴミ、ゴミ。

決意を秘めてキャンピングカーに乗り込んだベルが目にしたのは、比喩のしようもないゴミの海だった。

「はは……………男の2人旅なんてまぁ、こんなもんだろ？」

ドン引きするベルの様子を見て、クラドがばつの悪そうに苦笑した。

不幸中の幸いか。ゴミの殆どは開封されたカードやインスタント食品のパッケージ類で、異臭の原因である生ゴミは見当たらなかった。彼らに調理スキルが無かったことが唯一の救いだったと言える。

「こんなもん、じゃありません!! 不衛生な環境は身体にだって良くないんですよ!?! わたしが育った貧乏村の方がまだマシでしたよ……………」

眉をハの字に下げたのも束の間。次の瞬間にはキツとVの字に奮い立たせて、ベルは袖を捲り上げて啖呵を切っていた。

「ですが、お任せ下さい!! 下働きはわたしの領分、ここは全力で片付けさせて頂きますっ!!」

どすん、と置かれたリュックサックの中から飛び出したのは、モツプに箒に雑巾、塵取り。おりゃーと雄叫びを上げるや否や、フル装備のベルは非常に手際よくリビングを片付けていった。

「おー、こりゃあ頼もしい。デュエルの授業料としちや十分なんじやねーの、センサー？」

「……………別に見返りを求めるつもりは無かったんだが」

ベルの掃除を微笑ましく見守るクラドと、マイペースにデツキ調整を行うユウ。

どちらも掃除の邪魔であることは変わりないのだが、ベルは気にする風もなく文字通り全力で片付けに没頭している。

「さて、不精な男が2人居ても邪魔になるだけだしな。ちよつくら情報整理といきますか」

自動運転中の運転席に転がり込んだクラドがDパッドを車内の機器に接続すると、フロントガラスが巨大なディスプレイとなつてDパッドの画面を映し出した。

「……お、例のシガマの大会について情報が出てるな」

慣れた様子で手元のDパッドを操作しながら、次々と画面を切り替えていく。ネイティブで行われる大会であるからか、記事は小さなものであったが。

しばし記事に目を通したクラドは、怪訝に眉を寄せた。

「……センサー、ちよつといいか？」

全力清掃中の騒がしいリビングから、ユウが静かに顔を覗かせる。

「どうした？」

「いや、シガマの大会について情報が出てたんだが……良い知らせと悪い知らせがある」

「良い知らせは？」

「大会の優勝商品についてだ。あくまで噂のようだが『テキスト不明のレアカード』が2枚渡されるらしい。掘り出し物の可能性アリ？ なーんて触れ込みだが……コレってセンサーの『探し物』って可能性は無いか？」

「何とも言えないが、可能性があるなら潰しておきたい。シガマの大会には出場出来そうか？」

「……悪い知らせ、つてのがそれだ」

クラドの苦笑が、モニターの反射越しにユウへ伝わる。

「この大会、なんと4人1組のチーム戦『限定』なんだそうだ。何でも『決闘旅団』^{パーティ}向けに開催された企画らしくてな。現状の俺らじゃ頭数すら足りないし、まして俺なんかは戦力外だ。名前だけ貸すつても、センサー1人で勝ち抜くには限界があるだろ？」

「……なるほど、な」

詰まるところ、現状のユウ達には参加資格すら無い。

優勝チームに商品を見せて貰おうにも、ネイティブの荒くれた決闘者達がどこの馬の骨とも分からぬ連中に警戒を抱かず『レアカード』を見せびらかすとは到底考え難い。

ともすれば、手段は一つに絞られる。

「大会開催前までにフリーの決闘者を仲間にして俺達も『旅団』を作る、これしかねえ。それも優勝商品には手を出さないお利口ちゃん、そこそこの実力を持った決闘者をだ」

「……難しいな」

「難易度はグレート・モス級だな……とりあえずシガマに到着するまでに寄る街々で探していくしかなさそうだ」

探し物は一向に見つからず、逆に増える一方だ。1人分の居候費が増えたことで、クラドの商売も今まで以上に気合を入れていかなければならないだろう。

「はは、まあしゃーねーか。そんなときはそんなときさ。最悪は——」

陰鬱な溜め息が漏れ出る。一步手前で、クラドは何故か小さく頬を緩ませた。リビングが騒がしいおかげだろうか、妙なところで調子が狂ってしまったようだ。

「——形だけでも出て貰えるくらいには、鍛えておいて方が良さそうだな？」

はたきを振り回すベルを横目に、男達もまた決意を新たにしていた。だった。

「しかし何だか悪いなあ、掃除して貰った上に食事まで作らせちゃまって」

「いえいえ、何でもお役に立てれば幸いですから！」

クラドが空になった食器を片付けながら頭を下げると、ベルははにかんだ笑顔を返して見せた。

「でも、良かったんですか？ ガスとかお水とか使っちゃって……」
長旅での飲料水は貴重だ。ベルも極力消費は避け、クラドにも気にせず使えと許可は貰っていたものの、その点はやはり気掛かりだったらしい。

「はは、全然問題ねーよ。男2人で居たってガスなんか使わなかった

しなあ。それにせつかくメイドちゃんが来てくれてんだから、節約なんてケチなことはナシだ」

そうは言いつつも食器洗いにはしっかりと桶に水を溜め、彼も極力消費を少なくしようという意向が伺える。どうにも掴みどころが無いヘラヘラとした男だが、根元はしっかりとっている人なのだとベルは思った。

「ところで、ココには食材なんて殆ど揃ってなかった筈なんだけど。材料はどっから仕入れたんだ？」

「わたしが荷物と一緒に持ち込んだものを使いました。店を出るときに店長が持たせてくれて」

荷物、と言われて、クラドの脳裏にあのパンパンに膨らんだリュックサックが浮かんだ。

「なるほどね、こりや店長さんには感謝しねーと。で、あのデカイリュックには他に何が入ってたんだ？」

「えーっと、掃除道具に調理器具。裁縫用具にその他、雑用仕事に役立つ諸々を詰め込んでます」

まるで嫁入りフルセットだな、とクラドは心中で呟いて、素直に疑問を投げかける。

「あー、年頃の女の子を取り扱うにあたり、ガサツな男代表として聞いておくが……着替えの服とかは持ってきてないのか？」

「はい。お洋服なんて働き始めてからコレと寝巻きだけしか持ってませんでしたし」

コレ、というのは今着ているメイド服のことだろう。

手入れはしっかりとっているのか綻びは殆ど無かったが、クラドはそれを聞いて何とも不憫な気持ちになった。

「……よし、メイドちゃんの為に俺も頑張るか」

「え？ な、何を頑張るんです？」

「久々に商売魂に火が点いたぜ……今夜は早速在庫点検だ!!」

「は、はあ……」

燃え盛るクラドを半ば啞然と見返して、ベルは彼の人物像を少し改めることにした。

「んじゃ、始めますか。記念すべきデュエル講座第一回！」

「はい、宜しくお願いします！」

食後のリビングでは早速、デュエル講習は開催された。

テーブルを挟んでユウとベルが対戦、その後ろでクラドがアドバイスを入れる形だ。

「……俺は教えるのはあまり得意じゃないから。クラド、フォローを頼む」

デッキをシャッフルしながらユウが目配せすると、クラドが親指を立てて答えた。

「お前は酒場でのデュエルを何度も見ていただろうから、おぼろげにでもルールは理解しているのかもしれないが……まずは基本的なことから順を追って説明していく。先に断っておくが、今日は細かい部分のルール説明は省く。一度に話しても理解できずに混乱するだけだからだ」

「はい、分かりました！」

ベルが元気よく頷く。

「では……まず、デュエルモンスターズは互いに40枚以上、60枚以下のカードで構成した『デッキ』を用いて対戦する。今回はテストプレイ用に全く同じ内容のデッキを2つ用意したから、コレを使って実際にデュエルをしながら説明をしていく。本来ならデュエルディスクを使ってやるのが一番楽なんだが……教えながらやるには、アレは色々と煩いことが多くて適わない」

ベルの脳裏に、割とテンション高めな審判員機構の女性が過ぎつた。初心者用に解説機能も付いているとのことだったが、とりあえず今はユウの方針に従うだけだ。

ユウからデッキを受け取ったベルは、感慨深そうにカードを1枚ずつ目を通していく。

カードの強い弱いはサッパリだったが、初めて手にしたデッキのカード達はどれも輝いて見えた。

「デュエルの勝利条件は基本的に一つ。モンスター・魔法・罫の3種類のカードを駆使し、相手プレイヤーの持ち点であるLP（ライフポイント）を0にすることだ。勝利条件には特例がいくつか存在するが……今はまだ知らなくても良いだろう」

「だとさ、メイドちゃん？」

カードを見るのに夢中になっていたベルは、クラドに小突かれてハッと我に返った。

「す、すいません……」

「……続けよう。本番になればディスクが自動でシャッフルを行うようになるが、今回は卓上でのデュエルなのでデッキをシャッフルする必要がある。こんな風にだ」

慣れた様子で、ユウがデッキカットをして見せた。促されてベルも見よう見真似でチャレンジしたが、たどたどしい手つきで行われたシャッフルは見事にデッキを大爆発させて終了した。

「うあ!？」

「……やはり難しいか。ディスクを使うようになれば、出来なくても問題は無いだろう。次にお互いのデッキを交換し、簡単なシャッフルを行ってから相手に返す。不正防止の役割でもあるが、卓上ならではの礼儀作法のようなものだ。先攻後攻を決めたら、デッキの上からカードを5枚ドロシーし、手札とする。この辺りの処理も、本来はディスクが自動で行ってくれる。これでデュエル開始の準備が整った」

ベルの初手札として舞い込んだ5枚のカード。未だどんな使い方をするのか分からないが、どのカードも皆頼もしく見える。

「先攻はお前からということにしよう。カードを1枚ドロシーして、ターンを開始する」

「あ、はいっ。ドロシーします」

記念すべき初ドロシー。その1枚は《切り込み隊長》。

「1ターンの流れは、大まかに分けてこのようになる。

①ドローフエイズ

②スタンバイフェイズ

③メインフェイズ1

④バトルフェイズ

⑤メインフェイズ2

⑥エンドフェイズ

以上を順に処理していく。慣れてくると各フェイズは省略して飛ばしてしまふものだが、最初のうちは各フェイズ終了毎に宣言をするようにした方が良いかもしれない。フェイズの流れを意識すれば後々が楽になる」

「わ、分かりました……」

早々に分かりづらい単語が飛び出し困惑するベルに、クラドが助け舟を差し向ける。

「そう肩を張らなくていいさ、やってりやその内嫌でも覚えるだろうしな。要するにフェイズつてのは『ここでは○○が出来る』って大まかな括りだ。今メイドちゃんがドローをしただろ？ それがターンの始めに来るドローフェイズってワケだ」

なるほど、とベルが頷くと、ユウは説明を続けた。

「ドローフェイズに発動するカードの処理がなければ、このフェイズはそのまま終了する。何も無ければ、次のスタンバイフェイズに移行する。ここも同様に発動するカードの処理がなければ終了する。基本的に今の2フェイズは、カードの発動タイミングがここに指定されていたり、妨害札……魔法や罠などのカードが発動されなければ、することは特に無い」

ベルが一通り手札に目を通すが、そういった記述のあるカードは見当たらない。

あつたとしても、先攻の1ターン目ということで発動することすら出来ないだろう。

「えっと、発動するカードはありません」

「ではメインフェイズだ。ここで出来るのは戦闘前の準備……モンスターの召喚や魔法・罠の使用、セットが含まれる。本来であれば自分の戦略に合わせて、何のカードをどれだけ場に出すかを決めるのだが。今回はまず場の手前5つの枠、モンスターゾーンに手札からモンスターを出す、『通常召喚』を試してみろ」

「はいつ、えーつと……」

言われて、ベルは手札で最も攻撃力の高いモンスターを出そうとしたが、すかさずクラドからストップが掛かった。

「待った、メイドちゃん。直接場に出せる『通常召喚』可能なモンスターは☆4以下のモンスターじゃなきゃならないんだ」

「☆4以下……」

言われて、ベルは手にしたカードをまじまじと見る。

《無敗將軍フリード》

☆5 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 2300 / DEF 1700

「こうした☆5・6の上級モンスターを通常召喚するには自分の場のモンスターを1体。☆7以上の最上級モンスターは2体を『リリース』、要するにコストとして墓地に送らなきゃ通常召喚は出来ないんだ。『アドバンス召喚』っていうんだが……ま、イキナリ強いモンスターは出せないってことだな」

感心したように頷きながらも、ベルの脳ミソは次々と飛び出す専門用語を覚えようとフル回転していた。

「えーと、リリース、あどばんす……」

「はは、言葉は覚えられなくても、とりあえず今は『☆4以上はコストがいる』ってぐらいの感覚でいいさ。さて、仕切り直しだ。通常召喚可能なモンスターを場に出してみようぜ？」

「あ、はい。それでは……」

「カッコよく、モンスター名を宣言！」

「は、はいつ！ 《X―セイバー アナペレラ》を召喚です！」

《X―セイバー アナペレラ》

☆4 / 地属性 / 戦士族 / ATK 1800 / DEF 1100

召喚されたのは、麗しき女剣士のカードだ。特有の効果を持たない『通常モンスター』であるが、その分下級モンスターとしては十分なステータスを誇る。

気合の入ったベルの初召喚はクラドのお気にも召したようで、ウムと満足げに頷いた。

「……通常召喚が出来るのは1ターンに1度まで。更にモンスターの通常召喚には、2通りの『表示形式』がある。1つは、今お前が行った縦に表向きで置く『表側攻撃表示』。もう1つはカードを裏の横向きで置く『裏側守備表示』。守備表示の場合はモンスターに攻撃されてもダメージを受け難い反面、守備力の低いモンスターであった場合は自身より攻撃力の劣る相手のモンスターにむぎむぎ破壊されることもある。攻撃表示の場合はすぐに攻撃に移れるが、戦闘すればダメージを受けてしまうし、破壊効果を持つカードの餌食になる可能性が高い。先攻1ターン目は攻撃が出来ないから、基本的には裏側守備表示で出すのが良い」

「な、なるほど……」

「だが。そんなセオリーを覆すことで有利に働く場合もある……クラウド」

「はいよ。じゃメイドちゃん、ここで魔法・罠カードの説明だ。OK？」

解説のボタンタッチを請け負ったクラウドに、ベルが大きく頷く。

「メイドちゃんも何と無くは分かっていると思うが、魔法・罠はモンスターやプレイヤーを補助するサポートカードだ。モンスターの通常召喚と違って、1ターンの発動枚数に制限は無い。緑色の魔法カードは基本的に自分のターンで使うもの、逆に赤紫色の罠カードはその名前の通り相手のターンで発動するものが多い。あくまで基本的に、だから例外はいくつもあるが……」

ベルの手札にあるカードを指しながら説明していくクラウド。本来であれば手札の内容が相手へ筒抜けになってしまう危険な行為だが、この『講義デュエル』では問題ない。

「んで、これら2種類のカードは場の後ろの5枠……魔法・罠ゾーンで発動、または裏側表示で『伏せる(セット)』ことができる。罠カードは伏せてからでなければ発動出来ず、伏せたターンには発動できない。つまり罠は『仕掛けてから少し待つ』をしなければりや獲物は掛からないってワケだ」

「その例え、すごく良く分かりました！」

村で生活していた頃、よく父親達と狩りに行ったことを思い出したベルは合点がいったように頷いたが、事情を知らないクラドは少々困惑の色を浮かべた。

「そ、そうか……？ 続けるが、魔法・罘と一言に言っても様々な種類がある。その辺はおいおい説明していくとして、とりあえずメイドちゃんの手札にある『速攻魔法』から説明しようか。稲妻のマークが描いてある魔法カードがあるだろう？」

言われて、ベルが手札を確認する。

「さつきも言った通り、魔法カードは自分のターンでしか発動出来ない。だがこのカードは罘カードのように一旦場に伏せることで、相手のターンでも発動出来るスグレモノだ。もちろん通常魔法のように自分のターンで発動させることも可能だが、一旦伏せちゃうと罘と同じようにそのターン中では発動出来なくなるから注意だ」

魔法・罘の講義が一区切りついたところで、実践となる。

「というわけでメイドちゃん。場に出たモンスターをサポートするために、手札の魔法・罘カードを伏せてみようぜ？ さて、何を伏せたら良いかな？」

手札には通常魔法が1枚、速攻魔法が1枚。そして通常罘が1枚ある。

「えっと、それならわたしはこの2枚のカードを伏せます」

ベルが選択したのは、通常魔法を除いた2枚。

見事に模範解答を導き出した彼女へ、クラドが拍手を送る。

「おお、大正解だ。メイドちゃんは飲み込みが早そうだな。さて、ここで追加問題だ。もしメイドちゃんがセンサーの立場だったら、この布陣はどう見える？」

モンスターが攻撃表示で存在し、更に伏せられたカードが2枚。

「うーんと……罘が2枚も張ってありますから、すごく攻撃しづらいと思います」

「その通り。更にさつきセンサーが言った通り、攻撃表示のモンスターは裏側守備のモンスターに比べて『攻撃を受けたとき』のデメリットが大きい。この状況を相手が見たら『攻撃を誘い、罘に掛ける

為にわざと攻撃表示にしたのか?』と疑心を抱くだろうな。そうなればコッチのもんだ。相手が強いモンスターを出してきても、罨を警戒して攻撃を仕掛けてこない、なんて展開も期待できるワケだ」

「なるほど……次の相手の番を警戒して、迎え撃つ準備をしたって感じですね」

ベルの解釈に、ユウが頷く。

「そうだ……こうした心理的なやりとりこそが1ターン目の『攻撃』とも言える。メインフェイズが終了したら本来はバトルフェイズに移行するが、攻撃は出来ないでエンドフェイズまでスキップされる。ここでターンの終了を宣言し、両者共にカードの処理が無ければ、自分のターンは終了し相手のターンに移る。メインフェイズ2はバトルフェイズを行わなければ移行出来ず、バトルフェイズのスキップは攻撃が可能な状況でも行えることを覚えておいてくれ」

「は、はい。わかりました……ではエンドフェイズに。わたしはこれでターンを終了します」

混乱する頭をなんとか整理しながら、ベルは何とか初ターンを終えた。

「では、俺のターンだ。ドローフェイズ。カードをドロー」

普段は省略する宣言をこなしながら、ユウのターンが開始される。

「まあ、センサーのターンはさっきの『おさらい』だと思って見といてくれ。あとは後攻の動き方のお手本だな」

「はい、分かりました!」

「スタンバイフェイズ。カードの発動がなければメインフェイズに入る。発動したいカードはあるか?」

場のカードをもう一度確認してみるが、今発動するべき効果があるカードはない。

「えつと……今は多分、ありません」

「分かった。ではメインフェイズに移行する。俺は手札から魔法カード《手札断殺》を発動。お互いのプレイヤーは任意の手札を2枚墓地に送り、デッキから新たに2枚のカードをドローする」

ユウはすぐに捨てる手札を決定したようだが、ベルは少し悩んだ

後、泣く泣くといった様子でカードを墓地へ送った。

「では。俺は手札から《岩の精霊 タイタン》を守備表示で『特殊召喚』」

《岩の精霊 タイタン》

☆4 / 地属性 / 岩石族・効果 / ATK 1700 / DEF 1000

「このカードは通常召喚では召喚出来ず、自分の墓地の地属性モンスターを1体ゲームから除外した場合に手札から特殊召喚が出来る。俺は先程《手札断札》で墓地へ送った《X-セイバー アナペレラ》を除外する」

「特殊召喚に……除外？」

攻撃力は捨てられたアナペレラの方が上だ。しかし何故、わざわざタイタンを場に出したのだろうか……ベルの呟きにはそんな疑問も含まれていた。その疑問に答えるように、ユウが解説を加える。

「特殊召喚は、1ターンに1度までの制限がある通常召喚とは別に行える召喚行為だ。こちらには1ターン内の回数制限は無い。デュエルモンスターズは主にこの特殊召喚を多用し、いかに早く、多くモンスターを場に出せるかが重要となっている。そして除外についてだが、対象となったカードを手札・場・デッキ・墓地のいずれでもない『除外ゾーン』へ送る行為のことを言う。大雑把だが『墓地よりも復活・再利用が難しいエリア』だと考えてくれ。今はまだその程度でいい」

特殊召喚と除外。実際に使用される光景を目にしながらの解説だからだろうか、ベルはどうか講義に追いついていくことが出来ていた。

「そして、この時点で俺にはまだ通常召喚が残されている。タイタンをリリースし、上級モンスター《無敗將軍フリード》をアドバンス召喚」

タイタンを糧とし現れたのは、先程ベルが召喚することが出来なかった上級モンスターだった。お手本としては上出来なユウのプレイングに、クラウドが言葉を添える。

「回数制限の無い特殊召喚で下級モンスターを用意し、即座に強力な上級モンスターをアドバンス召喚する。デュエルモンスターズの初歩的な戦略だな」

「な、なるほど……」

感心するベルをよそに、ユウの講義はその速度を緩めることは無い。

「これで、お前の場のアナペレラを上回る攻撃力を持ったモンスターを召喚することが出来た。俺はメインフェイズを終了し、バトルフェイズに移行したい。何かあるか？」

「えつと……」

クラドに様子を伺うベル。

「んー、せつかく張った罫だ。ここはもう少し『引き付けてから』発動といこうぜ？」

「分かりました。何もありません」

「ではバトルフェイズ。相手の場にモンスターが居る場合は、相手のモンスターを攻撃対象にしなければならない。俺はフリードでアナペレラを攻撃する」

「よし、ここだメイドちゃん！」

「はい！ 速攻魔法を発動します、《突進》！」

《突進》

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は

エンドフェイズ時まで700ポイントアップする。

「これでアナペレラの攻撃力は2500までアップしました！ 返り討ちです！」

「成程、突進か。戦闘は続行、攻撃力が下回ったフリードは戦闘に打ち負け、破壊される。ステータス変動のカードにはより適したタイミングがあるが……今はそれでいい」

破壊されたフリードを墓地に置きながら、ユウは説明を続ける。

「いかに強力なモンスターを召喚しても、今のように他のカードのサポート・コンボであっさり倒されてしまうことも多い。逆を言え

ば、どんなに強力なカードも攻略の方法は必ずあるということだ。それだけはしっかりと覚えておいて貰いたい」

「はい、わかりました！」

ユウは相変わらずのポーカーフフェイスだったが、どこことなく念を押しされたような不思議な感覚を受け取り、ベルも強く頷いた。

「さて、俺はバトルフェイスを終了する。何も無ければメインフェイズ2へと移行するが」

「大丈夫です、何もありません」

「メインフェイズ2。俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドを宣言する。何も無ければお前のターンだ」

「はいっ。わたしのターンです、ドロー！」

2度目のドローは緊張ほぐれて、少しばかりの期待が混じっていた。

*
*

「LPは0。俺の負けだ」

相も変わらぬ抑揚の無い口調で、ユウが敗北を宣言する。

初デュエルから数時間、基本的なルールを把握したベルは既に3戦ほどユウとデュエルを行い、内2戦は勝利を収めていた。

「凄いぞメイドちゃん。センサー相手に2勝も取るなんてなー」

「そ、そうですね？ えへへ……」

嬉しそうにデッキを見つめながら、ほんのりと頬を染めるベル。デッキは変わらず練習用のものであったが、後半はクラドのアドバイスにも頼らずデュエルを進めるまでになっていた。基本的なルールはほぼ把握したようだ。

「と、いう訳で頑張ったメイドちゃんに俺らからご褒美だ。その練習用デッキをプレゼントしましよーじゃないの」

「えっ？ 良いんですか……？」

「おう、本当ならもう少し強いデッキをあげたかったんだが……コッチも商売だからなあ。しばらくはそのデッキでデュエルに慣れてく

れ」

「は、はい！　ありがとうございます！　大切にしますね！」

「その言葉がいつまで聴けるのか。そう思うと切なくなるぜ……」

クラドが練習用デツキに採用したカードは効果が単調で安価なものが多く、強力なものは少ない。いずれ控え行きになるだろうことを見越しての発言だったが、ほろりと涙を流すその様子はまるで幼い娘から『お父さんと結婚する宣言』を受けた父親のようだった。

「そんじや、初日はこのくらいで終いにしようか。明日からもこうやって暇を見つけつつ、細かいルールやプレイングのコツなんかも教えていこうと思う」

「分かりました、よろしく願います！」

デツキを手にするその心が、今までに無い高揚感で溢れている。今朝までデュエルモンスターズを恨んでいたのが嘘のようだ。

「ふあ……さて、時間も遅いしそろそろ寝るかねー」

一区切りが付いたということで、クラドの口から欠伸が漏れる。

「メイドちゃんは2階の寝室を使ってくれ。狭いし天井が低いから気をつけてな？　ああ、寝るときはハシゴを取って上げて貰えば、俺らは上がって来れないから……あー、女の子だし寝る前にシャワーとか浴びたいよな？　ただこの車、貯水量が少なくて——」

「女だからって、気を使つて頂かなくても大丈夫ですよ！　ただ……お布団を汚してしまうのは申し訳ないので、タオルで身体を拭く分のお水は頂けますか？」

色々と思案するクラドを見ながらまるで『お母さん』のようだと、ベルは思わず微笑んだ。

「それではお先に、お休み頂きます」

「はいよ、お疲れ〜」

ベルが2階の部屋に引つ込むのを見届けてると、クラドは小声で呟いた。

「しっかしまさか、センサーの敗北シーンが拝めるとは思わなかったなあ？」

「初戦は負け、2戦目は勝ち。それ以降は全て負けろ。それがお前の

指示だったはずだが」

「そういう話をしてるんじゃないよ。どんな形であれ、センサーのLPがゼロになってんのは珍しいってことさ」

クラドの言葉に、ユウが表情を変えずに首を傾げる。

「……そういうものか?」

「そういうもんだ。さてさて、勝利の美酒を味わいデュエルも楽しくなってきたところで、メイドちゃんは『アイツ』とどう向き合うのか……?」

くつくつく、とクラドが意地の悪い、それでいてとても楽しそうに笑みを浮かべる。

「何を企んでいる」

「いや? ちよつとなー」

リビングのソファに毛布を広げながらクラドが生返事を返す。

一方のユウはデッキの調整にいそしんでいるが、既に自分のデッキの調整は終えているらしく、今後使用するらしい講義用のデッキを回していた。

「何のデッキ回して……成程、ロックバーン系か。教育熱心だねえ、流石はセンサー」

「……彼女には早く、力を付けて貰いたいからな」

師匠らしい言葉とは裏腹に、ユウの回すロックデッキは実にえげつないコンボを決め始めた。講義用の半端なデッキでは抵抗する間もなく焼き殺されてしまうだろう。

「そつかよ。そしたら俺も、俺の領分で頑張るとしますかね」

夜はどんどんと更けていくが、机の上の明かりと、ソファの上に灯るDパッドの光はしばらく消えることはなかった。

ベルのデュエルも、男達の思惑も。好調な滑り出しをしたようだ。

「おはようございます、ご飯の用意は出来てますよ!」

リビングで起床したクラドはテーブルに用意された朝食を見てか

ら、窓に張り付き目を輝かせるベルに気が付いた。

朝の柔らかな光が差し込む窓の外からは、大勢の人々の活気が感じられる。自動操縦の目的地にセットしていた街に到着していたようだ。

「おー……おはよう。その様子は、もう街に着いたみたいだな」

クラドが寝起き特有の軽い頭痛に顔をしかめるも、掠れた声はいつもの調子を保っている。

「はい！ 何だかとても大きな街ですね！ ここで大会が開かれるんですか？」

「いや、シガマはまだまだ先の方さ。行っておくが、シガマはココよりもっとデカイぜ？」

「そ、そうなんですか……」

実感する『自分の外の世界』に感嘆を漏らすベル。大型都市の中継地点として栄えるこの街の規模も、彼女にとっては初めての体験だ。

以前の街では見られなかった近代的な建物も立ち並ぶその様相は『白き文明』を髣髴とさせるが、その麓にはネイティブ人達の露天が軒を連ね、ベルにも馴染み深い野菜や果物などが売られていた。

(何だか、不思議な景色……)

車で1日、という距離でここまで世界が変わるのかと、ベルは改めて自身の視野の狭さを痛感した。

「……クラド。朝食を馳走になったら早速、行動を開始しよう。のんびりしている暇は無い」

果たして睡眠はとったのだろうか、昨夜と同じポジションでデッキ調整をしているユウが相変わらずの無機質ボイスで呟く。

「ああ、分かってるよ。ココのリサーチはある程度済ませてあるし、各自で役割分担して街を探索すればいい……ってことで、まずはメイドちゃんの朝食を頂きますかね？」

「その言葉をお待ちしてました！ どうぞ召し上がって下さい！」

テーブルの上に並んだ朝食は、簡素ながらもよく考えられたメニューだった。

起床時間がバラついても良いよう『冷め』の無いパンとサラダを中

心とした構成。貴重な飲料水の使用を極力控え、日持ちのしない食材から処理されている。

「……うん、うまいー!」

黙々と頬張るユウの心境は定かではないが、笑顔でグッドサインを送るクラドの胃袋は見事に掴んだようだ。

朝食を済ませ一息をつくくと、クラドが街の見取り図をテーブルの上に広げた。

「さて、メイドちゃん加入で3人に増えた作戦会議といこう。この街は都市部から都市部への中継地点として発展した『補給都市』だ。露店も多いし、旅支度を整えるにはもってこいだが……街の広さに反して宿は少ないから、長期間の滞在は難しいようだな。ま、その辺は周りを見れば分かると思うが」

窓の外に目を向けると、クラド達の他にもキャンピングカーが何十台も停車している。

恐らくは、彼らも同じ目的地を目指す『決闘旅団』だろう。

「つーワケで、俺らも支度が整い次第、先を急ごうと思う。メイドちゃんには日用品の買出しに行つて貰いたい。センサーは情報収集と大会出場メンバー探し、俺は露店やショップを回つて銭を稼いでくる。ラストに俺ら2人の用事が済み次第、メイドちゃんと合流して水を確保する——こんな流れだ。めぼしい店や合流場所はマークしてあるから、確認してくれ」

了解です、と頷きながらも、ベルはおずおずと手を上げた。

「あの、質問いいですか?」

「? 何だメイドちゃん?」

「お水の確保なんですけど。別にわたし1人で済ませてしまつても構いませんよね?」

困惑した表情を浮かべるクラドに、ベルはにっこりと笑顔を浮かべて言った。

「誤魔化そうとしても全力で無駄ですよ！ それに、この街の立地を考えてもその値段は高過ぎます、子供だからってからかわないで下さい！」

ふんす、と鼻息を荒くしてベルが露天商に異議を唱える。

無知な異陸人相手にぼったくりを掛けていた商人のようで、今もペラペラ固有言語を並べて誤魔化そうと試みている。が、そんな常套手段も同じネイティブ原住民の彼女には通用しない。効果は無効だ。

その後も押し問答は続いたが、結局露天商が根負けする形で食材類は見事、適正価格で件のリュックに収まった。

「全く……意地悪なお店です」

頬を膨らませながらも、次の目的地へ向かうベル。クラドから渡された買い物メモに連なる項目には、今は殆どに斜線が引かれている。

「ええと、次は……」

品物は全てリュックに詰め込まれ、今やベルとほぼ同じ大きさに膨らんでいた。水もすっかりとポリタンクに給水され、重量は相当なはずなのだが……当人は平気な顔で歩いている。その小さな身体はどこにそんな力があるのだろうか。

と、ベルの目に1件の露店が留まった。多少怪しげな雰囲気ではあるが、店先に並んでいるのは間違うことなくデュエルモンスターズのカードだ。

(あ……デュエルモンスターズ)

興味すら沸かなかった以前ならさしておき、今やベルは駆け出しの決闘者。未知の効果を持つカード達に自然と視線が釘打たれる。

——いかメイドちゃん？ 露店でカードを見つけても絶対手を出すなよ？

脳裏を過ぎったクラドの忠告に、はっと我に返る。

日用品や食料などには詳しくとも、カードの相場については素人以下だ。法外な値段で『自称レアカード』を掴ませられないよう、事前に注意を受けていたのを思い出したのだ。

(いけない、いけない！ カードのことはひとまずお2人に相談して

から……!」

「お嬢ちゃん。何かお探しかい?」

ビクリ、とベルの肩が跳ね上がる。物欲しげな視線に気付いたのか、店主の年老いた男が口端を吊り上げて手招きをしていた。

「あ、いえ、その……」

「少し見ていかんかね? 良いカードを沢山揃えているよ?」

怪しい。この上ない程に怪し過ぎる。

それでもその場から離れられないのは、キラキラと輝きを放つカード達の魅力に他ならない。かつて目の敵にしていた『理不尽な力』が、ほんの少し手を伸ばせば届く距離にある……そんな感情が、ベルを強く魅了していた。

やがて彼女が出した結論は「見るだけならよし」であった。

(どうせ自由に使えるお金なんてないし……大丈夫、大丈夫)

すすす、と無言で近づくりュックお化け。

陳列されたカードを間近で眺める。テキストに目を通すと、ルールを覚えたばかりのベルにとっては使い方の分からないものも多く見受けられた。

強力な魔法・罫は勿論、何といっても目が行くのはシンクロやエクシーズのモンスターカードだ。その独特な召喚方法からデッキの切り札を担うことが多いこれらのカード達は効果も非常に強力であり、稀少さも相まって高レートなものが殆どである。とどのつまり、全決闘者の憧れであり、一種のステータスでもある訳だ。

この露天にも数枚のシンクロやエクシーズのカードが並んでいたが、とてもベルが手を出せるような値段ではなかった。

(……これ1枚で晩御飯がどれだけ作れるんだろう)

「気になるかい?」

非常に分かりやすいベルの視線に、店主から声が掛かる。

「!、いつ、いえ! 見ているだけです!」

「はっは、そう怖がらんでも……そうだ、お嬢ちゃん。何ならこいつに挑戦してみないかい?」

男がそう指差したのは、粗雑な1枚の張り紙であった。

「……デュエルに勝てたら、お好きなカード1枚?」

「そう。俺に勝てたらカードをタダでくれてやるってワケさ」

「あの、それって賭けルールアンティっていうやつじゃあ……?」

じとり、と怪訝に眉を寄せるベル。タダより高いものは無い以上、負けたら何を請求されるか分かったものではない。

「はっは、お客様からは何も頂かないさ。ディスクを使わなきゃ『審判員機構』も動かんし、賭品の譲渡強制も無い。頂くとすれば、強いて言えば時間くらいだな」

何か裏がある。相手に何の利益も無い以上、それは間違いないのだが……。

「……ディスクを使わないっていうのは、本当ですか?」

うずうずと。好奇心にも似た何かがベルの口からついて出た。

カードがどうこうというよりも、今の彼女が挽かれたのは「自分の腕を試したい」という一身だった。

駆け出し決闘者のベルは、まだ自分のデュエルディスクを持っていない。ディスクを着けた熟練者に勝負を仕掛けても、ディスク未所持のベルでは鼻で笑って相手にもされないだろう。

練習ではなく、実戦。それに万が一にでも勝つことが出来れば、保障は無いに等しいがレアカードのオマケまでついてくる。

(人通りも多いし、向こうだってあまり乱暴なことは出来ないはず……それなら)

十分に警戒しながら……とはいえその行為に最早何の意味も無いのだが、おずおずとベルが承諾の意を示した。

「じゃあ……試しに少しだけ」

「そうこなくっちゃあな」

にんまりと口端を吊り上げる店主の男。

そんな男の怪しげな様子を見つつ、ベルはひとまず条件の確認を促した。

「ルールの説明と、条件の確認をお願いします」

「ハーファイフ4000スタート、ディスクは無しの上デュエルだ。先攻・後攻はそっちが決めていい。俺に勝てば、店のカードを1枚

持って行って貰って構わねえ。負けた場合は何も支払わなくて結構。このゲームの参加費用も勿論無しだ」

「……わかりました」

これだけでは店主側に何の得も無い。腹の内が分からないのが不気味ではあるが、ひとまずベルは自身の初陣を飾る第一戦に、この怪しげな舞台を選ぶことにした。

（大丈夫。昨日は師匠方にだって褒められたし……もしかしたらあっさり勝っちゃうかも、なんて……？）

頬の緩んだ表情で、ベルが露天の横に設けられたデュエルスペースに着席する。折り畳み式の簡易なテーブルと椅子だが、それだけあれば十分だ。

まだおぼつかない手つきでデッキを取り出し、シャッフル。デッキスペースにセットして初期手札5枚を伏せたままテーブルに置く。

店主のニヤつきが増したように感じたが、湧き上がる高揚感がそんな違和感を打ち消していった。

「んじゃ、始めようか？」

「はい、お願いします！」

「デュエル
「決闘！」」

ベル LP4000

手札・5

店主 LP4000

手札・5

「えっと、では先攻は頂きますね。カードをドロ」

引いてきたカードを合わせ、伏せていた初期手札を確認する。先攻側としては中々に悪くない内容に、思わず顔が綻ぶ。

「スタンバイからメインフェイズ。モンスターを1体、バックを2枚伏せてターンエンドです」

お手本のような先攻1ターンの目の布陣。後攻側の攻め手を鈍らせる堅実な形だ。

粗相無くエンド出来たことに安堵の息をつくベルに、店主が声を掛けた。

「はっは、堅苦しいデュエルだなお嬢ちゃん。もっとラフに行こうじゃねえの」

「すいません、まだ駆け出しの身なもので……」

「ほお、そうかい……俺のターンだ、ドロー。俺は手札から魔法カード《大嵐》を発動」

「……………えっ?」

背筋が凍る、とはまさにこのことなのだろう。ベルのどこか緊張が織り交ざった笑顔が一転、まるで冷水でも掛けられたように表情が強張っていく。

「駆け出ししてもコイツの効果知らない訳じゃあるめえな? 場の魔法・罠を全て破壊させて貰うぜ?」

大嵐は、その強力な効果故にデッキに1枚までしか入れられない制限の掛かったカードだ。故に手札に舞い込む確立は他に比べて低いが、熟練者であれば『万が一』とこのカードの存在を警戒したプレイングを行う……のだが、初心者のベルに当然そんな思惑は無い。

「は、はい……伏せたカードは破壊されます」

ベルの場から《炸裂装甲》《リビングデッドの呼び声》が墓地へ送られる。

「続けて、俺は手札から《レッド・ガジェット》を召喚」

《レッド・ガジェット》

☆4 / 地属性 / 機械族・効果 / ATK 1300 / DEF 150

0

「コイツは召喚成功時、デッキから《イエロー・ガジェット》1体を手札に加えることが出来る。勿論手札に加えて……バトルフェイズだ、レッドで伏せモンスターを攻撃」

「伏せモンスターは《荒野の女戦士》……戦闘破壊されます」

《荒野の女戦士》

☆4 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1100 / DEF 120

0

「ですが、荒野の女戦士は戦闘によって破壊されたので、効果が発動します。デッキから攻撃力1500以下の地属性・戦士族モンスターを1体、自分のフィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚です！」

ベルが選択したのは、同名カードの《荒野の女戦士》。

「なら俺はメイン2にバックを2枚伏せて、ターンエンドだ」

ベル LP4000

手札・3 モンスター・1 魔/罨・0

店主 LP4000

手札・2 モンスター・1 魔/罨・2

思わぬ大嵐に肝を冷やしたものの、幸いにもダメージは無い。

「わたしのターンです。カードをドロウ、スタンバイからメインフェイズ」

「カード発動は無いな」

「分かりました……なら、わたしは場の女戦士をリリースします！」

荒野の女戦士を墓地に置きながら、手札から新たなモンスターを場に出す。

「☆5の《無敗將軍フリード》を、アドバンス召喚！」

《無敗將軍フリード》

☆5/地属性/戦士族・効果/ATK 2300/DEF 170

0

「おっと、そいつは通せねえな。罨カード《奈落の落とし穴》を発動だ」

「……ふえっ?」

文字通り目が点になるベル。硬直したまま首を傾げる彼女に、店主が説明を加える。

「奈落の落とし穴は、相手が召喚・特殊召喚した攻撃力1500以上のモンスターを破壊し、ゲームから除外する罨カードだ。割と有名なカードなんだが知らなかったか?」

召喚反応型罨。罨カードの中でも強力がつメジャーな存在だ。昨夜の講習で知識としては頭にあったものの、実戦で遭遇するとその凶悪さがより鮮明に浮き出てくる。

「い、いえ。そういう訳では……」

高揚していた心の熱が、大寒波の如く一気に冷めていく。戦闘すら行えず、せつかく召喚した上級戦士が除外ゾーンへと送られた。

「……召喚はもう出来ないの、このままターンエンドです」

「そうかい、なら俺のターンだ。カードをドロー」

意気消沈したベルへ追い討ちを掛けるように、淡々と店主のターンが進む。

「俺は手札から、前のターンで手札に加えた『イエロー・ガジェット』を召喚」

『イエロー・ガジェット』

☆4 / 地属性 / 機械族・効果 / ATK 1200 / DEF 120

0

「バトルフェイズだ。2体のガジェットで直接攻撃」

「……え、えっと。合計2500のダメージを受けます」

ベル LP4000→1500

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

罫を剥がされ、上級モンスターを破壊され。あからさまに落ち込んでいるベルを尻目に、店主はニヤニヤと宣言する。

デュエルとは、勝負とは常に非情なものだ。計略は数多に巡らせど、相手への気遣いなど、まして手加減などはあつてはならない。

そんな駆け引きの中で戦う意思を無くしてしまえば、すぐに勝敗は決してしまう。

「……えっと、わたしのターン。カードを……」

結果だけを言えば、このデュエルはベルの敗北で幕を閉じた。

「毎度♪ またどっかで会ったら〜鼻屑に〜」

ひらひらと手を振って、クラドは客の背中を見送る。

デッキを新調するのだろうか、ある程度纏まってカードが揃けたので鼻歌交じりの上機嫌だ。

「さて、と。そろそろセンサーとメイドちゃんに合流しますかね」

そう呟いた口元が、ニヤリと良からぬ角度に吊り上がる。

「……ま。連絡が無いってことは2人とも『あそこ』なんだろうけど、な」

路上に広げられただけの簡素な出張露店。その脇をクラドがコツンと突くと、自動的に鞆のような形に縮小変形した。あつという間の店仕舞いだ。

軽快な動作で鞆となった露店を担ぎ上げ、迷いの色無く人々の行き交う大通りを進んでいく。この街について散々調べた張本人だ、地凶など広げなくとも行き先はバツチリだ。

二、三度角を曲がったところで、何やら騒がしい人だかりが出来ているのが見えた。

「へえ、狙い通りにいくもんだなあ」

人だかりに近寄っていくと、見知ったポーカーフェイスが遠巻きに『騒ぎの中心』を眺めているのに気が付いた。

「ようセンサー、奇遇だな?」

「……クラドか」

視線を逸らさずに皮肉を軽く受け流すなユウ。その様子を見て、クラドが口元を緩ませる。

「弟子が気になるか?」

「……否定すれば嘘になるな」

そんな彼らの視線の先には、とある露店商を相手取り必死にデュエルする少女の姿があった。

「バトルです! アナペレラでダイレクトアタック!」

「罨カード『魔法の筒』、攻撃は無効だ。さて、アナペレラの攻撃力分のダメージを受けて貰おうか」

「うぐっ……!」

ベル LPO

「……ッ、もう1回お願いします!」

「はっは、確かにチャレンジに回数制限は無えけどな? もう何回目だのお嬢ちゃん?」

そうは言いつつ、店主も笑いながらデツキをシャッフルする。休憩

する様子も無く、互いに初期手札5枚を揃える。

「今度はわたしが先攻を取ります！ ドロー！」

熱を帯びた様子の子のベルは対照的に、周囲を取り巻くギャラリィ達の反応は冷淡だ。

嘲笑交じりの『歓声』が聞こえているのかいないのか、ベルのデュエルは止まらない。

「モンスターを1体セットして、ターンエンドです！」

「俺のターンだ。ドロロー。魔法カード《抹殺の使徒》発動。裏側守備表示のモンスター1体を破壊し、ゲームから除外する」

「~~~~!!」

声にならない声を上げて、ベルが震える指先でモンスターを除外ゾーンへ放り込む。

セットモンスターは、戦闘破壊でなければ効果が発動しない《巨大ネズミ》。

「俺は《グリーン・ガジェット》を召喚し、効果で《レッド・ガジェット》1体を手札に加える」

《グリーン・ガジェット》

☆4 / 地属性 / 機械族・効果 / ATK 1400 / DEF 600

「更に装備魔法《団結の力》をグリーン・ガジェットに装備。攻撃力が800ポイント上昇する。バトルだ、ダイレクトアタック」

「だ、ダメージを受けます」

「ならここで速攻魔法《リミッター解除》を発動だ。このターン自分の機械族モンスターの攻撃力を2倍にする。さて、これでグリーン・ガジェットの攻撃力は——」

《グリーン・ガジェット》

ATK 1400 ↓ (+800) ↓ 2200 ↓ (×2) ↓ 4400

ベル LP 4000 ↓ 0

「ぐ、うう……！」

有無も言わさぬ、文字通りの瞬殺。

手札に残る罫カード《万能地雷グレイモヤ》を見つつ、ベルは唇を噛み締める。

(やっぱり罨を伏せておけば……でも)

彼女が罨を伏せなかったのには、理由があった。

初戦の大嵐に始まり、相手のドローカードがどうにも『都合が良過ぎる』のだ。

バックカードを多く伏せれば大嵐、それを警戒して1枚のみを伏せれば『サイクロン』で破壊される。モンスターを召喚すれば落とし穴に落とされ、上手く攻撃出来たとしても『魔法の筒』のような別の罨で対処されてしまう。

それならば、と相手の出方を伺おうと防御を手薄にすれば、今のようない撃必殺のコンボが飛んでくる。堅実かつ基本的な、まさに教本通りの『完璧な戦略』。

店主のデッキがそういう戦い方を得意とするデッキだというのはベルも理解してきたが——それにしても理不尽なまでに引きが良過ぎないか、と憤りにも似た違和感が湧き上がってくる。

より簡単に言えば、どうにも納得が出来ないのだ。

「……もう一度。もう一度お願いします！」

「自棄になっても勝てないぜお嬢ちゃん。まあ俺は構わんがね……」

忍び笑いをこぼしながら、店主はデッキのシャッフルを始める。

涙目になりながらも尚、納得の出来ない『何か』に挑戦し続ける弟子の姿を見て、ユウはクラドに問い掛けた。

「……あの男と戦わせることに、一体何の思惑がある？」

「ああ、勿論大アリさ。その口ぶりじゃとつくに気付いてるんだろうが……あの爺さんは『イカサマ』のプロでな。卓上デュエル限定だが、割とこの辺じゃ有名ならしい。メイドちゃん、開始前のデッキ交換シャッフルもすっかり忘れてるみたいだな。それに爺さんのデッキはサーチを多様する【除去ガジェット】。手札とデッキのカードを入れ替える隙なんざいくらでも用意出来る」

クラドが悪戯小僧のようにカラカラと笑う。

少しでも知識がある決闘者ならこの『違和感』に異を唱えることも出来ただろう。だが素人目しか持たないベルにそれは難しい。裏側から蹴飛ばせば成す術なく倒壊するハリボテの怪物に、未だ真正面か

ら斬り込むことしか出来ないのだ。

「……つまり、あの爺さんはお前の差し金と言う訳か」

「そういうコト。レアカードの景品をダシにイカサマ使って遊ぶのが趣味って変な爺さんでな、二つ返事で了解してくれた。あとはメイドちゃんがこの露店の前を通るようにルートを設定してやれば、爺さんが適当に声を掛ける手筈になってた」

「……そんな相手に敗北の経験をさせて、何の為になる?」

「いやな? センサーが実技指導担当なら、俺はメンタル面でサポートしていいこうかと思ってるさ」

「……メンタル面?」

ユウの表情に、少しばかり驚きの色が滲む。

「そ。今一番怖いのは、メイドちゃんがデュエルを「つまらない」と感じてしまうことだ」

「……あれではまるで逆効果だと思うが」

「まあまあ、アレはぶっちゃけ第2ステップ。初心者の第1ステップはまず、勝利の喜びを知ることさ。昨日の講習会がまさにそれだ」

良い感じで負け越してくれ、と指示された昨日の講習を思い出し、ユウは納得したように目を瞑った。

「いくら相手が本気でないと分かっているとはいえ、実力のある相手に勝ったというのは気持ちがいいもんさ。そこに多少ワザとらしくても褒め言葉を添えてやりやあ、誰だってデュエルに悪い印象は抱かない。メイドちゃんのデュエルに対する印象は悪かったからな、苦労したぜ?」

「……よく悪知恵が回るもんだ」

「おう、もつと褒める褒めろ。だが、天狗のままにしてちゃあマナー最悪の自己中決闘者の出来上がりになっちゃう。そこであの爺さんの出番さ。才能も実力も「あるんじゃないか」と思っているその鼻っ頭を早い段階でもぎ取っておく。なるべく『運』の要素をちらつかせてな」

イカサマによる理不尽な勝利には、そんなクラドの思惑を實現させるのにピツタリと言える。

「第2ステップは『負けることに慣れる』こと。なるべく惨めで、理不尽な負け方を今のうちに刷り込んでおくのさ。知識がついて変なプライドが芽生える前にな」

「……もし、爺さんとのデュエルであいつが匙を投げていたらどうするつもりだった？」

「センサーってば意外と過保護？ そんな時はそんなとき。メイドちゃんもそこまでの覚悟しか無かったってただけだ」

「……………」

押し黙るポーカーフェイスに不穏な空気を感じ取り、クラドは慌てて言葉を繕った。

「心配いらねえよ、現にメイドちゃんは挫けず何度も戦ってるじゃねーか。センサーだってある程度『見込み』があつたから教鞭を持つたんだろ？」

そう言つて、クラドは再び始まつたベルのデュエルに目を向けた。

呆れ顔のギャラリーの数。半ば自暴自棄で暴走気味のベル。これだけの状況証拠があれば何度もデュエルが行われたことなど容易に想像が付く。

「うぎゃーっ!？」

結果はまたも惨敗。《聖なるバリアーミラーフォーサー》で破壊されたモンスターを《リビングデッドの呼び声》でバトルフェイス中に蘇生し、追撃を仕掛けたまでは良かったのだが……店主の伏せは《サイクロン》。リビングデッドは破壊され、蘇生したモンスターは再び墓地送りとなつた。

返しのターン、店主必殺の《リミッター解除》が火を噴き、あつとこの間にベルのライフは燃え尽きてしまった。

「あちやー、惜しいトコまでいったんだけどなあ」

「……未だダメージすら通らず、か」

そう呟く両指導者の雰囲気は、心なしか暖かく緩んでいた。

攻撃反応型の罫を読み、蘇生前のモンスターを『匣』にすることでリビングデッドでの追撃を『本命』とする。ユウ達が教えたカードの知識は実戦を通じ、ベルの中で成長していることの証でもあつたから

だ。

「な？ メイドちゃんてば意外と根性あるだろ？ ちよつとばかりスパイスを効かせた方が好みかもしれないぜ？」

「……そうだな。精神面の指導はお前に任せられた方が良いかもしれない」

「あいよ、承った。時間はあるようで無いし、これからは安心してピシバシ行こうぜ、実技担当？」

指導者同士話も纏まったところで、無茶をやり遂げた弟子を迎えに2人は歩を進めた。

(駄目だ……勝てない……！)

ずん、と腹の底が冷えるような感覚。行き場の無い憤りが焦燥に変わっていく。

景品のレアカードのことなど、もう頭の片隅にも無かった。

ベルを何度も立ち上がらせ、突き動かしていたのは2人の指導者の存在だった。今ここで諦めてしまえば彼らの教えが全て無に帰してしまうような、そんな気がしたのだ。

自分が駆け出しだからだとか、デツキが悪いからだとか『言い訳』はいくらでもある。相手の理不尽な引きに関してもそうだ。疑い出せばキリが無い。

しかしそれでは、ここで逃げ出してしまえば『全力で決闘と向き合う』ことを誓った自分を早々に裏切ることになってしまう。店長に無理を言っただけの街を飛び出した意味が無い。

勝てなくてもいい。せめて一撃、自分で本当に納得が出来るその一撃が通るまで挑戦を止めることはしたくなかった。

「……すいません。もう1度——」

「おーい、何やってんのかなあメイドちゃん？」

驚いて飛び上がり後ろを振り向くと、ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべたクラドが手を振っている。その横にミスターポーカーフェ

イスを侍らせて。

「はう!? く、クラド、さん……?」

「露店のカード屋には手を出さな
って忠告した筈なんだけどなあ?」

「お、お一方違うんです、これはその……!」

「はっは、心配なさんな、お嬢ちゃんは
まだ買い物なんかしらんさ」

冷や汗を浮かべて必死に取り繕う
ベルに、店主が張り紙を指差しな
がら助け舟を出した。

「なるほど、そうかい。ただまあ、
随分とウチのメイドちゃんが世話に
なつたみたいだな?」

「いやなに、久しぶりに『食い下がる』
お客さんと手合わせ出来ていい
暇潰しになつたさ」

「ひ、暇潰し……」

所詮その程度の相手にしかされてい
なかつたのだ、という悲惨な現
実がずん、とベルの頭上に重く押し
掛かる。

「そう言ってくれりゃこっちは有難
いけどな。ま、営業妨害しちまつ
たのは事実だ、迷惑料って訳じゃ
ないが貰つてくれ」

クラドが1枚のカードを投げて寄越
すと、店主は口端を吊り上げて
小さく頷いた。

「なら、そうさな……お嬢ちゃん、
コイツを持っていきな
?」

店主が代わりに投げて返したのは、
中心に液晶画面の付いた円盤状
の機械だった。

「これって……でゆ、デュエル
ディスク!」

古いモデルで表面の擦れ汚れが目
立つものの、普通に使用する分
には問題はなさそうだ。

目を丸めたベルは、おっかなビツ
クリといった様子でディスクを眺
め回した。

「まだディスクは持って無えん
だろう? 型遅れのジャンク品だ
が『審判員機構』も起動できる。
ジジイの暇潰しにトコトン付き
合ってくれた礼だ、良けりや使
つてくれ」

「……はい！ ありがとうございます！」

ぬいぐるみでも抱えるように、ベルは大切そうにディスクを抱きしめた。

「良かったなメイドちゃん？ さて、そろそろ帰るぞー……にしても本当に担いで大丈夫かソレ？」

何の気なしにベルが担いだ水入りの巨大リュックに、クラドは思わず目を丸める。

「？ はい。それほど重くなかったですし、大丈夫ですよ！」

そう言つて微笑むベルに、クラドはやはり訝しげな視線を送った。

余談だが。試しにとクラドがリュックを背負ってみたところ、彼は数歩と動けぬまま降参した。サレンダー

「そーいやセンサー、スカウトの方はどうだった？」

「ああ。それなりの実力者が見つかった。外の車の前で待ち合わせている」

「車って、俺達のか？」

クラドの言葉に、ユウが無言で頷く。

「……てことは、だ。あの目つきの悪いゴロツキさん方がそうだったのか？」

ここは街の外の駐車場。仕入れた物資を持って帰ってきた一行の目の前では、彼らのホームたるキャンピングカーを取り囲む男達の姿があった。

前向きに捉えても決して友好的な雰囲気ではなく、どちらかといえば獲物を前にしたハイエナのような濁った微笑を浮かべている。

「あの、あんなにいつぱいスカウトしてきたんですか……？」

不安げに眉を寄せて、ベルが尋ねる。

「いや、声を掛けたのは1人だけだった筈だが」

「あー……何か荒事になりそうだぞ……？」

苦笑を浮かべて後ろ髪をかくクラドをよそに、ユウが一步前に出て

男達に告げた。

「酒場で話をつけた者だが。これはどういうことだ？」

ユウが声を掛けたらしい、一際屈強そうな男が答える。

「どういうこと？ お前さんから大会に出ねーかって誘ってきたんだろうが？ 最も……出場するのは俺の旅団とお前らの『物資』^{カード}だけだが、な!!」

男の腕に装着されたデュエルディスクから、赤い光の縄のようなものが伸び、ユウのDパッドへと喰らいた。

「……これは」

「ハハッ、まずはお近づきの印に楽しいデュエルというこじやねーか!! 俺とお前ら、その全財産を賭けてなあ!!」

宣戦布告と共に、男のディスクがデュエルモードへと展開。そしてユウのDパッドも、それに呼応するかのように強制的にデュエルモードへと移行した。

その様子を見たクラドが、目を見開いて糾弾する。

「デュエルアンカーだど?! おいおい、そいつは使用禁止で、今は使おうにも機能すらない筈だぜ!」

デュエルアンカー。強制的に相手のディスクとリンクさせ、勝敗が決するまで拘束するというストリート・デュエル御用達だった決闘機具だ。

しかしデュエルモンスターの力が増すにつれ、その機能に非難が集中。決闘機具のシステム管理の中枢である『文明の白』から使用禁止・機能停止のお触れが通達されると同時に、審判員機構へデュエルアンカーの使用を違反行為として登録された。

つまり、アンカーを使用すれば問答無用で反則負けとなる……筈なのだが。

「バーカ、んなもん律儀に守ってんのは『白』の良い子ちゃん連中だけよ!! 制限解除^{オフリミット}って言ってなあ、審判員どもの目を抜ける方法なんざ『裏』には腐るほどあんだよ!!」

制限解除……違法機具を公平たる審判員機構の目前でぶち通す魔改造。裏のデュエル社会では既に一般的な知識として蔓延している

技術のようだ。

「そら、もう1人も相手して貰おうか!!」

男の取り巻きからデュエルアンカーが容赦なく放たれる。標的となったのはクラドだ。

「おわっ?!? つとと……ッ!!」

Dパッドの装着された左腕を軸にヒラヒラと動き回り、アンカー攻撃を見事にかわして見せたクラドは、

「メイドちゃん、悪い!!」

ベルの後ろに隠れると、盾の如く前へと押し出した。

「え?」

つい数分前にベルがアクセサリー気分で身に着けたデュエルディスクに、デュエルアンカーが接続される。

『——『決闘申請』、確認。^{AR}仮想戦場、^{リンク}展開完了』

「え……ええええええ!!」

強制起動するベルのデュエルディスク。楕円型のような形から、アルファベットのS字のような形へと展開する。と同時に、周囲の景色が一面の荒野から生林のような場所へと瞬時に塗り替えられていく。

「な、ななな何するんですかクラドさん!」

「すまねえ、俺ってばカードの知識はあっても本番はからつきしなんだよ……つーわけでここは頼んだぜ? 大丈夫、メイドちゃんなら出来る!!」

「そんな無責任な!」

『^{ジャッジアプリ}審判員機構』起動——』

『世界の平和を守るため、愛と勇気と大人の事情がドツキング!! 美少女審判員コーパルちゃん、只今参上♪』

『……あなたを、ダイヤルオン。審判員機構ネフ、特殊召喚に成功致しました』

同型モデルながらも、性格は全く正反対な2人の審判員機構が戦場に姿を現す。

今回の彼女らは、いつかどこかで見たようなバーチャルアイドルのコスチュームに身を包んでいた。

『あらあら、ネフちゃんお久しぶりですね。何だかんだでフィールドで顔を合わせるコトは、審判員機構わたしたち的には封入操作されたスーレアくらい珍しいコトですからね〜』

『はい、姉さんもお元気そうで何よりです』

空気を読まない審判員2人をよそに、デュエルの設定が次々と申請されていく。

誰もディスクを操作した訳でも、口頭で宣言をしたわけでも無い。アンカーを通して、決闘旅団があらかじめ設定した要項が勝手に流れているのだ。

『おや〜？ 今回は決闘者の皆さんもやる気満々のようですね？ わたしたちのガイドラインも無く、ぶ〜丁寧な事前申請をこんなにな〜！』

『至れり尽くせりですね。遂にバーチャル存在にも労わりの心が求められる時代になったのでしょうか』

「ちよ、待ってください!! コレ!! 違反なんですよね!! このデュエルは無効です!!」

必死に訴えながら、ベルがデュエルアンカーを見せる。

『? はて、違法機具の反応はありませんが……?』

そんなベルの訴えとは裏腹に、コーパルはきよとんと小首を傾げる。規制解除の効力なのか、審判員機構はアンカーを認識出来ないようだ。

『そんなコトより『賭け品』さん? 早くディスクにデッキをセットしないと反則負けになっちゃいますよ?』

「う……わ、わかりました」

ここで審判員機構に逆らえば、問答無為で敗北が決定してしまう。

仕方なく、ベルは貰ったばかりのデュエルディスクに現在勝ち星ゼロの練習用デッキをセットした。ディスクの扱いは慣れないが、操作自体はほぼ全自動なのでデュエルに支障は無い筈だ。

『設定を確認します。ハーフライフ4000スタート。アンティール適用のシングルデュエル×2……申請承認を完了致しました』

『さあ、それでは始めましょう♪ 楽しいデュエルにしようぜー!!』

『アンティデュエル、レディー……』

『ゴー!!』

コーパル・ネフの息の合った宣言と同時に、有無も言わさぬ『強制賭けデュエル』が幕を開けた。

ユウ LP4000

ベル LP4000

リーダー男 LP4000

取り巻き LP4000

(うう……何でこんなことに……って!?)

ベルの頭上に表示された、先攻・後攻決定のダイスの目は1。幸先の悪さに思わず頭をたれる。

「はっ、自分の身可愛さにこんなガキを盾にするとはな……とんだ腰抜け野郎がいたモンだ。先攻は頂くぜ、ドロー!!」

取り巻きの言葉に思わず頷きそうになるも、ひとまず凹んだ気力を奮い立たせる。

自分達の全財産が掛かっているのだ、今は不満を呟いている場合ではない。

設定された条件は不明だが、恐らく自分とユウ、どちらか一方が負ければ賭けは成立するようになっていようだろうとベルは考えていた。そうでなければ2組同時にデュエルを仕掛ける理由が無いからだ。

「俺はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンドだ。さあ、攻められるモンなら攻めてみなガキンチョ?」

取り巻き LP4000

手札・3 モンスター・1 魔/罫・2

「頑張れメイドちゃん!! 気張っていけー!!」

ふりふりと手を振って声援を送るクラドをジトリと一瞥しながら、ベルはデッキトップに手を掛けた。

「もう……わたしのターンです、カードをドロー!」

ドロウしたカードは《サイクロン》の魔法カード。早速その効果を使用しようとして、不意にベルの脳裏に『デジャブ』が過ぎった。

(――あ)

魔法が、罨が。いくつものカード達が次々と思い浮かぶ。

しばしの沈黙の後、ベルは意を決したように告げた。

「――スタンバイからメインへ！ わたしはモンスターをセット、バックにカードを1枚伏せてターンエンドです！」

「ハッ、攻めの一手も無い糞手札だったようだな？ まあいい、なら遠慮なく潰させて貰うぜえ？ ここで伏せカード^{リバース}発動、《サイクロン》！」

取り巻きの場に伏せられていたカードが、その効力を発揮する。

「フィールド上の魔法・罨カード1枚を選択し破壊する！ 当然、選択するのはお前の伏せたカードだ！」

カードから発生した竜巻がベルのカードに迫る。

通称『エンドサイク』。伏せたばかりで発動できない罨を狙い打つ決闘者の常套手段だ。

ベルの伏せカードは、何の抵抗出来ず竜巻に屠られてしまう……だが、彼女とて無駄に苦汁を飲まされた訳では無かった。

「どうせそんなコトだろうと思ってました！ わたしは破壊された《セキュリティ・ボール》の効果を発動します！」

「なっ!？」

エンドサイクなど食べ飽きたとばかりに、即座に宣言を切り返した。

「このカードは元々、相手モンスターの攻撃を防ぐ為のものです……セットされたこのカードが相手の効果によって破壊されたとき、フィールド上のモンスター1体を破壊する効果もあるんです！ わたしは、あなたの場のセットモンスターを破壊します！」

破壊されたカードから飛び出した球体型の機械兵器が、取り巻きの場のセットモンスターにレーザー攻撃を浴びせる。

「くっ……クソガキが舐めた真似を!!」

ベルが相手の墓地を確認すると、セットされていたモンスターは《人喰い虫》とある。

《人喰い虫》

☆2 / 地属性 / 昆虫族・効果 / ATK 450 / DEF 600
リバース：フィールド上のモンスター1体を選択して破壊する。

(うつ……あ、危なかった……)

そのグロテスクな名前に口端を引きつらせつつも、ほっと胸を撫で下ろすベル。迂闊にモンスターを召喚し攻撃していれば、その恐ろしいリバース効果で即座に破壊されてしまっていただろう。

短時間で積み重ねられた理不尽な敗北の経験。それらは確かに、ベルを決闘者として前進させるに足る糧として機能していた。

『おっと、ナイス判断でしたね』『賭け品』さん？ ついこの間までカードを触ったことすらなかった初心者さんだとは思えない急成長です♪』

興味を示したらしいコーパルがコメントの横槍を入れる。

「ありがとうございます……なんですけど、その『賭け品』って呼び方は止めてくれませんか……？」

『それは失礼しました、それでは『ベル』さんと。どう頑張っても私たちは頭が機械ですから、もうカチンコチンな思考でして♪ 1度登録された名称は中々修正がきかないですよ♪』

取り巻きの男はそんなやり取りを忌々しげに睨みながら、自分のターンへと移った。

「ガキが余裕かましやがって……俺のターンだ、ドロー!!」

取り巻き LP4000

手札・4 モンスター・0 魔 / 罫・1

ベル LP4000

手札・4 モンスター・1 魔 / 罫・0

「俺は墓地の《人喰い虫》をゲームから除外し、このカードを特殊召喚する！ 出て来い《ジャイアントワーム》！」

《ジャイアントワーム》

☆4 / 地属性 / 昆虫族・効果 / ATK 1900 / DEF 400

巨大なムカデのようなモンスターが、地中を這い出て姿を現した。

「へっ、コイツの姿は初心なメスガキにや少し刺激が強過ぎたか？」

煽り文句を飛ばしながら、取り巻きの男は青ざめたベルの表情を期

待しながら顔を上げた——のだが。

「? いえ、別にそれほどは……」

本人は至って普通に、けろりとカードを構えて対峙していた。

ベルとて大自然の驚異渦巻く、ネイティブ生まれの女だ。ムカデ如きで悲鳴を上げるようなヤワな精神は持ち合わせていない。

「どこまでも腹の立つ……! まあいい、俺は更にジャイアントワームをリリースする!」

(!? この流れは……)

「アドバンス召喚、《セイバー・ビートル》!!」

《セイバー・ビートル》

☆6 / 地属性 / 昆虫族・効果 / ATK 2400 / DEF 600

昆虫族の上級モンスター、その名に恥じぬカブトムシ型のモンスターが姿を現した。

その刃のように輝く角の矛先は、ベルのセットモンスターに向けられている。

「バトルだ! セイバー・ビートルでセットモンスターを攻撃!」

戦車の如く進撃するビートルの迫力に気圧されながらも、その内心ではぐっと拳を握り締める。

(やった! セットモンスターは《荒野の女戦士》、これで次のターンまでモンスターを場に残せる!)

表になったカードから飛び出した女騎士が、ビートルの一撃をその身に受け止める。

だが——その衝撃は風圧の刃として、後方のベルへ襲い掛かった。

「……えっ? うあああっ!」

ベル LP 4000 ↓ 2800

大きく減少した自分のライフに目を丸くしながら、ベルが驚きの声を上げる。

「そ、そんな!? 何でライフが……!」

「いくら調子に乗ろうがガキはガキだな! 俗に言う『貫通効果』ってヤツさ! セイバー・ビートルが守備表示モンスターに攻撃をした時、その守備力よりも攻撃力が上回っていればその差の数値だけ相手

にダメージを与えられんだよ！」

得意げな取り巻きの解説に、クラドがどこか気まずそうな感嘆を吐き出した。

「あく……しまったなあ、貫通なんてありきたりな効果過ぎて、昨日の初回講義じゃ教えてなかったぜ……」

「ええっ!？」

そう呟いて後ろ髪をかくクラドに責め立てるような声を上げつつも、ベルは再び体勢を直して相手に向かい合う。教えられていなかったのならそれでいい、今ココで実戦体験として覚えることが出来たのだから。

「っ、ともかく効果は予想外でしたけど、戦闘で破壊された《荒野の女戦士》は効果を発動出来ます！ デッキから《切り込み隊長》を特殊召喚です！」

《切り込み隊長》

☆3 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1200 / DEF 400

「面倒なヤツを……！ 俺はこれでターンエンドだ！」

「ではわたしのターンです、カードをドロロー！」

取り巻き LP4000

手札・2 モンスター・1 魔 / 罨・1

ベル LP2800

手札・5 モンスター・1 魔 / 罨・0

(ビートルの攻撃力は2400。貫通効果があるから守備表示のモンスターで耐え凌ぐことも出来ない……なら！)

座学の知識は、実戦で形を成す。

「スタンバイからメイン、わたしは手札の《増援》を発動！ その効果でデッキから2枚目の《切り込み隊長》を手札に加えます！」

その効果を知っているようである取り巻きの顔が歪む。しかしその表情はまだ余裕の色がある。が――。

「ココで手札から《サイクロン》を発動！ 伏せカードを1枚破壊させて頂きます！」

「なっ!？」

今度はベルの側から竜巻が放たれ、取り巻きの伏せカードを蹂躪していく。破壊されたカードは……召喚反応罫、《激流葬》。

「て、テメエ……!!」

「へんつ、2択を1択に減らす方が悪いんですよ！ これで安心してモンスターを召喚できます！ わたしは《切り込み隊長》を召喚！」

ベルの場に2体の切り込み隊長が出揃う。その光景を目にしたコーパルが歓声を上げ、クラドがニヤリと口端を吊り上げる。

『おおく!! 戦士族定番のコンボ『切り込みロック』、堂々完成です!!』

これでベルさんの布陣は強固なものになりましたあ!!』

「へえ……早速実践、か。やるなあメイドちゃん」

切り込み隊長には、他の戦士族モンスターを攻撃対象に選択させない効果がある。それらが2体並ぶことで互いを攻撃対象外とし、結果的に相手のモンスターを攻撃不能にさせるとというのが『切り込みロック』だ。

更に、切り込み隊長のもう1つの効果である『召喚成功時に手札から☆4以下のモンスターを特殊召喚する』効果がまだ残っている。本来はコチラの効果を使って2体を並び立たせるのだが、今回のベルの場合はまだまだ追加で召喚が可能だ。

「更に切り込み隊長が召喚に成功した時、手札から☆4以下のモンスターを特殊召喚出来ます！ この効果で特殊召喚するのは……この子です！」

《マジック・ストライカー》

☆3 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 600 / DEF 200

「！ へえ、ここでソイツを出してきたか……」

デフォルメされた、等身の低いアニメキャラクターのような戦士がポンとフィールドに躍り出た。しかしその可愛らしい容姿とは裏腹に、クラドが思わず目を見張るほどの場に適した効果を持っていた。

一方、それに対峙する取り巻きは歯噛みしながらギツと睨つける。

「……クソ!! また面倒な……!!」

「バトルフェイズ！ わたしはマジック・ストライカーで『ダイレクト

「アタック!」

マジック・ストライカーは何とセイバー・ビートルの頭上を軽々と飛び越え、後方の取り巻きの下へと到達すると、その杖武器を躊躇い無く振るった。

「ぐっ……!?!」

取り巻き LP4000↓3400

本来、フィールド上にモンスターが存在する場合は相手プレイヤーへ直接攻撃することは出来ない。しかし様々な効果を持つモンスターのの中には、このマジック・ストライカーのように『相手モンスターを無視して直接攻撃が可能』というものも存在する。

こうした効果を持つモンスターは軒並みステータスが低く、次の相手ターンに回れば簡単に破壊されてしまうものだが——現在ベルの場には自分のモンスターへの攻撃を完全にシャットアウトする『切り込みロック』が完成している。

つまりこの布陣が崩れなければベルは毎ターン、マジック・ストライカーの直接攻撃を与え続けることが出来るという訳だ。

「メインフェイズ2でバックカードを1枚伏せて、ターンエンドです!」

「……あんまり調子に乗んじゃねーぞ?! 俺のターン、ドロー!!」

取り巻き LP3400

手札・3 モンスター・1 魔/罨・0

ベル LP2800

手札・1 モンスター・3 魔/罨・1

力任せに抜き取ったドローカードを見つめる取り巻きの表情が、みるみるうちに歓喜へと変わっていく。

「……ハハハッ!! こいつはイイカードを引いた!! コレでてめえは終わりだクソガキ、俺は魔法カード《禁じられた聖杯》を発動!! 対象はお前の切り込み隊長だ!!」

「わ、わたしのモンスターに!?!」

宣言と同時に、銀色の杯がおもむろに切り込み隊長へと投げつけられた。

するとどうだろう、中を満たしていた美酒が降りかかり切り込み隊長の纏っていたオーラの色を弱めていく。

「攻撃力は400ポイント上がっちゃうが……この効果を受けたモンスターは、エンドフェイズまで効果が無効になる!!」

「!! そんな!？」

そう、『切り込みロック』は万全ではない。魔法・罠・モンスターの効果の前では何の抑止力も無く、こうして呆気なく突破されることも多々あるのだ。

「これでウザってえロックが消え、攻撃が可能になったあ!! 俺は手札から《甲虫装甲騎士（インセクトナイト）》を召喚!!」

《甲虫装甲騎士》

☆4 / 地属性 / 昆虫族 / ATK 1900 / DEF 1500

白銀の甲殻甲冑に身を包んだ昆虫騎士がフィールドに降り立つ。効果を持たない通常モンスターだが、その攻撃力は下級モンスターとしては十分過ぎる程だ。

並び立つ2体の巨大昆虫。

彼らの剣は、角は。今は目の前の貧弱な戦士達を易々と葬れる。

「バトルだ!! まずは甲虫装甲騎士で聖杯の効果を受けていない切り込み隊長を攻撃!!」

「う……と、罠発動!! 《くず鉄のかかし》っ!!」

自身の効果で、他の2体を庇うように前へ出ていた切り込み隊長、その眼前に巨大な鉄製のかかしが割り込んだ。

「くず鉄のかかしは1ターンに1度、モンスターの攻撃を無効にして再び場にセツト出来ます……でも」

「ああそうさ!! まだセイバー・ビートルの攻撃が残ってる!! その邪魔な野郎を貫いてやれ!!」

ビートルの攻撃を阻むものは何も無い。無慈悲にもその角は切り込み隊長の腹部を貫き、その身体を霧散させ墓地へと葬った。

「ううっ……!!」

ベル LP 2800 ↓ 1600

「まだまだ!! 俺は手札から魔法カード《死者蘇生》を発動!! たった今

墓地送りにした切り込み隊長を、俺の場に守備表示で特殊召喚する
!!」

「な、ええっ!?!」

その光景は君主に仕える戦士の反逆が如く。取り巻きの場に、生気の無い目のままの切り込み隊長が特殊召喚された。

「はっ、返しのターンで《戦士の生還》でも使われちゃ、苦勞が水の泡だからな……出し惜しみはしねえ!! これでターンエンドだ!!」

その勘の鋭さに、ベルは思わず舌を巻いた。ベルが持つ唯一の手札、それぞまさしく《戦士の生還》だったからだ。

万が一破壊された切り込み隊長を墓地から回収し、再びロックを形成する……そんなベルの目論見は音を立てて崩れ去った。

(……やっぱり経験のある決闘者。昨日今日の付け焼刃のわたしなんかとは違う。でも——!!)

何が何でも、負けるわけには行かない。この先の旅路が。自分と、2人の男達の未来が掛かっているのだから。

くず鉄のかかしはあるが、相手のモンスター展開や貫通効果を持つビートルが居ることを考慮すると、ここでのドローが真正銘の正念場となる。

「……わたしのターン、ドロー!!」

勢い良く引き放つ、実質的なラストドロー。

恐る恐る目を開いたベルが目にしたのは——。

(……な、何コレ!?)

数秒、静止の後に小首を傾げるベル。

(こんなカード、デッキに入ってたっけ……?)

見慣れない名前、イラスト、テキスト。

デッキをプレゼントされてから何度も目を通していたが、こんなカードを見たのは初めてだ。そもそも、ベルの練習用デッキに扱いが難しい『最上級モンスター』など存在しない筈なのだが。

経緯はどうあれ、引いてしまったものはどうしようもない。しばしその効果に目を通し——。

(……でも、この子なら!!)

険しい表情のまま、ベルはフェイズ移行の宣言を続けた。

「スタンバイからメインへ移行します！ わたしはマジック・ストライカーと切り込み隊長の2体をリリース!! アドバンス召喚……」

墓地へ吸い込まれていく2体のモンスターの魂。それはより強靱な魂を降臨させる為の呼び水となつて光の道を形作っていく。

《アスタリスクス ヴァルキュリア》
「《* * * 翼戦神》!!」

雲を割り、風を纏いその姿を現したのは——『ネイティブ』に伝わる民族衣装を象つた金属装甲を纏いし、威光放つ巨大な天使だった。

《アスタリスクス ヴァルキュリア》
《* * * 翼戦神》

☆10 / 地属性 / 天使族・効果 / ATK 2800 / DEF 3000

「あ、アスタリスクスだあ?!? んなカテゴリ、聞いたことねえぞ!!」

非難するように取り巻きが叫ぶが、待っていましたとばかりにコーパルが即座に答えた。

『はいはい、一応違法行為の可能性もありましたので、私が即座に確認しましたが——非常に珍しいカテゴリのようですけど、過去の決闘記録にも『* * *』と名の付くカードが数度使用された形跡がありました。セーフもセーフ、疑つてどうもすいません、という感じですよ……』
「……てことは、そいつは超レアカードってワケか……?!?」

取り巻きの目の色が見る見るうちに変化していく。

何故こんなガキが。ベルにも分かる程、そんな心境が表情に滲み出ていた。

「わたしは更に手札から魔法カード発動、《戦士の生還》!! その効果でわたしは墓地から《マジック・ストライカー》を手札に加えます!!」
翼戦神《ヴァルキュリア》召喚の為にリリースされたストライカーが再び手札に舞い戻る。

「い、今更そんなモンスターを戻して何を……」

「こうするんですよ!! ヴァルキュリアの効果が発動!! 1ターンに1度、自分の手札か場のモンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備します!!」

ベルがディスクの魔法・罨ゾーンに《マジック・ストライカー》を置くと、ARヴィジョン上のヴァルキュリアに魔法杖が装備された。「そしてヴァルキュリアの攻撃力は、この効果で装備されているモンスターの数×600ポイント上がります!! これでヴァルキュリアの攻撃力は3400!!」

「だ、だが!! いくら攻撃力を上げてもこのターンで俺のライフは削りきれねえ!! 次のターンでモンスター破壊のカードを引けば——」
「次のターンには回しません!! ヴァルキュリアの更なる効果、装備されているモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得ます!!」

「何イ!？」

☆10に相応しい圧倒的な攻撃力。悠然と杖を向け光を背にするその姿に、取り巻きは言葉にならない言葉を呻き漏らす他無かった。「バトル!! ヴァルキュリアでダイレクトアタック……ブレイヴ・ブロウ!!」

魔法杖から放たれる魔力を纏いながら、ヴァルキュリアがビートルを、甲虫装甲騎士を飛び越え——取り巻きに巨大な魔法球を浴びせかける。

「う……うあああああ!!?」

取り巻き LP3400↓0

情けなく裏返った取り巻きの悲鳴とライフが尽きたブザーの音が、コーパルの宣言よりも早く決闘の終了を告げた。

『勝者、^{ウィナー}ユーリ・ベルガモットお!!』

勝った。

ベルはしばらく間を置いてから、ようやく目の前の事実を受け入れることが出来た。

入れた覚えの無いレアカードの『乱入』あつてこそその勝利ではあつたが、それでもこの場を乗り切れた事実は変わり無い。

デュエル中は終始冷静の装いだっただベルだが、その実情は未だ熱く脈を打つ心臓が十分に物語っている。それでも的確なプレイングを維持できたのは、先程の『連敗経験』が良い方向に働いたからだろう。「……………っ!! そうだ、ユウさんは……………!?!」

呆けている場合ではなかった。自分の他にもう1人、更に格上の相手と戦っている男がいたのだ。

弾かれるように後ろを振り向くと——拍手を送るクラドの横に、腕を組んで相変わらずの無表情を浮かべたユウの姿があった。

「……………あれ?」

「ブラボー!! カッコよかったぜーメイドちゃん!!」

「ど、どうも……………というかユウさんはいつから?」

「……………丁度、お前が見慣れないカードを出した辺りからだ。早めに片が着いたから顔を出したのだが」

「どうやら、ミスターポーカーフェイスには要らぬ心配だったらしい。」

「それにしても。そんなカードどこで手に入れたんだ?」

「それが、わたしもよく分からなくて……………いつの間にかデッキに」

デッキの枚数を数えてみると、全部で41枚あった。40枚丁度で組まれていたベルの練習用デッキにヴァルキュリアが紛れ込んだのは明白だ。

「ま、考えられる可能性とすりゃあ……………あの爺さんが『間違サーピスい』でデッキに仕込んでくれたのかもしれないねーな?」

「儲けモンだな、と気楽に笑うクラド。」

「へろへろと肩の力が抜けていくのを感じながら、ベルが取り巻きの方へ向き直ると——。」

『えー、ではでは。敗者となった決闘旅団の皆さんには——』

『アンティールとして、勝者に全財産を譲り渡して頂きます』

「審判員機構の2人に寄られ、たじろぐ男達の姿があった。」

「じ、冗談じゃねえ!! あんな馬鹿げたレアカード、端から相手になるか!! インチキだ!!」

『……………先の決闘に不正行為は見受けられませんでした。その申請は受

け付けられません』

『そうですよー。約束は約束ですから、すべこべ言わずに。パーっと
払っちゃって下さいな?』

「と、とにかく!! 今の決闘は無効だ!! もう一度再戦を——」

『破滅のコーパルちゃんストリーム!!』

「ぐばばばばば!!」

謎の液体が入った注射器を取り出し、反撃の隙も与えぬままリー
ダーの男に投与するコーパル必殺のストリーム攻撃が炸裂する。

仮想現実の存在である筈の彼女の攻撃を受けたリーダーの男はバ
タリと倒れ込むと、口から泡を吹いて気絶してしまった。

「り、リーダー!?!」

『ダイニダア!!』

「あばばばばば!!」

立て続けにストリーム攻撃を受けたのは、ベルと対戦した取り巻き
の男だ。

『さて、と……他に異議のある方は?』

十数人居た男達は皆、無言で首を横に振る。

そして自分達のデツキを投げて寄越すと、横たわる2人の男を見捨
てて一目散に逃げ出していった。

『ふむ。あの決闘旅団の方々、ホントに全財産が『カードだけ』だった
みたいですねー』

「…………、これが審判員機構の力…………」

あつという間の出来事に目を丸くしているベルを尻目に、クラドは
いそいそとカードの回収に走っていた。落ちていたデツキのみなら
ず、気絶した2人の腰元からも遠慮なくカードを抜き取っていく。

「へへ、こりやまた儲けモンだなく♪」

「クラドさん!! そんな泥棒みたいな…………!!」

ベルが責め立てると、クラドは人差し指を立てて言葉を返した。

「こうなることを覚悟で、奴らは俺らに襲い掛かってきたんだ。
あんなもん
アンカーまで使ってた? それに俺らが負けてたら、立場は逆だった
んだぜ?」

「そうかもしれないですけど!!」

『『ごう』なりたくないから。だからデュエルを始めたんだろメイドちゃんは? なら早めに気持ち切り替えといた方がいいぜ? この世界で強くなるってのは『ごういう』ことだ』

言いながら、クラドがホルダーごとデッキを1つ投げて寄越した。顔の近くまで迫ったからか、ベルは反射的にそれを受け取ってしま

う。
「コイツのはメイドちゃんが持つてな。自分が勝ち取ったもんだ、身の危険と引き換えにな?」

デッキトップに置かれていたのは《セイバー・ビートル》。あの取り巻き男のデッキだ。

「……でも」

言い淀むベルを尻目に、クラドは戦利品に素早く目を通していく。どこか釈然としない後味の悪さを飲み込んで、ベルはこれ以上の言及を止めた。クラドの言葉もデュエルが支配するこの世界では決定的外れではないのだろう。

勝たなければ一方的に搾取されるだけ。そんな世界の『掟』は誰よりも痛感していた筈だ。

「えつと……とりあえずゴメンナサイ!!」

ぶん、と風切り音をなびかせて、ベルは全力で意識の無い相手に頭を下げた。

初めての勝利を飾った対戦相手のデッキは、今や自分の手の中にある。『強くなる』ことの重みを感じながら、ベルは決意を新たにしていた。だった。

*
*

「……ああ、手筈通り『あのカード』は彼女の手に移ったよ」

露天の店主が、路地裏の暗闇に向かって言葉を投げた。

返事は無い。しかし店主はニヤリと歪んだ笑顔を見せて『会話』を続けた。

「さて、約束の品を渡してくれや」

暗闇が吐き出したのは1枚のカード。

ソレを受け取った店主は歓喜の色を滲ませ……ふと、怪訝な表情を浮かべた。

「……おい、そりゃあ一体どういう——」

瞬間。店主の身体は路地裏の暗がりと同化するかの如く、悲鳴すらもカードに飲み込まれ霧散した。

ぼつり、と店主の足元『だった』場所にカードが舞い落ちる。

カードはすぐに闇の中から伸ばされた手に回収され、その全貌は分からなかったが、唯一判別できたのはカード名称の一部だった。

——アスタリックス* *それが店主を飲み込んだカードの名前だ。

第3話 粉碎、玉砕、大失態

強制賭けデュエルをした補給都市を出てから一日半。渓谷エリアを抜け次の目的地へ向かう道中に見つけた河川で、一行は休憩をとることにした。先を急ぐ旅ではあるが、適度な憩いは必要だ。

「へ……」

比較的澄んだ水だったので、ベルは衣類の洗濯も兼ねて水浴びを提案した。男性陣2名が快く見張り番を買って出してくれたおかげで、ベルは安心して水浴びを済ませることが出来た、のだが。

「つくしゅ!!」

まだ暖かい季節とはいえ、川で水浴びは少しばかり無理があったかと、ベルは鼻を嚙りながら考えた。

「うう……」

予想外な水温の低さにぶるぶると身体を震わせ、今は衣類の洗濯を始めている。ろくな着替えが無かったのでクラドから借りた大きめのTシャツ1枚という格好でいるのだが。

(……まあ、ハダカでいるよりは全然いいや)

ネタで買った土産物だから返さなくていいぜー、と快く貸してくれたクラドに感謝しつつ。《ブラック・マジシャン・ガール》の胴部分がプリントされたソレを見てみると、やはり何か馬鹿にされているんじゃないかという疑念も湧いてくる。

そうこう考えているうちに、洗濯は無事に終了。近場の岩に張ったロープに衣類を下げて、ベルはひとまず息をついた。

「さて、と」

手ごろな岩にちょこんと腰掛けて、ベルが取り出したのはデッキホルダーだ。

僅かな時間を見つけてはデッキを眺めていることが多くなった辺り、ベルも着実に『デュエル脳』へ傾いてきたのだろう。

「……アスタリクス、かぁ」

いつの間にか紛れ込んでいた不思議なカードを眺め、ぼんやりと考える。

《―* *―翼戦神》。クラウドに調べて貰ったものの、非常にレアなカテゴリーに属するカードだということ以外は何も分からず終いだっただ。

モンスター効果も、最上級モンスターという扱い難さを考慮すれば飛び抜けて強力という訳でも無い。名称の変更や効果のコピーなどから『玄人向けのコンボカード』とユウは評価を下したが、基本戦術すらままならないベルが扱うには難しい。結局は宝の持ち腐れ、どんなレアカードも使われなければ意味は無い。

むしろベルのデツキ強化に貢献したのは、賭け品として勝ち取った【昆虫族】デツキの面々だった。ベルのデツキと同じく地属性主軸だった彼の昆虫族デツキには、相性が良いカードが多く積まれていたのだ。

ともあれ、依然ベルのデツキは纏まりの無い【寄せ集め】であることに変わりはない。種族やカテゴリーで統一されたパワーデツキの前には、到底成す術もないだろう。

「……カードか、それともお洋服か」

むう、とブラマジガールTシャツに視線を落としながら、ベルは溜め息をついた。

（でも、超レアカードっていう位なんだから、もつとこう……）

ドバーン、ズバーン。

LPは0、どうもありがとうございました。

——そんな感じのカードじゃないのかなあ、とユウの《裁きの龍》を思い出しながら小首を傾げた。

あれぞ必殺のエースカードの姿。カテゴリーで固められたユウの【ライトロード】デツキは、統一感もあつてとてもカッコ良い。知識の付いた今だからこそ余計にそう感じてしまうが、強力なデツキを構築するには高額なレアカードが何枚も必要になってくるらしい。

極端な例では、とある強力なカテゴリーデツキに3枚入れなければならぬ『必須カード』が1枚ウン十万円で取引されている、などというトンデモナイ話まである。今のベルにカテゴリーデツキを構築するなど、到底無理な話だ。

(超レアカードも、やっぱり1枚だけじゃなあ……)

身勝手な落胆にカードの精霊達が憤慨したのだろうか。

突然の谷風がビュウと勢い良く吹き抜けた。ベルの手から、カード数枚を攫って。

「ぎゃー!? カードがー!!」

はらはらと舞い飛ぶ幾枚のカード達。

慌てて追いつがるも、吹き飛ばされたカードは見事に川ポチャしてしまった。

ゆつくりとした流れに乗って、しかし見る見るうちに下流へ流されていく。

「だっ……あーもう!!」

迷っている暇など無い。ベルはブラマジガールTシャツを勢いよく脱ぎ捨てると、ばしやばしやと川の中に身を投じた。

あまりの冷たさに目を瞑ったのも一瞬、グツと覚悟を決めたベルはそれこそアクア・ジェットでも装備されたかのようにすると泳ぎ回り、吹き飛ばされたカード達を回収していく。

が、残りの1枚がどうにも見つからない。もしやと思い、意を決して水中へ身体を潜らせ、目を開くと――あった。翼戦^{問題}神^児発見だ。

(見つけた!)

素早く泳いでカードを掴み、耐え切れないといった様子で水面に顔を出す。

「はあ、はあ……せ、せつかく暖まってきたところだったのに……!」

震える身体を必死で押さえ込み、岸まで辿り着く。

川からその身を引き上げ、ふと顔を上げたところではたと気が付く。

(……あれ?)

干した衣類にしては大きな、2つの影。

前髪から滴る水滴でぼやける視界を必死に凝らして、その姿を確認すると。

「――あ」

片や、両手で顔を覆い。

片や、相変わらずのポーカーフェイスが小首を傾げてじつとベルを見据えていた。

「……何がどうしたんだ、お前は？」

悲鳴を聞いて駆けつけたのだろう、見張り番の男2人がそこにいた。

《威嚇する咆哮》

通常罨

このターン相手は攻撃宣言をすることができない。

「すいません！ 急に大声上げたりして！」

「え？ 何だつて？ 割とマジで何も聞こえないんだが……ずっとキーンっていつてる」

生気のない目で乾いた笑いを漏らすクラドに、頬を真っ赤に染めたベルがひたすらに頭を下げる。そんな様子を、ユウは耳かきを突っ込みながらただ黙って眺めていた。

薄手の衣類はすぐに乾いたので、ベルは半袖Tシャツに短パンというラフな格好に着替えている。上はブラマジガールTシャツのままなのだが。

「はは、なーんてな。謝るのはむしろ無遠慮に押し掛けたこっちの方だぜ？ 気にすることはねーよ」

「……うう、すいません」

相変わらずの飄々とした対応に心救われるベル。未だ耳かきを操りながら不思議そうに首を傾げているユウに関しては、鼓膜的な意味で若干の不安が残るのだが……。

「さて。残りの洗濯物が乾くまで少し時間があるし、次に立ち寄る街についてでも話しておこうかな？」

取り出されたのはいつもの通り、詳細な街の見取り図だ。

「名を『マガイア』。そこを流れてるの川の源流になってる、大きな湖が街のシンボルだ。この辺りじゃ珍しく『豊富な水源』を抱えているってコトで、その大きさは中央部の大都市並み。ま、『水源保護』に躍起になり過ぎて少々閉鎖的なのが厄介だが……」

湖を中心として円形に渦を巻くように複雑化していく街の見取りは、まるで蝸牛かたつむりの殻のようだ。山間の辺鄙な街に相応しくない、どこぞの要塞都市じみた堅苦しい印象を受ける。

「そんな『マガイア』での俺らの目的は、ずばり『決闘旅団バトル』の新規登録だ。『旅団』の新規登録が出来るデカイ組合ギルドがあるのは、シガマまでの道中じゃ『マガイア』しか無い」

シガマの大会出場に欠かせない条件は『決闘旅団』であること。新規登録には提出しなければならない書類や審査が多く、小さな町にある簡易的な組合では取り扱ってくれない場合がほとんどだ。

「大会の規定人数にはまだ足りないが、旅団として登録出来る最低人数はクリアしてるしな」

「最低人数？」

ベルが小首を傾げると、クラドは笑顔で答えた。

「そ。センサーと俺とメイドちゃん、3人だ」

「え？ あ、あの……わたしなんかメンバーに入ってしまったていいんですか？」

きよとんと目を丸くするベル。詳しい話は分からないが、当面の目的であるシガマの大会にはユウの大切な『探し物』らしきカードが賞品になってると聞いている。

そんな大事な大会に挑むメンバーに、自分のようなド素人を加えてもいいのだろうか。

「ん？ ああ、大丈夫ダイジョブ！ ここではあくまで『旅団』を登録する為のメンバーだからな。一度新規登録しちゃえば、人数の追加はDパッドからでも可能になる。だから実際大会に出て闘うことになるのは、この先でスカウトする連中になると思うぜ？ 俺だって大会参加なんて御免だよ」

手を振って否定するクラドに、思わず安堵の表情を向けるベル。

「なもんで、登録のチャンスはココしかないって訳だ。ただ、ここで少し問題がある」

「問題？」

苦々しい表情でクラドが告げると、ベルが怪訝そうに眉を寄せた。

「梅雨並みに鬱陶しい話なんだが……『旅団』の新規登録には、審査を受けて合格を貰わなきゃならない」

「審査、ですか」

「そ。具体的にはこんなことを審査される。『デュエルを悪用しないか』、『目的は何か』、『自分の身は自分で守れるか』」

最後の項目を告げたクラドが苦笑する。その意味をおぼろげながらに感じ取ったベルは、思わず目を丸くして尋ねた。

「もしかして……デュエルを？」

「ピンポン、大正解。メイドちゃんならよく知ってると思うが……旅団の資産を狙う他の旅団や犯罪組織は多い。旅団登録の管理をしている公的警護機関（セキュリティ）も手が回らなくなる程にな？ デュエルで実力を計るのも、自分達に掛かる火の粉くらい手前で払えってコトだろ」

ベルとしてはあまり思い出したく無かったが、かのA・O・J使いの旅団が頭に浮かんだ。デュエル悪用を禁じる審査を通過した筈の旅団が人々に害を及ぼす、というのも可笑しな話だ。

「セキュリティとしちや悪党予備軍を生み出さないように『振るい』を掛けてるつもりなんだろうが、振るいの網目を抜けて通るのは悪党の得意分野さ。それは現状を見れば一目瞭然だったのにな」

クラドが苦々しく呟くと、重苦しい口調のまま言葉を続けた。

「で、実は問題ってのはここからだ。登録後に作成される旅団用の『IDカード』ってのがあってな。簡単な個人情報はおろか審査時に使用したデッキ、さらに合格結果から向こうが勝手に決めた決闘者熟練度デュエリストレベルまで表示されちゃうスグレモノなんだそうだ」

溜め息をつきながら、やれやれといった様子で両掌を天に向けるクラド。

「元々、IDは『旅団として登録すれば組合から色々なサポートを受けられますよー』ってな入会特権を貰う為の証明書だったんだが……特権を悪用する連中が増えたからかな。『監視』の意味合いも込めて個人情報に記載されることになったんだ。情報は組合に登録してるヤツなら、誰でも回覧出来ちゃう。つまり自分はこういう名前で、どのくらいの実力があって、こんなカードを持っていますよーってアホみたいな看板担いで歩かなきゃならねえって訳だ」

「そ、そんなものが……」

ベルは、自分がそんな看板を背負う姿を想像した。実力はワイト級、所持するカードは超レアカードの《――アスタリスクス*――》。

鴨が葱を持ってきたどこの話じゃない。鍋に出汁を入れて自分を捌いて登場した位の至れり尽くせり感である。

はぐれめたる、という単語もふと頭を過ぎったが。そんな名前のカードはあっただろうか。

「それは……何だか嫌ですね」

「だろ？　これから大会に出るってときに、そんな駄々漏れな情報になるべく晒したくないんだよ。もっとハッキリ言えば他の旅団に『ハツタリ』を掛けたい。余計な面倒は起こしたくないし、あまり目立たず、かつ速やかに『旅団』の新規登録を済ませる。これが今回の目標だ。つーわけで、何か良い案はないかなと」

「そう言われても……」

あまり出来の良くない頭を回転させてみるが、良案などサツパリ浮かんでこない。

と、これまで沈黙を守っていたユウがおもむろに発言した。

「……審査時のデュエルがIDに反映されるのなら、こうすればいい」
驚いた2人が顔を見合わせて、同時に聞き返す。

「と、いうと？」

ユウは無言で、持っていたデッキをぽんと放り投げたのだった。

「……高い壁だなあ」

水源都市『マガイア』、その名物たる『渦巻く巨壁』を見上げベルは感嘆の声を上げた。

街に到着した一行は、早速組合へ向かい手続きを行った。が、審査の開始は時間ごとに区切られ、いくつかの候補者を合同で審査すること、1時間弱ほど各自の自由時間となった。

とはいえ、ユウとクラドはそれぞれ情報収集と資金調達、ベルは買出しと結局は前回の街と変わらない役割で街を散策することになったのだが。

「そしてカードも、お洋服も高いっ！」

街の中心へと螺旋を巻く通りを歩き、軒を連ねる店を覗いてみるものの、流石は腐っても大都市。どの店もベルの『常識』よりも価格が一桁違う。

それだけ良い品物なのだろうが、貧乏村出身かつ居候たるベルの財布では到底手の届く代物ではない。コストを払う為にはサイフポイントが軽く5回程、0になるだろう。

「……はあ、今回は仕方ないか。次の街に寄ったときにも——」

店外のショーケース前に張り付き、未だご縁の無さそうな高額カードへ名残惜しそうに手を振って、ベルが離れようとしたときだった。

「ありがとうございます——！」

店員の威勢良い挨拶に送られて、店の中から小さな2つの影がひよこひよここと出てきたのだ。

「え」

ベルの感覚が正しければ、このカードショップで売られているカードはどれも高価で、生半可な決闘者では手の出しようが無い代物ばかりだ。

だというのに、両手にカードを抱えて出てきたのは、自分よりも2回り程小さな子供達。

信じ難いが、店員の反応から察するに『お買い物』をした後と見える。

「？ お姉ちゃん、何見てるのかな？」

「……かな？」

きよとん、と綺麗に動きを合わせて、双子なのだろうか——よく似た顔の2人は小首を傾げた。赤と青、それぞれ対になるような美しいオッドアイを除けば、殆ど見分けが付かない。中世的な顔立ちと声から、性別すら曖昧だ。

「あ、いやその……何でもナイデスヨ?」

気恥ずかしくなって後半がしどろもどろになりながら、ベルはぼつが悪そうに顔を逸らした。

「へえ、そう」

「そう……」

それでも、何故か彼らはじつとベルに視線を向けたまま離そうとしない。何か心の底を見られているようで、少し気味が悪い。

しばらくして、双子は無言で人差し指を向けると、抑揚の無い声で告げた。

「匂いはするのに。ヘンな人」

「ヘンな人……」

「!? え、ええ……?」

ガン、と面食らったベルはとっさに何か言い返そうとしたが、どうにも言葉に出ない。

「こら。探したよ、2人とも?」

と、そんな3人の間に割って入る白い影があった。

「……おや。これは失礼、愛らしい小麦肌のお嬢さん。何か彼らが粗相を?」

ベルに気が付き振り向いた白い影は、爽やかに微笑んでそう言った。

透き通るようなブロンドに丈の長い白いコート、加えて長身の甘いマスク。絵に書いたような美男子が、そこには居た。

「え!? ああ、いえ、あの」

「すいません、彼らも悪気があった訳では無いのです。そうだ、もし宜しければどうですか、ランチでも一緒に?」

さつと跪き、恭しく片手を差し伸べるその仕草はどこかの王族のように優雅で、男性に免疫の無いベルはただただ顔を真っ赤にして言葉

を詰まらせている。

「また、始まった」

「始まった……」

そんな様子を、双子達はジトリとした半眼で睨みつけていた。

「や、やいやあの、わたし別に何もされてませんし、わたしネイティブの女だし……って、そうじゃなくて！　これからちよつと用事があつて！　あまりゆっくりしてる時間は！」

「ご用事ですか？　ではそれが済んだらディナーを……」

「ああ、えつと……用事っていうのは旅団登録の審査で、いつ終わるか分かりませんから！」

「ああ、新規登録の審査ですか。アレなら長くても2時間もあれば終わりますよ？　ディナーの時間には十分、間に合います」

につこり、と極上のスマイルを浮かべるブロンドの男。

双子の粗相に対しての謝罪から、最早ただのナンパになっていることに気付いているのかいないのか、全く引き下がる様子が無い。

「うう……えつと、あの」

「お？　メイドちゃんどうした？　こんなところで？」

まさにデステニー・ドロウの様相。そんなタイミングでクラドが通り掛かった。

「クラドさあん！」

「なっ!?　おいおい何だよ急に!?!」

さつとクラドの腰に腕を回して背後に隠れ、盾のように押し出すべル。前回の仕返しだ。

「……おや。これはこれは。既に素敵なパートナーさんがいらつしやいましたか」

笑顔を崩すことなく告げるブロンドの男だったが、その背後では双子が指を指してクスクスと笑っていた。

「仕方ありませんね、ではまたの機会にお会いしましょう。素敵な香りのcoppiaさん？」

「は、はあ!?!」

双子を連れて、颯爽と立ち去っていくブロンドの男。

冷やかされて頬を染めるクラドを尻目に、ベルは腕を鼻につけてクンクンと鼻を鳴らしていた。

(……何か臭うのかなあ、わたし……)

「それでは、これより旅団登録審査を始めます」

やけに事務的な女性の声がベルに突き刺さる。

セキュリティの制服に身を包んだ、切れ長の瞳をした長い黒髪の女性。ユウのポーカーフェイスとは違う、この無機質で擦り切れたような冷たい印象の前には、かの審判員機構ジャッジアプリの方がいくらか人間味を帯びていたようにすら思える。

「はい、よろしく願います」

へこ、と頭を下げるベルの他に、審査を受ける者は見当たらない。

旅団の新規登録志願者は、ある程度の数で纏めて一斉に審査が行われる。が、男女別々の部屋に分かれて行う形式の為、唯一の女性決闘者だったベルは審査員と1対1で部屋に閉じ込められることになってしまった。

「所持品の検査をします。デツキとディスクをその装置に」

人間味の薄い審査員に早くも嫌悪感を抱くベルだったが、言われた通りにテーブル型のスキャン装置に『決闘者の剣と盾』を置く。

ヴン、と鈍い起動音が聞こえたかと思うと、装置は虹色の光を放ちながらスキャンを始めた。

「ボディチェックを始めます。失礼」

スキャンが完了するまでの間に済ませるのだろうか。ベルは両腕を上げて大人しく従った。

危険物、と言つても色々なものがある。直接人を傷つけるような武器類は勿論のことだが、今やそんなモノよりもよっぽど強い力を持つデュエル、それに対する『干渉手段』がもっぱらの対象だ。

例えば。使用を禁止されている強力なカードを使用可能に出来る違法のデータチップや、デュエル機具のシステム自体を麻痺させるよ

うなウイルスが入ったメモリ等だ。かさばる凶器などよりよつぽど隠しやすく、脅威となる。

探知機のようなもので全身を探られ反応が無いと分かると、今度は審査員が手探りでボディチェックを始めた。手早く、ぽんぽんとベルのボディラインを探っていく。

「……………」

と。審査員の手が止まり、じつと『ある一点』に視線が留まった。

「な、何か——」

ベルが言い掛ける間もない程、審査員の行動は早く、唐突だった。

「失礼」

ベルの胸元に女性の細指が掛かる。

胸元の大きく開いたメイド服は、『ずり下げる』という至極簡単な動作でいとも容易く防壁としての機能を失ってしまった。

「!？」

ぷるん、元気良く飛び出したベルのそれに、じつと審査員の目視チェックが入る。

果てはぐにぐに、としばし事務的な手つきで揉み弄ばれる始末。

「あ、あの」

「年齢の割りに随分と大きいのですね。失礼しました」

危険物が無いと分かると、年齢の割りに随分と大きなソレはすぐさま元の鞄に戻された。

「お疲れ様です、所持品の検査は終了しました。これより質疑審査の後、実技審査を始めます。デッキとディスクを装着したら、隣の部屋へ来てください」

微笑すら向けることなく、審査員の女性はカツカツとヒールの底を鳴らして部屋を後にした。

「……………」

今日は、よくお胸を見られる日だなあ。ベルは力無い表情を浮かべたまま思った。

水浴びをしておいて、やっぱり正解だったかもしれない。

**

当然ながら、ベルは質疑審査を何の問題も無く通過した。むしろ想像していたよりもずっと粗雑な審査に不安と憤りを感じたほどだ。

どこか通過儀礼のような、それこそ女性の冷たい印象そのままの事務的な雰囲気。好き勝手にデュエルモンスターズの『力』を振り回す、悪賊まがいな旅団が後を絶たない理由が肌身で理解出来た。

そんなベルの憤りを察しているのか、いないのか。審査員の女性が淡々とディスクを展開し、静かに構えて言った。

「それではこれより実技審査に移ります。準備は良いですか」

2人だけの決闘場にはベルの一方的な苛立ちが立ち込め、それを受ける審査員の方は効かせ過ぎた冷房のように居心地の悪い空気を振りまいている。

この場にクラドがいれば「気が立ってるなメイドちゃん？」などと冷やかしを入れたことだろう。

「……大丈夫です、いつでもどうぞ」

「分かりました。では始めましょう」

ベルのディスクが楕円からS字型へと可変し、デュエルモードへ移行する。

実技審査のデュエルに審判員機構は用いられない。代わりにデータを計測・集計する為の端子がディスクに接続されている。恐らく別の部屋にいる記録係の端末へと繋がっているのだろう。

姿の見えないもう1人の審査員へ向け、ベルは監視カメラを一瞥してから宣言した。

「^{デュエル}決闘!!」

ベル LP4000

手札・5

審査員 LP4000

手札・5

「先攻・後攻はどちらが決めて下さい」

声色を変えず、女性審査員が淡々と告げる。

随分余裕じゃないですか、と少しばかり頬を膨らませるベルだった

が、この実技審査に『心理フェイズ』はむしろマイナス点だ。喉まで出かけた言葉はぐつと飲み込んで、有難く先攻を頂くことにした。

「それじゃあ先攻で。ドローー！」

ベルの初期手札に、今後の命運を分ける最初の1枚が舞い込む。

その申し分の無いラインナップに思わず口元が緩むが、相手に気取られてはいけなとすぐさま引き締める。

「スタンバイからメイン、わたしは手札からこの子を通常召喚します！」

抑えきれない興奮を隠して、勢い良くカードを叩きつけてしまいそうになる右手を宥める。結果、妙に硬いが丁寧な仕草で、そのモンスターはディスクに置かれた。

「《ライトロード・マジシャン ライラ》を、攻撃表示！」

《ライトロード・マジシャン ライラ》

☆4 / 光属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 1700 / DEF 200

フィールドに舞い降りたのは光の騎士団、その一員たる魔術師の女性だ。

言うまでも無く、このデツキはユウの「ライトロード」そのものである。

——デツキを交換？

ユウの考えた策。それはベルとユウのデツキを交換し、決闘者とデツキの『バランス』を均一化するというものだった。

寄せ集め故に勝率の低いベルのデツキを高い技量を持つユウが使用し、回し方さえ覚えてしまえばある程度は戦える強力な「ライトロード」デツキをベルが使用する。

こうすることで旅団のデュエリストレベルを平均化し、目立たなくしてしまおうという作戦だ。他にも、《アスタリクス | * * |》が標的となった際に矛先がユウに向くという意図もある。

「続けてカードを1枚伏せて、ターンエンドです。何も無ければライラの効果が発動しますよ？」

「構いません、どうぞ」

軽くドヤ顔を決めて見せたベルだったが、審査員の女性は眉一つ動かさない。

「デッキから3枚、カードを墓地に送ります。《ライトロード・ウォリアー ガロス》《ソーラー・エクステンジ》《ライトロード・ビースト ウォルフ》……やった、ウォルフの効果が発動です！」

墓地へ送られた筈のウォルフが、凄まじい雄叫びと共にフィールドに舞い戻る。

《ライトロード・ビースト ウォルフ》

☆4 / 光属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 2100 / DEF 30

「ウォルフはデッキから墓地へ送られた時のみ特殊召喚が可能になります、これでターンエンドです！」

下級モンスターとしては高い、攻撃力2100のアタッカーと魔法・罨除去の専門家が並び立つ1ターン目。手札の内容も省みるに、どうやら引きも悪くないようだ。

「……『ライトロード』ですか。それでは私のターン。ドロー」

少し驚いたような声色を覗かせるも、女審査員は何事も無かったかのようにターンを進める。

「手札より魔法カード、《おろかな埋葬》を発動。デッキからモンスターカード《ヘルウェイ・パトロール》を墓地へ送ります」

手札を1枚消費してまでも墓地へ送りたいモンスター。ライトロードの使い方を教わった今のベルには、そのモンスターがどんな効果を持っているのか容易に想像がたった。

「墓地へ送った《ヘルウェイ・パトロール》の効果が発動。墓地に存在するこのカードを除外し、手札から攻撃力2000以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚します。特殊召喚するのは《堕天使マリー》、守備表示」

《堕天使マリー》

☆5 / 闇属性 / 悪魔族・効果 / ATK 1700 / DEF 120

☆5モンスターの登場に少しビクついたベルだったが、攻撃力は下

級モンスター並。恐れるに足らず。だとすれば本命は『次』だろう。「更に手札から通常召喚。チューナーモンスター《ヘル・セキュリティ》」

《ヘル・セキュリティ》

☆1／闇属性／悪魔族・チューナー・効果／ATK 100／DE
F 600

現れたのは頭上にパトライトを光らせる、二頭身程度の小悪魔だ。ステータスは貧弱。しかし真に恐れるべき点はこのカーが『チューナー』であること、そして隣に立つ《墮天使マリー》との合計レベルである。

白く輝く高額レアカード群、『シンクロモンスター』。その召喚に必要な条件が揃ってしまった。

「☆5の墮天使マリーに、☆1のヘル・セキュリティをチューニング」ヘル・セキュリティが緑光の輪となり、マリーがその輪を潜って変質を遂げる。

直後、光の柱が立ち上り激しく輝いた。

「合計レベル6、シンクロ召喚。《ゴヨウ・ガーディアン》」

光の柱を割いて現れたのは、まるで歌舞伎役者のような出で立ちの、紐付き十手を構えた大柄な男だった。

《ゴヨウ・ガーディアン》

☆6／地属性／戦士族・シンクロ・効果／ATK 2800／DE
F 2000

☆6のモンスターとしては破格のステータス。審査員……すなわちセキュリティの人間のみが使用を許可された、一般の決闘では使用禁止となっている強力なシンクロモンスターがその姿を現した。

普段のベルならここで素っ頓狂な声を上げていただろうが、今だけは違う。

ユウから預かった頼もしい騎士団達と一緒に居てくれるおかげで、恐ろしいシンクロモンスターをもキツと見据えて対峙するだけの余裕がある。

「では、バトルフェイズ。ゴヨウ・ガーディアンでライラを攻撃」

ゴヨウ・ガーディアンが宙へ飛び上がり、紐付き十手をプロペラのように振り回し始めた。そんな攻撃モーションの最中、ベルはゴヨウの効果を確認していく。

(戦闘で破壊したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する、つて……つまり『逮捕』されちゃうってコト!?)

ベルの場に居るライトロードモンスターは、どちらも戦力として申し分ない。それがそのまま相手に奪われてしまおうとなれば厄介なところの上ない。

勢いづいた十手がライラに向けて投擲される。この攻撃が通れば、破壊されたライラが女審査員のフィールドに特殊召喚されてしまう。とどのつまり、出し惜しみをしている場合ではなかった。

「ここで！ えーつと……『だめーじすてつぷじ』に手札から《オネスト》の効果を発動します！」

《オネスト》

☆4 / 光属性 / 天使族・効果 / ATK 1100 / DEF 1900

ゴヨウの攻撃を受ける刹那。ライラの背後に虹色に輝く翼が出現し、瞬く間にその輝きを強めていく。

「《オネスト》は自分の光属性モンスターが戦闘を行うとき、このカードを手札から墓地に送ることで発動！ 戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分の数値を、その光属性モンスターへ上乗せすることができません！」

翼から放たれた光は十手を押し返し、遂にはゴヨウ本体すら飲み込んで消滅させてしまった。

審査員 LP4000 ↓ 2300

実質的に言えば、どんなモンスターでも攻撃力を0にしてしまうのと同義。どんなに攻撃力の差が開きがあろうが、オネストの前では一瞬で無意味となる。光属性モンスターに攻撃する際には必ずこのカードの存在を警戒される程、強力かつメジャーな存在だ。

ただ、オネストの発動タイミングである『ダメージステップ』の概念は複雑で、クラウド達もベルには付け焼刃として「攻撃宣言を受けた

「らこう言ってから使え！」とだけ教えていただけだったりする。

(——よしっ！)

速攻魔法でも罨でもない、手札からの奇襲攻撃。その新鮮な感覚にベルは戸惑いつつも内心でガッツポーズを決めていた。

オネストもライトロードも強力かつ高価なカードに違いは無いが、使用禁止にまでされている強力なシンクロモンスターを打ち破ったことはベルにとって大きな自信となったようだ。

「……では、バトルフェイズを終了。カードを2枚伏せてターンを終了します」

にわかに燃え上がるベルとは対照的に、女審査員は大したリアクションも無いままターンエンドを宣言する。

師たるユウに良く似た、それでいて性質の全く異なる冷たいポーカーフェイス。そんな彼女の悔しがる顔を期待したベルは不満げに口を曲げたが、手札で出番を待つ《彼》の姿を確認し、すぐさまその口端を吊り上げた。

「ならわたしのターンです、ドロー！」

ベル LP4000

手札・3↓4 モンスター・2 魔／罨・1

審査員 LP2300

手札・1 モンスター・0 魔／罨・2

「っ!! よしよし来ました!! スタンバイからメイン、わたしは魔法カード《光の援軍》を発動! デッキから3枚カードを墓地に送り、その後レベル4以下のライトロードを手札に加えます!」

その効果によって墓地に落ちたのは、《ライトロード・ハンター ライコウ》《カードガンナー》《ライトロード・パラディン ジェイン》。念のために、と手札に《ライトロード・サモナー ルミナス》を加えてみるが、もはやベルにとってそれは蛇足に過ぎなかった。

「では行きますよ! わたしはライラの効果を発動! 守備表示に変更することで、場の魔法・罨カード1枚を破壊します! 審査員さんの、デッキ側に伏せられたカードを破壊!」

純白の魔道服を翻し、砲弾のような光の魔法を伏せカード目掛けて

放つライラ。

その効果に対して宣言は無く、女審査員の伏せた《奈落の落とし穴》は容易く破壊された。

「っ、またそのカードですか……」

前回のトラウマが蘇り思わず身震いするベルだったが、もう恐れることも無い。

今は強力無比な光の騎士団が一緒なのだ。落とし穴など恐れる心配は無い。

「更にわたしは、守備表示になったライラをリリースして、アドバンス召喚！ 《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》！」

かの龍にはいささか劣るものの、神々しい装飾を纏った白銀の上級ドラゴンが咆哮を上げる。

《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》

☆6 / 光属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 2000 / DEF 1600

墓地のライトロードモンスターの種類×300ポイント攻撃力を上げる効果を持つグラゴニスの攻撃力は、現在3200。一撃でライフを削り取らんと意気込む様子がARヴィジョンを通して伝わってくるようだ。

だが。

「罨カード発動、《激流葬》。モンスター召喚時、場のモンスター全てを破壊します」

突如巻き起こった嵐のような奔流に流され、消滅する2体のライトロード。

ことごとくの召喚反応罨。愛用者は多いと聞くが、ベルとしてはうんざりする程見飽きた光景だ。しかし、志半ばで墓地へ埋葬された彼らの魂は確実に『次』へと受け渡された。

「……おかげさまで揃いましたよ！ 墓地にライトロードが4種類以上！」

得意げに手札を返し、ベルが見せたのは——本家本元、光の騎士団その最終兵器。

「特殊召喚、《裁きの龍（ジャッジメント・ドラゴン）》っ!!」
立ち上る光の巨柱。それを割いて現れる白銀の神龍。

少女（ベル）が憧れ、希望を見たその巨影は、今や頼もしい僕しもへとなつて咆哮を上げた。

《裁きの龍》

☆8 / 光属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 3000 / DEF 2600

相手の手札は1枚、場はすつからかんだ。

最早その効果を使うまでも無い。

「行きます、裁きの龍でダイレクトアタック!!」

歓喜に震える指を差し向け、攻撃を宣言するベル。

命を受けた龍が、大顎を開いて光の粒子を収束させていく。

「……………」

光のブレスが降り注ぐ最中、女審査員は残された手札で何をするまでも無く、ただ静かに黙して敗北を受け入れた。

審査員 LP2300↓0

興奮のあまり、呼吸を荒げて肩を振るわせるベルは気が付かなかった。

結局のところ、このデュエルで彼女に一度も『泡』を吹かせていないということ。

* *

「メイドちゃん、上手く切り抜けたみたいだな？」

「……………そうだな」

組合の待合室にて。クラドとユウは設置されたモニターを見守りながら、そんなやり取りをしていた。

殺風景な白い待合室には、いくつかのテーブルやソファアーに加え、実技審査中の様子を映すモニターが2つ、それしか無い。

既に審査を終えて結果待ちの者、ユウとクラドのように審査の順番待ちをしている者……そのどちらも手持ち無沙汰のようで、暇潰しにモニターを眺めるか仲間内で卓上デュエルをしているか、という状況

だ。

「ん〜？ センサーってばアレか？ 思ったよりメイドちゃんが自分のデツキを使いこなせてたから妬いてんのか？」

「馬鹿を言え。あいつの成長に感心することはあれ、妬むことは無い」
いつもながら抑揚の無い声で返すユウ。その手はせわしなく、デツキのチェックに勤しんでいる。無論、その手にあるのはベルの寄せ集めデツキだ。

「そうかそうかく、そいつは失礼……でもアレだな、本当に驚いたよ。たった数時間のレクチャーで基本的な動きは完全にマスターしやがった」

「ああ。まあデツキの動き自体は単調だからな……問題はその後だ」

ユウの発言に、クラドが苦笑する。

「おいおい、その後って……とりあえず今回は実技審査をあのデツキで通過することが目的だろ？ 応用戦術なんて、今はまだ身に付ける必要はねーよ」

「……そうだろうか」

「そうだよ、審査が終わればデツキは元の持ち主に返る。後はレアカードに釣られてのこのこ寄ってくる連中をセンサーがブツ飛ばすだけだろ？ あの【ライトロード】でさっ？」

「……………」

どうにも引っ掛かる表情——といっても普段と変わらぬポーカーフェイスだが——を見せるユウに、クラドは咳払いを一つ払って、仕切り直しとばかりに立ち上がった。

「よっしゃ、そろそろ俺らの番だ！ ここで落ちたらカツコ悪いぞ、頑張ろうぜセンサー？」

「……………ああ、そうだな」

ユウ達の呼び出し番号が待合室に響いたのは、そのすぐ後のことだった。

ぽつん、と待合室のソファに座って、ベルは落ち着き無く周囲を眺めていた。

ユウ達一行のように、大会出場の為に急遽登録をしに来たのだろう。皆男性で、メイド服姿の小さな決闘者にちらちらと気掛かりな目線を送っている。

ベルにはまだ知る由も無いが、つい先程までモニター上で「ライトロード」を振り回す様子がライブ中継されていたのだ。注目が集まっても仕方が無い。

(……う、目立つ)

早くユウ達と合流したいのだが、人数の多い男性登録者の実技審査は思ったより手間取っているらしい。2人はまだ、審査中なのだろうか。

と、周囲の談笑が一瞬静寂し、皆の目線が大きな2つのモニターに向いた。

「？」

何事、とベルもモニターに注目すると、それぞれ1人ずつ見知った顔が映し出されていた

(ユウさん、クラドさん?)

2人はセキュリティ制服の屈強な男性に向かい合い、デュエルディスプレイを構えている。その様子からして、丁度今から実技審査が始まるようだ。

声こそ聞こえないが、カードを引き、宣言しながらターンを進行していく2人。ユウのデッキは元々ベルのものなので、何をしているのかくらいは分かるのだが。

(そういうえば、クラドさんのデュエルって初めて見るなあ……)

実技指導担当はユウなので、練習ですら手合わせしたことはない。実戦は苦手だ、ということとで強制デュエルアンカーから逃げ回り、果てはベルを盾に使った彼だが、その実力は果たして。

「あっ」

クラドのモニターを見守っていたベルは、思わず声を上げてしまった。

彼の1ターン目に召還された《スクラップ・コング》が、何もされていなのに破壊され墓地に送られてしまったのだ。

一応、それは《スクラップ・コング》の持つ自身の破壊と引き替えに他の「スクラップ」モンスターを墓地からサルベージする立派な効果だったらしい。が、今は先攻1ターン目。回収するべきスクラップは居ない。情けなく苦笑を浮かべたクラドは、たははと後ろ頭を掻いた。

そんな彼の様子を見て、観戦していたギャラリイ達もどつと笑い声を上げた。

「クラドさん……」

複雑な気分で、ベルはその光景を見守った。

この審査はあくまで各個、決闘者としてのレベルを均一化させて通過することを目的としている。いくら実戦が苦手だとはいえ、これが^{ディーラー}売買人としての知識があるクラドの『全力』ではないだろう。

情けない道化を演じるクラド。その横のモニターではユウがベルの寄せ集めデッキを使つて淡々とデュエルを進めている。

《荒野の女戦士》でリクルート、リリース確保からの上級モンスター召還はベルのデッキでは上等手段だが……強力な禁止シンクロカードを相手に回してはいささか力不足だ。

結局、アドバンス召喚された《セイバー・ビートル》は無残にも、返しの相手ターンでシンクロ召喚された《ゴヨウ・ガーディアン》に破壊され、コントロールを奪取されてしまった。

「……彼ら、本当にこんな実力で『旅団』を作るつもりでいるのかしら？」

と。どこか冷淡な侮辱がベルの耳にピクリと届いた。

「え？」

驚いたベルが顔を向けると、意外な人物が傍に佇んでいた。

「デッキの構築錬度。プレイング。あの実力じゃ審査が通つても^{レベル}熟練度はせいぜいD。大会出場しても予選落ちが良い所でしょうね」

長い黒髪に切れ長の瞳。先程までベルの審査を担当していた女性

セセキュリティティだ。

ただ、彼女の紡ぐ言葉には以前と比べて、いくらか感情の色が灯っているように感じられた。

「あ、あの……？」

「全く。時間の無駄ね」

ふつつつとこみ上げてくる、妙に熱の籠った嫌悪の渦。

彼ら本来の実力なら、デツキなら。

自分の未熟をカバーしようとしなければ、もつと鮮やかに勝利を納めていた筈なのに。2人が謂れの無い悪評を受けている。

それはベルにとってとても見過ごせないし、許せないことだった。

「……お2人は強いですよ。わたしなんかより、よっぽど」

「？ ああ、あなた彼らと同じ旅団だったわね。年下だからって卑下すること無いんじゃない？ 【ライトロード】使ってる分、あなたの方が実力は上なんだし」

その【ライトロード】は元々ユウのデツキだと主張しそうになったが、ここでデツキ交換作戦が露呈すれば2人の気遣いが水泡と化してしまう。

いちいちが気に障る女の言葉にぐっと耐えて、ベルは言葉を選びながら言い返した。

「デツキが、弱いとか強いとか。そういうことじゃないと思いますけど」

「いいえ。デツキ構築は決闘者の腕を計る、最も簡単で分かり易い指標よ。審査をするまでもなく、あんなデツキを使っているようでは実力も底が知れているわ」

違う。2人は強い。

行き詰った自分に星^{ひかり}を示してくれたユウ。

何も知らない自分にカードの知識を教えてください。クラド。

「彼らは、弱いわ」展開^{リンク}

何も知らない目の前の彼女に、彼らを否定する権利など無い。

2人の顔が脳裏に浮かんだ刹那、ベルの中で何かが破裂した。

「——取り消して下さい」

「何を？」

「最初から最後まで!! 全部です!!」

ベルの怒声に、待合室中の視線が集まる。

針のムシロのようなその中でも、火の付いたベルの瞳が揺らぐことは無かった。

「……私は事実を言ったまですよ」

「違います!! 何も知らないくせに勝手なことばかり言わないで下さい!!」

「知らなくても誰でも分かるわ、その程度は」

「分かるわけない!! いいから取り消して下さい!!」

「……そう、そんなに私に『事実』を曲げさせたいのなら」

冷たい瞳で見下ろして、女審査員がディスクを構える。

「もう一度。デュエルで勝って証明して貰えるかしら？」

にわかになぞわつく周囲。決闘者にとってこの『対話』は日常茶飯事の光景だが、今回はその対戦カードが少しばかり奇抜だ。

既に審査を終えた審査員と候補者が、互いに闘志を剥き出しにしてディスクを構えている。観客達の注目を引くのに、それは十分過ぎる理由だった。

「当然だけれど、私に訂正を強いるならあなたにも相応の対価は賭けて貰うわ。それでもこのデュエル受けるつもり？」

「……当然です。あなたが相手なら、何回だって全力で勝って見せます!!」

「賭け成立ね」

女審査員のDパッドが展開、変形。

ベルのディスクもS字型に可変し、2つのディスクと遠きユートレリア・レイ『白き文明』の大陸より発信されるARARデーターがリンクする。

『——『決闘申請』、確認。仮想戦場、AR展開完了』

どこか事務的で殺風景だった待合室の光景は一変。『白き文明』に実在する、大型河川の対岸を繋ぐ吊り橋の上に観客共々招待される。

『審判員機構、起動——』

機械音声の後に現れたのは、割とテンション高めな赤髪の審判員。

『良かれと思ってフアンサービス、美少女審査員コーパルちゃん只今参上〜♪』

緊迫した空気の中、場違いな水着姿で登場したコーパル。当人もしばらくして剣呑な空気を読み取る——訳も無く、いつもの調子でデュエルの進行を始めた。

『さてさて、今回の対戦カードは……』

「審判員機構。アンテイルールの適用をお願いするわ」

『あ、はいはい。双方合意はお済みですか〜?』

コーパルの問いかけに対し、女審査員がちらりと横目でベルを見やる。

ベルは険しい表情で女審査員を見据えたまま、黙って頷いた。

『了解です♪ それではお互いの賭け品を提示して下さいな?』

「私は自分の意見についての訂正・及び撤回。彼女には——そうね、公務執行妨害につきデツキの没収、及び審査合格の辞退……して貰いましょうか?」

あまりに無茶苦茶で重過ぎる対価に、思わず目を見開くベル。

今ならまだ取り消しも出来るわよ? と言わんばかりにニヤリと

笑みを浮かべる女審査員に、ベルの弱音は完全に吹き飛んだ。

「……構いません!!」

あからさまな挑発行為。もしクラド達がこの場にいたのなら、相手の狙いに気付きベルを嗜めることが出来たかもしれない。

だが今、彼らはモニターの中でそれぞれの戦いを繰り広げている最中だ。ストッパー不在で暴発したベルは、感情を煽られるがままに突き進んでしまう。

「以上よ。後の設定は基本設定のまままで構わないわ」

『承りました♪ それではハーフライフ4000でのスタートでデュエルを開始します、準備は宜しいですか〜?』

キツと真っ直ぐに女審査員を見据えたまま、ベルはデツキをセツトした。

——大丈夫、このデツキと一緒にならどんな相手にだって勝てる。ましてこんな女性ひとに負ける訳が、道理が無い。

「デュエル
決闘!!」

ベル LP4000

手札・5

審査員 LP4000

手札・5

先の審査と全く同じ構図でデュエルが開始される。だが今回ベルに掛かる『重み』は比喩物にならないほど肥大化していた。

そいつ、とコーパルが掛け声と共に投げた賽の目が示したのは、ベルが4で女審査員が6。

「私の先攻、カードをドロ。モンスターをセット。バックにカードを2枚伏せてターンエンド」

やはり手堅い布陣で先攻1ターン目を終える女審査員。セキユリテイ所属の癖、なのだろうか。

前回と同じく召喚反応型の罠だと読んだベルは、あからさまに眉を寄せて女審査員を睨みつける。

「わたしのターンです、カードをドロー！」

ドロしたカードは《ライトロード・ハンター ライコウ》。リバー時にフィールド上のカードを1枚破壊し、デッキの上から3枚のカードを墓地に送れる万能カードだ。

リバー効果なら『召喚』のタイミングが無い為、相手の仕掛けた召喚反応罠を潜り抜けて破壊することが出来る。

ベルは確信した。このデュエルも、やっぱりユウさんのデッキが力を貸してくれている。負けるコトなんてありえない、と。

「スタンバイからメイン、わたしはモンスターをセットして、ターンエンドです！」

「……そう。なら私のターン、ドロ」

女審査員はちらりと手札に目を落とすと、躊躇い無くそのカードをディスクに差し込んだ。

「私は手札から魔法カード《抹殺の使徒》を発動。裏側守備表示でセットされたモンスターを破壊し、ゲームから除外する」

「っ!?!」

フィールドには2体の裏側守備モンスター。だが当然餌食となつたのはベルのフィールドにいる《ライトロード・ハンター ライコウ》だ。

抹殺の使徒たる美貌の騎士。その剣はリバース効果を発動させる隙無く、セット状態のままライコウを葬った。

「更に。《抹殺の使徒》は破壊したモンスターがリバース効果モンスターだった場合、お互いのデッキに存在する同名モンスターを全てゲームから除外するわ」

「!? そんな……」

ベルのデッキから自動的に排出される、もう1枚のライコウ。

墓地に送られるべきライトロードの種類が減る、という危険性をおぼろげながらに理解しつつ、ベルは残りのライコウを除外ゾーンへ送った。

「私のデッキにライコウは居ないわ。続けてセットしていた《異次元の偵察機》を反転召喚。更に手札から《異次元の生還者》を通常召喚」

《異次元の偵察機》

☆2 / 闇属性 / 機械族・効果 / ATK 800 / DEF 1200

《異次元の生還者》

☆4 / 闇属性 / 戦士族・効果 / ATK 1800 / DEF 200

目玉のような小型の機械兵器と、機械化した半身を隠すように布を羽織った男が並び立つ。この布陣をクラド達が見ればすかさず警鐘を鳴らしていたところだろうが、ベルはまだその危機に気が付いていない。

「バトル。2体のモンスターでダイレクトアタック」

「うあっ……!?」

ベル LP4000→1400

『おっと、鮮やかなダイレクトアタックがベル選手に直撃!!』

コーパルのアナウンスが響き渡る中、流星にベルも感じ取っていた。

何かがおかしい。先程のデッキとは違う、不気味な雰囲気漂っていることに。

「私はこれで、ターンエンド」

ベル LP1400

手札・5

審査員 LP4000

手札・2 モンスター・2 魔／罨・2

「っ、わたしのターン、ドロー!!」

今更怖気づく訳にもいかない。今はデッキを信じて闘うだけだ。

そんな気迫に答えるように、ドローしたのは「ライトロード」きつてのエンジンカード。

「よしっ、スタンバイからメイン！ わたしは手札から魔法カード《ソーラー・エクステンジ》を——」

「その瞬間。発動にチェーンさせて貰うわ」

ベルの発動した《ソーラー・エクステンジ》に、鎖が巻きつくエフェクトが掛かる。それに反応するかのようには、女審査員の場に伏せられていたカードがゆっくりと立ち上がる。

「え……!?!」

「永続罨カード発動、《マクロコスモス》」

永続。つまり破壊されない限り効果が続く罨カード。

続けて宣言されたカードの効果に、ベルは思わず耳を疑った。

「このカードが存在する限り。墓地へ送られるカードは例外なくゲームから除外されるわ」

「っ!?!」

つまり。

「さあ、次はあなたの番。《ソーラー・エクステンジ》の効果を処理して貰えるかしら?」

ライトロードを捨て、デッキからカードを2枚ドローし、その後デッキから2枚墓地に送る。本来であれば墓地にライトロードを溜め込み、裁きの龍を呼び込む為の行為。

しかし《マクロコスモス》をチェーンされ、先に発動されてしまった今。ドロー効果こそ生きたものの、墓地へ送られるカードは全てゲームから除外されることになる。

一旦発動されたカードの効果を、止めることは出来ない。

「……っ、わたしは《ライトロード・ビースト ウォルフ》を捨てて、効果を処理します……」

ドロローしたカードは《ライトロード・パラディン ジェイン》《ネック ロ・ガードナー》。

そして墓地へ送られたのは《ライトロード・サモナー ルミナス》《ライトロード・エンジェル ケルビム》。

発動コストとして捨てられたウォルフも含め、墓地へ送られていれば裁きの龍の召喚条件が満たされていたのだが……後続のカードに力を与えるべき光の騎士団達は、マクロコスモスの生み出した闇^{除外ゾーン}の底へと沈んでいった。

「さて。次はどうするのかしら？」

ここまでされて、ベルはようやく理解した。彼女の使うデッキが、かつてユウと対峙した「A・O・J」同様『弱点』となるデッキであることを。

『あらあら、これは厳しい状況ですね。ベル選手の「ライトロード」においてはまさに天敵となるカードが発動されてしまいました！』

嫌な汗が全身から噴出す。

このデュエルだけは、絶対負ける訳にはいかないのに。

「……わたしは、手札からジェインを攻撃表示で召喚します！」

《ライトロード・パラディン ジェイン》

☆4 / 光属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 1800 / DEF 1200

絶望的な状況の中、単身フィールドに降り立つ白銀の騎士。

どんな状況でも、諦めなければ必ず希望に届く。それはユウから教わった最初の心得。

だから、このデュエルでも必ず届かせる。届かせて見せる。

「バトルです！ 《異次元の生還者》にジェインで攻撃！」

攻撃力は互角。しかしジェインの持つ効果により、攻撃力は300ポイント上昇する。

一閃、光の剣戟が半身機械の戦士を斬り伏せた。

審査員 LP4000↓3700

もう1枚の伏せカードが発動しなかったことに、ベルの緊張が少しばかり緩む。

だが、まだ油断は出来ない。相手の場にモンスターが1体残っているということは、返しのターンで強力なモンスターを召喚される可能性が高いのだ。

アドバンスなのか、シンクロなのか。とにかく自身に響く警鐘に従って、ベルは手札から虎の子を発動させることにした。

「メイン2、わたしは魔法カード《一時休戦》を発動！ お互いにカードを1枚ドロウして、次のターンのエンドフェイズまでお互いが受けるダメージは0になります！」

ダメージを与えられないデメリットを踏み倒す、このメインフェイズ2での発動は既に講義を受けていた。相手にドロウを許してしまうものの、残り少ないライフを守るにはもうこの手しかない。

「なるほど、ね」

冷たい瞳をベルに向けながら、女審査員はカードをドロウする。ワントンポ遅れて、ベルもカードをドロウした。

(……よしっ!!)

ドロウしたカードは《ライトロード・マジシャン ライラ》。このカードがあれば、次のターンで《マクロコスモス》を破壊できる。

「わたしはこれで、ターンエンドです！」

「では。エンドフェイズに《異次元の生還者》の効果が発動」

女審査員の宣言と共に、マクロコスモスの闇から破壊された筈の生還者がフィールドへ降り立った。

「な、なんで!? 破壊されて、除外までされたのに……!!」

「勉強不足ね。異次元の生還者は自分フィールド上でゲームから除外された場合、そのエンドフェイズにフィールドへ特殊召喚されるのよ。ついでに言っておくけれど、《異次元の偵察機》もほぼ同様の効果を備えているわ」

つまり除外の環境下であれば、この2体のモンスターは何度でも蘇るということ。

考えてみればそうだ。この特殊な環境を自分から用意するのだから、相性の良いモンスターを採用するのは当然のことだ。

「では私のターン、ドロー。私は場の偵察機をリリース」

目玉のような小型機械が光の粒子となって消え去り、代わりに女審査員の手札から新たな僕（しもべ）が光臨する。

「アドバンス召喚、《邪帝ガイウス》！」

《邪帝ガイウス》

☆6 / 闇属性 / 悪魔族・効果 / ATK 2400 / DEF 1000

出現する黒き巨影。ファンタジー世界の魔王とも見違う禍々しいシルエットを震わせて、その凶悪な効果を解放した。

「ガイウスはアドバンス召喚成功時、フィールドのカード1枚を選択しゲームから除外する。選択するのは無論、あなたの場のジェインよ」

ジェインが足元に出現した黒い障気に飲まれ、闇の中へと引きずり込まれていく。

行き着く先は恐らく、他のライトロード達と同じだろう。

「バトル……と行きたいところだけど。《一時休戦》の効果でこのターンはダメージを与えられない。命拾いしたわね、ターンエンド」

女審査員のエンド宣言と共に、リリースされた偵察機が除外ゾーンの間より復帰する。結果。アドバンス召喚を行ったにも関わらず、彼女のフィールドのモンスターは減っていない。

「……わたし、は」

こんな相手に勝ち目など、希望など本当にあるのだろうか？

逆転の一手は手札には無い。次のドロワーで全てが決まる。

「あ……？」

デッキに掛けた手が、震えていた。

敗北の末に待っているのは、自分を救ってくれた恩人のデッキを奪われ、旅団申請の取り消される、恩を仇で返すような最悪の結末。

今更になって後悔の念が込み上げる。もっと冷静になるべきだったのだ。

例え自分の大好きな2人が、謂れの無い侮辱をされたとしても。

「っ……!!」

祈るように、カードを引く。

尊敬する師匠の、ユウが組んだこのデッキを信じて。

「――は」

膝から力が抜ける。顔から血の気が引いていく。

「裁きの、龍……?」

デッキは、ベルの願いに応えることは無かった。

「そん、な」

相手のフィールドに佇む3体のモンスターがグニヤリと歪んで見える。
チエックメイド

詰み。その事実がベルの瞳を真っ白に染め上げた。

「……ま、まだ。まだわたしはライラを召喚して、効果を……」

最後まで諦めない。ベルを支える1本の細い柱が、朦朧とする彼女を無意味に突き動かす。

そんな悪足掻きですら。冷淡な宣言が無慈悲に刈り取っていった。

「召喚時、罫カード《奈落の落とし穴》を発動。ライラを破壊しゲームから除外するわ」

ポキリ、と何かが折れる音がして。ベルは闇に飲み込まれていく最後の光を呆然と見送ることしか出来なかった。

「――、あ」

手札にはモンスターのみ。このターンで出来る行為は、もう何も無い。
い。

何も、出来ない。

「……ターンエンドかしら? 宣言をしてくれないと、このデュエルを終われないのだけど」

そんな言葉を聞いて、このまま黙っていようかとベルは思った。

そうすれば、負けることも無い。

「つて、メイドちゃん? 何やってんだ……?」

灰色に褪せた思考が、僅かに揺らいだ。

声の方向に顔を向けると、ギャラリーに混じってクラドとユウが不

思議そうにこちらを見ている。恐らく、審査を終えて待合室に戻ってきたのだろう。

「……………」

2人の顔を見た瞬間、ベルは激しい自己嫌悪に陥った。

このデュエルを挑んだ理由は何だったか。尊敬する2人を貶されたからだ。

彼らから教えを受けた自分が決闘者としての誇りを捨てたら、それは同じことではないのか？

「わたし、……。ターンエンド、です」

光の消えたベルの瞳に、僅かながらの火が灯る。

唇を噛み締めて、溢れそうになる涙を必死に堪えて、ベルはどうか宣言することが出来た。

「お、おいメイドちゃん？」

只ならぬベルの様子に何かを感じたのか、クラドが訝しげに眉を寄せる。

「…………ごめん、なさい。ユウさん、クラドさん。わたし——」

不安げなクラドの顔を見た瞬間。堪えきれなくなった涙が堰を切って溢れ出た。

「私のターン、ドロ——」

そんな様子を、女審査員は淡々と見届けて。

ベルが懸命に紡いだ言葉に躊躇い無く宣言を割り込ませた。「ガイウス、ダイレクトアタック」

邪帝の攻撃が、無防備に涙を流す少女へと叩き込まれた。

ベル L P 1 4 0 0 ↓ 0

『勝者（ウィナー）！ 藍湊峰（ラン・ソウフォン）！』

第4話 光騎士団、反旗（ライトロード、ジャツジメント）

「メイドちゃん、これは無い」

「ええ!? 何ですか!? ライフポイントを2000も回復してくれるんですよ!」

ベルのデツキを見ていたクラドが、難しい顔で1枚のカードを引き抜いた。

「うーん……デュエルモンスターズってのはな、基本的に強力なモンスターをいかに展開するかを競う側面があるんだよ。手札を効率よく使って、相手よりも速く、多くモンスターを召喚する。そうすることで、相手のライフも相対的に多く削り取ることが出来るって訳だ」
「だ、だからこそライフ回復のカードは必要なんじゃないんですか?」

ベルの疑問に、クラドは「仮にな?」と話を切り返した。

「メイドちゃんのターン。相手の場に攻撃力2500のモンスターが2体、一方自分のフィールドはガラ空きで手札は0。ライフは2600……こんな状況で起死回生のドローを狙ったとする」

「あ、あまり考えたくない状況ですね……」

「まあまあ。んで、ドローしてきたのがこのカードだとする。メイドちゃんはライフを2000回復して4600になったが……次のターンで受けるダメージは合計5000だよな? もし、このカードの代わりに《死者蘇生》なんかを入れていたら、少なくともモンスターを守備で出して耐え凌ぐことが出来たかも知れない」

そんな高価な死者蘇生なんて持ってませんよ、とばかりに口を尖らせたベルだったが、クラドは苦笑いして講義を続けた。

「つまりデュエルの基本はこうだ。『自分のライフより相手のライフを、ライフよりもフィールドを。フィールドよりも手札のカードを』。この優先順位は知っておいて損は無いと思うぜ?」

「……はい、分かりました」

澁々、ベルはクラドの言葉に従うことにした。

泥臭い戦士や巨大昆虫が集結したベルのデッキでは数少ない可愛い系のカードであったため、その落胆はどうしても隠せない。

「つー訳で、このカードも必要ないな？」

再び容赦なく引き抜かれるカードに、ベルはまたも食い下がって講義した。

「え!?! で、でも! 一度に1000ポイントのダメージって結構強くないですか!?!」

「あんなメイドちゃん、俺の話聞いてたか？」

.....

.....

.....

夢は、人の記憶の整理時間なのだという。

つい昨日の出来事だったが、ベルにとっては遠い昔の思い出のように感じられた。

「.....あ」

あれからどれくらい時間が経ったのだろう。

薄暗いキャンピングカーの2階寝室で目を覚ましたベルに、激しい嫌悪感が押し掛かる。

何の挽回もしようとせず、償うこともせず。2人の優しさに甘えて惰眠に耽った自分。

「.....わたし」

どうしようもなく、呆れてしまう。

ユウに預けた己の力^{デッキ}は、まだ返して貰ってすらいない。

ライトロードのデッキを信じて闘ったものの、結果は見るも無残な惨敗。あれだけの完成度を誇るデッキを使っても負けるようでは、きつと――。

「さいてー、だなあ.....」

デッキどころか自分自身すら信じられなくなっていることに、ベルはようやく気が付いた。

「いいですか。藍湊峰ラン・ソウフオンというセキュリティ職員は存在しません」

「はあ!? マジかよこっちはデツキ盗られてんだぞもう少し真面目に……」

通信先のぶつきらぼうな受付係の顔は、一方的に切断された回線の闇へと消えた。

「だっ……!?!? あークソ、コレだから〇〇の××は……!!」

クラドはDパッドをソファに投げつけると、『お国の仕事に従事する人達に対するとても口にする事なんて出来ない凄惨な悪口』を吐き捨ててどっかりと腰を下ろした。

ごたごたの忙しさから宿も取れず、ひとまず今夜は街の外に止めたキャンピングカーの中で過ごすことになったのだが。

「まさか、セキュリティに化けた悪党が紛れてたなんてな……」

陰鬱な溜め息を吐き出し、クラドは暗く目を伏せる。

舌を巻くほどに鮮やかな『彼女』の犯行……どうやって組合の目を欺いたのかは分からないが、実技審査担当のセキュリティとして紛れ込んだ『彼女』は、めばしい獲物——今回は「ライトロード」を持つベルに狙いを定めた。

適当な挑発で焚きつけて賭け決闘アンティに引きずり出し。2度目となるデュエルでは当然、獲物のメタとなるデツキを使用する。有無も言わず瞬殺し、審判員機構の名の下に速やかに賭け品を頂戴。

もちろん直後にクラドらも追い縋ったが、再戦の申し込みには応じず取り付く島も無かった。それはそうだが、目的の品が手に入れば優先すべきは正体がバレる前に、どこへなり『ドロン』することなのだから。

唯一の手掛かりは、実名登録が義務付けられている審判員機構に読み上げられた『藍湊峰』という名前のみ。特有のニューアンスから『忘却の青』アトランタ・ブルーの出身であることは分かるが、それだけでは検索ワードが広過ぎる。

「ちくしょー……どうすつかなあ……」

頭脳担当クラドも、今回ばかりは焦燥が隠せない。良策など浮かぶ

筈も無く、落ち着きなくキャンピングカーの中をうろつくだけだ。

焦り慌てるクラドとは対照的に、ミスターポーカーフェイスは相も変わらずテーブルにカードを広げてデツキの調整を行っていた。

「あー、センセーよお。あんまし言いたかないんだが、こういうときくらいデツキいじりは止めねーか？」

痺れを切らしたクラドが注意をかけても、ユウは黙ってデツキを回すのみ。

「それ、メイドちゃんから預かったまんまのデツキだろ？ 俺に頼んでカードを注ぎ足す訳でもなく、一体何してんだよ？」

「……………」

何をどうやっても反応の無いユウに、クラドは思わず泣きたくなつた。

大事なデツキを盗られて彼も少なからず気分を悪くしているのだろうか？

「……………はあ、メイドちゃんも2階に上がったまま降りてこないしなあ……………」

ちらり、と無用心に掛けられたままの梯子に視線を投げる。

審査の結果こそ『藍湊峰』というイレギュラーの乱入により再審査となったが、あまりに酷い敗北を経験し、ひどく落ち込んだ様子のベルは夕食も食べずに今尚寝室へ閉じこもったきりだ。

責任を感じることは無い、と懸命にフォローしたつもりではあったが、当人が頑なに塞ぎ込んでしまったため『暖簾に腕押し』にしかならなかったようだ。

「仕方ない、まずはアツチの『先生』に頼るかね」

今はとにかく出来ることをしようと、クラドは運転席に向かいDパッドを端末へと差し込んだ。自分まで我を忘れてしまったのは、早くも旅団瓦解の危機だ。

「検索ワードは『藍湊峰』と……………」

インターネットに接続し情報を収集する。誰にでも出来るシンプルな方法だが、今回のように広く浅く探し回るならベストアンサーと言えるだろう。

が、一番最初にヒットしたサイトを見て、クラドは思わず頭を抱えた。

「だっ……サイバー流鉄人料理人・藍湊峰だあ!」

トップ画面には中華鍋とおたまを掲げた、ドヤ顔のちよび髭中年男性の姿があった。『忘却の青』では有名な決闘料理人タレントとして名を馳せているようだが、その容姿はクラドの探している彼女とは似ても似つかない。

「クソ、有名人と同名同名なのかよ!? あの姉ちゃんどこまで厄介な……」

カチカチとDパッドを操作してネットの波を潜り抜けていくが、どこも話題は決闘料理人の方ばかりでクラドの探しているような情報は引き出されない。

「検索ワードを追加、女・賭け決闘被害! これでどうよ!」

こうなればやるしかない。情報命のカード売買人のプライドを掛けて、彼女の正体を必ず掴んでやる。

が、検出されたのは鉄人料理人のスキャンダル問題と、出演した番組内で行われた決闘大会において『ヤラセ』が発覚したという、どうでもいい記事のみ。

「ッ!!」

どこまでも被る、鉄人料理人と華麗なる女詐欺師の検索ワード。

思わずDパッドの液晶画面を叩き割りそうになったが、ベルの悲しげな表情が脳裏を過ぎり、さっと血の気が頭から引いていく。

「……落ち着けよ、俺。ここが踏ん張りどころだろ?」

一際長い溜め息をついた後、クラドは姿勢を正して再び画面に向き直った。

今夜は星も見えない曇り空。

ついさつき日が暮れたばかりだというのに、夜はあつという間に更けていく。

「——ええ。こつちも無事、ひと仕事終えたところよ。しばらくは生活も安定しそう」

朝の柔らかな光が差すホテルの一室で、通信中のDパッドを片手に『藍湊峰』は優雅に珈琲を口に含んだ。

灯台下暗し、とはこのことか。クラド陣営の大混乱など知らぬ存ぜぬと言わんばかりに、藍はマガイアの有名ホテルのスイートルームに宿をとっていた。

「え？ ……ふふ、お生憎様。もう次の『仕事』に目処は付いてるから」
そんな訳で今は、ルームサービスの朝食に舌鼓をうつの忙しい。故郷の『忘却の青』に良く似た、南国・島国風な部屋のテイストも気に入った様子だ。

「ええ、そうよ。次の仕事も……中々に面白そうなの」

ハンモックに身を預け、穏やかな風に吹かれながら。ブルーアイズ・マウンテンの高慢な香りに煽られ上機嫌で言葉を返すと、藍は傍らの丸テーブルに手を伸ばした。

テーブルに置かれていたのは何の変哲もないデツキホルダーだが、中に仕舞われているのは何を隠そうユウの【ライトロード】デツキだ。「当然。期待して待っていて頂戴？」

宝石か何かを愛でる様に、デツキホルダーを眺め微笑む。

「……くす。ええ、分かったわ。それじゃあまた」

柔和な笑顔を後に柵引かせながら、藍はそっとDパッドを閉じた。

「メイドちゃん！ 朝だぜ早く起きてくれよー!？」

フライパンをカンコンと鳴らしてクラドが騒ぎ立てるが、2階の寝室からは一向に人の動く気配は無い。

自炊など滅多にしないクラドが懸命に腕を奮って作った朝食らしきものは、テーブルの上で1人分だけがすっかりと冷め切っていた。「つたく……メイドちゃんめ、このクラドさんが乙女の部屋に無断で入れない紳士だと知っていて籠城するたあ、いい度胸じゃねーか！

もう怒ったぞー」

「……そんな姿で意気込まれても、迫力は無いな」

そんな姿——花柄のエプロンを装着した主夫姿のクラドを一瞥することすらなく、ユウは昨日と変わらず1人でベルのデッキを回しながらボソリと呟いた。

口端をヒクつかせ般若の形相でクラドが振り向くが、ユウは見向きもしない。

「あのなあ……そう思うならセンサーも少し協力してくれよ!?」

声を荒げたクラドが責め立てると、ユウはようやく観念したように両目を瞑った。

「……そうだな」

「お。ついに重い腰を上げたな?」

すつと無音で立ち上がると、ユウは静かにクラドの横を通り過ぎ、梯子に手を掛け足を掛けた。

「お、おいセンサー?」

クラドの不安をよそに、ミスターポーカーフェイスは何の躊躇いもなく2階寝室へと踏み込んだ。

「ちよ——!?!」

あまりに唐突で無遠慮な行動。

これでまたベルが着替え中か何かだったりしたら、騒ぎが起きて余計に事態がこじれる……などとクラドが頭を抱えていると。

「……もぬけの殻のようだが?」

ユウは寝室からひよつこりと顔を出し、首を傾げて言った。

「何だつて?」

言われて、クラドも寝室へと踏み込む。

綺麗に片付けられた寝室を見て、クラドは深刻なトーンで言葉を漏らした。

「まさか……家出か?」

家出、と言うには少し表現が違う気もするが、とにかくベルが昨夜のうちに車を抜け出したことは確かなようだ。

「せつかく人があの姉ちゃん尻尾を掴んだつてのに……どいつもコ

イツも勝手な……」

ガシガシと頭を掻きながらクラドが大きく溜め息をつく。と、先に部屋の中に入っていたユウが何かを見つけたらしく、ちよんちよんとクラドの肩を突いた。

「クラド」

「んだよセンサー？ 大体アンタがもう少し協力的になってくれたらこんなことには——」

「遺書が見つかった」

血の気が引いた顔で、クラドがソレを引つたくる。

しばらく文面に目を通して確認すると……呆れたような安堵したような、今日で何度目になるか分からない溜め息をついた。

「……何が遺書だよ、ただの書置きじゃねーか。つても……あまり良い文面じゃねーけどな」

ひらひらと、片手のメモ紙をひらつかせ、クラドは少し悲しげに目を伏せた。

——ライトロードのデツキは必ずお返しします。 ベル

少女特有の丸っこい文字で、少し皺の寄ったメモ紙にはそう書かれていた。

「再戦、しに行ったのか？」

「いや……あいつはコレの他にデツキを持ってない。それにあの女の居場所すら分かってないだろう」

ともすれば、『デツキを返す』手段は只一つ。

「……街のカードショップを風潰しに探すぞセンサー。今すぐ行こう、馬鹿な真似をされる前にな」

エプロンを脱ぎ捨てて、クラドが弾かれたように外へと飛び出していく。

途端、しんと静まり返る車内。ユウは腰のホルダーにデツキを一つ差し込むと、ワンテンポ遅れて後に続いたのだった。

裁きの龍、1枚100000円。

(……やっぱり高いな)

分かってはいたが、実際に目にしないと決意が揺らぎそうを確認しておきたかったのだ。

他のキーパーツカードも合わせると、一体幾ら掛かるのだろう。

(……どうしようかな)

時間は掛かるかもしれない。でもやるしかないのだ。

あの女性の居場所も分からない、分かったところでデツキを取り戻すだけの強さは無い。

そんな自分出来る今の『全力』は、何をしてでもお金を稼いで【ライトロード】デツキを元通りにして、ユウに返すことだ。

一度は暗い闇の世界に沈みかけた身。罪悪感も重なり、貞操を売ることに今更抵抗は沸かなかつた。いくら大都市とはいえ、ここは『未開拓の橙』ネイティブ・グラン。少し道を外れれば、裏稼業の人間などいくらでも見つかるだろう。

(……行こう)

ショーケースから離れたベルがゆっくりと背を向けると、

「おはようございますBoun giro no! またお会いしましたね素敵なお香りの嬢さん?」

眼前に色とりどりの花束が差し出され、ふわりと良い匂いが鼻をついた。

呆氣にとられたベルの目に飛び込んできたのは、昨日のブロンド男の甘い笑顔だった。

「あ、えつと……?」

「穏やかに晴れた素敵なお朝ですね。貴女の健康的な肌が良く映える」

「またも恭しく肩膝をつき、すつと花束を差し出すブロンド男。」

「先日は手ぶらで申し訳ありませんでした。これはその、せめてものお詫びです。どうぞ」

「あ、あの。困りますよ、そんなこと」

「おや? お気に召しませんでしたか? では仕方ありません、これからお時間はありますか? この先のホテルで美味しいモーニング

が頂けるんですが、ご一緒にどうですか？」

返事を聞くまでもない、といった様子でブロンド男はさつとベルの右手を取ると、腰に手を回して優雅にエスコートし始めた。

「いや、あの、わたしは……」

強引なブロンド男を振りほどこうとして、ベルは思わず吐き気を覚えた。

一瞬頭を過ぎった、最悪最低の自分の思考に、だ。

「……あの。1つ聞いてもいいですか」

「? ええ、何なりとどうぞ?」

爽やかに微笑むブロンド男の顔を、ベルはまともに見返すことも出来なかった。

「……欲しいデツキがあるんです。もしそれを頂けるなら、わたしをどうして貰っても構いません」

今自分がどんな顔をしているのか、ベルは分からなかった。

ただ、目の前のブロンド男は笑顔を崩さず真摯に見つめ返してくる。

「んー、成程。これは失念していました。決闘者の女性を口説くなら花より食事より、カードが一番ということですか」

からからと笑って。

ブロンド男はそつと腰に回した手を解き、一步ほどベルから距離をとった。

「……え?」

「駄目ですね。物憂げな貴女も、昨日の初心な貴女もとても魅力的でしたが。今の貴女は美しくない」

甘い笑顔を崩さず、ブロンド男は言葉を続ける。

「どんな優雅で可憐な花も、その足元にはしつかりと根を張って倒れまいと堪えているものです。だから美しい、恋焦がれる。ですが今の貴女は、他者に寄りかかり枯れるのを待つばかりの醜い野花だ」

腰を落とし、目線をベルに合わせて。ブロンド男は言い放った。

「またお会いしましょうArrivederci……決闘者たるもの、常に誇りを持って。貴女ならもつと、尊く輝けるはずだ」

一礼して、背を向けて去っていくブロンド男。ベルの手には強引に手渡された花束が1つ。

何か全てを見抜かれたような、不思議な感覚をベルは覚えた。昨日会ったばかりの優男にすら、今の自分の心は簡単に見透かされてしまうということだろうか。

情けなさや悔しさに涙が滲む。しかし、声を殺して咽び泣くベルの耳に飛び込んできたのは早くも標的を切り替えたらしいブロンド男のナンパ声。

「おお、Buon giorno! 黒髪の素敵なお嬢さん!」

黒髪、というワードにベルが思わず顔を上げる。

まさかと思っていたその相手が、夢か幻のようにぼやける視界に映り込んだ。

「あら、ご冗談が上手いのね? もしかして『文明の白』出身なのかしら?」

くすくす、と笑顔を浮かべるその女性は——雰囲気こそ違えど、間違なく昨日ベルを打ち負かしライトロードデッキを奪い去った『藍湊峰』その人だった。

「ジヨウダン? とんでもない、白く透き通った肌にしなやかなボディライン……一瞬、何かの芸術彫刻と見間違えてしまった程ですよ」

「その割には、目が合つてすぐ声を掛けてきたような気がするのだけど?」

シルク生地の子いスリムなドレスの上に、白のカーディガンを羽織った柔らかな装いはセキュリティ制服だったときの堅苦しい印象を180度反転させている。

本当に同一人物なのかと疑つてしまう程だ。というより、今やそのセキュリティに追われている身である筈の彼女が何故平然とこんな通りを歩いているのだろうか?

疑問は尽きないが、ベルは考えるよりも早く足早に藍の元へ歩み寄ると、無言で胸元を掴んだ。

「……あら。昨日振りねメイドのお嬢さん?」

「お願いです。デツキを返して下さい」

涙の混じった声でベルが声をひねり出す。

剣呑な空気を察したのか、ブロンド男は静かに三步、距離を空けた。

「それは出来ない相談ね。何なら、もう一度闘ってみる？」

「……………」

につこりと微笑んでデュエルディスクを構える藍に、ベルはただ俯いて言葉を詰まらせる。そんなベルの様子に、藍はどこか怪訝そうに眉を寄せた。

「…………あらら、昨日の威勢はどうしたのかしら？」

「わたしは、もうデュエルする資格なんてありません」

「そう。それなら諦めて貰える？ デュエルの勝敗はこの世界の全てを左右する、あなたも決闘者ならそれくらい分かるでしょう？」

「——お願いします!! わたしに出来ることなら、何でもしますから…………だから!!」

醜い野花だって良い。誇りなんて持てなくて良い。自分のことなど、どうなつても良い。

今はただあの人に、あの人達に掛けた迷惑を元に戻さなければならぬ。

その為なら、どんなことだって出来る。

「ま、待った、その必要は無いぜメイドちゃん」

息も切れ切れといった様子で現れたのは。

「クラド、さん…………？」

何歩か送られて、ミスターポーカーフェイスが涼しい顔で隣に並び立つ。

「…………ユウさん」

「あらあら。皆さんお揃いのようね？ 万事休す…………かな？」

ディスクを構えたまま、困ったように頬を掻く藍。しかしその表情に焦りの色は見受けられない。

「何だ何だ、姉ちゃん？ 昨日とちよつと雰囲気違うじゃねーの？」

「気にしないで、人は常に移り変わり行くものでしょう？」

くすくすと笑って見せる藍。笑顔など一欠も見せなかった昨日の

様子を知っているクラドとしては、少しばかり気味が悪い。

そんなやりとりを尻目に戸惑った様子のベルが呟く。

「2人とも、どうしてここに……？」

「バーカ、弟子の考えることなんざ師匠にとつちや筒抜けなんだよ。帰ったらお尻ペンペンの刑だからな？」

さて、と息を整えつつ、クラドは藍にしつかりと向き直った。

「姉ちゃん、俺らはアンタの尻尾を『何となく』だが掴んでいる。その上で尋ねるが……そのデッキを賭けて再戦する気はねーか？」

クラドがニヤリと口端を歪めて尋ねると一瞬目を丸くした藍だったが、すぐさま余裕たつぷりに言葉を返した。

「そう……相手はどちらかしら？」

藍の誘いを受けて、ユウが一步前へと踏み出す。

「あなたが？」

「いや——ベル、こっちを向け」

いつかと同じように。ユウはベルの元へと、デッキホルダーを弧を描くようにぽんと投げ渡した。

「え？」

「何を不思議そうな顔をしている。それはお前本来のデッキだろう？」

それでもう一度、闘うんじゃないのか」

「わたし、が……」

首を傾げるユウに、ベルは心中でそれは無理だと叫んだ。

自分の弱い心はとつくに砕けていて、もう一度デュエルで藍に挑むなど……。

「それは……あの……」

目を伏せ、沈黙が続いていると。

いつの間にか傍に歩み寄っていたユウは無言で、ベルからデッキホルダーを取り返した。

「闘う気が無いならそれでもいい。お前は所詮、そこまでの決闘者だったということだ」

返事を待つことなく、ユウはDパッドを展開するとベルのデッキをセツトした。

「……俺が相手をしよう。悪いがそれは元々俺のデッキだ、返して貰うぞ」

「構わないわ、でもそちらの賭け品は？」

「その売買人、クラウドが所有する商品を全てアンタに譲るそうだ」

クラウドはぐつと親指を立てて見せた。

「そう……分かったわ。賭け決闘成立ね」

お互いのデュエルディスクが連動し、共鳴していく。

『――『決闘申請』、確認。仮想戦場、展開完了』

騒ぎを聞きつけて集まった観客達を巻き込み、ARヴィジョンが決闘場に相応しい舞台へと招待する。

マガイアの街通りは、一瞬にしてステンドグラスの輝く礼拝堂へと変わった。

『審判員機構、起動――』

修道服をひらりと翻し降り立ったのは、物静かな方の赤髪審判員。

『ご機嫌麗しゅう皆様。今回の審判は私、ネフが勤めさせて頂きます』

神に祈りを捧げるように両手を組んで目を閉じるネフ。寡黙な彼女に神秘的な装いが、見事に様になっている。

思わぬ『眼福』にヒユウと口笛の拍手を送るクラウドとブロンド男を尻目に、ユウは極めて事務的な口調で告げた。

「アンテイルールの申請を要求する。こちらは所有レアカードの全譲渡。あちらは【ライトロード】デッキの譲渡となる。あとは基本設定からの変更は無い」

『承知致しました。アンテイルールの設定には両者の合意が必要となりますが？』

「私も構わないわ」

『では……設定を完了しました。アンテイ適用、ライフポイントはハーフ4000からのスタートで開始致します』

静かに、ネフが右手を天へと掲げる。

『デュエル
「決闘！」』

ユウ LP4000

手札・5

藍 LP4000

手札・5

ネフの振り投げたサイコロの目により、先攻・後攻が決定する。
「……先攻は俺か。カードをドロロー」

ちらり、とドロローカードに視線を落とし、ユウは迷い無く宣言していく。

「モンスターを1枚、伏せカードを1枚セットしてターンエンドする」
「なら私のターンね。ドロロー」

手札を眺め、くすりと妖艶に微笑む藍。その意味はすぐに分かった。

「手札から魔法カード発動、《光の援軍》」

驚愕の声を漏らしたのは、不安げにデュエルを見守っていたベルだった。

「え……？」

「つくそ、やっぱり使ってきやがったか。雰囲気変わってもあの姉ちゃん性格悪いな……」

「くすくす。聞こえてるわよ売買人さん？」

氷の微笑に、クラドは思わず背筋を伸ばす。

「さて。持ち主さんなら説明は不要ね？ 私はデッキからカードを3枚墓地に送り《ライトロード・サモナー ルミナス》を手札に加える」
墓地に送られたのは《ネクロ・ガードナー》《増援》《ライトロード・ビースト ウォルフ》の3枚。

「あら……これって結構良い『落ち』じゃない？ ひとまず、ウォルフの効果で墓地から自身を特殊召喚」

フィールドに舞い戻る気高い獣戦士。しかしその鋭い眼光は、元主人であるユウに向けられている。

「更に手札から通常召喚、《ライトロード・パラディン ジェイン》」

白銀の騎士が剣を構え、無慈悲にユウへと切っ先を向ける。光騎士団の誇る2体のアタッカーが並び立った。

「何も無ければこのままバトルフェイズ。まずはジェインから攻撃よ」

例の如く、攻撃力は300ポイント上昇しユウのセットモンスターへと容赦なく剣を突き立てる。カードが反転し、モンスターの姿が顕わになった。

「……セットモンスターは《荒野の女戦士》」

しばし鏖競合いを続けていた両剣士だったが、その攻撃力と守備力の差は歴然。か細い悲鳴と共に女戦士はその身を砕かれてしまった。「戦闘破壊されたことで、効果を発動。デッキから《荒野の女戦士》を攻撃表示で特殊召喚する」

「くすくす。お嬢ちゃんのお返し、つていうからどんなデッキで来るのか期待していたのだけど……まだそんなデッキを使っていたの？」小馬鹿にした微笑みを漏らす藍。つい昨日までのベルならここで憤慨したことだろうが、今はズキリと痛む胸を押さえ俯くことしか出来ない。

藍の問いかけに誰も答えないので、クラドが1つ咳払いをして打ち返した。

「だよなあ。普通なら【対次元】で組むか、ライ口読みでこっちも【次元】で行くかってトコだろうが……驚いたろ、ウチのセンサーのデッキチョイスは？」

「そうね。もしかして私、馬鹿にされてるのかしら？」

「いやいや？　んなことはねーよ、多分な」

掴めない雲の如く、クラドはヘラヘラと笑う。

真意が読めず眉を寄せる藍に、ユウがターンの進行を促した。

「……ウォルフの攻撃はまだ残っているようだが？」

「あら、ごめんなさい。ではウォルフで攻撃を続行するわ」

命令を聞き届けるや否や、一瞬にして己の間合いまで距離を詰める俊足の獣戦士。

その爪はしかし、硬直する女戦士に届くことはなかった。

「ならばリバース発動、罨カード《くず鉄のかかし》」

女戦士の身代わりとなり、ジャンクパーツで構成された不恰好なかしがウォルフの攻撃を受け止める。

「発動時、モンスター1体の攻撃を無効にし。魔法・罨ゾーンに再び

セットする」

ベルの寄せ集めデッキでは比較的扱いやすい攻撃妨害罟。破壊さえされなければ繰り返し使えることが強みだが——光騎士団ライトロードにはくず鉄を破壊する手段など幾らでも存在する。持って、あと2ターンだろう。

「面倒なカードね……まあいいわ。私はこのままエンドフェイズへ。ジェインの効果で、2枚のカードを墓地に送る」

白銀の騎士に導かれ、《カードガンナー》《ライトロード・アサシンライデン》の2枚が墓地へと送られた。

「……ユウさん、本当に勝つつもりなんですか？」

目を伏せたまま、ベルがそんな問いを投げかけた。拾ったのはクラドだ。

「当然。センサーが負けれると思って？」

「……分かりませんよ。だって、わたしのデッキだし——」

確かに、ユウ本来のデッキであれば勝利は確実だっただろう。

しかし今は、そのデッキが牙を剥き襲い掛かっているのだ。それ対して機能するにはベルの寄せ集めデッキではあまりにも力不足だ。

「たはは……『大切にします』なんて言葉を聞いたのが、もう遠い過去のようだけ……」

父、ついに娘にフラれるの巻。あまりにも早い反抗期に、クラドは思わず目頭を押さえてつうと一筋の涙を流した。

「ベル。お前は、自分のデッキを信じられないのか」

気が付けば、ユウが小首を傾げてベルに問いかけていた。

「……まあ、それは」

曖昧に言葉を濁すベルからさっと視線を外すと、ユウは再び眼前の敵へと向き直り言った。

「……俺は、お前のデッキを信じている。それが果たして正しいのか、この決闘が教えてくれるはずだ。俺のターン、ドロー」

じわじわと。『死刑宣告』が下されるその枚数まで揃いつつある藍の墓地を尻目に、ユウはやはり顔色一つ変えずにデュエルを続行する。

ユウ LP4000

手札・4↓5 モンスター・1 魔/罨・1

藍 LP4000

手札・5 モンスター・2 魔/罨・0

「……俺は手札から《電動刃虫》チエーンソー・インセクトを通常召喚」

《電動刃虫》

☆4 / 地属性 / 昆虫族・効果 / ATK 2400 / DEF 0
突然現れた、電動鋸を顎とした巨大昆虫。

その異形な姿が示す通り、攻撃力は☆4としては破格の2400。並みの上級モンスターなら簡単に葬れるほどだ。

だが、その過ぎた力の代償として備えた効果は――。

「バトルフェイズ。電動刃虫でウォルフを攻撃」

「ええ、攻撃は通すわ」

墓地の《ネクロ・ガードナー》は沈黙を守ったまま、電動鋸の無慈悲な一撃が獣戦士を葬った。

藍 LP4000↓3700

先制ダメージは見事にユウが制したが、しかし。

「……ダメージステップ終了時、忘れていないわよね？ 電動刃虫の効果発動。私はカードを1枚ドロウする」

そう。電動刃虫には、手札のアドバンテージが何よりも重要視されるデュエルモンスターズにおいて最も危険だとも言える、『相手にドロウをさせる』という恐ろしいデメリットがあるのだ。

得意げな藍を尻目に、ユウは黙って頷くとメインフェイズ2へと移行した。

「俺は荒野の女戦士を守備表示に変更し、カードを1枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロ……申し訳ないけれど、そんなデッキとタクティクスじゃ、仇討ちなんて到底不可能よ？ 手札から魔法カード発動、

《ソーラー・エクステンション》」

やつとのこととでウォルフを打ち倒したユウとは相反し、藍の操るライトロードはデッキの回転を更に強めていく。

「手札の《ライトロード・ウォリアー ガロス》を墓地に送り。デッキからカードを2枚ドロウし、2枚のカードを墓地へ送るわ」

墓地へ送られたのは《オネスト》《大嵐》の2枚。惜しいラインナツプに僅かな苦笑を浮かべるも、藍は攻撃の手を緩めない。

「それなら、手札から《ライトロード・サモナー ルミナス》を通常召喚し、効果を発動。手札の《ネクロ・ガードナー》を捨て、墓地より《ライトロード・アサシン ライデン》を特殊召喚するわ」

虚ろな瞳を覗かせる褐色肌の男が墓地の闇より姿を現す。

その眼光は暗殺者の名に相応しく、かつての主君をじっくりと見据えていた。

《ライトロード・アサシン ライデン》

☆4 / 光属性 / 戦士族・チューナー・効果 / ATK 1700 / DEF 1000

「さて。続けてライデンの効果を発動させて貰おうかしら？ デッキから2枚のカードを墓地へ送り、その中に「ライトロード」モンスターが含まれていればその数だけ攻撃力を200ポイントアップさせる」

ここで再び、カードが墓地へ送られる。《裁きの龍》《ライトロード・モンク エイリン》の2枚だ。

「これでライデンの攻撃力は1900……なのだけど。ここではあまり意味は無いわね」

大聖堂のステンドグラスを背に、藍は高らかに己の左腕を掲げた。「私は☆3のルミナスに、☆4チューナーのライデンをチューニング！」

アサシンが4つの光輪と化し、ルミナスの身体を包み込んでいく。

光の輪郭のみを残し、やがて召喚師は劇的な変質を遂げた。

「古の守り手、伝説の彼方より再来せん。シンクロ召喚、《ライトロード・アーク ミカエル》！」

《ライトロード・アーク ミカエル》

☆7 / 光属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 2600 / DEF 2

かの白鱗の龍に跨り、雄雄しく雄叫びを上げる屈強な黄金騎士。本来の持ち主であるユウがまだ見せたことが無かった、ライトロード第2の切り札がその姿を現した。

「シンクロ、召喚……」

ベルの口から、悲鳴にも似た何かが思わず漏れ出た。

デッキを渡された際に確認し、カードそのものは知っていたものの。いざ目の前に召喚されたソレは押し潰さんばかりのプレッシャーを放つ、文字通りの切り札であることが分かる。

勝てるわけが無い。寄せ集めデッキであんな強力なカード達に立ち向かうなど。

どれだけデッキを、カードを信じてても、力の差は絶対に覆らない。

「ミカエルの効果。1ターンに1度、ライフを1000払うことでフィールド上のカード1枚を選択しゲームから除外出来る。当然、私が狙うのはセットされた《くず鉄のかかし》」

ユウのフィールドには2枚の伏せカード。しかしどちらを狙えば良いのかなど既に筒抜けの状態だ。寸分の狂い無く指示されたセットカード目掛け、ミカエルの剣戟が光の刃となって強襲。くず鉄のかかしは切り刻まれ、次元の彼方へと消滅した。

「では、バトルを。まずはミカエルで電動刃虫を攻撃！」

「……………」

リバースカード発動の宣言は無い。

白鱗の龍が急降下、電動刃虫へ肉薄すると共にミカエルの大剣が豪快に切り裂いた。

ユウ LP4000↓3800

「電動刃虫の効果でカードをドロ―し、続けてバトル。ジエインで女戦士を攻撃！」

先程の焼き直しとなった戦場風景。女戦士の逆転はならず、またも切り伏せられてしまった。

「……女戦士の効果。デッキから《隼の騎士》を攻撃表示で特殊召喚する」

《隼の騎士》

☆3 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1000 / DEF 700
女戦士の救援に駆けつけたのは、もはや伝説の龍騎士を前にしては塵芥も同然の低レベルモンスター。それでも相手モンスターの追撃を受けることなく、このターンはフィールドに留まることは出来そうだが。

「私はカードを1枚伏せてターンエンド。エンドフェイズにミカエル・ジェインそれぞれの効果でカードを5枚、墓地へ送るわ」

伏せたカードは、墓地の光属性を回収する《光の召集》。

『裁き』や制限カードを含む5枚のカードが墓地へと送られてしまったが、ここまでお膳立てが出来ていればむしろ好都合だ。もはや気に留めることも無い。

「……俺のターン。カードをドロ、メインフェイズ」

ユウ LP3800

手札・3 ↓ 4 モンスター・1 魔 / 罠・1

藍 LP3700

手札・6 モンスター・2 魔 / 罠・1

ドロカードに目を通すものの、ユウは迷う素振りすら見せずにメインフェイズへと移行した。

「俺はフィールド魔法、《死皇帝の陵墓》を発動」

荘厳な大聖堂は突如として瓦解し、景色が一変。

土くれで出来た人型が無数に立ち並ぶ、薄気味の悪いフィールドが姿を現した。

「死皇帝の陵墓、効果発動。ライフポイントを2000支払い、手札の最上級モンスターをリリース無しで召喚する」

ユウ LP3800 ↓ 1800

大幅に減少したユウの魂^{ライフ}。その欠片に反応するかのようになり、土くれの人型が2体ユウのフィールドに立ち並ぶ。そして人形はアドバンス召喚時のリリースコストさながらに、光の粒子となって新たな魂を導く呼び水となる。

「――↑ * * ― 翼戦神、召喚」
アスタリスクス ヴァルキユリア

雲を割き、風を渦巻かせ。

土着信仰を象りし装甲天使が、穏やかな後光を背負って降臨した。

「……ようやくお出ましね。謎のレアカードさん？」

その姿を見た藍は感嘆も驚愕も無く、にやりと不敵な笑みを浮かべた。

「ヴァルクキュリア、効果発動。場の隼の騎士を装備し、その効果と名称を得る」

隼の騎士が光の粒子と化し、ヴァルクキュリアの掌中でその姿が再構成される。

翼を模した二振りの小剣。装備カードとなった騎士の魂は、見事な得物へと昇華した。

《――**――翼戦神》

ATK 2800 ↓ 3400

「バトル。ヴァルクキュリアでミカエルを攻撃する」

「くすくす。残念ね、私は――」

余裕の笑顔で手札に手を伸ばす藍。

しかしユウはそんな彼女を、声を上げて静止させた。

「慌てるな」

目を丸くした後、藍は怪訝に眉をひそめた。

「な、何を……？」

「まだ『その時』じゃないだろう。俺はヴァルクキュリアの『攻撃宣言時』にリバースカードを発動させて貰う」

ここぞとばかりに立ち上がった、ユウのリバースカードは。

「《和睦の使者》ですって？」

《和睦の使者》

通常罠

このターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは0になり、自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

効果は至ってシンプルな、駆け出し決闘者御用達の防御系罠カード。本来の役目は相手ターンの攻撃から自分のライフ及びモンスターを戦闘から守るためのもの。しかし、だ。

この盤面で、このデッキを相手に、今このタイミングで発動させるということは。

「……成程、やってくれるじゃない?」

手札の1枚に伸ばしかけた手を引つ込めて、藍は苦笑を浮かべた。あれだけの大量ドロウを行った後だ。『1枚は墓地に落ちた』が、もう1枚が手札に抱え込まれている可能性は、限りなく高い。

「さて、お待ちかねのダメージステップだが……どうする?」

ポーカーフェイスが僅かに口元を歪ませる。

彼が見通した藍の手札にあるべき1枚……《オネスト》のカードをぴたりと指差しながら。

「……ふふ、メイドのお嬢ちゃんがムキになった理由、今になってようやく分かったわ」

楽しそうに。本当に屈託無く楽しそうに笑う藍。

だが次の瞬間、その目に闘志を滾らせユウに向き直った。

「だけど私も負けてられない。残念だけどダメージステップはしばらくお預けよ!」

手札に伸ばされた細指は行き先を変え、墓地の中へ終着した。

『《和睦の使者》の発動にチェインして墓地より《ネクロ・ガードナー》の効果を発動、相手モンスターへの攻撃を1度だけ無効にする!』

ネクロ・ガードナーの幻影が、ヴァルキュリアの剣戟からミカエルを守り抜く。

だが、ユウは更なる宣言を言い放ち追撃を促す。

「ヴァルキュリアに装備された隼の騎士の効果を使用。バトルフェイズ中に2回の攻撃を可能とする。再びミカエルへ攻撃」

「まだよ、2枚目の《ネクロ・ガードナー》の効果を発動!」

斬って返す2度目の剣戟だったが、またも守護者の幻影に防がれる。まるで嵐のような戦神の攻撃から、ミカエルは辛くも生還した。

「……俺はこれで、ターンエンド」

思わずギャラリー達の口から漏れたのは、落胆か歓喜か。

「何とか凌いだわね……私のターン、ドロウ」

ミカエルが生き残った。その時点でヴァルキュリアの敗北は決定

する。

「まずはミカエルの効果発動、ヴァルキュリアをゲームから除外！」

藍 LP3700↓2700

双剣を手に威光を放つヴァルキュリアとて、ミカエルの除外効果には成す術も無い。光の剣戟の前に儂く消え去った。

「あなたのフィールドはガラ空き……バトルフェイズよ。まずはミカエルでダイレクトアタック！」

容赦の無い攻撃宣言。白鱗の龍と共に駆け、突進するミカエルの大剣がユウを貫く。

爆破の如く舞い飛ぶ粉塵が、敗北を決定付けた。

筈、だった。

「……すまないが、俺は手札からこいつの効果を発動させて貰った」

ミカエルが貫いたのは、ユウとは似ても似つかぬ不恰好なかかし。

『速攻のかかし』は、手札から墓地へ送ることでバトルフェイズを終了するモンスターカードだ。このままメインフェイズ2へ移行して貰う」

古の守り手に率いられながらも攻め切れぬ光騎士団。主に反旗を翻したが故の負い目、なのだろうか。

「しづといわね。私はこのまま、ターン——」

このままエンドフェイズを迎えれば、5枚のカードが墓地へと送られる。

残りのデツキ枚数はこれで7枚。

(……成程、そういうこと?)

浮き彫りとなる、底知れぬポーカーフフェイスが抱える勝利への布石。

(デツキアウト狙いね。十中八九、間違いなく)

ライトロードデツキは強力だが、弱点は多い。

1つは藍自身が披露した除外戦術。もう1つはその特有効果が故の『デツキ切れ』により引き起こされるルール上での敗北だ。

この弱点により、短期決戦を強いられるライトロードのカードパワーは高く設定されているのだが……そんな強豪モンスターを相手

にすることなく勝利出来る、この『抜け穴』を狙う決闘者は多い。

徹底した防御姿勢に、電動刃虫のドロロー効果。デッキの良回転に浮かれて気付くのが遅れてしまったと後悔する程だ。

(参ったわね、慣れないデッキで少しはしやぎ過ぎたみたい。ここは少し勿体無いけど……)

意を決し、藍が宣言する。

「前言撤回よ。私は伏せてあった罫カード、《光の召集》を発動。手札を全て墓地に送り、その枚数分だけ墓地から光属性モンスターを手札に加える」

オネストを含む7枚の手札が墓地へ送られ、回収されたのは——オネストと裁きの龍が共に2枚ずつ、更にルミナス・ライデン・エイリオンが並ぶ、凶悪無比なラインナップだった。

「既に墓地の「ライトロード」モンスターは4体以上、よって私は手札から《裁きの龍》を特殊召喚するわ」

現れる、決闘を終幕へと導く聖なる白龍。

しかし現在はバトルを終えたメインフェイズ2、敵対勢力に引導を渡すことは叶わない。

だがこれでいい、とばかりに藍は口端を吊り上げて宣言した。

「……私は、ここで裁きの龍の効果発動！ ライフポイント1000を支払い、フィールド上のこのカード以外のカードを全て破壊する！」

藍 LP2700↓1700

狂喜の沙汰とも呼べる、味方のモンスターのみを巻き込んだの全体破壊。裁きの放つ光の奔流に黙して飲み込まれる騎士団の面々、その散り様は儂くもあり気高かった。

確かに、場のライトロードが減ればデッキから墓地へ送られるカードは少なくなるが——これには別の狙いがあった。

「ここで破壊されたミカエルの効果を発動、墓地の「ライトロード」モンスターを任意の数だけデッキに戻し、戻した数×300のライフを回復する！」

デッキに戻されたライトロードは、ウォルフ・ルミナス・ジェイン・

ガロスの4体。抜け目無く墓地に4種類の「ライトロード」を残したまま、藍はデッキ切れ防止の策とライフの回復、その両方をやってのけたのだ。

藍 LP1700↓2900

「私はこれで、ターンエンド」

デッキから墓地へ送られる4枚のカード。しかしミカエルの犠牲によって、残りのデッキ枚数は12枚を保ったまま。ユウがどんな策を巡らせていたのかは分からないが、デッキ切れを狙っていたのなら計算は大いに狂った筈だ。更に言えば。

（今、手札にはもう1枚の裁きの龍にオネスト、ライトロードのモンスターが3種類。ライフも十分に回復出来た。彼がどう攻めてきても、次のターンを守りきるだけの蓄えはある筈……）

光の召集で集めた手札に目を落とし、藍はそんな思考を巡らせた。万全の布陣、改めて確認するまでも無い。しかし眼前のポーカーフェイスには、そんな自信を揺らがせる底知れぬ何かがあった。

彼が操るのは、デッキコンセプトすら定まっていない寄せ集めの雑多なデッキ。デッキとしてのパワーは取るに足らないほど貧弱だが、いつ何が飛び出してくるか分からない『予測不能』の恐怖がある。

熟練の決闘者になればなるほど、相手の思考を読み取りたがる。デッキの構成を把握しようとする。そう、藍は既に立派な『メタ』を張られていたのだ。

「俺のターン。カードをドロー」

ユウ LP1800

手札・1↓2 モンスター・0 魔/罨・0

藍 LP2900

手札・6 モンスター・1 魔/罨・0

果たして今、追い詰められているのはどちらなのか。

「手札から魔法カード《貪欲な壺》を発動。墓地のモンスターカードを5枚デッキへ戻し、2枚のカードをドローする」

ドローカードを確認したユウの目が、僅かに細まる。ソレの意味することは、すぐに分かった。

「……手札から装備魔法《自律行動ユニット》を発動。ライフを1500支払い、相手の墓地からモンスター1体を選択し攻撃表示で特殊召喚。その後このカードを装備する」

「この土壇場で、そんなカードを……」

ユウ LP1800↓300

掴み取った逆転の一手。代償は決して安くは無かったものの、その効果はかの制限カード《死者蘇生》に通ずるものがある。言うまでも無く、ベルが高価な《死者蘇生》に代用して投入したものである。

「選択するのは《ライトロード・アーク ミカエル》」

ユウのフィールドに、古の守り手が光臨した。

相對する龍と龍騎士。仕えるべき主は果たしてどちらなのか、互いに主張するかの如く吼え、唸る。

「更に手札から魔法カード《至高の木の実》スプレマシー・ベリーを発動。発動時に自分のライフが相手よりも下の場合、ライフを2000回復する」

ユウ LP300↓2300

「……ライフ回復カード？ 本当に読めないデッキね」

「ああ、そうだな。始めは俺も驚いた」

「え？」

怪訝に眉を寄せる藍に、ユウは淡々と答えた。

「何の意味も無くライフ回復カードを入れるのは、初心者にありがちな間違いだ。ライフよりも手札のアドバンテージを。俺とクラウドが何度も教えた筈なのだが、どうやら教えを破ってこっそり忍ばせていたらしい」

「いえ、そうじゃなくて……アナタ、そのデッキを調整しなかったの？
アナタの腕なら、もっとバランス良くデッキを組み直せた筈でしょう？」

「その必要は無い。これは奴の、ベルのデッキだ」

分からない、といった様子でますます複雑な表情を浮かべる藍に、ユウは僅かに頬を綻ばせながら言った。

「……不思議なことだが、デッキには『癖』がある。何となく分かるドロカードの傾向、1枚挿しにも関わらず頻繁に手札に舞い込むカー

ド。組んだ持ち主の性格が反映されるのか、はたまたカードに意思があるのか、それは定かじやないが——」

彼の無味乾燥な雰囲気からは想像も付かないような、御伽噺のような理論が次々と口から飛び出していく。それなのに何故か奇妙な説得力を持つているのは、決闘者なら何度か体験している経験だからというのもあるのだろう。

「そんな『癖』に合わせて調整されたデッキを、何も知らない俺が組み直せばきつと機嫌を損ねていた。そうなれば最早デュエルをすることで無いは無い。コイツの性格を把握するには多少時間が掛かったがな」

デッキを組み直さず、ただひたすらにデッキを回していたユウ。

それはベルのデッキの『癖』を、把握する為だったというのか。

「見た目に似合わずロマンチストなのね。デッキに意思があるとでも言うの?」

「ああ、そうかもしれないな。現に俺が否定したライフ回復のカードは、こうして俺の窮地を救ってくれた。《貪欲な壺》を使用すると《至高の木の実》を高確率でドローするという、このデッキの『癖』を信じた甲斐はあったと思う」

さらりと突拍子も無い理論を並べて、ユウはターンを続行する。

「ミカエルの効果を発動。ライフを1000払い、裁きの龍をゲームから除外する」

ユウ LP2300↓1300

激突する光のブレスと剣戟。ミカエルの聖剣が放つ剣戟は、その差400となる攻撃力の壁を凌駕して裁きの龍を次元の彼方へ葬った。

「バトルフェイズ。ミカエルでダイレクトアタック」

天駆ける龍騎士の一撃が麗しき黒髪の決闘者に下される。

「あぐつ……!?!」

藍 LP2900↓300

両者のライフが逆転。勝利の行方はこれで分からなくなった……
筈なのだが。

「俺はバックカードを1枚伏せて、ターンエンド。これで詰みだ」
チエックメイト

ユウから飛び出したのはまさかの、相手ターンを残したままの勝利宣言だった。

「……流石に格好付け過ぎじゃないかしら？ 確かに手札は筒抜けだけど、私が何をドローするかはまだ分からないでしよう？」

「いや。お前はこの状況を突破出来ない。俺の伏せをどうにかできればお前の勝ちだが——この状況で伏せカードを対処できるカードを引くことは無い。そのデッキの『癖』は良く知っている。俺は、俺のデッキを信じている」

迷いのない真っ直ぐな瞳。疑念や不安など一切感じられない。

ベルに希望の星を見せた、あのときのように。

「……ユウさんは、どうして」

「デッキを信じる、ってのは『神頼み』とは違うってコトさ」

半ば無意識に漏れ出たベルの呟きを、クラドが静かに遮る。

「神頼み……」

ベルは、昨日のデュエルを思い出した。

敗北の危機が迫ったとき、自分はデッキに何を願ったのか。

信じるとか諦めないとか。そんな言葉で表面を取り繕って、本当は何を求めたのか。

助けて。何とかして。

一方通行で、自分勝手な要求。

信頼などとは程遠い、醜く弱い感情。

「あら、随分な自信ね。私のターン、ドロー」

ユウにはつきりと断言され、カチンと表情を昂ぶらせる藍。

伏せを破壊するだけなら、狙い目はサイクロンかライラ。勢い良くカードを引き抜き、藍は不敵に微笑んだ。

「——へえ、確かにアナタの言う通りだったわ。ドローカードは《ライトロード・ビースト ウォルフ》」

どこからか安堵の息が漏れる。しかし。

「でも、何もこのドローで伏せカードを破壊する必要は無いわよね？

私はルミナスを通常召喚し、効果を発動！ 手札からウォルフを捨て、墓地の《ライトロード・アーチャー フェリス》を特殊召喚！」

麗しき半獣の弓兵が、ルミナスの描く魔法陣から颯爽と飛び出し弓を構えた。

《ライトロード・アーチャー フェリス》

☆4 / 光属性 / 獣戦士族・チューナー・効果 / ATK 1100 / DEF 2000

「私は☆3の魔法使い族・ルミナスと、☆4チューナー・フェリスをチューニング！」

藍の口から宣言されたのは、躊躇いのない怒涛のシンクロ連打。自身の効果を使われることなく即座に退場しなければならぬフェリスは主の命に口を尖らせるが、ルミナスに宥められ4つの緑光の環へと姿を変えた。

再び変質を遂げる召喚師。1000のライフコストを支払えない今、呼び出されたのは白き衣を纏った最上級魔術師だ。

「合計☆7、《アーカナイト・マジシャン》をシンクロ召喚！」

《アーカナイト・マジシャン》

☆7 / 光属性 / 魔法使い族・シンクロ・効果 / ATK 400 / DEF 1800

「アーカナイトマジシャンの効果。シンクロ召喚成功時に置かれた魔力カウンターを2つ取り除き、その数だけ相手フィールドのカードを破壊出来る！ ミカエルとその伏せカードを破壊させて貰うわ！」

これでユウの場合はがら空き、手札も、墓地発動のカードも無い。逆転の目なんて万が一にも有り得ない状況まで追い込める。

ライフを削り切るに足りない火力は、手札で眠る裁きの龍が十分に果たしてくれる。

白光のブレスがポーカーフェイスの命を刈り取る、そんな場面まで藍が思い浮かべたその刹那。

目の前のポーカーフェイスはそんな幻視^{ワイジョン}を打ち砕くかの如く、伏せカードを発動させたのだった。

「……中々のタクティクスだが、残念だ。俺の伏せカードは——」

——でも！ 一度に1000ポイントのダメージって結構強くないですか!?

「罨カード、《破壊指輪》」

《破壊指輪》

通常罨

自分フィールド上の表側表示モンスター1体を破壊し、お互いに1000ポイントダメージを受ける。

「っ!?! は、破壊指輪?!」

「俺はミカエルを破壊し、互いのライフに1000のダメージを与える」

ニカツ、と不敵な笑みを浮かべるミカエルの薬指には、爆弾付きの指輪が。

アーカナイトの放った魔術は見事に指輪ごとミカエルを破壊し――誘爆の余波が2人の決闘者を襲った。

藍 LP300↓0

ユウ LP1300↓300

「な……きやああっ!?!」

たった300の差。風前の灯のようなライフではあったが、勝利に変わりは無い。

ライトロードのもう1つの弱点。それは裁きの龍とミカエルという、エースカード達が効果を発揮する為に使用する膨大なライフポイント。

戦闘でダメージを与えることは難しくても、残り僅かとなったプレイヤーのライフを刈り取るだけなら、弱小カードと罵られるバーンカード1枚でも十分だったのだ。

相手と自分。どちらのデッキも知り尽くすことが出来たユウだからこそ狙えた、紙一重の勝機だった。

『ゲームエンド。勝者、ユウキリサキ』

ネフの宣言と共に、決闘の終了を告げるブザーが……と思いきや。今回のネフのコスチュームに合わせたのか、代わりにパイプオルガンの音色が鳴り渡った。

「……ユウさんが、勝った」

ベルは、仮想戦場が解除されていく様子を呆然と見守った。

「つたり前だろ？ センサーは自分で作ったデツキに負けるようなヤワな男じゃねーよ」

ニヤリとクラドが微笑み掛けると、ベルの瞳から一筋涙がこぼれた。

「のわ!? 何だ何だよどうしたメイドちゃん!? デツキも戻ってきたし、これで万事解決だろ?」

「……いえ。違うん、です。違って……」

デツキが無事に戻ってきた安堵ではない。

自分の不甲斐なさが悔しい訳でもない。

ただ。ただひたすらに謝りたかった。

「……ベル」

涙で滲む視界を上げる。

そこにはいつもと変わらないようで、少しだけ柔らかな表情を浮かべた師の姿があった。

「俺のデツキは取り返した。このデツキは俺にとってもう必要のないものだが……お前は どうする? こいつらの力を、まだ必要としているのか?」

差し出されたのは、不揃いな面子が寄せ集まった名前すら付けられない弱小デツキ。

でも彼らは、反旗を翻した光の騎士団に一喝を浴びせて、無事に帰ってきたのだ。

それだけの力を持った彼らを、信じられなかった。

どうしようもない後悔が、ベルの胸をきつく押し潰した。

「……ごめん、なさい……」

ぼろぼろと大粒の涙が零れ落ちる。

迷惑を掛けたユウ達に、そして自分が組み上げた最高の相棒に。

ごめんなさいは涙と同じだけ溢れたのだった。

「はい。約束の【ライトロード】のデツキよ。中身はしっかり確認して

頂戴？」

にこやかに微笑む藍からデッキを受け取ると、ユウは一通りカードに目を通し、静かに頷いた。

「……確かに受け取った。審判員機構、これで賭品の譲渡は終了だ」『了解しました。それではこれで、決闘を終了致します。お疲れ様でした』

ネフはすつと一礼すると、光の粒子となって消滅した。

同時に、興味本位で観戦していたギャラリー達も散り散りになって解散していく。

「さて、と……こつからは俺が相手だぜ姉ちゃん。アンタ一体何者だ？」

逃げる様子は無さそうだが、クラドがドンと藍の前に立ち塞がり尋問を開始する。

昨晚徹夜で調べ上げた情報はいわばクラドのデッキ。まずは一枚、先攻のドロード。

「民間の利用する匿名掲示板にこんな書き込みがあった。『女決闘者にカードを奪われた』。ようやくアンタの尻尾を掴んだと内心ほくそ笑んだが……このスレッドの進行がどうにも妙でな？」

Dパッドで件の掲示板を表示しながら、クラドが続ける。

「初めはこの『相談者』に協力的な何人かが『女決闘者』を特定しようと、色々と情報を聞き出しているよな？　だが……それに対する『相談者』の反応がどうにもおかしい。不特定多数の人間が閲覧出来る場だ、自分の個人情報を出したがるらないのは当然の反応だが、この『相談者』は明らかに過剰に反応している。まるで自分にやましい『何か』があるみたいにな？」

続けて、クラドはDパッドの画面を拡大して見せる。

「この掲示板に『相談者』が書き込みをしたのが20××年の3月5日。そして鉄人料理人・藍湊峰のヤラセが発覚したのは翌日の3月6日……この引っ掛かりに気付いたのは、どうも俺だけじゃなかったみたいだぜ？」

あくまで噂の域だが。と付け加えて、クラドはピシツと指をさして

宣言した。

「この『相談者』は料理人・藍湊峰本人であり。彼は謎の『女決闘者』にデツキを奪われたことで番組内でヤラセが発覚してしまった……違うか？」

「面白いお話だけれど、それと私に何の関係があるの？」

くすくすと笑う藍に、クラドは立て続けに手札のカードを切つていく。

「他にも似たような事件が無いかどうか、こつから調べてみた訳だが……出るわ出るわ。有名芸能人、プロデュエリスト、果ては政界の重鎮まで。『謎の女決闘者』に敗北したことで後ろめたい『秘密』が暴かれた『被害者』がな？ 不思議なことだが、公の記事には『女決闘者』の供述は何一つ記載されていないときた。謎の女決闘者は、どうも『長い黒髪の美女』ってことで噂が立ってるそうだ」

「……それ、私だって言いたいのか？ 単なる『都市伝説』でしょう？ ネットの世界で評判の」

呆れたように、藍が溜め息をついて見せる。

対してクラドは企み深く口端を曲げて、最後のカードを場に叩き付けた。

「ま、知らぬ存ぜぬを通すならそれでも良いぜ？ これからアンタをセキュリティに突き出せば全部分かることだしな。俺の予報が正しければ——偽装してセキュリティに潜入していたにも関わらず、何のお咎めも無くアンタは釈放されるだろうぜ。『決闘記者』デュエルジャーナリストの藍湊峰さん？」

クラドの最終口撃に、張り詰めた空気がピークを迎える。

「——つぷ」

ぷつん、と糸が切れるように。藍が噴出し、腹を抱えながら笑い始めた。

「あつははは！ 成程ね、私の目つてば随分と曇っていたみたい……まあ、自分を偽ったままじゃ『真実』を見極めるのも難しいってコトかもね」

ぽかん、と口を開けて驚くベルをよそに、藍は3人に対してすつと

頭を下げた。

「まずは貴方達への非礼を詫びます。ライトロードのデツキはすぐに返す予定で、交渉材料に使わせて貰う予定だったのだけど……メイドのお嬢ちゃんを追い詰めてしまったみたいね。ごめんなさい」

ベルに向かって、藍は改めて深々と頭を下げた。

「あ、あの……一体どういう……？」

困惑するベルに対し、藍は穏やかな口調で『ネタ晴らし』を始めた。「順を追って説明するとね。そこの彼が言った通り私はフリーの決闘記者、これまでは足の軽さを武器に著名人のスキャンダルを狙って潜入取材をしていたの。もちろん、関係者の許可を貰った上でね？ 今回の仕事もそう。セキュリティの職務怠慢、その取材と公表を依頼されたわ。同じセキュリティの上層部からね」

身内の汚れを暴くべく、フリーの記者を潜入させるとはセキュリティも中々に大胆なことをすると、クラウドは意外そうに目を丸めた。「私に何のお咎めも無いのはそのおかげ。レポートは仕事仲間に送ったから、後は記事になって流れてる筈よ。今頃、あの組合のセキュリティ関係者はブルブル震えている頃じゃないかしら？」

くすくす、と笑って見せる藍。だが、今の話の中ではベルからデツキを強奪した理由が見出せない。

「それなら、何でわたしにデュエルを……」

「私、そのときには次の取材対象を決めていてね。『闇のゲーム』……その真実を突き止めたいと思っていたの」

「闇の……ゲーム？」

やぶさかでない不穏な言葉に、ベルが眉を寄せる。

『『白き文明』を中心に噂されている都市伝説よ。『闇のゲーム』と呼ばれるデュエルを挑まれて敗北すると『魂』をカードに封印されてしまう。そんな御伽噺』

オカルトに興味は無いのか、苦笑を浮かべる藍。しかし次の瞬間にはその表情を引き締め、真摯に語りだした。

「でもね。噂の中の御伽噺が現実に起きているかもしれない、そんな事件がこの『未開拓の橙』で連続して起きているのよ。人知れず決闘

者ばかりが無差別に消え、未だ発見されていない」

「そういえば酒場で働いていた頃、そんな話を小耳に挟んだことがあったと、ベルはぼんやりと思いついて出していた。人攫いなどネイティヴの辺境では日常茶飯事なので、そういった事件にあまり関心を向けなかったのだ。」

「それと同時期に人々の間で噂されるようになった、人の魂が封じられているとされる《魂の牢獄》というカード……この2つの関連性を、是非ともこの手で明かしたいのよ」

藍の口から思いがけず飛び出したそのワードに、ユウの眉がピクリと跳ねた。

「……アンタ、何か知っているのか」

「いいえ、知らないからこれから調べるのよ。都市伝説を利用した『人の手による』事件なら早く真実を暴いて、止めさせないとね。もしも本当にオカルトじみた事件であるなら尚更、その危険をより多くの人たちに伝えるのが記者の務めだと思うし」

だから、と藍はユウに向き直って告げた。

「ユウキリサキくん、《魂の牢獄》を探して回っているのはもう調べがついています。私も今、事件について少しでも手掛かりが欲しい……勝手なお願いだけど、貴方達の旅団への『潜入取材』を許してくれないかしら？」

藍の意外な申し出に困惑したのは、ベルだけだった。

ユウは黙って目を瞑り、代わりにクラドが交渉の場に立つ。

「んー、盗られたモンも帰ってきたしな。断る理由は無いんだが……このまま素直にYESってんじや傷つけられたメイドちゃんに面目が立たない。そこで姉ちゃんにも、こっちの要求を飲んで貰おうかな？」

「何かしら、私に出来ることなら構わないけれど？」

くすり、と妖艶な笑みを浮かべる藍に、クラドは咳払いを挟んでから要求を述べた。

「まず1つ。アンタが掴んだ事件の情報はこっちに全て流して欲しい」

呆れたように、藍が苦笑する。

「まず、つて。1つだけじゃ済まないのね？」

「当たり前前よん？ 天下の売買人クラウド様はそこまで甘くねえ。つても次が最後だが」

びしり、と人差し指を立てて、クラウドは悪戯じみた笑みを浮かべて告げた。

「複数の、しかも他人のデツキを容易く操り、プロデュエリスト相手にも引けをとらないアンタの腕を見込んでの要求だ。これから先のシガマで開かれる旅団向けの決闘大会に、俺らと一緒に出場してくれねーか？」

差し出される売買人の右手。

柔和な表情を浮かべた藍は、そつとその手を握り返した。

「そういうことならお安い御用よ。力不足にならないよう頑張るわ」

決闘記者、藍湊峰。潜入取材を生業とする麗しの女決闘者。

色々と悶着はあったが、結果としてユウ達は旅団の結成と新規メンバーの引き込みまで漕ぎ着けることが出来た。

旅団として新たな一步を踏み出した一行。

ベルもまた己の弱さを見つめ直し、再び前を向き歩き出したのだった。

(あれ……そういえばあの男の人は……?)

ベルはきよろきよろと辺りを見回してみたが、ブロンド男の姿はもうどこにも見当たらなかった。

**

「馬鹿な……こんなことが出来る訳が……!!」

恐れ慄くは、ディスクを構えた若い男の決闘者。

彼のフィールドにはモンスターエクシースがたったの1枚。しかし相対する相手のフィールドには――。

《幻獣機コンコルダ》

☆7 / 風属性 / 機械族・シンクロ・効果 / ATK 2400 / DE

F 1200

《幻獣機ドラゴサック》

★7／風属性／機械族・エクシーズ・効果／ATK 2600／DEF 2200

《幻獣機メガラプター》

☆4↓7／風属性／機械族・効果／ATK 1900／DEF 1000

《幻獣機テザーウルフ》

☆4↓7／風属性／機械族・効果／ATK 1700／DEF 1200

《幻獣機トークン》

☆3／風属性／機械族／ATK 0／DEF 0

5つ全てのモンスターゾーンに、多種多様なモンスターがひしめき合っていた。

「全く、情けないね。男たるもの、レデイの前では毅然と振舞いたまえ？」

「レデイって?」

「……わたし?」

壁に寄りかかり、やれやれといった様子で頭を振るのはブロンド髪
の優男。

決闘者として相対し、ディスクを構えているのはオッドアイの双子
だ。

「ふ、ふぎげんな!! そんな見たことも聞いたことも無いようなカード
使いやがって!! インチキも大概に……」

「やれやれ。『彼ら』を目の当たりにすると、どいつもこいつも同じ台
詞しか吐かない。正直ウンザリなんだよ」

天へと立ち上る2つの光柱を見上げながら、ブロンド男は大きな溜
め息をついた。

「さて、さっさと片付けて次の街に行こう。彼らの後を追えばいずれ
『彼女』に会える」

「分かった」

「……分かった」

感情の色が伺えぬ、無邪気な攻撃宣言。

容赦なく注がれるモンスターの一斉攻撃に、男は成す術も無く敗北を余儀なくされる。

「ひっ……うわあああ!?!」

視覚が与える影響は大きい。架空のものとはいえ、モンスターの爆撃モーシヨンに男は思わず倒れ込み、気を失ってしまった。

攻撃の余波で粉塵が舞う中、ブロンド男がカツカツと靴音を鳴らし、て歩み寄る。

「ふーん……《No. 11》に《No. 50》か。他に『匂う』カードは無さそうだし……今回もハズレだったね」

男の落としたモンスターエキシブズを拾い上げると、ブロンド男はつまらなそうに口を尖らせた。

第5話 アーリー・ビー・バツク

「お、おお……!!」

ふわりと鼻をつく香辛料の匂いにつられて、ベルは長い感嘆を漏らした。

目の前のテーブルには、『忘却の青』^{アトランタ・ブルー}の一般的な家庭料理の数々がずらりと並んでいる。この地を出たことが無いベルにとって、それらはまさに未知の衝撃だった。

マガイアで仕入れた食材を使ってアトランタの郷土料理を再現したのは、何を隠そう藍である。一連のトラブルに対しての謝罪と、これからしばらく世話になるからということとで夕飯に振舞われたものだが、それらは一同の期待の斜め上を行く豪華なものに仕上がっていた。

「皆の口に合うか分からないけど……冷めない内にどうぞ？」
気恥ずかしいのか頬を僅かに朱に染めて、藍はそそくさと席に着いた。

小麦粉の皮で挽肉を包み蒸し上げ、肉汁ごと閉じ込めた饅頭のようなもの。淡水の白身魚と蟹等を具材として「本来の味」を再現したという、とろみのあるスープがかかった魚介の焼き飯。

そして油気の多いそれらをサポートするべく添えられた、後味サツパリの独特な風味のサラダがファイナーレを飾る。どれを箸でとつても、舌鼓は鳴り止まない。

「こりやまた、すげえな」

目を白黒させながら、流石のクラドも褒めるより先に箸を動かしていた。

「あ……わ、わたしも頂きますー！」

「ええ、どうぞ」

藍が促すより先に口一杯頬張っていたユウは元より、しばし呆気に取られていたベルも弾かれたように沈黙の食卓に参戦する。

蟹を食べるときは無口になる、と噂には聞いていたベルだったが、

まさか身をもって体験する日が来ようとは思ってもいなかった。

食べ物への恨みは恐ろしいがその逆、恨みを流すならば食という手段はとても効果的だ。夢中で料理を平らげる一同もソレを見守る藍も、穏やかな表情を浮かべていた。

料理というものは作るのに幾ら時間を掛けても、消費するのは僅かな時間で足りてしまう。開始十数分で料理の3/4が見事に平らげられた。

「つと。美味しい食卓もそこそこに、ここらで真面目な話をしようか？」

クラドは満足そうに口元を拭ってから静かに話を切り出した。

ベルが姿勢を正し、藍も表情を引き締めるが……ユウだけは黙々と箸の動きを止めない。

「まずは姉ちゃんが追っかけてる決闘者失踪事件……『闇のゲーム』についてだ。俺の方でも少し調べてみたんだが、姉ちゃん的にはとっくに掴んでる情報だろうから他の2人に向けての話になる」

ベルと藍がこくりと頷くが、ユウの視線は食卓に向けられたまま、箸は宙を彷徨っている。

「白で広まってる都市伝説としての『闇のゲーム』はこうだ」

クラドが語りだしたのは、噂話として語られている『闇のゲーム』の顛末。

心なしか車内に薄暗い影が落ち、おどろおどろしい雰囲気立ち込めた。

「ひよんなことから曰く付きのレアカードを入手した某A君は、そのカードを手にした日から連戦連勝を重ねる。が、ある日怪しげな風貌の男にデュエルを挑まれる訳だ。男はこう言った」

咳払いを一つ払って、クラドは声色を低くして台詞を決めた。

「勝てば望むだけのカードをくれてやる。だが、その対価に貴様の魂を賭けて貰う」

その手の話としては定石の展開に、ベルは内心胸を撫で下ろした。

昆虫や猛獣を相手にしてもケロリとしている逞しきネイティブ女子も、こういったオカルトホラーは苦手だったりする。

「連勝を重ねて気の大きくなったA君は意気揚々と承諾、いつも通りに審判員機構を呼び出すが……現れたのはどういう訳か普段とは違う、不気味な雰囲気。審判員だ。異常な事態に怯えながらもデュエルの仮想感触を超えた強烈な痛みが、A君の身体を襲うんだ」

デュエルディスクには決闘者の護身用にARを半実体化させる機能が備わってはいるが、それはあくまで護身用の域に留まる。人に重大な危害を与えるような、それこそ兵器として利用できるようなARの半実体化はユートピアでも開発に成功してはいない。

デュエルのダメージを現実にも引きずり出すなど、それこそオカルトの域を出てはいないのだ。

「痛みには耐えかねたのか、そもそも実力に差があつたのか……A君は無残にも敗北、気を失つてしまう。するとA君のデッキから件のレアカードが飛び出し、A君の身体をその小さな紙片の中へと納めてしまう訳だ。男はソレを拾い上げて、満足げにカードファイルの中へと丁寧に仕舞い込む。A君と同じように敗北し、閉じ込められた他の決闘者のカード達と共に……」

クラウドはひとしきり語り終えるとぽつと表情を切り替えていつもの調子に戻って見せた。

「とまあ、こんな感じに語られてる。この噂話についてはあくまで創作らしいが、火の無いところに煙は立たねえ。ソレを証明してんのが、今このネイティブで頻発しているらしい『決闘者無差別失踪』とセンサーの探し物でもある《魂の牢獄》ってカードのことだ」

空っぽになった皿が並ぶテーブルにドンと差し出されたのはクラウドのDパッドだ。

画面には既にユウの持っているものと同じ《魂の牢獄》の画像と、失踪事件のネット記事が表示されていた。

「失踪者は全て決闘者。その内の何人かは身に着けていたデュエルディスクが発見されたそうだが、そのどれもが失踪したと思わしき日時^{ログ}にディスクを起動した記録が残っていたらしい」

「つまり、被害者さんは失踪する直前にデュエルを……それって」

ベルがはつと目を丸める。

創作の都市伝説と現実の失踪事件が、繋がりを見せた。

「そう考えちまうよな？ 世間も面白半分はこの事件を取り上げてる。セキュリティの方は……まあ、しつかり仕事をしていると思いたいんだが」

ちらり、とクラドが藍に視線を送ると、回答は苦笑で返ってきた。

「残念だけど、私が取材していたのは旅団登録審査についての内部実態調査。刑事事件を扱うのは違う部門よ」

「だよな……まあ、ともかく噂に乗っかって悪さをしている『犯人』はワシちゃん達に任せておくとして、オカルトちは俺らが事実を見極めようじゃねーの。なあセンサー？」

言いながら、クラドは《魂の牢獄》の画像を指差す。ユウは未だに多くを語らないが、そのカードは確かに実在するという。

情報を整理するというこの場においては、ミスターポーカーフェイスにも普段の寡黙を取り払って貰わねばならないのだが、当の本人は箸を虚空で静止させたままピクリとも動かない。

「おーい、センサー？」

「……すまないが少し外の風に当たってくる。藍、馳走になった」

カラン、と箸を投げ出して、ユウは逃げ出すようにその場から立ち去ろうとする。

クラドが当然逃がすわけも無く、力強く肩を掴んで引き止めた。

「おいおい、そりゃ無いぜセンサー。コレはアンタの大切な探し物なんだろ？ 折角情報戦で強い味方が出来たんだ、用心深いのも結構だが……情報を出して貰わねーとコツチも動きようが無いんだぜ？」

ヘラヘラとした姿勢ではあったが、その言葉の端々には強い口調が見え隠れする。

そんなクラドの意思表示に気付いているのかいないのか、ユウは肩に乗せられた手をゆっくりと振り解き、視線を合わせぬままぽつりと呟いた。

「悪いが、今は待ってくれ。いずれは話す」

ポーカーフェイスの味気ない言葉の中に、珍しく切り詰まったよう

な風味が混じる。

クラドは諦めたように一つ溜め息をついて、抜きかけた感情の剣を鞘に戻した。

「……分かったよ。その代わりに、約束は破んなよ?」

ユウは背中を向けたまま静かに頷いて、停車中の車内から外へと出て行った。

ベルが不安げに、藍が目を丸めて見送る中、どっかりとクラドが腰を下ろした。

「ごめんな姉ちゃん。センサーはまだ話したくないとき」

「構わないわ。信用してくれるまでじっくり待たせてもらうから。まあ、早速胃袋の方は上手く掴めたみたいだけどね?」

くすくすと、藍は綺麗に平らげられた皿を見て微笑む。

各大皿の様子は塵一つ残さず、といった風。綺麗に平らげたものだ。

「ハハッ、違いねー。さて、美味しく頂いたあとは片付けるとしますか。無論、一番大変な皿洗いはセンサー用にちゃんと残しておくように」

皿洗いをするユウの姿がどうにも想像できなくて、ベルは思わず苦笑いした。

さて片付けと食器を纏めたベルの目に、ふと件の画像を写したDパッドが目に残る。

(……もし、本当に)

虚ろな表情で牢獄に囚われた、白き文明の出身と思わしき可憐な少女。

歳は恐らく、ユウと同じ位であろう。

(本当に、このカードが人の魂を封じ込めたものだとしたら……)

このカードに囚われている少女は、ユウにとって一体どんな存在だったのだろうか。

**

カタカタと、女性陣の寝室にせわしなくタイピング音が鳴り響く。藍のDパッドに接続された見慣れないソレと光景を、ベルは不思議そうに眺めていた。

「……すごいですね。何だか手だけが別の生き物みたい」

「くすくす。褒めても何も出ないわよ?」

そうは言いつつしっかり頬を緩ませる藍だが、ベルが比喻した通りその繊細な指先は絶えずキーボードを叩いている。

Dパッドの文字入力液晶画面上でも可能だが、簡単な文字入力ならまだしも長時間かつ長文を書き続けるには操作性が悪い。藍のように『書く』ことを仕事としている者はオプションパーツのキーボードを所持している場合が殆どだ。

「毎日キーを叩いていれば、ベルちゃんだってすぐにこれ位打てるよ
うになるわ」

「そういうものですか? わたしどんくさいから指が絡まっちゃいます
うですよ」

それまで一人だった寝室に、演技とはいえ色々と敵意をぶつけ合った女性がプラスされた。どこかぎこちない両者の距離は、どちらからでもなくジリジリと詰まっていく。

「お仕事、ですよね? わたし部屋の外に出ていきましょうか?」

「そんなに気を使わなくて大丈夫よ、むしろ話し相手が欲しいくらい」
それじゃあ、とベルはテンプレートに沿って質問を投げかけていく
ことにした。曲がりなりにも元客商売だ、会話のやりとりなら自信が
ある。

最も、相手は殆ど酔っ払いばかりでまともに会話が成立したのは少
ないのだが。

「青アトランタって、どんなところなんですか? わたし他の大陸のこと全然
知らなくて」

「どんなところ、ねえ……ベルちゃんは青についてどれくらい知って
る?」

正直な話、この一行に加わるまでインターネットの世界すら見るこ
とが出来なかったというのがベルの現状だ。有名な観光スポットは

おろか、風景を納めた画像すら見たことが無い。

「ええと……あはは、すいません全く」

「そうなの？　なら私も語り甲斐がありそうね、まずは何かから話そうかしら……」

嬉しそうな笑顔で思案しつつも止まらない藍の指先。ベルは改めて目を丸くした。

「ベルちゃん、どうして青が『忘却』なんて呼ばれているのか分かる？」

当然、ベルは首を横に振った。

審判員機構やAR、半立体映像などを生み出した高度な『文明』を有する『白』^{ユートピア}。

その殆どが『未開拓』である広大な大地を持ちながら、他大陸の侵略を受け入れるしか無い『橙』^{ネイティブ}。

これまでにベルと関わりがあった大陸名の由来は何となく分かったが、忘却とは一体何のことを指すのだろうか。

「青はね、正確には大陸じゃないのよ。5大陸の中心に広がる巨大な海洋のことを指すの」

「え？」

予想通りの驚きを見せたベルに、藍は満足そうに微笑んで続けた。

「最も、大昔には陸地もあって文明も栄えていたそうよ。だけど……地殻変動、要するに地球の動きに合わせて大陸が少しずつ移動していくことなんだけど、それに伴って青の大陸も海底に沈んでいったらしいわ」

「たっ、大陸が海に沈んじゃうんですか？」

不安げに聞き返すベルに、藍は片手を振って答えた。

「大丈夫よ、年間に数ミリ程度、なんて気の遠くなるようなスピードで動いているものだから、今日明日で沈むようなことは絶対に無いから」

「そうなんですか……良かった」

ほっと胸を撫で下ろすベルを見て頬を緩めつつ、藍は続ける。

「それから長い長い年月が経って、青の『元大陸』は人々から忘れ去られたわ。ところが今から200年ほど前、海底資源の調査に乗り出た

白が青の文明遺跡を発見したの。古代に栄華を築いた幻の大陸。それが再び人々の前に浮上した世紀の瞬間……当時は大騒ぎだったみたいね」

記者としての気質なのだろうか。青大陸発見の様子を語る藍の目には、どこか憧れのような熱い情熱の色が灯っているように見えた。「それからは急速に話が決まっていっただらいいわ。過去の文明を復元しよう、最新技術を用いて海底都市として……僅か数十年で、広大な海洋の下に第6の大陸が復活を遂げたわ。それが『忘却』と呼ばれるに至った由来よ」

出身者である藍の口から語られた、青が辿った長い歴史の道筋。

ベルはただただ感嘆を漏らして、しかしふとした疑問がその間を縫って出た。

「あれ？ でもそれじゃあ、青に住んでる人達は……」

「ええ、そうよ。元々は白や他の大陸から移住してきた移民の子孫が殆ど。私の祖父母も白の出身なの。若い頃は独立運動やら差別問題やらで大変だった、ってよく聞かされたものだよ」

懐かしそうに目を細める藍。僅かに語られたその言葉の端々から、復活を遂げた青が短い年月の間に複雑な問題を解決して来たことが伺えた。

「へえ……でも、海の下にある大陸ってわたし想像が付きませんよ」

「基本的には一年中夜みたいな感じかしら。太陽光が届かないから、特殊な照明で擬似的に昼夜を再現してはいるんだけど……それでもやっぱり、地上（こつち）の昼に比べると少し変に見えるかも。あ、そうだよ」

急に思い立ったように、藍はキーを叩く手を止めてバッグの中を探り始めた。

取り出したのは2枚ほどの、写真を使用したポストカードだった。「観光のお土産用に作られたポストカードなんだけど……雰囲気は大体こんな感じよ」

写真に収められていたのは、青の都市部を写したものだだった。遺跡から再現されたという独特な景観の高層ビルが立ち並ぶ街中を、車や

人々が往来している。色とりどりのネオンが輝く様は美しいが夜景というにはどこか空の色は明るく、青っぽく見える。

「こつちが昼間の青の姿よ」

「はえー……なるほど、確かにちよつと変な感じですよ」

こちらで言えば早朝か夕刻過ぎか、という程度だ。コレを昼間と言いつけるには、地上基準ではいささか無理がある。

「これでも少しは明るくなった方なのよ？ 照明装置の改良は、研究者も技術者も血眼になって進めているのだけだね」

事実、初期には日光を浴びないことで移民に様々な悪影響が及んだらしい。技術の進歩により現在は大幅に改善されたそうだが、海底生活というのも中々に大変そうだ。

「そうなんですか……その照明が完璧に昼間を再現できるようになる前に、実際の青に行つて『暗い昼間』を見てみたいですよ」

「くすくす、その気になれば、何処にだって行けるわ。ベルちゃんが青に行くときは、私が色々案内してあげたいな。青の料理はどの店だって美味しいから、きつと1人じゃ選べないでしょう？」

「わー、そんなに迷っちゃうほど美味しいお店があるんですか!? えへへ、今から全力で頬つぺたが落ちそうです……」

先程平らげた藍の料理を思い浮かべて、ベルはにへらーとだらしなく顔を緩めた。

「さて、と。ベルちゃんと楽しくお話出来たおかげで、原稿もあとちよつとで完成しそう。もうひと踏ん張りね」

んー、と身体を伸ばす藍の背中に、ベルがのそのそと這い寄る。

「お疲れ様です」

華奢な肩に手を掛けると、そのまま慣れた手つきでマッサージを始めた。

「そんな悪いわ、肩もみなんて……」

「いえいえ、気にしないでください。それにわたし、マッサージは結構得意なんですよ？」

「そう？ じゃあお言葉に甘えてお願いしようかしら」

自信を持って宣言した通り、ベルのマッサージは心地良かった。

どうしても長時間、同じ姿勢でキーボードと向き合わなければいけない藍の疲労した肩が丁寧に揉み解されていく。

リラックスした姿勢のまま、それでも藍はキーボードを叩き続けた。

「やっぱり、こういうお仕事をされてる方って肩こりが凄いですね。わたしなんかとは比べ物にならないくらい」

「あら？ ベルちゃんもそんな歳で肩こりするの？」

カタカタ、とキーを叩く音が一定のリズムを調子よく刻む。

「はいー、無駄にお胸が重いせいでしょうっちゅうー」

カタン、と。

キーボードを叩く手が、ピタリと止まった。

「？ 藍さん？」

ひよこ、と藍の顔を覗きこもうと前に回ったベルは、しばらくして自分が『地雷』を踏んだのだと気が付き、顔を真っ青にした。

「……そう、それは。とても大変そうね」

につこりと笑顔を浮かべたまま、藍は左手をキーボードに、右手を胸に置いてそう呟いた。

「あ、あの……」

「羨ましいわ、本当に。私には到底、想像すらつかないから……」

長く艶のある黒髪に整った顔立ち。モデルのようにスラリと伸びた長身は、女性らしい流線のボディーラインを描いている。

所轄美女と呼ばれるに相応しい藍。他の全てが完璧であるが故に一際目立つその部分。

「あるのか無いのか分からない私の胸には……重さなんて感じられないものね」

美人決闘記者、藍湊峰。

一見完璧な彼女が抱えるコンプレックスは、悲しいほどに薄いバストだった。

(も、もしかして藍さん……あのときのつて)

ベルの脳裏を過ぎったのは、旅団審査の1シーン。

唐突に胸を出され、揉みしごかれた意味不明のボディーチェック。

——年齢の割りに随分と大きいのですね。失礼しました。

あの無表情の仮面の下で、彼女は一体何を思ったのか。

きつと、今と同じように静かなる青い炎を燃やしていたに違いない。

「何で私は肩がこるのかしら？ 大したモノもぶら下げてないのに」

まずい。藍の何かしらが『ピピピピ……』と音を発しながら際限なく上昇していくのが分かる。

このままでは確実に取り返しをつかないことになる。何とかしなければ。

「あー、えっと……」

手札の対策を^{カード}広げる。どうする、どうするよわたし。

「お、お胸ばかり大きくても、いいことなんか無いですよ!? 酒場にいたときはお客さんに「馬鹿っぽい」とか「アホっぽい」とか散々言われましたし……!!」

ベルが切ったのは、ひたすらに自分がへりくだるといふビジネスマンさながらの低姿勢攻撃だった。

「男の人は何故かわたしの顔じゃなくてお胸を見ながら話すんですよ!? というか、わたしなんかお胸以外は子供体型のズンドーですから、魅力もへったくれもありません!!」

何故、こんな悲しい自爆特攻を繰り返さなければならぬのだろう。

ベルの精神的ライフが音を立てて削られていくが、未だ笑顔の鬼神を打ち破る突破口は見えない。

こうなればもうヤケだ。持てる手段^{てふだ}を全て使い切つて立ち向かう他無い。

「ほら、見てください!? こんなちぐはぐな身体なんか全然羨ましくないでしょう!？」

寝巻きの上着をすぽーんと脱ぎ捨て、鬼神と化した藍の前に裸体を晒す。

が、その衝撃で揺れた『年齢の割りに随分と大きい失礼なソレ』が見事な起爆剤となってしまった。

「……まあ」

それはいつかの再現。

むんず、と力強く驚づかみにされたベルのマシユマロンは、グニグニと凶悪な形に姿を変えられていく。

「イタイ!? イタイです藍さん!?!」

「あてつけ? あてつけなのかしら? 丁度貴女くらいの歳から成長が止まってしまった私への……」

ドタンバタンと逃げ回るベルだが、笑顔の鬼神は攻撃の手を緩めない。

「ひいつ!? 嫌あ!! 引つ張らないでください!?!」

「くすくす。引つ張れるだけのお肉があることに感謝すればいいじゃない……」

「おつ、お胸が小さくたつていいじゃないですか!! わたしなんかこの間の街で「変な臭いがする」とか言われたんですよ!? それに比べれば全然マシじゃないですかあ!!」

ひーん、と遂には泣き喚くベルを尻目に、鬼神の連続攻撃は遂にマウントポジションをとつての危険な状態に移行した。

「分かるものですか……持たざる者の苦悩が、持つ者なんか……」

もう駄目だ。引き千切られる。

ベルがそう覚悟した刹那、ゴトンと何か重たいものがぶら下がったような物音が木霊した。

2人が揃って顔を向けると、入り口の前で生首のようにぬつと顔だけを覗かせたユウが居た。

「……クラドから言伝だ」

節度保持の為に梯子はちゃんと2階に上げておいたのだが、懸垂の要領で登っているらしい。男性決闘者は基本的に身体を鍛えているというが、ユウも例に漏れないようだ。

『胸の大きさと女性の魅力は測れないし、メイドちゃんの変な臭いなんてしない。だから早く静かに寝てくれ、仕舞いには大小どっちも揉み倒すぞ』。以上だ、ちゃんと伝えたからな」

上半身裸のベルの上に跨り胸を揉む藍、という異常な光景を前に何

のリアクションも示さぬまま、不動のポーカーフフェイスは静かに顔を引つ込めた。

冷や水でも掛けられたような静寂が訪れる。しばらくして、下のほうからパチパチとカードを切る音が聞こえてきた。恐らく、ユウがいつもの『1人回し』を始めたのだろう。

「……………めんなさいベルちゃん。年甲斐にもなくはしゃいでしまったわ……………」

「いえ……………わたしの方こそ何かすいませんでした……………」

いそいそと乱れた衣服を直し、2人は静かに布団の中へと潜り込んだ。

「さて、次に立寄るのは商売で賑わう交易街『コーガム』だ」

朝食を済ませ、一同が集うリビングスペースでクラブがいつも通りに行動指針を発表した。

「目的はいつも通り決闘者のスカウトと、例のカードや事件についての聞き込みだ。こっちの情報収集系はセンサーと姉ちゃんにお願いしたい」

ユウは静かに目を瞑り、藍は柔和に微笑んで了解の意を示す。

「メイドちゃんは食料と日用品の買出し。そんで俺は……………今回はやはり気合を入れていかせて貰うぜ？ 大会に向けて、ありったけ強力なカードを仕入れてくる！」

腕を捲くつてふん、と鼻息を鳴らすクラブに注目が集まる。

商業の盛んな交易街ということで、彼の手腕が遺憾なく発揮されることだろう。

「やっぱ手持ちの在庫じゃ限界があるから……………皆のデッキが強化出来るように極力尽くすつもりだから、何か欲しいカードがあればリストを書いておいてくれ！」

「頼もしいわね。それじゃ遠慮なく希望を書かせて貰うわ」

頬に手を当てて思案している藍の様子を見ながら、ベルも自分が何

のカードが欲しいのか考えてみることにした。

まずは『必須』とさえ呼ばれている、汎用性の高い制限魔法・罠カードだろうか。どんなデッキでも特に理由が無ければ投入されている、1枚で強力な効果を発揮するカード達だ。

相手の墓地からでもモンスターを蘇生出来る《死者蘇生》、フィールド上の魔法・罠を問答無用で全て破壊する《大嵐》。

総じて値は張るが、シンクロやエクシーズモンスターに比べればまだ良心的な方だ。今の寄せ集めデッキにこれらのカードが投入するだけでも、大分安定して動くようになるだろう。

少し欲張りかも知れないが、折角のお言葉に甘えさせて貰おうとペンを走らせたところで、ベルがはたと思いつ。

「あ、皆さんはカード以外の物資で何か欲しいものはありますか？わたしも買出しのときに一緒に探してきますよ」

情報収集もカードの仕入れも出来ないベルが、この旅団の為に役立てること。

所詮は下働きかもしれないが、それでも力になれるなら全力でやり遂げるだけだ。

「お、そうか？ そしたら個人的な買い物頼もうかな？」

「助かるわベルちゃん、メモに書いておけば良い？」

「はい、それでお願います。わたしもご要望に応えられるように全力で頑張りますから」

やはりユウからの返答は無かったが、いつものことだ。

向かいの席でカードに目を通してユウに目を向けると、はたと目が合った。

「ユウさんは、何か欲しい物ありますか？」

何気なく尋ねてみたものの、恐らく答えは「特に無い」だろう。

そうアタリを付けていたベルは、間を空けて思案するユウに少しばかり面食らった。

「……そうだな」

最終的にベルの元に集まった買出しメモには、しっかりと3人分の要望が書き出されていた。

コーガムの街の景観を聞かれたなら、馬鹿みたいにただっ広い市場と答えれば良いだろう。

民家やビル等、本来あるべきはずの背の高い建物はあまり目に付かず、露天の仮設テントばかりが立ち並んでいる。干上がった湖の跡地に造られ発展したという経緯もあり、土地の起伏も殆ど見られない。

そのためか、軒を並べる店の数を省みれば十分過ぎる程の道幅がある。様々な物資を求めて人々の往来は激しいが、歩き回るのに全く苦は無い。強いて言えば遮蔽物がゼロに等しい為、照りつける太陽が肌を焼く心配が尽きない程度か。

「何に使うモノなんだろう、コレ……」

日焼けの心配など何のその。逞しい小麦色に汗を浮かべて、ベルはうーんと首を捻った。背中のリュックは既に詰まりに詰まっており、またもピンク色の動く球体と化している。買出しの品は殆ど揃ったが、ユウ希望の品である『こんぶ』というモノだけが見つからずにあった。海産物だという話だが、海とは縁遠く実物を見たことも無いベルにとってはその姿すら想像出来なかった。

元々、ネイティブの内陸部で海産物は貴重品だ。コーガムの市場でも入手は困難……なのだが、先ほど買い物をした店の主が取り扱っている店をあっさり教えてくれたこともあり、どうにか全員の希望に応えることが出来そうだ。

「それにしても、あのユウさんが欲しがる海産物って……」

まさか料理に使う訳でもないだろう、と内心で苦笑する。暇さえあれば四六時中カードを触っているような生粋の決闘者が必要としているモノなのだ。きっと脳を活性化させる薬になるだとかそういう感じなのだろう。

割と真剣にそんなことを考えていると、他の露店よりも一際大きくスペースをとった仮設テントが見えた。大きな屋根はジリジリと照らす太陽光を遮り、粗末ながらも長テーブルと椅子が置かれている。

その中で昼間から顔を赤くして馬鹿笑いする男達……その光景にはどこか既視感があった。

「……お酒を出してるお店があるんだ」

不本意ながらも、しかし良い店長の下で必死に働いていた数週間前の自分。

籠の中の鳥、と自分を例えるにはいささか不相応な気もするが、そんな籠の中も危険に晒され——気が付けば、誰かが開けてくれた窓から外の世界へと飛び出していった。

デュエルモンスターズを恨み、不甲斐ない自分を嘆いて。たった一ヶ月にも満たない時間ではあるが、あの日を懐かしく感じてしまう程に随分遠いところまで来てしまったようだ。

自然と頬が緩んで、日中のお祭り騒ぎを横目を通り過ぎていく。

今の自分が彼らをお相手するならば、デュエルの話と一緒に盛り上がることも出来ただろう。あれだけ大変だった日々も、そう思えば少しだけ輝いて見えてくる。

「——遅い。何分経つたと思ってる？」

思い出したくも無い『この声』さえ、聞こえてこなければ。

「……え？」

表情が、思考が凍てつく。

ぱつと声の方向へ顔を向けると、まるで焼き直しをしたような光景が飛び込んできた。

ざわつく店内。

ひっくり返されたテーブル。

無残に散らかる料理の数々。

「うう……」

その渦中で床に伏す、自分と同じ肌をした無力な少女。

少女は目に涙を浮かべて、降って沸いた理不尽に困惑の色を浮かべていた。

「タイム・イズ・マネー、時間は金より重要おもい。僕の時間を無駄にしたその代価、しっかり払って貰うよ？」

普通では考えられない暴虐無人な振る舞いと、周りを取り巻く男達

の数。そしてその腕に光る趣味の悪いデュエルディスクを並び見て、客も店の人間も一瞬にして理解した。

あの男に真つ当な言い合いは通じない。意見を通すには、彼以上の力をもってねじ伏せる他は無い、と。

姿ばかりは屈強なくせに、こういう場面で立ち上がる男が居ないのはかの町と同じだった。つい先ほどまで声高々に威勢を張り上げていたくせに、今は何の冗談か顔を青くして事態から目を逸らしている。酷い者は酔いを醒まされたと不機嫌そうに眉をひそめていた。

「少し貧相だけど君の器量ならまあ、そこそこの値で売れるだろう。良かったねえ、無駄な時間を掛けずに支払いを済ませることが出来て。という訳でこの子は貰って行くよ。店の人、いいよねえ？」

そう言つてディスクを構える男——A・O・J使いのシフトに対し、声を上げる者はいない。

「待つてください」

只一人。かつてその毒牙に怯え、無力を嘆いた少女を除いては。

「あ？　つて君は確か……？」

ベルの姿を見るなり、シフトは顔を引きつらせた。

無理も無い。ベルにとって無論この男は悪夢以外の何者でも無いが、彼にとつてもまたあの敗北は悪夢でしかないのだ。

「……何で君がここに？　折角、僕が見逃してあげたというのに」

「ユウさん達と一緒に旅することになりました。ここへは物資の補給に」

ユウの名前を出すと、目に見えてシフトに動揺が広がった。

しきりに辺りを見回し、ユウの姿が無いと分かるとすぐさま元の落ち着き払った態度に戻った。

「ふん、あの男は居ないのか。リベンジマッチが叶わないのは残念だけど……代わりに君を酷い目に合わせたらどんな反応が返ってくるか、見ものだね？」

下衆じみた笑いを浮かべてシフトが指図すると、取り巻きの男達がベルとウエイトレスと思わしき少女を囲った。さながら、猛獣の檻に放り込まれた餌袋といった様相だ。

「わたしに酷いことするのがお望みですか？　なら賭けも成立アンティですよ
ね？」

ベルがディスクを起動させ、構える。

放り込まれた餌袋は、あろうことかその小さな牙を露にし、敢然と
獣達を睨み返したのだ。

「わたしが勝ったらこの子は諦めて下さい。その代わりに、もし負けた
ら喜んであなたの商品になりますよ」

沸騰し爆発寸前の頭だというのに、口からついて出る言葉は妙に
淡々としていた。

カツとなるのは悪い癖だとベル自身も痛感していることだが、今は
これで良かったのだと思っている。この悪癖がなければきっと、悪夢シフト
を再び前にして尻込みしていたに違いない。そうなれば今度こそ本
当に、自分自身を大嫌いになつていただろうから。

勢いのままに、熱い感情のまままで立ち向かう。勇気の無い自分には
そんな起爆剤が必要なのだ。

「ツハハハ!!　何を言い出すかと思えば、君が僕に勝つ!?　時間の無
駄も甚だしい、甚だしいが……」

シフトの代わりにと一歩前に出た取り巻きの男を片手で抑えて、シ
フトは凶暴な笑みを宿らせてベルに向き合った。

「……正直、君の顔を見てクソみたいな『あのデュエル』が脳に焼き付
いて離れなくなった。非常に不愉快だ、この鬱憤は君を叩きのめして
晴らすことにしたよ」

地の底から響くような唸り声を上げて、シフトがデツキをセツトす
る。

漂い始める不穏な空気に、ベルの背後で怯える少女が声も細々に尋
ねてきた。

「……あの、どうして私を……?」

不安げに眉を寄せ、目の端に涙を溜める少女に、ベルは精一杯の笑
顔を作って見せた。

「どうしてって。歳も近いし、同じネイティブの女じゃないですか」

「でも、デュエルであんな約束して……」

「大丈夫です。わたし絶対、負けませんから」

あの日に見た一筋の星^{ひかり}。それを彼女に指し示す手段は今、この手の中にある。

次は自分が、この子の籠を開けてあげる番だ。

『――『決闘申請』、確認』

お互いのデイスクにデツキがセットされる。

オートシャッフル機能によってランダムに掻き混ぜられたソレから、運命を分かちつつ5枚のカードを引き抜く。

(……今度はわたしと一緒だよ。頑張ろうね、みんな)

前回は信じる事が出来なかった自分のデツキ。だが今回は違う。

あれから何度も練習を繰り返した。デツキに入れるカードをじっくり考えた。ユウの真似をして1人回しをすることもあった。

心が通じたとしてもいのだろうか。指先から伝わるカードの感触は、どこか暖かい。

『^{AR}仮想戦場、^{リンク}展開完了』

周囲の風景が観客を巻き込んで移り変わる。戦いの舞台は古代遺跡が立ち並ぶ朽ちた街中。

『^{ジャッジアプリ}審判員機構、起動』

ほん、と飛び出したのは、奇しくもあの日と同じテンション高めな姉型の方だ。

『呼ばれて飛び出て、美少女審判員コーパルちゃん只今参上♪』

今回のコスプレはどこかの探検隊のようなベージュのサファリルックだ。

ソレらしく額に手を当てて、対峙する決闘者の姿を見て驚きの声を上げる。

『おやー？ これは意外というか因縁といえますか。一大勢力を築く決闘旅団のリーダー・シフトさんと、かつて彼が逃した唯一の掛品・ベルガモットさんの直接対決とは。今回の試合も中々面白くなりそうですね？』

「審判員、賭けルールの設定だ」

持ち前のテンションで『実況』を始めようとするも、シフトの言葉

に遮られる。

「僕が勝てばそのメスガキの身柄を頂く。負ければ……あのときと同じ様に、僕のデツキを持って行けばいいよ。出来るものならね」

シフトの条件に、ベルは無言で頷く。

このデュエル、元より賭けの見返りや損得勘定など考えてはいない。

『何やら重たい空気ですがー。両者の承認を確認しましたので、賭けルールを設定します。デフォルトから変更が無ければ、このまま試合を開始しますよー?』

険しい表情を浮かべるベルと、爬虫類じみたシフトの眼光が交錯する。

では、とコーパルが右腕を高々と掲げて——火蓋が切って落とされた。

「二決闘（デュエル）!!」

第6話 《災厄》を破れ!

審判員機構コーパルが投げた賽は、ベルの先攻を示した。

「わたしの先攻、カードをドロロー!」

ベル LP4000

手札・5↓6 モンスター・0 魔／罨・0

シフト LP4000

手札・5 モンスター・0 魔／罨・0

正真正銘、これからの運命を決める初期手札に目を通す。

魔法・罨とモンスターのバランスも良く、滑り出しは好調に運びそ

うだ。しかし――。

(……あの人に、わたしの『まづまづ』があつさり通用する訳ない)

人間性はさておき、シフトは仮にも大型の決闘旅団を率いる長だ。

慢心するなど以つての外だが、少しの気の緩みも許されない。慎重に思考を巡らせて、ベルは宣言を放つ。

「スタンバイからメイン、モンスターとバックカードを1枚ずつ伏せてターンエンドです!」

結果、先攻第1手としては少々心許ない陣形でベルは相手ターンを迎え撃つことにした。

自分とモンスターを守る伏せカードはたったの1枚。シフトの手札に《サイクロン》等の魔法・罨破壊のカードがあれば、モンスターの召喚を安全に通す為に迷わずに使われてしまうだろう。

そうなれば、展開次第で大ダメージも覚悟しなければならない……だがそれで良いと、ベルは緊張した面持ちで額に汗を浮かべた。

これは要するに『相手の手札にサイクロンがあるか無いか』を確認する為の布陣。

伏せられた罨が破壊されずに残ればそれで良し。破壊されたのなら手札に残る『もう1つの本命』を次のターンに通すだけだ。

無論、例外的なパターンはいくらでもある。クラドにそう念を押されて教えられた小手先の戦術であるが、今の好調な手札を崩さずに守ることを優先するならば有効な手段だ。

「フン、偉そうに息巻いていた割には凡手以下じゃあないか。僕のターンだ」

幸い、シフトの様子から察するにコチラの狙いには気付かれていないようだ。

ドロローしたカードもつまらなそうに横目で流すと、シフトは迷い無くディスクにカードを差し込んだ。

「僕は魔法カード《サイクロン》を発動、まずはそのセットカードを破壊する」

幸か不幸か、狙い通り。

カードから発生した竜巻がベルの伏せカードを吹き飛ばし、粉々に打ち砕いた。

(……やっぱり、持ってた！)

腕を交差させて強風から顔を庇いながら、ベルは僅かに口元を緩めた。

「罨カードをチェーン発動、《八汰鳥の骸》！ デツキからカードを一枚ドロローします！」

罨、と呼ぶには頼りないその効果に、シフトは鼻で笑って見せた。

「はっ、一丁前に罨なんか張ったと思えば……全く時間の無駄だったねえ。さて、僕は手札からコイツを召喚させて貰うよ。《A・O・J (アーリー・オブ・ジャステイス) コアデストロイ》！」

《A・O・J (アーリー・オブ・ジャステイス) コアデストロイ》

☆3 / 閻属性 / 機械族・効果 / ATK 1200 / DEF 200
見覚えのある流線のフォルム。再び姿を現したそれは、標的を捉えるように無機質な眼光をベルへと向けた。

「A・O・J!? あのデツキはユウさんに負けて取られた筈じゃ……?」

あの日、その理不尽な効果に異を唱えつつも、場外から眺めることしか出来なかったモンスター。それが今、真正面で相対している。

動揺を隠せないベルに、シフトは鼻で笑って見せた。

「あまりみくびらないで欲しいねえ? 奪われたデツキを再構築する

「くらい造作もないさ」

だが幸い、彼の操るA・O・Jは光属性に対して有効な効果を持つものが多い。ライトロード使いのユウは苦戦を強いられたがベルのデッキは地属性が主体だ。

例え対峙したとしても、その効果が牙を剥くことは無い筈……そう自分に言い聞かせ、ベルは脈打つ鼓動を必死に抑えた。

「バトルだ、コアデストロイでセットモンスターを攻撃する！」

無機質な機械兵の攻撃が、セット状態のモンスターカードを襲う。

すかさず、ベルはカードを表側にしながら宣言した。

「わたしの守備モンスターは《リバース共鳴虫》、その守備力1300ポイントからの反射ダメージを受けて貰います！」

凶爪が貫くその刹那、巨大なコオロギのような昆虫型モンスターがカードの中から飛び出し、コアデストロイを押し返した。

《共鳴虫》

☆3 / 地属性 / 昆虫族・効果 / ATK 1200 / DEF 1300

シフト LP4000 ↓ 3900

共鳴虫の属性は地。コアデストロイの効果は適用されない。

貧弱なモンスターに傷をつけられた、とシフトは必ず感情を荒げるだろう……そう踏んでいたベルだったが、予想に反してシフトは落ちていた様子でフェイズ移行を宣言する。

「……なら、メイン2だ。バックカードを2枚伏せてターンエンド」

怒りを無理に堪えている様子も無く、シフトはあっさりとターンを終了した。

予想されていた猛攻も無く、しかしそれだけに伏せられたカードが不気味な影を落とす。

策を張りそれを突破する関係は、そのままそっくり反転して返された。

「わたしのターンです、カードをドロー！」

ドローカードに目を落とす。

想定とは違う状況となったが、むしろ都合の良い方向へ傾いてい

る。使うべきだった手札のカードを1枚、消費せずに済みそうだからだ。

「スタンバイからメイン、わたしは共鳴虫を攻撃表示に変更。何も無ければバトルフェイズへ、共鳴虫でコアデストロイを攻撃します！」
ベルの攻撃宣言に合わせ、コーパルが熱の入った実況を差し込む。
『おっとベルさん、ここで『リクルーター』お得意の自爆特攻を仕掛けたあ〜！』

所轄リクルーターと呼ばれる共鳴虫や《荒野の女戦士》などのモンスターは、戦闘破壊をトリガーとして後続のモンスターを呼び寄せる。基本的には相手の攻撃を受けて発動する受動的な効果であるが、状況によっては攻めの戦術に使われることもある。

コアデストロイと共鳴虫の攻撃力は同じ1200。コアデストロイの効果が適用されない今、両者が戦闘を行えば相打ちとなり互いが『戦闘破壊』されることになる。

破壊された共鳴虫は後続の昆虫族モンスターを呼び寄せるが、相手のフィールドには後続モンスターは現れない。新たに特殊召喚された共鳴虫の後続モンスターは、そのまま攻撃を続行出来る……これこそがリクルーターの持つ最大の矛だ。

この他にも対峙する相手モンスターと相性の良い後続モンスターをデッキから呼び寄せる為、自身より攻撃力の高いモンスターに攻撃を仕掛けることも多く、その状況から『自爆特攻』と称されている訳だ。

「この攻撃で、お互いのモンスターは戦闘によって破壊され——」
引き寄せられるように接近する2体。

その数秒後にはベルが望んだ状況が展開される、筈だった。

「……全く、下らない。僕はここでリバーズカードを発動させる。《DNA移植手術》！」

呆れるような溜め息と共にシフトが発動したのは、1枚の永続罫。

「このカードの発動時、属性を1つ宣言する。以降、このカードが存在する限り場の表側表示モンスターは全て宣言した属性となる。宣言するのは勿論——『光』だ」

共鳴虫の周囲に乳白色のオーラが発生し、ディスクに表示されたカード情報の属性部分が『地』から『光』へと書き換わる。

(モンスター属性を強制変更!? そんなカードが……!?)

「さて、何も無ければバトル続行だ。コアデストロイの効果を発動、光属性モンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する!」

ヴン、とコアデストロイ本来の力が起動する。力量の差は互角であった筈の共鳴虫は呆気なくその爪に引き裂かれ、一方的に『効果破壊』されてしまった。

「ううっ……!!」

共鳴虫破壊の余波から顔を庇いながら、ベルは苦々しく呟いた。

「コアデストロイの『効果』によって破壊された為、共鳴虫の効果が発動することはない。リクルーター自爆なんて下級タクティクスが、僕に通じるとでも思っていたのかい? このままフェイズを終えるなら、僕はもう一枚のリバースカードを発動させて貰うよ?」

つまらなそうに目を細めて、シフトはジェスチャーで「フェイズを進めろ」と促した。

「……分かりました。バトルフェイズを終了します」

「ならリバース発動だ。永続罫 《聖なる輝き》」

「またも発動される永続罫、その効果は――。」

「このカードが存在する限り、お互いにモンスターを『セット』することとは出来ない。もしセットする場合には、表側守備表示で召喚して貰う」

シフトのフィールドに発現した3枚のカード。それらが形成した布陣は、ベルの想像を遥かに超えた強力なものだった。

「時間の節約だ、説明してあげるよ。コアデストロイの効果は裏側守備表示のモンスターには適用されない。よってこのカードがあれば、先程のように余計な反射ダメージは受けずに済むということさ」

『ここでシフトさんお馴染みのコンボカードが揃いました! これはベルさん、早くも追い詰められたかー!?』

コーパルの実況は益々白熱していく。デュエルを見守る周囲から

漏れるざわめきを背に受けながら、ベルはターンを進めていく。

「メイン2、わたしは《カブトロン》を守備表示で召喚。バックカードを1枚伏せてターンエンドです」

デフォルメされた人型のカブトムシモンスターが、守備表示を示すように両腕を交差させてフィールドに出現した。

《カブトロン》

☆4／闇属性／昆虫族・効果／ATK 1600／DEF 900
やはり実力の差は思うようには覆せない。まだまだ駆け出しのベルに比べ、カードの知識も応用力もあちらが圧倒的に上手だ。

それでも手札で消費する予定だったカードがいくつか浮いたこともあり、こちらの被害は最小限に留まった。まだまだこれから、まずは返しの相手ターンを凌ぐ。

「僕のターン、ドロー」

ベル LP4000

手札・4 モンスター・1 魔／罠・1

シフト LP3900

手札・2↓3 モンスター・1 魔／罠・2

「さて、前菜にもならない『野菜くず』をどう料理したものか」

「……野菜くずを馬鹿にすると後悔しますよ。ちゃんと煮込めば美味しいスープになるんですから」

「ああ、そう。僕の口には合わないそうだけど。メインフェイズ、僕は《A（アーリー）・ジエネクス・ドウルダーク》を攻撃表示で召喚だ」
《A・ジエネクス・ドウルダーク》

☆4／闇属性／機械族・効果／ATK 1800／DEF 200
輪郭の丸い人型機械兵が、掌をかざした構えのまま場に降り立った。

「ドウルダークのモンスター効果発動。1ターンに1度、このカードと同じ属性を持つ表側表示のモンスター1体を選択し破壊する……DNA移植手術が適用されている今、ドウルダークの効果範囲は全てのモンスターを捉える。カブトロンを破壊だ！」

ドウルダークの掌から共振波が発せられると、振動に耐えられず力

ブトロンは成す術なくその身を砕かれた。

「この効果を使用したドウルダークは攻撃出来ない——が、こうすれば制約を踏み倒せる。僕は手札から《ワン・フォー・ワン》を発動！」
聞き慣れない名前のカードに、ベルは眉をひそめる。

「手札を一枚墓地へ送り、デッキから☆1のモンスター1体を特殊召喚する……来い、《アンノウン・シンクロン》！」

《アンノウン・シンクロン》

☆1／闇属性／機械族・チューナー・効果／ATK 0／DEF 0

2枚の手札を使って現れたのは、不恰好な小型の球体機械。

しかしそのカードカテゴリ名が示すのは、まさしく《災厄》の兆候だった。

「チューナー、モンスター……！」

戦慄を隠せず、思わず呟くベル。

覚悟はしていたつもりだったが、ソレは予想よりも早く現れた。

「僕は☆1チューナー、アンノウン・シンクロンに、☆4のドウルダークをチューニング！」

球体機械はたった1つだけの緑輪を作り出し、ドウルダークの身体を変質させていく。

「造られし模倣の正義よ、希望も絶望も隔てなく引き裂く災厄となれ！」

その合計レベルは、5。

「シンクロ召喚！ 起動しろ、《A・O・J カタストル》！」

《A・O・J カタストル》

☆5／闇属性／機械族・効果／ATK 2200／DEF 1200

緑の光輪より姿を現したのは、コアデストロイを大型化したような機械モンスター。

白銀の装甲に身を包み、無機質な単眼が標的を捉える。

「カタストルは闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずに破壊する。DNA移植手術によって全て『光』に書き

換わっている今、その効果はあまり意味がないがね？」

シフトはそう言つてのけたが、実際のところ素の効果範囲が広いというのは厄介だ。

コアデストロイだけならDAN移植手術を破壊出来れば無力化出来たが、このカードが後ろで控えている以上、安直な突破は難しくなった。

「さあバトルだ、まずはコアデストロイでプレイヤーにダイレクトアタック！」

迫る光殺しの機械爪。希望を打ち砕く凶攻を前に、ベルはしっかりと前を見据えて宣言した。

「罨カード発動、《ピンポイント・ガード》！ 墓地の共鳴虫を守備表示で蘇生します！」

カードの発動と同時。墓地より破壊された筈の共鳴虫が飛び出し、コアデストロイの攻撃からベルを守った。

「相手モンスターへの攻撃宣言時、自分の墓地から☆4以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚します！ 更にこのカードによって特殊召喚されたモンスターはこのターン、戦闘及びカードの効果によっても破壊されません！」

コアデストロイ・カタストルの両効果も、このターンだけは無効となる。

無事にダイレクトアタックを防いだベルは内心で安堵の息を吐き出して、シフトの様子を伺った。

「無駄な足掻きを……僕はこれでターンエンドだ」

あからさまに不機嫌そうな顔を浮かべるシフト。

少しばかり報いたようだが、まだまだ勝利を掴むには程遠い。

「わたしのターン、ドロー！」

ドローカードは……非常に有難い。が、ひとまずベルはこれまでに溜め込んだカード達に順番を解放することにした。

それだけの価値が『相手のフィールドには』あるのだ。

「スタンバイからメイン、わたしは手札からこの魔法カードを発動します！ 魔法カード《強制転移》！」

「……チツ、やはり持ってたか」

不愉快そうにシフトの眉が吊上がる。

相手のフィールドで戦闘破壊されても効果を発動するリクルーターにとつて、この強制転移は最高に相性の良いカードとして名を馳せている。交換した相手のモンスターで受け渡したりクルーターを破壊し後続を呼べば、ほぼ無償で相手モンスター奪い取ったも同然だ。

「お互いに自分フィールド上のモンスターを1体ずつ選び、それらのモンスターのコントロールを入れ替えます！ わたしのフィールドには共鳴虫のみですが……あなたはどっちを選択しますか？」

強制転移の存在は自爆特攻戦術を見た時点でシフトも予見していたのだろうが、分かっていただけに忌々しげな表情を浮かべていた。

「ブン……まあいいさ、僕はコアデストロイを選択する」

熱の籠った何かを吐き出すように、シフトが大きく溜め息をつく。

宣言と同時に、共鳴虫とコアデストロイの立ち位置が入れ替わり、主の変更を受け入れた。

(よし、上手く決まった！ これなら……！)

昔、父親に聞かされた話を思い出す。

どんな盾をも貫く『矛』と、どんな攻撃も通さない『盾』。

それら2つをぶつけたら、矛盾する(どうなる)と思う？

「バトルフェイズ、コアデストロイでカタストルを攻撃！」

フィールドに相対する2体の機械兵。そして今、互いの属性はそれぞれが抹殺対象として定める『光』。

「コアデストロイの効果！ ダメージ計算を行わずに破壊します！」

「……それはこちらも同じこと。閥属性モンスター以外と戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。結果は相殺だ」

かつての同胞に容赦なく爪を振るう、その辺りの非情さは機械兵士特有か。

最凶の矛と矛のぶつかり合い。シフトの宣言通り、結果は相殺とな

る筈だった。

しかしここで、ベルはおもむろに手札に手を伸ばし、即座にカードを発動させた。

「それはどうですかね!? ここで速攻魔法発動、《禁じられた聖衣》!」
「ッ何?!」

コアデストロイを包み込む半透明の光のヴェール。

決して攻撃的な効果ではないが、この場においてそれは災厄をも打ち破る矛として機能した。

「禁じられた聖衣は、選択したモンスター1体をカード効果の対象・破壊から守る魔法カード。代わりに攻撃力は600ポイント下がっちゃいますけど、この2体のバトルじゃあまり意味は無いですよね?」

「くっ……このメスガキが……!?!」

格下のモンスターに呆気なく貫かれ、カタストルは断末魔のような金切り音を上げて爆発炎上した。

『これは見事な切り返し! シフトさんの得意戦術をそっくりそのまま奪い取った形となりました!』

褒められて少し背中がむず痒くなるベルだったが、そこは決闘者の面目を保つ為ニヤリと不敵に微笑んで見せた。

当然それはシフトのプライドに火を付ける結果となり、それまであったどこか気怠るい雰囲気は熱が帯びていく。

「あまり調子に乗るなよ……僕のターン、ドロー!」

ベル LP4000

手札・3 モンスター・1 魔/罫・0

シフト LP3900

手札・1↓2 モンスター・0 魔/罫・2

「この僕が、手駒を奪われた対策を想定していないとでも思ったかい? 手札から《A・O・J サイクロン・クリエイター》を召喚!」
《A・O・J サイクロン・クリエイター》

☆3 / 闇属性 / 機械族・チューナー・効果 / ATK 1400 / D

EF 1200

新たに姿を現したのは、鳥の姿を模した調律チューナーの機械兵。

その隣に控えるのは、強制転移でコントロールの移った共鳴虫だ。思わず身構えるベルだったが、シフトが宣言したのは――。

「更に。僕は手札から《マジック・プランター》を発動、場の永続罨《聖なる輝き》を墓地へ送りカードを2枚ドロウする」

シンクロではなく、手札増強。

その狙いの意図は、すぐに示された。

「さて、ここでサイクロン・クリエーターの効果を発動。手札1枚を墓地へ送り、場の魔法・罨を手札に戻す。僕が戻すのは……《DNA移植手術》！」

鋼の翼から巻き起こされた竜巻のような風が、移植手術をシフトの手札へと吹き飛ばす。

乳白色のオーラと共に、フィールドからその効果が消え失せた。

(!? そんな、これじゃコアデストロイの効果が……!)

「さあバトルだ！ サイクロン・クリエーターでコアデストロイを攻撃！」

光殺しの機械兵に、同胞から放たれた容赦の無い突風が襲い掛かる。

後ろ盾の無くなったコアデストロイはデュエルモンスターズのルールに従い、通常通りのダメージ計算が発生し容易く破壊された。

ベル LP4000↓3800

「っ……!!」

歯噛みするベルを尻目に、シフトはここぞとばかりに畳み掛けていく。

「何を呆けてる、まだ『お前のモンスターの』攻撃が残ってるぞ!? 共鳴虫でダイレクトアタック！」

共鳴虫の発する高音波が響き渡り、ベルは思わず耳を塞いで屈んでしまった。

「うあッ……!?!」

ベル LP3800↓2600

「僕はバックカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

得意げにカードを伏せ、目を細めるシフト。

「内1枚は手札に戻した《DNA移植手術》だろうが、もう1枚は――」

（まさか自分の罫を手札に戻すなんて……!!）

後にベルも知ることとなる、セルフ・バウンスという高等戦術。

卓上の講義を乏すつもりはないが、やはり実戦は様々なことを教えてくれる。こんな状況でなければ、純粹にデュエルを楽しむことが出来たのかも知れないが。

「……わたしの、ターンです！ ドロー！」

ベル LP2600

手札・3 ↓ 4 モンスター・0 魔／罫・0

シフト LP3900

手札・0 モンスター・2 魔／罫・2

「スタンバイからメインへ、フィールド魔法《死皇帝の陵墓》発動!!」

「……何？」

密林の古代遺跡は、土人形が無数に立ち並ぶ気味の悪いフィールドに書き換わる。

それが意味することに、シフトは怪訝に眉を顰めた。

「陵墓の効果を発動!! 2000ポイントのライフを払って、手札の最上級モンスターをリリース無しで召喚します!!」

ベル LP2600 ↓ 600

浮き上がった土人形2体が生贄コストとなって瓦解し、その対価としてベ

ルの手札に眠る戦神が目覚めます。

「……一緒に行くよ!!」 アスタリスク 《――*――翼戦神》!!」 ヴァルキュリア

背に負う巨大な翼を高々と打ち鳴らし、古の民の姿を写した暗暖色の機械天使が光臨した。

《――*――翼戦神》

☆10 / 地属性 / 天使族・効果 / ATK 2800 / DEF 3000

「アスタリスクス!? そんなカード聞いたことが――」

『はいはい、非常にレアなカテゴリではありますが、過去に――*――』

―』と名の付いたカードが使用されたデュエルは数件確認されていますよー』

間髪入れず、コーパルが解説を挟み込む。

流石は審判員機構、過去に起きた問題トラブルに関する対応は非常に迅速だった。

「僕も知らないようなレアカードを何故君が……だがまあ、いいさ。このデュエルが終わればどの道、僕のモノになるんだからね?」

「それはどうでしょう? バトルフェイズ、わたしはヴァルキュリアで共鳴虫を攻撃!!」

ヴァルキュリアの掌から放たれた光弾は容易く対象を撃破。

一瞬にして灰塵へと変え、その余波はダメージとなってシフトに襲い掛かる。

シフト LP3900↓2300

「ぐっ……!?!」

「この瞬間、戦闘破壊された共鳴虫の効果発動、デッキから攻撃力1500以下の昆虫族モンスター1体を特殊召喚します!! 選択するのは《炎妖蝶ウィルプス》!!」

《炎妖蝶ウィルプス》

☆4 / 炎属性 / 昆虫族・効果 / ATK 1500 / DEF 1500

妖しく炎の鱗粉を撒き散らす巨大な蝶が、攻撃表示でどこからともなく現れた。

「再び攻撃宣言、ウィルプスでサイクロン・クリエイターを攻撃です!!」

シフト LP2300↓2200

熱風に巻き上げられ、上空で破壊エフェクトを散らしサイクロン・クリエイターが破壊される。

(クソッ……あの時デッキを取られていなければこんな醜態は無かつたのに……!)

デッキの再構築は容易いと言って見せたシフトだが、実のところその半分は虚栄だ。

確かに40枚のデッキ本体は見事に再構築されていたが、必然的に高価なシンクロやエクシーズで構築されるエクストラデッキについては未完成のままだったのだ。

前のターンで取るべき正しい一手は☆6か★3のモンスターを特殊召喚すること。しかし今、彼のデッキには現在該当するエクストラモンスターは存在しない。

たかが素人に『そこまで』追い詰められているということに、シフトは歯噛みした。

「メイン2、ヴァルキュリアの効果を発動!! 自分フィールドのウィルプスを装備カードとして装備し、攻撃力を600ポイントアップさせます!!」

ウィルプスがヴァルキュリアの武装として再構築され、蝶の翼を模したハープがその手に握られた。

《――***―翼戦神》

ATK 2800 ↓ 3400

「最後に、魔法カード《一時休戦》を発動。お互いにカードを1枚ドロ―して、次の相手ターン終了時まで全てのダメージは無効になります。バックカードを1枚伏せてターンエンドです!!」

一時休戦でアフターケアこそしたものの、残りライフはあと僅か。攻めに転じてみたものの、危険な状態は変わりない。

「あまり粹がるなよ……僕のターン、ドロー!!」

ベル LP600

手札・1 モンスター・1 魔/罨・3

シフト LP2200

手札・1 ↓ 2 モンスター・1 魔/罨・2

ドローカードを確認したシフトは、その表情を苦から悦へと一変させた。

「……大方、その伏せカードが何かは想像がつくが。あえて誘いに乗ってやるよ!! 永続罨カードを同時に発動、《DNA移植手術》《リビングデッドの呼び声》!!」

当然、移植手術で宣言されたのは『光』。

そして伏せられていたもう1枚はまたしても永続罫だった。が、これまでの補助的なものとは大きく異なり、牙を剥き出したシフトの咆哮を体現するかのような『攻め』のカードだった。

「自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する!! 選択するのはカタストルだ!!」

復活を遂げる一方破壊の機械兵。それは最早、執念と呼んでもいいのかもしれない。

フィールドに舞い戻ったプレッシャーに、ベルも思わず気押される。

「バトル!! 僕はカタストルでヴァルキュリアを攻撃!!」

シフトの真意を掴めぬまま、ベルはカタストル突破の切り札を迷い無く発動させた。

「伏せカード発動、《禁じられた聖杯》!! カタストルの攻撃力を400ポイント上げる代わりに、その効果をターン終了時まで無効にします!!」

《A・O・J カタストル》

ATK 2200 ↓ 2600

「この瞬間を……待っていた!!」

捕らえた、とばかりにシフトが邪悪な笑みを浮かべる。

おもむろに手を伸ばしたのは、己の手札。

「効果を失ったことにより、カタストルとの戦闘にはダメージ計算が発生する……そのダメージステップ開始時、手札から《オネスト》の効果が発動する!!」

「なっ?」

ベル自身も使用した経験のある、光属性デッキの象徴とも呼べる手札誘発型モンスター。

それがまさか、本来なら闇属性で統一されたA・O・Jから飛び出すなどベルには予想が付かなかった。

「カタストルは今、DNA移植手術の効果により光属性となっている……オネストの効果により自身の攻撃力をヴァルキュリアの攻撃力分、数値を上乗せする!!」

《A・O・J カタストル》

ATK 2600↓6000

効力を失った筈の爪は天使の加護を受けて、戦神を引き裂かんと迫る。

「ヴァルキュリアの効果を発動!! このカードに装備されているカードを全て墓地に送って発動します!! 攻撃力を300ポイントダウンさせ、そのターンに1度だけ戦闘及びカードの効果によっては破壊されません!! 『アームズ・プロテクション』!!」

《***翼戦神》

ATK 2800↓2500

ハープを前方に突き出し、防御体制をとるヴァルキュリア。

瞬間、装備カードは半実体のエネルギー状に再構築されたウィルプスの姿へと再構築され、カタストルの攻撃を受け止める盾としてその役割を終えた。

(もし《一時休戦》を発動させてなかったら、このターンで……)

紙一重で回避した『敗北』の2文字、その危うさに背筋が震えだす。

ヴァルキュリアの効果は自身を守るためだけのもので、プレイヤー主を庇うことは出来ない。本来であればこの戦闘で発生したダメージはそのままベルへ到達していたのだ。

「チツ、そんな効果があったのか……僕はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

苦渋に顔を歪めるのは、厄介なカードに対してか、確認を怠った自分に対してか。いずれにせよ、シフトが今のターンで何かを仕掛ける気であったのは間違い無さそうだ。

実質、これが最後のターンとも成り得る。虎の子だった《禁じられた聖杯》を使用してしまった今、カタストル災厄を破る手段は残されていない。

この状態が続けば、残り僅かなライフを刈り取られるのは時間の問題だ。

「――わたしのターン」

そう。『今は』まだ。

「ドロー!!」

全てを左右する運命の分かれ道。

硬直し、動けなくなるほどのプレッシャー。それを確かに全身で感じながら、己の命を磨り減らす如く——ベルは、その1枚を引き抜いた。

「……………」

無論、不安が無かった訳では無い。身体の末端は例外なく震え、心臓は必要以上に脈を打っている。

デュエルモンスターズとて所詮は遊戯^{ゲーム}。その勝敗はいつだってまぐれや偶然、運に大きく左右される。半ば初めから決定している結果に感情が横入りする余地は無い。

それでもベルはデッキを、『自分達』の力を信じた。知識も経験も足りないいちっぽけな自分は、そうやって精一杯背伸びをしてようやく指先が相手に届くのみだから。

「スタンバイから、メインへ」

真つ直ぐにシフトを見据えるその大きな瞳に、降参^{サレンダー}の色は無い。

「——ありがとう。わたしが召喚するのは、この子です！」

《インフォーマー・スパイダー》

☆4 / 地属性 / 昆虫族・効果 / ATK 500 / DEF 1800

現れたのは、リーダー機類と赤外線スコープを装着した奇妙な蜘蛛型モンスターだった。しかも、表示形式は何故か攻撃表示。

その貧弱なステータスにシフトは一笑しようとして、しかし効果を確認するとすぐさま表情を硬直させた。

「まさか、お前……………」

カチカチとパズルのピースが揃っていく感覚。

シフトの嫌な予感、ベルの勝利の方程式は、現実となって形を成していく。

「さらにわたしはヴァルクリアの効果を発動！ 手札から《ジュツテ・ナイト》を装備し、その名称と効果を得て攻撃力を600ポイントアップさせます！」

デフォルメされた岡っ引のような姿のモンスターが現れ、直後に装備として再構築された。十手という名が示す通りの、鉤を設けた刀状

の捕具がヴァルキュリアの手に握られる。

実はチューナーモンスターであるジユツテ・ナイトだが、シンクロモンスターを持っていないベルのデッキでは地味な役回りのモンスターだ。

「ジユツテ・ナイトとなったヴァルキュリアの効果を発動!! 1ターンの1度、相手の表側攻撃表示モンスターを表側守備表示に変更します!!」

ヴァルキュリアが十手を投擲すると、カタストルは爪や腕を引っ込めて防御体制をとった。だが、カタストルの効果は守備表示であろうとも戦闘したモンスターに容赦なく発動する。恐らく、普段のシフトなら声を高々にそう説明していただろう。

だが彼は、一言も発することは無かった。既に敵の狙いは明らか。後は残された伏せカードに一縷の望みを託すのみ、なのだが。

(馬鹿な……僕が、今度はこんな素人の小娘に……)

シフトが伏せているカードは、攻撃してきた相手モンスターを全て葬り去る『攻撃反応罠の最高峰』。カタストルの効果を縫って攻撃してきたモンスターを一掃するにはこれ以上無いカード、の筈だった。

《聖なるバリアーミラーフォース》。だが最早、このカード1枚では戦神の進撃を食い止めることは叶わない。

(……この僕が、また負けるだ?!)

シフトの表情からさつと血の気が引いていく。

「バトルフェイズ、インフォーマー・スパイダーでカタストルを攻撃!!」

その攻撃力と守備力の差は700。通常であればお互いのモンスターは破壊はされず、攻撃力の低いモンスターを操るプレイヤーにその反射ダメージが与えられるのみ。

だがそれも『通常では』という枠組みの中での話だ。

「カタストルの効果によってインフォーマー・スパイダーは『ダメージ計算を行わず』『効果によって破壊』されます!!」

貧弱な蜘蛛のモンスターは呆気なく弾け飛び、その命を散らした。

彼の役割、それはこの瞬間にあった。

「この瞬間、インフォーマー・スパイダーの効果が発動!! 『相手の効果によって破壊され』墓地へ送られたとき、相手の場の表側守備表示モンスター1体のコントロールを得ます!! 対象は勿論カタストル!!」

破壊されたインフォーマー・スパイダーから無数の糸が放射され、カタストルの体を絡めとりズルズルとベルのフィールドへと引き込んでいく。容姿からは想像もつかない凶悪な効果、しかしこれで災厄の壁は取り除かれた。

「続けて行きます!! ヴアルキュリアでダイレクトアタック!!」

「ぐツ……伏せカード発動!! 《聖なるバリアー—ミラーフォース—》!!」

十手で『突き』を放ったヴァルキュリアの攻撃は、虹色に輝く光の壁に阻まれ——直後、その衝撃を吸収した光の壁から無数の光弾が放たれた。

「お忘れですか? ヴアルキュリアの効果は——」

「そんなことは分かってる、だから取引といこうじゃないか……!?!」

額に汗を浮かべ、引きつった笑いを浮かべるシフトにかつての面影は無い。

ユウとのデュエルで傘下の実力者何人かから見限られ、大幅に勢力を削がれたばかりなのだ。こんな状況で素人の小娘に負けたとなれば、旅団の解散も有り得る。

恥も外聞も、時間の無駄もクソもない。

「こ、ここで君がヴァルキュリアの効果を発動しないでくれれば、僕は君達の旅団を厚待遇で傘下に迎え入れよう!! それだけじゃない、今までに売り払った君の友達も必ず取り戻そうじゃないか!! それでも足りないなら……」

他にもシフトはああだ、こうだと条件を並べてきたが、その一部始終をベルはぼかんとした表情で聞き流していた。理由は2つ。

1つ目。審判員機構を通して設定した『賭け品』を途中で変更することは出来ない為。よってこの『条件』はシフトの口約束に過ぎず、守られる保障はないということ。

2つ目。シフトが約束を守るような男でないことを、ベルが1番良く知っている為。

「どうだ!? 悪い条件じゃないだろう!? 今ならまだ間に合う、早く決断を——」

降り注ぐ光弾は、尚もヴァルクリアを穿たんと迫り来る。

まるで満点の星空。そんな光景を見上げてから、ベルは視線をシフトに戻すところこりと微笑んだ。

「……全力で、お断りします♪ 『アームズ・プロテクション』!!」

十手から再構築されたジュツテ・ナイトの幻影が見事な剣捌きで次々と光弾を打ち払っていく。巻き上がった砂塵の中に佇む高潔な戦神は、勿論無傷だ。

金属装甲の奥で鈍く光る感情無き瞳が、シフトを据える。

「あ……? 馬鹿が!! 止める!? 止めてくれ——!!」

今にも泣き出しそうなシフトに、ベルは問答無用で宣言を下した。

「攻撃は続行です!! 『ブレイヴ・ブロウ』!!」

戦神の放った鉄槌の光弾は背を向けて駆け出したシフトに見事命中し、そのライフを根こそぎ削り取る。

舞い上がる爆炎と、鳴り響くデュエル終了のブザー。

いつもより数段テンション高めの審判員機構は高々と腕を上げてアナウンスした。

『勝者あ（ウィナー）!! ユーリ・ベルガモットお!!』

シフト LP2200↓0

「無事か!? メイドちゃん!?」

デュエル終了から少しばかり遅れて、クラドと藍が現場に到着した。

情報収集の最中にシフトの旅団がこの街に滞在していることを知った藍が、酒場での騒ぎを聞きつけてクラドと合流し駆けつけたのだ。

「はいー…この通りピンピンしてますよー！」

息も切れ切れに滑り込んできた師匠らに、ベルは明るく微笑んで見せた。

ライフは結構ギリギリだったという事実はそつと胸に隠し、勝ち取った^{アンテイ}デツキを見せ付ける。

「それって……もしかして勝っちゃったの？ あのシフト・クロツカに？」

「お、おお!? あの野郎に一泡吹かせたのか……凄えぞメイドちゃん!!」

がしがしとクラドに頭を撫でられて、思わずはにかむベル。

そんな2人の様子を見て、藍はほつと息をついた。

「……どうやら、私の勝手な杞憂だったみたいね？」

ベルの芯の強さは藍も高く見ていたが、格上の相手を打ち破るまで至ると思っていなかったのだろう。

接してきた日こそ浅いが、ベルの勝利は藍も嬉しく感じられた。

「あ、あの……」

そんな最中、事件の渦中であつたネイティブの少女がおどおどと声を掛けてきた。

「見知らぬ私なんかを助けて頂いて、ありがとうございます……」

「あ、いやえつと。わたしとしても、ただほつとけなかつただけとか何というか」

しどろもどろになりながら言葉を繕うベルの背中に、クラドがバシンと喝を入れた。

「こういうときは、素直に礼を受けとくもんだぜ？」

突き出された笑顔とグッドサインに、ベルは頷いて答えた。

「……はい、どういたしましてー！」

そう言つて何気なく差し出した友好の右手。

しかしそれを受けた少女はビクリと肩を震わせると、一步二歩と怯えたように後ずさつた。

「? え、あの……?」

予想外の反応に困惑するベルは半歩距離を詰めたが、少女はまたも

後退する。

しんと流れる微妙な静寂。それを最初に破ったのは消え入りそうな少女の声だった。

「…………ごめんなさい。私、どうしても虫とか好きになれなくて……」

「へ？」

虫。

そう言われてみれば、今回のデュエルは戦士族は控えめな昆虫主体の戦いだった。

確かに見栄えは良くないかもしれないが、デュエルにおいてそんなものは二の次だ。

引かれる理由はない筈。ベルはそう思いながら一歩前へと踏み出した。

「ひっ!？」

「えっ」

怯える少女の瞳は語っていた。むしろ何であなたは平気なんですか、と。

インフォーマー・スパイダーの効果など、その手のモノが苦手な人からすれば悪夢も同義だろう。

「…………さ。行こうかメイドちゃん、もうやめたげよう。これが多分、普通の女の子の反応だ」

「普通!? ああ、じゃあわたしって…………？」

「英雄は得てして賞賛されるものではないわ。悲しいことだけどね」

「え、いや…………あのか」

昆虫族の何がいけないのか。

どこか腑に落ちない気持ちを抱えたまま、何度も涙目で謝る少女に手を振ってベルは酒場を後にしたのだった。

「で、何をやってんだセンサーは…………？」

「さあ…………わたしもよく分かりませんが…………」

リビングスペースから離れ、運転席から恐る恐る顔を覗かせるのはクラドとベルの両名。

「どすん、どすんと『ソレ』が叩きつけられる度、ビクビクと肩を震わせている。」

「おっかねえ顔して帰ってきたから何か掴んできたなと思ったが、まさか貴重な食料でストレス解消し始めるとはなあ……」

合流直後。付き合いの浅い藍には分からなかったようだが、ユウはどこか殺気立っていた。

ベルの勝利報告を聞き、頬を緩めるその様子を見てひとまず安心したクラドであったが——何を思ったのか「今日は俺が食事を用意する」などと言い出し、現在の状況に至る。

大量の小麦粉と少量の水を合わせ、粘土遊びの如き要領でこねては叩きつけ、こねては叩きつけ。

パンを焼くような設備など当然この車には搭載されておらず、その用途は不明。

「おまけに……なんだありやあ？ 何かの培養液か？」

「あれ、お買い物リストにあった『こんぶ』って海の食用草です……乾燥した状態で売られてたので、お薬か何かの材料だと思ったんですけど……」

鍋で『こんぶ』が無造作に煮込まれ、その煮汁が1リットルほどの容器にうつされてから早1時間。薄緑に濁った液体を背に、ひたすら小麦粉をこね続けるミスターポーカーフェイスの姿はまさに異様の一言に尽きた。

「俺らはこれから一体、何を食わされるんだ……？」

「分かりません。まだ『調整中』ですから……」

ぶるぶると震える2人を尻目に、藍だけはただ柔和に微笑んで大人しくテーブルに着いていた。

「……………これで詰み（チェックメイト）だ」

ひい、と小さく漏れた悲鳴は果たして誰のものだったのか。

ユウはゆつくりと出刃包丁を取り出すと、何の躊躇いも無く小麦粉の塊へと振り下ろした。

.....

「あら、美味しい。おダシもよく出てて喉越しも良いわ」

ちゆるちゆる、と出来上がったソレを啜りながら、藍は簡潔に述べた。

パスタにしては太過ぎる不思議な麺を、2本の棒を使って器用に口へ運んでいる。

「……藍が『醤油』を持っていてくれたお陰だ。この辺りでは入手も難しいそうだ」

夜間になると一気に冷え込むネイティブの気候。そんな肌寒い夜に染みる優しい味に、ベルとクラドは四苦八苦しながら舌鼓を打った。

「随分シンプルなスープ……ですけど、これ何ていうお料理なんですか？」

何の具材も入っていない、琥珀色のスープに艶のある白い麺が映える。

ベルは興味深々に尋ねた。

「……『うどん』という。俺が作れる料理といえませいせい、これが限度だ」

「へー。白き文明じゃコレが普通に食われてたりするの？」

「……さあ。どうだろうか」

クラドの何気ない質問に、ユウはどこか罰の悪そうに言葉を濁した。

「ま、美味けりやどうでもいいけどな。にしても、どうしてまた急に？」

「……こここのところベルと藍に馳走になってばかりだったからな。こちらも何か振舞いたかった」

ユウも2本の棒——『ハシ』を使って、音も立てずに上手く啜って見せる。

藍とユウの不可思議な技術に半ば見とれながら、ベルも負けじと

フオークを片手に応戦する。

多種多様な食事風景がしばし流れた後、おもむろに口火を切ったのはユウだった。

「……次の目的地についてだが、1つ要望がある」

「何だ何だ？ センサーって今日に限ってレアな一面ばかり見せやがって、今夜は雹でも降るってのか？」

そうやってクラドが茶化すも、ポーカーフェイスの口調は依然変わらず。

要望は端的に、淡々と告げた。

「ネイティブ唯一の観光都市・カセに寄りたい。『白面の女』が先日、そこへ向かったそうだ」

第7話 泣いた赤鬼、笑う青鬼

カセは古代遺跡の面影を残す文化遺産としても貴重な街で、ネイティブの数ある国・都市の中で唯一『観光都市』と呼ばれている。

とはいえ、歴史的な価値はあれども特に見所という見所も無く、^{ユートピア}白の観光地にある華やかさには程遠い。カセを訪れるのは歴史に触れ、静かな余暇を楽しもうと考える紳士淑女な初老の夫婦がほとんどだ。

穏やかな陽だまりの中、のんびりと遺文化見学……と行きたいところだが、今回ばかりはそうもいかない。

噂の《魂の牢獄》について何か知っているらしい『お面を被った女』。ユウの掴んだ情報から『白面の女』と呼ぶことになったその人物が、この街に来ているかもしれないからだ。

大会が開かれるシガマへの直行ルートから外れ、わざわざ立寄っただけの収穫があるかどうか。それは各メンバーの手腕に掛かっているのだが。

「すまん。コレはお世辞にも……なあ」

「ごめんなさい」

唯一の目撃者であるベルが、捜索用にと『白面の女』のイラストを描いて見せたのだが……幼児の落書きと何ら変わらないレベルのソレは正直、何の役にも立ちそうに無い。

女の人、と呼ぶにはあまりに等身の低い『マスコットキャラ的な何か』を眺めながら、クラドは苦笑し力なくうな垂れた。

「ベルちゃん、その人の特徴を私にも教えてくれる？ 出来れば細かめに」

「へ？ あ、はい……」

藍が落ち込むベルを励ましながら、ペンと紙を預かった。

「じゃあ、まずは――」

お面の特徴。色形。服のデザイン。髪型。体格。事細かな質問の連続に、ベルが記憶を搾り出すように細々と答えていく。

その間、藍はさらさらとペンを清流のように走らせ――瞬く間に、

『白面の女』の想像図は完成した。

「こんな感じで。どうかしら?」

「わ、凄いです藍さん! そうそう、丁度こんな感じの人でした!」
まるで魔法でも見たようにはしゃぐベル。白い狐の面を被り、赤いフード付きのコートを羽織った女性の姿が紙面に見事再現されていた。

ユウが聞き出した目撃者もほぼ同じ容姿を答えていたらしく、同一人物と見て間違いは無さそうだ。

「なるほど、狐の面だったのか。まあこんだけ怪しけりやすぐに見つかるだろ」

「ええ。コートも凄く特徴的なデザインだし……多分、別大陸の伝統装束か何かじゃないかしら?」

メンバーの不安を和らげるようにクラドが呟くと、藍も太鼓判を押すように意見を上げた。

「んじや、各自手分けして探して回ろう。今夜は宿を取ったから、夕飯時までには一旦宿に集まって情報交換だ」

クラドの指示に各自頷いて、前もって分担していたエリアへと向かった。

ユウとクラドは、情報を聞き出すにはある程度『腕っ節』が必要となる裏路地エリアへ。

ベルと藍は、現地人や観光客からの目撃証言を拾うべく観光エリアへ。

「じゃ、行きましようかベルちゃん。今日は1日よろしくね?」

「はい」

街を歩き、道行く人々に声を掛けていく。

現地語を話せるものの、情報収集のノウハウはサッパリなベルは藍の通訳として同行する形となったのだが、これが意外と良いコンビネーションとなった。

人々には観光地を訪れた青の美女アトランタと同伴する現地の召使い……といった風に見えるらしく、とにかく第一印象で警戒を抱かれずに済むのだ。

(メイド服だし、仕方無いか……)

そう溜め息をつく一方、大人の色香を放つ藍が隣に並ぶとどうしても劣等感が拭えなかつたりもする。

まだまだ子供である自覚もあるし、何より半野生児なネイティブ女子が麗しきアトランタレデイに追いつこうなど、無謀にも程がある。

それでも憧れてしまうのは女としての運命さだめなのか……我ながら面倒くさい奴、とベルは頭を抱えつつも、今は全力で召使い役に徹することにした。

遺跡の監視や、観光客の案内を請け負う現地人のスタッフに聞き込みを続けていたベルは、ふと映り込んだ遺跡の一角に思わず目を取られた。

「あの、これって……？」

「どうかしたの、ベルちゃん？」

「いえ……この遺跡に掘られてる壁画って、もしかしてデュエルモンスターズだったりするのかなあー、なんて」

随分と抽象的ではあるが、壁画には四角い窓のようなモノから魔物呼び出す古代の神官の姿が描かれていた。

勿論ベルに考古学の知識は無いので、周りにビツシリと描かれている文字が何を説明しているのかは分からないが、藍はその職業柄この壁画がどういったものなのかを知っているようだった。

「ああ、この壁画ね。もしベルちゃんの言う通りだったら面白かったんだけど……残念、コレはデュエルモンスターズとは無関係よ」

「あはは……まあ、やっぱりそうですよね」

大昔の戦争からデュエルが用いられていたとはいえ、流石に古代文明の時代からカードが世界の理を支配していた、なんて馬鹿げた話がある訳が無い。

「でも、全くの無関係とも言えないかもしれないわね。これは古代で行われた神官同士の戦を描いたものらしいのだけど……事細かにルールが設けられていたり、戦というよりは何かの競技や遊戯ゲームに近いものだったそうよ？」

どこか遠い目をして藍が語る。

デュエルモンスターズとは随分形は違えど、その在り方はどこか同じように感じられた。

「……そうだ、そろそろ喉が渴いたでしょう？ どこかでお茶でも頂きましょうか」

「え？ ああ、はい……？」

何を思ったのか、藍が何の脈絡も無く休憩を提案してきた。

遺跡を離れ、赤と黄色のパラソルが目立つ売店の下に向かいながら、藍は本当に小さな声で呟くように言った。

「——気をつけて。誰かに後を付けられてる」

「えっ!？」

思わず振り向きそうになったベルの頭を、藍が頭を撫でる仕草に見立てて固定する。

「気付かれちゃ駄目」

「は、はい……」

並々ならぬ藍の雰囲気と言い知れぬ不安を感じつつ、ベルは冷や汗を浮かばせて精一杯に頷いた。

カチコチに表情を強張らせたベルに苦笑しつつも、藍は何とか自然に振舞いながらベンチに腰掛け、売店で購入したお茶をベルに手渡しながら低く呟いた。

「さて……どうしたものかしら。このまま宿まで『お持ち帰り』するのは何としてでも避けるとして……全く、どこで地雷を踏んじやったのかなあ」

「あ、あの……藍さん。大丈夫、ですよね？」

「勿論。こんなの全然、大した修羅場じゃないわ」

そう言つてニコニコと微笑む藍にむしろ恐怖が増したベルであったが、そこは生唾と一緒に本音をごくりと飲み込んでしまうことにした。

「……よし。ここはベルちゃんにも一肌脱いで貰つて、ぱぱっと切り抜けちゃいましょう」

「えっ、わたしました脱ぐんですか」

「？ 何の話？」

きよとん、と顔を傾げる藍の様子にほつと胸を撫で下ろすベルだったが、そっち方面で無いとなると。

「それじゃ場所を移動しましょう。恥ずかしがり屋さん達が出て来やすいように、人気の無い場所まで、ね？」

観光都市であるカセも、遺跡エリアから少し離ればお馴染みの殺風景な荒野が広がっている。人の目は多くとも、その注目は遺跡に集まる。人目のつかない場所を見繕うのは簡単なことだった。

「ひい、ふう、みい……少数精鋭、といったところかしら？」

遺跡エリアを離れてすぐ、藍とベルは3人の男に取り囲まれた。

先んじてディスクを装着し、身構えながらにじり寄ってくるところを見ると、それなりに『場慣れしている』連中のようだ。

「こういうのは男の子チームの役目だったのね……向こうはやる気十分みたい。ベルちゃん、準備はいい？」

「はいっ！」

藍がショルダーバッグから、ベルがリュックからそれぞれ決闘者の『剣』を取り出す。

二枚貝を模したDパッドを、藍はまるでコンパクトミラーでも開いて見せるかのように、優雅な動作でディスクモードへと展開させた。

「——今だ、やれっ!!」

ディスクが展開すると同時。男の怒声と共に違法デュエルアンカーが伸び、すぐさま2人の退路を断つ。

『——『決闘申請』、確認。^{A R ウ ィ ジ ョ ン} 仮想戦場、^{リソク} 展開完了』

何の操作も無しに、デュエルモードがすぐさま起動する。

アンカーを発射したのはそれぞれ1人ずつ。リーダー格らしき残った男は万が一の為に様子見、といったところだろうか。

^{ギヤラー} 観客は空席のまま、仮想戦場が殺風景な荒野を塗り潰していく。何の因果か、今回の戦場は藍に馴染み深い海底遺跡だ。

『ジャッジアプリ
審判員機構、起動』

やはりというべきか。審判員機構は姉妹同時に呼び出された。

『集いし願いが、面白可笑しく世界を乱す!! 美少女審判員コーパルちゃん只今参上♪』

『……サイコロ振れば大体6。審判員機構ネフ、今日も絶好調です』
海底にちなんでなのだろうか。コーパルが亀、ネフが乙姫のコスプレをしている。

そんな2人の前に、『事前申請』と書かれた書類がぽんと出現した。
『おや? 今回はタッグデュエルをご希望ですか。アンティルールも絡んでくるとなると……何やら揉め事の匂いがぶんぶんですなー。くれぐれも決闘は楽しく仲良く、仲間割れはダメですよー?』
『……という訳で、ルール設定に問題が無ければ承認をお願い致します』

デュエルアンカーに審判員機構が反応してくれないのはベルも経験済みだ。

加えて、今回はあえて相手の誘いに乗っている訳なので、藍もベルも静かに首を縦に振った。大人しく状況を受け入れる2人の様子に怪訝に眉を寄せつつも、相対する男達も一歩遅れて承認の意を示す。
『はい、それではルールの確認です。対戦形式はタッグ、詳細設定はデュエルトのまま。ハーフライフ8000からのスタートになりますよー』

タッグデュエル。2人1組となり、1つのフィールド・墓地を共有し、合計4人のプレイヤーが交互にターンを進めていくデュエル方式。

今回が初めての経験となるベルは、果たして上手くやれるだろうかと不安に表情を曇らせた。

命運を分かち初期手札5枚がそれぞれに握られる。
審判員姉妹が揃って腕を掲げ、決闘は幕を上げた。

「決闘(デュエル)!!」

【ベル&藍】

LP8000

ベル：手札・5 モンスター・0 魔／罨・0
藍：手札・5 モンスター・0 魔／罨・0

【襲撃者A&B】

LP8000

A：手札・5 モンスター・0 魔／罨・0

B：手札・5 モンスター・0 魔／罨・0

大体6が出ると豪語したネフの振った賽は、その宣言通り6だった。

最も、それは相手側の白ダイスの方だけであり、ベル達の黒ダイスは無残にも2の目を叩き出していたのだが。

「あの……ネフさん？」

『申し訳ありません』

「ふん、まずはコチラから行かせて貰う。ドロー！」

よって、先攻ターンはあちらから。

ディスクの順番分けを確認すると、A↓ベル↓B↓藍の順にターンが回るようだ。

「俺は《マシンナーズ・ギアフレーム》を攻撃表示で召喚する！」

《マシンナーズ・ギアフレーム》

☆4／地属性／機械族・ユニオン・効果／ATK 1800／DE

F 0

出現したのは橙色の装甲の、華奢なデザインの機械兵だ。

ユニオン、という聞き慣れない能力名に身構えたベルだったが、このモンスターの持つ真に恐ろしい効果は別にあつた。

「ギアフレームの効果を発動！ 召喚成功時、《マシンナーズ・ギアフレーム》以外のマシンナーズ・モンスターを1体、手札に加えることができる！ 選択するのは《マシンナーズ・フォートレス》！」

いつかどこかで見た、とても嫌な思い出がベルの頭を過ぎる。

赤、黄、緑の三色が互いをサーチし合い、決して途切れることなく戦線に湧き出る不屈の機械兵達。このモンスターの効果はそれと良く似ていた。

「更に、マシンナーズ・フォートレスは手札の機械族モンスターを合計

☆8以上になるように捨てることで手札・墓地から特殊召喚が可能だ！俺は☆8の《マシナーズ・カノン》を捨て、手札から特殊召喚する！」

《マシナーズ・フォートレス》

☆7 / 地属性 / 機械族・効果 / ATK 2500 / DEF 1600

戦車のように重厚な体躯をキャタピラで駆動させ、空色の移動要塞が姿を現す。

先攻1ターン目から易々と出現したその強力なステータスに、ベルは思わず目を丸くした。

(☆7の最上級モンスターを簡単に……!!)

「そしてギアフレイムユニオン効果！1ターンに1度、メインフェイズに装備カード扱いで自分の機械族モンスターにこのカードを装備させることが出来る……無論、ここはフォートレスに装備！」ド派手な合体演出を経て、フォートレスに橙色の強化装甲が付加された。

自身のエースであるヴァルキュリアの効果を髣髴とさせるその効果に戦慄を覚えたベルだったが、白熱したコーパルの実況解説がそんな緊迫した雰囲気を見事に打ち砕く。

『キター!!いきなり出ました!!男の子のロマン、合体だぁ!!』

これは熱くならざるを得ないわよネフちゃん!!』

『……姉さん。少しはしやぎ過ぎです』

合体により強化されたフォートレス。見た目だけでは無く、その能力も厄介な効果が付加された。

「装備状態のギアフレイムは装備モンスターが破壊される場合、このカードを代わりに破壊することが出来る……これで俺は、ターンエンドだ！」

破壊耐性を持った強力な最上級機械族。

真正面から向かい合うベルの目にはしかし、当然ながら怯えの色は無い。

「わたしのターン、ドロォー！スタンバイからメイン、まずは魔法カ-

ド《増援》を発動！ デツキから《切り込み隊長》を手札に加えます！」

その動きに迷いは無く、次々と手札からカードを発動させていく。「更に手札から《サイクロン》を発動して、装備状態のギアフレームを破壊！ 続けて《切り込み隊長》を通常召喚し、効果により手札から《ジュツテ・ナイト》を特殊召喚！」

ベルの場に揃う、チューナーと非チューナーモンスター1組。その合計レベルは5。

「チューナーモンスター!? くそ、シンクロか……!!」

歯噛みする相手の男の反応に少しだけ安堵しつつ、ベルは高く片腕を上げて宣言した。

「行きます！ わたしはチューナーモンスター、ジュツテ・ナイトに☆3の切り込み隊長をチューニング！」

チューナー本来の能力を解き放ち、ジュツテ・ナイトが2つの緑光の輪となって切り込み隊長の姿を変質させていく。

「……造られし模倣の正義よ、希望も絶望も隔てなく引き裂く災厄となれ！」

光の柱が立ち上り、召喚の成功をベルに知らせる。

前回のデュエルで猛威を振るった災厄の機械兵。それが今、頼もしい仲間としてベルのフィールドに舞い降りた。

アーリー・オブ・ジャステイス

「シンクロ召喚！ 起動せよ、《A・O・Jカタストル》！」

《A・O・J カタストル》

☆5 / 闇属性 / 機械族・効果 / ATK 2200 / DEF 1200

単眼に光が灯り、敵を捉える。記念すべきベルの初シンクロは見事に決まった。

「そのままバトルフェイズ、マシンナーズ・フォートレスに攻撃！ カタストルの効果で、闇属性以外のモンスターはダメージ計算を行わずに破壊します！」

「ぐっ……厄介な」

ベルの攻撃宣言に、相手の男は苦々しい表情を浮かべた。

フォートレスは戦闘破壊時・モンスター効果の対象となったときにそれぞれ効果を発揮するのだが、カタストルとの戦闘では効果破壊扱いとなり、その効果は『対象を取る』ものではない。要するに相性は最悪なのだ。

成す術も無く、フォートレスは災厄の凶爪に引き裂かれた。

「メイン2、バックカードを2枚伏せてターンエンドです！」

戦果は上々、返しのターンへの準備もバッチリ。

タッグデュエルというこの状況下で、藍へのバトンを上手く繋げた筈だ。

「小娘がやってくれるじゃねえか……次は俺のターンだ、ドロー！」

【ベル&藍】

LP8000

ベル：手札・1 モンスター・1 魔／罨・2

藍：手札・5 モンスター・0 魔／罨・0

【襲撃者A&B】

LP8000

A：手札・4 モンスター・0 魔／罨・0

B：手札・5↓6 モンスター・0 魔／罨・0

「俺は墓地のフォートレスの効果を発動！ 手札の☆8機械族、アンティーク・ギアガジエルドラゴン《古代の機械巨竜》を捨て、墓地から特殊召喚！」

破壊した筈のフォートレスが、地中から復活を遂げた。

カタストルには太刀打ちできないことを知ったの上での蘇生。相手の思惑が見えず身構えるベルだったが、隣で控える藍が苦笑を浮かべつつ呟いた。

「マシナーズに古代の機械……まあタッグデュエルを指定してきた以上、ある程度予想はしていたけれど」

「な、何かマズいんですか？」

「ナイスカップルって事よ。見ていれば分かるわ」

藍の言葉が聞こえたのか、男はニヤリと顔を歪めた。

「気が付いたか……俺はフィールド魔法、ギア・タウン《歯車街》を発動！」

海底の戦場を上書きし、巨大な歯車が蠢く機械の街が姿を現した。

「このフィールド魔法がある限り、「アンティーク・ギア」モンスターをアドバンス召喚する際に必要なりリースを1体少なくすることが出来るが……このカードの真骨頂はそこじゃあねえ！俺は手札から《サイクロン》を発動し歯車街を破壊する！」

顕現した歯車の街並は、即座に巻き起こった竜巻によって蹂躪され、瓦解していく。

「自分で発動したフィールド魔法を……どうして？」

「やっぱり、『そう』来たわね……」

怪訝に眉を寄せるベルに、納得した様子の藍が軽く溜め息を漏らした。

「——歯車街は破壊されたとき、隠された効果を発揮する！」

フィールドは再び海底の景色へと戻るが、歯車街の瓦礫が砂埃を立てて視界を遮る。

まるでモンスターゾーンに出現した巨大な『何か』を隠すように。

《古代の機械巨竜》

☆8 / 地属性 / 機械族・効果 / ATK 3000 / DEF 200

0

「!? あれはさっき手札から捨てた……!!」

突如姿を現した歯車の機械竜に、ベルは思わず声を上げた。

「偉いわベルちゃん、しつかり相手のコストを確認してたのね？」

「あ、ありがとうございます……じゃなくて!!」

どこか嬉しそうに微笑む藍は、ブンブンと首を振るベルに穏やかに答えた。

「くすくす、ビックリしたわよね？ 歯車街は破壊されたとき、手札・

デッキ・墓地のいずれかから「アンティーク・ギア」モンスターを1体特殊召喚出来るの。さっきのフォートレス蘇生のコストは実質ゼロになった、という訳ね」

「そ、そんな……」

並び立つ最上級機械はどちらも攻撃表示。時間稼ぎの壁作りではないというのなら、相手は既に『カタストル突破』の手段を抱えているということになる。

とてもじゃないが笑って構える余裕はない。ベルは藍の態度がさっぱり理解できなかつた。

「ふん、講義は終わったか？ 俺は装備魔法《レインボー・ヴェール》を機械巨竜に装備し……バトルフェイズに入る!!」

ガコン、と重々しい起動音を上げ、虹色のオーラを纏った機械竜がカタストルを標的に据える。

「レインボー・ヴェールを装備したモンスターが戦闘を行う場合、そのバトルフェイズ中相手モンスターは効果を発動出来ない!!」

やはり持っていた突破口となるキーカード。

だからといって、大人しくやられる訳にもいかない。ベルは慌てて伏せカードを発動させた。

「それなら……罠カード発動です!! 《魔法の筒》……ッ!?」

ベルが発動したのは、相手モンスターの攻撃をそのまま跳ね返す強力な罠。

しかし、立ち上がるべき伏せカードはベルの声に応えてはくれなかつた。

「な、何で……?」

「ベルちゃん、残念だけど。「古代の機械」モンスターは、攻撃する時に魔法・罠の発動を封じる効果を持つものが多いの。あの機械巨竜も同じ効果を持っているわ」

脆くも突破された二重の防壁。

折角召喚したカタストルは機械巨竜の顎に捉えられ、砕かれてしまった。

【ベル&藍】 LP8000↓7200

「続けて行くぞ!! フォートレスでダイレクトアタック!!」

「通しません!! 今度こそ《魔法の筒》!!」

「!? ちよつと待ってベルちゃ……」

珍しく慌てた様子の藍が制止するも、カードの発動は間に合わず……。

「馬鹿が、罠に掛かったのはお前らの方だ!! 速攻魔法発動、《ダブル・アップ・チャンス》!!」

「あー……」

罨の存在を知った上での攻撃宣言。何かあると感づいたのが少しばかり遅かったと、藍は後悔に頭を抱えた。

「このカードはモンスター1体の攻撃が無効になったときに発動、そのモンスターの攻撃力を倍にしてもう1度攻撃させる！ 魔法の筒のダメージまでは防げないがな！」

「なっ……ええっ!?!」

【襲撃者A&B】 LP8000↓5500

《マシンナース・フォートレス》

ATK 2500↓5000

驚くベルをよそにフォートレスは全身の動力をフル稼働させ、その肩に担ぐ砲台にエネルギーを収束させていく。

『見て見てネフちゃん!! 今度は溜め攻撃よ!^{チャージショット} もう男の子心がくすぐられ過ぎてお姉ちゃん大興奮です!!』

『……姉さんは、兄さんだったのですか?』

キヤーキヤーと騒ぎ立てる審判員機構とは対照的に、ベル&藍サイドは呆然とその光景を眺めていた。

何ですかアレと怯えた表情で指をさすベルに、藍は両手を合わせてゴメンネと頭を下げる。

ちなみにお互い、無言のジェスチャーである。

「喰らえ!! 2度目のダイレクトアタックだ!!」

2人の足元に着弾したフォートレスの攻撃が、爆風を巻き起こし容赦なく吹き飛ばす。

「きやあああっ!?!」

【ベル&藍】 LP7200↓2200

「俺はこれでターンエンドだ。このまま押し切って勝利を決めてやる……!!」

「そんな残りライフ、タッグじゃ虫の息も同然だ。サレンダーしたらどうだ?」

不敵に笑う襲撃者に、精一杯の力を込めて立ち上がるベル。

ふと隣を見れば藍も同じように、しかしどこか優雅にゆつくりと立

ち上がった。

「……そうね、それは私も同感」

「藍さん!？」

思わぬ言葉が飛び出し、ベルが責めるように声を荒げたが、不敵に笑う藍の横顔に思わず息を呑んだ。

「タツグデユエルじゃ、あなた達5500も虫の息つて事には、ね？」
にこり、と微笑みを向ける藍。

可憐な華に似たその笑顔は味方には安らぎを、敵には冷たい戦慄を与えた。

「な、何を戯言を——」

「私のターン、ドロ——」

【ベル&藍】

LP2200

ベル：手札・1 モンスター・0 魔／畏・1

藍：手札・5↓6 モンスター・0 魔／畏・0

【襲撃者A&B】

LP5500

A：手札・4 モンスター・1 魔／畏・0

B：手札・2 モンスター・1 魔／畏・0

(そういえば、藍さんのデッキってまだ見たこと無かったっけ……)
練習で何度か相手をして貰ったことはあったが、そのときはクラウドから借りた調整用のデッキを用いていたものだった。

本気の、彼女のオリジナルデッキを見るのはベルも今回が初めてとなる。

「メインフェイズ。まずは手札から《プリンセス鯉っ子姫》を召喚」

《鯉っ子姫》

☆1／水属性／魚族・効果／ATK 0／DEF 0

先陣を切って現れたのは、藍のイメージには似合わないデフォルメされた魚の乙女。

「このカードが召喚・特殊召喚に成功したとき、自身をゲームから除外することでデッキから☆4以下の魚族モンスターを特殊召喚するわ。」

私が呼び出すのは……この子よ」

鯨っ子姫がキッスを投げると、泡のエフェクトに包まれながら姿を眩ました。

「来なさい、《リチュア・アビス》！」

《リチュア・アビス》

☆2 / 水属性 / 魚族・効果 / ATK 800 / DEF 500

魚乙女に代わって出現したのは、凶悪な顔つきの鮫型モンスター。

ブーイングの嵐でも起きそうなバトンタッチだが、その選択に間違いは無い。

「この瞬間、アビスの効果を発動。デッキから守備力1000以下の「リチュア」モンスター1体を手札に加える。手札に加えるのは《ヴィジョン・リチュア》」

《ヴィジョン・リチュア》

☆2 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 700 / DEF 500

たった1枚のカードから次々とカードが繋がっていくその光景は、まさに流れる水の如く。しかし現状では2体の機械族に立ち向かえるようなモンスターは影すら見えない。

「ヴィジョン・リチュアの効果を発動。このカードを手札から捨て、デッキから「リチュア」の儀式モンスター1体を手札に加えるわ。選択するのは《イビリチュア・ソウルオーガ》」

「儀式、モンスター？」

見慣れない青枠のモンスターカードに首を傾げるベル。

シンクロのようにエクストラデッキから呼び出すタイプのモンスターでは無さそうだが……。

「更に手札から《シャドウ・リチュア》を捨て、効果を発動。「リチュア」の儀式魔法カードを1枚デッキから手札に加えるわ。《リチュアの儀水鏡》を手札に」

《シャドウ・リチュア》

☆4 / 水属性 / 水族・効果 / ATK 1200 / DEF 1000

次々とサーチされては消え、新たなカードを呼び込むリチュアのモンスター達。

水面下で蠢くような不気味な動きを、ベルは固唾を呑んで見守った。

「魔法カード発動、《トレード・イン》。手札の☆8モンスター《イビリチュア・ソウルオーガ》をコストに捨て、デッキから2枚のカードをドロー」

ドローカードを確認した藍の口端が吊上がる。フィールドには勿論、墓地にもそれらしい逆転のカードは何も無い。

ただ、見えない藍の手札の中で確実に『何か』が牙を研ぎそのときを待っている。暗い夜の海を眺めるような底なしの恐怖に、男達は身を震わせた。

「続けて魔法カード《サルベージ》を発動。墓地の攻撃力1500以下の水属性モンスター2体を手札に戻すわ。ヴィジョン、シャドウの2体を手札に。更に2体の効果……デッキから《リチュアの儀水鏡》とソウルオーガを手札に」

「くそ……いつまで待たせる気だ!? さっさとターンを進めやがれ!!」

痺れを切らしたように……いや、重く押し掛かるプレッシャーに耐えかね、男の一人が声を荒げた。

「ごめんなさいね、女は準備に色々と時間が必要なのよ……ま、これ以上は審判員機構にも『遅延行為』とも判断されかねないし。そろそろ行きましようか?」

静かに波を打つ水面が渦を巻くように、リチュアの侵攻は幕を開けた。

「では、儀式魔法《リチュアの儀水鏡》を発動。手札のソウルオーガをリリースし、同じレベルの儀式モンスターを特殊召喚するわ……降臨なさい、《イビリチュア・ソウルオーガ》!!」

《イビリチュア・ソウルオーガ》

☆8 / 水属性 / 水族・効果 / ATK2800 / DEF 2800

毒々しい色合いの鱗に身を包んだ海の鬼神が、大きなヒレをなびかせて咆哮を上げた。

(これが『儀式召喚』……)

儀式魔法を使い、召喚したいモンスターと同じレベルになるよう他のモンスターをリリースすることで降臨する、特殊召喚モンスター。その性質から手札の消費が激しく、扱いが難しい玄人向けのデッキであるが……藍の手札はそんな定評を覆すが如く未だ4枚のカードを残している。

「ここで墓地の儀水鏡の効果を発動。このカードをデッキに戻すことで、墓地の「リチュア」儀式モンスター1体を手札に戻すわ。選択するのはソウルオーガ。更に手札からもう1枚の儀水鏡を発動、手札の☆8モンスター《護封剣の剣士》をリリースし、ソウルオーガを儀式召喚！」

2体目の鬼神が咆哮を上げる。たった1匹の魚乙女から始まった小波は、墓地・手札・フィールド・デッキ……ほぼ全てのカードゾーンを次々と操ることで、☆8の最上級モンスターを2体並び立たせるまでに大きく勢いを増していた。

「だ、だが!! いくら☆8を並べても攻撃力は古代の機械巨竜の方が上!! グダグダと遠まわしに召喚しやがったが、所詮はコケオドシで——」

「それはどうかしら? ソウルオーガの効果を発動」
鬼神の足元から水流が逆巻き、巨大な渦潮を形作る。

「1ターンに1度、手札から「リチュア」モンスター1体を捨てることで、相手フィールド上の表側表示モンスター1体を持ち主のデッキに戻す……ご自慢の機械巨竜にはご退場願おうかしら?」

藍が手札の《リチュア・チェイン》を墓地へ捨てたことがトリガーとなり、鬼神は渦潮の進路を標的へと導いた。敵を捉えた渦潮は瞬間に機械巨竜を飲み込み——跡形も無くどこかへ消し去ってしまった。

「くっ……!!?」

「さて、もう1体の効果を……と行きたいところだけど、その前に場のリチュア・アビスをリリースして、手札の《シャークラーケン》を特殊召喚しておくわ」

《シャークラーケン》

☆6 / 水属性 / 魚族・効果 / ATK 2400 / DEF 2100

「シャークラーケンは自分フィールドの水属性モンスターをリリースすることで手札から特殊召喚が出来るカード……なのだけど、困ったわね。これで私の手札はゼロ、もう1体のソウルオーガの効果で捨てる「リチュア」が無いわ」

ふう、と溜め息をつく藍の様子を見た男は、内心でほくそ笑んだ。

場にはまだマシンナーズ・フォートレスがいる。先程のカタストル戦では発揮できなかったが、フォートレスは戦闘破壊されたとき相手モンスター1体を道連れに破壊する効果がある。もう1つ、相手モンスターの効果対象となったときにも相手の手札1枚を捨てさせる効果もあるのだが、既に無手札状態（ハンドレス）の藍に効果は無いし、何より肝心のソウルオーガは効果を発動出来ずにいる。

ソウルオーガ1体の攻撃をフォートレスで受け、効果でもう1体のソウルオーガを破壊すれば、残ったシャークラーケンのダイレクトアタックのみでダメージが抑えられる。

幸い、こちらの手札は潤沢だ。相手チームの僅かな残ライフを刈り取るなど造作も無い。

この決闘、勝った！ 男がそう確信した刹那。

「……なんて、間抜けなコト言うと思った？ 墓地の儀水鏡の効果を発動、墓地のソウルオーガを手札に戻すわ」
「!?」

開いた口が塞がらない、といった光景を、ベルは今この瞬間に目の当たりにした。

「決闘者が手札を全て使い切るときは、このターンで決着をつけるという強い意思の表れ。あんな見え見えの降参宣言にニヤニヤしちゃって、カードの効果くらいよく聞いていたら？」

とんとん、とソウルオーガのカードを額に当てながら藍が煽る、煽る。

真っ赤な顔で髪を逆立たせつつも言葉を詰まらせる男達と涼しげな藍を見比べながら、ベルは頬を引きつらせた。

（鬼だ……鬼畜（おに）がいる……！）

「さて、そろそろお開きにしましょう。ソウルオーガの効果を発動、フォートレス1体をデツキへ戻す。^{バウンス}フォートレスの効果は一応発動するけれど……これで手札は真正正銘のゼロ、意味は無いわね？」

スツキリ爽やかな風を気持ち良さそうに受けて、艶やかな黒髪がふわりと舞う。

につこり微笑んで、藍は歌うように告げた。

「バトル、ダイレクトアタック♪」

当然ながら手札誘発のカードなどあるわけも無く。

男達の悲鳴は見事、激流に押し流され消え去った。

『う、勝者、^{ウィナー}ベルさん&藍様あ〜……』

『……姉さん。気持ちは分かりますが、その呼び方は色々とマズいので止めて下さい』

【襲撃者A&B】 LP5500↓0

*
*

賭け品としてこちらから何も提示していなかった為、特例として相手の賭け品であった『情報の提供』をそのままそっくり相手方に適用されることになった。

結果、男達を逃げられないように縄で拘束して貰った上で、審判員機構にはしつかり同席して頂いた。

「さて……色々と話して貰いたいことはあるのだけど……まず最初に、何故私たちを狙ったのかしら？」

「……………」

だんまりを決め込もうとした男達だったが、コーパルがどこからともなく注射器を取り出すと生気の無い顔でペラペラと話始めた。

「あ、あの女の関係者だと。そう思ったからだ……」

「あの女？ 一体誰のこと？」

「……お前らが聞いて回ってた、面を被った女のことだよ」

思わず顔を見合わせる藍とベル。思わぬところで目撃証言が得られた。

早々に問いただしたくなる衝動を抑え、藍は手馴れた様子で話を聞

き出す。

「私たちの探してる女性と、あなた達はどういう関係なの？」

「……奴に俺達の旅団を壊滅させられた。リーダーも、仲間の殆どが奴に『消された』んだ」

「消された？」

倒されたではなく、消された。

嫌な予感のする言い回しに、藍の表情も険しくなる。

「……どうせ信じやしないだろうが。奴にデュエルで負けた仲間は皆、カードの中に閉じ込められちゃった。俺達は幸い、観客側にいて事無きを得ただけだ」

「奴について何か知ってるなら答えてくれ！ 仲間を取り戻さなきゃならねーんだ！」

悲痛な面持ちで訴える男を前に、ベルは言葉を詰まらせながらも呟いた。

「藍さん、もしかしてそれって……」

男達の言葉に嘘は無いとすれば、それは――。

「闇の、ゲーム……？」

都市伝説のオカルト話は、たった今現実の色を帯びて2人の目の前に姿を現した。

第8話 T r i c k o r S u r r e n d e r

？

「勝者には更なる過酷な追撃を。」

敗者は規定数の保存、及び適宜な消去を。

は、後者だった。

自分の名を必死に叫んで手を伸ばした少女の身代わりになることすら叶わず、無様な敗北を喫した。

何が足りなかったのか。何故こんなにも自分は弱いのか。

いくら問い掛けても、その手に握り締めた白き龍は何も答えてはくれない。

膝を折り、無力に震える夕へ『罰ゲーム』の執行が宣言される。

意識は暗く、深い闇の底へと沈んでいく。

彼女も今、こんな冷たい孤独に包まれているのだろうか。

そうと思うと居た堪れなく、何より悔しかった。

.....

.....

.....

「ぐっ……」

倒れ伏した黒服の男を見下して、ユウは淡々とホルダーにデツキを収めた。

それは奇しくも、ベルと藍が襲撃者たちを破った時刻と同時だった。

『ゲームエンド。勝者、ユウ||キリサキ』

審判員機構のネフが高々と腕を上げる。たかが『システム』と呼ぶにはあまりにも人間臭い彼女達だが、こうして同時刻に別々の場所に出現することが出来るのは『システム』であるが故の人間離れした芸当だ。

『ユウ様。賭け品譲渡の際の立会いは——』

「必要無い」

『畏まりました』

ユウは素っ気無い反応とは対照的に丁寧な仕草で一礼したネフは、^{AR}仮想戦場と共に姿を消した。

そんな僅かな隙を突き必死に地を這って逃走を計る男だったが、今のユウがそれを許す筈が無い。

「——おい」

足早に追いついたユウは男の襟首を掴んで強引に立たせると、腕を固めて身動きを封じたまま勢い良く壁に押し付けた。

「がっ……!!?」

「答えろ。『白面の女』はどこにいる」

いつもと変わらぬ、抑揚の無い声。

だがその瞳には静かに熱を帯びる青い炎が、不気味にゆらゆらと蠢いている。

「お、おいセンサー? いくら何でも少しやりすぎじゃねーか……」

「答えろ。どこにいる」

傍で控えていたクラドが落ち着くように促すが、全く耳に届かない様子だ。

——この黒服の男は、『白面の女』について何か知っている素振りを見せた。男の風貌から厄介な気配を感じ取っていたクラドは多少の荒事もやむなし、とは考えていたのだが……それは精々、こちらに降りかかった火の粉を払う程度のこと。こちらから油を撒いて放火するような真似は願ひ避けだ。

「……だ、誰が貴様のような輩に『お嬢様』を……!!」

傍目から見てもこれ以上は危険、という力が男の腕に掛かり、鈍い音を立てて軋ませる。直後、男の口から獣のような呻き声が響いた。

人気の無い路地裏のエリアとはいえ、これ以上騒ぎを起こせば厄介なことになるかねない。クラドは竦む体へ懸命に命令を掛けて、ユウを男から引き剥がそうと必死に掴み掛かった。

「いい加減にしろ!! 必要以上に痛めつける理由は無いだろ?!」

男が吐かないなら他に方法は幾らでもある。過度な暴力はこちらにとつても不利益しか生み出さない。今のユウは、そんなことすら見失っているようだ。

『答え』が近づいて焦るのも分かるけどな、もうこれはアンタだけの問題じゃねーんだぞ?! ちつとは皆のことを考えてくれ!!」

皆。その言葉に、ユウの思考が一瞬クリアに戻る。

脳裏に浮かんだのは、自分を慕ってくれる純粹無垢な褐色の少女。その姿に、笑顔に。遠い記憶に映る少女の面影が重なった。

「……………」

しばしの無言が続いた後。クラドが引き剥がすまでもなく、ユウは男の拘束を解いた。

男は痛みには耐えかね、苦痛に顔を歪めながら再び地面に蹲る。

「はあ、つたく……いつものポーカーフェイスはどうしたよ? 雷雨なんて天候、センサーらしくねーぜ?」

実際には普段と同じく表情変化の乏しいユウだったが、彼を良く知らずとも感情が分かる程度には荒れ具合が分かるのだ。

また荒れだす前にと、クラドはユウと男の間に割って入るようにしやがみ込み蹲る男に交渉を始めた。

「おーいオッサン、ウチのセンサーがおつかねえのは良く分かったろ? つー訳で1つ妥協案なんだけどよー……」

「その必要はありませんわ」

どこからか凜とした少女の声が響いたかと思うと、クラドのすぐ傍に黒い影のような立体感の無い剣が突き刺さった。

「うおああ!」

慌てて飛び退くクラドの後を追うように、影の剣が2本、3本と突き立てられていく。

「なっ、こりゃあ……半実体のARか?」

何とか冷静さを保ちつつ、クラドは影の剣を凝視した。

つんつん、と指先で突いてやると、影の剣はデュエル時と同じ破壊エフェクトを散らして消滅した。

「あら? 私 わたくし本気で狙いましたのに……『不快害虫』並みの反射神経

をお持ちのようですわね？」

まるで陶器を響かせたような済んだ声色が、無粋な闇の中を踊る。カツカツと靴音を響かせて、声の主が姿を現した。

「お、『お嬢様』!? 何故——!!」

男が思わずといった様子で、悲痛な声を上げる。

クラドは、声の主の風貌を見るなり声を上げそうになった。

(白面の女!?! ……いや)

お嬢様、と呼ばれたその少女は漆黒のドレスを身に纏い、その素顔を白い仮面で隠していたが……それは『白面の女』の狐それとは大きくかけ離れた、貴族が戯れに用いる舞踏会用のものであった。ベルやユウの掴んだ目撃証言とも風貌が違う。

「ファミリーに手を出されて尚、引き下がるような『血』ではないこと……お前なら分かっているでしょう?」

その右腕には十字の金装飾が施された漆黒のDパッドが、デュエルモードとなって起動している。つまり先程の攻撃は審判員機構を用いた『正当防衛』だったということになる。

「失礼。その男がどんな粗相を働いたかは存じませんが、ここまで暴力を振るわれて黙っている訳にはいきませんの。ここから先は私がお相手致しますわ」

仮面の少女はドレスの裾を摘むと、優雅な仕草で一礼した。

彼女の口から飛び出したいくつかのワードから、クラドはある仮説に辿り着き——同時に戦慄を覚えた。

「……センサー逃げるぞ。こいつら多分『決闘組』だ」
デュエルファイア

決闘組。デュエルモンスターズの力を使い、世の裏社会を取り仕切る稼業を生業とする人々の総称。表の人間には滅多に危害を加えるようなことは無いが、こちらから手を上げればその限りではない。

何故こんな辺境の観光地にいるのか分からないが、決闘組を敵に回すなど恐らく旅団最大の危機だ。ユウの腕を掴み、しきりに引っ張るクラドだが、当の本人は決して動こうとはしない。

「お、おいセンサー!?!」

「……1つ尋ねる。お前が『闇のゲーム』を仕掛ける『白面の女』か」

彼女がそうである可能性は恐らく、万に一つも無い。完全にこちらの誤解だろう。

それでもユウは、いつもと変わらぬ口調で愚直に問いを掛けた。

「一体何のことやら。もはや貴方の下らない世間話になど傾ける耳はありませんわ、さつさとディスクを構えなさい」

「……そうか。分かった」

Dパッドをディスクモードに変形させ、ホルダーからデッキをセットする。

クラドの言葉など聞く耳持たず。ユウの闘る気は満々のようだった。

「だっ!? ダメだってセンサー、これ以上はNGだ!! あの子、メイドちゃんの目撃証言とも違うだろ!?!」

「……情報が間違っている可能性と、彼女が嘘をついている可能性を潰す。そうでなければ『搜索』の意味が無い」

「……わーかったよ、好きにしろ!! でも埋められるときはアンタが下だからな!?!」

半ばヤケクソにその場に座り込んだクラドを尻目に、いつも通り決闘の準備が整っていく。

『仮想戦場、ARワイジョン展開完了。ジャッジアプリ審判員機構、起動』

『……ネオスペースで僕と同盟。あくしゅ過労死同盟ネフ、推して参ります』

先程別れたばかりのネフが再び呼び出される。

ユウに負けず劣らずなポーカーフェイスの彼女だが、その表情にはいささか不満の色が伺えた。

そんな彼女に物怖じもせず、仮面の少女は端的に設定を告げる。

「審判員、アンテイ賭けルールの設定を。私は、あの殿方への然るべき制裁を望みます。そちらは? 何か聞きたいことがあったようですけれど」

「……嘘を付いているなら真実を。そうでなければ俺達に協力を」
ユウの切り出した賭け品に、クラドはにやりと口端を上げた。

(……センサーもやっと頭が冷えてきたみたいだな)

勘違いから過度に手を上げてしまったのは完全にこちらの落ち度であるが、賭け決闘というこの状況を利用すれば、汚いやり方ではあ

るが全てをチャラにした上に決闘組の協力を得られる。

加えてユウの実力は折り紙つき。敗北のリスクを心配する必要も無い。

「いいでしょう、その条件飲みましたわ」

『承知しました』

「お嬢様!!」

あまりにも呆気なく了承した仮面の少女に、黒服の男が咎めるように声を上げたが、それら全てを凍てつかせるように少女は低く問い掛けた。

「お前は……この私が万が一にも負けるかもしれないと?」

「——いえ。滅相ありません」

「なら黙って見ていなさい。『ラムジョレーン』の由緒正しきデュエルを」

少女が発したその名前に、座り込んでいたクラドが思わず立ち上がる。

「なつ……ラムジョレーンだあ!? 何だつてこんなトコに!」

「あら? まさか不快害虫様にまで名が知れているとは……真に光栄ですわ」

ケタケタと楽しげに笑う仮面の少女を、クラドが恨めしげに見据えた。

「……クラド、何か知っているのか」

「まあ、な。奴ら『悠久の黒』ヒストリア・ソワールじゃ有名な、アクションデュエルで一旗上げた異色の『劇団』兼『決闘組』さ」

アクションデュエルはARの半実体化機能を利用した、デュエルをパフォーマンスの一環として昇華させた特殊な決闘方式の1つだ。

勝敗の行方よりも、その最中に行われるモンスターと決闘者ネイティブとが織り成す見事な曲芸が観客の注目を集める。殺伐としたこの地ネイティブではとても味わえない、まさに『贅』を極めたデュエルと言っても良いだろう。

「今更で悪いが。気を付けろよセンサー、奴らの実力は半端じゃねえぞ」

「……分かった。忠告、感謝する」

ユウの実力があればと大船に乗ったつもりでいたクラドだったが、あの『ラムジヨレーン』が相手となれば白き豪華客船も途端に幽霊船と化す。

最悪、荒野の土に還ることも覚悟しつつ、クラドは3歩ほど引いてデュエルを見守る位置に付いた。

『それではデュエルを開始致します。ルールはハーフライフ4000からのスタート、アンティの設定を適用、他はデフォルトからの変更はありません。宜しいですか?』

両者が共に頷き、ネフが高く腕を上げる。

二振りのサイコロが宙を舞うと同時に、運命を決める舞台の幕は颯爽と開かれた。

「^{デュエル}決闘!!」

ユウ LP4000 VS ??? LP4000

少女のサイコロである黒のダイスは、見事に6の目を示していた。先攻を示すサインが華やかな黒金のDパッドに表示されると、少女はくるりと身を翻し、恭しく礼をして見せた。

「おやおや……これは僥倖。では先攻は私から頂きますわ。ドロークード」

ユウ LP4000

手札・5 モンスター・0 魔/罫・0

??? LP4000

手札・5↓6 モンスター・0 魔/罫・0

「まずは様子見、と参りましょう。バックカード2枚をセット、更にモンスターをセットしまして、ターンエンドにございます」

静かで、それでいて良く通る澄んだ声。1つ1つ指先に至るまで洗練された、舞を踊るかのような丁寧な仕草を魅せ付ける。

たった1ターンで、黒服の男を含めた3人の観客はあつという

間に彼女の世界に『飲まれて』しまった。

(くそ……あくまでアクションデュエルのスタイルを崩さねえ気か)
敵愾心を煽ったり、己を偽り油断を誘ったり……最終的には決闘者同士の『心理戦』となるこのデュエルモンスターズにおいて、相手を自分のペースに引き込むというのは中々に重要なウエイトを占める。相手がクラドであれば早速調子を崩されていたところであろうが、対峙するは無表情の白騎士。この手の効果は一切受け付けない。

「……俺のターン、ドロー」

クラドの憤りをよそに、ユウは淡々とフェイズを進めていく。

華美な装飾で着飾った少女の1ターンとは対照的な、必要最低限の質素な1ターン。

「魔法カード《ソーラー・エクステンジ》を発動。《ライトロード・ビースト ウォルフ》をコストにデッキから2枚をドローした後、更に2枚を墓地に送る」

墓地へ送られたカードを確認し、召喚すべきカードを見極める。

既に龍の息吹は手の中に。ライトロードの「落ち」が足りない今、躊躇いは無い。

「……手札から通常召喚、《ライトロード・サモナー ルミナス》。何もなければ効果を発動させて貰う」

「ええ、どうぞ。構いませんわ」

《ライトロード・サモナー ルミナス》

☆3 / 光属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 1000 / DEF 1000

2枚の伏せは召喚反応では無いのか、またはルミナスの蘇生先に発動するのか。

沈黙を続ける『サプライズ』に対しても、ユウは恐れず宣言を続けた。

「手札の《ネクロ・ガードナー》をコストに、墓地のウォルフを特殊召喚」

《ライトロード・ビースト ウォルフ》

☆4 / 光属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 2100 / DEF 30

白銀の獣戦士が復活の咆哮を上げるが、その召喚に対して少女の宣言はない。

訝しげに眉をひそめたのはクラドのみで、ユウはともかく——肝心の少女の口元からは微かに笑みが零れていた。

「……バトル。まずはウォルフでセットモンスターを攻撃」

ともなれば、残る可能性は攻撃反応罠。

そんな読みが的中したかのように、このタイミングで少女の麗しい唇が開かれた。

「お待ちを、ここでリバース・オープン致しますわ……さあ、『怪演』の幕を上げましょう!! 罠カード発動、《ゴーストリック・パニック》!!」

パチン、と少女が指を鳴らすと同時に。勢い良く開示された罠よりも早く場の伏せモンスターがケタケタと笑いながら飛び出してきた。

《ゴーストリック・キョンシー》

☆3 / 闇属性 / アンデット族・効果 / ATK 400 / DEF 1
800

現れたのは、可愛らしくデフォルメされた死人妖怪。両手を突き出した姿勢のまま、びよこびよこ元気に跳ね回る。

突然の出来事に思わず攻撃の手が緩んだウォルフだったが、その隙を突いたかのように突如、キョンシーが顔に貼り付けてあるものと同じ札が無数に張り付き——あれよあれよという間に裏側守備表示となくなってしまった。

(ラムジョレーンのゴーストリ使い……やっぱり、か)

苦々しい面持ちで、クラドは目の前の少女を見据えた。

「ゴーストリック・パニックは、自分フィールドのセットモンスターを任意の枚数表側にし、その中の「ゴーストリック」モンスターの数まで相手のモンスターを裏側守備表示に致します。今回はウォルフに効果を適用させて頂きましたわ……おやおや? どうやらこちらのキョンシーが、皆様にお友達を紹介したいようです」

説明を終えた少女の下に、キョンシーがひよこひよこことカードを持って近寄ってきた。

少女はキョンシーの頭を優しく撫でながら、さながら猛獣使いのようになアウンズする。

「キョンシーの効果は、このカードのリバース時に存在する「ゴーストリック」モンスターの数以下のレベルを持つ「ゴーストリック」モンスターを1枚、デッキから手札に加えることが出来ます。私が手札に加えたのは《ゴーストリック・ランタン》にございます」

年齢か14歳の、連戦連勝を重ねる天才アクションデュエリスト。

決闘組・ラムジョレーンの次期当主という立場から根拠も無い八百長疑惑まで上がり、畏怖を込めて付いた二つ名は『幽霊姫』。

「……こりゃあ、最高にマズイ相手にケンカを売っちまったみてえだな」

大げさなアクションは多いが、決してパフォーマンスだけでは無い。そこに確かなプレイングセンスがあることを、クラウドとユウはしっかりと感じ取った。

「降参Trick or しなSurrender? 悪戯アンリエール・ラムジョレーンの『華霊』なる決闘舞台……どうぞ、最後までお付き合い下さい」

仮面を外し、真摯に向けられた勝気な眼は宝石のようなルージュ色。

日の光を知らぬ白い肌を煌かせ、薄桃色の髪を優雅にかき上げた。

「……俺はバトルフェイズを終了し、エンドフェイズ。ルミナスの効果で3枚のカードをデッキから墓地へ送り、ターンエンドだ」

こんなときだからこそ、ユウのポーカーフェイズが非常に頼もしく感じられる。

本人に自信があるのか無いのかは定かでないが、気持ちとしては余裕を持って見ていられる。

「中々「ライトロード」が貯まらないご様子ですわね？ ですが手加減をするつもりはありませんのでご容赦を。私のターン、ドローカード」

ユウ LP4000

手札・4 モンスター・2 魔／罨・0

アンリエール LP4000

手札・4↓5 モンスター・1 魔／罨・1

「まずは手札から《ゴーストリック・マミー》を攻撃表示で召喚。「ゴーストリック」モンスターは自分フィールドに『お友達』^{ゴーストリック}が表側で存在しなければ通常召喚は出来ませんが……今はこの、愛らしいキョーンシーがマミーの手を引いてくれてますわ」

むおー、と気の抜けた雄たけびを上げて、大きなミイラ男がフィールドに出現する。

無論、畏怖などという言葉とは無縁のコミカルな姿だ。

《ゴーストリック・マミー》

☆3／闇属性／アンデット族・効果／ATK 1500／DEF

0

「さて、皆様にも覚えがあるかと存じますが……交友の輪とは常に広がるもの。このマミーには「ゴーストリック」モンスターを更に召喚できる、そんな効果がございます。マミー、貴方のお友達もこの舞台へ呼びなさい！」

そう言われても……と困ったように後ろ頭を掻くマミーの頭上に、どこからか現れた竹箒が振り下ろされた。

バシンと軽快な音が響いたかと思えば、ぶんすかと頬を膨らました魔女の少女がいつの間にかマミーの肩に座っていた。

その不満そうな表情はまるで「友達ならこの私がいるじゃない！」とでも言いたげだ。

《ゴーストリックの魔女》

☆2／闇属性／魔法使い族・効果／ATK 1200／DEF 200

「さて、ここでお目見えしました魔女の効果を発動。1ターンに1度、相手モンスター1体を裏側守備表示にする『魔法』を掛けさせて頂きます。その対象は……」

フィールドの景色は暗転。軽快なドラムロールと共に、三原色のスポットライトがフィールドをせわしなく行き交う。

「――Ms. ルミナス!!」

ドラムロールのフィニッシュと共にライトが収束したのは、ルミナスの立つモンスターゾーンだった。

光に照らされきよとんと首を傾げる褐色の美女に、にひひと悪戯な表情を浮かべた魔女が魔法のシャワーを浴びせかける。刹那ルミナスは反転、無機質なカードの裏面をフィールドに映し出した。

「くそ……完全に相手のペースだ」

忌々しげに呟くクラドが、ユウとアンリエールのフィールドを見比べる。

ゴーストリックは低ステータスなモンスターが多い反面、カテゴリー内サーチや表示形式変更……特に裏側守備表示に関する能力を持つものが多い。

攻撃力の高いモンスターを守備表示にし、低ステータスのモンスターで突破するというのは古くから存在するデュエルモンスターの基本戦術だが、奇しくも守備力の低いライトロードが2体並んでいたことが災いした。

「続きましてキョンシーの『ゴーストリック』共通の効果を発動。1ターンに1度、裏側守備表示に変更することが出来ます。キョンシー、休め！」

指を鳴らす合図と共に、キョンシーが即座に裏返る。カードの裏に隠れるような様子が何とも可愛らしい。

「モンスターの表示形式変更は1ターンに1度のみでございますが、今しがたの形式変更はあくまで『キョンシーの効果』によるもの。よってキョンシーの形式変更は再度可能となります。キョンシー、起きて！」

隠れたばかりのカードの裏から、文句の一つも言わずに飛び出すキョンシー。

その小さな手にはしっかりと「ゴーストリック」モンスターのカードが握られていた。

「Good Boy、私は手札に2枚目の『ゴーストリック・ランタン』を加えますわ」

キョンシーの頭を撫でるアンリエール。その姿はまるで猛獣使い

だ。

そんな彼女の優しげなルージュが、一際妖しく輝いたのは一瞬のことだった。

「——では、そろそろご覧に入れましょう。我がゴーストリック・ファミリーの真骨頂を……」

スツ、と優雅に掲げられたアンリエールの右腕。

その先の虚空に、光の粒子が渦を巻き始める。

「私は、☆3のマミーとキョンシーを『オーバーレイ』！」

再び鳴り響く指の号令。

気合十分の表情のまま、マミーとキョンシーは互いに紫の光球となつて空へと駆けていく。

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

いつの間にか勢いを増し、光の奔流となつた渦の中へ飛び込んでいくマミーとキョンシー。

「奇怪なる館の主よ、漆黒を翻し騒乱の夜を収めなさい……エクシーズ召喚!!」

星々の輝く宇宙にも似たその幻想的な光景は直後、虹色の終焉爆発ビッグバンを引き起こした。

「★3、《ゴーストリック・アルカード》ランク」

《ゴーストリック・アルカード》

★3 / 闇属性 / アンデット族・エクシーズ・効果 / ATK 180

0 / DEF 1600

オーバーレイ・ユニット
ORU : 2

2つの光珠、オーバーレイ・ユニットを衛星のように従えて、威厳ある吸血鬼が音も無く静かに降り立った。デフォルメされてはいるものの、他のゴーストリックとは明らかに違う、威圧的な何かが漂っている。

「エクシーズ召喚……黒のお家芸が出やがった……!」

モンスター・エクシーズ。同じレベルのモンスター2体を素材とし、ORUとして保持。レベルの代わりに『ランク』を持ち、エクストラデッキから特殊召喚される強力なモンスター郡。シンクロモン

スターと並ぶその高い価値を良く知るクラドは、思わず息を卷いた。
『悠久の黒』はエクシーズ発祥の地としても有名であり、もはや執着
と言っても良いほど黒の大陸出身者はエクシーズ召喚に固執する傾
向がある。

その気質は、ラムジョレーンのように古くからある家系には顕著に
現れているらしい。

「騒がしき夜を統べる主の技、とくにご覧あれ……アルカードの効果
を発動！」

そう言いつつアルカードの前へ躍り出たアンリエールの姿は、アル
カードの羽織る漆黒のマントの中へとすっぽり隠されてしまった。

決闘者の宣言もなしに、アルカードはORUを1つ吸収すると、そ
の力を得て闇の中へ溶け込むように姿を晦ました。

「なっ……決闘者ごと消えやがった!」

慌てふためき、あちこちを見渡すクラドを尻目に、アルカードは
……正確には彼のマントが、裏側守備状態のウォルフの上に覆いかぶ
さった。

少しくぐもったように響く『破壊』のエフェクト音。その後人の形
に膨れ上がったマントの中から姿を現したのは……につこりと微笑
んだアンリエールだった。

「なッ!」

驚き、反応を示すのはクラドだけだったが、アンリエールは優雅に
一礼するとマントと共に弧を描いて宙を舞い、元の立ち位置へとふわ
りと着地して見せた。

「1ターンに1度。自身のORU1つを使い、セット状態のカード1
枚を破壊する主の効果……お楽しみ頂けましたでしょうか？」

アクシオンデュエル風の演出に半ば呆然としつつも、クラドはしつ
かりと気を保ち『取り巻き』に徹する。

「くそ、ふざけやがって……!」

「ふざけてなどいませんわ。これが我がラムジョレーンのデュエル。

私の誇りを改めさせたいというなら……力づくで捻じ伏せて御覧な
さい? 最も——」

挑発するように仰向けられた手を、ゆっくりと差し向ける。

「そんなことが可能であれば、ですけど。バトル!!」

優雅な雰囲気は一転。狩りに興じるルージユの瞳は、鋭く標的を捕らえる。

「まずは魔女でセットモンスターをアタック!」

主の前で張り切っていたのだろうか。魔女はおぼつかない足取りで裏側守備状態のルミナスの元へ駆け寄っていくと、ばしばしと何度も箒で叩き始めた。

一瞬、困ったような表情で箒の猛攻に耐えるルミナスが映し出されたが、すぐに破壊のエフェクトが入ってしまった。

「続けて、アルカードでダイレクトアタック!」

これで道は開けたとばかりに、間髪いれずアルカードが使い魔である無数の蝙蝠を飛ばした。ユウ目掛けて一直線に飛び掛っていくが――。

「……墓地の《ネクロ・ガードナー》を除外し、攻撃を無効にする」

ネクロ・ガードナーの幻影がユウを包み、間一髪1800のダイレクトアタックを防いだ。

「ま、そうするしかありませんわよね? それではメイン2に移りましょう。主とて忙しき身、ファミリーの悪戯に付き合うのもこのターンのみ……後は『彼女』に任せると致しましょう」

再び掲げられるアンリエールの右腕。

場にはもうエクシーズ召喚に必要な『同じレベルのモンスター』は存在しない筈。しかしそんな疑問を浮かべるクラドの訝しげな表情とは裏腹に、先の光の奔流は寸分変わらず出現していく。

「私は、場のアルカードでオーバーレイ・ネットワークを『再構築』!」
アルカードがその身をマントに包み込み、光の奔流の中へと飛び込んだ。

「なっ!? おいおいふぎけんな、その召喚方法は……!!」

悲鳴にも似たクラドの叫びは、エクシーズ召喚の爆発音に掻き消える。

「エクシーズチェンジ!! ★4、《ゴーストリックの駄天使》!!」

《ゴーストリックの駄天使》

★4 / 闇属性 / 天使族・エクシース・効果 / ATK 2000 / D

EF 2500

ORU : 2

アルカードに代わって現れたのは、ひらひらと手を振る桃髪の女性型モンスター。

さながら鍵盤のような色合いの白黒が織り交ざる妙な羽根を持つ彼女は、『駄』天使の名が示すとおり、何ともいい加減な雰囲気は漂っている。

「成金エリートちゃんめ、エクシースチェンジなんて高等召喚を易々と……」

「実力あってこそその『高等』ですわ。駄天使の効果を発動、ORUを1つ使い、デッキから「ゴーストリック」の魔法・罠カード1枚を手札に加えます。選択するのはフィールド魔法《ゴーストリック・ハウス》！」

クラドの文句もさらりと流し、アンリエールは駄天使が雑に投げて寄越した1枚のカードを受け取ると、更に宣言を付け足した。

「そして今、ORUととして墓地へ送られたアルカードの効果を発動。このカードが墓地へ送られたとき、墓地のこのカード以外の「ゴーストリック」カード1枚を手札に加えます。主よ、しばしお休みを……選択するのは、先程アルカードの効果でORUととして墓地に落ちていたキョンシー！」

これでアンリエールの手札は6枚。展開されたモンスターは最終的には2枚。

だがユウの受けた損害は大きく、これだけのカードをプレイして尚、6枚もの手札を抱えているというのは明らかに異様だ。

その異様は、彼女の実力がどれほどのものかを悠然と語っていた。「それではこのターンの最後に、皆様をファミリーの愉快な根城へと招待致しましょう。《ゴーストリック・ハウス》発動！」

周囲の景色が移り変わり、ところどころに蜘蛛が巣を張る、雑多に物が散らかった洋館の大部屋が出現した。

「ゴーストリック・ハウスの発動中は、お互いに裏側守備表示のモンスターを攻撃対象に選択できず、表側表示のモンスターへの攻撃以外は全てプレイヤーへのダイレクトアタックとなります」

その効果を聞いて、クラウドはそれとなく安堵した。

直接攻撃が通りやすいということは、カードパワーのあるユウのライトロードにとっては寧ろ有利なのではと考えたからだ。

「ただし、「ゴーストリック」以外のモンスターが相手に与えるダメージは、全て半分となりますわ」

そんな希望も一瞬の煌き。敵の妨害を潜ってようやく与えるダメージが半減するとなれば、間違いなく苦戦を強いられるだろう。

「魔法の効果で自身を裏側守備表示へ変更し、バックカードを1枚伏せてターンエンドと致しますわ」

本来であれば裏向きのカードとして姿を残すセットモンスターだが、ハウスの効果からか魔法の隠れたカードは溢れる品物の数々に紛れて姿を眩ました。

アンリエールの圧倒的な第一幕。ダメージこそ無かったものの、その余裕溢れる表情が示す通り状況は一方的なまでにあちらへ傾いている。

「……俺のターン。カードをドロ」

ユウ LP4000

手札・4↓5 モンスター・0 魔/罫・0

アンリエール LP4000

手札・4 モンスター・2 魔/罫・3

「俺は手札から《マスマティシヤン》を召喚」

《マスマティシヤン》

☆3 / 地属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 1500 / DEF 500

「モンスター効果発動。召喚成功時、デッキから☆4以下のモンスター1体を墓地へ送る。選択するのは《ライトロード・アーチャーフェリス》」

白髭を伸ばした数学者モンスターが唱える奇怪な呪文により、デッ

キから1枚のカードが墓地へと落ちる。刹那、地に描かれた紫色の魔方陣——墓地から半獣の女弓兵が躍り出た。

「フェリスの効果。モンスター効果によりデッキから墓地へ送られた時、墓地から特殊召喚される」

《ライトロード・アーチャー フェリス》

☆4 / 光属性 / 獣戦士族・チューナー・効果 / ATK 1100 / DEF 2000

「続けて。手札から装備魔法《幻惑の巻物》を発動し、マスマティシャンに装備。その効果により属性を光へ変更」

効果は属性変更のみという、見方を変えれば非常に頼りない装備魔法。A・O・J等の光属性メタへの対抗策として試験的に投入したと聞いていたクラドだったが、その狙いに気付き頬を緩めた。

(……へえ。成程なセンサー、そういう使い方もあるか)

「俺はチューナーモンスター・フェリスに、『光属性となった☆3の』マスマティシャンをチューニング」

黒の奇術に対抗するは、白き栄光の剣。

弓兵は調律の緑輪となり、力無き数学者の肉体を変質させていく。なるほど。かのカードを呼ぶためには、地属性では都合が悪い。

「古の守り手、伝説の彼方より再来せん。シンクロ召喚、《ライトロード・アーク ミカエル》」

《ライトロード・アーク ミカエル》

☆7 / 光属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 2600 / DEF 2000

光を纏い、散らし。黄金の竜騎士が降り立つ。

他の☆7シンクロを差し置き、わざわざ装備魔法まで使用してまでミカエルを呼んだのはカードパワーが高いという以外にも、墓地へ送られる「ライトロード」の数を増やしたいという理由があった。

言われてみれば領ける理由だが、それはつまり裏を返せば「ミカエルが破壊される」ことを前提に構築された戦術、ということになる。ユウは既に、そんな状況まで想定しているのだ。

「おやおや……無駄に高レベルなモンスターばかり連打する、無粋な

シンクロ召喚でございますか。では私は、ここでリバースカードを発動させますわ」

呆れたような溜め息をついて、アンリエールは伏せカードの1枚に手を掛けた。

「罨カード《ゴーストリック・アウト》を発動。このカードが発動したターン、自分の『ゴーストリック』カード、及び裏側守備表示のモンスターはカード効果の対象にならず、効果によっては破壊されません」

姿を眩ました魔女は元より、守備表示で控える駄天使すら半透明と化し、あらゆる破壊効果を受け付けない無敵状態と化した。恐ろしいのは、その効果範囲がフィールド魔法である《ゴーストリック・ハウス》にも適用されているということだ。

これにより、ミカエルの『対象を取る』効果である除外能力は完全に標的を失ったことになる。唯一、残った相手の伏せカードを除いては。

「……ミカエルの効果。そちらのバックカード1枚を選択し、ゲームから除外する」

ユウ LP4000↓3000

「ではその効果にチェイン致しますわ。《ゴーストリック・パニック》発動！」

突如、どこからか表返った魔女が飛び出し、ミカエルの頭に竹箒を叩きつける。

驚いた様子のミカエルは目を見開いて魔女を眺めたが、彼女の「あつかんべー」を最後の光景に、裏向きのカードとしてハウスの中へと紛れてしまった。

「おいおい嘘だろ!? あのミカエルがこうもアツサリ!？」

頭を抱えてこの世の終わりの如く叫ぶクラド。

しかし当のポーカーフェイスはやはりというべきか、動じる様子も無く淡々とターンの終了を宣言した。

「……カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

ユウがそう宣言するや否や、クラドの頭の中では「一体どれくだけ

レアカードを差し出せば『半殺し』位で済むだろうか」という不毛な計算が続けられていた。

最も、駄天使よりも価値が高いカードは彼が商品として所持しているカードの中には存在しないのだが。

「では私のターン、ドロークカード。まずは駄天使の効果を発動し、デッキから《ゴーストリック・アウト》を加えますわ」

やる気なく駄天使が放り投げたカードを受け取ると、アンリエールはしばし考え込んだ。

ハウスの効果により全てのモンスターが直接攻撃を叩き込めるこの状況であれば、モンスターが与える総ダメージは3200。そんな勝利への一手を鈍らせるのは、たった1枚の伏せカードだ。

ライトロードはその性質上、デツキへの罠カード投入率はゼロに等しい。採用したとしても、墓地に落ちても効果を発動出来る《ブレイクスルー・スキル》等がほとんどだ。本来なら懸念される《激流葬》の可能性は無いと断言しても良い。

だが……おいそれと採用するにはあまりに異質と言える《幻惑の巻物》が投入されていたその事実が。駄天使の効果に対して何の反応も無かったことが、アンリエールの疑心を煽るのだ。

（決闘初心者なのか、単なるブラフなのか……けど、どちらにせよここは）

このターンで無理に攻める必要は無い。手札に加えた《ゴーストリック・アウト》が発動出来、確実に攻撃を通せる次のターンまで待つことにした。

「バトル、私は駄天使でダイレクトアタック！」

召喚行為を回避し、攻撃反応型罠の可能性も読み、攻撃命令は駄天使のみに下された。

白黒の斑な羽が、まるで矢のようにユウへ向かって飛んでいく。

「……………」

ユウ LP3000→1000

「少し癪ではありますが、貴方の目論見通り1ターン猶予を差し上げますわ。私は魔女を裏側守備表示にし、モンスターとバックカードを

2枚伏せて、ターンエンド」

「……俺のターン、ドロー」

ユウ LP1000

手札・2↓3 モンスター・1 魔/罠・1

アンリエール LP4000

手札・3 モンスター・3 魔/罠・3

「……まずはミカエルを反転召喚」

「構いませんわ。ライフコストが払えず、効果も発動出来ないようですし」

ケタケタと見下したように笑うアンリエール。

彼女の言う通り、このままではミカエルの効果はおろか、後に控える龍の効果も発動出来ない。

それでもユウは顔色一つ変えず、手札のカードに手を掛けた。

「……俺はミカエルをリリースし、アドバンス召喚。《ライトロード・エンジェル ケルビム》」

《ライトロード・エンジェル ケルビム》

☆5 / 光属性 / 天使族・効果 / ATK 2300 / DEF 200

ミカエルの魂が供物となり、長身の天使が光臨する。

ここで表情を変えたのは、アンリエールの方だった。

「……ケルビムの効果を発動。対象は2枚の伏せカードだ」

「させませんわ！ その効果にチェーンして《ゴーストリック・アウト》発動、更にチェーンを重ねて《エクシーズ・リボーン》発動！」

僅かに焦りの色を覗かせて、対象となった伏せカード2枚を全て開示する。

「エクシーズ・リボーンは、自分の墓地のモンスター・エクシーズ1体を特殊召喚し、このカードをORUと致します。主よ、今1度お目覚めを！」

墓地で眠りについていたアルカードが、唸るような笑い声と共に再びフィールドへ舞い戻った。その周囲にはORUとなったエクシーズ・リボーンが漂っている。表示形式は守備表示だ。

「……デッキの上からカード4枚を墓地へ送り、効果を処理。対象と

したカードが消費された為、破壊されるカードは無い」

ケルビムは「ライトロード」モンスターをリリースして召喚された時、コストとしてデッキから4枚のカードを墓地へ送って相手フィールド上のカードを2枚まで破壊する。

ゴーストリック・アウトが伏せられていたことは前のターンで露見していた為、ユウの狙いは『アウトの消費』と『詳細不明の伏せ1枚の確認』だったのだろう。

その狙いは功を奏したものの……結果として、相手フィールドのモンスターはこのターンも効果によって破壊されない状態となった。

——だが。これで『条件』は揃った。

「……墓地のライトロードは4体以上。召喚条件を満たしたことで、手札からこのカードを特殊召喚する」

《裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）》

☆8 / 光属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 3000 / DEF 2600

2ターンの沈黙を破り、白き龍が咆哮を上げる。

しかしその真価を發揮するには、ユウは傷を負い過ぎていた。

「来ましたわね。ですがそのような燃費の悪い高レベルモンスターなど、既に脅威ではありませんわ。先に説明しておきますが……アルカードが表側で場に存在する限り、他の「ゴーストリック」モンスターを攻撃対象に選択することは出来ません。さ、どうされますか？」

裁きの威光を前にしても平然とそう言ったのけたアンリエールに、ユウは淡々と告げた。

「……バトル。ケルビムでアルカードを攻撃」

魔法杖を振りかざし、光魔法を放つケルビム。

ゴーストリック・アウトは効果による破壊から守ることは出来ても、戦闘に関しては何の効果も付加されない。マントで体を覆い、最期まで優雅な振る舞いのまま、アルカードは魔法攻撃にその身を碎かれた。たった1枚のカードを使い手^{デイマー}に遺して。

「アルカードの効果。墓地のマミーを手札に加えますわ」

「……裁きの龍で駄天使に攻撃」

怪奇の闇を打ち払う光のブレスが、今放たれんと収束を始める。

アルカードの美しい最期とは打って変わり、駄天使はあたふたとフィールド内を走り回り、ハウスに散らかった何かに足を取られ盛大に躓いた。

そんな彼女に、裁きのブレスは容赦なく降り注ぐ。「ヒドイ！」と言わんばかりの悲鳴を上げて、駄天使もアルカードの後を追った。

アンリエール LP4000↓3500（ハウスの効果でダメージ半減）

「……エンドフェイス。裁きの龍の効果でデッキからカードを4枚墓地へ送り、ターンエンド」

「では、私のターンですわね……ドローカード！」

ユウ LP1000

手札・1 モンスター・2 魔／罨・1

アンリエール LP3500

手札・4↓5 モンスター・2 魔／罨・1

手札を眺め、にんまりと口端を上げたアンリエールは静かにユウへ向かって一礼した。

「さて、この辺りでショーの閉幕と致しましょう。光栄に思いなさい、私がこのカードを使うということは……貴方をショーの見せ物ではなく、倒すべき決闘者として認めたとのことなのですから」

アンリエールの眼が鋭く、より妖艶な輝きを放つ。

その意味を推測するより早く、アンリエールはドローしたカードをそのままディスクへ差し込んだ。

「魔法カード発動、《生者の書―禁断の秘術―》！ 墓地のアンデット族1体を蘇生し、代わりに相手の墓地のモンスター1体をゲームから除外しますわ！ 選択するのはミカエル！」

ミカエルがゲームから除外され、アンリエールのフィールドに現れたのはゴーストリックの主アルカード。その表情に不服の色は全く無い。

「何だよ、もったいぶって使った割りに、たかが専用蘇生カードかよ……」

「頭の悪い不快害虫さんはお黙り下さいな。気が散ります」

冷たい眼差しをクラドに向けて、アンリエールはすうと深呼吸をした。

その様子は、まるで危険な綱渡りを行う前の、曲芸師の精神統一。

「――私は。場のアルカードでオーバーレイ・ネットワークを再構築
!!」

宙に浮かぶ光の奔流。そこへ身を投じるアルカードの表情にも、心
なしかそれまでの余裕が感じられない。

妖しく、妙に張り詰めた空気。エクシーズ召喚のエフェクトが巻
き起ころうとも、その緊張は解かれることは無かった。

駄天使ではない。いや、そもそも『そういう』枠組みのカードです
らない。

「――法嗤う無限面相。混乱の夜を駆け、真の身を明かしなさい!!
エクシーズチェンジ!!」

ソレが姿を現す、ほんの一瞬前。ユウの脳裏を過ぎった最悪の予想
は、アンリエールの言葉を借りて現実のものへと具現化した。

「★4、《アスタリスクス―*ファントム*―怪黒兎》!!」

まるで御伽噺のキャラクターのような人型の兎モンスターが、くぐ
もった唾いを漏らす。

身を覆うは、黒の体毛と闇色のタキシード。

《その名》を冠する2体目のモンスターが、姿を現した。

第9話 2体目のアスタリクス

アスタリクスファンタム
《―*―怪黒鬼》

★4 / 闇属性 / 獣族・エクシーズ・効果 / ATK 2100 / DE

F 1000

ORU : 1

それは彼女が魅せたどんなパフォーマンスよりも、クラドに大きな驚愕を与えた。

ふと隣のポーカーフェイスを伺えば、その目にも僅かながら困惑の色が浮かんでいる。

「ふふっ。そんなカード見たことも聞いたことも無い、という顔をしてらっしゃいますわね？ それもその筈ですわ。このカードは代々ラムジヨレーンの当主に受け継がれてきた秘蔵の1枚なのですから」得意げな表情を乗せた慎ましい胸を張って、アンリエールは甲高く笑い声を上げた。

「公の場では使用を禁じられていましたが、これは貴方方に制裁を下す為の決闘。もはや人の目を気にして出し渋る必要はありませんもの♪」

初見のカードを相手にした決闘者の反応が見れて満足したのか、かなり上機嫌だ。実際にクラド達が驚いているのは、むしろ『2枚目』であるからなのだが。

高笑いを隠れ蓑に、クラドがユウに耳打ちする。

「……センサー。こんな状況で言う台詞じゃねーのは分かってるんだが、このデュエル、ますます負けるワケにはいかなくなっちゃったぜ？」

「分かっている。アスタリクスについては俺も気掛かりだった。何としても情報を聞き出す」

そんな2人の会話など毛ほども耳に入っていない様子で、アンリエールは高らかにカードの発動を宣言した。

「さあ、まずはファンタム第1の効果！ このカードのエクシーズ召喚成功時に存在する自身のORUの数まで、フィールド上のモンス

ターを裏側守備表示に致しますわ！ ORUは1つ、選択するのは《裁きの龍》！ 『Sweet Dreams』♪」

フアントムが床を杖で突いた刹那。

重くねっとりとした黒い霧が辺りに立ち込め、気高き白龍は無様に背を向けさせられた。

「更に魔法カード《オーバーレイ・リジエネレート》を発動！ このカードは発動後、モンスター・エクシーズのORUとなりますわ！」
自身の勝利を先視したのだろうか、堪えきれずといった風に笑いを漏らす幽霊姫。

フアントムの周囲を取り巻く光球が2つになったところで、意気揚々と宣言した。

「さあ、フアントムの効果を発動！ このカードはORUとなつているモンスター・エクシーズ1体を指定し、そのカードと同名カードとして扱い、同じ効果を得ますわ！ 私が指定するのは無論、アルカード！」

使い手の決定と共に、フアントムは自身のシルクハットをまるで虫取り網のように使つてORU——恐らくアルカードのものだろう——を1つ掬い取り、そのまま元通り目深に被り直した。

「姿を欺くは彼の十八番……『Retake a lie!!』
ハットのつばを押さえながら、ぼんやりと闇に溶け込んでいくフアントム。

それからほんの瞬きの間に《ゴーストリック・アルカード》へと姿を変えていた。

「……名称変更効果、か」

見るも鮮やかな変装劇を目の前に、ユウは思考を巡らせる。

ユウ自身も1度、ベルの持つヴァルキュリアを使用したことがある。あのカードもフアントムも『他のカードの効果・名称をコピー』するという近しい効果を持っていた。

だとするなら。《アスタリクス》の名を持つカテゴリーは共通して『カード名称』について影響を与える効果があるのではないか。

過去に何度か使用された記録が残るのみという幻のカテゴリー……

ユウの静かな眼は既にこの決闘の先、来るべき『未知の脅威』を捉えていた。

「フアントムアルカードの効果発動！ ORUを1つ使い、伏せられたバックカードを破壊致します！ 今一度御覧なさい、華麗なる技の再演アンコールを！」

2度目とあってアンリエールのパフォーマンスこそ無かったものの、アルカードの効果をもままトレースしたフアントムは、未だ正体不明なユウの伏せカードを容易く打ち破った……かと思われたのだが。

漆黒のマントに覆われたバックカードは、飲み込まれる間に僅かな輝きを放った。

「……効果にチェイン発動、『針虫の巣窟』」

発動されたカードはデッキの上から5枚のカードを墓地へ送るといふ、通常であればデメリットでしかない効果だが、墓地で効果を発揮するカードの多い「ライトロード」では逆転の狼煙を上げる可能性を秘めたギャンブルカードと化す。

「何を伏せていたかと思えば……行き当たりばつたりの墓地肥やしカードでしたのね？」

溜め息をつくアンリエールにユウは一瞥もくれず、デッキトップを眺めながら答えた。

「……良くも悪くも、このカードにデュエルの明暗が託された。俺の望むカードが落ちる可能性は僅かだが、その僅かな可能性が時に勝者をも喰らう」

「説教じみた講義は結構。仮に貴方が逆転のカードを引いたとしても、私の勝利に揺るぎはありませんわ」

苛々とした口調で言い捨てたアンリエールだったが、その『手ごたえ』の無さに益々怒りの色を強めた。舞台デュエルの主演たる自分のことをまるで見ていない。否、気にも留めていない。

華やかな装飾でデュエルを着飾るアンリエール。それとは全くの対極に位置するユウの無機質なデュエルは、彼女の神経を執拗に逆撫でする。

「……効果を処理。墓地へ送られたカードは《ソーラー・エクステーション》《超電磁タートル》《スキル・サクセサー》《レベル・ステイラー》《ライトロード・ウォリアー ガロス》」

何気なく墓地へ送ったユウの手札、そのカードを確認したアンリエールの表情が苦々しく歪んだ。

「ツ……ふん。《超電磁タートル》とは、何とも無粋な時間稼ぎです」と

墓地へ落ちたカードの中で最も厄介であるそのカードは、バトルフェイズ時に墓地に存在するこのカード自身を除外することでバトルフェイズを強制終了させる、という効果を持つ。今のアンリエールの手札には、その効果を妨害できるカードは無い。

（それにしても。このターンは確実に凌げるからといってあの余裕は何ですか？ ライフコストも払えず、裁きの龍は効果を封じられ……攻撃力ばかり高くても《ゴーストリック・ハウス》の効果で私が受けるダメージは半減。更に言えば手札には――）

ちなみに、とアンリエールは手札に抱えた2枚のカードに目を落とす。

彼女のライフを刈り取るには、ユウは残された1ターンで7000ものダメージを与えなければならない。普通のデッキ相手なら「ライトルード」にとつてその程度は造作も無い条件だが、「ゴーストリック」は防御・妨害に長けたカテゴリデッキだ。

アンリエールが序盤に手札に加えておいた《ゴーストリック・ランタン》は、相手からの直接攻撃と「ゴーストリック」モンスターへの攻撃を無効にして、手札から裏側守備表示で特殊召喚される防御型モンスター。つまり、最低でも2回はユウの攻撃は防がれることになる。

それは相手とて理解している筈。だというのに――。

「……どうやら。俺はまだここで終わる訳にはいかないらしい」

そんなことを呟くものだから、アンリエールの苛立ちは直後に沸騰した。

「ツ……!! 魔女をリバーズして効果を発動、ケルビムを裏側守備表

示に！ 平伏しなさい！」

魔女が竹箒を振り回して魔法をばら撒くと、光騎士団の誇る大天使も無防備な背を向けた。

「バトルフェイズ！ 貴方のフィールドのモンスターは全て裏側表示！ ハウスの効果により魔女でダイレクトアタックしますわー！」

ユウのライフは1000。ともすればこの瞬間に宣言されるべきは《超電磁タートル》の効果発動。しかしユウが手を伸ばしたのは墓地ではなく、手札に残る1枚のカードだった。

「……手札から《バトルフェーダー》の効果が発動。相手の直接攻撃宣言時、手札のこのカードを特殊召喚しバトルフェイズを終了する」
「なっ!?!」

《バトルフェーダー》

☆1 / 闇属性 / 悪魔族・効果 / ATK 0 / DEF 0

振り子時計のようなソレはバトルフェイズの終了を告げるように3度鐘を鳴らすと、何事も無かったかのようにユウのフィールドに収まった。

予想とは異なるユウの宣言に驚くのもつかの間。アンリエールの表情に憎しみにも似た色が湧き上がる。

「貴方……私をからかってますの?」

墓地へ落ちたカードに関係なく、ユウはこのターン確実に攻撃を凌ぐことが可能だった訳だ。それを知りつつ、あたかも《針虫の巣窟》に全てを掛けたような台詞を吐き、更には存在の知られていない手札の《バトルフェーダー》から見せ付けるように効果が発動した。

アンリエールのデッキには墓地の《超電磁タートル》を除外できる《生者の書―禁断の秘術―》が存在しているのを確認しているにも関わらず、だ。

そんな疑問を全て内包したアンリエールの問いに、ユウは静かに被子を振って答えた。

「それは否定する。俺はこの状況を打ち破るべき一手を選択した。それだけだ」

「……そうですね。だとしたら随分とお粗末なプレイングですわね。」

私はこれでターンエンド致します」

怒りに震える声を抑えることも無く、最後に吐き捨てるような溜め息をつけてアンリエールはターンをユウへと受け渡した。

「……俺のターン、ドロー」

ユウ LP1000

手札・0↓1 モンスター・3 魔/罨・0

アンリエール LP3500

手札・3 モンスター・3 魔/罨・1

ドローカードに目を落とし、ユウは再び『アンリエールの方を向かずに』呟いた。

「……残念だが。勝負の天秤は俺に傾いたらしい」

「なんですつて?」

「裁きの龍、ケルビムを表側攻撃表示に変更。更に墓地の《レベル・ステイラー》の効果を発動。裁きの龍のレベルを1つ減らし、墓地から特殊召喚」

《レベル・ステイラー》

☆1/闇属性/昆虫族・効果/ATK 600/DEF 0

《裁きの龍》

☆8↓7

「……俺は☆1のバトルフェーダーと、レベル・ステイラーでオーバーレイ」

「エクシーズ召喚、ですつて?」

ユウのフィールドに発生する光の渦。

それは先程アンリエールが見せたものと何ら遜色は無かった。

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚。《No.63 おしやもじソルジャー》」

《No.63 おしやもじソルジャー》

★1/光属性/天使族・エクシーズ・効果/ATK 0/DEF 2000

現れたのは可愛らしい、『しやもじ』を象ったマスコットキャラクターのようなモンスターだ。しかしその頭部には、しっかりと自身の

『No.』が刻まれていた。

——『No.』。全部で100枚が存在し、それぞれがナンバリングされた数字を与えられた特別なモンスター・エクシーズ。

その性質上、ナンバーズは世界で1枚しか存在せず、これらのカードを持つことは決闘者の間で一種のステータスとして認識されている。

とはいえ、全てのナンバーズが強力無比な効果を持っているかといえそうですが、入手したナンバーズが必ずしも持ち手にとって有益になるとは限らない場合が多い。

おしゃもじソルジャーもどちらかといえば『そういう類』の効果だが、今回のデュエルではまさに逆転劇の幕を上げるに相応しい役にはまったのだ。

「黒の人間でも入手困難なカードを、何故貴方のような……まあ良いでしょう。紳士としての心得を多少はお持ちであった、というだけのこと。それで？ その可愛らしいナンバーズでどうするおつもりですかの？」

「……No. 63の効果を発動。ORUを1つ使い、お互いに1000ポイントのライフを回復する」

ユウ LP1000↓2000

アンリエール LP3500↓4500

アンリエールの問いかけに応えたのかどうか。ユウは効果を淡々と読み上げる。

ライフの回復。それが意味するのは——。

「裁きの龍、効果発動。1000ポイントライフを払い、このカード以外のフィールド上のカードを全て破壊する。『ディスプレイック・レイ』」

ユウ LP2000↓1000

枯渇の檻から解放された白き龍が、雄々しく遠吠えを上げる。

輝く龍鱗に収束された聖なる粒子が、全てを飲み込む光の奔流と化した。

「ツ……破壊されたファントム、並びにORUとして墓地へ送られた

アルカードの効果を発動！」

大破壊の余波から顔を覆いながら、アンリエールが声を張り上げて効果の発動を宣言する。

愛らしい小さなナンバーズすら飲み込んだ光の奔流は、彼女の敷いた布陣を容易く飲み込んだ。しかし――。

「まずはフアントムの効果で墓地より《ゴーストリック・パニック》を手札に加えます！ 更にフアントムの効果を発動、ORUを持ったこのカードが墓地へ送られた場合、そのORUの数まで相手フィールド上のカードを裏側表示に変更致します……ORUは1枚、よって選択するのは裁きの龍！」

消え行く刹那に黒き霧と化したフアントムが裁きの龍を無様な姿へと裏返してしまった。

「だっ!? あのアスタリクス、そんな隠し玉まで持ってたやがったのか!？」

クラドが思わず頭を抱える。裁きの龍はターンの初めに表示形式を変更してしまつたため、このターンはもう立ち上がることは出来ないのだ。

しかしそんな常識を、ポーカーフェイスは易々と超えて見せた。

「……墓地の《ADチェンジャー》の効果発動。自分のメインフェイズに墓地のこのカードを除外することで、フィールド上のモンスターの表示形式を変更する。俺は裏側守備表示の裁きの龍を表側攻撃表示へ変更する」

「!? そんなカード、いつ墓地へ……」

「よっしや、上手いぞセンサー!!」

三者三様の感情が入り乱れる中、アンリエールは己の不注意に心中で毒づいた。

序盤で落とされた大量のライトロード『以外』のカード達の中に、確かにそれは存在していたのだ。他にも墓地発動の効果はいくつかあったが、彼女の戦略上で全く障害にならなかった為に意識の外へ飛ばしていったらしい。

墓地は常に対戦相手に晒され続ける貴重な公開情報。相手を侮り、

確認を怠った代償は決して小さくは無かったのだ。

「ですが……お忘れですか？ 私の手札には攻撃を防ぐランタンが2体、更に攻撃が通ったとしても、残りライフは4500。仮にその手札1枚がモンスターだったとしても、このターンの突破は不可能ですわ。次のターンで幾らでも巻き返しは——」

「……それはどうだろうな。俺は手札から《ライトロード・アサシンライデン》を通常召喚」

《ライトロード・アサシン ライデン》

☆4 / 光属性 / 戦士族・チューナー・効果 / ATK 1700 / DEF 1000

残された手札から現れたのは、冷酷な瞳を尖らせる褐色の暗殺者。言葉を聞かずとも主の思考を読み取れたのか、沈黙のまま宙へと飛び上がった。

「☆7となった裁きの龍に、☆4チューナー・ライデンをチューニング」

更なる高みへ導くが如く、緑光の輪が天へと連なる。

駆け上がる白き龍はその輪郭のみを残し、大気を貫かんばかりに咆哮を響かせた。

「……惑星（ほし）をも喰らう伝承の巨影。散り舞う光をその眼に宿し、姿を成せ」

調律の終わりを告げる光の柱が、地響きを立てて舞い降りる。

合計レベルは超大台の11。その圧倒的な質量にAR空間が僅かなノイズを走らせた。

「シンクロ召喚、《星態龍》」

光を切り裂き現れたのは、桁違いに大きな体格を持つ胴長の巨龍。

燃え盛る恒星を思わせる紅い体をなびかせ、災害じみた爆音量で威嚇の咆哮を上げた。

《星態龍》

☆11 / 光属性 / ドラゴン族・シンクロ・効果 / ATK 3200 / DEF 2800

「☆11……!? なんて品の無い……!!」

忌々しげにアンリエールが見上げ睨むも、もはやその『品の無いモンスター』と彼女を阻む壁はどこにも存在しない。少なくとも、フィールド上には。

「今更そんなモンスターを出したところで。フィールドはがら空きですが、手札にはランタンが2枚。モンスターの数を減らして頂けたならむしろ好都合、というもので——」

「墓地の《スキル・サクセサー》の効果を発動。墓地のこのカードをゲームから除外し、自分モンスターの攻撃力を800ポイントアップさせる。更にもう1枚のスキル・サクセサーを効果発動させる」

《星態龍》

ATK 3200 ↓ 4000 ↓ 4800

(2枚!… また序盤に落としたカードを……)

幽霊姫の驚愕に答えを示すかのように、2枚のカードがユウの墓地から取り除かれる。その攻撃力は決着の幕を降ろすに相応しい数値となつて、アンリエールのディスプレイに表示された。

「な、何度も言っているでしょう!?! いくら攻撃力が上がろうと、私の手札には!!」

「……星態龍が攻撃する場合。ダメージステップ終了時までこのカード以外の効果を受けない。お前の手札にあるランタンは『相手モンスターの攻撃を無効にする効果』。よつて『効果を受けない』星態龍は——」

手札にあった筈の『障害』も消え失せ。一步、また一步と後退するアンリエール。

舞台の主役は、降板を余儀なくされた。

「お前の『手札』を、突破する。バトルフェイズだ」

大きく開いた顎に、星屑の如き小さな煌きが収束していく。

「ダイレクトアタック」

アンリエールに向けて放たれたブレスは、まるで金銀に光り輝く紙吹雪。

華やかな幽霊姫の舞台は、敗北という形で閉幕を告げたのだった。

『ゲームエンド。勝者、ユウキリサキ』

「よっしゃー！ これで埋められずに済んだぜー！」

真つ先に生きる喜びを声に出したクラドは、消え行くARに脇目も触れずユウの肩を勢い良く叩いた。

「やったなセンサー！ まさか、あんなナンバーズまで持ってたなんて意外だったが、おかげで救われたぜ！」

「……そうだな。俺も最初は驚いた」

Dパッドからデツキを引き抜きホルダーに仕舞いながら、ユウは静かに呟いた。

どこかで聞いたその妙な言い回しに眉を寄せるクラドだったが、追求する暇も無くユウがアンリエールへ歩み寄っていく。

崩れ落ちるように膝を付き、俯く彼女からはもう闘志は感じられない。

「お嬢様!!」

まだ痛みの残るだろう身体を引きずって、黒服の男が割って入ろうとしたが、そんな彼をアンリエールは腕を伸ばして遮った。

「……お嬢様」

「俺の勝ちだ。ルールに従い、お前には約束を守ってもらおう」

淡々とそう告げ、敗者たる幽霊姫を見下ろすユウ。黒服の男は恨めしげに眼光を投げつけるが、ユウの視線は彼女へ向けられたままだ。

アンリエールはゆっくりと立ち上がると、毒気が抜けたような声で静かに、小さく呟いた。

「……ええ。承知しておりますわ」

黒艶のあるドレスグローブを纏った繊細な両手を、アンリエールがユウの右手に絡ませる。

握手でもするつもりだろうか、とクラドが訝しげな視線を送る中、アンリエールは手に取ったユウの手の甲をおもむろに口元へと運び――。

ちう、と可愛らしい音を立て、口づけた。

「!?」

その仕草はまるで主に忠誠を誓う騎士のよう。

今回ばかりは、流石のポーカーフェイスも慌てて手を引き抜き、警戒したように一歩後退した。

「このアンリエール・ラムジョレーン。必ずやご期待に応えて魅せますわ、白騎士様♪」

優雅な仕草で一礼し、顔を上げたアンリエール。その美しいルージュの瞳と日の光を知らぬシルクの頬は、激しい恋慕の熱を帯びていた。

「し、白騎士い……?」

つい先程まで命のやり取りをしていた相手の予期せぬ豹変。敗北のショックから気が触れたのかとクラドは頬を引きつらせたが、そんなことなど眼中に無いといった様子でアンリエールはユウへ詰め寄っていく。

「さあ白騎士様、なんなりとご用件をお申し付け下さいませ♪」

「……妙な呼び方は止めてくれ。ユウでいい」

「では、ユウ様と。私のこともお気軽にア・ン・リとお呼び下さい♪」

今にも抱き付かれかねない距離まで迫るアンリエール、ユウもその都度距離を取る。

「……分かった。アンリ、賭けの報酬として俺達が求めているのは『コイツ』の消息だ。今はこの街で出来る限りの情報が欲しい」

Dパッドに表示した『白面の女』のイラストを見せながら、盾を構えるように後退するユウ。いつもの無然とした雰囲気は、どこかその色を薄めている。

「成程、承知致しましたわ♪ ダステイン!」

パチン、とアンリエールが指を鳴らすと、黒服——ダステインと呼ばれた男——がサツと隣に控えた。

「……お嬢様。まさかとは思いますが、その男を」

「当然ですわ。強きをその血に折り込むことこそ、ラムジョレーンの女の勤めですもの」

「しかし！　いくら何でもシンクロ使いの男など……！」

「ユウ様の強さは無粋なシンクロのみにあらず。先のデュエルを見て、お前もそれ位は分かったでしょう？」

「何やら問答する決闘組の2人を見て、クラウドは顔をしかめてユウに耳打ちした。

「……なあセンサー。どうにも面倒なことになってるっばいぞ？」

「……らしいな」

断片的に聞いた限りユウの色々なものが危ないというのに、当の本人はいつものポーカーフェイスを取り戻していた。

黒服の男が渋々引き下がる形で問答が収まると、アンリエールはにっこりと微笑みをユウへ向けた。

「ではユウ様♪　その『探し人』の画像データを頂けますか？」

「……分かった。少し待ってくれ」

すぐにDパッド同士のデータ通信準備が整い、何故か少々興奮気味のアンリエールに件の画像データが送信された。

データを受け取ったアンリエールは丁寧に一礼すると、すぐさま控えていた黒服の男にデータを送信しながら指示を伝え始める。

「ダステイン、街にいる組員全員にこのデータを配布なさい。画像の人物と特徴の一致する者を見つけ次第拘束、この場へ連れてくるように。目撃証言もこの街から一滴残らず搾り出しなさい！」

はっ、と短く返答すると、黒服の男は街の雑踏の中へと姿を消した。

「さあユウ様、搜索が終了するまで少々お時間が掛かりますわ。それまでゆっくりと貴方様のお話を聞かせて下さい♪」

ひし、とユウの片腕に抱き付くアンリエール。

そういうものだという認識が追いついたのか、ユウは抵抗せずを受け入れると静かに問い掛けた。

「……さつきから随分と親しく接してくるが。どういう心境の変化だ？」

何の包みもない『ドストレート』を放つユウに、アンリエールも負けじと直線剛速球を投げ返した。

「私、一人の女としてユウ様をお慕いすることに決めましたわ♪」

「はあ!?!」

どこか予想はしていたものの、声を上げずにはいられなかったクラド。

そんな素っ頓狂すらどこ吹く風といった様子で、アンリエールの告白は熱を帯びていく。

「私……殿方にデュエルで負けたのはお兄様以外では初めてでしたの。負けた瞬間はそれこそ頭がどうにかなくなってしまいそうな程悔しかったのですが……全てが終わったとき、それは全てユウ様への溢れんばかりの愛と変わっていたのです!」

自分より強い男に恋心を抱く乙女、とはよく聞く話だが。

相手が決闘組の令嬢とあれば、考え無しに両手を挙げて喜ぶわけにもいかない。

「愛、だってよセンサー」

「……弱ったな」

「私を舞台の主役から引き摺り下ろす強引き! 野蛮な高レベルモンスターと慎ましきローレベルモンスターを織り交ぜ使役する繊細な手腕! ユウ様はまさしく今のラムジョレーンに求められている優秀な遺伝子の持ち主だと、はつきり分かったのです!」

語り舞う様子はまさに舞台劇。スポットライトの1つでも当たっていないそうな……と思いきや、本当にスポットライトが当てられている。

見れば大掛かりな照明器具の傍で汗を垂らす、赤髪の美少女が1人。

『……そろそろ、お暇しても宜しいでしょうか?』

賭け品譲渡が完了かどうかを見極められず、その場に留まり演出係まで務めた過労死審判員ネフは、うんざりした様子でそう呟いた。

「ここへはただの観光で訪れただけですわ。組の仕事とは何の関わりもありません」

アンリエールはようやく、ほんの少しだけ落ち着きを取り戻し。今はお互いの経緯を話し合い終えたところだった。場所は変わり、近くのカフェに腰を下ろしている。

場所を変えて大丈夫なのかと問うクラドに対し、アンリエールは興味無さそうに「連絡は致しました」と短く応えただけだった。

通りに面したテラス席なので、すぐに目に付くだろうとクラドも半ば強引に納得することにした。部下の黒服の気苦労を想いながら。

「教養を深めるようにとお兄様からのご提案でしたが……正直、この遺跡よりも途中で立寄った大衆市場の方がまだ興味をそそられましたわ」

店で一番値の張るハーブティー『ブラックローズヒップ』を優雅に啜りながら、アンリエールは淡々と話す。

「へえ。その辺の感覚は俺らとあんまり変わらねーんだな？」

「不快害虫さんと一緒にしないで下さいな。傷が付きます」

「何にだよ!？」

ユウとクラドとで露骨に対応を変えるアンリエール。商売柄、順応力の高いクラドはもう扱いに慣れたようだが。

「しかし『闇のゲーム』ですか。ユウ様も随分と眉唾なモノをお探しで」

「……本当に、眉唾なら良いんだがな」

そう言っただけか遠い目をするユウに、クラドは眉を寄せた。

どうにもユウは、何かを隠している。引つ掛かるような物言いを今こそ問いただそうとクラドが口を開きかけたそのとき。遮るようにユウが質問を被せてきた。

「アンリ。お前の持つ『*』についてだが」

「……え？ あ、はい！ ここにありますわ♪」

ユウの物憂げな表情に見惚れていましたとでも言わんばかりの反応で、アンリエールは慌ててデッキから『それ』を取り出した。

見かけには普通のモンスター・エクシードと何ら変わりはない。

「何か、これについて知っていることは無いか？」

「そうですね……我が家に代々伝わる歴史あるカードであること

と、一般的にはほとんど存在を知られていないこと、この2点でしよ
うか。公式試合で使用を禁止されていたのも、そういつた経緯で余計
なトラブルを招かないようにとの配慮でしょう。恥ずかしながら、こ
のカードに関して知っているのはその程度ですわ」

申し訳無さそうに目を伏せるアンリエール。

机に置かれたカードを眺めて、ふとクラドがある異変に気が付く。

「……歴史ある、って言うには随分とカードの状態が良いな？」

「当然です。ラムジヨレーンの管理能力を持つてすれば、この程度」

ふふん、と得意げに目を流すアンリエールに口を噤んだクラドだっ
たが、ユウとしても納得できない節があった。

丁寧に保管・管理を続けたといつても、ここまで良い状態が保たれ
るのは『コレクションケースの中で』と条件が付いた場合にのみだ。
アンリエールの言葉が正しいなら、このカードは何度か、いや公式戦
を除けば歴代当主全てのデュエルで使用されたかもしれない可能性
すらある。いくら手入れを欠かさず行つても、それだけデュエルの年
数を重ねれば綻びは必ず現れるものだ。

アンリエールが嘘を付いているようにも思えないが、ともかくこの
《―*＊―》達には何かしらの日くがついて回る。日の下ですら奇妙
な雰囲気醸し出すソレに、ユウは改めて警戒を強めた。

「……分かった、ありがとう。仕舞つて貰つて大丈夫だ」

「いえいえ♪ 決闘者としてレアカードに興味を持つのは当然の本能
ですもの♪」

ユウの感謝が余程嬉しかったのか、アンリエールは鼻歌でも歌い出
す勢いでカードを仕舞い込む。

「あれ、ユウさん？ クラドさん？」

不意に見知った声が掛けられる。

「丁度良かったです。ちよつと急ぎで連絡したいことがあつて――つ
て、」

振り返つてみれば、観光エリア組のベルと藍がきよとんとした様子
で立っていた。

「えつと、その方は？」

2人の視線は自ずとアンリエールへ向けられている。

漆黒のドレスを纏うその姿はやはり、この2人を前にしても人目を引くらしい。

「あー、紹介しよう。今回成り行きで俺らに協力して貰えることになった——」

「ユウ様の将来の伴侶、アンリエール・ラムジョレーンですわ。以後、お見知りおきを」

余計なことを口走らないようにと奮闘したクラドの努力空しく。につこりと微笑んだアンリエールが全ての配慮を上書きして2人に爆発物じみた自己紹介を叩き付けた。

「へえ、伴侶……えええ!？」

「まあ」

予想通りの全力リアクションを取るベルと、大人らしく言葉半分に受け取った様子の藍。

藍の方はまだ良しとして、ややこしくなりそうな雰囲気にクラドは頭を抱えた。

「え？ あ、あの伴侶ってどういう」

「騒がしいですわよ、礼儀を弁えなさい。いくらユウ様の下女とはいえ、これには私も口を挟ませて頂きますわ」

「げ、下女!？」

「いや、あのなお嬢。この子はそういうんじゃないよ……」

「不快害虫さんはお黙り下さい。まずはこの不躰なネイティブの下女を再教育する必要がありますわね」

「ふかつ……!？」

かちん、とベルの揮発性豊かな堪忍袋に火が灯る。

ベルの怒りパターンを熟知しているメンバーは皆、やっちゃったとばかりに目を逸らした。

「い、いきなり現れて!! 失礼なのはどっちの方ですか!?! わたしはともかくクラドさんにまで!!」

「街中で馬鹿みたいな大声を上げないで下さいな。不恰好に大きいのは、そのみつともない乳袋だけで結構です」

「みつ!?!」

うんざりした様子で手をパタパタと仰ぎながら、アンリエールはベルの不恰好に大きいソレを視線で差しながら言った。

確かに自慢するようなものでも、何か役に立つ様なものでもないかもしれない。しかしこの身体は両親から貰った大切なもの。それを貶されたベルの怒りは更に熱を帯びていく。

「お、お胸は関係ないじゃないですか!! それにみつともないって何です!?!」

「喧しい。貴女には貞淑さが足りないと言っていますのよ。隣の婦人を見習いなさい、その静かな佇まいに相応しい慎ましきバスト。あれぞ世の女性が目指すべき淑女の姿ですわ」

ぴし、と何かに罅が入る音がした。

どうなっているのか確認するのが恐ろしくて、クラドは首の位置が決して動かぬようにしっかりと手で固定した。目を合わせたら多分、石化の呪いでも掛かりそうなので。

「その婦人とユウ様がどのような関係なのかはともかく……私もその見事な慎ましきは見習いたいものですわね。まだまだ世界も広いということですか……まあ、負けるつもりは更々ありませんが」

壊れかけた淑女のハートに、容赦なく紅蓮の弓矢が放たれる。

無慈悲な追撃の前にLPを削り取られ、瀕死状態でその真価を發揮する彼女のバーサーカーモードは——その蒼い猛炎を披露する間もなく、呆気なく灰燼と成り果てた。

「……うお!?! 何か雰囲気違うと思ったら、姉ちゃんが日陰の隅のほうで『A』の文字を書いては消し、書いては消しを繰り返している!?! あの姉ちゃんをこうも簡単に退けるとは……これが天才決闘者の成せる技か!?!」

恐るべき口先の魔王・アンリエールに改めて戦慄を覚えるクラドだったが、まだ希望は残っている。凹凸コンビの凸の方、我らが巨乳メイド・ベルが未だ元気に食い下がっているのだ。

「藍さんにまで!?! いい加減、あなた基準で話す暴言を止めて下さい!! 世の中にはお胸が小さくて悩んでる女の人だっているんですよ

!？」

「あ」

果敢な戦士・ベルが振り上げた剣はその手をすっぽ抜け——あろうことか、後方で倒れていた僧侶・藍の頭にズブリと突き刺さった。まさに痛恨の一撃。

「やめたげてよお!! 姉ちゃんのLPはとつくに0なんだぞ!!」

バツ、と思わず藍の下へ駆け寄るクラド。小さく丸まった背中を摩つてみたものの……小さく肩が震えているのを見て、クラドは思わず涙を零した。

「大丈夫だ姉ちゃん、需要はあるさ……需要はッ……!!」

「……そろそろ良いか。話を戻したい」

魔王アンリエールとの戦いで唯一無傷だったユウは、事態が収拾出来そうなタイミングでそう呟いたのだった。

* * *

カセにおける『白面の女』捕獲作戦は結局、夜になるまでラムジョレーン組員がくまなく搜索しても事態は好転せず。当の本人の身柄はおろか、行く先すらも掴めず終いだった。

たった1つ。『白面の女』は『闇のゲーム』を本当に引き起こしたという証言だけを残して。

「……どうも奴さん、尻尾を掴むのも難しいらしいな。おまけに逃げ足も速い。目的地は同じくシガマと共通してるが、この調子じゃそのシガマでも捕まえられるかどうか」

顎に手を当て考え込むクラド。なまじその存在に現実味が増した分、雲を掴むような感覚が逆に不気味に感じられる。

今は宿泊している宿のロビーに、ついて来たアンリエールを含めた5人が顔を並べ、状況を整理している最中だ。

「大会の出場が目的、とは限らないものね……今回のように被害者を出したら、すぐに街を出てしまうかも知れないわ」

すっかり立ち直った藍が、クラドの不安に言葉を添える。

白面の女が『闇のゲーム』を行っていると分かっていた以上、その目的が大会出場とは限らない。街に集まった決闘者を闇のゲームの標的とする為だという可能性も出てきた。

ここでふと、クラドは何か思い出したように顔を上げた。

「……そういやセンサー。何でアンタ『姉ちゃん達から報告を受ける前』に『白面の女が闇のゲームを行う』ことを知ってたんだ？」

アンリエールと対峙したあの時。ユウは確かにこう問い詰めた。

——1つ尋ねる。お前が『闇のゲーム』を仕掛ける『白面の女』か。まるで最初から知っていたような口振り。

しかしユウは、そんな問いに静かに頭を振って答えた。

「……思い違いだな。俺はその問いのどちらを否定するか肯定するか、その反応を見極めたくて『鎌を掛けた』だけだ。実際のところ、本当に両者が繋がるとは思っていないかった」

「そういえばそう聞かれましたわね……さすがはユウ様、聡明ですわ
♪」

ユウの弁明に、アンリエールが黄色い声を上げる。

「……成程、な」

どこか腑に落ちない点はあるものの、クラドはそれ以上の言及は控え前に進むべく提案を促した。

「まあとにかく、俺達が今後取るべき選択肢は1つだ。『白面の女』にこれ以上遅れを取らないように、出来るだけ早くシガマへ向かうこと。寄り道もこれからは極力減らしていく。予定より少し早めに着いちまうかもしれねーが、この分じゃそれ位が丁度良いと思う。どうだ？」

それはつまり、現状のメンバーだけで大会に臨むということ。

4人が最低限のラインとして定められている以上、どんなルールが設けられるかは定かでないが——恐らくフルメンバーで闘わなければならぬだろう。

自然と押し掛かるプレッシャーに息を呑みつつ、ベルは他のメンバーと同じく首を縦に振った。

「決定だな。それじゃ早速——」

「明日の早朝、ここを発ちますわよ。各自準備を怠らずお願いしますわ」

得意げにそう締め括ったのは、何故かアンリエールだった。

「いや、あのなお嬢。こっから先はもう俺らだけで」

「何を言ってますの？ 白面の女を捕らえよ、とのユウ様の申し付け。私まだ果たしていませんもの。良い機会ですから私もこの旅に同行させて頂きます」

「はあ!？」

二度見しつつ声を上げたのはクラドとベル。ユウは相変わらず、藍はどこか諦めたように苦笑していた。

「いやついて来るってな……あの黒服のオッサンたちも纏めきれぬほどウチの旅団は——」

「ついて行くのは私1人だけですわ」

「なら尚更だ！ 決闘組の令嬢を迎え入れるほど立派な設備は——」

「私用のキャンピングカーがありますから。ソレを貴方の車に繋げて引いてくれれば結構です。負担になる燃料や物資はこちらで援助致しますわ」

「……親御さんに連絡を」

「教育係のお兄様からはもう許可は頂いております♪ ユウ様にお仕えし、世界を回るのも良い教養になるだろうと快く承諾して下さいましたわ♪」

ユウの問いに聞いただけは声色を変えて返すアンリエール。まるで魔法少女が変身でもするような変わりようだ。

貴き決闘組とはいえ、その辺りは『可愛い子には旅をさせろ』精神なのだろうか。随分と奔放な教育をするお兄様である。

「で、でもでも！ 有名人ってせいで、大会に出て貰えるかどうかすら分からない人を仲間にするのは!」

話が纏まりそうな雰囲気を感じてか、ベルが1人噛み付く。

「このアンリエール・ラムジョレイン。ユウ様の為なら、この腕を存分に振るう所存ですわよ？ 少なくとも、決闘者経験の薄い貴女よりはお役に立って魅せますわ」

「ぐ」

今度は瞬殺。少なくともアンリエールに口喧嘩で勝てる者はメンバーの中には居ない。

アンリエールの強引なメンバー入りは、彼女が主導権を握ったままに可決されたのだった。

「それでは改めまして。今後ともよろしくお願いしますわね、皆様♪」
軽く一礼して、幽霊姫はにっこりと微笑んだ。

第10話 思い出に降る雨（スクラップ・スコール）

「やはり。穏やかなランチタイムにはコレが一番似合いますわ」

まるで高級ホテルの一室のような『車内』で、アンリエールは有名ブランドコーヒー『ブルーアイズ・マウンテン』を優雅に味わっていた。

荒れ道を走っている筈の『それ』には、どういう訳か揺れや騒音は一切届いてこない。

「……それは良いことで」

そんな異様に静かな空間の中、銀のトレイを抱えたベルがムスツとした表情で呟いた。

テーブルの上にはサンドウィッチ等の軽食が少々。小柄な彼女のイメージを崩さない品々が並んでいる。言うまでも無く、このランチはベルが用意したものだ。

「コーヒーも適温、食事もなかなか。ま、今朝の失態はこれで見逃して差し上げます。どんくさそうな割りに飲み込みは早いようですね」
「……それはどうも」

今朝の出来事を思い出し、ベルの腹中が再び煮え立つ。

朝食に淹れて出した紅茶は「温度が高すぎる」と駄目出しをされ。食事を出すにもいちいち細かく作法を説かれ。挙句、胸の大きさを引き合いに出され小馬鹿にされた。

アンリエールが女性用寢室にと自分の車両を開放してくれたのは感謝しているが、だからといって彼女の召使いになった覚えは無い。生まれが^{ネイティブ}橙^{ネイティブ}というだけで下に見られる。それはもう慣れたものだが、アンリエールの高圧的な態度は『あのA・O・J使い』と似たところがある。

^{ノワール}黒の人間は身内以外にはあんなもんさ、と宥めてくれたのはクラダだ。どうやら件の彼もアンリエールと同じ黒の出身だったらしい。

（だからって……）

だからといって、腹立たしいものは腹立たしい。

アンリエールの小言など突っ撥ねてしまえばそれで良いのだが、そ

それはそれで敵前逃亡のようで悔しい。

どうせなら一泡吹かせてやろう。そう考えてしまうのがベルという少女の良いところであり悪いところだ。

結果としてベルはこのランチで、不機嫌そうな表情さえ無ければ名実共に『メイド』として立派な振る舞いを見せるに至った。

女主人に仕える侍女。皮肉なことだが、その光景はとても絵になっていた。

(あーもう。早く食べ終わってくれないかなあ……いつまで経っても食器が片付けられないじゃない)

優雅に、ゆつくりとランチを楽しむ主人にジト目を向けるメイドの心中は、中流家庭のオカンのそれと同じものではあったが。

と、周囲の振動騒音をシャットアウトするはずの車内に、ふわりとした慣性の力が働いた。

「……おや？ 何かあったようですね？」

落ち着いた様子で、アンリエールは呟いた。

ガクンと少し揺れた程度であったが、それはこの車内に限つてのこと。

恐らく先を走るクラドの車はより強い衝撃に襲われたに違いない。そこまで考えて、ベルは弾かれたように外へと飛び出した。

「どうし……うわあ!？」

その様子を見たベルは、驚きに身体を仰け反らせた。

僅かに体勢の崩れた車体から、黒煙がプスプスと立ち上っているのだ。

車からは、何事かというような表情で2階部屋から藍が顔を覗かせ、運転席からは相変わらずの無表情でユウが降りてきた。

「ユウ様、ご無事でございますか!？」

ベルに少し遅れて出てきたアンリエールが、先程とは180度態度を変えてユウの下へ駆け寄っていく。流星は決闘アクションデュエリスト役者といったところか。

寡黙な騎士は姫の問い掛けに何も答えなかったが、続いて降りてきたクラドが気まずそうな顔で代わりに答えを返した。

「……スマン。エンストした」

*
*

「燃料系のトラブルかあ……参った。直せることには直せるが、肝心の部品がな」

点検の結果。問題はクラドの運転ではなく、燃料ポンプの故障であることが分かった。

単純なパーツの取替えで修理できるレベルではあったが、頻繁に交換する消耗品というわけでもないため、当然ながら予備のパーツなど積んでいる筈も無い。

「……アンリさんの豪華なヤツは走らないんですか?」

「アレに自走機能はありませんわ」

さらりと答えたアンリエールに、ベルは内心で(使えないなあ……)と毒づいたが、いくら悪態をついても事態が好転することは無い。

「仕方ねえ。俺がひとつ走り近くの街まで買出しに行つて来るか」

「近くの街つて! ここからじゃ歩いたら半日は掛かりますよ!?! ひとつ走りなんて距離じゃりません!」

ちよつとそこまで、といった様子で呟いたクラドに、ベルは驚きの声を上げる。

「あー……その辺は分かつてるさ。皆には待ちぼうけさせちまうが、それくらい何とかならない訳じゃ……」

「何とかありません! ネイティブの荒野を甘く見ると、酷い目を見ますよ!?!」

声こそ厳しい口調だが、それはクラドの身を本気で案じてのこと。

ベルの気遣いに頬が緩むが、それでも誰かがこの役目を負わなければならぬ。

「ははは、心配してくれんのは嬉しいけどな。車を修理しないと俺らは先に進めないだろ? だから誰かが……」

「それなら買出しにはわたしも同行します!」

「へ?」

間の抜けた声がクラドの口から漏れ出た。

様子を見守っていた他のメンバーも、各々ベルの顔を見やる。

「荒野の歩き方を知らないクラドさんだけを行かせたら、それこそ野犬に骨を晒すのが関の山です！ だからわたしも付いて行きます。良いですね？」

「いや、だからってなあ……」

「ずい、と言い寄られて、クラドが困惑した様子でユウに視線を送ると。」

ユウは黙って頷いて、静かに口を開いた。

「……渡りに船だ、同行して貰うといい。少なくともお前よりはこの土地の歩き方に慣れているだろう。もし何か危険があれば、そのときはお前が守ってやれ」

ユウにも太鼓判を押され、ベルは自信満々に大きな胸を張って見せる。

遠まわしに「任せた」というメッセージを受け取ったクラドは、観念したように溜め息をついた。

「……はあ、オーケー。分かったよ……っー訳だ、すまんがメイドちゃん、一緒にお使い頼むわ」

「はいー。お任せ下さいー」

ぐっ、と気合十分に微笑むベル。

無事にお使い部隊が結成されたその一方で、結果的に居残り組が結成されたことになる訳だが。

「センサー、アンタの方も頼んだぞ？」

「……俺が追い詰められた決闘者達だ。手を貸すまでもないだろう」

決闘者に傷を負わせる方法は只一つ。その身を守る『術』に長けた彼女らには無用な心配だったかと、クラドは心中で苦笑した。

「まあ距離だけ見れば明日中には帰って来れると思うが、サイアクの事態は想定しておいてくれ。予定時刻を過ぎても俺のDパッドに連絡が付かない場合は、すぐにお嬢の親族に連絡。まずはセンサー達の救助を要請、安全を確保してくれ。俺とメイドちゃんも捜索はそれから。それが『サイアクの事態』の緊急シークエンスだ、いいな？」

クラドは極めて真剣な表情で、留守組に念を押しした。

「……分かっている。それが必要にならないよう、十分気を付けて行ってくれ」

その辺りの配慮は既に汲み取っていたのか、ユウが静かに頷いて答えた。

「あ、そうだユウさん。くれぐれも寝込みには注意して下さいね？」

「下女。それは一体どういう意味ですの……？」

どこか含みのあるベルの注意喚起に、アンリエールはジトリとした目で異議を唱えた。

「……相変わらずの大荷物だな、メイドちゃんは」

「はい、備えあれば憂い無しですから！」

大きく膨らんだピンクのリュックを眺めて、クラドは以前に感じた重みを思い出しゲツソリと顔を引きつらせた。

「そういや、メイドちゃんと2人つきりってこれが初めてか？」

「あー、そうですね。ユウさんがあまり喋らない人だから、あんまり実感無いですけど」

ジリジリと焼け付く荒野を歩く2人は、それ相応の装備を持って臨んでいた。強い日差しから目を守る為にゴーグルを下げ、布を被って髪と肌の露出を減らしている。

厚手の装備に体温は上るものの、直射日光を極力遮ることで日射病の危険は大きく下がる。適度な水分補給と休憩を挟んでいけば、体温上昇による熱中症も避けられるはずだ。

「んじや、これはメイドちゃんとの初デートって訳だ」

「えへへ、そうなりますか。エスコートは任せて下さいね？」

「お、言ってくれるじゃねーの」

そんな軽口を交し合いながら、一定の速さを保って荒野を歩く。

不思議と話題が尽きることも無く。どうとということのない話からデュエルの話まで、2人は存分に会話を広げた。

「アンリさんはもう少し皆に気を使うべきなんです。わたしのことはともかく、ユウさんのこと見てばっかりで……」

「ま、お嬢は良くも悪くも一直線だからなあ。メイドちゃんも頑張らねーと」

「なっ、どういう意味ですかっ、それ!? わたしは別につ……!!」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを布の覆面の下に隠してクラドが問うと、ベルは布の上からでも分かるくらいに顔を紅潮させてあたふたと手を振って否定の意を示した。

「ひひひ、照れるな照れるな。俺ら師匠は弟子の考えなど全てお見通しなんだぜ? ああ、センサーはデュエルのことに関してだけだな」
「そ、そうですか……」

「アレは高性能デュエルロボットか何かだと思った方がいい。他のことはからつきしだ」

どこかホツとしたような残念なような、複雑な溜め息がベルから漏れる。

「なもんで。メイドちゃんの方からは非、チューの1つでもして女というものをインストールしてやってくれよ?」

直後、爆発でも起こした様な声が、ベルから勢いよく噴出した。

「っ!? そそそんなコト出来るわけないじゃないですかあ!!」

最早脈有りだと宣言しているようなものだが、様子から察するに当人自信も自分の気持ちに気付いていないのだろう。これ以上の追求はベルの困惑を深めるだけだ。

今の会話で少しでも『芽吹く』キツカケになれば良いかと、クラドはひとまず区切りを付けて次の話題を切り出した。

「ははは、冗談だよジョーダン。あんまり無責任に男とくつつけたら、メイドちゃんの親御さんにぶっ殺されちまう」

クラドがそう口にした途端。

先程までの勢いはどこへやら、ベルはどこかばつの悪そうに口をつぐんでしまった。

「あ……すまん、悪かったメイドちゃん。少しからかい過ぎて——」

「い、いえ違うんです! そうじゃなくて」

慌てて取り繕うベルだったが、はつとした表情でその目を遠くへ向けた。

青という色をそのまま切り取ったような空、その向こう端が僅かに灰色にくすんでいる

「……ちよつとお天気が荒れそうですね。急いでテントを張れる場所まで歩きましょう！」

「お、おう。分かった。そんなに危ない空だったか……？」

その出身から天候に関しては自信のあったクラドだったが、この大陸独特の気候というのもあるのだろう。

ひとまずは土地勘のあるベルに従い、足早に歩を進めることにした。

沈み行く太陽と入れ替わるように降りだした雨は、道行く2人の身体を容赦なく濡らしていった。

経験の無い空の変貌ぶりに、クラドも半ば興奮気味に騒ぎ立てる。

「ひえ……スゲエ雨だ！ こりやメイドちゃんがいなかったら確かに詰んでたな！」

雨足は激しくなる一方。水はけの悪い地面は泥水を溜め込み、足元に容赦なく攻め込んでくる。テントを張ればどこでも雨風は凌げると短絡的に考えていたクラドだったが、こんな水浸しの地面の上では避難場所として機能する訳が無い。

「クラドさん！ この辺りにしましょう！」

流石に考えが甘かったと反省する一方。

ギリギリアウトなタイミングではあったが、緩い傾斜のおかげで雨水が溜まらず、鉄砲水や土砂崩れになりそうな高い岩壁に頼ることも無く。

岩陰になっている高台まで辿りついたベルの手腕にはクラドも思わず舌を巻いた。

「さっすがメイドちゃん！ ここなら大丈夫そうだ！」

「安心するのはまだ早いですよクラドさん！ 早くテントを組み立てましよう！」

岩陰に吹き込んでくる雨風に尚も身体を濡らしながら、2人はテキパキとテントを組み立てていく。

組み上がった頃には、どちらも頭からバケツ一杯の水を被ったようにズブ濡れになっていた。

「あくあ……お互い酷い格好だな。ひとまず服を乾か——」
「？」

言いかけて、クラドの視線が硬直する。

前髪から落ちる雨雫を受け止める大きな胸元。普段ですらピンと張って胸を覆っていた白い布地は、可愛らしいクリーム色の下着を浮かび上がらせていた。

視線の意味に気が付いたベルは、はっと頬を赤らめて反射的に胸元を隠そうとしたが。

「ひ、ひとまず服を脱いで乾かしましょう！ 風邪引いちゃいますよ！」

意を決したように口を真一門に結んで、羞恥を必死に堪えて言った。

「そ、そうだな！ んじゃ、俺は外に出てるわ……」

「駄目ですよクラドさん!! これからもっと寒くなるんですから!!」

昼と夜の寒暖差が激しいのがネイティブの一般的な気候だ。

夜に向かつて気温が下がる一方で、濡れた身体のまま豪雨の吹き荒れる外に出るなど自殺行為に等しい。

「いや、でもそれじゃあな……」

「わたし後ろ向いて着替えます!! それならクラドさん恥ずかしくないですよね!」

「メイドちゃん。後ろ向く立場が逆だと思っぞ、それ」

ベルの必死な呼び止めに折れたクラドが仕方なく同意する形で、2人は狭いテントの中で互いに背を向けあって着替えることになった。

替えあれば憂いなしが功を奏した。替えの服を2人分ピンクのリユックから取り出して、ベルはいそいそと煩わしい一張羅を脱ぎ始

める。

「……………ん」

それは羞恥心から来る緊張からなのか、不安からなのか。下着姿にパンスト1枚という半端な格好まで脱ぎぎったところで、ちらりと邪な気持ちがあるの思考を横切った。

ほんの少しだけ、すぐ後ろの気配を覗き見る。

(わ…………)

目を向けてすぐに、ほどよく筋肉のついた男性らしい背中が目に飛び込んできた。

線の細い印象のクラドだが、普段服の下に隠された体はしっかりと、力強く頼りがいがあった。

いけないと思いつつ、ぽうとした思考のまま視線を上げていく。

引き締まった両腕。硬く張り出した肩。

そして、こちらに向けられた困惑の視線。

「……………あ」

お互い弾かれたように目を足元へ引き戻し。しばし雨音のみの静寂が流れた。

「ご、ゴメンナサイ……………」

「お、おう。こっちもすまんかった……………」

どちらも同じく邪な気持ちに駆られてしまっただけに、あまり強く言い出すわけにも行かない。それはお互いに同じ感覚なのだろう。

「あ、あの。これから結構危ない部分に手を掛けるので……………ここから

先は、その……………」

「お、おう！ 神に誓って振り返らない、絶対だ！」

1つ咳払いをして、良く分からない気合を入れて。

それから先は、2人とも平穏に着替え終えたのだった。

着替えが終わってからというものの、ベルはどこか俯き気味だ。

テント内に張り巡らせた紐には2人分の衣服が掛けられており、当

然ながら下着類も何の遮りも無く干してある。そんな光景がますます、クラドの罪悪感を煽る。

「……すまんメイドちゃん。あれはその、本当に邪な気持ちは無くてだな……」

「へ!? ああ、いえ大丈夫ですよクラドさん! あれは何かお互い様というか!」

「いや、そうは言ってもな……」

今はTシャツ短パンに着替えたベルが、ジャージ姿のクラドにブンブンと頭を振った。

慌てたように否定してみせるベルだが、その表情はどこか晴れない。ますます不安げに眉を寄せるクラドが気の毒で、ベルはぽつりと口を開いた。

「えっと、実を言えば。わたしこういう大雨って少し苦手なんですよ。どうしても嫌なことを思い出しちゃって」

嫌な思い出。

普段は元気良く立ち回るだけに忘れがちではあったが、彼女の生い立ちを考えれば薄暗い過去がいくつあっても不思議ではない。

「……そっか。悪い、変なこと聞いちゃった。」

「いえ、大丈夫ですよ。皆さんにはずっと内緒にしようと思ったんですけど、正直ちよつと寂しくて……あまり気持ち良い話じゃないんですけど、クラドさんに話しても良いですか? わたしのこと」

そう聞くベルの目は、ずっと伏せられたままだ。恐らく、勇気を振り絞って打ち明けているに違いない。

そんな様子を汲み取ったクラドは、いつもよりも声を柔らかくするよう努めて言った。

「ああ。俺に話して楽になるようなことなら、聞くぜ?」

「ありがとうございます。では……」

クラドが笑顔で頷くと、ベルはぽつぽつと話し始めた。

「……わたし、小さい頃にお母さんを亡くしてるんです。それからずっと、お父さんが男手1つで育ててくれました」

出だしに語られたベルの生い立ちに、クラドは思わず目を驚かせ

た。

そういえば、と思い返す。ベルと出合ったあの街で「親御さんに確認を」とユウが問い掛けたときも、特殊な事情があると上手くはぐらかされたような。

「お父さんは決闘者だったんですけど、元々はお母さんの方が腕の良いい決闘者で。夫婦になってから少しづつ教わってたみたいです。お父さんが村でも下から数えた方が早い『下手っぴ』だったっていうのも、何となく領けます」

当時を懐かしむように、どこか嬉々として話すベル。

そんな様子を見てベルの幼少時代を微笑ましく思い浮かべていたクラドが、彼女の紡いだ次の言葉に声を凍らせたのは半ば必然とも言えた。

「でも、だからですかね。『生贄』を決めるデュエルで負けてしまったお父さんを、ずっと恨めなかったのは」

生贄。それが誰のことを指しているのか、会話の流れから察するのに時間は掛からなかった。

降り続く断続的な雨音だけが、2人の沈黙を取り繕う。

「……生贄？」

「時代錯誤な話だっと思ってますよね？ でも、ネイティブの田舎村じゃ結構普通に行われている政なんですよ。わたしも『外の常識』を知るまでは、それが普通のことなんて思っていましたから」

いくら『未開拓』とはいえ。仮想空間^Aさえ可能とする文明が並ぶ同じ時代に、人の命を神に捧げるなどという野蛮な風習が残っているとはにわかには信じ難い。

それでも、当事者はゆっくりと噛み締めるように言葉を続けた。

「当時わたしの村を苦しめていたのは雨でした。今日みたいな大雨が何日も降り続いて、農作物は駄目になるし、あちこちで土砂崩れが起きて道や家が壊されて……村で出された結論は、水の神様に生贄を捧げてお怒りを静めて貰おう、ということでした」

そんな行為に意味など無いことを、果たしてどれだけの村人が理解した上で口を噤んでいたのだろうか。

体の良い口減らし、あるいは……どうすることも出来ない自然の驚異の前に、それこそ神へ祈る以外に手は無かったのかもしれないが。「当然ですけど、どの家からも立候補者なんて出る訳なくて。結論から言えば、村で『最も弱かった』お父さんの家から……つまりわたしが生贄として出されることになったんですね」

生贄を決める賭けデュエル。辺境の村の風習にまで、デュエルの持つ決定力が利用されていたらしい。

「でも、メイドちゃんは」

「はい、ちやつかりこうして生きてます」

——すまない、と頭を下げた父親に対して、ただ黙って頭を振った。いつも強くて大きな優しい背中が、涙を流して肩を震わせている。

——すまない、と跪いた父親に対して、今度は精一杯に笑顔を作つて向ける。悪いのは父親ではない。まして勝者である『彼ら』を恨むのも違う、と思う。

「村の近くの渓谷を流れてる川に身を投げたんですけれど、大雨のせいで水かさが増していたのが逆に良かったんですね。気付いたら知らないオジサンが目の前に。実はそのオジサンが人身売買の商人さんで、しばらくは街と仕事場を転々として。最後はあの街で店長に気に入られました、それが3年ほど前。それで今に至ります」

「今に至ります、つて……」

さらり、とこれまでの経緯を語るベルだが、そのあつけらかなとした口調とは裏腹に彼女の歩んだ道のりは険しかった。

何か掛ける言葉を捜すように言葉を詰まらせるクラドに、ベルは申し訳無さそうに笑つて続けた。

「まあそんな背景があつて。わたしは雨と、それとつい最近までデュエルモンスターズが嫌いだった、というわけです。ごめんなさい、暗い話で」

「あ、いや……月並みの言葉だけど、大変だったんだな」

「ネイティブじゃ、それこそありきたりな身の上話かもしれないですけどね。わたしはまだ、運が良かった方ですよ」

そう言つて物憂げに微笑むベル。

あの店で共に働き、どこかへ売られていった仲間のことを思っているのだろうか。

「あ、でもこの話。くれぐれも他の皆さんには内緒でお願いしますね？」

そう言つて口元に人差し指を当てるベルに、先程まであつた陰鬱な影は見えない。

短い間ではあるが。ベルが年相応に泣き虫な少女だということくらい、クラドは知っている。

それでも、薄暗い過去に負けずに一生懸命前を向く彼女がとても愛らしくて。

「おう、了解」

クラドは照れ隠しに親指を立て、はにかんで見せたのだった。

夜が明ければ、すっかり雨は上がっていた。

2人は急ぎ足で出発し、昼過ぎには無事目的の街へと辿りつくことが出来たのだが。

「はあ!? 売り切れたなあ!？」

店に辿り着くには、僅か一步遅かつたようだ。

「すいませんねえ。丁度、先程いらっしやられたお客さんが買っていたのが最後の1つで」

「……なんつー出来た話だよ、こりゃあ」

気弱そうなジャンク屋の店主に当り散らす訳にも行かず、ガリガリと頭を抱えるクラド。

決して大きいとは言えない街だ。車のパーツを扱う店のような店など、他にアテはない。

つまり、ここに無ければ入手は不可能。なまじ『仕方が無い』話だからこそ、尚更はいそうですかと諦める気分にもならなかった。

「……っ!! そうだオツサン、その『お客さん』はどれくらい前に来たんだ!？」

何か思い付いたらしく、クラドはカウンターから身を乗り出して店主に迫った。

「はあ、20分ほど前だったかと……」

「どっちへ行ったか分かるか!」

「ええと、確か大通りの方へ……」

そこまで聞いて、クラドは抱えていた頭すら放り投げんばかりの勢いで店の外へ飛び出していった。

「あ、ちよつとクラドさ……し、失礼しました!」

とりあえず一礼して、ベルも慌てて後を追う。

「あの、クラドさん!? どうするつもりで……」

「決まってる!! その『お客さん』トコに交渉しに行くんだよ!!」

クラドの見通しが正しいなら。ここから大通りへ向かうということとは駐車場へ向かうということ……それはすなわち『出発』を意味する。

細かく説明している時間は無い。その『お客』が出発し手の届かなくなる前に、何としても交渉の舞台へ降ろさねばならない。

大通りにひしめくのは、野菜や果物、その他諸々の商品を籠に盛り、頭に載せて歩くネイティブの買い物客達。そんな賑わいの中を縫って駆け、クラドたちはがらんと開けた駐車場へと飛び込んだ。

街の喧騒からは少しだけ遠い、その辺鄙な空間にはクラドたち以外にもう1人。

クラドたちと同じ様なキャンピングカーのエンジンルームを開けて、何やら作業をしている男がいた。

「おいアンタ!!」

言うが早いのか、クラドは男へ猛然と駆け寄ると肩を掴んで言った。

「アンタか、きつきジャンク屋でエンジンパーツを買って行ったってのは!」

掴まれた肩をゆっくりと振り解き——まるで岩のように大きな顔を、身体をクラドの方へ向き直らせたその男は、重く響く声で返した。

「……恐らくは、そうだが。何か?」

まるで勲章のように入り乱れる、細かな傷の数々。

長く日に晒された証でもあるその濃厚な褐色の肌は、彼がネイティブの人間であることを示していた。

「なら話は早い！ すまねえがちよっと俺の話聞いて——」

瞬間、彼の視線はクラドの背後へと向けられる。

鈍い光沢を放つ金属塊のような彼の目は、大きな穴を穿ったように見開かれていた。

「……お父、さん？」

男の代わりに声を返したのは、困惑のあまり視線を泳がせる褐色の少女^ベだった。

第11話 金剛の牙

「……そうか。随分と娘が世話になったようだ。礼を言う」

深々と頭を下げる岩壁のような大男に、クラドも思わず畏まった。死んだと思っていた実は娘が生きていて、妙な男を連れてきているのだ。決して誤解を招かぬよう注意しながら、クラドはこれまでの経緯を説明した。

グレーユ・ベルガモット。それが目の前の彼——ベルの父親である男の名前だ。

短いウェーブの掛かった黒髪は男性にしては長く伸ばされ、傷だらけの厳つい顔を目元まで隠している。長く日の下に晒された褐色の肌はベルよりも色濃く、逞しく鍛えられた身体をより屈強なものとして映えさせていた。

余計なものが一切無い、整然としたこのキャンピングカーが『彼』の根城だ。古ぼけたセピア色の空間には、棚と机、それにベッドが見える程度である。

（確か親父さん、あまり強くない決闘者だったって話だよな……？）
クラドの視線は必然的にそこへと向かう。

腰のホルダーに収まった決闘者の証、デュエルディスク。旧型ながらも取り回しが良く利く銃型タイプのものだが、クラドの観察眼はそれからいくつかの情報を割り出した。

（あのデュエルディスク……旅団狩りが好んで使うタイプのヤツだ。それも良く使い込まれてるときてる）

旅団狩りとは、決闘旅団を狙った強盗のようなものだ。狙いはもっぱらカードであるが、質の悪いものとなれば食料や金品、果ては人間まで攫い糧とする。

単独で行動する者から大所帯の組織を組む者までその規模は様々であるが、共通して言える事は多数の決闘者を相手にしてもそれなりの勝率を上げられるだけの実力がある、ということだ。

（何があつたか知らねえが……こりゃあ親子感動の再会、つてだけじゃ済まないかもな）

聞いていたものとは随分違うグレーユの人物像に警戒を強めるクラドだったが、それは実の娘であるベルも同じだったようだ。

「……お父さん、何か雰囲気変わったね。今は何をしてるの?」

彼女の複雑な事情を差し引いても、どこか引つ掛かりのあるギクシヤクとした会話。ベルの困惑は目に見えて分かった。恐らくはもう、二度と会うつもりはなかったのだろう。

「……ようやく、デュエルでお金を稼げるようになってな。ネイティブのあちこちを回っている」

明確な答えを避けるグレーユの言い方に、クラドは推測を確信に変えた。

「そうなんだ。村の皆は元気にしてる?」

「……村にはもう、長いこと帰っていないからな。どうだろうな」

恐らくはベルも、父親の辿って来た3年間がおぼろげながらも見え てきたのだろう。

村の悪習がそうさせたとはいえ、自分の力不足で一人娘を失ったのだ。平然と村で暮らせる訳が無い。

デュエルモンスターズが理を支配するこの世界で生きていくなら、その道で力を付け弱者を淘汰するのが手っ取り早い。少なくとも、ネイティブ橙ではそれが常套手段だ。その道のりは険しく、凄惨だっただろ

う。

「ユーリ、そういうお前も随分と変わったな。母さんの面影が無かったら、きつと気付かなかっただろう」

どこか影のあったそれまでに比べれば少し柔らかくなった口調で、グレーユはようやく父親らしい言葉を掛けた。

様変わりした父親の中に『昔』を感じ取ったのか、ベルの強張った表情も次第に解けていく。

「そう、かな。自分じゃ分からないけど」

「ああ。大きくなった、本当に……」

先程までの緊張が嘘のように、2人の間には和やかな時間が流れていた。

どれだけ人が変わっても、親と子の繋がりは変わらない。

杞憂だったかと頬を緩めるクラドが耳を疑ったのは、その直後だった。

「……だがユーリ、お前は決闘者になるべきじゃない」

再び娘に向けられていたのは、金属塊のように心中が窺い知れぬ重い視線だった。

「決闘者を辞めろ。彼らの旅団からは離れた方がいい」

「……どうして、何でそんなこと言うの？ さっきクラドさんの話を聞いて無かったの!? わたしは——」

「お前は。この世界で生きていくには脆すぎる。折角助かった命だろう、こんなモノに関わったらそれこそ『次』は無い」

差し出された左手の意図を、突然クラドが叫んだ意味を。

ベルはそのとき、全く理解できなかった。

「捨てられないというのなら、カードは俺に渡せ……いや、力づくでも渡して貰う」

いつの間にか装着されたグレーユのディスクから、紅い一筋の光が伸びている。

デュエルアンカー。デュエルディスクを強制発動させるだけのはずのソレは、まだディスクを付けていないベルの左腕にきつく巻き付いていた。

「え？ 何、コレ……?」

以前に使われたものが玩具だとすれば、これは真正銘の『本物』。

対象者の手首を締め上げ、生命的な危機に晒すことでデュエルを強制する非人道的な拘束具。それが今、父から娘に向けて放たれている。

「もう1度言う。決闘者を辞めろユーリ。それが俺と、母さんの遺思だ」

人気の無いがらみ通りの駐車場で、大男と少女が向かい合っている。

実の親子が刃を交えるその光景を、クラウドは歯噛みして見守っていた。

アンカーを解除するにはデュエルするしか無い。その結果が例え勝利でも、敗北でも。

『――『決闘申請』、確認。仮想戦場、展開完了』

重苦しい静寂が流れる中、景色は仮初の戦場へ塗り替えられている。

現れたのはいつかと同じ、荒廃した石造りの古代遺跡。

『審判員機構、起動』

緊迫した空気を破り、現れたのはテンション高めな方の審判員だ。

『血は人間の絆。愛の証！ 愛の為に血を流す女、美少女審判員コーパルちゃん只今参上……つと、何やら早々に重苦しい雰囲気ですが――？』

赤と青のダボダボな全身タイツを着たコーパルが、不思議そうに首を傾げる。

彼女のハイテンションはいつも通り、グレーユの追加申請によつて流された。

『申請を要求、アンティルールの適用を頼む。賭け品はそれぞれ『決闘者の資格』を放棄すること。その手段・方法は問わない』

『……そんな条件、絶対呑まない!! コーパルさん、アンティの適用は無効にして下さい!!』

『あららー、残念ですねー。アンティルールの適用には互いの合意が必要と……』

バチン、と。

コーパルの身体が弾けた様に仰け反り、再び向けられたのは彼女に似つかわしくない、虚ろな瞳だった。

『――ルール改定の申請を受理しました。これよりアンティール適用、LP4000のデュエルを開始します。対戦者グレーユ・ベルガモット、並びにユーリ・ベルガモット両名は開始準備を済ませ、位置について下さい』

妹のネフよりも機械的な、まさに電子音声といった無機質な声が

コーパルから発せられる。本来なら受理されないはずのアンティ
ルールの設定受理を、さりとらと告げながら。

「っ!? お父さん、何したの!?!」

「……少しばかり細工をな。この程度で驚いているようでは、デュエ
ルモンスタースが抱える『闇』に喰われてしまうぞ」

目の前に立つ『敵』は、一体誰なのだろう

ベルの知るグレイユは、あの優しい大きな背中。一体どこへ行っ
てしまったのか。

「……ツ馬鹿野朗!! しつかりしろメイドちゃん!!」

激しく動悸する心に、気付けのようにクラドの怒声が響いた。

はつと我に返ったベルは、あちこちに揺れる視界を振り向かせ、何
とかクラドへ焦点を合わせた。

「腹括れ!! こうなった以上、そのクソ親父を倒す以外に道は無えん
だ!!」

愛し、愛された者から向けられる敵意。

その重圧に、悲しみに。果たして自分は立ち向かえるのだろうか。

「お父さんを、倒す……」

「ああそうだ、ガツンと一発かませ!! 見せてやれよ、メイドちゃんの
『全力』を!!」

拳を突き出し、快活に微笑むクラドの姿が。ベルの芯に熱を取り戻
させる。

「……わたしは」

出来る出来ない、ではない。

やり遂げなければならぬのだ。

彼らと出合ったあの日に誓った、願いを叶える為に。

これまでに出会い、乗り越えてきた決闘者達の為に。

「わたしは、絶対負けない! お父さんにだって……デュエルの闇に
だって!」

なにより。今はたった一人で自分を支えてくれている、クラドの為
に。

「……お前がいかに甘い『幻想』を抱いているか。それはこのデュエルが教えてくれるだろう」

互いにディスクを構え、位置に付く。

仮想空間を吹き抜ける風とコーパルの静かな合図が、無慈悲な闘いの幕を切つて落とした。

「決闘（デュエル）!!」

ベル LP4000 VS グレーユ LP4000

**

「……俺の先行のようだな。ドロー」

グレーユ LP4000

手札・5↓6 モンスター・0 魔/罨・0

ベル LP4000

手札・5 モンスター・0 魔/罨・0

「モンスターをセット。バックカードを2枚セットしてターンエンド」

彼の外見をそのまま現したような、静かで手堅い先行1ターン。

開始早々いきなりライフを焼き切るような『一撃必殺』系のライフバーンデッキではなかったことにひとまず息をつくクラドだが、基本的に忠実なその布陣に安堵も緊張に塗り変わる。

（ま、そりゃそうか……バーンは奇襲に向いてるとはいえ、安定して立ち回れるようなデッキじゃない。だとすればバランスの取れたビートタイプが妥当って訳だ）

旅団狩りとしては必然的な選択と言えるが、経験の浅いベルにとっては唯一安心して戦えるデッキだとも言える。予期せぬ一撃で、突然敗北するような危険性は無い。

「わたしのターン、ドロー!」

気迫一杯なベルの様子を察するに、手札も悪くないらしい。

この様子ならば勝利することも、十分に考えられる。

「スタンバイからメイン、まずは手札から《切り込み隊長》を攻撃表示

で召喚！」

《切り込み隊長》

☆3 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1200 / DEF 400
もはやベルのデッキではお馴染みとなったそのモンスターが第一陣を飾る。

次いで、その果敢な剣に導かれるように召喚の魔法陣が浮かび上がった。

「召喚成功時に効果を発動！ 手札から《荒野の女戦士》を攻撃表示で特殊召喚！」

《荒野の女戦士》

☆4 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1100 / DEF 1200

剣を携えた麗しき女剣士が凛々しく並び立つ。

これで《強制転移》があれば早くもロックが完成していたのだが。そこまで上手い手札ではなかったようで、伏せカードが召喚に反応しないと見るや、ベルはすぐさまバトルフェイズへと突入した。

「バトル！ まずは切り込み隊長でセットモンスターに攻撃！」

召喚を阻害しなかったというのであれば、セットモンスターは何かしらの効果を持つリバース持ちかりクルーターか。

そう踏んでいたベルの思考を、グレーユの重く静かな宣言が遮った。

「ならばその攻撃宣言時、永続罠カードを発動。《モンスターBOX》モグラ叩きのような装置が描かれた、決して汎用性は高くないその罠。

クラドの脳裏に『あるデッキ』の存在が過ぎった。

途端、もはや取り返しが付かない状況になってしまったことに血の気が引いていく。

「このカードは相手モンスターの攻撃宣言時、コイントスを1回行い裏表を当てる。当たった場合、攻撃モンスターの攻撃力はバトルフェイズ終了時まで0になる。最も、このカードのコントローラー……つまり俺は自分のスタンバイフェイズ毎に500ライフポイントを払

うか、払わずにこのカードを破壊する、という選択を強いられるが」
確立1／2のカウンターカード。しかし守備表示モンスターへの
攻撃に対して発動しても、ダメージを受けるもののベルのモンスター
を破壊するには至らない。

そう軽く考えたベルとは対照的に、クラドは真つ青な顔で危険を促
した。

「メイドちゃん!! 切り込み隊長の攻撃が中断出来そうなカードがあ
ればチェーンしろ!! 運が悪けりゃこのまま負けちまうぞ!!」

「えっ?」

一撃で決着の着いてしまう何か。それがあのカードの裏に潜んで
いる。

未熟なベルには思い当たるカードなど無かったが、クラドは既にそ
の正体を見抜いていた。

「ほう……彼は中々に経験があるようだ。さて、どうするユーリ?」

何か発動するカードはあるのか?」

手札に目を落としてみるも、この状況で発動出来るようなカードは
1枚も無い。

「……ありません。攻撃は続行されます」

「ならばモンスターBOXのコイントスを行う。俺の選択は『裏』だ」
いつもの熱の籠った実況をの代わりに沈黙を保っていたコーパル
が、ようやく口を開いた。

『効果の発動を確認。コイントス機能を行います』

能面のような表情のコーパルが、手馴れた動作でコインを高く弾き
飛ばす。

くるくると回転しながら落ちてくるそれに、3人の視線が収束して
いく。

(もし親父さんの『細工』がここにまで及ぶものだとしたら……!!)
攻撃宣言を止められなかった以上、クラドの不安は『それ』に尽き
た。

この不安が的中してしまえば、結果はイコール必然となる。この決
闘に最早意味など無く、儀礼じみた形式だけの『何か』に過ぎなかつ

たということだ。

『コイントスの結果が確定しました』

パシン、と。コーパルの掌の上で運命が決定される。

『コイン表示は『表』。よってグレーユ・ベルガモットの宣言は『失敗』となります』

コーパルの宣言と同時に。切り込み隊長の剣先は鈍ることなく、セツトモンスターへと叩き込まれた。

「……命拾いしたな。ユーリ」

攻撃を受け、カードの中から姿を現したのは岩のブロックで出来た上半身だけのモンスターだった。

《アステカの石像》

☆4 / 地属性 / 岩石族・効果 / ATK 300 / DEF 2000
グレーユの言葉を理解するより早く、ベルに反射ダメージの仮想余波が襲い掛かる。

「っ……くぅ……?!」

ベル LP4000 ↓ 2400

ダメージエフェクトを耐えたベルは、あまりに大きく変動していたライフを見て抗議の目をコーパルへと向けた。

「なっ、どうして!?! ダメージは差分の800の筈じゃ!?!」

『質問への回答。《アステカの石像》は『このモンスターを攻撃した時に相手プレイヤーがダメージを受ける場合、その数値は倍になる』という効果を持ちます。攻撃力1200の《切り込み隊長》が守備力2000の《アステカの石像》を攻撃し、発生した800ポイントの戦闘ダメージは効果によって倍に。結果ユーリ・ベルガモットは1600のダメージを受ける計算となります』

抑揚無く語られる、見た目には何の変哲も無い下級モンスターが持つ凶悪な効果。

敗北の可能性。その戦慄が今更ながらにベルの全身を駆け巡った。

「そんな……それじゃあ今……」

もしコイントスが成功し、切り込み隊長の攻撃力が0になっていた

ら？

4000のライフポイントは、あっという間に消し飛んでいただけう。

「今更気付いたか。そこの彼は既に『別件』を危惧していたというのにな」

ちらりとクラドに目線を送って、グレーユは続けた。

「安心しろ。コレに出来るのはあくまでアンティの強制承認とアンカー自身の存在を隠すことだけだ。デュエルの進行まで自在に操れたなら、ユーリをサレンダー扱いにさせているさ」

そう言って涼しげに微笑したグレーユを、クラドは恨めしげに睨み付けた。

「……アンタ、本気なんだな？」

「ああ。悪いが俺の思惑に裏も表も無い。言って分からないなら力でねじ伏せ、全力で従わせる。ただそれだけだ」

グレーユのデツキ。その名は「アステカ」という。

中心となる下級モンスターの名を冠するソレは、『相手の攻撃を受ける』という防御的な手段を用いながら高い殺傷力を誇る、極めて特徴的なデツキだ。

ときに相手の攻撃力を下げ。ときに己の守備力を高め。不用意に攻撃を繰り返せば一撃の決着も有り得る、まさにモンスター不殺のプレイヤーキラー。

それを躊躇い無く使用したグレーユに、何か思惑があったとは考えられない。

本気で娘を、ベルを殺しに掛かっているのだ。

「無駄話が過ぎたな。ユーリ、ターンを進めろ」

「……わたしはこれで、ターンを終了します」

すっかり消沈したベルを鼻で笑って、グレーユはデツキトップに手を掛ける。

「俺のターンだ。ドロー」

グレーユ LP4000

手札・3↓4 モンスター・1 魔／罫・2

ベル LP2400

手札・4 モンスター・2 魔／罨・0

「スタンバイフェイズ。俺はモンスターBOXを維持する為、500ポイントのライフを支払う」

グレーユ LP4000↓3500

「更に手札から魔法カード《増援》を発動。デッキから《砂塵の騎士》を手札に加える。モンスターを1体、バックカードを2枚セットしてターンエンドだ」

あちらからの攻撃は一切無く、ただただ不気味にセットカードが増えていくのみ。

徐々に追い詰められていくようなキリキリとした感覚に襲われながらも、ベルは懸命に『可能性』へ手を掛け、引き抜いた。

「……わたしのターン、ドロー！」

そんなベルの想いに応えたのだろうか。

手札に舞い込んだのは、勝利をもたらす翼の女神だった。

(っ!! よし、ヴァルキュリアを引いた! これなら——)

「お前のスタンバイフェイズ。俺はこのカードを発動させて貰う」

ベルの思考を遮り、立ち上がったのはまたしても罨。

コミカルなイラストで、女学生と幼稚園児、本を持った学生らしい男が格闘家風の男に挑発されている。

「罨カード《バトルマニア》。相手のスタンバイフェイズに発動するこのカードは、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て攻撃表示にし、そのターンの表示形式変更を封じる。そして、この効果を受けた全てのモンスターは攻撃を強要される」

罨カードから発せられた赤いオーラに触発され、切り込み隊長と荒野の女戦士が闘気剥き出しの様相でグレーユのモンスターを睨みつける。

メインフェイズが終われば、たちまち相手モンスターへ切り掛かっていくだろう。

(つまり、このまま放っておいたら……)

相手のフィールドには、未だモンスターBOXとアステカの石像が

立ち並んでいる。

加えて、裏側守備表示のモンスターがサーチした《砂塵の騎士》だという保障はどこにも無い。しれっともう1枚のアステカを伏せられていた可能性は十分に有り得るのだ。

そうなれば先のターンの再現。今度こそ、自滅の引き金を引く羽目になる。

(それなら……!!)

攻撃を強制されるのは、あくまで《バトルマニア》の効果を受けたモンスター。

それを破る手段なら、たった今手札に舞い込んでいた。

「メインフェイズ、2体のモンスターをリリースしてアドバンス召喚!!」

2人の戦士の魂が呼び水となり、天空から暗暖色の機械天使が舞い降りる。

「わたしに前へ進む勇気を貸して!!」
アスタリクス ヴァルキュリア 《—**—翼戦神》!!」

《—**—翼戦神》

☆10 / 地属性 / 天使族・効果 / ATK 2800 / DEF 3000

「最上級モンスターか……聞いたことの無いカードだが、この布陣を突破出来るのか?」

「……絶対、超えて見せる! ヴァルキュリアの効果を発動、手札の《マジック・ストライカー》を装備して、攻撃力を600ポイントアップ! さらにヴァルキュリアはマジック・ストライカーと同じ名前・効果を得る!」

ヴァルキュリアの手に握られたストライカー魔法杖が緑色の輝きを放ち、その力を流し込むように与えていく。

《—**—翼戦神》

ATK 2800 ↓ 3400

「ほう……それで一矢報いたつもりか。甘いな、俺は罠カード《岩投げアタック》を発動」

「このタイミングで罠……!?!」

それはまさにバトルフェイズへ突入せんとする、その直後だった。「デツキから岩石族モンスター1体を墓地へ送り。相手ライフに500のダメージを与える。選択するのは《タツクルセイダー》だ」

《タツクルセイダー》
☆4 / 地属性 / 岩石族・効果 / ATK 1500 / DEF 1800

グレーユのデツキから下級の岩石族が落とされ、墓地から弾け飛んだような岩の礫がベルにダメージを与えていく。

「あぐ……！」

ベル LP2400 ↓ 1900

「無論、それだけじゃあない。墓地へ送られたタツクルセイダーの効果を発動。相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して裏側守備表示にする」

「っ!! そんな……!!」

ヴァルキュリアに纏わり付くように、大小様々な岩が寄り集まる。岩の中に完全に埋もれたヴァルキュリアは、無防備に背を向けカードの形で沈黙した。

「折角装備したストライカーも、これで外れてしまったな。大方その効果でアステカの石像を飛び越え、ダイレクトアタックを狙い続けるつもりだったのだろうか……」

——強い。これが本当に、村で『下手っぴ』だと笑われていたあの父なのか？

「……わたしはこれで、ターンを終了します」

「なら俺のターンだ、ドロー。スタンバイフェイズにモンスターBO Xを維持。メインフェイズに伏せていた《砂塵の騎士》を反転召喚」

グレーユ LP3500 ↓ 3000

《砂塵の騎士》

☆4 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1400 / DEF 1200

「砂塵の騎士のリバーブス効果を発動。デツキから地属性モンスター1体を墓地へ送る。選択するのは《リバイバルゴーレム》だ」

《リバイバルゴーレム》

☆4／地属性／岩石族・効果／ATK 100／DEF 2100
ゴーグルを被った黒髪の騎士が砂塵を巻き起こしたかと思うと、その隣には気味の悪いアンデットモンスターののような外見のゴーレムが並び立っていた。

「リバイバルゴーレムはデッキから墓地へ送られた時、場に特殊召喚することが出来る。更に俺は、砂塵の騎士とリバイバルゴーレムの2体でオーバーレイ！」

「それって……まさか!？」

息をもつかせぬ怒涛の召喚連打。

その最後を飾るのは、ベルにとっては初めて目にする黒の召喚法。

「レベル4モンスター2体で、オーバーレイ・ネットワークを構築……エクシーズ召喚！」

星々の輝く宇宙が、虹色のを引き起こす。

「歯向かう全てを砕く、金剛の牙!! ★4、《恐牙狼 ダイヤウルフ》!!」

★4／地属性／獣族・エクシーズ・効果／ATK 2000／DE

F 1200

ORU：2

「エクシーズ、召喚……!？」

ORUを纏った狼型のモンスターが、腹の底を抉るような遠吠えを上げる。

間髪入れず、グレーユが効果を発動させる。

「ダイヤウルフの効果を発動。ORUを1つ消費し、自分フィールド上の獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター1体とフィールド上のカード1枚を選択して破壊する。選択するのはダイヤウルフ自身と……伏せ状態のそのモンスターだ！」

ベルが状況を把握できないまま、ダイヤウルフは巨大な獣の頭部へと姿を変え——無防備なままのヴァルキュリアを容易く葬った。

「っ、ヴァルキュリア!？」

「お前の手札に《戦士の生還》でもあれば先のターンの焼き直しだ。良

く分からんその最上級モンスターには、早めに退場願おうか？」

手札に《戦士の生還》を抱えていたベルは、驚愕に顔を歪めた。

こちらの思惑も完全に先読みされ、頼みのヴァルキュリアですら攻略された。

何より。初めて対峙する《アスタリスクス》の名に動じる気配が全く無い。

「……俺はこれで、ターンエンドだ」

変わり果てた父親の背中を、果たして今の自分が超えられるのだろうか？

(……バカ、泣くな!! 絶対、ゼツタイ諦めるもんか!!)

思わず吐き出しそうになった弱音を必死に堪えて。

クラドの祈るような視線を背に、ベルは声高く宣言した。

「わたしのターン……ドロー!!」

未来を切り開けるか、否か。

それはこのドローに託された。

第12話 父の背中 母の想い

昨晚の急な大雨が嘘のように、昼下がりの荒野はすっかり晴れていた。

クラドから「予定より少し遅くなる」と連絡はあったものの、やはり出掛けた2人のことが気掛かりなのだろう。留守番組の3人は、屋外にテーブルとパラソルを持ち出し各々の時間を過ごしていた。

「ユウ様あゝ お飲み物をお持ちしましたわ♪」

そんな中、アンリエールがニッコリ笑顔でティーセットを運んできた。

まるで蜂蜜のように甘ったるい猫撫で声は、ベルが聞いたら苦虫を『踏み潰した』ようなジト目を向けていただろう。

「……わざわざすまない、アンリ」

「いえいえ♪ 下役の者が居ない今、夫をもてなすのは妻の務めですから♪」

そんな彼女の声色に物怖じせず、ユウはいつもの調子で頷くと素直にもてなしを受け取った。艶黒の陶器に金装飾が施されたティーセットは、アンリエールの華美なイメージに相応しい。

「藍もご一緒には如何です。お仕事ばかりに構ってでは、身体に毒ですわよ」

今朝方のベルには随分と厳しく当たっていたようだが、決闘組のお嬢様として育った背景を疑ってしまうほど、アンリエールは実に気配りが上手かった。

3人分のカップへ慣れた手つきでハーブティーを注いでいくと、たちまち荒野のカラリとした空気に麗しい香りが染み渡っていく。ベルに散々口出しをしただけあって、その『作法』は完璧だ。

「あら、私も頂けるの？ それじゃ、お言葉に甘えて」

Dパッドを片手にジャーナリストらしく記事を書く藍も、昼下がりのティータイムに参加することにした。

「……お2人とも心配性ですわね。作業に手が付いていませんわ」

アンリエールの凶星な指摘に、藍は思わず苦笑する。先程から比較

的簡単な記事を書き始めているものの、まるで完成の目処が立っていないからだ。

ユウは相変わらずの無表情だったが、何かを誤魔化すように紅茶を口に含んだ。テーブルの上には、らしくもなくカードが散らかったまま放置されている。得意の1人回しはおろか、デッキを組むことすらままならない様子だ。

「あの2人は少々不出来な下使いではありますが、杞憂することはないでしょう。優雅に、余裕を持って彼らの帰りを迎えてやるのが私たちの責務ですわよ?」

軽く薄桃の髪を撫で上げながら、ふわりと羽毛が舞い落ちるように着席するアンリエール。少々ひねくれた言い回しではあったが、要は「2人を信じる」ということなのだろう。

「……そうね。とびきり美味しい料理でも用意して、2人が帰りを待ちましょうか」

アンリエールの思わぬフォローに、藍は頬を緩めるとカップを手にとつて頷いた。

一口含んだ途端、不安やモヤモヤとした気分が煙になって出ていってしまったかのような柔らかい香りが藍の胸を満たした。僅かな酸味が後味を引き締め、たった一口だけで嘘のように気分が落ち着いていく。

「……美味しい。ほっとする味ね」

「でしょう? このハーブには気持ちを落ち着かせる効果がありますのよ。私も気に入っていて、よく頂いていますわ」

どこから持ってきたのか、お茶菓子にと色とりどりのクッキーを皿の上に広げて、アンリエールがにこやかに語る。黒の本場貴族のもてなしを受けながら、藍とユウは贅沢な時間に舌鼓を打った。

「へえ……何ていう名前のハーブなの?」

「名は【アリユールクイーン】。他には脂肪燃焼と、ホルモンを抑制する効果がありますわ。ユウ様と藍にはあまり必要の無い効果ですね。一番飲ませてやりたかった子は、今は出掛けておりますが」

嫌な予感が藍の脳裏を過ぎる。それはまるで、モンスター召喚直後

に伺う相手プレイヤーへのカード発動確認にも似ていた。

藪を突いて飛び出すは奈落か激流か。恐る恐る、藍は努めて笑顔のままアンリエールに問い掛けた。

「……ねえアンリちゃん？ このハーブを飲むと具体的にはどんな効果が見れるの？」

「そうですね……精神安定と疲労改善、女性なら『美しく引き締まったバスト』に近づくかと。ま、藍には無用の長物ですわ」

すつ、と藍は静かに視線を手元へ移した。

ティーカップの底に描かれた花のような幾何学模様が「ご馳走様でした」と完飲を告げ。

そのすぐ傍では、残酷な真実が相も変わらず平伏していた。

「あら、アリエールクイーンが随分とお気に召したようですよわね藍？

涙まで流して……」

良かれと思って、という言葉が何故か頭を過ぎり。

藍はただ黙って首を横に振った。

「わたしのターン……ドロー!!」

ドローカードは……チューナーモンスター《ジュツテ・ナイト》。

ベルの脳裏に迸る、一筋の光の線。カードとカードが紡ぐ絆の道が、突破口を指し示した。

「スタンバイからメイン、わたしは手札の《戦士の生還》を発動！ 墓地の《切り込み隊長》を手札に！」

グレーユに看破され行き場を無くした《戦士の生還》も、息を吹き返したかのように逆転の一手へと連なっていく。デッキは確かに、彼女の願いに応えたのだ。

「手札に加えた切り込み隊長を召喚！ 更に召喚成功時の効果を発動、《ジュツテ・ナイト》を特殊召喚！」

《切り込み隊長》

☆3 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1200 / DEF 400

《ジュツテ・ナイト》

☆2 / 地属性 / 戦士族・チューナー・効果 / ATK 700 / DEF 900

戦士達の魂が指し示すは5つの星。グレージュ父の『黒』に対抗するかのよう
に、娘ベルの場に『白』への布石が集った。

「行きます！・ ☆3の切り込み隊長に、☆2チューナーのジュツテ・ナイトをチューニング！」

調律の戦士が変化した2つの光輪は、切り込み隊長を即座に変質させていく。

「造られし模倣の正義よ！・ 希望も絶望も隔てなく引き裂く災厄となれ！」

光の柱が反撃の狼煙の如く立ち上る。高く高く、少女の決意を天へ届けるように。

父を超え前へ進まんとする少女の背中を押すのは、かつて乗り越えた最悪の強敵だ。

「シンクロ召喚！ 起動せよ、アーリー・オブ・ジャステイス《A・O・J カタストル》！」

☆5 / 闇属性 / 機械族・効果 / ATK 2200 / DEF 1200

無機質な単眼が。全てを切り裂く金色の爪が。

眼前に立ちはだかる理不尽な壁を打ち破るべく、フィールドに降り立った。

「……ほう。そんなカードを持っていたのか」

感心したように呟くグレーユの口端が僅かに吊り上る。

そうでなくては手ごたえが無い、とでも言わんばかりの余裕な表情だ。

「よっしゃ、いざメイドちゃん！ ナイスシンクロだ！」

召喚のエフェクトが晴れ、待ち焦がれたようにクラウドが歓声を上げた。ぐっと拳を握り締め、今にも飛び上がりそうな勢いだ。

そんなクラウドに振り向きながら頷いて、ベルはしばし思考を巡らせる。

(カタストルは闇属性以外のモンスターとの戦闘を行う時、ダメージ計算を行わずに効果破壊する。これならモンスターBOXの成否に
関係なくアステカを突破できるはず)

再びグレイユへ向き直ったベルが見据えるのは無論、伏せられたままのバックカード。

不気味に沈黙を保つソレが咆哮を上げるのは、今この瞬間かも知れないのだ。

(だから……お願い、通って！)

しかし、その伏せカードが正体を明かすことは無かった。

カタストル召喚を止める術は無かったようで、グレイユはただ黙して攻撃宣言を待っている。

氷が溶け出すように弛緩していく緊張を悟られないように、ベルは声を張り上げ宣言した。

「カードの発動が無いなら……バトル！ カタストルでアステカの石像を攻撃！」

「モンスターBOXの効果を発動。宣言は『表』だ」

「……え？」

思わぬ父の宣言に、ベルは怪訝に眉を寄せた。

未熟な自分ですら気付いたアステカの突破口。使用者である彼がそれに気付かない訳が無い。

まさかもう一枚の伏せカードに何か……と戦慄したが、モンスターBOXの発動に何かをチェーンする様子は無い。

『効果の発動を確認。コイントス機能を行います』

くるくると宙を回るコイン、それは一瞬でコーパルの掌の中へ結果を託した。

『コイントス結果が確定しました。コイン表示は『表』。よってグレイユ・ベルガモットの宣言は『成功』となります』

コイントスの成功によりカタストルの攻撃力は0となったが、災厄のマシンはそんなことなど構いもせず爪を振るい——呪い返し
の石像を、見事に撃破した。

「……………」

破壊の余波に身じろぎ一つせず、グレーユは悠然と立ち尽くす。

天敵の召喚を許し、必殺のコンボを破られたことに対する憤慨や焦りを見せる様子は全く無かった。

「わたしはこれでターンエンド……だけど」

そんな彼を真っ直ぐに見据えて、ベルは声高く宣言した。

父の打ち立てた壁を一つ乗り越えた今だからこそ、伝えなければならぬことがある。

「このカタストル、元々はわたしのカードじゃないんだよ？ わたし1人じゃ、お父さんのモンスターは多分倒せなかった……」

これまでに出会い、ときには乗り越えてきた人々の面影が、父のプレッシャーに押し負けないようベルを突き動かす。

「このデツキは『1人』じゃない。辞めろと言われて「はいそうですか」って簡単に頷けるほど、わたしがここまで背負ったものは軽くない!!」

決意を語る娘を見て、グレーユは哀れみの目を向けた。

「……その様子では。お前の言う『重さ』に押し潰されるその時まで、進むべき道を誤ったことに気付かんだろうな。母さんと同じように「……どういう、こと?」

少し躊躇いがちに目を伏せて。

グレーユは重厚な唇を開け、告げた。

「母さんは、決闘者としての『^{おもり}錘』を背負ったが為に命を失った」

「お母さんが……?」

ベルの言葉を遮るように、グレーユが問いに答える。

「病弱だった身体に鞭を打ち、決闘者としての『誇り』を捨てずに闘い続けた結果……母さんは倒れた。それは力の無かった俺とお前を『背負った』結果でもある」

村での風習を考えれば、どうして母親が闘い続けなければならなかったのかは容易に想像がつく。

弱者から淘汰される、そんな社会で家族を守るために。それがベルの母親が強くいられた理由であり、そして命を落とすに至った原因でもあった。

「……そして俺も、妻を亡くした罪を背負い決闘者となった。1度は娘を失い、旅団狩りとして死線を抜け『鍾』は嵩を増した。もはやデュエルは俺を、家族を縛る呪いでしかない」

だからこそ、とグレーユは険しい眼差しをベルへと向ける。

「俺はお前をデュエルから救う責務がある。それは母さんの最期の言葉であり、遺志だ。お前の背負った鍾がどれほどの重さか知らないが……その程度、俺が纏めて引き受けてやる。お前はデュエルの世界から離れ、ひっそりと日影の中で生きていく方が幸せになれる筈だ」

母の死と父の決意。

それらを知った上で、ベルの心はふつふつと熱を帯び火を上げた。
(違う……)

ベルの心に渦巻く何かは、父に返すべき答えは未だ形を成してはいない。それでも今、何か言葉を返さなければ。それが肯定になってしまいうそりで。

「……それは多分、お父さんの勝手だよ」

纏まらない言葉を何とか紡ぎ、そう呟くのが精一杯だった。

「別にお前が理解しなくても良い。これは、その為のデュエルだ」

グレーユ LP3000

手札・2↓3 モンスター・0 魔/畏・2

ベル LP1900

手札・2 モンスター・1 魔/畏・0

「俺のターン、ドロロー。スタンバイフェイズ、モンスターBOXを維持する為コストを払う」

グレーユ LP3000↓2500

「更にメインフェイズ、畏カードを発動。《エクシーズ・リボーン》」

アステカの布陣を破られたにも関わらず、グレーユの手に迷いは一切無い。

カタストル天敵を突破する手段など、最早考えを巡らすまでも無いといった風に。

「墓地のモンスターエクシーズ1体を選択し、このカードをORUとすることで自分フィールドへ復活させる。再び現れる、《恐牙狼》ダ

イヤウルフ』！」

地を割き、災厄を砕くべく金剛の牙が躍り出る。

(専用蘇生カード!? そんなものまで……)

そのカードが持つ効果の意味を、ベルは身を持って知ることとなった。

効果の発動にORUを消費するモンスターエクシーズは、『死者蘇生』のような通常の蘇生カードでは再び効果を発動することは難しい。蘇生と同時にORUを補充出来るこのカードはまさにうってつけという訳だ。

「ORUとなった『エクシーズ・リボーン』を消費し、ダイヤウルフの効果を発動させる！ カタストルを砕け！」

再び振るわれる恐牙の一撃。戦闘では無敵を誇るカタストルも、この効果の前には無力だ。白く輝く装甲が弾け飛び、爆破の余波がベルを襲う。

「カタストルっ!?!」

折角見えた希望の光は、僅か1ターンで脆くも崩れ去った。

近くに壁でもあれば拳を打ち付けんばかりの形相で、クラドが歯噛みする。

「くそ、これでまた状況は振り出しかよ……!!」

「それはどうかな。むしろ、振り出しに戻る程度で済めば良いが」

クラドの苦しげな呟きに、グレーユが皮肉たっぷりに言葉を返す。

「これで俺の墓地には地属性のモンスターが5体。召喚条件を満たしたことにより、手札からこのモンスターを特殊召喚する」

どこか聞き覚えのあるその召喚条件に、ベルは戦慄を走らせた。

特定のモンスターを墓地に揃えることで条件を満たす。

それはまさに、自分をこの世界へと誘った白き龍のそれに良く似ていた。

「見せてやろう。これが道を誤ったお前を正すべく母さんが遺し、俺が背負った数多の罪の……その具現だ」

吼えるように、岩だらけの地面が低く唸りを上げる。

隆起し、飛び散る岩盤の中から姿を覗かせたのは巨大な黒鋼の鎧。

「眠れる死者を呼び起こせ、《地霊神グランソイル》!!」

《地霊神グランソイル》

☆8 / 地属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 2800 / DEF 2200

「グランソイルの効果を発動、特殊召喚成功時、自分または相手の墓地のモンスター1体を選択し自分フィールド上に特殊召喚する!!」

鉄球が連なったような剛腕を地面へ叩き付けると、そこを中心として魔法陣が展開される。ソレはまさに制限カードである《死者蘇生》を内包したような、強力な効果だった。

「選択するのは……お前の墓地の《A・O・J カタストル》だ!!」

グランソイルが腕を打ち付けた地面から、地の底から不気味な起動音を響かせ、災厄の使者が蘇った。だがそれは、皮肉にも敵陣である父のフィールドだ。

「そんな……」

乗り越えた筈の難敵から、再びベルへとその敵意が向けられる。

(流石にミスはしねえか……目先の攻撃力でヴァルクュリアを選ばずにカタストルを選んだあたり、先をしつかり読んでいやがる)

フィールドが放つ威圧に呆然と立ち尽くすベルに代わって、クラドが心中で毒づいた。

決闘者としての確な選択。敵ながらも流石と舌を巻く反面、油断や隙を突いての反撃はもはや不可能という重い事実が押し掛かる。

ベルはこのデュエルで《死者蘇生》を使用していない。つまりデッキか手札に未だ埋もれているとグレーユは考えたのだろう。

カタストルを蘇生出来る手段が残っているという警戒、それから導き出された答えがこの状況だ。

墓地からカタストルを奪い取ることで蘇生自体を封じ。仮に《死者蘇生》を使われたとしても、ヴァルクュリアや他のモンスターではモンスターBOXが残っているこの状況でカタストルとグランソイルを突破することはできない。

そして最も恐ろしいのは。決着を下しかねないこの状況で、グレーユが余念無く『次のターン』のことを考えて行動している、というこ

とだ。

油断は無い。慢心はしない。綱渡りのように緊迫したグレーユのデュエルスタイルは、彼の哀しい生き方を顕著に表していた。

「バトル、カタストルでダイレクトアタック!!」

災厄の爪が降りかかる。

ベルの残りライフは1900。勝負を決するには十分な攻撃力だ。

「メイドちゃん!!」

クラドの叫びと同時。

引き裂かれた人影は——ゴトンと音を立てて、鉄くずをその場に撒き散らした。

「……手札から《速攻のかかし》を発動！ バトルフェイズを強制終了します！」

ベルの代わりに攻撃を受けたのは、直接攻撃を防ぐ手札誘発の効果モンスターだった。

まさに紙一重の回避。このターンは何とか凌いだものの、残された手札はこれで1枚となった。

「俺はこれでターンエンドだ。まだ足掻くか、ユーリ」

圧倒的に不利なこの状況で、ベルの目にはまだ闘志の炎が灯っている。

クラドが希望を失わずに見守っていられるのは、ひとえにその力強さによるものだった。

「……お父さん、一つ聞かせて。お母さんは最期になんて言ったの？」

俯いたまま、ベルがグレーユへ静かに問い掛ける。

デュエルから自分を救うこと、それが母の遺した言葉だという。もしもそれが『本当』なら、ベルは潔くサレンダーをするつもりだった。

だが、父の返した解答は——。

「もしもお前が私たちと同じ道を歩みそうになったら、そのときは頼むと。そう言つてこのカードを渡された」

親子の血は争えないなど、ベルはこんな状況でも思わず苦笑してしまった。

諦めるには。父に屈するには、まだ早い。

「……そつか。それならきつと、そのカードはお母さんの遺志ではあっても、お父さんの罪じゃないよ」

「何？」

父の固い頭も。母の優しさも。今ならどちらも手に取るように分かる。

顔を上げ、前を向く。立ち塞がるモンスター達の向こうに見える父の顔は、ここでようやく僅かながらの動揺を見せていた。

「だから、わたしも言わせて貰うよ。お父さんの背負った錘がどれだけ重くても……わたしが纏めて引き受けて見せる。だから諦めない。絶対に勝って伝えるよ。お母さんの、本当の遺志を！」

デッキからカードを引き抜く。たった1枚。この状況を覆せる『かもしれない』、そのカードを引き当ててる為に。

「わたしのターン、ドロー!!」

ドローカードが半円の軌跡を描く。

動悸を押さえながら、祈るように手元へと目を向ける。

ドローカードは――。

(……死者、蘇生)

起死回生を担うべく舞い込んだカードはベルが望んだ希望の光ではなく。

皮肉にもグレーユが見通し、しっかりと対策を講じた『最悪の可能性』だった。

(……落ち着け、考えろ。このカードで出来ること……!)

しばし思考を巡らせ、結果。クラドの考察とほぼ同じ結論が見出される。

立ちほだかる双壁を突破することは不可能。次のターンを凌ぐ手段も無い。

「どうしたユーリ。あれだけ大きな啖呵を切っておいて、まさかサレンドーするつもりじゃないだろうな？」

返す言葉は浮かばなかった。

所詮、ここまでなのだろうか。

ちっぽけなまま。父親の心すら救うことが出来ず、終わってしまったのか。

「諦めんなメイドちゃん!! 頭ほじくってよーく思い出せ!! センセーと俺が教えたことを!!」

倒れそうになる身体を、またもクラドの声が支えてくれた。

ユウは常に前に立ち、藍とは隣で一緒に戦って。思えば背中にはいつも、彼がついていてくれた。

「一から十まで、百から千まで!! それで足りなきや万まで思い出せ!! 答えは必ず見つかる!!」

2人の師匠と共に旅立ったあの日から今日までのことを思い返す。性格が対照的な2人からデュエルを教わる時間が、今は何よりも楽しくて。あれだけ嫌いだったデュエルは、何にも替えがたい特別なものに変わっている。

だから手放したくない。これまでに築いた彼らとの時間を。これからの未来を。

——コホン。1つ、覚えていて欲しいことがある。

聞き慣れた声が脳裏を過ぎった。

それはデツキを貰ってすぐに、クラドが語った言葉だ。

——デツキはな、1人じゃ完成しないんだ。

どういふことですか、と首を傾げて返したベルに、クラドは続けた。

——自分がいて、相手がいて。それで初めてデツキは成立するんだ。

たった2枚の手札。それらがベルの脳内で光の軌跡を描いていく。

それは例えるなら、天から垂れた蜘蛛の糸。その先に希望が繋がっているのかどうかすら分からない、不完全な勝利の方程式。

——相手のデツキを、手札を、フィールドさえ。全てのカードを自分のデツキの流れに組み込む……それが決闘者として前へ踏み出す、大きな一歩になる筈さ。

「……わたしは、手札から魔法カードを発動!!」

それでも、今はその糸に手を伸ばす。

全てを運否天賦に委ねることに、不思議と恐怖は感じなかった。

「手札の《死者蘇生》を墓地へ送り、《二重魔法》ダブルマジックの効果を発動!!」
「死者蘇生をコストにしただと……?!」

思いも掛けないベルの選択に、グレーユの目が驚きに見開かれる。
一方のクラドはベルの選択に拳をぐつと握り締め、満面の笑顔を浮かべて大きく頷いた。

「このカードは相手の墓地にある通常魔法1枚を選択し、自分の正しいカードゾーンに置いて使用することが出来る!! 選択するのは……お父さんの墓地の《増援》!!」

二重魔法のカードが、光を放ちながら増援のカードへと書き換わっていく。

このカードこそ、勝利の可能性を掴むための第一歩。

「増援の効果により、デッキからレベル4以下の戦士族モンスターを手札に加える!! わたしは『このカード』を手札に加えて、そのまま召喚!!」

手札にもフィールドにもカードは無い。まさに一面の荒野と化したベルの陣営に、たった1人の女剣士が降り立った。

《アマゾネスの剣士》

☆4 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1500 / DEF 1600

「ッ、馬鹿な……」

グレーユの重鈍な眼が大きく開かれる。

数少ない「アステカ」の天敵でありながら、単体で採用するにはカードパワーの足りないカードであるが為に、意識の外へ放っていたその存在。

墓地へ送られたベルのモンスターを見れば、可能性は十分に考えられた。その事実がグレーユの心臓に深く突き刺さる。

それは正体不明の上級モンスターを、天敵であるカタストルを屠つたことによる油断に他ならない。

「……成る程。そのカードが、入っていたのか」

熱を帯びていく後悔の念に、妙な笑いがこみ上げてくる。

どこか諦めたように目を閉じ、グレーユは静かに呟いた。その表情

は憑き物が落ちたように清々しく、穏やかだった。

「……モンスターBOXの効果は強制、なんだよね？ 発動する意味の無いカタストルの攻撃に対して発動したのは、そういうことでしょ？ だから『発動しない』っていう選択肢は無い。どんなモンスターの攻撃宣言に対しても、必ず発動してしまう」

覚悟を固めた父親を真っ直ぐに射抜いて、ベルは言葉を続けた。「そしてアマゾネスの剣士は……このカードとの戦闘によって発生するダメージを相手に跳ね返す！」

グレイユの残りライフは2500。モンスターBOXの効果が発功し、攻撃力が0となったアマゾネスの剣士がグランソイルに攻撃を行えば――。

「だがユーリ。これは確実性の無い博打だ。ほんの少しでも運が俺に傾けば……それは分かっているな？」

「分かっているよ、だからこれが正念場。わたしとお父さん、どっちがどっちを背負うのか！」

ベルが宣言するが早いのか。女傑の剣士が地を蹴り、黒鋼の神へと駆け出していく。

「……バトル!! アマゾネスの剣士でグランソイルに『攻撃宣言』!!』『攻撃宣言』時、モンスターBOXの効果が発動。俺は『裏』を選択する」

モンスターBOXのカードが輝きを放ち、その効果が発動された。すかさず、宣言を受けたコーパルが虚ろな瞳を光らせる。

『効果の発動を確認。コイントス機能を行います』

ピン、とコーパルが無造作にコインを宙へ放る。「……ああ。すっかり忘れていたよ、ユーリ」

アマゾネスがその剣先を差し向け、コインが宙を舞う僅かその数秒。

時間は真空中に放り込まれたかの如く、ゆっくりと流れた。

走馬灯のように、グレイユは刹那の間に記憶を呼び起こす。それはまだ、親子が3人揃って笑いあっていた頃の話だ。

上手く肉が手に入って、野菜も新鮮なものが買えて。そんな日に夕

飯のリクエストを決めていたのは、コインやサイコロを使った簡単なゲームだった。

何度も何度もグレーユは彼女『達』に挑んだが。彼の希望はいつも叶わなかった。

『コイントスの結果が確定しました』

グレーユの呟きが終わるその前に、コーパルの手の中で勝敗は決した。

『コイン表示は『裏』。よってグレーユ・ベルガモットの宣言は『成功』となります』

《アマゾネスの剣士》

ATK 1500↓0

「お前と母さんには、ずっと負け越していたっけな」

アマゾネスの振りかざした剣は、グランソイルの一撃に耐え切れず粉碎したが——呪術師の加護を受けた彼女の身は、受けた衝撃を魔力の刃に変えてグレーユへ放ったのだった。

グレーユ LP2500↓0

「……ルールはルールだ。約束通り、俺は『決闘者の資格』を放棄する。審判員機構、頼む」

アンカーの拘束は解かれていないため、グレーユの申請にコーパルは虚ろな表情のまま応えた。

『アンティールルにより、賭け条件が適用されます。敗者グレーユ・ベルガモットの『決闘者の資格』の放棄を行使。今後、デュエルディスク並びにARRリンクシステムを用いたデュエル行為、並びに審判員機構によるサポートを無効とさせて頂きます』

そんなことまで可能なのか、とベルが驚いていると。

グレーユのディスクがショートし、拘束していたアンカーも霧散し消滅した。

『アンティ適用を確認。これにより審判員機構の終了を……ハッ!?

私は一体今まで何を!?』

アンカーの接続が切れたことでコーパルの擬人格が戻ったようで、その表情に元の騒がしい色が戻っていた。

「デュエルは終了だ審判員。もう帰って良いぞ」

『あらら。うーん何か釈然としませんがー。どうやら本当にデュエルは終わったようですので、これにてお暇させて頂きますー。ではでは、またいつかどこかの戦場^{フィールド}でお会いしましょうー♪』

腑に落ちない表情のままではあったが、ひらひらと手を振ってコーパルも粒子化して消滅した。

「……結局。俺は家族を誰一人守れなかった訳だ。不甲斐ない男の末路にしては上出来か」

消え行くARの仮想戦場を見送りながら膝を折り、自虐的に呟くグレュー。

そんな彼の前に立ったベルは、おもむろに拳を振り上げると――。

「えいつ」

こつん、と小さな音を立てて。拳はグレューの頭上に振り下ろされた。

岩のような彼の体にダメージなど無かったが、グレューは呆然と目を丸めて見返した。

「……ユーリ?」

「何でもかんでも自分の責任にし過ぎ。お父さんは昔からそうだよ?」

まあ、わたし自身もそうなんだけど……」

藍の挑発に乗って大惨事になりかけた事件を思い出しながら。

ベルは気恥ずかしくなって目を逸らしたが、咳払いを一つして再び向き直る。

「……デュエルが枷だとか、呪いだとか。そんな風に感じるのは、お父さんがそうやって余計な責任を背負ってるからじゃないかな。お母さんの言葉だって、多分そう。お父さんに負い目があったから、哀しい言葉にしか聞こえなかったんだと思う」

言葉の受け取り方など人それぞれだ。まして目の前で愛する者を失い、力の無い自分を責めているときであれば……それはきつと、暗

く冷たい意味に捉えてしまうだろう。

「お母さんが言った『同じ道』っていうのは決闘者の道って事じゃなくて、わたしたち親子の『悪い癖』……何でも一人で背負って無茶しちゃうコト、じゃないかな？」

決闘者としての道を歩ませたくないのなら、単にデュエルから一切関わりを持たないようにさせればいいだけの話だ。しかしデュエルが理を支配するこの世界で、弱きから切り捨てられる村で生きていくには難しい。

だからこそ。いずれ決闘者となるだろう娘の、支えになつて欲しいと願つたのではないか。

「そうじゃなきゃ、お父さんにカードを渡したりしないでしょ？ 自分のように一人で背負わずに、親子２人で支えあつていつて欲しいって。お父さんにもわたしにも、そう言いたかつたんじゃないかな？ まあこれは、わたしがお母さんだったらそう言うだろうなあ、つていう推測だけど……」

おぼろげな記憶の中にしか居ない母親の姿だが、親子の奇妙な繋がりが成せる技なのだろう、ベルには母の考えが手に取るように理解出来た。

「さっきも言ったけど、わたしはもう『１人』じゃない。１人じゃないからどんな重いものだって背負える。だから大丈夫だよ、お父さん」
そう言つて微笑むベルを、グレーユはただ呆然と見つめた。

二度と会うことは無いと理解したあの日以来、すっかり成長した娘には妻の面影が重なつて見えた。それはとても儚く、脆弱で。

しかし今、自分を乗り越え「大丈夫」と微笑む娘はもはや誰の写し身でもない。

未だに子離れ出来ずにいた自分とは違って、娘は立派に一人の人間として自分の道を歩んでいたのだ。

「あと、最後にもう一つ。折角こうしてもう一度会えたんだから、まずはそこを一番に喜んで欲しかったな？」

けれど、むつと頬を膨らめますその仕草はまだまだ子供で、どうしても愛おしい。

子離れするのはまだ難しそうだと、自分の弱さにグレーユは苦笑を漏らした。

「……そうか。そうだったな」

涙脆いのも、親子揃って。

岩壁から伝う雫が1つ地面を濡らして、とても暖かな言葉が芽吹いた。

「おかえり、ユーリ」

「ただいま、お父さん！」

「もう俺には必要の無いものだ。持っていくといい」

グレーユから渡されたのは件のエンジンパーツと、旅団狩りとして集めたのだろうカードの数々だ。そのほとんどが生活費に換わったので大した物は無いとのことだが、売買人であるクラドにとっては貴重な在庫だ。有難く頂戴しながらも、クラドは問い掛けた。

「でも親父さん、いいのかよ？　いくら決闘者で無くなったとはいえ、車ぐらいいは入用じゃないのか？」

「先を急ぐのだろうか？　構わんさ、俺はここで店にパーツが入るのをゆっくり待てばいい。出来ればコイツで、君らの仲間のところまで送り届けてやりたいところだが……」

頼みの『足』がコレではな、とグレーユがキャンピングカーを小突きながら言い掛けたところで、ふと駐車場に見知った人影がふらりと姿を現した。

「ゲッ!?　貴様ら何故こんなところに!?!」

その男はベル達を指差し、まるで不快な虫でも見つけたかのように口元を引き攣らせていた。

華奢な顔立ちと皮製の日除けマントの下から覗く華美な衣類は、今はどこかくたびれて威厳を失ってはいるが、その性格の曲がついていそうな顔つきは見間違えう筈が無い。

シフト・クロツカ。それなりに大きな旅団を率いていたが、遂に

はベルに乗り越えられた哀れな決闘者だ。

「よお、ダンナ。元気にしてたか？」

「ふざけるな!? ご覧の通り貴様らのせいで最悪な状況さ!!」

見れば、あれだけ群れていた取り巻き達の姿が1人も見当たらない。旅団は解散し、単身何とかシガマまで辿り着こうとこの街に寄つたというところだろう。

命からがらという状況ながらも未だにハングリー精神は失っていないようで、近くにユウの姿が無いと分かるとそれまでの表情を一転、好機とばかりに口端を吊り上げた。

「だが……僕の運もまだ尽きていなかったようだな!! あのライ口使いが居なければこつちのものだ!! お前とメスガキだけなら、油断さえしなければ——」

何を思ったのか、ずいとグレーユ前へ出る。

その姿をまじまじと眺め、シフトは何かを思い出したようにガタガタと震えだした。

「お、お前は確か……旅団狩りの……!?!」

「久しいな。いつだかの旅団頭」

に、いと邪悪な笑みを浮かべるグレーユ。

その威圧感、とても決闘者の資格を無くした者とは思えない迫力がある。

「何だ。親父さん、知り合いか？」

「まあな。前に少し遊んでやったことがある」

デツキの相性はそれほど悪くは無かった筈だが、旅団の後ろ盾を失ったシフトには荷が重い相手だろう。最も、今のグレーユにデュエルは出来ないのだが。

「ところで旅団頭、アレはお前の車か？」

木の幹のようなゴツイ指が、駐車場の隅に止められた趣味の悪い車を指差した。

お金持ちのお坊ちゃんが精一杯悪ぶって見せたような、ラクガキじみたデザインの車など持ち主は自ずと限られてくる。

「あ、ああ……そうだが……?」

言い逃れは出来ないと思つたシフトは、震えながらも肯定する。

「それは良かった。実は今、少しばかり『足』が欲しくてな?」

後は分かるな? グレーユに詰め寄せられたシフトは、涙目のまま頷くと黙つてキーを差し出したのだつた。

日も傾きかけた頃。ぽつんと荒野の真ん中に佇むキャンピングカーへ派手な外観の車が乗り付けた。

「よう、戻つたぜ? 皆いい子にしてたか?」

何事かと警戒を強めた留守番組の3人だったが、ドアを開けて現れた見知つた顔に呆れたようなほつとしたような、そんな色が浮かんだ。ユウだけは、終始相変わらずの表情であつたが。

「何かと思えば……随分と趣味の悪いタクシーを拾つて来ましたのねえ?」

おずおずと助手席から出てきたベルと交互に見比べて、アンリエールは深い溜め息と共にうんざりした様子で呟いた。

「あはは……まあ……」

貴女のお部屋も似たような感じじゃありませんの? と心中で呟いたが、ベルは改めて車を眺めた後「確かにそうかも」と考えを改めた。

「とにかく、2人ともお疲れ様ですわ。藍がダイナーを用意してくれていますから、早く中に入つてお休みなさいな」

不意に見せたアンリエールの優しげな表情に一瞬戸惑つたが、隣でグッドサインを作つて微笑む藍を見てすぐさま腹の虫が鳴いた。

恥ずかしさに顔を高潮させるも、続く藍の言葉に思わず身体を強張らせる。

「ところでベルちゃん、そちらのおじ様は?」

運転席に座る褐色の岩男に怪訝な眼差しを向けて、藍が首を傾げた。

当のグレーユは判断を任せているようで、何か取り繕う様子は無

い。

慌てて、クラドが言葉を挟む。

「あー、その人はだなあ……」

ちらりとベルに目配せすると、口元に人差し指を当てて微笑んでいた。

その仕草に一瞬どきりとしながらも、クラドは切れ切れに嘘を紡ぐ。

「たまたま、偶然。街で仲良くなった、気の良いオッサンだよ」

じつ、と向けられる疑いの視線から逃れて数秒。

諦めたように溜め息をついてから、藍はグレーユに一礼した。

「……そうでしたか。2人をここまで運んで頂きまして、ありがとうございます。お礼の代わりとしては何ですが、ご一緒に夕飯でもどうですか？」

「折角の誘いだが、まだ街に帰ってやることがあるのでね。申し訳ないがこれで失礼するよ」

「そうですか……残念です」

挨拶代わりにグレーユがすつと片手を上げると、エンジンが再び唸りを上げる。

助手席のドアを閉めるその間に、ベルが小さく呟いた。

「行つてきます」

グレーユも小さく頷くと、車はゆっくりと走り出して行った。

沈む夕日の中へ解けていくように遠く、小さくなっていく影。それをしばらく見送って、ベルは仲間達の待つ車内へと歩を早めた。

「……2人とも。何か隠してない？」

「おう、隠してる隠してる♪俺だけしか知らないメイドちゃんのお密をなく？」

「!? なつ、ちよつと何言ってるんですかクラドさん!？」

いよいよ近づいた、シガマの地。

大舞台への決意を新たに、ベルの胸は大きく高鳴っていた。

第2章 大会、開催。

第13話 スパイシー・ガール

「えーつと……わたしは《レスキューラビット》の効果を発動、このカードを除外して……」

「デッキからレベル4以下・同名の通常モンスター2体を特殊召喚、ですわ」

「あ、はいっ。デッキから《甲虫装甲騎士（インセクトナイト）》2体を召喚！」

《甲虫装甲騎士》

☆4 / 地属性 / 昆虫族 / ATK 1900 / DEF 1500

女性専用車両の小さなテーブルの上に、ベルのデッキから薄黄色のカードが2枚置かれる。ベルとアンリエールが嗜んでいるのは、ディスクを使わない卓上デュエルだ。

「これで☆4のモンスターが2体。エクシースX召喚の準備は整いましたわよ」

退屈そうに目を細め、アンリエールがフィールドを眺めながらX召喚を促すが、ベルは難しそうに首を傾げたまま動こうとしない。

「……やっぱり、ダメですね。この子は合わないみたいです」

ベルはそう言うと、テーブルに展開したカードの中から《レスキューラビット》を名残惜しそうに引き抜いた。

「たった1枚でモンスターを2体揃えられるのは強いかなあと思ったんですけど。どうにも、デッキの『様子』がおかしいというか……」
「それはそうですね。そのカードを使うなら素材になる通常モンスターを最低でも2枚、投入しなければならぬのですから」

グレージュ父から所有カードとデッキを丸ごと預かったベルだったが、彼の【アステカ】はクセが強く手に余る代物であり、結果として従来のデッキにいくつかのカードを足して強化することになった。

X召喚を戦術に取り入れるにあたり、その道のエキスパートである

アンリエールにデツキ構築を指南して貰うことになった訳だ。

「ラビットから持ってこれる素材は、色々と出来そうな子が揃っているようですけど……問題はエクストラデツキですわね。肝心のモンスター・エクシーズが1枚だけでは、そのカードを投入する意味は薄いものです」

短く溜め息をついて、アンリエールもカードをデツキへ仕舞いこむ。

「うう……」

そんなコトは言われなくても分かっていますよーと心中で毒を吐いて、ベルは泣く泣く貴重な『可愛い系カード』の採用を見送ることになった。

「ま、他に手頃なエクストラカードが手に入るまでお預けということでは良いんじゃないのですの？ シガマならカードショップも星の数ほどありますでしょうし」

アンリエールが外へ視線を投げる。

車の窓には既に、ネイティブでも有数の大都市シガマが映っていた。中心部に近づくにつれてビルが立ち並び、その発展は一带の街とは一線を画している。

その理由は至極明快、このシガマは『空の玄関口』として機能しているからだ。見れば時折、轟音と巨影を携えて旅客飛行機が街を出入りしている。

各政府が主導する公認大会がこの街で行われるのも、他の大陸からの決闘者が参加しやすいようにとの配慮に他ならない。

そんな不特定多数の人間が出入りする為だろうか、街へ出入りするにはそれなりのチェックを通過する必要があった。

ユウ、クラド、藍の3人は街の出入り口に設けられた関所へ行ってしまった為、アンリエールが素直にベルの相手をしているのは半ば暇潰しの意味合いが強い。

「そうですね……うう。でも、また新しいお洋服を買う夢が遠のいて……」

旅の資金源も兼ねているクラドの『商品』を譲ってくれという訳に

もいかず、結局は自分のお小遣いの範囲でしか買物はない。

大会開催も秒読みというこの状況で呑気に服など買っている訳にもいかず、折角溜まり始めたお小遣いもカード購入の軍資金となりそうだ。

大会の大舞台に立つのに、一張羅のメイド服のままというのも目立ち過ぎて何だか嫌だなあ、とベルなりに思うところはあったのだが。「服ですか？ 私のお下がりでも良ければ……ああ、そのはしたない胸囲じゃサイズが合いそうにありませんわね」

ぐさり、と魔王アンリエールの毒槍がベルのハートに突き刺さる。他に着る服が無いのもう一つ理由が、低身長のカセにやたら大きく張り出したソレのせいで、自分に合ったサイズが中々無いということだった。

男性は大きな胸を好む、と常々聞かされていたので、ひっそりと誇りを持って生きてきたベルだったが、こうした不便な点を考えるとアンリエールの言い分もあながち間違いではないのかもしれないと考えてしまう。

スリムな体型の方が可愛い服が多いし、実は『控えめな方が男性は好み』とかいう話も小耳に挟んだ。

「……いいですよ。どうせ着れたって、わたしにはそういうドレスとか似合いませんからー」

だからベルはふいっと顔を背けて、健気に強がるのが精一杯だった。

クラドの事前準備は今回もバツチリで、大会開催前でどこも満室になる筈の宿の確保も抜かりは無く、多少手狭ながらも男女2部屋に別れての宿泊が可能になった。

「ほい、メイドちゃんに俺らからプレゼントだ」

「えっ？」

そんな訳で。

色々とお金が入り用、というこの状況で『それ』はベルにとって思いも掛けないものだった。

「大会前だつてのにこんなケチなモンしか渡せないが……少しでもデッキの強化になる足しになればと思つてさ」

クラドから手渡されたのは、白と黒のカードが1枚ずつ。《大地の騎士ガイアナイト》に《銀嶺の巨神》、どちらも決して強力なカードとは言えないが、貴重なエクストラカードということに違いは無い。

「エクストラカード!? いいんですか、これからもつとお金が必要になるんじゃない?」

「ああ、その辺はセンサーと姉ちゃんが上手く見繕つてくれてな? 思ったより懐に余裕が出来てさ。お嬢の実家さんも、大会の参加費用くらいは持つてくれるそうなんだ」

驚くばかりのベルに、クラドと藍が悪戯な微笑みを浮かべた。

「その間、ここだけの話だけだね?」と声を潜めた藍が付け足す。

「……アンリちゃんね、実は『見聞を広げて修練を積む為に』つて反対するお兄さんを説得して付いて来たらしいのよ。電話口で『旅の間はもう家に頼るな』つてこつぴどく叱られてたわ」

宿へ着くなり街へ出て行ったユウを追いかけ、今はこの場に居ないアンリエールの意地悪な微笑を思い浮かべる。

アクションデュエリスト

いつも余裕ある態度の彼女だが、名のある決闘アクションデュエリスト役者が長い間舞台を離れることがどれほどのリスクを背負うのか。プライドの高いアンリエールがこつぴどく叱られたというその光景を想像する程度にしか分からない。

彼女はきつと「貴女の為ではない」と言うだろうが。メンバー全員の思いが詰まったそのカードを、ベルは包み込むように受け取った。

「……ありがとうございます! わたし、この子達と一緒に精一杯頑張りますね!」

何も出来なかった自分にはそうすることでしか報えないと、じわりと滲み始めた涙腺に蓋をしてベルは全力で微笑んで見せた。

「うむ、期待しているぞメイド隊長。とまあ授与式も終わったところ

で、俺らも早速シガマの街を搜索しに行こうか？ あんまりのんびりしてるとセンサーに睨まれそうだ」

照れ隠しなのか少しおどけて見せて、クラウドが今日の本題を切り出す。

翌日に迫った大会開催の前になるべく『白面の女』の手掛かりを探し出すこと。これまでの経緯からそう簡単に見つかるとは思えないが、相手もこの街に何かしらの目的がある以上、その距離は確実に縮まっっていると考えて良い。

危険極まりない『闇のゲーム』を仕掛けてくるといふ未知の存在。出来ることなら、次の『被害者』が出る前に正体を明かしたい。

「改めて確認だ。無茶はするな、手掛かりを掴んだらまず連絡しろ。これは絶対厳守だからな？」

極めて真剣に語るクラウドに、ベルと藍も神妙な面持ちで頷き返した。

「——とは言うものの」

広い。しかし狭い。

というのが、ベルがこの街に抱いた第一印象だった。

左右に背の高い建物が立ち並ぶ大通りは、今までに見たどんな街よりも広く長かったが……その中心を走るのはせわしない車の列。端へ追いやられるように詰められた人並みは入り乱れ、歩きづらいことこの上ない。

ベルの担当は街の表通りの、決闘者が集まっただけのような場所での聞き込みだ。

白面の女と直接遭遇する危険も有り得る『街の暗部』の散策は男性チーム、上流階級御用達の特別区域はアンリエール、年齢的にベルには不向きな場所へは藍が出向いている。

人混みを何とか掻き分けながら進み、1つ情報を得られそうなスポットを見つけたら、次のスポットの情報を聞いてそこへ向かう。そんなリレー方式で街を巡っていたベルだったが、慣れない人混みを歩き続ければ流石にスタミナも減るといふものだ。

そろそろ腹ごしらえもしたいと考えていたところで、ふと目に留まったのがベルがかつて働いていたのと同じような雰囲気の、木造建築の飲食店だった。

近代的な街並みの中に取り残されたように不釣合いな店だったが、それはあくまで『演出』としての効果を狙っているようで、中を覗いてみると街の空気に馴染めなような荒野の男達が相も変わらず騒ぎ立てている。腰のカードホルダーを見るに、大会に出場するべく集まった決闘者達なのだろう。

時刻は既に夕刻へ差し掛かろうとしていたが、普通に夕食を楽しむ客もいたりと雰囲気は『オリジナル』より少しばかり観光向けになっているらしい。

「あのー、すみません」

などと、なるべく目立たないよう店員に声を掛けてから、ベルはそくさと空いている席へ腰掛けた。こんな場所に1人で『妙な格好の女子供』が入ってくれば嫌でも注目を集めるだろうと、半ば諦めの境地で居たのだが。

何やら、男達の賑やかな注目はカウンターの1席に集まっているようだ。

「いいぞネエちゃん！ ドンドン片しちまえ！」

「見る、店主の顔が皿みてーに真っ白だ！」

ゲラゲラ、と豪快な喧騒が店の雰囲気を盛り上げる。

喧嘩やトラブルの類ではないようで、同席している客達も煩わしいというよりはどこか苦笑を浮かべつつその様子を楽しんでいるようだ。

値段も手頃な軽食を1つ注文してから、ベルもそろりと様子を伺いに席を立った。

「おかわりー！」

件のカウンター席には、細身の少女が1人。丁度、空になった丸皿を店主と思わしき男に笑顔で突き出しているところだった。

まだあどけなさの残るものの、歳は恐らく17〜8歳程。真珠を透かしたような独特の白髪は歳相応とは言えないが、腰の辺りまで長く

伸ばされたそれを2房の三つ編みに結ったそのシルエットはやはり、無邪気な雰囲気と相まって幼く見える。

しかし彼女の風貌は幼い少女のイメージとは大きくかけ離れた、かなり露出の多い軽装だった。上は肌にピツタリと張り付いた黒いスポーツインナーのようなものが1枚だけで、腹部を覆うには至らない丈の短さときている。腿の付け根辺りで役目を終えているデニムのホットパンツからは、程よく肉付いた脚がすらりと伸びていた。

ブラウンのロングブーツと黒のハイニーソだけが唯一彼女の肌を大きく隠していたが、ニーソの方はどこかで破いたのか、そもそもそういうモノなのか分からないが、大小の穴が開き白い素肌を覗かせてしまっている。

(……変な人だ)

自分の格好は棚に上げて、ベルの第一印象はそれに尽きた。

奇妙な少女の観察をしているうちに、空だった皿にはいつの間にか新たな息吹が注ぎ込まれていた。山盛りのカレーライスが、それはもうドカンといった具合に。

「……はいよ、これで9皿目。無理はしない方が身の為だぞ？」

「? 無理? 何で?」

きよとん、と目を丸めて少女が首を傾げたのも束の間。

「いただきまーすー!」

徒競走の号砲にも似た彼女の宣言と共に、香り豊かなスパイスマウンテンはみるみるうちに更地と化していく。

そんな彼女の災害じみた食事風景に、一瞬静まったギャラリ―たちが再び沸き上がる。

(あれが……9皿も!? ウソウソ、あの人の身体のどこに!?)

凹凸のはつきりとした、藍とはまた少し方向の違う女性らしいボディラインを備えた彼女のどこに、9つものスパイス山脈が詰め込まれているのだろうか。

そもそもお金は大丈夫なのだろうか、とカウンターの上方へ目を向けると……。

「超激カラヴァルカレー、おかわり自由。やれるもんならやってみろ

……」

口に出して、一字一句黙々と音読。

「げ、激辛!?! あっ……」

ここへ来て、ようやく何かを察したベル。

まるで目を刺すような芳ばしい香り。そしてカレーと呼ぶにはあまりに紅過ぎる、溶岩のような色をしたそのルーの違和感。

それがどれほどの攻撃力を持っているのかベルには想像もつかなかったが、目の前の少女は笑顔でソレを平らげると、一息ついてからこう言った。

「おかわり!」

かつて、ベルを苦しめた《マクロコスモス》というカードがある。

どんなカードであろうと問答無用で除外するその効果をふと思いつき、少女の胃袋はそんな別次元の何かで構成されているのではないかと、ベルはそう思った。

「……悪いがお嬢ちゃん。10皿目はタダではいかねえ」

肩を震わせながら呪詛でも紡ぐような姿勢で呟く店主に、ギャラリー達から十人十色のブーイングが飛び交った。

「ええーっ!?! 何でえ!?!」

白髪の少女もそれに漏れず、スプーンと皿を剣盾のように持ち構えながら不服の意を示す。

「おじさん、おかわり自由っていったじゃん!?!」

「悪いな。ここから先は大人の事情ってモンなのよ。正直な話、コレを2皿以上完食する人間がこの世に居るとはオツチャン、思いもしなかったのさ」

口は災いの元、とはまさにこういうコトなのだろう。

しかしながら、その辺りを誤魔化さず正直に頭を下げた店主の真摯な姿勢に野次の火は自然と静まり返った。

「おじさん……」

「だがよお嬢ちゃん、俺も男だ。もしも『コイツ』で俺に勝つことが出来たら……そのときは腹を括らせて貰うぜ」

そう言っ取り出したるは、全世界の共通言語デュエルモンスター

ズ。

漏れなく常備していたらしい旧型のデュエルディスクにデッキをセットし、店主の戦闘体勢はバッチリとあったところか。

「あー！ おじさんも決闘者だったんだ？」

まるで大好物でも見つけた子供のように、目を輝かせてディスクを見つめる白髪の少女。

その眼差しを見て、店主の口端がにやりと吊り上る。

「つーことは、お嬢ちゃんも……だよな。決闘者に二言はねえ、ここで俺が負ければ閉店も覚悟の内よ！ 10皿でも100皿でも、何なら店の食材前部食って行きやがれ!!」

店主の男らしい宣言に、ギャラリーはおろか店内全てが歓声と熱気に包まれる。

外まで余裕で漏れ出すその騒ぎに、道行く人々も何事かと外から様子を伺い始めた。

(き、聞き込みをするどころじゃなくなっちゃったなあ……)

沸き上がる男達に挟まれもみくちゃにされながらも、ベルはひとまず今から行われるであろうデュエルの結果を見届けることを決めた。

店主が決闘者だというのは不幸中の幸いだ、この辺りの決闘者界隈の詳しい話が聞けることだろう。そうなれば、白面の女の情報も何か引っ掛かるかも知れない。

「ホント!? それじゃ早速——あ、そうだった」

すかつ、と空ぶるような動作を見せた後、白髪の少女は少し残念そうに目を伏せた。

「あたし、今ディスクとデッキ持って無いんだった」

ズコツ、という古風なりアクションをギャラリーから頂いて、少女は後ろ手に頭を搔いて照れくさそうにはにかんだ。

「マジかいお嬢ちゃん？ 決闘者がデッキを手放すたあよ……」

「えへへ……でも大丈夫！ ちょっと待ってね！」

少女はくるりと店主に背を向けて立ち上がると、右手を大きく上げてギャラリーに向かってこう言った。

「誰か、あたしにデッキとディスク貸して？」

あつけらかんとした口調で言い切った少女に、流石のギャラリ―達もぎわつき始める。

ディスクを貸せ、というのは分かる。しかしデツキというのは使用する決闘者のクセすらも反映し、文字通り『個人専用』にカスタマイズされている。使い方も回し方も分からない赤の他人が、渡されてすぐに扱えるほど簡単な代物じゃない。

それに相手は店の存続を賭けた本気モード。生半可な実力で勝てるような相手ではない。

「ね？　ちよつとの間だけでいいからさ？」

両手を合わせて懇願する少女。ともすれば侮辱とも受け取れる彼女の『お願い』に、1人の男が手を上げて応えた。

「あの……俺ので良かったら」

中肉中背の、あまりパツとしない風貌の男が名乗りを上げる。

そんな彼の元に、少女はトテトテと駆け寄ると。

「ありがとう♪　それじゃちよつと借りるね？」

男の両手を握り軽く上下に振って、少女が柔和な微笑を浮かべた。

途端、人畜無害そうな彼の表情にカアツと紅が指していく。女性にあまり慣れていないのだろう、それだけでしどろもどろになった男は何とかDパッドとデツキを手渡した。

「お待ちせおじさん！　それじゃ始めよつか！」

少女は軽快にDパッドを起動させ、デュエルモードへと変形させると――男から受け取ったデツキを1枚も見ることなく、挿入口へと差し込んだ。

「お、おいお嬢ちゃん？　俺が言うのもおかしな話だが、デツキの中身を見なくて良いのか？」

「うん！　どんなデツキなのか、想像しながらデュエルする方が胸アツだし！」

満面の笑顔でそう返す少女に、侮蔑のような悪意は全く感じられない。

純粹に、この状況を楽しんでいるのだ。

「そうかい……言つとくが後悔はなしだぜ？　俺はガチで行かせて貰

うからな！」

「どんとこい！」

そんなやり取りが合図のように、カウンターを挟んで互いに距離を取る2人。

同時に2つのディスクがリンクし、お馴染みのシステムが起動する。

『AR^{AR}ヴァイジョン、リンク^{リンク}展開完了。審判員^{ジャッジ}機構、起動』

木内装の店内が一変、店の外と同じような大通りのド真ん中へと景色が塗り替えられていく。

『……イエロー系女子の可愛さは異常。永遠のニチアサキッズ、ネフが参りました』

毎度その前置きが良く分からないベルだったが、とりあえず無口な方の審判員到着に小さな拍手を送った。

今日は全身黄色のタイツに身を包んだ謎のコスプレをしているようだが、それもベルには良く分からない。

唯一、先程アツキレンタルを請け負った男が呪文のように長い解説をし始めたが、哀しいことに誰も聞いていなかった。ベルに分かったのは、カレーが好きで黄色のヒーローがいるということくらいか。

「審判員！ 早速だがアンティの設定だ！ 俺が負けたら、このお嬢ちゃんに好きなだけこの店の飯を食わせてやりたい！」

『承知致しました。この場合は相手の同意、及び対価となる賭け品の設定が必要となりますが？』

そうネフに視線を投げられて、少女は口元に手を当てしばし考え込んだが。

「分かった！ それじゃ、あたしが負けたら今まで食べた分のお金を払うよ！」

交換条件として妥当と判断したのか、ネフはこくりと頷いた。

『それではデュエルを開始致します。ルールはハーフライフ4000からのスタート、アンティの設定を適用。他はデフォルトからの変更はありません、宜しいですか？』

両者が共に頷き、ネフが高く腕を上げる。

二振りのサイコロが宙を舞うと同時。

一軒の飲食店が辿る運命、それを決める舞台の幕が開かれた。

「決闘（デュエル）!!」

店主 LP4000 VS ??? LP4000

「あたしのターン!」

賽の定めた先行は、白髪の少女からだった。

ドローカードに目を通しつつ、6枚揃った手札を眺めて少女はにんまりと頬を緩めた。

恐らくは、渡されたデッキ『何』なのか目星が付いたのだろう。

「モンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンド!」

先行1手目としては少し心許ない布陣、ではあるのだが。

何せ今は、どのカードがデッキのキーカードなのかも分からない状態なのだ。下手をすれば全てのカードが『ピン挿し』で取り返しが付かない、なんて可能性だってある。

そう易々と、カードを切っていく訳にもいかないだろう。

「なら俺のターンだ。ドロ!」

そんな少女の1ターンから転じて、店主は迷いなく手札を切っている。

「まずは手札からバーニングナックラー《BKグラスジョー》を召喚!」

《BKグラスジョー》

☆4 / 炎属性 / 戦士族・効果 / ATK 2000 / DEF 0

店主が繰り出した一番槍は、深緑の体色をした筋骨隆々の拳闘士。

見た目にそぐわぬその攻撃力は、下級モンスターでは大台の2000ポイントだ。

「へえ……」

一瞬。白髪の少女が獲物を見定めるように目を細めるも、店主はそれに構うことなく宣言を続けた。

「更に、自分フィールド上に「BK」が存在する場合、このカードは手

札から特殊召喚が出来る！ 来い、《BKスパ》！」

《BKスパ》

☆4 / 炎属性 / 戦士族・効果 / ATK 1200 / DEF 1400

グラスジョーよりもいくらか細身の、赤いクッションを両腕に装着した闘士が現れる。

スパーがその両腕を顔の前に掲げると、先に召喚されたグラスジョーがクッションへと拳を叩き込んでいく。所轄ボクシングで『スパリング』と呼ばれる行為を行った後、2体のモンスターは両腕を掲げてポーズを決めた。

「スパーがこの効果で特殊召喚されたターンはバトルフェイズが行えないが……オツチャンの狙いはそこじゃあ無え!! 見てな！」

店主が意気揚々と片腕を上げる。

にわかに出現したのは、渦巻く光の小宇宙。

「俺は、☆4のグラスジョーとスパーをオーバーレイ！」

拳闘士達は2つの赤い光球となって、螺旋を描きながら宙へと駆け上がる。

「2体のBKでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシース召喚！」

混ざり合った2つの魂が、悠久たる黒の化身へと昇華する。

「魂に秘めた炎を拳に宿せ！ ★4、《BK 拘束蛮兵リードブロー》！」

《BK 拘束蛮兵リードブロー》

★4 / 炎属性 / 戦士族・エクシース・効果 / ATK 2200 / DEF 2000

巨大な手錠に丸太が生えたような拘束具で縛られた、どこか禍々しい雰囲気のある拳闘士が姿を現す。

(え、エクシース召喚!?)

デュエルの様子を見守っていたベルは、目を見開いて驚いた。

ようやく自分が手に入れたモンスター・エクシースを、本職は決闘者で無い店主がいても容易く繰り出したのだから無理も無い。

大会開催地であるシガマは、それだけ住民達のレベルも高いということなのだろうか。

「ふっふっふっ。驚いたかお嬢ちゃん？ まさか飯屋のオヤジがモンスター・エクシーズを持つているなんざ夢にも思わな——」

「拘束蛮兵リードブロー。ORUを取り除くことで自身の破壊を無効に。更にORUが取り除かれるたび、攻撃力が800ポイント上昇する……だよな？」

にっこりと。店主の言葉の2、3歩先を言い放って、少女は小首を傾げて見せた。

「お、おう……詳しいじゃねえか。俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

「よし、あたしのターン！ ドロー！」

若干しよんぼりとした店主を構いもせず。軽快な面持ちでドロースる少女。

その笑顔は、一段と大きくなって。

「——悪いけどおじさん、これでだよ！」

あまりに早い勝利宣言。

周囲のざわめきも追いつかないままに、少女は伏せられたカードに手を掛けた。

「まずはそのいち！ 《火霊使いヒータ》を反転召喚！」

意気揚々とリバースされたカードの中から飛び出したのは——勝利の二文字とはまるで程遠い、小さな妖狐と戯れる幼き魔法使いだった。

第14話 急がば回れ

「攻撃力……500?」

《火霊使いヒータ》

☆3 / 炎属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 500 / DEF 1500

これといって特出したステータスも無い、典型的な下級モンスター。

しかし、この愛らしい姿のモンスターには確かに、このデュエルを一気に終幕へ導くだけの力が秘められていた。

「ヒータのリバース効果発動! このカードが表側でいる限り、相手フィールドの炎属性モンスター1体のコントロールを得る!」

それはひどく限定的ながらも、炎属性で統一された「BK」デッキには効果的面だ。

店主は驚きに目を張りながらも……次の瞬間には、口端を吊り上げて得意げな笑みを浮かべていた。

「甘えな、お嬢ちゃん! リバースカード発動、《禁じられた聖杯》!」

店主の伏せカードの内、1枚が立ち上がる。

400ポイントの攻撃力上昇と引き換えに対象のモンスターが持つ効果を無効にする速攻魔法。ベルにも馴染み深いそのカードが、効果を発動したばかりのヒータに作用する。

眼光を尖らせ、今にもヒータが呪文を唱えようという瞬間に水を差すかの如く。突然現れた金の杯から液体が振り掛けられ、ヒータの頭を濡らした。

《火霊使いヒータ》

ATK 500 ↓ 900

ああ、どこからともなく残念そうな嘆息が漏れる。

「お前……よりによって【あんなデッキ霊使い】を渡したのか?」

「し、仕方ないだろ!? 今の手持ちはアレしか無かったんだ!」

デッキを貸した男と、その友人であろう男が問答を始めた。

おおよそ、実戦向きではないとされる【霊使い】というテーマデッキ。カードイラストの愛らしさからファンは多いが、いかんせん限定的な効果や低いステータスが災いし、観賞用などと煽られることもしばしばだ。

それでも、各属性に分かれた『彼女達』を1人に絞ってデッキを構築すれば戦えないことも無いのだが……少女の抱える手札の中にヒータではない『もう1枚』の姿が見えたため、ギャラリー達から更に溜め息が漏れだした。

アレは正真正銘、『勝つことを目的としていない』デッキなのだ。
「アレ？　なんで皆ガツカリしてるの？　あたしは好きだよ霊使い！　可愛いもんね♪」

唯一。白髪の少女だけが、罰の悪そうな男に微笑みかけた。

「残念だが、可愛いだけじゃデュエルには勝てないぜ？　そんなカードが飛び出してくるとは正直驚いたが……無敵のリードブローにも弱点はいくつかあってな。対策はバッチリなんだよ」

チツチツ、と指を振る店主。

戦闘及び効果での破壊を耐えるリードブローの弱点は、バウンスやコントロール奪取などの『破壊以外の除去』である。

そんな中で、半ば奇跡とも思えるヒータの登場……だったのだが、肝心の効果を潰された今、戦闘力の高いリードブローを倒すのは絶望的だ。

しかし、白髪の少女はけろりとしたまま首を傾げると。

「うん、知ってるよ？　だからそのに、『精神操作』を発動！」

平然と、手札から2つ目の『破壊以外の除去』を繰り出して見せた。「精神操作は、このターンのエンドフェイズ時まで、選択した相手モンスターコントロールを得る……どうする、おじさん？」

屈託の無い笑顔を向ける少女に、店主も不敵に笑って見せる。精神操作でコントロールを奪われたモンスターは攻撃宣言が行えず、リリースすることも出来ない。

しかし——『墓地へ送る』だけなら話は別だ。ほんの僅かな文面の違いだが、たったそれだけの違いで出来ることの幅が変わってくる。

店主は当然、知っていた。霊使いが自身と同じ属性のモンスターと共に『墓地へ送られる』ことで現れる、あるカードのことを。

「させねえな。リバースカード発動、《神の宣告》！ ライフを半分払い、そのカードの発動を無効にさせて貰う！」

店主 LP 4000 ↓ 2000

「うわ……オツサン、ありや本当に本気だな」

ギャラリーが若干引くほどの、強力なカウンター罠が繰り出される。

二段構えの策すら易々と防いで見せた店主の布陣に万策尽きたかと思われたその状況で、少女の口から飛び出したのは底抜けに明るい声だった。

「すごい、すごい！ ここまで防ぎ切るなんて、おじさん中々に胸アツだね！」

「へへっ、そりやどうも」

互いを褒め合い、認め合い、鏝競り合う。

何だか楽しそうだと、ベルは少し羨ましくそんな2人を眺めた。

思えば、カードを抜くときはいつも何か切迫したような状況が殆どで、ユウやクラドとの練習以外にああして笑い合いながらデュエルをすることは無かった。

大会に参加すれば、この2人のような『楽しいデュエル』が出来るかも……ぼんやりとベルがそんな期待を思い描いたところで、白髪の少女が瞳を光らせた。

「でも……あたしだってまだまだ行くよ！ そのさん、《憑依装着―ウイン》を召喚！」

《憑依装着―ウイン》

☆4 / 風属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 1850 / DEF 1500

ヒータと同じような、黄褐色のローブを羽織った幼き魔法使いがフィールドに降り立つ。

エメラルドグリーンの髪色に、どこか内気な印象を受けるこの少女型モンスターは、炎属性を担当するヒータと同じ「霊使い」の1体、風

属性担当の《風霊使いウイン》の進化系である。

この「憑依装着」シリーズこそ、霊使いと同じ属性のモンスターを同時に墓地へ送ることで特殊召喚される、店主が危惧していたカードだ。この方法で召喚された「憑依装着」は貫通効果を持つのだが、手札から通常召喚された場合には効果を持たない平凡な下級モンスターとなる。

「幾らかマシな攻撃力を持つてるようだが……まだまだリードブローには届かねえぞ？ 最も、超えられたところでリードブローはまだ戦闘じゃ破壊されないがな」

「それはどうかな？ そのよん、魔法カード《マジシャンズ・クロス》を発動！」

次々と切られていく少女の手札。

燃え盛る炎のように、渦を巻く風のように、その勢いは止まらない。

「このカードは自分フィールド上の魔法使い族が表側攻撃表示で2体以上存在する場合、その内1体の攻撃力をエンドフェイズ時まで3000にする！ あたしが選択するのは《火霊使いヒータ》！」

《火霊使いヒータ》

ATK 9000↓3000

「そしてラスト！ 魔法カード《受け継がれる力》を発動！ 自分フィールド上のモンスター1体を墓地へ送り、その攻撃力を別の自分フィールド上のモンスターに加える！ あたしは《憑依装着―ウイン》を墓地へ送って、ヒータの攻撃力を更に上げる！」

《火霊使いヒータ》

ATK 3000↓4850

風の魔法使いが魔力の奔流となり、炎の魔法使いを奮い立たせる力となる。

「こ、攻撃力4850!?!」

「バトル！ リードブローに攻撃っ！」

燃え盛る『火憐』の魔法使いが、熱き拳の戦士に特大級の炎魔法を撃ち放つ。

店主の手札には、戦闘ダメージを受けたときに特殊召喚され、その

ダメージを回復出来る、という効果を持った《BK ベイル》が存在した。

しかし、そんな最後の砦も一撃でライフを0にされてしまえば活躍の機会さえなく。

店主 LP2000↓0

皮肉にも《神の宣告》でライフを半分失っていた店主は、幼き魔法使いの攻撃の前に成す術無く敗北を喫したのだった。

『ゲームエンド。勝者、ヒヨリⅡタマキ』

「やったー！ あたしの勝ちっ！」

偶然が重なったとはいえ、見事なワンショットキルに啞然としたのも束の間。

AR空間の解除と共に爆発のような歓声が沸いた。

『それでは、アンテイルールに従い賭け品の譲渡を』

ずい、と店主の前に詰め寄る審判員モードのネフ。手には何故かお玉が握られていた。

「……仕方ねえ。こうなりやケチなこととは無しだ!! 応援してくれた皆にもサービスするぜ、今日は腹一杯食っていきやがれ!!」

半ばヤケクソのような店主の宣言だったが、その表情はどこか晴れやかだ。

店内はお祭り騒ぎ。静かに拍手を送っていたベルもそんな騒ぎの中でもみくちやにされてしまった。

「わー、おじさんてば胸アツ!! それじゃ遠慮なく——おかわり!!」

白髪の少女——ヒヨリの差し出したそれに、今度こそ10皿目の激辛カレーが盛られる。

スプーンをくるくると指先で回して「いぎ頂きます」というところで、ヒヨリは思い出したように手を止めると、腕に付けたままのディスクを外して席を立った。

向かった先は持ち主である男の元だ。

「ごめんごめん！ コレ返すね、ありがとう♪」

図らずも今回の立役者となった男を、観客達はからかい混じりに揉みくちやにしていたが、ヒヨリの登場に道を開けた。

「いいデツキだね！ おかげで【BK】相手にも勝てたよ！」

「いや……あんなに俺のデツキが輝いて見えたのは初めてさ。僕も、キミみたいに上手くこのデツキを使えるように頑張るよ！」

男がすぐに冷やかされて、短いやり取りで終わってしまったが。そこには決闘者が持つ本来の姿が垣間見えた。

大騒ぎの店内を回転させるべく店長を始めとした店員達がフル稼働する中、ヒヨリは再び着席するとスプーンに手を掛けてペロりと舌で唇を濡らしたが――。

「あの、ちよつといいですか？」

ちよこん、と傍まで来ていた褐色の少女――ベルが微笑んでいた。

事情に詳しそうな店主に話を聞ける状況では無くなってしまった為、代わりにヒヨリに話を聞くことにしたのだ。

「んい、何かな？」

屈託の無い、幼子のような笑顔で返すヒヨリ。

恐らくは彼女も、大会出場の為に遠方からやってきたクチだろう。

そんな彼女に『白面の女』の話を持ちかけるのもどうかと悩んだが、決め手は2つあった。

「デュエル、お強いですね。何か見惚れちゃいました！」

1つは、彼女の技量が確かであること。

少なくとも、ベルが知る上で一番のユウと比較しても遜色はないだろう、という程度にはだ。そんな彼女であれば、ここまでの道中で何か情報を掴んでいるかもしれないと思っただからだ。

「あっははー、ありがとう♪ でも褒めても何も出さないよー？ 何か食べたいものがあつたらおじさんに頼んでね！」

褒められたことを素直に喜んで、ヒヨリはカレーに手を掛ける……かと思いきや、じつとベルの瞳を覗き込むように見据えて、言った。

「あのさ、どつかで会ったことあつたっけ？」

2つ目は、何とヒヨリの方から問い掛けられた。

「……あー、えっと。わたし少し前までこんな感じの酒場で働いていたことがあって。決闘者の皆さんとお話する機会も結構多かったんですよ?」

彼女の顔は確かに、ベルの記憶に引つかかる『何か』があった。

しかしその引つ掛かりは、中々1つの線となつて繋がりを見せない。

「一緒に「ユウ」キリサキ」って男の人も居たんですけど……覚えてませんか?」

何故なら。『画面の中にいる人間』がベルこちらを認識することなど、決して有り得ないことだからだ。

だからベルは嘘を付いた。ユウの名前を出したことで何か反応があれば。いわばカマをかけたのだ。

——こんなカードに見覚えは無いか?

ここへ来るまでに幾度と無く確認し、目に焼き付けた『あのカード』。

虚ろな表情のまま牢獄に囚われていた『彼女』とヒヨリに、どこか面影が重なったからだ。

あのカードのことについて、恐らくは中に囚われているのであろう人物について、ユウはまだ何も語っていない。しかし事情を知らないベルにも、その人物がユウにとって大切な存在なのだろうということくらいは分かる。

だからこそ、もしもヒヨリが『彼女』であるならば——。

「え? うーん、そうだなあ……」

こめかみの辺りを指で押さえて考え込むヒヨリ。

髪の色や髪型は大分違うし、笑顔の絶えない彼女と《魂の牢獄》に描かれていた少女とでは雰囲気も異なる。

数秒先の次の瞬間には、ユウが抱えた問題の答えが見つかるかもしれない、という期待。

その答えに辿り着いてしまったとき、果たしてユウはこれまで通りのユウでいてくれるのだろうか、という不安。

それらを決して表情には出さないようにして、ベルは『その顔』を

見つめた。

十数秒の後。やがて硬く閉じた目を開いたヒヨリは、

「ごめん、分かんないやー!」

きつぱりと言い切って、ヒヨリは眉をハの字に困らせて笑ったのだった。

「……そう、ですよね? そしたら多分、何かの勘違いですよ!」

たはは、と。ベルは自分に言い聞かせるつもりで明るく笑い飛ばした。

期待が外れた反面、内心でほっとする自分がいることに、複雑な感情を抱いたまま。

「それであるの、もう1つお伺いしたいことがあるんですけど」

「ん?」

小首を傾げて、ヒヨリがベルの言葉を待つ。

彼女に対する疑問が晴れた今、ベルがするべきことはもう1つある。

「こんな感じの……白いお面を被った決闘者のことを、ご存知ないですか?」

以前に藍に描いて貰ったイラストを見せながら問い掛ける。

このやりとりも慣れたもので、目撃情報でも得られれば御の字だ。

「……うーん、そんな変な人に見覚えはないけど。何でその人を探してるの?」

怪訝そうに眉を寄せたのも束の間、ヒヨリが興味津々といった様子でベルの瞳を覗き込む。

無関係である彼女が下手に首を突っ込まれても困ると、お茶を濁して話題を逸らそうと試みたベルだったが……キラキラと何かを訴えるような視線に根負けし、仕方なく『白面の女』と『闇のゲーム』のことをあくまで冗談ぽく説明した。

「へえ、そんなコトしてるんだ! 何だか面白そう!」

結果、ヒヨリの好奇心を更に煽る結果となってしまう訳だが。

それでも決して無駄骨という訳ではなく、傍で話を聞いていた決闘者の何人かがベルの話しに食いつき、幾つかの情報を教えてくれた。

「そういや、最近街外れの廃工場に白い面を被った幽霊が出るとかガキ共が騒いでたな……」

「ああ、確か丁度一週間くらい前からか？」

「思わぬ収穫だ。もしかしたらユウ達も似たような情報を掴んでいるかも知れないが、これで『白面の女』に一步迫ることが出来る。」

「本当ですか？ それじゃあ早速……」

——無茶はするな、手掛かりを掴んだらまず連絡しろ。

頭を過ぎったのは、メンバーの身の安全を第一に考えたクラドの言いつけ。

今すぐにも確認に向かいたい衝動を抑えたベルだが、不幸なことに彼女の旧型ディスクでは直ぐに連絡を取ることは叶わない。

一旦、Dパッドへの連絡端末がある宿へ戻って誰かの帰りを待つしかない。

「つと、その前に一旦宿に戻って連絡しなきゃ。皆さん、ご協力ありがとうございました！」

そう言っただけで頭を下げ、そそくさと席を立つたベルに声を掛けたのは。

「あ。それ、あたしも付いていっていい？」

いつの間にか10皿目を平らげたヒヨリが、立候補とばかりに高々と片腕を上げていた。

日も暮れかけたメインストリートはすっかり色とりどりの明かりに彩られ、まるで花々が咲き乱れる様相だった。

だが、そんな華やかで人通りも耐えない大通りも、脇に一本外れてしまえばガラんとした光届かぬ洞と化する。

「あの!! 本当によこちで合ってるんですか!？」

「うん、教えて貰った宿にはここを通れば近道だよ！」

近道を行こう、と勢い良く飛び出したヒヨリに手を引かれ、ベルは何度も転びそうになりながらパタパタと駆けていた。

遊び回っているうちにシガマの地理は大方把握したと胸を張っていたが、どこか抜けているヒヨリの言葉には不安が残る。

「あ、あの!? 本当に大丈夫なんですか!？」

「大丈夫、大丈夫〜!」

いくら大都市とはいえ、その実体を突き詰めれば荒くれ者共が闊歩するネイティブだ。そんな街の路地裏なら、ある程度の危険が伴う場所ではあるのだが……腕の立つ決闘者であるヒヨリはそんな『危険』などものともしなかったのだろう。

(ほ、本当かなあ……?)

どこかの飲食店からだろうか、換気扇から油の混じった生暖かい風がムワリと顔を撫でていくこと数度。

壊れた機材などが散在する、少しばかり開けた場所まで出ると、ヒヨリはぴたりと足を止めて立ち止まった。

「ここを真っ直ぐ行ければ、宿の前に着くよ!」

びし、と腕を伸ばして指し示したその先には――。

「真っ直ぐ、って――行き止まりじゃないですか」

柵を飛び越える、などというレベルのモノではなく、恐らくは建物の裏側なのだろうコンクリートの壁がしんと立ち塞がっていた。

「……あの、近道ってというのは?」

「だから、『真っ直ぐ行ければ』近道なんだよ。ココ」

脇に打ち捨てられた機材の山。その中の『何か』を隠すように覆っていた麻布の端を、ヒヨリはおもむろに掴むと勢い良く引き剥がした。

「……バイク?」

薄汚れた麻布の下から現れたのは、ワインレッドの光沢を放つ二輪の車体だ。

D・ホイール。見た目は通常のオートバイクと遜色無いが、その実態はデュエルディスクとしての機能を兼ね備えた『走るデュエルディスク』である。

ライディングデュエル
決闘疾走と呼ばれる、D・ホイールを用いての特殊なデュエルを行う際には必須となる代物なのだ――。

「あれ? D・ホイールのコト知らない? まあココじゃあんまり流行ってないって言ってたしな」

言いながら、ヒヨリがD・ホイールのパネルを手馴れた様子で操作していく。

まさか、と嫌な予感がして、ベルは思わず素っ頓狂な声を出していた。

「まっ、まさか!? ソレに乗って跳ぶとか!？」

オチは見えたと言わんばかりにずばしと指摘したベルだが——その予想は最悪の方向で裏切られることとなった。

「あっはは、違う違う! キミを乗せてそんな真似はしないよ?」

ガチャン、と飛び出したD・ホイールのディスク部分を取り外し。「これでよし、と」

ヒヨリは何でもない風にソレを左腕に装着し——笑顔のまま、構えた。

「え?」

気が付けばベルが壁側。

ヒヨリが立ち塞がるように帰り道の方向に立ち塞がる形で佇んでいる。

「さ。ディスクを付けて、構えて?」

思考が糸くずのように絡まり、上手く状況が飲み込めない。

ヒヨリが何を言っているのか、何を求めているのかが分からない。

「あ……あの。ヒヨリ、さん?」

目の前の現実を全力で否定しようとする。そんなベルの震えた戸惑いを、質量と熱を帯びた何かが悪く遮るように放たれた。

それはベルの頬を掠め。僅かに髪の毛の焦げた臭いが、ツンと鼻を刺激した。

「——え?」

小首を傾げるヒヨリの手はディスクに添えられている。

ベルには全く何をされたのかは分からなかったが、少なくとも目の前の人物が自分に危害を加えようとしていることは理解出来た。

「デューエールッ! しよ?」

例えそれが、自己防衛の為に発動する審判員機構のサポート無く『半実体化された』カードによる攻撃だという、不可解な現象であつて

もだ。

「……何が、目的なんですか?」

震える足を、混乱する頭を必死に立て直して、ベルはヒヨリに問い掛ける。

相変わらず笑顔のまま。ヒヨリは少しだけ困ったように眉を下げた。

「んー? そうだなあ、口封じとか?」

「口、封じ?」

「そ。キミ達を『あの子』に合わせるワケには行かないんだ、あたしとしてはさ」

ヒヨリの言う『あの子』が『白面の女』であることは、容易に結びついた。

つまり――。

「……騙したんですね」

きつ、とベルが鋭い眼差しをヒヨリへ向けるも、当の本人はそんなことはお構い無しで軽い言葉を投げていく。

「そーなるかなあ。あ、でも嘘は付いてないよ? あんな下手つぴな絵みたいなのは知らないもん。あの絵によく似てる『あの子』のことは知ってたけど、教えるワケにはいかなかったから黙ってただけだしね?」

ケラケラ、と笑顔のままに語るヒヨリに、悪ぶれる様子は全く無い。

「この道だって本当に近道。だから……そう! 騙されたキミが悪い!」

手をぽんと打って言い捨てると、ヒヨリはベルを指差して笑った。

まるで台本を棒読みしているような、粗雑で出来の悪い敵役だ。

「……あなたは、どこまで知ってるんです?」

「それはあたしに勝ったら教えてあげるよ♪ 決闘者ってそういうモノでしょ?」

ぽんぽん、とディスクを叩いて「早く付けろ」と言わんばかりに催促する。

「……分かりました」

審判員機構に頼らずカードの力を行使できる相手に、これ以上の抵抗は無意味。

ベルはディスクを取り出すと、即座に装着しデュエルモードへと変化させた。

「もう何も聞きません。あなたを全力で倒して……洗いざらい全部話して貰う事にしました!!」

街へ出る前に調整を終えたばかりのデッキが挿し込まれると、ディスクのオートシャツフル機能がカードをランダムに並び替えていく。

「あはっ、いいねそういうの！ 胸アツ♪」

ヒヨリの左腕、深紅のディスクから騒がしい金属音を鳴らし、一筋の赤い線が伸びた。

シャツフルを終えたばかりのベルのディスクに巻き付いたそれは――まるで血に染まったような色をした、半ARの鎖だった。

「っ!? デュエルアンカー……!?!」

「似たようなモノだよ。キミもヤル気になったみたいだし、必要無さそうだと思うんだけど……一応ね?」

くい、と鎖のアンカーを軽く引き寄せて接続を確認すると、ヒヨリはにっこりと、本当に楽しそうに微笑んで言った。

「――さあ。楽しいデュエルを、始めよう?」

ベル LP4000 VS ヒヨリ LP4000

第15話 闇のゲーム

デュエルモードとなった2台のディスクがリンクし、周囲に黒い霧が立ち込めていく。

仮想現実にはどこか生き物じみた不気味な気配が、ぞわりと背筋を撫でた。

(AR?… にはしては何だか……)

ベルが疑問に思う間もなく、ヒヨリはデッキトップに手を掛ける。「あたしのターンからだね! ドロー!」

先程の店で見せたままの陽気さで、ヒヨリはカードを引き抜いた。ベルのディスクには確かに、後攻を示すブルーのランプが灯っているが……あの賑やかな審判員の姿はどこにも無い。ARが作動しているにも関わらず、だ。

「ちよつと待つてください、審判員機構は!」

「? いらぬよ、そんなの。あたしは手札からこの子を召喚っ!」

《炎王獣 ヤクシヤ》

☆4 / 炎属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 1800 / DEF 200

牙剥く戦士が、逆巻く炎を振り払い咆える。

その熱気とプレッシャーは、明らかな『現実』を伴っていた。

(何が、一体どうなって……!?)

「カードを2枚伏せ、ターンエンド!」

ベルの混乱をよそに、早々にヒヨリは先行1ターンを終えた。

呆然と立ち尽くしたまま動かないベルに、ディスクがフェイズ進行を促すブザーを鳴らす。

「わ、わたしのターン……!」

ベル LP4000

手札・5 ↓ 6 モンスター・0 魔 / 罠・0

ヒヨリ LP4000

手札・3 モンスター・1 魔 / 罠・2

不穏な空気が漂うフィールドに対し、ベルの手札はこのドローに

よって整った。

一気に攻めるべきかと思案する一方で、何もかもが分からない不気味な相手に警鐘は鳴りっぱなしだ。

唯一の事実である『凄腕の決闘者』だという素性が、その警戒を一層強める。

「スタンバイからメイン、わたしは手札から《切り込み隊長》を召喚！

さらにその効果で、手札から《カードガンナー》を召喚！」

《切り込み隊長》

☆3 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1200 / DEF 400

《カードガンナー》

☆3 / 地属性 / 機械族・効果 / ATK 400 / DEF 400

ベルのデッキの中核を成す騎士と、ユウのデッキにも採用されていた野暮ったいデザインの機械モンスターが並び立つ。

しかし、ヒヨリのカードは伏せられたまま発動する気配が無い。

「……何も無いなら、行きます！ デッキの上からカードを3枚墓地へ送り、カードガンナーの効果発動！ カード3枚分の1500ポイントを攻撃力へ加えます！」

《カードガンナー》

ATK 400 ↓ 1900

「バトル！ カードガンナーでモンスターへ攻撃！」

僅か100ポイントばかりが上回った、カードガンナーのチャージシヨットがヤクシャへと迫る。

どちらかの伏せカードを発動すると睨んでいたベルだったが、ヒヨリからの宣言は何も挟まらず攻撃はヤクシャの硬い鎧を貫き爆散させた。

ヒヨリ LP4000 ↓ 3900

「……ふーん、まあいいや。ここであたしはヤクシャの効果を発動！」
(破壊を引き金にするモンスター効果……!?)

無防備な攻撃表示に罠の発動が無いとなれば……当然ながら本命はモンスター自身ということだ。

「このカードが破壊され墓地へ送られた場合、自分の手札かフィール

ド上のカード1枚を選択して破壊出来る！ あたしが選択するのは手札の《炎王神獣 ガルドニクス》！」

ヒヨリの手札で破壊されたのは、ヤクシャと同じ名前を持つ最上級モンスター。

墓地へ送ってから蘇生する算段なのかもしれないが、破壊をトリガーとしていたヤクシャの存在から何か意味がある行為なのだとベルは読んだ。

名前で纏められたカテゴリデッキは、どのカードも似たような特徴を持つ。それはここに至るまでの道のりで十分に理解していた。

「でも……この攻撃を防ぐ手段にはなっていない！ 切り込み隊長でダイレクトアタック！」

ガラ空きとなったヒヨリのフィールドを駆け、切り込み隊長が剣を振るう。

肉を断ち切るやけにリアルな音が響いた後、ヒヨリのライフが大幅に減少した。

ヒヨリ LP 3900 ↓ 2700

「メイン2、カードを2枚伏せてターンエンドです！」

出来る限りの想像と対策を場に秘めて、ベルはこのターンを終えた。

同時に、カードガンナーの効果が切れ、攻撃力が元の400ポイントへ戻る。

「あたしのターンだね、ドロー！」

ドローカードには目もくれず、ヒヨリは即座に宣言した。

「このスタンバイフェイズ前のターンで『破壊』されたガルドニクスの効果を発動！」

墓地に送るではなく、破壊。

やはり来たかとベルが身構えると、立ち込める黒い瘴気に僅かに紅が混じっていく。

「カードの効果によって破壊されたガルドニクスは、次のスタンバイフェイズに墓地から特殊召喚され——このカード以外のフィールド上のモンスターを全て！ 破壊するっ！」

水飛沫のように火の粉を撒き散らし、地中から飛び出したのは炎を纏いし巨鳥。

かの不死鳥を思わせるソレは、やがて色彩鮮やかな翼を広げ甲高い咆哮を上げた。

《炎王神獣 ガルドニクス》

☆8 / 炎属性 / 鳥獣族・効果 / ATK 2700 / DEF 1700

「燃やし尽くせ！ 『破壊と再生の輪廻』！」

炎の奔流が2体のモンスターを飲み込まんとした、そのとき。

「させません！ 速攻魔法発動、《禁じられた聖杯》！」

伝承の杯から溢れる液体が、ガルドニクスの炎を鎮めていく。

その様子を見たヒヨリが、ぷうと頬を膨らました。

「またそのカードかあ……なんかい思い出さないなあ。でも……」

不満げに呟いたのも束の間。聖杯の副次効果を受け最上級モンスターの攻撃力、その大台を超えたガルドニクスをヒヨリは笑みを浮かべて眺めた。

「これで攻撃力は3100、かの《青眼の白龍》も上回った！ なーん

て♪」

「ブルー……アイズ？」

かの、と言われても聞き覚えの無いカードの名前に、ベルは首を傾げた。

確かアンリエールがそんな名前のコーヒーを飲んでいたな、と脳裏を過ぎったが。

「あれー、キミも知らない？ 何でかなー、皆知らないんだもん。つまんないのー」

再び頬を膨らませるヒヨリであったが、確かに今のガルドニクスは脅威だ。

切り込み隊長の効果で攻撃力の低いカードガンナーを攻撃される心配は無いが、それもこれ以上モンスターが増えなければ、という前提付きだ。ヒヨリの展開次第では、このままライフを削られる危険もある。

「まあいいや。あたしは手札から《炎王獣 バロン》を召喚して、バトル！」

《炎王獣 バロン》

☆4 / 炎属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 1800 / DEF 200

細身のヤクシャよりもどこか力強そうな印象の、赤い肌の獣戦士が鼻息を鳴らしてフィールドをズシンと踏み揺らした。

「まずはバロンで切り込み隊長を攻撃！」

「罨カード発動！ 《和睦の使者》！」

無論、黙ってやられるベルではない。

戦闘ダメージをオールカットする強力な守護結界が、2体の脆弱なモンスターを守った。

「うーん……しぶといなあ。あたしはこれでターンエンドだよ」

「わたしのターン、ドローー！」

ベル LP4000

手札・2 ↓ 3 モンスター・2 魔 / 罨・0

ヒヨリ LP2700

手札・2 モンスター・2 魔 / 罨・2

手札は順調に、勝利を掴む為の布陣へと形を変えていく。

その『順調』が逆にベルの不安を煽るが、今は臆している場合でもない。

「スタンバイからメイン！ わたしは……☆3の切り込み隊長とカードガンナーで、オーバーレイ！」

橙色の光玉となった2体のモンスターが、螺旋を描いて宙へと昇る。

折り返すように降下する地表には、虹色の輝きを放つ光の渦。

「2体の地属性モンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」
アンリエールとのデッキ調整を思い出し。並べられた召喚の祝詞に淀みは無い。

故にベルの願いは届き、新たな力は大きな爆発を伴って顕現した。

「エクシーズ召喚！ ★3、《銀嶺の巨神》！」

《銀嶺の巨神》

★3 / 地属性 / 岩石族・エクシーズ・効果 / ATK 1800 / DEF 2200

見上げるような大きな岩壁が、ベルのフィールドに姿を現す。

2本の脚を生やした山の頂から、上半身だけを覗かせた迫力のあるシルエット。メンバーの皆から受け取ったばかりのエクストラカードだ。

「銀嶺の巨神、効果発動！ 1ターンに1度オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、相手の伏せカード1枚を選択して発動を封じます！ 選択するのは右側の伏せカードです！」

銀嶺の巨神が《切り込み隊長》の光球をその身に受け、効果を発動するべく地響きを立てる。

一見強力な効果であるが、カードの発動を封じられるのは銀嶺の巨神が表側で存在する場合のみ。それに、この効果にチェインして発動されてしまえば意味を失ってしまう。

「おおっ？」

だが、ヒヨリは何の宣言もすることなく。

自らの伏せカードが岩に覆われていく様を、ただ目を丸くして眺めているだけだった。

「バトル！ 銀嶺の巨神でバロンを攻撃！」

「相打ち覚悟？ いいよ、受けて立つ！」

巨神の効果を知っているのかいないのか、ヒヨリは迎撃指令をバロンに出す。

瞬間、ベルの口元が吊り上がる。

「……ダメージステップ開始時。手札から速攻魔法発動、《突進》！ 銀嶺の巨神の攻撃力を700ポイントアップします！」

《銀嶺の巨神》

ATK 1800 ↓ 2500

結果。炎を纏ったバロンの攻撃は通らず、巨神の巨大な脚が一方的な踏み潰しを行っただけに至った。

「あ、ありっ？」

ヒヨリ LP2700↓2000

気の抜けたような表情で返すヒヨリに、ベルは宣言を続けた。

「この瞬間！ オーバーレイ・ユニットを持つている銀嶺の巨神が相手モンスターを戦闘で破壊した場合、自分の墓地のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚できます！」

銀嶺の巨神を中心として、大きな魔法陣がフィールドに浮かび上がる。

その魔法陣が導く先は、消えたはずの命が灯るベルの墓地。

「……へえ、にやるほど」

ベルの墓地に確認できるのは、巨神の効果で取り除かれた《切り込み隊長》のみ。

しかし——ヒヨリが確認しなかった3枚のカードの内、モンスターカードがあれば。

そう、最初のターンで《カードガンナー》のコストで墓地へ送られていたなら。

「蘇生するのはこのカードです！ 舞い戻って、アスタリスクス《—**— 翼戦神》ヴァルキュリア」

《—**—翼戦神》

☆10／地属性／天使族・効果／ATK 2800／DEF 3000

魔法陣から溢れる光の粉塵と共に、ベルのエースたる機械天使が光臨する。

どこか余裕に溢れていたヒヨリの表情は——ここへ来て、驚愕の色を覗かせた。

「えっ……っ？」

正確には、うつすらと笑みを浮かべたまま固まっていた。

「あ……あっはははは!!」

擦れたような笑い声が漏れた、そう思ったのも束の間。

目尻には涙を溜めて、ヒヨリは狂ったように腹を抱えて笑い出した。

「な、何ですか……っ？」

「あつははは、いいね！　いいよこの展開っ！　最ッ高に胸アツだよっ！」

手札すら放り出さん勢いで笑うヒヨリに、ベルは思わずたじろいだ。

このカードについて、アスタリスクスについて何か知っているようではあつたが。

「あー、おかしー……でもこうなったら、ゼツタイ勝たなくちゃ……ね♪」

瞬間。ぞわりとベルの爪先から頭蓋まで何とも形容しがたい悪寒が走った。

何とか言い換えれば、それはチェーンソーを首筋に当てられたような粗雑な殺意。

「め、メイン2！　ヴァルキュリアの効果で手札の《セイバー・ビートル》を装備して、ターンエンドですー！」

守備表示のヴェルキュリアに、刃の先が二股に分かれた剣が握られる。

逃げるようにターンを進めたベルだったが、ミスは無い筈だ。

「じゃあそのエンドフェイズに、リバースカードを発動させるよ？」
沈黙を保っていたヒヨリの伏せカードが開く。

「罠カード《ジエネレーション・チェンジ》。自分フィールドのモンスター1体を破壊し、破壊したカードと同名のカード1枚を手札に加える」

炎の粉を花卉のように散らし、ガルドニクスが破壊のエフェクトと共に墓地へ舞い戻る。

ヒヨリの手にはもう1枚のガルドニクスが握られたが、その真意はベルにも理解出来た。

（これでまた、スタンバイフェイズに破壊効果が——!!）

「あたしのターンだね？　ドロー！　スタンバイフェイズ、ガルドニクスの効果を発動！」

再び迸る炎の奔流。止める手立ての無いベルのフィールドは紅蓮に包まれていくが——。

「ヴァルキュリアの効果を発動！ 装備カードを全て墓地に送り、攻撃力を300ポイントダウンさせることでこの破壊を無効にします！ 『アームズ・プロテクション』！」

《―*―翼戦神》

ATK 2800↓2500

ヴァルキュリアだけは、幻影となったセイバー・ビートルに守られ破壊を免れた。

惜しくも、銀嶺の巨神は猛火の向こうへと消えていく。

「へえ、そんな効果があつたんだあ……あーあ、攻撃表示なら戦闘破壊出来たのになー」

ちえ、と口で呟いて、ヒヨリは口をへの字に曲げた。

「それならあたしは、モンスターをセットしてターンエンドだよ」
ベルとのライフ差は半分。だというのに、ヒヨリからは余裕が消えるどころか妙な殺気すら漂いつつある。

何か手があるのか。先程見たヒヨリの『眼』を思い出して肌を粟立たせたベルだったが、無常にもターンは進んでいく。

「わたしのターン……ドロー！」

ベル LP4000

手札・1↓2 モンスター・1 魔／罨・0

ヒヨリ LP2000

手札・3 モンスター・2 魔／罨・1

ドローカードは悪くない。

だがそれ以上に、現状の手札で下手をすれば勝利を掴める状況にある。

それを手放して喜べないのは、ヒヨリの放つ不気味なプレッシャーがあるからだろうか。

「スタンバイからメイン、ヴァルキュリアの効果で、手札の《マジック・ストライカー》を装備！ その効果と名称を得て、攻撃力を600ポイントアップします！」

いつかと同じ魔法杖が、ヴァルキュリアの手に握られる。

《―*―翼戦神》

「えーと。つまりこれでダイレクトアタックが可能になったワケだ！
反則的〜」

伏せられたままのカードは、先程から何の行動に対しても発動され
なかった。

ともすれば、あのカードは少なくとも攻撃反応型の罠や魔法では無
いということになる。

ヴァルキュリアの攻撃が通れば、このまま勝利を掴める――。

「その通りです！ バトル、ヴァルキュリアでダイレクトアタック！
ガルドニクスを、未だ正体の見えない伏せモンスターを飛び越え、
ヴァルキュリアの放つ大魔法はヒヨリへ肉薄していく。

迫る光を真正面に捉え、ヒヨリがニヤリと口端を歪めた……その時
だった。

「そこまでです」

凜とした女性の声が響いたかと思うと、ベルとヒヨリを結ぶ紅い鎖
が、突然粉々に弾け飛んだのだ。

途端、互いのディスクからエラー発生警告が鳴り響き、フィール
ドを包んでいた黒い瘴気共々モンスター達の姿も消え去った。

「え……!?!」

突然晴れたベルの視界に飛び込んできたのは……いつか見た筈の、
今は師が追^{ユウ}い求めている謎の人物。

「白面の……!?!」

袖の長い赤の上着を羽織り、フードまで被って全身を隠した狐の白
い面を被った女が、そこに居た。

「……。帰りますよ」

「えー!? なんですよー!? 今いいところだったのにー!!」

白面の女に地団太を踏んで抗議するヒヨリはまるで駄々をこねる
子供のようだが、女は落ち着いた様子で諭した。

「……我侭はやめて下さい。長がお呼びです」

「む、分かったよう。しようがないなあ……」

渋々、といった様子でヒヨリはデッキとディスクを納めると、くる

りとベルに向き直った。

「今日はジャマが入っちゃってゴメンネ？　だけどまた絶対に『大会で』デュエルしようねー！」

仲の良い友達との別れを惜しむように、ヒヨリは大きく手を振ると

——いつの間にか起動していたD・ホイールの後部座席に跨った。

前席には白面の女が跨り、ハンドルを握っている。

「ちよつと、待ってください!!　まだっ!!」

逃がしてなるものかとベルは咄嗟に追いつたが、巻き上がる爆音と砂煙に阻まれてしまう。

どういう技術を使ったのか、2人を乗せたD・ホイールは『近道』だという壁を飛び越え、姿を消してしまった。

「……あの人は、一体……」

惜しくも勝利を逃した己の手を、ベルはじっと眺めて考える。

もしも負けていたのが自分だったとしたら、と。

「あれが、闇のゲーム……?」

換気口から流れる生暖かい空気に包まれながら、ベルは身体を震わせていた。

「巫女。一体どういうおつもりですか？　報告無しに《アスタリクス》と戦うなど」

蝋燭の明かり1つで照らされた廃工場の一室に、静かな女の声が響いた。

そこは1週間ほど前から『幽霊が出る』と子供達に噂され始めた日くつきのスポットである。火の無いところに煙は立たない、ということだ。

「だからあ、ゴメンて！　本当に知らなかったんだよ、あのコが持っているなんて！」

攻め立てる白面の女に、ヒヨリは後ろ頭を掻いて答えた。

呆れたように溜め息を付いて、白面の女が言葉を続ける。

「……貴女が嘘を付けない性格なのは知っていますが。しかし——」

「お説教もその辺にしといてやれよ。巫女サマが可哀想だろ?」

ぼう、と闇の中に浮かび上がったのは、笑顔を浮かべた狐の面。

声は高く少年のようだが、その全貌は見えない。

「なあ? 長も何か言つてやれよ?」

笑顔の狐面が声を掛けると、今度は黒い狐の面が浮かび上がる。

「……これは我々にとって憂慮すべき事態でも、歓迎するべき事態でもある。狙うべき『敵』が増えた、ということだからな」

長、と呼ばれた声の主は、低く唸るように呟いた。

歳を重ねた男性の声ではあるが、押し潰すような気迫に衰えは見えない。

しかし、長が返した『答え』とは呼べない言葉に気落ちしたのか、笑顔の狐面からは溜め息が漏れた。

「今大会の《アスタリクス》所持者はこれで4人。全てを、我々の手に収める必要がある……」

半ば独り言のように語る黒い狐面には、誰一人として言葉を返す者はいなかった。

誰しもが、そんなことは言われるまでも無いとでも言う風にな。

「……それはそうと、巫女。いい加減に私のデツキを返して頂けませんか?」

そんな沈黙を破ったのは、どこか不機嫌そうな白面の女だ。

「あ、ゴメンゴメン……っっていうか、怒ってる?」

ヒヨリがデツキを手渡しながら、上目遣いで尋ねると。

数秒の間を置いて、白面の女が言葉を返した。

「……怒っていません」

「嘘付け。愛車をベタベタ触られて怒り心頭なクセに」

ケタケタと嗤う笑顔の狐面にバツと振り返ると、白い狐面の女は力ツカツと早足に歩を進ませて闇の中へと消えていく。

「いだっ!? なんだよオレに八つ当たりするんじゃないよ!」

ポコスカと可愛らしい殴り合いの擬音が聞こえると共に、笑顔の狐面も闇の中へと吸い込まれていく。

「あっはは、いつもケンカしてばかりだねえ♪ 楽しそうだなー
……」

楽しげに笑うヒヨリの目が、徐々に鋭く研がれていく。

「……あーあ、本当に楽しそうだなあ。早く始まらないかな、デュエル
大会♪」

遠足を待ちわびる子供のような言葉とは対照的に。

その瞳は血に飢えた獣の如く、ギラギラと闇の中で輝いていた。

第16話 前夜の告白

「……白面の女の仲間に、闇のゲーム……か」

宿泊している宿の一室。男性用の部屋に集まった面々は、それぞれが神妙な面持ちでベルの報告を聞いていた。

闇のゲームらしきモノを受けたこと。

ヒヨリという決闘者のこと。

大会で会おう、と言われたこと。

恐らくこれまでのどんな情報よりも、ベルの体験は重要なウエイトを占めている筈だ。

「大会出場するつもりなら複数仲間が居てもおかしくはねえ、よな……とにかくメイドちゃんが無事で何よりだ。単独行動させた俺が甘かった、すまねえ」

深々と頭を下げるクラドに、ベルは大きく手を振って否定した。

「いえいえ！ わたしが良く考えもせず知らない人に付いていったのがいけないんですから！ クラドさんは悪くありません！」

そうは言いつつも、ベルは未だに信じられずにいた。

あんなに楽しそうにデュエルをしていたヒヨリが、実は闇のゲームで人を消す、白面の女の仲間で——あんなにも恐ろしい『眼』を向けてきたことを。

「でもよ……もしメイドちゃんが負けてたら……」

「結果オーライですわ。そ・れ・に、仮にも私の従者ともあろう者が、敵の放った雑兵などに負けてたまるものですか」

ふん、とベッドに腰掛けて胸を反らすアンリエールは、同意を求めるように片目を開けてベルを睨んだ。

「それでベルちゃん。その『闇のゲーム』を仕掛けた人についてなのだけど……分かった限りでいいから、教えてくれる？」

キーボードを接続したDパッドを膝の上に広げながら、藍が尋ねる。

「あ、はい。白くて長い髪を三つ編みにして2つに分けてて、多分歳はユウさんと同じくらいだったと思います。使ってたのは《炎王》って

名前のモンスターで……名前は」

変化を決して見逃さないように、それを決して他のメンバーに悟られないようにさりげなく。

ベルはしっかりとユウの顔を見つめて、言った。

「ヒヨリIIタマキ、と」

思わずベルが驚いてしまう程に。

ポーカーフェイスは、顔を『凍りつかせて』いた。

「名前からして、白の出身……？ 使用デッキは【炎王】か……」

「——あ、はい。それにD・ホイールっていうバイク型のディスクを持っていました」

「ということはD・ホイラーね。上手く大会参加者の中から割り出せれば良いんだけど」

眉を寄せてカタカタと情報を打ち込んでいく藍を尻目に、ベルは疑念を確信に変えた。

聞かなければならない。ユウにヒヨリのことを、『あのカード』のことを。

「……………」

再びユウに目を向けるが、流石というか既にいつもの表情を取り戻していた。

恐らく、ユウも何か思うところがあつて皆に黙っているのだろう。それをこの場で問い詰めても、恐らくは上手くはぐらかされるだけだ。

だから。今すぐにも答えを聞きたい衝動を抑えて、ベルは自分の気持ちに口を噤んだ。

「……大会、か。開催は翌日に迫った訳だが。正直な話、滑り込み参加な感じだから対策も何も練れてねーんだよな……『白面の女』が出る以上、あの大会の優勝商品には何かあるんだろうが」

ばたん、と伸びをしながら後ろ手に倒れこむクラド。

ソレを合図に、ひとまずメンバーの間から緊張が取り除かれた。

「確か、この大会で試験的に『新ルール』を適用するって話だけれど……………」

キーボードを片手に、藍が眉を寄せて問い掛ける。

「新ルール、ですか？」

「ええ。この大会で上手く機能すれば今後、審判員機構はその『新ルール』に従って機能することになるでしょうね」

何やら大々的に告知をしたそうだが、この大会の意図はそこにあつたらしい。

要するに、参加者は商品に釣られた体のよいモルモットということだ。

「とはいっても、カードの裁定なんか少し変更が加わる程度でしょうけれど」

「これまで使っていたデッキが丸ごと使用禁止に……では、笑えませんものねえ?」

ケタケタ、と口元に手を当てて楽しそうなアンリエール。

「ここで何で笑えちゃうんですか……」

今のルールによく慣れてきたばかりで不安もやぶさかではないベルは、そんな彼女の神経を疑った。

「詳しい大会形態や新ルールの発表は明日の開会式だ。その辺はどの旅団もフェアにやろうぜってコトだろ」

新ルールと大会形態に合わせたデッキ調整はほぼ不可能。

その条件はどの旅団にも同じように課せられるらしい。タッグ戦が設けられるだろうという予想から、既にタッグ用の調整をしている旅団は多いようだが。

「調整用に色々とカードも仕入れておいたから、明日の発表に合わせて対策を練ろう。俺らはそれに加えて『白面チーム』を早く割り出さなきゃならねえからな」

「そうね。勝ち上がって『優勝賞品』の真実を明かすことも大事だけど……まずは彼女達の正体を突き詰めないと」

クラウドの言葉に藍が応えると、一同は小さく頷いた。

「そうと決まれば、だな」

それが合図となったのか、メンバーは早速各々の作業に取り掛かる。

藍とクラドはそれぞれ情報収集、アンリエールはデツキの調整に余念が無い。

ベルもデツキを手にとって、パラパラと確認していくが……。

（――あのとき、もし）

脳裏に浮かぶのは奇抜な戦術や投入すべきカードではなく、そんな生産性の無い寝言めいた言葉ばかり。

――ヒヨリとのデュエル。あれは中断という形で幕を閉じたが、ベルにはそんな歯切れの悪い結果以上に引掛かる何かがある。

勝利を確信し、放った最後の一撃……しかしそれを受けるヒヨリの眼は、敗者が浮かべるソレでは無かった。

強がりやハツタリなどではない、相対したからこそ断言できる。ヒヨリは少なくともあの時点では『負けなかった』。

だとすれば。あのままデュエルを続けていたら、最後に立っていたのはどちらだったのだろう。

ベルとヒヨリ。決闘者としての実力差を考えれば、そんなことは明白だった。

「何ですか？ 辛気臭い顔で突っ立ってないで、調整の相手でも務めて頂きます?。」

じと、と訝しげに向けられたアンリエールの言葉に、ベルの意識が引き戻される。

「あ、えっと……すいません」

「全く。ぼーっとしている暇は無いとあれほど」

くどくどと始まった小言に耳を傾けていると、視界の隅でユウが静かに立ち上がった。

「……すまない、少し外へ出てくる」

「? おう、早く帰ってきてくれよ?。」

首を傾げたクラドに見送られ、ユウが部屋を後にする。

ゆっくりと閉じていく扉。それが自分達と『彼』を隔てる決定的な何かに思えたベルは、ある種の焦燥感を覚えた。

そうなればもう、居ても立ってもいられない。

「すいません! わたしもちよつとトイレに!。」

「何てはしたない……」

アンリエールの溜め息混じりな小言を背に受けて、ベルはすぐさまユウの後を追ったのだった。

「……何か用か?」

宿の屋上で景色を眺めていたユウは、背後の小さな気配を確かめて呟いた。

それほど高くはないものの、夜空と飛行場に輝く小さな明かりを堪能するには十分過ぎるスペースだ。

「すいません、少し聞きたいことがあつて」

「……悪いが、今は1人にしてくれないか」

「それは出来ません」

きつぱりと、ベルはユウの言葉を切り捨てた。

彼女の存在を知ってしまった以上、少なくともユウがメンバーに真実を隠す理由を聞くまでは引き下がるわけにはいかない。

それが閉じ行く扉をこじ開け、後を追ってここまで来た自分の果たすべき責務だ。

「《魂の牢獄》。あの画像、もう1度だけ見せて貰えませんか?」

冷たい夜風がベルの頬を静かに横切る。

しばらくの静寂が続いて、ユウは視線を夜景に向けたまま呟いた。

「……今更あんなものを見てどうする」

「確かめたいことがあるんです」

真つ直ぐに向けられたベルの固い意思が伝わったかのように、ユウの背中から力が抜けていく。

少し長めの後ろ髪をふわりとなびかせ、ゆつくりと向き直ったその無表情は。心なしか微笑んでいるようにも見えた。

「もう、大体の見当は付いているんじゃないのか?」

Dパッドを軽く操作して、ユウがひよいと投げて寄越す。

慌ててベルが受け止めると——そこには件の《魂の牢獄》が映し出

されていた。

「……やっぱり、そう。この人です」

描かれたイラストは、虚ろな表情を浮かべたヒヨリと瓜二つの少女。短めに切り揃えられた栗色の髪は彼女のものとは違っていたが、あの無邪気な笑顔の面影が残るこの少女はやはりヒヨリに間違い無い。

「……そうか」

短くそれだけの言葉を返して、ユウは再び背を向けた。

ここで口を噤んでしまつてはそれで終わつてしまつと、ベルはすぐさま追い続つた。

「教えてください。この人はどうして『白面の女』と？ この人は、一体ユウさんの——」

「……質問には1つずつ答える」

ぴしゃりとベルの言葉を遮つて、ユウがはっきりと告げる。

それはもう隠しはしないという、決意の表れのようなのだ。

「……何故、奴が白面の女と共に居るのか。それは正直、俺にも分からない」

遠くに見える飛行場から、旅客機が飛び立っていく。

鳴り響くジェットエンジンの轟音が鳴り止むのを待つてから、ユウはいつも通り淡々と告げた。

「だが奴は……ヒヨリは俺の師であり、友であり。想い人でもあつた」
砂の混じつた乾いた風が渦を巻く。

全身が吹き飛ばされそうになる錯覚を覚えて、ベルは思わず身体をよろめかせた。

「そう、だつたんですね……」

この無表情な男が、必死の思いで探し続けるモノ。それが彼の中でどれだけ大きな存在であつたのかを理解するのは難しくない。

しかし所詮、理解など自身の描いた理想に過ぎない。当人から語られる『現実』が持つ立体感とは程遠いものだ。

故に。ベルの胸を締め付ける小さな痛みは、彼女にとって想定し得ないことでもあつた。

「……これから話す事は。出来ることなら冗談半分で聞いて欲しい」
ユウは決して振り向かず、話を続けた。

それは自らの顔を見せまいとの配慮からなのか。はたまた、ベルの表情を見るまいという心遣いからなのか。

「俺とヒヨリは——いや、正確にはもっと『いる』のかもしれないが、どうやらココとは違う別の場所から連れて来られた人間らしい」

「別の……？ 文明の白から、ということですか？」

本当に突拍子も無い話に、ベルは胸の動悸を抑えながら聞き返した。

只でさえ多くを語ることが無いユウが、言葉を選びながら『冗談半分』を少しずつ語っていく。

「……いや、そういう事じゃない。恐らくだが『平行世界』『別世界』というヤツだろう。俺も詳しくは分からないが」

つまりユウの言わんとしていることは、架空の産物である夢物語が現実のものであり。そして自分達が『そう』である、ということなのだ。

村に居た頃はそういった話とは無縁であったベルだが、色々な街を移り働くうちにその手の物語を小耳に挟み、歳相応の興味を持って聞いていたこともある。

別の世界。別の自分。そういったものに強く憧れを抱いているのは、デュエルを通じて少しだけ強くなれた今でも変わらない。

「どういうこと……ですか？」

だからこそ、そんな夢物語を語るユウに真剣な眼差しを返す。

「……俺の生きてきた『世界』と『この世界』は何かが違う。その違和感はこの世界でデュエルをする度、人に触れ合う度……次第に大きくなっていった」

すう、と静かに息をつく。そんな小さな音まで聞こえる程に、ベルの意識はユウの話に集中していた。飛び交う旅客機の轟音など、ものともせず。

「……ムトウユウギ。この名を知っているか？」

唐突に投げ掛けられた質問に、ベルはふるふると首を横に振った。

「カイバセト、ジヨウノウチカツヤ……この2人はどうだ？」

ベルはただ、首を横に振る。

名前からして白の出身者なのだろうかと思ったが、それにしても妙な発音だ。

「……いずれも俺の記憶では『伝説』と語り継がれている決闘者だ。決闘者を志した者なら誰しもが聞く筈の名前なんだがな」

「す、すみません……勉強不足で……」

「いや、お前は悪くない。何せ『この世界』の人間は誰も知らないようだからな。試しに藍やアンリに聞いてみるといい、首を傾げて『誰？』と聞き返されるぞ？」

自嘲気味に鼻で笑って、ユウは話を続けた。

「……それが俺が感じた違和感、その1つだ。この世界は……特にデュエルに関しては俺の知っているソレとは何かが違う。俺の話が真実であるとすれば、それが証拠といえは証拠になる」

「尤も、それは俺の記憶の中だけの話だ。頭がおかしくなったのだと言われれば納得してしまう程度のものだが——」

再び振り返ったポーカーフフェイスはどこか哀しげに、1枚のカードを見せて言った。

「——俺とヒヨリが、このカードに閉じ込められ目覚めたことは。この世界で起きた確かな事実だ」

それは、がらんどうの檻だけが描かれた《魂の牢獄》。

「……ココではない、どこか別の場所だな」

何故、という言葉は出ない。

そのカードが果たした役割を、ユウが語らんとすることは容易に理解できる。その事実を受け入れ、口に出すことが出来ずにいるだけだ。

ユウは既に闇のゲームを体験し、カードに封印されたまま、彼の言う『この世界』に連れて来られたという、真実を。

「そんな……一体、誰に？」

「さあな。何の目的があったのか、それは未だに分からず終いだ。白

面の女が何か知っていれば良いのだが」

言いながら、ユウはカードを内ポケットに仕舞いこむ。

「……少なくとも、アレは人では無かったようだが。未熟だった俺達は、成す術もなく敗北した」

そう語るユウの目は遠くを見つめている。

こことは違う、彼の記憶の中にだけある世界を。

「……次に目が覚めたときは、『この世界』の白に居た。どうにもこの辺りの記憶は曖昧なんだが……癩に障る小太りな男があれこれと命令してきたのは良く覚えている。ここからは単なる昔話だ」

ポケットから取り出した右手には、もう何も握られてはいない。

空っぽの掌を見つめて、ユウは言葉を続けた。

「それから奴は、何をさせたかったのか俺に色々な奴とデュエルさせた。連日連夜、場所を変えて幾度と無く。ヒヨリのカードを人質にな」

それがどれだけの苦痛だったのか、屈辱だったのか。

こればかりはベルも、想像や理解が組み立てられない。

「奴からヒヨリを取り戻し逃げ出す機会をいつも窺った。そして丁度、この橙に着いてからだったな——俺は奴の手から逃れることが出来た。結局ヒヨリのカードは奴の手に戻ってしまったが」

つまりは失敗。一番守らなければならぬモノを残したまま、自分だけが生き延びた。

力なく伏せられた視線は、広げられた掌へと落ちていく。

「それからは、今までの通りだ。ヒヨリが封じられたカードを探して街を渡り歩いた……結局奴も、自力で逃げ出したようだがな？」

そう語るユウの目の端は、どこか柔らかく緩んでいた。

本当に安心したように。あのポーカーフェイスが、感情をこれだけ滲ませている。

しかし。

——ごめん、分かんないや！

ユウの名前を聞いても、けろりと否定した無邪気な笑顔も。

——ゼツタイ勝たなくちゃ……ね♪

闇の瘴気を纏い、思い出すだけでも背筋が凍るあの眼も。

あれらは全部嘘で、ベルを騙す為の演技だったのだろうか。

大切な人に会えたかもしれないのに、無事を伝えることが出来たかもしれないのに。

それを堪えてまで『白面の女』の傍にいなきやいけない理由があるというのだろうか。

ベルにはどうしても、それが理解出来ない。

「……あの、」

「ベル」

疑問の渦を断ち切るように、ユウが名前を呼んだ。

ヒヨリが闇のゲームらしき『何か』を仕掛けたこと。その眼の冷たさはユウも聞いていた筈だ。ベルが抱えている疑問は恐らく、ユウの心に一番強く渦巻いていることだろう。

「……こんな話をされても信じられないのは分かっている。だから、事態が落ち着くまでは皆には黙っているつもりだ。お前も今は、冗談半分で聞いておいてくれ」

今更ベルに問い掛けられずとも、ユウとて十分に分かっている筈だ。

何せ彼は、ベルが尊敬する『師』の1人なのだから。

「……分かりました。全部が分かっただら——ヒヨリさんがユウさんの元に帰って来たら、ちゃんと話を聞かせて下さいね？」

だからベルは笑顔で、そう返す他に無かった。

「うへ……想像通りのすげえ人……」

寝不足だろうか、目の下にクマを作ったクラウドが枯れた声でウンザリと呟いた。

大会会場となる『シガマアリーナ』前には観客と登録決闘者を含めた人でごった返し、入場整理に追われたスタッフ達が怒声を撒き散らしている。爽やかな朝とは程遠い光景だ。

「全く騒がしいですわね……これだから橙は」

暑苦しい、とばかりにウンザリと呟くアンリエールに、すぐ近くに顔があつた藍が苦笑を浮かべて言葉を返した。

「……あの、アンリちゃん？　そういう台詞は、アナタ目当てに集まつてきたこの野次馬を、どうにか、してから、言ってくれない、かしら？」

そう。

一行がもみくちやにされている9割方の原因。それは『天才決闘役者』ことアンリエール・ラムジョレーンの威光に他ならない。

「そうだぜお嬢……何が哀しくて、俺達はこんなトコロで肉饅頭されにやならんのだ？」

「私の魅力のせいだと？　冗談ではありませんわ、文句なら緊急対応のなつていない主催運営様に言つて頂けます？」

恨めしげなクラドの呟きを、アンリエールはさらりと流してのけた。

この大会にはプロデュエリストで構成された『ドリームチーム夢の旅団』、つまりゲストチームが参加するようなのだが、当然ながらそういったVIPには専用の通用口というものがある。

それは混乱を避けるための当然の処置なのだが、いくら何でも前日になつて突然参加が決定したこの野良VIPの為に、楽屋を用意したり通用口を段取つたりなどという準備が間に合う筈が無い。

結果。一般参加として待機するアンリエールにファンや野次馬その他諸々が殺到したわけだ。

現在、アンリエールを中心として4人で周りを囲んだ簡易バリアで押し寄せる人々からアンリエールを守っているが……。

「うええ!?!　いつ、今、誰かがわたしのっ……!?!」

「……耐えて、ベルちゃん。後で必ず割り出して制裁を加えてやるから……」

入場までにメンバーのライフが持つかどうかは、微妙なところである。

「ああん♪　ユウ様あ……身体が押されて……♪」

「そのプロ!! 変な声を出さないで下さい!! ただでさえ人の目が多いんですから!!」

「だ、ダメだ……意識が朦朧と……」

見かねた運営スタッフが彼らを救助したのは、それから少し経ってからのことだった。

一同は広い待合用のロビーに通されると、先に受付を済ませていた他の旅団と共に開会式へ向けた説明を受けることになった。

式の流れを大体説明し終えると、スタッフ達は忙しそうに裏方の方へと消えていく。

「一時はどうなることかと思っただけ……何とか無事に出場出来そうね」

全くだと頷く代わりに溜め息をついて、メンバーは藍の言葉に賛同する。

あのまま揉みくちやにされていたら、ココへ辿り着くことすら出来なかっただろう。

助けてくれた名も知らぬスタッフのおじさん達に感謝しつつ、ベルが気を引き締めていると。

「おはようございますBoun girono! またお会いしましたね、小麦肌のお嬢さん?」

ようやく一息ついた一同へと、無駄に明るい男の声が掛かった。

雑多に声が飛び交うロビーの中でもよく通るその声にベルが振り返る。

「ああつ、えつと……」

見ればその人は、水源都市マガイアで出会ったブロンド髪の軟派男だった。

そういえば、彼の名前を聞いていなかった……とベルが思案するよりも早く、ブロンドの男は大きく両腕を広げると力強くベルを抱きしめた。

「!?」

「うん、良い抱き心地だ。立派な決闘者として成長したようですね？」
「なっ!?」 メイドちゃんに何すんだ、この野郎!」

突然の行動に慌てたクラドが拳を振り上げて殴りかかったが、ブロンドの男は軽い身のこなしでひらりと避けて見せた。

「おっと……いやいや、ただの挨拶ですよ彼氏さん?」

憤慨するクラドを尻目に、ブロンド男は眉を寄せて余裕の困惑。

わたわたと手を泳がせるベルを優しく解放すると、ブロンド男は次の標的を藍へと向けた。

「おお、これはいつかの黒髪淑女! お久しぶりです!」

「あ、あはは……」

標的を藍に変えたブロンド男が、両腕を広げて笑顔で迫る。

困惑した表情で後ずさる藍との間に、すかさずクラドが割って入った。

「てめっ、この……!」

「はっはっは、暴力反対!」

爽やかな微笑みと共に長いコートの裾を翻し、クラドの直線的な攻撃をかわしていく。

「おや? おやおや? これはラムジヨレーンの幽霊姫様! こんなところでお目にかかれるとは……!」
まるでジェムナイト宝石騎士のように澄んだそのお瞳。画面越しに見るより強かでお美しい……!」

くるりと回りながら今度はアンリエールの前に躍り出ると、ブロンド男は恭しく膝について頭を下げた。そのまま手を取り、甲に口付ける。

「あら。それはどうも」

呆気にとられて声も出ないメンバーとは打って変わり、アンリエールの反応は淡白でしらっとしていた。

そういえばコイツも似たようなコトをしていたなど、クラドは表情には出さずに心中で呟いた。ただ矢印が複数に向いているか、極太のものが1人に向いているかの違いだ。

「あの、ここにいてって言うことは……?」

堂々たるアンリエールの態度に救われ、ある程度混乱が収まったところで恐る恐るベルが尋ねると、ブロンド男はにっこりと微笑んで答えた。

「ええ。力及ばずながら出場を、と」

見れば、彼の後ろには高額カードを買い込んでいた幼い双子がユウに負けず劣らずの無表情でぴったりと張り付いている。

決闘者の強さに年齢は関係ないと言うが……彼らもブロンド男と共に大会へ出場するのだろうか。

「本当に力及ばなそうな殿方ですわねえ……」

何の遠慮も無くずかずかと目の前で言っただけのアンリエールだったが、当の本人はニコニコと爽やかに歯を光らせているばかり。

美男子であることには間違い無いのだが、決闘者としての気迫というか心の強さというか、そういうものを感じるには線が細過ぎる。

苦笑を浮かべるばかりの一同に『お構いナシ』なのはブロンド男も同じようで、会場の空気が変わる気配を察したのか口元に人差し指を当てて呟いた。

「さて……そろそろ始まるようですよっ」

忙しそうに駆け回るスタッフ達が、不意にしんと静まり返る。

程なくして流れ始めた賑やかなBGMと共に、遂に大会の幕が開けた。

第17話 開幕、SSC!

「中々にぐ盛況……みてーだな?」

元々、様々なスポーツやイベントを運営する為に作られたこのシガマアリーナは、平時のまばらな客席が幻だったかのように人々の熱気で溢れていた。

「ネイティブに住む人たちにとっても、数少ないイベントですからね。盛り上がるのも何となく分かります」

「そうでなくとも、宣伝は結構大規模だったみたいだし……他の大陸からもわざわざ足を運んだ人も多いいんじゃない?」

ベルと藍が、各々の立場から感想を述べる。

辺境を放浪していたユウ達の耳に入ったのは少しばかり遅れたようだが、裏を返せばそんな彼らにも届くほどに大きく宣伝していた、ということなのだろう。

「そういえば……参加旅団の皆さんも、この辺りじゃあまり見ない服装の人達が目立ちますね」

アリーナの中心に位置する芝生の競技場の中、立ち並ぶ決闘者たちを眺めながらベルが感嘆した様子で呟いた。

良く見かける『旅の一団』も多数見受けられるが、中にはアンリエールと同じような華美な服装を纏う『外者』(ソトモノ)も目立つ。

品定めをするように他の参加者を見渡す者。他者のことなど気にも掛けず、暇そうに欠伸を欠く者……多種多様な決闘者達は、それぞれの思惑を浮かべていた。

「つか、ゲストチームとやらはドコに……ほほー、お高いところでご見物なさってら」

豪華ゲストたるプロの面々は、客席中央の主賓席で優雅に腰掛けていた。その表情までどこか緩んで余裕に満ち溢れている。どうにもその様子が癪に障ったらしく、クラドが口元を引き攣らせて呟いた。

「仕方ありませんわ、あの方々は『真正正銘の』プロデュエリストですもの。マスコミにちやほやされているだけの、どこかのジュニアとは違ってね」

いつも余裕溢れる彼女の意外な一面に妙な親近感が沸いて、ベルはくすりと笑みを溢した。溜め息をついたアンリエールの横顔に、大きく『悔しい』と書いてあったからだ。

「ま、いずれは私の足元に下して差し上げる予定ですけど」

その反対側には『負けるものか』と、殴り書きされていたようだが。

「……そろそろ、始まるようだ」

参加者達が見守る中、中央に設置されたステージからスモークが溢れ出す。

刹那、アリーナにARが展開されその光景が塗り換わっていく。

「おいおい……こんな大掛かりなAR、一体どれだけ金掛けてんだよ……？」

モデルは恐らく、『文明の白』に実在する最先端科学の結集した巨大アリーナだろう。

あちこちに浮かび上がったモニターには決闘者達の顔が映り込み、色とりどりの花火のような光がそこら中ではじけ飛んでいる。

パールホワイトの外壁には葉脈のようにパイプが走り、血液の如く用途不明の光粒子が流れていく。そんな様子を、子供達が顔を光で照らしながら面白そうに眺めていた。

先程までのシガマアリーナが石器時代の建造物とさえ思えてしまう、まさに近未来の産物だ。

『レディース・エーンド・ジェントルメン!!』

そんな光り輝く舞台の中心に降り立ったのは決闘者達には馴染み深い、華奢で騒がしい2人組。

『……姉さん。その台詞はこの場に相応しいようで、相応しくありません』

審判員機構、コーパル&ネフ。コスチュームは露出の際どいチアガール姿だ。

『メタイ立場へ更なるOne Step!! 今大会の司会を勤めさせて頂きます美少女審判員コーパルちゃん只今参上♪』

『貴方と、ベリxBuddies。副司会を努めますネフです。尚、えっつい目線はご遠慮下さい』

ペこり、とネフが頭を下げたのを皮切りに沸き上がる会場もなんのその。コーパルはハイテンションに口火を切った。

『さてさて、観客席の皆様？ 本日はSSC、通称『シガマのステキなチャンピオンシップ』にご来場下さいまして、まことにありがとうございます♪』

初めて知らされた大会名にどよめく会場。

なんぞそれというツツコミすら待たずして、ネフが代わって言葉を繋げる。

『……本大会は、各大陸代表国がスポンサーとなる最大規模のデュエル大会となります。要するに国の奢りという訳です。ですので安心して飲むなり食うなり、観るなりをお楽しみ下さいませ』

投げやりな彼女らの『いつも通りな』説明に、決闘者サイドから失笑が漏れた。

これも愛嬌だとざわつく会場に、突如として一喝が入った。

『そんでもってですねー、参加者の皆様に一言申し上げます……決闘者共お!! 気合は十分かあ!』

マイクをキーンと鳴らす演出まで混ぜて、コーパルが力の限りに叫ぶ。

突然の怒声にビクツ、と一斉に決闘者達の肩が上がったのは言うまでも無い。

『勝ちたいかあ?! 優勝商品が欲しいかあ?!』

そう叫んでマイクを決闘者達へ向かって突き出すコーパル。

要するにアレだろ? と何となく空気を読んだ半数が、おくと気の抜けた返事を返して右腕を上げた。

『……と、参加決闘者達もこの通り元気いっぱいなのです、火花散らす白熱した試合にご期待下さいまし♪』

いささか疑問の残る『元気』ではあったが、ひとまず彼女らのやりたいことはやり終えたらしく。その後はゲスト旅団による選手宣誓と中継による各国首脳からの挨拶など特に面白くも無いイベントが続ぎ、いよいよもって大会に関する説明が始まることとなった。

『それではお待ちかね……今大会で適用される新ルール発表です!!』

ふりふりとコーパルが小躍りしながら宣言したその瞬間は、恐らくこの開会式で最高潮の『盛り上がり』を見せただろう。

『それでは、コチラの大モニターをご覧下さい』

ネフが手をかざすと、アリーナ中央に巨大なモニターに箇条書きの項目が表示された。

『これが今大会で試験的に適用される新ルールの主な変更点となります』

1. 先攻プレイヤーのドロローは無し。
2. フィールド魔法は互いのフィールドにそれぞれ発動可能。
3. 新型モンスター「ペンデュラム」の導入と、それに伴ったフィールドへの「ペンデュラムゾーン」設置。

会場の『どよめき』は、このときが最高潮だっただろう。

項目1から既に度肝を抜かれるような発表。加えて正体不明の新型モンスターの登場……それでも決闘者達が落ち着いていられたのは、本能的に新ルール適用後のデッキを脳内で構築し始めていたからだろうか。

無論、経験の少ないベルは突然の衝撃にわたわたと手を宙に泳がせるしかなかったのだが。

『他には、決闘者の皆さんにしか分からないような細かい裁定の変更などですので、まとめて皆さんのDパッドへテキストを送信させて頂きました♪ 旧型ディスクしか持っていない旅団の皆様には、後ほど小冊子をお配りします〜』

『尚、新型のペンデュラムモンスターに関しては『一般的には』まだ市場に出回っていないカードですので、ご了承下さいませ』

ネフの補足説明を聞いて、クラドが呆れたように溜め息をついた。

「……成程、連中はそういう腹か？」

クラドが見据える先には、主賓席に腰掛ける『夢の旅団』の面々。ニヤニヤとモニターを眺めているが、恐らく大会の趣旨や新ルールの概要などは事前に聞かされていたに違いない。

「……彼らが既に新型モンスターを、ですの？」

「ああ。そうと考えるのが自然だろう？ 要するにこの大会、新型モン

スターのプロモーションも兼ねてるんだ。俺らは新型がどれだけ強いかを試す嚙ませ犬ってトコだな」

「……最悪ですわ」

げっそりといった様子クラドとアンリエールとは対照的に、ユウと藍は至って冷静だ。

藍に関しては、既にカタカタとキーを打ちながらメモを取っている。参加者としては冗談ではないが、実地潜入している記者という立場であれば新型のプロモーションを生で体感出来るなど『オイシイ』以外の何でもない。

『ではでは、これより大会のシステムについてご説明します〜』

波打つ動揺は、コーパルのそんな一言が見事に鎮めた。

『今回はA・Bの2ブロックに分かれての、旅団対抗トーナメント方式で勝ち残りを賭けて頂きます〜』

『……各旅団の皆様には、レギュラーメンバー4名と最大3名までの補欠を登録して頂けたかと思えます。基本的にはレギュラーメンバーの皆様で『シングル』を2戦、『タッグ』で1戦の計3戦を行い、2点先取で勝利となります』

この予想はドンピシャだったらしく、クラドを始めとした各旅団のブレーン達から安堵の息が漏れる。

そこへすかさず、コーパルの意地の悪そうな忍び笑いが木霊した。

『ふっふっふ……ですが、ただフツのデュエルをしたんじゃあ面白可笑しくありません。そこで……』

バン、という古めかしい効果音と共に大モニターへ張り出されたのは。

『良かれと思って、特殊デュエル決定ルーレットオ!! なんてモノを作っておきましたあ!!』

また余計なことを！ という野次が飛び交う中、これでもかと大きく書かれた箇条書きの項目が再び決闘者達へ突き付けられた。

1. いつも通りなハーフライフ、4000デュエル!
2. 実はコッチが正式、フルライフ8000デュエル!
3. 俺達の満足はこれからだ! 仮想ライディングデュエル!

4. エンターテインメントでなければならぬ！ 簡易アクシオンデュエル！

『この4つの異なる特殊デュエルが、3戦の中でランダムに適用されますよ。』

詰まるところ、これはどのデュエルが適用されるかによっても、自分や相手に有利不利が少なからず働くということでもあった。

そうなるに運の要素がかなり絡んでくる。4人のメンバーの内誰がどこを担当し、より有利な相手にぶつけられるか……そんな果ての無い考察が終わっても、この運という壁が易々と立ちほだかるのだ。

「……一筋縄じゃいかねえようだな。こりゃあ」

新ルールの適用、新型モンスターの脅威。そしてランダムに設定される特殊ルール。

トーナメント中に『白面の女』の旅団と当たれば御の字、程度に考えていたクラドであったが、そもそも勝ち上がれるかどうかすら、雲行きが怪しくなってくる。

『それでは続きまして、対戦トーナメントの組み合わせを発表します』
続いて大モニターに映し出されたのは、木の根のように細かく枝分かかれた2つのトーナメント表だった。根の先端には、多種多様な旅団の名前が連なっている。

「おっ、俺らはBブロックみてーだな」

指をさしてクラドが微笑むも、そもそもの話。

「……そういえばクラド。俺たちの旅団の名前は何か？」

小首を傾げるユウを筆頭に、メンバーの注目がクラドに集まる。登録に向かったのはクラドだけで、慌ただしい中ですっかり忘れていた一行の旅団名は彼に一任されていたのだ。

が、トーナメント表を横目で見ていたアンリエールが突然噴出したかと思うと、指をさしながらユウの肩を突いた。

「ぶっ、見て下さいましユウ様。にじいろ団などという名前の、センスゼロの旅団がございますわあ」

アンリエールがケタケタと嘲笑う中、どこかからギロリと睨まれた

ような気がしてベルが慌てて窘めた。

「ダメですよアンリさん！ そんな風に笑っちゃ！」

「では、貴方は『にじいろ団』に僅かでもセンスを感じると？」

「それは……その」

否定してはいけないという気持ちはあるが、ソレを肯定出来るかどうかというのは別問題だ。

目線をあちらこちらに泳がせるベルを、アンリエールはそれみたとかとニンマリ口端を丸めて眺める。

「アンリちゃん？ あんまりベルちゃんをイジメないで」

「あら、私は別に虐めてなどいませんわ。貴女の好きな真実とやらを述べたまでです」

「私が言うのも変だけど……例えば真実でも、口に出して良いことと悪いことはあるのよ？ あんな名前だつて一生懸命考えた人がいるんだから」

藍の言葉に「その通りだ」とコクコク頷くベル。

「そうですよ。ねえクラドさ……」

向き直ったベルが見たものは、

「そうだよな、いるもんな。ちゃんと一生懸命、考えた人が」

目の端から光の粒を消費し続ける、悲しき男の姿だった。

「ああ、ちなみにな。ソレ、ウチの旅団だから」

毒舌魔王アンリエールも、流石に口を噤んで目を逸らすしか無く。

男が流した哀れな雫は、しとしとと競技場の芝生を濡らしていた。

「結局、白面の連中は見つからなかった訳だが……」

涙の跡が残るクラドが気を取り直したところで、控え室での作戦会議が開かれた。

準備する時間もロクに取れず、試合は1時間後。簡単な調整だけを済ませて、小さな机を中心に5人の小さな円陣が組まれている。

旅団名だけでは何がなにやら分からない上に、いくら見渡しても白面の女はおろかヒヨリの姿さえ見当たらない。もしや彼らは出場しなかったのだろうか、という不安が過ぎる中、ひとまず目の前に迫る試合に集中することになった。

「予選第1試合、先発は誰が行く？」

そうと決まれば、真つ先に上がるのはこの議題。

フンと得意げに鼻を鳴らして、アンリエールが口先を切る。

「無論ですわ、このアンリエール・ラムジョレオンが華霊なる1勝を」「俺が行こう」

「はい♪ ユウ様あ♪」

即決であった。

藍は元より慎重派であったし、ベルに至っては緊張からか何度も深呼吸を繰り返している始末だ。参謀クラドとしても、ここは実力のあるアンリエールかユウを、と考えていたところだった。

「おっ、ヤル気十分だな。それじゃ頼んだぜセンサー？」

「ああ。期待に沿えるよう努力する」

ユウの表情はいつもと同じポーカーフェイスで、落ち着いているように見える。

だが――。

(……焦って、いるんですか?)

彼の内情を知るベルだけは、そんなユウの横顔を不安げに見つめていた。

きつとこれから先、彼はずっと一番手を立候補して。確実に『1勝』を得ようとしているのではないかと、そんな気がしてならないのだ。

それは裏を返せば、ユウが自分達を信用していないという悲しい事実の表れではないのか。

(……ダメダメ！ しつかりしろ、わたし！)

椅子に腰掛け、いつも通りにデツキを眺め始めたユウの姿がどこか遠く見えたベルは、ぶんぶんと首を振ってから気付けのよう頬を叩いた。

「ちよっ、なんですのいきなり!? 野蛮なネイティブ女はこれだから

……」
ぶつぶつと始まったアンリエールの文句も雑音ごと耳から流して、ベルもデツキを手に調整を始めたのだった。

『ではでは、続いてBブロック予選第3試合！ 【にじいろ団】VS【AKATUKI】の試合を開始しますよ〜♪』

コーパルのアナウンスと共に、コートへと入場する一同。
「相手方のお名前も……何とかアレですわね」

アンリエールの毒は幸いにして届かず、相手旅団の面々は不敵な笑みを浮かべている。

ARで改変されているとはいえ、元はスポーツの競技場としても使われていたこともあって選手用のベンチが設けられていた。

先発のユウ以外がそこへ着くと、ネフのアナウンスが続く。

『それでは、第1シングル戦を開始致します。対戦者はコートへお上がり下さい』

かつん、かつん、と靴音を鳴らしながら、ユウが熱戦の舞台へと上がる。

「へえ、アンタが俺のお相手か。お互い一番槍同士だ、ヨロシク頼むぜ？」

待ち受けていたのは、髪を逆立てた快活そうな好青年だ。

恐らくはユウと同じか、少し上くらいの歳だろう。服装はネイティブの旅団に良く見られる、荒野の長旅に適した茶褐色の服装だ。

「……ああ。よろしく頼む」

ともすれば無愛想ともとれるユウの態度にも、青年は少し目を丸くしたかと思うとすぐさま獣のような眼光をその瞳に灯らせた。

ユウが静かに構えたDパッドを見て、闘志十分と判断したのだから。

「さっさと始めようぜってか？ OK、審判ちゃんヨロシク！」

少し遅れて展開した青年のディスクにデツキがセットされると、す

ぐさま2台のディスクがリンクしていく。既に会場にはARが展開されている為か、いつもの手順が省略される。

『それでは！ 予選第3試合はシングル戦、そのルールを決定しますよ〜♪』

全試合をこんなテンションでやっていて疲れないのかという位の元気で、コーパルが持ち出したるはどこかで見たような紅白模様の円盤。ほぼ均等に8つに分けられた紅白模様には、それぞれ4つの特殊ルールが各2つずつ記載されている。

『アルティメットブルーレット、ゴー！』

おーっ、と右腕を上げるコーパルの合図と共に、紅白円盤が何とも言えない速度で回転し始めた。その3メートル程先には、吹き矢を構えたネフの姿が。

「おいおい、まじかよ……」

げんなりとしたクラドの眩きが示した通り、ネフは可愛らしく頬を膨らませると。

『……ふっー』

へろへろと飛んだ吹き矢は、コーパルの持つ紅白円盤に着弾した。

『ああっくと、これは残念たわし……じゃない！ 大当たり《8000フルライフ》です！ おめでとうございます！』

騒がしくドンパフと紙吹雪を撒き散らすコーパルに祭り上げられ、ネフが得意げに胸を張った。

何ともいい加減な方法で決まったように思えるが、実際にはコンピューターがランダムに決定したものを彼女達が面白おかしく演出してくれただけなのだろう。

「おっ、シンプルなヤツで助かったぜ！ これで思う存分実力が出せるってモンだ！」

何かを含んだ青年の笑みに、ユウも口端を僅かに歪めて応えた。

「……それは良かった。お互いにな」

「ははっ、言うねエ？」

交わすべき言葉も、最早ここまで。

『ではでは、お待たせいたしました！ 【にじいろ団】代表ユウ選手V

S【AKATUKI】代表フリン選手、試合開始イ!!」

コーパルが高々と右腕を上げ。

にじいろ団の行く先を占う、初戦の幕が切つて落とされた。

「^{デュエル}決闘!!」

ユウ LP8000 VS フリン LP8000

コーパルとネフが投げた、白黒の賽が示したのは――。

「俺の先攻か！ そんなじゃド……ローは出来ねーんだったな？」

『そうですよ〜？ 既に先攻ドロローをしてしまい失格になった選手もいますので、気をつけて下さいね〜？』

やぶさかでないコーパルの忠告に、両旅団からごくりと息を呑む音が聞こえる。

出鼻を挫かれたようで少し調子を悪そうにしながら、フリンは5枚の手札の中からカードを選択しディスクに伏せた。

「モンスターを1枚、伏せを2枚でターンエンドだ！」

『フリン選手。まずは様子見といったところででしょうか？』

好戦的な姿勢とは裏腹に、1ターン目で敷かれたのは手堅い陣形。

初動の手札が1枚減ったことで、思うように動けなくなったのだからか。

「……俺のターン。ドロロー」

対して後攻であるユウは十分に揃った手札を眺めると、思考を巡らせることなくすぐさまカードを切っていく。

「魔法カード《ソーラー・エクステンジ》を発動。《ライトロード・アーチャー フェリス》を捨て、デッキから2枚ドロローをして2枚を墓地へ送る」

『あつと、ユウ選手が発動したのは強力な手札交換カード！ 一体どんな「ライトロード」なんだあー!』

墓地へ送られたのは《光の援軍》《カードガンナー》の2枚。

そんな光景を眺めながら、フリンが研がれたナイフのように鋭く微

笑む。

「へえ……【ライトロード】か。成程、こりや確かにお互いフルパワーでやれそうだな？」

「……《ライトロード・サモナー ルミナス》を通常召喚し、効果を発動。手札の《ライトロード・パラディン ジェイン》を捨て、墓地のフェリスを特殊召喚する」

「おやおや、つれないねエ？」

問い掛けには答えず淡々とプレイするユウに溜め息はつきつつも、フリンは嫌な顔一つ見せずに進行を見送った。

結果、ユウのフィールドには2体の女性モンスターが凜と並び立つ。

《ライトロード・サモナー ルミナス》

☆3 / 光属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 1000 / DEF 1000

《ライトロード・アーチャー フェリス》

☆4 / 光属性 / 獣戦士族・チューナー・効果 / ATK 1100 / DEF 2000

『チューナーと非チューナーがフィールドに揃った……来るぞー！』

「☆3のルミナスに、☆4のフェリスをチューニング」

飛び上がる召喚師を、弓兵が変化した緑光の輪が包み込んでいく。

「神秘を担いし封印の魔衣、白き契約に従い答えよ。シンクロ召喚、☆7 《アーカナイト・マジシャン》」

《アーカナイト・マジシャン》

☆7 / 光属性 / 魔法使い族・シンクロ・効果 / ATK 400 / DEF 1800

光の柱を割いて現れたのは、純白のローブを纏った魔術師。

守備表示ながらも、目元の暗がりから覗く鋭い眼光がフリンのフィールドを捉える。

『決まったくー！ 初動ターンから速攻のシンクロ召喚だあー！』

「アーカナイト・マジシャンのシンクロ召喚成功時に、魔力カウンターが2つ乗る……」

「おっと！ ソイツの効果は防がせて貰うぜ？ 罨カード《ブレイクスルー・スキル》発動！ そいつの効果ターン終了時まで無効にする！」

自身も使用しているそのカードの効果も、ユウは静かに頷いて受け入れた。

バチバチ、と電流のようなモノがアーカナイトを襲い、力無く膝を付く。

『……あらら。無効化されちゃいましたね〜』

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「動じねえか。ま、この大会に出場したんならその位の気合が無いとな……それならエンドフェイズにコイツはどうだ？ 永続罨《メンタルドレイン》を発動！」

アーカナイトの破壊、もしくは無効化まではユウも想定していたのだろうが、ここでピクリとその無表情に小波を立てた。

その変化を見逃さなかったフリンが、思わず口端を吊り上げる。

「お、やっと反応してくれたな？ このカードは発動時にライフを1000支払うことで、フィールドに存在する限り『手札で発動するモンスター効果』を封じる……ま、その様子だと説明は要らなかったみてえだがな？」

フリン LP8000↓7000

発動されたカードに驚きの声が上がったのは、ベンチのベルからだった。

「手札のモンスター効果を……？ そんな、それじゃあ……モゴ!?」

「お馬鹿！ 分かり易く表情と声に出すんじゃないやありませんわ！」

血相を変えてアンリエールが口を塞ぐも、ベルの驚愕を見たフリンは満足そうに頷くとウイंकを送った。

「成程、やっぱりもう『抱えてた』訳だ。サンキュー、お嬢ちゃん♪」
「あ……」

「お馬鹿……」

サーツと血の気を失っていくベルの隣で、頭を抱えたアンリエールが苛立たしそうに両足をバタつかせる。

彼女達の反応が示す通り、ユウの手札には《オネスト》と《エフェクト・ヴェーラー》の2枚が握られていたのだ。

「さて、そんじゃ俺のターンだ。ドロー！」

勢い良く引き抜かれたカードを満足げに一瞥し、遂にフリリングが攻勢に打って出る。

「俺はフィールド魔法《アンデットワールド》を発動！」

近未来的な会場の風景が一転、歪に曲がりくねった木々が生い茂る陰鬱とした沼地が出現する。そこかしこにアンデットモンスターが蠢く不気味なフィールドに、ベルは思わず身震いした。

「このフィールド魔法が存在する限り、お互いのフィールド・墓地のモンスターはアンデット族となり、アンデット族以外のモンスターをアドバンス召喚することは出来ない」

おぞましいエフェクトとは裏腹に、それだけでは拘束力の弱い効果にほっと胸を撫で下ろすベルだったが、隣に座る幽霊姫は忌々しげに呟いた。

「……鬱陶しいのが来ましたわね。ユウ様なら問題無いかと思いますけれど」

「ああ、相手の戦略次第だが……奴さん、どうにもメタな色が強そうだしなあ」

アンリエールの呟きに対してクラドが答えるも、やはりそこには不安の色が混じる。

2人のやりとりについていけない己の知識の無さを呪いつつ、ベルは必死に口を押さえて展開を見守った。

「更に、手札からコイツを召喚する！ 来い《ゾンビキャリア》！」

《ゾンビキャリア》
☆2 / 闇属性 / アンデット族・チューナー・効果 / ATK 400
/ DEF 200

等身の低い、腕だけが大きく膨れ上がった醜悪なモンスターが低く不気味な唸り声を上げる。真に恐るべきなのは、このモンスターがチューナーであることだろう。

「そして伏せていたモンスターを反転召喚！ 《ゴブリンゾンビ》！」

《ゴブリンゾンビ》

☆4 / 闇属性 / アンデット族・効果 / ATK 1100 / DEF 1050

カードの反転と同時に、片手に剣を握った骨だけのモンスターが飛び出す。

ステータスこそ低いものの、その真価はアンデット族らしく墓地に眠ってこそ真価を発揮する。フリンはまさにそれを、言葉ではなく行動で示そうとしていた。

「俺は☆4のゴブリンゾンビに、☆2のゾンビキヤリアをチューニング！」

闇に包まれたフィールドに振り注ぐ、神々しい光の柱。

「不屈の竜魂、宵闇の加護を受け今こそ蘇れ！ シンクロ召喚！ ☆6 《デスカイザー・ドラゴン》！」

フリンが指を鳴らすと共に現れたのは、腐食した身体を引きずりながらも圧倒的なプレッシャーを放つ、青炎を纏いし亡骸の竜。

『おつとお、ここでフリン選手もシンクロ召喚だあ！』

「デスカイザーの効果を発動……する前に、俺はシンクロ素材として墓地に送られたゴブリンゾンビの効果を発動させる！ デツキから守備力1200以下のモンスターを手札に加えさせて貰うぜ？」

コーパルの実況を得意げな表情で聞き届けてから、フリンはデツキから排出された1枚のカードをユウへと見せ付ける。

「選択したのは……俺の相棒、《荒漠の死者》！」

「……成程、な」

相棒、と呼ばれたそのカードの効果を知るユウは、静かに目を瞑って納得したように頷いた。

「続けて、デスカイザーの効果を発動！ 特殊召喚成功時、『相手の墓地の』アンデット族モンスター1体を攻撃表示で俺のフィールドに特殊召喚する！」

アンデットワールドの発動はこのカードの効果を生かすため——フリンの狙いを理解したベルの前に、衝撃的な光景が展開される。

「《ライトロード・アーチャー フェリス》は……頂いてくぜ？」

光の騎士団に仕えていた頃の彼女の面影は無く。濁った瞳が元主人を不気味に射抜く。

紫色の魔法陣から這い出てきたのは、無残にも身体の所々が腐食した女弓兵だった。

第18話 フルパワー・フルスロットル

「さて、そんじやバトルフェイズだ!!」

操り人形と化したフェリスと死の竜を携え、意気揚々と宣言するフリン。

そこへ、ユウの静かな声が割り込んだ。

「……バトルフェイズに入る前に、俺は罨カード《光の召集》を発動。手札を全て捨て、その枚数分だけ墓地の光属性モンスターを手札に加える」

手札から送られたカードは《オネスト》《エフェクト・ヴェーラー》《ネクロ・ガードナー》の3枚。そして新たに加えたのはオネスト、ルミナス、ジェインだった。

『何とユウ選手、手札に2枚のカウンターカードを所持していたあ!!』

これは勿体無い!!』

「へえ、それだけ抱えてやがったのか。悪いコトしちまったな、だが……」

流星に罪悪感が沸いたのか、フリンが苦笑しながら頬を搔く。

オネストの存在は予想していたものの、加えてヴェーラーまで。『相棒』の天敵としてこうして対策を打ち、警戒していたカードが2枚も隠れていた事実には僅かながらの戦慄が走った。

しかしオネストを再び手札に戻す理由が分からず、どうにも妙だと首を傾げる。メンタルドレインが発動している限り、オネストの効果は使用できない筈なのだが。

(すぐに『どかす』手段がある……ってワケか?)

そんな疑問も、ユウの挙動を見てすぐに瓦解した。手札と墓地を交互に確認したユウの『目』を、フリンは見逃さなかった。

「改めてバトルだ!! まずはデスクイザーでアーカナイトを攻撃!!」

「……墓地のネクロ・ガードナーの効果が発動。自身を除外してその攻撃を無効にする」

不死の竜帝から放たれたのは、生者を凍てつかせる幽界の蒼炎。

冷酷な吐息は容赦なく魔術師を襲うも、墓地から這い出た戦士の幻

影が盾となって防いだ。

『容赦の無いフリン選手の攻撃!! しかしユウ選手も負けじと防いで見せたあー!!』

「へえ、ここで使うか?」

「……………」

ユウは無言のまま決して表情を崩さない。

ちらりと控えの少女達にも一応目を向けてみるが、表情を悟られまいと口元を押さええている褐色の少女以外は難しそうな顔でデュエルの行方を見守るばかり。

(収穫なしか。ま、仕方無ねーな)

フリンは決闘者らしく、素直にカチカチ思考を巡らせた。

勿論次のドローにもよるが、ユウの手札ではメンタルドレインを崩す手立ては無いように思える。ともすれば単純に『壁』を残したかっただけなのか…………。

(いや…………違うな)

自分がユウの立場であるならチューナーであるフェリスを取り返すことを何より優先するだろう。蘇生効果を持つルミナスがあるなら尚更だ。だとすれば狙いは必然。

「…………OK、メイン2だ。ここは『乗って』やるよ? 俺はフェリスの効果を発動! このカードをリリースし、相手フィールド上のモンスター1体を破壊する!」

ぴくり、とユウの表情が僅かに揺らいだのを、フリンは見逃さなかった。

決闘者同士が腹を探り合うその最中で、戦場では腐食の弓兵が全身を光の矢と変え魔術師へと強襲する。朽ちた身で尚、その役目を全うしたので。

爆散するアーカナイトの亡骸の向こうで、フリンが不敵な笑みを浮かべる。

「更にその後、デッキの上から3枚を墓地へ送る——残念、アタリは無しか」

墓地へ送られたのは2枚の魔法カードと《ピラミッド・タートル》。

ベルには知る由も無かったが、アンデット・デツキではメジャーな存在である《馬頭鬼》等の厄介なカードが墓地へ送られなかったことに『にじいろ団』のベンチから安堵の息が漏れた。

「どういうつもりだ、って顔してるな？　心配すんな、俺にも俺の狙いがあるんだよ」

「……そうか」

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

『フリン選手、相手のカードすら巧みに操る華麗な戦略を魅せてくれました!!』

相手のモンスターを奪い、その効果を活用して見せたフリンの戦術に会場は盛り上がりを見せるその一方で、にじいろ団の面々には何か喉に引っ掛かったような難しい顔が並んでいた。

「うーん、奴さんも【ライトロード】の動きを知らない訳でもなさそうだけどなあ?」

「直線的な性格の人みたいだから、そう捻くれた『狙い』でもないんでしようけど……」

「ユウ様……」

「も……」

そんなベンチの不安など杞憂だとしても言わんばかりに、ユウは淡々とカードを引き抜く。

「俺のターン、ドロー」

ドローしたカードは2枚目の《ソーラー・エクステンジ》。

確認するとすぐに、ユウはディスクへとカードを滑らせた。

「メイン1、俺は《ソーラー・エクステンジ》を発動。手札のジェインをコストにカードを2枚ドローし、デツキの上から2枚を墓地へ送る」

墓地へ落ちたカードは《裁きの龍》に《ライトロード・ビーストウォルフ》。

「……ウォルフの効果を発動。攻撃表示で特殊召喚する」

「ひゅー、そっちはアタリか。流石持ち主は違うねエ」

そのまま拍手でもしかねないフリンの軽快な口笛を切り裂くよう

に、雄叫びを上げて半獣の戦士がフィールドに降り立った。

『ユウ選手、ここで特殊召喚モンスターを引き当てたあ!!』

『流石です。持っていますね』

《ライトロード・ビースト ウォルフ》

☆4 / 光属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 2100 / DEF 300

「手札からルミナスを通常召喚し、効果を発動……手札の《ネクロ・ガードナー》をコストに、墓地のフェリスを特殊召喚」

ソーラー・エクステンジでドロートしたカードの内、1枚は2枚目のネクロ・ガードナーと分かったところで、フリンは思わず舌を巻いた。

フェリスを墓地へ置いたのは自分の意図があつたとはいえ、お互いに負けられない『一番槍』同士のデュエル、それ位でなくては面白くない。

「☆3のルミナスに、☆4のフェリスをチューニング」

アンデットワールドの演出は先程のように『奪われた』ときにのみ適用されるのか、紫のオーラを纏いながらも精錬な姿を取り戻したフェリスとルミナスが宙へと飛び上がる。

「古の守り手、伝説の彼方より再来せん。シンクロ召喚、《ライトロード・アーク ミカエル》」

《ライトロード・アーク ミカエル》

☆7 / 光属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 2600 / DEF 2000

『ここで出ましたあ!! ライトロード専属の超強力シンクロモンスターです!!』

(やっぱり来やがったな、ライトロードのエースシンクロ……!!)

フリンが想定していたメンタルドレインを取り除く手段。その第一候補がこの黄金の竜騎士だった。『ライトロード』が抱える有名な除去カードだ、予測するには難しくない。

「ミカエルの効果を発動。1000ポイントのライフを払い、メンタルドレインを選択しゲームから除外する」

ユウ LP8000↓7000

「させねえよ！ チェーン発動、罠カード《スキル・プリズナー》！
自分フィールド上のカード1枚を選択し、このターン中に選択された
カードを対象として発動したモンスター効果を無効にする！ つま
りだ……」

スキル・プリズナーのカードに現れた鎖のエフェクトがそのまま隣
のメンタルドレインへと巻きついていく。ワントンポ遅れて放たれ
たミカエルの剣戟は、この鎖によって容易く弾かれてしまう。

「選択したカードに触れたヤツは皆、腑抜けになっちゃうってコトだ
！」

『あくつと!? フリン選手ここで会心の罠カードが発動したあ!!』

この手のカードにありがちな『対象にならない』効果でもなく、対
象となった相手モンスターに付加する効果でもない、という珍しい効
果を持つこのカードは、有効範囲こそ狭いものの防御性能は強固だ。

先程のように既に効果が発動されてからでも問題なくチェーン発
動でき、複数のモンスターから同時に狙われる心配も無く、更に罠の
効果が通用しない相手にも力を発揮出来る。

そして、このカードが最も厄介なのは。

「まずいぞセンチ……これで少なくとも『もう一度』防がれちまう」

「くつ、あの殿方!! また面倒なカードばかり……!!」

キーツ、と恋人を寝取られたかのようにハンカチを甘噛みするアン
リエール。その反応に困惑しつつ口を塞いだままきよとんと首を傾
げるベルに、クラドが補足説明を加えた。

「スキル・プリズナーはな、墓地から除外して再度同じ効果を発動出来
るんだ。流石に墓地へ送られたターンには発動出来ないが……セン
セーも《スキル・サクセサー》って似たようなカードを使っていただ
ろ?」

もが、と驚きの声を上げてその厄介さを理解したベルは、眉をハの
字に下げて再び戦場へと視線を移した。

「……だが、俺の墓地の光属性モンスターが5種類になったことで、俺
は手札からこのカードを特殊召喚する」

「なっ!?!」

ユウの宣言に一瞬ヒヤリとしたフリンだが、僅かな条件の違いに胸を撫で下ろす。

先程墓地へ落ちたライトロードの代名詞……アレが来てしまえば元も子も無い。

「《ライトレイ・ディアボロス》を特殊召喚」

《ライトレイ・ディアボロス》

☆7 / 光属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 2800 / DEF 1000

期待はずれ、と言うには少々可哀想ではあるが、白と青の配色が美しい光の竜が姿を現した。逞しい両拳を見るに、ブレス攻撃よりも肉弾戦の方が向いていそうだ。

荒々しく雄叫びを上げて、光の転生竜が不死の竜帝をその眼に捉える。

「バトル。まずはディアボロスでデスカイザーを攻撃」

その外見通り、拳に光を纏ったディアボロスは両翼を羽ばたかせて肉薄すると、デスカイザーの胸元を抉り、軽々と打ち抜いて見せた。

フリン LP7000 ↓ 6600

「くっ……!!」

「続けてミカエルと……ウォルフで、ダイレクトアタック」

一瞬迷うような間を空けてから放たれるユウの宣言と同時。光騎士団の誇る精鋭2体が放つ剣戟と槍術が風を切ってフリンへ迫る。

「……おっ?」

一瞬呆気にとられたような顔をしたフリンだったが、どこか呆れたように苦笑を浮かべるとその大ダメージを一身に受け、大きく吹き飛んだ。

フリン LP6600 ↓ 1900

「痛っ……」

これで『条件』は整った、だが――。

ゆっくりと起き上がったフリンはズボンを叩きながら、ユウへと問い掛けた。

「……さーて。一応聞くけどよ、どういふつもりだ？」

「何のつもりも無い。このデュエル、お互い全力を出すんだろう」

ユウの目、というよりも意識のようなものが、ふとベンチへと向けられる。

その『目』は恐らく彼らには届かなかっただろうが、フリンの観察眼はそれを見抜いていた。

「お前の『全力』を受け切らなければ『師』として示しがつかない。だからだ」

果たして、その言葉は届いたのかどうか。

ベンチに座る面々にはそれぞれ表情が浮かんでいたが、口元を覆った褐色の少女だけはその表情が窺えなかった。

「成程、ね……なら遠慮なく打たせて貰うぜ、俺の全力をよ！」

「そのつもりだ。俺はこれでターンエンド。ミカエルの効果で、俺はデッキの上からカードを3枚墓地へ送る」

墓地へ送られていくカードに厄介なものが無いことを確認する。むしろ《死者蘇生》というパワーカードが落ちていったことに安堵しつつ、フリンはすっと思いを巡らせた。

（俺の期待に、奴は応えて見せやがった訳だ。なら次は——）

前のターン、フェリスをあえて墓地へと送ったのはある程度こうなること期待しつつのことだ。効果を使わずにフェリスを場に留めておけばここまで展開されることは無かったのに、だ。

それでもフェリスを墓地へ返したのは、《裁きの龍》降臨というユウの『全力』に期待を膨らませた上で、自分のLPを2000以下にするという条件をいち早くクリアする為。

しかしその意図は『このカード』を確認していたユウにも伝わっていた筈だ。ウォルフで攻撃をせず、1ターン跨いで攻撃を仕掛ければ『このカード』を出させずに完封できる可能性もあったのだから。

それでも尚ウォルフで攻撃を仕掛けたのは……ユウの後ろに続く『彼女』の為と、そして立ち塞がるフリンに対しての期待があったのだろう。しかし今のままでは、その期待に100%応えることは出来ない。

「俺のターン……」

頼む、俺のデッキ。最後の『鍵』を俺に引かせてくれ。

そんな願いを込めて、フリンはカードを引き抜いた。

「ドロー!!」

舞い込んだカードの枠は緑。

魔法カードであることに一瞬心臓が跳ね上がったものの、それが『鍵』では無かったことに落胆し——すぐさま、その落胆はある種の期待へと変わった。

「……へっ、あくまでフルパワーでいけ、つてか？ 俺は手札から魔法

カード《成金ゴブリン》を発動!! デッキからカードを1枚ドローし、相手のライフを1000回復させる!!」

ユウ LP7000↓8000

相手のライフを増やしてまでドローを行う、その意味。

デメリットでしかないその効果が敵を貫く槍となるその瞬間は、刹那の静寂を破って訪れた。

「——よし!!」

牙を剥いた獣のような満面の笑み。

それはフリンが見事『鍵』を引き当てたことの証明でもあった。

「このカードは自分のLPが2000以下の場合、手札から特殊召喚出来る……待たせたな、行ってこい相棒!!」

意気揚々とディスクへ叩き付けられたそのカードは、不気味な不死者の世界を震わせながら姿を現した。

「《荒漠の死者》を攻撃表示で特殊召喚!!」

《荒漠の死者》

☆5／闇属性／アンデット族・効果／ATK ?／DEF 0

腕だけが肥大化した、不恰な包帯巻きのミイラ男。

とてもフリンが全力を尽くした結果とは思えないその風貌とは相反し、放たれる不気味なオーラは確かに場を威圧していた。

「更に、荒漠の死者の特殊召喚成功時に速攻魔法《地獄の暴走召喚》発動!! このカードの発動トリガーは『相手フィールドに表側のモンスターがいること』『攻撃力1500以下のモンスターの特殊召喚成功

時』だが……特殊召喚成功時に攻撃力が？の茫漠は攻撃力を0として扱う!! よって効果が発動し——茫漠の死者をデッキ・手札・墓地から可能な限り特殊召喚する!!」

戦場を、客席さえも揺るがし。

地を割いて2体の《茫漠の死者》が姿を現した。

《茫漠の死者》

☆5／闇属性／アンデット族・効果／ATK ?／DEF 0

《茫漠の死者》

☆5／闇属性／アンデット族・効果／ATK ?／DEF 0

「そして!! 特殊召喚に成功した茫漠の攻撃力は、相手LPの半分の数値となる!!」

《茫漠の死者》

ATK ?↓4000

《茫漠の死者》

ATK ?↓4000

《茫漠の死者》

ATK ?↓4000

一瞬にして並び立つ、圧倒的な死の気配。人間とほぼ等身大だったその背丈は、いつの間にか見上げるほどに巨大な姿へと変貌していた。

静まり返るフィールドの中で、口元を覆うことすら忘れたベルがようやく捻り出せたのは絶望の声だった。

「こ、攻撃力……4000……?」

ソレが引き金となったかのように、圧倒的パワーの魅力にあてられた会場は熱気に包まれる。

『これは圧巻!! 圧巻です!! 一瞬の間に攻撃力4000のモンスターが3体も並んだー!!』

『流石です。持っていますね』

審判員達の実況を聞き届けると、それまでの緊張をほぐすようにフリンは長く息を吐き出してから言った。

「……さて、暴走召喚の効果はまだ残ってる。お前もフィールドのモ

ンスターを1体選んで、デツキ・手札・墓地から可能な限り特殊召喚出来るぜ?」

「特殊召喚可能なモンスターはウォルフだけだ。よって俺はウォルフを1体、守備表示で特殊召喚させて貰う」

膝を付いたままの姿勢で、2体目の獣戦士が戦場へと引きずり出される。

だが最早、そんな壁が1枚増えたところで押し寄せる4000の荒波の前では防波堤にもならない。

「行くぜ……バトル!! 攻撃力の低いウォルフから順に攻撃表示のモンスターへ攻撃!!」

「墓地に存在するネクロ・ガードナーの効果を発動。ディアボロスへの攻撃を無効にする」

鈍い風切り音を上げて、茫漠の死者の巨大な拳が断頭台の如く次々と振り下ろされていく。成す続べなく破壊されていく光騎士団のモンスター達だったが、唯一その惨劇の中で生き残ったのはネクロ・ガードナーの加護に守られたディアボロスだけだった。

ユウ LP8000↓4700

「へっ、そこまでは折込済みだぜ!? メイン2、俺は☆5の茫漠2体でオーバーレイ!!」

『何と、ここでフリン選手まさかのエクシーズ召喚っ!?』

攻撃力4000のモンスターが、紫の光球となって螺旋を描き天へと昇る。

それだけでも強力なモンスター2体を糧として生まれるモンスターのプレッシャーに、会場の空気が一気に引き込まれていく。

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚!!」

光の渦に光球が飛び込んだ刹那、巻き起こる大爆発。

その最中に、《61》の刻印が紅い輝きを伴って浮かび上がった。

「現れる、俺の隠し玉!! ★5 《N^{ナンバー}o.61 ヴォルカザウルス》!!」

溶岩を湧き上がらせる火山のような球体から一転。牙か角のような黄金の突起を体中に纏った紅蓮の恐竜へ姿を変え、爆誕の産声を上

げた。

《No. 61 ヴォルカザウルス》

★5 / 炎属性 / 恐竜族・エクシーズ・効果 / ATK 2500 / DEF 1000

『な……《No.》!! 《No.》です!! 世界にただ1枚の超強力カードがここでお披露目だぁ!!』

「ヴォルカザウルスの効果発動!! 相手フィールド上の表側モンスター1体を選択して破壊し、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与える!! 焼き尽くせ、『マグマックス!!』」

ヴォルカザウルスの両胸にある突起部分が開き、フリンの熱い咆哮をそのまま形にしたような紅蓮の炎がディアボロスへ向けて発射される。

白と青のコントラストは刹那の間に真っ赤に塗り潰され、爆風は当然のようにユウを巻き込み大ダメージを負わせた。

ユウ LP4700↓1900

『《No.》の強力な効果がユウ選手を直撃い!! ここで遂に両者のライフが並んだー!!』

「ユウ様あっ!?!」

流石のアリエルも《No.》の登場は予想外だったのか、悲鳴に近い声を上げた。

それに被せて白熱するコーパルの実況が示す通り、両者のライフはここへ来てピッタリと並んだ。

「俺はこれでターンエンドだ。この盤面、ひっくり返せるモンならひっくり返してみな!!」

と、威勢は張ったものの、裁きの龍を引かれてしまえば最早それまで。成す術は無い。

全ては次のドロウ次第。ユウが全力を出し切れるか否かにある。

「俺のターン……ドロウ」

それでも至って普段通り。この男には感情が無いのかと疑ってしまふほどに、ユウは淡々とカードを引き抜き、それに目を落とした。

(……どうだ? 引いたのか?)

表情の窺えないユウからは情報を読み取れない。

ベンチへ目を移すと——あろうことか先程は褐色の少女を宥めていた『幽霊姫』が「おいたわしや」とばかりに泣きそうな表情を浮かべている。褐色の少女の目もどこか残念そうに下がっている。この反応、少なくとも裁きでは無い。だが——。

「——悪いが、これで道は開けた」

ユウの口から放たれたのは、勝利宣言だった。

「……何？」

「まずは、手札から『オネスト』を召喚」

『オネスト』

☆4 / 光属性 / 天使族・効果 / ATK 1100 / DEF 1900

メンタルドレインの影響下で効果を発動出来ずにいた強力なカウンターカードが、何と戦場に降り立ったのだ。

ARとしてその凛々しい姿を立体的に出現させることは、彼の知名度に反してそうそう無いことだ。

「俺は☆4のオネストとウオルフでオーバーレイ。2体の光属性モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

残された最後の希望、それを紡ぐように螺旋の軌跡を描いて光球が飛翔する。

やがてその遺志を受け継いだ白銀の剣士が、爆燐を切り裂いて降臨した。

「エクシーズ召喚、★4『パラディオス』」

『輝光子パラディオス』

★4 / 光属性 / 戦士族・エクシーズ・効果 / ATK 2000 / DEF 1000

『ここでユウ選手、同じくエクシーズ召喚で対抗していく!!』

「パラディオスの効果を発動。相手フィールドの表側モンスター1体を選択し、そのモンスターの攻撃力を0にしてその効果を無効にする。選択するのはヴォルカザウルスだ」

この効果が通れば、残りライフ1900のフリンはパラディオスの

攻撃を受けて確かに敗北する。だが――。

「おいおい、忘れたかよ?! 墓地の《スキル・プリズナー》の効果が発動、墓地のこのカードを除外してヴォルカザウルスを選択、ヴォルカを対象としたパラディオスの効果を無効にする!!」

再び現れる鎖のエフェクト。今度はヴォルカザウルスの身体に巻きつき、パラディオスの放った光の剣戟を霧散させてしまった。

「へっ……突破、って言うには早計だったんじゃないか?」

「それはどうだろうな……俺は装備魔法《自律行動ユニット》を発動する」

ユウ LP1900↓400

「え……?」

漏れ出たのはベルの声だった。

かつて汎用蘇生カードである《死者蘇生》が無かったとき、ベルのデッキに代わりとして投入されていたこともあるカードだったからだ。

(センサー、また妙なカード入れやがったんだな?)

毎度ながら一筋縄ではないユウの「ライトロード」に、クラウドは思わずニヤリと口元を歪めた。カードが墓地へ送られる機会の多い「ライトロード」に余計な魔法や罠カードはあまり採用されない傾向があるが、どんなデッキが相手になるか分からないこの大会でユウなりに導き出した解答……ということなのだろう。

その結果が今、形を成して勝利への道を切り開いたのだ。

「1500のライフを支払い発動。相手の墓地のモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。俺が選択するのは《デスクライザー・ドラゴン》」

ユウのフィールドに不死の竜帝が降り立つ。

それから先は、ほんの数ターン前の再現。

「デスクライザーの効果を発動。このカードの『特殊召喚』成功時に『相手の墓地の』アンデット族モンスター1体を表側攻撃表示で特殊召喚する……《ゾンビキヤリア》を特殊召喚」

カチリ、カチリと。勝利へ至る道しるべがパズルのように完成して

いく。

「☆6のデスカイザー・ドラゴンに、☆2チューナーのゾンビキャリアをチューニング」

自らもよく口にするその口上を耳に受けながら、フリンは何ともいえない複雑な感情を抱いていた。

裁きの龍による破壊を恐れ『温存』していた自らの遺産が、そっくりそのまま敵に寝返り牙を剥いたのだ。

僅かに『全力』を出し切れていなかった自分を攻め立てるように、2つの緑輪を潜り抜け竜帝が別の姿へ変質していく。

「……文明の残照、今一度空を駆けその牙を打ち立てろ。シンクロ召喚」

ライフも手札も、フィールドさえも枯渇した戦場。

そこから奇跡の如く捻り出されたこの状況に相応しい、廃棄物で構成された巨竜が降り立った。

「結集せよ。☆8、《スクラップ・ドラゴン》」

《スクラップ・ドラゴン》

☆8 / 地属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 2800 / DEF 2000

『な……なんとということでしょう!! 今度はユウ選手が相手のモンスターをそのまま利用し、あつと言う間にシンクロモンスターを作り上げてしまったあく!!』

『流石です。持っていますね』

僅かなカード達から並び立った白黒のモンスターに、会場の熱気は更に膨れ上がっていく。

「スクラップ・ドラゴンの効果を発動。自分と相手のカードをそれぞれ1枚ずつ選択し、破壊する。選択するのはパラディオスと茫漠の死者だ」

スキル・プリズナーはヴォルカザウルスを対象としているため、茫漠の死者の破壊までは防げない。パラディオスの召喚は本命であり
囀——つまり、二段構えの破壊戦略。

鉄屑同士が潰れあうような金切り声を上げながら、群青色の巨竜は

無差別に廃棄物の隕石を戦場へと振り落としていく。あれだけ絶望的にそびえていた攻撃力4000の荒漠もこれにはあっけなく破壊されてしまい、低い断末魔を上げて墓地へと沈んでいった。

その片隅で巻き沿いを喰らった形のパラディオスも、ただ黙して己の運命を受け入れていた。

「バトル。スクラップ・ドラゴンでヴォルカザウルスを攻撃」

続けざまに空中からの強襲を仕掛け、その巨体が《No.》を圧殺する。

フリン LP1900↓1600

「……俺はこれで、ターンエンドだ」

お互いに手札はゼロ。墓地で利用可能なものといえば、せいぜいゾンビキャリアの自己再生程度。

「ぐくりと息を呑んだのは、果たして誰だったのか。

「さて、俺のターンか……」

深呼吸を1つして、フリンはデッキトップへと手を掛ける。

闘志の炎は消えないままに、カードを抜き取って。

「最後まで諦めないぜ……ドロー!!」

一筋の軌跡を描いたそれに目を落とすと。

フリンの両肩からはフツと力が抜けたのだった。

「……悪い。俺の負けだ」

ドロートしたカードである《メンタルドレイン》を見せてから、フリンはデッキにそっと手を置く。それはここまで頑張ってくれたカード達を労う様な、彼には似合わない優しい仕草だった。

フリン LPO (SURRENDER)

第19話 レッツ・アクション!! 犬猿のタツグデュエル!?

見事な接戦へと送られた拍手喝采に見送られ、ユウがコートを降りてくる。

階段の一段一段をしつかりとした足取りで踏みしめるその無表情は、心なしか穏やかに見えた。

「ユウ様あく♪ お見事でしたわあく♪」

興奮を抑えきれず、ベンチを立ってぶんぶんと手を振るアンリエールのすぐ横で、ベルは小さく安堵の息をついた。

（……心配なんて、いらなかったみたい）

この大会で勝ち上がることはヒヨリへと繋がる唯一の道。ユウが先発を申し出たときには勝ち急いでいるように思えたが、今の試合を見た限りそのような様子も無く、むしろ相手選手と共にデュエルそのものを楽しんでいたように感じた。『師』の名に恥じぬよう、その大きな背中をしつかり示しながら。

「……おかえりなさい、とっても良いデュエルでした!」

精神的な面でもその力量を見せ付けられたベルは、笑顔を作ってベンチへ戻ってきたユウを迎えた。

「……ああ」

ちらりと返されたその瞳には「心配するな」とでも言わんばかりの微笑が浮かんでいた。口数の少なさはいつものことだが、それは後に出番を控える弟子へ叱咤激励する意図もあったのだろう。

「やったなセンサー! ナイス1勝だ!」

「お疲れ様、良いデュエルだったわ」

「……何とかな。彼らも相当、腕が立つ決闘者のようだ」

続いて右腕を上げるクラドと藍に、ユウも右手を上げて応えた。

力強く乾いた音が鳴り止まない拍手の中で木霊する。

僅かばかりに疲れを見せるユウがすつと着席すると——黒いドレスを翻した姫君が素早く傍に仕えた。

「ユウ様、お飲み物をお持ちしましたわ」

「あ、ああ……ありがとうございます」

いつもながら何ともちぐはぐな状況に、さすがのポーカークフェイスも思わずたじろぐ。

とはいえアンリエールの気遣いを無駄にする訳にもいかず、スポーツドリンクが入ったストロー付きの容器を手にとるとユウは素直に口をつけた。

「さて、早速だが作戦会議といこうぜ？　試合中、ちよいと奴さんの旅団IDを覗かせて貰ったんだが……ダメだな。参考にならねえ」

クラドが一同に向けたのは万能端末Dパッド。そこには先程ユウと対戦した決闘者、フリンの旅団IDが表示されていた。

旅団IDには『登録された旅団を組合ギルドが安全に管理する為』という建前で個人の決闘者レベルや使用デッキなどが表記されているが、それはあくまで『自己申請制』であり、何を隠そうこの『にじいろ団』とて組合への申請時に『ズル』をしてデータを偽っていたりするのだ。勿論この大会に向けての情報かく乱が目的であったが、どの旅団も考えていたことは同じだったらしい。

「使用デッキは【除外帝】、決闘者レベルはD……すがすがしいまでに嘘だらけね。他のメンバーのIDも見つかったけど、役に立ちそうもないわね」

ふう、と悩ましげに溜め息をついて、藍もDパッドを仕舞いこむ。恐らくはこれから先の試合でもアテになることは無いだろう。

「だが……俺らの方はそうとも言えないんだよなあ」

この情報戦において【にじいろ団】が抱える弱点。それは――。
「？　なんですの？　ジロジロと妙な目を向けないで下さいまし」

一同の注目がとある一人に集まる。

どこからか取り出した派手な団扇でそよそよとユウを扇ぐその人、野生の有名人有名である。

ラムジョレーンの幽霊姫。その名声が示すは【ゴーストリック】のデッキそのもの。実力こそメンバーの中ではユウに告ぐ強者であるが、それ故に最も警戒されやすい。イコール対策も立てられやすいと

いうことだ。

プロとしてそういった死線を潜り抜けてきた彼女の实力を持つてしても、圧倒的不利な状況を作られては敗北の可能性を0にすることなど出来ない。

彼女をどう動かすか。それがブレーン・クラドを悩ませる一因でもあるのだ。

「次の試合は私と藍で華霊に勝利を飾る予定でしたでしょう？　今更悩む理由がありませんか？」

「それがあるんだよ。奴さんらはどうにも『メタ』の色が強い。自分達の苦手とするものは何か、警戒するべきは何かをしっかりと把握してらみてーだしな」

パワーカードである《茫漠の死者》を操ったフリンのデッキには、力押しになりがちなその効果に反して『相棒』が苦手とするカードへの対策がしっかりと練られていた。好戦的な男だったが、その足元は転ばないようにしっかりと清掃されていたと言う訳だ。

そんな男が所属している決闘旅団ならば、アンリエールへの対抗策も用意してあるに違いない。

「……で、次の試合はタッグな訳だ」

極めて真剣な表情で、クラドが重い口を開く。

特殊ルールこそランダムに決定されるが、各試合はシングル→タッグ→シングルの順で行われる。既に試合を終えた選手でなければ、登録したメンバー内での出場順は順次入れ替えが可能だ。それはこの2戦目、タッグデュエルから重要な意味を持つてくる。

「奴さんももう後がない、ここで確実に勝ちに来るはずだ」

仮にAとB旅団が試合を行い、A旅団が1戦目で敗北したとすれば、A旅団が精鋭を差し向けてくることは容易に予想出来る。

対して1戦目を勝利したB旅団は、そういった理由から難度の高いタッグ戦を放棄し、3戦目のシングルに賭けるという手段を取る事も出来る訳だ。

しかし、デュエルとは99%の知性が勝敗を決するモノ。そう簡単に事が運ぶ訳が無い。相手の戦略を読み、対策を練るのは何もフィー

ルドの上だけではないのだ。

その証拠に、こうした作戦会議の時間として10分ほどのインターバルが設けられている。観客を飽きさせないための余興なのか、フィールドではコーパルとネフがバーチャル故に『タネも仕掛けもある』どうしようもない手品を披露していた。

会場の和気藹々とした空気の中で、クラドは尚も続ける。

「タッグには必ず、お嬢への対策を盛り込んだ相手を選んでくる。タッグだけじゃない、多分3戦目の相手にもだ。そうなりや不利になるのはどうしてもタッグになる。1人を確実に潰されるなら実質2対1になっちまうからな」

だからこそ、とクラドは続ける。

彼が口にした結論は、予選第1試合で飛び出すにはあまりに早い台詞であった。

「……だから悪いが、正直なところ今の組み合わせじゃ次のタッグ戦で勝機は無いと思ってる」

「なっ!?!」

そんな発言に度肝を抜かれ、思わぬ侮辱に顔を染めたのは他でもないアンリエールだ。

「……ほおお、私では力不足と？ 随分と舐められたものですわねえ？」

「別にお嬢が弱いとかそういうコトじゃねーんだよ、これはもうジャンケンみてーなモンなんだって」

口元をヒクつかせて詰め寄るアンリエールに、クラドも頑として意見を叩き付ける。

「その為のタッグパートナーでしょう、何の世迷いを言っていますの!?!」

「クラド君、私だってフォローは出来るし——」

苛立つアンリエールを気に掛けてか、藍が助け舟を出すもソレを制止したのは意外な人物だった。

「……集中狙いはタッグの基本だ。それが分からない訳ではないだろう?。」

集中狙い。今この場でのニュアンスは強弱の『弱』に照準を合わせ
て攻める、という意味が最も近い。恋い慕う相手からそんな言葉を掛
けられ、アンリエールは愕然とした表情でオヨヨと震える声を搾り出
した。

「そんな……ユウ様までそんなことを!?!」

「……ちよつと落ち着いたかお嬢? 続けるぜ」

務めて落ち着いた声で言い聞かせてから、クラドは言葉を続けた。
「けどな、奴さんだつて多分その辺は考えてる。タツグ戦でお嬢を外
すつていうこつちの心理を読んで、本命の『お嬢メタ』は恐らく3戦
目だ。タイマンで闘り合えばまず勝ち目は無いレベルまで特化した
ヤツをぶつけて刈り取ろう、つて訳だ。だが仮にお嬢を2戦目に出し
ても、万が一敗北なんてコトになれば……そいつと対面するのはメイ
ドちゃんか俺。それつてなーんか危なくねえか?」

そこまでを聴き終えて、ベルはごくりと息を呑んだ。

口元に手を当てていた藍がそれを合図に意見を述べる。

「それじゃあ、アンリちゃんか八方塞つてことかしら? デツキの交
換は不正になるし……それともクラド君が出る?」

旅団IDに登録したデツキとは違い、大会運営側に登録したデツキ
はその大会中に変更することは出来ない。調整用のサイドデツキ間
でのカード入れ替えこそ認められているものの、デツキを丸ごと交換
するなどもつてのほかだ、そのような不正があれば間違いなくコーパ
ルの注射攻撃が飛ぶだろう。

「いやいや、俺はあくまで埋め合わせだつて言っただろ? だが……
奴さんの思惑通りに動くのも何か癪だしな? 言っただろ、ジャンケ
ンみてーなモンだつて」

クラドは口をニイツと歪め、くるりと顔を後ろへ反転させて言っ
た。

『ではでは、おまちかねの予選は第3試合【にじいろ団】VS【AK

ATUKI』、その第2戦目を開始しますよ〜♪』

人体切断マジックで上半身と下半身を分割した状態のまま、コーパルはマイクを手に試合開始の宣言を放った。その異様な光景に会場の子供が数人泣き出ししていたが。

「ああ……始まってしまいましたわ。こんな最悪な気分ですごい舞台上に立つ日が来ようとは……」

コートに立つのは勿論、にじいろ団の誇る実力者こと幽霊姫ラムジヨレーン。

そして、その隣に立つのは。

「お客さんはジャガイモ、お客さんはジャガイモ、お客さんはジャガイモ……」

大舞台上で緊張しっぱなしの褐色メイド、ベルだった。

「ああもう!! イモイモうるさいですわこの芋メイド!! この程度の舞台上で狼狽するんじゃないやありません!!」

「ヒステリー起こさないで下さいよ……ああ!? お客さんが元の間人に!? また最初からやり直さなきゃいけないじゃないですか!?!」

何の狙いがあったのか。ユウに辛辣な言葉を投げられ機嫌最悪の幽霊姫と、大舞台上に立ったことなど無い田舎者のメイドが急遽タッグを組んだのだった。

「……はあ、よりもよって貴女がパートナーだなんて。きつとチームの為に負けて来いということなのですわね……」

「最初から負けるつもりでないで下さいよ。こっちの気持ちまで下がっちゃいます」

「貴女じゃいくら気持ちも昂ぶらせても蒸し芋くらいしか仕上がりにせんわよ……」

「へえ、じゃあアンリさんはきつと素敵なシチューにでもなるんでしょうねー。魔女が作った薄気味悪いーい感じの」

「……ほおお、どういう意味ですの?」

「やあ〜」

まるで電池メンをフィールドに並べたときのような激しい火花を撒き散らし、両者はしばらく睨み合った後「ふんっ」と鼻を鳴らして

互いに顔を背けた。

「俺……やっぱ采配間違えたかな？」

「大丈夫よクラド君。私が次で何とかするから……」

顔を抑えて俯くクラドの背中を、藍は優しくポンと叩いてあげた。

ユウはいえば、アンリから貰ったスポーツドリンクをまだちびちびと吸っている。

「……何よアレ。息を合わせる以前の問題じゃない」

そんな彼らの様子を、「AKATUKI」からの出場選手である双子の姉妹が怪訝な顔を浮かべて観察していた。率直な意見を零したのは、姉であるリリンだ。

歳はおおよそ16〜7程だろうか。目鼻立ちの整った顔つきでスレンダーな体型、艶のある黒髪のスインテールが可愛らしい。

「リーダーの読み通り、2戦目はやっぱり『捨て』に来たんでしょうか……？」

どこか不安そうなのは妹のサラ。顔つきこそ良く似ているが、こちらはふわりとした長い黒髪はストレートに流れている。姉と比べると主に胸の辺りがふくよかだ。

「ま、アッチが幽霊姫を使い捨てる気ならそれに越したことは無いわ。予定通り私達のコンビネーションで叩き潰してやるだけよ！」

リリンが向ける好戦的な眼差しに気付く様子も無く、ツーンと顔を尖らせたままの姫メイドペアは本当に渋々といった様子でコートの上位置へと立った。

『それでは！ ルール決定のアルティメットルーレットといきましょう！』

コーパルが1枚のカードをかざすと、地響きを立てて金色の機械族モンスターが彼女の背後へと出現した。

《スロットマシンAM-7》

☆7 / 闇属性 / 機械族 / ATK 2000 / DEF 2300

腹部が文字通り『スロット』であるそのモンスターが腕をガシャンと振り下ろすと、ガラガラと大きな音を立ててスロットが起動し始めた。

最早『ルーレット』ですらないのでは、という視線のツツコミをたっぷり浴びるコーパルの右腕には、いつの間にか立派なデュエルディスクが装着されている。

『選手さん達の命運が今、私のドロローに委ねられた……!』
いつものニコニコ笑顔はどこへやら。

やけに真剣な表情を浮かべたコーパルはスツと目を瞑った。

『まずは1枚目、ドロロー!』

デッキから引き抜かれたカードには『A』の文字がただひとつ。

その結果が反映されるのか、スロットの左側がストツプし『A』の文字が浮かび上がった。

『続けて2枚目、ドロロー!』

光の軌跡を描き、引き抜かれたカードにはまたしても『A』の文字。

右側のスロットに結果が反映されると、マシーンからけたたましく

『リーチ!! リーチ!!』と機械音声が発せられる。

『次のドロローでもし、『A』のカードが引けなければ……選手さん達は「ルール不確定」というカオス空間でのデュエルを余儀なくされてしまう……!!』

「ええええええ!」

「嘘でしょ!? 冗談じゃ無いわよ!」

コーパルのやけに真剣なトーンが災いしたのか、両陣営から驚愕と野次の声が飛ぶ。

そんな批判も何のその。三度デッキに手を掛けたコーパルであったが、ふとその動きが止まる。

『……はっ!? カードが、遠ざかっていく……!!』

それは、決して心理的な意味ではなかった。

実際にディスクを付けたコーパルの左腕が、ポトリと地に落ちたのだ。

瞬間、何ともいえない悲鳴が会場のあちこちから巻き起こった。

『いや違う、私が怯えているんだ! カードを引くことに!』

「違わなく無いし、怯えているのは私達の方よ!」

声を大にしてツツコミを入れるリリンだったが、至って真面目なこ

の茶番は続く。

『姉さん、さっきのマジックの後遺症で……ここは私が!』

ネフがおもむろにリストバンドからカードを取り出すと、片腕を失ったコーパルへ向かって投げ渡した。鋭く風を切って飛ぶカードは見事、コーパルの手中に収まる。

『!! ネフちゃん、このカードは!』

やけに凛々しい顔で頷くネフに、コーパルが満面の笑みを浮かべる。

得意げに見せるそのカードには、やはりというべきか『A』の文字。

『3枚目のカードは……ルールカード《アクションデュエル》!』

「ちよつと!? それイカサマじゃないの!? 仮にも審判でしょ 안타ら!」

『それは違うぜリリン選手、私は希望を手にしたんだ! そして今、3枚のカードが全て揃った!』

スロットマシーンから色とりどりの賑やかなサウンドが噴き出したかと思うと、それを具現化したかのようなカラフルなお菓子がコート内へと降り注ぐ。

『アクションフィールド、《スウィーツ・アイランド》発動!!』

コーパルとネフが声を合わせて宣言したのは、遙か遠い黒ブラックの地で人氣を誇るデュエルの進化系、その根幹を担うカードだ。

まるで御伽話の世界に迷い込んだかのような、お菓子で出来た甘々な世界が瞬く間に広がっていく。通常のARとは違う、ルール効果を備えたフィールドが展開された。

「へえ……最悪の気分でしたけれど、舞台が私の庭とあれば惨めに負ける訳にはいきませんわねえ?」

クスクス、と不敵な笑みを浮かべたのは無論アンリエールだ。その様子からは先程までの苛立ちがすっかり抜け切っていた。

「これが……アクションフィールド?」

楽しい光景に目を輝かせたいのは山々なベルだったが、何せアクションデュエルは初挑戦だ。ごくりと緊張の息を呑んで、しっかりと気持ちを引き締める。

「よつしや、アクションデューエルならお嬢の十八番だ！ 女神サマはこつちに微笑んでくれたみてーだ！」

「ええ、これならメタを張られても突破できるかも……！」

歡喜に沸く【にじいろ団】サイドとは打って変わり、【AKATUK I】サイドでは重苦しい空気が流れる。

「鬼に金棒つてワケ……？ 冗談じゃないっての！」

「姉さん、落ち着いて下さい。私たちの作戦を信じましょう！」

妹サラのフォローに助けられ、不運に苛立つリリンが少しばかり落ち着きを取り戻したところで、バックのベンチから呑気な男の声が投げかけられた。

「気にすんな凹凸ツインズー！ 気張っていけよー！」

試合を終えて気が楽になったのか、酒を片手に完全に観戦モードとなったフリんだ。

「アイツ……!! 自分の出番は終わったからって呑気にい!!」

「姉さん！ 『アイツ』じゃなくて『リーダー』ですよ！ どうぞうー！ 拳を握り締め今にも殴りにいかんとするリリンを必死に宥めるサラ。

折角落ち着きそうだったのにと、気苦労の絶えない妹は疲労困憊といった様子で溜め息をついた。これではどちらが姉か分からない。

『それでは「いつもの」いつてみましょう！ 選手の皆さん、準備は良いですか？』

ほんとコーパルが手を打つと、会場がにわかには静まり返った。

「え？」

いつもの、とは何なのか。

きよとんとベルが首を傾げていると、ソレは突然に始まりを告げた。

「戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が!!」

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い……」

くるくると回りながら互いに声を上げていく、リリンとサラの双子姉妹。

スポットライトとカメラは全て彼女達に向けられ、大小様々なモニ

ターに映し出されている。

そのしなやかな指先がどうぞとばかりにベルに向けられると、スポットライトとカメラは一斉にベルへと集中する。

「……………え？ え？」

「コホン！ フィールド内を駆け巡る！ 見よ、これぞデュエルの最強進化系！」

突然の出来事にうろたえるベルをぐいっと後ろに引っ張り込み、入れ替わるようにして前へ出たアンリエールが一瞬で表情を取り繕う。

『『アクション……………』』

慣れた様子で残りの口上を請け負ったアンリエールに続き、すっかり腕も元通りになったコーパルとネフが高く腕を掲げると、タイミン
グばつちにパチンと両者の指が鳴った。

すると、天高く渦を巻くように浮遊していた無数のカードが弾け飛び、アクションフィールドの至る所へ飛び散っていく。

「!!」

それが合図となつて、アクションデュエルは遂に幕を開けた。

「でゆ、でゆえっ…………」

ちなみにベルは結局最後までついていけず、ぽかんと口を開けたままフィールドで棒立ちしていたのだった。

【ベル&アンリエール】LP8000 VS 【リリン&サラ】LP8000

第20話 宝石剣と魔蟲の罫

『ここで、本大会で採用されるアクションデュエル、及びタッグデュエルのルールについておさらいです』

ネフが隣に図解を表示させながら、開始前に観客向けの説明を始める。

どうやら予選では初のアクションデュエル適用だったらしい。

『アクションデュエルは、その地方や大会ごとに設定されるルールのオプションが異なる場合が多い、所轄「ローカルルール」が存在する競技形態であるため、本大会では「悠久の黒^{ヒストリア・ソワール}」で用いられている設定を用いることをご了承下さい』

ぺこり、と静かに頭を下げるネフとコーパル。大人しくしていると流石は双子型、どちらがどちらか見分けが付かない。

『まず第1に、今大会の「アクションカード」は魔法カードでありながら、相手のターンでも手札から発動出来る「スペルスピード2」の特異なカードとして扱います。ただし各効果の発動タイミング等については通常の魔法・罫と同様とします。使用されたアクションカードは、使用したプレイヤーの墓地へと送られます』

最近になつてようやく覚えた『ダメージステップ』等の用語が、ベルの脳裏を過ぎる。

『第2に、「手札・場に加えられるアクションカードは1プレイヤーにつき合計1枚まで」。今回はタッグデュエルですので、自分とパートナーを合わせて手札と場に存在出来るアクションカードは合計2枚までとなります』

ネフの解説板に、アクションカードを大量に伏せてから一度に発動する黒づくめの男がパトランプ頭の男に取り押さえられる、というアニメーションが流れた。

極端な例ではあるが、こういったルールが設けられた理由が良く分かる。

『最後に、「アクションカードのドローについて」。アクションカード

のドロローは1ターンに1度、メインフェイズ1に自分フィールドのモンスター1体を選択し、そのモンスターと共にフィールド内に隠されたアクションカードを見つけて下さい。制限時間は3分間。その間にアクションカードを見つけて出た出来なかった、もしくは選択したモンスターが破壊されるかプレイヤーにダメージが通った場合には、アクションカードのドロローは「失敗」となります』

この辺りにローカルルールが多いのか、アンリエールも僅かに耳を傾ける。

『次にタッグデュエルについてですが、こちらもローカルルールが多く存在するようで、ここまでも多数トラブルが起りましたため、試合前に逐一説明をさせて頂きます』

ネフの口調から、僅かにうんざりしたような陰鬱な空気が受け取れた。

決闘者同士のいざこざを『ルールの名の下に』まとめるのも審判の役目なのだろう。

『フィールドと墓地は共有、手札・エクストラデッキは非共有と致します。ターンの流れについてですが、仮に先攻チームをA・B選手、後攻チームをC・D選手としました場合、以下ようになります』

- ① 攻撃プレイヤーA、防御プレイヤーD（最後攻プレイヤー）
- ② 攻撃プレイヤーC、防御プレイヤーA
- ③ 攻撃プレイヤーB、防御プレイヤーC
- ④ 攻撃プレイヤーD、攻撃プレイヤーB

解説板に映し出された図を見せつつ、ネフが言葉を続ける。

『先攻①の攻撃プレイヤーは通常通り攻撃宣言が出来ませんが、②以降の攻撃プレイヤーからは攻撃宣言が可能となります。また手札発動のカードを使用したり、場の伏せカードを発動出来るのはそのターン中の攻撃・防御プレイヤーのみです。例を挙げれば、①の先攻ターンでA選手のモンスター効果に対してC選手の《エフェクト・ヴェーラー》は発動出来ないといった具合です』

またも黒ずくめの男とパトランプ男のアニメーションが流れたが、黒ずくめの不正に対してパトランプ男は何と腹部を殴るという制裁

を加えていた。「痛そう……」と悲痛な目で呟いたのはベルだ。

『同様に「手札に戻る」「デッキへ戻る」効果もそのターン中のプレイヤーにのみ適用されます。先の例で上げれば、A選手の展開したモンスターがB選手の攻撃ターンでバウンスされたとしても、戻るのはA選手の手札ではなくB選手の手札という訳です』

このルールについて不利になる点は、リクルーターを多用するベルにはすぐ分かった。

アンリエールのターンで自分のリクルーターが破壊されてしまえば、その効果を生かすことは出来ない……不利な状況に思わず歯噛みしながらも、その表情を悟られまいと必死に顔を引き締めて見せた。今でこそ酒に舌鼓を打っているが、フリンのその鋭い観察眼はしっかりと自分達へと向けられているのだから。

『最後に、LPはハーフであれば4000×2の8000。フルであれば8000×2の16000としてタッグ共有となります。説明は以上となります、お付き合いを頂きまして、ありがとうございます』

審判員姉妹はそう言って一礼すると、すごすごと解説席へと引き下がっていった。

先攻・後攻は既にダイスによって決められており、まずはサラからのターンだ。

「それでは改めまして、サラといいます。今日はよろしくお願ひしますね？」

ペこり、と頭を下げたサラの大きな胸がたゆんと揺れる。

退屈な解説に飽きていたの男達は皆、揃って黄色い歓声を上げた。

『おっとサラ選手！ これはイキナリ過激なパフォーマンスだあく！』

『流石です。持っていますね』

「えっ？ いえ私、そんなつもりじゃ……！」

かーっと頬を染めるサラを見て、何か思うところがあつたベルはうんうんと頷いてぽつりと呟く。

「……分かりますサラさん。揺れるもんは揺れるんです」

「何を共感してますの？ 人のフリ見て我が振り直せ。貴女もそのみつともない脂肪をどうにかする努力を心がけて下さいまし」

「だから！ これは減らそうと思つて減るもんじゃないんです！」

「またも始まった電池メンの如き火花の散らし合い。」

やはり何かを間違えたかと思わず頭を抱えるクラドだったが……ふと、隣を見ると藍がゴソゴソと何かを取り出すのが見えた。

「……姉ちゃん、何してんだ？」

「耳栓を付けたの」

猫の顔がついた可愛らしい耳栓。防音効果はバツチリと評判だが、その装飾からか男性からはあまり評判はよろしくない代物だ。それでも防音性の高さから作業用に購入するデスクワーカーも多いとのことだが……今はデュエルの真つ最中である。

「……えつと、何でそんなモンを今付けたんだ？」

「耳に毒つて言葉があるでしょう？」

目に毒、なら聞いたことあるんだけどなあ。

そう思つたクラドであつたが、そんな疑問を口にする前にふと気になつたことがあつた。

「……あのさ姉ちゃん、何で俺の話が聞こえるんだ？」

「私ね、読唇術が使えるの」

そう答えた藍の目は、クラドの口からフィールドに立つベル達ではなくデュエルの進行のみを示す大モニターへと向けられた。

そつか、とクラドは優しく微笑むと、視線をフィールドへと戻したのだった。

「わたしだつて好きでこんなに大きくなつた訳じゃ……！」

「へえ……それはそれは羨ましい限りねえ、お嬢さん？」

ベンチで人知れず起きていた悲劇など知る良しも無く、口論を繰り広げるベルとアンリエール。だがそこへ、思いもよらぬ乱入者が割り込んできた。

ダイヤの如く鋭い光を放つ、エメラルドグリーン瞳の瞳。

腰に手を当ててニツコリと微笑む、スレンダーな姉のリリンだ。

「へ!? ああ、えつと……すいません……」

「? 貴女も随分変わった人ですね。その慎みある身で、こんな余計なモノを欲しがるなんて」

「っ!」

慎みある身のリリンは、堂々としたアンリエールの言葉にガンツとシヨックを受けて俯いてしまった。かと思うと、わなわなと肩を震わせておぞましい声を沸き上がらせる。

「ふ、ふふふ……いいわ。幽霊姫だかなんだか知らないけど、この私に喧嘩を売ったことを死ぬほど後悔させてあげる……!」

「喧嘩? 何を言ってますの?」

本人としては何ひとつとして侮辱したつもりなど無いのだろう、恐らくは褒めた部類だ。

アンリエールは本当に不思議そうに首を傾げたが、それがかえってリリンの怒りに油を注ぐ結果となってしまった。

「……サラッ! あんなガキンチョ共、さっさと片付けるわよ!」

「は、はいっっ! わ、私のターン!」

その形相はまるで子供向けアニメに出てくる敵の女幹部。恨みつらみをはらんだドスの利いた声でリリンが吼える。姉の怒りに触れてぴよんと飛び上がったサラが先攻1ターン目を開始した。

「私はカードを2枚、モンスターを1体伏せてターンエンドです!」

サラの奥手そうな印象をそのまま体现したかのようなガチガチの防御布陣が敷かれる。

続く後攻攻撃プレイヤーであるベルはその光景に思わず顔を引き攣らせたが、1ターン目から逃げ出すわけにもいかない。

「わたしのターン、ドロー!」

初期手札はお世辞とも好調とは言えなかったが、後攻だったおかげで手札に良いカードが舞い込んできた。

「スタンバイからメイン、わたしは……手札から魔法カード《増援》を発動! デッキから《マジック・ストライカー》を手札に加え、その効果で墓地の《増援》を除外して特殊召喚します!」

《マジック・ストライカー》

☆3 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 600 / DEF 200

墓地のコストを払っての特殊召喚。

後に続く強力なモンスターへの布石であろうことは明白だ。

「更に手札からチューナーモンスター《ジュツテ・ナイト》を通常召喚
！」

《ジュツテ・ナイト》

☆2 / 地属性 / 戦士族・チューナー・効果 / ATK 700 / DEF 900

まずはカードの発動が無いことを確認。

ひとまずそこで息をついて、ベルは宣言を続けた。

「それなら……☆3のマジック・ストライカーに、☆2のジュツテ・ナイトをチューニング！」

「なっ!? お馬鹿っ!!」

アンリエールの鬼気迫る声にびくり、と肩を上げたベルだったが、1度宣言された『シンクロ召喚』は止まらない。

ジュツテ・ナイトの作り出した光の輪をマジック・ストライカーが潜り抜け、その身体を変質させていく。

「どうして先に『アクションカードをドローしなかった』のです!?」
「え……?」

ベルはすっかり失念していた。

これが通常のデュエルではなく、特殊なルールを用いた見知らぬ戦場であることを。

郷に入っては郷に従え。ルールが変わればそこに新たな『定石』が生まれるということ。

「と、とにかくシンクロ召喚!」
アーリー・オブ・ジャスティス
《A・O・J カタストル》

☆5 / 闇属性 / 機械族・効果 / ATK 2200 / DEF 1200

光を割いて現れる殲滅の機械兵。

しかしここで、サラのか細い声が張り上げられた。

「させません! 罫カード発動、《奈落の落とし穴》! 召喚、特殊召喚された攻撃力1500以上の相手モンスターを破壊しゲームから

除外します！」

出現したばかりのカタストルは突如として出現した落とし穴へと落下し、呆気なく破壊されてしまった。

『ああつとおお!? せつかくのシンクロモンスターがあつさりと退場だ〜!!』

『残念。ボツシユートですね』

「う……………やっぱり奈落が」

「ごめんなさい。私達もこれ以上、負ける訳にはいかないのです……………」

正直、召喚反応罫カードには良い思い出が無いベル。それでも「あれだけ伏せがあればそれ位は」と覚悟は出来ていたものの、隣で長い溜め息を付くアンリエールがどうにも鼻についた……………のだが。

「……………で？ 貴女このターン、どうやってアクションカードをドロ―するつもりですか？」

鋭いアンリエールの指摘に、ぴしっと心に罅が入ったのが分かる。

アクションカードは、いわば無償でカードアドバンテージを＋１出来る破格のボーナスだ。相手に妨害される危険があるとはいえ、やらない手は無い。

しかし、ベルにはもうこのターンでモンスターを展開できるカードは残されていない。奈落の落とし穴を読んでいたのなら尚更、シンクロ前に素材のモンスターでアクションカードを探しに行くのが『定石』であったのだ。

仮に選択したモンスターが破壊されたとしても、相手に除去カードを使わせた上に素材モンスターは１体場に残る。今回のように奈落のようなカードが伏せられていたとしても、手元にアクションカードは残る。どちらに転んでも損は無い。

「やるだろうとは思っていましたが……………見事に予想通りでしたね」

タッグデュエルでは基本的にパートナー間での『プレイング』に対する助言』は禁止されているため、アンリエールもシンクロ前にアドバイス出来ずにいたのだ。

嫌味な言い方にむっとしつつも、自分の不手際であることには変わ

らないためベルは文句を飲み込んで素直に謝ることにした。

「……すいません。わたしはカードを1枚伏せて、ターンエンドです」
そんなベルの様子に勝機アリ、と見たのか。

リリンは不敵に笑みを浮かべてカードを引き抜いた。

「私のターン、ドロー！ ふふん、そっちのお嬢ちゃんはまだアクションデュエルに慣れていないみたいね？ でも悪いけど手加減はしないわ、まずはサラの伏せた罠カード《トラップ・スタン》を発動っ！」

瞬間、ベルのディスクに表示された伏せ状態の《くず鉄のかかし》に、バツマークが覆いかぶさるようになって重なった。

「このカードが発動したターン、このカード以外のフィールド上の罠カードの効果は無効になる！ その伏せカードが何だか知らないけど、これで安全に召喚を通せるわ！ 私は更に手札から《レスキューラビット》を召喚！」

《レスキューラビット》

☆4 / 地属性 / 獣族・効果 / ATK 300 / DEF 100

リリンが召喚したのは、なんとベルが導入を躊躇ったものどころか名残惜しかった、短足の愛らしいウサギ型のモンスターだった。

「レスキューラビットの効果発動！ このカードを除外して、デッキから☆4以下の同名通常モンスター2体を特殊召喚するわ！ 現れなさい、《ジェムナイト・ガネット》！」

お菓子の床をかじかじと食い空け、レスキューラビットが空間の穴を作り出すと、そこから炎を纏いし紅き宝石戦士が2体、姿を現した。

《ジェムナイト・ガネット》

☆4 / 地属性 / 炎族 / ATK 1900 / DEF 0

《ジェムナイト・ガネット》

☆4 / 地属性 / 炎族 / ATK 1900 / DEF 0

「ここでアクションカードを探させて貰うわ……ガネット！」

リリンが差し出した手をとって、ガネットが空高く跳躍する。

妨害することも出来ず、ベルは歯噛みしながらその様子を見上げた。

「見つけ♪ アクシオンカードをドロロー！」

高所にあるお菓子の家々を飛び回り、早々にアクションカードを発見したリリンはホクホクとした笑顔を浮かべて手札に加えると、すぐさま元の位置へと戻りターンを続行する。

「まだまだ行くわよ？ 私は手札から魔法カード《ジェムナイト・フュージョン》を発動！ 手札の《ジェムナイト・ラズリー》と場のガネット1体を融合！」

リリンのバツクに浮かび上がる、2体の宝石戦士。

特有の召喚エフェクトである青と橙の渦巻き模様が、徐々に速度を上げていく。

「現れよ幻惑の輝き！ 融合召喚、《ジェムナイト・ジルコニア》！」
渦へ吸い込まれ、溶け合う2体の宝石戦士が新たな姿となって降臨した。

そのレベルは何と8。大きく太い腕を振り上げて、迫力ある咆哮を上げた。

《ジェムナイト・ジルコニア》

☆8 / 地属性 / 岩石族・融合 / ATK 2900 / DEF 2500

(あれが融合モンスター……)

デュエル講座でその存在を知ってはいたものの、いざ対峙するのは初めてのベル。

シンクロやエクシーズとも違う、魔法カードによって出現する紫色のエクストラカードに敵ながら胸躍ったベルだったが、そのテキストが融合素材を記す以外は空欄であることには驚きを隠せなかった。

(効果が、無い……?)

融合モンスターはその性質からシンクロやエクシーズよりも手札消費が激しく、扱いが難しいと聞いていたベルは安堵しつつも首を傾げた。

そんな難しい召喚方法を使って出されたカードが、言い方は悪いが攻撃力が高いだけのモンスターが1体だけ。それでは幾らなんでも……と思考が続こうとしたとき、リリンから更なる宣言が紡がれた。

「更に！ 私は融合召喚によって墓地へ送られたラズリーの効果を発動！ このカードが効果で墓地へ送られた場合、自分の墓地の通常モンスター1体を手札に加える！ 勿論手札に加えるのは《ジェムナイト・ガネット》よ！」

融合召喚によって失った手札のアドバンテージを、即座に回復した。

ジェムナイト、というカテゴリは恐らくそういう能力に長けているのだろう……そこまできを考えて、ベルは何だか嫌な予感がした。

「続けて墓地の《ジェムナイト・フュージョン》の効果を発動！ 自分の墓地の「ジェムナイト」1体をゲームから除外することで、墓地のこのカードを手札に加えるわ！」

どこかで見たような光景だと思えば、前に1度藍とタツグデュエルをしたときに見た「リチュア」にとても良く似ていたのだ。墓地から延々と魔法や素材を回収して繰り返し使えるというのは、手札消費の激しい召喚方法をカバーするように作られたシステムなのだろう。

「そして再び《ジェムナイト・フュージョン》を発動！ 手札と場のガネット2体で融合！ 燃え盛れ、紅蓮の輝き！ 融合召喚、《ジェムナイト・ルビーズ》！」

再びの融合召喚、そのレベルは6。

ジルコニアより控えめな攻撃力ながらも、しっかりと効果を有した紅き結合の宝石戦士が立派なマントを翻し、戦場へと降り立った。

《ジェムナイト・ルビーズ》

☆6 / 地属性 / 炎族・融合・効果 / ATK 2500 / DEF 1300

「そしてサラの伏せた《ファイヤー・ハンド》を反転召喚して、バトルよ！ 攻撃力の低いファイヤー・ハンドから順に3体のモンスターで攻撃！」

《ファイヤー・ハンド》

☆4 / 炎属性 / 炎族・効果 / ATK 1600 / DEF 1000

2体の融合モンスターに、炎を纏った巨大な腕だけの下級モンスター。

迫り来るそれらに怯みつつも、ベルは手札から早々に虎の子を切ることを決断した。

「て、手札から《速攻のかかし》を捨てて効果を発動！ バトルフェイズを終了します！」

相手モンスターの数だけ表れたブースター付きのかかしが、その攻撃を受け止めて砕け散っていく。おかげでベルは、先程の猛攻から身を守ることが出来た。

「っ、そう簡単に決めさせてはくれないか……メイン2、私は墓地のガネット1体を除外し、《ジエムナイト・フュージョン》を手札に加える。最後にカードを2枚伏せてターンエンドよ」

流石は物量がモノを言うタツグデュエル。2ターン目からの激しい攻撃を何とか凌いで見せたベルだったが、アンリエールはさも当然といった様子で涼しく鼻を鳴らすと。

「——さてさて、皆様。これより私アンリエール・ラムジョレインの華霊なる決闘舞台、その第一幕と相成ります。どうぞ最後までお付き合下さいませ」

ドレスの端を持ち上げて優雅に一礼するその姿に、先程までのイライラとした彼女の面影は既に無く。アンリエールの『デュエルモード』を初めて目の当たりにしたベルは、思わず目を丸くした。

「降参 Trick or Surrender? 悪戯 私のターン、ドロー」
ドローカードに目を通すも、その思考に迷いは無い。

黒のドレスグローブに包まれたしなやかな指先は、まるでダンスの相手を選ぶ高飛車な令嬢のようにすぐさま別のカードへと移っていく。

「私は手札から速攻魔法《手札断殺》を発動。お互いにカードを2枚捨てた後、デッキからカードを2枚ドロー致します……さあ、リリン様？」

差し出された左手はまるでダンスを誘うように柔らかであったが、その手に握られていたのは墓地のアンデットを特殊召喚する《馬頭鬼》と《ゴーストリック・グール》のカードだ。

最良、または最悪とも言える組み合わせにリリンは歯噛みしつつ

も、その効果を止める手立ては無いらしく素直にその効果に従った。「くっ……分かつてるわよ、手札の《ジェムナイト・フュージョン》と《大嵐》を捨てるわ!」

「おやおや? せっかく手札に加えた《ジェムナイト・フュージョン》と《大嵐》まで墓地へ落としてしまわれるとは……残ったその手札、余程大切なのでございますね?」

互いに新たな手札を2枚加えるが、アンリエールの指と口先は鈍ることなく続く。

「さては……この『悪戯』がお気に召しませんでしたか? 魔法カード《生者の書―禁断の呪術―》を発動。リリン様の墓地に存在する《ジェムナイト・ガネット》をゲームから除外し、私の墓地の《ゴーストリック・グール》を特殊召喚致します。皆様どうぞ、我がファミリーの道化師を拍手でお迎え下さい」

ドラムロールと共にアンリエールの墓地から這い出てきたのはコミカルに両手を挙げてアピールを決める、ゴーストリック特有のアニメチックなデフォルメがなされた屍食鬼(グール)だ。

《ゴーストリック・グール》

☆3 / 闇属性 / アンデット族・効果 / ATK 1100 / DEF 1200

会場は既にアンリエールのペースに飲み込まれており、グールという下級モンスターの登場ながらも観客達から拍手が巻き起こった。

「ありがとうございます皆様。それではもう一人、我がファミリーの立役者をご紹介致しますよう。普段はとても恥ずかしがり屋な「ゴーストリック」でございますが、表側表示の仲間が自分フィールドに存在する場合、手札の「ゴーストリック」は表側攻撃表示での通常召喚が可能となります。おいでなさい、《ゴーストリック・キョンシー》!」

指先でぐるりと回してからカードをディスクへ置くと、色白の死人妖怪がグールの周りを嬉しそうにぴよぴよこと飛び跳ねる。

(可愛い……)

味方のモンスターに思わず見惚れていたベルは「いけない、いけない」と首を振って気を持ち直した。パートナーである自分まで魅了さ

れてどうするのだ。

「それでは……私はこれからこのキョンシーと一緒に、メルヘンな情緒が溢れる《スウィーツ・アイランド》をお散歩することに致しましよ
う」

アンリエールが手を差し出すと、キョンシーはその手をとって彼女の歩幅に合わせてゆっくりと跳ね始めた。

「あの辺りが怪しそうですわね……キョンシー！」

アンリエールが指したのは、キャンディーが散りばめられたウエハースの家の屋根。

アクションカードを見つけ出すまでに要した時間は僅かであったが、それは演出としても観客に飽きが来ない程度の長過ぎず、短過ぎずの絶妙な間隔だった。

アンリエールはアクションカードが飛び散った瞬間にどこへカードが落ちたかがある程度把握していたようだ。

掛け声と共にぴよんと大きく跳ね上がったキョンシーは、続けてアンリエールの組んだ手の上に収まった。次の瞬間、チアガールのパフォーマンスが如くアンリエールがぼーんと勢い良くキョンシーを放り上げたのだ。

キョンシーはくるくると回転しながら屋根の雨どいに挟まっていたアクションカードをキャッチすると、そのまま落下して見事アンリエールの腕の中へと戻ってきたのだった。

「Good Boy(良い子ね)♪ アクションカードのドローはこれにて終了、メインフェイズへ戻らせて頂きますわ」

キョンシーの頭を優しく撫でながら、アンリエールは再び元の立ち位置へと戻った。

そんな彼女を待っていたのは、鋭い輝きを放つリリンの瞳だった。「……ふん。アンタのその余裕、これでも保ってられるかしら!?

罨カード発動、《グリザイユの牢獄》っ!!」

モノクロ調で描かれた絵画が写り込んでいる、リリンが発動させた罨カード。

その効果を理解するより早く、ベルはアンリエールが僅かに眉をひ

そめたのが分かってしまった。

「このカードは、自分フィールド上にアドバンス召喚・儀式召喚・融合召喚したモンスターの内いずれかが表側表示で存在する場合に発動！ 次の相手ターンの終了時までお互いにシンクロ・エクシーズ召喚は行えず、フィールド上のシンクロ・エクシーズモンスターは効果が無効化され、攻撃出来ない！」

これが、クラドの言っていた『メタ』の一角。

グリザイユ……つまりモノクロームの名が示す通り、シンクロとエクシーズを無効化するカードとして名高いそのカードだが、使用条件として3種のモンスターが求められている。しかし元々が融合召喚主体のリリンのデッキなら、問題なく投入出来るだろう。

（狙いはやっぱり、アンリさんを……！）

棒立ちのままのゴーストリックモンスターはどちらも☆3。

直前にアクションカードを回収しに行ったことからでも、これらのモンスターでエクシーズを行おうとしていたことは明白だ。

「……ふう、困りましたわね。私はキョンシーを効果で裏側守備表示に、カードを2枚伏せましてターンエンドでございます」

困ったとは口で言いつつも、エクシーズ妨害は半ば想定していた事態なのだろう。

それでもエンドフェイズまでしっかりと演じ切ったアンリエールは、続くサラのターンでの攻撃に備えて息を整えた。

「私のターンですね、ドローー！」

ドローカードを見たサラが、ふっと優しげに目を細めた。

恐らくはキーカードに近い何か。しかしその役割分担を見るにサラは『守り』に徹したデッキ構成の筈だ。

「手札から《トリオンの蟲惑魔》を召喚！ その効果で、デッキから《奈落の落とし穴》を1枚手札に加えます！」

お菓子の地表をすり鉢状に掘り進んで現れたのは、獲物を巣へと引きずり込み喰らう、蜻蛉の幼子。その化身である少女型のモンスターだった。

《トリオンの蟲惑魔》

☆4 / 地属性 / 昆虫族 / ATK 1600 / DEF 1200

「なっ、奈落をサーチ……!?!」

分かりやすく苦い顔を浮かべたベルに、サラが口元に手を当てて答える。

「ふふふ、蟲惑魔は「落とし穴」のカードを自在に操れる能力を持った良い子達です。可愛い顔をしていますけど、油断は大敵ですよ?」

「ちよつと、何で敵にアドバイスなんてしてるのよ!?!」

「あはは……ごめんなさい。でもメイドのあの子、何だか他人とは思えなくて。私もデュエルを始めた頃は召喚反応罫とかすごく苦手だったし……」

お互いに気の強いパートナーを持って挑んだこのタッグという環境は、それまで何の接点も無かった2人を僅かながらに繋いだらしい。

じつと向けられたサラの視線にたじろぎつつ、ベルはぺこりと頭を下げると微笑んで言葉を返した。

「……お気遣い、ありがとうございます。でも、これはお互いに負けられないデュエルです! 手加減なんてしないで下さいね!」

「勿論、そのつもりですよ! 私はこのでアクションカードを探させて貰います!」

選択されたのはトリオンの蟲惑魔。お菓子の地表を砂のように掘り進み、埋もれていたアクションカードを見事に探し出すと、地中から飛び上がってサラへとカードを投げ渡した。

「ご苦労様です。私は場に伏せられていた姉さんのアクションマジック《ハイダイブ》を発動! トリオンの攻撃力をターン終了時まで1000ポイントアップさせます!」

突然フィールドに現れたトランポリンに飛び乗ったトリオンが空高く舞い上がる。

すると、立て続けにサラの宣言が続いた。

「バトルです! まずはトリオンで裏側守備表示のキョンシーに攻撃!」

落下のスピードを乗せたトリオンが、流星のように裏向きのキョン

シーへと迫る。

だが、それしきの攻撃を幽霊姫が通す筈もない。

「あらあら、やんちゃなお嬢様ですわね。それでは躰にこんな悪戯はいかがでしょう？ 手札からアクシヨンマジック《キャンディ・コート》を発動。キョンシーは戦闘によつては破壊されず、魔法・罠の対象には選択されません」

カードから飛び出したキョンシーがぼいっと飴玉を頬張る。すると虹色のオーラが全身を包み込み、トリオンの強烈な一撃を見事受け止めて見せた。

「さて、ここでキョンシーの効果を発動。デッキからリバーズ時に表側で存在する「ゴーストリック」の数以下のレベルを持つ「ゴーストリック」を1体手札に加えますわ。私は☆2の《ゴーストリックの雪女》を手札に加えます」

キョンシーが帽子の中から取り出した……ように演出したカードを受け取ると、アンリエールはにっこりと微笑んで観客へ向かって一礼した。

「それならせめて、残ったモンスターだけでも破壊させて頂きます！

ルビーズでグールを攻撃！」

アンデットはやはり炎には弱いのか、ルビーズの炎の槍を受けて裏向きのまま破壊されてしまうグール。その猛火はアンリエールすら焼きつくさんと迫るが……。

「罠カード発動、《ガード・ブロック》。戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロー致します」

熱気を物ともせず、涼しい顔で流して見せるアンリエール。

このターンキョンシーは破壊できない為、これ以上サラの追撃は不可能となった。

(凄い……エクシーズを封じられて、これだけ凄いで見せるなんて)

役者らしく演じているのかは定かでないが、ベルが見守るその横顔にはまだまだ余裕が溢れている。残る手札に勝算があるのか、はたまた全てがブラフなのか。

「やっぱり……硬いですね。私はカードを3枚伏せてターンエンドで

す」

『さすが幽霊姫の名は伊達では無かった!! サラ選手の猛攻を見事に防いだ〜!!』

(何とか凌いでくれた……けど)

不安な面持ちのまま、ベルはデッキトップへと手を掛けた。

第21話 共演のチエック・メイト!!

サラの場には、またも守りの札が追加されている。内1枚は確実に奈落の落とし穴だ。

これを掻い潜ってモンスターを展開し、リリンの攻撃ターンを凌いでアンリエールへバトンを渡す……考えただけで頭が痛くなるが、今はただカードを引くだけだ。

「わたしのターン、ドローー!」

ドローしたカードは有難いことに妨害札。

だがその代償としてこのターン、奈落を潜って強力なモンスターを召喚することは不可能となってしまった。

(それなら、わたしのすべきことは——!)

ドローしたカードを持ち替えて、ベルはモンスターカードをディスプレイへセットした。

「スタンバイからメイン、手札から《切り盛り隊長》を召喚!」

戦場に降り立つ、銀の甲冑に身を包んだベルのデッキではお馴染みの騎士隊長……なのだが、どこか様子がおかしい。

その厳つい風貌に似合わない可愛らしいエプロンを装備した《切り込み隊長》の意外な姿が、そこにはあった。

「切り?」

「盛り?」

揃って首を傾げる姉妹に、ベルは僅かに頬を朱に染めながら説明を続ける。

「こ、このカードが召喚に成功した時! 手札1枚をデッキに戻してシャッフルし、その後デッキからカードを1枚ドローします! もしそれがモンスターカードだった場合、そのモンスターを特殊召喚出来ます!」

ディスプレイへセットされたデッキへ手札1枚を挿し込むと、オートシャッフル機能が即座に発動し、僅かな時間でシャッフルが完了する。

「ドローー! ……引きました、モンスターカード《セイバー・ビートル》

！」

《セイバー・ビートル》

☆5／地属性／昆虫族／ATK 2400／DEF 600

巨大なカブトムシ型のモンスターが、切り盛り隊長の『お玉』と『鍋』がかき鳴らす号令によって戦場へと導かれる。

サラはそんな光景をしばしきよんと眺めていたが、不意に我に返ると即座にセットしていたカードを発動させた。

「せ、セイバー・ビートル……？ あ、えつと罨カード《奈落の落とし穴》を発動！ 特殊召喚されたそのカードを破壊します！」

『ああつとお!? せつかく引き当てた上級モンスターがあつさりと退場だ〜!!』

『残念。ボツシユートですね』

前ターンのカタストルと同じように、セイバー・ビートルも呆気なく破壊されてしまう。

だがこれは勿論想定内。むしろベルとしては好都合だった。

(よし、これで奈落の落とし穴は使わせた！ あとは……)

後に来るアンリエールのターンの為、なるべくサラの残した守りの札を消費させる。それがベルの決めた『すべきこと』だった。

「ここでアクションカードを探しに行きます！ 隊長、お願いします！」

エプロン姿の騎士隊長はベルに向かって凜々しく「うむ」と頷くと、ひよいとベルを抱き上げて走り出した。実は近場にあるチョコレートの家の煙突、その上にアクションカードが落ちていたのをベルは見つけていたのだ。

飛び上がり、屋根を足場に再び跳躍——まっすぐにそこへ向かうベル達を見たサラは、慌てた様子で再びセットカードへと手を掛けた。「させません！ 罨カード《強制脱出装置》を発動！ 切り盛り隊長を手札に戻します！」

あと一歩でカードに手が届く。そんなところで、切り盛り隊長の姿が霧散し消滅してしまった。

「えっ……うわあ!?!」

支えを無くしたベルは落下しながらも何とかカードの端に手を触れさせたが――哀れアクションカードはヒラヒラと舞い落ち、ベルはショートケーキの畑に頭から突っ込んでしまった。ケーキの畑にはベル下半身だけが生え、逆さに捲かれたスカートからは黒のパンストに覆われた純白のソレがモロ見えな状態だ。

「……お馬鹿。何てはしたない……」

観客から巻き起こる爆笑と口笛の渦。

これ以上パートナーのあられもない姿を大衆の目の元に晒し続ける訳にもいかず、アンリエールが頭を抑えながらキョンシーに指示を出す。

ぴよこぴよことベルの元へ駆け寄ったキョンシーが脚を持って引き抜いてやると、クリームまみれの芋メイドが見事に掘り起こされたのだった。

肩を震わせて笑いを堪えるリリンの一方で、サラが必死に頭を下げる。

「ご、ごめんなさい！ 私そんなつもりは……！」

「大丈夫れふよ、あはは」

ベルは何とかそう返したが、口にクリームが入って上手く喋れない。

髪や顔についたクリームを何とか拭って、再びアンリエールの隣に立つ。

「うええ……さ、最後にカードを一枚伏せて、ターンエンドです」

「みつともないですわね。カードも取れず、お客様の前に無様な姿を晒すなど」

っーんとしたアンリエールの態度に、ベルが喰らい付く。

「そ、そんな言い方……!!」

「頑張りました、だけではデュエルに勝つことなど出来ませんのよ？

結果を残せなければ努力など無駄も無駄ですわ」

うな垂れて何かを堪えるベルの姿を、サラは対面からハラハラと見守っていた。

対戦相手である彼女から見ても、先程のターンはベルがこちらの守

りを削りに来ていたのは明白だった。恐らくはアクションカードの失敗も想定していたのだろう。

アンリエールとて一流の決闘者、それが分からぬ筈がない。仲間なのだし、もう少し優しい言葉を掛けてあげても……と喉元まで出掛かった言葉を、姉のリリンが遮った。

「お取り込み中悪いけど、私のターンに入らせて貰うわよ。ドロー！」
こういうとき、姉のリリンは容赦が無い。

相手にどんな事情があろうとも心を鉄にして叩きのめす。双子であるが故に、その胸に抱く思いはそう変わらない筈なのに。

「まずは最初にアクションカードを探すわ！ ジルコニア！」

巨大な宝石戦士の肩に飛び乗ったリリンは、手当たり次第にお菓子のモニュメントを破壊させていく。やがてどこかに隠されていたカードが目の前にひらりと舞い落ちると、かつさらうように手に取った。

「よし、ゲット♪」

「姉さん！ そんな乱暴な探し方は！」

「うっさいわね、勝てばいいのよ勝てば！」

妹の窘めに口を尖らせて反発するリリン。

それも一瞬、次の瞬間には口元をニヤつかせてアンリエール達を捉えていた。

「……悪いけどこのデュエル、私達が頂くわ！ まずはルビーズの効果を発動、ジルコニアをリリースし、その攻撃力を加算する！」

《ジェムナイト・ルビーズ》

ATK 2500 ↓ 5400

ルビーズの発する灼熱の炎がジルコニアを融解させ、一体となった。その輝きはまるで太陽のように黄金の輝きを放ち始める。

『攻撃力5400!! 最上級モンスターを超える大台の数値だー!!』
「そして基地のジルコニアを除外して《ジェムナイト・フュージョン》を回収！ そのまま手札の《ジェムナイト・アンバー》と《ジェムナイト・オブシディア》を融合！ 再び輝きなさい、《ジェムナイト・ジルコニア》を融合召喚！」

やはり立ち並ぶ、高攻撃力の宝石戦士。攻めの決闘者、リリンの猛攻はまだ止まらない。

「更にオブシディアが手札から墓地へ送られた場合、自分の墓地の☆4以下の通常モンスター1体を特殊召喚する！ 私は墓地で通常モンスターとして扱われるデュアルモンスター、アンバーを特殊召喚！」

《《ジエムナイト・アンバー》》

☆4 / 地属性 / 雷族 / ATK 1600 / DEF 1400

雷を操る琥珀の宝石戦士が、墓地の魔法陣から飛び上がってフィールドへ降り立つ。

「墓地のオブシディアを除外して《《ジエムナイト・フュージョン》》を手札に。そして通常召喚権を使ってアンバーを再度召喚（デュアルサモン）！」

更なる雷を帯びたアンバーに、磁力のような不思議な力が沸き上がる。

その力によって、異次元に消えた1枚のカードがリリンの元へと引き寄せられた。

「効果モンスターになったアンバーは手札の「ジエムナイト」カードを墓地へ送ることで、除外されているモンスターを手札に戻せるわ！」

《《ジエムナイト・フュージョン》》を墓地へ送り、除外されたオブシディアを回収！」

これで、リリンのフィールドには5体のモンスターが立ち並んだ。

対するベルの場にはキョンシーが1体のみ。伏せカードはあるものの、相手の手札と場には未だ効果が分からないアクションカードが2枚もある。

「待たせたわね……バトルよ！ まずはルビーズでキョンシーを攻撃！ 5400の貫通攻撃を喰らいなさい！」

猛火の黄金槍が小さなキョンシーへと迫る。ここしか無いと、ベルは伏せカードへと手を伸ばした。

「罨カード発動、《《サンダー・ブレイク》》！ 手札を1枚捨ててルビーズを破壊します！」

「その程度ツ！ サラの伏せてくれたアクションマジック《ミラー・バリア》発動！ 自分の場のモンスター1体はカード効果では破壊されない！」

放たれた雷の一撃はしかし、球状のバリアに弾かれ霧散する。

「うっ……!!?」

『惜しいっ!! ベル選手の渾身の罠をアクションカードの壁が阻んだっ!!』

勢いを増す紅の槍は止まらない。悲鳴すらも飲み込んで、黄金の猛火はキョンシーを跡形も無く焼き尽くした。

その威力は底知れず、後方に控えるベルとアンリエールすらも吹き飛ばしてしまう。

「うああああっ!!?」

「きやあああっ!!?」

【ベル&アンリ】 LP8000↓4400

『ああっとお!? ここで大幅にライフが削られるう!!』

仮想現実ながらも伴う苦痛を何とか耐え、ベルは伏せカードに手を伸ばす。

「くうっ……と、罠カード《時の機械―タイム・マシーン―》発動……戦闘で破壊されたキョンシーを、同じ表示形式で特殊召喚しますっ……!!」

再び戦場へと戻されたキョンシーは、すっかり怯えた表情を浮かべている。

「なら、続けてジルコニアでダイレクトアタック！」

「罠カード《くず鉄のかかし》！ ジルコニアの攻撃を無効につ！」

間一髪、巨腕の一撃こそ防いで再度セットされたかかしだが、このターン2回目の発動は出来ない。

「苦しそうね、でもまだまだ攻撃は残ってるわよ!? ファイヤー・ハンドで追加攻撃!!」

ファイヤー・ハンドの攻撃力はキョンシーの守備力には及ばないはず。

そんな当たり前の思考すら与えない程に、間髪入れずリリンの宣言

が飛んだ。

「さあ、ダメージステップいかしら!? 手札からアクションマジック《エクストリーム・ソード》を発動!! このターンのバトルフェイズの間、ハンドの攻撃力を1000ポイントアップさせるわ!!」

炎を滾らせ、唸りを上げるファイヤー・ハンド。その掌でキョンシーをギリギリと締め上げた後、乱雑に地面に放り捨て破壊して見せた。

「っ……ごめんね」

2度も破壊の恐怖に立たせてしまったキョンシーに、ベルは罰が悪そうに小さく呟いた。

「ラストー! アンバーとトリオンでダイレクトアタックツッ!」

干渉に浸っている暇など無い、とでも言わんばかりの追撃がベルを襲う。

「う、あああっ?!」

【ベル&アンリ】 LP3400↓200

『これは苦しい!! このまま決まってしまうのかー!?!』

地に伏しながら聞こえたコーパルの実況が、やけに遠く聞こえる。

何とか耐え切ったものの、残されたライフは僅か200。

「私はカードを1枚伏せてターンエンド。さあ、幽霊姫様? せいぜい足掻いてご覧なさい!」

ふんと胸を張るリリン、彼女達のライフは無傷のままの8000。その余裕が圧倒的な有利を物語っている。

「……全く」

片腕を抑えて、ゆっくりと立ち上がるアンリエール。

忌々しげに目を細め、彼女が発したのは――。

「今日は、とんだ厄日ですね。貴女なんかとタッグを組まされたせいで、私の輝かしい歴史に汚点が付いてしまいましたわ」

ここまで耐えたベルに対する労わりでも励ましもなく不満不平。まさに幽霊姫の名に相応しいドロドロとした怨言の羅列。

横たわったままのベルは、信じられないといった面持ちで目を見開いた。

「……は……？」

「使えないパートナーと組まされたおかげで、あんな格下の相手に敗北など有り得ないと言ったのです」

はつきりとしたアンリエールのその声は、会場中に響き渡った。

とてもプロとは思えないあまりの言い分に、観客達も流石にぎわつき始める。

「アンリエールさん!! 一緒に戦った仲間になんか言い方は!!」

どちらかといえばベルに肩入れをしていたサラが、堪えきれずに責め立てた。

気弱な妹がこれだけ怒りの感情を露にしたのは初めてなのだろう、リリンもぎよつとした顔を浮かべている。

「部外者は黙っていて下さいまし。これは私たちの問題ですわ」

「でもっ……!!」

最早泣き出しそうなサラの視界の隅で、ゆらりと立ち上がる影があった。

満身創痍のベルだ。

「……人が下に出てれば、いい気になって……」

それこそ、亡霊のような怨嗟の籠った声は一転。

ダンッ! とビスケットの地面を踏みつけたのを合図に、ベルは大きく目を開いてアンリエールへと詰め寄った。

「あなたは!! あなたの為に必死で戦った仲間感謝するとかそういう気持ちは無いんですか?! いつもいつもいつもいつも文句ばっつっかり!! もうやってられません!! 『仏の顔も3度まで』ってユウさんから教えて貰った言葉がありますけど、わたしの顔はせいぜい2度までが限界です!!」

ビシッ、とクリームまみれな自分の顔を指差しながらベルがまくし立てると、全く気圧された様子も無いアンリエールが鼻を鳴らして切り返す。

「ほおお、そのお間抜け顔で2度も? 使えない下仕えにしては上出来ですわねえ? それで? 私に言いたいことはそれだけですの?」

「……幽霊なら幽霊らしく、墓場の中で眠って下さいばーか!!」

散々吐き出しても怒りは収まらないのか、ぷうと頬を膨らませたベルは数歩アンリエールから距離を取ると、胡坐をかいて地面に座り込んでしまった。

『……おやおやく。これは試合続行不可能という感じでしょうか？
サレンダーなさいます？』

「ご冗談を。例え負け試合だとしてもこのアンリエール・ラムジョレーン、最後まで戦い抜いて見せますわ」

コーパルの問い掛けに凜と言葉を返すアンリエールだったが、その言葉に胸を打たれるものはもう誰一人としていなかった。

「……ダメだありゃあ。見てられねえ」

「ええ……」

すっかり気落ちしたにじいろ団のベンチからも、陰鬱な溜め息が漏れた。

既に耳栓も外していた藍も、クラドの言葉に怪訝な表情で頷く。

「……さて。それはどうだろうな」

そんな中、ただ一人ユウだけは小さくそう呟いていたが。

「それでは皆様、共に最後の一幕をお付き合ってくださいませ。ドロー！」

失望の的となっても、変わらずの調子でドローするアンリエール。そこへジトリとした目を向けて、リリンが伏せカードを立ち上げらせる。

「……あなたのスタンバイフェイズ、私は《グリザイユの牢獄》を発動するわ。残念だけど、これで終わりよ」

それは前のターンでも発動されたエクシース封じの必殺罫。

最早これまで。誰もがそう思った刹那。

「つ……ぶくくくつ……!!」

渦中の人物であるアンリエールから、堪えきれないといった様子でケタケタと笑い声が木霊したのだ。

「な、何よ？ ショック大き過ぎて頭おかしくなったの？」

「くくくつ……そうかもしれないわね。このデュエル、本当に勝ちを拾えるとは思えませんでしたから」

ケタケタという笑いは、会場のざわめきに混じっていつの間にか輪唱となっていた。

もう1つの声の主は他でもない、不貞腐れて座り込んでいた筈のベルからだ。

「な、何を——!?!」

「勝利を飾る役者は揃った、ということですよ!!」

ギンと目を見開いたアンリエールのルビーの瞳は、相對する宝石戦士に負けない紅い輝きを放った。ベルの琥珀色の瞳も、同様に輝きを取り戻している。

「さあさあ皆様、席をお立ちになるのはまだ尚早! これより始まる『我らファミリー』の大逆転劇、どうぞ心行くまでご堪能あれ!」

両手を広げてその声を上げたのは、ズタボロになりながらも満面の笑みを浮かべた褐色肌のメイド・ベル。

その傍らでは同じくすっかり煤けてしまったドレスを翻し、幽霊姫がカードを指先で弄ぶ。

「な、何をっ……!?!」

「まずは手札からお目見えいたしますのは、ファミリーきつての麗しの乙女《ゴーストリックの雪女》。続いては墓地にてその出番を今か今かと待っておりまして《馬頭鬼》の効果を発動、自身を除外することで墓地のアンデットモンスターを1体特殊召喚致します……皆様、今一度拍手でお出迎えくださいませ!」

《ゴーストリックの雪女》

☆2 / 闇属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 1000 / DEF 800

《ゴーストリック・グール》

☆3 / 闇属性 / アンデット族・効果 / ATK 1100 / DEF 1200

並び立つ2体のゴーストリックモンスター。

しかし、その攻撃力はリリン達のモンスターに遠く及ばない。

「な、何よ……そんな下級モンスター、幾ら並べても壁にすらならないじゃない!」

「……常に慎みと共にあれ。ラムジヨレーンに代々伝わる教えであり、信条ですわ。慢心し、無駄にレベルや攻撃力の高いモンスターばかり並べていると足元を掬われますわよ?」

と、アンリエールは不敵な笑みを浮かべて見せるも、すぐに困ったように眉を下げて深く深く溜め息をついた。

「……と、格好付けたいのは山々でしたが。今回ばかりは信条を曲げなければ勝てなかったようですわね……手札から魔法カード発動、《死者蘇生》!!」

フィールドに浮かび上がる、墓地へと通ずる巨大な魔法陣。

デュエルモンスターズにおける大逆転、その代名詞とも言えるカードの登場にアンリエールの言葉にも現実味が帯びてくる。

「だ、だけど!! 今更墓地から復活させて役に立つモンスターなんて……っ!」

——罨カード発動、《サンダー・ブレイク》! 手札を1枚捨てて――

そうだ、あの時に捨てたカード!

声に出すのものはばれるそんなリリンの思考は、現実として形を成す。

「今宵限りの特別ゲストをご紹介致しましょう!! 夢幻の気高き戦乙

女…… 《アスタリスクスヴァルキュリア——**——翼戦神》!!」

《——**——翼戦神》

☆10 / 地属性 / 天使族・効果 / ATK 2800 / DEF 3000

幽霊姫の祝詞を受け、暗暖色の機械天使が魔法陣から飛び上がりフィールドへ舞い降りた。

「☆10の最上級モンスター……!!? ってアンタら、めちゃくちゃ連携取れてるじゃない!? 騙したわね!」

「はて……?」

「何のことやら?」

ケタケタと笑うのはアンリエールだけではなく、その真似をして見せるベルもまた同じだった。

「ではアクションカードを探しに参りましょう。ヴァルキュリア、お願い致しますわ」

こくりと頷いた機械天使の手に飛び乗り、妨害の危険も無い中を悠々と進む幽霊姫。

リリンが破壊を尽くしたせいかわ道中で数枚アクションカードが見つかったが、何故かそれらを無視してある場所を一直線に目指して向かって行く。

辿り着いたのは、ベルがアクションカードを取れずにケーキの畑に突っ込んだ、あのチョコレートの家だ。

「見つけましたわ。これにてアクションカードのドロワーは終了、メイソフエイズへ戻ります」

屋根の上に落ちていたソレを手札に加えて元の位置へと戻る。

アンリエールの不可思議な行動の謎は解けないまま、ターンは再開された。

「それでは参りましょう、勝利へ至る最後の大仕込……永続魔法《闇の護封剣》を発動!! これにより貴女達のフィールドに存在するモンスターは全て裏側守備表示に変更して頂きますわ!!」

浮かび上がった髑髏の黒雲から、5つの黒剣が降り注ぐ。それらはリリンの場のモンスターに突き刺さると、全て裏向きの状態で縫い付けてしまった。

「なっ?！」

「大変長らくお待たせ致しました。これより皆様をファミリーの愉快な根城へと招待致しますよう。フィールド魔法《ゴーストリック・ハウス》発動!!」

アクションフィールドとしての効果は消えない。しかしメルヘンチックなお菓子の国は、一瞬にして『悪戯好き』が巣食う荒れ果てた洋館の大部屋へと装いを変えてた。

「ご存知でしょうが、このカードの発動中は裏側守備表示のモンスターを攻撃対象に選択できず、表側表示のモンスターへの攻撃以外はプレイヤーへのダイレクトアタックとなり、相手に与えるダメージは半分となります。尤も……「ゴーストリック」モンスターだけは例外

ですけれども、ね？」

にこり、と微笑みかけられたリリンの背筋に戦慄が走る。

まさか。まさか。

「はて。そういえば……ヴァルキュリアはどんな効果を持っていますかしら？」

「1ターンに1度、自分の手札またはフィールド上のモンスター1枚を装備カードとして装備し、装備したモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る。更に装備されているモンスターの数×600ポイント攻撃力がアップする……ですよ、お嬢様？」

「あら、そうでしたわね。ありがとう、『ベル』？」

「いえいえ♪」

微笑み合う2人を見てみると、先程までいがみ合っていた姿が嘘か幻のようにも思えてくる。いや……もしかしたら本当に、全て嘘だったのかもしれない。

「ヴァルキュリアの効果発動、場の雪女を装備!!」

ヴァルキュリアの手中に収まったのは、小さな小さな雪女の童女。

ほんの僅かな力しか持たない彼女が、怪奇の館に迷い込んだ戦乙女に力を貸し与える。

それは声を合わせて宣言する各々の主達の姿と、見事に重なって見えた。

《* * * 翼戦神》(ゴーストリックの雪女)

ATK 2800 ↓ 3400

「更にグールの効果を発動!! メインフェイズ1に1度、自分フィールドの「ゴーストリック」モンスター1体を対象として発動、そのモンスターの攻撃力は次の相手ターンの終了時までフィールドの「ゴーストリック」モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる!! よって、その攻撃力は4500!!」

《* * * 翼戦神》(ゴーストリックの雪女)

ATK 3400 ↓ 4500

「……すげえ」

最上級モンスター。その肩書きに恥じぬ怒涛の攻撃力が示され、思

わず言葉を漏らしたのは妹のサラだ。

ヴァルキュリアは現在「ゴーストリック」モンスター、つまりハウスの効果でそのままダイレクトアタックを仕掛けることが出来る。しかし4500の直撃に対する恐怖よりも、彼女達が生み出した奇跡の光景に胸を打たれ、サラは子供のように目を輝かせていた。

「い、いくら攻撃力を上げて!! このターンで決められないならまだ……!!」

口端をヒクつかせながら言い聞かせるように強がるリリンを、無情にもアンリエールの言葉が遮る。

「いいえ、これで……詰み(チェックメイト)ですわ!! バトル!!」
バツと腕を差し向け、攻撃目標であるリリンとサラに狙いを定めて。

2人は再び声を重ねて、告げた。

「ヴァルキュリアでダイレクトアタック!! 『ブレイヴ・ブロー』!!」
雪女が姿を変えた氷の槍を振るい、ヴァルキュリアが吹雪と風の刃を放つ。

呼吸すら止まりそうな冷気の嵐はか細い双子の少女をいとも容易く吹き飛ばす。

「きやあああつ!!」

「リリン&サラ」LP8000↓3500

地に叩き付けたれた2人に、最後の宣言が下される。

「ここでアクションマジック《ワンダーチャンス》を発動!! 自分のモンスター1体を選択し、そのモンスターをもう1度だけ攻撃させる!!」

それは、アンリエールが不可思議な行動を経て手札に加えたカード。

まるでこのカードを意図して引いたような行動であったが、裏向きにセットされているアクションカードを事前に確認することは不可能だ。

都合が良過ぎる。どうして……という姉妹の疑問は、程なくして解けた。

——わたしの顔はせいぜい『2度』までが限界です!!

あのカードが何か、それを確認出来るチャンスがあったのは。

——ほおお、その『お間抜け顔』で2度も？

アクションカードの回収に失敗し、クリームまみれになったメイドの少女ただ1人。

——それで？ 私に言いたいことはそれだけですの？

——幽霊なら幽霊らしく、『墓場』の中で眠ってて下さいばーか!!
どうやら、一芝居打たれたらしい。

そう気付いたときには既に遅く。『華霊』な連携に魅せられ、文句を付ける気力も失せた姉妹は、脱力した笑顔を浮かべて満足そうに吹雪の中へと沈んだのだった。

【リリン&サラ】LP3500↓0

第22話 辿られる伝説

『勝者（ウイナー）！【にじいろ団】タッグチーム！』

元氣満開のコーパルの宣言が上げられると、ベルは何かの栓が抜けたように長い溜め息をついた。張り詰めていた緊張が切れ、歓喜の波が一気にこみ上げてくるのが分かる。

いつも『大切な何か』を賭けてデュエルしてきたベルにとって、今まで味わったことが無い心地よい勝利の高揚。ゆらゆらと地面が揺れているなど思えば、今更になって膝が小刻みに震えていた。

（勝ったんだ……わたしたち）

ふと隣を見れば、アンリエールが満面の笑顔を観客達に振りまいている。その微笑みは決して自分の為のモノではなく、最後まで見守ってくれた人々への感謝の念だろう。

流石はプロだと、足元のおぼつかない自分との経験の差を改めて思い知らされた。

『今試合結果を持ちまして、準々決勝進出は【にじいろ団】の皆様となりました。おめでとうございます』

会場中から注がれる惜しみない拍手。それは先程まで刃を交えていた【AKATUKI】のメンバーからも同様だ。

敗者となった彼らが賭した物は何だったのか、それは恐らく問い掛けるべきものではない。確かなのは、先へ進む切符を手にしたのは自分達ということ。

「いよっしゃー!! やってくれたなお嬢、メイドちゃん!!」

「ナイスデュエルよ、2人共!」

ベンチから飛び出してきたクラドと藍が、2人の頭を掴んでわしわしと撫で回す。藍に至っては抱き付く始末だ。

「ちよっ、皆様の前ではしたない真似はやめて下さいませ!」

「わわわ……!」

一足遅れてきたユウが静かに親指を立てたところで、コーパルがアウンスを挟んだ。

『えー、お取り込みのところ申し訳ありませんがー。ここで両者の健闘を称えまして仲良く楽しく握手のターンと参りましょう♪』

アナウンスに従い、一列に並ぶ両旅団の面々。

コートに上がった人数こそほぼ同じだったものの、ベンチで歓声を上げている人数を含めれば十数人と「AKATUKI」が断然に多い。それなりに大きな旅団と言えるだろう。

一番に口火を切ったのは、苦笑を浮かべた双子姉妹の姉、リリンだった。

「……見事にやられたわ幽霊姫さま。初めっから全部演技だったってワケ？」

静かに差し出された手を、アンリエールもしなやかに握り返す。

「敵はおろか味方まで騙そう、などと姑息な手段を思いついたのはその芋メイドです。それに勝ちを拾えたのは、ほんの少し運が良かっただけですわ」

「ぶっ、変なトコで謙遜するのね？」

ケタケタと幽霊姫が悪戯に笑って見せると、リリンもまた歯を見せて笑い返した。

「ベルちゃん、ひとまずはおめでとうー！」

両手でベルの手を握ってきたのは、双子の妹、サラだ。

演技だったとはいえ終始自分を気遣ってくれた彼女に、ベルも両手でしっかりと握り返し、元気良く笑顔で応えた。

「あ、はい！　ありがとうございますっ！」

「ちよつと悔しいけど、私たちの分までしっかりと頑張っただね。あとね、もし良かったらなんだけど……」

そう言っただけでサラが取り出したのは、先程までベル達を苦しめていたサラ自身のデッキだった。

「この子達、持っていてくれないかな？」

これはデッキを賭けたアンティでも何でも無いのに。

ベルは両手と首を横に振って上ずった声を張り上げた。

「そ、そんな悪いですよ!!　大切なデッキじゃ……!?!」

「だからこそ、これから先の試合も一緒に戦って貰えたらなって。そ

れに多分ベルちゃん、カードが足りなくて上手くデッキを組めてないんじゃないかな？」

少し悪戯に目を細めたサラの視線が、ベルの懐事情をずばりと見抜く。

戦士族主体の構成に上級昆虫族の採用という滅茶苦茶なデッキ構成……デュエルの最中で、しっかりとサラに違和感を抱かれていたらしい。

ちらりとクラウドに視線を送るが、当の本人は控えの選手達と盛り上がっている。結構カツカツな【にじいろ団】の懐事情をバラしても、今なら大丈夫だろう。

「あー、えっと。まあ」

「……やっぱり。私も始めはそうだったから、何となく分かっちゃったんだ。今のデッキのまま崩したくないならそれでも良いんだけど、もしカードに不自由しているようなら遠慮なくこの子達を使ってあげて？」

どんな凄腕の決闘者であつても最初は皆、何も分からない駆け出しだ。

少ないカードの中から何とかデッキを組んだ、そんな経験は誰しもが持っている。そんな時に手を差し伸べてくれたのは、遥か先を歩く小さな影だった筈だ。

「で、でも……」

躊躇いがちに目を向けるも、サラの微笑みに迷いは無かった。

もし彼女達にも、ユウと同じくこの大会に賭ける想いがあつたとしたらなら。自分達はその想いも背負って前に進む責任がある。これまでも、これからも。

「……分かりました！ 責任を持ってお預かりしますっ！」

また一つ、自分へと紡がれた決闘者の意思。

ベルは深く頭を下げて、その重みを丁寧に受け取った。

「よう、おめでとうさん。見事なストレート決められちゃった」

健闘を称えあう少女達的一幕が広げられる中。

酒を片手に顔を朱に染めたフリンは、ユウと拳を付き合わせてい

た。

「……そつちも見事だった。相手の動きを的確に読んだ戦略、これから参考にさせて貰う」

「堅苦しいねえ。ま、確かにそれ位のストイックさが無えとこれから先は厳しいかもしれねえがな？」

ふとフリンが大モニターへと視線を移すと、僅かに眉をひそめる。

「……次のAブロックの試合が今日の予選最終みてえだな。『連中』はしつかり今日のトリを飾るつもりらしい」

「連中……ゲストチームのことか？」

ユウが尋ねると、フリンはコクリと頷いた。

「ああ。特別扱いもココまで来ると流石に胸焼けだ……挨拶もそこそこだが、お前さんらは次の試合をしつかり見といた方が身の為だぜ？」

用心深いフリンのことだ、恐らくクラドと同じ見立てなのだろう。

新型モンスター、ペンデュラム。その傾向と対策を講じる絶好の機会だ。

「……アンタに言われずとも、ウチのブレーンがじきに言い出すだろうさ」

そう、ユウが口端を緩めたのが早いか。

適当に挨拶を終えたクラドは、集合とばかりにちよいちよいと手招きをしていた。

ARの壁で丁度真ん中から2つに分けられたドームでは、遂に始まるゲストチームのデュエルを見ようと片側に観客が押し寄せていた。

大モニターでも観戦は出来るのだが、生の迫力やパフォーマンスを見ようと席を立って移動する者も少なくない。

そんな大混雑を、にじいろ団の面々は選手用の待ち受けロビーに設置されたモニターで遠巻きに窺っていた。白く清潔感のあるロビーには既に他の旅団の面々が揃い、こちらも独特の熱気に包まれてい

る。

「観客席の方は随分な賑わいですわね……藍は大丈夫でしょうか？」

時折サインを求めに来る決闘者を適当にあしらいつつ、アンリエールはうじやうじやと波打つ客席を不安そうに眺める。

生での雰囲気、仕草などからも得られる情報は多いということ、藍は単独で観客席の中へと飛び込んで行ったのだ。流石はジャーナリストといったところだろう。

「ま、姉ちゃんなら上手くやってくれるだろうさ……お、そろそろ始まるみたいだな？」

未だ騒がしいロビーの中で、モニターからコーパルの実況が流れ始めた。音量は少し控えめらしく、その殆どがギャラリーのざわつきにかき消されてしまう。

恐らく選手入場の合図があったのだろう。2人の男がコートへ上がってきた。

1人はゲストチーム所属の奇術師風な長身の男。もう1人は――。

「え？ あの人……って」

観客へ一礼をしてにこやかに登場したのは。

ベル達も良く知る、あのブロンド髪の軟派男だった。

「これはこれは、初戦から実に幸先が良い！」

腕を大きく広げて、ブロンド髪の男は喜び満点といったリアクションを見せた。

「おや？ 我々を相手にてつきり己の不運を呪うものかと思っていましたが……」

相對する奇術師風は、そんな反応を見るや不思議そうに首を傾げた。

黒い燕尾服に身を包み、鮮やかな手つきでデッキのカード達を自由自在に飛び回らせている。恐らくはカードパフォーマンスの一種だ。

「まさか。僕は貴方と戦うこの瞬間を、ずっと待ち焦がれていたんで

すよ」

そう言うのと爽やかに微笑んで、ブロンド髪の男はディスクを構えた。

対戦相手として、何よりファンとして極上の真摯な態度に、奇術師は満足したように目を細めた。

「ほう、それはプロデュエリスト冥利に尽きますな」

奇術師の男の名はピュクシス。アンリエールと同じく、ノワール黒の地で人気を博しているアクションデュエリストだ。

その風貌が示す通り、マジックをしているかのような鮮やかなカードパフォーマンズと確かな戦術が人気の決闘者なのだが。普段よりも余裕が現れているのは、恐らく必勝の『キーカード』がその手中にあるからなのだろう。

「では、早速始めましょうか……驚きと奇怪に満ちた素晴らしい決闘を」

頬骨の張った顔をニイツと歪めてディスクを構えるピュクシスだったが……ブロンド髪の男はにへらと笑みを浮かべて、あろうことか制止するように掌を向けた。

「あー、すいません。少し提案があるんですが」

「……何か？」

お決まりの『段取り』に水を差されて気分を害したのだろう。先程の穏やかな表情はどこへやら、ピュクシスは露骨に不快を滲ませた。

「僕らが今日の最終試合のようですよ、どうでしょう？　もし宜しければ2戦目のタッグも隣のBコートを貸して貰って、同時に行いませんか？」

あまりに突拍子も無い提案に、会場全体がしんと静まり返った。

ピュクシスの眉と顔の皺は、益々深く刻まれていく。

「……何故、突然そのようなことを？」

「いや、実は僕の旅団、残りのメンバーが遅刻してしまっています。今日試合に出れるのは僕とこの子達だけなんですよ」

そう言ってブロンド男の影からひょっこりと出てきたのは、青と赤

のオッドアイを持つ双子の兄妹だ。

じつ、感情の知れない不気味な視線をじつと向けられたピュクシスは、嫌悪感を隠すことなく露にした。

「そ、その子達が？」

「ええ。もし僕が負けてしまえば、3戦目は不戦敗で僕らの敗退は決定です。折角プロの皆さんと戦える機会だというのに、それじゃあまりにもこの子達が可哀想で」

情けなく笑うブロンド髪の男に、ピュクシスは溜め息を漏らす。

元々はそちらの不手際だというのに、何故こちらがそんな身勝手な要求を呑まなければならぬのだ。そう罵りたくなる口元を押さえ、ピュクシスはわざわざ考え来込むような仕草を見せた。

「しかし……それだけ大規模なルール改変となると我々の一存ではどうにもなりませんねえ。審判員機構、彼の申し出は実現可能なのですか？」

矛先が向いたコーパルはというと、にこりと微笑んで頷いて見せた。

『えーっと、結論から申し上げれば「はい」と。ただし両チームの合意があればのお話です。私たちが基本的には基本、盛り上げれば何でも受け入れる方向ですの〜』

笑顔でとんでもないことを言い放つルールの番人。

まさかの回答に会場がざわめく中、何か裏があるのではとピュクシスは暫く思考を巡らせるが。

(……ふむ。1戦を勝てば良いだけの我々としては、この提案確かにデメリットの方が多し。しかし——)

いくら考えても、ブロンド髪の男がこの『同時デュエル』を行うメリットが見出せないのだ。頭数の足りない彼らがどう足掻いても、結局2戦とも勝利を収める以外方法は無い。

しかし、仮にも自分達は実力者揃いのゲストチーム。僅かな敗北の可能性を憂いて『子供達の』申し出を断るのはイメージダウンに繋がってしまう。

(……納得はいかないが、断る訳にもいかないか)

後に控える他のメンバーに目配せすると、自信満々の表情で「受けてやれ」との答えが返ってきた。

「……分かりました、そのルールでお引き受けしましょう。我々としても、子供達の残念な顔など見たくありませんからね」

「ありがとうございます♪ ノリの良い皆様で助かりました！」

ふわりとした仕草で、ブロンド髪の男は深く頭を下げた。

『ではでは、両者合意ということで変則ダブルデュエルの開始です♪』

AコートとBコートを隔てるARの壁が取り払われると、双子達がトコトコとコートへと上がる。それに続き、ゲストチームからも2人のプロが大手を振って舞台へと上がった。

線の細い金髪の男と紫髪の男。甘いマスクで女性を魅了したタッグ戦では無敵の強さを誇る、白では『レイ&アビス』^{ユートピア}なるコンビ名で活躍している決闘者だ。

「おチビちゃん達の相手はボク達だ！ よろしくお願いするよー！」

ぴっ、と指を払って爽やかに挨拶をする金髪の男、レイに客席から黄色い歓声が沸き上がるが、双子は一瞬顔を見合わせた後。

「よろ」

「……しく」

と、無愛想に小さく呟くと黙ってディスクを構えた。

「あはは……緊張しちゃってるのかな？」

レイ&アビスは苦笑いを浮かべつつも、双子に続いてディスクを構えた。

『……それでは、Bコートのタッグ戦を私、ネフが』

『Aコートのシングル戦を私コーパルが！ 実況解説&審判を務めていきますよ〜♪』

背中合わせにAB両コートの上に立ち、審判員終いが同時に腕を上げる。

『ダブル・アルティメットルーレット、ゴー！』

彼女達の頭上に現れたのは、巨大な2枚の裏向きのカード。ガゴン、ガゴン、と大きく音を立てながら回転していくそのカードに、必

然と注目が集まる。

やがて回転を止めた2カードは、表向きになってその正体を露にした。

『当然正位置い！ Aコートシングル戦のルールはいつも通りのハーフライフう！』

『こちらも正位置。 Bコートタッグ戦のルールもハーフライフとなります』

下された運命は、どちらも普段のデュエルと変わり無いハーフライフ。

プロの決闘者によるパフォーマンスを期待していた観客からは僅かに嘆息が漏れたものの、「まだ『次』もあるしな」と巻き起こった落胆はすぐに収束へ向かった。

「良かった、いつも通りのルールなら変に肩を張らずに済みそうです」
「フフフ……そうそう、リラックスして下さい。お互いに全力を尽くすのが決闘者としてのマナー、妙な力が入っているのは実力を出し切れませんからねえ」

柔和な笑みを浮かべるブロンド髪の男に、ピュクシスも笑顔を向ける。

同時に計6台ものディスクが互いにリンクし、試合の準備が整った。

『それでは。 予選最終試合、異例のダブルデュエル……』

『開始い！』

『デュエル
「決闘！」』

Aコート：[ピュクシス] LP4000 VS [??] LP4000
Bコート：[レイ&アビス] LP8000 VS [??&??] LP8000

「それでは、僕の先攻からですね」

まずはブロンド髪の男から最初のターンがスタートする。

5枚の手札をしばし眺めた後、男にしては細く長い指先が1枚のカードを掴み取った。

「僕は、手札から《E・HERO エレメンタルヒーロー エアーマン》を攻撃表示で召喚！」

《E・HERO エアーマン》

☆4 / 風属性 / 戦士族 / ATK 1800 / DEF 300

現れたのは、プロペラ付きの翼を広げた青色の人型モンスター。ヒーローの名が示す通り、フィールドへ降り立つと同時に勇ましく声を放って見せた。

途端、会場中から何とも言えないどよめきが漏れ出した。

「えれめんたる、ひーろー……？ 聞いたことの無いモンスターですわね」

モニターで試合の様子を眺めていたアンリエールも、どこか納得がいかない様子で眉を寄せていた。珍しいモンスターの召喚に、観客席からも意外と言ったような声が上がっている。

「ああ……俺も知らねえモンスターだ。審判の姉ちゃんが何も言わないうってコトは、白の方で先行流通した新型モンスターなのかもなあ」
「へえ……そんなに珍しいモンスターなんですか」

こういった知識には長けているはずのクラドも、羨ましそうな目を向けていた。

ベルもカードの知識には疎い。自分の持つ《アスタリクス》もそうといった経緯を持つことから「アレはそういうものなんだ」と、ごく平凡な感想を抱くところだった。

隣に立つユウが『啞然とした表情』を浮かべていなければ。

「ユウ、さん……？」

まるで信じられないモノを見たような、未だ謎の多い《アスタリクス》を目にしたときですら見せなかつた驚愕の色。

ベルが不安そうに問い掛けると、ユウは我に返ったように身体を震わせ——その感情を刹那の内に仕舞い込んでしまった。

「……いや。何でも無い」

クラドとアンリエールも怪訝そうにユウの顔色を窺ったが、問い詰める暇も無くデュエルは進行していく。

「僕はエアーマンの効果を発動、デッキから「HERO」モンスター1枚を手札に加えます。選択したのは《E・HERO バブルマン》」

ブロンド髪の男が取り出して見せたのは、やはりというべきか《E・HERO》の名を冠したモンスター。

「更に……カードを2枚伏せて、ターンエンドです」

これと言つてどう展開する訳でもなく、結果として残ったのは下級モンスターが1体と伏せカードが2枚。何が始まるのかと期待を寄せていただけに、肩を透かした空気が会場の中を流れた。

「ふむ……罠を張りましたな？ 堅実な一手ではありますが、少し物足りませんねえ。私のターン、ドロー」

プレイングを指摘するように言葉で煽るピュクシスだったが、彼とてプロのデュエリスト。ブロンド髪の男が巡らす思惑に警戒は解かない。

（カテゴリ統一のモンスター郡……恐らくは次のターンで一気に動く筈。ならばこのターンで！）

ドローしたカードを満足そうに眺めつつ、ピュクシスは目の前に立つ真摯な男を腹の底で嘲笑った。

いくら見慣れないモンスターであろうと、『このカード』の前ではどんなデッキも頭を下げる。この決闘は……いや、この大会はそれを証明する為の舞台なのだから。

「……おや、これは僥倖。こんなにも早く『仕掛け』をお披露目出来るとは思いませんでしたよ」

「おや、何か良いカードを引いたのですか？」

プレゼントを楽しむに尋ねてきた子供のような、無邪気な笑顔を向けるブロンド髪の男に、ピュクシスも同じような笑顔を貼り付けて答ええた。

「ええ、すぐにご覧に入れて差し上げますよ……！」

僅かに漏れ出す、決闘者としての鋭い殺気。

ソレを感じ取った観戦の決闘者たちは「何かが来る」と表情を強張らせたが、対峙するブロンド髪の男は微笑を崩さない。

そんな彼に向けて奇術師が取り出したのは、カードの半分が魔法

カードのように緑色となった2枚のモンスターカードだった。

「私は、スケール1の《星読みの魔術師》と、スケール8の《時読みの魔術師》を……ペンデュラム P ゾーンにセッティング!」

聞き慣れない宣言、そして『ペンデュラム』の名前——モンスターゾーンでも魔法・罨ゾーンでもない、新設された位置へと置かれた2枚のカードが実体を露にしたとき、多くの観戦者が理解した。これから始まる未知の領域を、決して見逃してはならないと。

《星読みの魔術師》

〔Pスケール：青1／赤1〕

《時読みの魔術師》

〔Pスケール：青8／赤8〕

白と黒の魔術師が天へと飛び上がり、光の柱が立ち上る。幻想的な光景に息を呑む間もなく、ピュクシスの宣言は続く。

「これにて、☆2〜7までのモンスターが同時に召喚が可能となりました! 皆様に奇跡のシヨールをご覧に入れますよう……ペンデュラム召喚!」

光の柱によって穿たれた天の穴。

そこから飛び出した3つの魂が、次々とフィールドへと舞い降りる。

「現れよ我が僕達! 《ブラック・マジシャン》! 《ブラック・マジシャン・ガール》ズ!」

光が晴れ、そこに立っていたのは……褐色の肌に黒衣を纏い、挑発的な笑みを浮かべた最上級魔術師と、ケタケタと悪戯な笑みを浮かべる2人の女魔術師だった。

《ブラック・マジシャン》

☆7／闇属性／魔法使い族／ATK 2500／DEF 210

0

《ブラック・マジシャン・ガール》

☆6／闇属性／魔法使い族・効果／ATK 2000／DEF 1

700

《ブラック・マジシャン・ガール》

召喚されたそのどれもが、本来であればリリースを必要とするモンスターばかり。

それをたつた1ターンで、1度に3体も並べて見せたのだ。刹那の静寂の後、会場からは賛美の拍手が嵐のように巻き起こった。

「へええ、凄い！ 上級のモンスターを1度に展開ですか！」

目を輝かせて喜ぶブロンド髪の男とは対照的に、モニター越しの口ビーでは重苦しい深刻な空気が漂っていた。

「あれが、ペンデュラム召喚……？」

そう呟いてしまったのは、恐らくベルだけではなかっただろう。

「Pスケールの異なる2体のPモンスターを用意することで、スケール間のレベルを持つモンスターを同時に召喚する……何のこつちやサツパリだったが、実際目にして見て何となく意味が分かったぜ」

配布されていた大会用のルールブックを開きながら、クラドは重々しく呟いた。

「確かにアレがあれば、エクシーズやシンクロも従来よりずっとし易くなりそうですね……」

アンリエールが漏らした感想の通り、確かにフィールドにモンスターを並べることが出来るこの召喚方法ならば相性は良い筈だ。

試験段階だと言う新たな召喚方法。その可能性に息を呑む中で、未知の領域へと突入したデュエルはさらに続いていく。

「フッフ……観客の皆様も、Pカードがお気に召したようですね。ですがここからは私の持ち味を生かしていきますよ？ 手札から魔法カード《^{サウザンド}千本ナイフ》を発動！ ブラック・マジシャンとのコンボで、相手モンスター1体を破壊させて頂きます！」

ブラック・マジシャンから放たれる銀色の雨。それは風のヒーローを切り裂き、貫き、遂にはガラスを砕くように破壊して見せた。

「ッ!? エアーマンが……!?!」

「さあ、手加減は致しませんよ！ バトル、全てのモンスターでダイレクタアタック！」

絶望の渦中にある相手へと叩き込む終幕の一撃……言い知れぬ快感を味わいながら、ピュクシスは声高らかに宣言するが――。

肉薄する魔術師弟らの前に、1枚のカードが立ちはだかる。

「させませんよ、罨カード《ヒーロー見参》！ 相手モンスターへの攻撃宣言時、相手が選択した自分の手札1枚がモンスターだった場合、それを特殊召喚する！」

「ぬう……!?!」

差し出されたブロンド髪の男の手札は3枚。

歯痒い表情を浮かべたピュクシスは、その中で真ん中のカードを選択した。

「……では、そのカードを」

瞬間、ブロンド髪の男がニコリと微笑んだ。

「おお、命拾いしました♪ 選択されたカードは《E・HERO プリズマー》！」

《E・HERO プリズマー》

☆4 / 光属性 / 戦士族・効果 / ATK 1700 / DEF 1100

ズン、とフィールドを揺るがして降り立ったのは、全身を輝く結晶で覆った人型モンスター。攻撃力は下級モンスターの域を出ないが、その属性は光。

当然のように攻撃表示で召喚されたソレに、ピュクシスは心底鬱陶しそうに顔を歪めた。

（くっ……光属性のモンスターを攻撃表示！ オネストですか……しかし！）

ここで勝負を焦らずとも、ピュクシスにはまだ余裕があった。

手札に目を落とし、自分を落ち着かせるために呼吸を整える。

（ヤツの手札に《オネスト》があるならば、次のターン……確実に攻撃を仕掛けてくるはず！ だが私の手札には《聖なるバリアーミラーフォース》がある！ もしも攻撃を躊躇したなら《オネスト》はハツタリだ！ こちらからは攻めずに、ゆっくりと追い詰めていけば良い！）

そこまでを考えて、ピュクスは偽りの笑顔を貼り付けて宣言を続けた。

「これは一杯食わされましたねえ……仕方が無い、私はカードを1枚伏せてターンエンドです」

「おや、攻撃は無しですか？」

とぼけたように話すブロンド髪の男に少しばかり苛立ちを感じつつ、ピュクスは手札を指差し微笑んで見せた。

「当然。プロというモノを舐めないで頂きたい」

『これは間一髪！脅威のペンデュラム召喚、その怒涛の攻撃を見事な心理戦で耐え切った〜！』

第23話 その名は

「おや、ピュクシスさんてばもうお披露目しちゃったか……それじゃ、ボクらもそろそろお披露目といきますか！」

一方、Bコートで行われていたタッグデュエルでも動きがあった。既に両陣営とも1ターンを終え、場にはそれぞれカードが展開されている。レイ&アビスの場には、リリース無しで召喚出来る最上級モンスター《神獣王バルバロス》が睨みを利かせていた。

「ボクはスケール1の《クリフオート・ディスク》と、スケール9の《クリフオート・ツール》をPゾーンへセッティング！」

先攻側の2ターン目となるアビスのターン、再びソレは巻き起こった。

コアに黄色の光を灯した盾のような機械モンスターと、その名が示す通り円盤を模した巨大機械が2本の光柱を作り出していく。

《クリフオート・ディスク》

【Pスケール：青1／赤1】

《クリフオート・ツール》

【Pスケール：青9／赤9】

立て続けに披露されたペンデュラム召喚に、会場の空気が一気に沸き立つ。

アビスは満足そうに頷いて、両手を開いて高々と宣言した。

「うんうん♪ お客さん達も大喜びだ！ それじゃあいくよ？ まず
はPゾーンの《クリフオート・ツール》の効果を発動、ライフを80
0支払い「クリフオート」カード1枚を手札に加える！ そしてその
ままペンデュラム召喚だ！ ☆2と8のモンスターを、同時に特殊召
喚！」

穿たれた天の穴から舞い降りる3つの魂。

レイのターンで既に召喚されていた《神獣王バルバロス》と共に、計4体のモンスターが並び立った。

《神獣王バルバロス》

☆8／地属性／獣戦士族・効果／ATK 1900（3000）／

DEF 1200

《クリフオート・シエル》

☆8／地属性／機械族・ペンデュラム・効果／ATK 2800／
DEF 1000

《クリフオート・ゲノム》

☆6／地属性／機械族・ペンデュラム・効果／ATK 2400／
DEF 1000

《クリフオート・アーカイブ》

☆6／地属性／機械族・ペンデュラム・効果／ATK 2400／
DEF 1000

「特殊召喚された「クリフオート」達はそれぞれレベルが4になり、攻撃力も1800にダウンしてしまうのだけど……ボクは更にこの3体をリリースしてこのカードを召喚する！ アドバンス召喚、《アポクリフオート・キラ》！」

男性とは思えないしなやかな指さばきでディスクへとカードを叩き付けるアビス。

能力を大幅に弱体化させた上級モンスター達の魂を糧に、不気味な駆動音を響かせてフィールドへと降り立ったのは——白と黒のコントラストが神々しい、空を覆いかねない程に大きな4つ足の空中要塞だった。

《アポクリフオート・キラ》

☆10／地属性／機械族・効果／ATK 3000／DEF 2600

ペンデュラム召喚から繋がった、3体ものモンスターを使用する豪快なアドバンス召喚。

会場は更なる火種が注がれ、興奮も最高潮まで達する。

「更に、リリースされたゲノム・アーカイブ2体の効果を発動！ これらのカードがリリースされた場合、ゲノムはフィールド上の魔法・罫カードを1枚破壊し、アーカイブはフィールド上のカードを1枚手札に戻す！ ボクはキミ達の場のモンスターと伏せカードをそれぞれ選択する！」

双子の場に伏せられていた2枚のカードの内1枚が破壊され、裏側守備表示で存在していたモンスターが手札へと戻された。

漂う絶望の瘴気。しかし双子の兄妹は顔色一つ変えずに処理を続行する。

「そしておまけに、Pモンスターの特色もご披露だ！ Pモンスターが場から墓地へ送られる場合は、墓地ではなくエクストラデッキへと送られる！ そしてエクストラデッキのPモンスターは、P召喚の際に召喚対象として選択することが出来る！」

通常では考えられない、モンスターのエクストラデッキへの回帰。そして、それらの効果が意味することは――。

「つまり次のターン……Pゾーンのカードをどうにか出来なきや、またあの3体がペンデュラム召喚されるって訳か!?!」

思わず漏れたクラドの驚愕。

破壊されても、リリースされても毎ターン出現する複数のモンスター達。他の召喚方法を補佐するだけではない圧倒的な『数』の力――それこそがペンデュラムの秘めた真の力だとも言うのだろうか。「そしてアポクリフオート・キララーの効果を発動！ 自分のメインフェイズに1度、相手は手札かフィールドのモンスターを1体墓地へ送らなければならぬ！」

双子の妹らしい、このターンのプレイヤーである少女は眉一つ動かすことなく、黙って手札1枚を墓地へと送った。

「さあバトルだ！ まずはアポクリフオート・キララーでダイレクトアタック！」

伏せカードを1枚だけ残した双子のフィールドへ向けて、アビスの攻撃宣言が下される。

当然、そこへ立ち塞がるのは伏せられていた1枚のカード。

「……罨カード《デモンズ・チェーン》を発動。対象としたモンスターの効果と攻撃を無効にする」

「無駄だよ！ アポクリフオート・キララーは魔法・罨の効果を受けない！ 更に言えば――」

自身に巻きつけた鎖を易々と弾き飛ばし、巨大要塞は冷徹な殺意を

双子へと向ける。

その巨軀へとチャージされていくエネルギーの奔流は、止まることを知らない。

「このカードよりレベルの低いモンスターの効果も受け付けず、特殊召喚されたモンスターへの攻撃力・守備力を500ポイントダウンさせる！ まさに無敵のモンスターなのさ！」

四方八方から放たれた色とりどりの光の雨が、双子へと降り注ぐ。

子供を相手に容赦の無い猛攻であったが、まさに必殺と呼べるモンスターへの登場に歓声は鳴り止むことは無かった。

「???&???」 LP8000↓5000

「続けてバルバロスで攻撃！ 生贄無しで通常召喚されたバルバロスなら、アポクリフオートの効果を受けることは無い！ そしてこの瞬間、ボクはレイが伏せてくれていた永続罫《スキルドレイン》を発動！」

フィールド上のモンスター効果が無効となる、強力な永続罫。本来であればデメリットを負いかねない、扱いの難しいカードであるが……。

「バルバロス本来の攻撃力は3000だ！ スキルドレインが発動されバルバロス自身の効果が消えた今、その攻撃力は『元に戻る』！ 更に言えば、アポクリフオートはボクの発動したスキルドレインの効果ですら効かないのさ！」

難攻不落の要塞は決してその力を衰えさせることなく、神に近しい獣の戦士が本来のパワーを持って双子の妹へとその槍を突き立てた。

「???&???」 LP5000↓2000
攻撃力3000の直撃。

その凄まじい衝撃で吹き飛ばされるも、双子の妹は泣き言を言うでも無くゆつくりと立ち上がった。

「おおっ!! 偉いぞボウス、嬢ちゃん!!」

子供ながらに肝の据わっていると、会場からは哀れみどころか拍手が沸き上がった。

ここでサレンダーだろうな、という多くの予想を覆し、勇ましく最

後まで立ち向かおうという姿勢を見せたことが観客達の心を打ったらしい。

「おお、ナイスガッツだ！　ボクはこれでターンエンドだよ！」

白く輝く歯を見せて、アビスがターンの終了を宣言する。

ペンデュラムモンスター。その脅威に初めて立ち向かったにしては上出来だと、選手用のモニターが設置されたロビーからはちらほらと場を離れる者も現れ始めた頃。

その瞬間は、訪れようとしていた。

「おやおや、あんなに張り切って。若いというのは羨ましいですねえ。」

隣のコートに浮かんだ巨大要塞を見上げながら、余裕の表情で構えるピュクシス。

幼い子供相手にあちらは多少気を使っているようだが、新型モンスターのプロモーションに手加減など加えれば後でどんな雷が落とされるか知れたものではない。

世渡りの『甘さ』を含めて内心で嘲笑っていると、ブロンド髪の男は無邪気にこの状況を楽しみ始めた。

「おお、流石に迫力がある！　やっぱりカッコいいですね、ペンデュラムは」

「勿論です、プロモーション用として我々にのみ配布された新規のカードなのですから」

皮肉と嫌味を込めてピュクシスが答えると、ブロンド髪の男は笑顔のまま、クリフォートへと向けていた視線を元へと戻した。

「ただ……貴方も彼らも、Pモンスターをあまり使い慣れていないようにお見受けしますが？」

ぴしり、と放たれた、プロとして聞き捨てならない言葉。

ピュクシスは剥がれそうになった笑顔の仮面を持ち直しつつ務めて冷静に聞き返した。

「……と、言うところ？」

「使い慣れた普段のデッキで挑めば、僕らに負けるコトも無かった……ということですよ」

既にドローフエイズを引き終えたブロンド髪の男は、そう言ってニヤリと口元を歪めた。

「……何？」

「メインフェイズ、僕はプリズマーの効果を発動。エクストラデッキの融合モンスターを相手に見せることで、融合素材となっているモンスター1体を墓地へと送り、このターンそのモンスターと同名カードとして扱う……」

そう言っつて、取り出された融合モンスターは――。

「僕が選択したのは《超魔導剣士―ブラック・パラディン》。よって融合素材である《ブラック・マジシャン》1体を墓地へと送る」

刹那。プリズマーの体が光を放ち、光の霧が立ち込めていく。

霧が晴れると共に姿を現したのは、ピュクシスの場にある黒衣の魔術師を鏡写しにした、同名の最上級魔術師であった。

しかしAR上で同じように再現されている筈のソレは、ピュクシスのものとは細部が違っていた。邪悪に顔を歪める褐色の男とはまるで正反対の、凜とした佇まいを崩さぬ清き白肌の男の姿があった。

「ぶ、ブラック・マジシャンだとツ……!?!」

黒衣の最上級魔術師。その使い手としても名を馳せるピュクシスにとつて、よもや最愛のカードが敵に回るなど屈辱以外の何者でもない。

まして、名前だけがコピーされた上に攻撃力は変わらずの1700。劣化も劣化、こんなものを対戦相手にと得意げに出されては、自らの品格すら落とされかねない。

ついに激昂を表情に露としたピュクシスに構うことなく、ブロンド髪の男はカードを切っていく。

「更にカードを2枚伏せ、手札の《E・HERO バブルマン》の効果を発動。手札がこのカードのみだった場合、特殊召喚が可能になる」

《E・HERO バブルマン》

☆4 / 水属性 / 戦士族 / ATK 800 / DEF 1500

劣化の魔術師に並び立ったのは貧弱なステータスのふくよかな小男。

手札には何と、オネストすら無かったのだ。守備表示で召喚されたそのモンスターの微笑みが、遂にピュクシスの怒りへ火を付けた。

「……貴様!! 私を愚弄するのも——」

「僕は☆4のブラック・マジシャンとバブルマンを『オーバーレイ』プロの激昂、ソレを遮るが如くブロンドの男が声を張り上げる。

紡がれた口上は、黒の召喚法。

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

光の奔流に飛び込んだ2つの魂が、新たに生まれ来る強靱な魂を導き出す。

眩いばかりの閃光爆発、その刹那に浮かび上がったのは——。

「エクシーズ召喚……現れる、ナンバーズ N O . 3 9 !!」

赤きそのナンバーが示すは、未来への希望。

純白と黄金に彩られた剣のオブジェが展開し、翼と剣を携えた光の巨人が姿を現した。

《N O . 3 9 希望皇ホープ》

★4 / 光属性 / 戦士族・エクシーズ・効果 / ATK 2500 / DEF 2000

『ななな、なんとお!! ここで《N O . 》が召喚ですっ!! 希望の名は伊達じゃないのかあ!』

「な……《N O . 》だと!」

ピュクシスの背に冷ややかな水滴が伝う。

攻撃力は2500。ブラック・マジシャンと相打ちにされるとはいえ、ペンデュラム召喚を駆使し万全の罠まで張ったのだ、そう簡単に崩されることなど無い……。

正体不明の《N O . 》が放つプレッシャー。しかし、それよりも何よりも、大丈夫だと言いついて聞かせている自分自身に対して奇術師は戦慄を感じていた。

やがてその戦慄は、カードとしての形を成して現実のモノとなる。

「僕はここで、伏せていた魔法カード——ランクアップマジック《R U M—リミテッド・バリアンズ・フォース》を発動。★4の希望皇ホープでオーバーレイ・ネットワークを『再構築』」

再び剣のオブジェとなったホープが、展開された光の奔流へと沈んでいく。

会場のどよめきまでその渦中へと吸い込んで、希望の光は変貌を遂げた。

「混沌の力纏いて勝利を目指せ……進化した勇姿が今ここに現れる！
ランクラップ・エクシーズチェンジ!!」

赤き光で満たされた、どこか別の世界で鎮座する扉が封印の鎖を破り解き放たれる。

そこから飛び出した光とも闇ともつかない粒子の渦が、全てを飲み込んだ。

「降臨せよ!!」カオスナンバース 《C N O . 3 9 希望皇ホープレイヴ!!》

《C N O . 3 9 希望皇ホープレイヴ》

★5 / 光属性 / 戦士族・エクシーズ・効果 / A T K 2 6 0 0 / D E F 2 0 0 0

濃紺に深紅の混じったカラーリング、鋭角に尖った各部……先の姿とは対照的な巨人が放つ攻撃的なオーラは、見る者全てを戦慄させた。

何より。観客は元より決闘者である者ですら、何故、どのようにしてこのモンスターが召喚されたのかが分からない。それが余計に肌を粟立たせる。

「え……?」

会場とロビーに、全く同種のざわめきが流れ出す。この異様な空気に耐えかねたベルは、助けを請うように他の3人を見回したが……三者は三様、凍りついたように視線をモニターへ固定されていた。

「あ、アンリさん、あれってどういうカードなんですか……?」

エクシーズの使い手である筈のアンリエールに尋ねるも、彼女はただ静かに首を横に振った。

「……分かりませんわ。魔法カードによるエクシーズチェンジなど聞

いたことがありますもん……ましてや、《C.N.O.》などという言葉も」

一息ついて、アンリエールは吐き出すように呟いた。

「あの殿方……一体何者ですの」

その道のエキスパートである彼女が漏らした戦慄。

ベルに対する答えは、それが全てであった。

「僕はホープレイヴの効果を発動!! ORUを1つ使い、相手フィールド上のモンスター1体を破壊し、その攻撃力分のダメージを与える……『Vブレードシユート!!』」

巨人が自らの翼部から湾曲した剣を抜き出し、低く雄叫びを上げながら黒衣の魔術師へと投擲する。

回転し肉薄する剣は魔術師の胴を切り裂き、遂にはその余波がピュクス自身へと襲い掛かった。

「何だと……ぐッ!?!」

【ピュクス】 LP4000↓1500

鋭く走る痛みに耐えながらも、ピュクスは必死に思考を巡らせた。

虎の子である伏せカードが破壊されない限り、決着は無い。ただそれだけに意識を集中する。

「更に伏せた2枚目の魔法カード、《死者蘇生》を発動……墓地より蘇れ、《ブラック・マジシャン》!!」

《ブラック・マジシャン》

☆7 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK 2500 / DEF 2100

まだ。伏せカードが破壊されない限り、決着は――。

そう歯を食いしばるピュクスへ向けて、黒衣の魔術師はチツチツチツと指を振った。

「ぐ……!?!」

「さて、バトルです。まずはホープレイヴで攻撃!」

下された攻撃宣言。

待ち望んでいたその瞬間に、ピュクスは声を張り上げた。

「ッ掛かった!! 罨カード発動、《聖なるバリアーミラーフォース》
!! 攻撃表示の相手モンスターを全て……」

「今、『発動』と言いましたね?」

未知のモンスターの恐怖に駆られ、失念していたその伏せカードが
ゆっくりと立ち上がる。

「罨カード《スターライト・ロード》。自分フィールドのカードを2枚
以上破壊する効果を無効にし、破壊する」

ミラーフォースの力によって反射したホープレイVの攻撃エネルギー
は、止まらない。

光の奔流はたった1枚のカードに吸い込まれ……大地を揺るがし、
光の柱を出現させた。

「なっ……!?!」

「そしてその後——とあるシンクロモンスターを1体、エクストラ
デッキから特殊召喚できる」

光の柱に現れたのは、シンクロ召喚に用いられる緑色の光輪。

その数は、8つ。

「集いし願いが、新たに輝く星となる……」

口上と共に幅を増していく光の柱。

その中に、翼を広げた竜の巨影が垣間見えた。

「光差す道となれ! 飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》!!」

その身に纏う燐粉は、白金に輝く星屑の群れ。

細く、それでいて威光を放つ白き竜は、宙へ向かって高々と咆哮を
上げた。

《スターダスト・ドラゴン》

☆8 / 風属性 / ドラゴン族・シンクロ・効果 / ATK 2500 /

DEF 2000

「な、何なんだ……さつきから妙なモンスターばかり!? おい審判員
機構、コイツに不正は無いのか!」

藁をもすがる思いでピュクシスが叫ぶも、コーパルは困ったように
首を横に振った。

『そうですね、私の方でも色々調べてみましたがー。バツチリと

データだけは登録されてるみたいなんですよ。つまり不正でも何でもない、真正正銘のレアカードということですよ」

「そ、そんな……!!」

自分達だけに渡された、未だ使用者の無いペンデュラムカード。

それを使い、輝かしく開かれる栄光の道……そんな幻想の光景が音を立てて崩れ去る。

「さて、ジャツジタイムは宜しいですか？ ホープレイVの攻撃を続行します……『ホープ剣・Vの字斬り』!!」

魔人の剣戟が、女魔術師の儂い命を散らす。

師匠の死によって僅かばかりに上がった攻撃力も、最早何の手助けにもならなかった。

【ピュクシス】 LP1500↓1200

「や、やめろ……!!」

「それは無理なご相談です♪ スターダストで攻撃……『シューティング・ソニック』!!」

こんな所で負ける訳にはいかないんだ。

プロとしての悲痛な叫びも飲み込んで、白き竜が放った星屑の吐息は2人目の女魔術師をも葬った。

「ぐうっ……!?!」

【ピュクシス】 LP1200↓1000

「た、頼む!! スポンサーやファンが見ているこの舞台で、まして新型モンスターを使いながら負けたなど!! 私の評判が……!!」

ピュクシスの懇願を受けたブロンド髪の男はにっこりと微笑むと、隣のコートをちよいちよいと指差して見せた。

「それには心配及びません、評判を落とすのは何も貴方だけではありませんよ？ 見て下さい、あちらの方もどうやら決着が付きそうですから」

「は……?」

言われるがままに、ピュクシスが視線を向ける。

そこには、1枚のカードを構えた双子の兄の姿があった。

「どうしてキミが、そのカードを……!!」

声を震わせて尋ねるレイ。
感情の無いオッドアイの瞳は一言、応えた。

「手札から。スケール5の《アスタリスクスヴァージュラ——**——阿雷虎》をPゾーンにセッティング」

浮かび上がる光の柱。

琥珀色の宝玉を抱いた猛虎の石像が、ふわりと浮かび上がる。

「……《アイオロス——**——吽風龍》の効果を発動」

それと同時に、妹が兄の言葉を継ぐように口を開いた。

「《——**——阿雷虎》がPゾーンに置かれたとき、墓地のこのカードを空いているPゾーンに置くことができる」

いつの間に、と言い掛けたアビスの口が思わず塞がる。

手札を経由し、墓地へと直接『リリース』させたのは他でもない自分達だったからだ。

「……スケール3の《——**——吽風龍》を、Pゾーンにセッティング」
碧色の宝玉を抱いた龍の石像が並び、アスタリスクスの名を持つペンデュラムモンスターが揃い踏み。

《——**——阿雷虎》

【Pスケール：青5／赤5】

《——**——吽風龍》

【Pスケール：青3／赤3】

「……と唾を飲み込みつつ、レイは何とか言葉を返した。

「……し、正直驚いたよ！ だけどそのスケールで召喚出来るモンスターは☆4のモンスターだけだ!! それでは——」

「ヴァジュラ、アイオロスのP効果を発動」

「……それぞれがPゾーンに置かれているとき」

「同名モンスターのみをペンデュラム召喚する場合」

「……スケールに関係なく、それを可能な限り特殊召喚出来る」
交互に重なる、幼き双子の美声。

それは既に多くの人々の理解の外にあり、これから起きる出来事は
全てそういうものだと思われ受け入れる他に無かった。

「揺れる。魂のペンデュラム」

「……天空に描け、光のアーク」

天を穿つ円環。その幻想的な光景は最早当たり前のように記憶の
中へと溶け込んでいく。

「ペンデュラム召喚」

「……現れよ、我が僕のモンスター達」

やがて降り立った気高き3つの魂すら、人々はただ静寂を持って迎
えた。

《青眼の白龍》

☆8 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 3000 / DEF 250

0

《青眼の白龍》

☆8 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 3000 / DEF 250

0

《青眼の白龍》

☆8 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 3000 / DEF 2500

それは、異界の地において刻まれた伝説の再現。

この場にいる誰もが知る由も無かった。牙を剥き、吼えるその白き龍達がデュエルモンスターの起源とも呼べる存在であることを。

「手札から装備魔法《巨大化》を発動。青眼1体に装備し、その元々の攻撃力を倍にする」

《青眼の白龍》

ATK 3000 ↓ 2500 ↓ 5500

魔法カードによる助力を得て、その力を膨らませていく伝説の白き龍。

アポクリフト・キラーの効果によって攻撃力が下がっていたものの、その攻撃力は5500にまで上昇した。

「伏せカード。速攻魔法《サイバネティック・フュージョン・サポート》発動」

「……ライフを半分支払うことで、機械族モンスターの融合素材を自分のフィールド、墓地、手札から除外することで使用出来る」

「???&???」 LP 2000 ↓ 1000

この場にいる誰もが知る由も無かった。今、この光景そのものが、これまでデュエルモンスターの未来を切り開いてきた伝説の舞台そのものだということ。

「魔法カード《融合》発動」

「……墓地の《サイバー・ドラゴン》3体を除外し、融合召喚」
伝説は紡がれる。

際限なく、その力を存分に示しながら。

《サイバー・エンド・ドラゴン》

☆10 / 光属性 / 機械族・融合・効果 / ATK 4000 / DEF 2800

銀の装甲に身を包んだ三つ首の機械龍。

先に並んだ白き龍にも劣らぬ名声の持ち主であることなど、誰も知らない。

「こ、攻撃力……4000」

「バトル。青眼の白龍でアポクリフオート・キラーに攻撃」

魔法・罠の効果、モンスターの効果すら寄せ付けない無敵の要塞。その突破口は実に単純だった——その攻撃力を、上回ればいい。

「『滅びの爆裂疾風弾』
バーストストリーム」

収束する光の粒子が、蒼き聖なるブレスとなって要塞を貫く。

その余波は華奢な2人を軽々と吹き飛ばした。

「う、うわああああ!?!」

「レイ&アビス」 LP8000↓5500

「そ、そんな、そんな……!!」

「……バトル。サイバー・エンドでバルバロスを攻撃」

まだ幼く、柔らかな五指が命令を告げる。

アポクリフオートの撃墜により本来の攻撃力を取り戻した機械龍は、必殺の一撃を放たんと出力を上げ、その顎に光を溜めていく。

「……『エターナル・エヴォリユーション・バースト』」

その名が示すは、永遠に絶える事の無い3本の光槍。

圧倒的なその力は、獣の王を呆気なく葬り去った。

「レイ&アビス」 LP5500↓4500

「あ、ああ……う？」

「さて。ご理解頂けましたか？　これで詰チエックメイトみです」

3人のプロデュエリストに浮かぶ絶望は、やがて思考を巡らせ気付かせるに至った。

慣れないデッキを使ったからだとか、そういう下らない理由を付けたから負けた訳では無いと。

根本的な何かが、違う。

自分達と彼らとでは、絶対に覆ることの無い何かが。

「……これで伝説は辿られた。貴方達を超えることで、僕達はその称号を手に入れる」

ニイ、と歪んだ三日月の口に、ピュクシスは最後の気力を振り絞って尋ねた。

「な、何を、言っ……」

「言っただでしょうか？　僕は貴方と戦うこの瞬間を、ずっと待ち焦がれていたんですよ。ずっとずっと……ね」

黒衣の魔術師が杖を振るう。

奇しくもそれは、隣のコートで白き龍がブレスを放つのと同時であつた。

「……『黒・魔・導』」

『ピュクシス』LP1000↓0

『レイ&アビス』LP4500↓0

鳴り響くブザーに、歓声の合いの手は無い。

しんと静まり返った会場の中でただ2人。人で無いが故に普段通りのアクションを見せる審判員の声だけが木霊した。

『う、勝者!!^{ウイナー}【ドミノ】、ユーギームトウ選手!!』

『同じくBコート。勝者、【ドミノ】ジェイ&ケイ選手』

ベルは思わず、隣に立つユウの顔を見上げた。

そこにあつたのは自分達と同じ様に愕然と目を開いたポーカーフェイスの素顔だつた。

第24話 青い古傷

藍の思考は、しばらくの間硬直していた。

恐らくはこの大会、最大の障害となったであろうゲストチームが僅か数ターンで破れ去ってしまったその真実に、情報の整理が追いつかない。

これだけの人が集まりながらも、吐息一つ聞こえない不気味な静寂。それは渦中の人物——ユーギムトウが片手を上げて微笑んだことで唐突に封を破られた。

ざわめきとも賛美ともつかない歓声がいびつに巻き起こり。そこでようやく、藍は自分が『伝説』の瞬間に立ち会ったということを理解した。

（つて、呆けてる場合じゃないわ！ 早く話を聞かないと——）
駆け出したタイミングは、皆ほぼ同じだったのだろう。

藍がユーギの元へ参じたときには、彼を囲む報道陣がまるで肉食獣のようにわらわらと群がっていた。

一言、コメントを。

使用されていたカードは一体何ですか。

今のお気持ちについて、何か。

本来であれば、ここでインタビュウを受けていたのはペンデュラムモンスターを使用し、華やかな勝利を決めていたプロデュエリスト達だった筈だ。

そんな報道の『プロ』達が向ける矛先は今や、正体不明のカードで青天の霹靂を打ち立てたダークホースへと向けられていた。

「ははは……今はちよつと疲れているので、後にして頂けませんか？」
ボイスレコーダーやマイクをこぞつて向けているのは、揃いも揃って美人レポーター達だ。普段の彼であれば食事にでも誘っているところであろうが、我先にと特報を狙う貪欲な眼差しに気圧され流石に笑顔を引き攣らせている。

幾つも覗く重厚なレンズから逃れようと、あちこちに視線を泳がせるユーギ。遠巻きに様子を眺めていた藍と目が合うや否やするりと

報道陣の壁を抜け、藍の足元に恭しく膝をついて見せた。

「Quantotempo、黒髪の美しいお嬢さん!!」

いつもに増して演技掛かった笑顔に向け、ユーギは藍の手を取る。かと思えば驚く間もなく、軽くその手の甲に口付けた。

「なっ……!!?」

瞬間。まるで『鬼』の役でも手渡されたかのように、渦中の人物はユーギから藍へと変わった。

ユーギ選手とはどのような関係で？

確か、今大会の出場選手ですよね？

マイク、カメラ、ボイスレコーダー。銀色の銃口は一斉に藍へと向けられ、質問の弓矢が次々と繰り出される。

本来なら聞く立場であるはずの決闘ジャーナリストはその迫力に気押されてしまい、あつという間に周りを囲まれてしまった。

「それでは、僕はこれで失礼します。Arri^{またお会いしましたよう}video」

「あっ!? ちょっと……!!?」

ぴっ、と警戒に指を切つて、混乱に乗じたユーギはまんまと逃げ出していく。

後続く双子も、ちらりと横目を向けて

「がん」

「……ば」

と呟くと、ちよろちよると子猫のように姿を消してしまった。
(くっ……擦り付けられたわね)

後に残されたのは、何やら渦中の人物と関係を持っていそうな女が1人。彼らにとっては格好の獲物だ。

同業者の習性を良く知る藍は素直に弁解しようとして、溜め息を付きながら口を開いた……その刹那、1人の女レポーターが怪訝に眉を寄せて言った。

「あら? そのお顔、どこかで拝見したような……?」

何気ない一言。しかし藍の背筋には、何ともいえない悪寒が走った。

レポーターの疑問を皮切りに、周囲の報道陣へもぎわめきが伝染し

ていく。

そういえば、どこかで。

このまま疑問が連鎖すれば、いずれ誰かが『答え』に辿り着くだろう。

藍は慌てた様子で頭を振ると、顔を隠すようにして俯いた。

「き、きつと気のせいです!! あと、さっきの彼とは何の関係もありませんから!!」

フリージャーナリストの組合証を盾のように顔の前に突き出し、声を張り上げる。

なんだ同業者か、と報道陣から僅かばかりの嘆息が漏れ出たその一瞬の緩みについて、藍は逃げ出すようにその場を立ち去ったのだった。

(参ったなあ……まさかこんな所で……)

結局。藍はそれ以上ユーギに接触することは叶わず、騒ぎの裏でひっそりと退場したプロチームにもペンデュラムモンスターについての情報を引き出すことも出来なかった。

チームに貢献できなかった落胆と自分自身への憤りが重なる最中、藍の『悪寒』は未だに背中を這っていた。

——まさか、『再び』カメラを向けられることになろうとは。

他人のスクヤンダルを食い物にしておきながら、自分自身はカメラを向けられることが怖いだなど……虫の良い話だとは思いますが、今更この生き方を変える訳にもいかない。

それが、『彼女』達への——。

「さっきは危なかったですね、先輩?」

聞き覚えのある、透き通ったガラスのような女の声。

背後から掛けられたその声に驚いた藍がぱつと振り向くと、そこに立っていたのは……。

「カメラなんて向けられるの、久し振りなんじゃないですか?」

白地に青い花の刺繍が彩られた、細身のドレスを纏った美少女だった。

藍と比べても引けを取らない見事なプロポーションに、目鼻の整った可愛らしい顔立ち。よく手入れされた黒髪は左右で輪を描いており、その絢爛な出で立ちから彼女がどこかの『商品』であることが容易に窺えた。

「……あなた、どうしてこんな」

「どうしてこんなところにつて？ それはこっちの台詞ですよ」

少女が口元に手を当てて妖美に笑う。

あくまで、笑っているのは紅に染まった唇だけだったが。

「ひよつとして『他人の粗探し』、もう飽きちやったんですか？」

その深い碧色の目は、責め立てるように藍を縛り付けている。

藍も何か言い返そうと一瞬口を開きかけたが、罰が悪そうに目を伏せるとそのまま黙り込んでしまった。

「いいですよ。先輩がドコで何をしようよ、私たちには関係ないんですから」

ただ、と一言付け加えて、少女は低く呟く。

「私は絶対に、あなたを許しませんけど」

何かがピツと鋭く風を切る。

俯いたままの藍の頬に、冷たい痛みが走った。

「それ。もういらないんでお返しします」

藍の頬を切り裂いたソレがパタリと足元に落ちる。その正体は、古ぼけた一枚のカードだった。白い肌にじわりと赤い線が浮かび上がるも、藍はそれを袖で拭うことすらしない。

「捨てようかとも思っただんですけど。イライラしたとき結構ストレス解消になってたんですよ、それ」

見れば、裏向きに落ちたカードには無数の小さな穴が空いていた。

何度も、何度も、何度も。恨みを込めて針か何かで刺されたのであろうソレには、ある種のおぞましが伝わってくる。

「そうだ、情報大好きな先輩にイイコト教えてあげます。先輩が戦う次の相手、私たちなんですよ。私は先発で出る予定なので、よろしくお願ひしますね？」

カツカツと靴音を鳴らして、少女は立ち尽くしたままの藍の横を通

り過ぎた。

去り際に、ふと耳打ちを残して。

「……まあ、そんな度胸があればのお話ですけど」

少女の言葉は、カードに穿たれた針穴のようにプツリと藍の心に痛みを打ち付けた。

「……………」

涙も、怨嗟も、怒りすら無く。ただ黙って足元のカードを拾い上げる。

カードをしばらく見つめた後、藍がゆつくりと歩き出すことが出来たのは、少女の靴音が遠のいて完全に消え去った後だった。

陽も落ちかけた夕刻のシガマ。

この地にふさわしく橙色に染まった街を、ユウは昨夜と同じように眺めていた。

「……………来たか」

絶え間なく飛び去っていく旅客機が夕陽を返し、ユウの背中を見つめるベルの顔を照らす。その表情はどこか複雑で、どう話を切り出そうか迷っているようだった。

「……………ユウさん。あの、昨日の話のことなんですけど」

「ユーギムトウ。奴の話だろう」

途切れ途切れに呟かれたベルの問いは、先回りをしたユウの言葉に遮られた。

ユウが先日語った、彼の世界では伝説とまで呼ばれる決闘者。その彼と同じ名前を名乗り、プロデュエリスト達をも易々と葬ったブロード髪の男。

他にもベルが聞きたいことは山ほどあったが、色々と整理を付けてまず最初に飛び出したのはそのことだった。

「それじゃあやっぱり、あの人はユウさんが言ってた……………？」

「……………いや、奴は違う」

ベルの予想に反して、ユウは静かに頭を振った。

「黒衣の魔術師を従え、神と呼ばれるカードですら自在に操ったとされる伝説の決闘者……彼の姿を写した記録を見たことはあるが、奴とはまるで別人だ」

ふつと振り返ったユウはいつものポーカーフェイスで、驚きに歪んだ先刻の彼はもうどこにもいない。

「そう、なんですか……」

「あの名前が単なる偶然なのか。偽名だとすれば奴にどういう意図があるのか。それも分からないが、な」

ユウの口から小さく溜め息が漏れる。

唯一、今日の出来事についてキーワードを持っている筈のユウが戸惑いを見せたことで、ベルの不安にも濃い霧がかかっていく。

言い知れない悪寒を拭うように、ベルは日和見的な意見を口にした。

「誰も『伝説』を知らないのに偽名を使う意味は無さそうですし、単なる偶然なんじゃ……?」

それを受けたユウは即座に首を横に振って、否定の意を示す。

「そう思いたいのは山々だが、奴は『ムトウユウギ』の使用していたカードの他にも『伝説』と呼ばれた決闘者の用いていたカードばかりを使用していた。アレは俺のいた世界でも、いわば『おとぎ話』の世界の産物だというのにな」

「おとぎ、話……?」

夢、幻、架空の存在。クラドやアンリエール達の反応、そして何よりユウの表情を思い返せばそんな事実にも頷ける。

「同じような存在だった筈の《No.》^{ナンバーズ}をこっちで見るときも驚いたが……奴の持っていたカードはその中でも別格だ。どうやって奴らがそんなモノを手に入れたのか知らないが、もしアレが本物だとすれば……俺達のような並みの決闘者ではまず勝ち目は無い。わざわざそんなモノまで用意しているところを見ると、奴にはやはり何かしらの意図があるのだろう」

ユウの実力を持ってしても勝ち目が無いとまで言わせる伝説の

カード達。

双子の決闘者が従えていた3体の白き龍、その名前をヒヨリが口にしていたことを思い出し、ベルの中ではこれまでのユウの話が真実味を帯びてきていた。

「……それじゃあ、あの人もユウさん達と同じ世界の……ってことですか？」

「恐らくは。それにこの大会に出場していることと《アスタリクス》を所持していることを考えると……色々と話を聞く必要がありそうだな」

そう言い切ったユウの目は、鋭く細められた。

勝ち目が無いと言いつ切った相手にすら平然と挑みに掛からんとする、そんな険しい表情だ。

大切なものの為に。その表情が意味することに、ベルの胸が僅かな痛みが走る。

「……そう不安そうな顔をするな。もし奴と相見えることになっても、それは俺の役目だ」

ベルの表情を違った意味で受け取ったらしく、僅かに口元を緩めたユウは不器用な言い回しで宥めて見せた。

目的の為にただカードを振るう姿も、強敵との出会いを喜ぶような先程の姿も。こうして自分を思いやる優しい姿も……無表情の仮面の下に隠れた同じ男の姿。

「……すいません。こんなときに変なことを聞きますけど、いいですか？」

普段は無口な師の『優しい姿』に今は甘えることにして、ベルは思い切って訪ねることにした。

「ユウさんは今日のデュエル……『楽しかった』ですか？」

唐突なベルの問い掛けに、ユウ目が僅かに丸くなる。

「……何故、そんなことを？」

「ユウさんにとって、この大会は絶対に負けちゃいけない筈……ですよね？ でも今日のデュエルは、とても楽しそうに見えたんです」

真剣に戦って欲しいと責められているのだろう、とユウは考えたの

だろうか。

ユウが頭を下げようと僅かに腰を下げたところで、ベルは更に言葉を続けた。

「……わたしは、今日のデュエルは凄く『楽しかった』んです。だから今日の試合を終えてみて、ずっと分からなくて。デュエルの本当はどっちなんだろうって」

「デュエルの、本当？」

首を傾げたユウに、ベルは目を伏せたまま答える。

「これまでずっとデュエルって辛くて、怖いものだと思ってました。負けたら何かを取られたり、誰かが傷ついたり。でも今日のデュエルはアンリさんと一緒に頑張って、お客さんから声を貰って……」

思い返せば頭に響く観客の声援。どちらの勝利も敗北も、惜しみ賞賛する。

熱が渦巻く中でお互いに全力を出し切り、ほんの僅かな運の差で勝利を手にした。

「……戦い終わった後も、サラさん達と仲良くなれた。それが凄く嬉しかったんです」

思えば、ベルにとってデュエルはずっと「生きるための目的」だった。敗北とは何かを失うことで、大きな力を持った決闘者は力無き者を虐げる畏怖の象徴。

だからこそ、今日の大会は彼女に変化をもたらしたらしい。

「でも、もし負けていたら。ヒヨリさんに繋がる手掛かりがなくなっちゃったかもしれない。それはユウさんだって同じ……いえ、それ以上だった筈です。でも今日はユウさんも、デュエルを楽しんでいるように見えたんです。だから余計に分からなくなっちゃって」

「だから……俺に？」

「はい。今のわたしの気持ちの間違ってているなら、全力で叩き直さなきゃいけないと思って。ヒヨリさんのことも、ユーギさん達のこと……このままじゃきつと、足手まといになっちゃいます。だから教えて欲しいんです、デュエルを楽しんで良いのかどうかを」

デュエルとはどういうモノなのか、おぼろげになってしまったその

輪郭をはつきりさせたい。ベルの真剣な眼差しを受けて、ユウは少し考え込むように目を伏せると、そのままぽつりぽつりと言葉を吐き出した。

「……悪いが、俺にその答えは出せない」

きつぱりと言い切られたその言葉を受けて、ベルは目を伏せた。

「そう、ですか……」

「今日の試合も、悪いが俺には『楽しみ』を感じることは無かった。だからデュエルの姿がどうあるべきか……それはお前自身が向き合い、決めるべきことだと俺は思う」

自分自身で決めろと言い切って、しかしユウは自分自身の言葉を取り繕うように言葉を続けた。

「……参考までに、俺が出した答えを話そう。あちらの世界にいた頃は、俺もデュエルを楽しいと感じていたことがあった」

言葉を切って、遠い目を虚空へと向ける。

その脳裏に過ぎる記憶はいつの頃なのか。他ならぬヒヨリとの思い出だと理解して、ベルは僅かに目を伏せた。

「ただそれは、あくまで自分のために戦っていたからかもしれない。腕を磨き、熟考を重ね……師ヒヨリに近づいていく自分自身に喜びを感じていたからだ」

自分の成長を実感する喜び。それは恐らく、今のベルと同じだったのだろう。

「だが今、俺がカードを切るのは自分の為じゃない。だからどんな強敵と正々堂々、死力を尽くして戦ったとしても……そこに喜びも楽しさも無い。だが——」

ふとベルが顔を上げると、ユウの真剣な眼差しがあった。

「デュエルが好きであること。それは恐らく、今までもこれから変わらない。それが俺の出した答えだ」

その言葉に、偽りの陰りは無かった。

かつて横暴に力を振るうデュエルが嫌いだと言っていた自分が、今や戦うことに楽しみを見出している。そのことに今更気が付いたベルは、どこか雷に打たれたように目を丸くした。

「楽しむことも、ひたすらに相手を倒すことも……どちらもデュエルの在り方だと思う。新しい在り方を見つけたのなら、その度に考えて悩み、自分の信じるデュエルをすればいい。他人の在り方に左右される必要はない。どんな形になろうとも、そう思えるだけの魅力がデュエルにはある筈だ」

きつかけこそ切羽詰まった事情があった。しかし今は、違う一面を見出せるほどにデュエルを『好き』になっていた。

敗北の許されない真剣勝負も、勝敗に関わらず全力でぶつかり合える今日のような戦いも……どちらもデュエルが持つ魅力の1つ。

好きなものを楽しむ。

そんな当たり前なことだって、決して間違いではない。

「……どうやら、ひとまずの『答え』は見つかったようだな」

ユウは口元を緩めてそう言うのと、くるりと背を向けて再びシガマの空へと目を向けた。

鉄の翼が飛び交う茜の空には、既に群青の色が落ちかけていた。

——メイ、お前なら分かるだろう!! 今がどんなに大事な時期か!! 乱暴に肩を掴まれた黒髪の少女は、その剣幕にビクリと肩を振るわせた。

今朝方、仕事へ向かう前にそつと頭を撫でられたあの優しい時間が、今は遠い昔のようにも思える。

——お前達は、俺達は……ここで終わる訳にはいかないんだ!! 分かるだろう!?

血走った目。紫色に染まった震える唇。

そこには彼女が良く知る、スーツの似合う頼れる男の姿は無かった。

——お前は、何も見なかった。良いな?

肩を掴む男の華奢な手は。これまで自分達を支え、押し上げてきてくれた両手は。

罪という汚れで、真っ黒に染まっていた。

——良いな？

何度も何度も、念を押すように男が呟く。

少女は正義感が強かった。到底、見逃すことなど出来ない。

だが彼女の脳裏に過ぎつたのは、共に階段を上つて来たチームメンバーの笑顔だった。

——頼むよ、メイ……!!

今、彼を失えば彼女達が、自分達がどうなるか……想像するに難しくない。

泣き崩れた男を見て、少女は遂に首を縦に振った。

——ありがとう、メイ……!!

それは正直に、真っ直ぐに生きてきた彼女がついた、最初の嘘。

嘘は、決して一度だけでは済まされない。

一度ついた嘘を隠すために嘘を付き。その嘘を隠すためにまた嘘を重ねていく。

それから先の人生で『真実』を求める彼女が嘘で塗れる原因となった、その日の出来事だった。

「……上がつてきませんわねえ」

ベルの調整相手をしていたアンリエールが、痺れを切らしたように呟いた。

サラのデツキを拝借して早速、夢中でデツキの調整を行っていたべルだったが、言われて初めて気が付いた。藍が風呂場に入ったきり、上がつてこないのだ。

2人とも先に入浴を済ませて、今は簡素な寝巻きに着替えている。なので待ちぼうけという訳でもないのだが……それにしても遅過ぎる。

「全く……帰って来るなり鼻を膨らませて『デツキ調整お願いします!!』とか言い出す芋メイドといい……今日はどなたも、どこか変で

すわねえ」

「わたしそんな変顔してませんよ?! 失礼な!!」

アンリエールの顔芸にツツコミを入れてみるが、備え付けの風呂場からは何の返答も無く、ただシャワーの流れる音だけが響いている。

「……反応なし、ですわね」

「流石に気味が悪いですわ。見てきなさい、ベル」

何でわたしが、と言い掛けたものの、何か大事があったのではという不安も拭えず、ベルはそろりそろりと風呂場に近づいていった。

決して広くは無い部屋の床を、爪先がぎしぎしと鳴らしていく。

「ら、藍さあ〜ん……?」

ばこん、と脱衣所の扉を開けると、シャワーの音が一回り大きくなった。

曇りガラスの向こうに見える藍のシルエツトに違和感を覚え、脱衣籠に『何も無い』ことを確認したベルは、跳ね上がる心臓の鼓動を合図に勢い良く浴室のドアを開け放った。

「藍さんっ!?!」

飛び出してくる白い湯煙が晴れる。

ゆっくりと振り向いた藍は、ベルの姿を見ると驚いたように目を丸くしていた。

「……ベルちゃん?」

聡明で、物腰の柔らかな黒髪の美女は、まるで壊れた人形のように座り込み。

衣服を着たまま、ざあざあと頭からシャワーを被っていた。

「な、何やってるんですか?! もしかしてずっと……!?!」

驚くベルを見つめながら、藍自身も自分の身に何が起こっているのかを把握していないようだった。ずぶ濡れになった自分の身体を眺めて、不思議そうに小首を傾げている。

「どうしましたの……っつて!?!」

ベルの声に驚き、駆けつけたアンリエールも仰け反って驚く。

「ええっと……あはは」

情けなく笑って見せる藍だが、その目元が赤く腫れていることに気

が付いたベルは怪訝に眉を寄せたままだ。

「藍さん、あの……何かあったんですか？」

「ごめんね、少しぼーっとしちゃって。大丈夫だから……」

「はあ……もう呆けてるってレベルじゃありませんわよ？」

よろよろと壁に手をつけて立ち上がり尚も虚勢を張ろうとする藍だったが、その声は擦れて僅かに潤んでいる。

帰って来たときに服装の乱れも無かったことから、乱暴をされたという訳でも無いだろうが……精神的にかなり参っているようなのは明白だった。

「しっかりと下さいまし？ 貴女がそんな様子では——もご!？」

「アンリさん、ちよつとチェーン挟みますね」

アンリエールなりの心配なのだろうが、小言が始まりそうな気配を察したベルが口元を塞いだ。

こほんと咳払いを1つして、ベルは笑顔を作って言った。

「藍さん、これから一緒にお風呂行きましょう！ 3人で！」

「……え？」

驚いたのは、口を塞がれていたアンリエールも同じだった。

「ぷはっ……って何を言ってますの!？ もう私たちは湯浴みを済ませ……」

「入り直ししましょう！ 下に皆で入れる大きなお風呂があるってクラドさんが言っていましたし、折角ですから！」

「折角って、そんなの貴女と藍が行って来れば……」

「まあまあそんなこと言わずに、今更ですけど女3人で親睦を深めましょう！ ね？」

「ちよ、ちよつと!？」

さあさあ準備してきて下さいねー、とアンリエールの背中を押して浴室から押し出すと、ベルはくるりと向き直ってバスタオルを藍へと渡した。

「……話せないことでしたら別に構いません。暖かいお風呂に入つて、少し落ち着いて。ほんの少しでも話したくなったら、そのときはわたし達に話してください」

悩みのモヤモヤは吐き出すに限る。

つい先程、ユウと話したことで胸のつかえが取れたばかりのベルはそう思っていた。

今日は色々な事があって、皆何か抱えていることがある筈だ。恐らくはアンリエールも。

短絡的な方法だとベルも我がことながらに思ったが、今はそれ以外に思いつかなかったのだ。

「軽く身体を拭いたら、一緒に行きましょう！」
ベルが笑顔で首を傾けると、藍は黙って頷いたのだった。

* * *

「ふう……ペンを持ってきて正解でしたわ」

湯船の中で優雅に脚を伸ばすアンリエールが、溜め息と共に呟いた。

今日の試合が終わるまで、アンリエールがプロデュエリストだと知らなかった客も多かったのだろう。すれ違う何人かからサインを求められることも多くなった。

ソレを見越していたのか、準備万端であったアンリエールは戸惑う2人を尻目にサラサラとファンの要望を書き流して、鼻歌混じりに浴場まですんなりと到着したのである。

「人目があるからと遠ざけていましたけれど、やはり湯浴みはこうでなくては。あんな脚も伸ばせない湯船では浸かった気にもなれませんわ」

旅の間はシャワーを浴びれるだけでも大変だ。これまでも色々と不満はあったのだろうが、高貴な幽霊姫も今は随分とくつろいでいる。

一番乗り気でなかった彼女が満喫している様を見て、ベルはくすりと微笑んだ。

「……なんですか？ はしたなくプカプカと肉を浮かべてからに」
「他のお客さんも居るんですからそういうこと言わないで下さい!!」

ぱちゃん、とたわわな胸を隠すベルだが、見渡せば他の女性客たちからジロリと鋭い眼差しを集めてしまった。アンリエールの言う『慎重ましき』体型の女性ばかりであったことが災いしたらしい。

「これ、騒ぐんじゃありませんわ。周りの方に迷惑ですの」
「ぐうう……」

ちらり、と隣で浸かっている藍を横目でみやるも、物憂げに瞼を伏せたままで特に反応は無い。普段なら過敏に反応しているところなのだが。

何か反論をしようと両脇の2人を眺めると、2人とも長い髪はタオルでくるりと巻いて纏め上げていた。普段は隠された白い肌に彩られたうなじが、何とも言えない女性の色香を醸し出している。

対する自分とは見比べてみるも、セミロングで癖の強い髪はわざわざタオルで巻いてやる必要すら無い。メリハリの無いボディラインも子供っぽく、胸だけがバカみたいに張り出しているだけだ。

自分よりもよっぽど、ここにいる女性達の方が魅力的じゃないか……と心中で毒づいたベルは、ぶくぶくと顔を半分鎮めた。

「……ありがとう、ベルちゃん。ここまで私を連れ出してくれて」
不意に、藍がぼつりと言葉を漏らした。

「いえいえ。わたしも、さつきまではちよつとウジウジしてましたし」
「そうでしたの？ 今日折角、華々しく勝利を飾れたというのに」

「……そう言うアンリさんは、何も思わなかったんですか？」
勿論、彼女達はユウやユーギ達の事情を知らない。

ソレを考えれば無理は無いのかもしれないが、話を振られたアンリエールは僅かに声のトーンを落として、答えた。

「……先行きが不安でないと言えば嘘になりますわね。あの殿方が使われていたカードのこと。私の知らないエクシーズ。《アスタリスクス》のペンデュラムモンスター……正直なところ今は考えても仕方が無いと、なるべく考えないようにしているだけですわ」

ちやぷん、と伸ばしていた脚を抱えて、アンリエールは続ける。

「……藍、貴女は強い女性です。あの殿方の取材に失敗したからといって、気に病むような性格ではないでしょう。その貴女がそこまで

気に掛けていることが何なのか、深く尋ねることはしませんが……それがこの先、私やユウ様を困らせるようなら、今ココで吐き出してしまいなさい。今日が終わって不安なのは皆同じ。貴女を笑ったり責めたりする者など、ここには居ませんわ」

長いまつげをそつと閉じながら。アンリエールは最後、囁く様に言い切った。

「……ありがとう。それじゃあ1つだけ、聞かせてくれる？」

歳の離れた少女2人に気遣われ、藍の声色が僅かに潤む。

「……大切な人達に、昔『嘘』をついたの。その人達はすごく傷ついたし、私はもちろん嫌われた。けど……その人達に謝れるとしたら、ちゃんと私の『真実』を伝えられるなら。2人だったら、どうする？」

ちゃんと向き合える？ それとも逃げ出してしまう？」

しばらく口を噤んでいたベルとアンリエールだったが、やがて口火を切ったのはアンリエールだった。

「私なら逃げますわ。そのような度胸も、面倒事を処理できる力もまだありませんもの」

デュエルマフィア 決闘組のお嬢様らしい答えだと、藍は思わず苦笑したが。

「でも貴女は、藍の答えは違うのではなくて？」

ぴくり、と。身体のどこかが僅かに跳ね上がる。

アンリエールの鋭い視線に続くように、ベルも口火を切る。

「わたしは多分、ちゃんとその人たちと向かい合うと思います。今日のことでもそうですけど、一度抱えたモヤモヤってどこかで解決しないと気が済まないみたいで……それは藍さんも同じじゃないですか？」

アンリエールのように、初めから『逃げ』の選択肢があるのなら。あんなに壊れてしまうまで自分を追い詰めることもなかった筈だ。

向き合うことしか回答が無かったから。その重圧に耐え切れなくなつて、崩壊してしまつたのだろう。

だから、今の藍に必要なのは迷いの解決ではなく――。

「藍さん、ここは自分に『嘘』をついちゃいませんか？ 怖がつてる本当の自分に嘘をついて、その人達と決着をつけるまで。わたしと最初に戦つたとき、あんなに怖いセキュリティの人を演じてた藍さんな

「出来る筈ですよ！」

「自分に、嘘を……」

嘘を隠すためには、また嘘を重ねなくてはならない。
それなら、もう一度嘘を重ねよう。

「……2人とも。もう一度だけ私のお願いを聞いて貰える？」

瞳に輝きを取り戻した藍を見た2人は、笑顔でこくりと頷いた。

「おお、何だ何だ？ 湯上り女性陣が男部屋に何の用だ？」

ふわりと漂う甘い香りに戸惑いつつも、クラドは引け腰気味に3人
を中へと招いた。

適度な清潔感が保たれた男部屋には、やはりというべきかユウが机
を占領してカードを広げているところだった。

「……ユウ君、クラド君。ちよつと相談があるのだけど」

部屋の隅に膝をついて、藍が真剣な眼差しを向ける。

いつの間に用意したのか、ユウの傍らには飲み物の入ったコップを
持ったアンリエールが待機していた。

「ど、どうした、姉ちゃん？」

「……随分と物々しいな。何かあったのか？」

只ならぬ様子に、ユウもクラドも小首を傾げる。

少しの間を空けて。本当に数秒迷うような仕草を見せてから、藍は
意を決したように切り出した。

「次の試合は、私を先発で出して欲しいの」

第25話 地獄から響く唄

「先輩、やりました！ 初勝利です！」

「やったね蓮^{レン}！ 一緒に練習した甲斐があつたわ！」

白い歯を並べて笑う黒髪の少女に、まだ『湊美麗^{ソウメイリイ}』と名乗っていた少女はパチパチと手を叩いて喜んで見せた。

歌唱力とパフォーマンス、そして『実力』を見せ付けるのには手っ取り早いデュエルモンスターズ。その3つの力量が求められる芸能界での彼女達の立ち位置はまだ中の下。

ジュニアアイドルグループとしては歌もパフォーマンスも中々に好評だが、あとは人々の間で話題になる『箔』さえ付けば、鰻上りに人気は高くなるだろう。そんな評価が下されていた頃の話だ。

他のメンバーよりも一回り年上で落ち着いた雰囲気のと、甘え上手な黒髪の少女——蓮の2人は特に仲が良かった。

まだまだ知名度の低い彼女達であつたが、とりわけこの2人の組み合わせだけは世間でも話題になることが多く、他のメンバーからも羨ましがれる声も多かった。

「先輩がくれたこのカード、やっぱり私のデッキに凄く相性がいいたいで！」

「そう、良かった！ 蓮が頑張ってくれたおかげで、私たち『アトランタ杯』に進めるのよ！」

2人の周りに他のメンバーも集まり、興奮冷めやらぬといった様子できやあきやあと飛び跳ねる。

話題になる『箔』が付けば、それを現実のものとするために彼女達が出場を決めたのは、年に1度開催されるデュエルモンスターズの団体大会『アトランタ杯』に出場し、優勝することだった。

出場の為の予選枠を勝ち取った今日、彼女達の『夢』はまさに手の届く距離まで迫っていたのだ。

「お疲れ皆！ 差し入れだぞー！」

そこへ姿を現したのは、まだ20代前半だろうという若いスーツ姿の男。

キンと冷えたスポーツドリンクを手にした彼は、彼女達のたった一人のマネージャーだ。

彼女、彼らが所属しているのは他にも人気グループを抱える大手事務所で、そんな中で期待の薄い彼女達にはマネージャーとして彼一人だけが付けられた。

幸い、その癖の無い顔立ちが人懐っこい少女達にすぐ受け入れられ、半ば孤立したような境遇の中で彼女達の絆は深まっていった。

「マネージャー！ ヒドイですよー今までどこ行ってたんですか!？」

「あー、いやその……色々と仕事が」

「折角の蓮の晴れ舞台だったのに……はあ」

「あ、はは……キツいなあメイは」

湊と蓮の責める様な視線に、思わずたじろぐマネージャー。

そんな彼を見て満足したのか。少女2人はニツと笑い合うと彼の両腕にそれぞれが抱きついた。

抑えきれない嬉しさを全身で表現するかのように、他の少女たちも皆マネージャーの体に抱きついていく。お互いの信頼が形になったその光景は、彼女達の楽しい日常だった。

このまま頂上を目指して駆け上って。

いつか輝く星になれたそのときも、それからもずっと。

純粋な彼女達はそう信じて疑わなかった。

少なくとも。湊美麗という少女だけは。

『さあ!! 盛り上がっていますSSC準々決勝!! 次なる試合は……』

コーパルのアナウンスが響くその隣で、見事な手捌きでドラムをロールしているのは勿論ネフだ。

『何と!! かの「幽霊姫」をメンバーに抱え、予選では見事な試合を見せてくれました隠れた実力派旅団【にじいろ団】と!!』

コーパルが右手をかざすその先には、【にじいろ団】が控えるベンチ

が。

パンツ、と急にスポットライトが当たり、ベルとクラドが眩しそうに目を瞬かせた。

そんなことなどお構い無しに、コーパルの右手は対戦相手の紹介へと流れた。

『対するは、謎のローブを纏った神秘の女性決闘旅団……って、あれ？』

コーパルが手をかざす先には、誰も居ないベンチがライトに映し出された。

まさか試合放棄か、と客席がざわめき始めると……。

『な、なに何!?!』

突然の出来事に、流石のコーパルも驚いた様子で仰け反った。

不意に、コート上にスモークが噴出したのだ。

『こんなの聞いてませんよ!?!』

慌てふためくコーパルを尻目に、ネフは黙したままそつとドラム一式を片付けた。

彼女の方は事情を知っているのか、極めて落ち着いた様子だ。

『あー、えつとおく……!』

戸惑うコーパル。ただ黙するネフ。

彼女達のアナウンスも無しに、未だスモークが晴れないコート上に七色のライトが輝いた。照らし出されたのは、灰色のローブを目深に被った6人の影。

とりあえず試合放棄でないことが分かり、ほつと胸を撫で下ろす仕事をさせて、コーパルは咎めるようにくどくどと小言を漏らし始めた。

『ちよつと困りますよ? 段取り通りキッチンと席に座っていて貰わないと……!』

そんな彼女の言葉を遮るように、突如として会場に軽快な音楽が流れ始めた。

びくり、と肩を震わせるコーパルとは対照的に、一部の観客から先立って歓声が沸いた。何かの曲のイントロなのだろうか、とベルが

首を傾げたところでクラドも曲の正体に気が付いたらしく、苦笑を浮かべて呟いた。

「……おいおい、マジかよ」

「? クラドさん、何か知ってるんですか?」

信じられない、といったクラドの目は、首を傾げるベルにではなく険しい表情を浮かべたままの藍へと向けられていた。

ベルの疑問。それは『彼女達』が一斉にローブを脱ぎ捨てたことで解決した。

「えっ……?」

異なる色のライトがそれぞれを照らし浮き上がらせる。

コートの上に現れたのは、咲き誇るのは花か宝石かという程に美しい美女達だった。

それぞれ違う魅力を放つ6つの輝き。一気に湧き上がった観客の大歓声を糧に、彼女達は息を吸い込むと——琴か何かの音色と聞き違うような繊細で美しいメロディを、その口から紡いだ。

『な、ななんとお!!? 本大会はカオスと化したのか!?! 今が旬、アトラクタ・ブルー忘却の青にて人気を博しているアイドルチーム【Nネ—EイVヴEスS】がまさかの参戦だあく!!』

それまではサプライズゲストとして姿を隠し、偽名で登録していたのだろう。

ライブ会場と化した会場の中心で、にじいろ団の面々はその歌声に圧倒されていた。

「アイドル……チーム?」

ベルの小さな呟きは歌と歓声にかき消されてしまったが、メンバーの視線は藍に集中する。どういふことだとそれぞれの目が訴えるが、藍の視線はただコートの上で歌い、踊るアイドル達へと向けられていた。

『地獄の底から返り咲いた、タフな彼女達の実力は予選で既に折り紙つき!! 見逃せない試合となりそうです!!』

コーパルの解説など聞こえていないようで、会場は【N—E V E S】のパフォーマンスに夢中だ。それでも歌詞の前半が終了したところ

でバックミュージックの音量も控えめになり、センターの少女がにっこりと微笑んで客席の方へと向き直った。

それは、昨日藍に詰め寄ったあの黒髪の少女だった。

「皆さん、ご声援ありがとうございます!! 私たちからのサプライズ、いかがでしたか?」

最高、という合いの手を受けて少女は大きく頷くと、もう一度笑顔を作って息を切らしながらも言葉を続けた。

「この大会に参加したのはお仕事の宣伝、っていうのもありますけど…… 私たちだって立派な決闘者!! 今日も精一杯頑張りますので、応援よろしくお願いします!!」

大きく頭を下げた少女を称えるように、暖かな歓声が飛び交う。

驚きに声が出ない4人と、じつと険しい表情を浮かべている藍を除いて。

「……………♪」

再び上げられた少女の顔に、ちらりと横目で鋭い眼差しが放たれた。

まるで氷柱のように冷たく尖った感情。一瞬ではあったが、それは確かに藍へ向けて放たれていた。

「時間を頂いてしまってすみません!! 先発は私からです、にじいろ団さんの選手さんもステージへどうぞ!!」

黒髪の少女を残して、他の5人はベンチの方へとはけたが……流石はそういう方面での『プロ』だ。誰一人として着席はせず、屋根に隠れないよう絶妙な立ち位置で並んでいる。

コーパル達から完全にアナウンス主導権を奪った黒髪の少女は、対戦相手を導くように右手を差し伸べた。その表情『だけ』は、明るい笑顔に彩られていた。

「……姉ちゃん、あのさ」

「行つて来るわ。私の我が侘を聞いてくれてありがとう、皆」

注がれる視線と疑問を振りほどくように、藍がゆっくりと立ち上がり歩を進めた。

一段、一段と藍が階段を上る間も黒髪の少女は笑顔を崩さない。

コートへ上がり、定位置へと立ったところで、藍は凜と声を張って告げる。

「……私が対戦相手よ。よろしくお願いするわ」

差し伸べていた少女の手がゆっくりと下げられる。

貼り付けたような笑顔のまま、少女は僅かに声のトーンを落として応えた。

「……ふーん。逃げないで上がって来れたんですね、先輩」

藍だけがコートに立っていたとしたら、恐らく誰も気が付かなかっただろう。

しかしこの場には、この状況には。

藍が何者であるかを示す記号が、あまりにも多過ぎた。

「おい、あっちの女……もしかして元メンバーの湊美麗ソウ・メイリイじゃないか？」

誰かが呟いたその『答え』は一石を投じた水面が打つ波紋の如く、瞬く間に会場に広まっていく。答え合わせは、しっかりとコーパルのアナウンスによつて果たされた。

『な、なんとということでしょう!?! にじいろ団の先発、藍選手は【N—EVES】の元メンバーだった!?! これは波乱の展開だー!!』

6人を照らした7色のライト。その残り1つが藍を照らし出した。これも偽名を使つてのサプライズ演出だと思つたのだろう、観客達の熱が再び勢いを増していく。疑問符を並べているのは、にじいろ団の面々ばかりだ。

「元、メンバー……?」

「何だ? メイドちゃん達も何も聞いてないのか?」

何も聞かずに先発選手として出して貰いたい。昨夜の藍はその一点張りだったが、一緒に頼み込んできたベルとアンリエールは事情を聞いているものだとかラドは思っていたらしい。

「えっと……昨日は話しませんでしたけど、藍さん何か凄く思いつめてみたいで……その原因が今日の試合にあるっていうのは聞きましたけど、こんな話までは」

「成程な。姉ちゃんには悪いがちよつと調べさせて貰うか……」

組合の戦力情報はアテにならないが、アイドルチームについての情報なら幾らでも掴める。クラドはDパッドを広げると、簡単に情報を表示して見せた。

「あっさり出てきたな……アイドルチーム【N—EVES】。5年前に7人組のジュニアアイドルとして売り出したが、専属マネージャー、及び所属事務所が業界重鎮に対して不正な取引をしていたことが発覚。スキヤンダルとして炎上し一時解散となったが、最年長メンバーの凄美麗を除き6人で再結成。地道に活動を続けここ最近で人気が急上昇、地獄から返り咲いたアイドルグループとして復活した……だとき」

そう言って向けられたクラドのDパッドには、ほとんどベルと同じ位の歳の少女達が7人。煌びやかな衣装に身を包み、笑顔で集合している写真が表示されていた。

グループの中央で肩を抱き合っている2人の少女の内、片方は対戦相手の黒髪の少女だと分かる。そしてもう1人、今よりも大分幼い顔立ちで髪も短く分かり難いが、比べてみれば確かに藍本人だった。

「じゃあ、もしかして藍さんは……」

「彼女達との間に何か確執があった、と考えるのが妥当ですわね」
さりり、とアンリエールが言つてのける。

職業柄、せつかくほとぼりが冷めた『身元』がバレれば仕事がし難くなる筈だ。それでも尚、あれだけ対面することを恐れながらも。藍は『ステージ』へと向かったのだ。

「今更だけどな……良かったのかセンサー、姉ちゃんに先鋒を任せて」
彼女達がスキヤンダル炎上という地獄の底から復活した、その理由は見当がつく。

正体を隠し、予選を通過した彼女達の腕は本物のようだ。世間からの強い風当たりを受けながらもデュエルで力を示し、信頼と人気を勝ち得てきた結果なのだろう。

恐らく一筋縄ではいかない。そして藍が敗れば苦しい戦いになる。だがユウは藍の背中をじっと見つめたまま、言い淀むことなく答えた。

「……藍の目は本気だった。俺にはとても、彼女の邪魔なんて出来ない」

鳴り止まない熱狂の渦の中、遂に賽は投げられた。

『それでは恒例のルーレットタイムといきましょう!! 何が出るかは蟹の味噌汁……いざ、オゾンより下へとダーツを投擲!!』

コーパルが天へ向かって投げたダーツの矢は、やがて推進力を失って重い針を下にして落下を始めた。待ち構えるのはネフで、例にもよって試合方法が描かれた紅白のルーレット板を顔の前に構えている。

ふらふらと動き回りながらも見事ネフがダーツを受け止めると、試合方法はすぐさま決定した。

『決定しました!! 今回は「仮想ライディングデュエル」を行います!!』

おおつ、と沸き上がる会場の隅で、にじいろ団の面々は苦い表情を浮かべる。

『本来、ライディングデュエルとはデュエルディスクの発展系であるバイク型ディスク「Dホイール」と、専用魔法《S p》スピードスベルを用いて戦う競技形態であります。参加者全員にコレを用意しろというのは到底無理な話。ですので、今大会では少しばかりルールを変更致します』

ネフが指を鳴らすと同時に、大モニターへ解説図が表示される。

『Dホイールは半実体AR技術を応用した仮想のモノを使用して頂き、《S p》に関しては後ほど説明させて頂きます 《スピードカウンター》のルールのみを残し、通常通りの魔法カードを使用可とします』

『ですので、ライディングデュエル中は書き換え不可能の特殊ワールド魔法《スピード・ワールド3》が発動しているものとします! 各プレイヤーの皆さんが発動したフィールド魔法は通常通り効果を適用されますが、コチラの効果が消えたりすることがない、というのはアクションフィールドと同じですね。効果は以下の通りですよ!』

《スピード・ワールド3》フィールド魔法

お互いのプレイヤーはお互いのスタンバイフェイズ時に1度、自分のスピードカウンターをこのカードの上に1つ置く。(お互い12個まで)

お互いのプレイヤーは手札・フィールドから魔法カードを発動した場合、スピードカウンターを1つ取り除く。取り除かない場合、そのカードの発動を無効にし破壊する。

また自分用のスピードカウンターを取り除く事で、以下の効果を発動する。

- 4個：自分の手札の魔法カードの枚数×800ポイントのダメージを相手のライフに与える。
- 7個：自分のデッキからカードを1枚ドローする。
- 10個：フィールド上に存在するカードを1枚破壊する。

「これって、魔法カードが凄く使いづらいんじゃないか……」

「よく気が付きましたわね。その通りですわ」

ベルの疑問に何故か不貞腐れたように答えたアンリエールは、それっきり腕を組んで黙ってしまった。藍にとつて不利なルールが適用されたことに、行き場の無い苛立ちが積もっているのだろう。

(藍さんは儀式『魔法』を何度も使って戦うデッキ……これじゃあ……)

ベルの不安をよそに、デュエル開始への時は刻々と迫る。

『ご確認頂けましたか？ それでは、フィールド魔法《スピード・ワールド3》セット!!』

コーパルがディスクのフィールドゾーンへカードを挿し込むと、粒子に包まれ景色が一変していく。

出現したのは楕円のサーキットコース。コースのサイドには、緩やかなカーブを描く大きなガードレールが設けられていた。客席からの視界を遮らないよう透明に作られたソレの上ですら、本来のライディングデュエルであれば縦横無尽に走り抜けるのだ。

『――DUEL・MODE ON……AUTOPILOT・STAND BY――』

機械音声が響くと共に、2人のコスチュームも煌びやかな衣装やドレスから一転。くつきりとボディラインが形作られるライダースーツへとARによって書き換えられた。

同時に白と青を基調としたDホイールも出現。パトライトや他のオプションパーツは取り外されているものの、セキュリティの白バイ隊員に支給されているものとほぼ同型のものだ。本来のガツシリとした厳格なシルエツトも、今は心なしかスマートに見える。

『それでは両選手、Dホイールに搭乗して位置について下さい』

ヘルメットのバイザーを下ろし、Dホイールに跨る2人の美女。恵まれた体型故か中々様になっている。

バイクの操縦が慣れない彼女達でも、オートパイロットのおかげでハンドルさえ握れば何の苦もなくコースレーンの定位置へと着く事が出来た。

『それでは参りましょう!! 【にじいろ団】藍湊峰選手、改め湊美麗選手VS 【ミステリアス】改め【N―EVES】センターの蓮莉帆レン・リーファン選手!!』

Dホイールに取り付けられたディスクへとデッキをセットする。

オートシャッフルが起動し、運命を分ける最初の手札が選定された。

「……正直ほつとしてますよね、先輩？ 自分に不利なルールで。負けても言い訳が出来ますもんね」

不意に、黒髪の少女……蓮がそんな言葉を投げかけた。

しかし藍が返す言葉は無く、ただスタートまでのシグナルがカウントを告げる。

「でも、私は逃がしませんよ。言い訳なんて出来ないように……徹底的に潰してあげます」

もうすぐにDホイールが唸りをあげる。

その刹那、コーパルが待ちかねたようにアナウンスを挟んだ。

『それでは皆さん、一緒に!!』

『ライディングデュエル・アクセラレーション!!』

観客達をも巻き込んだアウンズが終わると共に、シグナルはオーググリーンへ。

様々な思惑を乗せて、2台のDホイールがスタートラインを飛び出した。

【藍】 LP4000 VS 【蓮】 LP4000

『さてさて、ライディングデュエルでは先攻・後攻の決定をいつものダイスロールではなく、第1コーナーを先に制した方が先攻を取るという形式になっております！ 一体どちらが先攻を頂戴するのかー?!』

オートパイロットといえども、それはあくまで事故防止のための精密なバランスが動いているだけに過ぎず、ある程度の速度調整や進路変更は可能である。

その為、本物のバイクレースさながらの熱いデットヒートが行われる訳だ。

「……ふっ」

甲高いエンジン音を鳴らし、蓮が駆るDホイールが鋭角にコーナーを攻める。対する藍はそんな彼女の動きを見るや「お先にどうぞ」とでも言わんばかりに速度を緩めると、あっさりと先攻を譲った。

ある意味、この最初の攻防がライディングデュエルの醍醐味であるが故に、客席からはガツカリとした嘆息が漏れる。

「張り合いが無いですね先輩？ ガツカリです」

【蓮】 LP4000 SC:1

あっさりと決定した『先攻』の文字をつまらなそうに見つめながら、蓮はスピードカウンターが1つ溜ったことを確認すると、初期手札の中からカードを選び出し、しなやかな指先を操ってディスクへとセットした。

「私は魔法・罠ゾーンにカードを1枚セットして、ターンエンドです」

モンスターも無く、ただ1枚のみのカードセット。

あまりにも頼りないその布陣。しかし彼女の持つ実力がそんな常識を感わせる。

「先輩？ どうぞ？」

クスリ、と妖艶に微笑んで、蓮はターンを促した。

「……私のターン。ドロロー」

【藍】 LP4000 SC:i

沈黙し、しばらく考えた後。藍は1枚のカードを場に出した。

驚きの声が漏れたのは、果たしてどこからだっただろう。

「スピードカウンターを1つ使い、永続魔法《天変地異》を発動。このカードが存在する限り、お互いにデッキは『裏返し』にしてデュエルを進行する」

途端、ディスクにセットされていた両者のデッキが裏向き……つまり、カードの表が見えるよう自動的にセットされた。

ルールに介入する特殊なカード。相手のデッキトップが常に確認できるという『情報アドバンテージ』は稼げるものの、それは相手にとっても同じ条件だ。

「更に私は、手札からモンスターを召喚」

少なくとも、そのカードだけでは。

「《リチュア・デイバイナー》を、攻撃表示」

《リチュア・デイバイナー》

☆3 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 1200 / DEF 800

出現したのは、赤い鱗に覆われた海竜の占術師。

強力なステータスこそ持たないものの、彼の真価は別にある。

「デイバイナーの効果を発動。1ターンに1度カード名を1つ宣言し、自分のデッキトップのカードをめくり、それが宣言したカードなら手札に加える。私が宣言するのは……」

一度言葉を切って、藍がちらりとデッキトップへ目を落とした。

本来であればデッキトップのカードは確認することの出来ない未知の領域。いわばギャンブルとも呼べるデイバイナーの効果だが……今はその『未知』を、誰もが確認できる。

「モンスターカード《イビリチュア・ソウルオーガ》」

成功が約束された『確認』を経て、藍の手札にカードが加わる。不利な条件の中、莫大なハンドアドバンテージを稼ぐこのコンボに、思わずクラドが声を上げた。

「よしいいぞー！ これなら儀式モンスターの展開に制限があっても、ハンドアドで相手に差を広げられる！」

「凄い……藍さん、こんな戦法まで！」

以前に見せたような展開こそ不可能なものの、1ターンに実質2枚のカードをドロー出来る現状を維持できれば、最終的な物量は相手を上回る。

「……バトル。ディバイナーでプレイヤーにダイレクトアタック」

肉薄する占術師。しかしその微弱な攻撃は、1枚のカードに阻まれた。

「ふふっ……私はここで、リバースカードを発動させます！」

全て思惑通りと言わんばかりの微笑を浮かべ、蓮がカードを発動させた。

攻撃反応型の罠だったか、と思われたその矢先。明らかとなったそのカードにクラド達は思わず息を呑んだ。

「罠カード《アビスファイア》……デッキから「水精鱗」マーメイドモンスター1体を特殊召喚します！ 来て、《水精鱗―アビスリンデ》！」

《水精鱗―アビスリンデ》

☆3 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 1500 / DEF 120

0

出現したのは、深青の長髪をなびかせる麗しき人魚。マーメイド

ディバイナーの攻撃力を僅かに上回った彼女が、くるりと宙を舞いながら主を守るように行く手を阻んだ。

「くそ……【水精鱗】か。アトランタ青は水属性使いが多いって聞くが、こりや厄介な相手だぜ」

そうぼやくクラドの前の席で、アンリエールがパタパタと足を鳴らし始める。

2人の苦い表情を見たベルは思わずユウの表情も窺ったが、彼の顔

にはいつも通りのポーカーフェイスが浮かんでいた。

「……攻撃はストップ。メイン2にカードを3枚伏せて、ターンエンド」

攻撃こそ阻まれたが、藍のバックには強固な3枚のカードが伏せられた。

手札の状況はこれからほぼ筒抜けの状態となってしまうが、この3枚は相手も知り得ない。つまり強力な抑止力となる。だが、ここで蓮が待ち侘びたように宣言を挟んだ。

「このエンドフェイズ。アビスファイアーの効果によってこのカード自身を破壊し、それによってこのカードの効果によって特殊召喚したモンスター……アビスリンデを破壊します！」

急な特殊召喚への代償なのか、アビスリンデが巨大な水泡に閉じ込められる。

水泡は断末魔の悲鳴を遮断し、必死の形相を浮かべながら墓地へと沈んでいく人魚の姿に、会場から僅かばかりの悲鳴が漏れた。

「人魚の唄は、地獄の底からだって届く……アビスリンデが破壊された墓地へ送られた場合、デッキから「水精鱗」モンスター1体を特殊召喚できます！ 姿を見せて、《水精鱗―メガロアビス》！」

《水精鱗―メガロアビス》

☆7 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 2400 / DEF 1900

0 同胞の悲鳴に応え、現れたのは真紅の鱗を輝かせる巨大な鮫の半魚人。

手にした無骨な大剣を振るい、後方を走る藍へと威嚇の咆哮を上げた。

「たった1枚のカードで攻撃を防いで、最上級モンスターまで召喚するなんて……！」

厄介な相手だと評したクラドの言葉が、現実となって降りかかる。戦慄のあまり、ベルは知らずの内にぎゅっと両手で拳を作っていた。

ふと周りを見れば、クラドとアンリエールもその表情を凍てつかせ

ている。しかし2人の視線は、藍の背中を憂うベルのモノとは違っていた。

まるで絶望の未来を、覗き見たかのような。

「ふふっ。私のターン、ですね……？」

蓮がデッキトツプへと手を掛ける。

天変地異によって明らかとなった『真実』は、

「私は——《水精鱗—メガロアビス》を、ドローです」

【蓮】LP4000 SC:2

最も残酷な形で、使用者である藍へと牙を剥いた。

第26話 蜃気楼の真実

いつの間にか再開していた「N—E—V—E—S」のパフォーマンスがデュエルのバックミュージックとなつて会場を盛り上げる。

露骨な蓮への『応援歌』らしい歌詞にそこはかとないアウエーを感じつつ、にじいろ団の面々はコースを駆ける藍の姿を見守った。

「まずは手札から《水精鱗—アビスパイク》を通常召喚し、効果を発動！」

《水精鱗—アビスパイク》

☆4 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 1600 / DEF 800

逞しい肉体を持つ男性型の人魚が紅き暴君の隣に並び浮かび、すぐさま召喚時の誘発効果が発動する。

「手札の《海皇の狙撃兵》を墓地へ捨て、デッキから☆3の水属性モンスター1体を手札に加えます！ 選択するのは《フィッシュボーグ—アーチャー》！ そして——」

後続のモンスターをサーチ出来るというだけでも十分強力な効果だと言うのに、まだ追加効果があるのか……とベルは苦い表情を浮かべたが、彼ら水精鱗が『厄介』と言われる所以たるはこの程度では留まらない。

「水属性モンスターの効果発動コストとして墓地へ送られた《海皇の狙撃兵》の効果を発動、相手フィールドのセットカードを1枚破壊します！」

墓地という深淵の底から、緑の鱗を持つ半漁人のモンスターが頭を覗かせる。

狙撃兵の名に相応しく、刺々しい水中銃を構えたソレは一瞬の内に狙いを定め、容易く藍の伏せカードを破壊していった。

水精鱗とは違う、《海皇》という別カテゴリのモンスター群。海竜族・水属性という共通点を持ち、それ以上に互いのシナジーが強い彼らを組み合わせればどうなるか。

——【海皇水精鱗】。それが蓮の操るデッキの、真の名称だ。

「……破壊されたのは《神の宣告》。墓地へと送るわ」

「当たり前、みたいですね？ さっさと使っておいた方が良かったんじゃないですか？」

くすくすとミスを指摘するように蓮は笑ったが、ライフの半分をも失って使用する万能カウンターはその代償も大きい。特殊召喚の手段が豊富な【海皇水精燐】が相手ではその『止めどころ』が非常に難しく、使いどころを見極めているこのタイミングでの破壊は最適にして最悪なのだ。

「更に手札からメガロアビスの効果を発動！ 手札の《海皇の竜騎隊》と《フィッシュボーグ―アーチャー》をコストに特殊召喚!!」

《水精鱗―メガロアビス》

☆7 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 2400 / DEF 190

0

出現する2体目の紅き暴君。しかも今回はそれだけには留まらない。い。

「この効果で特殊召喚に成功した場合、デッキから「アビス」と名の付いた魔法・罫カード1枚を手札に加えます！ 選択するのは装備魔法《アビスケイル―ケートス》！」

ごう、と音を立てて水流の渦が巻き起こる。

メガロアビスの前に浮かんでいたのは、青と紫を基調とした光沢のある金属鎧だった。

尾を覆うようなパーツが見受けられることから、装着するべき者は明らかだ。

「更に、水属性モンスターの効果によって手札から捨てられた《海皇の竜騎隊》の効果を発動！ デッキから海竜族モンスター……《氷霊神ムーラングレイス》を手札に！」

立て続けに巻き起こった水流の渦に、海竜に跨った2騎の兵士が舞う。

渦の中を泳ぐ巨影が垣間見えたが、それも水流の勢いが収まると共に一瞬で消えた。

息を呑むにじいろ団サイドの空気を読み取ったのか、蓮は満足そうに口端を吊り上げてターンを続ける。

「ふふっ……装備魔法《アビスケイル―ケートス》は、800ポイントの攻撃力上昇と共に、このカードを墓地へ送ることで罨カードの発動を1度だけ無効にする効果があります。私はスピードカウンターを1つ取り除き、これをメガロアビスに装備！」

暴君と鎧が一体化しようというその刹那。

藍の伏せカードが立ち上がり、加護を授ける鎧が暴風に巻き込まれ消滅した。

「なっ……!?!」

「罨カード《砂塵の大竜巻》。効果によって装備魔法を破壊するわ」

墓地へ送ることで罨カードを無効にしてしまう加護の鎧も、その罨カードによって破壊されてしまえば殆ど意味を成さない。

最悪の事態は何か防いだものの、これで藍の伏せカードは1枚。安堵するにじいろ団ベンチだったが、それと比例するように蓮の声色が僅かに歪んだ。

「……そうやって。私の邪魔をして楽しいですか、先輩？」

ヘルメットのバイザーに隠れて目元は見えない。

だが人離れた声帯が、それこそ地獄の底から響くような怨嗟を漏らす。

「あの時だって、そう。下らない『真実』なんてモノの為に、貴女は彼を……私たちを何の考えも無しに突き落とした……」

蓮の呟きをマイクが拾ってしまったのだろう。

曲の変わり目で静まっていたこともあり、会場の空気がしんと凍てついた。

「最後に聞きます、先輩。貴女は今も『真実』にこだわるつもりですか？ スキャンダルを内部告発した、あの日と同じように」

今度は会場に聞こえるように。声を張って蓮はそう言い切った。

藍が、【N―EVES】の元メンバー・湊美麗が内部からスキャンダルを漏らしたと。

「……成程。そういうことなのです」

呆れたように溜め息をついて、アンリエールがジトリとした目を【N―EVES】へと向けた。

「え、えっと。何か分かったんですかアンリさん」

「要するに。あの女共は自分達の不始末を藍に告げ口されて逆恨みしてるだけですわ。グループから藍を1人だけ追い出して、ね」

「そんな、それじゃあ……」

あまりにも藍が可哀想だ。ベルはそう言い掛けたが、どうにも違和感が拭えない。

彼女とは短い付き合いだが、少なくとも藍は自分に非が無いにも関わらず黙っているような弱い女性では無い筈だ。あそこまで言われればむしろ何倍にも膨らませてさりと『口撃』をして返すような、そんなしたたかさがある。

そんな藍が、自分を見失ってしまうまで追い詰められるような『何か』があつた筈なのに。

ベルの不安をよそに、藍は少し間を置いて答えた。

「……真実を明らかにしたい。その気持ちは変わらないわ、今も昔も」

「何を——してるんですか？」

形としてそんな言葉が漏れたが、目が見えてさえいれば答えなど明白だった。

肌色と白。薄暗い部屋の中で見たその光景は、多少大人びていたとはいえまだ幼い湊にとって頭を殴られたような衝撃だった。

まず頭を過ぎつたのは、2人が愛を重ねあっているのではという疑惑。しかし『男』の横で嗚咽を漏らす少女の姿と——そんな彼女へジツとレンズを向けているカメラがそれを否定した。

「……メイ」

スーツの上からでしか分からなかった、逞しい身体がゆつくりと起き上がる。

その向こうで嗚咽を漏らし顔を腫らしていたのは、妹のように可愛がつっていた少女——蓮のあられもない姿だった。

芸能界の闇、という遠い世界の言葉が、藍の思考のパズルをカチリ

と埋めた。

「……先輩、違うんです、違、くて」

蓮が、目の前の男を庇おうとしていることは、分かった。

激しい動悸と混濁する意識の中で動けずに居た湊は、気が付けば目の前に迫っていた男——マネージャーに肩を掴まれていた。

「ッ……!!?」

恐怖のあまり声が出ない。

ぐっと顔を近づけたマネージャーの男は、無理矢理作ったような歪な笑みを浮かべて、言った。

「メイ、お前なら分かるだろう!? 今がどんなに大事な時期か!!」

その異様な剣幕に、湊はビクリと肩を振るわせた。

今朝、仕事へ向かう前にそつと頭を撫でられたあの優しい時間。

だけど今は、遠い昔のようにも思える。

「お前達は、俺達は……ここで終わる訳にはいかないんだ!! 分かるだろう!?!」

血走った目。紫色に染まった震える唇。

そこには彼女が良く知る、スーツの似合う頼れる男の姿は無かった。

ここは本当に現実の世界なのだろうか。目の前の男は、本当に『彼』なのだろうか。

「だから。お前は、何も見なかった。良いな?」

肩を掴む男の華奢な手は。これまで自分達を支え、押し上げてきてくれた両手は。

罪という汚れで、真っ黒に染まっていた。

——汚い。

「良いな?」

何度も何度も、念を押すように男が呟く。

見逃すことなど出来ない。どんな理由があろうとも、蓮を傷つけたこの男を。

「そんな、こと……」

「先輩っ!!」

怒りに震え、手が上がりそうになったところで。湊を止めたのは蓮の嗚咽混じりの声だった。

この男を突き出して、それで自分達はどうなる？

これまで積み重ねてきた努力は。掴みかけている夢は。

「頼むよ、メイ……!!」

今、彼を失えば自分達がどうなるか……想像するに難しくなかった。

遂に泣き崩れたマネージャーを見て、湊は震える唇を動かして言った。

「……どうしてこんなことをしたのか、聞かせて下さい」

マネージャーがぼつぼつと語った事情は、こうだ。

これはいわば事務所の裏の顔で、所属タレントの情事を記録し、それを取引材料として業界の重鎮達へ取り入っていること。それ故に、事務所は業界でも力を持っていられるのだという。

そして遂にその『役目』は【N—EVES】に回り、マネージャーは仕方なく行為に及んだのだと。蓮もその事情を理解した上で、同意したと。

——汚い。どうしようもなく。

それでも、彼の説明に湊は僅かながらに救われたような気がした。彼らとて被害者なのだ。自分の信じた男の姿に、偽りは無かったのだと。

そう思えるだけの『真実』が見えた。それだけで、湊の心は壊れずに済んだ。

「……信じて、良いんですね」

素直に、真っ直ぐに。そう生きてきた彼女にとって衝撃は大きかったが、こうした汚れを飲み込むこともまた、夢を掴む為には必要なことなのかもしれない。

まだ幼く判断の鈍い少女は、そう思い込むことで自分の心を守った。

「ありがとう、メイ……!!」

それは正直に、真っ直ぐに生きてきた彼女がついた、最初の嘘。

だが嘘は、決して一度だけでは済まされない。

「……1つ、お願いがあります」

一度ついた嘘を隠すために嘘を付き。その嘘を隠すためにまた嘘を重ねていく。

それから先の人生で『真実』を求める彼女が嘘で塗れる原因となった、その日の出来事だった。

……

……

……

『優勝は何とジュニアアイドルチーム【N—EVES】の皆さんです！

おめでとうございます！』

これから登り詰める煌びやかな栄光のステージ。その腰掛となる最初の舞台は、大成功を収めた。

精一杯に笑顔を貼り付け、カメラの前ではこれまで通りに振舞っていた湊だったが……優勝トロフィーを掲げる頃、既に心はボロボロになっていた。

自分へ向けられる賞賛も応援の声も、どこかくぐもって聞こえる。嬉々として感想を求めてくるインタビュアーの笑顔も、グニヤリと責めたてるように歪んで見えた。

気分が悪くて倒れそうになる。それでも精一杯『プロ』として笑顔で乗り切って、湊はその日を何とか乗り切った。

弱っている顔を見せてはいけない。彼らは、マスクミはそういう匂いに敏感だ。ここで下手を踏んでしまえば、自分に嘘を付いてまで守ったこの『日常』を壊してしまう。

「……蓮も」

彼女も同じ思いをしているのだろうか。

ふとそう考えたところで、湊は言いようの無いモヤが心に立ち込めていくのを感じた。

飲み込んだ筈の何かが、まだ引っ掛かる。

……

……

……

「どうしてですか。先輩」

電話の向こうから、涙で枯れた蓮の声が低く呟かれる。

天使のようだと揶揄された彼女の声は、今や地に墜ちた悪魔のように怨嗟で彩られていた。

アイドルとの淫行を賄賂に？ 大手A事務所の売春疑惑浮上。

スキャンダル発覚、【N—EVES】アトランタ杯優勝取り消しへ。

大手A事務所、事実関係を否定。所属マネージャーを解雇処分へ。

蓮の手元にあるDパッドに映し出されているのは、幾つも取り上げられている自分達のスキャンダル記事だった。

「……私たちさえ黙っていたら、皆でずっと一緒に居られたのに」

首を絞められているかのような息苦しさに、湊は思わず胸を押さえた。

「何で……言っちゃったんですか」

薄暗い部屋の中。家の周りはどこから沸いたのか知れない人だかりに囲まれている。

だが彼らは『真実』を知らない。誰が情報を漏らしたのか、そんなことさえも。

「全部、壊れちゃった」

むしろソレを知っているのは、電話の向こうにいる彼女だけだ。

告げたのは湊自身。だからこそ、怨嗟の矛先は湊へ向かっている。

「貴女は、そんなに『真実』が……大事だったんですか……？」

彼女の問いに対する答えを、このとき湊は持ち合わせていなかった。

沈黙が永遠のように続く。電話の向こうからも、こちらと同じように外からの喧騒が聞こえてきた。

「……こたえてよオツ!!」

ガリガリ、とスピーカーが割れる音がして、通話は唐突に途絶えた。

無機質な機械音声が、相手との通信が切断されたことを告げる。

「……そう」

どこか安堵の表情を浮かべて、湊はDパッド用のイヤホンマイクを

外した。

「……そうですか。それなら心置きなく、貴女を潰せます」

当時誌面を賑わせた彼女達のスキヤンダルを知る者は、この会場においてもそれなりに多い。だからこそ、その内通者が元メンバーの藍であることは衝撃的な事実であった。

事件の全容を急いで調べたクラウドが、Dパッドに記事を映し出す。大まかな内容だけ目を通した一同は、皆それぞれ複雑な表情を浮かべた。

「……藍は当然の正義を貫いただけで、あの女共に責められる理由などありませんわ」

アンリエールは一貫して藍の味方である姿勢を崩さない。

確かに、不正を黙認してでも前に進むべきだったとも聞こえる彼女達の考えは間違っているのかもしれない。藍は正しかったと思うのはベルも同じだ。

だからこそ違和感がある。どうして藍は引け目のようなものを感じているのか。

答えは出ないまま、冷酷な殺意を纏った蓮の指先は詰チエックメイトめへと迫っていく。

「メガロアビスの効果を発動！ 場のアビスパイクル1体をリリースし、このバトルフェイズ攻撃を2回行えるようにします！」

それは決意の表れなのか。紅の暴君が傍らの兵士を乱雑に貪り喰らい、その力を蓄えた。

だが彼女のステージは、それすらも腰掛けとして更にボルテージを高めていく。

「……これで墓地の水属性モンスターは5体。よって手札からこのモンスターを特殊召喚します！」

流れ込む冷気が後方を走る藍へと襲い掛かる。

暴君を両脇に従え、遂にその巨影が姿を現した。

「全てを氷点下へと誘いなさい……《氷霊神ムーラングレイス》!!」
白と黄金の鎧に身を包み、荘厳な角と巨大な棘を携えし海竜の長。
暴君より二回りも大きなその巨体を靡かせて、甲高い雄叫びを上げた。

《氷霊神ムーラングレイス》

☆8 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 2800 / DEF 2200

「霊神、って……」

その召喚方法や名称から、ベルはかつて父親が使役し、対峙した《地霊神グランソイル》の巨体をすぐに思い浮かべた。

霊神と呼ばれるシリーズはそれぞれが各属性に分かれており、強力な魔法・罠と同等の効果の内蔵している。後にベルはクラウド達から聞いたわけだが、実物を目にしたのはこれが始めてだ。

「ムーラングレイスの効果を発動！ このカードの特殊召喚成功時、相手の手札をランダムに2枚選んで捨てます……と言っても、貴女の手札は丁度2枚のようですけど」

「……………」

折角稼いだハンドアドバンテージが、これで水泡と帰した。

黙々と墓地へ送られたカードを、蓮はしっかりと確認していく。1枚はデイベイナーの効果で手札に加わっていたソウルオーガだったが、もう1枚は――。

「へえ……《ブレイクスルー・スキル》ですか。しっかりと伏せていれば、最初のトリガーになったアビスパイクの効果だつて止められたかも知れないのに。とんだプレイングミスですね？」

アビスパイクの効果発動、メガロアビスのリリース効果、ムーラングレイスのハンデス。

このカードを伏せて、どれか1つでも止めることが出来ていれば。プレイングの指摘に関しては確かに彼女の言う通りだ。だが――。
「……………ミスではないわ。少なくとも、この状況なら」

真つ直ぐに向けられた藍の瞳が、3体の最上級モンスターの向こうに居る蓮へと突き刺さる。

彼女にも何か感づいたところがあつたのだろう。ギツと歯を噛み締めて、雑念を振り切り切るように声を張り上げた。

「減らず口ばかり……バトル!! メガロアビスでデイバイナーにアタック!!」

粗雑な刃を振りかざし、後方の獲物へと肉薄する。

その一撃を前に、藍の凜とした声が水面を打った。

「罨カード《和睦の使者》を発動。このターン、戦闘による全てのダメージを0にする」

「ッ……!?!」

真珠色のオーラが、暴君の一撃を弾き返す。

このターンでは仕留められなかった。よりにもよって破壊できなかった最後のカードが《和睦の使者》だった。そんなフラストレーションが、蓮の整った顔立ちを醜く歪めていく。

「……どこまで私を苦しめるつもりですか? どこまで、どこまでッ……!!」

パフオーマンスも声援も、既に会場には響いていなかった。

ただ忘れられたように、賑やかなバツクミュージックだけが響いている。

「……メイン2!! 私は2体のメガロアビスでオーバーレイ!!」

前方へ出現した光の渦に、2つの青い光球となった暴君が螺旋を描いて飛び込んでいく。

牙を剥くような形相で告げられたのは、黒の召喚法。

「2体の☆7モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!! エクシーズ召喚!!」

巻き起こった光の爆発が、粒子を撒き散らしながら新たな力を生み出す。

風に流され後方へと散っていく光の粒子。その中を走り抜ける蓮の姿は、狂喜に満ちながらもどこか儚く、美しく輝いていた。

「エクシーズ召喚!! ★7、《水精鱗―ガイオアビス》!!」

《水精鱗―ガイオアビス》

★7 / 水属性 / 水族・効果 / ATK 2800 / DEF 1600

貪欲な海の皇すらも取り込み己の半身とした、白髭を靡かせる屈強な青き水精鱗の長。

高レベルモンスターを素材とただけあって、その能力は極めて高い。

「さっさと斃れて下さいよ!! そうでない……私たちはもつと上に行けない!! 貴女を倒して、あの日に決着を付けないと!! そうでない……」

身勝手に哀れな、地獄の人魚が悲痛な叫びを上げる。

過去との決着。そのワードは奇しくも、藍が背負っていたモノと同じだった。

「……まあ何とも、はしたない……」

アンリエールがそう呟いたのは、果たして自らが嫌う高ランクのモンスター・エクシーズに対してなのか。

クラドの方は純粹に、出現したガイオアビスに対して苦い顔を浮かべていた。

「マズいな……アレは☆5以上のモンスターの攻撃を抑制する効果に加えて、ユニットを使えば自分より攻撃力が下のモンスターの効果を封じれる」

「そんな……」

「姉ちゃんの墓地にはさつき《ブレイクスルー・スキル》が落ちたから、1ターンの間は無力化できるが……結局次のターンで決められないと終わりだぜ」

並び立つ2体の双壁。恐らくは水属性モンスターの中でもトップクラスのモンスター達だろう。そんな相手を前にして、藍は――。

「……1つ尋ねるわ。あの時、犠牲にならなければならなかったのは何故私たちだったのかしら」

怨嗟の声に、藍は何と問いを投げかけた。

呆れたように鼻で笑って、蓮がそれを投げ返す。

「……何を、今更言い出すんですか? そんな下らない『もし』なんて、この数年間でどれだけ――!!」

「名前も売れていない。さして有名でもない私たちの情けない姿を見

て喜ぶ人が……果たして、業界を束ねる人の中にどれだけいたのかしら」

水面に投げられた1つの小石は、やがて波紋を広げていく。

波風激しい芸能界という海の中で、1人真っ直ぐに生きようとした少女だからこそ見つけた、ほんの小さな取るに足らないような波紋。

ともすれば、他の波風に吞まれて消えてしまいそう。それを少女は、掌にすくってずっと見つめ続けた。

「それ、どういう……？」

時間制限を過ぎた為に、蓮のターンが強制的にエンドフェイズへ移行する。

「私のターンね、ドロー」

それを確認するや否や、突き放すように藍はカードをドローした。

【藍】LP4000 SC:1

1枚のカードが晒し続ける『真実』は、ドローされたカードも、次のデッキトップも露にする。ドローカードは《シャドウ・リチュア》。そして、そのすぐ下に見えるカードを見た蓮の表情が凍りついた。

「……どういふつもりですか」

「リチュア・デイバイナーの効果を発動」

「させない!! ガイオアビスのORUを使い、その効果を——」

「墓地の《ブレイクスルー・スキル》を除外し、ガイオアビスの効果を無効にする」

幾重にも折り重なったチェーンが終わり、解き放たれたデイバイナーの効果が発動する。

「宣言するのは……モンスターカード、《深海のディーヴァ》」

カードを手札に加わえ、ちらりと藍が目線を向けたのは——余計なおしゃべりを挟まないようネフに口を抑えられていたコーパルだった。

「……良かった。不正にはならないようね？」

藍の問い掛けに、ネフの拘束から解かれたコーパルが答えた。

『ふは！ はい、カードに傷を付けてマーキング行為を行うことは立派なルール違反ですがー。藍選手はしっかりと「スリーブをつけてプ

「レイング」しているので大丈夫かと判断致しました！」

見れば。確かに藍の持つカードはデュエルモンスターズ特有の裏地が見えない。変わりに、塗りつぶされたように藍色の無地があるだけだ。

AR上では裏面のデザインも変わらず表示されている為、気が付かなかったのだ。

「藍さん、何でそんなこと……?」

カードは意外なことに傷が付き難い。どういう原理か故意に傷をつけようとした限り、普通にプレイングをしている限りは滅多に傷が付かないのだ。

カードを覆ってしまうスリーブを使う局面といえば、せいぜいイカサマを取り締まる審判員機構が居ない卓上デュエルで公平を保つ為にやむなく使用される程度。

残る利用法といえば……。

「何かの理由でボロボロになったカードをどうしても使いたかった……とかか?」

遠目に見た限りではそれがそのカードであるのかはベル達には分からないが、藍の反応から察するに手札に加えた《深海のディーヴァ》がそれにあたるようだ。

「……話の途中だったわね、もう一つ尋ねるわ。彼は……マネージャーは本当に私たちの未来を考えていてくれたのかしら?」

「この期に及んで……!! 今度はマネージャーを悪く言うつもりなんですか!」

藍の次なる問い掛けには、蓮だけでなく他のメンバーにも殺気が漂った。

彼女達がマネージャーであった男に寄せていた信頼は、今も昔も深かったのだろう。

「本当に私たちのことを考えてくれたなら……どうして彼は今も『事務所が主導して不正を働いた』事実を頑なに言い張っているのかしら? 事務所側は証拠を提出して事実無根だと証明しているにも関わらず」

「……私たちの為にあの人が嘘を付けばよかったって、そう言ってるんですか!? 事務所は力も強いし、事実をもみ消すのだから簡単だって言ったのは貴女でしよう!」

「そうね。あの日、そう『嘘』を付いたのは私だったわ」

「……は?」

「逆に。もしも本当に事務所の主導で不正が行われていたのだとしたら……貴女達は今ここで歌うことすら、私と戦うことすら出来なかったんじゃないかしら? 業界の闇ってというのはね、そう生易しいモノじゃないのよ」

目の前の『真実』が揺らぐ。

それは海洋に浮かぶ豪華客船が泡沫へと消える、蜃気楼のように。

「深海のディーヴァを通常召喚し、効果を発動。デッキから☆3以下の海竜族モンスターを1体特殊召喚する」

《深海のディーヴァ》

☆2 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 2000 / DEF 400

恨みを受けて傷つき、打ち捨てられた悲劇の歌姫がステージへと上がる。

いつまでも変わらない美しい歌声に導かれ、その傍らに2体目の占術師が姿を現した。

「選択するのは《リチュア・ディバイナー》」

「ちよつと……ちゃんと最後まで答えてくださいよ!? ねえっ!!」

「……『真実』は姿を変えるわ、その人の心の有り方次第でね。丁度この、筒抜けのデッキトップみたいに」

デッキの上には魔法カード《サイクロン》が置かれている。

このカードをディバイナーの効果でデッキに加えたとして、藍に勝ち目は無い。

だが――。

「手札から《シャドウ・リチュア》を捨て、効果発動。デッキから「リチュア」の儀式魔法1枚を手札に加え、その後『デッキをシャッフルする』」

蜃気楼が、変わる。

「私は《リチュアの儀水鏡》を手札に加え、デッキをシャッフル。そして――」

藍色のカード達が面を上げた。

デッキボトム 地獄の底から這い上がってきたのは、美しい青のフレームに彩られた鬼神だった。

「デイバイナーの効果を発動。宣言するのは《イビリチュア・ソウルオーガ》」

「どう、して……?」

「スピードカウンターを1つ使い、リチュアの儀水鏡を発動。場のデイーヴァ、デイバイナー2体を生贄としてソウルオーガを儀式召喚」

「何で!？」

《イビリチュア・ソウルオーガ》

☆8 / 水属性 / 水族・効果 / ATK 2800 / DEF 2800

「何で!! 言ってくれなかったんですか……マネージャーが私たちを騙してたつて!!」

鬼神の咆哮と、蓮の叫びが重なる。

このやり取りを聞いてぴんと来たのは、にじいろ団のベンチだけでは無かった筈だ。

「成程……そりゃ認めねーよな。自分^{デメエ}が勝手にやってた不正を咎められるより、事務所にやらされてたつて言う方が風当たりは弱そうだし。もみ消す『力』を持つてんのは事務所のほうだ、世間から疑われるのは当然……てな?」

頭の後ろで指を組んで、クラドは溜め息混じりに呟いた。

「そこまで自分の身が可愛い殿方が、頂上に登り詰めた彼女達をどうするか……考えるに難しくありませんわね。マネージャーという仕事は私も良く知りませんが、有名なタレントを多く輩出すればそれだけ『箔』がつくモノなのでしょう?」

「つまり……自分が出世する為に藍さん達を利用したんですか?」

「恐らくは、ですけど。少なくとも藍は、それを確信できる証拠を掴んでいたみたいですよわねえ」

ベルの言葉に、アンリエールはケタケタと面白そうに笑って見せた。

「何故、か。私もずっと後悔していたのよ。何である時、単なる『スキヤンダル』だけを漏らしたのか……って」

「……え？」

ぽつりぽつりと藍が漏らした言葉に、目尻に涙を浮かべ蓮が顔を上げる。

そんな折、ふとベルはコーパルが何かディスクを操作していることに気が付いた。

遅延防止のため、フェイズ強制移行の為のタイムカウントが止まっている。

ベルと目が合ったコーパルは、口元に人差し指を当てて微笑んで見せた。

「貴女も知ってるでしょう？ 私、気になることは何でも調べるしよ
うがない性格でね。何をとは言わないけれど、『搦んだ』のもあの日
だった」

彼女が持つジャーナリストの魂は、恐らくこのときから既に宿っていたのだろう。

所属アイドルという自分の立場を利用して、上手く情報を集めて回る姿が目に見えかぶ。

「多分、私も彼を最後まで信じたかっただと思うわ。もしも彼が、自分の罪を認めて『事務所とは無関係だ、やったのは自分個人だ』と言ってくれたら……そのときはもう一度彼を信じようって。だけど『真実』は残酷ね。結局彼は罪を認めず、事務所と私たちを道連れに堕ちていった……」

「だから、どうして……それを私たちに」

「言えるわけ無いじゃない……出来るわけない。皆がずっと慕ってきた彼を、悪人にする事なんて」

マネージャーを信じようとしたのは、恐らく建前で。

藍があんなにも思い悩んだのは、自分の内に秘めていた残酷な真実を語らなければならないというその重圧、だったのではないか。

その為に自分の姿すら、無実と分かっている事務所すら巻き込み悪だと偽って。

誰よりも真っ直ぐだった少女は。世界を、仲間を相手に大きな嘘をついた。

「そんなことをしたら、きつと皆壊れてしまったから。だけど今は違う。あの状況から立ち直って、貴女達はここまで駆け登って来た。あの頃なんかとは比べ物にならないくらい、強い心を持って」

フリージャーナリストとして各地を飛び回る一方で、藍の耳には届いていた。

地獄から這い上がるようにする、したたかな人魚達の歌声が。名聲が。

「だから……私も打ち明けることにしたの。あの時は怖くて言えなかった『真実』を。今度こそ、嘘偽り無く」

墓地のカードへと手を掛ける。

その手は決して詰み^{チエツクメイト}へは届かない。しかし目の前の壁を取り払うには十分な一手だった。

「今の皆なら、それをすっかり受け止めて前に進める筈だから」

墓地で発動する魔法カードの効果は、スピードカウンターを消費せずとも発動出来る。儀水鏡のカードがデッキへと戻り、墓地のソウルオーガが手札へと加わる。

「ソウルオーガの効果が発動。手札の「リチュア」モンスターを捨て、相手フィールド上の表側表示のモンスターをデッキへ戻す。選択するのはガイオアビス」

両腕を交差させて巻き起こした巨大な水の竜巻が、ガイオアビスへと迫る。

鬱陶しそうに払い退けようとした水精鱗の長だったが、このターンに受けたブレイクスルーの束縛が災いしたのか呆気なくその姿を霧散させた。

「バトル。ソウルオーガでムーラングレイスに攻撃」

鬼神と霊神。二つの力はまさに互角だった。

すれ違うように互いの一撃を叩き込んだ両者は、その全てを出し

切って破碎した。

「私はこれで、ターンエンド」

お互いに手札は0。

フィールドにも戦えるモンスターは居ない。

「成程な……姉ちゃんの狙いが何となく分かった」

「えっと、どういう……？」

静まり返ったフィールドを眺めて首を傾げるベルに、クラドはニヤリと笑って答えた。

「あのデツキ…【海皇水精鱗】は強力なデツキだが持久力が無い。相手の姉ちゃんの顔を見るに……ありや多分『勝ち筋』が無くなったんだ。《ブレイクスルー・スキル》を伏せなかったのも、わざと手札を2枚残してムーラングレイスを召喚させるように仕向けたんだらうな」

つまり、藍はデツキの動きをあえて妨害『しなかった』訳だ。

嵐の後に凧が訪れたような、この静かなフィールドを作り出すために。

「……………」

藍の次のドローカードは《浮上》。ディバイナーを始め、墓地にはこのカードで蘇生可能なモンスターが揃っている。次のターンで再び勢いを増すだろう。

対する蓮の次のドローは……最上級モンスターであるメガロアピス。召喚こそ出来ないが、コストとして使えば墓地の《フィッシュボーグーアーチャー》を蘇生して壁とすることも出来る。もう1ターン待てば、何か打開策が舞い込む可能性だってある。

だが――。

「……………ごめんなさい。先輩」

僅かに残された希望があれば、最後まで戦い抜くのが決闘者というものだ。

だが決闘者である前に1人のアイドルである蓮莉帆は、静かに右手をデツキの上へと置いた。

【蓮】 L P O (S U R R E N D E R)

デュエル終了を受け、2人のDホイールがスピードを緩めていく。

かくしてお互いにLPへのダメージが1ポイントも無いまま、デュエルの幕は閉じられた。

過去を振り切る。そんな彼女達の戦いは、既に決着していたのだから。

第27話 狙われたアスタリクス

『さてさて、続きましては第2試合！ タッグデュエルはハーフライフルール、早速参りましょう〜！』

衝撃的な幕開けとなった第一試合だったが、彼女達【N—EVES】を支援するスポンサーの意向もあるのだろう、試合は辛うじて続行となった。

コートの上へ上がってきたのは、蓮よりも少し歳下に見える童顔の少女が2人だ。

「湊先輩のことはビックリしたけど」

「私たちだって決闘者です！」

「最後までお付き合い、よろしくお願いします！」

礼儀正しく頭を下げる少女達。栗色のふんわりとした髪と、活発そうな黒髪のポニーテールが元気良く揺れる。元々息もピッタリな組み合わせらしく、藍もタッグでは彼女達が出てくるだろうと予想していた程だ。

そんな彼女達を向かい打つは、恐らく「にじいろ団」が放てる最強のタッグ。

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

ポーカーフェイスの貴公子と、ラムジョレーンの幽霊姫。

戦術的な相性はともかく、実力だけを見れば露骨に『決めに来た』組み合わせ……なのだが。

「……………フン」

憧れのユウとのタッグだというのに、当のアンリエールはどこか苛立たしげに対戦相手の少女達を睨みつけている。普段の優雅な振る舞いはどこへやら、滲み出る敵意を隠そうともしていない。

パタパタと落ち着き無く打ち鳴らされる幽霊姫の足音と鋭い視線に、アイドルチームの2人はすっかり怯えている。

コーパルもそんな剣幕にたじろぎつつ、さっと腕を上げデュエルの開始を告げた。

『そ、それでは第2試合、タッグデュエル開始い!』

デュエル
「決闘!!」

【ユウ&アンリエール】 LP8000 VS 【チームN—EVES】
LP8000

ダイスロールの結果、先攻を取ったのは【チームN—EVES】。
デュエルとなれば奮い立つ何かがあるのか、キツと表情を締めなおして栗色髪の少女がカードを操る。

「行きます! まずは《水精鱗—アビスパイク》を攻撃表示で召喚!

効果で水属性モンスター《キラ・スネーク》を墓地へ送って、《海皇の狙撃兵》を手札に加えます!」

《水精鱗—アビスパイク》

☆4 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 1600 / DEF 800
「カードを1枚伏せて、ターンエンドです!」

やはり言うべきか、彼女達のデッキは全て【海皇水精鱗】で統一されているようだ。

第1試合と同じく出現した人魚の兵士を見据え、ユウは小さく呟いた。

「……やはりか。気をつけるアンリ、アレは恐らく——」

アイドルとしての活動がある傍ら、デュエルに割ける時間が少ない彼女達の事情を考えれば頷ける戦法だ。水属性モンスターのカードは忘却の青であれば入手が容易な上、全員が同じデッキを使えば互いに教え合い易く上達もおのずと早くなる。

加えて、タッグ戦となればその力は驚異的だろう。複雑な戦略も息を合わせることも必要とせず、パートナー共々普段のシングル戦と同じように戦うことが出来る。弱点と言えば、デッキの弱点がそのままチーム全体に適用されてしまうことだろうか。

「ユウ様の御手を煩わせる必要はございませんわ」

そんなユウの警戒にも耳を貸すことなく、ぎっと足を踏み出して勇ましき幽霊姫が前へ出た。前髪に隠れた目元がゆらり……と妖しい光を放つ。

「あの女共は、私1人で片付けます故」

「……アンリ?」

「地獄だか何だが知りませんが……藍を苦しめた罪の十字は重いですわよ!! この場で四肢を縛って、海の底へと放り返して差し上げますわ!!」

ドスの利いた声に圧倒され、アンリエールより年上の筈であるアイドル2人はひいっと声を漏らした。女の身といえど、やはり由緒正しき決闘組の血筋。拳を作って吼えるその形相は紛う事無い『本物』だ。

「あ、アンリちゃん……お手柔らかにお願いね……?」

「おー、怖いねえ。敵にしても味方にしても『女の友情』っていうのは」「あはは……」

ベンチに戻っていた藍がたまらずフォローを入れるが、果たして耳に届いたのかどうか。

苦笑を浮かべたベルの隣では、クラドが楽しそうに笑っていた。

「私のターン、ドロー!! まずは手札から速攻魔法《手札断札》を発動!! 互いに手札を2枚捨てて2枚のカードをドローします!! 何をぼやっとしてますの、さっさと処理なさい!!」

「ひい!? え、えつとじゃあこの2枚を捨てますっ……」

「手札から《クレインクレイン》を通常召喚し、効果発動!! 効果無しにして墓地から☆3の《ゴーストリック・グール》を特殊召喚、それに対し速攻魔法《地獄の暴走召喚》を発動!! デッキから残り2体のグールを攻撃表示で特殊召喚します!!」

《クレインクレイン》

☆3 / 地属性 / 鳥獣族・効果 / ATK 300 / DEF 900

《ゴーストリック・グール》

☆3 / 闇属性 / アンデット族・効果 / ATK 1100 / DEF

1200

ホラー映画よろしく、地面から湧き出し一気に並び立つグール達。内1体はクレインの鶴に吊り上げられた状態で、何とも迫力に欠けていたが。

「……貴女も!! さっさとアビスパイクを特殊召喚なさい!!」

「は、はいっ!?!」

対するアビスパイクも負けじと並び立つものの、彼女のデッキには2枚までしか投入されていないのか、フィールドに現れたのも2体までとなった。

「私は効果が無効となったグールとクレーンクレーンでオーバーレイ!! 2体の☆3モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚!!」

アンリエールの気迫に押されたのはARも同じなのか、エクシーズ召喚のエフェクトも僅かばかり駆け足気味だ。

「奇怪なる館の主よ、漆黒を翻し騒乱の夜を収めなさい!!」★3、

《ゴーストリック・アルカード》!!」

《ゴーストリック・アルカード》

★3 / 闇属性 / アンデット族・エクシーズ・効果 / ATK 180
0 / DEF 1600

弾け飛ぶ光の粒子を呼び水に、悪戯好き共を束ねる館の主がマントで口元を覆いながら参上した。自らの役目を分かっているのか、彼の動きはすぐさまアンリエールの命に反応する。

「アルカードの効果を発動!! ORUを使い、その伏せカードを破壊します!!」

「ち、チェーンして罨カード《アビスファイア》を発動! このカードで私は……」

「どうせアビスリンデでございましょう!? さっさとなさい!!」

「ひっ!? う、ううう……」

真正正銘の『お嬢』モードとなったアンリエールの前に、か弱き歌姫は遂に泣き出してしまった。震える指先でようやくディスクへセットされたカードは、やはり無難に守備表示のアビスリンデであった。

隣に立つユウでさえ、アンリエールの剣幕に真顔のまま若干引いている。

《水精鱗―アビスリンデ》

0

☆3 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 1500 / DEF 120

「遅いッ!! そんなカード捌きでは日が暮れますわ!! 私は更にアルカードでオーバーレイ・ネットワークを再構築、エクシーズチェンジ!!」

《ゴーストリックの駄天使》

★4 / 闇属性 / 天使族・エクシーズ・効果 / ATK 2000 / DEF 2500

アルカードと入れ替わりに登場したのは、桃色の髪をなびかせる可愛らしい少女型のモンスターだ。

「はあい、と手をひらひらと振る駄天使だったが——凍りつく観客席と泣きじやくる相手プレイヤー、そして鬼のような形相の使い手を見て「どったの?」という困惑の表情を浮かべていた。

「効果発動!!」

あまりの剣幕にびくつと肩を震わせて駄天使がまっすぐに背筋を伸ばすと、すぐさま自らのORUを口へと放り込み、頭を低く下げてカードを1枚差し出した。

「家臣からカードをひったくると、姫君は不機嫌そうにディスクへと叩き付ける。

「フィールド魔法《ゴーストリック・ハウス》を手札に加えそのまま発動、更に駄天使でオーバーレイ・ネットワークを再構築!!」

この召喚方法に該当するカードは1枚。

その正体を知るクラドからぎよつとした声飛んだ。

「なっ!? おいおい、いいのかよお嬢!?!」

「その芋メイドが既にヴァルキュリアを晒した以上、出し惜しむ必要などありませんわ!!」

「ははは……はあ」

クラドの制止も、ベルの溜め息もなんのその。召喚はもう止まらない。

「出番はコレだけ? と言わんばかりの不満そうな顔のまま、駄天使は澁々と光の渦の中へと身を投げた。

「法嗤う無限面相、混乱の夜を駆け真の身を明かしなさい!! エク

シーズチェンジ、★4 《アスタリスクスファントム | * * * | 怪黒兎》!!」

《―*―怪黒兎》

★4／闇属性／獣族・エクシーズ・効果／ATK 2100／DE
F 1000

紳士的に一礼をして見せる、漆黒のタキシードを着こなした細身の兎怪人。

公の場では、などと涼しい顔で語っていたのが嘘の様に、ソレはあっさりと姿を現した。

『こ、これは盛り上がってきました!! 謎のレアカード《アスタリクス》が――』

「効果発動!!」

『あう……』

コーパルの実況すらも遮って、幽霊姫の怒涛のターンは続く。

「このカードのエクシーズ召喚成功時に存在する自身のORUの数まで、フィールド上のモンスターを裏側守備表示に致します!! ORUは3つ、よって選択するのは貴女のフィールド全てのモンスターですわ!!」

「そ、そんなあ……」

心地よい夜の闇に誘われ、3体の水精鱗達が裏側守備表示となった。

「更にファントムの効果で、ORUとなっているモンスター1体を指定し、そのカードと同名カードとして扱い、同じ効果を得ますわ!」

私が指定するのは《ゴーストリックの駄天使》!!」

ファントムがシルクハットでORUを1つ掬い取り、そのまま元通り目深に被り直す。

するとその姿が闇に溶け、再び現れたときにはペロリと舌を出して笑う駄天使の少女の姿があった。

「2体のゴーストリック・グールの効果!! 自分フィールドの「ゴーストリック」モンスター1体を対象として発動、そのモンスターの攻撃力を次の相手ターンの終了時までフィールドの「ゴーストリック」モンスターの元々の攻撃力を合計した数値にしますわ!! 選択するのは《ゴーストリックの駄天使》となったファントム!! よってその攻

撃力は——」

《―***―怪黒兎》(ゴーストリックの駄天使)

ATK 2100↓6400↓10700

「こっ、攻撃力いちまん……ッ!?」

怯えた2人の少女が互いに抱き合いながら、美しい悲鳴を重ねる。彼女達の眼前にはズモモモ、と見上げるまでに巨大化した駄天使の嫌らしい笑顔があった。

「ゴーストリック・ハウスの効果で!! ダイレクトアタックですわ!!」
降り注ぐチエックメイト鉄拳制裁。

ライフが一気に削られる音が空しく木霊し、ARが解除された後には——きゆうと目を回してのびている、2人のアイドルの姿があった。

【チームN―EVES】LP8000↓0

「フンッ!!」

腕を組み、鼻息を鳴らすアンリエールだけがこの場で唯一勝利の余韻に浸っていた。

「残念ですけど、私たちの負けのようです」

度重なる衝撃に凍り付いていた会場も【N―EVES】達のパフォーマンスによって何とか空気も解れたらしく、両者の健闘を称えて温かな拍手を送っている。

ありがとうございます、と両チーム共に頭を下げたところで、ふと蓮が何かを思い出したように藍へ視線を向けた。

「……そうだ、先輩。折角ですから教えておきます。幽霊姫さんが使ってた見慣れないカードのことで1つ」

「えっと……《アスタリクス》のこと?」

藍の確認に蓮がこくりと頷くと、他の4人も蓮の言葉に注目を寄せた。

「少し前のことですけど、青の方で幻想の紅クリム・クロアの連中がそんな名前の

カードを探して回ってるって噂があつたんです。強引にアンティを迫ってくるのか何とか……いつもの『悪口』ならいいんですけど」

「紅の人間が、『アスタリクス』を……?」

口元に手を当て、藍が思考を巡らせる。

海の底にある大陸、アトランタ・ブルー忘却の青。その成り立ちに関わっていたこともあり、近隣大陸である文明の白とは比較的友好的な関係を築いているものの——『もう一方』の近隣大陸である幻想の紅とは領海の問題などで衝突が絶えないという『問題』を抱えている。

元々、紅の大陸は閉鎖的な面が強く、他の大陸からも険悪なイメージが抱かれることが多かった。根拠の無い『悪口』が囁かれることは青でも日常茶飯事なのだ。

(……何か、裏がありそうね)

紅の大陸と言っても、そこに所属する国だつて様々。ひとくくりにするにはあまりにも大き過ぎるが、それでも『一部の人間』がアスタリクスを狙っているということは確かな筈だ。少なくとも、火の無い所に煙は立たない。

「見たところ先輩の旅団には2枚、そのカードがあるみたいですし。噂は噂ですが、用心するにこしたことはないと思います」

「そう……情報ありがとう、助かったわ」

「いえ。その代わり気が向いたらでいいですから、コツチにもたまには『帰って来て』下さいね?」

微笑んで差し出された手を藍が握り返し、準々決勝は円満に幕を閉じた。

「それにしても以外というか、見た目通りだったというか……」

夢から醒めたようなふわふわとした気持ちで、ベルは選手用の通用口を歩いていた。気疲れした様子のメンバーに飲み物でもと選手用の配給場へと向かっている途中である。

先程の『噂』を気にしてか、藍は「単独行動は避けた方が」と気に

掛けていたが、待合ロビーから往復でも数分と掛からない距離だ。ベルは大丈夫だと手を振って出てきたのだが。

「えーっ!? 1人ひとつまで何て聞いてないよ!」

廊下の先、曲がり角の向こうから聞こえてきたのは、どこか聞き覚えのある少女の声。

どこまでも無邪気で、しかし子供のソレとも違う。

(……この、声——!!)

跳ね上がりそうになった心臓を押さえながら、ベルは壁に背を当ててゆつくりと角の向こうを覗き見た。

「おかわり禁止、なんてルールブックには書いてなかったし!!」

「規則に無くても『おかわり』なんぞ認められるか!!」

ベルの視界に収まったのは、スポーツドリントクの空容器を片手にスタッフへ抗議する白髪の少女——ヒヨリの姿だった。

「いーじゃんケチ!! 嘘つきい!!」

「嘘つきって……お前には常識ってもんが無いのか!」

ブーブーと頬を膨らまして抗議するヒヨリに、スタッフもたじたじで応戦している。

幸いベルに気付いていないらしく、しばらくよく分からない押し問答が続けられていた。

すぐにでも駆け寄って、彼女を問い詰めたい。

だがそんなベル以上に、彼女に会って話したい人がいるのだ。

(……今の内に、ユウさん達を)

衝動をぐつと堪えて、クラドから渡されていた携帯端末を取り出す。

数回プッシュすれば各メンバーのDパッドへと繋がる、時代遅れのジャンク品ではあるがベルの身としては十分な代物だ。

(早く——)

早く伝えないと。そう焦るベルの手を何かが遮った。

(——え?)

ディスクに巻きつく赤い鎖。

どこかで見たソレに戦慄を覚える間もなく、ベルのディスクが展開

する。

それと同時に陶器のような白い指先が、しっかりとベルの腕を掴んでいた。

「……失礼」

端末操作を妨害する、そんな意思をはつきりと示した腕の主は――

*
*

「……バトル。《サイバー・ドラゴン》と《フォトン・クラッシュヤー》でダイレクトアタック」

機械龍が放つ雷のブレスと、光子の戦士が振るう金棒の一撃。

幼い双子の操るモンスター達の攻撃は、相手のライフを見事に刈り取った。

これで謎多きチーム【ドミノ】も準々決勝を通過したことになるが、依然として彼らの使うカードは見慣れないものが多く、ユウの表情も険しくなるばかりだ。

『決まったあ!!…これで準決勝進出は――』

モニターの中には、声援に応えるユーギの姿が映し出されている。昨夜はどう姿をくرامしていたのか、そして今日はどうするつもりなのだろうか。

今大会のダークホースである彼らとは、このまま順調に勝ち進んでいけばブロックのトップ同士で行われる決勝戦で当たることになるだろう。だが――。

「分かんねえな。どれが『白面』のお仲間なのか」

待合ロビーのモニターを見上げ、クラウドが忌々しげに呟く。

ヒヨリの姿は勿論、これまでの試合で特に怪しげな人物は見当たらないからだ。当然と言えば当然なのかもしれないが、そこまで存在を隠す理由が分からない。

「大会に登録した選手のデータは、補欠も含めて流石に大会の方でも流出してないみたいだし……どこか別の旅団へ『助っ人』として参加

しているのかもしれないわね」

藍が1つの仮説を切り出す。

少なくとも、こちらが『白面』を追っていることは向こうも知らない筈だ。姿を隠す必要があるとするなら自身がどこかの旅団の『隠し玉』として控えているから、ではないだろうか。

「助っ人か……それなら確かに参加旅団の名簿を漁っても引つ掛からねえし、出場しても組合に登録してる『正式な旅団』だから弾かれる心配もねえな」

随分と回りくどいやり方ではあるが、それならば確かに姿を消して大会に参加できる。

そうまでして姿を隠す『白面』と、伝説の名を語る男。この大会に渦巻く『何か』に、メンバーの間にも不穏な空気が流れる。

「つーことは結局、俺らはこのまま大会を勝ち進めて、白面の奴を引きずり出すしか方法は無い訳だ。単純明快で結構なコトだが、どうもな……」

誰かの掌で転がされている様で、どうにも落ち着かない。

4人の思考がそう重なったところで、アンリエールがふと気が付いたように声を上げた。

「そういえば。あの芋メイドはどこをほつつき歩いてますの？」

「ああ、メイドちゃんなら飲み物貰って来るってさつき……」

ここから配給場までは、往復しても10分と掛からない距離だ。

それにしても遅過ぎる。

「……私、ちよつと様子を見てくるわ」

蓮に受けた注告が藍の脳裏を過ぎる。

ベルとて《アスタリクス》の所持者、やはり1人にすべきではなかったのか。

そんな焦燥を浮かべる藍をクラドが腕を掴んで制止した。

「待った、まずメイドちゃんの連絡端末に付けた発信機があるから、そいつで居場所を探ってみようぜ？」

「まあ何と、抜かり無いですわねえ」

流星はチームのブレーン担当。

感心した様子アンリエールも含め、一同はクラドのDパッドに顔を寄せる。

しかしクラドのDパッドに表示された発信反応は——ただ一言、『LOST』の文字だけがあった。

「……マジかよ」

「た、単に壊れただけじゃありませんの？」

「ならいいんだが……この場合は『壊された』って考える方が自然っぽい、よな」

クラドの言葉を聞くや否や、藍はすぐさま弾かれた様に飛び出してしまった。

自分の責任と感じてしまったのだろう、しかしユウは冷静に判断を下した。

「……手分けをして探そう。各自何か手がかりを掴んだら全員に連絡を。アンリ、お前は俺と一緒に来い。狙いが《アスタリクス》ならお前の身も危ない」

「わ、わかりましたわ……！」

「俺はとりあえず大会運営の方に行ってくる、迷子の放送でも流して貰えれば御の字だしな」

言うが早い、ユウとアンリエール、クラドが一斉に駆け出した。

何かアテがあるわけでも無い。

それでも『手遅れ』になつてはならないのだ、絶対に。

『さてさて、続きましては——……』

モニターの向こうで、コーパルが次々と試合を仕切っていく。

にじいろ団が迎える準決勝開始のゴングは、刻一刻と迫っていた。

「……う」

ぼんやりと視界が開ける。

全身に意識が巡っていくような感覚の後、腹部に鈍い痛みを感じてベルは苦痛に顔を歪めた。

「っ痛……!?!」

「目が覚めましたか」

ひよこ、とベルの視界に入り込んできたのは——藍や【N—EVE S】の面々とも少し違う、凜とした顔立ちの黒髪の女だった。

ストレートの前髪は眉の辺りで切り揃えられ、綺麗な髪ではあるのだが全体的にぎっくりとした印象が強い。無頓着、とでも言えばいいのか。

つり上がった目の端はキツイ印象が強いが、表情はユウにも引けを取らない無味無臭で、ベルを覗き込むその顔からは何の感情も窺えない。

「ここは……?」

少し身じろぎして分かったが、当然のように身体の自由はきかない。

鎖のようなもので身体を縛られているらしく、芋虫状態で地面に放られているようだ。

「ここは私たちが根城にしている場所です。会場からもそう離れてはいません」

ベルの質問に女は懇切丁寧に答えたが、具体的な場所はしっかりと伏せている。

ふと周りを見れば、確かに薄暗くて埃臭く、何に使うのかも分からない様々な機材が捨て置かれていた。

「すいませんが貴女の所持していたデュエルディスク、並びに連絡端末は破棄させて貰いました。危害を加えたことについては謝罪します」

そうだ、とベルはようやく記憶の整理がついた。

ヒヨリの姿を見つけたあの時、ディスクを強制的に起動させられた——つまり半実体ARの『防衛機能』が働かないその一瞬について、この女は強力な膝蹴りを叩き込んで見せたのだ。気を失うよう的確に。細かい見かけに反して、こういうった荒事には随分と慣れているようだ。

「二体、わたしに何を……?」

「随分とアバウトな質問ですね。私もそれでは答えかねますが、ここまで貴女を連れ去ってきた理由は一つです」

ベルの目の前に、橙色のDパッドが放り投げられる。

カラカラと回って地面を滑ったソレは、ベルの鼻先に当たるとピタリと動きを止めた。

「私とアンティデュエルを。貴女には《アスタリスクス》を賭けて頂きます」

黒髪の女は、ただ冷ややかにそう告げた。

第28話 立ち籠める闇

「っ……!?!」

ジャラジャラ、と鎖が音を立てて巻き上げられる。

女は首輪に付けられたソレを引っ張るようにしてベルを無理矢理に立たせると、身体を簧巻きにしていた鎖だけを解いた。四肢には未だ柱へと伸びる鎖が繋がれているが、ある程度の自由は効くようだ。それこそ、デュエルをするのに十分な位には。

「げほっ、げほっ……!?!」

こみ上げてくるものを堪えきれずに、思わず咳き込む。

溜りに溜った恨みの視線を黒髪の女へと向けてみるも、当の本人は平然とした顔で流して見せた。

「……随分、乱暴です、ね」

「教養が無いもので。おもてなしという文化には疎いのです」

言いながら女はディスクを取り出すと、手馴れた様子で腕に装着した。

真紅の外装に独特のフォルム。どこかで見たような気もするが、身体中の痛みに流されベルの思考はすぐさますり替わっていく。

渡してきたのは最新型のDパッド、しかし相手は旧型のディスクを使用するという違和感だ。どうしてそんなことを……と考え始めれば、疑いへと向かうのは必然だ。

「? ああ、Dパッドに細工がしてあるかも、という顔をしていますね。疑うようなら私のディスクと換えても構いませんよ? 尤も……私があなたのそんな行動を読んで、そっちのディスクの方に仕掛けをした、という可能性もあります」

そう言っただけで女は付けたばかりのディスクを外すと、ベルの方へ放つて投げた。

人の器を測るような言葉と視線。じつと見据える無感情な吊り目が、心の底を見透かしてくるようで気味が悪い。

ベルは真紅のディスクを手にとってしばらく考え込むと――その

まま女へ投げて返した。

「……疑ってもキリが無いですから。わたしはわたしと、カード達だけを信じます」

「成程、良い回答です。貴女は教養がありますね」

互いにディスプレイを装着し、起動する。

最新型とあって少し戸惑ったが、デュエルモードへ変形させてしまえばあとはいつも通りだ。

（このデュエルに勝つても、無事に帰してくれるって保障は無いけど……）

立会人の無いアンティデュエルなど、所詮は口約束。向こうが勝つまで約束は延期、なんてことも有り得る。それでも今は、彼女が決闘者としての筋をだけは重んじる人物であると信じて戦うしか無い。

その線の様に細い吊り目からは何の感情も窺えないが……女は急に、思い出したように言った。

「ああ、忘れていました。そのDパッドに、アナタの持っていた端末の連絡先を登録しておきました。お仲間さんに連絡を取るなら今の内ですよ」

人差し指を立てて語るその台詞はどうにも棒読みで、何らかの意図があるのは明白だ。

「……何が狙い何ですか？」

「それは言えません。ですが、別に強要もしません」

のらりくらりと核心は語らない女だが、旅団メンバーに連絡が取れるのは幸いだ。自分の置かれている状況を伝えられるのなら、形振り構ってなどいられない。

とはいえ相手は慣れない新型機器。どうしたものかとベルが硬直している、見かねたように溜め息を付いた女が言い足した。

「左上のアイコンを指でタッチ……触って、下の方向になぞって下さい。アンテナのアイコンがありますから、それをタッチしたら連絡先もタッチで選んで下さい。そうしたら勝手に繋がります」

言われた通りにしてみると、何のことはなくちゃんと繋がった。

暫くコール音が流れた後、画面に表示されたのはクラドの顔だっ

た。

『なっ……メイドちゃんか!? 今どこにいるんだ!? 無事か!?』

クラド側には未登録の不審な着信として表示されたのだろう。訝しげな表情から一転、必死の形相で声を上げた。やっぱり、いなくなつた自分を探してしてくれたのだ。

ベルも見知つた顔を見ることが出来て、僅かながらほつと息が落ちる。

「すいません、無事とはチョット言い難いんですけど……何とか大丈夫です。会場近くの工場跡らしいんですけど、具体的な場所までは……」

『分かつた!! すぐ皆で探しに行くから、それまで——』

「今、ヴァルキュリアをアンテイにしてデュエルをさせられています」

要点だけを簡単に述べて、ベルは今は見えないもう1人の『使い手』に警鐘を飛ばす。

本来なら真つ先に彼女へ連絡したかったが、自分の現状のこともある。直接本人へ連絡するよりも、こうした話は頭の切れる『ブレーン』へと伝えた方が良いとの判断だった。

『——マジか?』

「はい、多分N—EVE Sの皆さんが言つてた人達じゃないかと思えます。だからアンリさんの周りを警戒してあげて下さい。この人が何者なのかはまだ分かりませんが——」

「そういうえば。そちらのチームも』そろそろ準決勝の時間ではないですか?」

わざと画面の向こうにいるクラドへ聞こえるようにだろう。女が声を大きめにしてそんなことを呟いた。そんな女の言葉をしっかりと聞き取つたクラドの顔が、僅かばかり曇る。

『……今の、誘拐犯の声か?』

「はい、でもあの、もうすぐ試合って本当なんですか!」

『まあ、な……ただ今の話で何となく察したわ。奴さんも中々汚え真似してくれるじゃねーの』

要するに。

次の対戦相手が、妨害工作の為に自分を？

「まあ、ひどい言い掛かりですね」

どういった意図があったのかは分からない。だが確かに『そういうコト』をわざと匂わせた女は、クラドの怒りに対しても涼しい顔で受け流してみせた。

「……クラドさん。わたしは大丈夫ですから、皆で試合に出て下さい！」

『バカ!! んなコト出来るか、放っておいたら何されるか——』

「わたしたちが失格になる、それがこの人たちの狙いかもしれないんですよ？ それにわたし連れ去られる前に見たんです、『白面』の仲間の人を会場で……」

『なっ!? おいそれマジか!?!』

ヒヨリがいると分かった以上、敗北は許されない。何と少しでも勝ち上がってユウに引き合わせなくてはならない。こんな所で躓いている訳には、いかない。

「……はい。だからわたしは大丈夫です！ 勝って、ちゃんと皆のところへ帰ります！ だからクラドさん……お願いします、試合には必ず出て下さい！」

何より。自分の不注意でユウに、皆に迷惑を掛ける訳にはいかない。

「……お願い、します」

『だからって、そんな……』

画面の向こうのクラドは困ったように顔を歪めたが、ベルの真剣な眼差しを受け取ったのだろう、意を決したように表情を引き締めて答えを出した。

「……いや、分かった。ひとまず皆と合流して相談する。どうするかはそれから決める。だから——」

何かを言いかけたクラドの言葉は、赤い鎖によって掻き消されて消えた。

ヒヨリも使っていたデュエルアンカーのようなモノ。デュエルモードは作動しているが、他の機能は全てシャットアウトするよう

だ。

「面会時間は終了です。では参りましょう」

用は済んだとばかりに、女が2台のディスクを強制的にリンクさせる。

審判員の立会いも無しに起動するデュエルモードといい、やはりヒヨリのときと状況が重なる。

「この鎖……あなた、まさか!?!」

「ルールは折角ですから、大会と同じものを使いましょう。よろしいですね?」

立ち込めていく不気味な黒い霧。

ベルが抱く言い知れぬ不安がそのまま形になって現れたソレは、否が応でもその言葉を思い出せずにはいられなかった。

「――決闘^{デュエル}」

無法の決闘。

その幕は、闇の中で静かに切られたのだった。

【ベル】LP4000 VS 【??】LP4000

「切られたか……クソッ」

沈黙するDパッドに思わず拳をぶつけそうになって、クラドは行き場の無い憤りを長い嘆息に変えて吐き出した。

何とか気持ち落ち着かせて、クラドは他のメンバーへと回線を繋げるべく操作する。

(ひとまず、皆に伝えねーとだな……)

今のところは無事なようだが、状況は最悪だ。

恐らくは次の対戦相手が妨害工作の為にベルを誘拐したのだろう。わざわざアンティデュエルを行い時間を稼ぎ、ベルの方から連絡をさせてコチラを煽り立てているのがその証拠である。

しかし一概にそうも言い切れない不安もある。藍が気にしていた例の噂だ。

正直なところ、紅の人間に関してはあまり良い噂を聞かない。自分達の思想を主張するためにテロ紛いの行為をするなど、過激な行動が多いのも事実だ。

何故《アスタリクス》を狙っているのかは分からないが、奪われてしまえば『元所持者』がどうなるか……あまり想像したくは無い。

「おや？ どうしました、慌てた様子で……？」

不意に声を掛けられ、驚いて声のする方へと目を向ける。

随分と低い位置から声を掛けられたようで、クラドの視線はどんどんと下へ降りていった。

「あはは……こんな所から失礼します」

通路の壁に設けられた、金網で蓋をされた四角い穴……恐らくは通気口なのだろうが、しかしどこからどう入ったのか。今大会で最も注目を集めている人物が、ひよっこりと金網の向こうから顔を覗かせていた。

「……何やってんだ、アンタ？」

「いやー、こうでもしないとすぐに見つかってしまうもので……人気者というのは思っていたより大変ですね」

伝説の名を語る男は、どこか人事のように笑って見せた。

「そんなことよりも……随分と怖い顔をして、何かあったのですか？」

「わたしのターン、まずは手札から《トリオンの蟲惑魔》を召喚!!」

《トリオンの蟲惑魔》

☆4 / 地属性 / 昆虫族 / ATK 1600 / DEF 1200

真紅の衣を纏った蜻蛉の幼子たる少女型のモンスターが、地中から飛び出して姿を現す。

その手にはしっかりと一枚のカードが握られている。使い方はもうバッチリだ。

(サラさん……力を貸してください!!)

カードを託してくれた麗しき決闘者の顔がベルの脳裏を過ぎる。

思いを託してくれた彼女の為にも、負ける訳にはいかない。

「トリオンの召喚成功時、デッキから《奈落の落とし穴》を手札に加えます!! 更に手札から永続魔法《補給部隊》を発動、カードを1枚伏せてターンエンドです!!」

「……ほう」

何のカードに対してなのか、黒髪の女は口元に手を当てて興味深そうに呟いた。

補給部隊は、1ターンに1度だけではあるが自分のモンスターが破壊されると1枚のドロワーを得るという、相手に見れば地味ながらも厄介なカードだ。

その隣にはあからさまな『罨』という、《サイクロン》で狙うにしても二者択一を迫る中々に嫌らしい布陣を敷いたベルであったが――。

「……1つ、聞かせて貰っていいですか」

「? 何でしょう」

表情は険しく、じつと女を見据える。

つい先日に見えた「デュエルを楽しむ心」はもう、鳴りを潜めていた。

「ヴァルクュリアが欲しいだけなら、どうしてこんな回りくどいことをするんですか?」

それこそ、気絶している間にでも抜き取ってしまえばいい。

審判員機構に咎められるから、というのは愚問だ。彼女達の目を盗んでデュエルすることが出来る妙な手段を抱えておきながら、そんなことを気にする必要は無い筈だ。

「やっぱりわたしたちのチームを……妨害する為なんですか?」

ベルの目が一層険しくなる。

そんな糾弾の視線を真正面から受けて尚、黒髪の女はフムと少し考ええるような仕草を見せただけで、さらりと答えて見せた。

「否定します。私の目的は《アスタリクス》の奪取、それ以外にはありません。こうしてデュエルを挑んでいるのも故あつてのこと……それ以上は答えるわけにはいきませぬね」

その解答がターン開始の代わりと言わんばかりに、女はデッキから

カードを引き抜いた。

「私のターン、まずは手札から《補給部隊》を発動」

「っ……!?!」

自分と同じカードがまるで鏡合わせのように相手のフィールドに立ち上がる。

その光景にベルが思わず声を上げると、女は不思議そうに首を傾げた。

「そう珍しいことでもないでしょう？　優秀なカードはデツキへの採用率も高い、そんなことは教養の無い私だって知っていますよ？」

続けて、と淡白な声で繋げて、女はカードをディスクへとセットしていく。

「手札から《炎王獣 バロン》を攻撃表示で召喚」

《炎王獣 バロン》

☆4 / 炎属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 1800 / DEF 20

0
地を揺らし、赤肌の獣戦士が鼻息を鳴らしてフィールドへと降り立つ。

灼熱を纏うその姿が、大会前のあの日を髣髴とさせる。

——さあ。楽しいデュエルを、始めよ？

天真爛漫な瞳のその奥に、何か嫌なモノを秘めた白髪の少女と交えた、あの日。

彼女が付けていたディスクは。

あの時、デュエルに割り込んで来たのは誰だったか。

「……あの時は、我らの巫女シスターがお世話になりましたね」

目の前にいる女は。

「やっぱりあなたが、白面の……!?!」

「そちらでどう呼ばれているかは存じませんが、恐らくは」
こくりと頷いて、女は肯定の意を示した。

彼女が白面の女だとすれば、次の対戦相手となる旅団には——。

途切れ途切れだった線が、一本の線になって繋がっていく。

「……失礼。罫の発動は宜しいのですか？」

女の声にはっと意識を取り戻し、ベルは慌てて罨の発動させた。「っ、な、《奈落の落とし穴》発動!! バロンを破壊してゲームから除外します!!」

異空へと繋がる裂け目へと落下し、断末魔の叫びを上げる炎王の尖兵。

その犠牲は、敵陣を焼き尽くす業火へ繋がる小さな種火となる。

「補給部隊の効果を発動。カードを1枚ドロ―。更に場の「炎王」が破壊されたことにより手札の《炎王獣 ヤクシヤ》を特殊召喚します」

《炎王獣 ヤクシヤ》

☆4 / 炎属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 1800 / DEF 20

0

同胞の死を嘆き、その怒りを咆哮へと変えて棒術を操る牙の戦士が奮い立つ。

「バトル。トリオンへ攻撃」

怒りの戦士の一撃はいとも容易く蜻蛉の少女を葬った。

はじけ飛ぶ火の粉が、実体を伴ってベルへと降りかかる。

「ッ……!?!」

【ベル】LP4000↓3800

服を、頬を焦がすその熱量はまさしく現実のものだった。

背筋を濡らすような不気味な感覚はヒヨリと戦ったときと同じ――

「闇の、ゲーム……!?!」

「おや、ご存知でしたか。巫女とのデュエルではダメージを負っていなかった筈ですが……いかに、我々とのデュエルは単なる遊戯ではありません。受ける痛みは現実には、命(ライフ)を失うことは文字通りの『死』を伴います」

「死……って、それじゃあ、行方不明の人たちはどうしたんですか……!?!」

「そこまで調べていたのですか。流石は教養ある方、関心です」

「答えてください!!」

精一杯声を張り上げるも、ベルの足は立っているのがやっと、とい

うまでに震えていた。

闇のゲームの犠牲者が辿ったその末路は？

カードの中に閉じ込められるだけではなかったのか？

「その質問には答えかねます。さあ、デュエルを続けましょう」

知りたいのならこのデュエルに勝てばいい。そう言わんばかりに女がプレイを促す。

命まで掛かったこのデュエル、タイムアップで敗北などあってはならない。

「……トリオンが破壊されたことで、わたしは、補給部隊でカードを1枚……ドローします」

震える指先でカードを引き抜く。

勝つて皆の所へ帰るんだ。そう自分に言い聞かせて、ベルは恐怖で燃え尽きそうな心を何とか奮い立たせる。

「では、私はカードを2枚伏せてターンエンドです」

「そんな……」

待合ロビーに集まったメンバーは、それぞれ暗い面持ちでクラドの話聞いていた。

一番ショックを受けていたのは、やはり藍だった。

「私をもっと強く止めてれば……付いていてあげてたら」

蓮からも忠告を受けていたにも関わらず、無警戒にもたった一人で行かせてしまった。

そんな自分に対する怒りが、か細い指先を丸めた拳を震わせる。

ベルのことだ、きつと気疲れをした自分達の為にと飲み物を取りに行っただろう。そう思えば尚更のことだった。

「藍、たればは無しですわ。ここに居る全員にその責任はありますのよ」

「お嬢の言う通りだぜ姉ちゃん。大会スタッフの人がセキュリティに連絡してくれたし……何でか知らねえがユーギームトウのチームも

手分けして街を探してくれている」

クラドが事情を話すと、ユーギはベルの搜索を願い出たのだという。何でも「麗しき小麦肌のお嬢さんが危機に晒されているのなら、黙っていられません」とのことだ。

確かに渦中の人物が街を歩き、周囲を騒ぎ立てればそれだけで誘拐犯を炙り出せるかもしれない。

「……対戦相手は、何と？」

ユウは表情こそいつも通りだが、返答次第では試合など放棄して相手方に飛び込んでいきそうな不穏な空気を纏っている。

実はクラド、それを実行に移してしまった訳ではあるが、そこから得られた情報は意外なものだった。

「否定してた……というか、連中も昨夜に闇討ちを喰らったとか言ってるな、逆にこつちが疑われたよ。確かな証拠が無いのも事実だ」

旅団間のトラブルは大会側も関与しない。結局、お互いに疑いも晴れぬまま試合に臨むしか無い訳だ。ここであらぬ疑いを探っているも、闇雲に辺りを探し回ってもキリが無い。

だからこそ、クラドはベルの意思をそのままの形でメンバーに問い掛けた。

「……だから。とにかく今は、メイドちゃんの言う通り試合に出ようと思う」

こういう時、真つ先に身を案ずるクラドから出た思わぬ結論に、メンバーは驚いたように目を丸めた。

「誘拐事件なんざどの道、俺らの出る幕じゃない。メイドちゃんのことはその道のプロに任せて、俺らは俺らのやるべきことをやろう。反対意見があれば言ってくれ」

何か言いたげに口を開けて閉じたのは、藍とアンリエールだった。

それでも自分達の意見が感情的で現実的でないことは頭で分かっていたのだろう。ユウがしばらく考え込み、静かに答えを出すまでは目を伏せて押し黙った。

「……素人が闇雲に動き回っても仕方がないのは事実だ。俺はベルと、クラドの意向に従う」

ユウの考えに後押しされる形で、藍とアンリエールもやがて静かに首を縦に振った。

それでも何か言わずにいられなかった藍は、やがてぼつりと口を開いた。

「……出来る限り試合には集中するわ。けど試合が終わってもベルちゃんが見つからないなら……私も探しに行く。それだけは許して」「ああ、そりゃここにいる全員がそのつもりだ。な?」

今度のクラドの問い掛けには、全員が間髪入れずに頷いた。

「わたしは、手札から《テイオの蟲惑魔》を召喚!!」

《テイオの蟲惑魔》

☆4 / 地属性 / 植物族 / ATK 1700 / DEF 1100

大口を開けた獣のような形の巨大な食虫植物……ハエトリグサの精霊たる少女型モンスターが気だるそうに欠伸を漏らす。花で彩ったツインテールの黒髪は色香を散らす雨露に濡れ、なんとも扇情的だ。

そんな彼女として罨を張り獲物を待ち構える蟲惑魔の1人。闇の恐怖に晒されている新たな主の為に、その力を存分に振るう。

「テイオが召喚に成功した時、墓地から「蟲惑魔」1体を特殊召喚できます!! 《トリオンの蟲惑魔》を特殊召喚!!」

テイオが紡ぐ歌に誘われ、砂塵を巻き上げて蜻蛉の少女が再び地中から飛び上がる。

——女の場の《補給部隊》を貫きながら。

「……トリオン第2の効果!! このカードが特殊召喚に成功した時、相手の魔法・罨カードを1枚破壊します!!」

「……ほう」

素直に感心したように、女は感嘆を漏らす。

気が付けば場には同じレベルのモンスターが2体。この状況、女とて僅かな攻撃力不足を指摘するほど野暮ではない。

「……行きます!! わたしは、トリオンとテイオでオーバーレイ!!」
闇の中に差す眩い希望の光。黒の召喚法は少女に道を切り開く力を与える。

彼女のデツキの中に渦巻く、数多の想いの数だけ。

「☆4モンスター2体で、オーバーレイ・ネットワークを構築!! エクシーズ召喚!!」

ここまで来る為に乗り越えた、大きな父の背中。

かつて目の前に立ちはだかった強固な意思が、今は絶望の暗闇を払う強靱な牙となる。

「全てを砕く金剛の牙!! ★4、《恐牙狼 ダイヤウルフ》!!」

蟲惑魔たちの魂をその身に纏い、金剛の獣は遠吠えを上げた。

(絶対に負けない……『皆』の為に!!)

こんな得体の知れない闇の中でも、自分は決して1人じゃない。

そんな事実が、褐色の少女を決闘者として奮い立たせていた。

第29話 イカロスの翼

「バトル!! ダイヤウルフでヤクシヤを攻撃!!」

牙を持つ者同士が、己の主君の為にと真正面から衝突する。

金剛の牙と炎の棒術が交差し——結果は、四足の獣たるダイヤウルフに軍配が上がった。

「??」 LP4000→3800

僅か200とはいえ、ダメージは通った筈。

しかし女は痛みなど感じた風も無く涼しい顔で受け流して、カードの処理を続行した。

「……では、破壊されたヤクシヤの効果発動。手札のカード1枚を選択して『破壊』します。選択するのは《炎王神獣 ガルドニクス》」

ベルの脳裏を過ぎったのは、ヒヨリとのデュエルで明らかになった不死鳥ガルドニクスの恐るべき効果。だが、ベルとてあれから何も学んでいない訳じゃない。

「……それなら!! 手札から魔法カード《死者蘇生》を発動!! 墓地のガルドニクスをわたしの場に特殊召喚します!!」

「……成程、そうきましたか」

墓地で発動しフィールドへ舞い戻るなら、その場所から奪ってしまえばいい。

幸いにも手札にそれを可能とするカードがあったことに感謝しつつ、ベルは女の顔色を窺ったが……。

「それにチェーンして畏カード《リビンググデッドの呼び声》を発動します。対象はガルドニクスを選択、よって蘇生対象を失った貴女の《死者蘇生》は不発となります」

「ッ!」

破壊自体は防ぐことが出来た。しかし不死鳥が舞い降りたのは自らの主の下だ。

火の粉を星屑のように撒き散らして、死よりの輪廻を自ら祝福するように咆哮を上げる。

《炎王神獣 ガルドニクス》

☆8／炎属性／鳥獣族・効果／ATK 2700／DEF 1700

ダイヤウルフの効果で破壊しようにも、そうすれば次のスタンバイフェイズに復活してしまう。そもそも自分の場がガラ空きになってしまえば元も子もない。

相手の方が1枚上手だった、というどうしようもない事実。このターンで打てる術はもう無い。

「……わたしはこれで、ターンエンドです」

「では、私のターン。手札から《炎王獣 ヤクシヤ》を攻撃表示で召喚バトルです」

恐らくは来るであろう、激しい衝撃に自然と身が固まる。

空を舞う炎王の長が狙いを定めたのは、地を這う四足の獲物だ。

「ガルドニクスでダイヤウルフを攻撃」

空から降り注ぐ圧倒的な熱量。金剛の獣は成す術なく、業火に焼かれてその身を溶かした。炎の渦はやがて後方のベルへとその魔手を伸ばした。

「うっ……うあ!!」

【ベル】LP3800↓3100

身を焦がす炎は、やはり本物のそれと何ら変わり無い。

恐怖が、森を焼き尽くしていくようにじわじわとベルの心を焦土へと変えていく。

「続けてヤクシヤでダイレクトアタック」

炎王の兵士に、容赦という言葉は存在しない。眼前の獲物がどんな姿であれ、その腕を振り下ろすだけ。

炎を纏った棒術の一撃は、無残にも褐色の少女へと叩き込まれた。

『大変長らくお待たせしました!! それではBブロックは準決勝、最初の組み合わせはこちらです!!』

華やかなファンファーレと共に、各チームの紹介が行われる。

『まずは、これまで見事な試合を繰り広げて頂きました【にじいろ団】!! 所以对するは堅実なプレイングで着実な勝利を収めてきました【猟犬（ハウンド）】の両旅団です!!』

コーパルの実況も、騒がしい歓声も。ベンチに座る4人の耳には届いていなかった。

気持ちばかりが焦っている。これではいけないと、誰ともなく溜め息を漏らす。

「……襲撃を受けたって話、どうやら本当みたいだな」

訝しげに眉を寄せながらも、クラドはぼつりと呟いた。

対岸のベンチに見える人影は、大柄な男と年端も行かない少年が2人だけ。

試合が出来る最低限の人数すら足りていないのだ。

「二応、向こうの旅団について調べてみたのだけど……決闘傭兵の仕事を請け負っているかなりの大所帯みたいね。あちこちに分かれて活動しているみたいで、あの2人について調べようにも数が多過ぎて絞り込むのはほぼ不可能よ」

Dパッドを操作しながら藍が呟く。

規模の大きさ故に、地域ごとに幾つかのチームに分かれて行動している旅団のようだ。今回大会に参加したのは、その内の1つということなのだろう。

「ま、ともかくだ。向こうの頭数が足りてないってのは都合がいい。早めに切り上げてメイドちゃんを探しに行きたいってのもあるしな」クラドの発言は決闘者として褒められるべきものではないのかもしれない。

それでも今この場に関しては、その想いは皆同じだった。

『それでは!! 第1試合に出場する選手の方は、コートへお上がり下さい!!』

「……行って来る」

コーパルのアナウンスを聞いて、ユウがコートを上がっていく。

頭数の足りない彼らがどんな作戦で来るのか、それは明白だ。タッグを放棄してのシングル2回で勝利——これしかない。

つまりこちらにも、実力者2人をシングル戦にぶつけるのが最良という訳だ。

「……………」

ユウがコートの上に立つも、相手の選手2人は一向に立ち上がろうとはしない。

代わりに、少年が腕を高々と上げた。

「はいはい、審判員のお姉ちゃんズ！ 俺らから宣言がありまーす！」

『はい、なんででしょう？』

「俺ら、この第1試合はキケンしまーす！」

少年の口から放たれたのは、思いもよらない言葉だった。

その発言の意図に、会場からもどよめきが漏れ出す。

『は、はあ……ですがその場合、あなた方【獵犬】は自動的に敗北となりますが——』

「ちゃんとタッグ戦と最後のシングルはやるよ。最後の1人が今ちよつと遅刻中ですよ」

遅刻。その言葉に今度は会場のどよめきにも呆れのような色が浮かんだ。

「…………審判員。この場合、彼らは出場資格はあるのか？」

『あー、そうですね。本来であれば問答無用で出場取り消しし、としたいところなのですが。ご存知の通り少々ゴタゴタがありましたし、特例ということです』

歯切れが悪そうに、コーパルがジャッジを下す。

大会としても、誘拐や襲撃についてはあまり表に出さない方針なのだろう。

「そーそー。こつちもちよつとバタバタしててさ。それはお互い様だろう？ 少しくらいお行儀が悪いのは許してくれよう？」

悪びれる様子も無い少年にユウは険しい視線を送ったが、今回の事件は彼らの落ち度では無い筈だ。

小さく溜め息をつくど、ユウは黙って振り返り、コートを降りた。

『え、えー。という訳で、第1試合は【にじいろ団】の不戦勝という形

に……」

会場は剣呑とした空気に包まれたまま、第2試合であるタッグデュエルへと移行した。

ルーレットによって、ハーフライフルが決定する。

機械といえども空気を読んだのか、いつもの寸劇も少しばかり抑え気味だ。

『それでは第2試合はタッグデュエル、ハーフライフでの開始となります〜!!』

先にコートへ上がったのは藍とクラドの2人。

アンリエールの戦力は、未だ見ぬ『最後の1人』を討ち取る為に温存することにした訳だが……。

「……クラド君、大丈夫?」

「おうよ、メイドちゃんの分までしっかり役目を果たして見せるさ」

本番は苦手だ、と語る男は身に余る大舞台に緊張を隠せないのか、頼もしい言葉とは裏腹に表情を強張らせていた。

「……これで上手く決めれば、俺たちの勝ちだ。『全力』で行こう!」

「ええ!」

そんな自分を鼓舞するようなクラドの言葉に、藍はせめてもの手助けをと大きく頷いて答えた。

「こんなコトになってお互いアレだけどさ、まあ宜しく頼むよ♪」

そう意気込む2人に対峙するのは、現状「猟犬」全メンバーである大柄な男と少年の2人。態度はどうであれ友好的な少年と比べて、大柄の男は黙ってDパッドを起動させ腕に装着させた。さつさと始めようとでも言わんばかりに。

「あー、ゴメンゴメン。うちの長つてばどうにも血の気が多くてさ、あはは……」

途端、慌てたように少年が耳打ちをしたが、大柄の男は表情一つ変えずに黙って頷くと構えを解いて直立の姿勢に戻った。

そんな焦燥した表情から一転、少年は歳相応らしい悪戯な笑みを浮かべるとクラド達に向き直り言った。

「……そういえば。ソッチのいなくなった選手つての、あのオツパイ

大きい女の子だろ？ 残念だなー、俺あの子と戦いたかったのに」
ベルの話題を出されて、2人ともぴくりと眉を潜める。
そんな反応を楽しむかのように、少年は言葉が続けた。

「……今頃、どんなヒドイ目にあってるのかな？」

我慢の限界とばかりに、藍がデイスクを構える。

静かに燃え立つ青色の炎。そんな彼女を片手で制して一歩前に出ながらも、クラドは呆れたように言葉を返した。

「おいおい坊主、悪戯はそこまでにしとけよ？ お兄さんとお姉さんな、今最高にムカついてんだ。それ以上無駄口叩けばどうなるか……？」

「おお、おっかね。最後の1人が来るまでなるべく時間稼ぎしたかったんだけど。それじゃ、始めますか？」

ちらり、と少年がコーパルに目配せする。

『え、えーそれでは第2試合はタッグデュエル、「にじいろ団」藍&クラド選手VS「猟犬」リレンジ燐路&慶燦選手、デュエル開始い!!』

「決闘!!」

【にじいろ団】藍&クラド LP8000 VS 【猟犬】燐路&慶燦
LP8000

【ベル】LP3100↓1300

ジャラ……と小さく鎖が揺れた。

鎖が繋がれた腕に身体が吊り下げられ、膝をつくことも許されな
い。

所々が千切れて血が滲んだいつものメイド服は、ボロボロになった
ベルの心をそのまま表しているかのようだった。

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンドです」

女の無機質な声に、かろうじて意識を取り戻す。顔を庇った腕はほ
とんど感覚が無かった。吹き飛ばされそうな衝撃を、鎖で無理矢理に
留められた四肢が痛い。

それでも霞む視界を何とか持ち直して、ベルは何とか地に脚を立たせる事が出来た。

(帰るんだ……ちゃんと、皆のところに……!)

余計なことは考えるな。今はそれだけに集中しろ。

恐怖は忘れよう。痛みも忘れよう。ただ今は、目の前のカードを――

――!!

「わたしの……ターンです」

「……ほう？」

その琥珀色の目にまだ闘志が宿っていることに驚いた女は、その細い目を僅かに丸めた。

「わたしは……手札から魔法カード《手札断殺》を、発動っ！」

今の手札では戦況を覆せる手段は無い。

だからこのカードに、全てを託す。

「《カズーラの蟲惑魔》と《――***――^{アスタリクス}翼戦神^{ヴァルキュリア}》を捨てて2枚を、ドロ―

……!」

ドロ―カードが、時折ちかちかど明滅する。

それでもデッキはしっかりと、ベルの声に答えた。

「……これで墓地の地属性モンスターが5体。召喚条件を満たしたことで、このカードを特殊召喚します……!!」

痛みを堪えながら。娘の身を案じて尚前に進ませてくれた父の思いを解き放つ。

「眠れる死者を呼び起こせ……《地霊神グランソイル》!!」

《地霊神グランソイル》

☆8 / 地属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 2800 / DEF 2200

黒鋼の巨神が、地を割って姿を現した。

その剛腕を叩き付け、呼び起こすのは――。

「グランソイルの、効果発動……墓地のモンスター1体を、自分フィールドに特殊召喚します……舞い戻れ、ヴァルキュリア!!」

《――***――翼戦神》

☆10 / 地属性 / 天使族・効果 / ATK 2800 / DEF 30

主を守護するべく地の底より舞い上がる、暗暖色の機械天使。

彼女が放つ暖かな光は、満身創痍の少女に微かな希望を与えた。

「ヴァルキュリアの効果、発動!! 手札の《マジック・ストライカー》を装備……攻撃力を600ポイントアップし、その名前と効果を得ます……!」

《―***―翼戦神》(マジック・ストライカー)

ATK 2800 ↓ 3400

その手に握られる、雷の形を象った魔法杖。相手のライフは3800。ヴァルキュリアの直接攻撃とグランソイルの攻撃が決まれば、それで終わり――!!

「これで……最後です!! ストライカーの効果を得たヴァルキュリアで、ダイレクトアタック!!」

勝敗を決める一撃の前に、しかし女は眉一つ動かさなかった。

静かに、デイスクヘセットされたカードへと手を伸ばす。

「罨カード、発動」

「……ッ!!」

どくん、とベルの胸が跳ね上がる。

女の場に伏せられていた伏せカードは、決して飾り物ではなかったのだ。

しかし――。

(……《テストラクト・ポーション》!?)

無慈悲に発動された罨は、決してヴァルキュリアの攻撃を防ぐものではなかった。

「自分フィールドのモンスター1体を選択して発動。選択したモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復します」

まさか、ガルドニクスを？

だとすれば女のライフポイントは回復し、このターンでの敗北は無くなるが……。

「私が選択するのは――」

ベルの脳裏に、1つのシナリオ浮かんだ。

破壊したガルドニクスを、次のスタンバイフェイズに効果で復活させ。モンスターを装備しているヴァルキュリア共々フィールドを焼き払い、攻撃力の下がったガルドニクスでヴァルキュリアを攻撃する……。

(それでも——!!)

ベルは、何とか希望を見出した。

グランソイルの制約効果でバトルフェイズこそ行えないものの、手札に抱えた残る手札は2枚目の《奈落の落とし穴》。ガルドニクスの破壊効果までは止められないが、その身は破壊出来る。

思い描いた生存への幻視^{ヴァイジョン}。しかしそんなベルの浅はかな読みは、始めの前提から覆されることになる。

「炎王獣ヤクシヤを、破壊」

「な!?!」

破壊されたのは不死の王ではなく、牙の尖兵。

巻き上がった爆炎は主のライフを大幅に回復した。

【??】 LP3800↓5600

「更に破壊されたヤクシヤの効果、手札のカード1枚を破壊します。手札で破壊されたことで《火舞太刀》のモンスター効果を発動。相手モンスター1体を破壊し、相手に500のダメージを与えます……対象はアスタリスクスを選択」

女の手札から、尾の先を刃状に尖らせた白毛のイタチが飛び出し、ヴァルキュリアを破壊せんと迫る。その姿はさながら爆風のようなだった。

「こ、効果発動っ!! 装備カードを墓地へ送ることで、破壊を1度だけ

——」

ここへ来て、ベルはようやく気が付いた。

自らの身には、既に詰^{チエックメイト}みが掛かっていたことを。

「気付いたようですね。そのアスタリスクスの破壊耐性は装備カードありきの効果、そしてモンスターの装備能力は1ターンに1度のみ。更に装備モンスターを失ったことで直接攻撃能力を失い、攻撃力は2

500までダウン……私のガルドニクスには届きません」

手の内は既に、見通されていた。

それでも、効果を発動しなければ結果はより最悪なモノとなる。魔法杖を手放し、ヴァルキュリアは火舞太刀の一撃を何とか受けきった。

「尤も、破壊できなかつたことで火舞太刀の効果ダメージは発生しません……手札のそのカードだけで、果たしてこれ以上持ちこたえられますか？」

「……まだ!! グランソイルでガルドニクスを攻撃!!」

父の想いを背負った一撃。

しかし想い（それ）だけでは勝利を掴むことなど出来ない。

「ダメージ計算前、速攻魔法《禁じられた聖槍》をグランソイルに対して発動。攻撃力を800ポイント下げて頂きます」

《地霊神グランソイル》

ATK 2800↓2000

残酷な事実が、完全にベルの心を折ってしまった。

罠を伏せていたとしても。自分の読み通りに女がターンを進めていたとしても。

デット死の運命からは、決して逃れられなかつたのだと。

「グランソイル、撃破」

鋼鉄の拳は、空高く舞う炎王のブレスに打ち勝つことなく蒸発し、消えた。

「……………あ」

残された手は。たった1枚の見通された手札だけ。

「——イカロスの翼、という話をご存知ですか？」

女の声が、ベルの折れた心の隙間にズルズルと入り込んでくる。

「彼も貴女も、少々目立ち過ぎたのです」

決闘者なら最後まで諦めるなど、誰かは言うだろう。

それでも少女は。傍らに控える女神と共に翼をジリジリと溶かしながら、落ち行くその瞬間を覚悟するしかなかった。

**

「行くぜ……俺は☆4の《スクラップ・キマイラ》に、☆5チューナー《スクラップ・ソルジャー》をチューニング!!」

翼を翻し、獅子の頭を持つ廃材の合成獣が5つの緑輪を潜り抜ける。

合計レベルは大台の9。白の召喚法を紡ぐのは、チームの頭脳たる男だ。

「メイドちゃんに渡したかったが、コイツは『専用系』だったんで……出し惜しみ無しで使わせて貰うぜ!! シンクロ召喚、《スクラップ・ツイン・ドラゴン》!!」

金切り声を上げ、光の柱から灰色の双頭龍が姿を見せる。廃材をスクラップ結集し形を成したその巨体からは絶え間なく駆動音が鳴り響き、白煙を撒き散らした。

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》

☆9 / 地属性 / ドラゴン族・シンクロ・効果 / ATK 3000 / DEF 2200

霞み揺らめくその白煙の中で、4つの瞳がエメラルドグリーンに輝き敵を見据える。

「早速行くぜ、ツイン・ドラゴンの効果だ!! 自分フィールドに存在するカード1枚と、相手フィールドに存在するカード2枚を選択して発動!! 選択した自分のカードを破壊し、選択した相手のカードを手札に戻す!! 俺は自分の場に表側で存在する《リビングデッドの呼び声》を破壊し、お前らの《ラヴァバル・ドラゴン》と《炎星候えんせいこう―ホウシン》をバウンスする!!」

ツイン・ドラゴンが掻き鳴らす駆動音が一層の激しさを増し、熱を帯びた白煙が突風の如く吹き荒れる。その巨体と爆音に気圧されているのは、炎を司る2体のシンクロモンスターだ。

溶岩を纏った黒岩の竜と、黒炎の駿馬に跨る勇ましき英傑。2体は成す術も無く、そのまま手札ではなくエクストラデッキへと戻ってしまった。

「これでお前らを守るモンスターはいねえ!! バトル、ツイン・ドラゴンと《イビリチュア・ソウルオーガ》でダイレクトアタック!!」

既に召喚されていた藍の鬼神と、廃材の機械龍が共に攻撃を仕掛ける。

相手の場には永続魔法である《炎舞―天キ》と《炎舞―玉衡》ぎよつこうが発動されていたが、既に役目を終えているその2枚は獣戦士族モンスターターの攻撃力アップに繋がるのみ。渦巻く水流と二筋の熱線は、【猟犬】の2人に大きなダメージを与えた。

「がつ……!? クソ、よくも……!!」

【猟犬】 燐路&慶燦 LP6000↓200

「俺はこれでターンエンドだ!! オラ、さっきまでの余裕はどうしたよ!?!」

「ナイスよ、クラド君!!」

「おうー」

藍の声援にパシンと掌に拳を打ち付けて応えるクラドだったが、その声は僅かながら震えていた。

(あつぶねえ……キマイラを引いてなかったらこのターンで終わりだったぜ……)

そんなクラドの心の声など知る由も無く、【猟犬】の少年――燐路はあからさまに焦りの色を浮かべていた。

「まずいぜ長、アイツら意外にやりやがる!! このままじゃ『どつちか』が来るまで持たないぜ!?!」

「……そうだな。では致し方あるまい、使用を許可する」

長と呼ばれた大柄の男、慶燦の静かな言葉に、燐路はニイと口を三日月に曲げたかと思うと落ち着きを取り戻し――ゲラゲラと高く笑った。

「……つくく、その言葉を待ってましたあ!! 行くぜえ、俺のターン!!」

ドローカードなどには目もくれず。

目を爛々と輝かせた燐路は、たった1枚のカードをディスクへと叩き付けた。

「魔法カード《真炎の爆発》を発動!! 自分の墓地から守備力200の炎属性モンスターを可能な限り特殊召喚する!! 来い、俺の可愛い僕共!!」

突如としてフィールドを包み込む、紅き閃光。

思わず顔を覆ったクラド達だったが、次の瞬間目に飛び込んできたのは燃え盛る炎の中に佇む3体のモンスターだった。

《ラヴァル・ツインスレイヤー》

☆5 / 炎属性 / 戦士族・シンクロ・効果 / ATK 2400 / DE

F 200

《ラヴァル炎火山の侍女》

☆1 / 炎属性 / 炎族・チューナー・効果 / ATK 1000 / DEF

200

《ラヴァル炎湖畔の淑女》

☆3 / 炎属性 / 炎族・チューナー・効果 / ATK 2000 / DEF

200

灼熱に燃える赤と黒の岩鎧を纏いしシンクロの戦士と、その傍らには紅い髪を棚引かせた褐色肌の少女2人が、祈りを捧げるように膝をついて控えている。

(……この状況で呼べるヤツっていうと……)

クラドは懸命に頭を回転させ、自分が知る『市場』のカードの中から候補を探し出す。

ツイン・ドラゴンとソウルオーガ。相手にしてみれば立ち並ぶ2体のモンスターの内、どちらか一方を逃せば除去されるのは明白というこの状況だ。ツイン・ドラゴンは自身の効果で、ソウルオーガは墓地の儀水鏡の効果を使えば効果発動のコストを補える。

まず最初に予想されるシンクロモンスターのレベルは☆6、8。そこから更に☆9のシンクロも可能、となれば……この布陣が突破されるであろう『候補』は幾つかあった。

しかし――。

「天を地を、全てを廻りし猿ましらの皇よ……」

2人の少女は炎の輪と成り、灼熱の戦士を球の檻として包み込む。

さながら、それは星の核。岩石の鎧はやがて融和し、胎動する巨大な1つの岩となった。

「今一度、仮初の世を駆け怠惰をみだ正せ!!」

炎の輪は弾け飛び……黒く焼け焦げたその表面に、紅い亀裂が走る。

それはまるで、これから起こる混乱を暗示するかのような『噴火』だった。

「シンクロ召喚ツ!!」

弾け飛び、拡散する黒岩。

その中心から軽々と飛び上がった影は、さも当然といった様子で『噴煙に飛び乗り』、手に持つ朱色の棒を自在に振り回して高らかに雄叫びを上げた。

「アスタリクスハヌマーン
《* * *》!!」

額には金に輝く戒めの輪。

美しい体毛すら炎を照り返し小金に光を散らす。

今大会で5体目となるその名が、ついに解き放たれた。

第30話 紅の最終者（アンカー）

《―*―炎猴皇》

☆9／炎属性／獣戦士族・シンクロ・効果／ATK 2800／DEF 1000

「さあ行くぜ、ハヌマーンの効果発動!! このカードのシンクロ召喚成功時、素材に「名称を指定する」カテゴリのモンスターが含まれていればその内の1つを選択し、そのカテゴリに属するモンスターの数だけ相手フィールド上のカードを破壊する!! 素材となった俺の「ラヴアル」モンスターは3体、よって3枚のカードを破壊させて貰うぜ!!」

ハヌマーンはその美しい黄金色の体毛を3本抜き取ると、ふうと息を吹きかけた。

途端、体毛は爆ぜる様に燃え上がり――瞬く間に3体のハヌマーンが姿を現した。

『仙術・見言聞』!!」

火を吹き、棒術を叩き込み、飛び蹴りを喰らわせる。3体は皆それぞれ全く異なる方法で、クラド達のモンスターはおろか伏せカードまでを破壊して見せた。

相次いで巻き起こった破壊の嵐は、クラドと藍に強烈な余波を浴びせた。

「きやあああつ!!」

「ぐっ……!!?」

予想外のカードの登場に脈が波打つ。

しかしブレインの頭脳は、この異常事態に対する確かな判断を下した。

「くっ……だが、破壊されたツイン・ドラゴンの効果を発動!! このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」モンスター1体を選択して特殊召喚する!! 来い、《スクラップ・ゴブリン》!!」

《スクラップ・ゴブリン》

☆3 / 地属性 / 獣戦士族・チューナー・効果 / ATK 0 / DEF 500

ツイン・ドラゴンの破片が寄せ集まり、不恰な廃材の子鬼が姿を現す。

貧弱なステータスではあるがこの場においてはまさに最適解。小型モンスターと侮る無かれ、立ちはだかった子鬼はクラド達の場を守る強固な盾となる。

「こいつは表側守備表示で攻撃を受けるとバトルフェイズ終了時に自壊しちまうが、代わりに戦闘によつては破壊されない!! 残念だがこのターン、その猿の攻撃は——」

そう言い掛けたクラドの目に映ったのは、余裕を崩さぬ燐路の狂笑。

嫌な汗が、背を伝う。

「はっ、そいつはどうか？ ハヌマーンにはもう一つ効果があるんだよ……!!」

主の言葉に呼応するかのように、猿の皇の姿がゆらりと揺らいだ。「こいつはシンクロ召喚に成功したターンの終了時まで、シンクロ素材となったカード1枚を選択することで同じ効果と名前を得るのさ!! 選択するのは無論《ラヴァル・ツインスレイヤー》だ!!」

赤と黒の岩鎧を纏った二刃の戦士が、再び戦場へと舞い戻る。

その光景に藍は愕然と声を漏らした。

「供物の姿をその身に纏え!! 『仙術・陽炎』!!」

「そん、な……!!?」

愕然と目を見開く藍の様子を見て、満足そうに目を細める燐路。

羽虫でも弄ぶように声を弾ませて、少年は更に告げた。

「そうそう、言い忘れてたが。ハヌマーンは獣戦士族モンスター、長の発動した「炎舞」2枚のサポートもしっかり受けているんだぜ? よつて攻撃力は3000に上昇だ!!」

《――***炎猴皇》

ATK 2800 ↓ 3000

「いくぜ、バトルだ!! ハヌマーンでその雑魚モンスターに攻撃!!」

『如意金箍戟』!!』

ツイン・スレイヤーの姿を借りたハヌマーンが手にした朱色の棒は、いつの間にか巨大な柱と見間違うまでにその大きさを変えていた。炎を纏ったソレは、非力な廃材の子鬼へと容赦なく振り下ろされる。

「この瞬間、ツインスレイヤーとしての効果を発動!! 墓地に「ラヴァール」が3体以上存在すれば、このカードは貫通効果に加えて守備表示モンスターを攻撃したとき、もう一度続けて攻撃することが出来る!!」

【にじいろ団】 藍&クラド LP4300↓1800

炎は勢いを増し、攻撃の余波は容赦なくクラドと藍の2人へと吹き付ける。

悲鳴すらも飲み込んで、岩鎧の戦士は再び朱色の『柱』を振り上げた。

「続けて2打目だ!! 『如意金箍戟・連』!!」

子鬼の盾は、その役目を果たすことは叶わず。

再び吹き荒れた熱風の前に、健闘も空しく2人の決闘者が膝をついた。

【にじいろ団】 藍&クラド LP1800↓0

クラドと藍が渦巻く炎に身を焼かれた、同時刻。

会場からそう離れてはいない廃工場の中でも、ソレは起ころうとしていた。

「バトル。ガルドニクスで攻撃」

破壊を司る炎のブレスが、気高き翼を撃つ。

暗暖色の機械天使は成す術も無く、その身を燃やしながら暗い墓地へとその身を落とした。

【ベル】 LP1300↓1100

「……あ」

宙を泳ぐベルの手を、200ポイント分の熱量が無常に焦がしている。反射的に手を引いたとき、既にヴァルキュリアの姿は何処にもなかった。

女はフウと一息ついたと思うと、淡々と事務的な台詞を述べ始めた。

「私はカードを1枚伏せてターンエンドしますが……貴女にはサレンドーを推奨します。これはあくまで私の『経験則』ですが、そんな細かい身体では超過ダメージ1600の苦痛は耐え切れ無いでしょう」
「ガルドニクスのダイレクトアタックを受ければ命の補償は無い。余計な苦痛を味わう前にヴァルキュリアを差し出せ……詰まるところ、そういう意味だろう。」

少し前なら、この大会に出場する前のベルならばきつと、言われた通りに手を置いていただろう。しかし今は。

「……冗談、言わないで下さい」
翼をもがれ、闘争心を折られても尚。ベルの心から決して灯火は消えない。

例え勝利の可能性が0%だとしても、それだけは絶対にしたくない。

待っている人たちがいる。

背中を押してくれた人たちがいる。

だから、どんなに怖くても――

「……もう絶対、逃げ出したりなんてしない!! 最後まで全力で戦います!!」

どんなカードを引いたとしても、恐らくはもう勝ち目など無い。そんな避けられない敗北を前にして、ベルの瞳は輝きを失っていないかった。

「……そうですか。教養があるのか無いのか、不思議な人ですね」
悩ましがな溜め息をついて、女は腰に手を当てた。

「どうやら気の済むようにさせてやろうという意味表示らしい。」

「……………」
震える指先で、カードに手を掛ける。

その先には決して奇跡など無い。

「わたし、の」

しかしそれでも、ベルは引くことを決めた。
僅かに力を込めた、そのとき。

「そのままです
Smettaila」

2人以外誰もいない筈の廃工場に、高らかに響いたのは線の細い男の声だった。

どこか聞き覚えのあるその声に、思わず視線を上げると――。

「お見事・よく言い切りましたね。美しく開いた貴女の花弁、しっかりと見届けさせて頂きましたよ♪」

そこには2階の手すりに腰掛け、パチパチと嬉しそうに手を打つブロンド髪の男――ユーギムトウの姿があった。

「ゆ、ユーギさん……どうして……?」

「お連れの方に話を聞きましたね。マスコミから逃げがてら、お迎えに上がりました♪」

ユーギは丈の長い白いコートを翻し手すりからひらりと飛び降りると、結構な高さであったにも関わらず猫のように華麗な着地を披露して見せた。

「!? 何故、貴方が……」

乱入者を前にして、女は初めて怪訝そうに眉を寄せる。

恐らく彼女にとっても想定外の出来事だったのだろう。僅かに狼狽を見せるも、すぐさまその表情を取り繕った。

「失礼ですが今はデュエル中。ですので部外者は――」

「はい?」

女の言葉を遮ったのは、ユーギの爽やかな笑顔。彼のディスクから伸びた一筋の光の糸は、女の操る『紅い鎖』へと瞬時に巻きついた。

「っ、これは……!?!」

途端、ベルのディスクにも変化が現れた。『BATTLE ROYAL MODE』の機械音声と共に、対戦相手の表示が新たに追加さ

れたのだ。

バトルロイヤルモード。3人が同時にデュエルを行う特殊な対戦形式だが、タッグとは違い基本的にはどのプレイヤーに狙いを定めて良い。結託して1人を狙うもよし、漁夫の利を狙うもよし。

当然、審判員機構の監視下であれば同意無しの乱入はカットされてしまうが、デュエルアンカーで繋がれている現状では同意も何も無い。そして今回の場合、ユーギの意図は明白だ。

「……どういふおつもりですか？」

「小麦肌のお嬢さんは大分お疲れのようですし、ここから先は僕がお相手致しましょう」

咎めるような女の視線と、ユーギの爽やかな笑顔が交差する。

時間にして十数秒の後、女は深く溜め息をついて紅い鎖を強制的に断ち切った。

「……今この場で貴方とやり合うのは愚策です。ここはひとまず身を引くとしましょう」

「おや、僕ではご不満ですか？ ではせめて家までお送りしますよ、女性が1人ではこの辺りは何かと物騒だ」

「……結構です」

表情は崩さぬまま追い続けるユーギを振り払うかのように、女が後ろ手に駆け出す。

「おやおや、どこへ——ッ!？」

ユーギの言葉は、突如として耳を裂いた爆音に掻き消された。

恐らくはリモートコントロール出来るのだろう、どこかに隠されていた真紅のD・ホイールが爆音を撒き散らしながら工場の中へと進入してきたのだ。

女は軽い身のこなしでソレに飛び乗ると、一目散に工場の外へと飛び出してしまった。

「……やれやれ。美しい見掛けに反して随分と野生的な女性だ」

ふう、と溜め息をついて女を見送ったユーギは、再び笑顔を作つてベルへと振り向いた。

「さてと。大丈夫ですか？ ご安心下さい、今セキュリティの皆さん

に連絡、を？」

手を差し伸べたユーギの視界には、ゆっくりと傾いていくベルの姿が映った。

ユーギが反射的に身体を受け止めると、ベルの瞼は虚ろに閉じていく。

ぷつん、と頭の中の電球が切れたような気がして。

ベルの意識はそこで、スーツと闇の中へと沈んでいった。

『えー、色々と大波乱の本試合ですがー。ここでまたしても問題発生です』

コーパルは自らの頭上に表示されているソレを指差しながら、朗らかに告げた。

それは【猟犬】最後のプレイヤーに与えられた遅刻の期限。^{リミット}タイマーが示す残り時間は、もう2分を切っていた。

『トラブルを考慮しての特別な「遅刻処置」でしたが、大会の円滑な進行の為タイムリミットを設けさせて頂きましたー。その残り時間もあと僅か、タツグデュエルで鮮やかな勝利を魅せつけてくれた【猟犬】チームもここで敗退かー!?!』

「……大変ですわね、大会のMCというのも」

腰に手を当て、退屈そうに呟いたのはコート上に立つアンリエールだ。

恐らく最後の1人は来ない。

【にじいろ団】が不戦勝を取って決勝進出か。

そんな雰囲気会場を包んでおり、彼女もまたそんな空気に吞まれていた。

一刻も早くベルを探しに行きたいのに、残り数分を待たなければいけないことが煩わしい。

「ワンちゃんチーム様ー？ 無駄な足掻きはやめて、さっさと棄権してくださいまし？ こっちは1分1秒も惜しいんですよー」

件の《アスタリスクス》を操り、藍とクラウドを破った少年——燐路がベンチからギロリとアンリエールに眼光を向ける。

「くそ、あの女……!!」

「気に掛けるな燐路。煽^{センリ}里から直ぐにこちらへ向かうと連絡があった……『10番』の奪取には失敗したそうだが」

低く唸るような声で大男——慶^{ケイシヤク}爍が囁く。

「なっ!? マジかよ、そんなに強かったのか? あのオツパイちゃん
は?」

「……ユーギムトウの邪魔立てが入ったようだ。彼を相手にするにはまだ時期尚早だ。煽^{センリ}里の判断は正しい」

「はあ!? くそ、何だってアイツが……!?!」

苛立たしげに足をバタつかせる燐路の仕草は歳相応らしかったが、その表情は悪鬼の如く歪んで見えた。

『残り1分!!』

そんな最中、遂にタイマーの残り時間が2桁へ突入した。

『50!!』

10秒毎に、コーパルがカウントを取っていく。

『40!!』

祈りを捧げるように手を組み、目を瞑るのは両陣営のベンチも同じだ。

その願いの質が果たして同じモノであるかどうかは、さておき。

『30!!』

願いを奏でるチームメイトの傍ら、ユウと慶爍の視線だけが静かに交錯する。

『20!!』

ここまで来ると、いよいよ決着の雰囲気^{ケイフキ}が漂い始める。

くるり、と周囲を見渡すアンリエールの表情に焦りは無かったが、その仕草には確実にこのまま決着が付くことを願っている節があった。

『10!!』 9、8、7、……』

遂にカウントダウンは、1秒ごとに刻まれる。

「5、4、3、2、1……!?!」

ばさり、と。

コーパルがカウントを詰まらせたその刹那。何か布のようなものがコート上に舞い落ちた。

その正体は赤く紅い、燃え盛る紅蓮を模したフード付きのコートだった。

ゆっくりと立ち上がったソレが、面を上げる。

「……成程。ようやくお出まし、という訳ですの?」

戦慄を滲ませながら、アンリエールが口端を吊り上げた。

残り1秒、その瞬間に突如として現れたのは——白い狐の面を被った女だった。

「う、嘘……?」

「……ビンゴ、ってか」

啞然とした面持ちを浮かべるクラドと藍、その傍らでポーカーフェイスが僅かに歪む。

ようやく合間見えた、『彼女』へ繋がる手掛かり。ソレを前にして、ユウも静かに冷静さを掻いていく。

「お、遅せえーぞ姉ちゃん!? いや一番悪いのはあのバカ巫女だけだよー……」

「……『犬狩り』に随分手間取ったようだな?」

重く響く慶爍の問い掛けに、白面の女はコクンと頷いて見せた。

そのやり取りを聞いていた燐路は「ああ、そういうコトかよ」と勝手に理解して、つまらなそうに口を尖らせて野次を飛ばした。

「チコクした責任、しっかり果たしてくれよ?」

白面の女はまた頷いて、白面に刻まれた曲線の眼をアンリエールへと向けた。

『何というロマンスでしょうか!! ヒーローは遅れて登場するモ

ノ、【獵犬】最後のプレイヤーが残り時間1秒というタイミングで颯爽とコートへ降り立ちましたあ!!」

「これまでも大会側で様々な『演出』がされてきたせいもあるのだろう、観客達はこれも何かの演出だと思ったのか、この奇跡を素直に受け入れ、大いに盛り上がった。剣呑な雰囲気の流れる【にじいろ団】の様子に、気が付くことも無く。

普段であれば嬉々として受け入れる歓声も、アンリエールの耳にはもう届いていない。相對した想い人の『敵』を前に、ふつつつと闘志が湧き上がっていくのが分かった。

「……これは好都合。貴女と間違われることも無ければユウ様と出会うこともなかったですから、一度お礼をと思っておりましたの」

「……………」

ディスクを構え、向き合う両者。

その後ろでコーパルとネフがいつもの茶番を展開し、特殊ルールが決定する。

『決定しました、ルールはフルライフ8000!! それでは参りましょう、【にじいろ団】アンリエール選手VS【獵犬】煽里選手、両チームの命運を分かっラストデュエル、開始イ!!』

「^{デュエル}決闘!!」

【アンリエール】LP8000 VS 【煽里】LP8000

「私の先攻ですわね……生憎の曇天ではございますが、これは愛しきユウ様へ捧げる華霊なる舞台。まずはその下準備と参りましょう。モンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド致しますわ」
「普段にも増して優雅に、そして熱の入った演技で素早く1ターンを終えるアンリエール。

幽霊姫の初動は静かに、何が飛び出すか分からない不気味なプレッシャーを放ち始める。

「曇天って……そこまで雲が多いわけでもねえのにな。気合入ってる

ぜ、お嬢」

「お願いアンリちゃん、勝って……！」

遂に姿を見せた『敵』を前に、ベンチからも思わず熱が飛ぶ。

そんな「にじいろ団」とは対照的に、「猟犬」のベンチでは燐路が腕を組んで余裕の表情を浮かべていた。

「……私のターン、ドロロー。手札から《クリバンデット》を攻撃表示で召喚」

《クリバンデット》

☆3 / 闇属性 / 悪魔族・効果 / ATK 1000 / DEF 700

面にはボイスチェンジャーでも付いているのか。白面の女が発した機械のような甲高い声に導かれ、毛むくじやらで黄色のバンダナを巻いた丸っこいモンスターが姿を現した。

「……見掛けによらず、随分と可愛いモンスターがお好きなようですわね？」

軽口を叩いて見せたアンリエールであったが、慎ましき^{ローレベル}は彼女の十番。この小さなモンスターが秘めた効果を知らない訳では無い。

(……墓地にカードを溜めていくタイプのデッキ、ですわね。「ライトロード」で無ければ良いのですが……)

どちらにせよこのエンドフェイズに見当が付くだろうが、墓地が『肥えて』動き出す前に仕留めなくてはならない。

早期決着が望まれるプレッシャーに、アンリエールの鼓動が脈を早める。

「バトル。裏側守備モンスターへ攻撃」

可愛い声を上げて突撃するクリバンデットの攻撃力は、たったの1000。

低ステータスの「ゴーストリック」モンスターであれば破壊出来る
と踏んだのだろうか、しかし——。

「おやおや……『怪演』前の役者に声を掛けるとは何たる無礼な……」

クリバンデットが振り下ろした小さな爪は、顔の前に札を付けた可愛らしいモンスターがはつしと白刃取りで受け止めていた。

《ゴーストリック・キョンシー》

☆3／闇属性／アンデット族・効果／ATK 400／DEF 1800

「守備モンスターは《ゴーストリック・キョンシー》。リバーズ効果により私はデッキから《ゴーストリック・マリー》を手札に加え、貴女には反射ダメージ800ポイントを差し上げますわ」

【煽り】LP8000→LP7200

早めにライフを減らしたいこの状況で、敵の自爆はありがたい。

アンリエールは思わず口端を吊り上げた。

「……カードを2枚伏せて、ターンエンド。この瞬間、クリバンデットの効果を発動。このカードをリリースし、デッキから5枚のカードをめくる。その中から魔法・罠カードを1枚選択し手札に加え、残りのカードを墓地へ送る」

「どうぞ？ 邪魔立ては致しませんわ」

涼しい顔をして受け流したアンリエールだったが、内心では苦虫を噛み潰していた。

ランダムとはいえ、墓地へカードを送りつつ魔法か罠をサーチ出来る。それがこの小さな毛むくじやらに隠された強力な効果だ。

デッキの情報が公開されてしまうものの、「ライトロード」のように墓地のモンスターを利用していくタイプのデッキではさしたるデメリットにはならない。

クリバンデットが光の輪の中へと沈み、その効果が発動してしまう。デッキからめくられた5枚のカードを、白面の女は淡白な仕草で公開した。

「なっ……!?!」

めくられた5枚のカードの全容に、アンリエールも思わず演技を忘れて愕然と目を見開いた。デッキの代名詞とも呼べるそのカードと共に、彼女が公開した5枚の中にはもう1つ、別の代名詞が紛れ込んでいたからだ。

《エルシャドール・フュージョン》
《神の写し身との接触》

《シャドール・ビースト》

《シャドール・ファルコン》

《インフェルノイド・ルキフグス》

《死者蘇生》

【「シャドール」に……【インフェルノイド】……!?】

あまりに強力な効果から、市場でも効果で取引されるカードカテゴリ【「シャドール」】。

それが相手というだけでも厄介だというのに、コチラの墓地のカードにまで干渉してくる【「インフェルノイド」】まで含まれている。

単なるカテゴリ統一よりも扱いが難しい混成デッキ……悪戯好きゴーストリックが相手をするには最悪となる組み合わせに、アンリエールは歯噛みした。

「……めくられた5枚の中から、私は《神の写し身との接触》を選択し手札に加え、残りのカードを墓地へ送る」

「……ふん、随分と性格の悪そうなデッキですわね？」

悔し紛れに毒を吐いてみるものの、白い面はただ細い目を向けるのみ。

苦しい戦いになるだろうが、これでもプロの世界を渡ってきた身だ。この程度の逆境は幾つも越えている。今更臆するような事でも無い。

「……効果によって墓地へ送られたことで、2体のシャドールの効果を発動。ファルコンを裏側守備表示で特殊召喚し、ビーストの効果でカードを1枚ドロー」

渦巻くようなアンリエールの心境とは相反し、白面の女は淡々とカードを処理していく。

いつの間にか手札は補充され、場にはモンスターが増えている。墓地へ送られることで膨大なアドバンテージを稼ぐ、それが【「シャドール

ル」の特長の1つだ。その為、複数の効果が連続して発動し易く、処
理に時間が掛かり易い。

自身のデツキとどこか似ていて、それでいて遥かに強力と謳われる
デツキ。対抗心からかアンリエールも遂に何かが吹っ切れた様子で
『お嬢モード』に火が付いた。

「いいでしょう……カードの力にばかり頼った無粋なデツキをこの幽
霊姫に差し向けたこと、その身を持って後悔させてあげますわ!! ド
ロー!!」

ドローカードに目を通しつつ、アンリエールのしなやかな指先は熱
を帯びたまま舞台へ上げる役者を選び出した。

「舞台へお上がりなさい、手札から《ゴーストリック・マミー》を攻撃
表示で召喚!!」

包帯巻きの大男が、幽霊姫の舞台^{フィールド}へ降り立つ。

《ゴーストリック・マミー》

☆3 / 闇属性 / アンデット族・効果 / ATK 1500 / DEF

0

「更にキョンシーの効果を発動!! 裏側守備表示に変更した後、再び
反転召喚しますわ!! リバース効果によって《ゴーストリック・ラン
タン》を手札に加えます!!」

休^{レスト}め。起^{ムーブ}きて。せわしなく下される号令に疲れ切った様子のキョ
ンシーとマミー。スポットライトを浴びた2体のモンスターは、休む
間もなく紫色の光球となって螺旋を描き宙へと舞上がった。

「私は☆3のキョンシーとマミーでオーバーレイ!! 2体のモンス
ターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚!!」

まるで夜空に浮かんだ虹色花火。

幽霊姫が得意とする黒の召喚法がここに成立した。

「奇怪なる館の主よ、漆黒を翻し騒乱の夜を収めなさい……★3、
《ゴーストリック・アルカード》!!」

《ゴーストリック・アルカード》

★3 / 闇属性 / アンデット族・エクシーズ・効果 / ATK 180

0 / DEF 1600

くぐもった忍び笑いを漏らして、白肌の吸血鬼が漆黒のマントを翻す。

「この幽霊姫の前で無様に『背』を向けたこと、存分に後悔なさい!!
アルカードの効果を発動、O R Uを1つ使い、セツトカード1枚を破壊しますわ!! 対象は裏側守備表示の《シャドール・ファルコン》!!」

アルカードが素早く裏側守備のファルコンへと覆い被さると、そのマントの中から少しくぐもったように『破壊』のエフェクト音が響いた。

「……ファルコンの効果発動。このカードが——」

「ご説明は結構、効果は存じておりますわ」

ひらり、と宙返りをしてフィールドへ舞い戻るアルカード。その眼前には破壊した筈の《シャドール・ファルコン》が裏向きのまま再度セツトされていた。

効果によって墓地へ送られた場合。それは「シャドール」モンスターにとつてフィールドからでもデッキからでも変わらない。一見無敵と思われるこの効果だが——。

「ですがこの幽霊姫の舞台、そう生易しくはありませんわ。やり直しは1度まで……ですわよ? バトル!!」

パチン、と指を鳴らしてバトルフェイズへと突入する。

アルカードのマントから放たれた無数の蝙蝠達が、鳥の形を模した影の使者を喰らい尽くしていく。紫の糸に吊るされた影人形は、今度は蘇ることなく墓地へと送られた。

「よし、いいぞお嬢!! シャドールモンスターは1ターンに1度しか効果を発動できないからな!!」

クラドが拳を作って声援を送る。

彼の言う通り、シャドールモンスターはリバース時と墓地へ送られた場合の両方にそれぞれ別の効果が備わっているのだが、そのどちらかが1度発動してしまうと同一のターンでは効果を発動することが出来なくなってしまう。

1度蘇生効果を使用してしまったファルコンは、アルカードの攻撃

によって真価を発揮できず破壊されてしまったという訳だ。

「私はこれで、ターンエンドですわ」

「……成程。貴女は教養があるのですね」

白面の女が呟いたその言葉に、ベンチで控えていた燐路が吹き出したように笑った。

どこか馬鹿にされたような印象を受けたアンリエールは眉に皺を寄せ、ルージユの瞳をギラリと研ぎ澄ませた。

「……それは、私に対する侮辱ですか？」

「ターンエンド時、私はこのカードを発動させます」

アンリエールの凄みなど意にも介さず、白面の女の指先はセットされていたカードへと向かった。その仕草には否定も肯定も無い。無味無臭の機械的な行動。

「……セットカード 《アーティファクトの神智》、発動」

何の前触れも無く放たれた3つ目の『名』に、会場の誰もが背筋を凍らせた。

第31話 歪な融和

「アーティファクト……ですって？」

その『特異な性質』から他のカテゴリと組み合わせることが容易な「シャドール」ではあるが、それでもせいぜい1つまでが限度だ。

種族や属性間での^{シナジ}互換性を狙って複数のカテゴリを組み合わせる決闘者は少なくないが、名称を指定するカードが多いデュエルモンスターズにおいてデッキの動きを阻害するリスクも当然発生する。それ単体でも機能するカードを集めたベルの「寄せ集めデッキ」とは訳が違うのだ。

しかし。白面の女はそんな扱いの難しい混合デッキを、しかも3つも組み合わせたモノを使用している。単に強力なカードを渡されただけの素人なのか——あるいは、扱いきれる自信があるのか。

「何も無ければ、効果解決。デッキから《アーティファクト・モラルタ》を特殊召喚」

女の背後に展開された幾つもの巨大な歯車が、重苦しい音を立てて廻り始める。

歯車が鎖を巻き上げ、地面に突き刺さっていた無数の得物の中から1本の両刃剣を吊り上げると、茶褐色に錆付いていたソレはみるみるうちに白銀の輝きを取り戻した。

《アーティファクト・モラルタ》

☆5 / 光属性 / 天使族・効果 / ATK 2100 / DEF 1400

ふわりと宙に浮かんだ両刃剣は、良く見れば半透明の幽霊のようなモノが柄を握って構えていた。その姿はうつすらと青白く輝き、時折不安定に明滅している。

そんな『彼』が狙いを定めたのは、アンリエールの場にある伏せられたばかりのバックカードだ。

「……相手ターン中に特殊召喚されたモラルタの効果。相手フィールド上のカード1枚を選択して破壊する」

光の斬撃によってアルカードは無残にも破壊される——筈だった。

しかしいつまで経っても、その矛先がアルカードへと向くことは無かった。

(……効果を発動しない？ まさか)

意味不明な女の行動。アンリエールの疑問は即座に1つの『答え』を導き出した。

影依人形シャドールが『最悪』を謳うその所以。それがもし、手札にあるとすれば……。

「私のターン、ドロロー。墓地のルキフグスを除外し、手札から《インフェルノイド・アスタロス》を攻撃表示で特殊召喚」

《インフェルノイド・アスタロス》

☆4 / 炎属性 / 悪魔族・効果 / ATK 1800 / DEF 0

鋼の甲殻に身を包んだ、不気味な蒼い炎を纏いし煉獄の尖兵。

翼を広げ槍を構えたその姿は、御伽噺に現れる『悪魔』そのものだ。

「このカードは自分の場のレベル・ランクの合計が8以下ならば手札か墓地の「インフェルノイド」を除外して特殊召喚出来る……」

「説明は不要、と言った筈ですわ!!」

「……アスタロスの効果を発動。このカードの戦闘を放棄する代わりに、相手の魔法・罠1枚を選択して破壊する」

怨嗟のような蒼炎を灯した矛先を向け、アスタロスはその槍を残された伏せカードへと投擲する。瞬間、アンリエールがにやりと不敵な笑みを浮かべた。

「罠カード《強制脱出装置》を発動!! 対象はモラルタ、手札に戻って頂きますわ!!」

アンリエールの場で立ち上がったのは、タイミングを選ばないフリーチェーン罠。

槍の一撃と交差するように、白煙を撒き散らしながら発射された口ケットのようなマシンが白面の女の手札へとモラルタを押し戻した。

『これは煽り選手、前のターンで選択肢を誤ったかー!? このままではフラグが足りずにバッドエンド一直線ですよー!?』

『姉さん、そんな大げさな。どこぞの伝奇ノベルゲームでもあるまい

し』

審判員の言葉を方耳に、白煙に黒いドレスを柵引かせ笑顔を見せるアンリエール。しかし、その内心では言い知れない焦燥が沸き上がっていた。

(クソツタレ……ですわ)

アーティファクト・モンスターは魔法・罨ゾーンへセットすることで効果を再利用されてしまう。本来であれば使い所ではなかったものの、黙っていればただ破壊されてしまうだけだ。それなら少しでも場のモンスターを減らした方が良い。

本来なら『これから召喚されるであろう』モンスターに対して打つ為のモノだっただけに、この展開は非常に歯痒い。

会場の感嘆と声援。そんな明るい雰囲気とは裏腹に、フィールドの状況は今まさに白面の女の方へと傾こうとしていた。

「……次に手札から魔法カード《シャドール・フュージョン影依融合》を発動」

会場の喧騒が、鈴の音を鳴らしたかのように静まり返る。

「このカードは『エクストラデッキから特殊召喚されたモンスター』が相手フィールドに存在する場合、デッキのモンスターを素材として「シャドール」融合モンスターを融合召喚することが出来る。墓地へ送る融合素材は《シャドール・ヘッジホッグ》と《シャドール・ビースト》」

エクストラモンスターを利用しないデッキなど皆無に等しい中で、その効果は最早止めようも無い。莫大なアドバンテージをもたらすソレはまさに『最悪』の名を欲しいままとした。

「影に依り添う千の針よ。影を駆ける王者の牙よ。太古の記憶呼び覚まし、今一つとならん……」

混ざり合う影と影が、新たな魂を作り出していく。

まるで祝詞を読み上げるような白面の女の、白い指先がぴたりと重なった。

「融合召喚。出でよ、《エルシャドール・ミドラーシユ》」

カタカタと四肢を不気味に震わせ。歪な能面を貼り付けた緑髪の魔術師が、紫の影系に吊られた竜人形に乗って姿を現した。

《エルシャドール・ミドラーシユ》

☆5／闇属性／魔法使い族・融合・効果／ATK 2200／DE

F 800

「ようやく来ましたわね……鬱陶しい小娘が」

忌々しげに呟くアンリエール。彼女の反応も無理は無いだろう。

場に存在するだけでお互いに特殊召喚を1ターンに1度までと制限し、加えてカードの効果では破壊されないうときている。生半可な決闘者が相手なら、これ1枚だけで封殺されかねない。エクシーズを多用する彼女にとつて、まさに天敵とも呼べる存在だ。

「……更に墓地へ送られたヘツジホッグ、ビーストの効果を発動。手札に《シャドール・ドラゴン》を加え、デッキから1ドロー」

強力な融合モンスターを召喚したにも関わらず、白面の女の手札は6枚。

これが《影依融合》の持つ恐ろしさだ。手札消費が激しく消耗しやすいという『融合召喚』の特徴などまるで無視である。

「……バトル。ミドラーシユでアルカードを攻撃」

用は済んだとしても言わんばかりに、影依の魔術師がその杖を振るってアルカードへと魔法攻撃を仕掛けた。

アンリエールに残された選択肢は2枚。本来ならどちらとも使える状況ではあったが、目の前の『小娘』がそれを邪魔する。

(ですが……こうなるのも)

プロを名乗るなら、常に先を見通すべし。ターンエンドしてから、幽霊姫の脳裏では何百とこの光景が繰り返されていた。

「既に想定済み、でしてよ？」

放たれた魔法攻撃はアルカードへと直撃し、黒い瘴気に紛れて粉微塵に弾け飛ぶ。

ココまではアンリエールとて想定内だった、が――。

「アルカードの効——ッ!? きゃっ!」

【アンリエール】 LP8000→7600

柄にも無くか細い悲鳴を上げてしまったことに、自分自身驚きを隠せない。

僅か400ポイントのダメージなど、普段であれば涼しく受け流すか、舞台の上であれば多少わざとらしく演技をしたかもしれないが――今、アンリエールの肌を裂いたのは紛れも無い『痛み』。仮初の感覚などでは決して無かった。

(何ですの、今の……!?)

疑問が首を上げる前に、アンリエールは首を振って掻き消した。恐らくは緊張のせいだ、何かの勘違いだと。

見れば審判員はおろか、会場の人間だって何の異常も感知していない。

有り得ない。こんな人目につく大舞台で『それ』を行える訳がない。これが、『闇のゲーム』である筈がない。

「あ、アルカードの効果で墓地からマミーを手札に!!」
とにかく今はデュエルに、勝つことだけに集中する。

勝利すれば。そうすれば何の問題は無いだ。

「そして手札から《ゴーストリック・マリー》の効果を発動、ダメージを受けたとき手札からこのカードを捨てることで、デッキから「ゴーストリック」モンスターを裏側守備表示で特殊召喚致します!!」

現れたのは、埃の積もった金縁の華美な化粧台。

その鏡に浮かんだ銀髪の少女が思いつきり甲高い声で叫んだかと思うと、2体目のキョンシーがデッキから現れ、くるりと身を翻してアンリエールの場にセットされた。これが普段のデュエルであれば、パフォーマンスも交えて観客を大いに沸かせただろうが。

(心苦しいですが……仕方ありませんわ)

これでこのターン、アンリエールはもう特殊召喚を行うことが出来ない。

すなわち手札にあるランタンはもう使えない。

「……なら、手札から速攻魔法《エルシャドール・フュージョン神の写し身との接触》発動。手札の《シャドール・ドラゴン》と光属性モンスター《アーティファクト・モラルタ》を融合」

それは先のターン《クリバンデット》の効果で手札に加えたカード。アンリエールもこの展開は想定済みだ。

「影覆う翼よ。太古に沈みし精霊の矛よ。天突く神の名に依りて今1つとならん……」

再び女の指先が重なる。その光景は先程と全く同じだった。

背後で蠢く魂、その質量があまりにも桁違いであることを除いては。

「融合召喚。出でよ、《エルシャドール・ネフィリム》」

山と見間違うまでに巨大な、その体躯。

藍色の鎧に身を包んだ鉄の処女は、慈悲深く目を閉ざしたまま両腕を広げていた。

《エルシャドール・ネフィリム》

☆8 / 光属性 / 天使族・融合・効果 / ATK 2800 / DEF 2500

「……ネフィリムの効果を発動。デッキから罠カード《影依の原核（シャドールーツ）》を墓地へ送り、その効果で《神の写し身との接触》を手札に加える。更に融合素材として墓地へ送られた《シャドール・ドラゴン》の効果で伏せカードを破壊する」

「……伏せカードは《ゴーストリック・アウト》。墓地へ送りますわ」
大型融合モンスターの召喚、融合魔法カードの回収。そしてバツクカードの破壊。

これが全て戦^{バトルフェイズ}闘中に行われた処理だと、理解は出来ても許容はし難い。

「バトル。ネフィリムで裏側守備モンスターを攻撃」

続けて下された攻撃宣言を受けて、翼のように広げた無数の影系がキョンシーへと迫る。

ネフィリムには特殊召喚モンスターと戦闘を行う際、効果による破壊が発生するのだが、幸いその効果は裏側表示のモンスターには発生しない。結果としては勿論キョンシーは破壊されてしまうが、リバー効果は問題なく発動する。

雨のように降り注ぐ無数の糸に貫かれながらも、キョンシーはしっかりとアンリエールへバトンを繋いだのだ。

「くっ……キョンシーの効果を発動、デッキからランタンを手札に!!」

「……私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

相変わらずの機械音声、しかしその宣言にアンリエールの口端は意図せず吊り上がる。

何とか、このターンを凌いだ。

「私のターン!! ドロー!!」

ドローカードは……。

「手札から魔法カード《闇の護封剣》を発動!! 貴女の場のモンスター全てを、裏側守備表示にして頂きます!!」

「よし、いざお嬢!! 反撃開始だ!!」

クラウドが席を立てて声を上げる。

「裏側にしまえば制限効果も無くなる!! ミドラーシユの守備力は800、いくら効果で破壊されなくても戦闘でなら楽に破壊出来るぜ!!」

漆黒の剣が天から降り注ぎ、影依人形達を縫い付けていく。あれだけの巨躯を誇ったネフィリムさえも、今は四角いカードの中だ。

効果では破壊されない。場に存在する限り特殊召喚に制限を掛ける。そんなモンスターに対抗する最初の一手が、このカードだった。

「これで思い切り悪戯が出来そうですね……さあ、お覚悟を!! 手札から魔法カード《生者の書―禁断の呪術―》を発動!! 貴女の墓地の《シャドール・ヘッジホッグ》を除外し、墓地からアルカードを特殊召喚!!」

漆黒のマントを翻し、アルカードが再びフィールドへと舞い戻る。

窮地に追い込まれたアンリエールの予想外な反撃にクラウドや藍、観客たちも皆沸き上がる。自然と不利な方に味方してしまうほど「シャドール」の名は忌み嫌われているのだろう。

だからこそ。『最悪』はその程度の戦略など易々と跳ね返した。

「その瞬間。リバーズカード《神の写し身との接触》発動。場のミドラーシユと炎属性モンスター、アスタロスを融合」

既に3度目ともなる融合召喚。

手札は未だに尽きず、モンスター達がその身を溶かし合いながら矢継ぎ早に繰り出される。

「記憶辿りし影法師よ。煉獄纏いし槍兵よ。原初の焰溶かして今一つ
とならん……融合召喚。出でよ、《エルシャドール・エグリスタ》」

真紅に染まった影糸を翼のようにはためかせて、ネフィリムと同格
の紅い巨人が姿を現した。

《エルシャドール・エグリスタ》

☆7／炎属性／岩石族・融合・効果／ATK 2450／DEF
1950

「……墓地へ送られたミドラーシユの効果を発動。墓地から《影依融
合》を手札に加える」

シャドールの融合モンスターに共通して、自身が墓地へ送られた場
合に「シャドール」魔法・罫をサルベージする効果がある。

破壊されたとしても、こうして『融合素材』として使われたとして
も。再び融合魔法を主の元へと遺していく……そんな光景を目の当
たりにして尚、幽霊姫はくつくつと笑って見せた。

「……やはり来ましたわね。ですがこの好機、私とて逃す訳には参り
ませんのよ!! 手札からマミーを通常召喚!! 更に場のアルカード
でオーバーレイ・ネットワークを再構築!!」

「えっ!!」

「ばっ!! 何考えてんだお嬢!! そいつは……!!」

クラウドと藍の驚く声など聞く耳持たず。

連続融合へ対抗するかのようには、幽霊姫はそのモンスターを呼び出
した。

「エクシーズチェンジ!! ★4、《ゴーストリックの駄天使》!!」

《ゴーストリックの駄天使》

★4／闇属性／天使族・エクシーズ・効果／ATK 2000／D
EF 2500

はあい、いつものように軽く手を振るいい加減な女性型モン
スター。……そこへ、エグリスタの紅い影糸が迫った。

「……エグリスタの効果発動。相手が特殊召喚する際、その特殊召喚
を無効にして手札の「シャドール」カードを墓地へ送る」

「構いませんわ……ただし」

アンリエールの瞳がルージュに輝いた、その刹那。

星を象った魔法陣が描き——陣の中心へ閉じ込められたエグリスタは、いとも簡単に破壊されてしまった。

「……………」

「この幽霊姫に何の策も無いとお思いで？ 私は手札からこの子の効果を発動しておりましたのよ？」

《幽鬼うさぎ》

☆3 / 光属性 / サイキック族・チューナー・効果 / ATK 0 / DEF 1800

顔の前で構えた幾枚の札には青い炎が灯り。

兎のように真っ赤なその瞳を向け、墨色の着物を着込んだ小さな体躯の少女が、白髪をゆらりと流して敢然と立ち塞がっていた。

「ご説明致しましょう。この子はフィールドのモンスター効果が発動した時、またはフィールドで既に表側表示で存在している魔法・罫カードの効果が発動した時、手札・フィールドのこのカードを墓地へ送って発動……フィールドのそのカードを破壊する、ですわ」

しかし、アンリエールのフィールドにはもう駄天使の姿は無かった。

幽鬼うさぎの効果はあくまで『破壊』であって『無効』ではない。恨めしげにジトリと目を向ける駄天使の亡霊と共に、幽鬼うさぎの姿もフィールドから消滅した。

「……エグリスターの効果コストで《影依融合》を墓地へ送り、墓地へ送られたエグリスターの効果を発動。《神の写し身との接触》を手札に加える」

「では私も墓地へ送られたアルカードの効果で、墓地のキョンシーを手札に加えますわ」

アンリエールの表情に、僅かながら余裕が戻る。

「そしてお忘れなく。私の場には既にマミーが召喚されていますのよ？ 彼が表側で存在するとき、「ゴーストリック」モンスターをもう一度だけ通常召喚出来ませわ。キョンシーを通常召喚!!」

ミイラ男の肩に乗り、可愛らしいキョンシーが再び姿を現した。

「私は☆3のキョンシーとマミーでオーバーレイ、2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築……エクシーズ召喚!! 《ゴーストリック・アルカード》!!」

2体目となるアルカードだが、その威厳は決して色褪せない。

彼の行く手を遮るものは、もう何も無いのだから。

「アルカードの効果発動!! ORUを使い、セット状態のネフィリムを破壊!!」

「……………」

空を覆う巨躯ですら、今は漆黒の中に包まれ砕かれる。

「ネフィリムの効果。墓地の《影依融合》を手札に加える」

「まだまだいきますわ!! アルカードでオーバーレイ・ネットワークを再構築、エクシーズチェンジ!! 《ゴーストリックの駄天使》!!」

こちらも2体目となる、桃色髪の女性型モンスター。

墓地に眠る同胞への手向けなのか、今度はモノクロチェツクのハンカチをつまんでヒラヒラと振っている。

「同じモンスターばかり、とウンザリしたご様子ですわねえ? お生憎ですが私も、貴女の一辺倒な融合戦術には飽き飽きしていましたの。苦しみはお互い分かち合うのが美德でございましょう?」

「……………」

アンリエールの煽り文句に、女はどう反応しているのか。

無言のまま佇むその仮面の向こうは窺えない。

「駄天使の効果を発動!! ORUを取り除き、デッキからフィールド魔法《ゴーストリック・ハウス》を手札に加えますわ……更にそのまま発動致します!!」

埃の積もった奇怪な洋館が姿を現す。幽霊姫のしもべを守る堅固な要塞の出現に、にじいろ団ベンチのみならず会場からも歓声が巻き起こる。

「よっしゃ来たぜ、お嬢のホームグラウンドが!!」

「更に、場の駄天使でオーバーレイ・ネットワークを再構築!!」

加速していくエクシーズ・コンボ。

いつも以上に気合の入った宣言に、駄天使も調子よく光の渦へと飛

び込んでいった。

「法嗤う無限面相……混乱の夜を駆け真の身を明かしなさい!! エク

シーズチェンジ、★4 《アスタリスクス—**—フアントム 怪黒兎》!!」

《—**—怪黒兎》

★4 / 闇属性 / 獣族・エクシーズ・効果 / ATK 2100 / DE

F 1000

「さて……このカードを出したからには私も全力ということですね。この幽霊姫にここまで手を煩わせたこと……光栄に思いなさい!!」

場の流れはアンリエールへと傾いている。

だというのに、【獵犬】のベンチでは不穏な笑みばかりが浮かんでいた。

「フアントムの効果を発動、このカードのORUを1つ選択して発動、次の相手ターンのエンドフェイズ終了時まで、このカードは選択したORUと同名カードとして扱い、同じ効果を得ます!! 私が選択するのは《ゴーストリックの駄天使》……『R e : t a k e a l i e !!』」

紫色のORUをハットで捕まえた黒兎の怪人は、可愛らしい女性型モンスターへとその姿をゆらりと変えた。

(……残っている伏せカード。本来ならアレを破壊するのにアルカードに変身させるところですが……アーティファクト・モンスターである可能性もありますもの。眠れる獅子を呼び起こしたくはありませんわ)

最も厄介な除去効果を持つモラルタは、その強力な効果が祟り現在では1枚しかデッキに投入できない『制限カード』だ。とはいえ、先に発動された《アーティファクトの神智》は破壊をトリガーに発動する万能除去罠でもある。迂闊に起爆スイッチを踏むわけにはいかな

い。
(ならばせめて、守りを固める——!!)

それがアンリエールの導き出した結論だった。

女の手札に加わった融合魔法は2枚。それだけあれば返しの手で再び融合シャドルを展開することも可能だろう。

幸い、最も厄介なミドラーシユとネフィリムは『制限』カードだ。《死者蘇生》もクリバンデットの効果で墓地へ送られているため、そう簡単には復活出来ない筈だ。

「駄天使となったファントムの効果を発動!!　ORUを使い、デッキから《ゴーストリック・ブレイク》を手札に加え、ORUとして墓地へ送られたアルカードの効果で《ゴーストリック・アウト》を手札に加えますわ!!」

手札には攻撃を防ぐランタンが2枚。今出来る最善は尽くした。

後はこのまま、思い通りに事が運ぶのを祈るのみ——!!

「バトル、ファントムでダイレクトアタック!!」

白黒の羽を鏃のように飛ばし、白面の女へと迫る。

伏せられたカードは何の反応も示さないまま——攻撃は女に直撃し、ふわりと後方へ吹き飛ばされた。

第32話 楽しいデュエル

【煽里】LP7200↓5100

『き、決まったーっ!! 両者一步も譲らぬ接戦の末、遂にアンリエール選手のダイレクトアタックが煽里選手へと届いたあく!!』

『ナイスパンチですね』

会場に響く大歓声に白熱したコーパルの実況が響く。

流石のアンリエールも、この一撃の成功には安堵の溜め息が漏れた。

「私はカードを2枚伏せてターンエンドですわ。起き上がれないところを見ると、どうやら相当ショックを——?」

横たわったまま動かない白面の女の肩が、僅かに上下した。

何か、眩いている?

「……………、……………」

1人、また1人。

会場の人間が声を静めていく。

「何だ? 一体…………?」

声を聞こうと、耳を潜める。

そして完全に会場が言い知れぬ静寂に包まれた、そのときだった。

「ツク あははははははははは!! あはははははははは!! あはははははははは!! あはははははははは!!
あははははははは!! あははははははははは!! あはははははははは!! あははははははははは!!
あははははははははは!! あはははははははは!! あはははははははは!! あはははははははは!!
あはははははははは!! あはははははははは!! あはははははははは!! あはははははははは!!
あはははははははは!! あはははははははは!! あはははははははは!! あはははははははは!!

白面の女からこぼれだしたのは、まるで壊れたテープレコーダーのように繰り返される、不気味な笑い声だった。

腹を抱えて楽しそうに、という訳でもなく。

自棄になつて無理矢理にひねり出している苦笑でもない。

それはただ本当に『笑っている』だけの、感情の籠つていない純粹な笑い声だった。

「……な、何を笑っていますの……!?!」

気味が悪い。心の底からそう思ったアンリエールの顔は引き攣つていた。

強がることも、余裕の表情も。今はどんな仮面も被れない。

「あははははははははは!! あははははははははは!! あはははははははははは!!」

「お黙りなさいッ!!」

耐え切れず、アンリエールは叫んだ。

まるで尾を丸めて後退しつつ、キャンキャンと吠え立てる子犬のよう

「……………」

ぴたり、と。女は笑うことをやめた。

緩慢な動きでゆっくりと立ち上がりながら、女はポツリと言葉を漏らし始めた。

「……だってしょうがないじゃん。こんな楽しいデュエル、久しぶりなんだもん♪」

「は……?」

目の前にいる女は、誰だ?

「あ、そうそうまだデュエルの最中だったよね? 『あたし』はエンドフェイズにリバースカード発動、《バースト・リバース》!! LPを2000払って、墓地からモンスター1体を裏側守備表示で特殊召喚つ!!」

弾むような機械音声。その発信源は依然として表情の窺えない白面の女のまま。

訳が分からない。得体の知れない不気味さに、アンリエールの足は

意図せず後退していた。

【煽里?】LP5100↓3100

「選択したのは《エルシャドル・ネフィリム》!! という訳で、もうあたしがターン貰っていいよね? いいよねっ? ドローっ!!」

その姿はまるで、プレゼントを貰ってビリビリと包装紙を破いていく子供のようで。

「お、おい巫女の姉ちゃん!? 何やってんだ作戦無視してんじゃねーよ!!」

一周り年下の燐路からではあるが——叱咤を受けるのも、またそんな光景を彷彿とさせるのに十分だった。

「うるさいなあ……結局大会に出たって全然デュエルさせてくれないし、【獵犬】のオジサン達だつて全然面白くなかったもん。センちゃんの真似しててもつままないし、このウサちゃんとは『あたし』がデュエルしたいの!!」

「なっ、バカ——!?!」

女が白面に手を掛ける。

燐路の狼狽など間に合う筈も無く。仮面の下の素顔は、白日の下に晒された。

「……あれ、つて」

「……え?」

その素顔を見たクラドと藍が、そしてすっかり怯えた表情のアンリエールまでもが、ある人物に視線を集中させた。

「——陽依?」

クラド達からしてみれば、カードに囚われていた筈の探し人が目の前にいて。どういうことだという目を向けたくなるのは分かる。

それでも。ユウ||キリサキは、信じられないといった面持ちでその名を呟くことしか言葉を返せなかった。

「ふう、これでスッキリ! それじゃあデュエル続行お〜♪ まずはネフィリムを反転召喚させて、魔法カード《影依融合》を発動っ!

デッキから《シャドル・ドラゴン》と《ペロペロケルペロス》を素材として融合召喚!!」

鼻歌でも歌い出すように、白面の女——ヒヨリの指先はディスクの上を滑っていく。

長い二房の三つ編みが、ふわりと揺れた。

「影覆う翼よ、三つ首を携えし玩具の獣よ!! 殺戮傀儡の名に依りて今一つとならん……出でよ、融合召喚っ!!」

ぱしん! と。勢い良く合掌したその仕草に、それまでの静けさはなかった。

全てを飲み込む獰猛な黒炎。それが彼女の本質なのだと、この場の誰もが理解する。

「全て蹴散らせ、《エルシャドール・シエキナーガ》!!」

《エルシャドール・シエキナーガ》

☆10 / 地属性 / 機械族・融合・効果 / ATK 2600 / DEF 3000

中に浮かぶのは、ネフィリムに良く似た巨人を中央に据えた四足の巨大要塞だった。

不気味な駆動音を立て、並び立つネフィリムの上空からちっぽけな会場を見下ろしている。

「更に融合素材として墓地に送られたドラゴンの効果、場の魔法・罠カード1枚を破壊する! 選択するのは《ゴーストリック・ハウス》っ!!」

「さ、させませんわ!! 罠カード《ゴーストリック・アウト》発動!! 手札のランタンを見せて、このターン……」

「知ってる知ってる♪ だからあたしは、それにチェーンして手札から速攻魔法《サイクロン》を発動っ!!」

アンリエールの体に、稲妻に打たれたような衝撃が走った。

こんな強引な方法で突破をしてくるなんて……いや、そんな芸当が出来るまでに、この女はデュエルを知り尽くしている、のか。

「なっ……!?!」

「逆順処理。ちよつと発動が遅かったね♪」

詰まれたチェーンは、上にあるものから順に解決していく。この場合で言えば《サイクロン》↓《ゴーストリック・アウト》↓《シャドー

ル・ドラゴン』の順だ。

一番最初に解決する《サイクロン》の段階ではアウトの破壊不能効果は適用されていないため、何の問題も無く効果が適用されてしまう。この手を回避するには相手の行動を見てからでは遅かった、ということだ。

相手のターンに入ってすぐ、スタンバイフェイズで発動していれば。

僅かな油断、その結果が招いた絶望にアンリエールの中にあつた『何か』が、幽霊館と共に砕け散る。

「……巫女。楽しむのは構わないが、責務はしっかり果たして貰おう」「はいはい、分かったよー長様。心配しなくても、これからちやんと

『出す』よっ！」

愕然と目を開くアンリエールなどお構い無しに、口を尖らせて慶燦に言葉を返すヒヨリ。

歪な笑みを浮かべた彼女は、再び獲物へ向き直る。

「それじゃあ続けるよ？ 手札から《貪欲な壺》を発動。墓地のミドラーシユ・エグリスタ・ビースト・ドラゴン・モラルタの5体をデッキに戻して、カードを2枚ドロっ!!」

手札に舞い込んだカードを見て、ヒヨリの目が爛々と輝いた。

「……デッキを信じれば必ずカードは答えてくれる。これって凄く『胸アツ』だよね？」

「な、何を戯言を……」

「戯言じゃないよー？ ま、いいか。これから身をもって体感して貰う訳だし」

くるくるとカードを弄んで、ヒヨリは1枚のカードをディスクへと差し込んだ。

「……手札にはランタンが2枚。場には《ゴーストリック・ブレイク》が1枚」

「ッ!? な、何故それを!？」

言い当てられたカードの数々に、思わず上ずった声を上げたアンリエールだったが。

「何でって。今ウサちゃんの手札も場も、全部デッキからサーチしてきたカードばかりでしょ？ 要するに——」

ヒヨリはずっと、見ていたのだ。アンリエールが何をサーチしてきたのか。何を使ったのか。

当たり前と言ってしまえば当たり前のこと。しかしそれを、興奮余る試合の中でやり遂げるのは中々に難しい。

「何を出しても、今なら怖くないっ♪」

白面の下に隠されていたその素顔は。

強者と呼ぶに相応しい確かな実力と、言い表せぬ不気味な狂気だった。

「さ、行くよ？ 速攻魔法《神の写し身との接触》を発動!! 手札の《シャドール・ハウンド》と《シャドール・ヘッジホッグ》を融合っ!!」
渦を巻く2体の影依人形。

この素材から出現するのは、恐らく先程《貪欲な壺》で回収したミドラーシユだろう。

誰もが、そう予想を立てた。

「影を追う執念の爪よ、影に依り添う千の針よ。太古の記憶呼び覚まし、今1つとならん……」

読み上げる祝詞も先程と変わらない。

そう、ここまでは。

「……されど、その身に混ざるは狂乱の鎖」

突然差し込まれた祝詞に、召喚エフェクトに異変が起こる。

ミドラーシユとしての形を成そうとしていた『ソレ』に、突然どこからとも無く現れた不気味な紅い鎖が巻きついたので。

それはまるで繭のようであり、胎動するその様は何かの心臓のようにも思えた。

「偽りの姿破りて、四度現世に乱れ咲け……!!」

ギラギラと妖しく輝きを放つ、ヒヨリの瞳が見開かれる。

激しく合わせられた掌は指先まで上気し——乾いたその音を引き金に、『ソレ』は一気に弾け飛んだ。

——紅き牙が空に吼える。ピンと立てた耳や尖った顔立ちは狼の

ようであり、しかしどこか違う。

——竜のように長い胴が渦を巻く。しかしどこを見渡しても手足は無く、そんな思考に至ったことこそが『蛇足』だったと悟る。

——尾の先は九つに分かれ、揺れる。紅い花卉を妖艶に撒き散らすソレを、皆は一樣に見入ってしまった。

「融合お召喚ツ!! 憑き出でよ、《—*— 紅狐蛇》!!」

これまでに現れたどれよりも禍々しく、そして妖艶な輝きを放つソレは。

紅い鎖を掻き鳴らし、会場に渦巻く全ての声を飲み込んだ。

《—*— 紅狐蛇》

☆6 / 炎属性 / 爬虫類族・融合・効果 / ATK 2400 / DEF 2000

「な、ん……ですの……?」

足が、震える。

ヘレイネと比べて圧倒的な巨軀を誇る2体のシャドール達ですら、そのカードが放つ異様なプレッシャーの前では霞んで見えた。

「ウサちゃんも『4番』を見せてくれたからね、これでお相子だよ♪」
その声にはっと引き戻されたアンリエールが、弾かれたように向き直ると……そこには目だけを爛々と輝かせたヒヨリの『笑顔』があった。

どこか恍惚とした様子のヒヨリは、腕を伸ばして宣言する。

「あははは、行くよ……? まずはヘレイネの効果を発動っ!!」

アンリエールの元へ、ヘレイネがまるで触手の様にして鎖を伸ばしていく。

それらが別々に意思を持つかのように動き回り、手札の周りをうろつき始める。

「な、何を……!?!」

「1ターンに1度。カードカテゴリを1つ選択し、相手の手札を確認する。もしも宣言したカテゴリのモンスターカードが手札にあれば、場に存在する同じカテゴリのモンスターのコントロールを得る」

「なっ……!?!」

「尤も、ハズレた時はあたしの場のモンスターのコントロールは全部相手に移っちゃうんだけど……そんな心配、いらないよね？」

手札には筒抜けになった2枚のカードしかない。

場にはたった1体のモンスター……今は《ゴーストリックの駄天使》と名を変えたファントムだけが佇んでいる。

「あたしが宣言するのは勿論「ゴーストリック」♪ さ、手札を見せて？」

震える指先を返し、形式上の確認を取る。

それでもまだ、手札のこのカード達が自分の身を守ってくれることだけが救いだっただけ。

「アツタリ♪ それじゃ『4番』のウサちゃんは貰って行くよ？ 効果

発動、舞え!! 『ブラッディ・チェイン血族の反鎖』!!」

先端に刃の付いた鎖が桃髪の少女の胸を貫く。

苦しそうな呻き声を上げたのも束の間、串刺しのままヒヨリのフィールドへと連れ去られてしまった。

「ファントムッ!？」

泣き出しそうなアンリエールの悲鳴を聞き流し、考え込む仕草を見せるヒヨリ。

「うーん、でもどうしよう？ 手札にはランタンが2枚、場にはブレイクもあるし……これじゃしばらく踏ん張られちゃいそうだねえ？」

という訳で、魔法カード《手札抹殺》を発動♪」

「……え？」

突きつけられた、絶望。

僅かに残った希望は、運否天賦の得体の知れないドロカードに託された。

「あたしは手札を1枚、ウサちゃんは手札2枚を捨ててカードをドロ……ってごめんごめん、また「説明なんて不要ですわ」って怒られちゃうね？」

胸の中で渦巻く憤りよりも、目の前の相手がただただ恐ろしい。

底が見えない相手に怯えるアンリエールは、淡々とカードの処理に従った。

「最後の最後まで希望を捨てないっ、ライフが尽きるそのときまでくってね！ で、あたしもドロウ。効果で墓地に送られた《影依の原核》の効果で墓地の《神の写し身との接触》を手札に加えるよっ、と」
ドロウしたカードに、目を落とす。

「ねえねえ、何引いた？ デツキはちゃんと応えてくれた？」

——ブラック・ホールに、死者蘇生。

確かに、デツキはアンリエールの願いに答えてくれたのかも知れない。

次のターンが、訪れていたらの話だが。

「ま、それもこの攻撃で分かるとして……バトル!! まずはフロントムで、プレイヤーにダイレクトアタック!!」

ケタケタケタケタ。

三日月に口を歪め髪を振り乱し。

鎖で胸を貫かれたままの、駄天使の姿を借りたフロントムが笑う。

「ひっ……!?!」

思わず後退するアンリエールへ、フロントムは血走らせた目をぎょろりと向けた。妙にギクシヤクとした動きで白黒の羽根を飛ばすその姿に、悪戯好きの愛らしい面影は残されていなかった。

「ッ!?! つぐ、うあああああッ……!?!」

【アンリエール】 LP7600↓5500

先程のヒヨリと同じように、アンリエールが後方へと吹き飛んだ。黒のドレスでは分かり難いが、体中に受けた傷から血を流して。

「おい、今の……」

「ええ、何か様子が……まさか!?!」

アンリエールの只ならぬ悲鳴に何かを察したクラウドは、リタイアのサインをコーパル達審判員へと送った。

コーパル達もシステムの異常を疑ったのだろう、対応は迅速に行われた。

『了解しました! 【にじいろ団】さんのリタイア宣言を受け、この試合【獵犬】チームの勝利と——』

「続けてバトル!! シェキナーガでダイレクトアタック!!」

「なっ!? オイ待て!？」

クラドの制止など、もはや届かず。

ゆっくりと起き上がりかけたアンリエールに、今度は上空から無数の砲弾が降り注いだ。

「うあああああああッ!!？」

【アンリエール】 LP5500↓2900

尋常ではない悲痛の叫びに、会場もようやく騒然とし始める。

尚も止まらない攻撃宣言に、コーパルも語調を強めた。

『ストップです煽り選手!! この試合はもう——!!』

「何で? まだ分からないじゃない? ライフが0になるその瞬間まで、決闘者は絶対諦めちゃいけないんだよ。最後の最後の、最後まで……」

にたり、と。

狂気は鎌首をもたげて、笑った。

「さあ。楽しいデュエルを、続けよ?」

残るモンスターの攻撃は、2体。

「……あっははははは!! バトル、ネフィリムでダイレクトアタック!!」

勝負は既に決している筈だ。手札にも場にも攻撃を防ぐカードは無く、当の本人はぐったりとうつぶせに倒れこんでいる。

それでも尚、ヒヨリは攻撃宣言を止めない。

「審判員!! 何やってんだ早く回線を切れよッ!!」

『回線は既に遮断しているんです!! でもどうしてかデュエルが止まらなくて——!!』

『……かくなる上はっ!!』

本来はプレイヤーにペナルティを課すための『お仕置き』システムを最大出力で作動させたネフが、キツと口を真一門に結んでヒヨリへ

と『打ち放った』。

弾頭を赤く染めた無数のミサイル。所詮は半仮想現実ではあるが、気絶させる程度の威力ならある。

『これもプレイヤーの安全確保の為……南無三!!』

しかしネフの放った攻撃は、紅い鎖によって全て打ち落とされてしまった。

跳ね返され、あらぬ方向へと飛んだミサイルが観客席の方面へと飛んでいく。

『馬鹿な……!?!』

幸い防壁によって直撃は免れたものの、事態はこれで一気に混乱を増した。

「邪魔しないでよ……今はデュエルの最中ですよ?」

動かないアンリエールの胴に、ネフィリムの影糸が巻きついていく。

いとも容易くその細い身体を宙へと持ち上げると——無慈悲な女神は、幽霊姫をそのまま地面へと叩き付けた。

【アンリエール】LP2900↓100

「お嬢おツ!!」

「これで詰チエツオメイトみ!! ヘレイネでダイレクトアタック!!」

くの字になってうずくまるアンリエールの元へ、藍もクラウドもがむしやらに駆け寄ろうとした——その視線の先には既に、血塗れた幽霊姫を抱える1人の男の姿があった。

「……あれ?」

放たれた真紅のブレスは、2人を包んで燃え上がったかのように思われた。

白く輝く翼を広げ、咆哮する龍の姿が見えるまでは。

「……決闘者に直接的な危害が及んだ場合、『審判員機構ジャッジアブリ』が状況を判別。正当防衛が可能と判断された場合、簡易的な『ARヴィジョン』を展開」

その背中は、『直接的な危害』をしっかりと受け止め焼け焦げていた。

「被害側の決闘者はカードを半実体化させ攻撃が可能となる……この世界では常識だ。覚えておけ、陽依」

対峙する、紅の蛇と白き龍。

一瞬間を輝かせたヒヨリだったが、ユウの姿を見つけると眉を寄せ、怪訝そうに笑顔を曇らせた。

「誰？ デュエルの邪魔しないで」

「……随分な物言いだな。どうやら本当に頭のネジをどこかへ置き忘れてきたらしい」

互いの視線が交差する。

ヒヨリの目にはただただ不快の色が、ユウの目には僅かに困惑の色が漏れ出ていた。

「う、う……」

ユウの腕の中で、アンリエールが僅かに呻いた。

彼女がプロの決闘者として培ってきた精神力と肉体が、僅かに命を繋いだらしい。ユウがそつと頭を撫でると、ルージユの瞳がうつすらと開いた。

「……ゆ……さ、ま……」

想い人の腕の中で抱かれていることが分かったのだろう。アンリエールは本当に嬉しそうに微笑むと、かくんと深い眠りへ落ちていった。

呼吸が続いていることを確認して、ユウは視線をヒヨリへと戻す。

「何かつまんなくなっちゃった。まあいいや、目的のモノは手に入りました」

ひらひらとファントムのカードを弄んで見せると、ヒヨリはディスプレイを下げた。

「……待て、それは他人のカードだ。決闘者として最低限の礼儀すら忘れたか？」

「だからキミ誰なのさ、うるさいなあ。『コレ』はそういうモノなの、あたしだって欲しくて取ってる訳じゃないよ」

混乱の元凶となったモンスター達が消えていく。

そのタイミングを計っていたのか、担架を担いだスタッフ達や何や

ら物騒な装備に身を包んだ男たちまでワラワラと3人の周りを取り囲み始めた。

これだけの騒ぎを起こしたのだ、ペナルティどころの騒ぎでは無い。当然ながら【猟犬】の2人も取り囲まれている。

法の番人ことコーパルとネフも、実況席を離れて鼻息を荒くしている。

『逃がしませんよ不屈き者ども!! スタッフさん達、やっっておしまい!!』

「賑やかになってきたねー。という訳であたしたちはオサラバかな、縁があったらデュエルしようね?」

ひらひらとヒヨリが手を振った、その刹那。

どこからともなく現れた真紅のD・ホイールが全てを掻き回し……いつの間にか現れた自動操縦の2台を含めた3台のD・ホイールは皆を嘲笑うかのように逃走してしまった。

会場の通用口をD・ホイールが駆け抜け逃走したことで、スタッフや観客も含めて負傷者は数人出てしまったものの、大会として大きな被害は無かった。

しかし後日、【猟犬】を構成していた旅団メンバーが忽然と姿を消していたことが明らかとなった。その中に、ユウ達が対峙した筈の3人の名前は無く。

Bブロック通過チームは無し。結果としてAブロック勝者の【ドミノ】が大会の優勝旅団として名を刻み——SSCは、その幕を閉じた。

第3章 海の向こうへ

第33話 過ぎた嵐と波立つ心

「はむっ」

お見舞いにとクラドが持つてきてくれたオレンジを啜えつつ、ベルは嬉しそうに目を細めた。サイドテールを解いてセミロングの髪を下ろし、白い病室の中で所々に包帯を巻いた彼女は何とも弱々しく見えるが、身体のダメージはというと軽い打撲で済んでいる。

隣で横になっているアンリエールも痛々しい見た目ほど深刻な怪我也無く、あと2〜3日もすれば病室を出ることになるだろう、とのことだった。

それでも2人が入院を余儀なくされてしまったのは、『2日間意識が戻らなかった』という点に尽きる。脳にダメージが無いか精密な検査をする必要があったのだ。

結果としては深刻なダメージこそ無かったものの、精神的なダメージが強いとのことだった。人間の脳というのは非常に良く出来ていて、あまりにリアルな錯覚を感知すると現実のものだと判断し、その影響は肉体にも及ぶらしい。スプーンと水滴だけで死刑囚に『刑を執行した』話は有名だという。

通常のデュエルで使用されるARにはそういった『錯覚』が起こらないよう工夫されているようなのだが……ヒヨリ達が行う『闇のゲーム』はそういつたりミッターを外しているのではないか、というのが現状で考えられるもつともな仮説だった。

ともあれ無事に意識を取り戻した彼女達は、何か後遺症などが残る心配も無く無事に退院のめどが立ったという訳だ。

「本当に2人とも、大したことは無くて良かったぜ……」

「あはは、ご心配をおかけしました」

ペこり、と頭を下げるベル。何日かマトモな食事が取れなかったこともあって、今は純粹に味覚が楽しめることが何より嬉しい。

——これで病室の窓際と扉の前に黒服の男が控えていなければ、もつと手放しにクラド達のお見舞いを喜べたのだが。

「はは、何となく居づらいよな。まあしようがないさ、こっちはお嬢のついでに守って貰ってるんだ。感謝こそすれ、文句は無しだ」

「そうですね……でも、どうにも慣れなくて」

どこことなく居心地の悪そうなベルの様子を見て、クラドは頬を掻きながら穏やかに言い宥めた。

ベルが目覚めたときには、広い病室にアンリエールと並んで寝かされ、黒服の男達に囲まれていた。黒服の男達は何を聞いてもだんまりで、アンリエールはまだ目を覚ましていなかったこともあり、状況を理解するのは看護師が巡回をしてきてからだだった。

大型旅団【獵犬】を壊滅状態に追い込み、成りすましてまで大会に出場したヒヨリと白面の女達。優勝を飾ったユーギムトウが受け取った大会賞品が《アスタリクス》のカードだったことから、彼女達がアスタリクスに強い執着があるのは容易に察しがついた。ともすれば、取り逃したベルのヴァルクュリアを狙うべく再び襲撃してくる可能性が高い。

念の為にヴァルクュリアのカードはユウが預かったが、向こうがそんな事情を察してくれるとは思えない。そこで意識の無い無防備なベルを守ってくれたのは、アンリエール負傷の報告を聞いて駆けつけた『決闘組』の男達だった。個室を貸しきってお嬢を護衛するならば、デュエルマフィアの男達に、といったところであったが、クラド達にしてみれば渡りに船だ。

特徴的な桃色のツインテールを解き、布団に包まれている幽霊姫の背中越しに、クラドは柔らかく声を掛けた。

「お嬢、サンキューな」

「……別に。私の判断ではありませんわ」

ところが、一方の幽霊姫はすっかりいつもの調子を落としてしまっている。

悲惨な敗北がショックだったのか、闇のゲームの恐怖が抜け切っていないのか。あるいは両方か。

「目が覚めてからずっとこんな調子で……わたしとは口もきいてくれません」

ひそひそとクラドに耳打ちするベル。成程なあと苦い顔を浮かべたクラドであったが、何か思いついたように口端を曲げるとチヨイチヨイとユウを手招きした。

「センサー、悪いんだがお嬢にリンゴでも食べさせてやってくれないか?」

「……? ああ、構わないが」

首を傾げるユウに、クラドが紅く熟したリンゴをほいと投げて手渡した。ユウはアンリエールのベッド横に椅子を置くと、果物ナイフを手にしてシャリシャリと皮を剥いていく。

やがて6切れ程に切り分けられたそれを、ユウは布団を被ったままのアンリエールに差し出した。そんな姿を、ベルはちよつとだけ羨ましいなーと思いつつ眺めた。

「……アンリ。気落ちするのは分かるが、何か食べた方が良い」

ユウが普段の調子で囁くと、布団を被っていた幽霊姫の顔が半分だけ、ひよっこりと顔を出した。

「……もう少し、お近くに」

「? ああ」

ユウがそつとその距離を詰めていく。

そんな彼の動きとリンクするように、アンリエールの布団も徐々に下がっていく。

「もう少し、もう少し……」

近づいていく2人の顔面距離。

見れば、すっかり露になった幽霊姫の口元は、完全に「チュー」の形にすぼめられているではないか。

「なっ……!?!」

何やら不穏な企みを感じたベルが声を上げようとした、そのときだった。

「失礼」

しゃくつ。

黒いサングラスにブロンドの髭を生やした黒服の男がぬつと間に割り込むと、ユウの持つていたリングを一口齧っていった。

「……毒見でございませう」

低い地鳴りのような声が、不思議と病室に良く響く。口下手で不器用そうなその男はボソリと呟いて、何事も無かったかのように持ち場へと戻っていった。

ユウはどこか納得したように頷いた後、そのままリングを差し出した。

「……アンリ」

「いえ、お気持ちだけで結構ですわ」

幽霊姫のご尊顔はまたも、岩戸の中に隠れてしまった。

「さて……そろそろ話してくれるよなセンサー？ アンタのことも、シャドルー使いの姉ちゃんのことを」

この病室に集まったのは、何もお見舞いだけが目的ではない。実際に危険な目にあつた2人を交えて、ユウが知っている限りで『何が起こっているのか』を説明してもらおう為だった。

「……分かつた」

顔を出したアンリエールも交えて向けられる真剣な眼差しと、何より痛々しい2人の姿を見て、ユウはベルに話したことと同じ話をクラウド達にも告げた。

ヒヨリも自分も、別の世界の人間であること。カードに封印されていたこと。

その証拠として、この世界では認知されていない『伝説の決闘者』がいたということ。

更にユウは、ユーギムトウが『伝説の決闘者』をなぞっているようだということと、ヒヨリが何故アスタリクスを狙う集団に関わっているのか分からないということをつけ足した。

ベルも、既に事情を知っていたことを明かして、自分はユウの話を

信じると答えて見せた。

「……喋らせといて何だが、とんでもない話だからなあ」

「私も、ここまで来て疑うつもりはないけれど……」

にわかには信じ難い話ではあったが、黒服の男達が同席するこの状況で嘘をつくならもう少しまともな話はいくらでもある。それに全てを鵜呑みに出来ないとはいえ、2人の少女が何か不可思議な力で被害を受けたのは現実だ。

そこまで考えて、クラド達3人は顔を見合わせて頷いた。

「……ま、異世界がどうかという話はイマイチ飲み込めねーが。センチの恋路は応援するぜ？ あの姉ちゃんも何か事情があるんだろ？」

「私もオカルトについては半信半疑だけれど……考えてみれば『忘却の青』だって元々はオカルトじみた存在だったもの。真実がどうなるか、最後まで見届けさせて頂戴？」

そう笑顔を見せる2人に、ポーカーフェイスの表情は僅かに綻んだ。

突拍子も無い話を受け入れ、変わらずの協力を申し出てくれたことに、ベルもほっと胸を撫で下ろした。

「……ありがとう。感謝する」

一方、表情を曇らせているのはアンリエールだ。

何だかんだとユウの看護を受けて調子を持ち直したかにも見えたのだが、今はどこか複雑そうな表情で俯いてしまっている。そんな彼女を気に掛けたクラドが、アンリエールに声を掛けた。

「どうしたお嬢？ 何か引つ掛かるところがあれば今の内に……」

「ついで、別にユウ様のお話を信じない訳ではございませんわ!! ただ——」

はっと飛び上がり、首を振って否定したアンリエールだったが。続く言葉を見失ったように口をつぐむと、再び布団の中に潜り込んでしまった。

「悪い、お嬢。少し無遠慮だったな」

「……お気になさらず、ですわ」

事態の整理が気持ちの整理にもなるかと今回の話し合いを提案したクラドだったが、少し急ぎ過ぎたかと申し訳無さそうに頭を掻いた。予想以上に、アンリエールが受けた傷は深いようだ。

「すまん、事態が事態なモンで俺も少し結論を急いじまった。退院してからまた皆で今後を相談しよう、連中もどう動いてくるか分からないしな」

そう締めくくって、クラドはよつと立ち上がった。

「それじゃ、そろそろ行くこうか？ あんまり長居すると怒られちゃうし」

「ええ。それじゃあね、ベルちゃん、アンリちゃん」

「はい、皆さんも気をつけて下さいね」

ひらひらと手を振って、ベルは部屋を出て行く3人を見送る。

すると。最後にユウがふらりと立ち止まり、布団に潜ったままのアンリに対して優しい声色で言葉を投げた。

「アンリ」

「……なんでしょう？」

「……プライドの高いお前には辛い経験だったかも知れないが。ここで折れるような決闘者ではないと、俺は信じている」

「……………」

しばらくの無言が続いた後、パタンと乾いた音が響いた。

部屋の中にはまだ何人もいるのに、少し広めの病室には取り残されたような静寂が訪れる。

「あの、アンリさ……」

声を掛けようとしたベルは、ピタリとその声を止めた。

小さく小さく押し殺した嗚咽が、布団越しに聞こえてきたからだ。

「……………」

いつも高慢に振舞ってきた彼女からはとても想像できない『歳相応』の弱々しい姿に、思わずベルも動揺してしまった。

考えてみればそうだ。自分と殆ど歳が変わらないにも関わらず、プロという舞台に立って華々しく活躍してきた彼女が……クラドから又聞きした程度でも悲惨だと感じるような目にあって敗北を喫した

のだから。

寝て起きてしまえば苦しみも忘れる、そんな単純な自分は幸せなのかもしれない。ベルはそこまで察して自分も布団を被って目を瞑った。

しかし幽霊姫が抱えてしまった『痛み』は、ベルが考えているよりも少し複雑だった。

*
*

「もしセンサーの話が本当だとするならば……ユーギウムトウは何か知ってやがるのか？」

「そうね……彼については私も気になるところが多かったし、詳しく調べてみるわ。彼の身柄が捕まれば一番良いのだけど、アレだけの報道陣に追われて逃げ切れる彼を捕まえるのは難しそうだし」

宿に戻る道中、日が落ちかけたシガマの大通りでポツリと漏らしたクラドの疑問に、口元に手を当てて藍が言葉を返した。

そんな2人を前に、ユウは伏し目がちに俯きながら呟いた。

「……本当に頭が下がる。2人共すまないな」

ユウにしては少し珍しい言葉が飛び出したことに驚いたのは両名だったが。

しばらく間を置いて、クラドが茶化すように答えた。

「謝ることはねーよ。他人の事情に首を突っ込んだのは、俺と姉ちゃんに関してはお互い様だしさ。協力するって決めた以上、しつかり仕事はさせて貰うぜ？」

クラドの答えに、藍もこくと頷いて同意した。

訳も分からず放り出された荒野を歩いていた頃が幻であったかのように、今のユウにはこんなにも頼れる仲間がいる。今更ながら実感出来たその事実には、ポーカークフェイスが僅かに揺らいだ。

——デュエルは絆を繋ぐモノ。

そう教えてくれた『彼女』の面影が、ふっとユウの脳裏を過ぎる。だとすれば。あの白面達は『今の彼女』が紡いだ絆、ということな

のだろうか？

「おいおいセンサー、さつきから自慢のポーカーフェイスが崩れまくってるぜ？」

「つ……ああ、すまない」

茶化しながらのクラドの指摘に、物思いからはつと意識を戻す。

すっかりしてくれよ？ と念を押され、ユウは普段の表情で答えた。

「……皆の助力に見合った結果を出せるよう、俺も頑張ろう」

「おう。つー訳で、帰ったら早速やることは沢山だな」

苦笑するクラドの表情が語るとおり、彼らがやらなければならないことは山盛りだ。

どこから手をつけようか、などと話をしていると――。

「おや？ 僕の噂はもう終わりですか？」

渦中の人物——ユーギⅡムトウの声が突然、背後から投げかけられた。

「なっ!？」

一同が驚いて振り向くと、そこには随分とラフな格好をしてはいたが、確かに本人が爽やかな笑みを浮かべて佇んでいた。

試合中にも着込んでいた丈の長い白のコートではなく、少し柄の悪そうなワイルドファッション。派手な青い色合いの帽子を目深に被って変装していたのだろうが、今は鍰を少し上げて目元を晒している。

その出で立ちにはシガマの街に良く溶け込んでいた。本人から『自己申告』してくれなければ分からなかっただろう。

「驚かせてしまってすいません。どうにも最近、周りがうるさいもので」

人差し指を口元に当てて、につこりと声をひそめるユーギ。

そんな友好的な彼の態度とは対照的に、ユウと藍はしっかりとユーギを取り囲むようにして逃げ道を塞いだ。こちらとしては絶好の機

会だ、逃す手は無い。

「……おっと。そういえばその黒髪のお嬢さんも報道関係者でしたね、失念してました」

「安心して頂戴、私たちは『決闘王』のプライベートに興味はないわ。ただ少し正直に答えて欲しいことがいくつかあるだけよ」

「……………」

藍の口から出た『その名』にユウは勿論、事情を聞いたクラドも薄気味悪さを感じざるを得なかった。

注目度は高かったとはいえ、たかが地方の大会で優勝を飾った彼は自信満々に『その名』を自称した。本人の茶化したような性格や実力も手伝ってか半ば好意的に受け入れられ———辺境の地で誕生した『決闘王』の名は、今や海を渡り世界でも注目を浴びる存在となっているのだ。

そんな彼の名声は、否が応にでもユウが知るという『伝説』と重なって見える。

「質問とは？」

「貴方の名前と、所持している妙なレアカードについてよ。別件で少し、色々興味深い話を聞いたの」

「……結局は僕の個人情報ですか。まあいいですよ、お答えしましょう。ですが代わりにコチラの要求を貴方達に———正確には『貴方に』受けて貰いたい」

ユーギの視線の先に佇んでいたのは、ユウだった。

「……俺に？」

「ええ。それさえ引き受けて頂ければ、好きな女性のタイプでも何でもお話ししましょう」

ユーギの瞳が妖しげな光を灯す。

底知れぬ何かに警戒を強めながら、ユウは淡々とした口調で答えを返した。

「……要求を呑むかどうかは、お前の回答によって判断する。俺達に何かさせたいなら、先にこちらの質問に答えて貰おう」

「先払いですか……納得のいかなない取引方法ではありますが、まあい

いでしよう。僕のプライベートを明かすだけで望みが叶うなら安いものです」

にっこりと微笑んで、ユーギは質問を促すように手を胸に当てながら続けた。

「さて、では何からお答えしましょう?」

「まずは名前について。それは偽名?」

「まさか? 僕の両親が心を込めて名づけてくれた、自慢の名前ですよ」

けろりとそう言つてのけるユーギだったが、当然口先だけの言葉で納得できる筈もない。

「何か証明できるモノはある?」

「ええつ? そう言われましても……参つたなあ、誰と勘違いしているのか存じませんが。身分証明なら一応、Dパッドの個人登録データを見て貰えれば……あ、そうだ」

そう言つて、ユーギは身分照明とばかりにDパッドに装填されている個人IDのカードを抜き取つて差し出した。

「これを『皆様の』Dパッドで確認出来れば、妙な疑いも照明出来るかと。個人IDカードは複製や情報読み取りの難しい高度なシステムキーですが、Dパッド自体の改竄は比較的容易ですし、そういった手の犯罪も増えていきますからね。そちらのパッドで犯罪防止用のパッドを僕が解くことが出来れば良い、という訳です」

あまりにも自信満々な物言いに、とりあえずは従つて見せると……ユーギはあつさりパスワードを解き、藍のパッドで「ユーギムトウ」の個人データを表示させることに成功してしまった。

「……少なくとも、名前に関しては嘘じゃないってことね」

「信じて頂けましたか?」

にっこりと微笑むユーギのすぐ傍で彼の情報に目を通していた藍だったが、ふとその出生に目が止まった。

「……ナイトコーポレーションK C デュエルシステム開発部、って……貴方KCの社員なの!?!」

「はあ?」

揃って甲高い声を上げたクラドと藍の口を、ユーギが慌てて塞ぐ。何事かと集中する人目に挙動不審になりながらも、ユーギは一同の手を引いてそそくさと脇道へ引つ張り込んだ。

「ちよつ、勘弁して下さい!! 目立つような行動は慎んで頂きたい!!」
KCとは言わずもがな、かの審判員機構を生み出し世界中の決闘者にARという仮想戦場を与える、『文明の白』においてトップに立つデュエルシステム開発の総本山である。

平社員ですら破格の高待遇、エリート中のエリートとっても過言ではない。そんな狭き門を、目の前の若者は潜り抜けたというのだから驚くのも無理は無い。

落ち着いた頃合いを見計らって、ユーギは咳払いを一つしてから言葉が続けた。

「コホン……まあ、僕の秘密といえばそれが秘密です。各地を回ってデュエルディスクのデータを集めるのが仕事なんですよ。久しぶりに休暇を貰って、賞品目当てに大会に出場してしまったのが運の尽きでした。はあ、これからどうなることやら……」

「貴方の事情は何となく分かったわ……それじゃあ何故、そんな貴方が『見たことも無いような』レアカードばかり所持しているの?」

ユウの話が本当なら、彼の所持しているカードも『伝説』と呼ばれるに値する、極めて珍しいモノだ。

誰も知らない、そんな超レアカードばかりで構成されたデッキなど、明らかに不自然だ。

それでもユーギはけろりとして、藍の疑惑に答えて見せた。

「あ、珍しくて良いカード達でしょう? 実は僕、コレクターも兼ねてまして。仕事柄世界中を飛び回っていますので、その行く先々でチョコチョコと」

いかにもな言葉を並べるユーギに当然納得できる筈も無く、ユウは痺れを切らしたように一歩詰め寄った。

「……アレはそんな言葉で片付く代物では無い筈だ。お前は何を知っている?」

「それを言うなら。貴方達の持つ《——**——》も『珍しいで済まない』

代物なのではないですか？」

含みのあるユーギの笑顔が、ユウ達の間には僅かな緊張が走らせた。

「今でこそ世間では認知されていますが、かの《No.〇》ナンバーズもかつては秘密裏に配布された特殊なモンスター・エクシーズでした。世界には我々の知らない未知のカードが山と存在する……そんなロマンが、僕はたまらなく好きなんですよ」

「……ふざけるな。ここまで『偶然』が一致する筈が無い、お前は何を——」

「僕はデュエルモンスターズを愛する、ただのコレクターですよ。それ以上でもそれ以下でも無い」

だからこそ、と付け加えて、ユーギは懐から3枚のカードを取り出した。

「僕は運命を感じたんですよ。未知のレアカード《—***—》を所持した者達と繋がりを持つ貴方に」

取り出されたのは、3枚のカードに、思わずクラドと藍が驚きの声を上げた。

「なっ……!!?」

「これって……!!?」

「ちらりと見えた名前には《—***—》の文字がある。内2枚はペンデュラムモンスターである、双子が使用していたカード達だ。

ユウの眼光は鋭く、ユーギへと向けられた。

「……どういうつもりだ?」

「こちらの要求、というのがコレです。この《—***—》をお渡ししますので、存在する全ての《—***—》を手中に収め、ソレを僕に見せて頂きたい」

不可解なユーギの言動に、藍からも疑問が飛び出した。

「……ユーギさん、コレクターを名乗るにしては随分と乱暴な演技じゃなくて? 第一それが望みなら自分自身で集めたいって思うのが普通でしょう?」

「先程お話ししました通り、変な目立ち方をしたせいで思うように動けないんですよ。僕はざらりと並ぶ《—***—》のカード達、その光景

が見れば誰の手中にあらうと……いえ、『僕に見せてくれそうな』人物であれば誰の手にあらうが構いません。要するに、あの赤コートの『彼女』達は対象外ということですよ」

両手を挙げて降参のポーズをとりながら、ユーギは続ける。

「聞けば赤コートの『彼女』達、随分と物騒だそうじゃないですか？だから僕の代わりに危険を冒して《——***——》を収集してくれる『代行者』が必要だったんですよ。カードの譲渡はせめてもの報酬代わり、とでも思って頂ければ良い」

「……なら何故、ユウ君を選んだの？」

腕の良い、それこそ汚れ仕事が得意な決闘者など幾らでもいる。

藍の尤もな疑問に、ユーギは含み笑いを浮かべて答えた。

「——カードは決闘者を選ぶものです。小麦肌のお嬢さんから貴方の手に渡った、そのカードのように」

瞬間、3人の背筋に何か得体の知れないものが走った。

ベルから預かったヴァルキュリアは今、確かにユウの手元にある。「迷信やジンクスは結構信じる方でして。馬鹿馬鹿しいと思われるかも知れませんが、僕は本気で考えています。ユウ〓キリサキ、貴方が全ての《——***——》を統べる運命にある、とね？」

その手には未だ3枚の《——***——》が握られていた。

深く、不穏な影を落とすそれを前に、ユウの喉が渴いていく。

「——以上が僕の事情です。理解して頂けましたか？ この収集は勿論私情ではありませんが……この数奇な巡り会わせを幸として、どうか受け取って貰いたい」

笑顔を浮かべて佇む『決闘王』に、ユウはもう一度念を押すように問い掛けた。

「……知っていることは、本当にそれだけか」

「強いて言えば『闇のゲーム』なるものについて、会社の方から原因を究明するよう指示が下されていたコトくらいです。コチラについては僕もサツパリですね」

やれやれと首を振るユーギ。

彼を完全に信用した訳では無い。しかしこのカードを受け取るこ

とに関してメリットがあることも事実だ。

このカードを多く所持していれば『白面の女』達から真っ先に標的とされるだろう。ユウにしてみれば願っても無いことだ。それにどの道、ヒヨリへ辿り着く上で《―***―》を追うことは避けられない。「契約は成立……ですネ?」

気が付けばユウは、その3枚を受け取っていた。

複雑な表情を浮かべるクラドと藍を振りほどくように、ユウは真っ直ぐにユーギを見据えて言った。

「……その代わり条件がある。《―***―》に関して何か情報を掴んだら俺に回して貰う。勿論『赤コート』達の情報も含めてだ」

「構いませんよ、それは僕の方からもお願いしたかったです。では連絡先を……」

ユウと連絡先を交換し合うと、ユーギはにっこりと微笑んで帽子を目深に被った。

「それでは皆さん、*またお会いしましょう*」

雑踏の中へと溶け込んでいくユーギの背中を見送りながら、クラドはボソリと呟いた。

「良かったのか、センサー。これで」

「……ああ。後悔は……していないさ」

手中に収まった4枚の《―***―》。

脳裏に浮かんだ2人の少女を思い、ユウの中で1つの意思が固まりつつあった。

第34話 空っぽの幽霊屋敷

「冗談じゃねえ!! 目の前の獲物をみすみす置いて行けっていうのかよ!?!」

甲高い怒声を上げて、笑顔の狐面を頭に被った少年——燐路が立てかけてあった鉄材に当り散らした。

「……そうだ」

一団を纏める長たる慶燦は、ぴくりとも表情を動かさずに頷いた。

白面の一団は現在、シガマから僅かに離れた廃村の小屋に身を隠している。大会運営からの通報を受けたセキュリテイの捜査網から抜け出し、何とか腰を落ち着けたところだったのだが……慶燦が切り出した今後の決定は、奪取に失敗したヴァルキュリアを放置して『次の目的地』へと向かうことだった。

「……忘却の青の同胞から連絡があった。大陸各国の監視体制が強化されたそうさ。しかしアスタリクスは依然未回収のままだ……今は我らが直接出向く必要がある。その為の手筈は整っているが、タイムリングが限られている。だからこそ早急に青の地へ向かう必要がある」

ユーギームトウらの發揮した思わぬ実力。彼らの手にある3枚のアスタリクスは『今は』見送る他無いというのは共通認識であったが……手頃な獲物を見逃すというのは、若く血の気の多い燐路としては納得がいかなかった。

「でもよ!! こんなトコロまで来て、収穫は『4番』1枚だけぜ!? それこそ皆にしめしがつかねえだろ!?!」

「……今は青の地へ潜りこむのが先決だ。この機を逃せば『儀』を行うことは永久に叶わないかもしれないんだ」

「それは『10番』も同じことだろ!? あんな弱つちい女が持つてる今、このときに奪わないでどうすんだよ!? どっかの旅団にでも掠め取られてみる、それこそ……!?!」

「もー、うるさいなあ……頭がイタイって言うてるのに大声で叫ばな

いでよお……」

煩そうに顔をしかめて、埃だらけの布団からむくりと起き上がったのは、銀の髪をボサボサに爆発させたヒヨリだった。

じとりと向けられる眼差しに、燐路もイラついた表情で返す。

「んだよ!? 元はと言えばアンタ……巫女サマが勝手な行動ばかりとるから!!」

「えー……10番が見つかったのは、あたしのお手柄なんだけどなあ」
「ッ、それだつてそうだ!! そのときにしつかりブン取っていればこんなコトには!!」

「あたしを止めたのはキミのお姉さんだよ? あのまま続けてれば、勝負は分からなかったのにさあ……」

ぷうと可愛らしく頬を膨らまして見せるヒヨリだったが、その目は全く笑っていない。

そんな2人の間に割って入るように、慶爍が低く呟いた。

「……意見は尤もだが、巫女。お前と同じ『奴隷』の生き残りであるあの男は危険だ。その調べがいついたときからお前の正体を隠す、という取り決めに破ったのは見過ごせぬな」

「しつこいなあ、それは昨日謝ったじゃん……もういい、もう1回寝る」

完全にへそを曲げてしまったようで、ヒヨリは喚く様にそう声を上げると再び背を向けて横になってしまった。

「とにかくッ!! 俺はもう一度シガマに戻ってあの女から『10番』を回収する!! 1人だつて行くからなッ!」

慶爍はやれやれと首を小さく横に振ると、すつと掌を上にして燐路へと差し出して言った。

「何だよ?」

「……止めはせぬ。だが『9番』は置いて行け。それは巫女が納めるべきものであり、お前の所有物では無い」

丸顔の少年の頭が、見る見るうちにフーツと赤く染まっていく。

小刻みに震えだし、噴火5秒前といったところで、燐路は懐からデッキを取り出すとその中から1枚のカードを取り出し、差し出され

た大きな掌へと叩き付けた。

「上等だコラ!! んなモンに頼らなくなつて『10番』程度回収して見せらあ!!」

ドストスと木の床を踏み抜かんばかりに足音を立てて、燐路は立て掛けてあつたD・ホイールの小型版であるスケボー型の『D・ボード』を抱えると、勢い良く小屋の扉を蹴り開けた。

「クソが……今に見てろよ!! 後で泣いて謝らせてやるからなツ……!!」

黒と赤で炎を模した、何とも歳相応なデザインのD・ボードに飛び乗った燐路の姿は、あつという間に見えなくなつてしまった。

食料調達へ出ていた煽里が事情を聞き、深く大きな溜め息をつく事になるのはそれから程なくしてのことだった。

若い女性の看護師が、にこりと柔和な笑みを浮かべて言う。

「包帯を交換しましょう。失礼しますね」

看護師も同じネイティブ出身らしく、健康的な小麦肌が白い制服と対比して眩しく映つた。こんな大きな街の病院に勤められているのだから、相当良い家の出身なのだろう。

彼女が薄青の入院着に手を掛けた途端、ベルの顔はかあつと朱に染まった。

ベルは、この時間が苦手だった。

一応カーテンで仕切られているものの、薄布の向こうには厳つい顔つきの成人男性が数人控えているのだ。腹部を殴られたこともあり、湿布の交換などでどうしても上半身を露にしなければならぬのは仕方が無いことなのだが……。

「まあ、おつきい……羨ましいなあ」

これである。気恥ずかしさから頬を染めて俯いてしまうのは仕方が無い。

毎回同じ看護師さんが来てくれるのであれば「止めて下さい」の一

言で済むのだが。初見さんは大体『コレ』をきっかけに会話を始めてくる。

同じ女性同士、患者とのコミュニケーションを図る為の話の種なのだろう。しかし病室の状況は前述の通りだ。少しはそうした配慮をして欲しい、と声を大にして言いたいところではあるのだが。微笑ましそうに喋りかけてくる看護師の様子を見るに、自分はまだまだ『子供』としてしか見られていないのだろうと解釈して、ベルは諦めた。

少し身体を拭いてもらって、湿布を張り替えて貰った後。

ガチャリと病室のドアが開いた音を聞いたベルは思わず飛び上がって胸元を隠した。

(まっ、まさか……こんな格好のときにユウさん達が!?)

そんな懸念を裏切るように、その声はきよんとした様子で呟かれた。

「お? 随分と豪華な部屋の使い方してんじゃねーか? 金持ちのやることは違うねえ」

「馬鹿!! 本人達の前で言う台詞じゃないでしょーが!! 殺されるわよ!?!」

「あはは、えっと……お邪魔いたします」

姿が見えなくても、その光景はベルの脳裏にすぐさま思い浮かんだ。

1回戦で激突し、ベルがデュエルの楽しさを学んだ対戦旅団、「AK ATUKI」の3人だ。

ぱあつとこみ上げてくる嬉しさはしかし、唐突に終わりを告げることになる。

「? 何だ、このカーテン……」

「!? わ、ま、ちよっ……!?!」

何の気なしにリーダーのフリンがカーテンに手を掛けようとしたものだから、ベルの口から心臓が飛び出しそうになった。

「ストップ!! ストップ!!」

「うお!? 何だお前ら!? 離せモガ!?!」

幸い、その無遠慮な凶行は息ピッタリな双子姉妹によって阻止され

た訳だが。

「それにしてもビックリね、まさかデュエルで病院に運ばれたなんて。アクションデュエルで調子に乗って怪我をする奴ならそれなりに見たけれど……」

腰に手を当て、姉のリリンが何ともいえない表情で呟いた。その横では妹のサラが椅子に座って器用にパイナップルを剥いている。

フリンはというと、幽霊姫をからかってもあまり反応が無く飽きてしまったのか、今度は黒服の男に何やら話し掛け始めていた。

「噂なんかでは耳にしてたけれど……本当にあるんですね、闇のゲームって」

どうぞ、と手渡されたパイナップルは半月状にカットされていて、一口大に切り分けられた果肉は皮を皿のように持ったまま手を汚さずに食べられそうだ。

ぺこりと頭を下げて受け取ると、ベルは芳醇なその果実の甘さに思わず舌鼓を打った。

「アンリエールさんどうぞ？　美味しいですよ？」

上半身だけを起こして何やら物思いにふけていたアンリエールは、サラの声にはっと気が付くと躊躇いがちに手を伸ばした。

「……ええ、頂きますわ」

当然、彼女が口へ運ぶ前に不器用な男による『毒見』が挟まった訳だが、その光景に始めて遭遇した「AKATUKI」の3人はぎよつと目を見開いて驚いた。

特に、目の前でちよつかいを出していた男が突然消え去ったフリンはそのリアクションも二回り程大きかった。

「……ええ、確かに美味しいですわね。ありがとうございますわ」

「何よ、随分と覇気が無いわね幽霊姫さま？　入院して牙でも抜かれた？」

ケタケタと茶化してみせるリリンの言葉にも、アンリエールは僅か

に苦笑を浮かべただけ。流石に様子がおかしいと察した双子姉妹は、互いに顔を見合わせた。

「ありや？ 意外とダメージ深刻？」

「仕方がないですよ。誰だってあんな怖い目に遭えば……」

「……ふうん。ねえ？」

何を思ったのか。リリンがずい、とアンリエールへ顔を詰め寄せらる。

「あれから私、デツキを調整したのよ。ちよつと相手してくれない？」

「……この狭い病室で何を考えてますの？ 常識というものを——」

「何もデイスクを構えるだけがデュエルじゃないでしょ？ その机でいいわよ、イカサマなんてしやしないから」

出来ないような怪我でもないでしょと付け加え、半ば強引にアンリエールにデツキを握らせると、リリンはベッドの隣に椅子を持ち出し腰掛けた。

渋々とした表情のアンリエールを意にも介せず、リリンはデュエルの準備を進めていく。

「ルールはまあ……いつも通りでいいわよね？ じゃあ先攻・後攻はコレで決めましょ」

そう言つてリリンが取り出したのは白黒2色の6面ダイス。

アナログアイテムであるが故に疑い出せばキリはないが、とりあえずアンリエールは黒のダイスを手に持ち、机の上に転がした。

同時に振られたリリンの白ダイスは6。対して幽霊姫のダイスは2の面を晒していた。

「……………」

「じゃ、私の先攻ね。手札から《ジェムナイト・フュージョン》発動。手札の《ジェムナイト・ラピス》《ジェムナイト・アンバー》の2体を融合」

いきなりの融合召喚。攻撃も出来ず、返しのターンで何も出来ずに除去される危険性も多い先攻1ターン目での展開……何か考えがあるのだろうか。

アンリエールの背中越しに隣のベッドから行方を見守るベルは、リ

リンの引き強さに感服していた。

「融合召喚、《ジェムナイトレディ・ラピスラズリ》」

《ジェムナイトレディ・ラピスラズリ》

☆5 / 地属性 / 岩石族・融合・効果 / ATK 2400 / DEF 1000

リリンが右手掲げたのは、紫の衣を羽織った宝石乙女の融合体。宙に浮かび、両手を広げた優しく凛々しいその影は——どこか、似ている。

「っ……」

びっくり、と小さくアンリエールの肩が震えた光景を、ベルは確かに見てしまった。

「この子は初のお披露目ね。効果を発動するわ、手札からは何も無い？」

「……ええ」

「なら効果を発動。ゲツキから《ジェムナイト・ラズリー》を墓地に送り、フィールドの特殊召喚されたモンスターの数×500ポイントのダメージを相手に与える」

【アンリエール】 LP4000 ↓ 3500

「更に墓地へ送られたラズリーの効果で、墓地のアンバーを手札に加えるわ。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

バーンダメージ、手札アドバンテージの回復。伏せたカードが大会タッグ戦で使われた『あのカード』であるなら、かなり滑り出しの良いい1ターンと言える。

流石とリリンに感服する一方で、ベルからは細い背中と流した桃髪しか見えないアンリエールの頼りない姿に言い知れない不安が積もる。

「……私のターンですわね」

カードを1枚ドロー。6枚揃った手札を覗き見たベルは、それが対戦相手に有益な情報となってしまうことなど忘れ——思わず声を上げていた。

「——えっ？」

モンスターカードが、1枚も存在していなかったからだ。

「……私は手札から《サイクロン》を発動。その伏せカードを破壊しませぬ」

「なら、それにチェーン《グリザイユの牢獄》を発動。次の相手ターンの終了時まで

お互いにシンクロ・エクシーズ召喚は行えず、フィールド上のシンクロ・エクシーズモンスターは効果が無効化され、攻撃できない」

やはり伏せられていたのは白黒のエクストラモンスターを封じ込める強力なメタカード。

普段のアンリエールであったなら、ここで舌打ちの1つもして見せただろう。しかし今は……今の手札では、そんな必要すら無かった。

「……手札からフィールド魔法《ゴーストリック・ハウス》を発動し、カードを2枚伏せてターンエンドですわ」

残された手札は2枚。

手札誘発の多い「ゴーストリック」ならば、相手にしてみれば何より強固な壁とも見えるだろう。しかしハリボテのその裏側を知るべしは、驚愕を隠せない。

(そんな……どうして?)

《大嵐》

《サイクロン》

手札に残されているのはダブついた魔法・罠カード除去。

そして伏せられているのは――。

《ゴーストリック・パニック》

《つり天井》

一発逆転のミラーフォースでもなければ、全てを打ち消す神宣でもない。

そのどれもが発動条件すら満たせず、ただ黙して座すばかりの無意味なカードばかり。

唯一主の身を守るのは、閑散とした埃まみれの幽霊屋敷だけ。しかしどうしたわけか、悪戯好き達の愉快的な姿はそこには無い。

「私のターンね、ドロロー。《ジェムナイト・フュージョン》の効果でラ

ズリーを除外して手札に加え、そのまま発動。手札のアンバーと《ジェムナイト・オブシディア》を融合するわ」

手札の内は知らなくとも、ベルの表情から何か様子がおかしいことを察したのだろう。サラは不安そうに眉を下げていたが、リリンは淡々とデュエルを続ける。

「《ジェムナイト・ジルコニア》を融合召喚。更に墓地へ送られたオブシディアの効果でアンバーを特殊召喚」

《ジェムナイト・ジルコニア》

☆8／地属性／岩石族・融合・効果／ATK 2900／DEF 2500

《ジェムナイト・アンバー》

☆4／地属性／雷族・融合・効果／ATK 1600／DEF 1400

「墓地のオブシディアを除外して《ジェムナイト・フュージョン》を手札に加え、アンバーを二重召喚し効果を発動。《ジェムナイト・フュージョン》を墓地へ送り、除外されているオブシディアを手札に加えるわ」

ジェムナイトが得意とする大量展開。

アンリエールに残された希望は、もう1体が召喚され《つり天井》の発動条件が満たされることを願うしかない。

「ここでラピスラズリの効果を発動。デッキからラズリーを墓地へ送り、特殊召喚されたモンスター3体……合計1500ポイントのダメージを与えるわ」

「……ハウスの効果で、ダメージを半減致します」

【アンリエール】LP3500↓2750

「ラズリーの効果でラピスを手札に加え、墓地のラズリーを除外。

《ジェムナイト・フュージョン》を回収してそのまま融合するわ。素材は場のアンバーと手札のラピスよ」

《ジェムナイトレディ・ラピスラズリ》

☆5／地属性／岩石族・融合・効果／ATK 2400／DEF 1000

「……ラピスラズリの効果でラズリーを墓地へ送り、1500ポイントのダメージ。更にラズリー効果で墓地のアンバーを回収。そろそろ潮時ね」

【アンリエール】 LP2750↓2000

2体目の宝石乙女。この融合召喚が通ったことで何か確信を得たのだろう。更に融合モンスターを展開することも可能だったにも関わらず、リリンはそれ以上の展開をしようとはしなかった。

「バトル、まずはラピスラズリでダイレクトアタック。続けてもう1体のラピスラズリ、ジルコニアの順でアタックするわ」

「……………」

せめて、あと1体召喚されていれば。

そう思ってしまったのは、恐らくこの部屋の中ではベルだけだった。

ゴーストリックの戦術を考えれば、展開した裏側守備モンスターを巻き込むことなく発動する《つり天井》を警戒するのは珍しいことではない。リリンは必然の回避を行ったに過ぎないのだ。加えて、この攻撃が通ってしまえば――。

【アンリエール】 LP2000↓800↓0

幽霊屋敷のハリボテは、無残にも崩れ去るだけだ。

「……………」

俯くアンリエールを尻目に、淡白な表情をしたリリンは強引にその手札を奪い取ると、続けざまにフィールドの伏せカードをも確認し始めた。

そんな横暴にも、アンリエールは抵抗する素振りすら見せない。

「ちよつと、姉さん!？」

一足遅れ、慌てて制止したのはサラだった。

そんな彼女もハリボテの裏側を改めて確認すると思わず絶句してしまう。

まさかこれ程とは、と。

「……へっほこ以下ね。ヒドイ負け方をしたとはいえ、アンタも一応はプロでしょ？ ここまで腑抜けるなんて、心の傷『だけ』じゃあ無

いんじやない？」

言葉に棘があるものの、それは刃を交えた戦友が掛ける精一杯の氣遣いだつた。

その証拠と言わんばかりに、奪い取るように確認した4枚のカードはトントンと揃えてアンリエールの元に返された。

「……貴女達には、関係ありませんわ」

「確かにね。でもね、ただアンタがこのまま腑抜けになつていったら、私たちが『あんなへつぽこに負けた決闘者』ってレッテル貼られちゃうもの。そんなの願ひ避けよ」

様子を見に来たのもそれが目的だし、と口を尖らせて語るリリンに、サラは苦笑を浮かべている。その姿に何となく親近感を覚えるベルもまた、苦笑を浮かべていた。

「ま、部外者に話したくないならそれでもいいけど。せめてその子にくらいは話してあげたら？ 寝ても食べても吹き飛ばない悩みなんか、他人に押しつけるのが一番よ」

と言い切つた本人が一番スツキリしたらしく、リリンは勢い良く椅子から立ち上がるとデッキを纏めて帰り支度を始めた。

「お、何だもう帰んのか？ あれだけ来たい来たいって駄々こねた割りにはやけに……」

「うるさい!! 余計なことを言うな!!」

無言で佇む黒服などお構い無しに、フリンへと掴みかかるリリン。その顔はルビーの如く真っ赤に染まっていた。

「イテテ……つと、褐色ちゃん。無口なアイツにもよろしく言つてくれ」

「あはは……それじゃあ私たちはこの辺で失礼するね。2人とも、早く元氣になつてね？」

「ムキーツ!!」

荒ぶる姉とフリンを押し出すように何とか宥めながら、サラも病室を後にしていく。

「はいー。あのっ、皆さんー」

ドタバタと病室を出て行くその一瞬に、ベルは少しだけ声を張って

言った。

「今日は、ありがとうございました！ 次は絶対に……勝ちます!!」
それだけのたった短い言葉だったが。

ふつと振り返ったサラはにこりと微笑んで、「うん」と頷いて見せた。

ベルが掲げていた「蟲惑魔」のカードを、しっかりとその目に焼き付けながら。

「……やっぱり、そういうことなの？」

月が雲に隠れた夜。宿の部屋で1人Dパッドを叩く藍が眺めているのは、インターネットの海が囁く『とある符号』だった。

彼女の故郷に幻想の紅クリム・クロアが不法な侵入を執拗に始めたのは、1ヶ月前にとある噂が流れ始めた時期と一致する。

——ある開拓エリアから、妙なカードが発掘された。

忘却の青はその性質上、海底領内をドーム上の居住コロニーがいくつも建設・開発されていくことで町や国が形作られていく。

その為、新設されるコロニー内で旧大陸の遺跡などが発掘されることも少なくないのだが……。

(そんな大昔の遺跡から、デュエルモンスターのカードが発掘されるなんて……?)

デュエルモンスターの歴史など、遡っても精々百数年が限度だ。そもそも。忘却の青と未開拓の橙、この2つの大陸資源を争って大陸間戦争が起きたのは青が発見された200年程前の話だ。

武力で争い疲弊した大陸各国に、デュエルモンスターズによる代理戦争が提唱されたのはそれからしばらく経ってからのこと。それまでの軍事産業から現在のカード事業に転向したナイトコーポレーションK Cは、その恩恵を最も受けた企業であるとも言える。

ともかく、代理戦争の手段として生み出されたデュエルモンスターズが何千年も前に沈んだ大陸遺跡と共に沈んでいる筈が無い。

所詮は子供同士で盛り上がる『都市伝説』の域を出ない話だと、それまでならば笑い飛ばしていただろう。

しかし。

ユウから語られた異世界の存在が、闇のゲームの実体が。実際に起きた事実の全てが、そんな思考を否定する。

(……あの人達の狙いがアスタリクスなら、そのカードも……?)

確証は無い。しかしそれは恐らく『白面』達も同じ筈だ。

ユーギムトウが示した『アスタリクスの回収』。ベルのヴァルキュリアを狙って再び襲撃してくる可能性も勿論あったが……彼らと再び対峙する為、それを旅の指標として定めた自分達にとってこの情報は無視出来るモノでは無い。

何より、自分のホームグラウンドである青ならば『白面』達よりも身軽に動ける筈だ。

「……これは少し、相談してみる価値はありそうね」

そう呟いて、藍がDパッドの通話機能に手を伸ばそうとするところ――

「呼び出し……クラド君から?」

それはつい先程「用がある」とユウと共に宿を後にしたクラドからだった。

躊躇うことなく手を伸ばし、さっと通話モードへと切り替える。

「どうしたの、クラドく――」

藍が言い切る前に、パッドに表示されたクラドは切羽詰った表情で叫んだ。

「病院でメイドちゃんとお嬢が襲われた!! 姉ちゃん、こっちに來れるか!?!」

第35話 襲撃！ 炎の白面少年

「私には、お兄様がいますの」

サラ達が出ていってからしばらく経ってから、アンリエールがぽつりと口を開いた。

「……はい、前に少し聞きました」

ベルは、この街に着いたとき的一幕を思い出した。

旅へ参加することに兄は快く承諾してくれた、などと言っていたアンリエールだったが、その『お兄様』と電話で口論する姿を藍が目撃している。同行について反対されていたらしいことは、その内容から察しがついたらしい。

本人が気丈に振舞っているので、このことは黙っていようとメンバーの中で意見は一致したのだが。そんな事情もあり、ベルは少し曖昧に答えた。

「……それなら、しばらく独り言を言いますわ」

少しずつ氷が溶けていくように、アンリエールの口から言葉が漏れ出した。

俯いたその脛に、細くなった夕日のオレンジが反射する。

「お兄様は厳しく、とても強い人でしたわ。数々の舞台で勝利を飾り、沢山の観客を魅了して……私はずっと、そんなお兄様の後について歩かされました。だから決闘アクションデューエリスト役者としての道も、あのカードフアントムも……現役を退いて組の仕事に専念するようになったお兄様の『お下がり』に過ぎませんの」

ずっと視線を自分の足元に向けられたまま、静かに語るアンリエール。

兄弟がいないベルには、心中の全てを察することは出来なかったが……それが心の錘になっっていることは、何となく理解出来た。

「お兄様にとって私は後をつけて歩く影。壇上でどんな賛美を頂いても、ただ空しいだけでしたわ。そのどれもが皆お兄様の『お下がり』ですもの。自分の分け身であるなら勝って当然、敗北など有り得ないと」

贅沢な悩みだと率直な感想を胸に抱いたベルだったが、人の心は決して貧富の差で秤をかけて良いモノじゃない。

皆どこかが欠けていて、どこかが満たされて。だからこそ、答えの無い『ソレ』を求めて人は繋がっている。

旅を通じて広い世界に羽ばたくことが出来た今だからこそ、ベルはそうも考えることが出来た。想像がつかない『栄光』を背負った幽霊姫の心の錘は、それこそ『比喩物にならない』のだろう。

周囲の期待に応え、努力をして結果まで出したのに。

たった一言「頑張ったね」の言葉すら貰えないなんて、そんなのは悲しすぎる。

「だからでしょう。ユウ様と出会い、敗北したあの日……目が覚めたようでしたわ。恋は人を盲目にすると聞きましたが、お兄様の背中だけを眺めていた私にとって良い目隠しになったのかもしれないわね」

少しだけ頬に朱が差して、アンリエールの表情に僅かな色が戻る。

「この旅は私にとって初めての『反抗』でした。お兄様には了解を得たと言いましたが、私が一方的に護衛を送り返して勝手に付いてきただけですよ。資金援助と言っていたのもポケットマネーで……ああ、これは皆さんには内緒にして下さいまし」

とんでもない事実にも、ベルは思わず目を丸くしながらも何とか頷いた。

「当然、お兄様はお怒りになったようですが。今日まで私を連れ戻そうともしませんでしたから。やっとお兄様に勝てたような気になって、旅の間はずっと嬉しかったですよ」

でも、と付け加えたアンリエールの横顔には暗く影が落ちた。

「それも、……でお終いですわね」

「……え？」

アンリエールの言葉の先は、ベルも何となく察しが付いた。

それでも、疑問の声を口に出さずにはいられない。

「どうして、そんな——」

「お兄様は私を連れ戻すでしょうから。十中八九、間違いなく。無様

に恥を晒した自分の影をこれ以上、野放しにしておく筈がありませんもの。加えて家宝を奪われたとあれば、相応の罰も覚悟しておく必要がありそうですわね……」

力なく苦笑するアンリエールに、ベルは思わず声を張り上げていた。

「そんなの……アンリさんはそれで良いんですか」

「……あまり気は進みませんわね」

「なら、何とかしてお兄さんに分かって貰うように——」

「言葉で無理ならコレで聞かせるしか方法はありませんが、言ったでしょう？ 私はお兄様の影ですわ、一度でも勝った試しなどありません。尤も今は——」

そう力無く微笑んで、デッキを握ったアンリエールの手は震えていた。

「あの女に、歯向かう牙すら抜かれてしまったようですけれど」

闇のゲームを体験したことで植えつけられた恐怖。しかしそれ以上、彼女の上にはとてつもなく大きな……『兄』という重圧が、押し加かっていた。そんなプレッシャーから何とか幽霊姫を支えていた柱は、あの1戦で見事に砕かれてしまったらしい。

「……デッキを握り、敗北することが恐ろしくなつたのです。あの痛みが、お兄様の目が頭を過ぎつてね。先程も見ましたでしょう？ 駄目な主を見限つて、この子達はちつとも応えてくれなくなつてしまいましたわ……」

ぽたぽたと水滴が落ちる音だけが静かに響く。

掛ける声を一生懸命に考えてから、ベルは静かに口を開いた。

「アンリさん、わたしも付き合いますから、頑張つて一緒に——」

そう励まそうとしたベルに向かって、情けなく泣き顔に微笑を浮かべたアンリエールは、

「……ごめんなさい。私は貴女ほど強くは、ありませんの」

ぴしやりと言葉を遮って、布団に潜り込んでしまった。

「……独り言に付き合つて頂いて、ありがとうございましたわ」

テーブルには、ばらりと散らばつたデッキが乱雑に置かれている。

ベルにはどこか、そんな悪戯好き達が寂しげに見えて。

「そんなの……」

らしくないですよ、と出掛けた声を飲み込んで、ベルはつとめて明るい声で言い換えた。

「……一緒に頑張りましょう。待ってますからね」

「ベルちゃん達が襲われたって、どういうことなの!？」

夜の街を駆け抜けながら、藍がDパッド越しにクラドへ問い掛けた。

通話先は何やら騒がしく、どうやら近くでデュエルが行われているようだ。時折弾ける様な物音が響く中、クラドは口早に説明した。

『そのままの意味さ、いや……どうにも黒服さん方が頼りなくてな、このところ許可を貰って夜中はセンサーと病室で張ってたんだよ。もしたら案の定だ』

クラドの口ぶりからして、黒服の護衛達は成す術なくやられてしまったらしい。

腕力ではユウ達などより上の筈だ。『白面』の一味らしく、おかしな力を使ったに違いない。

「……相手は何人いるの?」

『準決勝で俺らと戦ったガキンチョが1人だ。今はセンサーが相手をしているが……これから増援がくるかも分からない、だから姉ちゃんにも声を掛けたんだ』

そういうことは自分にも話しておいて欲しかったのに、とついて出そうになった文句を飲み込んで、藍は短く溜め息をついた。

激しく争うような物音で飛び起きたベルは、咄嗟に枕元に置いてあったディスクを掴んで左腕に装着した。

「さて、邪魔な奴を片付けたところで——」

飛び起きたベルの目にまず飛び込んできたのは、自分と同じ位の背丈の小柄な人影だった。

紅い衣に狐の白面……そのシルエットは間違いなく『彼女』達と同じものだったが、その声は女性というよりは少年のものだ。ベルの中で、話に聞いていた人物像が思い当たる。

藍とクラドが敗北を喫した、アスタリスクスを所持する「ラヴアル」使いの少年——。

見れば、既に黒服の男達は一回り大きな体躯のモンスター達に組み伏せられてしまっていた。少年の両腕にはそれぞれディスクが付けられており、片方は倒れ伏した黒服の男のディスクと紅い鎖で繋がれている。

少年は黒服の男と強制的に『闇のゲーム』を行うことで、召喚された半実体のモンスターをそのまま暴力へと変換しているのだろう。

やはり標的は自分か……そう身構えた刹那。

「……ああ？」

少年の声色は、ベルの前に立ちはだかった影を前にして怪訝に上ずった。

「何だデメエ？ 用があるのはそこのおっぱいちゃんなんだよ、邪魔する気なら容赦しないぜ？」

徐々に鮮明になっていく視界が、見慣れたその背中を認識する。

「……それはこちらも同じだ。2人に手を出すなら俺も容赦はしない」

淡白な口調の中に、僅かに怒りの色が滲む。

「ユウさん!! どうして……」

「こういう事態に備えて、隠れて待機させて貰っていた。今はアンリと一緒にコイツから離れている」

それなら一言でも話してくれば良かったのにとベルは思ったが、目の前の現実を見るに彼の憂慮は見事的中したらしい。

それは相手にとっても痛手だったようで、突然現れた邪魔者に苛立たしく声を荒げる。

「チツ、余計な真似を……!!」

そもそも少年はどこから入り込んだのだろう……と見渡せば、天井の一部に大きな穴が空いていた。天井裏から進入、同時に奇襲を掛けたといった具合なのだろうが、無茶苦茶にも程がある。

すると、怯えながらも精一杯気丈に振舞うアンリエールの声を上げた。

「あ、貴方!! 一体どういうつもりですか!? こんな場所で騒ぎを起こせばどうなるか——」

「うっせーな、少し黙ってろよ用済み女。いくら叫んでもこの部屋には誰も入れやしねーよ」

見ればドアの前と窓の前。狭い病室で立ち塞がるように召喚された2体のモンスターは、完全に入出口を封鎖してしまっている。これでは折角駆けつけた救援も、容易には突破できない。少なくとも『騒ぎが大きくなるように』甲高く叫んだアンリエールの声は、今は無駄だったようだ。

「こうなったら仕方ねえ、さつさとディスクを構えな能面男!!」

「……1つ尋ねる。カードを奪うだけなら何故デュエルする必要がある?」

「知るかよ、そういうモンなんだとよ。知ってたとしても教えねえけどな」

「……そうか。なら、力づくでも聞き出すだけだ」

互いに敵意を持つ決闘者同士、交わす言葉はこれ以上必要無い。

代理戦争として発展を遂げたその起源が示す通り、後はカードの刃を交えるのみだ。

「へっ、上等だ、後悔するんじゃないぞ!」

少年の左手に装着されたディスクから、紅い鎖が伸びる。

審判員を欠いた、まさに無法の決闘が始まろうとしていた。

「……………」

デッキは装着されていたディスクは勝手にデュエルモードへと移行し……両者は僅かに身じろぐと、声高らかに火蓋を落とした。

「決闘!!」

【ユウ】LP4000 VS 【燐路】LP4000

闇のゲームの開始と共に、病室は倒れ伏した黒服たちをも巻き込んで、漆黒の霧が立ち込めていく。あつという間に、室内はその輪郭すら分からなくなった。

「……俺のターン。まずは魔法カード《ソーラー・エクステンジ》を発動。手札の《ライトロード・アサシン ライデン》を墓地へ送り、カードを2枚ドロシーし、デッキから2枚を墓地へ送る」

墓地へ落ちたのは《ライトロード・パラディン ジェイン》と《裁きの龍》ジャッジメント・ドラグーン。切り札が早々に墓地へ送られてしまったことにも眉一つ動かさず、ユウはターンを続ける。

「手札から通常召喚、《ライトロード・サモナー ルミナス》。その効果で手札の《超電磁タートル》を墓地へ送り、墓地からライデンを蘇生する」

《ライトロード・サモナー ルミナス》
☆3 / 光属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 1000 / DEF 1000

《ライトロード・アサシン ライデン》
☆4 / 光属性 / 戦士族・チューナー・効果 / ATK 1700 / DEF 1000

並び立つは褐色の召喚師と暗殺者。

攻めることが出来ない先攻1ターンではあまり好ましくない『速攻』の布陣ではあるものの、手札の状況を見たユウは尚もデッキを加速させるべく宣言を止めない。

「……ライデンの効果を発動。デッキから2枚のカードを墓地へ送る」

続けて送られたのは《カードガンナー》《ライトロード・モンク エイリン》の2枚。

ライデンの持つ攻撃力上昇効果はディスクの処理に任せて省略し、ユウは本命とも言える宣言を言い放った。

「俺はチューナー・モンスター・ライデンに、☆3のルミナスをチューニング……古の守り手、伝説の彼方より再来せん。シンクロ召喚、《ライ

トロード・アーク ミカエル』」

《ライトロード・アーク ミカエル》

☆7／光属性／ドラゴン族・効果／ATK 2600／DEF 2000

4つの緑輪が列を成し、白く輝く柱が天を突く。

光を裂いて現れた黄金の騎士は、剣を掲げて咆哮した。

「けっ、馬鹿の一つ覚えなシンクロ召喚だな……」

そんな光景を、少年は舌打ちをしながらつまらなそうに睨みつける。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。ミカエルの効果により、俺はデッキから3枚のカードを墓地へ送る」

止めとばかりに墓地へ送られたカードは《ブラック・ホール》《暗黒竜コラプサーペン》《ライトロード・ビースト ウォルフ》の3枚。

「効果により、俺はウォルフを攻撃表示で特殊召喚する」

《ライトロード・ビースト ウォルフ》

☆4／光属性／獣戦士族・効果／ATK 2100／DEF 300

貴重な制限カードも墓地へ送られてしまったものの、それと引き換えとばかりにフィールドには白毛の獣戦士が召喚された。

（凄、墓地に「ライトロード」を4種類貯めた上に攻撃力の高いモンスターまで……）

伏せカードも、更に手札が2枚残されているこの状況では、相手もかなり慎重に動かなければならない筈だ。

1ターン目としては悪手かもしれないが、相手の妨害が無い内に墓地を肥やすことを選択したのは、恐らく手札には既に《裁きの龍》があるからだろう。

内心で声援を送るベルの胸中とは相反し、少年は余裕の声色でターンを受けた。

「おいおい、それで終わりかよ？ なら次はコッチから行くぜ？ 俺のターン、ドロー!!」

白面の奥で、瞳に紅く光が灯る。

「俺は手札から魔法カード《炎熱伝導場》を発動!! デツキから「ラヴアル」2体を墓地へ送る!!」

少年がカードの発動を宣言した瞬間、場の空気が一瞬強張ったように感じられた。

ベルがふと隣を見れば、アンリエールが忌々しげに眉を寄せている。

「……最悪ですわ。初手にあのカードがあるなんて……」
「え?」

彼女が呟いた言葉の意味を、ベルはすぐに知ることとなる。

「墓地へ送ったのは《ラヴアルのマグマ砲兵》と《ラヴアル炎火山の侍女》!! そして墓地へ送られた侍女の効果を発動!! このカードが墓地へ送られた時、自分の墓地に《ラヴアル炎火山の侍女》以外の「ラヴアル」モンスターがあれば、デツキから「ラヴアル」モンスター1体を墓地へ送る事ができる!! 俺は2枚目の侍女を墓地へ送る!!」

侍女の効果に「1ターンに1度」という制約は無い。
つまり、2体目も同様に効果を發揮し――。

「2枚目の侍女の効果発動!! 同様に3枚目の侍女を落とし、最後にその効果で《ラヴアル炎湖畔の淑女》を落とす!!」

たった1枚のカードで、墓地に5体のモンスターが送られた。

墓地へ大量のモンスターを送るその意味は、ベルもよく理解している。だからこそ、口を噤んで息を呑む他無かった。

紅く滾る炎を蓄え、火山が噴火を始めるその瞬間まで。

「更に手札から魔法カード《真炎の爆発》を発動!! 自分の墓地から守備力200の

炎属性モンスターを可能な限り特殊召喚する!! 俺は5体の「ラヴアル」を特殊召喚ツ!!」

少年がディスクへカードを叩き付けた刹那、墓地を意味する紫色の魔法陣から紅蓮の炎が噴出する。

眩いばかりの熱量と輝きを持った炎を背景に、5つのシルエットが浮かび上がった。

《ラヴアル炎火山の侍女》

☆1／炎属性／炎族・チューナー・効果／ATK 1000／DEF 200

《ラヴァル炎湖畔の淑女》

☆3／炎属性／炎族・チューナー・効果／ATK 2000／DEF 200

《ラヴァルのマグマ砲兵》

☆4／炎属性／炎族・効果／ATK 1700／DEF 200

炎髪なびかせる妖艶な姿の女性型モンスターに、巨大な砲塔を2門背負った岩石兵士。攻撃力は下級モンスターの域を出ないものの、今更ソレを指摘するのは間違いだ。

「さあ行くぜ？ 俺は☆4のマグマ砲兵に、☆1チューナー炎火山の侍女をチューニング!!」

噴出を始めた溶岩流は、最早止めようがない。

1つの緑輪と交わって変質したモンスターは、光騎士団を追い詰める為の石礫と化する。

「表裏一体、調和の混沌!! 無理を貫き終止を穿て!! シンクロ召喚、

《幻層の守護者アルマデス》!!」

《幻層の守護者アルマデス》

☆5／光属性／悪魔族・シンクロ・効果／ATK 2300／DEF 1500

左手に盛る炎を、右手には光の盾を構えた黒白の守護者が降り立つ。

攻撃力こそ今一步だが、このモンスターを召喚したことでユウの構えた布陣は一転してしまう。

「……厄介なカードだな」

「ハハッ、そうだろうな!? コイツが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法も罫も、モンスターの効果すら発動できねえ!! お得意の《オネスト》ちゃんはコイツの前じゃクソの役にも立たねえってワケだ!!」

「!? そんな……!!」

思わずベルが声を上げる。

ユウに残された手札は2枚。その内の1つが《オネスト》である可能性は少なくなかったが、これで攻撃力の劣るウォルフは確実に破壊されてしまおうだろう。

頼みの綱はミカエルのみ。しかしそれも、後に控える3体のチューナーが黙って見過ごす筈がない。

「更に行くぜ!? 俺は墓地のマグマ砲兵を除外し、手札から《炎の精霊イフリート》を特殊召喚する!!」

《炎の精霊 イフリート》

☆4 / 炎属性 / 炎族・効果 / ATK 1700 / DEF 1000
湾曲した2本の角を携えた炎の巨人が、煙を撒きながら姿を現した。

当然、その身には3つの緑輪が重なっていく。

「☆4のイフリートに、☆3チューナー炎湖畔の淑女をチューニング!! 神世の焰神、今蘇りて滅魔の猛火を振るえ!! シンクロ召喚、《エンシエント・ゴッド・フレムベル》!!」

《エンシエント・ゴッド・フレムベル》

☆7 / 炎属性 / 炎族・シンクロ・効果 / ATK 2500 / DEF 2000

赤い炎を全身に纏った赤銅の巨人が、ズンと少年のフィールドへ降り立った。

「エンシエント・ゴッドの効果発動!! このカードがシンクロ召喚に成功した時、

相手の手札枚数まで相手墓地のカードを選択し、ゲームから除外する!! テメエの手札は2枚、よって俺が選択するのは超電磁タートルとライデンの2体だ!!」

古の巨人が放つ猛火がユウを襲う。

ダメージこそ無いものの、その凄まじい熱量にユウは顔を腕で覆った。

「更にも!! このカードの攻撃力は、この効果で除外したカードの数×200ポイントアップする!! よって攻撃力は2900だ!!」

《エンシエント・ゴッド・フレムベル》

「そんな、墓地のカードを除外するなんて……」

「エクストラモンスターは多種多様な効果を備えているもの……とはいえ、どうしてこうもユウ様にとって最悪なカードばかり……!!」

ユウを見守る2人は、その留まることを知らない勢いに思わず歯噛みした。

自分達はただ、こうして見ていることしか出来ないのか……いや。

「ユウさん!! やっぱりわたしも——!!」

溜らず、ベルはディスクを起動させて前へ出ようとしたが——制止するかのよう突き出されたユウの手が、ソレを押し留めた。

「……案ずるな。ここは俺に、任せてくれ」

そう言うユウの目は、ただ真っ直ぐに相手へ向けられている。

「……下がっているんだ。これ以上、お前達を危険な目に合わせる訳には行かない」

否とは言わせないユウの言葉が、ベルを自然と押し戻していく。

「カッコつけフェイズは済んだかよ？ 俺は手札から魔法カード《トランスターン》を発動!! 炎火山の侍女を墓地に送り、このカードと種族・属性が同じでレベルが1つ高いモンスター1体をデッキから特殊召喚する!! 来い、《ラヴァル炎樹海の妖女》!!」

《ラヴァル炎樹海の妖女》

☆2 / 炎属性 / 炎族・チューナー・効果 / ATK 300 / DEF 200

炎髪を黒いフードで隠したラヴァルの女性型モンスターが、侍女と入れ替わりにフィールドへ現れる。

「ここで☆7のエンシェント・ゴッドに、☆2チューナーの炎樹海の妖女をチューニング!!」

(!? 更にシンクロ召喚を!?)

山の斜面を駆け、森を焼いていく溶岩流。少年のデュエルは、まさにそんな様相だ。

物量にモノを言わせた連続シンクロを止める術は、今はユウに残されていない。

「雲を突く要塞の巨兵、道行く全てを圧倒しろ!! シンクロ召喚、《鬼岩城》!!」

《鬼岩城》

☆9 / 地属性 / 岩石族・シンクロ・効果 / ATK 2900 / DEF 2800

そのレベルは大台の9。見上げるまでに大きなその巨体は、これが闇のフィールドでなければ大惨事となっていただろう。

攻撃力は既に素材となったエンシエント・ゴッドと並んでいるが、更にその力を増していく。

「鬼岩城は素材となったチューナー以外のモンスターの数×200ポイント、攻撃力を上げる!! よってその攻撃力は3100だ!!」

《鬼岩城》

ATK 2900 ↓ 3100

「続けて俺は、手札の《ラヴァル・キャノン》を通常召喚して効果を発動!! 除外されているマグマ砲兵を特殊召喚する!!」

《ラヴァル・キャノン》

☆4 / 炎属性 / 戦士族・効果 / ATK 1600 / DEF 900

左腕に巨大な大砲を構えた青肌の岩石戦士が、地面へ向かってその火を撃った。

刹那、赤く溶けた地表からマグマ砲兵が這い出るようにして特殊召喚される。

「さて……これが最後のシンクロだ、刮目しな!! ☆4のマグマ砲兵とキャノンの2体に、☆1チューナー炎火山の侍女をチューニング!!」

「その素材構成は……まさかっ……!?!」

悲鳴のようなアンリエールの声が響く中、たった1つの緑輪が2体のモンスターを束ねていく。

「天上天下、唯我独尊!! 絶望の魔槍よ、ムカつく奴らをブツ殺せ!!」
パキパキ、と熱せられていた空気が凍てついていく。

身を裂くような暴風と共に雄叫びを上げたのは、三つ首の巨竜。

「シンクロ召喚ツ!! 《氷結界の龍 トリシューラ》!!」

炎の進撃、その最後に姿を現したのは——立ち向かう気力すらも凍
てつかせる、最凶のシンクロモンスターだった。

第36話 翔ける白炎

《氷結界の龍トリシューラ》

☆9 / 水属性 / ドラゴン族・シンクロ・効果 / ATK 2700 / DEF 2000

翼を広げ、三頭を持つ白竜が耳を裂く様な金切り声を上げる。

強力な効果故にこれまでに何度も使用禁止を提唱され、その入手難度から操る決闘者すら限られるシンクロモンスターの最高峰。

背筋がぞわりと粟立ったのは、このモンスターを初めて目の当たりにしたベルだけではない。ユウとアンリエールも……いや、なまじその『力』を知っているだけに、その戦慄はベルよりも深かった筈だ。

そんな3人の様子を満足げに眺めて、少年——燐路は鬱陶しそうに仮面を脱ぎ捨て、犬歯を剥いて宣言した。

「トリシューラの効果発動!! シンクロ召喚成功時、相手の手札・フィールド・墓地のカードをそれぞれ1枚まで選んで除外する!!」

三つ首の竜が、滅びの伝承をそのままに『それぞれの』標的へと眼差しを向ける。

「そんな、3箇所のカードを1度に……!?!」

「くっ……これだから嫌なのですわ、野蛮なシンクロモンスターなど……!!」

普段から高レベルモンスターを嫌うアンリエールだが、その表情は覇気こそ無かったものの、いつもに増して忌々しげに歪められていた。

「標的は墓地のルミナス、場のミカエル、その手札のカード1枚だ!! 穿て!! 『アブソリュート・トライアングル』!!」

狂乱の号令と共に放たれたのは、神々しい視覚に反して禍々しく歪み、うねる3本のブレス。1つは黄金の竜騎士の胸を貫き、残る2つはユウを襲った。

「ッ!!」

あまりの冷気に灼熱の爆風とも区別が付かないソレは、ベルやアンリエール達にも襲い掛かり——直撃を受けたユウは吹き飛ばされ、壁へと叩き付けた。

暴風の余波から思わず顔を庇っていたベルとアンリエールだったが、その大きな物音に驚いて庇う腕を解いたときには、悲鳴のような声を上げていた。

「ユウ様!？」

「ユウさんっ!!」

2人の目に映ったのは、肩膝をついてうな垂れるユウの姿だった。おぞましい冷気が舞う中、ユウは2人を気遣うようによろよると立ち上がると、静かにディスクを構え直した。

「……大丈夫だ、心配するな」

そう言っただけで『敵』を睨み据えるも、その足元はどこかおぼつかない。

闇のゲームがプレイヤーに与える痛みを知る2人は悲痛な面持ちを浮かべていたが、ユウの表情は普段のポーカーフェイスのまま揺るがない。

その深い黒眼だけは研ぎ澄まされた剣のように尖っていたが、それを受ける燐路の表情は余裕に満ち溢れていた。

何故なら、魔槍の竜が穿^{除外した}つたユウの手札は——あるうことか、勝利を導く白き龍だったからだ。

「ハッ、痩せ我慢も大概にしろよな？ 俺は更に墓地の炎湖畔の淑女の効果を発動!! このカードと「ラヴァル」1体を除外することで、セットカード1枚を破壊する!!」

ライフに傷は無いものの、既に満身創痍のユウに追い討ちが掛けられる。

これが決まってしまうえば、残されるのは1枚の手札と、場のウォルフのみ——。

「その効果にチェーン発動、畏カード《強化蘇生》。墓地のカードガンナーのレベルを1つ上げて守備表示で特殊召喚する……」

《カードガンナー》

☆3 ↓ 4 / 地属性 / 機械族・効果 / ATK 400 / DEF 400

間一髪、場に舞い戻ったのは既に墓地へ送られていた青赤の寸胴な

機械射手だ。

「チツ、炎湖畔の淑女が破壊出来るのはあくまで『セットカード』だ。今は見逃してやるよ、だが——」

ギンと見開いた灼眼が捉えるは、勝利への道筋。

道中に転がる小石を蹴飛ばして歩く童子のように、燐路は腕を振り上げた。

「コイツらの攻撃を受けても、ヘラヘラ立ってられるかよ!? バトルだ!! まずはアルマデスでウォルフを攻撃!!」

白毛の獣戦士がその爪を振るうも、黒白の守護者に対して傷一つ付けることは叶わない。

そう、例え守護天使オネストの加護があつたとしても——。

【ユウ】LP4000↓3800

孤独の光騎士団最後の1人は、無残にも紅蓮の炎を纏った右手に胸を貫かれて碎け散った。

「……ツぐ」

僅かな余波がユウを襲うも、それだけですら苦痛の声が漏れ出る。

たった200のダメージですらこんな状態だというのに、これからの攻撃をまともに受ければ——。

「続けてトリシューラでカードガンナーを攻撃!!」

再び放たれる3本の白熱線。

そのエネルギーを受け止めるのには、カードガンナーの体軀はあまりにも小さ過ぎた。

「ツ……!!」

車にでも撥ね飛ばされたように吹き飛んだユウに、冷気の刃が容赦なく襲い掛かる。

駆け寄ってしまったいたくなる衝動をベルとアンリエールがどうにか抑えることが出来たのは、ユウの「危険に晒したくはない」という決意が釘を刺していたからだだろう。

「ユウ「様」さんツ!?!」

ぼとり、とその身を地に落として尚。

全身に受けた痛みを引き千切り、ユウは再び立ち上がった。

「まだ立てんのか？ 流石は『奴隷』の生き残りだな？」

「……、俺は」

だらりと下がった右腕が、ゆっくりと動いて伸びていく。

向かう先は——デイスクヘセットされたデッキの上だ。

「へえ、サレンダーかよ？ 立派な心がけじゃねーか」

小馬鹿にニヤニヤと口端を歪める隣路には怒りが沸いたもの——傷付いていくユウを見たベルは、サレンダーするという選択肢は間違っていないと思った。

カード1枚を渡して助かるのならそれに越したことは無い。命を奪われてしまつてはそれこそ、ヒヨリに再会することすら叶わなくなつてしまう。

だからユウの選択は正しい。サレンダーして下さいと、そう声を掛けようとして——。

「……カードガンナーの効果で、カードを1枚ドローする……」

そんな言葉は、未だ眼前の敵を見据えたまま闘志を絶やさないうウの姿の前に、喉の奥へと引っ込んでしまった。

「ユウさん、何でっ……!?!」

引き抜いたカードは何だったのか。それは分からない。

しかしユウの眼は次の攻撃宣言を促すように鋭く研ぎ澄まされている。

「……よっぽど死にてえらしいな。ならお望み通りブツ潰してやるよ!! 鬼岩城でダイレクトアタックだ!!」

「待つて!! もう止めて——!!」

振り上げられた岩石の拳が、遂に文字通りの直撃を果たす。

「あ……」

縋るようなベルの叫びも空しく。

ゴンと鈍い音を立てて、ユウは壁へ打ち付けられた。

【ユウ】LP3800→700

その身体は、ピクリとも動かない。

見た目には先程のブレスよりも威力は劣っているように見えた。しかしソレは、不可思議な力の働くこのフィールドでユウの命を『数

値』として削っていったのだ。

「……そ、んな」

無残なユウの姿に、ぐにやりとベルの視界が歪む。
もつと自分に戦う力があれば。

守られてばかりの自分は嫌だと、そう言つてこの人に付いてきた筈なのに。

なのに――。

「ケツ、やつとくたばったか……」

押し掛かる自責と悲しみはやがて、自分と歳がさほど変わらないだろう目の前の少年に対してドス黒く、憎悪となつて降り積もつていく。

「……あなた、は――!!」

悲鳴とも泣き声ともつかないそんな声がベルの口から漏れ出しそうになったとき、ユウの指がピクリと動いた。

「……あ?」

不愉快そうに眉を寄せた燐路の目にも映る。

ゆらりと三度立ち上がる、静かな白い炎のような男の姿が。

「ユウ様ツ!!」

それを目にした瞬間、アンリエールは形振り構わず駆け出していた。

「ユウ様、もうお止め下さい!! これ以上はもうお身体が――!!」

おぼつかないユウの身体を、アンリエールが抱きつくようにして支える。

目尻に涙を貯めている彼女に、ユウはポンと手を置いて静かに呟いた。

「……大丈夫だ。俺は、まだ戦える」

追い続けるアンリエールを優しく振りほどいて、1歩1歩と前に出るユウ。

ちらりとベルに向けられたユウの目は、一瞬だけ微笑んだようだった。

「死に損ないが!! まだやろうつてのよかよ!?!」

「……当たり前だ。まだライフは残っている……」

じり、と1歩後退した燐路が声を荒げる。

大人を相手取ってデュエルしてきた燐路にとって、年齢差など取るに足らないモノだ。

「……俺は、もう二度と『諦めない』と決めた。例え可能性が0であっても……」

しかし今、目の前の取るに足らない男に——しかも追い詰めて優位に立っている筈のこの状況で、こんなにも気圧されているのは何故なのか？

「……『ライフが0になるその瞬間まで、決闘者は絶対に諦めてはいけない。最後の最後の、最後まで』……」

その姿に、その目に。

忌まわしい『あの女』が重なる。

「つぎけんな!! そんなボロボロで何が出来るってんだよ!？」

「……さあな。俺にも分からないさ、今は『まだ』な」

「ふぎげやがって……俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ!!」

ディスクの表示が点滅し、短いブザーと共にターンプレイヤーが燐路からユウへと移る。

「俺のターン……」

デッキトップへと手を掛けたユウの呼吸がスツと鳴りを潜める。

刹那の間、最凶が振りまいた禍々しい冷気とは違う不思議な静寂が訪れた。

それはさながら、磨かれた鏡面のように清廉な、白く輝く炎。

「——ドロー!!」

引き抜いたカードは光の軌跡を描き、吸い込んだ空気は身体の芯に灯った種火を湧き上がらせる。

そして見事に、『彼女』の意思を継いだデッキは使_{ユウ}い手_ウに_ウ応えて見せた。

「……魔法カード発動、《光の援軍》」

引き当てた。

その事実には、燐路の顔が醜く歪む。

「デッキから3枚のカードを墓地へ送り……《ライトロード・マジシャン ライラ》を手札に加える」

「クツ……今更どんなカードを持って来ようが!! 無駄なんだよ!!」

墓地へ送られたカードは《ライトロード・アーチャー フェリス》《エクリプス・ワイバーン》、そして——橙と緑。2色に分かれた異色のモンスターカードが墓地へと落ちて行つた。

「なっ……!?! テメエ、何でそのカードを……!!」

それはユーギムトウに付き添っていた双子が所持していた筈の、辰の姿を象つた《アスタリクス》だった。

「ユウ様、それは……!?!」

「今のは、何で——」

狼狽を露にする燐路だったが、それは味方である筈のベル達も同じだ。

何故と問い掛ける間もなく、ユウはターンを続ける。

「……墓地へ送られたエクリプスの効果を発動、デッキから《裁きの龍》を除外する。そして手札からライラを召喚し、効果を発動。このカードを守備表示に変更し、お前の場に伏せられたカード1枚を破壊する」

《ライトロード・マジシャン ライラ》

☆4 / 光属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 1700 / DEF 200

白いローブを纏った女性が、魔法杖を構えて伏せカードへと狙いを定める。

燐路は苦々しく歯を噛み締めつつも、伏せカードを発動させた。

「クソッ、罨カード《奈落の落とし穴》発動!! ライラを破壊し除外する!!」

召喚反応型罨の天敵とも呼べる、モンスターの魔法・罨破壊効果。次元の虚穴に吸い込まれ消えた魔術師は、その身と引き換えに道を切り開いたのだ。

自らの後続く、偉大なる『勝利』の為に。

「……ならば俺は、手札から《アスタリクス*ヴァージュラ》を、ペンデュラム

ゾーンへセツテング」

天に浮かび上がるは光の柱。その中央に浮かび上がるのは虎を象りし琥珀の石像。

「……ヴァジュラのP効果発動。墓地の〈――**――〉アイオロス 吽風龍をペンデユラムゾーンへとセツテイニング」

翡翠の辰像が浮かび、光の柱が並び立つ。

指し示された振り幅は4。しかしユウの手札にあるのはたった1枚のカードだけ。

「……ハッ、ご大層に並べたのはいいが、その手札で何しようってんだよ!? エクシーズもシンクロも出来ねえ、たった1枚だけで何が!!」
同名のカードのみならどんなレベルでも複数体並べせることが出来る脅威の能力……あの試合を見ていた燐路は、その効果を知っていた『つもり』だった。

新ルールと共にリリースされたばかりのペンデュラムモンスターが何故「アスタリクス」として存在しているのか。それは彼の知った話では無かったが……少なくとも、試験段階らしい「クリフォート」を見るに、P召喚を駆使するにはデッキを構築できるだけの大量のPカードが必要となる筈。

大人顔負けの観察眼とデュエルセンスを持つ燐路はそう考えて、だからこそ彼は逆に胸を撫で下ろすばかりか、手土産が増えたと内心ではほくそ笑んでいた。

長も姉も、あの女にも。3枚ものカードを持ち帰って見せればきつと見返してやれる筈だと。少なくとも、その瞬間までは。

「……それは、早計だな」

「――何?」

「ヴァジュラ 虎の像には、隠された効果がある」

にやついていた燐路の口端が、僅かに引き攣る。

いつも聞き流していた長の忠告が、ふと頭を過ぎった。

――我ら決闘者にとって、『未知』とは最大の敵となる。

「……メインフェイズにP召喚を行う代わりに、手札・エクストラデッキから「アスタリクス」1体を選び、召喚条件を無視してP召喚扱

いで特殊召喚できる」

「なっ……!?!」

まさかと脳裏を過ぎったのは、唯一所持していたと思われていたヴアルキュリア。

しかしそれでは、攻撃力3100の鬼岩城を突破出来ない。ならば何故――。

そこまで考えて、次に思考の中を掠めたのは。効果にある『エクストラデツキから』という一文。

(まさか……ッ!?!)

ならば自然と思いが当たる。ユーギームトウから受け取ったのならば、ソレは存在する筈だ。

大会の優勝賞品として彼に与えられた、自分の知らない『未知』の存在が。

「……神世を翔けし駿馬よ、英魂をその背に蹄鉄を鳴らせ」

天に穿たれた円環から、燐路にとっては見慣れた緑輪が放たれ。直列したソレは、3本目の柱となって眩い光を放ち弾け飛んだ。

「――ペンデユラム召喚。《――*――
アーリオン 霊輝馬》」

白金の鎧を纏った駿馬が嘶く声は凜と響き渡り。

闇に包まれたこのフィールドの中ですら、夜空に浮かぶ月のように明るく自らの存在を照らし出した。

《――*―― 霊輝馬》

☆7 / 光属性 / 獣族・シンクロ・効果 / ATK 2500 / DEF 2000

「まさか、コイツが……!?!」

ユーギームトウが何故この男に《アスタリクス》を託したのか。そんな疑問はもう、どうでも良かった。

問題は今、この瞬間だ。

——我ら決闘者にとって、『未知』とは最大の敵となる。
相手の狙いが分からない。

対処の仕方が分からない。

次のターンが訪れるか、ワカラナイ。

——よって。《アスタリクス十二支柱》と事前の知識無しで刃を交えることを禁ずる。

目の前に展開された『未知』。

それは確かに、敗北を知らない少年にとって間違いなく脅威として立ちはだかつていた。

「アーリオンの効果を発動。墓地に存在するモンスター1体をゲームから除外し、そのモンスターと同じ名前と攻撃力・守備力を持つ「英魂トークン」1体を特殊召喚し、このカードを装備カード扱いとして装備する。俺が選択するのはエクリプス・ワイバーン」

除外された翼竜の魂が、気高き英魂となってフィールドへと舞い戻る。

ぼんやりとした輪郭の白騎士は、頭を垂れた駿馬に跨ると円錐の騎乗槍を天へ突き上げた。

《英魂トークン（エクリプス・ワイバーン）》

☆7／光属性／戦士族／ATK 1600／DEF 1000

「は、ハハハ!! 何だよ、びびらせやがって!! 散々威張り散らした癖に、能力はたかが雑魚モンスターをコピーしただけかよ!?!」

「……除外されたエクリプスの効果発動。先に自身の効果で除外していた《裁きの龍》を手札に加える」

「ほーん、で? 今更ヤツを呼んだところでどうしようも無いだろうが!!」

「墓地にはジェイン・エイリン・ウォルフ・フェリスの4体。条件を満たしたこのカードを特殊召喚する」

《ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍》

☆8／光属性／ドラゴン族・効果／ATK 3000／DEF 2600

翼を広げた白鱗の龍を見上げながらも、燐路は必死に自分に言い聞

かせていた。

ユウのライフは既に1000を切っている。

残された手札が《オネスト》でなければ……攻撃力3100の鬼岩城が存在する以上、このターンで突破するのは不可能だと。

その思考の中に、やはり『未知』の存在は欠けていて。

「……バトル。まずは裁きの龍でアルマデスに攻撃」

「いいぜ、せーぜー足掻いてみるよ!! 少しくらいは殴らせてやるからよ!!」

圧縮された光のブレスが光の盾を貫き、黒白の守護者を打ち砕く。破壊の余波がダメージとなって燐路に襲い掛かるが、そこは闇のゲームを操る者として『慣れ』があるのだろう。くるりとその小柄な体軀を翻して、ダメージを受け流していた。

【燐路】 LP4000↓3300

「ぐっ……!!? クソツ!!」

それでもライフを削られる痛みばかりは消せなかったようで、その表情に苦痛が浮かぶ。

「……続けて、英魂^{アーリ}トークン^{オン}でトリシューラを攻撃」

裁きの龍を召喚するためだけに召喚したモンスターなら、その低い攻撃力を晒すことなく守備表示で出していた筈だ。

しかしソレは、槍を構えた半透明の白騎士を乗せて猛進してくる。

「……霊輝馬の効果発動。装備モンスターが攻撃を行うダメージステップの間、その攻撃力を自身の攻撃力分プラスする」

「な!?!」

よって、その攻撃力は――。

《英魂トークン（エクリップス・ワイバーン）》

ATK 1600↓4100

噛み付こうとする三つ首を稲妻の如き速さですり抜けると、白騎士はその軌跡を描くように騎乗槍を走らせ、最後にその胸元へ深々と突き立てた。

刹那に弾ける光の奔流。

流石の燐路もこれには成す術も無く、壁まで吹き飛ばされる。

「つぐ、がああああ!?!」

【燐路】 LP3300↓1900

全身を走る苦痛に顔を歪めながら、燐路はそれでも己の勝利を疑わなかった。

今の攻撃で確信したからだ。手札は《オネスト》ではない、と。更にアーリオンの効果は『自身から攻撃する時』のみ、つまり返しのターンで戦闘破壊するのは容易だ。

ユウのモンスターは全て攻撃を終了した。場には何の罫カードも残されていない。これで――。

「……手札から速攻魔法《エネミーコントローラー》を発動。英魂トークンをリリースし、鬼岩城のコントロールを得る」

残されていた、もう1つの『未知』が開示される。

白騎士の姿が消え去ると共に、するりと伸びた接続端子が燐路に残された最後の砦を奪い去った。

「……ざげんな」

山のような巨体がゆつくりと振り返り、拳が振り上がる。

「……詰チエックメイトみだ。鬼岩城でダイレクトアタック」

敗北は死と同義である世界で育ち、常に敗者を見下してきた少年にとって『この瞬間』はどこか遠い世界の話で、自分とは無縁のモノだと思っていた。

それが今、圧倒的な現実しつじょうをもって自らに下されようとしている。

(クソツタレ――!!)

情けないことに、頭を過ぎったのは唯一の肉親である姉の顔。

燐路には、迫る拳がスローに見えた。眼前に迫った拳は最早止まったようにも感じられて――実際に止まっている事に気が付いたのは、最後まで頑なに目を見開いていたおかげだったのだろうか。

そのとき燐路の胸に湧き上がったのは安堵の溜め息ではなく、屈辱からなる怒りの炎だった。

「……おい、どういうつもりだ!?!」

「……サレンダーしろ。ライフが0になってどうなるかは、お前の方が良く知っている筈だろう」

ユウが静かに告げたのは、燐路が口にする筈だった台詞だった。

モンスターばかりか、自分の思い描いていた『未来』まで奪われた——タイムアップで強制的にターンが移行するまでに返答を返さなければきつと、攻撃が下されてしまうだろう。

敵の手に墮ちるくらいなら自決を選ぶ……などという選択は、まだ若く幼い燐路には思い浮かぶことすらなく。

「……クソが」

ユウの鋭い眼から逃れるように顔を伏せて——燐路は、叩き付けるようにしてデツキへ手を置いたのだった。

第37話 十二支柱

「……俺の勝ちだ」

未だ赤い鎖が2人を繋ぎ止めている中で、ユウは静かに少年へと告げた。

よろよろとした足取りで詰め寄ったユウは、鬼岩城が霞の中へと消えていくのに入れ替わりに燐路の前に立ち塞がった。

「……話を聞かせて貰おう。色々とな」

「チツ、分あったよ……」

唸り声を漏らし観念したように燐路が俯く。

そのままゆっくりと左腕のディスクを操作し、互いを縛っていた赤い鎖を断ち切り——顔を上げた少年は、犬歯を剥いて嗤っていた。

「……って、素直に答える訳ねーだろうが!!」

言うが早い。立ちこめていた闇が晴れ、元の白い病室へと戻ると同時——小猿の如き身のこなしで窓を突き破ると、外気の中へとその身を放り出した。

「なっ?!」

予想外の行動に、ベルは驚きの声を上げた。

この病室は6階、飛び降りて無事で済むような高さではない。慌てて窓へ駆け寄って下を覗いたベルが見たのは、既に夜風を受けて落下していく燐路の姿だった。

このままでは悲惨な光景が広がるのは時間の問題。しかし燐路が持つ不可思議な力が、そんな常識を覆した。

「受け止める、ラヴァル・キャノン!!」

左右2つのディスクを赤い鎖で繋ぎ、襲撃時と同じようにモンスターを実体化させ、地上に着地するまで僅か数秒。眩い光を纏って出現した灰色の巨体は、燐路を抱えたままアスファルトに着地した。

「嘘、あんな使い方……!!」

着地と同時に破壊のエフェクトが発生し、すぐに《ラヴァル・キャノン》は消滅してしまっただが——燐路が逃走するには十分すぎる時間だった。

「……逞しい奴だ」

アンリエールに支えられながら窓際までやってきたユウがおもむろに眼下を覗くと。

闇夜に浮かぶ、ギラギラと燃え盛る紅い瞳が突き刺さった。

「ツ……あの野郎、次はぜってえブツ潰す……!!」

燐路は低く獣の如き唸りを上げると、眼光の尾を引いて闇の中を駆け抜けていく。

「逃げられ、ちゃいましたね……」

「……いや」

小さな獣の影を追う、ポーカーフェイスの視線の先。そこには――

「……大丈夫だ」

疾駆する燐路の前に、すらりと伸びる2つの人影が立ちはだかった。

足を止め、眼前の『敵』を見据える燐路の眉間に皺が寄る。

「あ？ てめえらは確か――」

見覚えのあるその顔に燐路が記憶を遡る。

大会で潰したあの2人だ。

背の高い女――藍はディスクを構えて堂々と仁王立ちしているものの、クラドは1歩下がった位置で手刀を構えている。

「どけよ、また潰されてえのか？」

そう言う燐路の表情は凶悪なままだが、どういう訳かディスクを構えようとはしない。

逃走を優先したいのだろうと踏んだ藍の口元は、自然にクスリと歪んだ。

「……へえ、まだまだ元気が良いじゃない？ でもそうでなくちゃ困るわ。何せ私も、あの子たちを酷い目に遭わせたお礼に――」

手負いの燐路は表情にこそ出さないようにと懸命に堪えたつもりだったが――どこまでも沈んでいくような錯覚すら覚えるその青色に、思わず戦慄を感じていた。

「――アナタ達を絶対引っぱたいてやる、って思っていたから」

紅きルビーに、氷の如き青のサファイアが対峙する。

ハツタリが効かないどころか、冷気の湯気が立ちそうなその雰囲気はどうにも厄介だ。まともにやり合っているのは恐らく身が持たないだろう。

ならばと、燐路が結論を導き出すのは早かった。

「……へっ、生憎と俺にそんなシユミはねーんだよ!!」

四足で駆けるが如き素早さでばつと反転する燐路。その眼は既に闇の向こうを見据えていたが……そんな視界の端に映ったのは、ふわりと翻る『何か』だった。

違和感を覚えるその前に、燐路の体は冷たいアスファルトの上に叩き付けられていた。

「がッ!?!」

硬い地面の感触に混じって、耐え難い窮屈な感覚が押し寄せてくる。

気付いたときには、青いドレスの裾からすらりと伸びた白い脚が身体を自由を絡め取っていた。

「ぐっ、テメエッ!?!」

「クスクス、子供が大人に勝てる訳がないでしょう?」

うつ伏せの状態で腕を捻られ、拘束された燐路が吼える。

デュエルという年齢の境目を曖昧にしていたソレが取り払われた今、確かに大人と子供という力関係は顕著に現れるのかもしれない。

しかしクラドが傍から見ていたその光景は、とてもそんな言葉で片付けられるような次元の話では無かった。遅れてやってきたふわりとした風圧が、クラドの冷や汗を拭う。

やはり『本業決闘者』という人間は、何かが違うのか……?

(い、今……何が起きたんだ……?)

「さ、観念しなさい?」

につこりと、藍が妖艶な微笑を浮かべて見せる。

やっぱりこの人を敵には回したく無いな……改めてそう認識しつつ、クラドはそそくさと燐路を取り押さえに駆け寄ったのだった。

「……ケツ」

黒服の男達に取り囲まれ、ぶすつと頬を膨らませた燐路の腕と足には——当然ながらデイスクもカードも取り上げた上で、鈍く黒光りする枷がはめられていた。不可思議な紅い鎖ではなく、しっかりとした実体を持つ鉄の鎖がジャラジャラと音を立てている。

場所はといえば、セキュリテイの交番でもなければ牢獄の中でもない。ラムジョレーン家の力で病院関係者すら立ち入ることが出来なくなつた、アンリエール達の病室だつた。

両足も縛られている為、丁度体育座りの様な格好でむくれている燐路に、藍がゆつたりと屈んで覗き込んだ。

「さて、色々と答えて貰いましようか？」

こんな無茶を通したのにも理由はある。仮に燐路の仲間が襲撃を再開するとすれば、狙いはアスタリクス所持者……と思われているベルと拘束された燐路の救出だろう。守りを固める意味でも、標的を1つの場所に固めておいて方が良いという判断だつた。

(それにしても……随分肝の据わつた子ね)

と、藍は思った。燐路はこんな状況でも、焦りも怯えも見せず不機嫌そうに顔をしかめているだけなのだ。仮にも彼は決闘組デュエルファイター相手に喧嘩を売つた訳で、頭を銃弾で打ち抜かれようがそのまま海の底へ投げ捨てられようが、どんな目に遭つてもおかしくはないのだが……。

(『命のやり取り』だけは勘弁して欲しいのだけど……ね)

自分達に危害を加えてきた『敵』とも呼べる存在とはいえ、年端もいかない少年が命の危険に晒されているとなればあまり良い気持ちではない訳で。

(まあ、でも今は……)

お世辞にも白とは言えないが、今は彼らの手を借りるしかない。既にこの街でお尋ね者である燐路から、セキュリテイに連行されて手が届かなくなる前に聞き出さなければならぬことが山ほどあるからだ。結局その後、面子を汚され怒る『彼ら』をどう説得するか骨が折

れそうではあるのだが……。

「それじゃ答えて頂戴、まずは貴方達の目的は何？　そうまでして《アスタリクス》を集めるのは何故？」

「ずい、と顔を寄せて詰め寄る藍に、燐路は当然ながらそっぽを向いてだんまりを決め込んでいる。こんな問答で彼の口は割れ無いことぐらい、藍も承知の上だ。」

「答えるつもりは無いのね？」

「当たり前えだろ」

瞬間。燐路の後ろに立つ黒服が、何やらカチリと小さな金属音を立てた。

直接的な『武力』とは縁の無いクラドとベルは、その『音』に思わず顔を青くした。

「ひっ……」

しかし、当の燐路は背中に突きつけられたソレに心当たりが付いてようやく、「仕方ねえな」と言わんばかりの表情でぽつりぽつりと語り始めた。

「……『儀』を遂行する為さ」

「儀……？　それは一体何の事なの？」

「知るかよ、テメエで調べろカス」

ガチリ。

その無機質で不穏な『音』が響いた瞬間にベルは思わず目を覆ってしまったが、燐路はどこか鬱陶しそうに溜め息を付くだけだった。

「わーった、わかったよ!!　……ったく、どうせ言っても信じねえだろうが？」

「それはこちらが判断することよ」

藍の言葉を聞くと、燐路はにやりと意地の悪い笑みを浮かべて。

それでもその得意げな表情に偽りの色は無く、言った。

「デュエルモンスターズを『無かったこと』にするんだよ。『十二支柱』アスタリクスの力だな」

それはあまりに突拍子も無く、その場に居る殆どにはそれが1人の少年が語る歳相応の非現実的な夢物語に聞こえた。

只1人、そんな『非現実』に巻き込まれた張本人^{ユウ}を除いては。

「十二支柱……？」

「この際サービスで教えてやるよ、アスタリクスは全部で12枚だ。その12枚を揃えて『儀』を行えば、デュエルモンスターズは歴史から消滅する……ま、これは『ジジイ達』の受け売りだからな。『儀』の内容については詳しくは知らねえよ」

「……そんなことをして、一体何を？」

「デュエルモンスターズが無かつたら、世界はきつと『武力』を掲げて戦争を続けてただろ？ 『武力』を用いたまま戦争が続いていたなら、きつと勝者は文明^{ユートピア}の白じゃなく幻想^{おれ}の紅だった……それが『ジジイ達』の考えさ。だから無くしちまうのさ、歴史からデュエルモンスターズの存在をな」

燐路の語った話には、藍もいくつか心当たりがあった。

紅の一部ではデュエルモンスターズの撤廃を掲げ、旧時代の『武力戦争』を良しとする過激派が存在する、という噂だ。皮肉なことに、彼らは自分達の意見を主張する為に身につけたデュエルの実力は高いらしいのだが……。

彼らの背景は、デュエルモンスターズが代理戦争として採用される以前に遡る。

当時、白と紅の地は互いに拮抗した実力を持つ強者として在った。しかし代理戦争が導入されて以降は、世界における紅の地位は下降の一途を辿っていったのだ。

カード開発やルールの裁定……様々な分野を各大陸で分散させることで表には公平を保っていた代理戦争ではあったが、やはりデュエルシステムの最先端を担う^{ナイトコーポレーション}K Cを懐に抱えた白の優位は戦争開幕当初から囁かれていた。

結果として——代理戦争前から既に『蚊帳の外』であった

未開拓の橙を除いて——紅は散々な結果を残して敗北、その後の推移は現在の姿を見れば明らかだ。

近代化の一途を辿る白に対し、文明の発達どころか未だに戦争の傷を埋めることすらままならず、内国での紛争が後を絶たない。

そういった事実を見ても、燐路の言葉には妙な現実味があった。しかし——。

「幾らなんでも、カードを集めて過去を変えるだなんて……」

「馬鹿だと思うならそれでもいいぜ？ 俺らはただ、潰して奪うだけさ」

ベルの呟きは、恐らくこの場における全員の総意であったが……燐路の声色は茶化しつつも至って真剣だった。

「……1つ聞かせて」

歴史の改竄……そんなことが可能かどうかはこの際置いておくとして。

こんな年端もいかない少年達を自分達の狂った思想で統べ、馬鹿げた目的の為に他者を傷つける『ジジイ達』と呼ばれた者の存在に、藍はふつつつと怒りを感じていた。

「貴方はその話を、本気で信じているの？」

それは単純な興味だったのか、それともこの少年の中に『救い』を見出したかったのか。

真摯に問い掛けた藍に対し、燐路はつまらなそうに目を細めて答えた。

「さあな。嘘でも本当でも、どっちだっていいさ。奴らの下で戦っていりや何不自由なく生きられるんだ、その結果がどうなるうが知ったことかよ」

そこにあつたのは果たして、藍が望んでいた『救い』だったのだろうか。

否、彼は幼いながらもしっかりと『真実』を見極め、自分の為に動いていたのだ。

「……そう、分かったわ」

「あーくそ、ずっと地べたに座らせられてるからケツが痛くなってき

た……こんなコトなら無理矢理にでも『9番』を持ってくるんだったぜ……!!」

「……そういえば、あなたの『アスタリクス』はどうしたの？」

藍が没収した彼の「ラヴアル」エクストラデッキには、あの強力な猿のアスタリクスは入っていないかった。既に15枚のカードが投入されていたし、身体を調べてもどこかに隠していた訳でも無かった。

これから『アスタリクス』と戦おうというのに、わざわざキーカードを抜いておくというのも彼の性格上考え難い。

「……没収されたんだよ、没収。だから俺がこーなったのもアイツらのせいって訳だ」

不機嫌そうに眉を寄せて、燐路はぶつくさと目を横に反らした。

仲間に対する僅かな嫌悪感。それを見逃さず、藍は疑問を畳み掛ける。

「……『アスタリクス』って一体何なの？ 何故わざわざ、奪う為だけに『闇のゲーム』なんて仕掛けてくる必要があるの？ そもそも闇のゲームはどうやって……」

「あーはいはい、ちよつと待ってって」

藍が訝しげに眉を寄せると、腕が自由に使えるなら後ろ手に頭を掻く様な表情で話を続けた。

「俺が知ってるのは、『十二支柱』はデュエルで勝ち取らなければ『儀』を行う為に意味を成さない、って話だけだ。普段のデュエルで使う分には問題ないんだが、『十二支柱』は基本巫女サマのモンってコトになってる。俺らが回収したとしても、最終的には巫女サマにわざと負けて差し出すように言われたぜ。ただ、そこにどんな意味があるのかは知らねーよ。本当だ」

わざと負ける、というのが気に入らないのだろう。

僅かに顔をしかめた燐路だったが、再び表情を戻すと話を続けた。

「んで、『闇のゲーム』についてだが……正直、コレは俺が物心付いたときから当たり前に使ってモンだしな。何でとかどうしてとか、正直こっちが聞きてえよ」

「え……？」

デュエルシステムに干渉する、という点から特殊な科学技術の類だと思っただけに、藍は素っ頓狂な声を出してしまった。他のメンバーも同じく、皆訝しげな表情を浮かべている。

「俺の故郷でも、使える奴と使えない奴が居るんだぜ。強制的にデュエルに持ち込めるってのが便利だから、使える奴は『ジジイ達』に見込まれて決闘者になることが多いけど……知ってるコトはその位だな。ま、頭の良い学者先生なら何か知ってんじゃねーの？」

もしかしたら、自分達がかかわれているだけなのかも知れない。いや、普通に考えればむしろその可能性の方が高いだろう。

しかし、その真つ直ぐに向けられた紅い瞳には嘘偽りが感じられず……藍はひとまず別の疑問を振ることにした。

「……なら次に、『巫女様』は何故貴方達に協力を？」

「おいおい、まだ答えなきやいけないのかよ？ いい加減に……」

口答えをするなどばかりに、背中に押し当てられたソレが更に押し付けられる。

「あー、はいはい。吐きますよ。あの巫女サマは『呪い』の成功者なんだと。それ以上は知らねーよ、あの馬鹿女が何で協力してるか何て知りたくもねえ。俺はそういうマツリゴトには関わってねーんだ」

燐路がそう言い切ったと同時に、ユウが痺れを切らしたようにずいと前に出た。

「……なら、直接本人に問い質すだけだ。ヒヨリはどこにいる？」

ユウの言葉に、燐路はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべたかと思うと、小馬鹿にしたように鼻を鳴らして答えた。

「決まってるんだろ？ 次の『十二支柱』を回収しに行ったよ」

「……それはどこだ」

「はっ、言えるわけねーだろ？」

かちやり、と突きつけられた背中のソレにも物怖じせず、燐路はわざとらしく大声を上げた。

「おーおーいいのかよ俺を殺しちゃって？ そしたら巫女サマの居場所は何の中だぜ？ 死人に口無しって言うだろ？」

成程、と藍は思った。

これがあつたから、燐路は命の危険にありながらもそれまで平然としていられたのだ。

ヒヨリ達の居場所という情報を盾に、燐路はニヤニヤと煽り立てる。

「お？ どうしたどうした？ 撃てるモンなら撃ってみろよ、巫女サマも『4番』も、二度と戻ってこないかもしれないねーけどなあ？」

「ッ、下衆が調子に……!!」

前に出ようといきり立つたアンリエールを片手で抑止したのは、藍だった。

「……成程。どうやらもう、『私たちの知っていること以上の話は出てきそうに無い』わね？」

そう言つてベル達に振り向いた藍の顔は、燐路からは伺えなかつた。

が……ベル達にはしつかりと見て取れた。片目を瞑つて悪戯に微笑むその表情は明らかに何か企んでいる。

「もう良いでしょう。『早速出発しましょうか、私の故郷へ』ね？」

無論、それは他のメンバーにとって寝耳に水な話であつたが——ユウとクラウドに関しては彼女の表情から何かを察して、無言で頷いて見せた。

その一方でベルとアンリエールはきよとんと首を傾げて「え？」と聞き返したが、それがむしろ妙な現実味を持たせていく。

「あの、藍さんの故郷つて……忘却の青アトラランダへ行くんですか？」

「ええ。そういえば『まだ話して無かつた』わね？ どうやら彼のお仲間さん達も目的は同じのようだし。もう彼に用は無いわ」

勿論、藍には青で発見されたカードがアスタリクスである確証は無いし、仮にそうだったとしてもヒヨリ達の目的が別の場所という可能性もあつた。

だからこそ、藍は餌うそを撒いて釣り糸を垂らしたのだ。小生意気な獲物が目の色を変えて喰らい付く、その時を待つて。

「……待てよ」

そして垂らした糸は——見事にぴくりと水面に波紋を立てた。
「何か？」

疑念が確信に、嘘が真実に変わる。

にんまりと笑みを浮かべた藍は、髪を揺らしてゆっくりと振り返った。

「お前ら……どこまで掴んでやがる？」

「さあ？ 貴方に教える義理は無いわ」

威圧的な態度こそ崩さなかったものの、燐路のそれは焦りの裏返しだ。

交渉において大事なものは、常に相手より上の立場に立つこと。半ば情報を人質に取って優位にあった先程までの状況から一転、再び交渉という場に着く為に『手札』を一枚追加で場に出さなければならなくなった。これで互いの立場はほぼイーブン。

「……青に行くなら、俺も連れてけ」

「何故？ それが私たちにメリットはあるの？」

「とぼけんな。どうせロクに『十二支柱』の在り処も知らねえんだろ？」

確かにその通りであったが——次にヒヨリ達が向かう場所が青であるという『確認』が取れた今、そこはさしたる問題ではない。

「あつちに巡らせてるパイプは腐る程あるわ。私としては、別に在り処を貴方から聞き出さなくても良いし」

「ならこうだ、俺の身柄を交渉材料に使え。その方がお前らとしても楽に事が運ぶんじゃないのか？」

「……あら、随分と必死ね？」

「当たり前前えだ。俺はこんな所でくたばる訳にはいかねーんだよ」

見苦しい交渉だというのは燐路も分かっていたが、このまま決闘組やセキユリテイに身柄を拘束される訳には行かない。

仲間と合流する。隙を見つけて逃げ出す。その為にはどうにか理由をつけて彼らと行動を共にするしかないのだ。

「……彼女達にとって、そこまで貴方の身柄に価値があるの？」

「疑うなら良いこと教えてやるよ。そのオツパイちゃんを襲ったの

は俺の姉貴さ。他の連中はともかく、姉貴なら血相変えて取り返そうとするだろうぜ。俺でダメならそこで姉貴を捕まえて交渉すりゃいい。盗られた『4番』を取り返すにしても、巫女サマに何か用があるにしてもだ。悪い話じゃねえだろ？」

身の安全と引き換えに秤に載せられたのは、最終目標であるヒヨリ達に対しての交渉カードだった。自分の身柄と、果ては肉親までも売り払うその姿勢に驚きつつも。

「……そう。そういうことなら、少し相談する価値はありそうね？」
確かに条件としては悪くない、と考えていた。

* * *

結果として。燐路は身柄を拘束した上で青の地へと連れて行くことになった。

アスタリスクスの在り処については、既に藍が現地の知り合いに調査を依頼しているらしく、到着と同時にスムーズに動ける段取りがつき始めている。

長かった夜も明け、ベルとアンリエールの退院も間近。そんな折――

『やあ、お久し振りですね』

朝の街を歩くユウは、Dパッドに表示されたブロンド髪の男――ユーギの顔に嫌気が差して、ふうと溜め息をついた。

「……何か用か？」

『おや、情報を寄越せと言って来たのは貴方の方では無いですか？という訳で早速ですが情報をお渡ししましょう。白面の彼女たちが次に向かう目的地は、どうやら「同じ」ようです』

「……随分遅い仕事だな。その情報ならもう間に合っている」

むしろ気になるのは、ユーギがこちらの何処までをしっているのか、だ。

『おや、そうでしたか。やはり美しい女性はこなす仕事もお見事だ』
にこにこ笑顔を見せるユーギ。

そんな表情はそのままに、雰囲気だけがふっと引き締まる。

『——では、よろしくお願いしますよっ。』

「ああ」

送られてきた『チケット』を別の画面で確認しながら、こつこつと足早に歩を進める。

そこに記されていたのはユウの名前と、頭上を飛んでいく鉄の翼に記されたものと同じロゴマーク。空の船が彼を運ぶ先は——忘却の青だった。

「……安心しろ。期待には応えるさ」

ぷつん、と白いDパッドが沈黙する。

飛んでいく巨影と入れ違うように、ユウの足はそこへ向かっていった。

目が覚めたベル達が『そのメッセージ』を受け取ったときには、既にユウの姿は無く。

街にはただ、地鳴りのような轟音が残響しているだけだった。

第38話 黒兎、吼える

朝方、ユウから届いたメツセージには、次のようなことが書かれていた。

今まで自分に付き合ってくれたことへの感謝と、相談も無く突然行動したことに對しての謝罪。

そしてこれ以上自分に関わることは危険であると続けて、白面達の狙いである『アスタリクス』は全て自分が預かること。

最後に、預かったヴァルクリアと奪われたフロントムを返しに必ず戻ると約束して、全て事が終わるまで旅団を離反することを記し、締めくくられていた。

ユウからのメツセージを見たクラドと藍は真つ先に空港へ向かい、街中を探し回ったのだが……結局、ユウの姿を見つけることは出来なかった。

時刻は既に昼を過ぎ、強い日差しが差し込む病室には消沈とした雰囲気立ち込めている。

「ユウさん、どうして……」

ベルは、まだ使い慣れない橙のDパッドの画面をなぞりながら呟いた。

彼はどうやって忘却の青へ渡ったのか。仮に飛行機を使ったにせよ、どうやってこのタイミングで朝一番に発つ便のチケットを入手出来たのか……ユーギムトウの手引きを知らないベル達に疑問は尽きなかったが、ともかく現時点で分かっているのはユウが『アスタリクス』4枚を手に旅団を離脱したということだけだ。

「……まさか、1人で行ってしまうなんてね」

「くそ、あのデュエルマシーンは何考えてんだ……!!」

思わず悪態をついたクラドだが、誰も言葉を返そうとはしない。

何とも言えない重苦しい空気だけが、しんと肩に押し掛かってくるだけだ。

「……………」

今日が退院日であるにも関わらず、帰り支度すらままならなかった

ベルだが、今はようやくいつものメイド服に身を包んでいる。

きつと何かの間違いだろうと思ひ込み、Dパッドを何度も眺めては俯いていたが、その文面はいつまで経っても変わらない。

そんな湿った空気を裂いたのは、身じろぎすらままならない燐路の気だるそうな声だった。

「ケツ。で、どうすんだよ？ このままじゃあの野郎、向こうに着いた途端にリンチ確定じゃねーのか？」

「何？」

「あのライロ野郎、そこそこ実力はあるみてえだけどよおー……流石に多対一じゃ厳しいだろ？ あつちに居るのは巫女サマ達だけじゃねーんだぜ？」

間延びした声で、至ってつまらなそうな仕草を見せる——その反面。

（オイオイ冗談じゃねえぞ……さつさと青に向かってくれねえと俺が困るんだよ!!）

自身に『交渉材料』という価値が消え、かつ長達と合流を果たす機会すら無くなりそうなこの状況に焦りを感じていた。

（クソ、あのライロ野郎!! また余計な真似しやがって……!!）

憎き男の顔面を殴りつけたくなる衝動を抑えながら、燐路は務めて不敵な笑みを浮かべ続けた。

あれだけの啖呵を切って、勝手に飛び出した燐路の帰りを待つ程——勿論、姉の煽りを含めて——彼らが温情ある人間でないことはよく分かってる。きつと今頃、『裏ルート』を使って目的地へと向かっている頃だろう。

空路を使った『表ルート』で向かうならば、長達が青で身動きが取り辛くなることを加味しても……出発まであまり時間を掛けている訳にはいかないのだ。

今とはとにかく、何としてでも彼らを炊きつけてユウの後を追わせる他無い。

「おい、そりやどういうことだよ……？」

幸いにも、燐路の言葉にクラウドが食いついた。

「向こうには既に、俺らの同胞がわんさかいるってコトだよ？ 仮に巫女サマをどうにか出来たとしても、奴一人で無事に帰ってこれるとは思えねーけどなあ？」

「そんな話、いちいち真に受けてられるか!! 仲間と合流したいからって出任せ言いやがって——」

「待って、その話に関してだけは丸っきりの出任せとは言えないかも……」

クラドの声を遮った藍の眉間には、難しそうに皺が寄っていた。

「蓮^レが……【N—E—V—E—S】が話していたでしょう？ 紅の人間が青でカードを探しているって。『まだ』あくまで噂らしいけど、アスタリスクスが発見されたと分かった以上、どれだけの人数が青に潜り込んでいるか分からないわ。彼らがどれだけの規模で動いているのかも……ね」

組織の規模について燐路から聞き出すのは簡単だが、この状況では誇張して話されても確認のしようが無い。数刻前とは状況が一変してしまっているのだ。

燐路の狙いは明白、しかし目的地については燐路に頼らずとも問題は無い。このまま彼を置いて出発するという考えも過ぎだったが……もしものときの『交渉手段』は抱えておいて間違いは無い。最悪、ユウの身柄と交換することになるかもしれないのだ。

「……何が何でも、青に行きたいみたいね？」

「話が早くて助かるぜ記者のネーチャン？ ま、そういうこつた。ライロ野郎が心配ならさっさと追いかけな？ 水先案内人ならこの俺がやってやるからよお？」

ケラケラと笑いながら、ちらりと様子を伺う。

ベルとアンリエールは、表情を青くして固まっている。それこそ一秒後には外に飛び出して行ってしまいそうな程だ。歳が近いだけに、その結果は燐路が狙った通りだった。

「っ………お願いします、追いましょ!! じゃないとユウさんがっ!!」

必死にそう訴えるベルの反応に内心でほくそ笑んだ燐路だったが、そんな彼の思惑など絡まなくとも……恐らくベルの気持ちは変わら

なかった。

「メイドちゃん……」

一方の大人2人……クラドと藍は、事を冷静に思案しようとする一方で、ユウのことは勿論今にも泣き出しそうなベル達を気に掛けている様子だ。

(ま、注いだ油は上々ってトコか……)

何かある、とは分かっているけど、これで後を追わざるを得ないだろう。

そんな燐路の確信を裏付けるかのように、藍とクラドがこくりと頷いた。

「大丈夫、分かっているわ。当初の予定通り……よりは少し前倒しで出発しましょう。私の方で準備しておくことは、もう大体済んでいるから」

「俺も同じくだ。追いついたら、あのぶつきらぼうに一発かましてやる」

「藍さん……クラドさん……!!」

頼もしい2人の言葉にぱつと顔を明るくするベル。

その一方で、以前であれば有無も言わず噛み付いてでもついてきただろう少女——アンリエールは表情を曇らせて俯いていた。

「——私は、」

飛行機雲のように一直線だった彼女の心が、今は振り子のように弧を描いて揺れている。

真つ先に飛び出すべき言葉が、出ない。

「……アンリさん、あの」

そんな彼女の様子をベルが察する前に、病室のドアが無造作に開かれた。

病院関係者すら黒服たちのチェックを済ませなければ入室できなかった、その硬いドアを平然とくぐって現れたのは。

「おや……お話の最中でしたか、誠に申し訳ない」

ルージユの長髪をさらりと流した、見慣れない長身の男だった。歳は20前半くらいだろうか。顔の輪郭は女性と見間違えう綺麗な線を描き、血のように赤い瞳を長い睫毛が覆っている。

陽の光すら吸い込む漆黒のスーツに一切の乱れは無く、ぴつしりと糊のきいた青白いシャツの中に緋色のネクタイが浮かんでいる。異様に白い肌も相まって、男の出で立ちは否が応にも『吸血鬼』を髣髴とさせた。

「あの、どちらさままで……？」

不審に思った藍がそう尋ねると、一閃。

鋭く尖った殺気のような『何か』が、ピリピリとその場の全員を射抜いた。

「——失礼。私はラムジョレーン現当主を勤めさせて頂いております……ソルシエール・ラムジョレーンと申します」

すつと音も無く一礼して、男——ソルシエールが上目遣いに顔を上げる。

低く男性的でいて、それで腹の底に響き渡るような不思議な声……物腰低く丁寧なその口調の中に、触れれば刺さり、撫でれば切れてしまうような冷たい何かがある。

肩書きだけではない、決闘組デュエリマフィアという裏の世界を生きるために必要な、得てして表の人間には理解し得ないモノが確かに在った。

ラムジョレーンの現当主にして、幽霊姫が最も恐れる実兄。

怒ったアンリエールの迫力など比にならない『本物』のソレに、一同が思わず息を呑んだ。

「以後、お見知り置きを」

再び、ソルシエールが優雅な仕草をもって一礼する。

この世の女性であれば、その殆どが胸を打たれ、恋に落ちることだろう。魔性という言葉がこれほどまでに似合う男もそうそう居ない筈だ。

実際、ベルと藍も『こんな状況』でなければ危なかったかもしれない。い。

「……どうやら連絡が行き届いていなかったようですね。本日はそこ

にいます愚妹を引き取りに伺いました。皆様のお話は伺っております、大変ご迷惑をお掛けしたようで……」

「ちらり、と責める様に黒服達へと送ったのも一瞬。

先程よりも深々と一礼したソルシエールは、今度は頭を上げることがはなかつた。

「い、いや……俺らも色々と助けて頂きましたし、はは……」

たじろぎつつも何とかそう返したクラドの言葉を受けたからか、ソルシエールは静かに頭を上げた。

「それは恐縮でございます。では、私達はこれにて……病院側への手続き等は引き続きこちらの者が行いますので、ご安心下さいませ」

それまで向けられもなかったソルシエールの視線が、俯き加減でたじろいでいるアンリエールへと突き刺さる。その冷たさは、黒服達に向けたものよりも粗雑な印象を受けた。さも「何をぼさつとしている？」と言わんばかりの表情を向ける兄と、俯き加減で震える妹。不穏な空気に気付いた藍は、たまらず尋ねた。

「……あの、アンリちゃ、アンリエールさんをお連れになるとは？」

「愚妹の我が俣にこれ以上、皆様を付き合わせる訳にはいきません」

「で、ですけど——」

「これは我がファミリーの問題です。恩義ある貴方達といえども、口出しはしないで頂きたい」

血の瞳はきつぱりと、ただそれだけを告げた。

決定を下した兄はしかし、無理矢理に妹の手を引こうともしなかつた。

早くしろと急かす言葉を掛ける様子も無い。ただその険しい視線を、じつと向けるだけ。

「……あのー」

キツと口を結んで、ベルはアンリエールの気持ちを伝えようと一歩踏み出したが……その勇気は、すぐ傍から伸びた手で遮られた。

「——お兄様。私、まだ帰る訳には参りませんの」

毅然としたその口調が、僅かに震えている。

それでも、ルージユの瞳に小さく炎が灯ったように見えて、ベルは

嬉しくなった。

「アンリさん……！」

兄への恐怖と、ユウへの想い。

ガラガラと崩れ去ったプライドの瓦礫の中で立ち上がり、ようやく振り絞ったアンリエールの言葉はしかし、短く鋭利な言葉の牙に噛み砕かれた。

「駄目だ」

たった一言、それだけで。

灯りかけていた勇気の火が、ふつと吹き消されそうになる。

それでもアンリエールはぐつと腹に力を込めて、懸命に踏み止まる。

「……お願い致します!! 私は、あの方に恩を……!!」

かつて旅をする為に反抗出来たのは、顔の見えない電話越しだったからだ。

連れ戻しに来たとしても、それは多忙の兄に代わって派遣される黒服達。彼らが相手なら臆することも無い。

「駄目だ」

その目を、その言葉を。

聞くことも、見ることも無いから、大丈夫だったのだ。

一方的に告げられる否定の言葉。有無も言わさぬ眼光の圧力。

生身の兄から放たれるソレが、こんなにも重いとは。

「お願い致します、どうか……」

「いい加減にしろ」

悲鳴のようなアンリエールの抗議にも、兄は眉一つ動かすことは無かった。

何故という言葉も、反論すら無い。帰ってくるのはただ『決定』の言葉のみ。

自分を影だと罵りながらも、心のどこかで否定していたのだろう。兄は自分を『影』などとは見ていないと。きっと自分を分かってくれると。

それが、そもそも間違いだった。

妹としてではなく、『影』としての絶対的な主従関係。

故に互いの意思が挟まることなど……話し合う余地など、最初から無かったのだ。

「……分かりましたわ」

現実を再確認したアンリエールは、ぷつぷつりと、諦めた。

窮鼠は猫を噛むという。ならば黒の脱兎とて、追い詰められれば同じこと。

心の中で何かがくるんと反転してしまえば、あとは不思議と気が軽くなった。

「アンリ、さん？」

様子がおかしい。思わずアンリエールの両肩を掴んだベルだったが……そんなベルの手はすつと振り払われて、コツンと白く細い足が一步前に出た。

「……私とて貴きラムジョレーンの女。もはやこれ以上、言葉を交わすのは不躰ですわね」

ベルを押しつけ、ソルシエールの前に立った彼女の腕には——十字の金装飾が施された、漆黒のDパッドが在った。

「決闘者ならばカードで語れ。そうですね、お兄様？」

「くどい。簡潔に話せ」

敗北の恐怖も、兄へのコンプレックスも。今なら思い出すだけで笑いがこみ上げてくる。

だからもう、何の躊躇いも無い。

言葉の引き金を、引ける。

「……私と、決闘を」

耳をピンと立て、全身の毛を奮い立てた黒兎は——自らを作る『形』あにを喰らってやると、真昼の月に向かって吼えた。

流石に病室では狭いということで、病院近くのバスケットコートに場所を変えてラムジヨレーンの兄妹が向かい合っている。

突然黒服の男達に締め出されたバスケット少年達は、始めこそ不満そうにコートの外から眺めていたが……対峙する2人が決闘役者と知らされてからは「試合がタダ見出来るなんてラッキー」とばかりに、口笛を鳴らしてはしやぎ始めた。

「アンリさん……あの、本当に大丈夫なんですか？」

入院で鈍った身体を解すアンリエールに、ベルが不安そうな声を掛ける。

しかし当の本人はケロリと振り向いて言った。

「ふっ、ご安心なさい。貴女に心配される私など既に息絶えましたわ」何か吹っ切れたのか、精神面はすっかり元の調子に戻ったようだが……病室でリリンと戦ったときに見たあの光景が嫌でも頭を過ぎる。空っぽの幽霊屋敷。調子を取り戻した幽霊姫に、悪戯好き達は応えてくれるだろうか。

「それより……貴女達はユウ様を追わなくて大丈夫ですか？ 私でしたら後からでも追いつけますし、付き合うことはありませんのよ？」少し照れ臭そうに口を尖らせるアンリエールに、クラドは意地悪な笑みを浮かべて答えた。

「なーに言ってるんだお嬢？ こんなに面白そうな決闘、見ずに飛べるかっての」

そんなクラドの言葉に笑顔で頷くベルと藍。

朱に染まった頬を見せまいと、ぷいっと明後日の方向へ顔を向かせつつ、アンリエールは長い溜め息をついた。

「まあ、何とも浅ましい方々で……いいですわ、そこまで言うなら見せて差し上げます」

金十字のディスクが起動する。

真昼間だというのに、その黄金色の煌きは夜空に浮かぶ月を彷彿とさせた。

「——この幽霊姫が『屍皇』に勝利する、その瞬間を」

不敵に微笑むアンリエールがコートの中央へ向かい、少しだけその

背中が小さくなつてから、ベルがポツリと呟いた。

「でもやっぱり……とんでもなく強いんですね、お兄さんは」

屍皇。それは言うまでも無く、現役時代のソルシエールに与えられていた二つ名である。

プロ世界で『皇子』ではなく『皇』と畏怖された彼と、『女王』ではなく『姫』と持て囃されるアンリエールとの違いを鑑みれば、その実力差は明らかだ。

啖呵を切つて出陣したアンリエールだったが、それは彼女が『演じている』普段の姿に戻つただけだ。あれほど遠い存在だと語つた相手を倒す活路など、そう易々と見出せる訳が無い。

「まあ……なあ。少なくともお嬢が勝つた事ねえんだろ？ 俺は屍皇に関しちやよく知らねえんだけど……」

「何だあ？ お前ら『屍皇』のことも知らねえのか？」

クラドの言葉に、ケラケラと燐路が割つて入った。

手足を鎖で縛られ、首輪までされて。そこから伸びた鎖はクラドの手にあり、2人の体格差からどことなく猿回しのように見える。

「ああ？ そういうお前は知つてんのかよ？」

露骨に顔をしかめて、クラドが聞き返した。

「まあなー、元々はその屍皇から『4番』を奪う予定もあつたんだ。情報戦は基本だろ？ ま、知らないなら知らないで楽しみに見てろよ。面白いモンが見れるだろうぜ」

「つたく……こんな状態になつてまで口の減らないガキだぜ……」

「……………」

ますます不安そうな色を強めるベルに、藍は肩に手を掛けて優しく声を掛けた。

「大丈夫よ、アンリちゃんを信じましょう？」

「こくん、と頷いて見せる。」

「……………はい。でも——」

デュエルの行方は確かに不安だ。しかしベルはそれ以上に、『血の繋がった2人が刃を合わせる』この状況にデジャヴを感じて、ただ静かに手を合わせた。

「……届いて、欲しいですね」

幸いにも、自分の父は分かってくれた。

それはデュエルを通して、多少強引でも気持ちが届いたからだ。

だからベルは願った。アンリエールの気持ちも、屍皇という高い壁を越えて届いて欲しい、と。

『——「決闘申請」、確認。^{AR}仮想戦場、^{リンク}展開完了』

ほぼ同型の2台がリンクし、寂れたバスケットコートが月浮かぶ夜の草原へと変わっていく。

いつの間呼び寄せたのか——数を増したバスケット少年達も『観客』として認識され、共に仮想戦場の中へと招待された。

『^{ジャッジアプリ}審判員機構、起動』

月をバックに現れたのは、白い半袖のTシャツに青のジーンズという出で立ちのコーパルだった。

『んなトコにいると蹴つ飛ばすぞお!! 問答無用のビーム系美少女審判員コーパルちゃん只今参上っ!!』

大きな旅行鞆を振り回しながらはしゃぐ彼女は、いつにも増してテンションが高い。

『いや、何かこう月に代わってオシオキしたくなりそうな良い^{ステージ}戦場ですね!! 思わず私もやぐらぐれぐたあ』

「審判員、ルールの設定を」

『あつ、はいはい。本日はいかが致しましょう?』

流石はシステム、屍皇の圧力にもいつもの調子を崩さない。

ソルシエールはアンリエールに目配せすると、つまらなそうに言い捨てた。

「お前の好きな設定で決めると良い。何ならアクションデュエルでも構わないが」

「ご冗談を、それこそお兄様の独壇場ですわ……ですがまあ、お言葉に甘えさせて頂きますわ。LP8000のフルライフ制、^{アンティ}賭けと致しましょう? 賭け品はそれぞれ今後一切の『行動の自由』で」

「……ほっ?」

ソルシエールが僅かに目を細める。

ここに至るまでによく見せた、妹に対しての『感情』らしきモノ。

『えくと、アンティには互いの合意がですね〜』

「良からう」

『はい、承認頂きましたのでサクサク設定しちゃいますよ〜』

手早いコーパルの対応に、決闘の準備は整っていく。

『それでは!! これより元プロ決闘役者「屍皇」ソルシエールさんVS幽霊姫の異名を持つアンリエールさんの兄妹対決を開始します!!』

コーパルが白黒のダイスを放り投げる。

宙を舞う2振りの正方形は、廻り回って悪戯に運命のクジを引く。

「——戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が」

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い、フィールド内を駆け巡る……」

まるで詩でも読むかのように、その台詞は紡がれた。

パフォーマンスなど無く、清々とした面持ちで佇む2人の目は閉じられている。

「見よ、これぞデュエルの最強進化系」

「ご覧あれ、華霊なる我らラムジョレーンの一幕を」

賽が地を跳ねると同時。

皇と姫の眼は、同時に交錯した。

「^{デュエル}決闘!!」

【アンリエール】 LP8000

VS

【ソルシエール】 LP8000

第39話 屍皇の一撃

「それでは、私の先攻から参ります」

「賽の目が定めた運命は、アンリエールへ先攻を促した。

やり直し^{マリガン}などきかない、既に決定されてしまった5枚の手札。先刻の光景が、がらんだこの幽霊屋敷が嫌でも脳裏に過ぎる。

恐る恐る右端から順に視線を流していくと……緑や赤紫のカードに混じって、悪戯好きの姿がひよつこりと顔を覗かせた。

(……ありがとうございますわ、皆さん)

演技を忘れ、自然と口元が緩んだのも一瞬。

妖美な微笑にすぐさますり替えて、ディスクへカード達を滑らせていく。

「幽霊姫の怪演、まずはその下準備から始めさせて頂きます。モンスターをセット、バックカードを1枚伏せてターンエンドですわ」

1ターン目としては中々の滑り出しに、ベルはふうと胸を撫で下ろした。

(良かった、普段のアンリさんに戻ったみたい……)

それでもまだ、『確実に負ける』最悪の状態から『1度も勝てなかった』という元の関係に戻っただけに過ぎない。同じ土俵に立てたとしても、あつさり投げ飛ばされてお終い、なんてことも有り得るのだ。

『幽霊姫』ことアンリエールさん、まずは手堅い1ターン目を終えました！ コレを受けて屍皇ソルシエルさん、一体どんなデュエルを見せてくれるのでしょうか？』

コーパルの実況に、一行の視線が自然とソルシエルへと流れた。悠然とディスクを構え、ゆつくりと余裕を持ってデッキトップへと手を掛ける。その姿からは僅か数パーセント立ち上がった勝利の可能性を消し飛ばす程の、圧倒的強者の圧力が波のように押し寄せて来た。

月夜を背景に向かい合う高貴な兄妹、しかしそこにある構図はまさに狩人と獲物。

弱者^{えもの}が逃れる術はあれど、立ち向かう術は無い。結末の決まった一

方通行の殺戮舞台^{コロシアム}は、それ故に観客を魅了する。

「……ここにあります皆様方。本日は数奇にも私達ラムジョレーンの決闘にお付き合い頂き、誠にありがとうございます」

恭しく一礼する屍皇のそれは、これから『シヨール』を始めるに相応しく。

それでいて、『狩り』を始める前に舌をなめずるハンターのそれに近しいものがあつた。

「ささやかながらの感謝と致しまして、このソルシエール・ラムジョレーン……『今宵』再び、屍の皇としてこの腕を存分に振るわせて頂きます」

月夜に光るは血濡れの瞳。

幾人もの決闘者を闇へと葬つてきた文字通りの『怪物』が、月夜の下で蘇る。

「私のターン、ドロロー。手札から通常召喚、《マスマティシャン》を攻撃表示」

《マスマティシャン》

☆3 / 地属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 1500 / DEF 500

白髭を伸ばしたコミカルな数学者モンスターが先陣を切る。

ユウも使用した、優秀な効果を持つそのモンスターに対して、アンリエールの伏せカードが発動することは無かつた。

「マスマティシャンの効果が発動。私はデッキから《ワイトプリンス》を墓地へ送る」

彼が唱える意味不明の数式によって、ソルシエールのデッキから1枚のカードが墓地へと送られる。

《ワイトプリンス》

☆1 / 闇属性 / アンデット族・効果 / ATK 0 / DEF 0
その名が示す【答え】は、たった一つ。

苦々しい表情を浮かべて、クラドが呟いた。

「ゲツ、マジか。確かに『慎ましい』デッキではあるけどよ……」

「え、えつと……もうデッキが分かっちゃったんですか」

狼狽するベルを見て、燐路が嘲笑する。

「へっ、ホントにシロートなんだなあお前。どうしてもクソも、あのカード1枚見りゃ一発で分かるだろ？」

「黙ってるクソガキ」

「つてえ!？」

「ごちんと生意気なツンツン頭に拳を振り下ろしてから、クラドはベルに向けて続けた。

「ありやな……【ワイト】っていう、ちよつと面白いデツキさ」

「ワイト……?」

「ああ、「ワイト」モンスターは1枚1枚じゃ大した力も無いし、希少価値^{レアリティ}だつて低い。だが——いざ相手にすると少々厄介でな」

クラドの知識を持つてしても厄介と言わせるデツキ。その実力はアンリエールの戦績からしてほぼお墨付きだ。

戦慄を覚えるベルの一方で、藍がどこか納得したように頷いた。

「道理で『屍皇』の名前が一般的に知られてない訳ね。アンリちゃんと言うだけの『結果』を残した割にはおかしいと思ったのよ」

「あの、それってどういう……」

「アクションデュエルは、派手な華やかさが無ければ人の記憶には残らないわ。あのデツキじゃ結果は残せても名声は残せないって訳」

実力を認められながらも、観客からは声援よりも畏怖を集めた怪物。

兄の影として常に比べられながらも、多くの観客達を魅了してきた幽霊姫。

そういった意味で、この兄妹はまるで真逆の道を歩んできたのだ。

「ワイトプリンスの効果発動。このカードが墓地へ送られた場合、《ワイト》《ワイト夫人》を1体ずつ手札・デツキから墓地へと送る」

《ワイト》

☆1／闇属性／アンデット族／ATK 300／DEF 200

《ワイト夫人》

☆3／闇属性／アンデット族／ATK 0／DEF 2200

「更に、墓地でワイトプリンスの効果を発動。自分の墓地から「ワイ

ト」2体とこのカードを除外し、デッキから《ワイトキング》1体を特殊召喚する。《ワイト夫人》は墓地では「ワイト」として扱われる」
「ええ、よく存じておりますわ」

「結構。ならばデッキから《ワイトキング》を特殊召喚」

《ワイトキング》

☆1／闇属性／アンデット族／ATK ?／DEF 0

場に現れたのは、紫色の衣を羽織った骸骨のモンスター。

何の比喩もしようが無い、ただそれだけのひ弱なモンスターの出現に、ベルは思わず拍子抜けしたように声を漏らした。

「攻撃力、0?」

《ワイトキング》

ATK ? ↓ 0

ベルの疑問に、クラドが答える。

「今はまだな。言っちゃえばあのモンスターが「ワイト」の要だ。奴は墓地の「ワイト」の数だけ攻撃力を増していく……奴をどう『育てるか』、それこそが使い手に試される力量って訳だ」

クラドの説明から、ベルも恐らくは墓地肥やし型のパワーデッキなのだろうと予想することは出来た。しかし、そんな単調な動きをするデッキを相手にアンリエールが苦戦するとも思えない。

どう『育てる』か。その言葉に引つ掛かりを覚えつつ、ベルは視線をデュエルへと戻す。

屍皇のターンは、未だ終わりを見せない。

「更に手札から《ワイトメア》を捨て、効果発動。ゲームから除外されている自分の《ワイト夫人》1体を選択しフィールド上に特殊召喚する」

『屍皇の進撃に終わりは無いのか！ワイトキングを召喚して尚止まることなく、まだまだターンを続けていくく!!』

黒のドレスを身に纏った長身の骸骨が、蜘蛛の巣が張り付いた椅子に座したままフィールド上に舞い戻る。

コーパルの暑苦しい実況を冷ますかのように、静かな口調でもってその言霊は放たれた。

「私は、☆3のマスマティションとワイト夫人でオーバーレイ」
紡がれたのは当然、黒の召喚法だ。

橙と紫、2つの光球が螺旋を描いて宙を踊る。

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築。エクシ
ズ召喚！」

闇夜に浮かぶ虹色の渦が、ソルシエールのすらりと伸びたシルエツ
トを照らし出す。

それは一際大きく膨れ上がったかと思うと、パツと光の花吹雪を一
面に散らした。

「★3、《虚空海竜リヴァイエール》！」

月夜に舞う花道を、長細い体躯がうねり踊る。

次元を飛ぶ竜は、ぼんやりとエメラルドに発光する翼を広げ、甲高
く咆哮した。

《虚空海竜リヴァイエール》

★3 / 風属性 / 水族・エクシーズ・効果 / ATK 1800 / DE
F 1600

「リヴァイエールの効果発動。ワイト夫人ORUを1つ使用し、除外されている
《ワイトプリンス》を特殊召喚する」

紫色のORUを吸収し、リヴァイエールが一際高く咆哮すると――
月夜の背景をガラス窓のように突き破って、小柄な骸骨の王子がマン
トをたなびかせてフィールド上へと帰還した。

再び並び立った同レベルのモンスター。黒の人間としては日常茶
飯事だろう、連続のXエクシーズ召喚。

「続けて☆1のワイトキングとワイトプリンスでオーバーレイ。2体
のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

そこに最早驚きは無い。

アンリエール達は苦々しく眉を寄せ、観客達は待っていましたとば
かりに騒ぎ立てた。

「歴戦の魂よ、彷徨う亡者を束ね冥府へと導け。エクシーズ召喚！」
乱れ咲く光の花吹雪は、その異形のシルエツトを浮かび上がらせ
る。

蹄を掻き鳴らし、紫の光球を従え——それは幽霊姫の前に立ちほだかった。

「出でよ、★1《ゴーストリック・デュラハン》!」

《ゴーストリック・デュラハン》

★1 / 闇属性 / 悪魔族・エクシース・効果 / ATK 1000 / DEF 0

白馬に跨り、くすんだ鋼の鎧を着込んだ首無し騎士。

その姿はどこか可愛らしくデフォルメされていて、とても命を刈り取る死の使いとは思えない。

しかし、ベルが驚愕したのはそのコミカルな姿ではない——何か間違っているのかと、思わず声を上げる。

「ご、ゴーストリックって……!?!」

「おいおい、何驚いてんだよ? カテゴリーされた《名前》があるからって別のデツキで使っちゃいけない、なんてルールは無えんだぜ?」

エクストラモンスターなら尚更……」

「うっせ、少し黙ってろ」

「いだっ?! テメエ捕虜に対する労りってモンがねえのかよ!?!」

またしてもクラドの鉄拳が振り下ろされると、涙目の燐路はウーツと唸り声を上げて恨めしそうに睨み返した。

しかし、彼の言葉もあながち間違いではない。実際ベルも「A・O・J」のカテゴリモンスターであるカストールを使用しているし、汎用性の高いモンスターが様々なデツキに投入されることはベルとて良く理解している。そう頭では理解していても、幽霊姫の象徴たる「ゴーストリック」が彼女の敵として立ち塞がることは、ベルとしても動揺を隠せなかった。

様々な反応を見せるベル達の一方で、アンリエールは不敵に微笑んで見せた。

「……腕に鈍りは無いようすわね、お兄様」

「当然だ。銃口を錆付かせているようでは、とても組の長など務められぬ」

短く交わされた兄妹のやり取りは、すぐに戦いの詩へと変わる。

「更に私は、手札から魔法カード《エクシーズ・ギフト》を発動。自分フィールド上のORUを2つ取り除き、デッキからカードを2枚ドロウする。私を取り除くのはデュラハンのORUを2つだ」

デュラハンの傍に漂っていた紫の光球がデッキトップへと吸い込まれていく。

モンスター・エクシーズの魂とも呼べるORU、しかしソルシエールはソレを躊躇うことなくドロウカードへと変換してしまった。

「効果を使わなかった……どうして!？」

「今の盤面じゃデュラハンの効果は使い難いから……つてのは戦い慣れてない俺みたいなの考えだろうな。恐らく……」

「ORUになっっているワイト達を、早急に墓地へ送る為ね」

ベルの疑問、クラドの解答。それに領いて答えた藍の言葉が示す通り、ソルシエールの墓地が新たに動き始める。

「カードをドロウ。続けてORUとして墓地へ送られた《ワイトプリンス》の効果処理。デッキから《ワイト》《ワイト夫人》を1体ずつ墓地へ送る」

これで墓地に存在する《ワイト》《ワイトキング》は——6体。

ワイトキングの攻撃力を上げる為に《ワイト》を墓地へ送る、その手段は実に豊富だ。

だからこそ、その手段をどれだけ採用するか、どのカードと組み合わせるかでこのデッキの真価は大きく変わって来る。しかし『屍皇』とまで呼ばれるようになった彼がどこまでこの「ワイト」を昇華させたのかは、火を見るよりも明らかだ。

「もう、あんなに「ワイト」モンスターが墓地へ……」

「お？　ようやく理解したみてえだなおっばいちゃん？　あのデッキの恐ろしさがよ」

不気味に胎動するそんな屍皇のフィールドと青ざめた表情のベルを見比べて、燐路はニヤニヤと犬歯を覗かせた。

「更にORUの無くなったデュラハンでエクシーズ・チェンジ。★4、

《ゴーストリックの駄天使》を攻撃表示で特殊召喚する」

《ゴーストリックの駄天使》

★4／闇属性／天使族・エクシード・効果／ATK 2000／DEF 2500

はあい、と手を振る桃髪の少女型モンスターは、アンリエールが使用するものと寸分違わぬ同じものだ。

紅い鎖に囚われ、ケタケタと嗤って牙を剥いた下僕——数日前の記憶が、頭を過ぎる。

「——バトル。まずは駄天使で伏せモンスターに攻撃」

下らない幻が纏わり付いた頭を振り、下された攻撃に備える。

前に進むために、影であることを振り切るために。だからこそ選んだのだ、兄を乗り越える道を。

あのいけ好かない女の影に怯えている暇など、余裕など無い——!!
「っ、《ゴーストリック・キョンシー》のリバース効果発動!! 手札に《ゴーストリック・ランタン》を加えさせて頂きますわ!!」

幾重にも突き刺さるモノクロームの羽に、苦悶の表情を浮かべたキョンシが一耐え切れずに爆散する。そんな死の間際に投げ渡された1枚のカードが、アンリエールへと受け渡された。

「続けて、リヴアイエールでダイレクトアタック」

唸りを上げて肉薄する薄緑の次元竜。その暴風が刃となって襲い掛かる。

しかしアンリエールは手札に加えたランタンも伏せカードも発動させること無く……その一撃を身をもって受けた。

「くうっ……!!」

【アンリエール】LP8000↓6200

「アンリさん、何でランタンの効果を使わなかったんですか!？」

「はっ、そう迂闊に使える訳ねえだろ? いつ死ぬか分からねえんだからさ」

ベルの悲鳴にも似た疑問。燐路は茶化しながら答えたが、その回答は的を得ていた。

次のターン、ソルシエールの手札から突然《ワイトキング》がひよっこりと召喚されてしまえば、その怪物的な攻撃力を持って一気に勝負の幕を引かれる可能性だってある。

その身をもって『死の一撃』を受けてきたアンリエールとしては、防御手段をなるべく温存しておこうという算段なのだろう……ベルにはまだ、その実感が薄かった。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

長かった屍皇の『怪演』もひとまずは暗転し、幽霊姫へと舞台が明け渡された。

前座とでも言わんばかりに召喚された2体のモンスター・エクシズを前に、アンリエールは勇ましくデッキトップに手を掛けた。

「では参ります。私のターン、ドロー！」

黒のドレスを翻し、ドローカードに目を通す。

ルージュの瞳に、妖しく光が灯った。

「私は手札から魔法カード《精神操作》を発動。お兄様のリヴァイエルをエンドフェイズ時まで頂きますわ」

催眠電波のような波状紋がエメラルドの海竜に浴びせられると、その身を翻してアンリエールの場へと反転した。

この効果によってコントロールを奪われたモンスターは攻撃も、リリースさえも制限されてしまう。そのため奪ったモンスターはSシンクロ素材やX素材として利用することが定石とされているのだが――。

「凄いわね。アンリちゃんもここまでではしっかり想定してたみたい」「え？」

藍の感嘆とベルの疑問。その答えはすぐに明かされた。

「……さて、ここでリヴァイエールの効果を発動。ORUを使い、除外されているお兄様の《ワイト》を、『私の場に』特殊召喚しますわ。更に手札から自身の効果で《ジェスター・コンフィ》を表側攻撃表示で特殊召喚！」

《ワイト》

☆1／闇属性／アンデット族／ATK 300／DEF 200

《ジェスター・コンフィ》

☆1／闇属性／魔法使い族・効果／ATK 0／DEF 0

こうか王の名を持たない、貧弱な骸骨のモンスターがリヴァイエルに導かれ幽霊姫の舞台上がる。そんな彼の背後から寸胴な道化師が姿

を現した。

『おつとここで幽霊姫、相手モンスターはおろか、除外ゾーンまで利用するというファインプレー!! 更に☆1のモンスターが並んだということは……流石は決闘役者、魅せてくれます!!』

審判員機構に促されるまでも無い。

「私は、コンフィーとワイトでオーバーレイ!」

兄の後を追う様に、アンリエールも右腕を突き出し黒の召喚法を紡ぐ。

「歴戦の魂よ、彷徨う亡者を束ね冥府へと導きなさい……エクシーズ召喚、★1《ゴーストリック・デュラハン》!」

現れたのは、先程ソルシエールが呼び出したものと違わぬ黒鋼の首なし騎士。

しかし、ただ黙して幽霊姫に付き従うその姿は、ベルの目にはとても勇ましく映った。

「……カードの発動は無いようですね?」

ソルシエールの場に伏せられた2枚のカードは依然、動き出す気配を見せない。

ならばとばかりに、アンリエールは手札のカードに指を走らせた。

「手札から魔法カード《強制転移》を発動! お互いにそれぞれ自分フィールド上のモンスター1体を選び、そのモンスターのコントロールを入れ替える……リヴァイエールはお返しいたしますわ、お兄様」
ソルシエールの場には駄天使が1体のみ、選択出来るモンスターはそれ以外には無い。

幽霊姫は不敵に笑みを浮かべ、屍皇が黙して頷くと、リヴァイエールと駄天使が宙で交差しながら場を入れ替わる。アンリエールの場へ新たに居座った駄天使は「はあくい」と新たな主へとお気楽に手を振って見せた。

「さあ、駄天使の効果を使わせて頂きますわ。ORUを使い、デッキから《ゴーストリック・ハウス》を手札に加えます!」

『幽霊姫、隙がありませんっ!! またも相手モンスターの効果を利用していくぅ!!』

駄天使がぼんぼんと手を打ち鳴らすと、どこからともなくカードが現れアンリエールの手札へと収まる。これで相手モンスターの効果を全て利用し、更には自身のデッキと相性の良いモンスターを手中にした形となった。

何より一撃が脅威となるこのデュエルでは、被ダメージを抑えられる《ゴーストリック・ハウス》は重要な役割を果たす。アンリエールは躊躇うことなく、ディスクの中へとそれを滑り込ませた。

「物の怪巢食う、我が根城へご招待致しますわ。手札に加えた《ゴーストリック・ハウス》をそのまま発動！そしてバトルフェイズ、まずは駄天使でリヴァイエールを攻撃！」

月夜の草原が物静かな廃館へとその装いを変え、ホームグラウンドへ降り立った駄天使はむんつと鼻息を荒くしながら自身の羽を宙へ並列させていく。

「……良いだろう。カードの発動は無い」

「ならば遠慮なく攻めさせて頂きます！ デュラハンの効果を発動、コンフイーORUを使い、リヴァイエールの攻撃力を半分に致しますわ！

ソウルハント『魂分割』！」

駄天使の攻撃が降り注ぐその刹那、宙を漂う海竜へ向かって首無しの騎士が駆け出した。

すれ違い様に靈気の刃で一閃。苦しい咆哮を上げた海竜へと容赦無くモノクロの羽雨が降り注いでいく。

《虚空海竜リヴァイエール》

ATK 1800 ↓ 900

リヴァイエール爆散の余波は屍皇へと襲い掛かり、ルージユの髪を激しく揺らす。

しかしその長身は、身じろぎ一つとして動くことはなかった。

【ソルシエール】LP 8000 ↓ 6900

「続けて参ります！ デュラハンでダイレクトアタック！」

「通さぬ。手札より《ゴーストリック・ランタン》を裏側守備表示で特殊召喚し、効果を発動。その攻撃を無効にする」

ソルシエールの手札から飛び出したのは、見慣れたカボチャの浮遊

霊。

ランタンはケタケタと笑ってカードの中へと隠れると、埃に塗れた屋敷の中へと姿を隠してしまう。

『ななな何とお!? またしても屍皇の手から「ゴーストリック」モンスターが飛び出したあ!!』

コーパルの興奮した実況に合わせてクラドが呟くと、藍も苦い顔をして頷いた。

「成程な……レベルと属性も共通して使いやすい。X召喚を駆使するなら、場に残るランタンは《ワイトキング》の補助としては悪くない、か」

「ええ、★1にわざわざデュラハンを採用している意味もあったという訳ね。墓地に落ちたランタンを使い回せるし、何よりワイトキングが育ち切るまでの『時間稼ぎ』には最適……」

「じゃあ、お兄さんが「ゴーストリック」モンスターをデッキに入れていたのは、初めから……?」

2人の言葉を聞いて、ベルはそれまでの考えを改めた。

嫌味らしく、アンリエールの『メタ』としてゴーストリックをわざわざ組み込んだものだと思っていたが……そうではない。

アンリエールの動じない表情から察するに、恐らく彼女のデッキの原点は——ソルシエールの「ワイト」に対する解答が、アンリエールの「ゴーストリック」なのではないか、と。

「攻撃の続行は不可能。私はこれで、ターンエンドですわ」

アンリエールが黒のドレスを翻し、一礼してターンを受け渡す。

(何とかダメージこそ与えましたが……)

妖しく浮かべた笑顔を僅かに曇らせ、目の前の『壁』を見据える。

(この程度の『好調』で敗れるような人なら、苦労はしませんわね)

幾度と無く敗北してきた、それまでの映像が脳裏を過ぎる。

奇策が功を奏し、ソルシエールのペースは乱した。しかしこのままで済む筈が無い。

「私のターン、ドロロー。場のランタンを反転召喚する」

《ゴーストリック・ランタン》

☆1 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 800 / DEF 0

黒衣を纏った悪戯好きの低級モンスターが、屍皇の命を受け幽霊屋敷を飛び廻る。

墓地にはデツキからワイトキングを呼び出せる《ワイトプリンス》がいる。その場合、狙いはワイトキングの攻撃を通す為、手札から別のモンスターを召喚してのX召喚か。

おおよそ思い浮かんだ観客達の予測は、見事に裏切られる。

「この瞬間。私は『自分の』ランタンの反転召喚にチェーンし、罠カード《連鎖除外》チェーン・ロストを発動する」

静かに、そして重く告げられたのは——自身のモンスターに対しての召喚反応罠。

「な……!?!」

ベルが疑問を浮かべる間もなく、アンリエールが驚きの声を上げたことで『ソレ』が奇策であることを皆が認識した。

「攻撃力1000以下のモンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に発動。そのモンスターをゲームから除外し、更に除外したカードと同名のカードを相手の手札・デツキから全て除外する」
アンリエールが知らない、兄の手の内。

これこそが彼の仕掛けた真正銘の妨害メタであった。

「何を驚く? 《エフエクト・ヴェーラー》を筆頭として『召喚される可能性もある』手札誘発型モンスターは我が下僕に対して有効に働くのでな。これしきの手を読めぬようでは——このデュエル、最早何の意味も成さぬぞ」

胸を鎖で貫かれ、ランタンが苦痛の叫びを上げる。

ジャラジャラと唸りをあげて伸び続けるソレは、アンリエールの手札で控えていたランタンも貫き。そのままデツキへと潜り込んだ破壊の鎖は、残る2枚さえ無慈悲に刈り取っていった。

——それじゃ『4番』のウサちゃんは貰って行くよ?」

手札に纏わりつく紅い鎖が、一瞬だけ幻視する。

ぞわりと粟立つ肌。首を振って何とか気持ちを持ち直して——今、目の前に立ちはだかる倒すべき『敵』をしつかりと捉えた。

(……お黙りなさい。貴女をぶん殴るのは、この人を倒してからですわ!!)

ルージュの闘志は、不安定に揺らめきつつも決して消えることはない。

そんな瞳を覗き込んだ屍皇は、どこか興味深そうに目を細めた。

「——では、墓地のプリンスの効果を発動。自身と《ワイト》《ワイト夫人》の3体を除外し、デツキから《ワイトキング》を特殊召喚する」
地の底から這い出るようにして現れたその姿は、変わらず紫の布を羽織った脆弱な骸骨。

しかしその大きさは、首を反らして見上げるまでに大きく膨れ上がっていた。

《ワイトキング》

ATK ? ↓3000

「攻撃力、3000……」

最上級モンスターと同等の攻撃力を持つその姿に、思わずベルが目を見開く。

デュエルが長引く程、戦場から屍が送られる程。どうしようもなく力を増大させていく、圧倒的な絶望。

この一撃を防ぐ為に残してあった希望は、既に無い。

「——バトルフェイズだ」

屍皇と呼ばれるその所以が、遂にその腕を振り上げた。

第40話 決死のファイナーレ

バキバキと不快な音を立て、白木のような指が折り畳まれた無骨の拳が迫る。

「攻撃対象は——デユラハンだ」

デユラハンの持つORUは、ソルシエールの除外ゾーンから特殊召喚した《ワイト》。

効果を使えばワイトキングの攻撃力は更に増すこととなるが、破壊されてしまえば結局は同じことだ。少しでもダメージを抑えるために、取るべき行動は一つ。

「っ、デユラハンの効果を発動！ ORUを使い、ワイトキングの攻撃力を半減します！」

《ワイトキング》

ATK4000↓2000

ぶつかり合う無骨な白拳と靈気の刃。

デユラハンの攻撃力は場の「ゴーストリック」モンスターの数×200上昇し、1400となっていたものの力及ばず。幽霊姫に付き添った首なしの騎士は無残に圧殺されてしまった。

【アンリエール】 LP6200↓5900

「っ……!!」

ワイトの墓地送りとデユラハンの破壊。

本来であれば……ランタンが除外されなければ防げた筈なのに、やはり一筋縄でいく相手ではない。

上を行こうとすれば更にその上に行く。見せ付けられたどうしようもない力の差に、アンリエールは強く齒噛みした。

「効果は使用しないか……」

デユラハンが墓地へ送られた場合、手札へ「ゴーストリック」カードを回収する効果を持っている。しかしアンリエールがあえてその効果を見逃すと、ソルシエールはその狙いを見透かしたように呟いた。

「ならば伏せカード《リビングゲッドの呼び声》を^{オーブン}発動。墓地の《ワイ

トキング》を攻撃表示で特殊召喚」

《ワイトキング》

ATK?↓3000

「そんな、2体目まで……!?!」

ベルが見上げる巨躯が2つに増える。

さすがに致死量とまではいかないまでも、絶望を与えるには十分すぎるサイズだ。

「続けて、駄天使へと攻撃」

地より這い出した巨大な拳が、アワアワと震える駄天使へ向かって振り下ろされる。

力をもって押し潰す、たったそれだけのシンプルな攻撃。しかしその威力は裁きを下す龍の一撃にも等しい。

圧倒的な力の前に成す術なく、駄天使はモノクロの羽を散らして玉砕した。

【アンリエール】 LP5900↓5400

『何と恐ろしい光景でしょう！ 怒涛の攻撃に幽霊姫の場は早くも焼け野原です〜!』

破壊の余波がアンリエールへと吹き付ける。地に足を留まらせるのが精一杯で、顔を覆った腕を解いたとき場はガラ空きとなっていた。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

ここままで全て予測済みとでも言うような、無味乾燥なエンド宣言が放たれる。

最悪のシナリオ——つまりこのターンでの決着こそ無かったものの、恐らくこのままでは次など無い。

「私のターン、参ります……」

だからこそ、このドローに全てが掛かっている。

「ドロー!!」

引き抜いたカードは……この状況では最適解で無いかもれない。しかし、屍皇の思惑を覆すには頼もしい一手となる筈だ。

ここままで来たらもう引き下がれない。今はデッキを信じて前を進

むのみ。

「まずは伏せてあった速攻魔法《皆既日蝕の書》を発動!! 場のモンスター全てを裏側守備表示に致します!!」

1ターン目から沈黙を保ってきた伏せカードの、思いがけないその正体。先程の攻撃に対してソレを使えば、と声を上げそうになったベルは……これまでアンリエールが取ってきた戦術を思い出し、すんでのところで口を塞いだ。

発動された書のカードに対してチェーンは組まれず、2体の大髑髏は小さな裏向きのカードとして幽霊屋敷の中へと溶け込んでいった。「続けて手札から《クレインクレイン》を召喚し効果を発動、墓地のキョンシーを特殊召喚!!」

《クレインクレイン》

☆3 / 地属性 / 鳥獣族・効果 / ATK 300 / DEF 900
流れるように手札から現れたのは鉄塔の鶴。

垂らした嘴の先には、襟首を引っ掛けられて宙ぶらりんな状態のキョンシーがいた。

「これで☆3のモンスターが2体!」

ベルは両拳をぎゅっと握って歓喜した。

アンリエールがデユラハンの回収効果を流し、わざわざ自分のターンで皆既日蝕の書を使用した、その理由が線となって繋がっていく。皆既日蝕の書は、エンドフェイズにモンスターを表側表示に戻してしまうデメリットがある。加えてドロワー効果まで付随している為、この盤面では使いどころが難しい。

しかし、ワイトキングの守備力はいくら墓地に「ワイト」モンスターが溜っても0のまま。例えばドロワーを許してしまっても攻撃を防ぎつつ残ったモンスターでワイトキングを攻撃すれば処理出来たのでは……とベルは考えていたが、実はワイトキングには戦闘破壊に対して墓地の《ワイト》を除外することで墓地から復活する効果があった。

中途半端となってしまった防御札を、アンリエールは『攻め』の一手として転用したのだ。

「私は、☆3のクレインとキョンシーでオーバーレイ! 2体のモン

スターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

これまでに幾度と無く幽霊姫と共演してきた看板役者が、満を持して舞台へ降り立つ。

ウスノロな大怪物など、所詮は彼を引き立てる演出に過ぎない、と誇示するかのように。

「奇怪なる館の主よ、漆黒を翻し騒乱の夜を収めなさい……エクシーズ召喚、★3 《ゴーストリック・アルカード》!!」

《ゴーストリック・アルカード》

★3 / 闇属性 / アンデット族・エクシーズ・効果 / ATK 180
0 / DEF 1600

漆黒のマントを翻し、不敵に笑う白肌の吸血鬼。

彼ならば戦闘を介することなく、骸の王を葬れる。

「アルカードの効果を発動！ ORUを1つ使い、裏側守備表示のワイトキングを破壊致します！」

屋敷の中は主の独壇場だ。いかに巧妙に隠れようとも、金の眼が必ず射抜く。

四角いカードのままアルカードのマントの中へ閉じ込められた骸の怪物は、そのまま破碎され墓地へと送られた。

厄介ごとはまず1つ片付いたが、目前には怪物を操る黒幕が控えている。屋敷の主は、静かに宙を駆けた。

「バトル、アルカードでダイレクトアタック！」

鋭い爪が振るわれると同時に、闇色の刃がソルシエールの身体を裂く。1800ものダメージともなれば、いくら半仮想とはいえ衝撃も相当な筈だ。

しかしソルシエールは一步も引かず、呻きすら上げず、反転し飛び去っていくアルカードを見つめながら何かを諦めたように静かに目を瞑った。

【ソルシエール】 LP6900→5100

「バトルを終了しメインフェイズ2、私はアルカードをエクシーズチェンジ！」

息もつかせぬエクシーズ連打。

ここで『彼』を呼び出すことが出来たら、2体目のワイトキングも葬る事が出来たのに……そう思わずにはいられない状況だが、このデュエルはその『彼』を奪還する為のデュエルでもある。自らが背負った十字として受け入れるほか無い。

「★4 《ゴーストリックの駄天使》を、守備表示でエクシース召喚！」
2体目の、とはいえ自分のエクストラデッキから召喚されたのはこれが1体目となるが、桃髪の駄天使が再び幽霊姫の傍らに舞い降りた。

勿論、彼女の力ではワイトキングに太刀打ちできないことなど承知の上。大髑髏の攻撃を受け止めるため、アルカードに代わって守備表示で召喚したのだ。

「駄天使の効果発動、手札へ《ゴーストリック・ブレイク》を加え、2枚のカードをセット。ターンを終了致しますわ」

これで駄天使が破壊された後も、後続のゴーストリックを呼び出していく事が出来る。キョンシーを裏側守備表示で特殊召喚出来るのは大きなリカバーだ。

『返すターンでの攻撃を見越した幽霊姫、見事なアフターケアです!!
これを受けて屍皇、どう動くか?!』

残ってしまったワイトキングは厄介ではあるが、こうしてライフを繋ぎ、順々に処理していけば勝機が見える——そう確信したアンリエールの目に飛び込んできたのは。

「……では、そのエンドフェイズにこのカードを発動させて貰おう」
どこか哀れむように目を細め、小さく嘆息をつく屍皇（ミイラ）の姿だった。
「速攻魔法 《月の書》。その効果で駄天使を裏側守備表示へと変更する」

何故、そう問い掛けたい口が動かない。

狙いは分かる。ゴーストリック・ハウスの効果で裏側守備表示のモンスターは攻撃対象に選択する事が出来ない、言い換えれば裏側にしてしまえばワイトキングの攻撃がダイレクトに通るということ。

しかしアルカードの攻撃に対して発動させていれば、駄天使へのエクシースチェンジには繋がらず、サーチ効果も許すことは——。

(……まさか)

思考の先に辿り着く、その可能性。

ぴりぴりと肌が粟立つ。これまでソルシエールが『そのカード』を使用したことは無かったが、あえてアルカードの攻撃を受けた理由は恐らく、ソレしかない——!!

「私のターン、ドロー」

ドローカードを淡白に目を通すと、ソルシエールはすぐさまディスクの上へ、そして手札の端へと順々に指を滑らせた。

「ワイトキングを反転召喚。そして手札より装備魔法《巨大化》を装備。自分のライフが相手よりも下の場合、装備モンスターの元々の攻撃力は倍になる」

墓地に存在する《ワイト》《ワイトキング》の合計はこれで4体。

つまり——。

「攻撃力、8000……」

致死の一撃。そう呼ぶに値する数値を叩き出したワイトキングの半身は、既に屋敷の床を踏み抜き埋もれていた。

上半身だけを覗かせた規格外の大髑髏。深淵に塗られた2つの洞が幽霊姫を覗き込む。

「バトル。ワイトキングでダイレクトアタック」

怪演の終わりを悟ったようなソルシエールの瞳を見て、アンリエールは感じた。

ゴーストリック・ハウスの効果で半減され、実質ワイトキングが与えるダメージは4000止まり。僅かにこちらのライフが残ることとなるが……そんなことなどあちらも承知の上だ。

この場面で勝負を決める、つまりワイトキングの攻撃力を致死量まで吊り上げるには『あのカード』しか無い、と。

「場に伏せてあったカードを発動、《異次元からの埋葬》。これにより除外されていた《ワイト》《ワイト夫人》《ワイトプリンス》をそれぞれ墓地へ戻す。よってワイトキングの攻撃力は14000へと上昇する！」

フィールドすら崩壊させかねないほどの地響きを立て、大髑髏は更

に増幅した体躯を暴れさせてアンリエールへと迫る。

真つ向からでは覆しようもない数値の暴力。立ちすくむばかりなベル達の目前に立つアンリエールは少しだけ俯いて、

(……やはり、そうでしたか。ですが——)

自らの読みは間違っていたのだと、ルージュの瞳を一際輝かせた。

全てを呑み込む大波のような相手に向かって、小さな黒兎が吼える。

「——まだ、発動を許した覚えはありませんわ!! カウンター罠発動、《神の宣告》!!」

告げられたのは、多大なコストを要求しての万能罠。

発動するタイミングは何度もあった。ワイトキングの反転召喚、巨大化に対しても。

しかし発動するべきは、今まさにこのタイミングだった。

「ライフを半分支払い、《異次元からの埋葬》を無効に致します。聡明なお兄様なら……その先は言わずともお分かりですわよね？」

【アンリエール】LP5400↓2700

ミソとなるのは、その膨大なライフコストにあった。

巨大化はライフ差が相手よりも下であればその攻撃力を倍にするが、その逆……相手よりもライフが上であった場合はその攻撃力を半分にしてしまう。

まさに諸刃の剣。時には相手モンスターに装備させることで弱体化を狙うデメリット効果を、アンリエールはこの盤面できると引き出して見せたのだ。

《ワイトキング》

ATK4000↓2000

「ワイトキングの攻撃力が!!」

「おし、ナイスだお嬢!! いいタイミングで『神引き』してやがった!!」
ベル達の歓声を背に受けて、アンリエールも確かな手ごたえを感じていた。

最も警戒していたのは、先程も発動された《リビングデッドの呼び

声」。ワイトキングの反転召喚、または巨大化に対して神宣を撃つても、もう片方の伏せカードがリビングゲッドであれば、ライフコストを支払った今のライフではその攻撃を受けきれないからだ。

しかし墓地の増強を妨害し、巨大化がマイナスの方向へと働くこのタイミングなら——リビングゲッドでワイトキングを追撃させたとしてもその攻撃力は3000。

半減された合計のダメージは2500、僅かではあるが敗北へは届かない。そこまで読んだ上で、アンリエールは発動を引き伸ばしていたのだ。

しかし。屍皇は少しも動じることなく、静かに告げた。

「……こちらはまだ、発動を許した覚えは無い」

大髑髏の向こうで、ゆつくりと伏せカードが立ち上がる。

残されていた最後の札。アンリエールがリビングゲッドだと読んだ、その1枚。

「っ……!?!」

背筋が凍る。息が詰まる。

そんな訳が無い。もし《そう》だとすれば、それこそ発動の機会は幾らでもあった筈だ。

なのに何故、このタイミングで立ち上がる？

「チェーン発動、《神の宣告》」

突きつけられたのは、更なる高み。

鉄の塊で頭を殴られたような衝撃が、幽霊姫の視界を捻じ曲げている。

「そん、な……」

発動の機会など幾らでもあった筈……それはアンリエールとて利用した、思考の裏側。

後を追う者がどうしようもない距離を埋める為、必死に編み上げた

策。

しかし先を行く者はそれを、何の気なしに軽く飛び越えてしまった。

「……残る伏せカードは《ゴーストリック・ブレイク》のみ。もし前のターンで《ゴーストリック・パニック》を選択していたのならば——」
白き拳が振り上げられる。

その一撃を止める術は、もう無い。

「まだ、分からなかったかもしれないがな」

手札に残ったカードを、ソルシエールは無防備にも見せ付けた。

「……それは」

いつから手札に在ったのか、それは分からない。

だがソルシエールが最後まで温存していたそのカードが示す答えは唯一つ。

「これで終幕だ。ワイトキングでダイレクトアタック！」

崩れそうになる膝を何とか支えて、アンリエールはその瞬間までしつかりと目を開いていた。

この結末だけは、このデュエルの最後だけは心に刻み付けておかなければならないと。

【アンリエール】 LP2700↓0

『う、勝者あ!! 「屍皇」ソルシエール!!』

走馬灯のような一瞬の思考は、一つの答えを導き出した。

この手は、兄の背にすら届いていなかったのだと。

「……そんな」

アンリエールが負けた。

確かに不安はあったが、ベルは信じていた。

きつと彼女なら勝ってくれる。兄を、この苦境を乗り越えてくれると。

だが、現実として突きつけられた結果は——気まぐれで残酷な勝利

の女神は、力ある者に微笑んだのだ。

「……これにて閉幕となります。ご観覧の皆様、最後までお付き合い頂き誠に有り難うございました」

ソルシエールが優雅に一礼すると、唯一の観客であるバスケット少年達から拍手が巻き起こった。

ミラーマツチのような同モンスターによる激闘、神宣のカウンター合戦……確かに2人の決闘は接戦を繰り広げ、観客を魅せるモノとしては最高であったかもしれない。

だが最後に残ったソルシエールの手札を見たベル達にとって、そしてこの決闘が招く結果を知る者達にとって、それは全くの正反対に写った。

「……兄貴の手札にあったカード。あれ《サイクロン》だったよな……？」

しばし凍りついていたクラドが、ぽつりと思い出したように呟いた。

決着の瞬間、アンリエールへ向かって見せていた屍皇の手札は、遠巻きにはあるがクラド達にも確認できていたのだ。

そこにあったのは間違いなく、決闘者ならば幾度と無く目にしたカードの姿だった。

つまり。ソルシエールはわざわざ『接戦』など演じなくとも、最初から《ゴーストリック・ハウス》を破壊するなり、伏せられていた神宣なりを狙っていけば。

「ええ、悔しいけれど多分。今回はあくまでエンターテイメントに徹した、という事でしようね……」

簡単に、アンリエール幽霊姫を葬っていた。

それは屍皇に余力があったという証拠だ。アンリエールがどれだけ手を伸ばしても、どれだけ歩を詰めても……きっと勝利には届かなかった。その事実を痛いほど突きつけられたのは、実際に刃を交えた本人だろう。

「アンリさん……」

俯いたままコートに佇む幽霊姫に、どう声を掛けたら良いものか。

自分の未来を決める大事な一戦で、こんな決定的な差を見せ付けられて……彼女の傷は、これでより深いモノになったのではないだろうか。

そんな彼女に掛ける言葉など、見つかる筈も無かった。

『ではでは。アンテイルールとしまして掛け品の譲渡を……』

例えどれだけ暴れようとも、どれだけの理論をかぎそうとも。デュエルに敗北したことにより、アンリエールの自由は奪われた。これは変えようのない事実だ。

デュエルによる決定は絶対。兄の言葉を拒否することは、もう出来ない。

「……まだ、ですわ」

だというのに、幽霊姫は決して膝を折らなかつた。

金十字のディスクを構え、再び前を見据える。

「何のつもりだ」

「もう一度……もう、一度私とデュエルをして下さい！」

突然の言葉に、ベル達ですら啞然と沈黙してしまった。

「……審判員機構を通した取り決めに破ると？」

『そうですよー幽霊姫さん？ ルールを守らない悪い人はこのコーパルちゃんが鉄槌を——』

「ペナルティが必要なら後で纏めてお支払いしますわ！」

『ひゃい!』

件の注射機を取り出し掛けたコーパルが、その剣幕にびくりと体を強ばらせる。

そんな様子を見て、ソルシエールは呆れたように溜息をついた。

「……お前の我が侷に他人様を巻き込むな」

「ワガママだろうとなんだだろうと結構です!! ここでユウ様を追えなければ私は——こんなところで、お兄様の影で終わる訳には参りません!!」

敗北して尚、アンリエールの瞳から輝きは失われていなかった。

そればかりか、ルージユの炎は火の粉をまき散らしてその勢いを広げていく。

「審判員様、アンティは必ずお支払い致しますわ。ですからどうか今は……私に決闘を続けさせて下さい!!」

『え、うーん……そう言われましても、私はただ取り決めを守るだけですし……』

注射機を片手に困惑しながらもコーパルがちらりと伺うと、ソルシエールは険しい表情のまま口を閉ざしていた。

「ご不満であれば、次に失うものが腕だろうと目玉であろうと、命だろうと構いません!!」

無言故に重みが増した屍皇の双眼。

それでもアンリエールはさらに一步、一步と前へ踏み出していく。

「お兄様に認めてもらえるまで、何度でも挑みますわ……文字通り、命を懸けてでも!!」

それは聞くも無様な、無茶の道理。

声は震え、涙をこぼして……だからこそ彼女がもつ決死の覚悟は嫌というほど伝わってきた。魂の悲鳴と言わんばかりのアンリエールの叫びに、周囲は——コーパルさえもしんと息を飲む。

「そこまで認めたくないか、己の敗北を」

そんな静寂を、ソルシエールの重たい眩きが裂いた。

独り言のような短い問い掛けではあったが、アンリエールは小さく頭を振って答えた。

「……いいえ。私の未熟は、力量の差は十分に理解しましたわ。ですがここで引くわけには——」

「質問を変える。お前が涙を流した意味は何だ」

兄の言葉の真意が分かりかねて、アンリエールは怪訝に眉を寄せたが——やがて涙に濡れた唇はゆっくりと答えた。

「……私は、自分が情けないのです。大切な人を追うことも、貴方という壁すら越えられない……私は今日ほど、自分の非力にほとほと嫌気が差しましたことはありません」

掠れるような声で吐露するアンリエールの姿をベルはもう見ていられなかった。

自分なんかより余程才気に溢れた彼女が、何故ここまで思い詰めな

ければならないのだろうと。このままユウへの想いも、自分の全てを伏せて影の世界に埋もれていくなんて——それこそ彼女らしくない。やっぱり、間違っている。相手が決闘組ということすら忘れてベルが抗議しようと口を開いたのと、ソルシエールが口早に告げたのは同時だった。

「……ならば今一度、世の荒波に揉まれてくると良い」

その言葉が意味することを理解できたのは、アンリエールを含めて皆一拍置いた後だった。

「今のお前になら、その価値も幾らかはあろう」

ぽかんと口を開けたままのアンリエールを一瞥することもなく、ソルシエールはくるりときびすを返した。

「お、お兄様……？」

「今日までお前に『再戦』をせがまれたことなど、一度たりとも無かったな」

追いつがるような問いかけに、背を向けたままポツリとソルシエールは答えた。

「鍛錬と称して何度かお前の相手をしたが、お前はいつでも『敗北は必然』といった態度ばかりで、勝利しようとする意志が欠片も見られなかった。私としても実りが少なく、うんざりしていた所だ」

「……それは」

「だが……今日は中々に楽しめた。下らない反抗だと思っていた『家出』も存外、良い結果に繋がったらしい」

絶対に勝つ、乗り越える。想いを寄せる人の為に、そして何より自分自身の為に。

極限まで追い詰められたことで噴出したアンリエールの強い意思は、デュエルを通じて確かに屍皇の心に届いていたのだ。

「賭け品としてお前の自由を奪った上で命じよう。怪黒兎を奪還し、私を倒すまで……ラムジョレーンの敷居を跨ぐことは許さん。それまではプロとしての舞台から除籍させて貰うが構わんな？」

ソレだけを告げると、ソルシエールはルージュの長髪をふわりと揺らして、靴音を鳴らして立ち去っていった。

黒服達が慌ててその後を追い、結局バスケットコートに取り残されたのはベル達とアンリエール、そして審判員のコーパルだけ。

「お兄様……」

先程までの激戦は嘘のように、すっかり静まり返ったコートの中央でコーパルが思い出したようにぽんと手を叩いて場を締めた。

『えくつと……とりあえずは双方合意の賭け品譲渡ということ！』

私はオサラバしちやいます！』

言うが早々、コーパルがひらひらと手を振って消えてしまう。

締め出しを喰らっていたバスケット少年達もガヤガヤとコートへ戻ってきて、何を始めるかと思えばアンリエールへ声を掛け始めた。彼らからは褒め称える声は上がれど、貶めるような言葉は無かった。

呆氣にとられたまま『ファン』へ対応するアンリエールを尻目に、鎖に繋がれたままの燐路は目を輝かせて叫んだ。

「黒服はもういねえ。てことはだ……俺も自由ってコトか!？」

「んな訳ねえだろ」

ツンツン頭に拳を振り下ろしながら、クラドは深く深く溜め息をついた。

「つってえな!? いい加減にしろよ、この売買人風情がツ!？」

「つたく、お嬢が復活したのはいいけどよ……問題はコイツだぜ」

ラムジョレーンの力添え無しに、どうやってコイツを飛行機に乗せようか、と。

文字通りの聞き分けの無い小猿だ。こんなのを怪しまれず、かつ安全に飛行機で運べる手段が見つからない。

と、そんな様子を見ていた藍がくすりと妖しげに微笑んで見せた。「大丈夫、そのことならもうアンリちゃんのお家から『良いモノ』を頂いてるから♪」

楽しそうに藍が鞆から取り出して見せたソレは、一体どういう経緯で開発されたもののだろうか。

見た目には何の変哲も無さそうな金色の輪。しかしその内面には精密機械であることを示す無数の線があちこちに走っている。

ソレの使い方を察したクラドは、思わず口元を引き攣らせた。

「……流石は決闘組だ、何でもアリだな……」

「あ？ おい何だそりゃ？」

「さて……それじゃリン君、ちよつと『頭』を貸してね？」
身動きが取れない。

ニコニコと笑顔で近づいてくるソレから、逃れられない。

「——い、」

想像したその姿があまりにも似合すぎていて、ベルが思わず吹き出しそうになったとき。

悲痛な少年の叫びがバスケットコートに木霊した。

第41話 海底大陸 アトランタ

『当機はシガマ国際空港を離陸いたしましたして、ただ今水平飛行に入っております。ハイメイン空港到着時刻は、現地時間で——』

真つ白な機体の中で、丁寧な女性のアナウンスが流れてくる。

ベルはというと、離陸の衝撃にしばらく茫然自失としていたものの……今は窓の外に広がる光景を食い入るように眺めていた。

(ははは……まあ、もの珍しいのは分かるけどな)

窓に映る、目をぱちくりさせて空を眺めるベルを見てクラドの表情が僅かに緩む。

ベルと燐路。この2人については色々と手続き上の障害はあったものの、そこは既にラムジョレーン家が『決してクリーンとは言えない方法』ながらもしつかり対策を用意してくれていた。

お陰で難なく突破する事が出来たとはいえ、これ以上はラムジョレーンの力を頼ることは許されない。実質これが最後の助力となるだろう。

残るクラドの気掛かりは預けてきた車や荷物についてだったが……いくら治安の悪いネイティブとはいえシガマは有数の都市部だ。帰ってきたら荷物はどこへやら、なんて悲惨な事態は無いと信じた。

「……けっ、よく飽きねーな。同じ景色ばっか見てそんなに楽しいかよ？」

ベルとクラドの間に挟まれた燐路が、つまらなそうに言い捨てる。

頭の後ろで手を組んだラフな姿勢が示す通り、彼の四肢は既に自由だ。しかしその代わり金色の輪が嵌められており、アクセサリーというには飾り気の無いソレは頭にまで装着されている。

拘束を少しでも解けばそれこそ『エアジャック』しかねない暴れん坊が素直に座席についているのは、コレの存在が大きいということは明らかだ。

服装に関しても、赤の目立つ煌びやかな衣装から一転。地味なグ

レーのシャツに黒のカーゴパンツという、何とも目立たない格好に着替えさせられた。変装としてはかなり軽度だが、今のところはそれで十分らしい。

実体を知れば危険極まりない燐路だが、世間から見れば『カードゲームの大会を荒らした無法者』程度の存在だ。当然国内外で指名手配されているようなこともなく、その点に関しては一行も胸を撫で下ろした訳だが……。

要するに、あまり面倒を起こすのは燐路にとっても得策ではない。そんな彼の状況を知っている為、ベルもいちいち燐路の相手はしなかった。

「……………」

反応が無いことが不服らしく、ジトリと燐路の瞼が下がった。

——バカなヤツだ。いくら『戒め』を掛けた相手とはいえ、敵に背を向けるとは愚の骨頂だろうに。

こと、燐路という少年は手加減という言葉を知らない。

相手が誰であろうと、何であろうと自分の獲物と決めたなら全力で狩る。

息を潜め、殺気を消し。両の手の神経を表面へと浮き上がらせ——獲物の呼吸に、自らの呼吸を合わせていく。

勝負は、一瞬。

背中越しにするりと腕を滑り込ませて。

燐路少年は未成熟というには不釣合いな、たわわな果実に手を伸ばした。

「ひいやあああああああつ!!」

何事かと集まる視線を、燐路の心底楽しそうな笑い声が吹き飛ばした。

「バーバーカ!! 隙だらけなんだよデカパイ女!! ぎやははははッ!!」

「何やってんだこのエロザルが!」

あまりの早業に止めようも無かったクラウドが慌てて拳骨を叩き込んだが、時既に遅し。

獲物を狩り終えた彼には、どんな苦痛も勝利に添える着にしかならない。

「~~~~~ッ!!」

胸元を押さえてワナワナと震えるベルはさしずめ、百獣の王に子を狩られた母牛か。

自分を侮辱した、そもそも敵とも呼べる男子が顎をしゃくれさせて憎たらしく笑う。恥ずかしくて悔しくて、顔が火傷して死にそうな少女は——万が一にと教えられていた彼を苦しめる『禁呪』を、思わず叫んでいた。

「このっ……『降参』ッ!!」

響き渡る甲高い絶叫。

刹那の間も無く、燐路少年は奇妙な格好で苦痛の叫びを上げることになった。

「つぎゃああああああああっ!!」

各部に装着されたリングが、バチバチと唸りを上げた。

強力な磁石にでもなるのだろうか、両腕と両足のリングはそれぞれガチンとくっついて手錠のような形となり、頭に嵌ったリングからは電撃が流れている。

裏世界で流通しているというデュエル用の『衝撃増幅装置』を改造したらしいソレは、登録制の声紋認証を備えたスグレモノだった。

声紋認証はネイティブ出身の女の子でも扱える安心のカンタン操作で、『降参』で起動、『ターンエンド』で解除。加えて装着者の体温、振動からエネルギーをチャージする為バッテリー切れの心配も無用である。浮気性なパートナーに悩むレディー達もこれで安心。

ただし法的にはバツチリな代物の為、バレれば即セキユリテイがゴヨウである。とはいえ流石は闇の世界を生きる方々が用意しただけのモノはあり、その実用性はまさに完璧と言えた。

「あががががが待て馬鹿やめろこんなトコで使うんじやねええええええ!!!」

電磁波その他諸々に影響される精密機器が満載の飛行機内だ、D

パッドの普及もあつて多少は対策されているとは聞いているが、燐路は勿論のことクラウドもヒヤリと肝を冷やした。

ベルはといえば相当頭に血が上っているらしく、全身の毛を逆立ててフーツと唸っている。冷静な判断は期待できそうにない。

「つたく……『ターンエンド』！」

このまま騒ぎになつても厄介だと、見かねたクラウドが『解除コード』を口にした途端、仰け反っていた燐路の体からがくと力が抜けた。時折びくんと跳ねるその様子が何とも痛々しい。

「何かございましたか？」

「あ、あはは、いえ！ 子供同士の喧嘩で……すみません、注意しまつス！」

駆けつけたCAのお姉さんが怪訝そうに尋ねてきたが、周囲の乗客へも頭を下げつつ持ち前の営業スマイルを浮かべて、クラウドは何とか事無きを得た。

「おいおい頼むぜ……？ こんな調子じゃ向こうに着いてすぐ強制送還だぞ？ 猿小僧も無事に青へ行きたいなら大人しくしてろ」

はああ、と深く溜め息をついて、小声で注意を促すクラウド。

が、そんな世話役の言葉を聞いているのかいなのか。2人はバチバチと険しい視線を交えたまま互いに引こうともしない。このままでは第2回戦が始まつてしまうのも時間の問題だ。

「まあまあ、仲の悪いお猿さんが2匹……」

ひよっこりと後ろの座席からアンリエールが顔を覗かせる。

「人事みたいに言わないでくれよお嬢……こつちの身にもなつてくれ」

泣きそうな顔でクラウドが懇願すると、アンリエールはやれやれとといった様子で溜め息をつくど、人指し指を立てて1つ提案を出した。「分かりましたわ。それでは私が、ベルと席をお替り致します。それで丸く収まるでしょう？」

こと、燐路という少年は手加減という言葉を知らない。相手が誰であろうと、何であろうと自分の獲物と決めたなら全力で狩る。

標的は、生意気にジューズを片手に雑誌を読みふけている高慢女だ。

別に何をされたというわけでは無いのだが、昔から金持ちの貴族様というのはどうにも気に入らない。さほど歳も変わらないくせに偉そうなのが鼻につく。それだけだ。

息を潜め、殺気を消し。両の手の神経を表面へと浮き上がらせ――獲物の呼吸に、自らの呼吸を合わせていく。

勝負は、一瞬。

雑誌の影になっっている死角からずりりと腕を滑り込ませて。

燐路少年はあるのかないのかよく分からないソレを、ぺたんと確かに掴み取った。

(狩ったツツツ!!)

ざまあみろ、お前も醜態を晒せ!

機内に響き渡る幽霊姫の絶叫を幻聴した燐路だったが……いつまで経っても、機内には静寂ばかりが流れている。

(あ………?)

何だ、何かおかしい……。

気が付けば、燐路に向けられていたのは艶やかなルージユの流し目だった。

不穏な気配を察し、控えめな胸元に置いたままだった手を引き戻そうとして……その手はすつと、アンリエールの両手に包み込まれてしまった。

「まあまあ……随分と情熱的ですわね……?」

くい、と妖艶な瞳が燐路少年を覗き込む。

紅潮した頬、艶かしい唇、囁くような甘い声。それら全てが燐路の意識を支配していく。

「全く、懲りない方♪」

兄譲りの魔性を放つ彼女の全てに、燐路の意識は徐々に吸い込まれ

ていく。

僅かな膨らみと体温（ぬくもり）が掌から伝わり……身体は自然と、目の前の甘美な魅力を放つ唇を求めて――。

結果。

彼は自身の目元に迫っていた二本指に気が付くことなく、再びその醜態を晒した。

*
*

海上都市、海真門。^{ハイメイイン}

都市と呼ばれてはいるものの、その実は忘却の青所属の先進国・リウム共和国が有する巨大人工浮島^{メガフロート}である。その役割はただ1つ、遙か眼下に聳える海底都市への玄関口だ。

居住区は存在せず、せいぜい港で働く職員達が生活に困らない程度の施設しか誘致されていない。軒を連ねているのは、日々大量に運ばれてくる物資を管理する巨大な倉庫だけ。

何処までも続くコンクリートの平地では、幾つもの船や飛行機がせわしなく離発陸を繰り返している。ここから様々な物資や人々が入りを繰り返して、巨大な連絡潜水艦で各国々へと送り届けられる訳だ。

「ほえ……」

知識としてはあったものの『海』ですら初めて目にしたベルにとって、それらの光景は全てが真新しく、とても新鮮に映った。

まして海面に浮かんでいる『巨大な酒瓶みたいなモノ』が海中深くに潜っていくなど、ベルにはとても想像がつかなかった。

ずらりと海面に並ぶ船体には、工業貨物用の鉛色一色な艦もあれば、デユエルモンスタースターのキャラクターが描かれた観光向けの『旅

客機』も見受けられる。

あのどれか1つにこれから乗り込むのだと思うと楽しみで仕方がない反面、少し躊躇うところもある。

とはいえそんな不安など一度、シガマの空港で嫌というほど味わったばかりだ。空を飛んで来てしまった以上、何を今更恐れることがあるのか。

「目が……目が……」

「私の胸を触った代償ですわ、ありがたく噛み締めなさい」

両の目を押さえてフラフラと歩く燐路尻の尻を、アンリエールが叩いて無理矢理に進ませる。

そんなこんなで荷物を受け取った一行は、空港エリアの待合ロビーで経路を確認。

次に乗る潜水艦のターミナルへ向かおうとしていたのだが……そんな彼らの前に現れたのは、意外な人物だった。

「お久し振りです、先輩」

サングラスを掛け、大きめのキャスケットを目深にかぶった女性。

彼女とは関わりの浅かったベル達は小首を傾げるばかりだったが、

藍は飛び上がって驚くと上ずった声を上げた。

「蓮!? どうしてココに——!!」

驚いた藍の反応に満足したのか、サングラスを下げて目元を見せた

彼女は——SSCで【にじいろ団】と戦ったアイドルデュエルチーム

【N—E—V—E—S】の代表、蓮^{レン}莉^{リー}帆^{ファン}だった。

今は大会中に着ていた煌びやかな衣装の印象とは打って変わって、細い脚を引き立たせる薄青のデニムを始めとしたカジュアルな服装に身を包んでいる。

「オフを貰ったんで、お迎えに上がりました。ご迷惑でした?」

「いえ、そういう訳では無いけど……ってというか、何で蓮が私たちのことを——」

「親切なお兄様方から一報頂いたもので。ま、今日動けるのは私だけなのでN—E—V—E—S揃っての歓迎会はまた後日になります」

「全く、あの人達はまた余計なお節介を……」

深く長い溜め息をついて、藍が頭を抱える。

彼女が頭に思い浮かべているのは、恐らくは今回の件で助力して貰った藍の知り合いなのだろうとベルは察した。

「……まあ、こつちとしては確かにありがたい話だけど。仕事の方に影響は無いの?」

「先輩、ホントにジャーナリストの仕事してるんですか? 今はアイドル戦国時代ですよ?」

藍の気遣いに、蓮はジトリとした目を向けて返した。

「もつとお仕事したいと思っても、次から次へと新勢力が沸いてきますし。私達がひっきりなしにTVに呼ばれてた時期はもう終わっちゃいました。今は歌の仕事が殆どですから、そこまで時間に追われてる訳じゃないんです。SSCで『宣伝』してきたばかりですし、1日お休みを貰うくらいなんでもありません」

「ぐ……勉強不足でした、ごめんなさい。相変わらず芸能は流れが速いわね……」

藍が素直にペこりと頭を下げると、蓮はベル達に向き直って言った。

「というわけで、今日は私が皆さんの案内役を勤めさせて頂きます。よろしくお願いしますね?」

につこりと微笑んだ蓮に、ベル達もおおずと頭を下げる。

こちらの事情は粗方話を聞いていたのだろう、多少なり変装させた隣路の姿を見ても何の反応も示さなかったが……ふと、気が付いたように呟いた。

「あれ、あの無口そうな方は居ないんですね?」

その言葉を受けて気まずそうに俯いた一行に、蓮は小首を傾げる。

「えっと、彼ね。ちよつと問題があつて先にこつちへ来てるみたいで……目的地は同じだから、きつと合流出来ると思うわ」

それはどこか希望のような願望のような、皆に言い聞かせるような藍の回答だったが——続く蓮の言葉は、容赦なく現実を突きつけた。

「そうですか……今は何かと物騒ですし、皆で纏まって行動した方が安全だったんですけど。心配ですね」

窓も無い船内で揺られること1時間弱。

海底都市の港へ到着したというアナウンスが流れたが、船外の排水が完了するまでにしばし時間が掛かるという事だった。

「こういう筒みみたいな港に船が入って、それから半分くらい海水を排出したら外に出られるの」

「へえ……」

待っている間、藍のDパッドに表示された図を指差しながらの解説は、ベルのみならずクラドやアンリエールも興味深そうに聞いていた。

藍の説明を耳に入れながらも、ベルの目が釘付けになったのはアトランタの一般的な居住コロニーの外観、その解説図だ。

当然ながら肉眼でソレを伺うことは出来ないが、どうやら居住コロニーはいくつもの球体がくつついたような、いわば『泡』のような形をしているらしい。

その見た目通り『バブル』などと呼ばれているようで、半円のドーム型コロニーがまず海底に設計され、そこから上へ小さなコロニーが増設されたことでこのような形になったと記されている。

「ケツ、つまんねー話聞いて何が面白いんだか……」

へえ、ほお、と楽しげに時間を潰している一行を、燐路は不貞腐れたように腕を組んで寝たフリをしていたが……時折薄目を開けてはその様子を伺っていた。

排水作業も完了し、いざ港へと降りてみると。

大きな円筒状の空間は無骨な鉛色一色で、照明の淡い白色だけが彩りを添えていた。

(すごい、独特な匂い……)

色濃い海の匂いが、湿り気を含んでつんと鼻をつく。

乾燥地帯出身のベルにとって不思議で仕方なく、何度も吸い込んで

は吐き出しを繰り返していると

「正気ですの……?」

と、鼻を押さえたアンリエールに白い目で見られてしまった。彼女に至っては、露骨に不快な表情を浮かべていた。

入国手続きを済ませ、幾つかの防護扉を潜り抜けると、遂に港の外へと降り立った。

そんな一行の目に飛び込んできたのは——前にベルが見た写真と全く同じ、薄暗い青に染まったネオン街だった。

「うわあく……」

「おお、やっぱ実物は違うなあ」

「思っていたより人が多いですわねえ」

三者三様、初めてこの地に足を踏み入れた一行の感想はそれぞれ違う所へ向けられた。

ベルは『天井のある空』、クラドは商売柄かネオンビルの群れに。アンリエールは無数に行き交う人々や車の流れを目で追っている。

そんな彼らの反応を嬉しそうに見回して、藍と蓮は微笑んできた。

「お疲れ様、皆。リウム共和国の首都『リューアン』へようこそ」

「N—EVES代表として、心から歓迎します!」

と、それまで詰まらなそうに頭の後ろで手を組んでいた燐路が、スンスンと鼻を鳴らしてフラフラと一行から離れていく。

「おい、待て猿小僧。また『あの呪文』を言われたいのか……?」

「やめろ!?! いくら俺でも『もう』逃げようなんてバカなマネはしねえよ!?!」

ひゅん、と一瞬でクラドの元へ戻ってくる燐路。

出発前から今に至るまで脱走する隙を突いては、即座に『呪文』を唱えられてきた彼はすっかり調教されてしまっていた。

パイタツチペナルティも合わせて、その苦痛が身に染みただろう。

「たださ、そこら中からイイ匂いがするじゃねーか? 腹が減ったぜ

俺は」

言われてみれば、そうだ。

飛行機で軽食はつまんだものの、今日は朝からろくに食事を取っていない。何より体感時間的には早めの夕食を頂いても良い時間だ。

「当然のように飯をねだるな猿小僧。事が済んだらお前の『ラヴァル』は換金してやるからな……まあけど、確かに腹は減ったな。姉ちゃん、時間は大丈夫か？」

燐路はともかく、腹ごしらえをしたいのは満場一致の意見だ。

とはいえ、今回の目的は観光ではない。ユウや白面達の動きが分からない今、なるべく早く目的地へ向かうことが優先される。

行動スケジュールを把握している藍は少し考えて、こくりと頷いた。

「宿のチェックインがあるから、あまりゆつくりお店は選べないけど……さっと食べていく位なら大丈夫そうよ。蓮の方はどう？」

「どのみちそんな予定でしたから、大丈夫ですよ。明日のお仕事には余裕で間に合います」

「ありがとうございます。それじゃあどこか入れそうな所を探しましょうか」

頼もしい現地人の案内の下、人通りの多い街中を歩くこと数十分。

屋台……なのだろうが、観光向けにオープンカフェのようになった佇まいの店がずらりと並ぶ一角へと到着した。

(おいしそうな匂いがいっぱい……！)

胃をくすぐるゴマ油の芳ばしい匂いと、パフォーマンスの如く立ち上る炎の赤が何とも食欲をそそる。

以前に藍が振舞ってくれた美味しい肉饅頭が売られていたので、ベルの視線はそれへ釘付けとなったが、流石にそれだけでは腹は膨れない。

結局、そこそこ量もあつて値段も手頃な『麺』に落ち着くこととなった。

「へえ、スープに3つも味があるんですね？」

店先に張られているメニュー写真を見るに、どうやらスープの味を好みに選んで良いらしい。どれにしようかな、とベルが小さく表示さ

れている共通言語を読んで決めかねていると。

「俺はその赤いヤツな」

すっぱりと注文を決めて、我先にと隣路が席に着く。

「ったく……ちなみに姉ちゃん的には、何かオススメとかあるのか？」

「えーつと、一番癖が無いのは醤油ベースかしら？ あとは好みによるけど」

「では、私はそれで。見知らぬ土地で食の冒険をする度胸はありませんわ」

「お嬢の言う通りかもな……ま、俺も無難にソレにしとくか」

アンリエールも即決し、クラドもそれに釣られるように注文を決めてしまう。

「あ、ああ……」

「ベルちゃんは、どれにするか決まりましたか？」

サングラス越しの瞳が、ひよっこりとベルの顔を覗きこんできた。

仮にも世間を騒がせたアイドルがこんな観光地に訪れているなど、考えてみれば恐ろしいことだ。

「あはは、えつと、まだ……」

「私的オススメはコレです。さっぱりしてて長旅の後には丁度いいかもしれないですよ？」

そう言つて蓮が指差したのは、他とは大分違う透明感のあるスープだった。

盛り付けも野菜類が多めで、ベルの好みといえれば好みだ。

ただ、宣伝文句が読めない単語だらけで味がイマイチ分からず、二の足を踏んでいたのだが……蓮に太鼓判を押されたことで遂に注文へと踏み切ってしまった。

早く決めないと。そんな焦りがベルの判断能力を狂わせていく。

「じゃあ、わたしもソレを……」

「げほっ(ゝ)ほっ!？」

麵を啜った瞬間。ベルは盛大にむせた。

「ちよつ、ベルちゃん大丈夫!？」

注文された品が配られてから、終止不安そうにベルを見ていた藍が咄嗟にフオローする。

「げほつ……び、びっくりした……何ですかこれ、お酔……？」

「ええ、かなり強めの……誰、コレをベルちゃんに勧めたのは」

ずるずる、と平気な顔で同じものを啜っている蓮が手を上げた。

「私です。コレってそんなに強いですか？ 私なんか全然足りないくらいですけど……？」

「私達の基準で考えないで！ もう……ごめんねベルちゃん」

頭を抱えて溜め息をつきながら、藍はふと自分の器を見たが……残念ながらベルと全く同じモノだ。取り替えてあげること出来ない。

「あ、えつと……」

「だ、大丈夫です！ せっかくのお料理を粗末に出来ませんし、わたし頑張つて食べますから！」

「そう……？ 別に無理しなくていいのよっ」

とは言ったものの、立ちはだかるは触ればむせるカタストル。

どう攻略したものかと悪戦苦闘しながら、なるべく啜らないように口へ運んでみるもの……3口目あたりでやっぱり限界が来た。

「げほつ、うう……」

「そんなにむせるなら俺のと取り替えてやろうか？」

意外なことに、助け舟を出したのは向かいに座っていた燐路だった。

正直「やつぱり無理かもしれない」と思い始めていた頃だったので、渡りに船だ。

パイタツチの件もあり良い印象が無かったが、ここへきて株が急上昇だ。

「ほ、本当ですか？」

「おう。もう半分くらい喰っちゃまったけど」

ほい、と寄越される赤い器。

不幸なことに、このとき藍はせめてもの口直しにと肉饅頭を買いに

席を離れていた。

この場にいるのはどうにも気配りオンチな蓮と、燐路が食ってたんだから味は大丈夫だろうという初見素人が2人。

「じゃあ、ありがたく頂いて……」

故郷の食事にも、香辛料の効いた料理など幾らでもある。

辛いものには自信があつたベルだが……ベクトルの全く違う『辛さ』があるという現実を、少女はこの日初めて思い知らされることになる。

「ひいひいひいひいひいひい!!?」

(へへ、儲けた儲けた)

一方。割と何でも食べれる雑食系少年はずるずると酢麺を啜り、実質1.5杯を平らげて満足そうに腹をさすつたのだった。

「さて、それじゃ食事も済んだし、そろそろ移動を……」

食後の小休止も終わり、ぽんと手を打って藍が立ち上がる。

麺が満身に味わえなかつた分、余計に名残惜しいのだろう。ベルは肉饅頭の包み紙をいつまでも離さず手元に握り締めている。

そんな可愛らしい様子を見た藍は、柔和に微笑んで言った。

「今度はもっと時間があるときに色々お店を案内するわ、勿論ユウ君も一緒にね」

「……そうですね！ そのときはよろしくお願いしますー！」

賑やかなこの光景をひとまずはお土産にしよう。そう振り返って……一行ははたと気が付いた。

「……何か向こうが騒がしいな？ 喧嘩か？」

クラドが手をかざして人垣の向こうを眺めるが、騒動の種は見当たらない。

しかし喧騒は着実に、こちらへと近づいてくる。ソレはどうやらかなりの速さで移動しているらしい。

そんな中で微かに聞こえてきたのは、甲高いジェットエンジンじ

みたマシンの咆哮。

「この音……まさかッ!？」

辛うじて判別できる程度の『音』を聞きつけた燐路が、弾かれるように駆け出す。

その『音』は一同も聞き覚えがあつたが故に、その判断はすぐになされた。

「おいっ!？ くそ、『降参』!!」

「がああああッ!？」

考えを巡らせる間も無く、燐路の体が地に転がった。

(嘘だろ!? 何だってこんなに早く——!!)

最悪の可能性が頭を過ぎる。

でもまさか、そんな筈は。燐路が連絡を取っていたような様子は無かつた。

ともすれば——全くの偶然なのか？

聞き間違いであればそれで良かった。すぐにでも『呪文』を解いて、肉饅頭の1つでも2つでも奢つてやるつもりでいた。

そんなクラドの願いも空しく、屋台の屋根に飛び上がった真紅の車体は間違いなく。

「ガッ……姉貴!! こっちだああああ!!」

——白面の女、煽^{センリ}里の駆るD・ホイールだった。

「そんな、彼女がどうして私たちの居場所を——!？」

無理矢理に屋根を伝つて走る真紅のD・ホイールが、刻々と迫ってくる。

しかし、冷静さを欠いていた彼女達の目には映らなかつた。そのD・ホイールから黒い煙が僅かに立ち上っていることが。

「また来たぞ、避けるおー!!」

また。人々がその言葉に引つ掛かりを覚える前に、新たに2台のD・ホイールが対岸の屋根に跳ね上がる。

操縦者は赤のフルフェイスヘルメットで顔は何えないが、漆黒に塗られたその車体は煽^{センリ}里のものと比べるとかなり軽量化が計られており、足場の悪い屋根の上でもお構い無しとばかりに距離を詰めてい

く。

破片を撒き散らしながらの無法なデッドチエイス。そこに垣間見えたのは、真紅のD・ホイールへ伸びる2本の紅い鎖だった。

「行け、《ヴォルカニツク・ロケット》でダイレクトアタック!!」

人垣の群れから飛び出した、翼竜の骨格のような『炎属性』モンスターが真紅のD・ホイールへ迫る。

不安定な足場故に逃げ道が無かったのだろう。モンスターが放った火球が直撃したD・ホイールは無残にも大破し——煽里の身体は、宙へ放り出された。

第42話 フルフェイス・ライダーズ

悲鳴に染まった人垣は海を裂くように『空白』を作り、撃墜されたD・ホイールは数メートルほど滑った後に爆砕。

遅れるように地面を転がった煽里の身体は、ピクリとも動かなかった。

「……何だ何だ？ 一体どういうことだ!？」

吹き上がった炎が、薄青の夕刻を紅く照らししていく。クラドの困惑した一言は、皆の疑問を全て代弁していた。

真つ黒なライダースーツに身を包み、赤のフルフェイスのヘルメットまで装着した彼らからは個性を、素性を隠そうという明らかな意図が見える。どう見てもセキュリティ組織の関係者でない。

その正体と真意を測りかねている間に、先行していた2台の後に続いて新たに3台のDホイールが姿を現した。

「目標沈黙。これより消去する」

軽量型のD・ホイールを着地させた彼らは、瞬く間に煽里の周囲を取り囲んでいく。

飛び出した不穏な言葉からも、これから止めを刺そう（なにをしよう）としているのかは明らかだった。

「お、おい待て!?! 俺達もそいつに聞きたい事が——」

クラドの言葉にびくりと反応し、ライダースーツの男達が一斉に振り返る。

その視線の向く先はフルフェイスのヘルメットに遮られ何う事は出来なかったが——続く言葉がソレを示していた。

「——これは驚いた。まさか『弟』の方まで見つかるとはな」

苦痛の声を上げ、うずくまる煽路に向かって1台のD・ホイールが迫る。

「な……クソッ!?!」

白面の女と煽路は間違いなく『敵』だ。

だからその判断が正しいかどうか、クラドには分からなかったが……少なくとも敵の敵は味方、という訳でなさそうだ。

『ターンエンド』!! 逃げんぞ猿小僧!!」

駆け出しながら解除のキーワードを叫び、燐路の体を抱えて飛び退く。次の瞬間には甲高く唸り声を上げるD・ホイールの車輪が2人の位置を掠めていった。

数メートルほど進んだ男のD・ホイールだったが、タイヤを鳴らし、見事にターンを決めて向き直った。

「……ほう?」

余裕を含んだまま、男はクラド達を一瞥していく。

続く言葉はなかったが、おもむろに起動したデュエルモードが「邪魔をするなら容赦はしない」と無言のメッセージを叩きつけてきた。

そんな中、答えを返すように短い溜め息がどこかから漏れた。

「はあ——やれやれ。忘却の青も存外、物騒ですのね?」

そんな男の前に、アンリエールがひらりとドレスを翻して立ちはだかった。

「藍、この方は私がお引き受けしますわ。貴女達はあちらのお2人になる。……大丈夫、アンリちゃん?」

先程の様子を見るに、彼らとのデュエルは恐らく『闇のデュエル』となる。

まだ傷は癒えていないだろうと気遣う藍に、アンリエールは不敵に微笑んで返した。

「ご冗談を、むしろ丁度良い肩慣らしですわ。もともと……最初から見逃して頂ける様子ありませんでしたし」

こちらが敵対する意思を見せたからか。燐里の周囲に待機していた2台のD・ホイールも、エンジン音をふかしながら一行の周りを囲み始めた。

見れば2台ともデュエルモードへ移行している。アンリエールへ「多対1も辞さない」と脅しを掛けているようなものだ。

「……引き下がるなら今のうちだぞ、小娘」

「何を馬鹿な。むしろこの幽霊姫を相手に、お一人で勝機がある?」瞬間、アンリエールの前後から紅い鎖が一斉に放たれた。

おぞましく金属音を掻き鳴らし、無防備な幽霊姫の背後へ迫ったソ

レを受け止めたのは——まだ真新しい、橙色の新型ディスクだった。
「……藍の言葉、そっくりそのままお渡し致しますわよう。」

「お気遣い無く。その言葉、全力でお返しします！」

黒き姫と橙の侍女。背中合わせの少女達がカードの剣を引き抜く。

2人の目にはもう、迷いや怯えの色は無かった。

「くっそ……一体何が……」

「今ばかりはスマン猿小僧、こっちも何がなんだか——」

彼らの狙いが姉弟であることに気が付き、早々にその場を離れようとしたクラドだったが——Dパッドを付けたその手に、逃すまいと紅い鎖が絡まる。

「げっ!？」

「そう易々と逃すとも?」

クラドのDパッドは残念ながら、しっかりとデュエルモードへと起動していた。

D・ホイールに跨ったまま、ライダースーツの男がゆつくりとディスクを掲げる。

「か、勘弁してくれ……俺は実戦に関しちや弱々で無害な男なんだよ……な?」

「ならん。カードを抜け」

両手を挙げて降参のポーズをとるクラドだったが、ライダースーツの男は無常にも頭を振った。

（参ったな、サレンダーしたら何が起こるか分かったもんじゃねえし……仕方ねえ、ここは——）

クラドが一瞬の間に思考を巡らせていると、背負われたままの隣路がペチペチと頭を叩いた。

「おい、いいから準備しろ。俺がやる」

「はあ!? 冗談言うな、誰がお前何かにディスクを渡すか!!」

「バカ、そうじゃねーよ!! 俺が『頭』になるって言ってるんだ!! お前は俺の言うとおりにカードを動かしてりゃいい!!」

状況が状況だけに、しばらく悩んでいたクラドだったが……長く溜

め息をついて、うな垂れながら呟いた。

「……デツキにあれこれ文句とか言うの、無しだからな？」

「何だっつていい！ 早く構えろ売買屋！」

変則タッグとも言える、奇妙な組み合わせが誕生した頃。

「さて、そういう訳で申し訳ないけれど……貴方達には私たちの相手をお願いするわね？」

藍と蓮は、煽里を囲む残りの2人と対峙していた。

「……アイドル風情が何の用かな？」

ライダースーツ達は藍と蓮に向き直りつつ、手元のパネルを操作してデュエルモードへと移行する。アイドルと知りつつ刃を向けることに躊躇いは感じられない。

そんな彼らの反応に、蓮がニツコリと営業スマイルを浮かべて言った。

「あれ、ご存知でした？ 嬉しいな〜」

「ああ……地獄から這い上がってきた『汚らしい』スキャンダルアイドルとしてな」

煽り気たつぷりの、嫌味たらしい敵意の塊。

蓮も芸能人だ、ここへ至るまでに何度受けたか知らない侮辱ではあったが……それを平然と受け流せるかどうかと問われれば、答えはNOである。

「……先輩。私、ほんのちよ〜とだけカチンときちやいました」

笑顔を浮かべたまま、背後に渦巻く群青のオーラは禍々しく変化し、刃のように研ぎ澄まされていく。

そんな蓮の隣で、藍が一步前へと踏み出して言った。

「手伝うわ蓮。ホントは白面そのひとの女から引き離して終わりにするつもりだったけど——」

カチリ、と美しい装飾が施された貝型のディスクに青い火が灯る。

「本格的に、潰したくなっちゃったから」

押し寄せる津波のようなプレッシャーに僅かながら気圧されつつ、男達はそれぞれ紅い鎖で標的をロックした。

「あーあ、先輩まで怒らせちゃいましたね。ま、せいぜい後悔して下さい?。」

あつという間に出来上がった5VS5の構図。いつしか人々の悲鳴や喧騒は、しんと鳴り止んでいた。

「さあベル、ナンパ男共をひっぱたきますわよ!」

「了解ですつ!」

「テメエらがどこの誰かは知らねえが気に入らねえ、爆殺の刑だ!!」
「そうだなあ、出来るといいなあ!!」

それぞれの思惑を胸に、その一声は同時に打ち上がった。

「」「」「決闘(デュエル) ツ!!」「」「」

「ぐあつ!」

黒のライダースーツに身を包んだ男が地を転がる。

LPの表示は0、既に勝負はついた後だ。しかしそれはベル達が交戦を始めた同時刻でありながら、遠く離れたダウンタウンの街中での出来事であった。

点滅するネオン、散らかったままの廃棄物。中途半端に再現された拳句、首都『リユース』の発展と共に忘れ去られた『遺跡』の街並みは、どこか荒廃した雰囲気漂っている。只でさえ人通りの少ない路地から一歩外れたそこは、人目の届かぬ無法地帯だ。

「……勝負は付いた。約束を果たして貰おうか」

抑揚の無い声が冷たく言い放たれる。決着の瞬間に紅い鎖を断ち切り、絶命を逃れたことを声の主は見逃していなかったのだ。

男の襟元を掴んで強引に立ち上がらせると、冷たい声の主は顔を近づけて言った。

「案内しろ。お前達の言う、シスター巫女の下へ」

背後で消え行く白き龍の威圧をそのままに、ポーカーフェイス無表情の男——ユウ
||キリサキは男のフルフェイスヘルメットを引き剥がす。

「な、何が目的だ……」

苦悶の表情を浮かべるソレは、やはり自分と同じ『東洋人じみた』顔
立ち。紅の地の人間であることは明白だったが——。

「答える義理は無い。むしろ俺が、その問いを返したい位だ」

周囲に散らばる『ソレ』を一瞥する。

白い狐の面に、赤い上着——ユウの周りにはそれまで『敵』と認識
していた人間たちが息絶えたまま転がっていた。

ユウが手を下した訳では無い。恐らくは彼こそ、この場においては
『イレギュラー』な存在だったのだろう。

「……不要になったモノを排除した……ただ、それだけのことだ」

荒い呼吸を整えながら、男が意味深な答えを返した。

妙なワードに、ユウが首を傾げる。

「……不要？」

「ああ……」

首元を掴まれながらも、男は不敵な笑みを崩さない。

「全ては世界の修正のため……元より我らに『未来』など無い……」

「？ 何を言ってる——」

疑問を返すユウだったが、ふと不穏な気配を感じ咄嗟に後ろへ飛び
退いた。

瞬間、ゆらりと伸びる紅い鎖が、倒れ伏した白面のディスクへと繋
がったのが見えた。

「《火炎地獄》……発動」

男の身体は、あつという間に炎に包まれた。

残り僅かだった男の命は、ライフたった500のデメリットダメージで簡
単に焼き切れてしまったらしい。

本来は対戦相手へ向かう筈の1000ポイント分の火力は、あらぬ
方向へと飛んでいく。

「……敵の手に掛かって死ぬのは不名誉、ということか」

メラメラと燃え上がる炎の中に残る、僅かな人の輪郭に向かって眩くも……答えはもう返つてはこない。

(……何が起きている?)

燃え盛る男の姿をしっかりと目に焼き付けながら、ユウは自らに押し掛かる正体不明の影に戦慄を覚えたのだった。

「わたしは、手札から《トリオンの蟲惑魔》を召喚して効果を発動！

デッキから《奈落の落とし穴》を手札に加えます！ カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

蜻蛉の幼子が地面を抜けて飛び出す。

後攻の1ターン目としてはあまり嬉しくない動き出しであったが、それも戦略の内だ。

「ならば伏せカード発動、《サイクロン》。セットされたそのカードを破壊する」

掛かった、とベルは小さく舌を出した。

「残念でした。私が伏せたカードは——」

一陣の風がベルの場を駆け抜けた刹那、けたたましく警報を鳴らして赤い球体形のロボットが無数に飛び出していく。

「罨カード《セキュリティ・ボール》！ あなたの場の《ヴォルカニック・ロケット》を破壊します！」

このパターンの戦術は、もはやベルの十八番だ。

愛らしい姿に惑わされ少しでも気を緩めれば最後、その僅かな隙を突いて『全力』の毒牙が猛威を振るう。

そんなベルの後ろでは、幽霊姫アンリエールが順調にその手を詰めていた。

「★3のアルカードでエクシースチェンジ、★4の《ゴーストリックの駄天使》を守備表示でエクシース召喚。その効果で《ゴーストリック・アウト》を手札に加え、カードを1枚伏せてターンを終了致しますわ」
優雅なエンド宣言を言い放つアンリエールの表情は余裕に溢れて

いたが……早くも相手のデッキを特定するカードが明かされている手前、その胸中は穏やかではない。

相手に見せ付ける形で『対策』を示したものの、顔色が伺えぬその装いからは一切の情報が伝わってこない。

どこからか漂い始める不気味な空気……そしてその不安は、声色の変わらない男の声で現実と化す。

「では、私のターンだ。ドロー、手札より永続魔法《ブレイズ・キャノン》を発動」

やはり来た——しかし何故？

ここですかさず、アンリエールは先のターンで伏せた罫を発動させた。

「させませんわ！ 手札の《ゴーストリック・マリー》を見せて罫カード《ゴーストリック・アウト》を発動！ このターン、私の《ゴーストリック》カード及び裏側守備表示のモンスターはカードの効果の対象にならず、破壊もされません！」

ブレイズ・キャノンはその性質上、相手モンスターを対象にとる必要がある。アンリエールの場には駄天使が1体のみだ、少なくともこのターンで『火を吹かれる』ことは無い筈……。

そんなアンリエールの思考を嘲笑うように、男の手は静かに伏せカードへと向かった。

「ならばこちらも、罫カード《ナイトメア・デーモンズ》を発動させて貰おう」

(——っ、そういうことですか)

こちらの動きも、相手にとっては全て計算の内——流石に大口を叩くだけのことはあると、アンリエールは歯噛みする。

「場の《ヴォルカニック・ロケット》をリリースし、貴様の場に3体のナイトメア・デーモン・トークンを攻撃表示で特殊召喚する」

《ナイトメア・デーモン・トークン》

☆6／闇属性／悪魔族／ATK 2000／DEF 2000

トークンとしては破格のステータスを持つ3体の悪魔達が、棒のよう

うに細い手足をバタつかせてアンリエールのフィールドで楽しそう

に踊る。

駄天使は鬱陶しそうに横目で睨みつけていたが、彼らの『真価』を知るアンリエールは自然と身構えていた。

「これで標的は揃った。手札から《ヴォルカニック・バックショット》を送り、ブレイズ・キャノンの効果を発動」

三つ脚に支えられた銀色の単砲台、その銃口がデーモン・トークンへと向けられる。

しっかりと照準がセットされると、砲台の弾倉へ飛び込んだ三つ首のトカゲのようなモンスターが炎を纏って発射された。

「相手モンスター1体を選択し、破壊する！」

着弾したデーモン・トークンは断末魔の叫びを上げながら爆散し、その余波を容赦なくアンリエールへと叩き付ける。

「ぐっ……!!?」

「バックショットは墓地へ送られた時、相手に500のダメージを与える。並びにナイトメア・デーモン・トークンの効果も発動、被破壊時に自身のコントローラーへ800ポイントのダメージを与える」

渦巻く炎が、幽霊姫の身を焦がしていく。

「アンリエール」LP4000↓2700

「あぐっ……!!」

「更に墓地へ送られたバックショットのもう1つの効果を発動。デッキから2体の《ヴォルカニック・バックショット》を墓地へ送ることで、相手フィールド上のモンスターは全て破壊される」

駄天使は《ゴーストリック・アウト》の効果に守られ被弾することはなかったものの——両脇でバタバタと騒いでいた迷惑な隣人達は降り注ぐ火の雨に打たれ爆散。

きやーつと耳を塞いで逃げ回るその姿は可愛らしかったが、主人であるアンリエールへと襲い掛かるダメージ量は凄まじい。

「ナイトメア・デーモンズが更に破壊されたことで1600、そしてバックショット2体が墓地へ送られたことで1000ポイント……合計2600のダメージを受けて貰おう！」

全てが灼熱で構成された紅蓮の暴風雨がアンリエールを襲う。

「つあぐ……ッ!?!」

【アンリエール】LP2700↓100

「つ……て、手札の《ゴーストリック・マリー》の効果……デッキから《ゴーストリックの雪女》を裏側守備表示で特殊召喚しますわ……!!」
《ゴーストリックの雪女》

☆2／闇属性／魔法使い族／ATK 1000／DEF 800
息も絶え絶えに辛うじてアンリエールが呼び出したのは、か弱き氷の悪戯好き。

雪女は不安そうに主の顔を伺いながら、裏向きとなったカードの中へと身を隠した。

「アンリさんっ!?!」

「余所見をしている暇など与えんぞ小娘、こちらは《ブレイズ・キャノン・トライデント》を墓地へ送り、《ヴォルカニック・デビル》を特殊召喚!! 貴様にも同じ苦痛を与えてやる!!」

ブレイズ・キャノンの上位種である三連砲をコストにして呼び出されたのは、黒く艶のある溶岩石を鎧のように身に纏う鋭利なシルエツト。

その姿はまさに『怪獣』と呼ぶに相応しいものだった。

《ヴォルカニック・デビル》

☆8／炎属性／炎族／ATK 3000／DEF 1800

頭上からもうもうと炎を吹き出し、雄叫びを上げる。

そのレベル、攻撃力から「ヴォルカニック」モンスターの切り札だとベルは直感したが——魔法カードを踏み台として突如現れたソレに動揺が隠せない。

「手札から通常召喚、《ヴォルカニック・エッジ》!!」

《ヴォルカニック・エッジ》

☆4／炎属性／炎族／ATK 1800／DEF 1200

デビルよりも二周りほど小さな体躯の、鋭利な金属甲殻に身を包んだ恐竜のようなモンスターが続けて戦場へ降り立つ。

「バトルだ、まずはデビルでトリオンの蟲惑魔へ攻撃!! 『ヴォルカニック・キャノン』!!」

煮えたぎる溶岩の火球が、開かれた凶悪な顎に収束していく。

比喩ではなく『大砲』と化したソレは怒轟を伴い、蜻蛉の少女へ向かって打ち出された。

「あうッ……!!」

【ベル】LP4000↓2600

溶岩大砲の熱波がベルの身を焦がす。

苦悶の声を上げる少女に対し、ライダースーツの男は冷淡に宣言を下した。

「続けて、エッジでダイレクトアタック……!!」

既に、ベルを守る壁は消失している。

デビルの攻撃による熱すら冷めぬまま、エッジが放った小型の火球は寸分変わらずベルへ命中した。

「うあああああッ!!」

【ベル】LP2600↓800

肌を焼く熱に意識を明滅させながらも、ベルはおぼろげに理解した。

採用しているカードこそ違えど、彼らのデッキは高速で相手のライフを削り切ることだけに特化させて調整されていることを。

勝利を目指すのはデュエルの大前提だが、彼らの戦い方からはもつと別の意図を感じたのだ。

彼らが目指すのは『勝利』ではない。

喜怒哀楽の感情を削ぎ落としたもつと瞬粋な——いわば『敵の敗北』。

「ターンエンドだ……」

敵を殺す。

ただそれだけを目指し、カードを引く。

フルフェイスの奥にあったのは、そんな淡白な戦意だった。

「……メイン2、《ヴォルカニック・エッジ》の効果を発動。攻撃宣言

を行っていないため、相手に500ポイントのダメージを与える」

【クラド&燐路】 LP2500↓2000

「うあちちっ……!!」

「クソ……コイツら、ちよこまかどムカつくカードばかり使いやがって……!!」

一方。【スクラップ^{クラドのデッキ}】を操って戦っていた燐路も、ベル達とほぼ同じような状況に陥っていた。

ブレイズ・キャノンからのバックショット全体破壊、加えて1500ものバーンダメージ。

ナイトメア・デーモンズとのコンボこそ無かったものの、ロケットに加えてエツジまで追加で召喚され、一斉攻撃を何とか《バトルフェーダー》で凌いだところだった。

「お、おい？ 本当に何とかなるんだろーな……!!?」

「運が良けりやな。死んだら死んだでそんなときだろ」

すっかり怯えた様子^のクラドに、燐路がつまらなそうに言葉を返す。

「そんなとき、で死ぬのは俺なんだよ!? ふざけんな!!」

「つせーな、テメエも男なら覚悟くらい決めろ!!」

口論する2人に、ライダースーツの男は溜め息をつきながら淡白に終了を宣言する。

「……ターンエンド。貴様らのターンだ」

モンスターカードが多いのか、相手の場に伏せカードは無い。

攻めの姿勢が得意な燐路は、この機を逃すまいと目を光らせた。

「へっ、ようやく回ってきたか！ じゃあ行くぜ、俺のターン！」

「くっそ……ええい、こうなりやヤケだ!! ドロオオオオツ!!」

天を指差す燐路を背負い、クラドが光の軌跡を描きながらカードを引き抜く。

「……おっ」

ドローカードを確認した燐路は、ニヤリと口角を上げた。

「運が向いてきやがったぜえ？ 俺は手札から《スクラップ・キマイラ》を攻撃表示で召喚ツ!!」

「は？ し、召喚ツ!!」

《スクラップ・キマイラ》

☆4 / 地属性 / 獣族 / ATK 1700 / DEF 500

獅子の頭に毒蛇の尾を持つ、廃材の獣が翼を広げてフィールドへと降り立つ。

その金切り声に導かれ、まだ燃え残っていたモンスターの破片がズブズブと寄り集まっていく。

「効果により、墓地から《スクラップ・ソルジャー》を特殊召喚する!! さあ行くぜ、俺は☆4のキマイラに、☆5チューナーのソルジャーをチューニングツ!!」

「お、おう、チューニングツ!!」

《スクラップ・ソルジャー》

☆5 / 地属性 / 戦士族・チューナー / ATK 2100 / DEF 700

墓地より復活を遂げた寄せ集めの機械兵が即座に5つの緑輪となつてキマイラを包んでいく。

合計レベルは9。たった2枚しかないクラドのエクストラデッキでその条件に当てはまるカードは、1枚しかない。

「悪衣悪食、因果応報!! 輪廻の理を牙に変え、地上の亡者を蹂躪しろ!!」

光の柱を裂き、蒸気の霧がフィールドを包む。

「シンクロ召喚!! 《スクラップ・ツイン・ドラゴン》!!」

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》

☆9 / 地属性 / ドラゴン族・シンクロ・効果 / ATK 3000 / DEF 2200

白い闇の中でゆらりと輝く緑の眼光は4つ。二頭を持つ屑鉄の竜が姿を現した。

「ソッコで効果発動!! 俺の場のバトルフェーダーを破壊し、テメエの場にいるヴォルカニク2体を手札に戻すぜ!!」

ツイン・ドラゴンが咆哮を上げると共に、全身から吹き上がった蒸気が2体のヴォルカニクモンスターを押し戻していく。

「まだ終わりじゃねーぜ？俺はカードを1枚伏せ、魔法カード《エクステンジ》を発動!!俺の手札は1枚だけだ、コイツをくれてやるよ!!」

燐路に支持され、クラドが投げ渡したのは《サイクロン》。

万能カードではあるが、肝心の相手のター^まンは発動することすら出来ない。

「モチロン、テメエの手札はしつかり見させて貰うぜ？」

「くっ……」

エクステンジで公開された手札の中に、攻撃を防ぐカードは無かった。

攻撃を確実に通す為に手札を確認したのかと思いきや……場に伏せた1枚のカードが示す意味に気が付き、クラドはデュエル中ということすら忘れて「あ、成程な」と感心したように呟いた。

「けっ、シケた手札だな……なら、俺が頂くのは手札に戻した《ヴォルカニック・エツジ》だ!!」

苦悶の表情を浮かべながら、男は渋々カードを投げ渡す。

「さらに俺は、場に伏せた《二重召喚(デュアルサモン)》を発動!!

《ヴォルカニック・エツジ》を追加召喚し——」

手札にも、そして相手の場に伏せられたカードも無い。

ギリリと大きな瞳に火を灯して、燐路が叫んだ。

「お待ち兼ねのバトルだ!!2体のモンスターでダイレクトアタックッ!!」

絡みつくようにうねる蒸気のプロレスと、火球の追撃が男へと放たれる。

ライフを削ることに特化したライダースーツの男は何の抵抗もせず、その攻撃を受け入れた。

「グッ……がああああ!!」

【??】LP4000↓0

吹き飛び、倒れ伏した男の様子にクラドは気が気ではなかったが——そんな彼の背中にしがみついていた燐路は、親指で自らの首を掻き切る様な仕草をして言い捨てた。

「ヒヤハハハツ!! 爆殺の刑、執行完了だぜ!!」

第43話 ガールズ・サイド

【藍】LP100

「これでターンエンド。さあ、貴様のターンだぞ？」

バックショットと《ナイトメア・デーモンズ》のコンボバーン。

その銃口は藍に対しても同様に向けられ、容赦なく火を吹いていた。

(このダメージ……確かに普通のARとは違う……!!)

ヒリヒリと肌を焼くその感覚に苦悶の表情を浮かべながらも、藍はデツキのカードへ手を掛けた。

「威勢が良いのは口だけか？ フン、所詮はアイドル崩れだな」

半笑いの混じった、小馬鹿にしたような男の口調が藍の神経を真つ向から逆撫でする。しかし彼女の胸を絞め付けているのは、そんな侮辱でも肌を焼く痛みでも無かった。

「私の、ターン……」

脳裏を過ぎる、影依達シャドールの非道な猛攻。

ズタバロになってベッドに横たわった2人の姿が、今も鮮明に浮かんでくる。

「フン、あくまで最後まで足掻くか」

悪趣味なフルフェイスの奥など見えずとも分かる。敗北などあり得ないと余裕の表情で佇んでいる筈だ。

既に自分が『敗北』という名の海流に、あらぬ方向へ流されているとも知らず。

「……ドロー」

藍はドローした手札を『見ず』に、そのまま端へと追いやった。

「……私は、永続魔法《天変地異》を発動。お互いのデツキを表側にし
てデュエルを進行するわ」

「何をし出すかと思えば、今更……」

「そして伏せていた罫カード発動、《ゴブリンのやりくり上手》」

男の言葉を振り切るように、藍は宣言を流していく。

「デッキからカードを1枚ドロ―し、墓地に存在する《ゴブリンのやりくり上手》の枚数分……つまり1枚をデッキの一番下に戻す。私に戻すのはドロ―した《リチュアの儀式水鏡》よ」

「はっはっは!! 何だソレは、せっかく手札に加えた儀式魔法を戻すとは!!」

稚拙なプレイングだと、フルフェイスの男はたまらず吹き出した。天変地異の効果で確認できる、藍のデッキトップに表示されていたのは《神の宣告》。もう1ターン早ければ、次のターンで自分が引くことになる《ヴォルカニック・エッジ》の引導くらいは防げたかもしれないが――。

「アドバンテージの概念すら皆無……貴様らにデュエルを指南した奴の顔を、是非とも拝んでみたいものだなあ?」

実に滑稽。所詮は元アイドルが知名度目当てに習った、付け焼刃程度のデュエルだ。

ケラケラと笑い過ぎて頬骨が痛くなった頃……ふと、男は寒気を感じた。

見てはいけない、と獣の本能が警鐘を鳴らす。しかし顔を上げた男はしつかりと、その両目をもってソレを見てしまった。

「……拝めるかも、しれないわよ?」
くすり、と。

他に適切な表現がない為、辛うじて『微笑』と呼ぶしかないソレはあまりに冷たく。

長い前髪から覗く青い瞳は、ジツとフルフェイス越しの男を射抜いていた。

「な……」

言葉を詰まらせ、うろたえた様子の子の男の声を聞いて、藍の『微笑』は更に鋭利な形へ歪んでいく。

「手札から《リチュア・エリアル》を召喚、そして手札から装備魔法
ブラック・ペンダント
《黒いペンダント》を発動し、エリアルに装備」

《リチュア・エリアル》

☆4 / 水属性 / 魔法使い族 / ATK 1000 / DEF 180

現れたのは、黒のトンがり帽子を被った青髪の可憐な少女。

その首元には深紫の宝石が嵌められた、妖しげな輝きを放つペンダントが下げられていた。

《黒いペンダント》だと……?!? まさかッ!!)

藍の青い瞳に染め上げられていくように、男の顔から血の気が引いていく。

もつともそれは、皮肉にも男自身にしか自覚できない現象だった
が。

「クス、立派な腕をお持ちの貴方なら——この先はもう、分かるでしょう?」

冷たい『微笑』の口元が三日月に曲がる。

尖った牙も、長く伸びた舌もない。それでも尚おぞましい。

深淵だけがぽっかりと覗く、吸い込まれてしまいそうな闇がそこにはあった。

「ばっ……そ、そんな……!?!」

こんな得体の知れないモノに銃口を向けてしまった、そのときから。

既に自分は『詰んで』いたのだと、男は凍りついた頭で理解した。

白く、細い指がディスクを滑る。透き通るようなその仕草が、逆に恐怖を駆り立てる。

「魔法カード発動、《大逆転クイズ》」

男が見た絶望の未来は、見事にその形を成した。

「自分の手札とフィールド上のカードを全て墓地へ送り、デッキの一番上にあるカードの種類を宣言する。もしも宣言した通りのカードだった場合は……ああ、説明は野暮だったわね」

ゴウゴウと音を立てて現れた大渦が、フィールド上全てのカードを飲み込んでいく。

そんな中、男の前へちよこんと現れたエアリアルは、下げていた《黒いペンダント》を男の首へ通すと「ばいばい」と手を振って渦の中へ消えていった。

「ぐっ……クソ……ッ!？」

「天変地異が破壊されたことで、デッキは再び裏向きに戻るわ。そして私が宣言するカードの種類は魔法カード……名前まで言い当てましょうか？ 儀式魔法《リチュアの儀式水鏡》よ」

藍が言い当てたのは、先程《ゴブリンのやりくり上手》でデッキボトムへ……つまり現在のデッキトップへ戻したカード。

正解率は100%、不正だらけの八百長解答。こんなもの、最早クイズでも何でもない。

「——大正解。薄汚れた元アイドル^{わたし}には、相応しい逆転劇でしょう？ さあ、正解の特別ボーナスよ。《大逆転クイズ》が成功した場合、相手と自分はライフポイントを入れ替える！」

藍が掲げた儀式水鏡のカードから閃光が放たれる。

刹那——男は全身を炎で焦がし、膝を屈していた。

「ぐうッ……!？」

【??】 LP 4000 ↓ 1000

【藍】 LP 1000 ↓ 4000

対して、凜と佇む藍には傷1つ無い。

苦痛に呻く男と、冷たい微笑を浮かべる藍。両者の立場はまさに『大逆転』した。

「その顔なら、もう説明するまでもないけれど。《大逆転クイズ》の効果が全て処理し終えたところで墓地へ送られた《黒いペンダント》の効果を発動するわ」

「ま、待て……!!」

「——相手のライフに、500ポイントのダメージを与える！」

放たれた仕掛けは、もう止まらない。

敗者へ罰を与えるように——男の首に掛けられた魔女の呪いが、爆ぜた。

「ッがああああああ!!!？」

獣のような叫びを上げ、地面へと崩れ落ちた男だったが——決着の間際、紅い鎖はちやっかりとディスクから引き抜かれていた。

それを確認した藍はふうと短く溜め息をついて、ひとまずの勝利に

胸を撫で下ろしたのだった。

「さて、と。先輩の方も終わっちゃったみたいですし、コツチもそろそろ終わりにしちゃいましょうか？」

るん、と笑顔を向ける蓮に、優勢であるはずの男は微かに恐怖を覚える。

一瞬の内に倒れた仲間の姿は、まるで自身が迎える未来への暗示。

「私のターン、手札から《深海のディーヴァ》を召喚し、効果発動！」
《深海のディーヴァ》

☆2 / 水属性 / 海竜族・チューナー・効果 / ATK 200 / DE
F 400

地獄から舞い戻った歌姫が、まずは高らかに開幕を口ずさんだ。

硝子を鳴らしたようなその美声に同調し、水色のカードスリーブに保護されたデツキが軽快な音を立て歌姫のパートナーを導き出す。

「デツキから特殊召喚するのは、《海皇子 ネプトアビス》！」

《海皇子 ネプトアビス》

☆1 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 800 / DEF 0

歌姫の隣へ付き従うように現れたのは、逞しい身体に三叉の槍を構えた美麗の皇子だった。

深く艶のある黒髪をなびかせて柔和に微笑むその姿は、まさに歌姫のパートナーと呼ぶに相応しい。

「ネプトアビスの効果が発動、デツキから《海皇の竜騎隊》を墓地へ送り、《海皇の狙撃兵》をデツキから手札へ。更に水属性モンスターの効果によって墓地へ送られたことで竜騎隊の効果も発動、海竜族モンスター《氷霊神ムーラングレイス》を手札に加えます」

ネプトアビスが三叉の槍を振るい、飛び交う海皇の猛者達を自在に操っていく。

結果、蓮の手札には2体ものモンスターが補充されていたが——
せつかく並んだ2体のモンスター、これで終わるはずがない。

「さあ、いきますよ？ 私は☆1のネプトアビスに、☆2チューナーの
ディーヴァをチューニング！」

寄り添い、手を握り合う2人の竜麗人が、緑輪に導かれ溶け合っ
ていく。

「寵愛授かりし竜の落とし子よ、我が願いの下に来たれ!! 《たつの
こ》ちゃんをシンクロ召喚!!」

光の粒子を祝福代わりに振りまいて、可愛らしい朱色の竜童が姿を
現した。

《たつのこ》

☆3 / 水属性 / 幻竜族・シンクロ・チューナー・効果 / ATK 1
700 / DEF 500

「し、シンクロモンスターのチューナー!? それも『幻竜族』だと……
!?!」

男の驚愕は、ほぼ時同じくしてデュエルを終えたクラウドと藍の耳に
も届いた。

「なっ……ちよつと蓮!?! そのカード一体どうしたの!?!」

「ふふん、OBな先輩にはチョット酷なお話ですが。この間の大会の
とき、仲良くなったカード製造のスポンサーさんからこっそり頂い
ちやいました♪」

「うへえ……『コネ』ってやつか……なんて羨ましい」

どこか納得したようで、それでいてげっそりと口端を下げる藍とク
ラウド。

誇らしげに張った胸をそのままに、蓮はびしっと指を男に向かって
突きさした。

「という訳で、申し訳ないですが……せっかくの最新カード、バツチリ
『宣伝』させて頂きますよ? 《たつのこ》ちゃんの効果を発動!! 手
札のモンスター《海皇の狙撃兵》1体をシンクロ素材として扱い、シ
ンクロ召喚しちやいます!!」

「何ッ!?!」

手札のモンスターを素材とするチューナーモンスター。

その特異性に驚く間も無く、パイと甲高く鳴いたたつのこは3つの

緑輪となつて狙撃兵の姿を変質させてく。

「古の守護司りし獣よ、我が願いの下に來たれ!! シンクロ召喚、《氷結界の虎王ドウローレン》!!」

《氷結界の虎王ドウローレン》

☆6 / 水属性 / 獣族・シンクロ・効果 / ATK 2000 / DEF 1400

身を裂くような冷気を纏い、薄青の体毛を振るわせ四足の猛虎が空高くへと吼えた。

重厚な黒い鎧は脚を踏み出すたびにカチリと音を鳴らし、金の瞳は獲物を縛り付ける。

「これで墓地にはディーヴァ、ネプトアビス、竜騎隊、たつこのこちゃん、狙撃兵の水属性モンスターが5体……よつてこのカードを手札から特殊召喚できます。全てを氷点下へと誘いなさい、《氷霊神ムーラングレイス》!!」

《氷霊神ムーラングレイス》

☆8 / 水属性 / 海竜族・効果 / ATK 2800 / DEF 2200

莊嚴な角を振り回し、鎧を纏つた海竜の長が雄叫びを上げる。

かつて藍を窮地へ追いやった冷気の刃が、フルフェイスの男へと振るわれた。

「ムーラングレイスの特殊召喚成功時、効果発動! 貴方の手札を2枚ランダムに選択して捨てさせて頂きます!」

「くっ……!?!」

選ばれた2枚の手札に氷の刃が突き刺さり、強制的に墓地へと送られた。

その中には奇しくも——攻撃を防ぐための唯一の手段であつた《バトルフェーダー》があつた。

牙を向くモンスター達の合計攻撃力は……4000という男のライフを軽く飛び越していた。

「バトル!! 2体のモンスターでダイレクトアタック!!」

放たれる冷気の津波。

男は辛うじて鎖を解いたものの……背を向けてアクセルを踏み込む前に、D・ホイールごと吹き飛ばされていた。

《炎帝近衛兵》

☆4 / 炎属性 / 炎族・効果 / ATK 1700 / DEF 1200

「このカードの召喚成功時、効果を発動。墓地の《ヴォルカニック・バックショット》3枚と《ヴォルカニック・ロケット》をデッキへ戻し、カードを2枚ドロウする」

長く伸びた半身をうねらせ、紅鱗の竜戦士が墓地を意味する紫の魔法陣の中へと爆炎を送り込んでいく。すると命の源を吹き込まれた『弾薬』達は、再び男のデッキへと舞い戻っていった。

補充された手札は——《ヴォルカニック・エッジ》《ヴォルカニック・バックショット》の2枚。ここでバーンダメージを与えられる魔法カードが来ていれば、決着まで漕ぎ着ける事が出来たのだが。

「これで、ターンエンドだ」

気が付けば、既に3人ももの同胞が敗れている。彼らとてそれなりに死線を潜り抜けてきた、ということだろう。

手を抜いたつもりはない。だが、たった100のライフをこのターンで削り切ることが出来なかったその事実が、優位に立つ男の思考に影を落としていく。

世界の行く末すら決定してしまう『このゲーム』に、何か不可思議な力が働いていることを男はよく知っている。だからこそ——。

「……私のターン、ですわね？」

にやりと不敵に浮かんだ『幽霊姫』の微笑に、男は自らの運命を悟った。

「参ります。まずは焦土へ麗しき花々を……《ゴーストリックの雪女》を反転召喚し、更に手札から《ゴーストリックの魔女》を召喚しますわ」

《ゴーストリックの雪女》

☆2／闇属性／魔法使い族・効果／ATK 1000／DEF 800

《ゴーストリックの魔女》

☆2／闇属性／魔法使い族・効果／ATK 1200／DEF 200

白髪の小さな和服美人、活発そうな金髪小魔女、桃髪のモノクロ羽天使。

アンリエールのフィールドへ3人の多種多様な女性ゴーストリックが揃う。

目にも華やかな光景だが、男は陰しく眉を寄せて呟いた。

「☆2のモンスターが2体、か……」

「ご名答ですわ。私は、☆2の雪女と魔女でオーバレイ！2体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを構築！」

薄青の闇の中、2体の少女が楽しげに虹色の渦へと飛び込んでいく。

パツと花開いたそれはまるで、夜池に咲いた黄泉の華。

「魍魎嗤う怪異の夜、永久に続く良き悪夢を……エクシーズ召喚!!

お出でなさい、★2 《ゴーストリック・サキユバス》!!」

《ゴーストリック・サキユバス》

★2／闇属性／魔法使い族・エクシーズ・効果／ATK 1400
／DEF 1200

眠そうに目を擦りながら、漆黒に染まった悪魔の翼を生やした少女がフィールドへと降り立つ。あどけない容姿ながらも、妖しげな魅力を放つ赤いネグリジエが夢魔の名を存分に示していた。

「……随分とか弱いモンスターが出てきたものだ」

「慎ましい、と言って頂きたいですわね？ サキユバスのモンスター

効果、オーバレイ・ユニットORUを1つ取り除くことで、フィールド上の《ゴースト

リック》の合計攻撃力以下のフィールド上のモンスター1体を選択し、破壊しますわー！」

ぱちんと指を鳴らして命令するアンリエールとは対照的に、サキユバスはあまり気分が乗らなそうに欠伸を吐いたものの……のそりと

伸ばしたその五指の間に、炎帝近衛兵の虚像がぼんやりと浮かび上がった。

「対象は勿論、貴方の場のモンスター……お沈みなさい、『Paradise Waltz!!』」

サキュバスがぐつと力を込めると、炎帝近衛兵の虚像は硝子のように砕け散った。

悪夢は現実へ、場に存在する炎帝近衛兵も虚像と同じく破壊される。

「そしてサキュバスを素材として、2体目の《ゴーストリックの駄天使》へとエクシーズチェンジ！」

ひと仕事終えたサキュバスが、眠り込むように虹色の渦へと飛び込む。

光の華を散らして飛び出してきたのは桃髪の駄天使。鏡写しのように並び立つ駄天使達は嬉しそうに手を合わせて喜んでいるが、対峙する男としてはまさに『悪夢の続き』だった。

相手の場のモンスターはガラ空き。このまま2体のダイレクトアタックを受ければ——4000のライフは、一気に吹き飛ぶ。

「……そうか」

敗北は死。しかし男に恐怖はなかった。

鎖を解く訳でもなく、冷静にディスクへと手を掛ける。

「ターンを渡した時点で勝負は決まっていた、ということか」
「潔いのですわね？ 私も目覚めが悪そうですから、素直に降参して頂けますか？ 聞きたいことは山ほどありますし——」

アンリエールが肩をすくめてそう提案した、瞬間。

男は何を思ったのか、デッキの中ほどから1枚のカードを取り出しディスクへと叩き付けた。

「なっ……!?!」

あまりの行動に、アンリエールは思わず言葉を失う。

厳密に定められた規則の下で戦うからこそ、その勝敗に『力』が生まれる。いくら敗北が死に繋がる『闇』の中とてそんな無法が許される訳では無い。

結果、アンリエールのディスクへと表示されたのは、本来ならば審判員機構が下した筈の『JUDGE KILL』の文字だった。

【??】LP4000↓0

無法を働いた枷として、男のライフが全て失われる。

不可解な表情を浮かべるアンリエールへ、男は小さく呟いた。

「……悪いな。我等とて駒としての誇りはあるのだよ……」

そのフルフェイスの奥でどんな表情を浮かべたのだろうか。

男はD・ホイールから崩れ落ちると、そのまま永遠に続く悪夢の中へと沈んだのだった。

* * *

アンリエールが逆転劇を開始する頃と時同じくして、背後で戦うべルもまた反撃の狼煙を上げようとしていた。

「わたしのターン、手札から《ファイヤー・ハンド》を召喚！」

《ファイヤー・ハンド》

☆4／炎属性／炎族・効果／ATK 1600／DEF 1000

灼熱の凶獣に対峙する、炎の巨腕。

攻撃力こそ劣るもの……蟲惑魔と共に受け継いだこのモンスターは、ベルが慣れ親しんだ戦法を生かせる効果を持っていた。

「バトル、ファイヤー・ハンドで《ヴォルカニック・エッジ》へ攻撃！」

「チツ……無駄な足掻きを！ 迎え撃て、ヴォルカニック・エッジ！」

五指を開いて掴みかかろうとしていたファイヤー・ハンドを、エッジの放った火球が粉々に打ち砕く。その余波は勿論、ベルへと襲い掛かったが……。

【ベル】LP800↓600

「つ……!! でもこの瞬間、破壊されたファイヤー・ハンドの効果を発動!! 相手の場のモンスター1体を選択して破壊します!! 対象は

――
爆砕したファイヤー・ハンドの残骸がゆらゆらと漂い、標的を定める。

残骸は、無数の火礫となつてモンスターを襲う。ベルが下した標的は、攻撃力の高いデビルではなくエッジの方だった。

（成程……残り僅かなライフを守るべく、バーン効果のあるエッジを潰したか）

そう思案するも、手札のカードへ目を落とす男の内心はにやりとほくそ笑んでいた。

「更にファイヤー・ハンドが破壊されたことで、デッキから《アイス・ハンド》を準備表示で特殊召喚！ カードを『1枚』伏せて、ターンエンドです！」

《アイス・ハンド》

☆4 / 水属性 / 水族・効果 / ATK 1400 / DEF 1600

不安そうにターンを渡してきたベルを見ながら、男は内心で嘲笑を浮かべていた。

（伏せカードが1枚……とはいえあれは十中八九、前のターンで手札に加えた《奈落の落とし穴》。アイス・ハンドで壁を張り、奈落で召喚を牽制しつつ返しのターンを防ごうという魂胆か……実に可愛らしい計略だが——）

勝利を確信し、デッキへと手を掛ける。

「俺のターン、ドロロー。残念ながら狙いは丸見えだぞ小娘？ 俺は手札からこのモンスターを攻撃表示で特殊召喚させて貰おう……貴様の場のアイス・ハンドを生贄としてな!!」

氷塊の巨腕を墓地へ沈めて現れたのは、大きな双翼を持つ竜のような姿をした《ヴォルカニック・デビル》と同型の——鋭利なシルエツトを持つ怪物だった。

《ヴォルカニック・クイーン》

☆6 / 炎属性 / 炎族・効果 / ATK 2500 / DEF 1200

「わたしの場に、モンスターが……!?!」

「ヴォルカニック・クイーンは相手フィールド上のモンスター1体をリリースし、相手のフィールド上へ特殊召喚できる！ ククク……その《奈落の落とし穴》を発動させたければするがいい、デビルの直接攻撃をその身に受けたければな!!」

勿論、ベルがそんな選択を出来る訳がない。

攻撃表示で召喚された自らの下僕に、男はデビルの砲口を向けた。

「これで終わりだ、バトル!! デビルでクイーンへと攻撃!!」
放たれる灼熱の巨砲。

迫り来る死の一撃を前に——ベルは、くすりと口端を吊り上げた。

「——駄目じゃないですか。罨はちゃんと、警戒しないとっ!!」

ヴォルカニック・クイーンへ放たれた圧倒的な熱量の塊は、突如として現れた紫色の筒の中へと吸い込まれる。

「馬鹿な……何故そのカードが!?!」

そのあまりに古典的な罨の登場に、男は愕然と目を見開いた。

「罨カード《魔法の筒》……相手モンスターマジック・シリンダーの攻撃を無効にし、そのダメージを相手に跳ね返します!!」

二対の筒の片方から発射されたデビルの攻撃が、そのまま男へと着弾する。

身を焼きつくさんばかりの炎の本流が、男のライフを一気に削り取った。

「ぐがあああああ!?!」

「???」 LP4000→1000

かろうじてD・ホイールのハンドルを握り締め、持ちこたえた男だったが……擦れた声が一番に問い掛けたのは至極単純な疑問だった。

「……くっ、何故、そんなモノがあるなら最初から伏せなかった……?」

もつともな男の疑問に対し、ベルは胸を張って答えた。

「こうでもしないと、アナタが罨に引つかかってくれないと思ったからです」

「何……!?!」

「もし、わたしが罨を2枚も伏せてたら『落とし穴の他にも罨があったのか』って警戒しません? 逆に言えば、《魔法の筒》を《奈落の落とし穴』

し穴』だと思ってくれば必ず攻撃してくれる……あの白面さんに勝っちゃうような人達なんですから、わたしも全力でココを使ったんです」

こつん、と自分のこめかみを小突いて、ベルはにっこりと微笑んだ。「もつとも、『このコ』が特殊召喚されたのは予想外でしたけど……今のわたしには、とつても素敵なプレゼントになったみたいですね？」

ベルのディスクへとセットされたクイーンの効果。

自分フィールドのカード1枚を墓地へ送ることで、相手——つまりベルから見た男へと1000ポイントのダメージを与える効果がある。

男の残りライフは奇しくも1000、そしてベルの手札には弾薬代わりの《奈落の落とし穴》。狙いが完全に裏目となった男の顔は、憎悪に歪んでいた。

「チツ……」

ふと見れば、幽霊姫と戦っていた同胞が自決をしたようだった。

組織に妄信的だった彼らしい最期……立派なモノだ、命が惜しい自分達とは違う。

そうと決まれば男の決断は早かった。荒い呼吸を整えながらも紅い鎖を解除しアクセルを握る。

「なっ、ちよつと!？」

光の粒子となって消えていくモンスター達。当然、肩透かしを喰らったベルは驚いて追いつけるも、男はD・ホイールを人垣の中を縫うように走らせ……あつという間にその姿をくらましてしまった。

「行っちゃった……」

D・ホイールの爆音が遠のいていく中。ベルはディスクにぼつんと残された《ヴォルカニック・クイーン》を見ながら、どうすることも出来ない自分に歯噛みしたのだった。

第44話 破滅の種

「皆さん乗りました？ 急いで出しますよ！」

大騒ぎの屋台通りから、一行は気を失っている煽里を抱えて逃げ出していた。

蓮の用意したボックスカーに何とか全員乗り切ると、車はやけに静かなエンジン音をふかして走り始めた。

忘却の青では、電気自動車が主流である。

海底大陸というその性質上、化石燃料採掘が盛んではあるものの……事故のリスクが大き過ぎるが故に、肝心の精製プラントはどの所属国にも存在しない。採掘された資源は精製プラントを有する他の大陸へ輸出するのみで、ガソリンなどの輸入コストが高くついてしまふ為だ。

「……はあ、はあ……な、何も逃げなくたって良かったんじゃ……？」
「アホ、あのままセキュリティに囲まれて一番ヤマシイ身分なのは俺らだろーが？ 偽パスポート使って不法入国してるってコト忘れんな」

全力疾走の代償に息を切らしながらぼやいたベルだったが、そんな彼女へツツコミを入れたのは燐路だった。

「それに正当防衛だのと良い子ちゃんぶったとしてもだ。あれだけ騒ぎを起こしておいて、あのセキュリティ連中が『はいソウデスカ』って放つて置くと思うか？」

「そ、それは……」

流石は悪党の一味、そういう部分に関しては抜け目がないようだ。だが確かに、今はこちらが無実であることを証明して……などと悠長にお世話になっている場合ではない。

騒動の始末は『本職』に任せることにして、今は先を急ぐべき……纏め役のブレーション達も、残念ながら燐路と同様の結論を下していた。「……しっかし。白面姉ちゃんの顔を、こうまじまじと見ることにするとはなあ」

クラドがちらりと隣に横たわる煽里を見やる。

石畳で出来た地面に叩きつけられたというのに、すうすうと寝息を立てているのは流石決闘者、といったところだろうか。ただでさえ細い糸目が、今は力無く閉じられている。

「キスでもしてやれよ、飛び起きるかもしれねーぞ?」

「お前なあ……」

ケタケタと邪悪に笑う弟リンジの冗談に、クラドは呆れたように溜め息をついた。

一応は両手足を簡単に拘束してはいるものの……いつ目が覚めて暴れられやしないか、とヒヤヒヤしているクラドとしては冗談でも恐ろしい。

「……ま、話し合いに持つてくまでは何とかしてやるよ。俺だって、今何が起こつてんのかサツパリだしな」

後ろ頭に手を組んで、燐路はぶつきらぼうに言い捨てた。少なくとも彼は、こちらに協力してくれる姿勢のようだ。

そんなやり取りが交わされている中。

中列に座るベルとアンリエールへ、藍が不安げに声を掛けた。

「……2人とも、本当に大丈夫?」

「あの程度、私にとつては何のことはありませんわ」

そんな彼女の気遣いを吹き飛ばすように、幽霊姫はフンと鼻を鳴らして答えた。

「わたしも……変な言い方ですけど、白面さんとデュエルしたときに比べれば随分楽でした」

ベルも小首を傾げながら不思議そうにしている。

アンリエールの様子を見ても、あの大会で負わされた傷に比べれば掠り傷にもなっていない。

「そう……変に我慢とかしていないのならいいけれど。特にアンリちゃんは目の前で人が……」

「(心配なく、悪党の死に様など見慣れたモノですわ。これでも由緒ある決闘組デュエルマフィアの娘ですよ?」

何と言うか、この歳にして頼もしい限りだ。

ベルもベルで、出会った頃に比べて随分と強い目をするようになった。両拳を握って、むんと「元気です」アピールを作っている。

(……最後にライフが回復出来た私が無事、っていうのは何となく分かるけど)

無事であることに越したことは無いが、藍はこの現状に疑問を抱いていた。

闇のデュエルが展開され、残りライフも僅かという状況まで追い込まれたにも関わらず、自分を含めた全員がぴんぴんとしている。特に女性である蓮に関しては、闇のデュエルの事前知識すら怪しいにもかかわらずだ。

そんな藍の疑問をそのまま吐き出すように、ハンドルを握る蓮が口を尖らせた。

「でも、確かに変ですよね？ 話を聞いた限り、モンスターの攻撃なんかほとんど現実に近いダメージになる、って感じだったのに……正直、ビビッて損しました」

僅かな沈黙の後。彼女の問いに答えたのはやはり、同じ『力』を持つ少年だった。

「……力の強さには個人差があんのさ、連中のは下の下だ。それでもまあ、人を殺すくらいは出来るだろうが」

この機を逃すまいと、クラドが身を乗り出す。

「個人差？ ならやっぱりの連中は、お前さん達の同胞ってコトか？」

「さあな。あんな雑魚共が動いてるって話は聞いてねえよ」

「……雑魚って、お前さんはどうなんだよ？ その『力』の強さってやつはさ」

クラドの問いに、燐路はギリツと歯を鳴らして忌々しそうに眉を寄せた。

「……俺も姉貴も組織の中じゃダントツ『だった』ぜ。あの女が来るまではな」

「あの女……？」

「決まってるんだろ、あの馬鹿巫女サマだよ。正直言ってアイツは……」

『力』に關してだけは異常だ。そこのお嬢サマなら『味比べ』したことだし、俺の言うことも分かるんじゃないかねーのか」

自然と視線が、アンリエールへと集中する。

不機嫌そうに眉を寄せながらも、アンリエールは息をつきながら答えた。

「……ええ。そういうことなら確かに、お猿さんの言う通りですわね。先程の『ヴォルカニック』使いとあの女とは、何というか……重さが違いましたわ」

ベルは口にこそ出さなかったが、今は寝息を立てている『白面の女』とのデュエルを思い出しながら、アンリエールと全く同じ感想を抱いていた。

命というものが仮に形を成していたのなら、彼女のソレは文字通り『削る』という行為そのものであったが——今日遭遇した男のデュエルは、針の先で突くようなものだった。

勿論、その針の先が命の核に届けば絶命するのだろうが、そこに至るまでの過程で受けるダメージは前者の方が遥かに大きい。燐路の言う力の強さとはそこが異なるのだろう。

しかし燐路は、フンと小馬鹿にしたように鼻を鳴らしてアンリエールを見据えた。

「重さが違う、ねえ。よく言うぜお嬢サマ……鎖で『直接』繋がれてなかっただけ、お前は命拾いしたんだぜ？　ありゃあ、本来の力が漏れ出ただけの『匂い』みてーなモンだったんだからよ」

「……あくまで本気ではなかった、と仰いますの？」

「ああ、少なくとも『力』に關してはな」

本気ではなかった、という言葉に歯を剥くアンリエールに対し、ベルは背筋をぞつと凍らせていた。

もしもあのとき、ヒヨリとデュエルしたあの路地裏で……『鎖』に直接繋がれた自分が一撃でも攻撃を受けていたら。

「ベルちゃん、大丈夫……？」

藍の不安そうな声に、はっと思考を停止させる。

一体どんな顔をしていたのだろう。クラドやアンリエールまでも

心配そうに視線を向けていた。

「あ……だ、大丈夫です！」

笑って誤魔化すも、ベルの思考はまた別の方向へと沈んでいった。それだけ恐ろしい力を持ったヒヨリとは一体、どんな人物なのだろうと。

ユウの話信じらるならば、ヒヨリも『異世界』から連れて来られた人間のはず。

カードの中に閉じ込められていた彼女が何故、白面の集団に加担しているのか——そんな強い力を持つていたら、それは尚更の疑問だった。

彼女について知りたい。きつと今もどこかで戦っている、ユウの為にも。

「……燐路くん。ヒヨリさんは一体、どんな人なんですか」

「前にも言ったろ、巫女サマは『呪い』の成功者だ。それ以外は知らねえよ」

以前、彼に理由を尋ねたときと同じ答えを返されたが……燐路は溜め息をついて言葉を続けた。

「……って答えるのはカンタンなんだけどな。仮にも身内を匿ってくれた札だ、知っていることだけなら話してやるよ」

「え……う？」

目を天井に向けたまま、燐路はぽつりと話し始めた。

「……『呪い』ってのに関しては知らねえけど。巫女サマやあの無表情男は、俺らの間じや決闘奴隷デュエルスレイヴって呼ばれてる。奴らはカードから生まれ、この世に害悪をもたらす……昔からジジイ共にはそう教えられてきた」

「害悪……？」

「その辺がモヤモヤしてんのは俺も同じだ。それがどういうコトなのか、ジジイ共は結局話してくれなかったしな。で、俺らに与えられた主な仕事は、決闘奴隷そいっつらとその子孫共を片っ端から始末することだった」

燐路の口から飛び出した言葉に、藍は慌てて聞き返した。

「待つて、それって……」

「多分ご想像の通りだぜ。決闘者の失踪……世間サマジや事件になつてんだろ？ 全部が全部、俺らの仕事かどうかは知らねえけどな」

彼の言葉が本当だとするならば、被害者とされる決闘者は全員――

「……そんなに大勢、ユウ君と同じ人達が……？」

「結構な数が紛れ込んでいるみたいだぜ？ 奴らは『力』を使ってデユエルすれば死なずにカードになる……混血の子孫共には素直に死んで貰ったけどな」

「そんな……ッ!？」

物騒な話が、燐路の口から軽々と飛び出す。やはり自分達とは違う世界で生きているのだと、ベル達の前に改めて突きつけられた。

「……話を、続けるけれど」

険しく眉を寄せながらも、藍は声を抑えて質問を続けた。

「混血……子孫の人がいるってことは、かなり前から存在していた決闘奴隷もいる、ということ？」

「そうじゃねーのか。連中がどれだけ前から居たのか、どっから来たのかは分からねえ。ただ……少なくともジジイ共が『昔話』として話すくらいには昔の話なんだろうぜ」

ユウに関しては、最近になってカードから解き放たれたと話していた。つまり異世界からの人間……決闘奴隷が大勢いるとして、それがカードから解放された時期はバラバラだったということだ。

異世界に腰を落ち着かせ、平穩に人生を全うした者も居れば……ユウのように何かを追って放浪した者も居たのだろう。

そんな彼らを、子孫共々に『狩る』燐路達を――やはり善とは言い難い。

「……疑問は、なかったんですか」

唇を噛み締めながらベルが問うと、燐路は険しい表情を浮かべて返した。

「決まってるんだろ。んなクソみてえなもん、その辺に捨ててやったよ。そうじゃなきゃ俺達が生きていけなかった」

そう真つ直ぐに告げられたとき、ベルは何故か泣き出しそうになつてしまった。

自分とは決定的に違う、何か。

同じ貧しい境遇にありながらも、両手を血に染めるしかなかった少年の目は……もはや別のイキモノのようで。

「お前さんの主張は分かった。話を戻すぜ？」

そんなベルの表情を見かねたクラドが間に入りこむ。

「問題は、あの巫女ちゃんとその決闘奴隷とやらだつてトコだ。お前さん達が狙う『標的』が、何で大人しく連れて歩かれてんだ？」

「だから、それは俺が聞きてえよ。ジジイ共が突然連れて来たんだ、アスタリスクス十二支柱を納める巫女呪いが完成した、つてな。俺の『9番』まで没収しやがつて……」

「呪い……な。確かお前さん達の目的は『デュエルモンスターズを無かったことにする』だったよな？　つまり決闘奴隷を消すことも、その目的に係してることか……」

断片的に話を聞いたクラドは、1つの結論を導き出した。

「もつと言えば。あの巫女ちゃんを『呪い』つてやつにする為に必要なことだった……とか？」

各々が事態を整理するのに精一杯という中で、知る限りの事実を語った少年もまた、ガリガリと頭を搔いた。

「……とにかく。アイツについて俺が知ってるのはそれだけだ」

ぼすん、とシートに身を預けると、燐路はそれきり口を噤んでしまった。

——玄武げんぶろう老様、ソレは……!?

細い目を見開いて、女は震える声で叫んでいた。

長い白髭の老人が手にした3枚のカード。それから放たれる異様な雰囲気、女——煽里の決闘者としての何かをピリピリと逆立たせた。

——何を驚くことがある？ 十二支柱が混沌を穿ち、漏れ出でた『破滅の種』……その1つよ……。

しかし老人はただ、そんな煽里の様子が愉快とばかりにくつくつと嗤う。

その瞳の奥は、長い眉毛の奥に隠れて見えない。

——そのカードが本当に……我々を、民を栄華へ導くと……？

紅の民がかつての栄光を取り戻すこと。それは『デュエルモンスターズの消滅』に他ならない。

しかし老人が手にしているソレは……デュエルモンスターズはおろか、世界の全てを飲み込まんと胎動しているように感じられる。

煽里は本能以理解した。これは良くないモノだ、と。

——左様、しかしまだ足らぬようだ。『奴隷』共の魂^バだけではの……。

煽里の周りに居た白面達が、糸を切った人形のようにバタバタと倒れていく。

入れ替わるように、闇の中からフルフェイスの男達が浮かび上がった。

——この『破滅』を1つに束ねるには……より多くの強靱な魂^バが必要なようでの？

遠まわしに下された老人の命はただ1つ。

バケモノにその命を捧げよ、それだけだった。

民の為なら、祖国が豊かになるのならそれも仕方がないことだと

……今までの煽里なら黙って頷いていただろう。

しかし今、忠誠を誓ってきた老人の放つ『匂い』が、幼き日に見た災禍のシルエツトが……3枚のカードと、びたりと重なる。

聡い彼女は気付いてしまった。老人が、そのカードが、自分達の運命を狂わせた張本人だということを。

——ほう？ 流石に感づいたか。お前の教育の賜物だな慶^{ケイシヤク}爍^{ヤク}？

長は黙したまま、すつと静かに頭を下げた。

彼も最初から『あちら側』にいたのだ。

——ならば尚のこと……『破滅』の糧となつて貰うしかなさそうだ

の？

老人の目がキラリと光を灯す。

それを合図に、フルフェイスの男達が一斉にカードを引き抜いた。

「——ッ!？」

見知らぬ匂いが鼻について、煽里は反射的に飛び退いていた。

近く感じた気配へ布団を投げかけ、四足について低く身をかがめる。

「うわっぷ!! 何だ何だ!？」

もごもごと聞こえてきたのは、覚えのある声だった。

「——燐路?」

白い掛け布団から這い出てきたのは、ツンツン頭のナマイキな赤毛。

数日振りを見る、仏頂面な弟の顔だ。

「つたく……正解だ、クソ姉貴。よく寝れたかよ?」

ふと周りを見れば、見知った顔がいくつつかある。

そこには以前シガマでデュエルした、『10番』所持者の少女の姿もあった。

冷静に考えれば分かったことだ。敵に捕らわれたと諦めていた燐路がいるということは、つまり——。

「貴女達は……ッ!!」

刹那の先には飛び掛ろうとした、そんな矢先。

あたふたと手を振って、茶髪の男が椅子から立ち上がった。

「あー待て待て、こっちは別にアンタをどうこうしようって腹はねえよ」

男は敵意が無いことを示すように両手をあげながら、口早に続けた。

「アンタの怪我の手当てをしたのはウチのメイドちゃんなんだぜ？感謝はされても、恨まれるような義理はない筈だ。詳しい話は弟から聞いてくれ、な？」

見れば確かに、身体のいたるところで丁寧に包帯が巻かれている。ちらりと『10番』所持者のメイド少女に目を向けると、一瞬表情を強張らせたものの、すぐ柔和に微笑んでペコリと頭を下げた。

「……姉弟共々、命を救われたようですね。先の無礼をお許し下さい」
深々と三つ指をついて頭を下げる煽里を、クラドはまあまあと声を掛けてベッドに座らせた。

「アンタの出方次第じゃこつちも多少乱暴になつてたかもしれないな……その辺はお互い様だろ？」

言うまでも無く、ここは宿泊予定としていたホテルの一室だ。煽里の傷を手当てして一息ついた一行だったが、そんな矢先のひと騒動。気が休まる暇はなかった。

「そーだそーだ。俺にこんな残虐非道な装置嵌めるような連中だぜ？土下座までするこたねーだろ」

「……このように教養の無い弟故、貴方達の処置も当然かと思えます。何か粗相がありましたら遠慮なく懲らしめてやって下さい」

既に何度か粗相をしている件はさておき。

クラドは仕切り直すように咳払いをして、話を切り出した。

「さて、と。そんな訳でこつちもあんまりのんびりしている時間は無いんだ。早速で悪いんだが話して貰えないか？あのフルフェイスの連中は何なのか、アンタに何があったのか……」

クラドの言葉に、煽里はこくりと頷くと。

少し躊躇いがちに目を伏せながら、ぽつぽつと話し始めた。

「彼らは……いわば内部の人間を抹消する為に作られた隠密部隊のようです。言うまでも無いですが、私も彼らに襲われて……」

「ちよつと待ってくれ？ 猿小僧の話だと、アンタらは組織の中でも

相当実力がある方なんだろう？ 何でまた……」

「……力が強いからこそ、かど。『あのカード達』の糧とするには、都合が良かったのでしょうか」

ぶるりと震えた煽里に、藍が静かに尋ねる。

「あのカード……達？ それは《アスタリスクス》のこと？」

「……いえ、十二支柱とは別のモノです。ですがあの力は、デュエルモンスターズを『破滅』へ導くには十分過ぎる」

「破滅……？ どういうこと？ 貴女達の目的は『アスタリスクスを揃えて』、『デュエルモンスターズを無かったことにする』ことじゃない？」

「まさか、もう全ての《アスタリスクス》が揃ってしまったというのですの!？」

藍の言葉を遮り、難しそうな表情で眉を寄せる煽里へ、アンリエールは身を乗り出して問い詰めた。

アンリエールが必死になるのも無理はない。何せ煽里の言葉が示すのは、彼女らの組織が全ての《アスタリスクス》を手中へ収めた……つまり、既にユウが敗れたということの意味するかもしれないからだ。

しかし、煽里は掴みかからんばかりの形相で詰め寄るアンリエールを宥めるように、首を横に振って答えた。

「いえ……十二支柱はまだ、半分も揃っていません」

そんな煽里の答えに食いついたのは、燐路だった。

「おい待てよ？ 十二支柱を全て揃えて、巫女サマが『儀』を行う……それがデュエルモンスターズを歴史から消滅させる方法だったんじゃないの？」

「私たちも、そう聞いていたのだけど……？」

矢継ぎ早に繰り返される質問に対し、煽里はゆっくりと、まるで自分の意見を整理するかのよう^にに答えを返していく。

「……燐路の言う通り、本来はその筈でした。ですが十二支柱と強過ぎる巫女の力は、デュエルモンスターズを『破滅』へ導く『種』を呼び寄せ——そしてソレは、既に『四方老』様達の手にあったようです」

「しほう、ろろう？」

聞いたことの無い言葉に藍が思わず聞き返すと。

煽里に変わって答えたのは、妙に苛立った様子の燐路だった。

「俺らを纏めてる『ジジイ共』のコトさ。全部で4人いる」

「じゃあ……貴女達姉弟を襲うように命じたのも？」

煽里も燐路も、眉に皺を寄せながら頷いた。

実質『用済み』だと告げられたようなものなのだ、彼らとて良い気分ではないだろう。

彼らが優れた力を持っていることは、相對した『敵』だからこそ分かる。だからこそ気になるのは、あえて力の劣るフルフェイス達に姉弟を始末させようとしたのかだ。

クラドが頭を掻きながら、改めて煽里へ問い掛けた。

「……あー、その。破滅だとか何だとか、俺らにはサツパリ見えてこねーんだが……要するにだ、《アスタリクス》12枚全部を集める前に、上層部の爺さん達は代わりになりそうな『デュエルモンスターズを吹っ飛ばす爆弾』を手に入れちまった。で、爺さん達にとってアンタらは邪魔になったから命を狙われた……そういう感じで良いのか？」

クラドの要約に頷きつつも、煽里は言葉を付け加えた。

「……はい。正確には『爆弾の材料にする為』私たちを狙っているのだと思いますが。それと、ここからは私の推測になりますが……」

煽里は躊躇いがちに、しかしはつきりとした意思を持って口を開いた。

「恐らく、デュエルモンスターズを消滅させる計画は、方法や手段を含め多岐に分かれていたのでしょう。十二支柱を全て集めることも、私が見た『あのカード達』もその内の1つで……その下準備は少なくとも10年前から始まっていたようです」

「……おい待て姉貴、10年前だと？」

みるみると青ざめていく燐路の視線に、煽里はこくりと頷いた。

ベル達には話が見えなかったが、燐路の険しい表情を見て、ソレが深刻な事実であることは十分に悟ることが出来た。

「……私たちの両親を、あの日民の命を奪ったのは、災害なんかじゃなかった」

煽りはゆつくりと唇を開き、その名を告げた。

「……『三幻魔』。それが10年前から今に至るまで、四方老様が呼び起こそうとしている『破滅』の名です」

第45話 開拓地への案内人

10年前。クリム・クロア 幻想の紅。

この2つのキーワードを検索に掛ければ、すぐにでも浮かび上がる『災害』がある。

——ガイジユ 蓋樹山噴火。

噴火事体の規模は小さく、火砕流や火山灰などの被害については特筆すべきことはない。この災害が史上に名を残したのは、その異様なまでの人的被害にあった。

原因は、蓋樹山周囲の独特な地形だと言われている。蓋樹山を中心として円で囲うように高い山脈が連なっているその様子は、真上から眺めれば平野分がドーナツのように見える。

人々の命を奪ったのは、そんな『逃げ場の無い場所』へ流れ込んできた大量の火山ガスだと説明がされた。

蓋樹山の周囲に存在していた無数の農村や集落は壊滅状態。辛くも逃げ出せた少数の人々を残し、死傷者は史上最悪の数字を叩き出した——それが、表向きに世界中で取り上げられた大災害の全容だ。だが——。

「それは全て、3枚ある『三幻魔』のカードを降臨させるための『儀』を隠蔽するための偽装だったようです。そして今、3枚の幻魔を1つに束ねるため再び『贄』を集めている……と」

聞くに堪えない悲惨な結果を招いたこの災害が、たった『3枚のカード』によって引き起こされた『災厄』を隠す為の嘘だった、と……にわかには信じ難い話だが。

「人の魂を吸うなんて、そんなカードが……」

ある訳が無い、と否定しかけたベルは、彼らが持つ『力』のことを思い出し口を詰まらせた。

闇のゲームは人の精神を、魂を傷つける。そんな『力』が現実に残しているのと知った今、煽里の話を馬鹿げた話と笑い飛ばすことなど出来はしない。

「私もそう思っていました……実際に『三幻魔』を目にするまでは。ア

レが大勢の民の命を奪ったのだとすれば、それこそガスなどより余程納得が出来ます」

大勢の民。その中に自分達の両親が含まれていると煽里は言った。姉弟が……いや、彼ら『白面』達が貧しき故に道を違えたのだとすれば……少なくとも、『三幻魔』はその引き金を引いたことになる。

両手を血に染めるとしても、生きる為にはそれしかなかった……そう燐路は言った。その言葉通り、彼らに後悔や罪の意識は無いのかもしれない。

しかしそんな自分達の『覚悟』さえ、初めから利用されていたのだとしたら？

淡泊に自分を抑えて語る姉とは対象的に、弟の苛立ちは拳となってベッドの中へと叩き込まれた。

「……はっ、つまり俺らは最初から……都合よく計画の『コスト』にされたってワケか？」

孤児として生きるしかなかった彼らに、強い力が眠っていたとして……それをもっとも効率良く使うとすれば。

考え付く『だけ』ならベルでも容易いことだ。

だからこそ、燐路の自虐的な呟きに答える声は無い。

「——決めた。ジジイ共は俺がブツ潰す。三幻魔だか何だか知らねーが……超気に入らねえ、爆殺の刑だ」

瞳をグラグラと沸き立たせて、燐路は低く唸るように呟いた。

このまま放っておけば、数秒後には戒めのことも忘れて飛び出して行くだろう。

そんな少年の手綱を握るクラドは、爆弾にでも触るような声で宥めた。

「落ち着けよ、例えばお前さんに「ラヴァル」を返したとしてもだ。そんな化け物みてーなカードに勝てると思ってるのか？」

「うるせえ!! 少なくともお前の【駄目スクラップ】よりはマシだ!!」

「そりゃまあ、そうだろうが……少し頭を冷やさせて。考えてもみろ、その『三幻魔』ってヤツを一つに纏めるには沢山の魂が必要なんだろう？ 燃料が足りねえってトコへ、お前さんご自慢の『強い力』が吸わ

れたらどうなるか……お前のせいで燃料満タン、ドカンといったらどうすんだ。それじゃ復讐どころか爺さん達にとつちや酒の肴だぜ？」
「……っ分かってるよ、んなコトは!!」

クラドの言葉に多少頭が冷えたのか。再びベッドを殴りつけると、燐路は不機嫌そうに脚を組んで椅子へと座り込んだ。

そんな様子を見てひとまず安堵したベルの脳裏に、ふと疑問が湧き上がる。

(強い力が、吸われたら……?)

三幻魔のカードに多くの——より強い力を吸わせたいのなら、真つ先に標的になるのは誰なのか。

「待ってください!! それじゃ『力』の強いヒヨリさんはもう——!?!」

青ざめた様子のベルに、煽里は首を横に振って答えた。

「いえ……シスター巫女にはまだ役目が残っていると四方老に連れられていきましました。恐らくですが、アスタリクス十二支柱を全て回収する手筈も整っているでしょう」

煽里の否定に、強張っていた足の力が抜け落ちる。

ヒヨリにはユウと話して貰いたいこと、聞かなければならないことがある。訳の分からないカードの生贄になってしまうなど……あつてはならないことだ。

とはいえヒヨリが無事ということは、また別の危機が立ち上がってしまう。

「老人会のお楽しみ計画は、豪華2本立てで進行してるってことか……」

つまり、煽里達が関わっていた本来の計画——《アスタリクス》を揃え、デュエルモンスターズを消滅させる計画も同時に進められているということだ。

それも主戦力だった筈の、煽里と燐路を『贄』に回しても良いと判断出来るだけの『全て回収できる方法』を抱えたまま。

「……白面の姉ちゃん、その連れられていった場所ってのは分かるのか？」

クラドが結論を急ぐと、煽里は躊躇うことなく口を開いた。

「はい。ここ首都『リユースアン』の開拓プラント、遺跡エリアA―31
5。教養のある貴方達なら、もう目星を付けている筈ですが」

煽里の糸目が見抜いた通り、そこはまさに一行が向かおうとしていた目的地であった。

藍が突き止めた、恐らくは《アスタリスクス》が保管されている場所だ。

「……あんまりゆっくりはしてられねえ、か」

「ホラ見ろ!! 今すぐにも出発するべきだ!!」

居ても立ってもいられない、と立ち上がった燐路の襟首をむんずとつかんで、クラドが椅子に座らせる。

「だからといって、向こうの人数も分からないまま夜中に動くのは賢くねーよ。ワケも分からず、またあのフルフェイス達に囲まれたってんなら話は別だけどな?」

「ぐっ……!!」

クルクルとクラドの言葉に回され、大人しくなる燐路。

そんな彼を見て溜め息をついてから、今度はアンリエールが言葉を挟んだ。

「ですが、そうしますとユウ様の身が尚更危険ですわ。お猿さんの言う通りではないですが、早く合流しませんと……」

確かにアンリエールが危惧する通り、このままではユウは1人でヒヨリとフルフェイスのD・ホイラー達、そして三幻魔までも敵に回してしまうかもしれない。

そんなどうしようもない焦燥感を洗い流すように、冷静な面持ちの藍はゆっくりと煽里へ切り出した。

「煽里さん? その『四方老』が動き出すタイミング——日時なんかは分かっていたりする?」

落ち着いてことを探ろうとする藍の言葉に、煽里は霞掛かった記憶に手を入れながら言葉を返す。

「正確な日程は……聞いていませんでした。というより私たち……いえ、巫女をこの地へ呼び寄せたのも急でした。恐らくですが、今回の判断は突発的なことだった、かと」

「つまり……今すぐにでも『開拓プラント』に押し入れるような準備は出来ていないってことね？」

藍がそう問い掛けると、煽里は曖昧ながらも頷いて見せた。

「そう……なら幸い、私たちが1歩リードのようね。明日には正規のルートで、警備が厳重な『開拓プラント』に堂々と入って行けるもの」
藍がそう微笑むと、訝しげな顔で燐路が口を挟んだ。

「その『開拓プラント』の警備つてのは、そんなに厳重なモンなのか……？」

「大丈夫、少なくとも外部からの力押しじゃビクともしないはずよ。
『開拓プラント』は文字通り『土地を作る』場所……お金持ちのお偉い様が血眼で動かしてる所だもの。私たちがだつて本当は知り合いの『コネ』が無かつたら入ることすら出来なかつた筈よ」

胡散臭い身分のベルや燐路がそのまま通過出来てしまう、というのは嚴重警備としてどうなんだと疑問を抱いていた当人達だったが……コネの力は凄いと改めて感服した。

「ただ……燐路君と煽里さんはプラントの外でお留守番かもね。騒ぎもあつたことだし、普段より警戒レベルが上がっているかもしれないわ」

「……仕方がありません。本来、貴女達からも疑われて仕方のない身分ですから」

静かに頷く煽里に対し、燐路は不満そうに口を尖らせた。

「んだよ、結局俺らは除け者かよ」

「まあまあ、そんなときは俺が傍に居てやるよ。それなら寂しくねえだろ？」

「……お前、この輪っかが外れたら真っ先に噛み付いてやるからな」

ガールと牙を剥く燐路の頭をわしわしと頭を撫で回しながら、クラウドは欠伸を交えながら切り出した。

「さて、それじゃ方針が決まったところで休もうぜ？ 各自色々と思うところはあるだろうがまあ……とにかく今は頭を休ませよう」

燐路はクラウドと、煽里は藍の部屋で。

残ったベルとアンリエールが同室と振り分けて、ひとまずの解散と

なった。

「それじゃ先輩、私はこれで」
ホテルのロビーで待っていた蓮に、藍は申し訳無さそうに頭を下げた。

忙しい中、足代わりの役目を買って出てくれたにも関わらず、危険な目にまで遭わせてしまった。

「ごめんね蓮、本当はここまで巻き込むつもりは無かったんだけど……」

「いいですよ、久々にランチャできて楽しかったですし。それに十分、対価は頂いてますから」

にんまり、と蓮の頬が吊り上る。

「約束、忘れてませんよね？」

楽しそうな蓮の笑顔に対して、藍の頬は赤く上気していく。

ジトリと責めるように目を細めて返すも、蓮の表情はニコニコと変わらない。

「……忘れてないけれど。本気なの？」

「ええ、本気ですよ♪ 皆だって楽しみにしてるんですから、絶対逃げないで下さいね？」

「……はあ。分かったわ、約束は守るわよ。全く何が楽しいのやら……」

呆れたように溜め息をついた藍だったが。

ぶんぶんと子供のように手を振って帰っていく蓮を、いつまでも見送っていた。

「……あの」

藍が席を離れている間、監視を任されたベルはおずおずと煽りに声

を掛けた。

「なんでしよう」

ベッドで半身を起こしたまま、煽里はゆっくりと顔を向ける。

そんな彼女からは、かつて向けられていた冷酷な敵意は感じられない。しかし燐路を半ば人質として、かつ敵対する理由が無くなったとはいえ……彼女達の言葉が全て嘘であり罠に掛けようとしている可能性は拭えない。

ベルもそれなりに警戒しようとして、今はデツキとDパッドをアンリエールに預けているのだが。

「ちよつと、お話があつて……」

「大丈夫です。私は今、貴女に手出しなど出来ませんよ」

そんな心境で搾り出した声に返されたのは、意外な言葉だった。

「え……？」

「例えどのような目に合わされても、決して。教養の無い私ですが、貴女にはそれだけのことをしたという自覚くらいはあります」

報復を受ける覚悟はある、ということだろう。

力を抜いて横たわっている煽里へ、ベルはぶんぶん首を振って否定した。

「あ、いえいえっ?! 別にわたし、そんなつもりじゃなくて」

「? では、私などに何の用で……？」

きよとんと小首を傾げる糸目に、ベルはまっすぐ向き直った。

「あの、今こんなことを言うのも何なんですけど……全部終わってからでもいいんです。もしユウさんと合流できて、三幻魔ってカードをどうにかできたら。わたしともう一度、デュエルしてくれませんか？」

一瞬、その糸目が丸く見開かれたような気がした。

「……私と、ですか？」

「はい。次は絶対勝ちますって、ある人に約束しちやっただんです。その為にも是非」

自分を死の淵まで追いやった相手に対して、もう一度戦おうと。

そう言つてにつこりと微笑むベルに、煽里は何を感じたのだろうか。

「……それだけの為に、私と？」

「え……っと。正直言うと、ちよつとだけ私怨も入ってます。今日こんなことになるまでは、私が煽里さんと戦うつもりでいたんです。でもそれは、煽里さんを傷つけたいとかじゃなくて……もつと単純に、あなたにデュエルで勝ちたいって、そう思ったからなんです」

気恥ずかしそうに頭を掻く褐色肌の少女。

勝ちたい。そう言った彼女の表情は、実に晴れやかだった。

「だからここでいくらビンタしたって、わたしの気は晴れません！」

彼女も1人、^{ネイティブ}橙の地で。決して幸せとは言えない境遇で生きてきたと聞いた。

自分と同じように、デュエルモンスターの世界で自らの運命を、大切なモノを賭けてきたと聞いた。

そんな彼女と自分の違いは。

どこで道を変えていたら、彼女のように笑うことが出来たのだろうか。

「……そうですか。教養があるのか無いのか、面白い人ですね」

ベルが諦めずにデッキからカードを引こうとした、あの時。

悩ましげな溜め息と共に呟かれた言葉と良く似たソレが、今は緩んだ頬から漏れ出していた。

「やあ、初めまして。皆さんのことは藍ちゃんから聞いているよ」
翌朝。

ベル達の元に現れたのは人の良さそうな小太りの男だった。

小さな目鼻立ちに、刈り上げた丸頭。20代後半という歳ながら、丸いシルエットとサスペンダーで吊り下げた茶色のズボンも相まって、まるでクマのぬいぐるみのようなのだ。

そんな男に対して、藍は丁寧に深々と頭を下げた。

「おはようございます、ハラダ編集長。ごめんなさい、こんなに早くから……」

「あはは、気にしなくて良いよ。君には色々面白い話を聞かせて貰っているし……『期待して』と大見得を切っただけのことはあるようだね！」

ぷるぷると顎を揺らして、男——ハラダは朗らかに笑って見せた。この男のことは、一行も既に藍から話を聞いている。アイドルを引退した藍がジャーナリストとして経験を積むために、一時期所属していた出版社の編集長ということだ。

何でも忘却の青向けに決闘者専門誌を手がけているようで、フリーの立場となつてもお世話になつていらしい。何より、遺跡から発掘された《アスタリクス》を所持しているという、開拓プラントに住まう人物にコネがあるというのはこの男なのだ。

今回の件も、藍の書き上げた記事をソレらしく掲載しているのとこののだが……彼の出版社はゴシップな記事も多く、噂半分として世間には受け取られているらしい。

もつとも、紅の不法入国者の狙いが《アスタリクス》である、ということとは十分警戒に値する情報だったようだが。昨晚藍が言った通り、現在は開拓プラント周辺の警備が嚴重になっているのは事実だ。

「さて、嘘か誠かさでおき……君たちも色々大変みたいだね。本当ならこの辺りを色々と案内してあげたかったんだけど。『用事』が済んだら、そのとき改めて案内させて貰うよ！」

そう言つて柔和に微笑む彼は、やはり大きなぬいぐるみのようで。藍が信頼を寄せているのも頷けると、ベルは思った。

藍から事の全てを聞いているにも関わらず、その表情からは何の焦りも、訝しげな色すらも感じられなかった。かといって丸つきり話を信じていない訳でも無いようで、燐路と煽里に対しては微妙に距離を取っている。

報道者として、どこか肝が据わつているか。そんな印象だ。一同も一通り簡単な自己紹介を終えると、ハラダはまじまじと周りを見渡しながら言った。

「それにしても……聞いていた通り美人さん揃いだなあ。可愛い女の

子達に囲まれて旅が出来るなんて痺れるくらい羨ましいぜ、男性諸君！」

「あつはつは、まあ……正直男としちや自慢して回れるレベルつす」

「ま、揉みがいがありそうなのは1人だけだけどな」

そんな男達のやりとりに、ベルは気恥ずかしくてぼつと顔を赤らめたが。

藍は呆れたように溜め息をつき、アンリエールは当然といった様子で胸を張り。煽里に至っては、そこに自分は含まれていないと思っっているらしく「確かに……」と興味深そうに一同の顔を眺めていた。

「あはは、正直でよろしい！　じゃあ早速だけど出発しよう。『アイツ』も結構忙しい身でさ、時間には結構うるさいんだ……」

その口ぶりからして、男と《アスタリクス》の所持者はかなり親密な仲らしいことは察しが付いた。

藍や煽里の話聞くに、その人物は『遺跡』の調査と再現に関するの研究をしている若き期待の研究者とのことだ。

遺跡の復興は、忘却の青の国々にとって『街作り』に繋がる重要な仕事だ。手厚い支援を受けられることはもとより、青の人々から多くの支持を得ている職業でもある。

そんな人物とどうやって知り合えたのか。ベルはおずおずとハラダに問い掛けた。

「あの、編集長さん。その人とは一体どんなご関係で……？」

「ん？　ああ……そんな大した関係じゃないよ。子供の頃からの腐れ縁ってやつさ」

「腐れ縁？」

男は停めてあつたボックスカーのドアを開けながら、どうぞとベル達を招き入れる。

「こんな海の底で仕事をしているのも、アイツの趣味が拗れたせいって感じだし……ま、オレ『達』もそれぞれ楽しくやってるから良いんだけどね！」

そう言うハラダの目は、呆れたように細まりつつも本当に楽しそう

ベルは何となく、今ここにいる皆ともそんな関係になれたら良いな
と思った。

一同が乗り込んだボックスカーは相変わらず静かに、薄青の朝日に
照らされながらリユースの市外を抜け、順調に開拓プラントへと向
かっていた。

遺跡を元にして造られた、レンガ造りの高い建物は次第に数を減ら
していき……薄暗い朝を照らしていた華やかな金色は点々とした提
灯の朱色へ移り変わり、その街並みは背の低い民家が連なる下町の工
リアへと姿を変えていく。

「開拓プラントの傍まで来ると、街の様子も随分変わりますのねえ」
興味深そうにアンリエールが呟くと、藍がそれに答えた。

「この辺りは開拓されたばかりで、まだ『バブル』の天井が低いので、
あまり高い建物が建ててしまうと、将来『バブル』を拡張したとき、古
い『バブル』を取り壊せなくなってしまふから……」

見れば確かに、『空』の位置が随分と近く見える。
あの『空』を壊すとき、市街で見たような高い建物があつたら作業
の邪魔になるということだろうか。

「開拓されたばかりのエリアはしばらくは安価な居住区として機能し
て、『バブル』が拡張されるにつれて『本来の姿』を取り戻していくの。
こういう開拓居住区に住んでいるのはプラント関係で仕事をしてい
る人達がほとんどで……彼らはそうやって新しい開拓居住区へ移り
住んでいくことが多いそうよ」

「成程、そういうことですね……」

上手く機能しているものだと感心しつつ、アンリエールは1つの場
所に住み続ける事が出来ない生活というものが想像出来ず、少しばか
り考え込んでしまった。

家や土地、というものが先祖代々ずっと黒の地にあるアンリエール
にとって、確かに住居を次々と変えて移り住むという生活は馴染みの
ないものではあったが……現在ほとんど勘当されたような形で家に
戻れない彼女としては、他人事とも言えないからだ。

そんなアンリエールの隣からひよつこりと顔を出したベルは、なんの気なしにハラダへと尋ねた。

「それじゃあ、今から会いに行く人もこの辺りに？」

「いやいや、アイツはほとんど仕事場から出てこないよ。仕事場がアイツの家みたいなモノだからなあ」

「へええ……」

「それもまた、難儀な生き方ですわね」

むむ、と難しそうに眉を寄せるアンリエールとは対照的に、仕事に命を掛ける女性というものに憧れを抱いたベルはキラキラと目を輝かせた。

「ふふん、ふんふん♪」

薄暗い研究室の中で、楽しげな女性の鼻歌が響いていた。

彼女の目の前には幾つものモニターが淡い光を発し、せわしく叩かれるキーに合わせてそれぞれの画面が展開されていく。

彼女がモニターの中で一心不乱に作り上げているのは、まるで針金細工で組み上げられたような一つの街並みだった。それは言わずもがな、太古の昔に失われた文明の再現だ。

いわばこの研究室は彼女だけの空間。

そんな中、コンコンとドアをノックする音が木霊した。

「博士。さつき連絡があったよ、予定通りこつちへ到着するって」

声を掛けたのは、賢そうな顔つきの若い男だった。

白衣を着ているところを見ると、どうやら女性の研究仲間のようなだが……それにしては口調も随分砕けていて親しみがある。

彼がオートのドアを開けて廊下の向こうに佇んでいると……。

「ん、了解！ 私も丁度一段落しそうだし……もうすぐ上がるね！」

女性はキーを叩く指先を止めなかったが、るんと声だけを返して答えた。

もうすぐと言いつつ、更にスピードが上がったキーの悲鳴を聞いた

男は、苦笑を浮かべながら優しく言い聞かせるように呟いた。

「……博士？ 仮にもお客さんなんだから、会う前にちゃんと鏡くらい見ておきなよ？」

「うっ……わ、分かっているよっ!? 私だってもう大人のオンナなんだからっ!!」

「くすっ、はいはい……」

ニコニコとその賢そうな顔を緩めて、男はそそくさと研究室を後にした。

「全くもう……!!」

残された女性はふうと頬を膨らませつつも、うっすらとモニターに映った自分の顔を見て前髪を弄り始めた。

「……うーん。やっぱりシャワーでも浴びておこうかなあ」

まるで向日葵のような、くりつとした黄金色の瞳がじとりと半眼になる。

朱色の長く伸ばされた髪は毛先がくるんとはねていて、『アダルトイナキヤリアウーマン』を目指す本人の希望とは相反し、とても可愛らしい印象を与えている。

「フトシ君はどうでもいいけど、元アイドルさんにこのまま会うっていうのは気が引けるし……」

菱形模様の連なる、民族的なデザインのカチューシャは彼女のトレードマークだ。

大人になった今でも、それは変わらない。

「……よしっー!」

彼女——若き期待の研究者、アユカワ博士は白衣を脱ぎ捨て、意を決したように立ち上がったのだった。

第46話 博士の海底水族館

見渡す限りの車、車。

開拓プラントの検問へと辿り着いた一行であったが……予想以上の混雑に巻かれ、しばしの足止めを喰らっていた。

「うへえ……何だこりゃあ……？」

危険物の有無、身分の確認。セキュリティ隊員達が開拓プラントへ出入りする車両を懇切丁寧に1台ずつ検問しているものだから、周辺の道路は大渋滞となっているのだ。

どのドライバーもウンザリした様子ではあるものの、事が終わるまでは大人しく隊員達に従っている。隊員達もまた、顔色一つ変えることなく淡々と己の業務を全うしていた。

「出入りするのは遺跡の研究関係者がほとんどなんだろう？　なのに何で……」

クラドが零した通り、ここへ来るまでの閑散とした雰囲気はどこへやらだ。

物資などの輸送車両に混じって、家族連れの一般車両すら多数見受けられる。

そんな彼に、ハラダ編集長は顎を揺らして笑い返した。

「ま、着けば分かるさ。目的地は多分、同じだろうしね」

「はあ……」

ハラダの回答に、クラドはまたも頭を捻った。目的地が同じということ、家族連れの彼らもまた『博士』の研究室^{ボク}へ向かうということだ。

その道の権威とはいえ、一介の研究者がそこまでの人気者になれるものなのか？

「すいません」

と。車の窓がコンコンと強めに叩かれた。

外を見れば、やはりというべきか……黒の分厚いサングラスを掛けた物々しいセキュリティ隊員が窓を開けるようにジェスチャーで指示している。

ついに来た、と一同に緊張が走る中、気が気でないのは燐路少年だ。「おい、本当に俺らも乗ってて大丈夫だったんだろうな……？」

「あはは、大丈夫だよ。多分」

「多分、ってなあ……!?!」

曖昧な返答に噛み付く燐路を尻目に、ハラダはひよいひよいと窓を開けていく。

「失礼します。荷物検査と身元確認にご協力下さい」

7人という大所帯に、露骨に表情をウンザリさせたセキュリティ隊員であったが——ハラダ編集長が自身の身分と名前を明かすと、そんな表情にも僅かな明るさが差した。

「ああ、フトシハハラダ様とそのお連れ様ですね。博士からお話は伺っております」

流星はコネ持ち、普段なら顔パスでも通れてしまいそうな勢いだ。

ちゃんと話は通っていたのだ、と安堵した刹那。

「ですが念のため、皆様の身分証明書を確認させて頂きますね。決まりなモノで」

セキュリティ隊員のその言葉に、一行はヒヤリと背筋を凍らせた。偽パスポート所持者であるベルと燐路、煽里の3人は、ここで疑われてしまえば後がない。

「では、失礼します」

ダラダラと嫌な汗が流れ落ちていく中、セキュリティ隊員が行ったのは——何とも簡単なDパッドによるID照合だけだった。

無論、その照合元とは藍からハラダ編集長、そして『博士』なる人物へと流れていった個人情報である。つまり、確認しているそもそもその大本が『偽物』である訳で……。

「確かに確認しました。それでは車両の確認が終わりましたらお進み下さい」

万事、何事も無く。

叩けば埃だらけの一行は開拓プラントへと足を踏み入れたのだ。た。

「あはは……お勤めご苦労様です」

「いえ。道中どうぞお気をつけて」

にこやかに一礼し、徐々に遠ざかっていくセキュリティ隊員。

後部座席の燐路は満面の笑みを浮かべて、ブンブンと手を振りながら低い声で呟いた。

「なーにが嚴重だ、ザルじゃねーか。悪党が2人も入っちゃったぞ」
罰が悪そうに視線を落とす藍に、ハラダ編集長もフォローを入れる。

「あはは……まあ、チートアイテムを使ったようなもんだしね。君達だつてココへ押し入ろうとしていたんなら、オレみたいな人間を真っ先に利用するんだろ？」

「大正解、きつとそうしてたよ。ま、今はジジイ共が同じ手で進入してないことを祈るしかねーな……あんな様子じゃ望みは薄いけど」

燐路はひとしきり悪態をつくつと、ぼすんとシートに腰を落とした。

それから車で揺られること数十分。

建設途中……もとい復元途中の遺跡やら、仮設テントがちらほらと見受けられる街中を走り抜けていくと、一際大きなドーム状の建造物が目に付いた。

その建物が背にしているのは『バブル』の外壁……つまりは正真正銘、大陸の一番端だ。

何故こんな辺鄙な場所に……と疑問が沸く前に、『その光景』はベル達に新たな疑問を投げつけてきた。

楽しげに笑い合う親子連れに、手を取り歩くカップル達。

そしてドーム状の建物に大きく、賑やかに描かれた色とりどりな魚の絵。

そもそも、海というものに縁が無かったベルはただただ首を傾げるばかりだったが——訝しげに目を細めたクラウドとアンリエールが、その答えを口にした。

「こりゃあ、どこからどう見ても……」

「水族館、ですか？」

遠くに見えるお土産コーナーで、可愛らしい熱帯魚のマスコット

キャラクターが手を振っている。その明るく楽しい雰囲気は、どう解釈しても件の『遺跡博士』とは繋がらない。

「すいぞくかん……?」

きよとんと、小首を傾げるベル。

そんな彼女を尻目に、ジトリとしたアンリエールの矛先はハラダ編集長へと向いた。

「……失礼ですが、道をお間違えになったのでは?」

「いやいや、アイツはここで仕事をしてるんだよ。正確にはアイツの仕事場が水族館になったって感じだけどね」

どこか納得しきれない様子のアンリエールだったが、そんな不服を遮るようにちよいちよいとドレスの裾が引つ張られた。

「あの、あの、アンリさん」

「あーもう、なんですの鬱陶しい……」

「すいぞくかん、って何ですか」

じっ、と困ったように見つめてくる丸い琥珀の瞳。

こういうときばかり子供っぽくなるベルに溜め息を漏らしつつも、アンリエールは「これも主人の務め」と腰に手を当てて説明を始めた。

「ハア……いいのです? 水族館というのは、水中や水辺に住む生き物を展示して、民衆に見識を広めて貰おうというレジャー施設のことです。それが何故このような場所にあるのかは甚だ疑問ではありませんが」

「へえ……」

と、アンリエールが少し目を放した際に、ベルの視線は水族館を解説するARの電子看板に釘付けになっていた。

「ちよつと!?! 人に説明させておいて、ちゃんと話を聞いておられますの!?!」

「あ、ごめんなさい。つい……」

と。ベルが見ていたARに1人の女性の姿が浮かび上がった。

金魚の尾ひれを思わせるような、長くさらりとした赤い髪に特徴的なカチューシャ。活発そうな印象とは相反した丈の長い白衣が、すらりとしたスレンダーな体型を包んでいる。

「遺跡研究の開拓者……アユカワアユカワ？」

施設の責任者だというその女性は、ARの中で子供のように明るく無邪気に振舞い、館内の案内役を務めていた。

そんな女性を指差しながら、ハラダが言った。

「ああ、彼女がこれから君たちに出会って貰う『例のカード』の持ち主さ」「え？ それじゃあ、あの人が遺跡研究をしている博士さん……なんですか？」

ベルの反応に、ハラダは満足そうに頬を揺らして笑って見せる。

「信じられないだろ？ 元々、魚とか海とか大好きな奴でさ……それが拗れて海底遺跡の研究を手伝い始めてね。で、上がりに上がった立場をいいことに、自分の研究室を海底水族館に改造しちゃったのさ。あんまり出来が良くて、観光地になっちまう位にね」

見れば、ARの中で解説するアユカワ博士の話は徐々に魚の話へと脱線していた。

興奮気味に語るその様子はどうにも「コチラが本職なのでは？」と疑いたくなってしまふ熱の入りようだったが……不自然なカッツが入った後、澄まし笑顔に戻った博士は再び施設の成り立ちについて語り始めた。

「ここで話しているより一見にしかずだ。さ、早く中に入って顔を見せてやってくれよ！」

そう言ってハラダが案内したのはいわゆる表の出入り口ではなく、従業員用に用意された裏の通用口だ。

入館したまでは問題なかったものの、そこは流石に国の重要施設。警備の人間が数人、両サイドにつくこととなった。細身の男達であったが、軽武装で固めたその肉体には一切の無駄が感じられない。

そして当然というべきか腕には鉛色のDパッドが目を光らせている。恐らくデュエルに対しても何かしらの干渉が出来る筈だ。流石の燐路や煽里も、この人数差ではまず勝ち目は無い。

暴れるような真似はしないと張り張っていた燐路と煽里ではあったが、その言葉もどこまで信用して良いものか分からない訳で。そんな一行にとって、保険の意味でもありがたい処置ではある。

「それでは、我々についてきて下さい」

案内されるがまま、こつこつと広い廊下を進んでいく。

海底という立地を生かしたのだろう。廊下の内壁には特殊なARで『壁外の様子』を投影しているらしく、その光景はまるで海中を歩いているような錯覚さえ覚える。

深海ということもあって、時折恐ろしい外見の魚達が巨影を落とすこともあったが——蛍のように光を放つ美しい小さな魚達が、逆にそんな彼らを勇ましくライトアップしていた。

「凄いもんだな……これ、外の景色がほぼ再現されてるんだろ？」

「ええ、私も実際に見たのは初めてよ。外には光もあまり無いはずだし、厳密には明るさが調整された『フェイク』なんでしょうけど……それでも凄いスキヤン技術ね」

そんな『海底見学トンネル』とも呼べる光景に、ベルはおろか藍やクラドまで感嘆の息を漏らした。鬱陶しい検問と渋滞をくぐり抜け、こんな辺境の地まで訪れるだけの価値はある、ということか。

しばらく歩いて警備の人間に案内されたのは、広い円形の応接室らしき部屋だった。

「では、ここにしばらくお待ち下さい」

走り回れるほど十分なスペースがあるものの、主に来客用として使われているのかベル達以外の人影は無い。窓は一つも無く、壁の白色ばかりが目立つこの部屋はどこか圧迫感を感じる。

(何だか、すごく静か……)

入り口の賑わいがまるで夢だったかのようだとベルはぼんやりと思ったが、状況が状況だけに余計なお喋りは出来ない。

妙にそわそわとした雰囲気の中、待つこと数分。

「お、来た来た！」

スライド式のドアが開いたかと思うと——先程ARで見た通りの可愛らしい女性が、にこやかに手を振っていた。

「お待たせフトシ君！ ゴメンね、待たせちゃって……」

てへへ、と舌を出して人懐っこく笑う博士。

そんな彼女に、重苦しい余計な威厳などは一切感じられなかった。

「全く……いつも直前になってバタバタするんだから」

と、博士の横から同じく白衣を着た男性が、溜め息をつきながらひよっこりと顔を覗かせた。彼女達とは同じ年くらいの、青い髪をした聡明そうな男性だ。

そんな2人へ、ハラダは親しげに挨拶を返した。

「よ、何だかんだで直接会うのは久しぶりかな？ 取材で開拓^{こく}プラント^ちへはちよくちよく出入りしてたんだけどね」

「うん、お互い中々機会が無いしね。確か、前は先々月に少しだけ食事したっけ。アユ、そのときだって君は……」

じとり、と責めるような視線を向ける青髪の男性に、博士は頬を膨らまして噛み付いた。

「お、女の子は色々と準備に時間が掛かるの！」

「君はもう『大人のオンナ』なんじゃなかったの？」

どすん、と。

何かを踏み抜くような音が木霊した。

「つ~~~~~!?!」

「ごほん！ え、私がこの館の責任者であります、アユ!!アユカワです！」

博士は片足を押さえてピョンピョンと飛び跳ねる青髪の男性の前に出ると、何事も無かったかのように一行へ向けた自己紹介を切り出した。

ベルは、思わずそんな博士の足元に目をやった。博士が着用していたのは、キラリとした赤い光沢を放つ——靴底の平たいパンプスだった。ハイヒールと名の付く凶器カテゴリではないと確認したベルは、ひとまず男性の足に深刻なダメージが無いことを悟りほつと胸を撫で下ろした。

「口は痺れる災いの元だぜ、タツヤ」

「うう……ヒドイよ……」

やがてぱたんと床に倒れこんでうずくまってしまった男性へ、ハラダはそつと寄り沿うと肩を叩いて声を掛けた。そんな様子と砕けた口調からしても、彼らが特に仲の良い友人であろうことは容易に想像

がつく。

そんな中、咳払いを軽くしてから、藍が一步前に出て一礼した。「お初お目にかかります、博士。ハラダ編集長にはお世話になっております、藍湊峰です」

藍が代表として丁寧に挨拶すると……途端、博士の顔にぱつと花が咲いた。

「あなたが元N―EVESの湊さんっ!？」

「え？ あ、はい。そうですが……?」

「うわあ、凄いホンモノだあ!?! 後でサイン下さい!!」

「いえ、あの……」

握手した手をブンブンと振り回す年上の女性に困惑気味の藍だったが、こほんと咳払いをして仕切り直したのは当の本人だった。

「ああ、えつと。ごめんなさい、嬉しくてつい興奮しちゃって」

博士はひとまず握っていた手を離すと、気恥ずかしそうに頬を掻きながら話し始めた。

「私、前からずつとN―EVESのファンで……」

「前から、ずつと……?」

「うん。丁度ね、ここで働き始めて色々あって凹んでた頃かなあ……何気なく聞いたアナタ達の歌に元気を貰ったの。アナタ達がいてくれたから、私もここまで頑張つてこれたんだ。だからあのスキャンダルがあった後も、私ずつと応援してたんだよ?」

嘘偽りの無い純粋な笑顔。きつとこんな彼女だからこそ、多くの人から支持され、引きつけることが出来たのだろう、と藍は思った。

「本当は、あの一番大変なときに力になってあげられれば良かったんだけど、私の立場も色々とウルサくて……それが最近復活したって聞いて、私凄く嬉しくて!」

そして何より、蓮や他のメンバーと和解したことで決着を付けたはずの『過去』に、どこか暖かな光が差したような気がして。

思わず潤んだ涙腺を引き締めて、藍は笑顔で言葉を返した。

「……そう言っ頂けると私も嬉しいです、あの子達もきつと。サインは私の方からメンバーに掛け合ってみますよ。よろしければ受け

取って頂けますか?」

「ええっ!? ホントに……ああいやいや、本当ですかっ!?」

「はい、御礼といっただけですが」

「やったあ!! ありがとう湊さんっ!!」

アイドルとしての名前を……捨てた筈の名前を呼びながら、博士はぴよんと抱きついてきた。半ばタツクルのような勢いで飛んできた博士を、藍は必死で受け止める。

「ほら、アユ。藍さんが困っているだろ? 皆さんを待たせているんだし、早く本題に入ろう?」

足を引きながらよろよろと立ち上がった青髪の男性——タツヤに促され、博士は頬を染めながらぱつと藍から離れると、咳払いを1つして一同に向き直った。

「おほん……それじゃ、皆さんのお話を改めて聞かせて貰えるかな?」

*
*

「えっと、大体のお話は私も聞いてたけど……そんな恐ろしい話が現実にあるなんて。やっぱりまだ信じられないなあ」

テーブルに着いた一同から話を聞いて、まず口火を切ったのは博士だった。

いくら彼女が奔放な性格とはいえ、その本業は論理^{ロジック}を組み立てていく研究者だ。いくつかの事実が根拠になっているとはいえ、たかがカードが歴史を改竄したり人を殺めたりするなどといった話は流石に受け入れ難いのだろう。

博士はどうやら燐路と煽里の事情も知った上でここへ招き入れたらしいが、それはそういった疑念を確かめる為に「直接会ってみたかったから」だという。警備の人間が武装をし、最初から警戒を強めているのも、博士からの手回しがあったからだ。

うーんと考え込む半信半疑な博士に、燐路はケタケタと笑いながら煽里を指差して言った。

「信じられねえってんなら、姉貴が《モウヤンのカレー》でもご馳走し

「てやるぜ？」

「……そんな下らない事のために力を使うつもりはありませんが。どうしてもというのなら、ディスクをお貸し下さい」

ライフ回復のカードを一枚渡したところで、どうにかなるものでもないのだろうが……燐路と違って何の枷も無い煽里にディスクとカードを渡すのは躊躇われる。一流の殺し屋ならモデルガンですら凶器に仕立て上げてしまいそうな、そんな不安だ。

その一線を越えるつもりはないという意味を、クラドがぴしやりと告げる。

「流石の俺らも、そこまで無用心になるつもりは無いぜ？　貸すなら、警備の人達と俺ら全員で囲んでからだな」

「……ええ、承知しています。当然の処置かと」

ある意味では冷淡な言葉にも、煽里は素直にこくりと頷いて同意を示した。

「どうします、アユカワ博士？」

藍の問い掛けに博士は一瞬迷うような仕草を見せたが、首を横に振って笑顔で答えた。

「モウヤンのカレーはちよつと興味があるけど……大丈夫！　確かに歴史を改変するとか規模が大きな話は、私としては信じられないよ？

でも、アナタ達は少なくともそういうことで嘘を付くような人たちじゃないって。お話して、それだけは分かったかな」

ひとまずは信用して貰えたようで、一行も胸を撫で下ろす。

「だからきつと、『あの子達』に関してはきつとアナタ達の方が詳しいんだと思う。私達がここで色々調べて分かったのは、結局『ただのカード』だつてことだけだし。オーパーツだ何だつて騒がれているけど、私を含めた研究者の間じゃ『質の悪いイタズラ』つて結論に落ち着いちやつててき」

博士が言う『あの子達』とはつまり、『アスタリクス』のことだろう。

その口ぶりから察するに、恐らくは複数枚。

「まあ、個人的に気になることはあるんだけど……それはまた後で、か

な？」

よつと立ち上がりながら、博士は腰に手を当てて話を続けた。

『どの道、『あの子達』をこれ以上調べるのは私達じゃ無理ってことだし。だからここから先は、何か事情を知ってるアナタ達にお願いした方が良い結果になると思うんだ！ 勿論、何か分かったら是非私に教えて欲しいんだけど……』

成程、と藍はどこか納得したように頷いた。

例え旧友のコネがあるとはいえ、遺跡から発掘された貴重な『資料』を得体の知れない人間に手渡すなど正気の沙汰ではない。あちら側にも何かしらメリットがなければ、と考えていたのだ。

「今更ですが、よろしいんですか博士？ その、貴重な……」

「うん、カードを持ち出すことに関しては大丈夫だよ？ さつきも言った通り、もう『あの子達』に研究価値は無いって判断されちゃったし。私が管理を任されているのも単に面倒を押し付けられただけだから、外部に調査を依頼するって形で誤魔化すよ」

警備の人間がいる前でそんなことをケロリといつてのける博士。彼らの『守秘義務』を盾にとつての行動なのだろう。

が、そんな物怖じしない博士の姿勢に溜め息が1つ。タツヤと呼ばれていた青髪の男性だ。

「……アユ？ その『誤魔化す』部分を何とかするのは僕の仕事なんだからね？」

「あははは……よろしくお願いしま〜す……」

「では博士、早速なんですけどそのカードを」

思いの外、トントン拍子で交渉が進んだ。道中、どうなることかと何度もヒヤヒヤしたのが嘘のようだ。

これでユウとの合流が、『アスタリクス』を狙うヒヨリに対する交渉の手段が手に入る。ひとまず一段落、と安堵した一同だったが――

「あ、うん。ちょっと待ってね？」

そう言っただけで博士が白衣の内から取り出し、しっかりと左腕に取り付けたのは空色の最新型Dパッドだった。

見れば既にデツキがセットされており、何故だか『準備』は万端だ。
「じゃ、始めよっか！」

ばんつと仁王立ちした博士は。
得意げに、決闘者にとつての『盾』を構えた。

「……え？ あの、博士、何を？」

「何って、私達は決闘者なんだから。コレを持ってやることは1つで
しよ？」

首を傾げる博士の瞳は恐ろしく純粹だった。

そもそも、博士が決闘者であることなど今の今まで知らなかった訳
で。

「アナタ達が『この子達』をお願いするのに相応しいかどうか……お話
だけじゃ分からないトコロ、最後にデュエルで試させて！」

ふんす、と鼻息を荒くする博士はやる気満々だ。

狼狽する一同に、ハラダも顎を揺らして朗らかに笑う。

「あっはっはっ、成程！ 確かにお互い分かり合うにはデュエルが一
番だ！ 申し訳ないけど付き合っただけでよ、君たちもそれがカード
の引渡し条件だっというなら、聞かないわけにはいかないだろう？」

どうにも、彼はあちらの味方らしい。

「で、ですが……」

「いいんじゃないの？ デュエルするくらい。どーせ戦えない俺ら
にや関係の無い話だしなー」

腕を組んでソファでふんぞり返る隣路は、言葉とは裏腹に不満タラ
タラな様子だ。

「ということで、相手は誰かな？ 立候補しないならこっちから決め
ちやうよく？」

そうは言いつつ、博士の決断に数刻のカウントダウンすら無かつ
た。

びし、と指を向けられたのは……。

「……へ？」

大方、実力者の藍かアンリエールだろうと高を括っていたベルだつ
た。

「お魚さんのコトよく知らないベルちゃんに、私の「アクアリウムデッキ」を見せてあげる!!」

博士からご指名を受けたベルは、もたつきながらも急いでDパッドを装着した。

他のメンバーはそのまま、ソファに座ったままデュエルを観戦することになったのだが――。

（相応しいかどうか確かめるって、やっぱり「カードが欲しければ私を倒してみろ!」的なことなのかな……?）

貴重なカードを託すイコール、他者に奪われたりしないよう守っていけるだけの实力があるかどうかを測るというのがセオリーな筈だ。

だとしたら、一番弱そうな自分を選んだ博士は、燐路の言う通りデュエルの腕に自身が無いのだろうか？

気負わず行け、と声援を送るメンバーの顔ぶれを見回しながら、ベルはうーんと首を捻った。

「おい」

どうにも解せない気持ちを引きずりながら駆け出そうとしたベルを、燐路の声が引き止める。怪訝に振り返ると、不機嫌そうな燐路少年の顔があった。

「は、はい。何ですか……?」

「博士サマの機嫌を損ねんじゃねーぞ。大事なカードが掛かってんだ」

何かと思えば、ただの嫌味か……。

そんなこと言われるまでもない、とベルがしかめ面を浮かべていると。

「おい、売買屋」

「へいへい、何でもございましょうか猿小僧様ー?」

燐路はクラドを手で招くと、何やらござこそと耳打ちを始めた。

「は? ああ、別に構わないが……」

少し不審そうに眉を寄せながらも、燐路の言葉を聞き入れたようだ。

クラドは懐から取り出したデッキから一枚カードを抜き取ると、「ほい」とベルに手渡した。

ちらりと見えたデッキのカードの中には、確かに「ラヴァル」の文字があった。

ということとは、そのデッキは燐路の……？

「猿小僧からだ。メイドちゃんに渡せつてさ」

「えっ、何で……」

「さあな？ 奴なりの饑別なんじゃねーか。とりあえず素直に貰っつけメイドちゃん、そいつはそこそこ値が張るカードだぜ？」

ベルに渡されたカードは「ラヴァル」のカードではなかったが、ベルのデッキでも十分に使える汎用性の高いカードだ。

「……どーせそいつは使ってなかったからな。少しでもデッキを強化しろ」

驚いたベルが目を向けると、燐路はぷいっと顔を背けて言った。

紅の地で育った、ほとんど同じ年の少年。考え方も生き方も違う彼を、どこか自分とは違う遠い存在のように感じていた。

けれど今、文句を言いながら落ち着き無く足をパタつかせる、その素直じゃなくて不器用な姿は——昔、村で一緒に遊んでいた男の子たちと全く同じで。

ベルはふっと、何だか嬉しくなった。

「……分かりました。それじゃありがたく使わせて頂きます！」

明後日の方向を向いている燐路に頭を下げると、ぱたぱたと博士が待つ『戦場』へと駆け寄った。

「お待たせしました、よろしくお願いします博士！」

「いえいえ……それにしても仲が良さそうだね？ ボーイフレンドかな？」

「ななっ……!？」

そんなベルを、博士はニヤニヤと面白い玩具を見つけた子供のような顔で迎えた。

「そ、そんなんじゃないやありませんっ!! 全然違いますっ!!」

「照れるな照れるな♪ いいねえ青春だねえ」

にひひ、と八重歯を見せて笑う博士。

これはどう否定しても、面白がられて終わってしまいそうだ。

「もう!! 違いますっつてば!!」

うがー、と腕を振り上げた拍子に、Dパッドのデュエルモードが起動する。

博士のものとは少し形の違う橙色の新型ディスクが、半実体の黒いプレートを瞬時に形作る。

「うんっ、ベルちゃんもノツてきたね!」

つられて博士も、空色のDパッドをデュエルモードへと起動させた。

連動した2台のディスクが共鳴し、決闘の調停者を呼び起こす。

『――『決闘申請』、確認。^{ARウィジョン}仮想戦場、^{リンク}展開完了。^{ジャックリアアプリ}審判員機構、起動』

真っ白な応接室が、海底大陸にあるまじき太陽の照りつける荒野の溪谷へと変わる。

カッと日の光をその背に受け、凛々しいシルエットをなびかせるのは無口な方の審判員だ。

『明日の私には後光が差すだろう。審判員ネフ、日焼け対策はバッチリです』

スクール水着の上からセーラー服の上着を羽織った健康的な姿は、むしろ日焼け跡のあれこれを期待してしまいそうなものだが。

「審判員さん、ルールはいつも通りで……って、この間から変わったんだっけ?」

博士の問い掛けに、ネフはこくと頷いた。

『はい、正式に全デュエルディスクへと新ルールが適用されました。LP等のデフォルト設定は、以前と同じですが』

大会に出場していたからか、これまで自然と『新ルール』でデュエルしてきたベルだったが……正式に採用された、というのが初耳だった彼女は思わず聞き返してしまった。

「えっ、そうだったんですか?」

『Dパッドをお持ちなら、お知らせのメールが届いていませんでしょうか?』

デュエル以外でDパッドを活用できないベルに、その質問は酷であった。

周囲の景色から浮き出た『観客席』のアンリエールから、長〜い溜め息が漏れる。

「それじゃベルちゃん、変更なしのいつも通りでいいかな? 何か希望はある?」

「あ、いえ。大丈夫です!」

博士の問い掛けにベルが慌てて頷くと、ネフは手早くデュエルの設定を読み上げた。

『かしこまりました。それではハーフライフ4000、アンティは無し、シングルデュエルを開始します。両プレイヤーは適正位置へお付き下さい』

十分な距離を取り、ディスクを構える。

博士はコホンと咳払いをすると、両手を広げて高らかに声を張り上げた。

「戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が!!」

どこかで聞いたその台詞に、ベルも反射的に切り返す。

「もっ、モンスターと共に地を蹴り宙を舞い……ってあれ? これアクシオンデュエルなんですか!」

そんな話聞いてない、とネフに目を向けるベルだったが、肝心の彼女もふるふると首を横に振っている。

博士は気恥ずかしそうにコツンと額を小突きながら、ペろりと舌を出して笑った。

「ごめんごめん、前から一度やってみたくてつい……♪」

驚きのあまり立ち上がりかけた観客席一同も、へなへなと席に着く。

条件反射でポーズをとりかけた幽霊姫は奇妙な格好のまま固まっ

ていた。

「まあまあ♪ 格好だけでいいから、ね？」

「は、はあ……」

そんな博士の『お願い』に続いたのは、気心知れた彼女の友人達だ。

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ、これぞデュエルの最強進化系！」

腕を振り上げてノリノリで声を上げるハラダ編集長とタツヤ助手。

そんな彼らの姿は、本当に無邪気な子供のよう。

「アクション……」

ぱちん、と博士のしなやかな指が鳴る。

「^{デュエル}決闘っ!!」

【ベル】LP4000 VS 【アユ】LP4000

飛び散るアクションカードこそ無かったもの。

それはこれから始まる賑やかな決闘に相応しい、元気で軽快な合図

だった。

第47話 猛攻！ 水槽の麗女優（アクアアクトレス）！！

「私のターン！ ドロー……は出来ないんだよね？ なら私は、手札からこの子を守備表示で特殊召喚っ！」

しなやかな指先がディスクを滑ると、博士の場に予想だになかったモンスターがひよつこりと姿を現した。

《鬼ガエル》

☆2 / 水属性 / 水族・効果 / ATK 1000 / DEF 500

「鬼ガエルは、手札からこのカード以外の水属性モンスター1体を捨てて特殊召喚出来る！ 私が捨てるのは《アクアアクトレス・テトラ》！」

黄色の肌に毒々しい赤色の模様。

プクプクと口を膨らませる妙にリアルなカエルのモンスターは、博士のイメージにはどうも似つかわしくないように思える。

乾燥地帯出身のベルは実物こそ見慣れてはいないものの、こういった生き物に対して抵抗は無かったが……恐らくは多くの女性がそうなのだろう、観客席のアンリエールは露骨に眉をひそめて声を上げた。

「ちよつとグロテスクな見た目だけ……この子だって私の水族館アクアリウムには欠かせない仲間なんだから！ 鬼ガエルが召喚・特殊召喚に成功したとき、自分のデッキかフィールド上から水族・水属性・レベル2以下のモンスター1体を選んで墓地へ送る事が出来る！ 私は2枚目のテトラを墓地へ送るよ！」

先程、特殊召喚の手札コストとなったものと同じ青い魚のモンスターが、鬼ガエルの伸ばした舌に絡め取られ墓地へと送られる。

うん、とその様子を満足そうに確認すると、博士は手札のカードに指を走らせた。

「そして手札から永続魔法、《水舞台アクアリウム・ステージ》発動！」

カードの発動と同時。それはフィールド魔法でないにも関わらず、

真つ赤な太陽の輝く荒野の谷間を一瞬にして色とりどりの珊瑚礁に囲まれた海の底へと変えた。ジリジリと肌を焼くように照り付けていた太陽も、今や水面のカーテンに遮られ優しげな光の筋を届けるのみだ。

「このカードがある限り、私の場の水属性モンスターは水属性以外のモンスターとの戦闘では破壊されない！ あんな日焼けしそうな舞台^{ステージ}じゃ、私のお魚さん達が輝けないもの♪ 最後にカードを1枚伏せて、ターンエンド！ さあ、どこからでも掛かってきなさいっ！」
むんっ、と胸を張ってエンド宣言を放つ博士。

その表情には一点の曇りは無く、好調な滑り出しであることが窺えた。

そんな1ターン目にして博士が作り上げた布陣を、クラドとアンリエールが興味深そうに見つめる。

「へえ、墓地を肥やして壁まで作ったか」

「アユカワ女史、良い腕をお持ちのようですね。あのお馬鹿がどこまで食いつけるやら……ん？」

ふと、アンリエールが審判員の姿を見やると。

フィールドの変化に合わせたいのか、いそいそとコスチュームに何やら付け足していた。

「やけに静かだと思っていましたら……業務を放り出して何をしていますの？」

『今回は解説、実況役としましても観客の皆様の方が適切かと判断しました』

そう言う彼女のコスチュームには、大砲やら何やらの物々しい武装が装着されていた。

だというのにスク水はそのまま。何ともちぐはぐな格好にアンリエールは怪訝に目を細めた。

「……何ですの、その格好は？」

『はい。せっかくの海中ということですので、艦——』

「メイドちゃああああん!! 熱血だああああん!!」

その一方で実際に博士と対峙するベルは、その華奢で奔放な雰囲気

からは想像も出来ない大きなプレッシャーを感じていた。

経験の浅いベルでも——いや、そんな彼女だからこそ感じ取れた博士の圧力。腕に自信がないんじゃないか、なんて疑問は既にどこかへ流されていた。

堂々と佇む博士の自信にはきつとそれだけの根拠がある。それは近いうちに明らかとなるだろう、伏せられたあのカードの中に隠されている筈だ。

(同じモンスターを2枚も墓地に送ったってことは……きつとソレを生かした何かがある。けど……)

今のベルに、博士の手の内を読むだけの知識は無い。

思いつくのは精々、自身も愛用しつつ何度も泣きを見せられた『召喚反応罫』や万能のカウンター罫《神の宣告》程度。

だが逆に言ってしまうえば、それらの汎用カードであれば立て直すのも慣れたもの。どうせ分らないのであれば、恐れず前へ進むだけだ。

あれこれ考えるのは後の話。

まずは信じる仲間達^{デッキ}から、一步目の可能性を受け取る——!!

「わたしのターン、ドロロー!」

引き入れたのは、博士の魔法・罫を除去できるような都合の良いカードでは無かったが……博士の敷いた布陣に一石を投じるくらいは出来そうだ。

「スタンバイからメイン、わたしは手札から魔法カード《増援》を発動! デッキから《切り込み隊長》を手札に加えて、そのまま通常召喚します!」

《切り込み隊長》

☆3 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1200 / DEF 400

銀の甲冑を着込んだ隻眼の男性騎士が、ベルのフィールドへと馳せ参じる。

サラからデッキを譲り受けてからも、多くのカードとの連携が可能なのこのモンスターは相変わらずベルのデッキに投入されていた。

「更に切り込み隊長の効果を発動、手札からチューナーモンスター

《ジュツテ・ナイト》を特殊召喚！」

《ジュツテ・ナイト》

☆2／地属性／戦士族・効果／ATK 700／DEF 900
はっ、と甲高い声を上げ、切り込み隊長の隣へ三頭身程度の『岡っ引き』が姿を現す。

博士の用意した水中の晴れ舞台に、ベルの戦士たちがドカドカと上がりこんだ。

「むむっ、チューナーモンスターかあ……シンクロ召喚だね？」

「はい。すいませんけど、遠慮なく行かせて頂きます！」

闘志をみなぎらせた博士の表情に、曇りの色は一つもなかった。

むしろそこにあつたのは、何かを待ち望むような期待と興奮の赤色だ。

「行きます！ ☆3の切り込み隊長に、☆2チューナーのジュツテ・ナイトをチューニング！」

2体の合計レベルは5。

天に向かって放たれた調律の光輪が、切り込み隊長の姿を変質させていく。

「造られし模倣の正義よ、希望も絶望も隔てなく引き裂く災厄となれ！ シンクロ召喚！ 起動せよ、《A・O・J カタストル》！」

《A・O・J カタストル》

☆5／闇属性／機械族・効果／ATK 2200／DEF 1200

無機質な単眼を光らせ、全てを切り裂く金色の爪が降り立つ。

彼が呼ばれた理由は、只一つだ。

「おお、よっしゃー！ いいぞメイドちゃん！」

「確かに、カタストルの効果破壊なら《水舞台》の戦闘耐性も突破できるわね」

「ま、あの子にしては上出来の解答ですわ」

カタストルの召喚に対して、博士は何のアクションも起こさなかった。それを見届けた藍とクラウドは歓喜の声を上げ、アンリエールは腕を

組んで安堵の表情を浮かべていたが……。

「……はっ、どうだかな」

眉を寄せる燐路は只一人、そんな風に呟いた。

「んだよ猿小僧？　メイドちゃんが負けたらお前が一番文句言いそうなんだから、せめて応援くらいしろっての」

「言わねーよ。あの博士サマがそれなりに強えってのは分かったしな」

つまらなそうに言い捨てた燐路に、怪しげな含み笑いを向けたのはハラダ編集長だった。

「ふっふっふっ。痺れるくらい鋭いね、燐路君」

「そうそう。アユの『エンタメデュエル』は、そう簡単には攻略出来ないよっ。」

恐らくはずっと前から、何度も何度も博士とデュエルをしてきたのであろう2人から放たれた『実感』のある言葉。それは燐路の感じた『気配』以上の重みがある。

「バトル！　カタストルで鬼ガエルに攻撃！」

そんな観客席的一幕など知る由も無く、ベルはカタストルへ攻撃指令を下す。

主の命に従い突撃する白の機体へ、待ったを掛けたのは博士だ。

「させないよ！　ここでリバースカードをオープン！」

（っ、攻撃反応罫……!?!）

その可能性は高い、と見ての攻撃だったものの……ベルの予想に反して、ソレは意外な姿を披露した。

「罫カード、《マジカルシルクハット》を発動っ!!」

「なっ……!?!」

お披露目されたのは、ミラーフォースでもなければ次元幽閉でもない。

除去効果も無く、あまり採用率は高くない。しかし他に例を見ない特異な効果を持つ、カードイメージ通りの『トリッキー』な罫カードだった。

「このカードはデッキから選んだ2枚の魔法・罫カードを、裏側守備表

示の攻守0のモンスターとして特殊召喚し、自分フィールド上のモンスター1体と合わせてシルクハットの中へと隠す！ 私がデッキから選択するのは、永続魔法《水舞台》と《水アクアリウム・ライティング照明》の2枚！」
出現した巨大な3つのシルクハットの中に、それぞれ鬼ガエルと裏向きの2枚のカードが隠されると……3つのハットは複雑な動きで互い違いに入れ替わり、博士の場にモンスターとして立ち塞がった。「この効果で特殊召喚した2枚のカードはバトルフェイズ終了時に破壊されちゃうけど……さてさて、ベルちゃんはシルクハットの中に隠れたカエルさんを見事当てられるかな？」

博士はニンマリと屈託の無い笑顔を浮かべると、ベルにバトルの続きを促した。

ベルは考える。鬼ガエルを守り、次のターンでシンクロやエクシズ、アドバンス召喚に繋げることが狙いだとしても……言ってみれば1／3の確立で目論見が失敗してしまう訳だ。防御札として選択するにはあまりにも心許ない。

だとすれば、本当の目的は2枚の魔法カードをモンスターとして特殊召喚したことにありと見ている。そこで考えられる可能性は、あの2枚が破壊されたときに何か効果があるかもしれないということだ。しかしここで攻撃を抑えたとしても、結局は《マジカルシルクハット》がバトルフェイズ終了時に破壊効果を発動してしまう。ならば――

（狙いはまだ分からないけど……カタストルは無事だし、とにかく今は攻撃あるのみ！）

これで鬼ガエルを当てる事が出来れば儲けたもの。
そんな決断を下し、ベルは再びカタストルへと指令を下した。

「えっと……それじゃあ、真ん中のハットへ攻撃します！」

カタストルの爪は、正々堂々と真ん中のシルクハットを貫き――見事、中に隠れていた鬼ガエルを仕留めた。

「うむむむっ……大当たり。鋭いねベルちゃん！」

「でも、これでわたしのバトルフェイズは終了です……」

「そうだね、それじゃシルクハットの中に残された2枚のカードを破

壊するよ！」

結局は博士の目論見通り、モンスターとして場に出ていた2枚の永続魔法が音を立てて破碎してしまう。

「隠されていた2枚のカード……《水舞台》と《水照明》の効果を発動!! フィールドから墓地へ送られた場合、墓地から水族モンスターを1体特殊召喚できる! 私はそれぞれの効果で、墓地の《アクアアクトレス・テトラ》2体を守備表示で特殊召喚!」

《アクアアクトレス・テトラ》

☆1 / 水属性 / 水族・効果 / ATK 300 / DEF 300

アルトの美声を奏でながら、華美な舞台衣装で着飾った2体の小さな魚型モンスターが博士の舞台へ^{フィールド}と躍り出る。

青く長い尾ひれをたなびかせ、2体はくると宙で弧を描いた。

「前のターンで墓地に送っていたのは、これが狙いだっただって訳か……」

「そういうこと! 痺れる展開だろ?」

感心したように呟くクラドに、ハラダが顎を揺らして笑う。

意外な方法で後続のモンスターを残されてしまったことに、ベルは歯噛みしながらも返しのターンに備えて頭を回転させた。

たった300の攻撃力を持つだけの小さなモンスターではあったが……基本攻撃力やレベルだけが全てで無いことは、これまでの戦いで十分に身に染みている。

「メイン2、わたしはカードを1枚伏せてターンエンドです!」

とりあえず、今出来る最善はこれしかない。

険しい表情でベルがターンを渡すと、博士は一瞬困ったように眉を下げたが。

「それじゃ私のターン、ドロー! ……よしっ!」

ドローカードが良かったのか、花が咲いたような満面の笑みが浮かぶ。

喜びを抑えるようにコホンと咳払いをすると、博士は高らかに両腕を上げた。

「紳士、淑女の皆様! 大変長らくお待たせ致しました!」

何事かと目を丸めるベルやクラド達などお構いなしに、博士は仰々しい口調をそのまま続けた。

「これより、私自慢の『水槽の麗女優』^{アクアアクトレス}達による華麗なエンタメデュエルショーを、皆様にごぞんとお見せ致しますっ！」

「いよっ！ 待つてましたあー！」

そんな博士に、ハラダとタツヤが声を重ねて合いの手を入れる。

頼もしい声援を受け、博士はまるで本当のエンターテイナーのように優雅な一礼をして見せた。

「あれは、確か……？」

博士の行動に何か思い当たる節があったのか、アンリエールの眉がぴくりとはねる。

「お嬢、何か知ってるのか？」

「あの前台詞は恐らく、アクションデュエルの開祖の……あのお方、余程アクションデュエルがお好きなようですね。それにしても、私のことなど眼中に無いというのが残念ではありますが」

くすりと微笑む幽霊姫の言葉の端に、クラドも何となく事情を察した。

「つまり、あれはその人のモノマネって訳か？」

「だと思えますわ。まあご友人方も楽しそうですし、余計なツツコミを入れるのは野暮というものです」

うおー、と盛り上がるハラダとタツヤを見ると、クラド達も思わずこれから何が起こるのかと期待してしまふ。

博士が模倣したのはきつと、『その人物』の格好だけではない。人々を楽しませようとするその意思すら、この場に再現しているのだから。

「まず皆様にご覧頂きますのは、凛々しくも可愛らしい男装の乙女達によるオープニング・セレモニーですっ！ 彼女達の力で、この舞台をより華やかに飾って頂きましょう！」

博士の合図で、テトラたちが8の字を描くように水中を舞い踊る。

『《アクアアクトレス・テトラ》は1ターンに1度、デッキから『アクアリウム』1枚を手札に加えることができます！ 2体分の効果で私

が手札に加えるのは永続魔法《水照明》と《水舞台装置》！アクアリウム・セットそしてそのまま、手札に加えた2枚を発動っ！」

テトラ達から受け取った2枚のカードを、博士は躊躇うことなくディスクの上に滑らせていく。

珊瑚礁の海底に、朱色に塗られた建物や水車が並ぶ御伽噺の『海底王国』がゆらりと浮かび上がり、仕上げとばかりにキラキラと輝く照明がライトアップを飾る。

「凄い、キレイ……」

ほえくと感嘆の息を漏らすベルに、博士も満足そうに頷いた。

「さてさて、テトラたちのおかげで舞台も華やかになりましたが！」

ここでもう一つ、私がささやかなアレンジを致しましょう！ 手札からフィールド魔法《湿地草原》発動っ！」

3枚の永続魔法で景色を飾りつけながら、まだまだ物足りないばかりに発動されたのは極めつけのフィールド魔法だった。

しとしとと雨が降る広大な草原地帯も、海の底に沈んでしまったては形無しの筈。しかし岩肌ばかりだった海底の地表をゆらゆらと揺れる緑が埋めたことで、色鮮やかで良いアクセントとなった。

当然ながら、博士の狙いは視覚的な効果だけには留まらない。

「湿地草原は、フィールド上の水族・水属性・レベル2以下のモンスターへの攻撃力を1200ポイントもアップさせちゃうフィールド魔法！ 更に発動させていた水舞台装置の効果で、私の『アクアアクトレス』達は600ポイント攻撃力がアップしています！ よってテトラ達の攻撃力は——？」

《アクアアクトレス・テトラ》

ATK 300↓2100

それはもはや、上級モンスターすら相手に取れるほどの立派な攻撃力だった。

「そんな、ちよつと前までだった300の攻撃力だったのにな……!?!」
「むっふっふ、驚いて頂けたようですね？ それではバトルと参りましょう！ まずはテトラでA・O・J カタストルを攻撃っ！」

テトラが手にしたステッキを振りかざし、くるくると円を描いてい

く。

巻き起こった水流が敵を押し流そうと力を貯めていく中で、ベルは驚きの声を上げた。

「なっ……カタストルの効果を忘れたんですかっ!？」

「忘れた訳じゃないよ、水舞台上に隠された第三の効果! 私『アクアアクトレス』は相手モンスターの効果を受けないっ!」

「なになっ!？」 け、けど攻撃力はまだカタストルにつ……!？」

水の魔イリュージョン法が放たれんとしたその時、水照明の煌びやかな光がテトラを照らした。

「水照明の効果発動! 自分の『アクアアクトレス』が相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時、その『アクアアクトレス』の攻撃力・守備力はダメージ計算時のみ倍になる!」

《アクアアクトレス・テトラ》

ATK 2100 ↓ 4200

ゴゴゴ、と地鳴りを響かせて渦を巻くその威力は、もはや切り札級の数値だ。

これが元はたった300の小さな下級モンスターの攻撃であったなどと、一体誰が信じられるだろうか。

「よ、4200って……きやあああっ!？」

放たれた激流に、カタストルは跡形も無く吹き飛ばされてしまう。その超過ダメージはベルへと襲い掛かり、LPはごっそりと削られてしまった。

【ベル】 LP 4000 ↓ 2000

「は……はれほれ……?」

渦に巻かれてクルクルと目を回しているベルに、アンリエールが激を飛ばす。

「お馬鹿っ!?! しつかりなさい、次が来ますわ!!」

「続けて行くよ? もう1体のテトラでダイレクトアタックっ!」

アンリエールの声と博士の攻撃宣言に、辛うじて意識を立て直したベルは伏せていた毘へと手を伸ばした。

「はっ……!?! り、リバーズ発動っ!! 《くず鉄のかかし》!!」

不恰好なジャンクのかかしが、再び放たれた水魔法を辛うじて受け止める。

ぐるぐると回る視界を必死に押さえつけながら、ベルはふらつく足を踏ん張らせた。

「やっぱりそう簡単には通してくれないかあ……うんっ！ 私はこれにて、ターンエンドでございます！」

おどけて一礼する博士に、観客席から拍手が送られた。

それは友人であるハラダやタツヤだけではなく、見事なお手前に感服したクラウド達からも巻き起こったものだ。

分け隔てなく人々を魅了するそのデュエルに、ベルは羨望を抱きつつも思った。

——強い。恐らく今までに会った決闘者と同じか、それ以上に。

だが不思議と、ベルは博士に対して恐怖を感じなかった。

それは、このデュエルに何も掛かっていないからだろうか？ いや、そうではない。自分がこのデュエルに負けてしまえば、もしかしたら《アスタリクス》のカードを譲って貰えないかもしれないのだ。博士に指名され、代表としてこの場に立っている以上、いつも以上に気を張っていた筈なのに。あれだけ強いプレッシャーに当てられて、緊張もしていた筈なのに。

何故だろうか。博士のデュエルをもっと見ていたいと思うのは。

このデュエルを、この時間をずっと続けていたいと思うのは。

それは、大会でサラ達と戦ったときにベルが感じた、『楽しさ』という違和感の正体だった。

(……そっか)

外の世界を羽ばたく為に力が欲しくて、その為にデュエルを学んできたつもりだった。

ずっとこの目で見てきた。勝敗で全てが決まってしまうデュエルを、大切なモノが失われていく悲しさを、怒りを。

ベルは悩んだ。それまで大嫌いだった理不尽なデュエルと、自分が感じた楽しいデュエル。どちらが本当の姿なのだろうと。

その答えは簡単だった。どちらもきつと本当の姿で、偽りなんか

じゃない。悲しい事が沢山あったあの酒場にも、今はもう帰れない故郷の村にも。思い返せば、そこには笑顔でデュエルを語る人々が沢山いたのだ。

勝敗が全てを分かっ厳しい世界。だからこそその楽しさがあって――彼らは皆、決闘者であり続ける事が出来たのだ。

「あ、やっと笑った!」

博士に言われて、ベルはふっと気が付いた。

頬が、自然と緩んでいる。

「え……う?」

「ベルちゃんてば、このデュエルが始まってからずくと難しそうな顔してるんだもん! セツかくの楽しい時間なんだし、そんなんじや勿体無いよ?」

てへへと後ろ頭を掻きながらも、博士は続けた。

「まあ、今は私に押されてツマンナイかもしれないけど……もしここから逆転できたら、って考えたら? ベルちゃんだって私だって、きつと楽しめると思うんだ!」

それまでベルが行ってきたデュエルは、楽しめる余裕など無かったことも事実だ。

負ければ後が無い決死のデュエル。そんな中でも、ベルは博士の言う『ソレ』を確かに感じとっていた。

「だからベルちゃんも、もつと楽しんで全力でぶつかってきて! どんなときでも、明るく楽しくエンタメる!! 私の大好きな人の言葉だよ!」

自分の眺めてきた景色とは全く違うモノを見てきた彼女の言葉は、ベルの中にあつた何かを呆気なく取り払っていった。

「どんなときでも、明るく楽しく……」

ベルの頭に浮かんだのは、相当な腕を持ちながらも笑顔を見せたことが無い男の姿だった。

かつては自分もデュエルに『楽しさ』を感じていたと語った彼……ユウにこそ、この言葉を届けてあげたいと思った。籠を開け空へ放つてくれた彼に、今度は自分がその翼で飛び回り、知り得たものを伝え

る番だ。

だから今は、博士から精一杯の『エンタメ』を学びたい。胸を張ってユウに伝える事が出来るように。自分と同じように、デュエルの『楽しさ』を思い出して貰えるように。

ユウの背負った荷物がどれほどのものかをベルは知らない。だが事情がどうであれ、あんな表情のまま戦い続けているなんて……あまりにも辛過ぎるから。

「……分かりました！ お言葉に甘えて、全力で楽しませて頂きますっ！」

笑顔で頷く博士の胸を借りるつもりで、ベルはまた一步前へ踏み出していく。

明確な目標を掲げたベルの右手は、とても軽快に動いてくれた。

「わたしのターン、ドロっ!!」

第48話 雲間に浮かぶ天女

「……よしっ！」

ベルが手にしたのは、舞台上で輝く麗女優達を突破する為の一欠片。博士の場に伏せカードが無い今、臆する必要は無い。

博士に倣ってベルも楽しげな笑みを浮かべて見せる。今度はこっちの番だ。

「スタンバイからメイン、私は手札からこの子を召喚します！」

《アイス・ハンド》

☆4 / 水属性 / 水族・効果 / ATK 1400 / DEF 1600

海底を突き破り現れる、氷塊の掌。

その歪な姿に隠された効果を知っているのだろう、博士は露骨に苦い顔を浮かべたが……反面、キラリと期待に目を輝かせた。

「ううっ、そのカードは……ベルちゃんてば引きが強いんだね。でも私のアクアリウムコンボはもう完成してる！ 自爆をするにはちよつと無謀じゃないかな？」

博士の言葉の意図を読み、ベルも頷く。

「確かにこのままアイスの効果を使おうとすれば、わたしのライフの方が先に無くなっちゃいます。けど……」

それからニヤリと不敵に笑って、ベルは一枚のカードをディスクへと滑らせた。

「このカードがあればどうですか？ 魔法カード《一時休戦》っ！ お互いにカードを一枚ドロし、次の相手ターン終了時までお互いが受けるダメージは0になります！」

「ふふっ、成程ね♪」

ライフを気にすることなく自爆特攻を繰り返せる、ベルの常套手段。

このカードの登場は博士もある程度は予想していたのだろう、表情に焦りの色は無い。むしろ『一方的な休戦』の代償として発生する無償の1ドロに活路を見出すように、博士は既にデッキのカードへと手を掛けていた。

「ドローっ！」

ベルと博士、2人の決闘者が同時にカードを引き抜く。

互いの視線は一瞬、手元のカードへと向けられた後——修正、再構築された戦術を秘めたまま甲高い音を立てるようにぶつかり合った。

刹那、解き放たれたのは意気揚々とした攻撃宣言だ。

「バトル、アイス・ハンドでテトラに攻撃！」

「勿論迎え撃つよ！ やっちやえテトラ!!」

4200の攻撃力が轟音と共に再び振るわれる。

飛び掛っていった氷の巨掌は抵抗する間も無く、粉々に砕けてしまったが——。

「この瞬間、アイス・ハンドの効果を発動！ まずはアクアアクトレスに破壊耐性を与えている《水舞台》を破壊します！」

砕けた氷の破片が珊瑚礁を無残に貫き、破壊していく。

これで麗女優達に破壊耐性を与えていたコンボの一角が崩れた。

「更に、ゲッキキから《ファイヤー・ハンド》を特殊召喚！」

そんな状況の変化を合図に、溶岩の巨掌が入れ替わるように海底から姿を現した。

《ファイヤー・ハンド》

☆4 / 炎属性 / 炎族・効果 / ATK 1600 / DEF 1000

「それなら私も、《水舞台》が破壊されたことで効果を発動するよ！ 墓地から《鬼ガエル》を守備表示で特殊召喚！」

最初のターンで見事コンボの初動を果たした、毒々しい色合いのカエルモンスターが水泡の沸き立つフィールドへと再浮上した。

だが、今のベルにとって優先するべきは強力なコンボを生み出している魔法カードの破壊だ。気に留めることなく、更なる追撃を目指す。

「続けてバトル！ ファイヤー・ハンドでテトラに攻撃！」

「またまた返り討ち！ なんだけど……」

博士の言葉尻が小さくなった、その意味が示す通り。

放たれた激流に飲まれ、砕け散った溶岩の破片は礫となってテトラに襲い掛かっていく。

無数の礫に当てられた青の麗女優は、か細い悲鳴を上げながら海の藻屑と散っていった。

「ファイヤー・ハンドの効果発動！ 破壊されたことで《アクアアクトレス・テトラ》を破壊し、《アイス・ハンド》を特殊召喚！ そして特殊召喚されたアイスで残ったテトラに攻撃、今度は《湿地草原》を破壊します！」

再び入れ替わった氷の巨掌が、水泡の煙幕を割って残った麗女優へと向かって行く。

驚いたテトラは主の指示を待つことなく、反射的に水魔法で迎撃したが……結果は先と同じだ。今度は岩礁を覆っていた新緑のカーペットが氷の礫に打ち抜かれていく。

「うう、私のアクアリウムがあ……」

「まだ行きますよ!! ファイヤー・ハンドを再び特殊召喚してテトラに攻撃します！ 効果発動、アイス・ハンドを再度特殊召喚し鬼ガエルを攻撃です！」

次々と交互に繰り出されるその様は、まさに氷炎の拳撃。

博士の用意した華麗な舞台には相応しくない荒くれた戦術だったが……これがベルの、数多の決闘者と向き合って身に着けたネイティブ・グラン未開拓の橙のデュエル作法だ。

「メイン2、カードを1枚伏せてターンエンドです！」

遠慮など欠片もない、ベルの全力。

破壊し尽くされたアクアリウムを残念そうに眺めながらも、博士の表情はこの状況を確かに楽しんでいた。

「凄いね……たった1ターンで私のアクアリウムコンボを破っちゃうなんて！ でもまだまだ——」

困ったように下がっていた博士の眉が凛々しく吊り上る。

ディスクを掲げて、ベルに、観客たちに向かって高らかに声を上げた。

「お楽しみは、これからだ！」

少し不安そうに博士を見守っていたハラダとタツヤも、彼女の言葉を聞いて一転。

子供のように目を輝かせ、声援を送る。

「よっしゃー!! もっと痺れさせてくれー!!」

「頑張つて、アユ!!」

親友達の声援に笑顔で手を振って。

博士はすつと目を瞑り、祈りを捧げるようにデッキのカードに手を掛けた。

「……お願い、私のデッキ。いいカード引けますようにっ」

デッキはちやんと、応えてくれるだろうか？

もしも応えてくれなかつたら、どうやってこの状況を切り抜ける？

博士の佇まいは、そんな感情が直接頭に響いてくるかのようだった。

「私のターン、ドロー!!」

カードを引き抜いた博士の指が輝く一筋の軌跡を描く。

その一瞬に誰もが目を奪われる。相手として対峙するベルですら、期待に胸を膨らませてしまう程に。

その結果は最早、語るまでも無いだろう。

「——よっ!!」

博士の唇から、喜びの音が漏れる。

「一時休戦の効果でこのターン、ダメージは与えられないけれど……攻めない理由にはならないよね？ まずは手札から魔法カード《浮

上》を発動！ 墓地からテトラを守備表示で特殊召喚っ！」

墓地という名の深海から、青の麗女優が再び舞^{フィールド}台へ浮かび上がる。

「そして私の場に攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚されたことで、速攻魔法《地獄の暴走召喚》を発動！ 私はテトラを、ベルちゃんは自分フィールドのモンスター1体を選択して、手札・デッキ・墓地から可能な限り特殊召喚できる！」

「なっ!?!」

「出た!!」

「アユのマジックコンボだ!!」

ベルの驚きに合わせて、ハラダとタツヤが拳を握り締めて絶妙な合いの手を入れる。

アクアリウムコンボを成立させる為の永続魔法をサーチ出来るテトラの効果、その強力は前のターンで立証済みだ。そのモンスターが再びフィールドへ展開されたということは……。

「わたしは《アイス・ハンド》を選択、守備表示で特殊召喚します……!!」

そうならばこちらも、魔法・罠を破壊出来る氷の掌で牽制するしかない。破壊され墓地へ送られた2体が、ベルの場にずらりと並び立つ。

そして対する博士の場には美しく尾を引いた3体のテトラが、くると舞い踊った。

「私は場に揃った3体のテトラの効果を発動! 《水舞台》《水舞台装置》《水照明》をそれぞれデッキから手札に加える!」

テトラ達から3枚のカードを受け取って、博士が満足そうに微笑む。

フィールド魔法の《湿地草原》こそ無いものの、これでいつでも前のターンで完成した強固なコンボが再現可能という訳だ。

「続けて、守備表示のテトラをリリース! 《アクアアクトレス・アロワナ》をアドバンス召喚っ!」

タテガミのような白のファーに、華美なドレス。

金色のキセルを啜えた紫の大女優が、ふふんとベルに流し目を向ける。

《アクアアクトレス・アロワナ》

☆6 / 水属性 / 水族・効果 / ATK 2000 / DEF 2000

「あ、アドバンス召喚っ!」

「大物キター!!」

大型の古代魚『アロワナ』をモチーフとしたそのモンスターは、そのサイズも相まって他の観賞魚に比べて飼育が難しい部類になる。

扱いこそ難しいが、その迫力は満点……ハラダの上げた歓声は、二重の意味で的を射ていた。

「さあ、アロワナの効果を発動! デッキから《アクアアクトレス・グッピー》を手札に!」

業界の大物からお声が掛ければ、どんな女優も急いで駆けつける。アロワナの背後に一瞬だけ見えたピンク色の小魚は、すぐさまカードとなって博士の手元に加わった。

「そして私は、このままバトルフェイズに！　まずはテトラでアイス・ハンドへ攻撃っ！」

手札にはアクアリウムコンボを決めるカードがある。しかし博士はそのままバトルへと突入した。魔法・罫を破壊出来るアイス・ハンドがこれでもかと並んでいるこの状況、ベルが博士の立場でも同じ選択をしていただろう。

《アクアアクトレス・テトラ》

ATK300↓1800

残っていた《水舞台装置》、《水照明》の支援を受けたテトラの攻撃が氷の巨掌に迫る。前ターンの化け物じみた威力まではいかなくとも、下級モンスターを蹴散らすだけなら十分だ。

「ううっ……!?!」

水魔法に蹴散らされ、氷の塊が砕け散る。

破壊の余波に片腕で顔を庇いながらも、ベルは臆することなく先のターンと同じ台詞を告げた。

「っ……この瞬間、アイス・ハンドの効果を発動！　《水照明》を破壊して、効果で《ファイヤー・ハンド》を特殊召喚します！」

「でも《水照明》が破壊されたことで、私は墓地からテトラを守備表示で特殊召喚するよ！　次はアロワナでアイス・ハンドに攻撃っ！」

《アクアアクトレス・アロワナ》

ATK2000↓2600

水舞台装置の城に腰掛けたアロワナの大きな口から放たれたのは、強力なバブルブレスだ。最悪なことに、後に続く紅蓮の掌はもうデッキの中に存在しない。

（こうなったら《くず鉄のかかし》で守る？　でも……）

確かに《くず鉄のかかし》を発動すれば、アイス・ハンドを守ることは出来たが……そうなればアクアリウムパーツを破壊出来る機会を逃してしまうかもしれない。

博士の場に残っているのは《水舞台装置》1枚。《アクアアクトレス》の攻撃力を600上昇させるだけの効果ではあるが、博士の手札には既にもう1枚の《水舞台装置》がある。合わせれば1200ポイントの上昇……決して無視できる数字ではない。

結果として、ベルは頭上から降り注いだその攻撃を受け入れ、2体目の氷掌を砕け散らせた。

「……アイス・ハンドの効果を発動っ！ 《水舞台装置》を破壊します！」

水舞台装置が破壊されたことで、フィールドは元の荒野の谷間へと姿を戻したが……そんなものは、束の間でしかない。

「《水舞台装置》が破壊されたことで、墓地から《鬼ガエル》を攻撃表示で特殊召喚！ そしてメインフェイズ2。私はさつき特殊召喚したテトラの効果で、《水舞台装置》をデツキから手札に加える！」

ベルが全力を尽くして打ち崩しても、博士はソレを受け止めて見事に立て直した。

炎氷の拳撃を打ち切つて尚、博士のアクアリウムは崩れない。

「更に《水照明》《水舞台》、そして《水舞台装置》を2枚、一気に発動っ！」

虹色の珊瑚礁、煌びやかな舞台装置。

麗女優達を照らす光は、荒くれたたちの襲撃を受けても決して色褪せなかった。

「私はこれで、ターンエンドっ！」

どんなもんだと言わんばかりに、にかつと笑顔を浮かべて見せる博士。

もしこれが、それまでと同じような気持ちで臨んだ大切な何かを賭けたデュエルだったら。ベルは唇を噛み締め、焦燥に胸を脈打たせていたかもしれない。

「……やっぱり、強いですね。でも——」

けれど今は違う。自分の全力をぶつけた分だけ、同じように跳ね返ってくる博士とのデュエルに熱く心を揺さぶられている。

もう自分の心を偽ることなく、素直な気持ちで『楽しい』と感じる

事が出来る。

「わたしだって、負けませんっ!」

ユウのことも《アスタリクス》のことも、決して忘れた訳じゃない。
い。

だけど今は、それ以上に——勝ちたい。負けたくない。

こんなにも楽しい時間を、終わりにしたくない。

「わたしのターン、ドロー!!」

ベルのドローも、負けじと光の軌跡を描いた。

手札に残されたカードと照らし合わせ、しばし思考に耽る。

(考えろ、この状況を打ち破るには……)

ファイヤー・ハンドを盾としようにも、その効果にはもう期待はできない。更にアイス・ハンドの自爆にしても、アクアリウムコンボが再建されてしまった今、その代償は無視できない状況だ。

だとすれば——どう動けば良い?

ベルの頭の中で、バラバラだったパズルのピースが形を成している。
く。

やがてそれは、光の道となつて一筋に繋がった。

「スタンバイからメイん、わたしは手札から《トリオンの蟲惑魔》を召喚! その効果でデッキから《奈落の落とし穴》を手札に加えます!」

《トリオンの蟲惑魔》

☆4 / 地属性 / 昆虫族 / ATK 1600 / DEF 1200

海底の壇上へと上がった次なる刺客は、得意の罠で獲物を絡め獲る魔蟲の化身。

あどけない顔立ちの少女は短い銀髪をさらりと揺らすと、1枚のカードをベルに手渡す。

すると彼女は自らの役目を理解していたかのように、黙して溶岩の掌の隣に並び立った。

「行きます!! わたしは☆4のトリオンとファイヤー・ハンドでオーバレイ!!」

橙と赤の光球が螺旋を描き、光の渦の中へと飛び込んでいく。

「2体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを構築……エク

シーズ召喚!!」

闇色に暗転した景色は、瞬く間に眩い光に照らされた。

「全てを砕く金剛の牙、★4 《恐牙狼 ダイヤウルフ》っ!!」

父から譲り受けた、ベルの持つ汎用★4エクシーズが姿を見せる。

その強靱な前足を海底の舞台にしっかりと食い込ませ、金剛の狼は雄叫びを上げた。

《恐牙狼 ダイヤウルフ》

★4 / 地属性 / 獣族・エクシーズ・効果 / ATK 2000 / DE

F 1200

「凄いつ、エクシーズ召喚まで!」

「えへへ……行きます、ダイヤウルフの効果を発動! ORUを1つ使い、自分フィールド上の獣族モンスター……ダイヤウルフ自身を破壊することで、フィールド上のカード1枚を選択して破壊します! まずは《水舞台》を破壊!」

せつかくのモンスター・エクシーズであったが、その役目はやはり博士のアクアリウムコンボを崩すことにある。

早々にその身体を砕き、無数の無骨な刃に姿を変えたダイヤウルフが珊瑚礁の舞台を破壊する。

「ああ!? せつかく作り直したアクアリウムがまた……うう、墓地にモンスターがないから《水舞台》の効果は発動できないし……」

「まだまだ行かせて頂きますっ! 更に伏せていた永続罫《リビングデッドの呼び声》を発動! 墓地から《トリオンの蟲惑魔》を特殊召喚し、その効果で《水照明》を破壊します!」

「えええ!? またあ!?」

博士の悲痛な叫びも空しく、ベルのモンスター達はアクアリウムを打ち崩していく。

墓地から飛び出してきた蜻蛉の少女が腕を突き出し、地中から出現した巨大な鋏のような顎が水照明を砕いた。

しばし呆然としていた博士だったが……その口元は、自然と緩んていった。

「……ふふつ、私のアクアリウムコンボを二度も崩してくるなんて!

けど、私の場にはまだお魚さん達が沢山いるよ？ アロワナの攻撃力は2枚の《水舞台装置》の効果で3200……ベルちゃんはどうするつもりなのかな？」

確かに、これ以上ベルにアクアリウムを破壊する手段は残されていない。

それどころか、肝心の麗女優達を退けるにはあまりに非力な布陣だ。

「確かに今のままの手札じゃ次のターン、博士に攻め切られてしまうのは時間の問題です……けど、ご心配には及びません！ 魔法カード《貪欲な壺》を発動！ 墓地のハンドモンスター5枚をデッキに戻して、カードを2枚ドローします！」

ハンドモンスターを補充すると共に、新たなカードを呼び込む逆転の一手。

何とか切り替えしたベルに、観客席のクラドとアンリエールも胸を撫で下ろす。

「よし！ 上手いこと貪壺を引いてたか！」

「破壊耐性を与える《水舞台》は先程で3枚目……ハンドモンスターの後続が補充された今、アユカワ女史にとって攻め難い状況になりましたわね」

博士は少し驚いたように目を丸めたが、ドローカードを確認してぱっと明るくなったベルの表情を見て口角を上げた。

「ふふっ……良いカードが引けたみたいだね？」

「はい！ 手札から魔法カード《精神操作》を発動、アロワナのコントロールを得ます!!」

果たしてベルが引き当てたのは、モンスターのコントロールを奪う強力な魔法カード。

カードから放たれた螺旋状の催眠波がアロワナの精神を操^{コントロール}作し、ベルのフィールドへと鞍替えさせる。

この効果で奪ったモンスターは攻撃宣言やリリースこそ出来ないが、シンクロやエクシーズの素材に関しては何の指定もない。博士は当然、アロワナを素材とすることで『処理』するものと踏んでいたが

……ベルの不完全なエクストラデッキを知る観客席の一同は、思わず小首を傾げた。次の瞬間、彼女の宣言を聞くまでは。

「そして、コントロールを得たアロワナを『持ち主の手札に戻し』、このカードを特殊召喚します！」

精神操作を受け、ぐるぐると目を回したままのアロワナが博士の手札へと帰っていく。

同時に発生した渦巻く風は、この水中舞台において激しい渦潮と化す。渦を割って現れたのは、寸胴な体型の鳥人型ロボットだった。

《A・ジエネクス・バードマン》

☆3 / 闇属性 / 機械族・チューナー・効果 / ATK 1400 / DEF 400

緑色の装甲に白い刃のような鋭い両翼。

その姿を見たクラドが、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべて隣の少年を見やった。

「ありやあ……はっはっは！ 役に立って良かったなあ、猿小僧？」
「けっ……」

ぽんぽんと頭を叩くクラドの手を、燐路は鬱陶しそうに払いのける。ベルのフィールドに現れたソレは、デュエル前に燐路が手渡したカードだったのだ。

確かにバードマンの特殊召喚は確かにリリースではなく、エクストラデッキを用いた召喚法でもない。

「成程……ベルちゃんの手札にはトリオンの効果で手札に加えた《奈落の落とし穴》があるわ。これでアユカワ博士は次のターン、アロワナを再度アドバンス召喚することが出来なくなった、という訳ね」

藍が言い纏めた通り、バードマンでの処理は『アロワナの召喚を封じる』ことで実質上の死に札とすることが出来る。急場のコンボとはいえ、中々の機転だ——観客席の一同も、そして対峙する博士すらも思わず舌を巻いた。

「それでは……行きます！ バトル、トリオンとファイヤー・ハンドで攻撃表示のテトラ2体に攻撃！」

博士の場に伏せられたカードは無い。無防備な青の麗女優達へ、溶

岩の拳と巨大な鋏顎が迫る。

握り締められ、引き裂かれ。僅かに勝る攻撃力の前に、美しき魚影は呆気なく葬り去られた。

「ううっ……!?!」

【アユ】LP4000↓3800

「カードを1枚伏せて、ターンエンドです!!」

上級モンスターを交え、立て直したアクアリウム。それを褐色のメイド少女は笑顔で乗り越えてきた。

色々と思うところがあつたのだろう。博士は乱れた髪をぼんぼんと直すと、少し間を置いてからゆっくりと呟いた。

「……うんっ。ホントは『幽霊姫』さんとも湊さんともデュエルしてみたかつただけど。やっぱり、ベルちゃんを選んで良かったよ!」

「あ、ありがとうございますっ」

にひひ、と子供っぽく微笑む博士に、ベルは慌てて頭を下げる。

「でも、私だってまだ負けた訳じゃないよ? それにまだ——『あの子達』の答えを聞いてないからね」

「えっ……?」

ベルの疑問を押し流すように、博士が渾身の力を込めてカードを引き抜く。

「私のターン、ドローっ!!」

ドローカードを確認した博士は、丸い瞳を優しく細めた。

僅かな手札、その欠片が導き出した『答え』に満足げに頷く。

「——うんっ。やっぱり『あの子達』もベルちゃんと戦いたいみたい」それは当然のことだと、自信に溢れた言葉とは裏腹にほっと息をついて。

博士は『あの子達』と呼ぶソレの為に、再び舞台の幕を上げた。

「私は、場の鬼ガエルの効果を発動! このカードを手札に戻すことで、『鬼ガエル』以外の『ガエル』モンスターを、通常の召喚に加えて1度だけ召喚できる……んだけど、今回は『鬼ガエル』の効果を使っ

て手札から特殊召喚する！ 私が手札から捨てるのは《アクアアクトレス・グツピー》！」

まだアロワナが手札に残っている現状、当然ながらベルが罫を発動させる様子は無い。

もつとも——博士の言葉から、ベルの狙いは既に『別の大物』へと向けられていたが。

「鬼ガエルが特殊召喚に成功したことで、デッキから条件を満たしたモンスター1体を墓地へ送る！ 私が墓地へ送るのは——」

博士がデッキから1枚のカードを抜き出し、ディスクの墓地ゾーンへと送る。

僅かに見えたそのカードは、フィールドを包む海と同じ澄んだ青色。

「水族・水属性・レベル2の儀式モンスター、アスタリクス《—*—》ヴォジヤノイ鏡蝸牛》!!」

☆2 / 水属性 / 水族・儀式・効果 / ATK 200 / DEF 1000

明かされたその名は、燐路達の言葉を借りれば『二番』と称される十二支柱。

観客席のクラドと藍から真つ先に驚きの声上がる。

「儀式モンスターの《アスタリクス》、か……!!」

「もう何が出てきても驚かないつもりでいたけれど……儀式モンスターを墓地へ送るなんてアカワ博士は何を……?」

儀式モンスターはその性質上、対となる専用の儀式魔法を必要とする為に汎用性があるとは言い難い。加えてエクストラモンスターと同様、正規の召喚手順を踏まなければ墓地からの蘇生は出来ない制限もある。よって儀式モンスターを扱うならば、藍の使う「リチュア」のように専用のデッキを組む事が推奨される。

アクアリウムコンボでモンスターを強化していく博士のデッキに取り込むには、どう考えても無理がある……しかし博士は、そんな疑問の声を一喝するように声を張り上げて宣言を続けた。

「ヴォジヤノイの効果発動！ このカードが墓地へ送られた場合、

デッキから《アスタリスクス》モンスター1体を手札に加える！」
「ツ!! サーチ効果……!?!」

ヴォジャノイの持つその効果を聞き、博士の行動に一瞬納得しかけた一同だったが——手札に加えられたのは何と、またしても青いフレームの儀式モンスターだった。

「更に手札から魔法カード《サルベージ》を発動っ! 墓地からグツピーとヴォジャノイを手札に戻して、グツピーを通常召喚!」
《アクアアクトレス・グツピー》

☆2 / 水属性 / 水族・効果 / ATK 600 / DEF 600
可愛らしくウインクを振りまいて、ピンク色の麗女優が躍り出る。

その攻撃力は、2枚の《水舞台装置》の効果で1800まで上昇していたが……手札に加わった《アスタリスクス》を前にしては《奈落の落とし穴》を発動させることは出来ない。

(……これで、博士の手札は——)

博士の手札には、2枚の《アスタリスクス》と前のターンにバウンズしたアロワナのみ。

彼らを全てフィールドへ呼び出せば、確かに強力な布陣が築けるかもしれない。だが——。

「……これで召喚権も使ってしまったようですし、一体どうやって儀式召喚するおつもりですか……?」

アンリエールが小首を傾げた通り、このままでは儀式召喚はおろか、アロワナのアドバンス召喚すら不可能な状態だ。にも関わらず、彼ら呼び出すために必要な儀式魔法は未だその名前すら出てこない。

そんな彼女を、燐路は心底楽しそうに嘲笑った。

「決闘者にとつて『未知』は最大の敵だぜ? ジョーシキを超えて何が飛び出すか……楽しみに拝見しようじゃねーか」

それはまるで、自身がその『未知』によってユウに敗北した事実を自嘲するかのようだったが——その言葉は果たして、的を射ていた。
「ヴォジャノイの効果が発動!! 手札のこのカードを儀式魔法として扱い、儀式モンスター1体を降臨させる!!」

博士の堂々たる宣言に、一同へ電流じみた衝撃が駆け抜けた。

「なっ……!?!」

「儀式魔法の代わりになるモンスター……ですって!?!」

自身も儀式を多用する藍から、彼女らしからぬ驚愕の声が上がる。海底の舞台に浮かび上がる青い光に包まれた魔法陣、その中央にぼんやりと姿を現したのは——逞しく捻じれた二本角を携えた雄牛の頭に、その名の通りカタツムリの殻のように渦を巻いた外殻。その渦の中央には、怪しげに光を跳ね返す鏡が嵌め込まれていた。

言うまでも無く、それは十二支柱『二番』の姿だった。

「私は、手札のアロワナと場の鬼ガエルをリリース!!」

ぼう、とアロワナと鬼ガエルの姿が鏡に映し出されると、魔法陣の外円を青い炎が時計回りに灯っていく。儀式を執り行う準備が、整ったのだ。

「……神々を魅了せし雲間の天女よ、古の秘術によりて今蘇れ!」

ここが海中だということすら忘れてしまうほどに、青い炎の奔流が天を貫く柱となって立ち上った。

博士の祝詞と共に、魔法陣の中心で奔流に飲まれた鏡蝸牛のシルエットが見る見るうちに変質していく。

「儀式召喚!! ☆8、アスタリスクス《—*—》アブサラス羊雲海《!!》」

解き放たれたその名は十二支柱の『八番』。

その身が天上の者だと示す体色の青を、白い雲の天衣がどこか触れ難い『聖』へと彩る。

天女は豊かな乳房を雲の天衣で隠し、巻き角を模した金の冠をシャーンと打ち鳴らした。

第49話 魅入られし瞳

《—*—》
アスタリスクス アプサラス
《羊雲海》

☆8 / 水属性 / 水族・儀式・効果 / ATK 2100 / DEF 3000

それは、人が劣情を抱くことすら禁ずる神界の踊り子。

ふわりと宙に浮かぶ彼女は、その赤い瞳を細め、ちっぽけな少女を試すように射抜いた。

「アユが儀式召喚……痺れるウ!!」

ハラダの歓喜余った歓声が空気を振るわせる。

アプサラスの放つプレッシャーに固まっていた一同は、同時に息を飲み込んだ。

（これが、遺跡から見つかった2枚目の《アスタリスクス》……）

鉛色の曇天のような威圧に気圧されていたベルは、はっと我に返った。

呆けている場合ではない。伏せたカードは飾りじゃないのだ。

「と、罨——」儀式召喚成功時、アプサラスの効果発動っ!!」……えっ!?!」

慌てて《奈落の落とし穴》を発動しようとしたベルの声を制止するかのように、博士の宣言が遮った。

「2種類ある効果の中から、私は『表側攻撃表示で存在する限り、カードの効果の対象にはならず相手のカードの効果によっては破壊されない』効果を適用する!!」

「なっ……それじゃあ?!」

ベルの言葉の続きは、観客席のクラドへと引き継がれた。

「つまり、メイドちゃんの伏せカード……《くず鉄のかかし》も《奈落の落とし穴》も、アイツには効かねえってのか!?!」

頭を抱えたクラドの悲鳴にも似た声に、博士がにつかど笑顔を浮かべる。

「そういうことっ♪ 更にアプサラスは儀式召喚に使用したモンスター1体を選択し、そのカードと同名のカードとしても扱える!! 選

扱するのは当然《アクアアクトレス・アロワナ》!! よって《水舞台装置》の効果が適用され、羊雲海の攻撃力は——」

アスタリスキス アプサラス
《—*— 羊雲海》

ATK2100↓3300

麗女優としての『名』を冠したアプサラスは、博士の海底舞台の上で我が物顔で舞い踊った。

傍らに控えるグツピーとテトラの2体も、彼女を立てるようにはバックダンサー方として徹していた。

「攻撃力、3300……!!」

「バトル行くよ!! まずはアプサラスでトリオンに攻撃っ!!」

翼を掌のように見立て、4本の腕から渦を巻いた水流が放たれる。だが彼女が攻撃表示でいる限り、ソレを止める術はない。

どうすることも出来ず、圧倒的な攻撃は銀髪の幼子に襲い掛かった。当然ながらその余波がベルにも降り注ぐ。

「っ、きやあああッ!!」

【ベル】LP2000↓300

「続いてテトラでA・ジエネクス・バードマンに攻撃っ!! ほらほら、このままじゃ負けちゃうよっ!」

博士は笑顔の中に『決闘者』としての厳しい顔を覗かせ、容赦の無い攻撃を仕掛けた。

アプサラスの攻撃を何とか堪えたベルは、息も絶え絶えに迫り来る2体の女優達を真っ直ぐに見据えた。

(このままじゃ——いや、でも)

伏せカードに伸ばしかけた手が、はたと止まる。

残りライフはたったの300。この攻撃を《くず鉄のかかし》で止めてしまえば、攻撃力1800となったグツピーに再度攻撃を仕掛けられて詰みだ。
チェックメイト

博士は例え僅かなライフでも、確実に削るつもりなのだ。しっかりと勝利に向かって詰めて来る、決闘者としてはまさに至高の一瞬で——

——ならば。何故、博士はあんなことを……？

博士の意図に気が付き、ベルはそのまま『誤った一手』を発動させようとして……それは恐らく博士の望みじゃない、と思い止まった。これは自分^{ベル}を試すためのデュエル。だとしたらこれは博士からの『期待』だ。その期待には全力で応えたい。例え博士のやり方に疑問があつたとしても。

だから——。

(——ゴメン、燐路くんっ！)

ベルは、歯を食いしばってバードマンへの攻撃を見逃した。

「あぐっ……!!」

【ベル】LP300↓200

「これで最後!! グッピーでファイヤー・ハンドに攻撃っ!!」

「……その攻撃は、通せんぼせんっ!! 《くず鉄のかかし》で止めます!!」
溶岩の巨掌の前に、不恰好なジャンクのかかしが立ち塞がる。

グッピーが放った水魔法は、寸でのところがかかしが受け止めた。

「ふむ……私はこれで、ターンエンドっ」

博士は満足そうに頷いて、ターンの終了を宣言した。

僅かながら残ったライフは、無事にベルのターンへと受け継がれた。息を止めて見守っていた観客席の面々も、ここでせきを切ったように息を吐き出す。

「ふう……何とか首の皮一枚繋げて『頂いた』ようですね……」

「ああ、もしバーン効果とかあつたらどうしようかと思つたぜ……」

「せっかくのチューナーだぞ!! 何やってんだあのバカ!!」

べしべしと膝を叩いて悪態をつく燐路を尻目に、ハラダとタツヤは顎に手を当てて興味深そうにベルを眺める。

「へえ……アユの『意図』にちゃんと気付いたみたいだね」

「それでもしつかり前を向いてる。あのコも中々、痺れるねえ」

期待、不安。

そんな様々な視線が注がれる中、ベルは高鳴る鼓動を抑えながら立ち上がった。

(……大丈夫。まだ、戦える)

ちらり、と手札に目を落とす。

難攻不落の城壁を打ち破る手段は、辛うじて『繋げて貰って』いる。だがそれも、今の手札では攻略のピースは足りない。ならば……。

(——引くしか、ない……!!)

ベルが手を掛けたそのデッキは、かつてとある1人の決闘者が組み上げた『論理』^{ロジック}の城とも呼べる存在だった。

様々な盤面を想定し、幾重もの実戦を積み——そうして組まれた『論理』は完璧に見えて、当の本人以外には決して理解し得ない『暗号』のようなモノだ。

その『暗号』を解読し、自分のモノとする決闘者もいる。だが、少なくともベルにはそんな器用な真似は出来なかった。

良い部分を模倣し、自分の型に当て嵌め、再構築された『ソレ』は……もはや誰のモノでもない。ベルの、ベルの為だけの魂^{デッキ}。

だからこそ、道は切り開かれた。

「わたしの……ターン!!」

^{アフサラス}対峙する天女の赤い瞳が、少女の運命を見届ける。

力及ばず、ここで朽ちるか？ それとも、と。

天女が、皆が注視する中——ベルは勢い良くカードを引き抜いた。恐る恐る、カードを見やる。

頭の中で描いた『理想』と『現実』が、徐々に色を重ねて……。

「——、きた……?」

曰く。

ある種の人間にとってソレは、『必然』だという。

だとすれば、信じられないといった様子でドロカードを眺めるこの少女も、また……。

「引いたんだね、キーカードを」

ベルの様子を見た博士が、柔和に微笑みかける。

「……はい。でも、あの……」

「もー、言ったでしょ！ 明るく楽しくエンタメるって！ ベルちゃんの『全力』、早く見せてよ！」

申し訳無さそうに眉を下げるベルに、博士は堂々と微笑んて言った。

そんな博士の台詞は、凜と黙したアプサラスの声を代弁しているようにも思えた。

「……分かりました！ では、行きますっ！」

「うんっ♪ よっしや、来いっ!!」

覚悟を決めて振り切った様子のベルを前に、博士は両拳を握って見せる。

華奢な彼女の胸に飛び込む勢いで、ベルはカードをディスクへと叩き込んだ。

「わたしは、手札から《テイオの蟲惑魔》を召喚!!」

《テイオの蟲惑魔》

☆4 / 地属性 / 植物族 / ATK 1700 / DEF 1100

ずるりと出現する巨大なハエトリグサ。その中でツインテールの黒髪を揺らし、少女型モンスターがつまらなそうに半眼を向ける。自らの色香が通用しないとはいえ、天女を相手に堂々たる物腰だ。

「テイオが召喚に成功した時、墓地から《蟲惑魔》モンスター1体を守備表示で特殊召喚できます!! わたしは《トリオンの蟲惑魔》を特殊召喚!!」

テイオが指先から落とした雨露が呼び水となり、墓地の深淵から巨大な鋏顎がぬらりと覗く。不気味な余韻を残し地中へ引っ込んだかと思うと……鋏顎は博士の場に残っていた《水舞台装置》を突き破り、銀髪の少女が同時に飛び上がった。

宙を舞い一回転。テイオの隣に降り立った蜻蛉の幼子は、ニヤリと得意げに口元を歪めた。

「なら私も、ここを破壊された《水舞台装置》の効果発動!」

同時に、博士も声を上げる。

「忘れた訳じゃないよね? 墓地から《アクアアクトレス・アロワナ》を特殊召喚っ!」

「させませんっ!! 罨カード発動、《奈落の落とし穴》、アロワナには退場して頂きます!!」

堂々たる面持ちで場に舞い戻ったアロワナだったが、突如自身の下に空いた異空の穴に呆気なく落ちていった。

ドップラー効果の掛かったアロワナの悲鳴は、あたかも「こんな汚れ役、私の仕事じゃないわ!!」とでも言わんばかり。アロワナの散り際をしつかり見届けてから、ベルはすつと視線を博士へと向け、宣言を放つ。

「……バトル、行きます!! ティオとファイヤー・ハンドでテトラとグッピーに攻撃っ!!」

2体のモンスターが、天女の脇に控える女優達に襲い掛かる。

と、言っても相手の場に向かっていったのはハンドのみで、ティオは得意の誘惑攻撃でテトラをおびき寄せると、そのまま『本体』である巨大なハエトリグサでパクリと頂いてしまった。

それでも総ダメージは1200。予想以上の衝撃に、博士も顔を覆う。

「あうっ……!!」

【アユ】LP3800↓2600

「……イタタ。でも、このままじゃアプサラスは倒せないよ! どうするつもり?」

そう。博士を守る難攻不落の城壁は、未だ攻撃力2700という数値を持ってベルの前に佇んでいる。

ファイヤー・ハンドの効果が仮に使えたとしても、アプサラスが攻撃表示で居る限りその効果は届かない。彼女を跪かせる為には、ベルの下級モンスター達では圧倒的に攻撃力が足りないのだ。

しかし——そんなことなど博士もベルもとうに分かっている。これはある種の『盛り上げ』に過ぎない。

「……そうですね。確かにわたしじゃ、アプサラスを『倒す』ことは出来ません。ましてやこのターンに決着をつけるなんてとても。ただ——」

ありきたり過ぎて、正体が割れてしまえば「何だ」と気が抜けてしまいそうな、とても初歩的な一手。

だがそれこそ、そんな基礎の戦術こそがベルの戦い方であり——。

「だからこそ、アップサラスを『借りて』詰チエックメイトみをひっくり返すことは出来ます!! 手札から魔法カード《強制転移》を発動!!」

彼女が信じた、これまでのデュエルを表す1枚となった。

「このカードは『対象を取る効果』でもなければ『カードを破壊する』効果でもありません。でも博士のフィールドに選択できるモンスターはアップサラスだけ、ですね?」

リクルーターを愛用してきたベルにとって最も馴染みのある魔法カード。だからその強さ、弱さはよく知っている。

「……『自分がいて、相手がいて。それで初めてデッキは成立する』いつも頭の片隅にいつもあるのは、デュエルの鉄則。

ユウとクラドに教わって、藍とアンリエールに倣って磨いた心の剣だ。

「……まだまだ練習中ですけど、それがわたしの『エンタメ』ですつ!」胸を張って、笑顔で宣言したベルは、気恥ずかしさからか僅かに頬を紅潮させていた。

そんな彼女の姿を見てホロリと来たのは、観客席の教育係だ。

「め、メイドちゃん……俺の言葉をそんなに大事にしてくれたんだなッ……!!」

「成程……ベルの妙に嫌らしい戦術の原因は貴方にありましたのね」
だーつと男泣きするクラドを、ジトリと横目に睨むアンリエール。
しゃくりながらではあったが、涙の教育係も「よよよ……」と反撃する。

「グスツ、いやあ……アレ元々はセンサーと一緒に考えて考えた言葉
できあ……!!」

「何ツツと深いお言葉!! 私感動で涙が止まりませんわあ!!」

「だああッ!? うるせえし汚え!! 向こう行けバカ共!!」

鼻水を垂らして涙を撒き散らすクラドとアンリエールを、燐路が腕を振り回して猛烈に拒絶する。そんな大混乱の横で、黙って観戦していた煽里がぼつりと呟いた。

「……成程。彼女と私達の『違い』が、何となく分かった気がしました」
「違い……?」

隣に座っていた藍が、思わず聞き返した。

思い返せば、彼女とはまともに言葉を交わした事が無い。

煽里も別段気を悪くした風も無く、そのままぼつぼつと言葉を続けた。

「彼女の中には常に『他者』がある、怒りにも喜びにも。私達にはソレがありません。肉親すら『生きる』為に切り捨てる……それが『強さ』だと、そういう風に歩いてきてしまいましたから」

思い起こせば、あの廃工場で対峙したときも――。

一呼吸置いて、煽里は続けた。

「強さを求める『理由』は同じでも、私達とは望むべき『未来』がまるで違う。今日のデュエルを見ていて、そう確信しました」

「……なら、貴女の望むべき『未来』の姿は変わってしまったの？」

藍の静かな問い掛けに、煽里は少し考えて。

「どうでしょうか。四方老様から教えられた『未来』と、彼女の『未来』。どちらが正しいのか……教養も力も無い今の私には、見届けることしか出来ません」

「……そう。私としては、貴女達とはもう刃を交えたくはないのだけど？」

「フフツ、それに関しては私も同感です。だって――」

強制転移の効果を受け、ベルの場からファイヤー・ハンドが、博士の場から強制的にアップサラスが選択され互いのコントロールが入れ替わる。

その様子を眺めながら、煽里は苦笑して言った。

「恐らく、もう彼女には歯が立たないでしょうから」

天女はその膝を折ることなく、何とも呆気なくベルの下に付いた。

博士の場から離れたことで《水舞台装置》の恩恵が受けられなくなり、攻撃力こそ落ちてしまったが……その強靱な破壊耐性は健在だ。

自分の優位がそのままひっくり返ってしまったこの状況に、博士の表情はどこか悔しそうで、それでも穏やかな笑顔に溢れていた。

「ハンドモンスターを使っていたから、もしかしたらなあとは思っていたけど……破壊じゃなくて、コントロールを奪われるなんてね。

……何か、本当にその子がベルちゃんを選んだみたい。私、結構愛着あつたからちよつと悲しいなあ」

天女の赤い瞳は、今は敵対し博士を見下ろしている。その目がどこか申し訳無さそうに見えるのは、きつと気のせいではないはずだ。

今度はベルが、そんな天女の声を代弁するように声を落として言った。

「……でも、わたしはこれでターンエンドです。もしも博士がわたしに少しでもダメージを与えるカードを引いたら……」

「あはは、そうだね!! 望みは薄いけど、私だつて最後まで諦めないよ!!」

博士の場には《水舞台装置》が1枚、手札は0。対してベルのライフはたったの200……アプサラスが味方に付いたとはいえ、吹けば消し飛んでしまう危うい橋だ。

例えば、博士が直接攻撃が可能な《貫ガエル》等を引いたら——場の優位など関係なく、それだけでベルは敗北してしまう。

「私のターン……」

そういった意味では、ベルの詰^{チエックメイト}みは不完全。

博士もまた、その僅かな可能性に掛けてデッキに手を掛ける。

「ドローっ!!」

博士のドローに、表情に全員の視線が集まる。

お互いの心臓の音が聞こえそうな静寂が、どれほど続いただろうか。

「……残念」

静かに腕を下ろした博士は、につこりと笑ってベルにカードを見せた。

「私の負け、みたいだね!」

ドローカードは……フィールド魔法《湿地草原》。

ベルのライフを削ることも、モンスターの攻撃を防ぐことも出来ない。

『降参……ということ、宜しいですか？』

審判員としてのお役目を放り出して黙っていたネフが、邪魔そうな大砲をガチャガチャと鳴らして博士の傍に寄る。

「そうだね。これ以上、私も痛い思いはしたくないし」

『では、改めて』

博士が頷くのを見届けて、ネフは腕を上げて宣言した。

『ゲームエンド。勝者、ユーリ・ベルガモット』

【アユ】LP0 (SURRENDER)

「という訳で、この2枚はベルちゃんにお預けします！」

博士から2枚の《アスタリスクス》を受け取ったベルの表情は、やはりどこか曇っていた。

こういう結果になってしまった以上、自分で無理矢理に納得してデュエルを続けたものの、やはり博士の口から本当の意図を聞かなければ――。

「……あの、アユカワ博士。少しお聞きしてもいいですか？」

「ん？」

きよとん、と目を丸める博士に沈んだ声が尋ねる。

「どうして、あの時……《奈落の落とし穴》を発動しようとしたわたしを、止めるようなコトをしたんですか？」

アップサラスの効果を確認せず、罠を発動させようとしていたベルを遮ったのは他の誰でもない。博士の言葉だった。

もしあの場面でベルがアップサラスに対して《奈落の落とし穴》を発動させ、水泡としていたなら……このデュエルの結果はきつと、変わっていたに違いない。

切り詰められたデュエルの中では、相手のプレイングミスを誘うというのも立派な戦術の1つだ。ベルがしっかりと確認していたならまだしも、博士の方から『助け舟』を出すような行為は、つまり……。

不安そうな眼差しを向けてくるベルに博士は少し困ったように頬

を搔くと、言葉を選びながらゆつくりと答えた。

「うー……確かに真剣勝負を誓った上で『あれ』は、決闘者として褒められた行為じゃなかったかな。気を悪くしちゃったならゴメンね？
でも——」

少し間を置いて、博士は続ける。

その丸く向日葵のような瞳には、嘘や偽りの淀みは浮かんでいなかった。

「折角出てきて貰ったんだもん、『この子達』とはちゃんと向き合って欲しかったんだ」

「え……？」

予想していたものとは少し違う解答に、ベルも目を丸くして聞き返す。

「ベルちゃんはこの子をどうやって乗り越えるんだろう、どんな反応をしてくれるんだろうって考えたら、思わず口を挟んじゃった。確かに、あのまま黙っていたらデュエルは私が勝ってたかもしれない。でもね、例え『手を抜いた』って思われても……私はベルちゃんの『全力』が見たかったし、見せたかったんだ」

差し出した2枚のカードをベルの手に乗せながら、博士は笑って言った。

「だからね、これは『私達』のワガママ。ベルちゃんが勝つ事が出来たのは、しっかりと『この子達』に向き合った結果だと思って……今は、許してくれると嬉しいな？」

博士の意図オネガイをしっかりと受け取って。

ベルはぱつと、雲を晴らして頷いた。

「……分かりました、責任を持ってお預かりしますっ」

ベルの返事に満足そうに頷いて、博士の手は2枚のカードから離れていった。

「うん、お願いね！ つと……あんまりゆつくりもしてられないんだった。早速だけど皆、ちょっと私について来てくれるかな？」

そう言っ博士がポケットから取り出したのは車のキー。

移動先が『そこそこの距離』にあることを示している。

「フトシ君、人数も多いし2台で行こう？　場所は分かるよね？」

「モチロンだぜ、早速出発しよう！」

「あの、一体どこへ……？」

「どうやら、ハラダ編集長は事情を聞いていたらしい。」

困惑した様子でベルが聞き返すと、博士は振り向き様に笑顔で答えた。

「その子達について、ちょっと見て貰いたいモノがあつて……」

博士は未だ発掘作業が終わっていない、テントに覆われた一区画へと一行を案内した。

心なしか海の匂いが残る、むき出しの岩盤や見慣れない機材、復元途中の遺跡の姿に目を白黒とさせながら、一行はスルスルと禁断の領域に踏み込んでいく。

遺跡から発掘されたカードに関して、研究者達からは質の悪い悪戯として流されてしまったそうだが……ここで見つかった『ソレ』を見た博士は《アスタリスクス》に関して引っ掛かりを覚えたという。

「さ、着いたよ。コレを皆に見て欲しかったんだけど……」

博士の手に導かれ、一行の目に飛び込んできたのは——3メートル四方ほどの内壁に描かれた壁画だった。

一際目を引く魔法陣のような円の中に、ぐるりと輪を成すように描かれた『12匹の』動物達。

円の周囲には、何やら札のようなモノを掲げる人々の姿がある。

「これ、もしかして——!?!」

壁画が指し示す記号にベルが思わず声を上げると、その声に被せるようにして燐路が重々しく呟いた。

「アスタリスクス
十二支柱……か？」

先程アユカワ博士から譲られた牛ヴォジャノイアプサラスと羊も。確かに壁画の中にずらりと並ぶ動物達は、これまでに出会った《アスタリスクス》に良く似た姿をしている。

「……その様子だと、他の《アスタリスクス》もここに描かれているみたいだね。紅にも同じような遺跡があったりするのかな？」

「……さあな。俺らが知ってんのは、ジジイ共が紙に書いた『模写』って奴だ。その大元がドコにあったかまでは知らねえよ」

「そっか。じゃあそのお爺さん達、やっぱり何か知っているかもしれない訳だ？」

博士の問いに、燐路と煽里が頷く。

「……だろうな」

「私達は確かに、コレと良く似た絵を《十二支柱》として四方老様に教えられました——それが一体何を意味するものかまでは、全く。ご期待されたような教養が無く、申し訳ありません」

「あ、大丈夫ダイジョウブ!! それだけ大きな秘密があるってコトなんだろうし……」

博士は燐路達をそれ以上問い詰めようとはせず、壁画に再び視線を向けて呟いた。

「……これはね。私達が調べた限りでは、どうやら当時のある『儀式』の様子が描かれたモノらしいんだ」

「儀式……?」

ベルを筆頭に驚く一同に、博士が言葉を付け加える。

「うん、この『忘却の青』がまだ大陸として在った数千年前……古代の神官同士が力の優劣を決める為の『競技』に近いものだったらしいんだ。このこと同じ年代の遺跡が、確か橙ネイティブにもあったはずんだけど……」

「それは、もしかしてカセの遺跡……ですか？」

藍の問い掛けに、博士がこくりと頷く。以前ベル達が訪れ、アンリエールと初めて出会った場所だ。そこで見た壁画を思い出して、ベルは目を丸くした。

「知っているなら話は早いかな? これだけ離れた場所で、同じような『競技』に関する記録が残ってるってコトは……つまり、今のデュエルモンスターズと同じく、当時はこのゲームも大流行してたって推測出来る訳で。でもこの『儀式』、何故だかある年代を境にぱったり消

えちやってるんだ」

少し難しそうに眉を寄せながら、博士は続ける。

「これがデュエルモンスタースターの起源……なんて夢のある話なら私も大興奮なんだけど、そんな訳で残念ながら全くの無関係。でもね、今と同じように『競技』^{ゲーム}が力を示す手段として用いられてたってことは確かなんだ。それにどうやら、この『12体の動物』は当時の『儀式』においてかなり特別な扱いをされていたみたい。それこそ『神様』と同じくらい」

「神様……？」

腰のデツキホルダーに手を掛け、ベルは噛み締めるように呟いた。

「私はね、その《アスタリスクス》にも何か不思議な力があつたとしてもおかしくないのかなって思うんだ。もし本当に誰かの悪戯だつたとしても、この壁画と《アスタリスクス》が全然関係がなくても……ここで『その子達』が見つかつて、ベルちゃんを選んだ。それはきつと偶然じゃない」

「はっ、学者先生がそんな『非科学的』でいいのかよ？」

燐路が小馬鹿にしたように言い捨てると、博士は少し困つたように笑って見せた。

「たはは……そうだよねえ、私も『学者失格』だつて思うよ。だからこそ、ここから先は『私』じゃ調べられない。本当は私が全部謎を解いてみたかつたんだけど……遺跡はこれ以上、何も教えてはくれないからね」

「博士……」

少し悲しそうな博士の顔は、ベルが目を向けるとすぐさまいつもの笑顔に戻った。

「言いたかつたコトはこれで以上！何か手がかりになりそうなら遠慮なく聞いて——」

「？何か、地面が変……？」

博士が何かを言いかけ、ベルが僅かな異変を感じ始めた、そのとき。

テーブルでもひっくり返したように、突如グラグラと地面が揺れ始めた。

「わわっ、地震っ!?!」

「し、痺れ揺れるウ!?!」

何かに足元を掴まれたような、とても気分の悪い感覚——慌てる博士達の様子を見るに、どうやらこの地に住む人間にとっても『異常な事態』らしい。

激しい揺れは僅かな間で収まったが、その余韻のようなモノがいつまでも全身の感覚を蝕んでくる。

「び、びっくりしましたわ……こんな海の底で地震など、冗談でもお断りです……!!」

「ら、藍さん、あの……この地震って……?」

ベルが不安そうに藍の顔を見ると、そこにあつたのはいつになく険しい表情だった。

藍はその面持ちのまま、博士に目を配らせる。

「博士、この揺れは……」

「う、うん。何かおかしな感じだよね、地震にしてはちよつと……」

博士が首を傾げると同時。弾かれたように駆け出す影が3つあつた。

煽里と燐路。彼ら姉弟がクラドの手を引いてテントから飛び出していったのだ。

「なつ、おい!?! 一体何だつてんだよ!?!」

余韻のような揺れも未だ収まらぬ中、クラドも訳が分からず威嚇するように声を上げる。

一同も慌てて後を追ひ、外へ出た彼らが目にしたものは——にわかには信じられない光景だった。

天井付きの空には不相応な紫雲が、我が物顔でゆつたりと渦を巻き。

遠くに見える3色の光柱が、渦の中心へ向かつて立ち上る。

柱が放つ光の色は——目にも鮮やかな赤、青、黄色。

「……な、何ですか、アレ……」

そう呟いたベルだったが、おぼろげながらも『答え』は既に掴んでいた。

認めたく無い。誰かが否定してくれるのを願う、いわば悪足掻きのようなモノだ。

「……恐らくは、ご想像の通りの『モノ』かと」

そんなベルの生温い幻想を、煽里は抑揚の無い口調で碎いて見せた。

彼女は、姉弟は思い出していた。『あの日』に見た雲の色を。

それは丁度、今日のような死神色をしていて……。

「ジジイ共の老体にしちゃあ、随分と早い仕事じゃねえかよ……!!」

決して再現される筈のなかった、御伽の世界に在る悪夢。

しかしソレは今、異様なまでの質量をもって己の存在を訴えかけてくる。

「……あれが、三幻魔……」

押し寄せる波の様に、高く、大きく。

まるで英雄ヒーローの不在を歓喜するかのよう——新たな世界ゴチソウを与えられた悪魔達は、その咆哮ウラゴエを上げた。

第4章 白の騎士と紅の巫女

第50話 ユウⅡキリサキ

少しひび割れた電子音に、思わずぴくりと肩を震わせる。

ふと時計を見上げれば、2本の針はぴったりと重なっていた。

「……もう、そんな時間なのか」

俺——桐崎夕きりさきゆうは、のろのろと教科書を仕舞いながら、ぼんやりと呟いた。

(今が何時間目かなんて、全然気にしてなかったな……)

周りを見れば、皆待ち侘びたように席から立ち上がり、騒がしく机を寄せ始めている。

退屈な時間から解放されたのだ。これが当然の反応だろう。

けれども、それは自由な時間に『楽しみ』があるという前提の話だ。

授業という適当な『暇潰し』が無いこの時間は、俺にとって有意義な時間ではない。

(……行くか)

沈みそうになる気持ちを、いつものように『仮面』の中へと押し込んで。

俺は、そそくさと購買部へと向かった。

中庭。

校庭の楽しい喧騒だけが遠くに聞こえる、人気のない場所だ。

あるのは涼しげな木陰とベンチだけ。あとは園芸部が育てているらしい、プランターの小さな花々が目に付くという程度か。それでも俺はこの場所を学校のどの場所よりも最良にしている。

その理由は……おかしな話ではあるが、部活動が盛んなこの校風にある。昼休みともなれば校舎内に限らず、校庭の隅から隅まで何らかの部が自主練習なり談笑なりをしていることが多いからだ。

そんな彼らの邪魔をせず、かつ時間を潰せるのはここしか無い。俺のような人間が逃げ込むには丁度良い塩梅という訳だ。

……話は変わるが。部活動に『全力』を注ぐ我が校では、よくある購買部の争奪戦争は起こらない。焼きそばパンもカレーパンも、何の障害も無くすんなり買えてしまう。

貴重な昼休み中、食事に掛ける時間をなるべく減らしたいのだから。

俺としては何ともありがたい話だ。何の苦労も無く、こうして満足に空腹を満たすことが出来るのだから。

(……と言っても。こう毎日同じようなパンばかりじゃ……な)

そんなことを考えつつ、中庭のベンチに腰を下ろす。

ふわふわと暖かな風を受けながら、俺は焼きそばパンをかじった。

季節は5月、入学のドタバタから1ヶ月が経つ。

世間一般では、大よそ自分がどのグループに属するか大体が決まる頃。そんな時期に1人という俺の立場は……まあ説明せずとも分かるだろう。

原因は何となく分かる。この無愛想な顔と態度、そして致命的な『コミュニケーション能力』の欠如だ。

流されるままにこのポジションへ嵌ってしまったのは当然の結果。案外ドライにこの状況を受け入れてしまっていることも問題だと思っただが。思うだけでは、現実に何の影響も現れないことも事実だ。

そう、自分自身で変わろうとしない限り、何も――。

「――ぐくつ」

ふと。

何やら背中に視線を感じた。

確かに、中庭の人气が少ないことの理由に『出る』という噂が付き纏っていることは知ってはいたが……それはあくまで、放課後や閉門後の話だ。

まさか、そんな筈は――冗談だろうか？

いや……幽霊なんて非科学的な奴より、もつと恐ろしい奴なら昼夜問わず活動しているじゃないか。生ある『人間』だ。まともな思考が壊れた奴なら、何時だって何処にだって現れる可能性がある。

「……じゅる」

ぞわり、と肌が粟立つ。

まるで肉食獣に狙いを定められたような感覚が全身を襲った。

視線、気配、思考——そういったモノが全て矢尻になって突き刺さってくる。

もうどうにでもなれと、ここまでくれば半ば自棄になり。

カウンター気味に掴みかかってやろうとまで考えた意気込みで、バツと振り返ってみると。

「……だらだら」

涎を犬か何かのように垂らした女が、目の前に居た。

「っ……!!」

ひつ、と。柄にもなく女性ののような悲鳴が心臓から飛び出しそうになった。堪えることが出来たのは、凍りついた表情筋が頑張ってくれたおかげだろう。

十数秒の間を置いて少し冷静になると……女が身に着けているのは我が校の伝統ある制服だということに気が付いた。しかも胸元に着けられたリボンの色は俺よりも1学年上の赤。

——つまり、この女は俺の先輩に当たる訳で。

「……何か、用ですか」

俺が恐る恐るそう尋ねると、先輩らしき女は黙ったままコクリと首を縦に振った。

ベンチに座ったままズリズリと後ずさる俺を尻目に、先輩の視線は俺の手元に突き刺さったまま離れない。

何となく。本当に何となく察してはいたが、まさか……。

「……もしかして、欲しいんですか。コレが」

その先輩はこくこくと何度も首を縦に振ると、ぱあっと顔を明るくした。

「んくっ……はあく、このまま学校の中で行き倒れるかと思った！」
隣にちよこんと腰掛けたその人は、俺が渡したもう1つの昼食……
カレーパンをものの数秒で平らげると、季節外れの向日葵のように微笑んだ。

「助かったよ、ありがとう♪」

肩口よりも長く伸ばした栗色の髪に、あどけなさの残る丸っこい顔。ハムスターか何かを連想させるが、身長は女子としては平均より少し高めだ。綺麗というよりは、可愛い部類に入るだろう。

「お弁当忘れちゃってねー、どうしたもんかと途方に暮れてただけど」

「……そう、ですか」

先輩は何が楽しいのかココロと笑ってばかりいる。

第一印象こそ不気味な感触だったが、こうして話してみると明るく人懐っこい性格のようで……正直なところ、コミュニケーション能力の無い俺にとって苦手なタイプだ。

「お昼がなくて本っ当に困ってたんだよ、ありがとう♪」

「いえ、別に……」

地に落としていた視線を、ここで初めて先輩の方へと向けた。

すると彼女の視線が俺ではない『何か』に向けられていることに気が付く。

「……えっと、今日ね？ お弁当、忘れちゃってね？」

意味深に2回、同じ言葉が繰り返された。

口の周りには先程のカレーパン、その残滓がある。それでも尚モノ欲しそうな眼差しを向けてくる先輩に、俺はきっぱりと告げた。

「……あげませんよ。今からでも購買部に行けばいいじゃないですか」

「そんなお金、ないもん」

即答だった。

俺の厳しめな即答を鏡に映したような見事なカウンター。それを

決めた先輩はむんつと立派な胸を張っている。

「……そうですか。じゃあ諦めて下さい」

が、そんな色香に惑わされるようでは『無愛想』の烙印がすたる。不動の心を持ってジトリと目を線にして見据えると、先輩は何やら考えた末に口早に提案を投げかけてきた。

「……ここ、困っている女の子を助けるのはポイントが高いらしいよ!」

「何のポイントですか」

「えっ?」

「……色々あるでしょう。TだとかPだとか」

「えーと、確か『ふらぐ』だとか何とか……」

「そんな互換性の無いポイントならお断りします。俺も裕福じゃないので」

「この冷徹漢、鉄面皮!!」

「そのようですね、自負しています」

色々と言葉攻めが通用しないと分かった途端、先輩は急に流し目を作って俺を見据えた。

「……んふふ。なるほど、なるほど。最初からコレがご所望なんですよ?」

「はっ!」

ぴらり。

突然めくられた先輩のスカートに対し、当然ながらソレが何かを視認する前に顔を背ける。

「……何をしてるんですか」

「ぱんつの効果発動、これを見せることで男の子は皆言うこと聞きたくなっちゃう」

「じゃあ見ませんし、言うことも聞きません」

「えー!? 何で!? 男の子って皆ぱんつ好きなんですよ!? もっと喜んでよお!」

先輩が抗議の意思をたっぷりに立ち上がって、こちらへと回り込んでくる。

じいっと覗き込んでくる大きな瞳に、俺は子供か何かに言い聞かせ

るように答えた。

「……えー、いいですか。ココに『お金』と書かれたアタツシユケースがあります」

「えっ!? どこどこっ!?」

「例え話です、大きな目を血走らせないで下さい。話を戻しますが、先輩はケースに何が入ってると思いますか」

「札束!!」

「……まあ、何となく今ので先輩がどんな人なのかが分かりました」

「え? これって心理テストだったの!?!」

「こんな小学生でも分かりそうな心理なんぞテストしません……話を続けますよ。いざケースを開けたら、中には500円玉が1枚入っていました。先輩はどう思いますか」

「……何か、凄くガツカリした」

「でしょうね。つまり世の中には『見えない方が価値があるモノ』もあるということですよ」

「つ、つまりあたしのぱんつつて500円の価値しか無いってこと!?!」
「いや、そういう事では……まあ今のままじゃあながち間違いでもないか……」

男の夢についての話はちっとも伝わらなかったが、先輩は割と真面目にシヨツクな表情を浮かべていた。普段抑えている分、口を開けば割と毒ばかり吐いてしまうのがいけない。

慣れない口を動かして、心ばかりのフォローを入れる。

「別に先輩に魅力が無いって話じゃないですよ。可愛い方だと思います」

「ふえ!? そ、そうかな? でへへ……」

そんな言葉を聞くや否や。先程までの妙に不安そうな顔は何処へやら、デレデレと頬を赤らめて困ったように頬を掻き始めた。

怒ったり落ち込んだり喜んだり。きつと素直な人なのだろう……少しだけ、そんな先輩が羨ましいと思う。

「……って、話を逸らそうしてもそうはいかないんだからね! もっ

と分かるように説明してよ!？」

男子の秘めたる夢、その意味をまだ理解できていないようだ。

しつこく食い下がる先輩に対し、俺は声色に僅かな『凄み』を乗せて言い放つ。

「閉門時間まで俺の話に付き合っ頂けるなら……存分に話します
が」

「えっ」

只ならぬ妖気を察したのか、先輩は呆気なく引き下がった。

こんなコトを言っておいて何だが、恐らく俺が女性の下着について話しても5分が限度だろう。ポロが出る前に引き下がってくれて助かった。

「ぐう……無念……」

何となく敗北した雰囲気を漂わせている先輩に、すっかり忘れているだろう『当初の目的』を放り投げる。

ぽーんと高い放物線を描いて、それは見事先輩の頭上に着地した。

「わぷっ!？」

「……まあ、先輩の顔は立ってますよ。そんなんで良ければ、どうぞ腹の足しにして下さい」

しばらくポカンと何か言いたそうに口を開いていた先輩だったが、意外なことに、また俺の隣に腰掛けると菓子パンの袋を破った。

「ありがと、優しいんだね!」

「……無愛想、の間違いじゃないですか」

「無愛想さんでも、少なくともあたしにとっては優しい男の子だよ♪」
ぱくり、と甘そうな菓子パンを頬張る先輩の横顔を眺める。

どうにも……良く分からない人だ。

「あ、ところでキミヤ」

ぱつと向き直った先輩が、ニヤリと口角を上げた。

何か、と次の言葉を待っていると。

「いつも中庭で暇そうにしてるけど……もしかして、友達いないの?」
危うく飲みかけていたコーヒータ牛乳を吹き出しそうになったが、こ

こでも死した表情筋が断固阻止する。

死して尚、責務を果たすとは我が一部ながら天晴れだ。

「……何を急に、そんなことを」

「ふっふっふ。『アレ』が流行ってる今のご時世、こんな所でひとりぼっちなんて人は

逆に目立って仕方ないからね？」

先輩が指差す方を見ると、いつの間訪れていたのだろうか……ベンチで向き合いながら『カード』を広げている男子生徒達が目に留まった。

「ああ……『デュエルモンスターズ』ですか」

世界的にその地位を確立した、超有名カードゲーム。そのプレイヤー層は老若男女を問わず、スポーツのようなプロリーグから専門の養成学校まであるという。

無論、そのベンチでわいわいと楽しんでいる連中はあくまで『趣味』としての嗜み程度なのだろうが。プレイヤー人口が多いイコール、それ極めて優秀なコミュニケーションツールと化する。

同じ趣味を持つというコトは、それだけで会話が弾む。約束も増える。臭い販促文句のようだが、事実『デュエルモンスターズ』はそういった役割を担っている訳で。学校を出て社会に放り出されても、何かと『デュエル』は付いて回るそうだ。

「あれ、興味なさげ？ それとも実は結構やりこんでたり？」

俺の反応が気になったのか、ずいと先輩が顔を寄せてくる。

長いまつ毛が当たりそうになるまで詰め寄ってきて、思わず仰け反った。

「……ルールくらいは知ってますが、別にそこまでは」

「じゃあ、デッキは持ってるの？」

ずい、と更に先輩が詰め寄ってくる。

近づいてくる先輩をかわそうと、彼女の額を押しつけてとりあえず距離を離す。

「……まあ、一応は」

「ホントツ!? じゃあじゃあ、あたしとデュエルしようっ!？」

何を言い出すかと思えばこれである。何かといえばデュエル、デュエルとばかり。

これまで『幾度と無く』交わし、なぞったやり取り……思わず出そうになった溜め息を、必死に押し返す。

「……いいですよ。俺で良いなら」

俺は沈んだ感情を全て『仮面』の下に押し込めると、淡々と承諾した。

モンスターを出して、カードを伏せて。

それ以外にすることは無い。いや………したことがない、の間違いか。

ターンを渡された先輩は、見るも鮮やかにカードを操っていく。

「召喚条件を満たしたことで、手札から《ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍》を特殊召喚つ

!! 何かある?」

「……いえ」

ディスク何て高価なモノは当然、持っていない。

ベンチという粗末なデュエルフィールドに、本来なら綺麗な姿を見せてくれたのだろう白い龍が場に出てきた。

ソレを止める術など俺にある訳もなく。場にあつたカードが吹き飛んでいく。

「更にあたしはルミナスの効果で、墓地から《ライトロード・アサシンライデン》を特殊召喚!!
ダイレクトアタック——なんだ、けど」

「……」

何を首を傾げる必要があるのか、ご覧の通り俺の負けだ。

万事平穩、いつも通り。

「……俺の負けですね。ありがとうございました」

「え……? あ、うん……」

何とも言えない表情で、先輩はカードを片手に固まっていた。

ああだこうだと理由を付けていたが、そんなのは些細な事。

これが俺の、孤立の原因だ。

「……さっきの質問の答えですが。まあ、察して下さい」

勝負事なんてモノは、実力の拮抗した相手と戦うから面白いのだ。スポーツだってそう。一方的な試合なんて、見ている方だってその内飽きてくる。

要するに。

俺は弱すぎて、相手にならないのだ。

戦う度、相手は気まずい表情を浮かべて去っていく。とはいえ彼らを責める気は無い、非があるのは俺の方なのだ。

元々が口下手なのに加えゲームを用いての対話すら不器用……我が事ながら、先が暗い。

「あの、や……」

あれだけ明るかった、太陽のようだった先輩の表情が、どんどん鉛色に曇っていく。

この瞬間だけは、どうしても慣れない。

ほんの少しだけ羨ましいと思ったその人も、こうしていつも通り俺から離れていく。

「……何です？」

決別を告げられる、曖昧な言葉が放たれるまで数秒。

全ての感情を能面の下に押し込んで、俺はそのときを待ったのだが――。

「どうしてそんなに、辛そうな顔でデュエルしてるの？」

先輩の口から放たれたのは、意外な言葉だった。

「……え？」

「ちつとも楽しそうじゃなかった。そんなのデュエルじゃないよ……」

少し怒ったように眉を尖らせ。

立ち上がった先輩が言い放ったのは、今までの『決別』とは正反対の言葉で。

「ホントの『楽しい』デュエル、あたしが教えてあげる」

切れることの無かった『繋がり』に、しばし呆然と佇み。

「放課後、空けておいてね？ あたし校門で待つてるから！」

「は……？」

昼休み終了の合図と同時に、俺はその言葉の意味を理解した。

「あ、お昼休み終わっちゃったね。そんじや放課後にまた！ 逃げちや嫌だよっ!？」

ビシツと敬礼のようなハンドサインを決めて立ち去ろうとする先輩に、俺は慌てて声を掛けた。

「いや、ちよつと——」

この人の素性とかクラスとか、そもそも放課後の約束はまだ承諾してないとか、聞きたいことは沢山あったが。

「アンタ、名前は……!?!？」

とつさに口から飛び出した質問に、先輩はくるりとスカートを回しながら振り向いて、答えてくれた。

「2—A組、珠城陽依っ!!」
たまきひより

閑散とした青い夜、『開拓プラント』付近の市街を2台のD・ホイールが並走する。

闇に浮かぶのは、白金の騎士と爬虫類のようなシルエットをしたヴォルカニツク炎銃の使徒。

現在は「バトルロイヤルモード」のラストターン。そして今、最後の宣言が下されようとしていた。

「……バトル、ジエインでエツジに攻撃」

切り裂かれた『ヴォルカニツク・エツジ』爆散の衝撃を受け、コントローラーであるフルフェイスの男はD・ホイールごと巻き上げられる。

紅の鎖が千切れ飛び、敗者はその『リスク』を全身に受け路上へと

叩きつけられた。

「ぐ、あああああッ……!?!」

【??】 L P O

男の痛烈な叫びが、あつという間にスピードの彼方へと置き去りにされていく。

勝者——ユウキリサキの駆る黒い軽量のD・ホイールは、今しがたクラッシュした彼らのソレと同じモノだ。言うまでも無いが、彼らから『拝借した』代物である。

個体識別その他諸々……追跡される要因は幾らでも考えられたが、ユウはそんなことなどお構いなしに夜道を駆けて行く。

何かしら追手が来るだろう、ということとは承知の上。むしろこれから向かう目的地に近づくにつれて『向かい側から』湧き出てくるライダー達は良い道標となった。

あの男……ユーギムトウから受け取っている情報は正しかったということだ。だが——。

(……思っていたより行動が早い、本当に『赤コート』達は内部分裂したのか……?)

情報と状況を見るに、白面の集団——無論ヒヨリを含めた——がこの青の地に集結していることは確かだ。しかし先刻の光景を見るに組織の中で何か分裂が起きていることも事実。

そんな内輪揉めでボロボロの組織がここまで迅速にイレギュラーの対応などし得るのだろうか。

(ともかく今は、指定されたポイントに向かうしか無さそうだが……) あれこれ考えるのは苦手だ、とユウは思考を切断し、ユーギに指定されたポイントへと迅速に向かうことだけを考える。

そう、いつものように。仮面の下に全てを仕舞いこむ。余計なことなど考えてはいけない。だが——。

——誰? デュエルの邪魔しないで。

そう冷たく言い放った『彼女』の顔が、真新しい記憶としてユウに

刻まれている。

無表情の騎士は擦れた記憶を呼び起こしながら、少女の行方を憂いた。

第51話 勝つだけのゲーム

「やあ、随分とお早い到着ですね」

ユウが指定場所に到着すると、ユーギムトウは車内からひらひらと手を振って出迎えた。

夜の闇に紛れるような漆黒の車体は、例え借り物であったとしてもそれだけで彼の『収入』が伺える。流星はデュエルシステム市場を独占する一流企業……普通なら彼の振る舞いに憧れや妬みを抱きそうなモノだが、ユウは何の反応を示すことなくD・ホイールを車の傍に寄せた。

「……………どういうつもりだ」

「何がです？」

「危険だからと俺を『代行者』に立てた奴が、何故ここまで来たのかと聞いている」

開口一番、ユウは尖った口調で問い詰める。

ユーギは眉を下げつつ、やれやれと両手を上げて答えた。

「どこかの皆さんのお陰で、今は青も神経質アトランタになってしまいました……警備の厳重な開拓プラントに入る為には、僕が直接顔を出さなければ侵入すら難しいかと判断したままです」

そう言つて、ユーギは1枚のデータカードを手渡してきた。

「コレをDパッドに読み込ませて下さい、検問を誤魔化す為の偽IDです。僕と一緒にならまず問題なく通れるでしょう……ああ、そのD・ホイールとはここでお別れして下さいね？ 僕らまで追跡されるのはゴメンですから♪」

「……………」

ユーギの言葉の意図をそのまま体现するかのように、車のドアがカチリと音を立てゆつくりと開いた。見れば、後部座席にはしっかりと1人分のスペースが空いている。警戒の色こそ解かないままではあったが、ユウは促された通り車内に乗り込んだ。

ユウが席に着くと、車は静かに走り出した。例に漏れずこの車も電気自動車らしい。運転席には顔の見えない細身の男が1人と、助手席

には双子の片割れ。もう1人はユウからユーギを遮るようにして間に座っていた。

互いの安全を保つための最低限の配置……薄氷の信頼関係の中で成り立つ得体の知れない緊張感の中、ユーギはニコニコと笑みを浮かべていた。自分の思い通りに事が運んで心地良さそうな、そんな笑顔だ。

「……聞かせろ、ここまで来た本当の狙いは何だ？」

そんな底の見えない男に、ユウは低く唸るように問い掛ける。

「おやおや、せっかくのドライブですよ？ もっと明るい話題は無いんですか？」

「……俺にはお前の事情が見えない。こうして身を預けるのにも信用に足らない程にな。お喋りをしたいなら手の内を明かしたらどうだ？」

「あはは……手厳しいですね。以前お話した通り、僕はただのコレクターですよ。本当の狙いといえば……そうですね、及ばずながら降りかかる火の粉から貴方を守る事が出来れば、というコト位でしょうか？ 貴方には万全の状態で《アスタリクス》の回収に臨んで貰いたい」

仮面のような笑顔を浮かべたまま、全く『中身』の無い回答をするユーギ。

雲を掴むような感覚に僅かに顔をしかめながら、ユウは問いを続けた。

「……火の粉、というのは『赤コート』のことか」

「ええ、幸い僕もこの子達もそれなりの実力者です。『紅の巫女』の相手はまだしも……梅雨払い程度ならお手伝い出来るかと思ひまして」「……その程度のこと、何故俺にまで隠す必要があつた？」

「ははは……勘弁して下さい。僕だって男です、少しくらい格好つけても良いでしょう？」

ユウの追求をのらりくらりとかわしながら、ユーギは降参といったように両手を挙げて見せた。

未だ見えぬ『決闘王』の狙い。何か証拠があるわけでも無し、これ

以上の追求は無意味だろう。ユウはそれ以上の問答を諦めて、窓の外へと視線を投げた。

「……それでは、今度は僕の方から質問しましょう。紅の巫女——ヒヨリタマキとはどういった関係で？」

先程までの笑顔に曲がった目元は一転。ユーギの視線は細く鋭く研ぎ澄まされ、闇夜に反射する窓ガラス越しにユウを射抜いた。

「……話す義理は無い筈だ」

「いえいえ、それがそうでもないんですよ。彼女と相対したとして、貴方に手を抜かれては困りますからね。きちんとその辺りのお話を聞いておかなければ。いわば信用の問題です」

「……どこで、あいつと俺に因縁があると知った」

「おやおや、本当に因縁があつたんですね？ カマを掛けてみるものです♪」

ニコニコと、ユーギは本当に屈託無く笑う。

「……貴様」

「おっと、そんなに怖い顔をしないで下さいよ。趣味とはいえレアカードが関われば『巨額』が動く……これも一種のビジネスです。僕が必死になるのもご理解頂きたい」

慌てたように手を振るユーギの前で、小さな従者がディスクを構えた。

最新型の半実体レーザープレートが刃のように突き立てられ、ユウも渋々と引き下がる。

「……ヒヨリタマキが倒すべき『敵』としての因縁であれば良し。ですが、もし甘温い感情にデュエルの行方を左右されるようなことがあれば……僕の杞憂、察して頂けると助かるのですが？」

「……」

その目は再び、刃のように研ぎ澄まされる。

ユウは短く溜め息をついてから、答えた。

「……どの道、拒否権はないのだろうか」

「ええ、まあ」

ユーギの視線と、小さな従者のディスク。その2つが下げられたこ

とを確認してから、ユウは淡々と語り始めた。
もう戻れないのであろう、あの世界で過ごした記憶を呼び起こしながら。

約束の放課後。待てども待てども先輩は現れなかった。

ここまで来ると、俺としてはからかわれたのでは無いかと半信半疑だ。それでも馬鹿正直に校門の前で待っていると……人氣が無くなったのを見計らったようにして、先輩はひよっこりと現れた。

「ごめんごめん、待った……よね？」

「……まあ、俺は教えて貰う身の上ですし。気にしないで下さい」

「ホント、申し訳ないっ」

手を合わせて頭を下げる先輩。

約束を反故されなかっただけマシ、という胸の内はしっかりと秘めておいて、「それじゃ早速!!」と駅の方に向かって行く先輩に、俺は黙って付いていくことにした。

駅前に到着し、先輩に連れられて歩くこと数分。

何とも小さく狭苦しいビルの中に、それはあった。見渡す限りデュエルモンスターズのカードが沢山……学校帰りに寄り道をする連中も多いのだろう、幸い同じ制服は見なかったものの、制服姿の学生達が狭い店内に溢れ返っていた。

俺の持っているカードのほとんどは、コンビニ等で少しずつ買ったカードの寄せ集めだ。こうしたカードの専門店というのは初めて踏み入れる領域である。

その雰囲気には圧倒されるばかりの俺をよそに、先輩は鼻歌交じりに人混みを進んでいく。随分と慣れたものだ……袖を引つ張られるようにしながらも、何とか俺も後に続く。

「ふんぷん♪」

「……随分楽しそうですね、先輩」

「モチロンっ♪ デュエルの面白さを1から教えてあげられるなん

て、楽しくない訳ないでしょ?」

先輩の言葉に、俺は小首を傾げた。

「……そういうのって普通、面倒臭がるものでは?」

「そんなことないよ、決闘者^{デュエリスト}として一緒に成長できるって凄く嬉しいことだし!」

成程、彼女にとってはそういうモノなのか……。

「それにしても——」

予想外の人の多さに思わず愕然とする。

気を抜いていると、どこかへ流されてしまいそうだ。

「ユウ君、こっちこっち!」

先輩に招かれたのは簡易的な机と椅子が設置された、こじんまりとしたスペースだった。

休憩する為の場所ではないことくらいは俺だつて分かっている。机の上に広がっているのは無論、デュエルモンスターのカードだ。

多少混みあつてはいるが、幸いにも2人分の席が空いていた。デュエルディスクによるスタン^{立つ}ディング^たのスタイルが主流の今、プレイヤーマも観客も注目しているのは店の奥にあるディスク用のデュエルスペースである。

「アツチはいつも予約でいっぱいだからね……あたしたちはコッチでやろう!」

「ええ、まあ……構いませんが……」

「? どうかした?」

俺の微妙な反応を伺うように、先輩が顔を覗きこんできた。

この人はやたらと距離が近いなど戸惑いつつ、疑問をそのまま口に出す。

「カードを買ってデッキ強化とか、するんじゃないんですか」

ここまで連れてきたということは、そういうコトなのだろうと思つていた。

俺のはコンビニのパックで揃えた様なデッキだ、お世辞にも強いとは言えない。相手と同じ土俵に上がるには、まず強いカードを手に入れる必要がある筈——なのだが、先輩がここで『強力なレアカード』の

購入を勧めてきたならその場で帰ろう。そう考えていた。

デュエルモンスターズのカードには、プロが使う1枚何万もするよ
うなカードから、小学生のお小遣いで買えるようなモノまである。上
を見て下を見ても、それこそキリが無い。経済力や運で決まるよう
なゲームに、俺はどうしても熱を見出せない。

皆が『デュエル』に何の魅力を感じているのか、それが分かれば御
の字と先輩の誘いに乗った訳で。結局『強くて高いカードを揃えれば
勝ち』というのが先輩の言う『楽しいデュエル』なら、俺は文句の1
つでも吐いてやるつもりでいた。

だが、先輩はただ一言。

「? いらぬよ、そんなの」

そう言つて、にっこりと微笑んだ。

「少なくとも今日はね。あとでユウ君が欲しいって思ったなら止めな
いけど」

予想に反した言葉に、俺は少し面食らっていた。

「……なら、いいですが」

負け惜しみのように呟くと、先輩は思い出したように付け加えた。

「そうだ、それと今からあたしに対して敬語は禁止、決闘者には上も下
も無いからね、あたしもキミのことはユウって呼ぶよ?」

「……はあ、分かりまし」

「敬語っ」

「……こほん。分かった、これで良いか?」

「うんっ♪」

家族や同級生と接するような口調に戸惑いながらも、先輩の眼力に
押されて渋々口調を改める。

「それじゃ時間も無いし、始めよつか。デッキを出して?」

言われた通り、俺は自分のデッキを机の上に置く。

先輩はそれを手に取ると、今度は自分のデッキを取り出して俺の前
に置いた。

「先輩、何を……」

「もう、敬語っ!! 名前名前っ!!」

「……陽依、一体何を？」

「えつとね、ユウはあたしのデツキを使って戦って欲しいんだ。あたしはユウのデツキを使って戦うから」

視線はデツキに落としたまま、先輩——陽依はそんなことを言い出した。

成程、と思い当たる。陽依は俺との立場を逆転させることで、俺自身の未熟さやデツキの力不足を教えるつもりなのだろう、と。

そんなことは教えられずとも分かっているのに……と俺は思ったままを口にしようとする。

「一応、最初に断っておくけど。これからやるデュエルは、決してユウやデツキを貶す為のじゃない。そこを分かかっていて欲しいんだ」

真剣な声色と不意に向けられた視線に面食らった俺は、ただ黙って頷いた。

まるで頭の中を覗かれたような、得体の知れない感覚がぞわりと過ぎる。

「うん、それじゃ始めようか♪」

「え、ああ……」

彼女の意図は分からぬまま、俺は陽依からデツキを受け取る。

店中に響く賑やかな喧騒に巻かれながら、そのデュエルは静かに幕を上げた。

「……俺は」

正直、先攻1ターン目から何をしたいのやら、サツパリ分からなかった。

陽依は基本的な使い方すら何1つとして教えてはくれない。ただニコニコと、6枚の手札を眺めて固まる俺の様子を見ているだけだ。

仕方がないので、長いテキストを1枚ずつ読み通していく。どうやら共通して『デツキからカードを墓地へ送る』効果が付いているようだが、どれが最善の手なのかが分からない。

確か——デッキの枚数が0になると残りのLPに関係なく敗北してしまう筈だ。ならここはなるべくカードを墓地へ送らないよう、効果モンスターは伏せておくべきか……。

「……モンスターを伏せて、ターンエンド」

それにしても、手札6枚が全てモンスターカードなんて運が無いにも程がある。

相手が俺の弱デッキとはいえ、この調子では……。

「ふむ、なるほどね。それじゃああたしのターン、ドロー!!」

果たして俺の選択が正解だったのかどうなのか。答え合わせすら無く陽依はカードを引いた。

「まずは、手札から《一刀両断侍》を召喚っ」

《一刀両断侍》

☆2 / 風属性 / 戦士族・効果 / ATK 500 / DEF 800

あつ、と思わず声に出しそうになった。

元々は俺のデッキだ、どんなカードがあるかは大体把握している。限定的な状況でしか活躍できず、結局いつも伏せたままやられてしまう弱小ステータスのモンスター……それをこんな美味しい状況で引いてくる。彼女は他にも、俺には無い何かを持っているようだ。そりゃあきつと、デュエルも楽しいだろう。

「二刀両断侍は、裏側守備表示のモンスターをダメージ計算を行わずそのまま破壊出来るっ!!」

「……分かった。ジェインは破壊される」

こつちの気も知らず、陽依は攻撃を宣言してきた。

俺は黙って、伏せていた《ライトロード・パラディン ジェイン》を墓地ゾーンへと置く。

「ところで、知ってるかな?」

「……何を?」

「この子について、だよ。テキストに書いてある『効果』だけじゃなくてさ」

突然。陽依は本でも読み聞かせるように話を始めた。

「この子はね、元々はデュエルとは関係ない、テレビゲームに出てくる

忍者のキャラクターがモチーフになってるんだ。この効果も『忍者』って設定からきているのかもしれないね」

「……はあ。そう、なのか」

「ほら、いかにも暗殺って感じしない？」

「……まあ、言われてみれば確かに」

あのカードにそんな設定があったなんて、始めて知った。

単なるハズレ用のカードだとばかり思っていたのだが……。

「それじゃあ私はカードを1枚伏せて、ターンエンドだよ！」

陽依の魔法・罨ゾーンにカードが1枚伏せられる。

だが、俺の持っている罨や速攻魔法など数が知れている。恐らく1枚だけでは《一刀両断侍》を守りきれないだろう。なら——。

「俺のターン、ドロロー。手札から《ライトロード・サモナー ルミナス》を召喚。手札を1枚捨てて、墓地からジェインを特殊召喚する」

《ライトロード・サモナー ルミナス》

☆3 / 光属性 / 魔法使い族・効果 / ATK 1000 / DEF 1000

《ライトロード・パラディン ジェイン》

☆4 / 光属性 / 戦士族・効果 / ATK 1800 / DEF 1200

手札から捨てたのは今しがたドロローしてきたものの、どう考えても邪魔になりそうな『墓地で発動する』効果を持った低ステータスのモンスターカード。これならルミナスの効果に対するコストが無駄にならなくて済む……そこまで考えて、はたと気が付いた。

(……俺、デュエルでこんなに色々考えてたっけ……?)

少なくとも、最近の記憶には無い。

相手の手の内を読んで、コンボを考えて……そんなゲームらしい思考をデュエルでしたのは今日が初めてだ。いつも一方通行、何を考える暇も無く潰されるだけで。

「……バトル、まずはジェインで一刀両断侍に攻撃」

だがそれも、こうして強弱のバランスをとってこそ成り立つものだ。昼休みの結果を思い返せば、この瞬間が夢幻であることを知る。

やはり最後はカードの強さがモノを言うのだ。

「う〜……分かった、攻撃を通すよ!」

ジェインの攻撃力は、その効果で300ポイント上昇して2100。

一瞬悩んだ陽依の様子からしても、アレが《突進》であることは間違いない筈だ。

「続けて、ルミナスでダイレクトアタック」

思えば、直接攻撃なんて久方振りだ。

陽依のLPはこれで1400。次のターンでジェインが直接攻撃できればそれで詰チエックメイトみ。

カードが強力ならここまでデュエルを楽しめる。それが分かっただけでも御の字、良い経験になった筈だ。それでも俺が——心からデュエルを好きになれないことは変わらないのだが。

「……ふふっ」

不意に、陽依がクスクスと笑った。

どうしようもない俺の弱デッキに呆れたのだろうか？

「ちゃんとジェインから攻撃してきたよね？ 伏せたカードが《何か》分かったの?」

思いがけない質問に、俺は目を丸くしながらも何とか答えた。

「あ、ああ……まあ」

「そっか、それなら良いんだ♪ ってゴメンゴメン、まだそっちのターンだったね?」

……と言つても、俺はこのまま2体を棒立ちさせるしかない。

そのままターンエンドを宣言すると。陽依がまたもポツリと謳うように漏らした。

「ライトロードの共通効果は、エンドフェイズにデッキからカードを墓地に送ること。ジェインが2枚、ルミナスが3枚だよ?」

「……ああ、すまない。忘れていた」

そう。攻撃力や効果が強力な代わり、このライトロードというモンスターはデッキからカードを墓地へ送る『デメリット』が発生する。

モンスターを2体立たせたのも、このターンなら大ダメージを見込

めると思い切っただけに過ぎない。当然、そんな大盤振る舞いの代償は高くつく。

墓地へ送られるカードは5枚。その中にはライトロードという名前のモンスター他にも、魔法カードや陽依が使っていた白い龍の姿もあった。

「このカードは……」

思わず手にとって、その効果をまじまじと読みふける。

全てを破壊する強力な効果をもつ最上級モンスター。その召喚条件を見てみると……墓地に4種類のライトロードが存在する事が条件となっていた。

このカード自身が落ちてしまった今ではどうしようもないことだが、ライトロードが持つ効果の『意味』を唐突に理解する。

「そのデッキの動かし方、何となく分かったかな？」

そこでまたもや、俺の頭を見透かしたように陽依が声を掛けてきた。

「……デメリット効果で墓地にモンスターを溜めて、このカードの効果で一気に攻める……か？」

「うん、大体正解かな。その《裁きの龍》はね、次元を超えてやってくる正義の味方、《ライトロード》の最終兵器なんだ。ライトロード達はその強力な力を維持する為に、膨大な魔力が必要らしいんだけど……デッキのカードを消費する効果は、そんな設定の再現って訳」

「成程、な……」

理不尽に振られる暴力ではなく、しつかりとした背景があつてこそ『力』。相手にしたときには見えてこなかった、『彼ら』の姿が浮かんでくるような気がした。

「それじゃ、あたしのターンだね！ ドローっ！」

陽依は俺が納得したのを見計らったように頷くと、にこやかにカードを引き抜いた。

「さて、一戦終えてみてどうだった？」

結果だけを言えば、デュエルは「ライトロード」を使った俺の勝利で終わった。

使い方すら分からずまごついていたにも関わらず押し切れてしまったのは、やはり個々のカードの性能が段違いだからだろう。

「……まあ、勝てたのだから悪い気はしなかったさ」

笑顔を絶やささない陽依の問い掛けに、俺は正直に答えた。

「そっか。ユウにとつて、デュエルは『勝つ』ことが大切なんだね？」
そう返した陽依の顔に、落胆の色は無い。

「……別に俺だけの話じゃないだろう？ ゲームなんてものは互いの優劣を競い、勝敗を決するためのものだ。勝つ以外に目的なんて無い」

「うーん、確かにそういう人もいるけど……皆が皆、デュエルに勝ちを求めている訳じゃないと思うよ？ デュエルの中のストーリーを楽しむ人、知らない誰かと戦うことに楽しさを感じている人……多分だけど、そこに勝敗は関係ないと思うんだ」

何となく、陽依の言いたいことは分かる。

だが俺は、どうしても敗北する自分に納得がいかないのだ。勝負をするなら『全力』で挑みたい。なのにデュエルは資金という、どうしようもない『不平等』を要求してくる。

そんなデュエルの在り方は——やはりどうしても受け入れられない。

「……負けて喜ぶ奴なんて、いるわけ無いだろう」

搾り出したような俺の声に、陽依は困ったように言葉を返した。

「そりゃあ、喜びはしないだろうけど……負けて『悔しい』って思うのと『つまらない』って思うのは、全然違うよね？ 次は勝つんだって色々作戦を立てることは、楽しんでるってコトじゃないかな？」

「……それは」

何かを言いかけた俺の口は、次に続いた陽依の声でぴしゃりと遮られた。

「でもね、昼間のユウには無かったんだ……負けて悔しいっていう気

持ち。今はその逆、勝って嬉しいって気持ちだ」

心臓を槍で突かれたような、鈍い痛みが襲う。

悲しそうな目をしたまま、陽依は続けた。

「負けたらそれでオシマイ、カードが弱いから。勝って当然、カードが強いからだって、そんな顔してた。あたしね、何だかそれが勿体無くて……デュエルにはもっと色んな『顔』があるのにつて」

俯いた彼女の瞳は、俺の方を向いてすらいなかったが……心の奥底まで見透かされたような、そんな何ともいえない寒さが全身を振るわせる。

「デッキを交換したのも、それが理由。デュエルの中に新しい『楽しさ』を見つけて貰えれば良かったんだけど……見つからなかったみたいだね」

陽依の問い掛けに、俺は何も答える事が出来なかった。

彼女とのデュエルで感じた『楽しさ』は何だったのか。カードが強かったから？ 自分が相手よりも優位に立てたから？

自分の中ですら答えを出せずにいると、陽依はよつと勢いをつけて席を立った。

「あはは……今日は時間をとらせてごめんね？ 今日はこの辺でお開きにしよう！」

「え？ あ、ああ……」

「また学校で会ったら、今度はあたしがゴチソウするよ！」

そう言い残して足早に去っていく陽依。

ふとテーブルの上を見ると、彼女の「ライトロード」デッキが置かれたままだった。

「おい待て、このデッキ……」

慌てて呼び止めたが、陽依はこちらに振り返りもせず頭の上でひらりと手を振ると。

「ああ、それキミにあげる！ 良かったら使ってあげて、キミならきつと『勝てる』よ！」

ふわふわとスカートを揺らしながら、陽依は人混みの中へと姿を消していった。

第52話 勝つ為のゲーム

出来る限りの準備はした。

入学から今まで、手に掛ける事の無かった扉を開け放つ。

「……………」

ガラガラ、と音を鳴らす微妙に立て付けの悪い引き戸は、教室に居た皆の視線を一身に集めるには十分な役割を果たした。

ほんの数秒。ちらりと向けられた視線の束に臆することなく、俺は目的の『席』へと一直線に向かっていく。

4つ程の机を寄せ集めた、簡易的なデュエルスペース。昼休みこの時間、いつもここでデュエルが行われていることは耳に入っていた。

俺の目的が自分達であることに気が付いたのだろう。決闘者である彼らは盤面に戻そうとした視線をすぐさま俺へと向けなおして、ぽかんと口を開けたまま俺が傍まで来るのを見つめていた。

「……………な、何だよ……………」

この決闘者メンバーの中では中心核である喜多村君が、威嚇でもするようになく唸った。

無理も無いだろう、自分が打ち負かした無愛想男が鬼気迫る勢いで自分達に向かってきたのだ。復讐リベンジかと身構えてしまうのは至極普通の反応だろう。

おろおろ、とざわつき始める教室の中で、俺はすつと息を吸い込み——告げた。

「…………デュエルを、してくれないか」

瞬間。緊張の糸が切れたように、方々から息が漏れ出た。

「な、何だ……………んなコトかよ……………無駄に驚かせんじゃねえ！」

「す、すまない……………」

うがー、と片腕を振り上げて怒る喜多村君に思わず頭を下げる。

「あーいや、別に謝らなくてもいいけどさ……………つか、俺らは別に構わなainだけどさ、その……………お前ってデュエル嫌いなんじゃねーの？」

周りの決闘者メンバー達も、うんうんと首を縦に振って同意する。

俺は自分から「デュエルが苦手」と宣言したことは無い筈なのだが。

ここまで皆の共通認識として広まっているところを見ると、やはり陽依の言っていた『俺の印象』は正しかったようだ。それが嘘になるか誠になるかは、今日このデュエルに掛かっている。

「……そういう訳でも。とにかく付き合って貰えるとありがたいんだが……」

「ふーん、まあいいぜ。俺でよけりや相手になつてやるよ」

フツと不敵な笑みを浮かべ、喜多村君が向かいの席を指差した。

俺は素直にそこへ着席すると、デッキを取り出しながら言った。

「……すまない。1つ、頼みがある」

「頼み？」

「ああ。もし良ければ……サイドデッキ有りのマッチ戦を受けて貰いたいんだが」

その意味を知る決闘者メンバーは、にわかになぞわついた。

困惑したように、喜多村君も呟く。

「ええつと……珍しいんだけどな、そんな対戦形式で戦いたいなんて奴。確かにマッチサイド有りなら、俺がサイドデッキを持っていないけりゃ『ハンデ』になるかもしれないけど」

「いや、そういう意味じゃないんだ。そっちにサイドデッキがあるなら是非使つて貰いたい。そもそも、サイドが無いならこの条件を受けなくても構わない」

俺の言葉に、喜多村君は訝しげに眉を寄せて——直後に、にかつと笑った。

「……へっ、いいぜ。その条件受けた！ 何考えてるのか知らねえが、逆にお前の戦略を見てみたくなった！」

そう言いつつ、喜多村君は懐から新たにカードの束を取り出した。枚数はおおよそ15枚。紛れも無く、それは彼のサイドデッキだ。

「残念だが俺のデッキにはちゃんとサイドがある。それでも戦うか？」

「ああ、むしろ望むところだ」

「言うじゃねーか、後悔しても知らねえぞ？」

両者が向かい合い、視線が交差する。

どちらとも無く、雌雄を決する戦いの合図が口を付いて出た。

デュエル
「決闘!!」

.....

.....

.....

「やつほ、あれから調子はどう?」

中庭で昼食を取っていた俺に、陽依は気さくに話し掛けてきた。

「.....どうって、そうだな。まだ勉強中というか」

「ええっ? ライロの動かし方ってそんなに難しかったかな? パ

ターンさえ覚えちゃえば、あとは結構ゴリ押しで.....」

「ああ、そのことなんだが——」

懐からデツキを取り出して、しっかりと陽依に手渡す。

それを見た彼女はきよとんと目を丸くした。

「え? これって——?」

「それはアンタに返す。そのデツキじゃ多分、『俺のデュエル』は出来ないと思った」

「何で? キミはデュエルに勝つ事が楽しいんじや.....」

「.....どうにも俺は、ただ勝つだけじゃ満足できない贅沢な性格らしい」

「? どういうこと?」

ますます首を傾げる陽依に、俺はゆっくりと宣言するように言っ
てやった。

「.....この間のデュエルがきっかけになって知る事が出来たんだ。相
手の手の内を読み、思考を巡らせ、その上で相手を倒す.....それが俺
の求める『デュエルの楽しさ』だと」

陽依は少し驚いたように目を丸めたが、すぐに嬉しそうに微笑んで
「そっか」と短く呟いた。

「アンタの組み上げた【ライトロード】で掴んだ勝利じゃ.....カードの
強さだけに頼った勝利は、俺の求める勝利の形じゃない。どんなに強
力なカードを揃えても、きっと俺自身が強くならなければ意味が無
い。だから俺は『勝つだけのデュエル』ではなく、『勝つ為のデュエル』

をしたい——それが、俺の出した結論だ」

だから、と続けて、俺は懐からもう1つデッキを取り出して言った。「だからそのデッキはアンタが持っていてくれ。いつか俺と、俺のデッキが挑みに行くまで」

少し格好を付け過ぎてしまったか、陽依は困ったように眉を寄せていたが——。

「うん、分かった。そのときを楽しみに待つてるよ!」

そう言って、陽依は俺の返した「ライトロード」を胸元で握り締めた。

.....

.....

.....

あれからデュエルについて研究し、持てる知識とカードを総動員して挑んだのが今日。

相変わらず懐は寒く、レアカードなど揃える余裕は無かったが——むしろそれで良かったのかもしれない。カードパワーに頼ったデュエルで相手を負かしても、それは俺自身の強さには繋がらないからだ。

そんな俺の決意に真っ向から立ち向かってくるように、喜多村君がカードを振りかざす。

そこに遠慮や躊躇など一切無い。

「俺は手札から魔法カード《簡易融合》を発動! エクストラデッキから☆4の融合モンスター、《旧神ノーデン》を特殊召喚だ!」

《旧神ノーデン》

☆4 / 水属性 / 天使族・効果 / ATK 2000 / DEF 220

0

喜多村君の場に出てきたのは、特異な素材を指定する異色の融合モンスター。しかし☆5以下の融合モンスターを1枚で呼び出せる《簡易融合》と組み合わせることで、その汎用性は恐ろしいほど高くなる。「ノーデンの効果を発動、このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地のレベル4以下のモンスター1体を、効果を無効にして特殊召喚

する！ 俺は☆4の《ライオウ》を特殊召喚！」

《ライオウ》

☆4／光属性／雷族・効果／ATK 1900／DEF 800

墓地から蘇生されたのは、先のターンでやっとの思いで処理した厄介な下級モンスター。

カードの選出、戦い方からして間違いない。喜多村君は堅実な「メタビート」に近いデッキ構成のようだ。

「行くぜ、俺は☆4のノーデンとライオウでオーバーレイ!! 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築……エクシーズ召喚、★4《カチコチドラゴン》っ!!」

《カチコチドラゴン》

★4／地属性／ドラゴン族・エクシーズ・効果／ATK 2100
／DEF 1300

ノーデンからのシンクロ、エクシーズは常套手段だ。自身を起点にして様々なエクストラモンスターを召喚出来る為、高額で取引されていると聞く。だからこそ、無知な俺でもその『強さ』を事前に仕入れる事が出来たのだが。

「バトルだ、俺はカチコチドラゴンで伏せモンスターに攻撃！」

「……分かった、《一刀両断侍》は破壊される」

俺の場に伏せられたモンスターは一体のみ。

喜多村君のエクストラデッキを覗くことは出来ないが、この盤面でカチコチドラゴンを呼び出したのは順当だろう。

「相手モンスターを破壊したことで、カチコチドラゴンの効果発動！」

ORUを1つ使い、続けて攻撃出来る！ ダイレクトアタックだ！」

【ユウ】LP0

と、いくら思考を巡らせても、最早どうすることも出来ない。ライフを削れぬまま、俺は呆気なく第一戦を敗北で飾った。

「……参った。俺の負けだ」

「お、おう……」

喜多村君の顔に浮かんだのは、いつかと同じ気まずい表情。

そんな空気はいつしか周囲に伝染し……俺はずきりと痛む胸を張って、声を張って言い放った。

「では続けて2戦目だ。宜しく頼む」

たいせんあいて喜多村君の目を、真っ直ぐに見据える。

サイドを変えたところで勝負にならないかもしれない。今のデュエルの二の舞になるだけかもしれない。だが、ここで諦めるわけにはいかないのだ。

「……OK、じゃあサイドチェンジな！ 言つとくが手は抜かねえぞ？」

「ああ、それは覚悟の上だ」

とはいえ、俺が相手ではさして熟考する意味も薄い。

恐らくはサーチや特殊召喚を妨害するような『いつもなら刺さる』カードを抜いて、汎用性のある除去カードに入れ替える程度だろう。だが俺はそうもいかない。乏しいカードの中から十分に吟味し、後は運を天に任せてカードを切るのみ。最後は結局運頼みというのは何とも情けない話だが……それは俺も相手も同じ条件。どちらに天秤が傾いても恨みつこなしだ。

「決闘!!」デュエル

先攻は俺から。ガラにも無く願いを込めてカードを引き抜く。

「俺のターン、ドロロー。手札から《切り込み隊長》を召喚。その効果で同じく手札から《セカンド・ブースター》を特殊召喚する」

《切り込み隊長》

☆3 / 地属性 / 戦士族・効果 / ATK 1200 / DEF 400
800700

《セカンド・ブースター》

☆3 / 炎属性 / 機械族・効果 / ATK 1000 / DEF 100
0

「俺は、☆3の切り込み隊長とセカンド・ブースターでオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築……エクシーズ召喚、★3 《発条機雷ゼンマイン》」

《発条機雷ゼンマイン》

★3 / 炎属性 / 機械族・エクシーズ・効果 / ATK 1500 / DEF 2100

俺の持つ数少ないモンスター・エクシーズ。虎の子と言っても良い存在だ。

優秀な効果を持ちながら安価で入手がしやすいのは、このカードだけでは『決め手』にならないことが大きいのだろう。

しかしながら妨害の少ない1ターン目でこのカードを召喚できたことはかなり大きい。どうやら運が向いてきたようだ。

「クソ、面倒な奴が立つちまったな……!」

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

処理の難しいモンスターと、伏せカードが1枚。

こちらとしては頼もしくとも、相手からすれば嫌な布陣だろう。

「俺のターン、ドロー!」

瞬間。それまでしかめ面だった喜多村君の表情がニヤリと歪んだ。

「クッククク……来たぜ、そいつを突破するキーカードがな! まず手札から魔法カード《ブラック・コア》を発動! 手札を1枚捨ててゼンマインをゲームから除外する!」

ガッツを決める喜多村君であったが、周囲からはどこからともなく「あ……」と同情のような悲痛な声が漏れだした。

ゼンマインは強力な破壊耐性を持つが、破壊以外の除去手段には成す術を持たない。俺は素直に、ゼンマインを除外ゾーンへと移動させた。

その性質上、喜多村君のデッキはコンボに縛られず『何を引いても』手札のカードが腐ることは少ない。彼の引きが強いのは勿論だが、相手のデッキが分かかってしまえば対策カードをたんまりと詰め込む事が出来るという訳だ。

「悪いな、続けて俺は手札から《簡易融合》を発動! 《旧神ノーデン》を特殊召喚!」

【喜多村】 LP4000→3000

先程と全く同じ展開。

だが、ここまでは俺も予想の範疇だ。

「待った。その瞬間、俺はこのカードを発動させる」

俺は汎用性のある召喚反応罠など持ち合わせていない。

それは前のデュエルで喜多村君も気付いていた筈だ。だからこそ、このタイミングで罠が発動したことに彼は随分と驚いていた。

「罠カード《融合失敗》……融合モンスターが特殊召喚された時に発動し、フィールド上に存在する全ての融合モンスターを融合デツキに戻す」

「なっ——!?!」

本来であれば恐らく《奈落の落とし穴》あたりが発動しているであろう場面だ。

俺はどうしようもなくピンポイントな、専用のメタカードを発動させた。

「おまつ、ソレ……!?!」

「生憎と高価なカードは持ち合わせていなくてな。《旧神ノーデン》を対策するのはこのカードしか手元に無かった」

ノーデンに限らず、融合モンスターには強力な効果を持つものが多い。

確かに《融合失敗》はいつでも、誰にでも使えるカードではないが……相手の切り札を潰す可能性が無いわけではないのだ。

「まあ、残念ながらノーデンの効果は発動してしまうが……な」

「くっ……!?! お、俺は《ブラック・コア》の効果で墓地へ送っていた《ライオウ》を、効果を無効にして特殊召喚するぜ……!」

その厄介な能力が消えたとはいえ、結果として攻撃力1900のモンスターがフィールドへ残ってしまった。

「バトルだ、ライオウでプレイヤーにダイレクトアタック!」

【ユウ】LP4000↓2100

その一撃を、甘んじて受ける。

「メイン2、俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ!」

これで喜多村君の手札は1枚。

エクストラモンスターの召喚を防いだことで、辛うじて場に余裕がある。

——いける、これなら噛み付ける。相手の喉元に。

「俺のターン、ドロー」

舞い込んだのは、思いもかけなかった最良の1枚。

ふつつつと涌き上がる熱を感じながらも、俺の表情筋はソレを表には出さなかった。

「手札から《ブリキンギョ》を召喚し、効果発動。手札の《キャノン・ソルジャー》を特殊召喚」

《ブリキンギョ》

☆4 / 水属性 / 機械族・効果 / ATK 800 / DEF 2000

《キャノン・ソルジャー》

☆4 / 地属性 / 機械族・効果 / ATK 1400 / DEF 1300

0

ちらりと喜多村君を伺うと、少し迷ったようだが何かカードを発動させる素振りは無かった。ならばと、俺は手札に手を掛ける。

「更に手札から魔法カード《アイアンコール》を発動。墓地から《セカンド・ブースター》を攻撃表示で特殊召喚する」

言うなれば、ここが俺の正念場だ。もしも2枚の伏せカードの内1枚が《激流葬》であれば——掴みかけた勝利は泡沫に消えてしまうだろう。

だが喜多村君は意外なカードの登場に首を傾げただけで、少し悩んだ末に特殊召喚を見逃してくれた。恐らくは先程の展開からエクシーズ召喚を警戒したのだろうか……残念ながら俺は★4のモンスター・エクシーズなど持っていない。

「いいぜ、通す！」

「ならばバトルフェイズだ。ここで俺は手札から手札から速攻魔法を発動させる」

文字通り俺の『切り札』を見た周囲から、おおっと短い歓声が上がった。

「なっ……《リミッター解除》お!？」

「これで俺の場の機械族の攻撃力は倍になる……さあ、どうする?」

機械族で統一された強力なデッキは組めなくても、その代名詞とも

呼べる《リミッター解除》だけなら俺のような貧乏決闘者でも手に入ることは出来る。レアカードでなくとも比較的扱いやすいカードが多いのも機械族の特徴だ。相手が見せる一瞬の隙を突くに、コレ以上の適任はいなかった。

爆発力を上げた場のモンスターが総攻撃を仕掛ければ、ライオウを巻き込んで喜多村君のライフを0にする事が出来る。伏せられたカードの中にミラーフォースやリビングデッドが、手札に冥府の使者が控えていなければ……の話だが。

「うぐっ……まじかよ……!?!」

だがそんな不安も杞憂のようで、喜多村君は悩みに悩んだ末、場に伏せられていた罫を1枚発動させた。

「……《神の宣告》で、リミ解を無効にする!」

「だが、それで喜多村君のライフは半分になる」

【喜多村】LP3000→1500

これで詰み。チエックメイト 心の中でそう呟いた。

「メイン2、俺はキャノン・ソルジャーの効果を発動。自身を含む3体のモンスターをリリースし、1体につき500ポイント……合計1500のダメージを与える」

何もライオウを倒す必要など無い。

相手のライフを0に出来ればそれで良いのだから。

「分かってら、俺の負けだよっ!」

観念したように見せてくれた喜多村君の手札には《地砕き》、そして伏せられていたもう1枚のカードは《奈落の落とし穴》だった。

「おお、すげえ……」

「桐崎の奴、あんなデツキで喜多村から一本取りやがった……」

勝った……とはいえ、マッチデュエルとしてはこれで1対1。本当の勝利とは呼べないが……俺の考えたデツキで、戦略で、初めて1勝を飾ったのだ。

今のはただ、本当に運が良かったとしか言えない。次の1戦ではまた成す術も無くやられてしまうかもしれない。それでも俺は——俺の見つけた『デュエルの楽しさ』を精一杯噛み締めていた。

「はー……やられたぜ。まさかこんなにアツサリ負けされるとはなあ」

そう言う喜多村君は、悔しそうに眉を寄せながらも笑っていた。つられて俺も、僅かに口端を上げてしまう。

「……まだ、もう1戦残っている。その台詞を貰うのはまだ早い」
「だな。それじゃラスト1戦……最後には俺が勝つからな！」

サイドデツキからカードを入れ替えて、再び向かい合う。

気が付けば、周囲を取り巻く観客達みんは数を増やしていた。

「決闘!!」
デュエル

昼休み終了のチャイムが鳴るギリギリまで続いた接戦は、宣言どおり喜多村君が勝利を収めたが……俺の心は不思議と満たされていた。

「おい桐崎、これから付き合え！ カードショップに行くぞ！」

授業も全て終わり、放課後。荷物を纏めていた俺の肩をガツチリ掴んだのは喜多村君とその友達だった。

「え……？」

「え、じゃねえ！ あそこまでのいい戦いされて『はい終わり』で済むかよ？」

「そうそう。まあ喜多村だけじゃなく、俺らともデュエルして欲しいなってことだ」

困惑する俺を尻目に、彼らはぐいぐいと俺を引っ張っていく。

こちらの予定などお構いなしといった感じだが……これまで友達付き合いなどほとんど無かった俺にとって、彼らの強引さは素直に嬉しく感じた。

「……分かった、宜しく頼むよ」

俺が頷くと彼らも気を良くしたようで、腕を振り上げて笑った。

「よし、そうと決まれば事は急げ！ 西口の『ブルサブ』に出陣だ！」

西口と聞いて、はたと首を傾げた。

陽依に連れられて行った店は、確か駅の東口にあった筈だ。

「……あの辺には2件もカードショップがあるのか？」

「なんだお前、東口の方も知ってんのか？ あつちは少し狭い店だし、東口になると遠いからなあ。ウチの学校の連中はほとんど西口の『ブルサブ』に行ってるんだぜ？」

「そう、なのか……」

「もしかして、誰かに教えて貰ったのか？」

「そう言う喜多村君に、俺は頷いて答えた。」

「ああ、二年の……珠城という先輩に」

その名前を口にした途端、喜多村君達の顔がぴくりと固まった。

「……マジ？」

「？ ああ、知っているのか……？」

言おうか言うまいか、というように言葉を選びながらも、喜多村君は答えた。

「まあ、な。それこそ『ブルサブ』行ってる決闘者なら一度くらい聞いたことあるだろうぜ。ショップ大会で何度か優勝してるような人だしなあ」

その話を聞いて、俺は妙に納得してしまった。

それなりに強い方だとは思っていたが、まさか大会で優勝するような腕だったとは。

しかしそう感心する俺とは対照的に、喜多村君の表情は曇っている。

「ただ、さ。珠城先輩にはあんまり関わるなって噂でな」

「……それは、一体どういう？」

「あー、それは……」

俺の追及するような視線に耐えかねたのか、言い渋っていた喜多村君は言い難くそうに声を潜めて答えた。

「——あの人はデュエルをつまらなくするって。何かクラスでも浮いてるみたいなんだよ」

第53話 疎まれる勝者

翌日の昼休み。本人から詳しく話を聞こうと探してみたものの、彼女の姿がどこにも見当たらなかった。残りの授業を終えた俺の足は自然と2年A組……陽依のクラスへと向かっていた。

「……………」

幸いというか、2年生はもう1時限残っていたらしい。教室の中からは賑やかな談笑が聞こえている。ごくりと意を決し、只でさえ敷居の高い『上級生の教室』の扉を開くと……予想通りというか、しんと静まり返った教室から先輩達の視線が一気に集まってきた。だが、その中にあの天真爛漫な琥珀の瞳は無い。

「えつと……何か用？」

・しばらく入り口の前で佇んでいると、見るからに性格のキツそうな女の先輩が訝しげに尋ねてきた。軽く化粧をしているのか、ふんと不自然な甘い香りが鼻をつく。

「……ちよつと探してる人が。このクラスにいると聞いていたもので」

・大した用事ではないと分かって安心したのか、他の先輩達はそれぞれの談笑に戻っていく。しかし4人ほどいた、俺に話しかけてきた先輩グループは更に眉間に皺を寄せていた。

「……もしかしてアンタ、珠城と仲良くしてるっていう1年の子？」

・その冷たい視線で、俺に向けられている感情があまり良くないモノだと分かる。正確に言えば俺ではなく陽依に、なのだろうが。

・陽依が忌避されている理由は分からないが、俺は迷うことなくこくりと頷いた。

「ええ、恐らくは……」

「そ、アイツなら今いないよ。トイレじゃない？」

・ぶつきらぼうな彼女の口ぶりから、この教室における陽依の立ち位置がおぼろげながら浮かんできた。敵意こそ向けられなかったが、ついこの間までは俺も似たような立場だったから分かる。

正直、この先輩にはあまり良い印象は受けなかったが……それでも

親切に声を掛けてくれたのだ。頭を下げ、素直に礼を言う。

「……分かりました。ありがとうございます」

仕方がないので教室の外で待たせて貰うとしよう、後ろに振り向きかけたところで……先輩は頬杖をつきながらぼつりと付け加えた。

「アンタさ、珠城と絡むのは止めといた方がいいよ」

・ どうにも引つ掛かるその言葉に、ピタリと足を留まらせる。

・ 見れば、吊り目気味な先輩の目は警告のような色味を含んで俺へ向けられていた。

「アイツなんかと一緒にデュエルやってたら……アンタ、友達無くすよ?」

その刺々しい言葉の矛先は俺を通り越し、陽依へと投げられているようだ。

当然ながら、標的が自分でなくて良かったなどと思える筈も無い。

「……どういう意味です?」

「楽しくデュエルしたいならアイツと絡むのは止めとけてコト。自分が勝って楽しむだけなんて、そんな奴と仲良くしようと思う?」

彼女の言葉に周囲の先輩達も失笑して同意を示す。

しかし俺は、そんな彼女達に同調することは出来なかった。

「……決闘者なら、常に勝利を目指すのは当然では?」

決闘者として勝負の場に立つなら勝利を目指すべき。それが俺の掴んだデュエルの理想。そこを曲げるつもりは毛頭ない。

だがそんな俺の言葉に眉を潜めた先輩は、呆れたように鼻を鳴らしてジロリと睨んできた。

「何? アンタもそのクチ? 他人に勝って見下して、気持ち良くないらしいって訳?」

先輩のそんな糾弾に、俺は首を横に振って答えた。

勝者を羨むことはあれど、敗者を貶すなど決してあつてはならないことだ。

「……いえ、そういう意味ではありません。ゲームとして勝敗を決める以上、『お互いに』勝利を目指すのは当然だと考えているだけです」

そう言った俺の言葉に、先輩は今度こそ愛想を尽かしたように深く

溜め息をついた。

「……あのさあ、それがそもそも迷惑だつて分からない？」

「迷惑……？」

「世の中にはね、アンタ達みたいに勝ちにばかり拘らない決闘者だつて大勢いるの。好きなカード使つて、好きなデッキ使つて楽しく戦いたいってね。それを『勝敗』の二文字で片付けられる……そんな相手の気持ち考えたことある？」

勝敗を分かつことこそがデュエルの本質だと、今でもそう考える俺には彼女達の見出した『楽しさ』は分からなかったが……そんな理想もまた、1つのデュエルの在り方なのだろう。

理想と現実の不一致。カードの価値に比例した強弱に嫌気が差し、デュエルそのものに嫌悪を抱いていた俺とは違い、先輩達はただ自分を傷付ける『強者』を疎んだ。俺と彼女達の違いはそこしかない。だからこそ、先輩の言う『理想』を俺が否定することは出来ない。だが――。

——デュエルの中に新しい『楽しさ』を見つけて貰えれば良かったんだけど……。

少なくとも、陽依は。

俺なんかよりも余程、彼女達の理想の近くに居た筈だ。

「^{アイツ}珠城はただ単に強いだけだからね……そんな考えしてたら憧れちゃうのは分かるけどさ、少しは周りの空気読めるようになった方がいいと思うよ」

自らの主張を吐き出して満足したのだろうか。そう言い捨てた先輩は、もう俺に用など無いとばかりに内輪の談笑へと戻っていった。冗談じゃない、こつちが言いたいことは山ほどある。

まだ、俺のターンは終わっていない。

「……あの人は。ただ強いだけじゃありませんよ」

「は……」

つい数日前に会っただけの、少し言葉を交わした程度の人なのに。俺を、俺のデュエルを変えてくれた人を貶された事が凄く悔しくて。

言葉はせきを切ったように、止まらなかった。

「あの人はデュエルを心の底から楽しんでいる。少なくとも俺が知る誰よりも」

「そんなの、何でアンタが——」

「カードの優劣にばかり拘り、逃げていた俺を変えてくれたのがあの人だからです」

先輩からの反論をぴしゃりと遮ると、小馬鹿にしたように嗤っていた顔が驚いたまま硬直した。

「……俺は。自分なりの答えを見つけてデュエルと真剣に向き合った今でも、デュエルは勝敗が全てだと考えています。ですが——デュエルを心の底から好いている陽依アイツが、羨まれることこそあれ、貶されていい理由など何処にも無い!!」

普段は押し込めていた感情の波が、コントロール出来ずに一気に吹き上げ——気付いたときには、自分勝手な主張が語気を強めて飛び出ていった後だった。

「……………」

収まりの付かない言葉の刃を鞘に納めるように、ゆっくりと呼吸を整える。

呆然とする先輩達は口を半開きにして固まり、静まり返った教室では再び注目の矢が俺に降り注いでいる。

「……文句があるなら俺がいつでも受けて立ちます。自分の理想が正しいと思うなら……貴女のデュエルで、俺を打ち負かして下さい」

少しはまともになってきたとはいえ、俺の実力など所詮はたかがしれているのに。

命知らずな挑戦状を叩き付けた俺は、どこかへ逃げるように頭を下げた。

「…………お騒がせしました。失礼します」

死ポーんだ表情筋カーフェイスが良い感じで功を奏したのだろうか。逆上されるようなこともなく、嘲笑されるようなこともなく、俺は静かに教室を後にした。

それからしばらくした、ある日の放課後のことだった。

陽依とはどうにも顔を合わせるタイミングが無く、学校帰りは喜多村君達と駅前の『ブルサブ』でデュエルをしに行くのが通例となっていた……。のだが、今日に限っては補習をサボった罰として俺以外のメンバーが先生に拘束されてしまったため、仕方なく1人で帰ることになった。

(……あれから、どうなったのだろうか)

こここのところ脳裏を過ぎるのは、そんな不安ばかり。

後先考えずに怒鳴り散らしてしまったが、それが原因で陽依への風当たりが強くなっているかもしれないのだ。

教室に乗り込み啖呵を切った1年として俺も何やら奇異の目で見られるようになってしまったため、おいそれと2年生達の様子を伺うことも出来ない。時折、喜多村君達が話す陽依の噂話を又聞きする程度だ。

当の本人は探しても見つからず終い。まさか登校拒否を……などと、悪い方に思考が傾きつつあったときだった。

「……あ、あのっー！」

突然、聞き覚えのある声に呼び止められて、俺は声の方へと振り返ると。

校門の裏からひよっこり現れたのは——栗色の髪にあどけない丸顔の、少ししおらしくなった気がする陽依だった。

「き、今日は、お友達と一緒にじゃないの……？」

そのタイミングというか何と言うか。「ずっと機会を伺っていました」的な匂いがぶんぶんする陽依の表情が可笑しくて、俺は頬を僅かに緩めた。

思い返せばここ最近……教室を移動するときも、昼休みも、喜多村君達と行動を共にする事が多かった。どうやら陽依は、そんな俺に妙な気を使っていたらしい。

「……ああ。今日は皆、先生に捕まっちゃって」

「そ、そうなんだ……」

続く言葉も無く、そのまましばし沈黙。

仮にも年上に恥をかかせる訳にはいかないと、俺の方から一步前に踏み出す。

「いつもはこのまま喜多村君達とデュエルしてるんだが……良かったら今日は、アンタが相手をしてくれないか？」

何故かびくり、と僅かに仰け反りつつ。

俺の提案に対して、陽依は尻尾の代わりに如く首を縦に振った。

「う、うんっ！ 全然大丈夫だよっ！ あたし暇だし!!」

無理して笑うその姿も含め、どこかギクシヤクと様子のおかしい陽依は半歩後ろをひよこひよこ付いてきた。

女子としては決して小柄な方では無いと思うが……どうにも自信が無さそうに背中を丸めてしまっていて、その姿は以前よりも小さく見える。

「……この間は、ありがとう」

しばらくお互いに無言のまま歩いていると、ぽつりと陽依が呟いた。

「さて、何のことだ？」

俺がとぼけて見せると、陽依はくすりと微笑んだ。

「……教室まで来て、怒ってくれたんでしょ？ ちゃんと知ってるんだから。お陰であれから、あんまりイジメられなくなったよ。ありがとう」

「あんまり、ということはまだ……？」

「あはは……まあ無視されたりはしてるけど、大丈夫。その位なら別に気にならないし。『目つきの悪い1年生が珠城の舎弟になった』って皆怖がってるよ？ 凄いだねキミ」

「舎弟、って……」

別に、何か二人して素行不良をしているつもりは無いのだが。

呆れて溜め息をつくくと、陽依は声のトーンを落ち着けて話を続けた。

「……ありがとうと一緒に、ごめんねって謝らせて。キミは庇ってく

れたけどね、あの子達の言ってる事は正しかったんだ」

「……え？」

「デュエルで勝って、いい気分になって……友達相手に偉そうにして。相手の気持ちを考えてするデュエルなんて、それまでしたことなかった」

押し潰されそうな、か細い声。それが僅かに潤みを帯びて途切れ途切れに、彼女の口からは懺悔のような言葉が押し出されていく。

「だから勉強したんだ、デュエルモンスターズのコト。キミに会う少し前からいからかな？ どうしたら『勝つこと』以外でデュエルが楽しく出来るかな、って。それが分かったら……もう一度、皆とデュエル出来るかもしれないと思ったから」

陽依がデュエルに描いた理想は——勝利でも、カードに対する愛着でもない。

ただ周囲と自分を、繋ぎ留めたかっただけだったのだ。

だがそれには、陽依は少々不器用過ぎただけで。なまじ力が強過ぎたが為に、誰とも均衡がとれず周囲から距離を置かれてしまったのだろう。

「あたし、デュエルを本当に好いてなんかいなかったんだよ。皆と一緒に居たいから強くなって、皆が離れていったから自分を曲げたの。幻滅したでしょ？」

その問いに、俺は静かに首を振って答えた。

理由はどうであれ、俺は変わる事が出来たのだ。それには感謝しているし、責めるつもりは無い。

「……でも、そんなあたしと違ってキミは、『勝つこと』以外に意味は無いって自分の意思を曲げなかったよね？ それが本当に羨ましくて、だからほとんどヤケクソで『ライトロード』のデッキを渡したの……キミは自分なりの答えを見つけて、あたしにデッキを返しに来た」

気が付けば、人ひとりくらい距離が空いていて。

潤んだ声を懸命に明るく振り絞って、陽依は締めくくった。

「ビツクリしたし、本当に凄いなって思った。あたしはキミに庇われ

るような偉い人間じゃないけど——」

駅へ向かう十字路の横断歩道。青色に輝いていた歩道用の信号は点滅し始め、赤に変わってしまった。俺と陽依の足が、ぴたりと立ち止まる。

「もしも、あたしを許してくれるなら。受け入れてくれるなら……お願いがあるんだ」

流れる車のエンジン音を聞きながら、俺は真剣な声色の陽依をじつと見据えた。

「……あたしは、楽しいデュエルがしたい。出来るようになりたい」俯いたままの表情は伺えなかったが、その声色にはどこか熱い鉄芯が一本通っているような、そんな頑丈な響きがある。

俺が、周りがどう言おうが。もう陽依の中で答えは決まっている筈だ。

「あたしだけじゃなくて皆が楽しくなれるような、そんなデュエルがしたい。本当の意味で『強く』なりたい。誰からも認められるように。お話に出てくる、伝説の決闘者達みたいに。だから——」

何かを考え込むようにして、しばらく俯いたままの陽依だったが——すつと顔を上げたときにはもう、向日葵のような明るい決意えがおが浮かんでいた。

「だからお願い、あたしと一緒に……『強く』なつて下さいっ!!」差し出されたのは、どこにでもいる女の子の華奢な右手。

この頼りない手に俺は道を示され、今度はその手が俺を必要としている。

ならば答えなど、とうに決まっていた。

「ああ。こちらこそ、よろしく頼む」

彼女の理想を握り返して、決意を真っ直ぐに受け止めると。

信号は、再び赤から青へと切り替わっていた。

「あたしは、墓地へ送られた《ギャラクシー・サイクロン》の効果を発

動、このカードをゲームから除外して《次元の裂け目》を破壊！」
「げえっ!？」

喜多村君の張っていた対「ライトロード」用の切り札……除外戦術の要は、何の役目も果たすことなく破壊されてしまった。

彼は何かを訴えるようにパートナーの俺を横目で見つめてきたが、残念ながら俺も抗う術は持っていない。

「更に手札から魔法カード《光の援軍》を発動！ デッキトップ3枚を墓地へ落とし、『ライトロード』1体を手札に加える。墓地に落ちたのはジェイン、《超電磁タートル》《ブレイクスルー・スキル》の3枚……そして手札に加えるのはモチロン、ルミナスっ！」

当然のように通常召喚されたルミナスは、その蘇生効果でできばきとフェリスが復活させる。

「いくよ、あたしは☆3のルミナスに、☆4のフェリスをチューニング!!」

光の射手、フェリスと召喚師ルミナスが同時に宙へと飛び上がる。

調律の緑輪は、見る見るうちに新たな魂を形作っていく。デュエルディスクを用いたデュエルはやはり演出が派手だ。

「古の守り手、伝説の彼方より再来せん……シンクロ召喚っ!! 《ライトロード・アーク ミカエル》!!」

《ライトロード・アーク ミカエル》

☆7 / 光属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 2600 / DEF 2000

降り立った黄金の竜騎士に、陽依の口上もどこか気合が入っていた。

普段の卓上デュエルではそうでもないのだが、ここまで演出が凝っているとは格好の一つも付けたくなるだろう。

「ミカエルの効果で、LPを1000払い伏せカードを除外!!」
「チェーン発動、《強制脱出装置》。手札に戻って貰おう」

狙われた残りの伏せカードを、仕方なく発動させる。

しかし、既に陽依の墓地には――。

「これで、墓地にはライトロードが4種類！ 手札から《裁きの龍》2

体を特殊召喚っ!!」

《裁きの龍（ジャツジメント・ドラグーン）》

☆8 / 光属性 / ドラゴン族・効果 / ATK 3000 / DEF 2600

翼を雄雄しく広げ、白き龍が咆哮する。

陽依の『勝利』をそのまま形にしたような2頭の龍は、その顎をそれぞれ俺達に向けた。

「これで詰 チエックメイト みだよ、『逆鱗のグロウ・ストリーム』!!」

攻撃力3000の光の奔流は、瞬く間に俺達に残されてたライフを削り取り……敗北のブザーを打ち鳴らした。

「ま……まじか!? タツグでも勝てねーの!?!」

「すまない、あまり良い動きが出来なかった……」

信じられんといった顔で頭を抱える喜多村君に、俺は申し訳なく頭を下げた。

実質2対1のバトルロイヤルデュエル。それでも陽依は勝って見せたのだ。そんな凄まじい光景を目の当たりにしながらも、周りの皆も俺にフォローを入れてくれる。

「いやいや、桐崎はむしろいつもより回ってただろ。前よりずっとデツキのバランスも良くなってるしな……流石にメタカード割られちゃ仕方ねえって」

詰まるところ、陽依は運という奴に恵まれている決闘者だった。

あの先輩達はきつと、陽依のこの力に嫌気が差してしまったのだろう。ここぞというときでカードをドロ―し、勝利への道を切り開く……陽依自身の技量も大したものだが、その能力が彼女をより高い頂へと引き上げているのは否定できない。

だが——それでこそ倒しがいがあるというものだ。デツキの力を120%引き出す相手をどう倒すか、それを考えるのが俺の『楽しみ』なのだから。

「ふっふっふ、強いデツキはメタを張られやすいからね! こっちはだって対策するカードは日々研究しているのだ!」

そう言つて得意げに胸を張る陽依に、妙な遠慮や気後れは無かつ

た。

俺と一緒に喜多村君達ともデュエルするようになった彼女だが、その人懐っこい性格は喜多村君達が事前に聞き知っていた『悪評』をもさらりと流し、今ではすっかり打ち解けてしまっている。

「くっ……このままやられっぱなしでたまるか!! もう一度だ珠城先輩、今度はプランBに変えて……!!」

「おうよっ、何度でも掛かってきなさいっ!!」

性懲りも無く、喜多村君がデツキを変えて陽依に挑んでいく。

陽依はここぞというときの運は強いとは言ったが、そこは所詮『運』だ。決して完璧でもなければ現実でもない。幾度かデュエルをしている中で、何度か陽依も調子を崩して負けることはある。

そういった意味ではこちらも完全に『運頼み』なのかもしれないが……その不確定要素の手綱をどれだけ握れるかというのも、決闘者を測る物差しなのだ。

そう。例えばどんなに強い決闘者であっても、無敗は決して有り得ない。

それこそ、物語の中で語られる『伝説』でもなければ、決して。

「? おい、何だアレ……」

ふと、仲間の一人が窓の外を指差した。

それはまるで心地良く晴れた青い空に、幾つもの『星々』が輝いているようにも見えた。

勝つ確立が高いだけなら。負ける確立が低いだけなら。

何度も何度も何度も、納得のいく結果が出るまで繰り返せばいい。

「……待てよ。何か、こっちに降って——」

只1つ、たった一度の勝利があればそれで十分だと。

その『星々』は、そう主張していたのだろうか。

その日。

夢に向かって歩き出そうとしていた俺達の道は、得体の知れない挑戦者によって崩された。

第54話 その日。

教室の窓を割って進入してきたソレは——昆虫じみた六脚をカタカタと動かしながら、白いドラム缶のような胴体を不気味に揺らした。

突然の出来事に困惑する俺達をよそに、人が思い浮かべる普遍的な『ロボット』というイメージをそのまま現実にしたようなソイツは、何か作業を行うにしている粗雑な両腕アームを勢い良く展開した。

両腕の展開と同時に放たれたのは、細いワイヤーのようなもので……ヒュンと空を切って打ち放たれたそれは、あろうことか喜多村君の腕に巻きついた。

「!? うわっ!?」

ここで初めて、教室中の人間が侵入者を『外敵』とみなした。

涌き上がる悲鳴と共に辺りを散らして逃げ出すクラスメート達の中で、仲間を捕らえられた俺達だけはその場を動く事が出来なかった。

「な、何だよコイツ……っ!?」

無理矢理にワイヤーを外そうと試みる喜多村君だったが、すぐさまロボットはワイヤー伝いに『何か』を発射し、彼の左腕へと取り付けた。見慣れたシルエットのソレは、決闘者の盾たる『デュエルディスク』。

「は……!?」

『——決闘申請、承認強制。闇のゲーム、展開完了』
ガリガリ、と音割れした機械音声が不快に響く。

驚き戸惑う喜多村君をよそに、取り付けられたディスクがひとりだけにデュエルモードへと起動した。

「な、何だよ……!? 何しようってんだよ!?」

『……デツキセット認証、待機中。タイムアウトまで30、29……』
何が何だか分からないまま呆然としている俺たちを尻目に、ロボットが唱えるカウンターはどんどんと数を減らしていく。

『25、24……』

「くそ、何だよコレ!? 外れねえよ!!」

ロボットは淡々とカウントを続けるだけで、他に危害を加える気配は無い。

ガチャガチャと腕に取り付けられたディスクを必死に外そうとする喜多村君だが、人の力で外せる代物ではないらしい。

彼を助けなければ。残されたメンバーがそう我に返ったのは、同じタイミングだった。

「まっ、待ってる!! 今何かワイヤーを切れるようなもん持ってくるから!!」

仲間の一人が、そう言って教室の外へと飛び出していく。

そんな彼に触発され弾かれたように、俺の隣に居た仲間も声を張り上げて叫んだ。

「手え貸せ桐崎、あのロボットをぶっ壊すぞ!」

「あ、ああ……!!」

「あ、あたしもやる!!」

残った3人で、近くにあった椅子やら机やらを持ち上げる。

標的は只1つ、騒ぎの元凶である白いロボットへと容赦なく振り下ろした。

「この、野郎ツ!!」

人間であればひとたまりもないだろうその攻撃は、ほぼ同時にロボットの脳天へと直撃した。だが——バゴン、と軽快な音は響いたものの、ロボットには何のダメージも見受けられない。

「……駄目か!」

「っ、このお!!」

何度も何度も。こっちの手が痛くなるまで机や椅子を投げつけてみたが、ビクともしない。そうしている間にも、カウントは不気味に刻まれ続けていく。

『10、9、8、7……』

「ディスクの方をブツ壊せないか!」

「いや、それじゃ喜多村君の体が……工具か何かが無いと——」

半ばヤケクソに喜多村君の腕からワイヤーを取り外そうと試みる

も、焼け石に水。

気ばかりが焦り、何も出来ない俺達を嘲笑うかのようにカウントは淡々と刻まれていき――。

『3、2、1、0』

結局俺達はどうすることも出来ず、カウント0を迎えてしまった。

『――タイムアウト確認。対戦拒否により敗者への罰ゲームサレンダーを執行します』

「え?」

耳障りな声でそう告げられた、次の瞬間には。

投げつけられた1枚のカードに、喜多村君の姿がみるみるうちに吸い込まれていくのだ。

「な……!?! た、助け――!!」

眩い光の中、喜多村君が必死の形相で伸ばした腕は近くに居た俺にすら届かず。

1人の人間としてそこにいた彼は、小さなカードの中へと姿を消してしまった。

「……な、何……?」

そんな間の抜けた声を発したのは誰だったのだろう。

事態を理解する暇も無く、今度は俺の隣に居た仲間に向かって、ワイヤーが巻きつけられた。

『決闘申請、承認強制。闇のゲームカー・アンティ、展開完了……』

「う、うわあああっ!?!」

まさに機械的に、次の標的を捉えたロボットがカウントを開始する。

間近に見せ付けられた『敗者』の末路に怯え、反乱狂になる仲間の肩を掴んで、俺は大声で叫んだ。

「ディスクにデッキをセットするんだ、早く!!」

「えっ!?!」

「デュエルを受けなければ強制的に『敗北』扱いにされるだけだ!! とにかく今は――!!」

俺の剣幕に押される形で、彼が震えながらも何とかディスクへデッ

キをセットすると——思った通り、ロボットが唱える妙なカウントは止まった。

『——デツキセットを確認、決闘^{デュエル}を開始します』

通常のデュエルと同じように、ディスクのランプが先攻を告げる。

「お、俺の先攻なのか……?」

安堵で一息ついたのも束の間。ドローフェイズの制限時間も通常のデュエルと同様にカウントを刻み始めていた。

先程のことを考えると、デュエルに対してペナルティが発生した場合『反則負け』として扱われる可能性が高い。だとすれば……。

「とにかく、なるべく時間を稼ぎながらデュエルを続けるしかない!!

反則負けは避けるんだ!!」

「わ、分かった……俺のターン、ドロー!!」

手札を見るに、彼の先攻は悪くない滑り出しだった。

一筋差した光明に、思わずぱっと顔が晴れる。

「俺は、モンスターをセット。カードを2枚伏せて、ターンエンドだ!」

遅延行為と判断されないよう、ギリギリまで引き伸ばしてターンを進行する。

時間を稼ぎたいとはいえ、もしもあのロボットが本当にデュエルモンスターのルールに従って動いているのなら——反則だと懸念される行為は極力避けなければならない。

『エンド確認。ドロー、スタンバイ、メイン』

こちらのそんな意図などお構いなしに、ロボットはスラスラとターンを進めていく。

流石は機械なだけはある、などと思考に余裕が出てきたところで……ソレは突然に告げられた。

『手札より魔法カード《ハーピィの羽箒》を発動』
「ッ!」

僅かに見えた希望が、空しく刈り取られる。

おおよそ考えうる限りで最悪のパターンだ。負けたらカードに閉じ込められる、何て馬鹿げたルールの下でこんな理不^{きせき}尽が許されてい

いのか？

デュエルにはどうしても運の要素が絡んでくる。それは仕方がないことだと、頭では理解していた筈なのに……仲間に身の危険が迫ったこの瞬間だけは、どんなに身勝手でもそんな考えを受け入れる訳にはいかなかった。

「そんな……!!」

『チェーン発動未確認、ターン続行。手札より永続魔法《黒い旋風》を発動。手札より条件を満たした為《BF―暁のシロッコ》を通常召喚。《黒い旋風》の効果によりデッキから《BF―黒槍のブラスト》を手札に加えます』

次々と名を連ねていくソレらは、決闘者なら『誰もが良く知る』カード達だった。

語り継がれる『伝説』の中では英雄と共に戦い、その強力な効果は多くの決闘者達の憧れでもあった——そんな誇りある『彼ら』は今、得体の知れない機械の下僕となって俺の仲間に群がろうとしている。

『条件を満たしたことで《BF―黒槍のブラスト》を特殊召喚。条件を満たしたことで《BF―疾風のゲイル》を特殊召喚。《BF―黒槍のブラスト》の効果を発動、攻撃力を5000まで上昇させます』

《BF―黒槍のブラスト》

ATK 1700↓5000

黒羽の鳥人が、カチリとその大きな槍を向ける。

鴉の被り物から覗く鋭い眼光は、獲物を前にした狩人そのものの。その瞳に、慈悲や甘さは微塵も感じられない。

「う、うわあああつ……!!」

必死でワイヤーを振りほどこうと暴れる友達を前に、俺達は何も出れなくて。

『——メイン1終了、効果発動、及び処理は未確認。バトルフェイズへ移行。《BF―黒槍のブラスト》で裏側守備表示モンスターに攻撃します』

彼が伏せていたのは、強力なりバースモンスター《シャドール・ドラゴン》。

しかし——よりもよってその守備力は0。攻撃力5000の貫通攻撃はそのままプレイヤーへと直撃する。

「うわ、あああああっ!?!」

無慈悲に、さも当たり前のように。

黒羽が雪のように舞い散る中、聞き慣れた敗北のブザーが高らかに鳴り響いた。

『プレイヤー敗北確認。罰ゲーム^アを執行します^{テイ}』

デュエル終了と同時に床に倒れこんだ仲間に向かって、容赦なくカードが投げつけられる。

彼も喜多村君と同じようにカードに吸い込まれ……ロボットに回収されてしまった。

「……っ!!」

そんな光景を横目に、俺は傍線と立ちすくんでいた陽依の手を引いて駆け出していた。

ワイヤーが寸前のところで左腕を掠めたが、そんなことはもう気にもならなかった。

「ま、待ってよユウ君!! まだ2人が捕まったままなんだよっ!!」

泣き出しそうな声でそう叫ぶ陽依。

彼女の気持ちは分かる。せつかく出来た友達を、仲間を見捨てていくのは俺だって辛かった。だが——あの得体の知れない機械を相手に、このまま2人も捕まってしまったては誰も2人を助け出すことが出来なくなってしまう。

「駄目だ、逃げるんだ!! 今は——」

とにかく今は逃げ延びて、出来るだけ多くの人にこのことを伝え無ければならないのだと。教室を飛び出し、そう言い掛けた俺の目に飛び込んできたのは——喜多村君達と同じようにワイヤーで無理矢理拘束され、ロボット達に望まぬデュエルを強いられている皆の姿だった。

「嘘……あのロボット、こんなに沢山!?!」

あの星のように見えた無数の光は、全部コイツらだったのか……? 気が付けば、いたるところで悲鳴が上がっていた。それは学校の中

だけに留まらず、窓の外を見れば遠くに見える街中からさえ黒煙が幾つも立ち上っている。

「ユウ君、後ろっ!!」

「っ!?!」

陽依の声から送れることコンマ数秒。背後から襲い掛かってきたワイヤーをすんでのところでかわし、俺は再び陽依の手を引いて走り出した。

絡め取られたクラスメート達を横目に、俺達は一心不乱に駆け抜ける。

どこか隠れる場所は、身を隠せる場所は——!?

いくつもの階段を降り続け、廊下中を走り抜け。ようやく昇降口へと辿り着いたところで俺達に突きつけられたのは、どうしようもない『現実』だった。

昇降口の向こう側は既に何体ものロボットが蟲のように蠢き、その場しのぎで作られた粗雑なバリケードは今にも突破されてしまいうだ。

そんな絶望的な光景の中、学校の内部側から迫る1台のロボットにじりじりと追いつめられていたのは——。

「ちよつと……来ないでよ!! あっち行け!!」

陽依を疎んでいたあの先輩達が、悲鳴に近い声を上げていた。

放たれるワイヤーを必死に避けているが、あのままでは時間の問題。いずれ外に居るロボット達もなだれ込み、逃げ場が無くなってしまうだろう。

(……あの様子では、もう……!!)

ここから外へ出るのは無理かと、反転して階段を駆け上がろうとした——そんな俺の手を振りほどき、何と陽依は『昇降口』へ向かって駆け出した。

「な……っ!?!」

何をするのかと思えば、陽依はそのままロボットへ向かってヒーローも顔負けな飛び蹴りを喰らわせて見せた。

机や椅子の直撃を受けてもピンピンしていたロボットだ。女子の

飛び蹴り程度でどうにかなるモノではなかったが、ロボットの注意は完全に陽依の方へと移ったらしい。

「ったた……大丈夫っ!? 早く逃げて!!」

不恰好に着地した陽依は、不敵な笑顔を浮かべてそう言った。

「珠、城……何で……?」

「こいつはあたしが相手するから、早くっ!!」

素早くディスクを装着し、鮮やかにデツキをセットしてロボットに向き合う陽依。

その姿は本当に、子供の頃に見たヒーローのようだった。

「……陽依っ!! 何を——!?!」

「あたしは大丈夫だから!! ユウ君も早く逃げて!!」

ひらひらと手を振る陽依は、いつもと同じ笑顔を浮かべていて。そんな彼女の様子に面食らっていたのは、俺だけではなかった。

「何でよ……ウチら、アンタのこと……」

「ほっとけないもん。友達だから」

戦う意思を見せた決闘者に、ロボットは容赦なくワイヤーを発射した。

陽依のディスクに接続されたソレが、強制的にデュエルモードへの移行を促す。

「え……?」

「デュエルをしたら皆友達。それがあたしの『憧れ』だから」

翼のように展開するディスクを構えながら、陽依は静かに声を張った。

『「決闘申請」、承認強制。闇カー・アン・テイのゲーム、展開完了……』

「……こんなときだけど、あのときは皆のデュエルを否定したりしてゴメンね。あたし、まだ皆と楽しめるようなデュエルは出来ないけれど——」

自分の命が賭けられた、こんな理不尽なデュエルであっても。

正々堂々と、いつも通りに。陽依はカードの剣を引き抜いた。

「こいつらをぶっ飛ばすくらいなら、朝飯前だから!!」

そんな頼もしい言葉に押されるように、先輩達は逃げ出していく。

ここで彼女の言葉を信じ、逃げ出していれば未来はまた違っていたのかもしれない。だがこのときの俺は、どうしても陽依を放っておくことが出来なくて。

どこから現れたのか、彼女の背後から迫るもう1台に向かって走り出していた。

「ユウ君、何やってんの!? 早く逃げ——」

「せめて背中くらいは任せてくれ。これでも俺はアンタの『教え子』なんだからな」

俺の構えたディスクにもワイヤーが絡みつく。

強制起動する俺のディスクを横目に見やると、陽依は呆れたように微笑んだ。

「……ほんつとうにバカだなあ。キミって人は」

「普段、頭のネジが抜けてる人に言われたくはないな」

「なにおうツ!？」

軽く冗談を交わして、背中合わせに互いの敵と向かい合う。

ここからはいつもと同じ、真剣勝負。勝つか負けるかを競う文字通りの決闘。

それは相手が誰であろうと、変わらない。

「さあ、楽しいデュエルを始めようっ!!」

バリケードが突破され、逃げ場を無くした俺達を待っていたのは有無も言わさぬ連続決闘だった。

デュエルモンスターズのルールに基づいてしか戦えないからだろうか、複数体を相手にするようなことは無かったが……それでも休む暇も無く次々と相手をさせられ、精神も肉体も磨り減っていく。

一体、どれだけの機械を物言わぬ残骸としただろうか。俺は1体1体を相手するのに時間が掛かるせいで、言うほど撃墜数は稼いでいないのだろうか……。

「……バトル、ミカエルでダイレクトアタック!!」

速攻で勝利を収めていく陽依は、次々とロボットを静めていく。敗北したロボットは黒煙を噴出し、沈黙するが……後続する機影は途切れる様子が無い。

額に汗を浮かべ、肩で息をするその様子を見ても、陽依にかなり疲労が溜まっているのは明白だ。

すぐ近くでデュエルをしているだけあって、その情報は自ずと耳に入ってくる。だからこそ……今彼女がどれだけ『滅茶苦茶な』デュエルをしているか、それが分かってしまう。

『こちらの先攻。ドロウ、スタンバイ、メイン。カードを3枚伏せてターンエンド』

「……あたしの、ターン！ ドロウ、まずは——」

『スタンバイフェイズ。伏せカードを発動、《マクロコスモス》。伏せカードを発動、《閃光を吸い込むマジック・ミラー》』

「っ……また、かあ。あはは、まいったな……」

何戦目くらいからだろうか。多少のバラツキはあったが、陽依の相手をするロボットはほぼ9割が『このスタート』なのだ。墓地へカードが溜まることを妨害する《マクロコスモス》に、場と墓地の光属性モンスターの効果を封じ続ける《閃光ミラー》……隠そうともしない「ライトロード」に対するメタカードの数々に、流石に疑わざるを得なかった。

こいつらは個体間でデータのやり取りをしていて、連勝を続ける相手に対しては露骨にメタカードを積み込んだデッキに変えて戦っているのだと。

その一方で、こちらはサイドデッキのカードを悠長に吟味して取り替えている暇なんて無い。1つ1つの勝負としてはシングル戦、つまりは一本勝負なのだ。陽依も早い段階で気が付いたのか、サイドデッキから少しずつカードを入れ替えて対応しているようだが……それでも完璧とは言えない。

「それなら……あたしは、手札から《ライトロード・アサシン ライデン》を通常召喚！ 更に手札から《カゲトカゲ》を特殊召喚っ！」

持ち前の引きの強さで何とかこれまで勝ち続けているようだが

……俺の目からしても、それがあまりに不安定で危なげな橋だということとは明白だった。

「エクシーズ召喚っ!!」 ★4 《恐牙狼ダイヤウルフ》!!」

奇跡は、そう何度も起こらない。

いかに陽依がカードの女神に寵愛を受けた決闘者だったとしても、100%でなければいずれ引いてしまうのだ。

敗北という、可能性を。

「ダイヤウルフの効果発動!! このカードを——」

「その効果にチェーン発動、《ブレイクスルー・スキル》。《恐牙狼ダイヤウルフ》の効果が無効にします」

どれだけ奇跡を起こし続けても、それと同じ分だけ『最悪』も起こり得る。

伝説の中の英雄たちが切り開いてきた『逆境』もきつと、何度も繰り返せばその可能性はあったはずなのだ。

本当にどうしようもない、どんな奇跡でも策略でもひっくり返らない。

そんな逃れることの出来ない『敗北』の運命が。

「っ、バトル!!」 ダイヤウルフでダイレクトアタック!!」

『手札から《バトルフェーダー》を発動。このカードを特殊召喚しバトルフェイズを終了します』

牙を、翼を、爪を。

全てをもちがれた龍に、最早成す術もなかった。

「……あたしはこれで、ターンエンド」

『こちらのターン。ドロ、スタンバイ、メイン。場の《バトルフェーダー》をリリースし《邪帝ガイウス》をアドバンス召喚。効果を発動、

《恐牙狼ダイヤウルフ》をゲームから除外します』

《邪帝ガイウス》

☆6 / 闇属性 / 悪魔族・効果 / ATK 2400 / DEF 100

0

黒衣を羽織った闇の帝王が、力なく佇む金剛の牙を漆黒の渦の中へと吹き飛ばす。

ガラ空きとなったフィールドに、陽依を守る下僕はいない。

『バトルフェイズ。《邪帝ガイウス》でプレイヤーにダイレクトアタック』

「陽依っ!？」

【陽依】LP4000→1600

邪帝の放った波動球の直撃を受け、膝を付く陽依。

自分のデュエルも放り投げて、俺は思わず彼女に駆け寄った。

「……駄目だよ……ユウ君は、自分のデュエルに専念して」

「だが——!!」

それでも首を振る俺に、陽依は力なく微笑みながら言った。

「こういうの、らしくないんだけどさ……あたし、多分ここまでみたい。このデュエルはちよつと勝てそうにないや……」

見れば彼女の手札には《ソーラー・エクステンジ》や《光の援軍》など、そのどれもが《マクロコスモス》の影響下で発動すら出来ない、壁にもならない魔法カードばかりが並んでいた。

ズキリ、と胸に深い絶望が突き刺さる。そんな現実を認めたくなくて、俺は声を荒げて叫んだ。

「……最後の最後まで、諦めないんじゃないのか!？」

それでも、こんな手札でも彼女ならきつと。

そんな俺の願いを受け取って、陽依はゆつくりと立ち上がるとデッキリに手を掛けた。

「そう、だね……諦めるのはまだ、早いかな……」

一縷の願いを託し、カードを引き抜く。

最後の1枚を見た陽依の表情は——どこか気の抜けた、不安すら覚える『安堵』の表情だった。

「……ゴメンね、引けなかった」

それはモンスターカードでもなければ、一発逆転の罠カードでもなく。

(何を、今更……!!)

あまりにも見慣れたそのカードは……速攻魔法《サイクロン》。

「あはは……ちよつと、遅かったなあ」

情けなく笑う、そんな陽依の小さな声すら遮るように、背後で俺の相手をしているロボットがカウントを始める。

『1ターンの制限時間、残り1分。58、57……』

「ユウ君、もう自分のデュエルに戻らなきゃ駄目だよ。相手が待ってる」

そう言うと、陽依はいつもと同じ笑顔を浮かべて続けた。

「……あたしのデッキ、今度こそユウ君にあげる」

「何を……!!」

こんなときに、と陽依の目を見返すと、少し自身が無さそうに微笑みながら答えた。

「もしかしたらね、1戦1戦デッキを入れ替えて戦ったらメタに引っかけからずに戦い続けられるかもしれないでしょ？ だからデッキが2個あれば……」

「……!!」

勝負に焦るばかりで、そんなことにすら頭が回らなかった自分がどうしようもなく情けない。

「ゴメンね、もつと早く気が付ければ2人でデッキを取替えっこして戦えたかもしれないのに……あたしバカだから……」

首を振る俺の頭に手を載せて、陽依は笑いかけて言った。

「このデッキでキミと戦うって約束、守れなくてゴメン。代わりに今度は……キミがこの子達と一緒に戦ってあげて？」

手札と墓地のカードを引き抜き、陽依はデッキを俺の手に握らせながら言った。

「大丈夫、ユウ君ならきつと……」

何かを言いかけたその言葉は、突然鳴り響いた警告音に掻き消される。

『エラー。デッキとのリンクが切断されました。対戦拒否とみなし敗者への罰ゲームを執行します』

投げつけられたカードの中に、俺が憧れたその人の面影が吸い込まれていく……その瞬間。陽依は確かに、助けを求めるように手を伸ばし、俺の名を呼んでいた。

「……………」

きつと、怖かったのだろう。

それはそうだ。彼女は決闘者である前に俺と同じ高校生で。歳相応に悩んで、笑う。そんな年端もいかない少女なのだから。

『10、9、8、7……』

「……少し、静かにしてくれないか。言われなくてもすぐに戻る」

「勝者には更なる過酷な追撃を。」

「敗者は規定数の保存、及び適宜な消去を。」

「……俺の、ターン」

俺——桐崎夕は、結局のところ後者になった。

自分の名を必死に叫んで手を伸ばした少女の身代わりになることすら叶わず、無様な敗北を喫した。

何が足りなかったのか。何故こんなにも自分は弱いのか。

いくら問い掛けても、その手に握り締めた白き龍は何も答えてはくれない。

膝を折り、無力に震える俺へ『罰ゲーム』の執行が宣言される。

意識は暗く、深い闇の底へと沈んでいく。

彼女も今、こんな冷たい孤独に包まれているのだろうか。

そうと思うと居た堪れなく、何より悔しかった。

その日。

俺が過ごしていたどこかの『世界』から、多くの決闘者が連れ去られた。

第55話 英雄への賛歌

第55話 英雄への賛歌

それからのことは、断片的な記憶しかない。

見知らぬ景色。見知らぬ空気。

住み慣れた土地とは違う、乾ききった砂埃の匂い。

どうやって俺のカードの戒めを解いたのかは分からないが、気が付けば俺は商人風の男に文字通り自由を奪われていた。

それでも、混濁とした意識の中で、俺は男が見せてきた『陽依のカード』だけははっきりと認識していたように思う。

それを渡して欲しいと頼んだ俺を見下す、その男の下卑た目は今でもよく覚えている。

「ゴイツが欲しけりや、俺の言う通り『働いて』貰おうか」

それから。俺はただひたすらにデュエルをさせられた。

言われるがまま、誰とも分からない誰かと。

俺が下した敗者がどんな結末を迎えるのかすら分からないまま。

男の手から陽依のカードを奪い、ここから逃げようという考えに至ったのは、そんな日々がしばらく続いた後だ。

その辺りからは記憶もはつきりしていて、俺はまだ『ぼんやりとした様子』を装いながらも男の隙を伺って脱走の計画を立てた。

男について分かったことは3つ。男が自分のことを『決闘奴隷』と呼んでいたこと。男は定期的に住処を変え、何かから逃げているようであること。

そして、俺を使ってデュエルを行い金を儲けていたことだ。

俺は、男が慌てて住処を移動するその隙を狙って逃走を図ることにした。

その日は未開拓の橙ネイティブ・グランの荒野では珍しい、スコールも砂嵐も無い静かな夜。俺が囚われていた男の住処は、何者かの襲撃を受けた。幸か不幸か、俺が脱走を決めたその日は商人風の男にとっても運命の分かれ目だったらしい。

響き渡る怒声に得体の知れない獣の声。その混乱に乗じて俺は何

とか逃げ出せたが、辛うじて持ち出せた男のDパッドに陽依のカードは無かった。

「……その後、男がどうなったのかは俺が知る由も無いが。データの中に入っていたカードの写真を頼りにネイティブの荒野を歩いたこれまでの道のりの中では、少なくとも奴の顔や名前を聞くことは無かったな」

ユウの話が終わる頃には、車は既に検問を抜けて開拓プラントの中を走っていた。

僅かに人工太陽の明かりが灯され、海底都市が『夜明け』へと近づく中。ユウは一息つくくとユーギの方へと視線を向けた。

「俺は、直接陽依^{アイツ}に会って話を聞かなければならない。一体何があったのか。何故、嫌っていた筈の『相手を傷つける』ようなデュエルをしたのかを」

包み隠さぬユウの独白に、ユーギはやや呆れたように溜め息をついて返した。

「……つまり貴方と彼女の間には、僕が杞憂していた通りの事情があった、という訳ですね？」

後始末に追われるビジネススマンのソレと同じ面倒臭そうな横顔を見せるユーギに、ユウも毅然として言葉を返す。

「……曲がりなりにも俺は『決闘者』だ。戦うからには全力を尽くす『言葉ではどうとでも言えますよ。いざその場になって』やっぱり無理でした』なんて、よく聞く話でしょう？」

「……今のアイツに『言葉』は届かない。声を聞くなり、声をぶつけ合うなら手段はどの道『コレ』しかない。それに……」

ユウはDパッドにセットされた自分のデッキに手を添えて、僅かに口元を緩めて言った。

「……どこかで、アイツと戦えることを楽しみにしている自分がいる。この答えでは、お前の望みに届かないか？」

そう言って再びユーギへと向けられたその瞳は、薄暗い闇の中でも爛々と燃えて見えた。

変わってしまった想い人を前にしても、決闘者としての本能が全てをぶつけ合うことを望ませている。

そんな瞳を見たユーギは、またも呆れたように溜め息を付いたが――今度はどこか満足そうに微笑して頷いた。

「成程、よく分かりました。とりあえず今は、貴方の決闘者としての血を信じましょう」

そう言っただけで差し伸べられた右手を、ユウは一向に握り返そうとしない。

「――おや、やはりご不満でしたか？　自分が信用されてなかった、というのはい」

「そんなことはどうでも良い。こっちが聞きたいのは、お前がどこまで、何を知っているのかだ」

今度はこちらの番だと鋭い目を向けるユウに、ユーギは困ったように手を上げる。

「……何度も言いますが、僕はただのビジネスマン兼コレクターですよ？　若い身分で色々持てはやされてますから、色々とあらぬ疑いを掛けられるのは慣れていますが……僕だって会社から指示を受けて動いているだけの一社員、それ以上でもそれ以下でもありません」

彼の口から飛び出るのは、いつも通り知らぬ、存ぜぬの一点張り。表情こそ柔和に笑ってはいるが、彼の言う『若い身分』にしてはとうにも違和感のある作り物の笑顔だ。歳を重ねた大人のするようなそれが、どうにも胡散臭い。

とつくにディスクを下げていたが、隣に座る双子の片割れもどこか不気味だ。近くにいるにも関わらず呼吸すら感じさせない。

何を隠しているのか、何をしたいのか。ユウは言い知れぬ嫌悪感に眉を寄せた。

「詳しい事が聞きたいなら、是非我が社に乗り込んで上の方に文句を――っと、噂をすれば。どうやら、あちらから『お迎え』が来たようですよ？」

虫の羽音のような音しか立てていなかった車が、緩やかに停車す

る。

座席越しに覗いたフロントガラスから見たのは、黒いライダースーツを来たD・ホイールの集団だった。

「……………」

眼光の代わりとばかりに、幾つものヘッドライトが一斉に向けられる。そんな逆光の中で、一礼する大柄な男の影が浮かび上がった。

ユウはその男の姿を確認すると、無言で車のドアを開け放った。

「ああ、ちよつと？ 待ってくだ——」

ユーギの制止も聞かず、ユウは一目散にその男へと歩み寄っていく。

やれやれといった風息をつきながら、ユーギもドアを開けて車から降りる。双子の片割れもそんな彼に付き従うように半歩後ろに続いた。

「……………」

ユウはディスクを構えたまま堂々とした足取りで男の前に立ったが、周囲にエンジンを蒸かしている数台のD・ホイラー達は戦う姿勢すら見せない。

訝しげに思ったユウが男に声を掛けるのと、礼の姿勢のまま動かなかった男が顔を上げるのはほぼ同時だった。

「……………アンタは、確かシガマの大会に参加していたな」

「……………慶^{ケイシヤク}爍、と申す。以後はお見知り置きを」

男の言葉は妙に丁寧であったが、それは単に『マナー』としてそうしているだけに過ぎず、その表情は岩壁のように険しい。ユウを『敵』と捉えていることは明白だ。

一方のユウも態度を変えることなく、いつもの調子で淡々と告げる。

「……………そっちの方から出迎えてくれるとはな。探す手間が省けた」

純白のDパッドが、デュエルモードへと展開する。

低く唸るエンジン音すらものともせず、それは鋭い『鏗鳴り』を響かせた。

「……………話も聞かずに刃を抜くか。巫女^{シスター}とは何やら縁があるようだが

……随分と急いていると見えるな」

そんなユウの逆立つような気配に、慶燦は僅かに目を細めて応える。

「それはごつちの台詞だ。それだけの大所帯をけしかけて来たんだ、アンタの上に居る爺も余裕が無いんじゃないか？」

「……そうだな、貴様の言う通りかもしれない」

ユウが皮肉を返すと、意外にも慶燦は神妙な面持ちで頷いて見せた。

「四方老様方も、『幻魔』の力に魅入られ気を急いでおられるのかもしれない」

その名前を聞いた瞬間。

ぴくり、とユウの眉が跳ね上がった。

「……幻魔、だど？」

伝説に語られるソレについて思い出したユウは、すぐに燐路の語っていた彼らの『計画』に思い当たった。

デュエルモンスターズの消滅……確かにユウの知る『伝説』通りであるならば、そんな馬鹿げた話も可能かもしれない。

だとすれば。歴史を変える力、というのはまさか——？

「……成程な。それがアンタ達の『狙い』か」

ユウの無表情に僅かな陰りが差すと、それを嘲笑うように男の口元が僅かに歪んだ。

「幻魔の名を聞いただけでそこまで察した、か……やはり貴様は『決闘奴隷』であったか」

確信する。この男は『知っている』と。

追い求めていた真相、ようやくその尻尾を掴んだ——無表情の仮面の下から、逃すまいと絡みつくような白い炎しゅうねんが漏れ出す。

「答えろ。アンタはどこまで知っている？」

今にも爆発しかねないようなユウの気迫に怖気づくことなく、慶燦は軽く両手を広げて言った。

「その言葉を、待っていた」

「……何？」

「こちらは貴様の持つ『十二支柱』を必要とし、貴様はこちらの知る情報を欲している……ならば、ここは『取引』をしようじゃないか。こちらの要求に従うならば、貴様の欲する全てを可能な限り提供しよう。悪い話では無い筈だが」

慶爍はあくまで刃を交えるつもりは無いとばかりに、腰の後ろに手を回して語り始めた。

「……要求、か。《アスタリスクス》を寄越せと？」

「まあ、それがこちらの理想ではあるが……」

ユウの言葉に一度は目を伏せた慶爍だったが、その表情はすぐさま慈愛に溢れた微笑へと変わった。

「四方老様方はこう仰られた。無闇に刃を交えることはない、彼の者も我らの同志に迎えばよい——と」

慶爍の『交渉』に、ユウも思わず面食らった。

「何を——」

「我等の下に来れば、自ずと貴様の求める『答え』も見つかるだろう。巫女とも刃を交えることなく、好きなだけ積もる話でも何でも、語り明かすといい」

確かに。彼らの下に行けば陽依が変わってしまった理由を、その目で確かめる事が出来るかもしれない。

あの日、カードに閉じ込められた友人達の行方を掴むことだって出来るかもしれない。

だが——その『答え』と引き換えに、失われるモノは。

アスタリスクスが白面達の手に渡り、この世界からデュエルモンスターズが消滅して。そして歴史すら書き換えられてしまったら……デュエルによって収束した筈の戦火が、再び災厄の渦を巻くだろう。そうなれば、これまで自分が出会ってきた人々は。

強くなつて自分の道を切り開くんだと、真っ直ぐな目を向けたあの少女^ルは、一体どうなる？

「無論、それなりの待遇を用意しよう。それに我らが必要としているのは十二支柱だけでは無い……貴様自身の『力』も必要としているのだ」

慶爍は尚も、『取引』について得意げに語りかけてくる。

是か否かなど、最早考えるまでもない。

ユウは軽く鼻を鳴らして答えた。

「力、か……死んだアンタの部下が言っていたな、『元より我らに未来など無い』と」

再び、無表情ボーカフフェイスに白炎が灯る。

「そんな連中の下につくなど、最初から願ひ下げだ」

構えた左腕には、受け継がれし決闘者の『魂』が既に装填されていた。それはどんな言葉よりも明確に『拒絶』の意思を示していた。

「……御託はもういい。相手は誰からだ？」

しん、と静寂が打ち響く中。

パチパチと手を打ったのは、それまで静かに傍観していたユーギだった。

「交渉決裂……のようですね？ 無様なモノです。他人ヒトの契約者を横から掠め取ろうとするからこうなる」

「……………」

ユーギの野次に、慶爍は無言で睨み返していたが……最早話し合いの余地は無いと自身もディスクを抜き放った。それと同時に、幾つものD・ホイール達が一斉にデュエルモードを起動していく。

「……貴様も愚かな選択をしたものだ。この数に勝機があるとでも？」

低く唸る慶爍の憎悪を合図に、複数のホイーラー達から打ち出された『紅い鎖』が蜘蛛の糸のようにユウへと向かっていく。しかしそれは、ユウの前に飛び出した人物によって一身に受け止められた。

「……何？」

丈の長い、白いコートがふわりと翻る。

ブロンドの髪を掻き揚げながら、ユーギムトウはにこやかにユウへ微笑みかけた。

「取り巻き共の相手は僕が務めます。貴方は心置きなく彼と戦って下さい」

自分がその状況に置かれる『つもり』だったことなど棚に上げて、ユ

ウは彼の正気を疑った。

対戦形式は恐らく、多対一が可能になるバトルロワイヤルモード。慶燦の言う通り、この人数差ではまず勝ち目は無いだろう。

それに、恐らく相手のデッキはこうした事態を見越してバーン系のデッキで統一されているだろう。数刻前の決闘から既にバーン対策のカードをデッキに仕込んでいたユウとは違い、ユーギのデッキにはそんな僅かな『可能性』すら無いのだ。

そんなユウの心中を察したかのように、ユーギは不敵にディスクを構えながら言った。

「大丈夫ですよ、僕は負けません。何故なら……」

それがさも当然のことのように、ユーギは言い切った。

絶対の自信や、根拠の無い慢心とは違う。そう、例えるなら——。「猿が木から落ちることはあっても、林檎が木に上ることは無いでしょう？」『法則』しほうりよくというモノが崩れなければ……ね」

日々せわしなく開発、研究が進むアトランタの開拓プラント。

ある程度の調査が進み発掘作業も完了した区画は、十数人の研究員達がデータ測定の為に残っている程度で、警備もそこそこに人影もまばらだ。

かつては多くの人々が集まる『競技場』のようなモノだったと考えられている、とある一区画もその例に漏れない。薄青の闇に包まれた海底の明け方、僅かに明かりが漏れる仮設テントの中では研究者達が数字の羅列と格闘していた。

開発区画であるため、周囲には民家すら見当たらない。近くの道路もその大きな道幅に見合わず、時折どこか別の区画へと向かう重機や物資を積んだトラックが走り抜けていくだけだ。

そんな寂れた静寂の中にあつた研究者達の『仕事場』は、突如として占領された。

プラントへ入る為には検問を通らなければならないという伸び

きつた『安心感』と、まさか自分達がという慢心がまとめ一突きにされたような、そんな一瞬の出来事だった。

警備として出入り口で配置にしていたセキュリティ隊員の2人は、異常を連絡をする間も無く『紅い鎖』によってDパットのコントロールを奪われ、呆気なく敗北を喫し。テントの中で作業を行っていた研究者達も、乗り込んできた狐面の男達によって身柄を拘束されてしまった。

それまで順調に作業が進められてた研究機材は好き勝手にいじり回され、どこからか持ち込まれた得体の知れない機械に次々と繋がれていく。研究者達は皆、そんな様子を歯痒そうに見つめていた。

「セキュリティ共の警護がまさかあれだけ、とは……青の連中は『この場所』の有り難味を分かつたらんかったようだよ。こんなにも事が上手く運ぶとは思わなんだ」

占領したテントの奥で、朝になって出勤してくる研究者のリストをライダースーツから白衣に変装した『同志』に手渡しながら、白髭の老人達はくつくつと嗤った。

四方老と呼ばれる彼らは、それぞれ特徴的な輪郭の顔を頷かせるが……そんな中で角ばった輪郭の老人は声を洪らせる。

「……だが、十二支柱の回収は中々に捗らんようだよ。この地にあつた2枚も、回収には少し機会を見なけりやならんようだよ……」

「十二支柱の回収は後回しでもよからうて。既に『幻魔』の札は我等の手中にある。12枚が揃わずとも、こうして破滅の舞台は整った訳だし……そもそも、十二支柱を全て回収しろというのは——」

細長い輪郭の老人が何かを言いかけた直後。彼らが手にしていた『幻魔』のカードがそれぞれぼんやりと光を放ち始めた。

赤、黄、青。

鮮やかな色彩を放つそれらはどこか禍々しく——そんな光を受けて輝く老人達の濁った瞳は、混沌と渦を巻いているように見えた。

「……見ろ。十二支柱が揃わずとも、この通りしつかりと息づいておる」

「やはり何処の伝承とも知れぬカードなどより、我等の地で古来より

伝わる『呪い』の方が破滅を呼び込む一滴としては優秀だったようだの……」

そんな会話がひっそりと交わされていたテントの外で、小さなドーム程はあるだろう円形に窪んだ遺跡の跡を、鼻歌を歌いながら少女が一人、無邪気に歩く。

「♪」

かつては栗色だった髪は銀色に輝き、どこか鎖のようにも見える長く大きな二束の三つ編みがサラサラと揺れる。そんな少女の手元では、陽気な鼻歌に合わせて白い狐面がくるくると回っていた。

前をはだけた独特な形状の赤いコートは、人工的に送り込まれる換気風を受け花弁のようにヒラヒラと舞い、間から覗くピツタリと張り付いた黒のインナーは豊かなボディラインを浮き立たせる。

程よく肉付きの良い脚はコツコツと編み上げのブーツを鳴らし、ガラスを鳴らしたような澄んだ鼻歌に合いの手を入れて——そのどこか子供っぽい彼女の姿は、ユウの記憶にあるものとそう大差はない筈だった。

生死を賭けたデュエルの中で、力尽きた相手に向かって攻撃を加える。

そんな歪んだ姿さえ、無かったら。

「♪」

気分良く口ずさんでいるのは、かつて彼女自身が憧れ、夢見た赤き英雄への賛歌。その英雄が打ち倒してきた『悪』の姿に、今の彼女が近しいというのはあまりにも皮肉だった。

遺跡のあちこちで準備が進められていく中、彼女は待ち望む。

いくら注いでも満たされない、そんな自分を『楽しませてくれる』デュエルを。

「早く、次のデュエルがしたいなあ……♪」

そう。彼女の背後に打ち捨てられた、自分に歯向かった敗北者デイスクを付けた研究員達のことなど——ヒヨリにとってはもう何の価値も無く、文字通りの肉塊でしかなかった。

第56話 忌むべき力

「ひい、ふう、みい……8人ですか。成程、これなら先攻のデメリットを抱えたままでも十分ライフを削り取れる。1人500ダメージがノルマ……といったところですか」

笑顔を浮かべたまま、ユーギムトウは淡々と戦況を分析した。

審判員機構が介入していないこの『闇のゲーム』においては、先攻と後攻の決定はおろかライフの増減やターンが回る順番も何ひとつ調整されない。そのような状況下で、漆黒のD・ホイラー達が操る『ヴォルカニック』は理不尽なまでにその恩恵を受けられると言えた。手札からバーンダメージを無効に出来るカードは少ない。だからせめて、ダメージを軽減するカードを出す為に『1周目ラストターン』以外のターンが割り当てられることが最低条件とも言える。だが、ディスクが出した決定は――。

「……おっと、僕はラストターンですか。この状況ではあまり嬉しくないメリットです」

あろうことか、ユーギが引き当てたのはそのラストターンだった。

苦笑するユーギを一瞥し、D・ホイラーの1人がつまらなそうに鼻を鳴らす。

「ふん、決闘王サマも運に見放されたようだな……俺の先攻！ 『ヴォルカニック・エッジ』を攻撃表示で召喚！ 効果で500のダメージをユーギムトウに与える！」

【ユーギ】 LP4000↓3500

火球の礫がユーギの眼前で爆裂し、ブロンド髪を激しく揺らす。

ダメージが実体となる『闇のゲーム』故に、異様な熱気と焦げた臭いが周囲に撒き散らされる。

「続いて俺のターンだ、俺も『ヴォルカニック・エッジ』を攻撃表示で召喚し、その効果で500のダメージをユーギムトウに与える！」
「俺のターン！ 『ヴォルカニック・エッジ』を攻撃表示で召喚、効果を発動！」

息を付く暇も無く、D・ホイラー達にターンが回る度、フィール

ドに刃の炎獣が召喚され、ユーギに向かって火球を吐き出していく。

【ユーギ】 LP3500↓3000↓2500

《ヴォルカニック・エッジ》召喚！

「効果を発動！」

【ユーギ】 LP2500↓2000

ユーギが何の抵抗も出来ないことを嘲笑うかのように、伏せカードすら無いままに彼らはただ『ノルマ』をこなしていく。

事実、そのフルフェイスの奥では嘲笑っていたのだろう。ユーギがラストターンに配置されてしまった時点で、このデュエルはワンサイド・ゲーム……敗北の可能性など無いに等しい。

立て続けに浴びせかけられる火球。そんな数の暴力とも呼べる圧倒的な熱量の前に、遂にユーギのLPはデッドラインを切ってしまった。

【ユーギ】 LP1000↓500

焦げ付いたコートの袖で顔を庇う決闘王の姿が、ゆらりと火の粉が舞う黒煙の中に浮かび上がる。その弱々しい姿に勝利を確信した最後のD・ホイラーが、カードをディスクへと叩き付けた。

「俺のターン……これで終わりだ！ 《ヴォルカニック・エッジ》召喚し効果を発動！ 恨むなら自分の不運を恨みな！」

大会で名を残した決闘者とはいえ、所詮はこの程度……そんな台詞が口について出そうになった、刹那。

「そのお言葉、そのままそっくりお返ししましょう」

放たれた最後の一撃は、ユーギの前に現れたちっぽけな『影』によって阻まれた。

火球は『影』に直撃し——その『影』のモノであろう、白い羽毛を粉雪のように散らせた。

「何っ——!?!」

「僕は、手札から《ハネワタ》の効果を発動していました。このカードを手札から捨て、このターンに僕が受ける効果ダメージを0にする。

とても『偉い』子でしょう?」

くすり、とユーギが微笑を浮かべた。

手札からバーンダメージを無効に出来るカードは少ない——少ないが、無い訳ではない。

「このカードが『運良く』手札に無ければ危ないところでした……まあ、貴方達にとってはそれが『最悪』なのでしようが」
「くっ——!?!」

彼らの不運は、ユーギが数少ないバーン対策カードを手札に引き込んでいたこと。

そして彼らの怠慢は、そんな僅かな可能性を捨て伏せカードすら『必要なし』と判断してしまったことだ。

今更それに気が付いたところでもう遅い。ハネワタの効果が効いているこのターンではいくら追加のバーンを打とうともユーギのライフを削り取るまでには至らない。

だが、とフルフェイスのD・ホイーラーは考える。

例えこのターンで仕留める事は出来なくとも、その次のターン、またその次のターンで幾らでも《ヴォルカニック・エッジ》で刈り取る事が出来る……と。

「……ふん。俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

苛立つ気持ちを抑え、男は《ブレイズ・キャノン・マガジン》のカードを場にセットした。せめて手札に《ヴォルカニック・バツクシヨット》があればすぐに仕留める事が出来たのにと舌を鳴らしながら。

その『違和感』を、不思議に思うことすらなく。

「それでは、僕のターンですね。ここからは攻撃可能な『後攻』のターンですので、ドローを」

所々に付いた煤を払いながら、ユーギはにこやかにカードを引き抜いた。

「僕は手札から魔法カード《強欲で謙虚な壺》を発動、デッキからカードを3枚引いて公開し、その内の1枚を手札に加えます」

そう言って公開されたユーギのカードは、《ブラック・マジシャン》《融合》《無謀な欲張り》の3枚。

「はっ、何を引いたかと思えば……！」

D・ホイラー達は拍子抜けした様子でその3枚を眺めていた。発動ターン中に特殊召喚が封じられる《強謙》を発動した時点で《融合》は論外。ましてリリースを必要とするブラック・マジシャンなどもつてのほか。

残る可能性はといえば、精々が《無謀な欲張り》のドローに託してバーン対策が出来るカードを引く程度……初手に《ハネワタ》を引き込んだその運は確かに驚愕だが、そんな奇跡がこれから残る8ターン中に何度も起きる訳が無い。生き残れる筈が無い。

「僕が選ぶのは《無謀な欲張り》。カードを1枚セットして、ターンエンドです」

決闘王などと称される男は、結局フルフェイス達の予想から外れない行動を取った。

どのみち無意味になるとはいえ、壁モンスターすら召喚せずに。

「拍子抜けだな、大会優勝者といえどその程度か！」

そんな醜態に、8人目の男が先程言い逃した台詞をここぞとばかりに言い捨てる。

彼に続き、他の男達も失笑を漏らした。

「大見得切って俺達を相手にしてこのザマか。せめてその伏せカードで俺のターン位は凌いでくれよ？」

1人目の男がデッキに手を掛けながら、ゆっくりとフェイスを移行させていく。

スタンバイフェイズ。当然だがここでユーギが伏せカードを立ち上げた。

「では、お言葉に甘えて。このスタンバイフェイズに《無謀な欲張り》を発動、自分のドローフェイズを2回スキップする代わりに、デッキからカードを2枚ドローします」

「何を引こうが終わりだ！ メインフェイズ、俺は——」

そう言っつて、男は違和感を覚えた。

カードの処理が終わったにも関わらず、ディスクに表示されたフェイスが移行しない。

「な、何が——?」

「申し訳ありません、このデュエルはもう御終いです」

すつと一礼するユーギの振る舞いに、フルフェイス達は一瞬だけ『サレンダー』という言葉を思い浮かべ——その認識が過ちであったことを、思い知った。

反時計回りに連鎖する鎖のエフェクト。

浮かび上がる五芒星。

そして闇の中から突き出される、黄金の四肢——。

「なっ……!?!」

「言っただでしょうか? 『法則』が崩れなければ、僕が負けることは無い」と

につこりと微笑んだユーギの手札の中には……今まさにフィールドに出現しようとしている金色の巨人の『パーツ』が揃っていた。

5枚に分かれたそのカードがもたらすものは、たった1つ。

「僕の、勝ちです」

ずるりと金色の巨人がその全貌を露にする。上半身は大きく膨れ上がっており、歯を剥き出しにしたその表情は怒りの感情を露にしていた。

「何を馬鹿、な——っ!?!」

巨人に威圧された男達のディスクに表示されていたのは、『特殊勝利条件達成』の文字。

彼らの知る限り、手札に特定のカードを揃える事で条件を達成できる特殊勝利のカードなど存在し得ない筈だった。だが目の前の巨人がその両掌に込める力の渦は、自分達を敗北^死へと誘うに相応しい——それは自分達が、デュエルのダメージを实体化する『力』を備えているが故なのか。

『怒りの業火……エクゾード・フレイム』

決闘王、その1人を『勝者』とする為に。

巨人の放った炎は、その他を『敗者』として全てなぎ払った。

フルフェイスの男達がユーギへと浴びせかけた、その何百倍もの熱量が男達を襲う。

悲鳴すらも飲み込み、押し流し。残された8本の紅い鎖だけが尾を引くように消滅した。

「……さて」

ディスクを納めながら、ユーギはふうと息をつく。

あまりに衝撃的な光景から我に返ったユウがふと見渡すと、あまりの『力』に男達が乗っていたD・ホイールも只の鉄屑となつて、軒並み黒煙を上げながら横たわっていた。

「こちらは片付きましたよ？ 後はどうぞ、存分に語り合ってください」
そう言つてユーギは掌を差し伸べながら、ユウに席を譲るように後退していく。

「……お前は」

「はい？」

例え、それが只の『レアカード』であるとしても。

あの状況、あのタイミングで伝説^{エクソデイク}を再現することなど——果たして可能なのだろうか？

決闘者であるなら誰もが一度耳にするその『名前』を持つ男は、訝しげに睨む視線を一身に受けても尚、小首を傾げて微笑んでいる。

「……いや。今はいい」

例え今ここで問い詰めたとしても、また煙に巻かれて終わりだ。

聞きたいことは山ほどある。だが今は目の前の『敵』に集中しよう。

拭えぬ不信感を振り払うように、ユウはディスクを構え直した。

「これで数の上での差は無くなった。後は俺とアンタで決着を付けるだけだ」

見開かれた慶爍の視線は、ユウよりもユーギへと向けられていたが……それでも僅かな動揺を覗かせるのみで留まり、短く息をつく。

「……決着、か。例え私が貴様を下したとして、その男が控えているこの状況で最早その意味は無かろう」

そう言つて、慶爍はユウに向かって自分のディスクを放った。

カランカランと音を立てて地面を転がるディスクはユウの足元で止まった。

ディスクには既にデッキがセットされており、決闘者にとっての剣

を手放したそれは紛れも無い『降参』を意味していた。

「投了だ。私の知る限りであれば何でも話そう。だが貴様が一番知りたい巫女シスターの件については……四方老様か本人にでも直接尋ねることだな。そこまでの道案内なら喜んで引き受けよう」

「……そうして、自分だけ助かるつもりか？」

「元より、私の使命は貴様を四方老様の元へ連れて行くことだ。いくら私が醜態を晒そうが、その任を果たせれば問題は無い」
「……………」

静かな怒りの炎を燻らせるように、尚もディスクを構えた腕を下げないユウ。

そんな彼の肩を軽く叩いて、ユーギは『小さな従者』へとすぐに指示を出した。

「……ジエイ、彼を拘束して。お言葉に甘えて、彼には僕らのナビゲーターになって貰おう」

双子の片割れ——ジエイがこくりと頷いて拘束具を慶燦の両腕に掛けた。セキュリティでも採用されているような品物を幼い子供が何の気なしに取り出したことにユウは目を丸めたが。

その妙に手慣れた扱いを見て納得すると同時に、ユーギという男に、ひいてはKCという企業についてより不信感を募らせることとなった。

「……元より、我らの世界にデュエルモンスターズなど存在してはならなかったのだ」

慶燦が告げた目的地へと向かう車内で、問い詰められるまでもなく慶燦はぽつりと語り始めた。

訝しげに眉を寄せながらも、ユウは慶燦の独白に耳を傾ける。

「たかがゲームで全てが決する。こんな馬鹿げた世界に作り変えたのは文明ユートピア・レイの白の連中だ。『血の流れぬ戦』だと尤もらしい事を言っておきながら、奴らは自分達の有利に傾くようデュエルを普及させ利用し

たのだ……貴様ら『決闘奴隷』はその為の駒に過ぎぬ」

「それはそれは……」大層な『言いがかり』ですね。僕ら白の発展にユートピア
貴方達の勝手な憶測を結び付けなくて頂きたい」

嘲笑混じりに横槍を入れたユーギには一瞥を向けたのみで、慶燦は続ける。

「デュエルの世界を知り、どういう経緯でデュエルに目を付けたのかは知らぬが……決闘奴隷をこの世界に連れ込み、利用してデュエルを普及させたのは奴らだ」ユートピア

「……そう断言できるからには、何か確証があるのか？」

ユウの問い掛けに、慶燦はさも当然のように頷いて答えた。

「白の手先となった決闘奴隷共が、当時各地で政府や大企業の重役として名を連ねていたことは調べが付いている。それを信じるかどうかは貴様次第だが」

そう呟くと、慶燦はユウが持っている自身のDパッドを操作するよう、ちらりと目を動かした。言われた通りに操作をしていくと、何やら顔写真の付いたチェックリストのようなものが現れた。

「……これは？」

「我らが標的ターゲットとしていた決闘奴隷とその子孫共だ。経歴不詳に加え、不自然な大出世……そしてデュエルモンスターズ普及後はデュエルによってさらに功績を上げている。貴様自身が良く分かっているだろうが、決闘奴隷がカードへの封印が解かれた時期にはバラつきがある。それこそ数百年の昔から、現在に至るまでな」

「……………」

逃走用にセキュリティの捜査状況を確認する為だろうか、リストと共に真新しい事件の記事が資料として添付されている。

立場の高い人物が多いからだろう。大々的に報道されているものは少なかったが、ユウ自身もいくつか見覚えのある『決闘者失踪事件』の被害者とリストの人物達は一致していた。

「数百年もの前、デュエルモンスターズが戦の代替として各国に受け入れられたのも。急速に世へと広まり世界の『常識』と化したのも……全ては文明の白が世界の全てを掌握する為の布石だった、という

訳だ」

「……………」

ふう、とユーギが呆れたように溜め息をつく。

白の地に住む人間としては、貧しい土地に住む人間からの単なる妬みや僻みにしか聞こえないのだろう。

しかし当事者であるユウには、話半分で聞くことは出来ても決して「馬鹿馬鹿しい」と笑い飛ばす事は出来なかった。

「奴らはデュエルを戦に代わる『武』として置き換えたことで、より存在を大きくした。その全てが白の連中に協調しているのだ……白が世界中の覇権を握るのは必然であろう」

「……俺たちとこの世界の人達に、そこまで力の差があるとは思えない。まして世界を左右するほどの力など——」

そう否定しかけたユウの言葉を、慶燦は低く唸るように遮った。

「力が無い、と？ 貴様ら決闘奴隷には、元々この世界で生きる者には決して備わる筈の無い『力』があるだろう？ 運命を覆し、奇跡を呼び込む一手。そして『無血』を謳ったデュエルモンスターズをそのまま兵器として変えかねない力。その力の一端は、貴様も既に何度も見ていると思うがな？」

「……………何？」

その言葉が意味するものが分からないまま目を開くユウに、慶燦は嘲笑うような口調で続けた。

「無論、力の強弱や発現の有無には個人差がある……貴様のその様子を見る限り、どうやら決闘奴隷といえども必ずしも『力』を使える訳では無いようだ」

そう言つて、慶燦は自らの左腕を目でさして見せた。

「まだ分からぬか？ 我らの『この力』は決闘奴隷の子孫であることを示しているのだ。皮肉なものだが……な」

デュエルのダメージを現実のモノとする、忌むべき力。

その根本は……自分達の世界から持ち込まれたというのか？

「だから利用したのだ。白の連中が決闘奴隷共を利用して己の私腹を肥やしたのであれば、我らはこの世界に蔓延った異物を処理している

だけに過ぎぬ。我ら自身に植え付けられた『呪い血』と共にな

ポーカーフェイスに汗が滲む。

慶燦の言葉が、本当だとすれば――。

「1つ教えてやろう……あの巫女はその『力』が桁外れに強かった。我らの中の、誰よりも。それが起源オリジナルの証明でないとして、他に何かがある？」

第57話 終焉へ至る願い

アトランダ

青の朝は、まとわりつくような湿気に包まれていた。

海底という水分の多い土地柄故に、人工太陽が本格的に始動する朝方はむんとした湿気が立ち上る。それも昼になる前には空気循環・清浄のシステムが作動すれば『一時の風情』としてどこかへ流れていくのだが――。

そんな独特な匂いが鼻を付く中、ひっそりと佇む遺跡の開拓プラントに足を踏み入れたユウ達は、その雰囲気の様々に自然と身を構えた。

「……………いつらも、アンタの同志って奴か？」

遺跡を調査しているらしい白衣の男達。その眼鏡の奥に光る鋭い眼光は、どう見ても『普通』じゃない。過去を見据え、真実を見極める研究者の博識高い目とはあまりにかけ離れた――血に飢え、爪を研ぎ澄ました獣の目だ。

「当然だ。既にこの遺跡は我らが拝借させて貰っている」

「成程、これはまた見事な乗っ取りを……………」

彼らは突然の訪問者に怪訝な眼差しすら向けることなく…………拘束され、自由を奪われた慶爍の姿を見るや殺気を剥き出しにしてディスクを起動していく。

しかし、そのまま『闇のゲーム』を行えば慶爍を巻き込むようにユウ達が身を寄せて固まると、研究員の皮を被った『彼ら』はそれ以上踏み込んで来なかった。

「同志達よ、案ずるな。彼らをこのまま四方老様の元へお通しする。道を開けてくれ」

慶爍が低い声でそう言い放つと、研究員達は無言でディスクを下げていく。

「へえ、随分と大人しいですね。てっきりここで僕達を袋叩きにするものかと」

「その必要は無い。これ以上、幻魔の『糧』が減っては儀の遂行が危ぶまれる」

「ざらりと言ってますが……それ、同志さん達に聞こえてるんじゃないですか?」

声を潜めるでもなく言い放った『糧』という言葉は、周囲を取り巻く彼らにも確かに聞こえている筈なのだが——動揺が広がる様子は無い。

「……ここにいる者達は皆、自らの役目を弁えている」

「そういうこと、ですか。本当に絵に描いた様な『犯罪組織』だ」

そう呆れたように吐き捨てたユーギの発言に、慶爍は岩のような厳ついで目を向けて睨み返した。

「……貴様が言えたことか、ユートピア白の狗め」

「さて? 何のことやら」

思わず萎縮してしまいそうな地鳴りじみた声にも臆することなく、ユーギは僅かに肩をすくめたのみ。それから誰も口を開くことなく、ユウ達は慶爍を先行させて遺跡の奥深くへと進んでいった。

階段を降り、狭い通路を少し進んで、また階段を下りて。転々と通路を照らす小さなライトの明かりを頼りに、一向は地下へ地下へと降りていく。

そんな、どこまでも続くかのように思われたそれは——突如として終わりを告げた。

丁度地表に現れているのと同じ大きさの、円形に開けた巨大な空洞が現れたからだ。

「……これは」

その意外なまでの広大さに、ユーギが思わず感嘆する。

無数に立ち並ぶ四角柱の石柱は何本かが倒れていたが、それでもこの空間を維持するには十分な強度を保っていたのだろう。流れ込んでいた土砂は発掘チームによって見事に取り除かれ、かつて何かの『競技場』であったと推測されたそれは、在りし日の姿のまま悠然とそこに存在していた。

しかし、研究員達の目によって鑑定されたその推測を知らないユウの脳裏に過ぎったのは——おぼろげながらも記憶していた『伝説』の一片だった。

「……どういうことだ」

「おや、何か心当たりでも？」

ユウの漏らした呟きを興味深そうに聞き返すユーギに、ユウは眉を寄せながらも答えた。

「……俺の世界で噂になっていた都市伝説がある。ここは、その話に出てくる場所にまるで瓜二つだ」

「……その、都市伝説とは？」

視線を前方に見据えたまま、少しだけ間を置いて。

ユウは思い出を語るようにぼつりぼつりと話し始めた。

「……どこかの無人島に存在する『デュエルアカデミア旧校舎の地下』に、デュエルモンスターズを喰い尽くす『悪魔』が封印されている、というものだ」

「悪魔、ですか」

かつて、デュエルモンスターズのカードが『一時使用不能』になった事件があった。

嘘か真か。その事件を引き起こした原因とされるカードが、今もデュエルアカデミア本校跡の地下に封印されている。それはいかにも子供が好きそうな、単なる噂話の筈で。

自分の両親も子供の頃に聞いたというその噂は、『アカデミアの英雄』と共に長く語り継がれ——自分にデュエルを教えてくれたあの少女も、楽しそうによく話してくれた。

「子供の頃にテレビで特番が組まれたりしてな。事実、その旧校舎の地下は番組中で発見された」

「では、その『悪魔』とやらもそこに？」

どこか楽しそうなユーギの問い掛けに、ユウは静かに頭を振って答える。

しかし二人の視線は、決して動くことはなかった。

「……いや、そんなモノはどこにも無かった。子供心に少し落胆したのを覚えている」

「そのお話を聞いている僕としても残念です。その悪魔とやらを是非ともこの目で見たかった」

「……白々しい奴だ。お目当てのモノなら目の前に見えているだろう」

赤、黄、青。

三色の邪悪が漆黒の中でぼんやりと形を成し、巨大な影となって蠢く。

「——さあ、何のことやら」

その眼下でぼつりと浮かぶのは、背を折った細く小さな影が4つ——恐らくは、アレが四方老。そして、その傍で落ち着き無く動き回る花卉のようなシルエツトが1つある。

むせ返るような冷たい瘴気が、喉と肺を凍てつかせていく。背筋を撫でる悪寒を放ち続けているのは、恐らく老人達が取り囲んでいる台座に乗せられた『あの3枚』だろう。

「……三幻魔。あれがお前『達』の狙いか」

ユウの問い掛けに、ユーギも慶燦も、誰一人として答えを返すことは無く。

その代わりに、悪魔に魅入られていた4人の老人達を振り向かせた。

「……おや。予定とは随分と様子が違ったようじゃが——最後の『糧』は手に入ったようだの、慶燦」

楯田の輪郭をした老人の言葉に、慶燦は深く腰を折って一礼した。

先のユウの問いを押し流すように、ユーギは即座に老人の言動に切って返した。

「この期に及んで僕達を『糧』と？ 随分と舐められたものですね」

ユーギはそう言つて、横目でユウへと同意を求めたが——そのユウの視線はただ真つ直ぐに、老人たちの向こうにいる少女へと向けられていた。

男達の狙いが幻魔なら、ユウの望みはその向こうにある。

「……探したぞ、陽依^{ヒヨリ}」

我関せず、といった様子だったその少女はくるりと振り返ると、不思議そうに小首を傾げて言葉を返した。

「ん？ あたし？」

ふわりと翻る、二房の長い三つ編み。髪色はかつての栗色とは似つかない白銀に染まっていたが……妙に子供っぽい顔立ちは決して記憶の中のソレと変わらない。

その少女——ヒヨリはしばらくユウの顔を眺めていたが、ぱつと何かを思い出したように声のトーンを上げてはしゃいだ。

「ああ・キミ、こないだの大会で会ったよね！ わざわざ会いに来てくれたんだ？」

「でしょでしょ？ と得意げに同意を求めてくるヒヨリ。

そんな純真な視線を受けたポーカーフェイスは、ただ静かに頭を振って返した。

「……ふざけているなら、いい加減にしろ。今まで何があった、何故こんな連中に手を貸している」

「あれ、えーっと……違った？ ごめんね、あたし人の顔とか名前覚えるのニガテでさ」

かみ合わない会話の歯車が、ギリギリと不快な音を立てる。

その内、ヒヨリは何か思い出したように一瞬目を見開くと、きつと眉を吊り上げた。

「……っていうか！ 思い出したけど、キミこの前もそんなコト言ってたよね!? あたしはキミのことなんか知らないって言ったでしよー!?!」

ぷう、と頬を膨らませるヒヨリ。その仕草こそ可愛らしいものではあったが——ユウと彼女との経緯を知るユージにとってそれはとても薄気味の悪い光景に見えた。

聞いていた印象と、何ひとつとして変わらない。そんな中でただ一つだけ、彼女の中の決定的な何か^{ぬくもり}が欠落している——それはまるで中身の無い機械人形。

「……彼女、どうやら記憶を無くしているようですが？」

声をひそめてユージが問い掛けると、ユウは小さく頷いた。

「……大会で会ったときから、もしやとは思っていた。だからこそ——」

白き放浪の騎士がディスクを構える。

始めから話してどうにかなるようなら、既に大会で終わっているのだ。

「……こいつで、語る他無い」

何があったのか、何を考えているのか。

ソレを確かめる為に引き抜いた剣は——その咆哮を鳴らすことなく、ユウの四肢と共に自由を奪われた。

何を、と開きかけた口は、ヒヨリの言葉によって塞がれた。

「駄目だよ、まだ♪」

デュエルを強制する筈の呪われた紅い鎖は、暗闇のあちこちから無数に伸ばされ——ユウやユーギ達の四肢、そして起動を妨げるかのようになりにディスクもろとも縛り上げたのだ。

「ははは……これはまた、何とも」

「……どういふつもりだ、ヒヨリ」

静かに怒りの炎を瞳に灯すユウに、ヒヨリはにっこりと微笑んで答えた。

「それはごつちのセリフだよ。あと少しで『この子達』が『全力』になるってときに、邪魔しないで欲しいな？」

この子達、と言ってヒヨリが手を向けたのは、背後で蠢く3体の悪魔達の影だった。

「お前は……」

いくら記憶を無くしていたと分かっているても。

彼女に何があったのか知る術が無かったとしても。

デュエルという対話の手段を拒絶されたユウにとって、その光景は脳の導火線に火を灯すのに十分過ぎる熱を持っていた。

「……ソレが『伝説』の通りに目覚めればどうなるか!! 『アカデミアの英雄』に憧れたお前がそんなことも忘れたのか!?!」

空虚に広がる闇を震わせ、ユウが声を荒げる。

しかし燃え上がる白炎のような気迫に面食らったのはユーギだけで、熱を持った叫びを向けられた当の本人はけろりとして答えた。

「ううん、知ってるよ?」

至って不思議そうに。

何故自分が責められているのか分からない、といったように小首を傾げて。

『デュエルモンスターズの『精霊』は幻魔にみーんな食べられちゃう。そしたらカードは真っ白になって、デュエルモンスターズは『消滅』する……だよな?』

ユウの中で立ち上った炎が、たちまち闇の中へと燻り消えていく。だが、ここで引くわけにはいかない。

何のためにここまで来たのか。自分とは無関係な人間を巻き込んでまでここに辿り着いた、その理由を今一度胸に刻みつけながら、ユウは吼えた。

「知っているなら何故!! お前が、アンタが好きだと言ったデュエルが消えてもいいと——」

「それは普通に嫌だよ? だから、あたしが止めるんじゃない」
ギリギリと、歯車が噛み合わない。

耳障りな不協和音は、互いの声を掻き消していく。

「……何?」

「皆の『デュエルエナジー』を吸い取って、『この子達』がホンモノになって。いよいよ世界征服スタートってときに、あたしが戦うの」

ユウの言葉を、不気味に蠢く歯車が砕いては飲み込んでいく。

「何故、そんなことを……」

「だって、後で変な言い訳なんてされたくないもん」

「……言い訳、だど?」

ユウの問い掛けに、ヒヨリは困ったように眉を寄せて答えた。

「あれが無かったら勝ってたとか、あれがあつたから負けたとか……そんなのはもうウンザリ。デュエルは真剣勝負なんだから、お互いベストなコンディションで戦わなきゃ」

デュエルの理想を語るその姿は、ユウの覚えている彼女の姿と何ら変わりはなかった。

だが、その根底にあるものは、似ているようで、決して違う『何か』。「負けるのは、あくまで自分が弱いからでしょ? 他に言い訳なんてしたくないし、させてやらない」

ジャラジャラ、とヒヨリの手元で鎖が揺れる。

愛おしそうに鎖を撫でながら、ヒヨリは続けた。

「だからね、おじいちゃん達にだって『この子達』にだって、あたしと『全力』で戦って欲しいんだ！ 命を懸けて全力でぶつかり合う、それが『楽しいデュエル』なんだから♪」

ヒヨリの目が、爛々と輝く。

天真爛漫な少女の瞳はその面影を残したまま、汚泥のような不気味な冷たさで満たされていた。

「……何が、お前をそこまで……」

そこから先の言葉を詰まらせたまま、ユウは何も問い掛けることは出来なかった。

あまりにも変わり果てたヒヨリの『内側』を感じ取ったユウは、妖しげな光を灯す瞳を見ていられず、視線を落としてしまった。

「そういう訳だから、少しだけ待っててよ。キミが『この子達』に齧られてもまだ大丈夫だったら、そのときは改めてデュエルしてあげるからさ？」

「あー……Scusi、巫女さん？ 僕は幻魔の再現を邪魔するつもり

にはありませんので、どうか見逃して頂く訳には……？」

「駄目だよ、キミは私の代わりに『倒す』つもりでしょ？ 目がそう言ってるもん」

あつさりと提案を却下され、ユーギが肩をすくめる。

「さ、おジャマ者も静かになったところだし……早く『この子達』の目を覚まさせてあげて？」

「……堂々と『倒す』と宣言された傍から予定通りに事を進めるのは癪じやが……まあ、よかろう。お主如きに止められるようなモノであったなら所詮その程度であった……ということ」

そう言いながら、四角い輪郭の老人が杖をつきながらヒヨリの手を取ると、そのまま台座に納められた幻魔のカードに添えた。

「なれば。呪い受けし巫女よ、お主が望む『世界』を幻魔に願うが良い」

「えー？ うーん……世界とか、良く分からないんだけど」

ヒヨリの体を、淡い紅色の光が包んでいく。

紅き鎖が周囲に張り巡らされ、まるで棘茨のように醜悪に漂う。幻魔の放つ三色の邪悪に照らされて尚、ソレは妖しく揺らめいていた。「あたしが望むのは、1つだけ」

ヒヨリの唇が大きく開き、告げる。

「皆と、『楽しいデュエル』がしたいな！」

瞬間。紅き光が爆ぜた。

地の底から、悪魔の咆哮こえが響く。

「——陽依ッ!!」

巻き上がる風の渦の中、思わず少女の名を叫んだユウは——デイスクに装填された自分のデッキが光っていることに気が付いた。

「何……!?!」

見れば、渦中の中心でコートを靡かせているヒヨリのデッキも同じように光を放っている。まさか——と、ユウは思い当たる。

(……『アスタリクス』のカードが、反応している……?)

ユウの考えは、果たして的を射ていた。

カードから放たれた光は、渦巻く風に導かれるように三幻魔のカードへと吸い込まれていく。まるで、それは何か『力』を与えるかのよう——。

「……これで、まずは1つ目。幻魔の力で『デュエルモンスターズ』は消滅する」

ふと横目を見やると、慶爍がこれまでに見たこともないような笑顔を浮かべていた。

彫りの深い、皺の刻まれた岩壁じみた男の顔には似つかわしくない、少年のように純真無垢な笑顔を。

「……1つ目、だど?」

「そうだ、次は歴史を変えるのだ……我ら幻想クリム・クロアの紅が繁栄する輝かしき現在みらいへと。十二支柱アスタリクスと巫女の力があれば実現する」

そう言って、慶爍は狂喜に満ちた眼差しをユウへと向けた。

「貴様らの世で語り継がれる伝承の——《時械神》とやらの力で……

！」

その名を聞き、ユウは1つの仮説を立てた。今も尚、輝きを三幻魔へと与え続ける十二支柱が、^{アスタリスクス}一体どういうモノなのか。まだ不鮮明なその答えを。

(……)いつらが、アスタリスクスに執着していたのは……!?)

三幻魔も時戒神も。ユウの世界では『破滅』や『終焉』の象徴として語り継がれていた御伽噺の怪物のようなモノだ。存在すら定かでは無かったそれらが、こうして現実のモノとして成り立とうとしている。

つまり十二支柱とは、かつて伝説に語り継がれる英雄たちが退けたそれらを、この世界に『再現』する……そんな力を持つカードなのではないか？

「——っ!？」

刹那、ユウは自身の体がズンと重くなるのを感じた。

芯から熱が抜けていくような、不可思議な感覚——。

「これは……思っていたより大喰らいなようですね」

見れば、ユーギも飄々とした笑顔の中に苦悶の色を浮かべていた。精霊を喰らう前に、まず決闘者を喰らって力を蓄えようというのか。

「ほっほっほ……流石は腕の立つ決闘者共だ。幻魔に齧られて尚、開く口があるとはの」

幻魔の伝説は、恐らく『本物』となってしまうだろう。

それは何より、自身の体が証明してしまっていた。

(……すまない。結局俺は、何も——)

危険に巻き込むまいと遠ざけた仲間達の顔が、脳裏を過ぎって。ユウの意識は、そこで途切れた。

第58話 潜入、魔光の麓へ

「……あれが、三幻魔……」

遠方に立ち上る三色の闇色を見上げ、ベルがそう言葉を漏らしたのは——ユウ達はその毒牙に掛かってからしばらく経つてからのことだった。

ユウ達が遺跡跡に足を踏み入れた頃に青み掛かっていた人工の陽光も、今は地上であれば「高く上り掛けている」と表現できる程まで明るくなっている。

勿論、ベル達はそんなことなど知る由も無かったが——それだけの時間を掛け、決闘者からエナジーを貪り『本物』となった異世界の悪夢達は、今一度見せ付けるように声を上げた。

「——!!」

ビリビリと地鳴りのような咆哮が空気を伝わり、ベルの髪と肌を振るわせる。

隣で顔をしかめていたアンリエールも静かに毒づいた。

「何ともまあ、下賤な……」

生物の本能が、アレから離れるようにと警鐘を鳴らす。

しかしそんな身体の意味とは反対に、このまま野放しにしておけばどうなるかと、人としての理性がベル達をこの場に留まらせていた。

逃げ出すべきか、真実の片鱗を知る者として立ち向かうべきか——振り子のように揺れるベルの心は、やがて一つに傾いた。

(……ううん、迷う必要なんかない。あれをどこかでユウさんが見ていたら、ユウさんがいたら、きっと——)

「オイオイオイ何やってんだガキンチョ共!! その泥臭いオテテを今すぐマイハニーから離しな!!」

何やら騒がしいとベルが振り返ってみると、燐路と煽里の二人に向かって肌の黒い長身の男が猛烈な勢いで詰め寄っているところだった。

姉弟の傍には綺麗に磨かれた赤い車体のD・ホイールと、燐路の片手には怪しげに折り曲げられた針金があった。買い物帰りで荷物を抱えたままの男性を見るに、そのD・ホイールが燐路の手によって望まぬまま走り出そうとしていたのは誰の目にも明白だった。

「盗んだDホイで走り出す、ってか？ よく聞けガキンチョ共、もし傷の1つでも付けてみる？ ガキの頃ママに無理矢理教え込まれたユートピア・カラテと。パパ譲りのマシンガン・トックでケツの穴を1ダースに増やしてやるからな！ 俺様チャンは女子供だろーが容赦はしないぜ？ 分かったら大人しく……」

抱えていた荷物を道端に放り出し、男はやけに激しい身振り手振りで唾を飛ばす。

と、捲し立てる男の眼前に、煽里の手によってキラリと光る鋭い何かが突きつけられた。

「……………」

煽里の右手に握られたそれは、まるでナイフのように先端を尖らせた硝子片だった。

「あまり時間が無いのです。ここはどうかお引き取りを」

煽里の細目が男の心臓を射抜く。

既に幾人もの命を手に掛けたその眼光は、それ以上何も語らずとも男の両手を上げさせるには十分だった。

「OK、分かった。ここは穏便にいこう。大人は子供に何でも譲るもんだ、そうだろう？」

まるで熊か何かと遭遇したかのように、男は引き吊った笑みを浮かべてゆつくりと後退していく。お互いに十分距離が離れたところで、ようやく煽里が殺気と右腕を引き下げた。

「……感謝します。この子はいずれお返しします」

「いーのいーの、どこへご旅行？」

「あの、光の柱の麓へ」

「ワオ！ そいつはブツ飛んでるな！ どうぞごゆつくり」

そんなやりとりをしている間に、赤いD・ホイールの出発準備が整ってしまった。

何てこった、何て日だと額を押さえながら絶望的な表情を浮かべる男を尻目に、姉弟は素早くシートに跨がる。

「おい、お前らちよつと待て！」

いざアクセルを吹かし……という刹那。姉弟の進路に立ち塞がったのはクラドだった。

煽りの後ろに跨がる燐路が、背中から顔を覗かせる。

「どいてくれよ。頼むからさ」

「そいつは無理だな。お前らの答えによっちゃあ、だが」

「……………」

少し間をあけて、姉弟が話を聞く姿勢かどうかを確認してから、クラドは真っ直ぐに二人を見据えて言った。

「……一応聞くが。どこに何しに行くつもりだ」

「決まってるんだろ、あの化け物共をぶっ倒しに行く」

間髪入れずにそう答えた燐路に、クラドは無言でその瞳を見据えた。

周囲の人間も固唾を飲むこと数秒。クラドは深く溜め息をつくとき、内ポケットから何かを取り出すと燐路に放って投げた。

「そういうことなら、忘れ物だぜ？」

クラドの突然の行動に一瞬身構えた姉弟だったが、ソレが何かを理解した瞬間、丸く目を見開いて驚いた。

「お前、これ……何で」

燐路が受け取ったのは、しっかりとデッキが差し込まれた見覚えのあるDパッド。

続けざまに投げられたデッキケースらしきものは、今度は煽里に向けられた。中身は、見なくとも分かる。

「売買屋殿、これは……」

「デュエルモンスターズの化け物を退治しようつてのに、丸腰じゃ格好つかねえだろ？」

ニツと不敵に笑みを浮かべるクラドに、燐路が声を荒げる。

「そういうことじゃねえ！ これを渡すつてことはどういうことか……お前が一番良く分かってんだろうが」

そう。文字通りカードの力を凶器に変えることが出来る彼らに、矛と盾を渡せばどうなるか。言うが早い、燐路は手馴れた様子で素早くディスクを操作するとクラドにその切っ先を向けた。

あつと誰からとも無く声上がる。2人を取り巻くベル達の間、一気に緊張が走った。

「……この場でぶつ飛ばされても、文句は無えってことだぞ？」

紅い鎖は、まだクラドの腕に絡み付いてはいなかったが——それ以上少しでも燐路が動きを見せれば、誰かが『呪文』を口に出すだろう。そんな緊迫が流れる中、クラドは少しも表情を崩すことなく答えて見せた。

「ああ。そんなときは俺の見込み違いだったと思つて諦めるよ」

一瞬の、いや……数分続いたように思える空白を挟んでから、燐路はおもむろにディスクを下げ、言った。

「……礼なんか言わねえからな」

「ああ、俺はそんなもん要らねえよ。けどよ——あの人達には、頭一つくらい下げておけよ？」

クラドが立てた親指で示した先にあつた光景は、丁度ガタガタと音を立て白いボックスカーが乱暴に路肩へと乗り付けたところだった。

「皆、あそこへ行くんでしょ?! 早く乗つて!!」

ひよこつと窓から顔を覗かせたのは、アユカワ博士だった。

ふと後部座席と助手席に目をやれば、2人の男達が青い顔で目を回している。

「だ、だから僕が運転するっていったのに……!」

「痺れるドライブになりそうだぜ……」

ベコベコに凹んだ車体を見れば、彼女がどんな運転をしてきたか想像に難しくない。

クラドは気まずそうに後ろ髪を搔いてから、燐路達へと尋ねた。

「……あー、一応言わせてくれ。まだそのDホイを盗まなきやいけな理由はあるか？」

諭すようなクラドの声に、燐路は少し俯いたあと。

「……事故つて間に合わなかつたら、お前をボコすからな」

「おう、覚悟はしとくよ」

軽くクラドの腹を小突いて、燐路はズンズンと車の方へと向かっていった。

煽りもクラドと男へ静かに頭を下げると、燐路の後を追って車に乗り込でいく。

とりあえずは鎮火した姉弟の暴走にふうと息をつき、クラドも車へと向かおうとすると……いつの間にか駆け寄ってきたベル達に囲まれてしまった。

「全く、ヒヤヒヤしましたわ」

「そうよ、彼らがもしまだ『あちら側』に付く気でいたらどうなつたか……」

「……悪い。相談とかする暇も無くてさ」

心底心配した様子の藍と、ジトリとしたアンリエールの視線がクラドに向けられる。

一歩遅れて何かを言い出そうとしたベルも、言葉を飲み込んでただ不安そうな表情を浮かべている。

「……まあ、あんまり良い選択じゃねえってのは分かってるんだが。ここは俺とアイツらを信じてやってくれないか？ あの手は多分、本気だ。嘘はついてない」

「クラド君、そんなこと何を根拠に——！」

「そんなのは無えよ。だけどさ」

3人の目を見回しながら、クラドは続けた。

「短い間だけどさ。アイツを頭に乗つけて一緒にデュエルした俺には分かるんだよ、何となくな。だからせめて三幻魔の件だけは……アイツらにも戦わせてやって欲しい。親の敵だって言うんだ、俺たちが邪魔するモンでもないだろ？」

クラドの話には、何の根拠も無かった。だが……そう諭すように語る彼の目には、3人を納得させるのに十分な『何か』があつて。

アンリエールの長い溜め息を皮切りに、3人の表情からふつと緊張が解けた。

「……ま、いいでしょう。例えあのお猿さん達に掌を返されたとして

も、敵でいてくれた方がむしろ好都合ですわ。胸を弄られた御礼をたつぷりと返して差し上げるまでです」

「あはは、そうですね。わたしとしては、クラドさんの言うことを信じたいですけど……」

前向きな2人の決定に続き、藍が言葉を続ける。

「……私はまだ、あの2人を完全に信用できてはいないけれど。皆がその調子ならあまり心配する必要も無いみたいね」

柔和な微笑みを浮かべる藍に、クラドもニカツと微笑み返して。

どこかモヤモヤしていたわだかまりが消えたと同時に、少し遠くから声が投げかけられた。

「オイ、何チンタラやってんだ！ 早くこつち乗れよ雑魚キャラ共が！！」

車の窓から身を乗り出し、我が物顔で罵声を上げたのは渦中の人物……燐路だった。

「つたく、人の気も知らねえで……！」

そう毒づきズカズカと車へ向かうクラドに、3人は苦笑しながらも後に続いたのだった。

* * *

通行止めを行っていたセキュリティを無理矢理に突破し、目的地へと辿り着いた白のボックスカーは無残な形に歪んでいた。

当然、中の搭乗者も車のアクロバティックな動きに振り回されることになり、ミキサーのように滅茶苦茶に掻き回されたベル達は辛うじて開いた横開きのドアからデロンと這い出してきた。

「だ、だから僕が運転するって言ったんだ……」

「痺れるくらいに目が回ってるぜ……うえ」

「ま、まだ頭がクラクラしますわ……見た目程、慎ましいお方ではありませんのね……」

「アンリちゃん、何か言った？」

「いえ、別に……」

台風の目であった当の本人だけはピンピンしていたが、他のメン
バーはどう鼻屑目で見てもLP100を切ったような状態だ。

「……それにしても」

額を押さえながらゆっくりと立ち上がった藍が訝しげに周囲を見
渡す。

「……どういうこと？ セキュリティは何をしているの？」

異変を受けて駆けつけたのだろう。セキュリティのD・ホイールが
何台も見受けられるものの、肝心の隊員の姿が何処にも見当たらな
い。

デュエルで交戦しているような騒がしきも無く、光の柱から放たれ
る異様なプレッシャーだけが更に濃度を上げていくばかりだ。

藍の疑問に答えたのは、燐路の淡白な声だった。

「やられたんだろ。考えるまでもねえ」

「そんな……」

現場に向かうセキュリティ隊員ともなれば実力は折り紙つきの筈。
そんな彼らを一蹴するほどの手練が、この先に待ち構えているとい
うのか。

「ここまで来たなら、女だろうと覚悟を決めろよな。俺らの足を引っ
張るんじゃないぞ」

ベル達の間を渦巻く不安を蹴飛ばすように、姉弟は遺跡へと歩を進
めていく。

「……アユカワ博士、タツヤさん、編集長。ここまで同行して頂きあり
がとうございます。ここから先は——」

藍がそう言いかけたところで、アユカワ博士はそつと唇に人差し指
を寄せた。

「何言ってるの、ここからが『気になる』んじゃない！ 私達だけ除け
者なんてあんまりだよ？」

「そうそう。歳を取ると痺れる経験も中々無くなってくるからね！
足を引っ張るつもりはないから、最後まで手伝わせてくれよ！」

「ははは……まあそんな訳さ。大丈夫、これでもその辺の決闘者より
お役に立てる筈だよ！」

そう言う3人の腕には、しっかりとデツキがセットされたディスクが光っていた。

彼らの温かさに、ベル達も少し頬を緩めて。

「……分かりました。では、ご好意に甘えさせて頂きます。ですが危険と判断したら、すぐに引き上げて下さい」

「了解っ！」

心強い味方を得て、一同も姉弟の後に続いた。

「……どう見ても。あれは研究員の皆さん、って感じじゃないですよね……」

「うん、あの中に知ってる顔が1人もいないもん。絶対ヘンだよ」

物陰に隠れながら様子を伺っていた一同だったが、アユカワ博士のそんな一言で疑念は確信へと変わった。

遺跡の敷地内を見回るように徘徊している白衣の男達は皆、左腕にディスクを下げて『遺跡の外を』警戒しているからだ。遺跡の内側から吹き出ている光の柱を警戒する訳ではなく、だ。詰まるところ、答えは1つ。

「俺らも知ってる顔がいねえ。てことは……中身はあのフルフェイス共と同じ奴らか」

隣路がギリツと奥歯を軋ませる。

自分たちを餌として『狩る』為に秘密裏に動いていた人間など、同じ組織であろうとも私情を挟む理由は皆無だ。

「これだけ『目』があるとなれば、コツソリ進入という訳にもいかなそうですわね」

「危険だけど、誰かが注意を引いているうちに入り口を見つけて中へ入るしかなさそうね……」

「待って藍さん、とりあえず遺跡の中に入る入り口なら分かるよ。見取り図を皆のDパッドに送るね」

アユカワ博士がディスクを操作すると、それぞれのDパッドに画像

が送信されてきた。

ココへ来るまでにメモしていたのだろうか。遺跡の見取り図には現在地と入り口への進入経路が何通りか、ピンクの線で走り書きされていた。

「ナイスだぜ学者先生！ やるじゃねーか！」

「へへん、ちよつとは尊敬した？」

「アユカワ博士、こんなものをどこから……？」

「研究者同士でまあ、色々よね。バレるとちよつと問題なんだけど、今は緊急事態だし」

燐路の軽口にも、藍の鋭い疑問にも持ち前のノリの良さで答えず、アユカワ博士は続けた。

「えつと、三幻魔のカードが何処にあるかまでは分からないけど……内部の大まかな造りもそれで確認できるよ。最下層に大きな空洞があるみたいんだけど、中はそれほど入り組んだ作りじゃないから迷うことは無いと思う」

「成程……流石は博士、教養がおありで」

「中に連中が待ち伏せていそうなスペースもねえな……となれば、ここさえ突破できればジジイ共に一発お見舞い出来るって訳か」

そうなればと、一同は互いの顔を見渡した。

「誰が引き付け役になるか、だな……」

言うまでも無く危険な役回りだ。出来れば1人ではなく、複数人が望ましい。

それも、いざとなればセキュリティ隊員を一蹴する程の猛者を相手に立ち回れる、実力者が。

「……仕方がありませんわね」

はあ、と溜め息をついて、アンリエールが一步前に踏み出す。

「ここはこの幽霊姫にお任せなさい。どの道、あんな生臭い遺跡の中に入るのはコリゴリでしたし、丁度良い役回りですわ」

髪を軽くかき上げながら、アンリエールは不敵に微笑んで見せた。

「私も一緒に戦うわ。人の注目を集める『ちよつとしたりハビリ』にもなるし、ね」

そう言って、藍もアンリエールの後に続く。

意味深な彼女の発言に、ハラダ編集長が喰らい付いた。

「おや、何やら痺れるワードが聞こえたけど？」

「その辺の追求はここを乗り切ってからでいいですか、編集長？ 終わり次第『真っ先に』ご報告させて頂きますから」

「そういうことなら了解したよ。いやあ、ますますここでハマする訳にはいかなかったね！」

ニンマリと笑顔を浮かべるハラダに、事情が見えない他の一同は首を傾げるばかりだったが、とにかく最適な立候補者が上がったことで、引き付け役2人の逃走ルートも含め作戦ルートが立てられている。

「それじゃ、ルートはこつちでいこう。2人共ヤバイと思ったら無理せずこの場を離れてくれ。そのときの為にコレを渡しとく」

そう言ってクラドが手渡したのは、何やら無骨な鉄の筒だった。

「？ 何ですの、コレは」

「ディスク装着型、お手製照明弾だ。コイツをあらかじめディスクにつけておけば、エラー信号がトリガーになって弾が発射される。モンスターカードを魔法・罨ゾーンに差し込んだりすれば一発で起動する筈だ。と言っても一時的な目晦ましにしかならないけどな、連中の数が多くなってきたら使ってくれ」

「また、いつの間になんかそんなものを……」

「いつも戦力にならないからな、コレくらいは役に立つぜ？」

ニカッと親指を立てて笑うクラドに、苦笑を返す藍とアンリエール。

彼の機転に甘えることにして、早速2人は照明弾をディスクへと装着した。

「それじゃ、行って来ますわ」

「十分に引き付いたら『合図』を送るから、あとはルート通りに」

「2人共、気をつけて下さいね」

ベルの不安そうな声に頷いて、2人は物陰から物陰へと移りながら、一同が隠れている所から丁度反対側にあたる場所へと移動して

いった。そして、そろそろ向こう側へ着いたかという頃。

カーン!! という一際甲高い金属音が、遺跡中に鳴り響いた。

恐らく仮設のテントに使われていた鉄パイプか何かを思いっきり叩いたのだろう。ベル達の近くをうろついていた白衣の男達も、一斉に音の方向へと向かって行く。

わらわらと集まってくる白衣の男達に向かって、今度は別の方向から突然、セキュリテイのD・ホイールが飛び出してきた。騎乗していたのは、ヘルメットこそ被っていたもののどこか見覚えのある長い黒髪の女性——藍だった。

D・ホイールは引き寄せた白衣の男達を翻弄するかのように2、3周円を描いて走行すると、十分注意を引き付けたとばかりにあらぬ方向へと走り出していく。

その、次の瞬間だった。青緑のパトライトが独特の音を鳴らして点灯を始めたのは。

「今だ、行くぞー！」

藍の発した『合図』をキツカケに、ベル達は一斉に物陰から飛び出した。

しかし、合図を受けて飛び出したのはベル達だけではなかった。

「さあさあ、どこをぐー覧になっていますの!？」 ショーの主演はこの幽霊姫ですわよ!!」

あらかじめディスクで半実体化させていたゴーストリック達を従えて、入り口へとパレードを始めたのだ。

そう。入り口は何も一つだけではない。

藍もアンリエールも、それぞれが『囿』であり入り口を目指す『本命』であり——しかしてその実体は、どちらもベル達を別の入り口へと導く為の引き付け役。

結果、ドタバタと二分された敵の注意は見事、ベル達から逸れた。

「上手くいったぜ、これなら——っ!」

そう隣路が喜んだのも束の間。

彼らが目指した入り口には、まだ数人白衣の男達が残っていたのだ。

「クソが!! 律儀にジジイ共の言いつけ守ってやがったか!？」

舌を鳴らして反射的にディスクを起動させようとした燐路の手を、ふわりと柔らかな細腕が遮った。

「ダメだよ、キミ達はパパとママ達の仇をとらなきゃいけないんだよー!」

瞬時に伸ばされた紅い鎖を受け止めたのは、一回り、二回り大きな3人の影。

「任せて、この人数なら私達だけでも戦えるから!」

「キミ達は今の内に中へ! 早く!」

「そんな! でも……!!」

「悪い、恩に着るぜ学者先生!!」

アユカワ博士、ハラダ編集長、タツヤ助手の3人のディスクが強制起動する。

燐路と煽里は彼らの意思を汲み取り、するりと白衣たちの間を抜けていく。その一方で未だ困惑した様子のベルに、アユカワ博士はぽんと頭に手を置いて言った。

「大丈夫、こういうのは大人の仕事! ベルちゃんは先に行って燐路君達を助けてあげて! あの子達に選ばれたベルちゃんならきつと出来るって、私達は信じているよ!」

「博士……」

彼らとのデュエルで受ける痛みを知っているベルは、どんな言葉を貰っても博士たちを置いていくことを許容できなかった。

しかし、そんな彼らの意思を無駄にしない為にも。いつまでも立ち止まっているわけには、いかない。

「……分かりました。どうか無事でいてくださいね」

「うんっ!」

博士の笑顔を受けて、ベルとクラドも走り出す。

そんな彼らの背後で聞こえたのは、頼れる大人達の勇ましい声だった。

「へへっ、久々のデュエルだ! 痺れさせてくれよ!」

「頼んだよ、僕のデッキ! 精一杯頑張ろう!」

「よしっ、気合十分！ 2人ともいくよ!？」

「^{デュエル}決闘っ!!」

【アユ&フトシ&タツヤ】LP4000

VS

【ENEMYS】LP4000

第59話 それぞれの決闘

ゴーストリック達の騒がしいパレードに紛れ、アンリエールが入り口へと肉薄する。行く手を遮るようには伸ばされた紅い鎖をひらりとかわすと、アンリエールは黒いドレスをなびかせてペロりと舌を出した。

「おつと残念、もう少しでしたのに。紅のお猿さん達だと少々見くびっていたようすわ」

「ッ、小娘が……！」

その飾り気の無い狙いは白衣の男達に筒抜けであったが、今はそれでいい。わざとらしく挑発し十数人程いる男達の注意を引くと、アンリエールはDパッドに表示された時刻に目を向けた。

(さて……そろそろ、ですわね)

入り口へ突入する『フリ』を続けるのもそろそろ厳しくなってきた。こちらにその気が無いのを勘付かれるのも時間の問題だ。

もうベル達も突入に成功している頃合いだろうと、クラドから預かった照明弾へと手を伸ばした、そのとき。

「朝方に長様に連れられた奴らといい、つくづく気に入らないガキ共だ……」

そんな男の悪態が、ふとアンリエールの耳に入った。

「……私達より先に、誰かが中に？」

アンリエールの脳裏に、ふと1人の男の影が過ぎった。

「——その『気に入らないガキ』というのは、一体どんな方でしたの？」

あの人なら。

自分達よりも先に『コイツら』の後を追っていた彼ならば——。

はしたなく甲高い声で叫びそうになる心を抑えてアンリエールが問い掛けると、白衣の男はフツと口端を吊り上げて言い捨てた。

「ふん、わざわざ貴様に教えてやる道理など無い！」

言うが早い。白衣の男が放った紅い鎖がアンリエールへと伸び

ていく。

彼女の動きをもつてすれば、避けることなど容易いタイミングと距離だった——が、アンリエールは自身へ迫るそれを、微動だにせず左腕で受け止めた。

「——そうです。では、事情が変わりましたわ」

宝刀が鏗鳴りを立て、鞘からその刃を覗かせる様に。黒に金の装飾が施されたアンリエールのDパッドがデュエルモードへと展開していく。

隙をついて複数の紅い鎖が絡みついていくが、アンリエールは少しも意にも返さず男達に向かって凜と声を張った。

「時間を稼いだら見逃して差し上げようと思いましたが……ここは何が何でも突破させて頂きます!!」

「博士達……本当に大丈夫でしょうか」

薄暗い石造りの通路を、慌しい足音を響かせながらベル達は駆けていた。

「大丈夫さ、アユカワ博士だってあんなに強かったんだぜ？ 他の2人もきつと白面の連中なんかには負けやしねえさ。今はあの人たちを信じよう」

「……はい」

不安そうに呟くベルに、クラウドは明るく笑って見せた。当のベルは表情を曇らせたままではあったが、いつまでも後ろを気にしている訳にはいかない。

今は、自分に出来ることをやり切るだけ。迷いを振り切り、顔を上げたベルが見たのは、先を行く姉弟の立ち止まる背中だった。

「2人とも、どうし——」

彼らが見据える先。通路が少し広がり小部屋のようになっているスペースで、立ち塞がるように巨大な人影が佇んでいる。

その人物にベルは心当たりは無かったが……燐路が唸るように投

げかけた声を聞いて、彼らがどんな関係であつたのかは容易に想像がついた。

「……よお。久しぶりじゃねーか、長様?」

デイスクを構え、仁王立ちする巨軀の男——慶爍は、鋭い眼光を向ける燐路からの剥き出しの敵意に一切の感情を挟まず、ただ短く端的に告げた。

「この先は通さぬ。どうしてもというのなら私を倒し、押し通るがいい」

姉弟が多くを語るまでも無く、慶爍は全てを理解した上で彼らを『敵』と認識したらしい。そこに一切の温情や躊躇いは無い。

そんな慶爍の態度に、燐路は獣じみた禍々しい笑みを浮かべて応えた。

「相変わらず話が早くて助かるオヤジだ……お望み通りブツ潰してやるよ!!」

まるでそれまでの不満や怒りを一気に浴びせかけるように、燐路が吼えた。

静かにデイスクを構えた煽里も、静かな怒りをその目に滾らせているようだったが……。

「……オイ、何のつもりだよ?」

そんな3人の間に、ふらりとクラドが割って入ったのだ。

不機嫌そうに燐路が唸ると、クラドが呆れたように溜め息をついた。

「あのなあ、お前さん達の目的は三幻魔をぶっ飛ばすコトだろ? こんなのを相手にしてる暇があるならサツサと先に進め。ここは俺がやる」

「なっ……!?! クラドさん、何を——!?!」

突然の申し出に、ベルも驚きの声を上げた。あれほど「本番は弱い」と言っていた彼が、こんな無茶を受けきれぬ筈が無い。

燐路も、怪訝そうに眉をひそめて問い返した。

「……それ、本気で言ってるのか?」

「おう。相手が1人なら時間稼ぎぐらいなら出来るさ」

ニツと不敵な笑みを浮かべるクラドに、ベルは責め立てる様に叫んだ。

「クラドさん1人じゃ無理です!! わたしも一緒に——」

「おーおー、師匠に向かつて随分ナマイキな口をきくようになったなあ……なんてな。大丈夫、メイドちゃんはこの先でいぎつて時に2人を助けてやってくれ。博士から預かった十二支柱アスタリクスクスでさ。そいつは、俺には出来ない仕事だ」

「そんな——!!」

ベルが言い切らないうちに、慶爍が端的に言い放った。

「させると思うか? お前達はここで全員、私が止める」

「やれるもんならな——お前ら、目エ瞑れ!!」

クラドの声にはつと『気が付いた』ベルは、半ば反射的にぎゅつと瞼を閉じた。

次の瞬間、瞼の向こうでとてつもなく強い光が爆ぜた。

「——むっ!?!」

アンリエールと藍にも渡していた、お手製の小型照明弾。ディスクに取り付けて連動させていたソレを、クラドが使用したのだ。

事前にその存在を知っていた3人は咄嗟に思い出し、目を瞑って防ぐ事が出来たが——只1人、クラドが発した言葉の真意を測りかねていた慶爍だけは一瞬、判断が遅れた。

その一瞬が功を奏し、閃光に怯んだ巨軀の隙間を縫って姉弟が先へと駆け出していく。

「おい、ぼさつとすんな!!」

「きやつ!?!」

燐路に手を引かれ、ベルは混乱の中で前へと駆け出していた。

「行って来い!! お前らの武勇伝、楽しみに待ってるぜ!!」

「クラドさんっ!!」

まだ不鮮明な視界の中、振り返ったベルの目に見えたのはいつもと同じクラドの頼もしい笑顔。

今すぐにも引き返して隣で戦いたい。そんなベルの衝動を何とか抑えていたのは、自分の手を引く燐路から感じる力強い意思と、何

よりクラドが身を挺して作ったチャンスが無下にする訳にはいかないという責任感だった。

(クラドさん……どうか無事でいて下さい……)

ぎゅつと噛んだ唇から少し鉄の味がして。

その痛みを強さに変えて、ベルは深淵へと続く道を先へと進んだ。

「おし、皆行つたな。とりあえず目標は達成か？」

「……自分を躊躇い無く犠牲にするとはな。我らが同志にも相応しい精神の持ち主だ」

照明弾のダメージが回復しつつあるのか。クラドの左腕には既に紅い鎖が巻きついており、慶爍は多少おぼつかない手つきながらもデュエルの準備を淡々と進めている。

「ハッ、冗談。お前らのお仲間なんぞ死んでもゴメンだ」

「なれば貴様にはここで終わって貰おう。実力の程はシガマの大会で拜見している。悪いが貴様に勝機は無い」

「そいつはどうか。デュエルは始めてみなきや分からねえだろ？」

クラドの答えに、慶爍は鼻で笑って返す。

「……そんなものは弱者の戯言に過ぎん。決闘者の実力、デッキの相性、カードの質……デュエルは始まる前から、既に勝敗を決しているモノだ」

「へえ……ならお前ら悪党の運命も『決している』ってコトだな？ 悪を働いてる連中の末路なんぞ、大抵ロクなもんじゃねえ」

「……それこそ下らぬ買言葉だ。『この世界』に我らを阻む障害は無^{えいゆう}い。故に誰にも止められぬ」

慶爍がそう言い切ると、今度はクラドが鼻で笑って返した。

「残念だが……ヒーロー^{HERO}ならいるぜ？ いつの時代も、どの世界にも。だからこそタチが悪いんだけど、な」

「あの『紛い物』のことか。だとすればとんだ買い被りだな、奴は——」
ディスクが点灯し、デュエル開始の合図が鳴り響く。

「知ってるさ、大体な」

クラドの言葉に、ぴくりと慶燦の眉が跳ねた。

「――何？」

「だからこそ。破滅の力を私利私欲に使うお前らを放っておけねーんだよ」

ニヤリと笑みを浮かべたクラドに対して、慶燦は怪訝に瞳を尖らせた。

「……貴様、一体何者だ」

「これからぶつ潰す野郎に、名乗る名前はねえよ」

クラドの言葉が火蓋となつて、両者激突の幕は切つて上がった。

「ならば、力でくで聞き出すまで!!」

握られた手札は5枚。

勝敗を占うカードに目を落とし、クラドは口端を吊り上げた。

「――いいねえ。俺好みの答えだ」

「気配が濃くなつてきやがった……そろそろ近いぜ」

燐路はそう言つて顔をしかめていたが、何の力も無いベルにはその『気配』とやらが分からなかった。何となく嫌な感じはしているが、それはココに着いてからずっと感じていた嫌悪感だ。化け物の足元に潜入しようというのだから、そんなものは誰でも感じていて当然である。

「……は……？」

歩を進めていくと、やがて大きく開けた空間に出た。

無数に立ち並ぶ四角柱の石柱。かつて何かの『競技場』であつたと推測されたその空間に立ち込めていた瘴気が、3人を押し潰すかのようになりかかる。

(何、コレ……!?)

身体を溶かし、魂を削られていくような異様な感覚。

明滅する視界の中、ソレを捉えたベルは痛みも苦しみも忘れて思わず叫んでいた。

「——ユウさんっ!!」

闇が広がる空間の中で立ち上る三本の光の柱。その中心にある台座の傍で、紅い鎖に拘束された師ユウの姿があった。

こんな場所に長く放置されていればどうなるか——ぐったりとうな垂れたユウの様子から、そんなことは考えるまでも無い。

(そんな……まさかもう!?)

可能性は、あった。

自分たちよりも先に出発した彼が既に白面達と、ヒヨリと接触しているかもしれないと……その『可能性』は、現実突きつけられた。

あれこれ考えている余裕など無かった。ベルは重く押し掛かる瘡気を掻き分け、一目散に駆け出していた。

「ユウさんっ!!」

泣き出しそうな声で必死に名前を呼んで、一心不乱に紅い鎖に掴みかかる。

しかし、非力な女の力で鎖の拘束が解ける筈も無い。ベルは何度も名前を呼びかけながら、祈るようにユウの身体を掻きぶった。

「ユウさんっ!! お願いだから目を……目を開けて下さいっ!!」

視界を滲ませるのは、涙なのか瘡気なのか。

もう何も分からなくなったベルの耳に届いたのは、ユウの擦れた声だった。

「……ベル? 何故、お前が……?」

ごしごしと手の甲で涙をぬぐって、ベルはもう一度ユウの顔を確認した。

僅かではあるが、開いた瞼から瞳をこちらに向けているのが分かる。

「良かった、生きて……!!」

「……どうして、こんなところまで来た。早く、ここを離れろ」

「何を言ってるんですか!! 皆ユウさんを心配して——」

と、ベルが言い切る前にユウの身体に巻きついていた紅い鎖がバキーンと音を立てて弾け飛ぶ。一体何だと目を向けると、燐路が険しい顔をして伸ばした紅い鎖を手元へと戻しているところだった。

「よう、いいザマじゃねーか」

「……貴様」

力無く横たわりながらも、ユウは目の前に現れた『敵の姿』に向かって眼光を刺す。

しかし直後に放たれた燐路の言葉に、そんな険しい眼差しは啞然として丸められた。

「生憎と、今はテメエと話してる暇は無えんだよ。おいベル、さっさとソイツを連れて出る」

「——何だど？」

「詳しい話はまた後です、今は早くここを出しましょう！」

「そういうこった。さすがに俺も、巫女サマとジジイを同時に世話するつもりはねーからな」

どういふことだと目を向けるユウを、ベルが支えになりながら引き起こす。

その間も、燐路の視線は一点に向けてジツと向けられていた。

「やつほー、久し振りだね。リン君にセンちゃん？」

視線の先には、いつの間にか台座に腰掛け、両足をぶらぶらと揺らすヒヨリの姿があった。

「それと……確か、キミはシガマで会った『持ち主』の子？」

ベルを指差し、ヒヨリは屈託無く嬉しそうに微笑む。

彼女がこの場にいたこと自体は、この状況を考えればさほど不思議なことではない。

しかし、だとすればユウをこんな目に合わせたのは——それが分かっているだけに、こんなにも無邪気な笑顔を浮かべるヒヨリを、ベルは許せなかった。

「……あなた、なんですか？ ユウさんをこんなにしたのは……！」

ベルがそう聞いたのは、せめてヒヨリから何か負い目のようなものが感じられればと思っただからだ。

2人がどんな関係なのかは知らない。だがユウがこれだけ必死になって取り戻そうとしている『想い人』なら——きつと、こんな酷いことをするのに何か理由があるはずだからだ。

「ん〜……まあ、そうなるかな？」

しかし。

ヒヨリから返って来たのは、何とも呆気ないまるで他人事のような回答だった。

「その人達を動けないようにしたのは私だしね。結果的には間違っていないよ」

「その人……達？」

言われて、ベルはようやく気が付いた。すぐ傍にはユーギムトウトとオツドアイの双子の1人も鎖で縛られて倒れていたことを。

「ユーギさん達、まで……!？」

既に煽里が鎖を砕いて介抱し始めていたが、2人とも意識を取り戻す気配は無い。

驚くベルを見て、意地悪そうにヒヨリがにと微笑む。

「あれ、もしかして今まで気付いてなかった？ ひつどいなー、仮にもその人『デュエルキング』なんでしょ？ かわいそう……食べられ損、ていうのかな？」

「……食べ、た？ 一体何を——？」

怪訝に聞き返すベルに、ヒヨリは指を振りながら答えた。

「三幻魔は、決闘者の『デュエルエナジー』とカードの精霊を食べて大きくなる。この子達は新人さんだから、どうも燃費が悪いみたいだけどね」

「じゃあ、ユウさん達は——」

「そ、幻魔達のご飯になったってこと。まだ喋れる元気が残ってるっていうのは驚いたけど……もうエナジーが少ないみたいだし、次はキミ達に『おかわり』になって貰——」

「オイ、クソジジイ共!! 居るんなら出てきやがれ!!」

燐路の上げた咆哮に、ヒヨリは耳を押さえて顔をしかめた。

「もー、うるさいなあ！ 急に大声出すのビツクリするからやめてよ！？」

そんなヒヨリの言葉になどお構い無しに、燐路は闇に向かって吼え続ける。

「お前らの大事な巫女サマをキズモノにされたくはなかったら、大人しく出てきやがれ!!」

「うげ……リン君、サイテー」

ヒヨリもジトリと目を垂らす粗暴な煽り文句が、深い闇の洞に響く。

すると、どこからかしわがれた笑い声が木霊した。

「……ふん、多少力が強いからと甘やかしておったツケが回ってきたかの」

「……糧としての役割も満足に果たせぬばかりか、我らに対して牙を向けるとは」

ぼうっと浮かび上がる、4つの矮躯。

子供の背丈程であろうソレからは、まるで年輪を重ねた樹木のように重い声が発せられている。その奇妙な光景は、まさしく『怪』という字をそのまま体現していた。

「コレは少し、仕置きをせねばなるまいか……？」

「何、幻魔の力を試すには丁度良い供物となろうて」

四方老と呼ばれる彼らの意見は一致したらしく、どこからとも無く紅い鎖が燐路へと伸びた、が――。

「……ほう。お前もか、煽里」

伸ばした鎖を遮った『影』に対し、老人が嘆息をつく。

燐路へと伸びた2本の鎖の内、1本をその左腕に受け――煽里はこつんと小さく音を立てて着地した。

「……四方老様、お聞かせ下さい。幻魔は――あなた方の理想は本当に紅の民を救う『未来』と成り得るのですか？」

煽里の糸目が、老人達へと向けられる。

その瞳の奥に滾る炎は老人達にも見て取れただろう。しかし、しば

しの間を置いても彼らからは何の返答も無かった。

「その悪魔たちが本当に私達の故郷を喰らったのだとすれば。私にはとても民を豊かにする力があるとは思えません」

感情を抑え、放たれた煽里の問いに——老人達はようやく、分かりきったことをと言わんばかりに溜め息をついた。

「我らを取り戻すは『誇り』と『栄光』。それが民の幸というものだ。豊かな暮らしなどその後からいくらでもついて来よう……貴様ら戦士も民も、栄光と誇りの為に身を捧げるべきなのだ」

ダンツ、と石造りの床が踏み鳴らされる。

老人達の答えに、燐路が再び吼えたのだ。

「ゴチャゴチャうるせえ!! 姉貴はどうだか知らねえがな……俺らがずっとテメエらの掌の上で転がされてたつてのが!! 一番気に入らねえんだよツ!!」

燐路の啖呵に、煽里はどこか『タイミングを失った』ように肩をすくめつつ……ふうと小さく息をついてから続けた。

「……まあ、それには私も半分くらいは同意しますが」

姉弟がディスクを構え、老人たちと対峙する。

そんな彼らの『決定』に慌て出したのは、他でもないヒヨリだ。

「あつ、ズルイ!! 先に三幻魔と戦うのは、あたしっ——」

割り込むように、ヒヨリが紅い鎖を伸ばす——が、そんな彼女の前に立ち塞がる影があった。

ヒヨリが三幻魔との対決を望んでいたように。彼女にもまた、彼女との対決を待ち望んでいた男がいたのだ。

「……へえ、まだ動けるんだ?」

僅かにうな垂れた首を僅かに上げ、前髪の間から黒い瞳を覗かせ、白の騎士が立ち塞がる。

「……お前の相手は、俺がする」

感情を抑えた、いつもと変わらぬユウの声。しかし誰が見ても、今の彼は立つのもやっという状態だ。身体を支えていたベルから離れ、ヒヨリの前に割って入っただけでも殆ど奇跡に近いというのに。

「ユウさん、そんな無茶は——!!」

慌てて引き止めようとするベルだったが、もう遅かった。

決闘者同士が鎖で繋がれた今、その決定権を握る紅き巫女がその眼にユウを捉えたからだ。

「……まあ、いいよ。あつちは順番待ちみたいだし、それまで相手してあげる。その代わり——」

ヒヨリのディスクに火が灯る。葉状の黒いプレート部分が展開し、まるで孔雀の翼のように扇を広げ——その誘いを受けるかの如く、ユウの白いDパッドもデュエルモードへと可変していく。

「キミも『全力』で立ち向かってきてくれなきゃ……嫌だよ?」

にこつ、と屈託の無い笑みを浮かべるヒヨりに、ベルは何か薄ら寒いモノを感じた。

止めようにもデュエルは既に始まろうとしている。しかしいくらユウでも、こんな手負いのままでは勝てる勝負も逃してしまうだろう。

なら今、自分に何が出来る?

外で戦っている皆から託されたこの身を、どうやって活かす?

ベルが起こした行動は、ほとんど反射的なものに近かった。

「ベル、何を——!?!」

「無茶をするなら、わたしも一緒にします」

自分の身体をユウの腕の間に滑り込ませると、見た目には小脇に抱えられているような状態になってしまったが——再び、今にも倒れそうなユウの支えになっていた。

「……このデュエルは危険だ。俺が何故、お前達から離れたのか分からない訳じゃないだろう?」

優しく説き伏せるように言いながら、ユウは咄嗟にベルを引き離そうとした。

だが、ベルもしつかりと腰に手を回していて離れようとしなない。

「分かりません。ソレを言うならわたしが、皆がユウさんをどれだけ心配していたのか……ユウさんは、分からないんですか?」

「……………」

「アンリさんも藍さんも——クラドさんも。今、外で皆戦ってくれて

います。危険だつていうユウさんの気持ちも分かります、けど……1人きりで頑張つても、いつかきつと倒れちゃいます」

ベルの言葉は、ヒヨリに挑むことすら出来ずに倒れ伏したユウの胸に深く突き刺さった。

もし、彼女達が自分を追いかけてきてくれなかったら今頃どうなっていたか……目を閉じ、その事実を反芻しながら、ユウはベルの言葉に耳を傾けた。

「だから、もつとわたしたちを頼ってください。それとも……わたしってこんなときですら頼りにならないような育て方、されたんですか？」

ふふつ、と少し悪戯に微笑んで、ベルはユウの瞳を覗き込んだ。

「……お前は」

幻魔の放つ瘴気の中であっても、決して輝きを無くさない琥珀色の光——ベルの瞳を覗き返したユウは、それを見ただけで十分に分かった。彼女が自分の背中を預けるのに相応しいかどうか、そんなことを考える必要すら無い程、力強く成長していることを。

「……分かった、ならもう止めはしない。俺と一緒に戦ってくれるか、ベル」

「はいー」

ユウの言葉に、ベルはすぐさま頷いて返す。

「あれ、もしかして1対2？ あたしは別に構わないけど……」

そんな2人のやり取りを見ていたヒヨリは驚いた仕草をみせるが、その実さして障害とも思っていない様子だった。

しかしユウは毅然と、そして静かに言い放った。

「……勘違いするな、あくまでお前の相手をするのは俺1人だ。ベルにはただ、満足に動かない俺の身体の代わりをして貰うだけ……そうだな？」

有無も言わさぬ、といった風ユウに見つめられ、ベルは一瞬戸惑ったものの……すぐにこくりと頷いた。

「ふくん、そっちの方が面白そうだったんだけどなあ。まあいいや、早く始めよう？」

「言われなくとも、そのつもりだ」

んくつと背伸びをしてから、ディスクを構えるヒヨリ。ベルもユウの腕をとり、決闘開始に備えようとして……ふと、自分のデッキから2枚のカードを取り出した。

「もし良かったら、この子達も一緒に戦わせてあげてくれませんか?」

そのカードを見たユウは、驚きに目を丸くした。

青く染まった2枚のカード。それは紛れも無く『アスタリスクス』の名を冠したカードだった。

「……それを、どこで?」

「ここに来る前に、ある人から預かったんです。その人も今、外で戦って来ています」

ヴァルキュリアといい、つくづく『アスタリスクス』に縁がある子だと思いつつ——ユウの脳裏に過ぎったのは、気を失う前に見た禍々しい光景だった。

「こんな大事なデュエルでデッキのバランスを崩す訳にはいかない、っていうのは分かってるんですけど……わたしがこの子達を持ってユウさんと一緒に戦うことになったのは、きつと何か意味があるんじゃないかって思うんです」

何も知らないベルは、アユカワ博士に託された思いを胸にユウへと訴えかけていた。

どこか不思議な『アスタリスクス』と出会えた自分達には、きつと偶然じゃない『何か』があるのだと。

「無理ならそれで構いません、だけど——今はわたしと、この子達を信じてくれませんか?」

ユウとしても彼女を信じたい気持ちがあったが……この世界に再現されようとしていた三幻魔に、まるで力を与えるかのように輝きだした『アスタリスクス』のカード達——果たして、そんな『破滅』を招くようなカードの力に、これ以上頼って良いのか?

渦を巻く疑念にしばし思考を沈め、ユウは——。

(……いや)

纏わりつく黒い靄を振り払うかのように。

ユウはベルからカードを受け取ると、デッキの中へと何の迷いもなく投入した。

(例え『アスタリスクス』が破滅の力だろうと構わない。ベルの言う通り、本当に何か『意味がある』のなら——アイツの強さに届く為に、その力を利用して貰う)

今はただ、少しでも力が欲しい。

変わってしまった『師』へ、何故と問う為に。

(もし、俺の行いがこの世界に『破滅』を導くなら……『アスタリスクス』が牙を剥くなら。そのときは俺が砕く、それだけだ)

それが彼女達を巻き込んでしまった自分の責任だと、そう心に刻んで。

「……分かった、ありがたく使わせて貰う」

「……はいっ!」

ベルが嬉しそうにユウの左腕を抱えて構えを取ると、ヒヨリはようやく準備が完了したのかと言わんばかりに満足そうに頷いた。

「準備は出来た? それじゃあ……」

グツ、と得体の知れないプレッシャーが押し掛かる。

それは恐怖を感じる間も無いほど明確で、純粹な殺意。

「楽しいデュエルを、始めよう?」

紅の巫女はこれまでの気楽な口調のまま、ゲーム遊戯の始まりを告げた。

第60話 破滅の運命

喉が焼けそうな瘴気が渦巻く中。

紅の姉弟が対峙する老人達は、まるで娯楽^{ゲーム}を前にした子供のよう
に嗤った。

「カカカツ……愚かな、それだけの『力』がありながら、この幻魔の力
を押し量ることも出来ぬか」

両者を繋ぐ紅い鎖は既にその役目を果たし、先攻後攻の決定を知ら
せるアラートと共に各々の右手には5枚の手札が握られている。

だが——姉弟は既に様々な局面に対して思考を巡らせているとい
うのに、鎖の先の老人達はディスクを構えようともしていない。そん
な様子に痺れを切らし、燐路は声を荒げた。

「ゴタゴタうるせえッ!! とつとと構えろ!!」

血の気の多い若輩者に愛想を尽かしたと言わんばかりに深く溜め
息をつくくと、老人達はようやく『戦意』らしきものを姉弟へと向けた。
「……やれやれ。それではちいと……灸を据えてやるとするかの?」

「主らは2人。ではワシらも2人で挑むとしよう」

そう言って横一列に並ぶ老人達を、燐路が鼻を鳴らして挑発する。

「ケツ、2人と言わず4人纏めて来いよ。その方が手っ取り早いだ
ろーが」

「では——お言葉に甘えて、そうするのでしょうか?」

そんな燐路の『何も知らない子猿』の鳴き声を聞き届け、老人達は
一斉に口端を吊り上げた、その瞬間だった。

壁を、床を、天井を。好き勝手に渦巻いていた幻魔の瘴気が一斉に
老人たちを集まりだし、ここが『海の底である』という事実を冷たく
突きつけるような地鳴りが轟いたのだ。

(!? 何だ、こりゃ……何かに引っ張られる……ッ!?)

それは恐らく、姉弟の『力』が強かったからこそ耐えられた『暴食』。

少し離れた場所でヒヨリと対峙していたベルとユウは慌てた様子
だったが、倒れたり膝をついたりする様子は無い。だとすれば、コレ
は——。

「なるほどな、コレが俺らを騙そだてした理由ってやつかよ……!!」

紅の鎖を持つ者を糧にした、その目的。身勝手な理想に溺れ、幾万もの人々を犠牲にして成り立とうとしている破滅ねがい——。

「二カカカ!! 潤う……潤うぞオ!!」

涌き上がる溶岩の如き憎しみを向ける姉弟の視線の先で、老人達の身体がぼんやりと溶け出し……とても年老いた獣が出せるとは思えない咆哮を轟かせた後、歪な瘴氣の光を吐き出した。

「——ッ!?!」

「チッ、何だつてんだ……!?!」

紫色の霧が立ち込める。

かつて4人の矮躯が佇んでいた、その先には……。

「……ククク。まあ、今の状態ならこんなモノか?」

「この僅かな魔力へかでこれだけの力なのだ……文句はあるまい?」

まるで岩壁と見間違うのような、2mを越す筋骨隆々の巨躯。

そしてその頂点に座していたは——僅かに老人達の面影を残す若い男達の双頭だった。

「……ケツ、気色わりい」

「あのようなモノが、現実に——!?!」

真正面に対峙する姉弟は、冷静を装いながらも戦慄していた。いくら老人達が妖しげな力を持っていても、所詮は人間……その考えは既に彼方へと飛び去った。

もはやアレは、人間ではない。

「な、何……あれ……っ!?!」

その姿を見たベルとユウも、おぞましげに一瞥したが——彼らと対峙するヒヨリはケロリとした様子で、何とも無いように声を掛けた。

「さっ、早く始めよう? 融合みせ召喚せいのはもう終わったでしょ?」

下らぬ芸だと言わんばかりに、そう『微笑み捨てる』ヒヨリ。

その笑顔がきよとんと丸くなったのは、刹那の瞬間だった。

「——お?」

ぐらり、と足元が泥のように柔らかく歪む感覚。

「お、おおっ!?!」

恐らく、今の衝撃で地盤が緩んだのだろう。

元々デリケートだった遺跡の足場が崩壊し、ベル達3人が落下している。と知ったのは宙に放り出された後だった。

「——き、きやあああつ!？」

ユウは咄嗟にベルの体を抱きかかえ、自分の体を下へと向けたが——3人はどこへ向かうのかすら分からぬ暗闇の中に飲み込まれていった。

「ベルツ!? チツ、クソが……!!」

「……フン、案外呆気の無いものだ」

ヒヨリの身だけは惜しかったのだろうか、僅かに眉を潜めた双頭の男達であったが——仕方なしとばかりに小さく嘆息を漏らす。

「テメエら……!!」

刹那の中で起きた惨劇に、しかし燐路は憎しみを更に燃え上がらせた。

同胞の死に痛める心など既に持ち合わせていない。だが——気に入らない。老人達の、目の前の奇怪な男達の全てが、ただ気に入らないのだ。

「ククク……何をそんなに怒ることがある?」

「今更人の死を嘆くなど滑稽も良いところだ……まあ、良い」

そんな燐路の反応に何か興味を引かれたのだろうか。

双頭の男達はその生に溢れた眼を輝かせ、告げた。

「では、ゆくぞ……デュエルだ!!」

【燐路・煽里】 LP8000 VS 【四方老】 LP8000

「まずはワシのターン……フン、どうやら幻魔も暴れたがっているようだ」

「ケツ、中身ジジイのバケモンが何カツコつけてんだ。頭まで筋肉になつて退化したか?」

ここで初めて手札に目を通した双頭の男は、ニヤリと口を歪ませる。

指を立てて挑発する燐路を意にも介せず、双頭の男はどこか優雅な仕草をもってカードをディスクへと滑らせていく。

「ワシはカードを2枚伏せ、モンスターをセットし……ターンエンドだ」

何が起こるのか、と身構えていた姉弟だったが……凡手と言わざるを得ない男の1ターン目に燐路は怒りすら駆立てられた。

「……ケツ、何かと思えばクソみてーな先攻打ちやがって。幻魔の力つてのはその程度かよ」

「……ツカカ、吼えるな。その矮躯が余計に小さく見えるぞ?」

「ッ——舐めやがって、俺のターンッ!!」

火花を散らす勢いで引き抜かれた燐路のドロカードは、何かの確信と共に手札に加えられ——燐路は既に構築していた勝利への道筋にカードを走らせた。

「手札から魔法カード《炎熱伝導場》を発動!! デッキから《ラヴアルのマグマ砲兵》と《ラヴアル炎火山の侍女》の2体を墓地へ送る!!」
墓地へモンスターを大量に送り込み、一気に『噴火』させることで展開するラヴアル。それを最高とも言えるスタートで飾った燐路だったが、燃え上がる烈火は留まることを知らない。

「そして墓地へ送られた侍女の効果を発動!! このカードが墓地へ送られた時、自分の墓地に《ラヴアル炎火山の侍女》以外の『ラヴアル』があればデッキから『ラヴアル』モンスター1体を墓地へ送る事ができる!! 俺は2枚目の侍女を墓地へ送る!!」

侍女の効果に『1ターンに1度』という制約は無く、この手順は枚数が許す限り連鎖していく。そして、燐路の墓地にはあつと言う間に——。

「2枚目の侍女の効果発動!! 同様に3枚目の侍女を落とし、最後にその効果で《ラヴアルのマグマ砲兵》を落とす!! 更に魔法カード《真炎の爆発》を発動!! 自分の墓地から守備力200の炎属性モンスターを可能な限り特殊召喚する!! 俺は5体のラヴアルを特殊召喚ッ!!」

燐路の咆哮と共に、墓地を司る紫の魔法陣から紅蓮の炎が噴出し——
—眩いばかりの熱量と輝きを持った炎を背景に5つのシルエツトが浮かび上がった。

《ラヴァル炎火山の侍女》

☆1 / 炎属性 / 炎族・チューナー・効果 / ATK 1000 / DEF 2000

《ラヴァル炎火山の侍女》

☆1 / 炎属性 / 炎族・チューナー・効果 / ATK 1000 / DEF 2000

《ラヴァル炎火山の侍女》

☆1 / 炎属性 / 炎族・チューナー・効果 / ATK 1000 / DEF 2000

《ラヴァルのマグマ砲兵》

☆4 / 炎属性 / 炎族・効果 / ATK 1700 / DEF 2000

《ラヴァルのマグマ砲兵》

☆4 / 炎属性 / 炎族・効果 / ATK 1700 / DEF 2000
「俺は☆4のマグマ砲兵2体に、☆1チューナー炎火山の侍女をチューニングッ!!」

炎髪の少女が祈りを捧げ現れた緑輪が、2体の屈強な岩砲兵を束ねていく。

「天上天下、唯我独尊!! 絶望の魔槍よ、ムカつく奴らをブツ殺せ!!」
パキパキ、と熱せられていた空気が凍てついていく。

身を裂くような暴風と共に雄叫びを上げたのは、三つ首の巨竜。

「シンクロ召喚ツ!! 《氷結界の龍 トリシューラ》!!」

《氷結界の龍トリシューラ》

☆9 / 水属性 / ドラゴン族・シンクロ・効果 / ATK 2700 / DEF 2000

現状の隣路のデッキの中で、最も強力なシンクロモンスターがフィールドに降り立った。

だが、正確に言えばまだ分からない。伏せられたカードの内どちらかが召喚反応である可能性は十分にあるからだ。だからこそ隣路は早々にトリシューラを召喚した。

(召喚反応罫を使ってくればそれでいい、もしそうでないなら儲けモンだ——)

相手にしてみれば、場と手札を含めカードが6枚しか無いというこの状況であれば、場はおろか手札のカードを除外してくるこのカードの召喚は確実に止めてくる筈だ。

奈落か、激流か。そのどちらかならトリシューラの効果までは防げない。

鬱陶しい《神》が何か口を挟むなら、その多大なコストを道連れに出来る。

手札に《エフェクト・ヴェーラー》があるかもしれないが、それならそれで構わない。先にコチラの双頭を疲弊させておけば、それだけ姉の煽りが動きやすくなる。

(さあ……どう来る……?)

燐路がこのとき冷静であったなら。あるいは、ほんの少しでも【三幻魔】について知識があつたなら——結果は少し変わっていたのかもしれない。

だがそれも所詮は可能性の一つ。決定付けられた運命は、そんな些細な可能性など無情に塗り替えていく。

「愚かな……この瞬間、ワシはリバースカード《デモンズチェーン》を発動!! トリシューラの効果と攻撃を封じる……!!」

想定の外から『何故か』外れていた、最悪のカードが氷龍の前に立ち塞がった。

効果を封じ、かつ攻撃も封じる……トリシューラはこの時点で、少なくとも『アドバンテージ』を取る事が出来ないデクの棒と成り果ててしまったのだ。

(チツ、よりによつて厄介なモンを……)

頭に血が上り過ぎていたのか?

何でこんな可能性すら見通せなかったのか?

そもそも……このターンでトリシューラを召喚したのは正しかったのか?

「燐……」

「ッ、まだ終わりじゃねえ!! 俺は手札から《フレムベル・パウン》を通常召喚!!」

《フレムベル・パウン》

☆1／炎属性／炎族・効果／ATK 2000／DEF 2000

弟の様子がおかしいことに気が付いたのだろう、煽里は声を掛けようとしたが、燐路はソレを振り払うかのように新たに炎を纏う猿のモンスターを召喚した。

「シンクロだけが能じゃねえぞ!! 俺は☆1の《フレムベル・パウン》と《ラヴアル炎火山の侍女》2体でオーバーレイ!! 3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!!」

炎を纏う3つの魂が飛び上がり、螺旋を描いて宙を昇る。

その眼下に渦巻くは、まるで水面のような虹色の輝きを放つ。

「熱き闘志の雄叫びが、眠れる魂すらも震わせる……エクシーズ召喚!! 現れる、《No. 54》ツ!!」

光の爆発中、刻まれる『54』刻印。

フィールドに現れた心臓を思わせる真紅のオブジェは、脈打つ鼓動と共にその牙を、腕を成し——金色の鬣をなびかせる灼熱の獣闘士へと姿を変えた。

《No. 54 反骨の闘士ライオンハート》

★1／地属性／戦士族・エクシーズ・効果／ATK 1000／DEF 1000

「フン、《No.》か……」

つまらなそうに鼻を鳴らす双頭の男だったが、それ以上のアクションは無い。ならばと燐路はお構いなしに攻撃宣言へ突入した。

「ただじゃ転ばねえ……バトルだ!! ライオンハートで裏側守備表示のモンスターを攻撃ツ!!」

たった攻撃力1000のモンスターではあるが、その拳は正体不明のモンスターへと何のためらいも無く叩きつけられた。

何故ならば、ライオンハートにはORUを消費することで相手に戦闘ダメージを反射できる効果があるからだ。

例え守備力が高いモンスターが壁として伏せられていたならむしろ好都合——しかし、そんな燐路の思惑はまたしても外れることとなる。

「カカカ……伏せられていたのは《ファントム・オブ・カオス》、その攻撃によつて破壊される。良かったのう？」

《ファントム・オブ・カオス》

☆4 / 闇属性 / 悪魔族・効果 / ATK 0 / DEF 0

「なっ——!?!」

裏返った黒い塊のようなモンスターが破壊され、燐路が驚きの声を上げた。

ファントム・オブ・カオスは墓地のモンスターを除外することで能力をコピーするモンスターだ。

例えばダメージを受けるにしても、1ターン目から壁として伏せるのはあまりにも稚拙なプレイング。伏せに《デモンズ・チェーン》があったなら尚更と言える。

「……俺はこれで、ターンエンドだ」

相手の狙いが掴めないまま、燐路は歯を鳴らしながら仕方なしに呟いた。

燐路のターン終了を受け、今度はもう1人の双頭の男が動き出す。

「ワシのターン。ドロ……カカカ、魔法カード《手札断殺》を発動!! お互いに手札を2枚捨て、2枚カードをドロ……さあ、お主も捨てて貰おう」

「チツ……2つに増えてうるせえ口だな」

何が面白いのか、効果処理の最中も双頭の男はニヤニヤと顔を歪めて燐路の顔を眺めていた。まるで羽虫を弄ぶ幼子のような、純粹な悪意を滲ませながら。

「ほらよ、効果処理は終わったんだ、さっさと——」

「なれば、ワシはカードを3枚伏せてモンスターをセット、ターンエンドだ」

何を展開するでもなく、またしても場に罠を増やしただけ。

どちらかが守りを、どちらかが攻めを担当しているわけでもない。あっさりターンを受け渡してきた双頭の男達に、燐路は思わず聞き返した。

「——何だど?」

「聞こえんかったか？ ターンエンドだ。お主はその年で大分耳が遠いようだな」

「生憎と、俺はテメエらみたく無駄に4つも付いてねえからな!!」

だが、何にしろこれはチャンスだ。

次のターンで煽里が魔法・罫を一掃できる何かを打つ事が出来れば……いや、例えそれが叶わずとも、こちらがモンスターで圧殺する手段の方が罫の数より圧倒的に多い。向こうの展開速度を考えれば、もう勝利したも同然だ。

「飛ばせよ、姉貴」

弟のそんな短絡的な思考を感じ取ったのか、煽里は短く溜め息を付いた後、運命の第一手を引き抜いた。

「私のターン、ドロー……私はフィールド魔法《炎王の孤島》を発動」
暗黒の瘴気に塗れた海底遺跡の底が一転、ひと時の幻想によって周囲の景色が南海の孤島へと姿を変えていく。しかし、その空はどういう訳か重く、鉛色にくすんでいた。

「その効果により手札の《炎王獣 ヤクシヤ》を破壊し、デッキから《炎王獣 バロン》を手札に加え、更に手札で破壊されたヤクシヤの効果を発動。手札の《炎王神獣 ガルドニクス》を破壊、墓地へ送ります」
孤島の火山が唸りを上げ、真っ赤な血潮を吹き上げる。

その貫い火を移していくように、煽里の手札は次々と炎に巻かれ破壊されていく。

「手札から通常召喚、《炎王獣 バロン》……何も無ければターンを続行します。バトル、バロンで伏せモンスターを攻撃」

《炎王獣 バロン》

☆4 / 炎属性 / 獣戦士族・効果 / ATK 1800 / DEF 200

地を揺らし、赤肌の獣戦士が鼻息を鳴らしてフィールドへと降り立つ。持ち主から静かな怒りの炎を貰い受け、彼の拳は何の抵抗も無く伏せモンスターに叩きつけられた。

反転し、甲高い断末魔を上げて墓地へと沈んでいったのは……またしても低ステータスのモンスターだった。

《サクリファイアス・ロータス》

☆1／闇属性／植物族・効果／ATK 0／DEF 0

「……手札から速攻魔法《炎王炎環》を発動。場のバロンを破壊し、墓地からガルドニクスを特殊召喚します」

《炎王神獣 ガルドニクス》

☆8／炎属性／鳥獣族・効果／ATK 2700／DEF 1700

赤銅の獣戦士が命を散らせ起こした紅蓮の粉塵の中を舞い、不死の炎翼が輪廻を祝福するように咆哮を上げる。その鋭い眼光はすぐさま、目の前の『敵』へと向けられた。

「……攻撃反応も無し、ですか。これならば貴方達よりも教養のある決闘者を知っています。先程地の底へ落ちていったあの子達の方が……余程」

炎王の神が翼を広げ、太陽と見間違ふほどの輝きを放つ。

開かれた嘴に収束する炎の標的を定め、煽里は腕を振り下ろした。

「バトル、ガルドニクスでダイレクトアタック——!!」

「さて……早いトコ終わりにしようぜ？ ああは言ったが、あの姉弟じゃ幻魔の力にどこまで持ちこたえられるかわからねえしな」

「……見かけによらず冷血な男だ。追い込まれているのは貴様の方であらう？」

そう言うクラドに慶爍は「何を言い出すかと思えば」と鼻で笑って返した。

フィールドを見れば、既に慶爍じぶんのカードが所狭しと展開されている。【炎星】の特徴とも言える《炎舞》はそれぞれ《天キ》《天枢》《天権》の3枚が発動され、場の『炎星』モンスターは攻撃力を500ポイントアップさせている。

《炎星侯―ハウシン》

☆6／炎属性／獣戦士族・シンクロ・効果

ATK 2200↓2700

《炎星皇―チョウライオ》

★3 / 炎属性 / 獣戦士族・エクシース・効果

ATK 2200↓2700

《魁炎星王―ソウゴ》

★4 / 炎属性 / 獣戦士族・エクシース・効果

ATK 2200↓2700

加えて、切り札らしき《スクラップ・ツイン・ドラゴン》も先のターンで葬ったばかり。何か策を講じているにしてもクラドの手札は2枚と何ともか細い線だ。

それに比べて、慶燦の手札には仮に《ブラックホール》と《ハーピイの羽根箒》を受けても再び優位な場を構築できるだけのカードが握られていた。

「――終わりにするのは私の方だ、貴様には既に希望など無い」

「さて、そいつはどうかな？」

これだけの戦力差があつて尚「ハツタリ」を装い続ける男に、慶燦は僅かに哀れみの色を覗かせる。

「強がりはやせ。貴様のような力無き者達こそ、我々が作り上げる

『デュエル無き世界』で生きれば良いのだ」

「デュエル無き世界……ね。そんなモンが本当にあるなら、俺も賛成だけだな」

「……ほう？」

予想外の返答に、慶燦は興味深そうに聞き返した。

この男が何を知っているのかは分からないが、上手く丸め込めば同志として取り込むことが出来るかも知れない。そんな考えを過ぎらせた慶燦に向けられたのは、冷たく深い怨恨に濡れた、得体の知れない十二かの眼光だった。

「――だけどな。お前らが言うその『理想』はあくまでお前らの都合の良い世界ってことだ。それは結局、デュエルが招く『破滅』の1つに過ぎねえんだよ」

その、まるでこの忘却の青の下で眠る泥のような怨嗟は、慶燦個人

に向けられているものではなかった。彼が憎しみを向けるのは、特定できる『誰か』ではなく、もつと先にある漠然としたモノ――。

背筋を鷲づかみにされそうな悪寒を振りほどき、慶爍が反論を掲げる。

「デュエルが招く破滅、だと？ 確かに幻魔の力は人に災いをもたらすモノだ、だがそれはより良い未来に進むための一時的な試練に過ぎぬ。それが破滅と言うのなら貴様の――」

「仮にお前らの望み通りに事が運んだとして。その『先』を想像したことはあるか？」

慶爍の『理想』は、クラドの声に遮られた。

「その先、だと？」

「仮に幻魔がデュエルモンスターズを喰い尽くしたとしてだ。本当にソレで全てが終わると思うのか？ お前らが天下を取ったその後は？ 何も無いって、そう言い切れるのか？ デュエルモンスターズが行き着く『先』は、そんな優しいモンじゃねえぞ」

クラドは目を閉じながら、どこか皮肉めいた口調で続けた。

「永遠に続く闇に飲まれる破滅。行き過ぎた加速が招く破滅。異世界が衝突し消滅する破滅……どれもこれも、この世界で生きる俺らにや想像すら出来ないぜ？」

理想を求める慶爍には理解すら出来ない話に閉口していると、クラドは少し間を置いてから何か思い出したように呟いた。

「……なあ、アンタ。ミツバチの話知ってるか？」

「貴様……ふざけているのか？」

「ユートピアにはミツバチの巣を襲って食い散らかす『スズメバチ』って大型の蜂がいてな。ときには人間だって襲う凶暴な連中なんだが……ユートピアで育ったミツバチは、昔からコイツらに何度も襲われたせいでちゃんと『対処法』を持つてんだ。自分たちの巣を見つけた『スズメバチ』の偵察を、集団で取り囲んで『熱殺』する……自分たちは死なず、かつスズメバチだけが死ぬような熱に調節してな。偵察の口を封じちまえば、後から本隊が来ることも無えからな」

「……脈絡も無く、一体何の話をしている」

「まあ聞けよ。んで、そのミツバチなんだが……例えば他の大陸から持ってきた『よそ者』のミツバチをユートピアで繁殖させるとだ、『スズメバチ』の対処法が分からない『よそ者』のミツバチは成すすべなく全滅しちまうらしい。その逆も然りだな、ユートピアから『スズメバチ』が他の大陸に流れたら一体ミツバチはどうなるか……」

「何が言いたいッ!!」

痺れを切らした慶燦が声を荒げると、クラドは嘲笑を浮かべながら答えた。

「——俺らも『よそ者ミツバチ』も同じってコトさ。本来遭遇する筈の無かった『スズメバチ』に対しての対処法が分からない。来るべき脅威に対して何の免疫も持ってないんだ。アンタだって知らない訳じゃねーんだろ、デュエルが異世界から持ち込まれた異物だってことくらいは、さ?」

「……………」

押し黙る慶燦に、クラドは畳み掛けるように言葉を投げかける。

「俺の言いたいことは分かるだろ? 俺たちが『よそ者ミツバチ』ならデュエルが招く破滅は『スズメバチ』だ。アンタらにも何となく想像がついたろ? アンタらが『一匹のスズメバチ』を手懐けたとしてだ、その向こうに何千、何万の破滅が潜んでいると思う?」

両手を広げ、クラドはやれやれと深く溜め息をつく。

「デュエルモンスターズは素晴らしい、大いに結構じゃねーか。けどな……デュエルが向かう先には必ず『破滅』が伴う。『オリジナルの世界』じゃどんな破滅だろうが何度も『英雄』が押し返してくれたんだろうな。だがそれをアンタらに、俺たちの世界の『英雄』に同じ役目を任せられるのか?」

慶燦にとつて——僅かながらこの世界の成り立ちを知る者にとつて、クラドの言葉はどこか現実味を帯びていたが、理想の為に全てを捨てた彼にソレを認めることは許されなかった。

「……………」この世界でデュエルが蔓延ったことで世界が崩壊すると? 下らぬ!! 何を根拠にそんなことをのたまう!?!」

「根拠ならあるさ。俺はその『破滅した未来』からわざわざ戻ってきた

んだから」

その言葉に、慶爍は愕然と目を見開いて聞き返した。

「……まさか貴様、《時械神》の力を——!？」

「残念だが、ありやもう俺の上司が使っちゃまつてる。時間旅行をした
いなら他所をあたってくれ」

ガラガラと崩れる何かが慶爍の胸の内で音を立てる。

その怒りの衝動がクラドに向けられると同時に、タイムアップで慶
爍のターン終了を告げるブザーがディスクから鳴り響いた。

「……つと、話が長くなつたな。俺のターン、手札から《スクラップ・
コング》を通常召喚！」

《スクラップ・コング》

☆4 / 地属性 / 獣族・効果 / ATK 2000 / DEF 1000

先のターンで破壊された《スクラップ・ツイン・ドラゴン》の残骸
である鉄屑が集合し、屈強な猿獣の形を成した——かと思えば、ソレ
は即座に爆破し弾け飛んだ。

「このカードが召喚に成功した時、このカード自身を破壊する。こい
つが破壊され墓地へ送られた場合、墓地から『スクラップ』モンスター
を手札に回収出来るが……今は後回しだ。今は『コイツ』を出してや
らないと、な」

クラドの口端がニヤリと吊り上る。

スクラップ・コングが爆散した中心に、何か他とは毛色の違う鉄の
塊が浮いていた。

「自分場のモンスターが破壊されたとき、手札からコイツを特殊召喚
できる」

光沢のある銀色を放つその鉄塊は、1つ2つと数を増やしてい
く。

モンスターの効果破壊をトリガーとして特殊召喚されるモン
スター……慶爍が知るソレは《森の番人グリーン・バブーン》というモ
ンスターだったが、そのモンスターの召喚時にこんな不気味な演出は
挟まれなかった筈だ。

ならば……このモンスターは何だ？

「何だ、こいつは……」

「――破滅のカタチの、その内の1つさ。皮肉なモンだろ？」

鉄塊の『眼』が開く。

その奥で輝く、緑色のコアの光に浮かび上がったのは『∞』のシンボル。

5つの鉄塊は列を成して飛び上がり――やがて1つとなって重くなった。

《機皇帝ワイゼル∞》

☆1 / 闇属性 / 機械族・効果 / ATK 2500 / DEF 2500

片腕に刃を携えた、『スクラップ』達の形状とは程遠い流線の機械巨人が紅く眼を光らせる。巨人に見下ろされた慶爍は、原始の恐怖に突き動かされ一歩ずつ後退していく。

「馬鹿な……これが《機皇帝》だ?! 何故、貴様がソレを……!!」

「何故も何も。アンタらと同じようなコトをした結果さ。間に合わなかったから、こうして戻ってきてるんだけど……な」

ぴたり、とクラドの指が標的を定める。

「ワイゼルの効果発動。1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を装備カードとしてこのカードに装備する……『シンクロ・アップ ソープション』!」

ワイゼルの胸部から解き放たれた無数の緑光が、まるで触手のように《ホウシン》を絡めとり、そのまま胸部へと取り込んでいく。

《機皇帝ワイゼル∞》

ATK 2500 ↓ 4700

「ワイゼルの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。バトルだ、ワイゼルで《ソウコ》に攻撃!」

敢然と構える猛将へ、鋼鉄の巨人が炎を纏った刃を振り上げる。

だが、未知の恐怖を前にしたとしても慶爍とて決闘者だ。すぐに伏せていたカードを発動させ迎撃を試みる。

「クツ……ダメーjistステップに速攻魔法《禁じられた聖槍》を発動!!
この効果で装備カード扱いとなった《ハウシン》が無力化されれば、例
え機皇帝といえど——」

「残念だけどな、その効果は無効だ。ワイゼルは1ターンに1度、相手
の魔法カードの発動を無効にして破壊する。更に俺は、この効果に
チェーンして手札から速攻魔法を発動!」

慶爍が手に持つ《聖槍》のカードが砕かれると同時に、ワイゼルの炎
を纏った刃に更に緑光のラインが葉脈のように浮かび上がる。

「……リミッター、解除だと……!?!」

《機皇帝ワイゼル∞》

ATK 4700↓9400

全ては運命の流れの中で。

スズメバチ
破滅の一撃は、理想の中に浮かぶ一人の男を軽々と葬った。

「……悪いな、オッサン。これが絶望ってやつだ」

【慶爍】

LP4000↓0

第61話 混沌の果て

煽里の宣言と共に放たれた炎ガルドニクス王神獣の炎は、確かに異形と化した男達を焼き尽くさんと唸りを上げた筈だった。

だが、そんな怒りの炎に満ちた姉弟の瞳に映ったのは。

「クカカ……伏せカード発動、《ヒーロー見参》!!」

悠然と立ち上がる、相手の伏せカードだった。

(やはり、一筋縄では——)

一瞬、煽里は《ミラーフォース》のような攻撃反応罠かと身を固くしたが……突きつけられたソレは『とあるダーク・ヒーロー』が描かれた、全く予想外のカードだった。

「このカードは相手の攻撃宣言時に発動し、相手に自分の手札を1枚選択させる。それがモンスターだった場合、自分フィールドに特殊召喚できる。とはいえ、ワシらの手札は1枚だけだがのお」

「……成程、その手札が幻魔という訳ですか?」

「カカカ、精進が足らぬの煽里。幻魔がこのようなチャチなカードで操れば苦労などせぬわ」

「ならば……単なる上級モンスターを召喚し、壁にするつもりで?」

僅かに感じた焦燥を拭い、煽里は手札事故じみた相手の行動に嘆息をつきそうになった。

このターンもダメージを与えることが叶わなかったのは痛手であつたが……相手のフィールドと手札を見る限り『時間の問題』であることは火を見るよりも明らかだ。

それに自分が手を下さずとも、頭に血が上った弟が強烈な一撃を見舞ってくれるだろう。

(いくら幻魔といえど、フィールドに現れなければどうということは……ない……)

煽里の糸目が僅かに嘲笑の色を滲ませる。

その思考が、油断が『有り得ないモノ』だと気付かないまま。

「壁……のう?」

「お主らが《こやつ》を黙らせる事ができれば……それもまた真まことかも

しれぬがな？」

カードの効果によって強制的に選択された《1枚きりの手札》が、ゆつくりと異形の男のディスクへと滑り落ちていく。

「さあ我がフィールドに現れるが良い……破滅の導き手よ!!」

漆黒色の膜がついた翼を広げ、心すら鷲掴みにされそうな『目』を向け。

男達の身体から滲み、未だ空間に満ちている闇の瘴気を糧として、ソレは現れた。

《ユベル》

☆10／闇属性／悪魔族・効果／ATK 0／DEF 0

「攻撃力、0……？」

デュエルモンスターズにおいて『攻撃力』は強さを測る物差しでないことは重々承知していながらも、煽里の口からついて出たのはその一言だった。

男性とも女性ともつかない身体つきに、赤紫と黒を基調としたカラーリング。翼を広げた姿もどこか宗教的な『悪魔』を想像させるソレは、取り返しのつかない『どこか』へ誘うようにクスクスと笑みを浮かべている。

本能的に危険を感じ取った煽里だったが、そんな彼女とは対照的に煽路はつまらなそうに鼻を鳴らした。

「……悪シユミなカードだぜ。そいつが『ヒーロー』ってガラかよ？」
「クカカ、ワシらにとつてはこの上ない『英雄』じゃよ」

そう豪語した男達のフィールドで笑みを浮かべる悪魔は攻撃表示。

光属性でないこのカードが攻撃表示で存在する理由は、残された伏せカード3枚の中にサポートカードが含まれているか、あるいは。

「おい、姉貴。あんなザコさっさと蹴散らして——」

「ガルドニクスのバトルが巻き戻ったことで、私はバトルフェイズを終了。そのままターンエンドします」

「なっ!? バカ姉貴、何やってんだ!!」

「バカは貴方の方。カードの効果はよく確認しなさいと教わったでしょう」

「……カカカ。少しは『教育』の成果があった、ということかのかの?」
煽りの判断に、異形の男達はパチパチと手を叩きながら嗤った。

「そのカードは……戦闘破壊耐性を持ちながら相手へ反射ダメージを与え、更に効果で破壊されると何らかのモンスターを特殊召喚する。そうですね?」

「っ、そんな効果があったのかよ……!!」

忌々しげな燐路の視線を、攻撃力0の悪魔はニヤリと意地の悪い笑みで返した。

「幻魔にばかり気を取られていましたが、厄介な伏兵を紛れさせていたようですね」

「あの短い時間でよくそこまで判断したものだ……カカカ、見れば中々に器量も良い娘ではないか。このまま幻魔の糧とするのは少々惜しくなってきたな?」

「……みすみす餌になるつもりはありません。それよりも早くターンを進行して下さい、こちらは既にターン終了を宣言しています」

「フン、言われずとも……ワシらのターン!!」

男のドローと同時に、ズンと得体の知れないプレッシャーが押し掛かる。

(ツ!? 何、今のは……!?)

この瞬間に何か決定的な『運命』が決定されてしまったとしても、言わんばかりに。

ぎよろりと剥かれた4つの目が、焦点すら定まらぬまま姉弟を縛りつけた。

「……カカカ!! 引いた、引いたぞ!! やはり破滅の力はワシらの手の中に宿ったのだツツツ!!」

「何を……!!」

「ワシらはここで伏せられていた2枚のカードを発動させる!! 止められるものなら止めてみるが良いツ!! 罫カード《融合準備》フュージョン・リザーブ!!」

男が発動させたのは、前のターンにもう片方が伏せていたカードだった。

それも、全く同じカードを2枚。

「エクストラデッキの融合モンスター1体を見せ、そのモンスターにカード名が記された融合素材モンスター1体をデッキから手札に加える!!」

そう言っただけから取り出されたのは、紫色の枠を持つ融合カード。

「一足先に見せてやろう、世界を喰らう破滅の神の姿を……ワシはこのカード、《混沌幻魔アーミタイル》に記されている《降雷皇ハモン》《神炎皇ウリア》の2体を手札に加える!!」

「混沌、幻魔……!?!」

対峙する煽里も燐路も、言葉を無くして立ちすくむ。

まだフィールドに降り立ってすらいないにも関わらず、そのカードから放たれるプレッシャーはあまりに色濃く、重厚だった。

「更に魔法カード《手札抹殺》を発動!! ワシらの持つ3枚の手札と……前ターンプレイヤーである煽里、お主を手札を全て捨て、互いにその枚数分だけドロウする!!」

「手札抹殺!? 何を……ッ!?!」

困惑する煽里の目に映ったのは、たった今手札に加えられたばかり三幻魔が墓地へと送られていく光景だった。

(幻魔皇ラビエル……既に手札にあったのですね)

手札に揃っていた幻魔。それを墓地へ送ったということは、伏せられているカードは恐らく蘇生系のカードだろう。

三幻魔降臨を止める手段はもはや無い。少しでも策を練る為に、煽里は素早く『公開情報』となった三幻魔のカードに目を通した、が――幻魔のカードに記されていた効果には、特殊召喚モンスターによく見られる厳しい『召喚制限』が掛けられていたのだ。

「なっ……そんな!?!」

これでは例え召喚制限を満たしていたとしても、ましてや手札から直接墓地へ送られていては蘇生など不可能。いかに凶悪で破滅を呼

ぶカードといえど、自身に架せられた『ルール』には逆らえない。ならば、何故——？

「……カカカ、そうかそうか。お前も暴れたいか？」

渦を巻く煽里の疑念とは裏腹に、新たにドロローしたカードを確認した異形の男はまるで飼い猫を愛でるような声色で《ユベル》へと問い掛けた。

その異様な様子に、燐路は精一杯の虚勢を張って舌打ちして見せた。

「チツ、気色悪い声だしてんじゃねえーよジジイ」

「よく吼える小猿だ、もうじきにその口を縫い合わせてやろう。ワシらは手札から魔法カード《死者への手向け》を発動!! 手札を1枚捨てることで、フィールドのモンスター1体を破壊する!!」

「けっ、古臭えカード使いやがっ……」

破壊の標的として選ばれるのは恐らく戦闘破壊が《ライオンハート》だろうと燐路は考えていたが。

(いや——違う!?)

——否、直前に煽里が読み解いた《ユベル》の効果が脳裏を過ぎった。

「ワシらが選択するのは——自分フィールド上の《ユベル》だ!!」

苦痛の叫びと共に、異形の悪魔が砕け散る。

ニヤリと、呪詛のような冷たい微笑を姉弟に残して。

「この瞬間——破壊された《ユベル》の効果発動!! 墓地よりこのモンスターを特殊召喚する!!」

(墓地……!?! そうか、前のターンで《手札断殺》を撃ったのはこのためか!!)

ユベルは元々、タッグパートナーであるもう1人の男が所有しているカード。

モンスターを呼び出すにも、リクルーターのようにデッキから『だけ』ならユベルの効果も不発だったのだが……互いの共通エリアである墓地に、既に特殊召喚の下準備を済ませていたのだ。

全ては男達の、四方老の手の内で。

異形の男の喘い声と共に、闇の瘴気が渦を巻き墓地である魔法陣から『何か』が引きずり出てくる。

「恨みの深淵より現れよ、《ユベル―Das^ダス・Abscheulich^{アブシユ}Ritter^{リッヒ}ター》!!」

ズルリ、と墓地の深淵より這い出てきたのは、まるで自分の操る主を写したような双頭の竜。漆黒の両翼には確かに《ユベル》の面影はあったが、もはやその姿は完全に別のものと化していた。

《ユベル―Das Abscheulich Ritter》

☆11／闇属性／悪魔族・効果／ATK 0／DEF 0

「破壊されて進化するモンスター……だと?」

「まだまだ!! ワシは更に、守備表示で特殊召喚した《ユベル―Das Abscheulich Ritter》に対して魔法カード《シールドクラッシュ》を発動し破壊する!!」

「何ッ!？」

召喚されたばかりの双頭の悪魔竜が、再び墓地の深淵へと沈んでいく。

「まさか……まだ『先』があるっていうのかよ……!？」

「クカカカ、その通りだ!! 我がもとへ来い、深き悲哀に染まりし究極の悪夢よ!!」 《ユベル―Das Extremier Trauring Drachen (ダス・エクストレーム・トラウリヒ・ドラツヘ)》!!

4枚の翼をはためかせ、双頭竜の姿を模した異形の悪魔が深淵より舞い上がる。

漆黒と赤紫の体色とそのシルエットは、まさに幼い子供が描く原初の『悪夢』、そのカタチ。

悪夢はゆつたりと宙に居座ると鋭い爪を不気味に光らせ、身体のうちこちで蠢く無数の『顔』が姉弟へと視線を向けた。

《ユベル―Das Extremier Trauring Drachen》

☆12／闇属性／悪魔族・効果／ATK 0／DEF 0

「レベル12の……最上級モンスターだと……!？」

「にもかかわらず攻撃力は0……このモンスターもやはり何か、特殊な——」

「お主ら、『主賓』の存在を忘れていているわけではあるまいな？」

そう言つて瞳を剥き嗤う異形の男に、姉弟は背筋を凍らせた。

姉弟の中にある『紅い鎖』の力が警鐘を鳴らすほどに、目の前の悪魔は異様なプレッシャーを放っているのだ。三幻魔のカードを捨ててまで召喚に成功したこのカード以上の、何を出そうというのか——。

「ワシは!! 伏せていた罫カード《リビングゲッドの呼び声》を発動、墓地より《ファントム・オブ・カオス》を特殊召喚する!!」

《ファントム・オブ・カオス》

☆4 / 闇属性 / 悪魔族・効果 / ATK 0 / DEF 0

「……まさか、テメエツ!？」

ファントム・オブ・カオスは墓地のモンスターをコピーするカード。

蘇生不可能な三幻魔を墓地へ送った意味が、ようやく繋がった。

「更にモンスターが特殊召喚に成功したことで、速攻魔法《地獄の暴走召喚》を発動!! ワシは《ファントム・オブ・カオス》をデッキ・手札・墓地から可能な限り特殊召喚する!! ほれ、お主等もそこで突っ立っているモンスターを好きだけ特殊召喚して良いぞ?」

「……私は、デッキから《炎王神獣ガルドニクス》を1体、守備表示で特殊召喚します」

《炎王神獣 ガルドニクス》

☆8 / 炎属性 / 鳥獣族・効果 / ATK 2700 / DEF 170

0

他に姉弟の場に存在するモンスターは《トリシューラ》と《ライオンハート》のみ。

エクストラモンスターである彼らを特殊召喚することは、無論不可能だ。

「さて……3体揃った《ファントム・オブ・カオス》で何をするのか——物分りの良いお前なら分かっておろう、煽り?」

「……墓地の三幻魔をコピーしても、所詮は贋作です。いくら強力な

効果が使えたとしても《ファントム・オブ・カオス》が与えられる戦闘ダメージは0……ユベルの反射効果を使つたとしても、私達のライフを削りきることは——」

「それは、どうかの？」

瞬間、ひやりとした何かが燻里の背を伝った。

いや……そんな筈はない。

仮にあのカードを、融合モンスターを呼び出すには肝心の『あのカード』が足りない。

今、男の手札にも、場にも、既にカードは1枚も残されていない。なら——。

「ワシは《ファントム・オブ・カオス》の効果で、墓地の《幻魔皇ラビエル》《降雷皇ハモン》《神炎皇ウリア》を除外し、それぞれの名前と効果をコピーする!! 仮初の身にて顕現せい、破滅の化身よオ!!」

《幻魔皇ラビエル》(ファントム・オブ・カオス)

☆10/闇属性/悪魔族・効果/ATK 4000/DEF 4000

《降雷皇ハモン》(ファントム・オブ・カオス)

☆10/光属性/雷族・効果/ATK 4000/DEF 4000

《神炎皇ウリア》(ファントム・オブ・カオス)

☆10/炎属性/炎族・効果/ATK 0/DEF 0

ATK 0↓1000

DEF 0↓1000

地を砕き、雄叫びを上げ。

それだけで命を奪いかねないほどの雷と業火を渦巻かせながら、遂にそれらは姿を現した。

「まさか、そんな……!?!」

手札ではなく、例え贗作^{コピー}であつてもフィールドに揃える必要があつた、その意味。

融合を必要としない融合召喚——例こそ少ないが、確かにそれは存在していたのだ。

「ワシは、フィールドに並んだ三幻魔をゲームから除外することで、エクストラデツキよりこのカードを融合召喚するツ!!」

男達は両腕を高く宙に掲げ、告げる。

「魍魎従えし、群青の巨魔よ!!」

「雷翻す、黄昏の暗翼よ!!」

「業火渦巻く、真紅の邪竜よ!!」

「混沌の果てに1つとなりて、己が欲望のまま世界を喰らえツ!!」

三色の破滅が、溶けて交わる。

その光景は恐ろしくもあり、そして不思議なまでに美しかった。

「融合召喚ツ!! 産声上げよ、《混沌幻魔アーミタイル》!!」

激しく明滅する白き闇。

その最中から現れたのは——ラビエルの青い半身、ハモンの黄金の翼、ウリアの紅い胸を掛け合わせた異形の巨軀だった。

《混沌幻魔アーミタイル》

☆12／闇属性／悪魔族・効果／ATK 0／DEF 0

「また、攻撃力0……!?!」

最上級モンスターとしては、またしても異例の攻撃力0。

しかしそんな燐路の驚愕に、異形の男はさも愉快そうに答えを返した。

「カカカツ、そう案ずるな。アーミタイルの攻撃力は我がターンのみ、10000まで上昇するのだ……お主らを葬るには十分過ぎるほどの『破滅』であろう?」

「い、10000……だと……!?!」

《混沌幻魔アーミタイル》

ATK 0↓10000

「ツ、それでも……!?!」

それでも。その先の言葉は、出てこなかった。

反射ダメージのある《ライオンハート》以外のモンスターに攻撃したとしても。10000の攻撃力ではライフ8000には届かない『かった』。

混沌幻魔アーミタイルの隣で不気味に微笑む、悪夢ユベルさえいなければ。

「さあ行くぞ……バトルだ!! まずは《ユベル―Das Extrener Trauring Drachen》で《氷結界の龍 トリシューラ》を攻撃!!」

「なっ……!?!」

双頭の顎が開かれ、紅蓮の炎がトリシューラを襲う。しかしその攻撃力は0……だが、デモンズ・チェーンで縛られ、無力化された筈のトリシューラの瞳がその炎と同じ橙色に染まっていく。

やがて自身を縛る鎖を引き千切り——浮遊する悪夢の竜へと、その顎を開いた。

「な、何が——ッ!?!」

「クカカ……『ナイトメア・ペイン』、《ユベル―Das Extrener Trauring Drachen》の効果だ。このカードの戦闘によって発生するワシへの戦闘ダメージは0となり、更に表側攻撃表示で存在するこのカードが相手モンスターと戦闘を行ったダメージステップ終了時、相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与え、そのモンスターを破壊する!!」

トリシューラが放った3本の白熱線は、ユベルが纏う得体の知れないオーラによって乱反射し、燐路達のフィールドへと死の雨となって降り注いだ。

「ぐっ……があああああっ!?!」

【燐路・煽里】LP8000↓5300

あまりの痛みに、燐路は思わず声を上げてしまった。

自分達が行ってきた『闇のゲーム』とは、根本的な何かが違う。

これが——破滅の力?

「く……ん、これは一体……!?!」

「折角、三幻魔が降臨する記念すべきデュエルなのだ。与えられる闇の深さも、極上でなければもう?」

燐路と煽里がダメージから何とか立ち上がると、既に氷の魔槍の龍は姿を消していた。

フィールドには3体と、十分な数のモンスターが残されていたが

……反射効果のある《ライオンハート》はともかく、無防備に攻撃表示で取り残されていたガルドニクスが致命的だった。

「くっ……!!」

「これで最後だ……アーミタイルよ、ガルドニクスに攻撃せよ!!」

『全土滅殺 転生波』!!」

唸り上げて放たれた破滅の波動が、不死ガルドニクスの火鳥を灰に変えていく。

その攻撃を、痛みを、防ぐ手立ては——無かった。

【燐路・煽里】 LP5300↓0

「く……そ……!!」

想像を絶する苦痛に飛びそうになる意識を何とか保ったものの、燐路は力なく地に伏していた。

これも『紅い鎖』の力を持ったが故なのか、自分達が葬ってきた人間とは違ってすぐに命の灯し火が消えることは無かったが——僅かに残った火を消さないようにすることで精一杯で、もはや立ち上がる気力すら残されてはいない。

「クカカ、他愛も無い……だが直接幻魔に魂バを喰われてまだ息があるか、見上げた生命力だな」

「……まだ、だ。もう一度……デュエルを……」

地に拳を打ち付けて、立ち上がろうともがく燐路。

その小さな頭を見下ろしながら、異形の男は何の気無しに踏みつけた。

「がッ……!!?」

「フン、敗者は大人しく地を舐めていけば良い。幻魔の糧という、お主らの役目はとうに終えているのだからな。もつとも……立ち上がったところで、お前は既に牙を抜かれた子犬も同然だがの」

異形の男は燐路のディスクからデッキを抜き取ると、目の前にバラバラとカードをバラ撒いて見せる。

「な……に……!?!」

燐路の瞳が、驚愕に見開かれる。

彼が愛用していた「ラヴアル」のカード達は——何のイラストも、効果も記されていない紙切れと化していたからだ。

「……俺のカードが。一体、何を……?」

「完全に目覚めた幻魔の前では、全てのカードが力を失う。この力がやがて世界を覆ったとき……それこそがワシの、幻想の紅クリム・クローアが栄光を取り戻すための第一歩よ!! クカカカ!!」

「……バケモノが……!!」

己の無力に打ちひしがれ、燐路の目から伝う涙が地を濡らしていく。

先のデュエルで感じた妙な『違和感』が、彼のプライドをより深く抉った。

出来ることならやり直したい。だが、もう一度牙を立てることすら叶わないのだ。

「……ほう、まだ姉の方も息があるようだの……?」

もう片方の異形の男が、倒れたままの煽里へと歩み寄っていく。

その目には元老人らしからぬ、邪な色が浮かんでいた。

「どれ、幻魔のおかげで我が生も滾っていたところだ。戯れに子を孕ませてみるのも面白いかもしれぬな」

艶のある長い黒髪を驚づかみにし、異形の男は人形のような煽里の身体を引き起こす。だらりと脱力した四肢を舐め回すように眺めてから、男は乱暴に胸元に手を伸ばして——。

「止め guardian。女性に乱暴を働くなど——思慮を深め、老いた紳士として恥ずかしくないのですか?」

瞬間、燐とした男の声が響いた。

同時に異形の男の手に突き刺さっていたのは、1枚のカードだった。

「貴様——まだ息があつたか」

透き通るようなブロンドに丈の長い白いコート、加えて長身の甘いマスク。

絵に書いたような美男子——ユーギ・ムトウの微笑が、そこにあった。

「こんな所で落とせるほど、安い命ではないのでね。さて——その姉弟の気が済んだところで次の順番待ちはこの僕です。ディスクを構えて下さい」

ユーギの申し出に、異形の男は下らないとばかりに鼻を鳴らした。

「戯言を……聞いていなかったのならもう一度言おう。このカードの前では、全てのカードが無力に——」

「それは、『この世界のカードなら』というお話です」

《ブラック・マジシャン》。

《E・HEROネオス》。

そう言ってユーギが得意げに見せた彼のデッキのカードは、燐路の「ラヴアル」とは違いしつかりとカードとしての色彩を放っていた。

「貴様、一体——!?!」

「僕はただのコレクターですよ。ただし、これから貴方達を倒し英雄になる——ですが」

言って、ユーギはディスクを構えた。

最新型デュエルディスクの静かな駆動音が鳴り響き、半実体ARの黒いプレートが浮かび上がる。

「ああ、宜しければ貴方達2人ともまとめてお相手致しましょう。僕の相方は残念ですが、もう使い物にならないようですからね」

ユーギが向ける視線の先には、倒れたままピクリとも動かない幼い姿があった。

呼吸の様子も無く、もはやそこに生命としての温かみは感じられない。

「……クカカ、自称『英雄』殿が随分と冷酷なものだな」

「物事に犠牲は付き物です。僕はそんなことで、いちいち歩みを止めている訳にはいかないのでね」

ユーギの言葉に、異形の男達も何か思うところがあったのだろう。

眉を寄せた気難しい表情から一転、狂喜に満ちた表情を浮かべディスクを構えた。

「いいだろう!! 我ら4人で貴様の相手をしてやる!!」

先程まで究極の幻魔と悪夢を従えていたディスクとデツキが、再び牙を剥く。

その様子を満足そうに眺めて、ユーギは口端を吊り上げて言った。

「そうこなくては。では——楽しいデュエルを、始めるとしましょう」

【ユーギ】 LP4000 VS 【四方老】 LP8000

第62話 必然のドロ―

「……っ!？」

ズン、と重たい衝撃に身体を揺らされて、ベルは目を覚ました。何事かと辺りを見回すと、何やら薄暗い中にぼんやりと無骨な岩肌のようなものが見えた。

「おおっ、結構揺れたねえ」

突然投げ掛けられた声に、ベルはハツとして振り返った。

声の方向を見れば、にっこりとヒヨリが笑みを浮かべていた。

「おはよ、起きたみたいだね?」

ここはどこだと、かすかに痛む頭を働かせて記憶を遡る。

そうだ。確か自分は、あの祭壇らしき場所から落ちて――。

「ここは――?」

「んー、遺跡の最深部……とかじゃないかなあ? 脱水も終わってないみたいだし」

ベルが問い掛け終わる前に、ヒヨリはそう言っただけで足元の泥をピチャピチャと弄って見せた。

あれだけの高さから落ちて、なぜ無事で済んだのだろう。

と、ヒヨリが不意にベルの隣を指をさした。

「とりあえず、隣の彼も起こしてあげたら?」

「え……?」

何のことかと、間の抜けた声が漏れ出す。

ゆっくりと視線を向けたベルは、すぐ側にユウの身体があつたことに驚いた。

「ゆ、ユウさんっ!？」

ユウはぐったりと体を横たえていて、その様子からは「生」がとても希薄に感じられた。

ベルは慌てて身体を揺すったが、そんなベルを見てヒヨリはくすりと笑みを浮かべて言った。

「あはは、大丈夫だって! 落ちたっていつても大した高さじゃないし。それよりも幻魔にかじられて元々フラフラだったから、心配する

のはそつちの方じゃないかな？」

「大した高さじゃない、って……」

あの、心臓を掴まれるようなひやりとした感覚を思い出しながら、ベルは僅かに語調を強めた。少なくとも、気楽に「大丈夫」なんて言える高さではなかったのは確かだ。

それでもヒヨリは小首を傾げつつ、幼子を言い宥める母親のように言葉を返した。

「ミドラーシユが消えたのはあの辺りだったし、死んじやうような高さじゃないって」

「ミド、ラーシユ……？」

ヒヨリの口をついて出たのは何故か、聞き覚えのある『カード』の名前だった。

「それって、もしかして——？」

怪訝なベルの視線に、ヒヨリはむんと胸を張って答えた。

「うん、あたしの力でモンスターを召喚してパパパツとね♪ けっこう役に立つでしょ？ ホントはキミをほつといて、彼とデュエルを始めても良かったんだけど」

ヒヨリが言葉を切ると同時、ベルの目の前にカシヤンと投げ出されたのは、見慣れた白いDパッドだった。

「あたしのモンスターが受け止めたときになかな？ 彼のディスクに大きい石か何かに当たったみたい。急に鎖が切れたからどうしたもんかなー、って思ったんだけど」

幸い、装着されていたユウのデッキは無事なようだが、カードをセットするプレート部分は見事にぐちゃぐちゃになっている。いくら不可思議な『闇のゲーム』であっても、ディスクが壊れてしまつてはデュエルを続けることが出来なかったのだろう。

「で、またモンスターが消えて、そこからまた落つこち始めて……大変だったんだよー？」

腰に手を当てながら、ヒヨリはディスクを見やりひとつ溜め息をついた。

「ちらりと横目に向けたその瞳は、さも「感謝のひとつも欲しいな？」

とでも言わんばかりにベルに向けられていたが、ベルの視線は壊れたディスクに釘付けで、深い絶望に染まった視野の中にヒヨリの姿は無かった。

「そんな……」

ヒヨリは少しむつとして頬を軽く膨らましたものの、気を取り直してとひとつ咳払いをしてから、おどけたように明るい声で問い掛けた。

「と、そんな訳で、今度はキミのディスクに鎖を繋がせて欲しいんだ」
怪訝に顔を向けたベルに、ヒヨリは困ったように眉を寄せながらぴつと上を指差した。

「どうもコレ、機械に繋がっていうよりは人間に繋がって感じだし……相手に意識がないと作用しなくてさ。上の方も決着ついたみたいだから、あたしもそろそろ戻らないとね」

「決着、って——」

決着がついたとは、どういうことだ。

ソレを問い掛ける前に、ベルの頭の中では既に答えは導き出されていた。

ヒヨリの口振りから窺えたのは『楽しげな』感情。それが意味することはつまり——。

「うん、負けちゃったみたいだね。センちゃんとりんくん」

ベルは、ふつと目の明かりが消えたような、そんな感覚に襲われた。
(あの二人が、負けた……?)

元は敵対していた間柄とはいえ、ここまで目的を共にして戦ってきた仲間が、それも実力のあつた2人が敗れたという事実がベルに重く押し掛かる。

敗者は幻魔の『糧』となる、とあの老人達は言っていた。恐らく2人の命は既に無いだろう。

自分達がココにいる今、幻魔が押し進む道を阻む者はいない。

そうしたら、外にいる皆はどうなるのだろうか。

アンリエールや藍、それにアユカワ博士達は？

この住居区コロニーに住んでいる人達は？

「と、まあそんな訳で、その人がデュエル出来ないなら早く上に戻りたいんだ。だから、ほんのチョットだけキミの体とディスクを貸してくれない？」

ベルの脳裏に、ふと考えが過る。

ヒヨリが幻魔と戦えば、もしかしたら止められるかもしれない、と。だが、仮に彼女が勝ったとして、それで『危機』は去るのだろうか？

何より、そんなことになってしまえば、もう『彼女』はユウの手の届かない場所に行ってしまう気がする。

——奴は……ヒヨリは俺の師であり、友であり。想い人でもあったいつか聞いた、そんなユウの言葉を反芻しながら、ベルは静かに横に頭を振って答えた。

そして、体の震えを隠して、ヒヨリに向かってディスクを構える。「……すみません。それは全力でお断りさせていただきます」

例え勝ち目がなかったとしても、このまま大人しく、言われるがままにヒヨリを幻魔の元に向かわせる訳には……それだけはできない。

だが、ヒヨリはそんなベルの決意をひらりと受け流すように笑って見せた。

「そっか、じゃあこつちも全力でムリヤリ貸して貰うことにするよ。でも、キミのカードはそんな状態だけど……全力で戦えるのかな？」
「えっ……？」

くすくすつ、と意地の悪い声を出しながら、ヒヨリはベルのデッキを指差す。何を言われているのか分からず、ベルは怪訝に眉を潜めていると……ふと、その違和感に気付いた。

ディスクが、反応していない。デッキをセットしているにも関わらず、デュエルモードへの移行が完了しないのだ。

こんなときにエラーなんて、とデッキを引き抜いて、ベルはその原因に愕然とした。

「何、これ……」

目に飛び込んできたのは、見慣れたカードの鮮やかな色彩ではなく——まるで一面を霧で覆ってしまったかのように真っ白な、紙の束

だった。

今まで一緒に戦ってきた仲間達が、想いを背負った大切なカード達が。全て、イラストもテキストもない無意味な紙札と成り果てている。

「一体、何を——!!」

「あたしは何もしてないよ。幻魔が目覚めたんだし、カードの精霊達はデュエルどころじゃないってコトでしょ?」

「カードの、精霊……?」

目を吊り上げて問い詰めるベルに、ヒヨリはさも怪訝そうに首を傾げて問い返す。

「ああ、そっか。普通の人には見えないんだっけ。精霊はね、何ていうか……カードの電池みたいなモノだよ」

デッキからおもむろにカードを一枚取り出して、ヒヨリは続けた。

「どんなカードにも必ず精霊はいてね。精霊が宿っているから、デュエルモンスターズはその『存在』が成り立ってる。でも三幻魔は今、その精霊達を食べようとしてるからね。精霊達は逃げて、耐えるのに必死で、デュエルにエネルギー使ってる場合じゃないって訳。こんな状態が長く続いたらデュエルモンスターズがどうなるか……あ、それがおじいちゃん達の狙いかな?」

決闘者の生命力のみならず、カードそのものも喰らうという底無し
の破滅。

自分には到底理解の及ばない事態に言葉を失うベルだったが、そこ
ではたと気が付いた。

ヒヨリが片手間で弄んでいたカードには、しっかりと『絵柄』が見
えるのだ。

「そのカード、何で——!?!」

「ん? あー、コレ? ふっふっふ、あたしのデッキの子達はね、よく
分からないけど『こういうコト』に耐性があるみたいなんだ。元々は、
あたし達のいた世界のカードだからかな?」

ヒヨリは得意気にカードをちらつかせると、ふと思い出したように
手を打った。

「あ、それと『アスタリクス』のカードも頑張ってるみたいだね。
ヘレイネ6番達は何ともないみたいだし。キミの10番も、ヴァルキュリア大丈夫なんじゃない？」

言われて、ベルは無意味な紙束となったデッキの中を確認したが……ヴァルキュリアもアユカワ博士から預かった2枚の『アスタリクス』も、今はユウのデッキの中に入っていることを思い出した。

「そんな訳で、やる気満々なところで悪いんだけど。キミはあたしとデュエルすることすら出来ないんだよね」

「……で、でも！ わたしとデュエル出来ないならその紅い鎖だって——!!」

「その辺は大丈夫。キミはあたしの予備のデッキを挿せばいいよ」

ぽん、と投げられたのは、紛れもなく40枚のカードの束が納められたケースだった。しかも、そのどれもがしっかりカードとしての色を保っている。

デュエルすら出来ない、といった手前で何故、わざわざ助けるようなことを——と言いかけたベルに先駆け、ヒヨリは苦笑いを浮かべながら言った。

「つていつてもソレ、ホントに余りのカードを40枚集めただけのデッキだから……たとえ10番ヴァルキュリアを入れたとしても、勝てる見込みはあんまりないと思うけど」

ヒヨリが抜き出していたカードがデッキへと戻され、慌ただしくオートシャッフルされる。シャッフルが終わると同時、ヒヨリはゆったりとした動きでディスクを構え、ベルを真正面から見据えた。

「それでもあたしと——全力で戦ってみる？」

ぞわり、と肌が粟立ち、全身がすくむ。

ヒヨリの大きく丸い可愛らしい瞳は、まるで獲物を狙う蛇のように冷たく鋭い光を放っていた。

「あたしは早く三幻魔と戦いたただけだし、素直に言うコトを聞いてくれたら何もしないであげる。邪魔してくるなら、話は別だけどね？」

正直なところ、自分のデッキを使ったところでヒヨリに勝てる見込

みは薄かった。

それでも刃を向けたのはユウのため、何より幻魔と戦おうとしているヒヨリを少しでも説得する時間が欲しかったからだ。

だが他人の、しかもデツキとしての体を成していないカードの束で戦うとなれば——勝利する見込みはおろか、時間を稼ぐことすらままならない。

きつと1ターンももたずに敗北するだろうことは、ベルにも分かりきった話だった。

皆に送り出されて、やっと追い付けたというのに、何も出来なかった。

心の中で、誰にとも無く「ごめんなさい」と泣き言を漏らしそうになったそのとき、滲む視界の端で、何かかもそりと動いた。

「デツキは……」

ゆらり、と白い人影が立ち上がる。

「戦えるデツキなら、ここに……」

破損したディスクを右手で拾い上げながら、ユウは擦れた声でそう告げた。

「ユウさん……!!」

震えながら、どうにかデツキを引き抜いたその左腕は、痛々しく血が滲んでだらりと力なく下がっている。

腕だけではない。よく見れば、彼の全身を覆う白い衣服にはいくつも血が滲んでいた。

傷一つない自分の身体を見れば、彼が『何』を守ったのかは明白だった。

(わたし……また、助けられてばかりで……)

こぼれそうになった涙は別の涙に重なって、訳も分からずに引っ込んだ。

何を言えばいいのかわからないまま数秒が過ぎて、ベルの琥珀色の瞳に映るユウはうつすらと微笑みながら言った。

「……迷惑を掛けたな。もう、大丈夫だ」

左隣に立つベルの頭を、右手でぽんとひと撫ですると、ユウはヒヨ

リの方へと向き直りつつ口調はそのままにこう続けた。

「……すまないが、お前のディスクを貸してくれないか」

こんな怪我を負いながらも、ユウの瞳はずっと前だけを向いていた。

ヒヨリとデュエルすることだけを、彼女の真意を聞くことだけを道しるべに。こんなにボロボロになってまで、決して揺るがない無表情のその奥に、どれだけの想いが秘められているのだろうか。

だが、ユウの体は素人目で見ても、今すぐ手当てが必要な状態だ。デュエルなど、ましてダメージが現実のものとなる『闇のゲーム』など、させるわけにはいかない。

「ダメです!! そんな体じゃ、きつと——!!」

だが、ベルはそこから先の言葉を出せなかった。普段と同じ無表情の横顔が、どこか焦りと深い悲しみを抱えて、今にも泣き出しそうだったからだ。

ここでユウを引き止めることも、先へ進ませることも、そのどちらともがベルに委ねられていた。ベルは、2人の関係は詳しく知らない。互いがどれだけ『大切な存在』なのか、どんな思い出があるのかさえ。

ベルにとってユウはデュエルを、自分の生きる世界に希望を見せてくれた『大切な存在』だ。もしも本当にユウを想うのなら、ここで彼を引き止めるべきなのかもしれない。

ただ、とベルは思考の歩を反転させる。

もしも、自分がユウと同じ立場だったら。

きつと相手が誰であろうと、必死になって頼んでいたはずだ、と。

「……分かりました」

白紙となったデッキを腰のホルダーにしまいながら、ベルはそのまま、その右手を返してユウの目の前へと差し出した。

「でも——さっきの約束、わたしも一緒に戦う、って約束は守って貰います。わたしが、怪我をしたユウさんのディスク代わりになります」

「……何？」

「ディスクとデッキを着けて戦うのはわたし、ってことです。カード

の使用とタイミングを指示してくれば、わたしはその通りに動きま
す」

「……それがどういうことか、お前は分かって言っているのか？」
ベルは黙って、こくんと頷いた。

ディスクが認識している「プレイヤー」は、ベルということになる。
つまり、紅い鎖の効果によって闇のゲームが発動するであろう、こ
のデュエルでは――。

「怪我をしてるユウさんに、これ以上のダメージを負わせる訳にはい
きません。ディスクを貸すなら、この条件を飲んで頂きます」

「……駄目だ、そこまでお前を危険に晒す訳にはいかない」

「その言葉、そのままそっくりお返しします」

ぴしやり、とユウの言葉を遮って、ベルは続けた。

まっすぐに向けられた琥珀色の瞳に、決して揺るぎはない。

「ちよつとー？ お話、まだ掛かるの？」

言葉を詰まらせるユウへ、不意に声が投げ掛けられる。無邪気に
頬を膨らませ、不満の意を示すかつての『師』がそこにはいた。

もしも彼女が自分なら。自分が彼女なら、きつと。

「……分かった。だがディスクの代わりなんかじゃなく――1人の決
闘者として、共に戦うという意味でなら、だ」

「えっ？」

「俺だけの力ではいつか倒れてしまう、と言ったのはお前だろう？
ならアイツに喝を入れるために、一緒に戦ってくれ」

その無表情から、ふつと優しいな微笑みが漏れだす。

「勿論、全力でな」

「……はいっ！」

僅かに潤んだ声を必死で押さえて、ベルは元気よく返事を返した。
「決まったみたいだね？」

んん、と身体を伸ばすヒヨリに、ユウが向き直りながら答える。

「……ああ。悪いがライフもデツキも共通で、俺達2人がお前の相手
をさせて貰う」

「別にいいよ。1人を相手しているのとあんまり変わらないし。まあ

でも——」

ユウのデッキがセットされたベルのディスクに、紅い鎖が絡み付く。

公平を司るデュエルシステムを介することなく、互いのディスクはデュエルモードへと変形していく。

「2人を相手にしたって、負けるつもりはないけど、ね♪」
ぞくり、と。

ベルは心臓が脈打つのを感じた。

（——違う）

紅い鎖から伝わってくるソレは、かつて一度対峙したときよりも、センリやフルフェイスの男達のものとは根本的な何かが違っていた。単なる数値の優劣ではない、もつと決定的な『何か』が。

「大丈夫か、ベル」

ユウの言葉に、いつの間にか震えていた身体がはっと反応する。

「大丈夫です。まさかこんなに『違う』なんて、思ってたなくて」

「……そうか。巫女なんて大層な名前を貰うだけのことはあるようだな」

そう言ったユウの横顔はいつも通りの無表情で。だが今のベルには、ユウの複雑な感情までまるで手に取るように理解できた。

「……ユウさん。絶対、ヒヨリさんから話を聞かせて貰いましょう」

「ああ、必ず聞き出して見せる」

先攻、後攻を決定付けるランプが灯り、運命を分ける剣が両者の手の中に納められる。

片や、自らの欲望を満たすために。

片や、そんなノイズの中へと声を響かせるために。

「『決闘!!』」

【ユウ&ベル】【ヒヨリ】

「……俺のターン、まずは手札から《ソーラー・エクステンジ》を発

動。《ライトロード・アーチャー フェリス》を手札から捨て、デッキからカードを2枚ドロウする」

ユウの宣言どおりに、ベルがカードを処理していく。ドロウしたカードは《超電磁タートル》《ライトロード・パラディン ジェイン》の2枚。

「そしてその後、デッキからカードを2枚墓地へ送る」

墓地へ送られたカードは《ライトロード・プリースト ジェニス》、《光の援軍》。

「更に、手札から《ライトロード・サモナー ルミナス》を召喚。手札の《超電磁タートル》をコストに、墓地から『ライトロード』モンスター1体を特殊召喚する。俺は——」

（ここでフェリスを特殊召喚すれば、シンクロ召喚ができる。けど、ヒヨリさんのデッキ……「シャドル」は相手の場にエクストラモンスターがいることで強力な効果を発揮する。だから、ここは——）

ユウの指示する、その先の思考。それをベルは、おぼろげに理解できていた。

以前はただ、そのパワーに憧れてデッキを回転させることだけに終止してしまい、藍に敗北してしまったが、今は違う。

《ライトロード・プリースト ジェニス》を、攻撃表示で特殊召喚！
「《ライトロード・プリースト ジェニス》を、攻撃表示で特殊召喚する」

《ライトロード・サモナー ルミナス》

☆3 / 光 / ATK 1000

《ライトロード・プリースト ジェニス》

☆4 / 光 / ATK 300

強力ではないこのカードをあえて選んだ理由は、2つある。

万が一にもコントロール奪取された場合——例えば、アンリエールとのデュエルで召喚された『アスタリクス^ハクス^ネ』など——に、『チューナー』であるフェリスでは相手に余計なアドバンテージを与えてしまうこと。

そしてもう一つは、極端に低い攻撃力をあえて晒すことで、少々露

骨だが手札に《オネスト》の存在を警戒させることだ。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドする」

伏せカードは《ブレイクスルー・スキル》。これで次のターン、ヒヨリのモンスター効果を一度だけ封じる事が出来る。動き出しの1ターン目で回転を抑えられるというのは、相手にとって大きな『枷』となるはずだ。

「エンドフェイズ、ルミナスの効果でデッキから3枚のカードを墓地へ送る」

墓地へ落ちたカードは《ネクロ・ガードナー》《エクリプス・ワイバーン》《ブラック・ホール》の3枚。

「墓地へ送られた《エクリプス・ワイバーン》の効果。俺はデッキから《裁きの龍》をゲームから除外する。そしてジェニスの効果が発動、『ライトロード』の効果によつて自分のデッキからカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時に、相手に500ポイントダメージを、自分は500ライフを回復する」

【ユウ&ベル】4000↓4500

【ヒヨリ】4000↓3500

（場には《ブレイクスルー・スキル》、攻撃力の低いルミナスとジェニスもうまく《オネスト》を警戒させられてる。これなら――）

ベルが好調を確信して目をやると、ユウは未だに険しい表情を浮かべていた。

「――ユウさん？ 何を……」

「……よく見ておけ、ベル。あいつの『強さ』を」

そう言つて、どこか寂しげにユウが呟くと。

油が煮えた鍋に火を放るように、ヒヨリのターンが始まった。

「じゃあ、いくよ？ あたしのターンっ！」

身体を回転させ、勢いよくドロしたヒヨリは横目でカードを確認すると、そのままカードをディスクへと滑らせた。

「あたしは、手札から魔法カード《サイクロン》を発動っ！ 伏せカードを破壊するよ！」

「なっ!?!」

おおよそ考えうる限り『最悪』のパターンが、現実となった。

つい数秒前まで絵に描いていた好調が、たった1回のドロイーで一気に瓦解していく。

「あははっ、《ブレスル》かあ♪ どうやらアタリみたいだね？」

破壊された《ブレイクスルー・スキル》を見て嬉しそうに微笑んでヒヨリはカードに指を走らせる。

「それなら続けて、手札から《カードガンナー》を通常召喚！ その効果で、デッキから3枚のカードを墓地へ送るよ。墓地へ送られたカードは……あはっ、《インフェルノイド・デカトロン》2枚と《レベルステイラー》の3枚っ！」

それらのカード達は、一切の無駄がなかった。『もしも』や『理想』の類である筈の何かは、ヒヨリの意思に吸い寄せられるように『結果』として現実のモノとなっていく。

「そして手札から魔法カード《真炎の爆発》を発動！ 墓地に存在する守備力200の炎属性モンスター、《インフェルノイド・デカトロン》2体を特殊召喚っ！」

運が良い。引きが良い。

ソレは、そんな普遍的な言葉で語るには小さすぎた。

《インフェルノイド・デカトロン》

☆1／炎／DEF 200

《インフェルノイド・デカトロン》

☆1／炎／DEF 200

「2体のデカトロンのモンスター効果発動！ 召喚・特殊召喚成功時に、デッキから『インフェルノイド』モンスターを墓地へ送り、そのレベル分だけこのカードのレベルを上げて名前と効果を同じにする！ あたしが選択するのは、どちらも《インフェルノイド・ルキフグス》！」

《インフェルノイド・ルキフグス（デカトロン）》

☆1↓☆4

その天真爛漫な振る舞いのなかでも、ヒヨリはしっかりと相手に進行の確認をとるように間を空けて目配せをしてくる。

しかしソレは何の抵抗もできない相手にとって、まるで獲物を飲み込まんとする前の、絶対的優位^{捕食者}にある者が見せる冷酷な眼光と同じだった。

「ルキフグスのモンスター効果！ 1ターンに1度、攻撃を放棄する代わりに相手フィールド上のモンスター1体を破壊できる！ 2体のルキフグスの効果で、ルミナスとジェニス破壊っ！」

翼を持つ悪魔へと姿を変えたデカトロンが、白光の乙女達へと煉獄の黒炎を放つ。

あくまで『攻撃』ではないその暴力に、天使のハツタリは通用しない。乙女達は成す術なくその身を焼かれ、命を砕かれた。

「そんな、こんなにあっさり……!!」

「……これが、あいつの『強さ』だ。例えこちらがどんなに対策を講じても、どれほど精密にデツキを組み上げたとしても——あいつは、その1回の『ドロー』で全てをひっくり返す」

決闘者なら誰もが憧れ、しかし同時に誰からも疎まれる、そんな『強さ』。

どこか悲しげに、ユウは続けた。

『最強たる決闘者のドローは、その全てが必然』。俺のいた世界で語り継がれる『英雄』達と同じ力を……あいつは、持っているのかもしれない

誰も真似できない、そんな『強さ』を手に入れた彼女の闇。

デュエルにおいても、どこか『運』の無かった父親のことを思い出しながら、ベルは改めてヒヨリへと向き直った。

彼女が何故、ユウのことを忘れてしまったのか。どうしてそこまで『楽しいデュエル』の拘るのか……その答えを聞くために。

「まだまだいくよ？ あたしは、☆4となったデカトロン2体でオーバレー・ネットワークを構築！ エクシーズ召喚、★4 《ラヴァルバル・チェイン》！」

《ラヴァルバル・チェイン》

★4 / 炎 / ATK 1800

灼熱を纏う歪な海魔が、甲高い雄叫びを上げる。

その攻撃力は決して高くはないものの、このモンスターが持つ効果は非常にヒヨリのデッキに噛み合っていた。

「チェインの効果発動！ デカトロン ORUを1つ使ってデッキから《シャドル・ビースト》を墓地に送る！ そしてビーストの効果で、カードを1枚ドローっ！」

ドローカードを満足げに眺めて、ヒヨりはふと悪戯な笑みを浮かべて問い掛けた。

「そうだ！ せっかくだし『あの子』も呼んであげようか？」

「えっ……っ？」

困惑した表情を浮かべたベルをよそに、ヒヨりは高く右手を掲げた。

「あたしは、チェインを素材としてオーバーレイ・ネットワークを再構築！」

チェインが、足元へと出現した光の渦へと吸い込まれていく。

不意に、闇の気配が色濃くなった。それはどこか、それまで身近に感じていた感覚で――。

「――』法嗤う無限面相。混乱の夜を駆け、真の身を明かしなさい』!!」

それは、漆黒の闇より出でし月夜の怪異。

漆黒の体毛と闇色のタキシードを翻し、現れる。

「エクシーズチェンジっ!! ★4、《アスタリクス * * * 《ファントム 怪黒鬼》っ!!」

かつて、アンリエール 幽霊姫のエースであったそのモンスターは。

不気味な含み笑いを浮かべ、ベル達の前に立ちはだかった。

キャラクター&オリカ設定

設定集&オリカまとめ【※挿絵あり、回覧注意】

【登場人物紹介】

《ユーリ・ベルガモット》

「全力で、お断りしますっ!!」

年齢：13

愛称：ベル（クラド呼びは「メイドちゃん」）

本作の主人公、兼メインヒロインであるメイド姿の褐色少女。

貧しい境遇に生まれ育った彼女は『とある事情』で故郷の農村を離れ、荒くれ者の決闘者が集まる酒場で仕事をして暮らしていた。

そんな生活の中でいつしか『決闘者』を、ひいては『デュエルモンスターズ』を憎むようになっていった彼女だが、身の危険をユウに救われたことで考えを改め、自身も決闘者としての道を歩むことを決意する。

右も左も分からず始まった彼女の決闘道中であつたが、多くの決闘者達と出会い、衝突し、徐々にその力は実を結んでいく。

◆主な使用デッキ◆

【寄せ集めビート】

カードプールが乏しい為、旅の先々で手に入れたカードや譲り受けたカードなどで日々デッキを強化している。素体はクラドから貰ったルールを覚える為の初心者用デッキ。

エースモンスターは《アスタリスクス—*—ザアルキュリア翼戦神》。

◆蛇足◆

ロリ巨乳＋褐色＋貧しい境遇。妄想が捗ります。

イメージカラーはオレンジ。元々はオリジナルカードゲームの主人公として考えていました。この子に限らず、拙作のオリキャラの殆どがそうなのですが……。

本家アニメ『遊戯王ARC-V』にて同名のキャラ『ユーリ』君が

登場。同人誌という紙媒体を出してしまっただが為に修正も出来ず、結局作中でその名前を呼ぶキャラが少ないのでそのままになっています。いつそのこと何かネタにしようかと模索中。

《ユウ＝キリサキ（桐崎 夕）》

チエックメイト
「詰 みだ」

年齢：17？

愛称：ユウ（クラド呼びは「センサー」）

本作の男主人公。表情の変化が乏しいミスターポーカーフェイス。偶然立寄った酒場でベルの危機を救い、以降はクラドと共に彼女の師として立ち振る舞う。

決闘者としては中々の手腕を持ち、幾つもの強力なカードを操りながら常に冷静なデュエルを展開する。

実はこの世界ではない、どこか別の世界から『連れて来られた』異世界の人間。共に連れ去られ、カードに封印された筈の想い人を探して旅をしていた。

人をカードに閉じ込める『闇のゲーム』の噂と、ベルが目撃したという妖しげな『白面の女』を追い、彼は今日もカードを引き抜く。

◆主な使用デッキ◆

【ライトロード】

その強力な効果からかなり高額で取引されている《裁きの龍》を始めとし、シンクロやエクシーズも投入された非常に強力なデッキ。

日々の『1人回し』は彼の日課であり、本来であれば投入が推奨されないようなカードも試験的に投入し、日夜戦略の幅を広げている。

◆蛇足◆

テンプレイケメン主人公（無口）。イメージカラーは白。

3000打点ドラゴンが3体と、露骨に遊戯王ライバルキャラを意識しています。

またしても設定が本家『遊戯王ARC-V』と被る。この先、彼が

対峙するべき一番の敵は妖怪キャラ被りなのかもしれませんが。彼はパクリでは無い（セルフ腹パン）

《クラド・シフル》

「本番はからつきしなんだよ」

年齢：18

愛称：クラド

カードを売り買いして生計を立てる『デイトラー売買人』の青年。

「知識はあるが実戦は苦手」と自称し、メンバー内では旅路の決定や資金管理など纏め役に徹している。戦力としてではなく、旅を続ける上では貴重な人員。

仲の良くなった相手に独特なアダ名を付けて呼ぶクセがある。サツパリとしていてどこか飄々とした性格だが、出身地など彼の背景には謎も多い。

◆主な使用デッキ◆

【スクラップ】

シンクロ召喚を主体とした強力なデッキ……なのだが、売買人としての立場から手持ちのレアカードは殆ど使えず、シンクロモンスターは「スクラップ」専用の数種類のみ。

あまりデュエルをすることは無い為、本人もこれ以上強化するつもりは無いらしい。

◆蛇足◆

ラノベ的に言えば主人公の親友ポジ。イメージカラーは緑。

デュエルシーンこそ少ないものの、画面にはよく顔を出す人です。優秀なガヤ勢。

このキャラが好き、と言ってくれる方が多いのにも驚き。作者として嬉しい限りです。

惜しいのは僕の画力も描写もまだまだ、ということ。もっとカッコよく描けたらなあ。

「女は準備に色々と時間が必要なのよ」

年齢：20

愛称：藍（クラド呼びは「姉ちゃん」）

美しい容姿を持ちながら『決闘者』兼『フリージャーナリスト』を務める黒髪の女性。

セキュリテイの怠慢を暴く為に潜入取材をしていたところ、旅団結成の申請をしにきたベルと衝突。『取材候補』であったユウ達に接触を図るために一芝居を打った。以降は『闇のゲーム』の真相を知るためにユウ達の旅に同行する。

元ジュニアアイドルという経歴を持ち、仲の良かったメンバーとはとある確執があった。余裕溢れる大人びた仕草を見せる彼女だが、その内面はとても繊細。胸の話は特にタブーである。

◆主な使用デツキ◆

【天変リチュア】

☆8の《イビリチュア・ソウルオーガ》を主軸とし、互いのデツキトップを公開し続ける《天変地異》を加えた非常にトリツキーなデツキを愛用する。潜入取材の際に様々なデツキを扱ってきたことから、プレイングの柔軟度はメンバー随一。

◆蛇足◆

影が薄い、胸も薄い。本当に申し訳無い（博士感）。

遊戯王のお姉さんキャラは巨乳さんが多い。だったらスレンダーなお姉さんを作って満足するしかねえ、という下品な発想から生まれたキャラ。イメージカラーは青。

ココだけの話、この人はどうにも動かし難いです。これから先、何とかキャラを立ててあげたいですね。

《アンリエール・ラムジョレーン》

「Trick or Surrender?」

年齢：14

愛称：アンリ（クラド呼びは「お嬢」）

ヒストリア・ノワール
悠久の黒の地では有名なアクシオンデュエル劇団、そして

デュエルマフィア

『決闘組』の側面も持つ『ラムジョレーン』家に生まれた少女。自身

アクシオンデュエリスト

もプロの決闘役者として名を馳せ、その名声に恥じぬ実力とプライドを持つ。

ユウ達が追う『白面の女』に間違われたことからユウと一戦を交え、打ち負かされたことで一目惚れしてしまい、半ば押しかける形で旅団へと同行する。

実力を認めたユウに対しては献身的であるが、その他に対しては不躰な態度を見せる。ただしスレンダーな体型の藍には「慎ましき女性」として一目置いている様子。

デュエル中は普段の様子とは打って変わり、決闘役者らしく丁寧な物腰で相手を務めるが、余裕が無くなったり不機嫌になると『決闘組』としての血が顔を覗かせる。

◆主な使用デッキ◆

「ゴーストリック」

『幽霊姫』の二つ名に由来する、愉快で可愛い怪物達が飛び出す決闘役者らしいデッキ。エクシーズ主体であるが「デュエルは優雅に慎ましく」の家訓に倣い、レベル・ランク共に4以下のモンスターのみにデッキを構成している。

先祖代々受け継がれてきたという《アスタリクス—**—ファントム 怪黒兎》が切り札。

◆蛇足◆

ですの娘。目指せ女版万丈目サンダー。イメージカラーは黒。クラドさんと同じく、この子も好評を頂いています。貧乳至上主義という性格も相まって僕もお気に入りキャラです。

さりげなく名前に「ア」と「J」が入ってます。とはいえメインヒロインではないのですが……。

《コーパル&ネフ》

決闘者であることに絶大なアドバンテージをもたらしている、その張本人達。

審判員機構と呼ばれる彼女達はあらゆる暴力から決闘者を守り、決闘盤を用いたデュエルを始めればたちまち彼女達が現れ、LP設定から賭け成立まで様々なセッティングを執り行ってくれる。ルールを守らない不届き者には裁きの鉄槌を下す。

が、所詮は機械システムの為、開発元が把握していない最新の違法ツールに対しては一切耐性を持っていない。その様はさながらスタダに強脱といったところ。

デュエルモンスターズとは全く関係の無い、どこか遠い別の世界を飛び廻る面白おかしい双子姉妹と良く似ているらしいが、その真相はマジカル薬学の闇の中である。

◆蛇足◆

キャラの再現度が微妙（セルフ腹パンする音）。

【オリカまとめ】

アスタリスクス

《—*— Now entry》

【1】 ……???

【2】 ……ガオ鏡蝸牛

【3】 ……ヴァアジユラ

【4】 ……フアントム

【5】 ……アイオロス

【6】 ……ヘレイネ

【7】 ……アーリオン

【8】 ……アフサラス

【9】 ……ハスマーン

【10】 ……ガアルキュリア

……ガアルキュリア

……ガアルキュリア

……ガアルキュリア

……ガアルキュリア

……ガアルキュリア

……ガアルキュリア

……ガアルキュリア

〔11〕 ……
〔12〕 ……
??????

《アスタリスクス ヴオジャノイー
* * 鏡蝸牛》

☆2 / 水属性 / 水族・儀式・効果 / ATK 200 / DEF 100

手札の儀式魔法カード1枚を墓地へ送って発動できる。レベルの合計がこのカードと同じになるように自分の手札・フィールドのモンスターをリリースし、手札からこのカードを儀式召喚する。
《アスタリスクス ヴオジャノイー
* * 鏡蝸牛》の③の効果は1ターンに1度しか使用できない。

①：このカードが儀式召喚に成功した場合、儀式召喚に使用したモンスター1体を選択する。フィールド上に存在する限り、このカードはその選択されたモンスターと同名カードとしても扱う。

②：自分の手札のこのカードをリリースして発動できる。レベルの合計が儀式召喚するモンスターと同じになるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリースし、手札から儀式モンスター1体を儀式召喚する。

③：このカードが墓地へ送られた場合、デッキから「アスタリスクス」モンスター1体を手札に加えることができる。

《アスタリスクス ヴァージュラ
* * 阿雷虎》

☆3 / 風属性 / 獣族・ペンデュラム・効果 / ATK 1000 / DEF 2000

①：このカードを発動した時に発動できる。自分の墓地・エクストラデッキから表側表示の《アスタリスクス
* * 吽風龍》1体を選んでもう片方の自分のPゾーンに置く。

②・《アスタリスクス》アイオロス 吽風龍》がもう片方の自分のPゾーンに存在する場合、自分メインフェイズに通常のP召喚を行う代わりに、手札・エクストラデッキから「アスタリスクス」モンスター1体を選んで召喚条件を無視してP召喚扱いで特殊召喚できる。

【モンスター効果】

A. 調整中

《アスタリスクス》ファントム 怪黒兎》

★4 / 闇属性 / 獣族・エクシーズ・効果 / ATK 2100 / DEF 1000
レベル4モンスター×2

このカードは自分フィールドのランク4以下のXモンスターの上に重ねてX召喚する事もできる。

①：このカードがX召喚に成功した時、このカードのX素材の数まで相手フィールドのカードを対象として発動できる。そのカードを裏側表示にする。

②：このカードのX素材を1つ対象として発動できる。次の相手エンドフェイズまで、このカードは対象としたX素材と同名カードとして扱い、同じ効果を得る。

③：このカードが破壊され墓地へ送られた場合、このカードが持っていたX素材の数まで相手フィールドのカードを対象として発動できる。そのカードを裏側表示にする。

《アスタリスクス》アイオロス 吽風龍》

☆5 / 風属性 / ドラゴン族・ペンデュラム・効果 / ATK 200

0 / DEF 1000

〔Pスケール：青3 / 赤3〕

①：このカードを発動した時に発動できる。自分の墓地・エクストラデッキから表側表示の《アスタリスクス | * * | ヴァージュラ 阿雷虎》1体を選んでもう片方の自分のPゾーンに置く。

②：《アスタリスクス | * * | ヴァージュラ 阿雷虎》がもう片方の自分のPゾーンに存在し、自分が同名モンスターののみをP召喚する場合、自分はスケールに関係なくそのモンスターをP召喚できる。

〔モンスター効果〕

A. 調整中

《アスタリスクス | * * | ヘレイネ 紅狐蛇》

☆6 / 炎属性 / 爬虫類族・融合・効果 / ATK 2400 / DEF 2000

自分が融合召喚を行う時、その融合モンスター1体をエクストラデッキから除外した場合のみ、代わりにこのカードをエクストラデッキから特殊召喚できる。

①：上記の方法で特殊召喚したこのカードは以下の効果を得る。

●1ターンに1度、カードカテゴリを1つ宣言して発動できる。相手の手札を全て確認し、宣言したカテゴリのモンスターが相手の手札にある場合、そのカテゴリに含まれる相手フィールドのモンスター全てのコントロールを得る。宣言したカテゴリのモンスターが相手の手札に無い場合、自分モンスター全てのコントロールを相手に移す。

●このカードが破壊された場合、除外されている「アスタリスクス」モンスター1体を対象として発動できる。そのカードを持ち主のデッキに戻す。

《アスタリスクス
—*— 霊輝馬》

☆7 / 光属性 / 獣族・シンクロ・効果 / ATK 2500 / DEF 2000

チユーター+チユーター以外のモンスター1体以上

《アスタリスクス
—*— 霊輝馬》の①②の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使

用できない。

①：自分または相手の墓地のモンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターをゲームから除外し、自分フィールドに「英魂トークン」(戦士族・光・星7・攻/守?) 1体を特殊召喚してこのカードを装備カード扱いとして装備する。このトークンは対象としたモンスターと同名カードとして扱い、攻撃力・守備力はそのモンスターの元々の数値と同じになる。

②：装備モンスターがフィールドを離れる事によってこのカードが墓地へ送られた場合、自分フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。このカードを装備カード扱いとしてその自分のモンスターに装備する。

③：装備モンスターが攻撃するダメージステップの間、装備モンスターの攻撃力は2500アップする。

《アスタリスクス
—*— 羊雲海》

☆8 / 水属性 / 水族・儀式・効果 / ATK 2100 / DEF 3000

手札の儀式魔法カード1枚を墓地へ送って発動できる。レベルの合計がこのカードと同じになるように自分の手札・フィールドのモンスターをリリースし、手札からこのカードを儀式召喚する。

①：このカードが儀式召喚に成功した場合、儀式召喚に使用したモ

ンスタター1体を選択する。フィールド上に存在する限り、このカードはその選択したモンスターと同名カードとしても扱う。また、以下の効果から1つを選択して適用する。

●このカードが表側攻撃表示で存在する限り、カードの効果の対象にはならず、相手のカードの効果によっては破壊されない。

●このカードが表側攻撃表示で存在する限り、戦闘では破壊されない。またこのカードと戦闘を行った相手モンスターをダメージ計算後に破壊する。

②：自分の手札のこのカードをリリースして発動できる。レベルの合計が儀式召喚するモンスターと同じになるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリースし、手札から儀式モンスター1体を儀式召喚する。

《アスタリスクス
炎猴皇》

☆9／炎属性／獣戦士族・シンクロ・効果／ATK 2800／DEF 1000

チューナー2体＋チューナー以外のモンスター1体以上

①：このカードがS召喚に成功した時、以下の効果をそれぞれ発動できる。

●このカードのS素材としたモンスターの種類の数まで相手フィールドのカードを対象として発動できる。そのカードを破壊する。

●このカードのS素材としたモンスター1体を対象として発動できる。エンドフェイズまで、このカードはそのカードと同名カードとして扱い、同じ効果を得る。

☆10 / 地属性 / 天使族・効果 / ATK 2800 / DEF 3000

①：1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。自分の手札・フィールドのモンスター1体を攻撃力600アップの装備カード扱いとしてこのカードに装備する。このカードはこの効果で装備しているモンスターと同名カードとしても扱い、同じ効果を得る。

②：このカードの装備カードを全て墓地へ送って発動できる。このカードの攻撃力は300ダウンし、このターンに1度だけ戦闘・効果では破壊されない。この効果は相手ターンでも発動できる。